

邪悪ヤンデレ厄災系ペットオメガスライム

marica

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公、ユーリのペットであるアクアが進化する。それからユーリの日常は、アクアによって侵食されていく。

ユーリ自身も、ユーリの周りも、アクアの無邪気な悪意からは逃れることはできない。

弱いはずのスライムによって、世界の命運すらも危機に陥るのであった。

この作品は小説家になろう、カクヨムでも投稿しています。

# 目次

## 1章 プロローグ

1話	はじまり	1
2話	学園生活	9
3話	異変	16
4話	悲しみ	23
5話	キラータイガー	31
裏	アクア	38
6話	剣術	44
7話	エンブラの街	51
8話	闘技大会	58
9話	決勝	65
10話	契約技	72
裏	ステラ	79
11話	日常	85
12話	暗雲	91
13話	救出	98
14話	平穏	105
裏	カタリナ	115
裏	苦み	122
i f	ステラとの未来	128
i f	本気のアクア	139
i f	アクアの暴走	146
i f	カタリナとの未来	150
1章	の登場人物	156

## 2章 水刃のユーリ

15話 新生活

16話 初依頼

17話 モンスター

18話 実践

19話 頂点

20話 スライム

21話 襲撃

22話 食事会

23話 休日

24話 出会い

25話 チーム

26話 疑惑

裏 愉悦

27話 逢引

28話 悩み

29話 誘惑

30話 デート

31話 カタリナと

裏 妬心

32話 暖かさ

裏 ユーリヤ

33話 運命

34話 ふれあい

35話 成長

316

309

303

297

290

284

277

269

263

256

248

242

236

230

223

217

210

204

197

190

183

176

168

159

裏 感情	467
5 3 話 主従	461
5 2 話 決意	455
5 1 話 新たな力	449
5 0 話 契約者	443
裏 フィーナ	437
4 9 話 フィーナと	431
4 8 話 連携	425
4 7 話 新たな仲間	418
4 6 話 異能	410
3 章 頂へと歩むオーバースカイ	407
2 章の登場人物	407
裏 サーシャ	401
4 5 話 祝い	393
4 4 話 弟子	386
4 3 話 家	380
4 2 話 帰還	374
4 1 話 新たなペット	368
裏 計画	361
裏 楽しみ	355
4 0 話 アデイ	348
3 9 話 ミーナと	341
3 8 話 謁見	334
3 7 話 ライバル	328
3 6 話 水刃	322

裏	渴望	474
54話	アリシアと	480
55話	レティと	487
56話	憧れ	494
57話	決意	500
58話	師匠	507
59話	師弟	513
裏	期待	519
60話	再会	525
61話	来訪	532
62話	ヴァネアと	538
63話	幸運	544
裏	ミーナ	550
64話	好意	556
65話	進化	563
66話	相談	570
67話	契約	576
裏	ノーラ	582
裏	希望	589
68話	好感	595
69話	サーシャと	602
70話	待望	609
71話	メルセデスと	616
72話	試練	623
裏	メルセデス	630

9 1 話	始動	783
裏	喜悅	777
9 0 話	幸福	771
8 9 話	ステラと	765
8 8 話	憩い	759
8 7 話	火急	752
8 6 話	危機	746
裏	法悦	740
8 5 話	支配	733
8 4 話	戦い	724
8 3 話	異常	718
8 2 話	兆候	712
4 章	プロジェクトU：Re	708
3 章	の登場人物	702
裏	オリヴィエ	696
8 1 話	正体	689
8 0 話	最強	682
7 9 話	リディと	676
7 8 話	ノーラと	670
裏	アリシア	664
7 7 話	夢	656
7 6 話	死闘	650
7 5 話	進歩	643
7 4 話	喜び	636
7 3 話	オリヴィエと	

裏 歪み	789
9 2話 侵入	795
9 3話 罪	801
9 4話 $\theta$	807
9 5話 露見	814
9 6話 恐怖	821
追憶 きっかけ	827
追憶 寂しさ	833
9 7話 想い	839
9 8話 絆	845
9 9話 心	851
裏 つながり	857
裏 オメガスライム	863
裏 解放	869
1 0 0話 目覚め	875
1 0 1話 名前	881
1 0 2話 優しさ	888
1 0 3話 紹介	895
裏 シイ	902
1 0 4話 痛苦	908
1 0 5話 悪夢	915
1 0 6話 願い	922
裏 未来	929
5章 ステラの導き	936
裏 指輪	936



118話	忍耐	1094
117話	余裕	1087
116話	ペットたち	1080
6章 ユーリとアクアの世界		
裏 檻		1074
裏 共鳴		1067
裏 永遠		1060
裏 志望		1054
裏 熱望		1048
裏 顕示		1042
裏 本能		1036
裏 痕		1030
裏 衝動		1024
裏 希求		1018
裏 愛玩		1012
裏 昂り		1006
115話	執着	999
114話	鎖	992
113話	尊敬	985
112話	思惑	978
111話	期待	971
110話	回顧	964
109話	望み	957
108話	敬意	950
107話	好意	943

1 1 9 話	責任	
1 2 0 話	関係	
1 2 1 話	競争	
1 2 2 話	実感	
1 2 3 話	大切	
1 2 4 話	真実	
1 2 5 話	困惑	
1 2 6 話	勇気	
1 2 7 話	歩み	
1 2 8 話	ユーリのこれから	
裏	カタリナの望む未来	
裏	アクアにとってのハッピーエンド	
i f	墮落するユーリ	
i f	カタリナとの未来・偽	
i f	ユーリヤとの未来	
i f	サーシャとの未来	
i f	アクアとひとつに	
i f	フィーナとの未来	
i f	ミーナとの未来	
i f	メルセデスとの未来	
i f	アリシアとの未来	
i f	オリヴィエとの未来	
i f	ノーラとの未来	
i f	しあわせなせかい	

# 1章 プロローグ

## 1話 はじまり

ある日の朝にぼく、ユーリのペットであるスライムのアクアが発光し始めた。

これは進化と呼ばれる現象の始まりで、進化すると姿を変えたり、新しい能力を身に着けたりする。

進化は突然起きるもので、一生進化しないモンスターもいるらしい。

モンスターが進化すること自体は珍しい話ではないが、当たりと言えるほど強い進化をすることはほとんどない。アクアはどんな進化をするんだろう。

ぼくは物心つく前からアクアと一緒にいたので、これから進化して姿を変えることが嬉しいような、少し寂しいような気分だった。

モンスターは人間の敵であることがほとんどだけど、アクアはぼくのペットとして一緒に過ごしている家族のような存在だ。

ぼくはアードラという国にあるミストの町という田舎で、これまでアクアとずっと暮らしていた。

この国を含む世界には人間と、普通の動物と、モンスターという、動物に似ているものも多いが動物とは比べ物にならないほど強いことが多い存在がいる。

特別強いモンスターには国を滅ぼせるようなものもある。人型のモンスターにはそういう強いモンスターがとても多い。

アクアの種族であるスライムは頑丈なだけで攻撃力がないものだけど、伝説のオメガスライムだけは本当に強かったらしい。なにせ3つの国を滅ぼしたと語られるほどだ。

アクアの進化が始まったので、備えのためにいろいろ準備をしていた。進化には結構時間がかかるから、準備する時間はあった。

準備を終えたぼくは、アクアとのこれまでを思い返していた。

アクアといっつ出会ったかは覚えていないけど、ぼくは本当にいまま

でずっとアクアと一緒に生きてきた。

両親がいなくなつてからはアクアだけが唯一の家族で、ぼくはアクアだけは守ろうと全力だった。

モンスターからアクアをかばつたせいで大ケガをしたり、逆にアクアにかばわれたおかげで無事だったり、アクアとはお互いに助け合っていた。

アクアとは毎日一緒に遊んでいて、特に球遊びはとても繰り返して、いくつも球がだめになった。

物心ついたころにはアクアと一緒にいたことになるから、もう十数年にもなる。

そんな日々もこれで終わりになるかもしれないので、ぼくはしっかりと過去を胸に刻んだ。

数時間後にアクアが発光を終え、進化を完了した。

楕円形のようなだった前の姿から大きく変わって、人間の女が青い透明になったように見える。人型になったということはきつとハイスライムだろう。

ハイスライムは人の言葉を話す上にスライムだった頃より大きく強くなる進化系だ。これは当たり前だ。

スライムより大きくなつて少し強くなるビッグスライムや、分裂を覚える以外は前と変わらないツインスライムは、スライムからのよくある進化だったが、ハイスライムは滅多にいない。

それに、スライムは最低限の指示に従う程度には言葉を理解しているけど、ハイスライムは完全に人の言葉を操れる。

アクアにはこれまでぼくから話しかけるだけだったけど、アクアからも話しかけてくれるようになる。アクアとどんな話ができるのか、今から楽しみだ。そう思っているとアクアが声をかけてきた。

「ユーリ、ご飯」

少し気が抜けてしまった。まあ、進化をするとお腹が減るといふし、定番の会話ではあるのかもしれない。

アクアはぼくのことをユーリと呼んでくれた。ぼくの名前をしつかり覚えてくれているのは嬉しいかな。

アクアにおねだりされてしまったので、ぼくはアクアの餌を準備することにする。

スライムは大抵のものは食べてしまう雑食だが、基本的にぼくはよくあるペットフードをアクアに食べさせていた。

アクアに餌を出すと、アクアはあつという間に平らげてしまった。表情はよく分からないけど美味しいのかな。それだと嬉しい。

「ご飯、もっと」

いつもは食べ終わるとのんびりしているアクアだが、今回は足りなかったらしい。

ビッグスライムなら餌が多くなるということとは知っていたので、一応準備しておいたけど、足りないといってもどれくらいだろうか。

「もっとってどれ位かな？」

「さつきと同じくらい」

いつもの倍も食べるようだ。

念のためにスライムの進化先は調べていたけど、ビッグスライムならともかくハイスライムには餌が増えるなんて情報ないはずだけど。

「そんなに用意して食べられる？」

「らくしよー」

うそを言っている様子もなかったのもう一度餌を与えると、さつきと同じようにすぐに食べ終わった。

餌を食べ終えたアクアはぼくに引っ付く。食事の時とは違って明らかに楽しいという顔をしている。

アクアに抱き着かれている時のひんやりふるふるした感触は、進化前と似ているようで結構違う。

前は体温を奪って行ってさらに押し返してくるような感覚だったけど、今はじんわり冷たく吸いつくような感じになっている。

そういえば、アクアはどう見ても女の子の格好だ。

言葉を喋れるようになったことだし、服を用意したほうがいいのか。おいおい考えていこう。

アクアは何か思いついた様子になって、こちらをじつと見る。

「ユーリ、契約、する？」

アクアから突然契約を持ちかけられる。

そういえば契約があったな。人の言葉を話せるほどのモンスターは人と契約することができる。

それによつて人がモンスターくらいしか使えない技を使えるようになるのだ。それを契約技と呼ぶ。

契約技はただの人間には決して使えない力で、この世界で上位の強い人間はみんな契約技を持っている。

契約することで人間だけでなく、モンスターの側もなにか得るものがあると聞けけれど、アクアから契約を持ちかけられるあたり本当のことなのだろう。

それにしても、アクアは教えてもない契約のことをよく知っていたな。

ずっと一緒にいたアクアは家族のようなものだし、契約はどちらかが死ぬまで解除できないけど、それを結ぶことは嫌ではない。

それでも、どんな技が使えるかくらいは確認しておこうかな。

「契約ってどんな技が使えるようになるの?」

「水。呼んだり、操ったり」

「水か。それって飲めるの?」

「ユーリなら別にいい」

ぼくならとはどういう事だろうか。よくわからない。

まあ、飲めるのなら最低限の役には立つだろうし、これ以上悩むことはないと判断したぼくは、契約の準備をする。

といつてもすることは簡単だ。ぼくの血をアクアに垂らして、アクアが契約を受け入れればいい。アクアから言い出したことだし、拒絶されることもない。

早速針を用意して指先に刺し、血を垂らそうとすると、アクアがぼくの指を啜えてきた。

「契約ってそれでもいいの?」

「いい」

ぼくの指を離れたアクアが肯定する。指についた傷はもう消えていた。アクアが治してくれたのかな?

それから少しすると、ぼくとアクアがつながったような感覚がした。これが契約の感触か。

一番強いつながりを感じた左手の甲を見ると、アクアを小さくしたような絵みたいなのが浮かび上がっていた。これは契約の証である。

これでアクアとは離れられなくなったな。契約がなかったとしても離れる気はないけど。

せっかく契約できたからいろいろ試してみるか。

ぼくはバケツを用意し、そこに向けて左手の証からバケツに向けて力を動かす意識を試してみる。

そうすると、少しだけバケツの中に水が出現した。成功だ。

それからはもつと力を込めたり、緩めたりすると、出現する水の量が増えたり減ったりした。

水の出し方は分かったことだし、次は動かすことを試してみるか。

何かを生み出す契約技は、契約の証と出現したものを繋げるようにすることで、生み出したものを操ることができる。基本的な技だ。

ぼくは証から流れる力をバケツの中にある水に向けて動かして水と繋げる。

水を動かそうとしてみるが、一部だけ動いたり、うまく全体を動かしてもほんの少しだけだったり、中々うまくいかない。これは今後の課題かな。

「ユーリ、水、飲んでみる」

アクアにそう促される。今の段階だと飲み水にくらいしか使えそうにないし、試してみるべきか。

ぼくはバケツから水を手ですくって飲んでみる。

驚いた。ただの水とは思えないくらい美味しくて、ぼくは何度も水を飲んでしまう。

これだけでもアクアとの契約は大成功だと思えるほどだった。

契約技で生まれる水ってこんなに美味しいのか。それともこの水が特別なのだろうか。

「この水すつごく美味しいよ。アクアも飲んでみる？」

「いらない。でも、美味しいのは当然。ユーリ、それよりアクアと遊ぶ」

「わかったよ。何をして遊ぶのかな。せつかく進化したんだし、何かしたいことはある？」

「別に。いつも通りでいい」

「そっか。じゃあ球遊びでもしようか」

そうしてアクアと球遊びをする。

いつも通りでいらしいので、庭でボールを投げて、アクアに取ってきてもらう。

これまでの跳ねながら移動する様子と違い、人のように走って手で拾って持って来るようになったアクアを見て少し微妙な気分になった。ぼくは、ボールを受け取るとちよつと考えこむ。

何か別の遊びに変えたほうがいいだろうか。

そうしていると、アクアは若干怒った様子になる。

「ユーリ、早く撫でる。考え事は後」

急かされたので、撫でやすいように下げられたアクアの頭をなでる。

感触が変わったせいか、いつも撫でていたときより随分と撫で心地がいい。思わずずつと撫でていた。

アクアもご機嫌な様子なので、これでいいかと撫で続ける。

「ユーリ、頭だけじゃなくていい」

「いや、さすがにそれはちよつと……」

「人目を気にしてる？ だったら部屋で撫でればいい」

「そういう問題じゃなくて……」

困った。見た目は女の子みたいなのに態度はペットだったころと変わっていない。

一応、部屋の中に移動してアクアの手を握ったり、肩をなでたりしてみた。アクアはご満悦だ。

これで良かったのか。そう考えているとアクアはぼくに抱き着いてきた。服が濡れるかもと慌てたけど、ぼくの服は濡れていない。

ならいいかとアクアをそのままにしていると、なんだか落ち着くよ



うな感じがした。

アクアがただのスライムだった時に膝に乗せていたら感じなかったことだ。

それからしばらくの間アクアと遊んだ後はご飯の時間になったので、アクアの餌を用意して、ぼくのご飯も準備する。

アクアの水が美味しかったので、料理にも使ってみることを思っていた。

「あの水って飲み過ぎたらダメだったりするかな？」

「ただの水とあまり変わらない」

そういう事らしいので、スープに使ってみた。

アクアは今回もいつもより多くの餌を食べるらしいからこれからも餌が増えることになるのかな。

一応アクアにぼくと同じものを食べるか確認したけど、いつもと同じで良いらしい。

用意したスープを飲んでみると、明らかにこれまで同じように作った料理よりも美味しかったので、これからは水を使うほかの料理にもアクアの水を使うことにする。

ご飯の後は契約技の練習ついでに、アクアの水をお風呂に使ってみる。

さつきよりだいぶ楽に水を出せるようになった。何回か使って慣れてきたかな。

お風呂の準備ができたので入ってみると、思った通りいつもより気持ちよく入浴できた。

これなら生活用水としてだけでもこの契約技を手放す気にはなれない。

もともと契約解除の条件がどちらかが死ぬことである以上、検討する気もなかったけど、本当にアクア様々かな。

お風呂も終えて寝るまでに少し時間があるので、もう一度契約技の練習をする。

技の名前とか考えたほうがいいだろうか。すぐに思いついたのはアクア水だけど、あんまりぱつとしないよね。

でも、もつといい名前が思いつくまではとりあえずそれでいいか。それはさておき、今度はアクア水を動かす練習をする。

中々うまくいかなかったけど、アクア水を飲んで休憩をするとそのあと少しだけアクア水を操作するのがうまくなる感じがする。美味しい水を飲んで気分が良くなっているからかな。

それからも練習を続けたけど、今日はそこまでうまくならなかった。練習を切り上げ寢床に向かおうとすると、さっきまでぼくの様子を見ていたアクアが、

「ユーリ、今日は一緒に寝る」

とぼくを誘ってきたので、一緒に寝ることにする。ベッドが濡れる心配もないし、抵抗はなかった。

アクアはぼくに引っ付いてきたけど、ベッドに1人じゃなかったのは久しぶりだった割に、いつもよりぐっすり眠ることができた。

今日から、ぼくとアクアの新しい生活がはじまるのだった。

## 2 話 学園生活

ぼくは今日の授業を受けるため、30分ほどかけて歩いて学園へと向かっていった。

制服が少し重くて面倒くさいけど、これを着ていれば弱いモンスターの攻撃なら耐えられるようになっていいるから、着ないわけにはいかない。

ぼくの地元であるミストの町にある学園では、主に野生のモンスターに対抗するための方法の実践や勉強を行うことになる。100人ほどの学生がいて、この町の子供がたくさんここに通っている。

モンスターは身近な脅威なので、対処法を多くの人間が知っている必要があつた。

ぼくはモンスターを退治して生活する冒険者を目指して学園に通っていた。

今日は学園でアクア水について先生に相談するつもりだ。

学園にアクアを連れていくこともできたけど、アクアの姿が変わつたので、アクアに着せる服を準備してからアクアを連れていくことにした。

アクアは少し納得していない様子であつたが、ぼくの説得を受け入れてくれた。

学園に到着すると、近くにやってきた生徒に話しかけられる。

「よう、ヘタレくんは今日も遅いんだな。どうせお前は弱いんだから、モンスターと戦う事なんてあきらめて、さっさと学園やめちまえよ」  
そうぼくに突っかかってくるのはカインだ。

金髪碧眼で改造した制服を着る不良然とした感じの生徒で、ぼくと会うたびいつも馬鹿にしたようなことを言ってくる面倒くさい人だ。

ぼくよりは強いので、あまり強く言い返すこともできない。すぐに手を出してくるのは目に見えているから。

「はいはい。ユーリが弱いなんて分かり切ったことをいちいち言わないの。こんなでもヘタレだけあつてすぐ危険に気が付くんだから、別に学園やめることなんてないわよ。馬鹿と鉢は使いようってね」

ぼくをかばっているようでさらに馬鹿にしてるのは、幼馴染のカタリナである。

耳が隠れるくらいの長さの茶髪で毎日髪飾りを変えている、いつもつり目の少女だ。

ぼくとよくパーティを組んでいるけど、いつも馬鹿にしてるのはどうにかならないんだろうか。

カインとカタリナを適当にあしらった後、授業のために校庭に集まる。

今日は実技の授業で、模擬剣を使った組み手を行う。今日の組み合わせはぼくとカインだ。嫌になる。カインはいつもぼくを痛めつけようとしてくるんだよね。

先生の合図で組み手を始める。カインはさっそくぼくに向かって剣を振り下ろしてくるが、慌てて避ける。いつもならここで一発もらうところだけど、今日は避けることができた。

「まさか、ヘタレくんが俺の一撃を避けるなんてね。でも、調子に乗るなよ。たまたま一撃避けたからって、お前がザコだつてことに変わりはねえんだ」

そう言いながらカインはさらに攻撃を続ける。振り下ろしに薙ぎ払い、切り上げなどを仕掛けてくる。ぼくは頑張つてそれを避けたり剣で受けたりしていた。

防戦一方ではあるけど、いつもよりだいぶカインの攻撃に対処できている。多少の攻撃はもらうけど、いつものようにクリーンヒットはしない。

そうして粘っていると、先生が時間だと止めてくる。これで今日のぼくの組み手は終わりだ。いつもはボロボロになるけど、今回はほとんど痛くなかった。

「ヘタレくん如きが時間切れまで粘るなんてね。どうせ卑怯なことでもしたんだろうけど、中々やるじゃないか。次は今までより叩きのめしてやるから覚悟しとけよ」

「卑怯なことなんてしてないんだけど。いいかげん、ぼくを叩きのめそうとするのやめてくれないかな」

「ヘタレくんが俺に指図するな。まあいい、せいぜい先生にばれないようにするんだな」

嫌味な顔をしてからカインは去っていく。相変わらず嫌な奴だな。それにしても、今日はずいぶんうまく動けた。カインの動きもいつもより良く見えていたし、反応も良かった。ぐっすり眠れたおかげだろうか。

「あんた、今日はずいぶんやるじゃない。これならあたしとパーティーを組んでもあたしの品位が下がることは減ったわね。これからも精進しなさい」

「ありがとう。でも、品位が下がるのが嫌なら別の人と組めばいいじゃないか。カタリナなら引く手あまただろ？」

「うるさい！ どうせあんたなんかと組んでくれる奴なんていないんだから、あたしと組めることに感謝すべきなのよ。いちいち口答えしないことね。じゃ、またあとでね」

カタリナは言葉の割にご機嫌そうな様子で教室へと向かう。カタリナは言葉の鋭さと感情が一致しないからわかりにくい。ぼくはもう慣れていくけど。

この学園では戦いの訓練とモンスター相手の実戦の他に座学がある。座学は人によって受ける授業が違う。

次の授業をぼくは受けないので、空いている時間にアクア水について先生に相談するつもりだった。

アクア水について相談しようと思っている先生は、ステラ先生という。

藍色の髪を長く伸ばしておつとりした雰囲気を持っている、契約技について詳しい教師だ。この学園に勤めている人の中では恐らく一番若い。

アクア水がうまく動かせないことについて相談したかったので、ステラ先生はぴったりだろう。

「こんにちは、ユーリ君。何か質問ですか？」

「はい。ハイスライムと契約したので、その契約技についてです」

「ああ、アクアちゃんですね。今日は連れてきていないと思ったら、そ

ういうことですか。えっと、ハイスライムということは水ですね。どんな技ですか？」

「水を呼び出すことと、操ることができるといいたいです。水を呼び出すことはできましたが、動かすことがうまくできなくて」

「なるほど。では、今はどんな感じか見せてもらえますか。そうですね、校庭に移動しましょう」

校庭に移動したぼくはアクア水を使ってみせる。やはりとてもゆっくり動かすか、少しの量だけ動かすかしかできない。

アクア水を観察していたステラ先生は、少しだけ納得していないような顔だ。

「ふむ。こんなに多く水を出せるのに、ここまで動かせないとは。水と力を繋げているんですね？」

「はい。このままでは攻撃手段としては使えないので、何かアドバイスがあればと」

「それだけ多くの水が生み出せるのであれば、水を固定して、相手のほうを誘導することで溺れさせることができるでしょうか。」

モンスターは知性の少ないもののほうが多いので、まっすぐに突っ込むことも多いと思いますよ。罠などと同時に設置することで、相手の動きを止めて溺死させられるかもしれません」

「なるほど。水を動かさなくても使える手段を考えろということですね。だったら、地面が土なら足元をぬかるませるとか、石みたいななら相手を滑らせることとかできそうですね」

「はい。ただ、水を動かすこと自体も練習しておいたほうがいいかと。例えば、先ほどは少しの水を動かすことと、全部の水を動かすだけでしたが、少しの水を複数操作するとか、中くらいの水も試してみるとか、別の動かし方も含めて練習するといいでしょう」

「わかりました。ステラ先生、ご丁寧にありがとうございました」

「どういたしまして。また何かありましたら、相談してくださいね」

一礼してからステラ先生は戻っていく。やはりステラ先生に相談して正解だった。

これからの方針を立てることができたし、新しい発想を得ることも

できた。ちようど次の授業はモンスター相手の実習だし、いろいろ試してみよう。

実習は学園の近くにある山で行われる。特に高くもなく傾斜もなだからで、手入れをされているのか木はあまり生えていない。

何人かでパーティを組んで、学園で管理しているモンスターを倒すことになる。

学園にはモンスターを生み出す手段があるらしい。それによって学生でもどうにかなるレベルのモンスターを生み出し、学生たちに倒させるのだ。

一部の授業ではタイムの練習をすることもある。アクアがいるぼくには関係のないことだったので、タイムについては詳しくない。

今日もカタリナとパーティを組んで、山に入っていく。今日はアクア水を使ってみたかったから、カタリナに相談してみるか。

「カタリナ、今日は契約技の練習をしてみたいんだ。付き合ってもらえるかな」

「契約技？ あんた、契約するようなモンスターはいないでしょ」

「アクアが進化したんだ。ハイスライムになってね」

「ハイスライム？ あんたにしては上出来じゃない。でも、今日は何で連れてきてないのよ。ハイスライムだったら随分役に立つでしょうに」

「アクアはメスだったみたいで。服でも着せないと、外を連れていくにはちよつとね」

ぼくの言葉を聞いて、カタリナは怪訝そうな顔をした。呆れのようなものが浮かんで見えるように見える。そんなに変なことを言ったかな。

「はあ？ メスだからって、スライムに興奮するような奴なんているわけないでしょう。まさかあんた、アクアに変なこと考えていないでしょうね」

とんでもないことを言われてしまう。ぼくはアクアの事が大好きだけど、さすがにアクアをどうこうしようとは思っていないから、少しばかり腹が立つ。

「そんなわけないでしょ。でも、外に出るんだから備えくらいはしておかないとね」

「はいはい。あんたにそんなデリカシーがあつたなんて意外だね。それで？　どんな技が使えるようになったのよ」

「水を生み出すことと、生み出した水を動かすことだね。今回は水を動かさずに、生み出した水をその場に留めておくか、床に撒くかして、敵を足止めするつもり」

「そんなことを言うなんて、あんたはうまく水を動かせないのね。足止めくらいしかできないんだつたら、あたしがとどめを刺してあげるわよ。それでいいでしょ？」

「うん。じゃあよろしく」

今回のターゲットはホーンラビットだ。

単に角の生えたウサギくらいのもので、動きはゆっくりだし攻撃力もほとんどない。自分から角に刺さりにも行かない限り大げがはしないだろう。

少し探索し、ホーンラビットを見つけたぼくたちは戦闘準備をする。

まずは濡れさせるほうを試してみるか。そう思ったぼくは、ぼくとホーンラビットの間に水を出現させる。

「カタリナ、あそこにホーンラビットを誘導してくれる？」

そう言うと、カタリナは弓をホーンラビットに射かける。わざと外してこちらに注目させると狙いをつけた格好のまま待機する。

ホーンラビットはこつちに動き出した。少しだけ動く先がアクア水とはずれていたけれど、ホーンラビットのゆつくりした動きなら、相手の進行先にアクア水を置くこともできた。

水に入ったホーンラビットは少しだけ濡れていたが、さすがにぼくの動かす水より動きが速く、アクア水から抜け出されてしまう。

すぐにカタリナはホーンラビットを撃ち抜いた。

「あんたねえ、ホーンラビットでこれなら、どうやって実戦で使うつもりなのよ」

「罨なんかを仕掛けて足止めするしかないかな」



「ふーん。罨にかけられるなら、あたしが普通にとどめを刺せるわよ」  
カタリナは失望した雰囲気を感じそうともしない。でもその通りかもしれない。

溺れさせる技は当面の間使えないかな。そう判断したぼくは、ほかのホーンラビットに対し、足元を取る作戦を試してみる。

試した結果、地面が土だと、事前に床に水を含ませておかないとうまくいかなかった。戦闘で使うにはまだまだ厳しいかな。

「あんたが契約技を使うより、アクアをそのまま連れてきたほうが役に立つんじゃない？」

そう言われてしまったが、特に反論はできなかった。

アクア水を手に入れても、結局カタリナに頼りきりになってしまいかもしれない。カタリナにはずっと助けてもらってばかりだから、カタリナの役に立ちたかったんだけど。

そうして悩んでいると、唸り声のようなものが遠くから聞こえた。嫌な予感がしたぼくは、カタリナに帰ろうと提案する。

「あんた、カインにヘタレくん呼ばわりされるのも納得だわ。まあ、あなたの契約技の実験も済んだことだし、帰ってあげてもいいけど？」

カタリナは反対しなかったのですが、帰ろうとするが、唸り声が近づいてきていた。声のほうを見たカタリナが、焦ったような様子で言う。

「ユーリ、キラータイガーよ。すぐに逃げないと」

キラータイガー。学園の授業に出てくるようなモンスターじゃない。突然ぼくの日常が壊れようとしていた。

### 3話 異変

キラータイガー。赤色の地に黒のまだら模様をしている、牙の長い虎だ。

爪も牙も鋭くてちよつとの鉄くらいなら貫通させてしまう上に素早いという、出会ったら死を覚悟しろと言われるほどの存在。なんでこんな所にいるんだ。

慌ててぼくたちは声を抑えながら離れようとする。だけど、その判断は遅かったようだ。キラータイガーはこちらを向いている。気づかれた。逃げるか？

いや、キラータイガーの足はぼくたちよりはるかに速い。ただ逃げるだけでは追いつかれて終わりだ。

「カタリナ、ぼくが足止めするから早く逃げて！」

「あんたなんか足止めできるわけないでしょ！ こうなったら戦うしかないわ。ユーリ、しっかりしなさい」

覚悟を決めた顔でカタリナは弓を構える。

カタリナが逃げないというのならぼくも逃げるわけにはいかない。カタリナを見殺しにするなんて絶対にダメだ。ぼくも戦うことに決めた。

幸いにもキラータイガーは様子を見ているようで、ぼくたちにゆつくりと近づいてくる。今のうちにどうにかする手段を考えないと。

でも、どうしよう。正面から戦って勝てる相手じゃない。足場をぬかるませるには時間が足りない。キラータイガーのスピードでは溺れさせるのも現実的じゃない。

ぼくが何とか時間稼ぎをできれば、カタリナが弓を当ててくれるかもしれない。

だったら、カタリナとキラータイガーを引き離しつつ、ぼくが耐え忍ぶことが現状では一番ましだろう。

そう判断したぼくはキラータイガーを引き寄せることにする。

「カタリナ、ぼくから離れておいて。うまく隙を見つけたら、キラータイガーに攻撃してくれ」

「あたしは失敗なんてしないんだから、あんたは自分が死なないように気を付けることね。せいぜいあたしの盾になつて頂戴」

「わかった。カタリナ、頼んだよ」

カタリナが離れたことを確認した後にはぼくは剣を構えて、キラータイガーに向けて大声を上げることでキラータイガーの注意を引き付ける。

ぼくに気を取られたキラータイガーは、ぼくに向かって走り出す。思っていたより速い。それにまっすぐ動いてくれない。これじゃカタリナがうまく矢を当ててくれる可能性は低い。

キラータイガーは、素早く前足の爪でひつかいてきたり、噛みついてきたり、後ろ足で蹴り飛ばしたりしてくる。ぼくは何とか避けていた。

カタリナにこいつを倒してもらうためにも、どうにか足を止めてやらないと。

でも、キラータイガーの攻撃を避けることに精いっぱい、とても近くで足を止めさせるなんて事はできそうにない。今何とか攻撃に対処できていることさえ出来過ぎだと思えるくらいだ。

カタリナの様子をうかがうと、明らかに狙いが付いていない。このままではじり貧だ。

だからといってキラータイガーの攻撃を剣で受け止めることなんてできそうにない。剣ごとぼくがやられておしまいになるだけだろう。

いや、受け流せばいいのか？ 攻撃を避けながら、その思い付きをどうにか形にできないか考える。敵の攻撃がすべるようにするため、剣をアクア水で包み込むことにした。

覚悟を決めて、一か八かアクア水を剣のある場所に出現させて、キラータイガーの爪を少しずらして受け止める。ぼくは大きく体勢を崩したけど、一撃だけ受け流すことに成功する。

何とかうまくできた。だけど、これが何度も成功するとはとても思えない。

運がいいことに、キラータイガーは困惑したのか攻撃をいったんや

め、動き回りながら様子見に入った。

でも、とてもではないけど、剣でキラータイガールの攻撃をしのいで  
どうにかできるとは思えなかった。

なら、別の方法だ。剣でどうにかできない以上、ぼくの手札はアク  
ア水しかない。

だけど、どうしよう。顔面にアクア水を出現させても、うまくいつ  
ても攻撃が一瞬遅れるだけだ。ただの水では目潰しにもならないだ  
ろう。

いや、目潰しならできるかもしれない。アクア水だけではだめで  
も、土と一緒に飛ばせばどうだ。洗い流されるだけか？

だったら、泥を飛ばすべきだろうか。多くの水はすぐに浸み込まな  
いから、多くの土を泥にはできないけど、少しだけの水なら素早く移  
動させられるから、目に入るくらいの量なら泥にできるはず。それを  
剣で飛ばせば行けるか？

考えをまとめたぼくは、地面に少しだけアクア水を出現させる。

キラータイガーが次に狙ってきた時がチャンスだ。ぼくは濡れた  
地面に剣が届く範囲を維持しながら、キラータイガーの動きを見守  
る。すぐにキラータイガーはぼくに駆け寄ってくる。

今だ！ ぼくは剣を振り上げてキラータイガーの目に向かって泥  
を放つ。

キラータイガーは少しひるんだ。当たったのか？ ぼくは緊張し  
ながらキラータイガーの様子を見る。

キラータイガーはその場にとどまり、目を擦っている。今がチャン  
スだ！

「カタリナ、お願い！」

「わかってるわよ！」

そう言いながら、カタリナはすでに弓を撃っていた。流石はカタリ  
ナ！

当たってくれ。そう祈るが、なんとキラータイガーはすべての矢を  
前足を素早く振って弾いてしまう。注目されていなかったのに！

そしてキラータイガーは矢の飛んできた方向、つまりカタリナのほ

うを向く。

まずい。接近されたらカタリナに打つ手はない。カタリナは接近戦もできるけど、さすがにキラータイガーを相手にできるほどではない。

だけど、ぼくが考えるような手でキラータイガーをどうにかできるとは思えなくなっていた。このままではカタリナがやられてしまう。でも、ぼくには名案は思いつかなかった。

キラータイガーがカタリナに向かって駆け出したとき、ぼくは破れかぶれでキラータイガーの顔面に向かってアクア水を出した。

それを受けたキラータイガーは少し水を飲んだくらいで、ほんの少しの間足を緩めるくらいにしかならなかった。

「カタリナ！ 逃げてー！」

ぼくが思わずそう叫ぶと、突然カタリナを目の前にしたキラータイガーが足を止める。

なぜか少しの間だけ苦しんだ様子を見せると、キラータイガーはぼくたちの前から去っていった。

見逃された？ 最後に様子がおかしかったからそのせいだろうか。思わず力が抜ける。息を整えていると、大事なことを思い出す。

「そうだ。カタリナ、大丈夫？」

「ええ。まったく、あんたが不甲斐ないからあたしがこんなに追い詰められることになるのよ。少しは反省しなさい」

「そんなに減らず口が聞けるのなら大丈夫そうだね。よかった。二人とも無事でいられて」

本当に運が良かった。いや、悪かったのかな？

なににせよ、ぼくたちは窮地を脱したようだ。何が何だったのかは分からなかったけど、お互い大きなけがもないし、そこだけは良かった。

だけど、ぼくの胸の中には苦いものが残った。

ぼくが何をしてもあいつには通じず、ただ翻弄されただけだった。あいつが気まぐれを起こさなければ、ぼくもカタリナも無事ではいられなかった。

完敗だった。もつと強くなりたかった。ぼくは、アクア水の使い方をさらに訓練することと、剣の腕を磨くことを誓った。

「カタリナ、帰ったら先生たちにこのことを報告しよう。そのあとは、少し休みたいかな」

「そうね、さすがに疲れちゃったわ。まさかこんなことになるなんてね。他の人たちにも注意してあげる必要があるでしょうね」

「そうだね。さすがにキラータイガーは生徒だけでは倒せなさそうだし」

ぼくたちはそれから学園に戻り、ちょうどその場にいたステラ先生に事の顛末を報告する。

「キラータイガーですか。ここ数年このあたりに出現したということは無かったですね。」

いえ、それよりもできるだけ早く皆さんにこの情報を伝えて、山に入ることも避けさせたほうがよさそうですね。

ユーリ君、カタリナさん、よく無事に戻ってこられました。おかげで、だいぶ被害を少なくすることができそうです。事前情報なしにキラータイガーとぶつかっては、太刀打ちできる人は多くありませんからね」

それから、教師陣にこの情報が伝えられ、急いで生徒たちは呼び戻された。

幸い、他に被害者が出る前に生徒たちは学園に戻ることができたみたいだ。先生たちは大忙しという様子で、今日の授業はこれで中止になり、実習で使う山には封鎖が行われた。

キラータイガーに対処する人員を呼び寄せるためには、10日ほどかかるようで、それまで、学園の外での実習は行われないこととなった。

それから、ぼくは家に帰った。アクアが出迎えてくれたが、ぼくはあまり相手をする事ができなかった。その様子を見たアクアが、心配そうにぼくに声をかける。

「ユーリ、なにかあった?」

何も知らない様子でぼくに問いかけるアクアにぼくは今日あった

ことを話す。

キラータイガーに出会った事。ほとんど何もできずに殺される寸前だった事。なぜか見逃された事。それによつてとても悔しい思いをした事。

黙ったままぼくの話聞いていたアクアは、ぼくが話し終わった後にぼくに抱き着いた。

「ユーリ。アクアはユーリが無事ならそれでいい。今度はアクアを連れて行くといい。アクアがユーリを守ってあげる」

「ありがとう、アクア。でも、ぼくは自分だけでもどうにかできるように、もつと強くなりたいんだ。アクアと一緒に戦ってくれるのはうれしいけど、アクアに任せきりにはできないよ」

「わかった。それでも、ユーリはアクアのことを連れていくべき。アクアの知らないところでユーリが死んじゃったら、アクアにはどうにもできない。」

それに、ユーリと一緒にいられる時間も増やしたい。ペットと一緒にいるのは飼い主の務め」

「そうだね。じゃあ、今日はアクアの服を買ってくるね。次から一緒に行こうか」

「ん。じゃあ、首輪も買ってきて。ペットの証」

アクアにねだられてしまったので首輪も買うことにする。アクアはぼくに触れても濡れたりしないし、服でも同じだろうから、普通の服でいいか。

ぼくはアクアのサイズを測り、服屋に行つて女の子の服を買いそろえる。

店員さんに変な目で見られたけど、アクアのことを知っている人だったので、アクアの進化について伝えると、似合いそうな服を見繕つてくれた。

帰つてアクアに買ってきた服を見せると、少しだけ着てからすぐに脱いでしまった。

せっかく買ったのに。不満を感じていると、顔色を変えずにアクアは説明する。

「やっぱり服は窮屈。外でだけ着る」

まあ、外出先で着てもらうために服を用意したので、外だけでも着てもらえるならいいか。

それから、ご飯とお風呂を済ませて横になっていると、突然恐怖が襲い掛かってくる。

あと少しで死ぬところだった。またこんな事があつたらどうしよう。震えていると、アクアがベッドに入ってくる。

「ユーリ。怖いなら一緒に寝る。怖くなくても一緒に寝る」

アクアと一緒にいてくれるのがありがたかった。

そのまま抱き着いてくるアクアと横になっていると、安心感が湧き出してくる。

アクアとくっついているといつもやすらぐ。今日も落ち着いて寝られそうだ。

そうして次の日に学園へと向かうと、とんでもない知らせがあった。

「みなさんに残念なお知らせです。カイン君が亡くなりました」



## 4話 悲しみ

ステラ先生にカインが死んだと告げられる。それには本当に驚いた。

いったいどういう事だろう。キラータイガーが出ているのに山に向かったのだろうか。そう思っていると先生はさらに説明をする。

「カイン君は裏道で発見されました。傷跡からキラータイガーの仕業だと考えられます。本来人の多いところには現れないはずなのですが、今回町の中でカイン君が襲われた以上、町の中でも注意する必要があります。」

現在でも町の中での発見がされていない以上、人目から隠れていると考えるのが自然です。みなさんは人通りの少ない所を通らないようにしてくださいね。キラータイガーが討伐されるまで、しばらくかかりますので、みなさん、警戒を怠らないように」

キラータイガーは基本的に自分の縄張りに入ってきたものを攻撃する習性がある。

わざわざ縄張りから外れることなんてほとんどないので、キラータイガーが発見された場所の周辺に近づかないだけでも、ほとんどの場合には被害は起きない。

ぼくたちがキラータイガーに出会ったのは山の奥深くだ。わざわざ町にまで来るなんて、一体どういう事だろう。なにか特殊な個体だったりしたのだろうか。

ぼくが考え込んでいると、いつの間にか授業が終わっていたようで、カタリナに話しかけられる。

「カインのやつ、死んじゃったんだって。あいつ、本当にろくでもないやつだったし、せいせいするわよね」

カタリナは悲しみなど一切感じないような顔で言う。ぼくはそれに少し腹を立てていた。思わず言葉が口からこぼれる。

「カタリナ！ いくら何でも言っていないことと悪いことがあるよ。そりゃあカインといて嫌なことは一杯あったさ。だからって死ぬべきだったなんて思わない。そんなことぼくの前で言わないでくれ」

「なによ、いい人ぶっちゃって。どうせあんただって、あいつに死んでほしいって思ってたんでしよう。あんたはあいつにいじめられてたもんね」

「いいかげんにしてくれ。ぼくはそんな風には思わない。きみがあいつのことをどう思おうが勝手だけど、ぼくも同じだと思わないでくれ」

「もう！ せっかくないい気分だったのに、台無しだわ。お優しいあんたはせいぜいカインの死を悲しんでおくことね」

カタリナは足音を強く立てながら去っていく。さすがに今のは言い過ぎだ。ぼくはカインが死んだことが悲しかったから、どうにかしてこの気分を晴らしたかった。

ぼくはそれから授業を聞き流しながら、キラータイガーをどうすべきか考えていた。

できればカインの仇を討ってあげたいけれど、ぼくがそのまま挑んだところで、前回みたいな奇跡は起こらずにただ死ぬだけだろう。

討伐隊が来るまで少し時間もあるので、アクア水をもつと別の形で使えないか考えてみることにする。

どんな使い方をするにせよ、まずはアクア水をもつとうまく動かせるようになってからだと判断したぼくは、アクア水を動かす練習をすることに。

授業を終えて時間が空いたぼくはまず、どれだけの量ならアクア水を素早く動かせるのか試してみる。

今のところはコップ一杯が限界みたいだ。コップ一杯を複数動かしてみようとすると、多くのアクア水を動かすのと同じ速度で動かすことが精いっぱいだった。

がっかりしたぼくは、コップに入れたままのアクア水を動かしてみることにする。当然コップが倒れ、アクア水がこぼれようとする。

それを元に戻そうとすると、勢いあまってコップが反対方向に動き出す。

それを見たぼくの中にある考えが浮かんた。これなら前より手札が増やせる。ぼくが思いつきを考察していると、授業中は退屈だから

か遠くに行っていたアクアが話しかけてくる。

「ユーリ、考え事？」

「そうだね。アクア水、ぼくたちの契約技のことだね。その新しい使い方を思いついたんだ。ところでアクアは何か使い方のアイデアとかあるかな」

「別に。アクアは近寄って殴るだけだから、そういうのはわからない」  
「そういう事らしい。これからアクア水の使い方はアクアに相談することはなさそうだ。」

そうしているとカタリナがこちらに近寄ってくる。カタリナはアクアを物珍しげに見ていた。

「それがアクア？ 随分おめかししちゃって。というか、アクアに首輪なんてつけてるのね。あんたやっぱり変態だったのね」

「ペットの証。飼い主なんだからユーリがアクアに首輪をつけるのは当然」

「あんた、こんな女の子にペットだなんて言うの、やめたほうがいいわよ。どこからどう見ても不審者じゃない」

「いや、アクアのほうから言い出したことなんだよ。それに、こんな姿になる前からのことなんだしさ」

ぼくは言い訳をするけど、あんまりカタリナの言うことを否定できる気はしない。ペットと呼ばなくていいようにアクアを説得できるといういな。

それはともかく、カタリナに話したいことがあった。

「アクアのことは後にしようか。それよりカタリナ、ぼくはキラータイガーを倒したい。カインの仇を討ちたいんだ。手伝ってくれないかな」

「あんた馬鹿じゃないの？ あんたにはカインに恩なんてないでしょう。それだけじゃないわ、どうやってあいつを倒すつもりなのよ。前に手も足も出なかったばかりじゃない」

「手は今考えてる。さっき思いついたことがあってね。それに、ぼくだって何もぼくたちだけでキラータイガーを倒そうと思っっているわけじゃない。討伐隊に混ぜてもらおうと思っただけ」

「どうやってよ。ただ仇を討ちたいなんて言っただって、ただの学生を連れて行くわけないじゃない」

「そこは、ぼくが今考えてる策が通用するか見てもらって判断してもらうことにするよ。大丈夫。結構自信あるんだ」

ぼくの話聞いてても、カタリナにはまるで信じている様子はない。半信半疑ですらないように見える。カタリナはこちらの顔を見ながら首を横に振った。

「あなたの自信なんて信用ならないんだけど。まあいいわ。許可が出たなら一緒に行つてあげる。私をあんな目に合わせたこと、あいつに後悔させてやるんだから」

「ありがとう、カタリナ。それで、アクアも手伝ってもらっていいかな？」

「当然。ユーリのいるところが、アクアのいるところ」

それを聞いたカタリナはため息をついてうんざりした様子になる。

カタリナつて本当にすぐこういう顔になるけど、今回はいつもよりため息が大きい。機嫌を損ねちやつたかもしれない。

「ユーリ、あんたアクアまで巻き込もうつての？ あきれた。あんたは本当にどうしようもないわね。アクアも嫌なら断つていいんだからね。こんなやつに付き合うことはないでしょ」

「別に嫌じゃない。アクアは好きで付き合ってる」

「あらそう。どいつもこいつもぼつかみみたい。よかったわねユーリ、アクアが従順で」

カタリナがまたぼくを馬鹿にしてくる。

なんだかんだと言いながら、ぼくのやることに着いてきてくれるからカタリナには感謝しているけど、この物言いはどうにかならないんだろうか。いつもの事だから慣れてるとはいえ、嬉しいわけではない。

まあ、いまさらカタリナが優しい言葉遣いをしたところで気持ち悪いだけか。

話がまとまったのでこれからのために修行をすることにする。思い付きを検証してから、うまくいったらその練習もして、アクア水の

操作できる量を増やす訓練もしないと。

その日の夜。ぼくはアクアと話していた。

アクアのペットという立ち位置を変えたいと説得を繰り返してもアクアは譲らず、結局アクアのペット扱いは続けることになった。恥ずかしいのがこれからも続くことになる。

それから、なぜカインの仇を討とうと思っっているのかを話す。カインはあまり好きではなかったが、ぼくたちがもつとうまくやっていれば、カインは死ななくて済んだんじゃないかと思えたから。それに、嫌な奴ではあったけど、実際に死んでしまうと寂しかった。

しばらくの間話していると、ぼくの話の黙って聞いていたアクアが話し出す。表情はあまり変わっていないけど、優しげに見える。ぼくの気分の問題かな。

「ユーリ。カインはもう死んだけど、アクアはずっとユーリという。たぶんカタリナも。だから、心配しなくてもいい。これからは寂しくない」

アクアにそう慰められる。アクアはぼくの頭を撫でている。

アクアは本当にずっと一緒にいたからぼくの一部のようなものだ。アクアと離れるなんて考えられなかった。だから、アクアがずっと一緒にいてくれると言ってくれたことはとても嬉しかった。

カタリナがぼくとずっと一緒にいるなんてあまり信じられなかったけど、それが本当なら嬉しいことだ。

カタリナは憎まれ口ばかり言うてくるけど、ぼくにとっては大事な幼馴染だ。

少し落ち着いたので、今日もアクアと一緒に寝ることにする。アクアと一緒に寝るとぐっすり眠れるような気がしていた。

それから数日が過ぎて討伐隊がやってきた。

隊というくらいだからそれなりの大人数かと思っていたけれど、どうも2人みみたいだ。

短剣に軽く防具を装備をしている赤くて短い髪に高い身長 of 若い女戦士。

もう1人は赤い羽根をしたハーピー。愛嬌のある顔立ちをしてい

る。

その姿を見て、ぼくは驚く。風刃のアリシアと、その契約モンスターであるレティだ。とんでもない大物が来たな。

ハーピーは鳥系モンスターからまれに進化するモンスターで、素早い動きで空を飛んで敵をかく乱する。

また、空への攻撃手段を持たない敵には一方的な攻撃ができるとても強いモンスター。

レティはその中でも圧倒的な速さを持ち、ナイフ投げにおいても百発百中といわれている。彼女に任せているだけでも、たいていの敵は倒せるほどの強さを持っている。

だが、アリシアはさらにその上をいく。

ハーピーとの契約技である風を使つて、物を飛ばしたり、自分が加速したり、相手を妨害したりといった風使いがよく行う技も使いこなしているようだ。

物を飛ばすことは風の正確な操作が必要なうえに、それだけでなく、自分がうまく投げて狙い通りにいかないなら、風で軌道を変えようとしてもうまく当たらなかつたり、威力が出なかつたりする。

自分の加速は高い身体能力がなければ、風に耐えられずまともに走ることもできないことはよくあることで、他にも、動きに合わせた的確に風を操作できないと加速どころか減速してしまう。

妨害は使うこと自体は簡単だけど、的確に妨害することは結構頭を使うらしい。

それらを使いこなしているだけでも、一流といえるほどの実力者といえるが、なによりの彼女の武器は、代名詞でもある風刃である。

圧倒的な風の力とともに細かい制御がなければ、風で物を切り裂くことなどできないが、彼女はそれを他の戦闘行動を行いながら複数発射できる。

不可視の刃が、ただでさえ高い戦闘技術を持つアリシアから飛んでくるのだ。

人であってもモンスターであっても、彼女の前で10分耐えたものはいないという。

彼女たちならば、キラータイガーであつても容易に退治できるだろう。

「だけど、ぼくはそれを望まなかった。完全に自力でとはいかなくても、ある程度キラータイガーにぼくの恨みを思い知らせてやりたかった。それがカインへの手向けとなると信じていた。」

「では、キラータイガーの居場所はすでに把握しているということだね。それなら、地図を用意してもらおうか。一応最低限の調査はしているけど、君たちのほうが現場の理解は深いだろう?」

「わかりました。すぐに用意しますね。いつ頃討伐に向かわれる予定ですか?」

「地図の用意ができればすぐにでも。私たちはいつでも戦えるよ」

ステラ先生とアリシアがそう会話していた。地図を準備するのにそうはかからないだろう。

「今しかない。ぼくは意を決してアリシアに話しかける。」

「あの、アリシアさんですよ。ぼくたちをキラータイガー討伐に連れて行ってもらえませんか」

それを聞いたアリシアは真剣な顔になってぼくたちの方を向いた。その顔がちよつと怖いくらいに思えて、ぼくは少しだけ緊張した。

「君は? ここの生徒か。物見遊山で向かうにはキラータイガーはお勧めできないかな。もっと弱いモンスターだったらそれも良いんだろうけど」

「遊びのつもりではありません。ぼくたちはあいつに見逃されただけで、あいつが気まぐれを起こさなければ死んでいた。それは分かっているつもりです。」

「ですが、友達が殺されたんです。何もしないままではいられない。ぼくが考えた策をみて、それが通じないというのなら置いて行ってくれていい。でも、そうでないなら。どうかぼくたちを連れて行ってほしい」

「そうね、あたしたちはやられたままでいたくない。あいつに負けた悔しさは、あいつをコテンパンにすることで晴らしてやるわよ」

アリシアは納得した顔をして、それから思案する。

「どうだろう、アリシアはぼくたちを連れて行ってくれるだろうか。『そうか、君たちが……遊びで言っているわけではない』というのは分かった。なら、見せてもらおうかな、君たちの策を。ステラさん、それでいいかな?」

「ユーリ君たちが無事でいられると判断したならかまいません。危険なモンスターに、突発的でない形で挑むことは得難い経験になるでしょうからね」

「どうやら第一段階は突破してみたようだ。」

その後、アリシアたちに促されてぼくたちが策を見せると、アリシアは感心した様子になる。

「レテイ、君はどう思う? 私は見込みはあると思うけど」

「ユーリ君って言ったっけ? これを通じなかったらすぐに退くこと。それが守れるならいいかな。少なくとも全くダメということはないんじゃない?」

「そうか。なら、決まりだね、ユーリ君、カタリナさん、それにアクア。ついてくるといい。大丈夫。うまくいかなくても私たちがどうにかしてあげるよ。挑戦もいい経験になると思うよ、学生さん」

キラータイガーの討伐に向かえる。

ぼくはとても興奮してカタリナたちの方を見る。カタリナたちはうなずいてくれた。よし、みんなでキラータイガーに一泡吹かせてみせる。

「ありがとうございます! よろしくお願いします、アリシアさん、レテイさん」

「ええ。あなたたちに頼らなくてもあいつを倒してやるわ。あたしたちがね」

「ユーリならうまくいく。まかせておくといい」

アリシアたちの説得には成功した。あとは本番だけだ。カイン、きみの仇は討つてみせる。



## 5話 キラータイガー

ぼくたちはアリシアとレティに連れられて、キラータイガー討伐に向かっていた。

カインが死んでから、キラータイガーの動きは常に注視されていたが、あれからキラータイガーは特に山を出ることはなく、縄張りの中でおとなしくしていたらしい。

一体なぜ、カインは襲われたのだろう。ぼくはアリシアに尋ねてみる。

「キラータイガーは結局あれから町には現れなかった。あれもあいつの気まぐれなんでしょうか」

「私の知る限りにおいては、キラータイガーが縄張りから出るのは、縄張りを荒らした者を追いかけるときくらいだね。縄張りに入ってきた獲物を逃がすことは滅多にないし、自分から縄張りの外に踏み込むことは、よほど飢えている時くらいのものだよ。」

つまり、そのキラータイガーは相当おかしな行動をしている」

「なんでもいいじゃない。あたしたちのなすべきことは、あいつを倒すことだけよ。あたしの受けた屈辱、何倍にもして返してあげるんだから」

「ユーリが無事ならそれでいい。アクアも手伝うから、頑張つて倒そう」

「ユーリ君、考えるのは後でもいいよ。集中できなきややられちゃうよ？ キラータイガーくらいなら、いざという時でもわたしたちがどうにかしてあげられるけどね」

アリシア以外の人たちに窘められる。確かに今考えるべきことではないか。

キラータイガーは間違いなく強敵だ。アリシアたちは助けってくれろというけれど、それに甘えることはしたくない。ぼくたちの手でちゃんとあいつを倒したい。今はそれに専念しよう。

それからしばらくして、前回キラータイガーと出会った場所の近くにあるあいつの縄張りに入ろうとしていた。

視界の奥で何かが動いたと感じる。そこをよく見ると、キラータイガーの尻尾らしきものがあつた。

「アリシアさん、あれ、キラータイガーですよ。戦闘態勢に入りましょう」

「ユーリ君、よく気付いたね。ちゃんと警戒しているようだね。じゃあ、私たちはいざという時まで様子見するから、頑張つてね」

「わたしたちはこの距離からでもすぐ攻撃できるから、あなたたちは安心して戦つてくれていいよ。ケガしないようにね」

アリシアたちに応援される。よし、アリシアたちの手を煩わせずに終わらせよう。それがアリシアたちへの恩返しにもなるだろう。

「カタリナ、アクア、いくよ」

「そうね。任せておきなさい。あいつをギツタンギツタンにしてあげるわ」

「行く。さっさと倒して、ユーリと遊ぶ」

カタリナもアクアも気合充分みたいだ。

カタリナはぼくたちから少し離れ、ぼくとアクアは慎重に近づく。

それから用意してきた道具を取り出し、キラータイガーに先制攻撃を仕掛ける。

アクア水入りの、こぶしより少し大きいくらいの袋を操作して、キラータイガーに叩きつけようとする。

その袋は相手にぶつかり、少しひるませる。

これは今回用意した策の一つだ。アクア水が入った袋を遠くから操ることで、ぼくはキラータイガーからある程度離れたまま、あいつに攻撃できる。

あれからアクア水を操作できる量が増えたため、いくつも袋を操ることができた。

たつぷり水の入った袋をキラータイガーに勢いよくぶつければ、それなりのダメージを与えることができる。

その隙にアクアがキラータイガーに近づき、殴ったり蹴ったりする。キラータイガーも前足の爪や牙、後ろ足で応戦する。

アクアは服に気を使って相手の攻撃に当たらないようにしている

けど、万が一キラータイガーの攻撃がアクアに当たったところで、アクアに大きなダメージを与えることはできない。

アクアは物理攻撃ではよほどの手数と範囲でないと、水でできた体を通過して終わりだ。

水分のほとんどを失わせる手段をキラータイガーはもっていないから、あいつにアクアがやられることはない。

アクアは水分を通過できなくすることもできて、それでキラータイガーに当たるところを固くして殴ったりや蹴ったりしている。

アクアの攻撃の威力では、やつに大きなダメージを与えることはない。それでも、キラータイガーはアクアに気を取られていた。

「今のところ、うまくいってる。この調子だ」

袋が何度か破られるけど、今回はいくつも袋を用意してきたから、そのたびに補充する。

水はその場で用意できるから、袋は軽い荷物としていっぱい運んでくることができた。ぼくは限界まで水を操作していないから、余力でこぼれた水を地面にしみこませる。

アクアは泥には足を取られないし、ぼくはキラータイガーから離れている。

だから、キラータイガーだけが足場に注意しないといけなくなる。

「カタリナ、そろそろお願い」

「ユーリ、待たせるじゃない。じゃあ、行くわよ」

カタリナがキラータイガーに射かける。キラータイガーと接近しているのはアクアだけだ。

万が一誤射してもアクアは大丈夫。矢がアクアの体を通り抜けてすぐにアクアが元通りになるだけだ。

アクアがキラータイガーを足止めしてくれているから、キラータイガーはカタリナのほうへは行けない。矢が何発か弾かれるけど、ここからが本番だ。

キラータイガーが矢を前足で弾こうとするタイミングで、ぼくは矢にアクア水をぶつける。

矢の軌道が変わって、キラータイガーの防御をくぐり抜けて矢が突

き刺さる。やつは少しだけ痛がっているが、致命傷ではないみたいだ。

カタリナに気づいた様子のキラータイガーはカタリナのほうへ向かおうとしている。なら、これはどうだ。

ぼくは泥水が入った袋をキラータイガーの目の前に動かす。

そしてアクア水を使って、カタリナの撃った矢を袋に向けて操作する。矢が当たって破裂した袋から泥水がキラータイガーにかかり、やつは視界を塞がれる。

その隙にカタリナは別の場所へ移動し、さらに矢を射かける。

矢はどんどん刺さってだんだんキラータイガーの動きが鈍くなっていく。

このまま行ける。そう思っていると、キラータイガーは足止めしていたアクアを抜けて、ぼくのほうへと勢いよく走ってくる。

「ユーリー！」

カタリナがそう叫ぶ。確かにぼくは危ないけど、まだ打てる手はある。

キラータイガーはまだ視界が晴れていないのか、いつものようにジグザグの動きではなく、ぼくに向かって一直線に走ってくる。それから、ぼくの用意した策でどうにかなるはず！

案の定、泥に足を取られてキラータイガーはぼくの手前で転ぶ。

念のため用意しておいた保険が成功したようだ。ぼくとキラータイガーの間の地面を、戦闘中にぬかるませておいた。キラータイガーはそれに引つかかったわけだ。

駆け寄ってきたアクアがキラータイガーの上に乗り、抑え込む。

少し経つと、暴れていたキラータイガーの動きはどんどん鈍くなっていく。カタリナの矢に塗っておいた毒が効果を発揮し始めたようだ。

毒矢ではあるが、万が一誤射で矢がアクアに当たったとしても、スライムにはほとんどの毒が通用しない。

当然、ぼくが用意した毒はアクアには効かないものだ。

ぼくはとどめを刺すため、剣をキラータイガーの頭に振り下ろす。

それを受けたキラータイガーは痙攣した後、動かなくなった。

「やったわね、ユーリ、アクア。これならあたしたちは随分強いと言つて良いんじゃない?」

「ユーリ、勝った。後でいっぱい撫でて」

「ぼくたちは倒したんだ。キラータイガーを、カインの仇を。やったよ、カイン」

念のため少し様子を見るけど、キラータイガーは完全に死んだみたいだ。

準備はしていたけど、本当にぼくたちだけで倒せるなんて。感動しているしアリシアたちに声をかけられる。アリシアたちはとても感心しているように見える。

「三人パーティーでキラータイガーを倒せるなんてね。君たちは将来有望みたいだ。」

特にユーリ君、君の考えた策は面白かった。危ないところがあったとはいえ、君たちはもう一人前といってもいいかもしれないね」

「まあ、わたしたちがいない本当の本番だったら、うまく行かなかつたかもしれないけど。」

とはいえ、10人以上いても、やられちゃう人はやられちゃうのがキラータイガーだからね。あなたたちが冒険者になったら、いつかわたしたちと組むことができるくらいになれるかも」

「あたしがいるんだから当然だわ。ユーリのこと、少しくらいは褒めてやってもいいけど」

「ありがとうございます、アリシアさん、レテイさん。反省点はありますけど、これから精進していきたいと思います」

そして、ぼくたちは学園へと戻っていった。ぼくたちだけでキラータイガーを倒したことはステラ先生に報告された。ステラ先生は驚いた顔をした後、

「流石ですね、ユーリ君、カタリナさん、アクアちゃん。私もあなたたちの先生として鼻が高いです。よく頑張りましたね」

とぼくたちを褒めてくれた。ステラ先生に褒められるのはとても嬉しい。ぼくは若干照れていた。

それから、アリシアたちとステラ先生たちで話をするみたいで、ステラ先生はアリシアたちと去って行き、ぼくたちは教室で休んでいた。

「ふふ。ユーリ、あたしたちだけでキラータイガーを倒せたんだもの。あたしたちが冒険者になっても活躍できるのは目に見えているわね」  
カタリナはとても機嫌がよさそうだ。当然かもしれない。

キラータイガーは本当に強いと言われていて、キラータイガーを倒せば一人前という話があるくらいだ。ぼくだって浮かれてしまいそうだけど、頑張つて気を引き締めている。

「油断は良くないよ、カタリナ。あの戦いだって運が良かった事もいっぱいあったし、何より相手が最初から分かっていたわけだから。対策を練つてから挑めたからであつて、似たような強さの敵にも勝てる」とは言い切れないよ」

「相変わらずユーリは真面目ちゃんね。今日くらい浮かれておけばいいのよ。それにしても、今日は本当にいい日だったわ。アクアもそうは思わない?」

「ユーリと一緒に毎日がいい日。でも、今日はいっぱいユーリの役に立てたから、確かにいい日かも」

「ありがとう、アクア。今日はわがままを言ってくれてもいいよ。何でもとは言えないけど、できるだけ聞いてあげる」

「アクアは本当になつているわね。あんた、アクアに変なことをしないようにね」

「カタリナ。羨ましい? ユーリにおねだり」

アクアは表情をあまり見せずにカタリナにそんなことを言う。

アクアの言葉を受けたカタリナはぶぜんとした表情になり、それから腰に両手を当ててぼくの方をにらむ。

でも、かわいらしい物だ。今日は本当に気分がいいから、カタリナの状態が全く気にならない。

「羨ましくなんてないわよ。ユーリ、あんたアクアにおかしなことを教えていないでしょうね」

「おかしなことって何き。アクアは教えてもないことを知っている時

があるんだよね」

そんなこんなで話して時間をつぶしていると、アリシアたちがやってくる。

「ユーリ君たち。今日は楽しかったよ。カーレルの街を尋ねることがあったら、私の所へ来るといい。先達として、いろいろ面倒を見てあげるよ」

「アリシアがこんなことを言うなんてほとんど無いことだからね。ユーリ君たち、気に入られてみたい。わたしも気に入っちゃった。あなたたちと一緒に冒険するの、楽しみにしてるね」

「ありがとうございます。機会があったら、よろしくお願いします」

「じゃあ、またね。今度はもっと成長した姿を見せてくれ」

「さようなら。また会えると嬉しいです」

そしてアリシアたちは去っていく。その姿を見たカタリナは少し不満そうにしていた。

「なによ。みんなしてユーリユーリって。あたしがあんなたちのリーダーなんだからね」

「分かってるよ。ぼくが中心に話しかけたから印象に残っているだけでしょ」

「ま、そうでもなきやあんなにか覚えたりしないか。今日のところはこれでいいでしょ。ユーリ、アクア、また明日ね」

「じゃあね、カタリナ」

「ユーリ、アクアたちも帰ろ」

「そうだね、行こうか」

そうしてぼくたちは帰っていった。

それにしても、今回は反省点が多かったな。特に最後、キラータイガーに近寄られたのは危なかった。

どうすればもっとうまくやれただろうか。そんなことを考えながら夜を迎え、今日もアクアと一緒に寝る。

アクアが進化してからそんなに経っていないけど、アクアと一緒に寝ることに慣れてきたな。

こうして、キラータイガーの一件は終わったのだった。

## 裏 アクア

アクアにとって、ユーリといえる時間は何より大切なものである。アクアが進化してオメガスライムの体になったとき、アクアがまず考えていたことは、ユーリと一緒に居る時間を増やすための手段だった。

まずご飯を要求したのは、ユーリとの会話のきっかけになることを期待しての事だ。オメガスライムであるアクアにとって、食事など本来は必要ではなかったが、ユーリが嬉しそうに自分がご飯を食べている姿を眺めていることが嬉しくて、ついいっぱい食べてしまった。

ユーリとふれあう手段を考える中で、契約の存在に思い至ったアクアは、すぐさまユーリと契約するために、ユーリに契約を持ちかけた。ユーリの家にある資料によると、契約によって契約モンスターもなにかを得ることが出来て、モンスターはそのために契約を求めるものだとされていた。

アクアはその何かが力であることは知っていたが、それで力を高めるためにユーリと契約したいわけでは無かった。

ユーリともっと仲良くなること、ユーリに自分を頼ってもらおうこと、ユーリの格好いい姿をもっと見ることに。アクアはそれらを目当てにユーリと契約することにした。

本来、契約技というものは、契約するまでどんな能力かはわからないものだ。

だが、アクアは自分の契約技を調整して、狙ったものを発現させることが出来ると確信していた。

ユーリに自分の一部を取り込ませることは決まっていたから、アクアは、アクア水と呼ばれることになる契約技は、ユーリに単なる水に近いと思わせるようなものに決めた。

それで、ユーリがアクア水を飲んだ際、ユーリに自分の事を心地よく感じてもらえるように、ユーリの体を少し調整していた。他にも、ユーリの体をいろいろと変化させた。

ユーリがもっとアクア水を飲んだり、使ったりすることで、ユーリ



の体はもつと変化していくことになる。アクアは自分の思い付きに、とても満足していた。

ユーリが初めのころアクア水を使うことに苦戦していたのは、アクアの故意によるものもあった。

もともと、契約技を習熟するには時間がかかるものではあるが、アクアは、ユーリが自分のために頑張る姿が見たいこと、ユーリが進化した自分に頼ることを目指して、少しでもアクア水の操作を妨害していた。ユーリがアクア水を使いこなすために頑張る姿に、アクアはとても喜んだ。

それから、アクアはユーリといろいろとふれあっていた。

ユーリが自分に対してそこまで積極的ではないことがアクアにとっては少し不満だったが、だったら自分から近付けばいいと考えた。

ユーリに引っ付いていると、狙った通り、ユーリは自分と接するときに心地よさを感じていた。

これなら、もつとユーリと仲良くなることが出来る。アクアはそう確信していた。

その日にアクアはユーリを誘って一緒に寝ることにした。

夜もユーリと一緒に居られる。アクアはそれだけで、とても嬉しい気持ちになっていたが、ユーリと一緒に寝ることで、ユーリに自分といる時の心地よさを植え付けて、もつと一緒に居られるようになりた

い。

そう考えて、ユーリが寝ている間もずっとユーリに触れて、ユーリに心地よさを発生させ続けていた。本当に進化してから良いことばかりだ。まだ進化して1日もたっていないが、アクアの心はすでにそのことに対する喜びで満ち溢れていた。

次の日。アクアはユーリと一緒に学園へと行けないことになり、とても不満を感じた。ユーリとずっと一緒に居たいのに。

そう考えていたが、ユーリの体内のアクア水を通してユーリを感じていられたから、少しだけ不満は和らいだ。

ただ、カインがユーリを痛めつけようとしていることを強く感じた

アクアは、カインを始末する手段をずっと考えていた。

アクアが進化する前からずっとユーリのことを傷つけていたカインを、アクアは決して許すつもりはなかった。

だが、それから学園でユーリがアクア水の練習をする中、厄介なモンスターであるキラータイガーがユーリのそばに突然現れたことで、アクアはこのキラータイガーを利用することに決めた。

ユーリはアクアが改造したことによって、キラータイガー程度にどうにかできる存在ではなくなっていたから、アクアに不安はなかった。もし何かありそうなら、アクア水を通してユーリに干渉すればいいだけということもあった。

ただ、カタリナが傷つくことに対する懸念はあった。ユーリと幼馴染なだけあって、カタリナはユーリにとって大切な存在である。ユーリの事をカタリナは何度も助けていたから、それも大きいのだろうが。

なので、ユーリがキラータイガーに向けてアクア水を出現させたとき、上手くキラータイガーにそれを飲ませて、キラータイガーの体をアクア水を通して乗っ取り、キラータイガーを操作することで、カタリナとユーリを見逃すように見せかけた。

その日、キラータイガーを操るアクアは、このキラータイガーを利用してカインを殺すことに決めた。

キラータイガーを水で包み、水を通して水の中を通った光を操り、キラータイガーを視認させないようにして、カインが人から離れた隙を見計らい、カインにキラータイガーを使って攻撃した。

カインは何が起こったかもわからない様子のまま、顔を恐怖と苦痛で歪めて死んでいった。

だが、アクアに満足感はなかった。こんな奴が死んだくらいで許されるわけがない。ユーリを傷つけた罪というのは、その程度で贖えるものではないのだ。アクアは今後ユーリを傷つけたものは、もっと苦しめてから殺そうと決めた。

その日の夜、ユーリにキラータイガーについて相談されたことで、アクアはユーリに自分が操るキラータイガーを殺させようと考えた。

そうすれば、きっとユーリは喜ぶだろう。

それに、ユーリはキラータイガーを危険と感じているようだから、きつと自分を連れて行ってくれるし、アクア水の習得も頑張ってくれる。ユーリを自分で埋められると考えたアクアは、絶対にその計画を実行すると決めた。

この日アクアが学園についていけなかったように、服を着ないとユーリが外に連れ出してくれないということに不満があったアクア。だが、ユーリのペットの証として首輪を服のついでに買ってもらうことを思いついたアクアは、首輪を買ってもらって付けてもらう事だけは喜んでいた。

服を着ていればユーリと触れる部分が少なくなるし、窮屈に感じる。服なんて何がいいのか分からなかったアクアは、それでも首輪を買ってもらえたことだけは良かったと思っていた。ユーリと自分の絆の証だと考え、首輪を着けることを楽しんでいた。

その日またユーリと眠ることが出来たアクアは、もうこの時間を手放すことはできないと考えていた。

夜の間ユーリと離れ離れになるなんてごめんだ。かつてのように過ごすことなど、絶対にしたくない。ユーリとくっついていられる幸せは絶対に譲らない。アクアはそう決めていた。

もしユーリが反対するようなら、何としても説得するつもりだった。その心配は杞憂だったが。

次の日、カインが死んだことに悲しんだユーリを見ていても、アクアは特に何も感じることはなかった。ユーリの事だから、ある程度知っている人ならだれが死んでも悲しむだろう。その程度の考えだったので、どうでもいい人の死に慣れてもらうこともいいかもしれないと思っていた。

アクアにはユーリの周囲の人間をうまく殺す手段が思いつかなかったので、実行はしなかったが。

ユーリがアクアにアクア水の使い方を相談した時、アクアはいくらでもアクア水の使い方を思いついていたが、ユーリにアドバイスすることはしなかった。ユーリはそうしたほうがきつとアクア水につい

てもっと考えてくれる。

すなわち、自分の事をもっと考えてくれるようになるも同然だ。そう考えたアクアは、ユーリに対して適当な答えを返していた。

ユーリがカインの仇を討つと言い出した時は、ユーリはお人好しが過ぎると考えていたが、それでも、自分に頼らせるためのいい機会だと考えていた。ユーリの目的であるキラータイガーのことをちやうどいい難易度に調整できる敵として使うつもりだった。

アクア水の有用性と、アクア自身の強さ。それらを感じてもらい、もっともつとユーリに頼ってもらうことを目標としていた。

ただ、あまりにもアクア自身が強すぎると、ユーリが自分を恐れかねないという懸念があったため、アクア水の有用性の方を主にアピールするつもりだった。

きっとユーリは自分を嫌わないが、念には念を入れよう。アクアはそう考えていた。

それから、キラータイガー討伐隊だというアリシアとレティがやってきた。アクアはそれによって自身の計画に問題が発生しないか警戒していた。

幸い、彼女たちはアクアにとって都合のいい考えをしてくれていたので、その2人をどうにかするという考えは破棄した。

そして、キラータイガー討伐の本番。ユーリの策は事前にある程度確認していたが、本当にアクア水をよく工夫して使っていた。

それだけ、アクア水の事を考えていたのだろう。アクアはだいぶ満足していたが、せっかくだから、もつと格好いいユーリの姿を見たい。アクアはそう考えて、いろいろと演出しておいた。

ユーリはそのすべてをうまく乗り切り、アクアはユーリの格好いい姿を見られたことにとても満足していた。

これなら、ユーリは冒険者になることを目指すだろう。自分の弱さに諦めるということはきつとない。

だから、自分にも、アクア水にも、頼ってもらえる機会はいっぱいあるし、ユーリの活躍もきつといっぱい見られる。

弱かったころのユーリがダメだったということはないが、せっか

なのだから、いろいろとユーリには活躍してもらいたい。アクアはそう考えていた。

その日、ユーリはとても満足感に満たされた様子だった。ユーリが嬉しそうなことで、アクアは自分まで嬉しい気分になっていた。

ユーリとずっと一緒に居るだけでもいいと考えていたアクアだが、ユーリといるともっとどん欲望が浮かんできていた。

もっとユーリに頼ってもらいたい。もっとユーリといろいろな遊びをしたい。もっとユーリの格好いい姿を見たい。アクアはこれからユーリとどうするか、いろいろと考えていた。

アクアはその日の夜もユーリと一緒に眠っていた。大好きなユーリと一緒に居られることの幸せを、アクアは今日も噛みしめていた。

## 6話 剣術

ぼくは最近、剣術の腕をめきめきと上げていた。体は前より速く動くし、相手の動きもよく見える。

模擬戦においても、これまで負けていた相手に勝てるようになっていた。

そんなぼくに対して、カタリナは感心したという様子で話しかけてくる。

「あんだ、最近調子がいいみたいじゃない。これなら今までよりあたしの役に立てるわね」

「そうだね。自分が自分じゃなくなった位に感じるよ」

「ユーリ、楽しそう。アクアもうれしい」

「良かったわね。あんだ、今まで弱っちゃったのがウソみたいだわ。これからもあたしのために精進して、強くなることね。今くらいじゃだめだけど、もっと上に行けるならご褒美をあげてもいいわよ」

カタリナは胸を張って自信満々といった様子だ。ご褒美の内容にぼくが満足すると確信しているのだろうか。

でも、そういう顔しながら変なものを渡された経験も何度かあるからな。

「カタリナのご褒美って嫌な予感しかしないんだけど。昔みたいにその辺の石ころとか渡してこないでね」

「あんだ、あたしを何だと思ってるのよ。ちゃんと良い物をあげるんだから、泣いて喜びなさいよね」

カタリナの言うご褒美が何なのかは分からないけど、すぐにももらえるような気がした。

それくらい調子が良かった。以前ならアクアの進化があつたとしても、手も足も出そうになかったキラータイガーを倒せたり、今も剣技がずいぶん上達していたりと、本当に順調に成長できている。

そうこうしているとステラ先生に呼び出される。何の用事だろう。

「ステラ先生、なんのご用件でしょうか？」

「そうですね、ユーリ君に提案があるんです。エンブラの街で行われ

る闘技大会に出てみませんか」

「別にかまいませんけど…… どうして急に？」

「実はですね、キラータイガーを倒したユーリ君たちなら、闘技大会でもいい結果を残せるのではないかという話がありました。

もちろん、すぐに負けたからといって何かユーリ君に問題が起こるというわけではありません。出場が嫌なら断ってくれてもかまいませんよ」

ステラ先生はそう提案するけど、ぼくはその話を受けていいのか悩んだ。なので、もう少し詳しく聞いてみることにする。

「ぼくたちを買ってくれるのはうれしいですけど、アクアはともかく、カタリナには話を持ちかけないんですか？」

エンブラの街の闘技大会は、モンスターに出場権はなかったはずだ。

そうでなくとも、アクアの特性上、武技を競い合う大会にはアクアはそぐわないだろう。技術云々以前の問題になってしまふことは目に見えている。

「ルールがルールですから。カタリナさんとは相性が悪いと判断されました。狭い空間で戦わなくてはならないですし、逃げ回ることも禁止されていますからね」

なるほど。カタリナは弓使いである以上、距離を取って戦うことが基本になる。近接戦闘もある程度はできるけど、大会に出るほどではないという判断は当然かな。

「わかりました。ですが、キラータイガーを倒した要因としてはアクア水、契約技ですね。

その活躍が大きくて、ぼくの剣技はそこまで活躍していません。別に出場するのは構いませんが、その辺をご理解していただきたいところですね」

「私としては、ユーリ君が結果を出すことに期待しているわけではななんです。こう言うと、気分を悪くされるかもしれませんが。

ただ、最近調子を上げてきているみたいですし、環境を変えてみることで、さらに何かを得るきっかけになればいいかと思ひまして」

そのステラ先生の言葉を聞いて、ぼくは大会に出場することを決意した。

ステラ先生は本当にぼくの事を考えてこの提案をしてくれた事が良くわかる。だから、ステラ先生の期待に応えたい。

「いえ、気分を悪くなんてしませんよ。いろいろと考えてくださっているみたいで、ありがたいです。そういう事であれば、ぼくは出場してみたいと思います」

「わかりました。では、手続きをしておきますね。大会は2週間後です。それまで、移動を除いた1週間、訓練の時間を多くとりたいと思います。授業への参加はしなくてもかまいません」

「ありがとうございます。では、少しでも良い結果を残せるようがんばります」

それからぼくは、大会のルールを確認していた。

4メートル四方の空間で武技を競う。武器の種類は自由。ただし、運営側の用意した模擬武器を用いる。

モンスターと契約しているものは、契約技の使用を禁止。敗北条件は大きく3つあり、場外、降参、気絶となっている。

その他、あまりにもボロボロなのに戦おうとすると、審判から止められ、その者の敗北となることもあるが、滅多なことでは適用されない。

相手の殺害は無条件で失格。

また、戦おうという姿勢を見せない場合。例えば逃げ回るだとか、いつまでも口で争っているだとか。

その場合も失格となる。闘技大会にわざわざ出場するものがやることではないので、いままでほとんど使われたことのないルールらしい。

闘技大会のルールはこんな所か。

大雑把なルールだけど、一地方の、若者の大会にはこれくらいで十分という事なのだろうか。

それとも、大きな問題は起こらなかったから大雑把でも良かったのだろうか。



ルールの確認を終えたころ、近くに来たカタリナが話しかけてきた。アクアもそばに居るみたいだ。

「あんた、闘技大会に出るんだって？ あの弱っちかったあんたがねえ。ねえ、あんた。あたしも見に行つてあげるんだから、あたしに恥をかかせない程度には勝つことね」

「ユーリ、アクアも応援する」

「アクアもつて、あたしがこいつのこと応援してるみたいじゃない。あんた、つまんない勘違いしないでよね」

カタリナはそう言うけど、なんだかんだでぼくの事を応援してくれると信じている。カタリナは口は悪いけど、暴力を振るわれたことはないし、これまでずっとぼくを支え続けてくれた人だ。

「まあ、やれるだけやってみるよ。アクア、練習に付き合つてくれる？」

「当然。アクアに任せておくといい」

「無視してんじやないわよ！ まあいいわ。あんた、あたしも見てあげるわ。あたしのありがたい意見をよく聞くことね」

カタリナも訓練を手伝ってくれるみたいだ。カタリナは弓を武器にするだけあつて、観察眼に優れている。ぼくでは気づかないことに気づいてくれるかもしれない。

それからぼくはアクアとカタリナと闘技大会に向けた訓練をすることに。

アクアは近接戦闘が得意なので、ぼくと組み手をしてもらう予定だ。

カタリナはぼくにアドバイスをするつもりらしい。さすがに近接戦闘だけなら僕が勝つと思うし、組み手には混ざつてこないみたいだ。

アクアと組み手をしていたところ、大きな問題が発覚した。

キラータイガー戦のためにアクア水をいつでも使う訓練をしていたのだが、その影響で、危ないと思った瞬間についてアクア水を使用してしまうようになっていたのだ。

他の人との組手では、危ないと思う前に先生から止められていたた

めに気づかなかった。このままでは失格になってしまう。剣の腕を上げるより先にやらないといけないことが増えてしまった。

それから2日間が、ぼくがアクア水をとっさに使ってしまったため、訓練に費やされた。

後の方では、カタリナはあきれたような顔をしていたが、それでもずっと訓練に付き合ってくれていた。

ぼくたちの訓練を見ているだけに飽きたカタリナは、途中からぼくとアクアの組手の最中に横から弓を射かけてきた。

そのおかげで、とっさのタイミングを意識できたぼくは、うつかりアクア水を使ってしまわないことに成功した。

最初に撃たれた時は滅茶苦茶だと思ったけど、カタリナのおかげでアクアと組み手をしているだけの時より、随分早く感覚をつかめた。

闘技大会まではこれでいいけど、闘技大会が終わったら、また感覚を戻さないとな。実戦ではアクア水を使わないほうがいい状況なんて滅多にないだろうし。

いや、オンオフを自在に切り替えられるのが理想か。どうするか考えておこう。

それからの訓練では、カタリナからのアドバイスが多く飛んできた。

「あんだ、回避を全部右からにしない！ そんなんじや簡単に読まれるわよ！」

「剣だけ使ってるんじやないわよ！ 左手なり足なり使いなさい！」

「しんどいですって顔をするな！ はったりでも何でも効かせるのよ！」

自分でありがたい意見なんて言っている時はどうかと思ったが、カタリナのアドバイスは本当にありがたかった。おかげでだいぶ上達できたと思う。

一週間ずっと手伝ってくれたこともだけど、カタリナには本当に感謝しないといけない。何かお礼を考えておこうかな。

「あんだ、ここまではあたしに手伝わせておいて、ろくな結果を出せなかったら承知しないわよ」

「うん。ありがとうカタリナ。勝てるように頑張るよ」

一週間の訓練もこれでおしまいだ。明日からはエンブラの街へ向かうことになる。移動の間は、できるだけ休めるといいな。

その夜、ぼくはアクアと話していた。

「ユーリ、闘技大会の訓練、楽しかった。でも、アクア水をあまり使わないのは寂しい」

そうか。アクア水を使えない大会だったからアクア水を使わないようにしていたけど、アクアがそう言うなら、これからはアクア水を使わない大会には出なくてもいいかもしれない。

それにしても、アクアは随分契約のことを大事にしてくれているみたいだ。ぼくにとっても大事なことだから、アクアと同じ気持ちでいられるのは嬉しい。

「そうなんだ、なら、闘技大会の後は、いっぱいアクア水を使ってみるのもいいかもしれないね」

「約束。今度はアクア水も使って組み手をしよう」

「組み手、楽しかった?」

「うん。スライムのころはできなかつたし、ああいう遊びもいい」

遊びか。まあ、スライムにとってほとんどの物理攻撃は脅威ではないし、それくらい認識でもおかしくはないのかな。アクアが楽しいのならまたやってみるのもいいかな。

それはさておき、カタリナへの上手いお礼が思いつかないから、アクアに相談してみよう。

「アクア、カタリナにお礼がしたいんだけど、何がいいと思う?」

「アクアにはくれないの? アクアは身に着けるものがいい」

「そっか。アクアも随分手伝ってくれたから、何か考えておくれよ」

身に着けるものか。カタリナは髪飾りにこだわりがあるみたいだし、それがいいかな。気に入らなくても換金できるものにしてあげば、そこまで怒ることはないだろう。

アクアは髪飾りは着けられないし、首には首輪をつけているから、ブレスレットあたりがいいか。イヤリングは装着できるのだろうか。

「アクアはイヤリングとブレスレット、どっちがいい?」

「どっちでもいい。ユーリが決めて」

「わかった。じゃあ、エンブラの街でなにか探してみるかな」

大会以外の時間は空いているし、そこで店を見てみるつもりだ。この町よりはいろいろあるだろう。

それにしても、闘技大会までの間は念のためにアクア水はあまり使わないつもりだけど、それでアクアが寂しがるのが分かったわけだし、組み手以外にも何か考えておかないとな。

明日から、エンブラの街への移動だ。闘技大会ではどんな相手が出てくるのかな。

## 7話 エンブラの街

あれから6日。ぼくたちはエンブラの街に到着していた。

馬車を借りて移動していたけど、移動の間はアクアやカタリナと話しているくらいで、特にすることもなかった。明日は闘技大会の当日だ。

今から訓練をしても明日に疲れを残すだけだろうし、今日は街を見て回りながら、アクアやカタリナへの贈り物を見繕うとしようかな。ぼくは街の店をいろいろと回ってみることにする。

ぼくたちの住む田舎よりは店の種類も多く、いろいろあって目が移る。その中に髪飾りもブレスレットも売っている店を見つけたので、その店で贈り物を探すことに決める。

いろいろと眺めていたところで目についたのは、ピンク色のヘアピンと、黒のブレスレットだった。

ヘアピンは少し長めで、猫をモチーフにした飾りが付いていた。カタリナのイメージと猫のイメージが合っているような気がした。どちらも気まぐれに見えるし、ちょうどいいんじゃないかな。

ブレスレットは二重になっていて、繋がっているところに氷のような柄が付いていた。アクアの青色に黒は似合うような気がしていたし、氷も水っぽいアクアの印象から遠くない。

二つを購入すると、女の人から声をかけられた。

「二つを合わせるつもりには見えないし、両方女物として売っている商品。君、見ない顔だけど、気が多かつたりする?」

「ちがいますよ。闘技大会の練習に付き合ってもらったので、そのお礼にです」

「闘技大会に出るんだ。奇遇だね。僕もなんだ。僕はミーナ。君は?」

ミーナはピンク色の髪を後ろでまとめっていて、明るい様子だ。声が弾んでいる。

ぼくに対しても何が楽しいのか、ずっと満面の笑みでいる。

それにしても、本当に奇遇だ。たまたま買い物をした店で闘技大会

の出場者と話をすることになるなんて。

「ぼくはユーリです。あなたも闘技大会に出場するんですね。ぼくのことを見ない顔だと言いましたけど、地元の人なんですか？」

「そうだよ。僕はこの店の一人娘なんだ。これでも結構剣の腕には自信があつてね。君と当たつてもきつと勝てると思うよ」

「お前はこの店を継いではくれないんだろうし、せめて闘技大会ではいい結果を残してもらいたいもんだな。ついでにうちの宣伝もしてくれると助かるんだが」

さつきぼくが商品を購入した人がミーナに話しかける。

この人が店主みたいだ。いかにも不愛想といった感じの人だし、ミーナは父親似ではないみたいだ。

「宣伝については考えておこうかな。ああ、ユーリ。引き止めてごめんね。大会で当たつたらよろしくね」

「ミーナさん、さようなら。もし当たつたらその時はお手柔らかにお願いします」

そうしてぼくは店を出た。結構時間を使っちゃったし、そろそろみんなと合流しないと。そう思ったぼくは、待ち合わせ場所である宿へと向かった。

宿につくと、その場にいたステラ先生に話しかけられる。

今回ステラ先生は、ぼくとアクアと観戦にきたカタリナの引率と、大会での手続きを担当してくれている。

「ユーリ君、観光は楽しかったですか？ せっかく遠出する機会ですし、大会以外にも楽しんでおくことも大切ですよ」

「ええ、楽しかったです。ミストの町では見かけないものが多くて、いろいろと見て回っていました」

「それは良かったですね。それでは、闘技大会の確認をしておきましょうか。」

大会に出場するのは16人です。トーナメント方式ですので、4回勝てば優勝ということですね。用意されている武器には、剣、槍、斧、短剣、棒、弓があります。

どれを選んでいいかわかりませんが、ユーリ君は、剣を選びますよね？

弓は距離を生かしきれないので、使う人はいないでしょう。これまでの大会でも、使われた記録はありません。

剣を使うなら、槍が厄介ですね。なかなか距離を縮められないままに負けるということが、過去の大会でも多かったですよ」

槍か。うちの学園では、先生の一人くらいしか使っている人がいなかったんだよね。

その人は槍の名手と呼ばれているらしいけど、ぼくは一本も取れたことはない。大会で槍を使う人が、あれくらいの腕だと勝ち目はないけど、学生くらいの年の人しか参加できないし、流石にそこまではないか。

「他には、降参の仕方ですね。まいった、降参、負けました。この辺りを言えば降参です。

ですが、会話の流れでうつかり口にして降参の扱いにされることはないのです、その辺は安心してきていていいですよ。

声を出せない場合には、武器を捨てて両手を挙げると、降参の扱いです。小さな大会ですから、この両方ができないような形になっても続行ということはありませんし、そこまでする人もいないでしょう」  
降参なんてしたら、カタリナが激怒しそうだな。

まあ、ぼくもよつほど危ない目に合わない限り降参するつもりはない。軽く降参なんてしたら、これまで練習に付き合ってくれたアクアとカタリナに申し訳ない。

「これくらいですね。ユーリ君、皆さんの期待に応えようとするのはいいですが、大きなけがはしないように気を付けてくださいね。

こんなことを言っただけですが、所詮は小さな大会です。将来に影響するようなものでもありませんし、無理をしないことが大切です」  
「ありがとうございます、ステラ先生。先生が心配するような事態にならないように、ほどほどに頑張りますね」

ステラ先生は本当に優しい人だ。学園にとっては勝つことを期待しての人選だろうに、それよりもぼくの安全を気にしてくれる。

先生に余計な心配をかけない程度に、いいところを見せておこうという気になってきた。

ステラ先生との確認を終え、ぼくはカタリナを探す。

すぐに見つかったので、用意していた髪飾りを渡すことにする。

「カタリナ、これ。受け取ってくれる？」

「なによあんた、急にプレゼントだなんて。あんたはそんなことをする奴だったかしら」

「闘技大会の練習に付き合ってくれたでしょ。カタリナのアドバイス、本当にためになったから、そのお礼」

「あたしのアドバイスが役に立つなんて当然よね。ま、あんたがどうしても渡したいというなら受け取ってあげてもいいわ」

カタリナはそう言いながらもぼくのプレゼントをじっと見ている。

押せば絶対に受け取ってくれると確信したぼくはカタリナに頼み込む。

「どうしても受け取ってほしいんだ。お願い、カタリナ」

「仕方ないわね。あんたがどうしてもって言うから受け取ってあげるんだからね。感謝しなさいよ」

「うん。カタリナ、今までありがとう」

カタリナはぼくから受け取った包装を開き、中にあつた髪飾りを見る。いろんな方向から眺めているけど、気に入ってくるといいな。

「髪飾りね。気が向いたらつけてやらないこともないわ。それにしても、あんたがアクセサリーを人に渡すことを思いつくなんてね。どうせもつとくだらないガラクタだと思っていたわ」

「カタリナ、毎日髪飾りを変えているみたいだから。あと、かさばらな

いからね」

「あんたはそんなことには気がつくのね。ただの節穴かと思っていたわ。あんた、ちよつとそこで待ってなさい」

そう言ってカタリナは部屋に戻る。

少し経った後、カタリナは部屋から出てきた。ぼくの送った髪飾りをつけてくれている。思わず見とれた。カタリナは本当に美人だ。あらためて見るとそれが良くわかる。

「カタリナ、本当に似合ってるよ。それが見れただけでも、髪飾りを買ったかいがあつたよ」



「流石にこういう時に褒めることくらいはできるのね。ま、あんたの選んだ髪飾りもそこまで悪くないわよ。思ってたより少し位はセンスがあるんじゃない？ あたしなんだから、何つけても似合うのは当然だけどね」

カタリナも少しは喜んでくれているのだろう。本当に気に入らなかつたら、もつとボロクソに言われているはずだ。プレゼントはうまく行ったと思っただけかな。

その後、ぼくとカタリナはお互いの部屋に戻る。ぼくの部屋にはアクアがいた。宿を決めた時にアクアはぼくとの同室を譲らなかつた。2人きりだし、アクアにもお礼を渡そうかな。

「アクア、これ、前に行つてたお礼。受け取つて」

「ブレスレット。楽しみ」

アクアはいつもと同じ調子でそう言う。それにしても、なぜブレスレットだと言い切れるんだろう。

「ぼくは何も言っていないんだけど。イヤリングだとは思わないんだけど？」

「わかる。ユーリのことだから」

そう言つてアクアは包装を開けていく。ぼくの事が分かるというのは嬉しいけど、ぼくつてそんなに分かりやすいかな。

包装を開け終えたアクアはブレスレットをすぐに着けた。うん。やっぱりアクアのイメージに合ってる。でも、首輪が悪目立ちするよな気がする。

「アクア、首輪、外さない？」

「嫌。これはアクアがユーリのペットである証」

アクアは本当にペットであることを変えようとしてくれない。スライムの目はよく分らないけど、ペットとしての扱いを否定しようとする、アクアの目力が強くなっている気がする。

だけど、ぼくはアクアをペットよりもつと大切な存在だと思つているから、できればペットと呼びたくない。

「ペットじゃなくて、家族だと思いたいな」

「ペットも家族の一部。ユーリは気にしなくていい。それより、これ。」

大切にする」

「ありがとう。大切にしてくれるなら、贈ったかいがあるよ」

今日は本当にいい日だったな。ミーナという新しい出会いもあった。ステラ先生の優しさに触れられて。カタリナとアクアにプレゼントを喜んでもらえて。

明日はいよいよ闘技大会の本番だ。みんなのおかげで上がった実力を、全力でぶつけよう。

そして次の日。ぼくたちは闘技大会の会場へ来ていた。思っていたより観客が多かった。ちよつと緊張する。

会場の中にはすでに何人かが集まっていた。その中にミーナもいて、目が合った。

その後、こちらに笑顔で手を振ってくる。ぼくも手を振り返すと、ガッツポーズをした。これは勝つという意思表示でいいんだろうか。

ミーナが去って行くと、不機嫌そうな顔をしたカタリナに問い詰められる。

「あんだ、さっきの女は誰よ。あたしが知らない以上、あんたの知り合いじゃないでしょう?」

「昨日カタリナに贈った髪飾りを買った店の娘さんでね。今回の闘技大会に出場するらしいんだ」

「あんだ、そんなところで女をひっかけようとしたのね。少しばかり話しかけられたくらいで、勘違いするんじゃないわよ。どうせあんたを好きになる奴なんて、アクアくらいしかいないんだから」

カタリナはそう言うけど、ぼくはそんな勘違いをしているつもりはない。ただ、せつかくの遠出で珍しい出会いだから、楽しい思い出にできればいいだけだ。

「誤解だよ。それに、ぼくが変なことをしようとしてるみたいに言うのやめてくれない? ミーナさんの父親に睨まれちゃったんだけど」  
「はいはい。ま、たしかにあんたみたいなヘタレに女を口説く度胸があるわけないわね」

「もうそれでいいよ……」

そんな話をしていると、選手に集合がかけられる。顔と名前の確認

をされた後、試合がある人以外は会場の外へいったん行くことになった。

ぼくの試合は一回戦の後半だ。試合開始まで時間があるため、他の人の観戦をするつもりだった。

初めの試合。今大会唯一の女性であるミーナの試合が始まる。

ミーナはあつという間に試合を終わらせてしまった。自信があるというだけあって、本当に強い。当たるとしたら決勝だけど、勝てる見込みは少ないかもしれない。

それからは普通に試合が進み、一回戦の後半、ぼくの試合の番になった。さあ、これからだ。

## 8話 闘技大会

ぼくの第一試合。対戦相手はマカロフというらしい。ぼくと同じく、剣を使う相手だ。試合開始の合図を前に、マカロフはぼくに話しかけてくる。

「君、武闘大会に出るには随分弱そうだねえ。良かったよ、1回戦くらいは勝てそうで。流石に初戦敗退なんてしたらかつこ悪いよねえ」

「そうですか。ぼくは勝てるように頑張るだけです」

「ふふっ、いいのかいそんな弱気で。強気だろうとぼくに勝てるようには見えないけど、せめて気合くらい見せてみたらどうだい」

これ以上取り合う意味もないだろうと判断したぼくは剣を構える。

相手も構えたところで、試合開始の合図が鳴る。マカロフはぼくに斬りかかってくる。数合切り結ぶと、マカロフはいったん距離を取る。

「へえ、思ったよりはやるじゃないか。でも、この程度が僕の全力だと思ってもらっちゃあ困るね」

そういったマカロフは先ほどよりスピードを上げ、連続攻撃を叩き込んでくる。ぼくは受けに徹しながら様子を見ることにする。どの程度で息が上がるのか確認したかった。

「どうしたどうした。僕の剣技に手も足も出ないのかい？ 悔しかったら攻撃してみてごらんよ」

安い挑発だ。ぼくは聞き流しながらさらに受けを続ける。数十合受け続けると、相手に焦りが見え始める。このまま受け続けるか。そう思っていると、カタリナに声をかけられる。

「あんた、一回戦なんかで負けたら承知しないわよ！」

その言葉を聞いたマカロフは明らかに怒った様子で斬りかかってくる。

ぼくが応援されているのが気に食わなかったらしい。先ほどより明らかに威力とスピードを上げている。これ以上威力を上げられたらまずいかもしれない。そう思っていると、

「さつきより苦しそうじゃあないか。そろそろとどめを刺してあげる

よ」

と言いながら、全力で剣をたたきつけてくる。ぼくは剣から左手を離して相手の剣を受ける。

予想通りにぼくの右手の剣は弾かれる。それを見たマカロフはほくそ笑むと、とどめを刺そうと踏み込んでくる。

ぼくはその足を右足で踏みつけた。相手は体勢を崩したまま、ぼくのほうへと突っ込んでくる。ぼくはその顔面に向けて、左足を踏み込み、全力で左手を叩きつけた。

「この…… 卑怯者め……」

そう言っただけでマカロフは気を失う。一回戦はぼくの勝利だ。

一回戦が終わった後、いくらかの休憩をはさんでから、2回戦に移るらしい。ぼくはカタリナたちと話していた。

「ま、いくらあんたとはいえ、あの程度の相手なら勝つのは当然よね。

1回勝ったからっていい気になるんじゃないわよ」

「ユーリ、おめでとう。アクアはユーリを信じてた」

「ユーリ君、おめでとうございます。2回戦まで、ゆっくり休んでくださいね」

「みんな、ありがとう。次も頑張ってみせるよ」

みんなに祝われるのって、思ってたより嬉しい。

こんな気分になれるのなら、次ももっと頑張ろうかな。そう思っていると別の方向から話しかけられる。

「ユーリも一回戦を突破したんだ。君が僕と当たるとするなら決勝戦かな？ 君と当たっても手加減はしないけど、お互いに楽しめるといいね」

ミーナは相変わらず楽しそうな様子だ。もう決勝戦の話をするあたり、かなり自信があるのだろう。

実際、ほかの参加者たちの中では、ミーナが飛びぬけているように見えた。

「決勝戦まで行けるかはわからないけど、できるだけ頑張るつもりです」

「固いね。彼女たち相手程とは言わなくとも、もっと砕けてくれても

いいよ」

「分かった。もし決勝で当たったらよろしくね」

そうぼくが言うと、ミーナはさらに笑みを深める。

できればミーナと当たってみたいけど、それよりこれからの試合でちやんと勝たないとね。

「ふふっ、楽しみにしてるね。もし負けた時は、僕の応援してくれると嬉しいな」

「その時はそうさせてもらうよ。じゃあ、次の試合も頑張ってるね」

「じゃあね。決勝で会えると嬉しいな」

そう言ってミーナは去っていく。

そろそろ2回戦の時間か。ミーナの試合は見に行こうかな。同じ剣を使うものとして、参考になるところもあるだろう。

しばらくして始まったミーナの試合。今回もミーナは危なげなく勝っていた。

「あのミーナってやつ、強いわね。あんた、気を抜くんじゃないわよ」  
「そうだね。まずは目の前の2回戦だけど、ミーナの相手は大変そうだ」

「ユーリなら大丈夫。次も勝って」

ミーナは強い。できることなら温存しておきたいけど、それで決勝までに負けたら意味がない。ペース配分が課題になりそうだ。

それから、ぼくの試合の番がやってきた。次の相手はアーノルド。槍使いだ。ステラ先生に要注意だといわれていた槍が相手だし、気が抜けないな。

「1回戦、見事だった。剣だけに意識を向けず、手足まで使えるとはな。ただの素人ではないらしい。」

だが、それは相手が剣だからだ。槍のリーチ相手に多少手足が使えるところで、役には立たん。お前はここで負ける定めだ」

「ミーナと決勝で戦いたいからね。ここで負けるつもりはないよ」

「ここで勝ったところであいつには勝てまい。あきらめるのが賢明だ」

そのやり取りの後、試合開始の合図が鳴る。アーノルドは構えたま

ま動いてこない。待ちの構えのようだ。しばらくたつても攻めてこないで、ぼくから攻撃を仕掛けることにする。

アーノルドはぼくが間合いに入る瞬間、槍を振り下ろす。速い。剣で受けると相手はすぐに槍を引き、突きを繰り返す。受け止められる気がしなかつたので避ける。アーノルドと距離ができたが、追撃は仕掛けてこない。あくまで待ち続けるつもりのようなのだ。

どうしたものか。槍の先の方はかなりのスピードだ。とにかく近づかなくてはじり貧になるだろう。

振りを受けることができるが、突きは難しい。槍を横から弾いてみるか。

ぼくはもう一度近づく。今度は突きで来るらしい。それに合わせて剣を振る。狙い通り槍を弾けた。

そのまま近づこうとすると、アーノルドは上に弾かれた槍を回して、今度は下から振り上げられる。近づく前にまた攻撃をされたため、ぼくは受けながら槍の進行方向に飛び、また剣の射程外に離れる。それから、何度か近寄ろうとするものの、そのたび遠ざけられる。困った。打つ手が思いつかない。少し考えこんでいると、

「いい加減降参したらどうだ。お前では俺には勝てない。これ以上無様をさらす前にあきらめるんだな」

と降参を持ちかけられる。格好が悪いくらいで降参してたまるか。格好つけて降参するより、格好悪くても最後まであがいてやる。いや、格好をつけるか。他に策は思いつかないしやらないよりはましだ。

ぼくはもう一度アーノルドに近づく。槍を振り下ろしてきた。策はないが、剣で槍を受け止める格好で、狙い通りだというつもりで笑った。

アーノルドは剣に槍が当たることを避け、槍を戻し、突きを繰り返した。無理に軌道を変えたため、いつもほどのキレがない。

ぼくは剣を槍に横から合わせると、槍をずらしながら接近する。近づききったところで、アーノルドの首元に剣を突き付ける。

「はっ、やられたな。今回はお前の勝ちということにしておいてやる」

そう言うと、アーノルドは槍を投げ捨て、両手を挙げる。2回戦もぼくの勝ちだ。

試合を終えて休憩していると、また皆から祝いの言葉をかけられる。

「おめでとうございます、ユーリ君。この大会で剣が槍に勝つのは本当に珍しいんです。ユーリ君が大きな壁を乗り越えられて、先生は嬉しいですよ」

「あんた、少しはやるじゃない。この調子であのミーナをコテンパンにしてやりなさい」

「ユーリ、さすが。次も頑張つて」

この瞬間が本当に嬉しい。勝った瞬間より今のほうがいい気分だ。問題なく終えられればそれで十分だと思っていたけど、本気で優勝を目指したくなってきた。まずは準決勝だ。

そして始まった準決勝。ミーナは今回も特に苦戦することもなく勝ち上がっていた。次はぼくの番だ。

ぼくの相手はスタン。弓使いだ。弓でここまで勝ち上がるなんて、とんでもない人だな。ぼくは警戒心を強める。彼は話しかけてくることはせずに構える。

試合開始の合図が鳴ると、即座に距離を取りながら射かけてきた。早い。

それを避けると、もう次の矢が迫ってきていた。慌ててそれも避ける。

なるほど。このペースで撃たれるなら、弓使いに不利なルールで勝つたのも納得だ。それから必死で避け続けていると、カタリナから櫓が飛ぶ。

「あんた、そんな奴に負けるんじゃないわよ！ あたしの足元にも及ばない奴でしょう！」

すごい物言いだ。だけど、避け続けている中で勝機が見えてきた。

スタンはぼくから見て左に射かけるときは右目を細め、右に射かけるときはそのままみたいだ。それに、移動したい方向へ先に体重をかけている。



カタリナならこんな分かりやすい癖はないし、カタリナの言うことも、そこまで滅茶苦茶というわけではないのかな。

射かけるスタンは、次の矢をつがえながら右目を細めた。つまり、左に射かけてくる。

なら、ぼくは右だ。ぼくの動きが予定から外れたのか、スタンは少しだけ撃つタイミングを遅らせた。

次からも同じようにしながら近づくと、右側に体重をかけながらも右目を細めない。

つまり、ぼくから見て右に矢を撃つてきて、右側に移動することになる。ここだ。

ぼくは素早く右に動き、放たれた矢を迂回しながら、相手の進行方向へと向かう。

ぼくが左に避けると思っていたみたいで、スタンはぼくの動きに明らかに対応できていない。そのまま弓を弾き飛ばすと、スタンは両手を挙げた。

良かった。準決勝も勝つことができた。

準決勝までは、あまり休憩時間は取られなかったけど、連戦になるぼくに配慮したのか、決勝戦までは少しばかり多めの休憩時間が与えられた。

休憩時間にはこれまで通りに、みんなと話すことにする。

「あんなザコ相手なら、あんたが勝つのも当然よね。あんな奴に負けてたら、あんたと組んでるあたしが恥ずかしいのよ。」

ほんと、あんな奴でも準決勝に出られるっていうなら、あんたの代わりにあたしが出てやつても良かったかもね」

「弓使いはこの大会に出たことはありませんでしたから。しかし、彼が良い成績を収めたことで、今後のこの大会の歴史が変わるかもしれませんね」

確かにそうかもしれない。カタリナならスタンにも勝てるだろうし、そういう人がこれから出てきてもおかしくはないよね。

「本当に驚きましたよ。ぼくが弓を使っていたなら、この大会に出場することを検討すらしなかったでしょうし。あの挑戦する姿勢は見

習いたいものですね」

「カタリナ、自信满满。でも、ユーリの方がすごい」

「はいはい。あんたは誰が相手でもそう言うんでしょね。さすがにそこまで好かれると、ある意味で羨ましいかもしれないわね。ま、あたしは別にアクアなんかには好かれたくはないけど」

カタリナはアクアなんかと言うが、アクアを見る目はちゃんと優しい。カタリナはアクアの事を大切に思ってくれているのは間違いないだろう。

でも、アクアのことをちゃんとフォローしないとな。

「ぼくはアクアに好かれるのは嬉しいからね。まあ、カタリナならこの大会でもいい結果を出せたかもしれないね」

それからもしばらく会話を楽しんでいると、決勝の時間が近づいてきた。これに勝てば優勝。相手はミーナだ。

## 9話 決勝

ついに決勝戦だ。ここまで大変だったけど、これからが本番だ。決勝の舞台でぼくとミーナは向かい合う。試合前でも朗らかな様子で、ミーナは話しかけてくる。

「僕と君とで決勝戦を迎えられるなんてね。なんだか運命を感じてしまいたい」

「そうかもね。でも、せっかくここまで来たんだ。応援してくれるみんなのために、ぼくは勝つよ」

「その意気だ。せっかく楽しい展開になったんだから、全力で楽しまない。ただ、勝つのは僕だよ。君には申し訳ないけど、ここで負けてもらう」

そしてお互いに構える。

それと同時にミーナの雰囲気が一気に鋭くなった。恐ろしさを感じるほどだ。ぼくはそれを見て気合を入れた。

それからすぐに試合開始の合図が鳴る。

合図と同時に、ともに動き出す。まずは数合ぶつかり合う。

ミーナの剣は速くて重い。少なくとも、1回戦で戦ったマカロフとは比べ物にならない。素直に戦うだけなら、ぼくが負けて終わりだろう。

でも、急いで何かしようとしても、その隙をつかれて終わりだろう。

ぼくはできるだけ最小限の動きで様子を見ることにする。ミーナの剣は正統派の剣術で、ぼくの剣を押し込もうとしているようだ。手や足は出てこない。

手足での攻撃を一度試してみるか。そう考えたぼくは、ミーナの剣がぼくの剣にぶつかった瞬間に足払いを仕掛けてみる。ミーナは一歩下がって避ける。

「見えているよ。僕の相手は人間だけじゃないんだ。冒険者になるつもりだからね。隠れた攻撃をしてくるモンスターだっているんだから、それくらいは対応できない」と

さすがに通じないか。なら、次だ。

ぼくは先ほどから、縦に攻撃されたときは右側に動くようにしていた。さつき足払いを回避されてからもさらに何度か同じ動きを繰り返した。

それからしばらくして、またミーナは縦の攻撃を仕掛けてきた。ミーナの目は右側に寄っている。

でも、今度は左から攻撃してやる。そして左側から仕掛けるけど、ミーナは目線を切ったまま剣を振ってくる。特にミーナに隙はできない。

「おや、その顔、何度も同じ方向から仕掛けてきたのは作戦だったみたいだね。でも、1回目に通じなかった以上次はないよ」

確かにそうだ。だけど、土壇場で失敗するよりはましだ。

あの感じだと、タイミングを変えたくらいじゃ通用しなかったはず。そう自分を慰めるけど、どんどん追い込まれていく。このままじゃ負ける。

ぼくは焦りながら隙を探していると、つばぜり合いが仕掛けられそうなタイミングがあった。

「もらったー！」

そう言いながら全力で押し込もうとする。避けてくれれば、いったんは落ち着くことができる。そう目論むも普通に受けられてしまう。

「やぶれかぶれ。いや、はったりかな。とても決め技には見えないよ」  
見破られていたのか。どうする。これ以上どうにかする手段は思いつかない。焦りながらも守って時間を稼ごうとする。時間があれば、何か思いつくかもしれない。そう期待するもミーナは取り合わない。

「時間を稼ごうとしても無駄だよ。それじゃ、決めさせてもらおうかな」

そう言ったミーナはぼくに一撃を与える。クリーンヒットだ。このまま負けるのかな。そう諦めそうになる。

「ユーリー！」

悲鳴のようなカタリナの声が聞こえる。

そうだ。諦めてたまるか。これまでアクアには何度も組み手に付

き合ってもらった。カタリナにはたくさんアドバイスをもらった。ステラ先生にはとても優しくしてもらえた。

何より、みんな応援してくれた。ぼくの勝利を祝ってくれた。

このまま負けたくない。負けるわけにはいかない。勝って、みんなの喜ぶ顔を見るんだ。ステラ先生には心配かけるかもしれないけど、ぼくは勝ちたい。

「これで、本当に終わりだよ」

そう言つてミーナはぼくに全力の一撃を放つ。避けることもできないままぼくに当たる。全力で振り切ったから、ミーナは体勢を崩している。攻撃できれば勝てるかもしれない。

なぜかわからないけど、ぼくの体はまだ動いた。隙だらけのミーナの剣にぼくの剣を全力で叩きつけた。ミーナの剣は遠くへ飛んで行った。

「まいった。決まっただと思っただけだね。これは、僕の負けかな。参りました」

そう言つてミーナは降参する。数秒後に喜びが沸き上がってきた。本当に優勝できたんだ。カタリナ、アクア、ステラ先生。ぼくは勝ったよ。

それからしばらくして、簡単な表彰式を終えた後、ぼくはみんなにお祝いの言葉をもらっていた。

「ユーリすごい。ユーリが勝つて、アクアも嬉しい」

「あんた、少しはやるみたいじゃない。最後なんて完全に負けたかと思っていたわ。これなら、前に言つてたご褒美をあげてもいいかもしれないわね」

「……」

ステラ先生は黙つたままで難しい顔をしている。何か問題があったのだろうか。アクア水は使っていないから、反則ではないはずだけど。

「先生、どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません。それよりユーリ君、本当におめでとうございます。少しだけ心配でしたが、今も元気な様子ですし、本当に嬉し

いです」

ステラ先生は先ほどとは違いぼくに笑顔を向けてくれた。この顔を見られただけでも優勝して良かったと思える。頑張ってたよかった。「みんなの応援があったからです。それに、これまでもたくさん支えてもらいましたから。本当にありがとうございます。」

カタリナ、アクアもありがとう。カタリナのアドバイスがあったから勝てた試合も何度かあるし、アクアとの相手のおかげで上達できたのは間違いないよ」

「当然よね。せっかくあたしが練習に付き合ってたよって、試合まで見に来てやってるんだから、いい結果を出してもらわなきゃ怒ってたわよ」

「アクアがユーリを支えるのは当然。これからも頼ってくれていい」

みんなにこうしてお祝いしてもらっていると、本当に優勝できてよかったなと思う。

応援が力になるなんて話を聞いたときは、そんなわけないと思っていただけ、今回は本当に応援の力を実感できた。これからも、みんなの期待にこたえられるといいな。

「ユーリ、今回は本当におめでとう。悔しいけど、君も見事だったよ」

「ミーナ。今回ぼくが勝てたのは奇跡のような気がするんだ。でも、たとえ奇跡だったとしても、応援してくれるみんなの期待に応えられたことだし、素直に喜んでおくよ」

「そうだね。優勝した人が納得していないような顔をしていたら、僕だって少しくらいは嫌な思いをしただろうし、それがいいよ」

そう言っただけでミーナは手を差し出してくる。ぼくも握手に応じると、何かに気づいた様子でミーナが話しかけてくる。

「その左手の紋章、君は契約技の使い手だったんだ。悔しいな。剣技だけは負けたくないと思っていただけ、手札を全部さらしていない相手に負けてしまうなんてね。次に会う時には、もっと強くなって、君の全力にも対応できるようになるつもりだから、また会おうね」

「そうだね。また会えると嬉しいな。せっかくの縁だし、これからも機会があることを期待しているよ」

そう言うのと、ミーナは手を振って去っていく。

それにしても、契約技か。もしアクア水が使えたなら、他の相手には楽に勝てただろうけど、ミーナだったらどうか。

少なくとも順調に勝てたとは思わない。あの速さに対応できる技はそう持っていないしね。今回も反省点は多くあつたし、ぼくももっと強くないと。

そうして、ぼくたちはミストの町へと帰ることに。

ミストの町に帰った後、学園でそれなりに祝いの言葉をもらった。カタリナたちにお祝いしてもらった時ほどじゃないけど、まあまあ嬉しかった。

次の日。カタリナがご褒美をくれるというので、アクアと一緒にカタリナの家に向かった。

そこでは、カタリナが料理を用意してくれていた。見るからに豪華だ。

魚の煮物に焼き魚が目につくけど、それ以外にもたくさん料理があつた。これは相当気合を入れてくれたらしいな。

「ほら、前に行つてたご褒美よ。どうよ？ あんたが思っていたようなものとは比べ物にならないでしょう。ほら、用意したあたしにたくさん感謝しながら、ありがたくいただきますい」

「うん。本当にありがとう、カタリナ。ここまで手間をかけてくれるなんて。本当にうれしいよ」

「すごい、カタリナ。本当にごちそう」

「あたしならこれくらいは楽勝よ。さ、話はいいでしょう。すぐに食べなさい。あたしがせっかく用意してやったんだから、残すんじゃないわよ」

残すわけがない。量はまともだし、ぼくの好物である魚料理が多い。

それに何より、カタリナがこれほど頑張ってくれたのだ。多少無理をするくらいでも、全部食べるつもりだった。

カタリナの用意した料理を食べ始める。本当においしい。ぼくは夢中になつて食べ進めていた。あつという間に食べ終えてしまう。

「カタリナ。本当においしかった。ありがとう。今日のことはきつと忘れないよ」

「当然よね、あたしの手料理を食べられたんだから。感涙にむせび泣くべきところよ」

そう言つてカタリナは満足げな顔をする。

ぼくは本当にカタリナと幼馴染であつたことに対して感謝した。カタリナにはこれまでに何度も支えてもらつている。ぼくはカタリナに十分なものを返せているだろうか。

「それにしても、随分がつつくのね。あたしの料理が美味しいのは当然だけど、もうちよつと優雅に食べられないのかしら。いや、あなたに優雅なんて似合わないわね。忘れなさい」

「カタリナの料理なら、何度だつて食べたいよ。ここまで手間をかけたものじゃなくてもいいから、また食べさせてくれると嬉しいな」

ぼくの言葉を受けて、カタリナは少し照れた様子になる。

しかめっ面をしていることが多いカタリナだけど、いつもこうなら可愛いのに。でも、しかめっ面のカタリナも魅力的だとは思うけど。「そ、そう。ま、気が向いたらね。いくらあなただからって、材料そのままを食べさせたりはしないから、よだれを垂らして待つてなさいよ」

「ありがとう。ゆっくり待つとするよ。カタリナ、今日のことみただけど、いつも本当にありがとう。カタリナが応援してくれたおかげで、闘技大会も優勝できたんだ」

「何よ急に。あんたが殊勝になつたつて気持ち悪いだけよ。でも、感謝したいつていうなら、存分に感謝しなさい。あたしが許してあげるわ」

本当にカタリナには感謝している。

今回練習に付き合つてくれた事や応援してくれたことはもちろん、この料理をごちそうしてくれたことも本当に嬉しかった。

だから、カタリナに喜んでもらえる何かをしたい。

「感謝するのも許可があるの？ でも、何かお礼を考えておくよ」「あんたなんかのお礼であたしが喜ぶとは思えないけどね。ほら、そ



ろそろ帰っていいわよ。これ以上いると暗くなっちゃうわ」

「わかった。カタリナ、またね。アクア、いこっか」

「うん。カタリナ、また」

そしてぼくたちは家に帰る。今日はアクアもぼくと同じものを食べていたけど、これからはアクアにもぼくと同じ食事を用意すべきだろうか。

「アクア、餌のことだけど、これからはぼくと同じものを食べてみるかい？」

「いつものでいい。アクア、味にこだわりはあんまりない」

「そう。別のものがないならいつでも言ってくれていいからね」

「わかった。でも、たぶん言わない」

アクアは本当にどうでも良さそうな雰囲気なので、食事は何でもいというのは事実なのだろう。食事が楽しくないなら、別の楽しみを知ってほしいかな。遊んであげる以外にも何か考えた方が良さだろうか。

それから、今日もアクアと一緒に寝た。アクアはぼくに抱き着いたまま絶対に離そうとしない。でも、アクアと一緒に寝ることは心地いいから、これでいいのだろう。

そして次の日。ステラ先生に呼び出される。

「ユーリ君。ユーリ君の契約技について、少し詳しく聞かせてもらってもいいですか」

## 10話 契約技

ステラ先生に呼び出されたぼくは、ぼくの契約技であるアクア水について詳しく教えてほしいと言われる。

一体急にどうしたんだらう。よくわからないので、先生に訊いてみる。

「詳しくというと、どういうことですか？ 何から話せばいいでしょう」

「そうですね。まずはどのような使い方をしているかでしょうか」

「先生も知っていることですと、水の召喚と操作ですね。前のキラータイガーとの戦いですと、水を入れた袋を水ごと操ったり、泥水を操ったりですね」

「泥水を操れるんですか？ それは、水が動くと、摩擦などで土も一緒に動くということですか？」

ステラ先生は本当に真剣な目をしている。よほど重要な問題なのだろうか。

でも、そこまで変なことにはなかったはずだ。

「よくわかりませんが、泥水をキラータイガーの目にぶつけて、視界を奪いました。袋の中に入れた泥水を、袋を破ることで、キラータイガーの目にかかるようにしました」

「そうですか、では、水の中で、土が偏っていたということはないと？」

「恐らくそうです。普通の泥水のような様子でした」

「そうですか……」

そうやってステラ先生は少し考えこむ。

泥水が操れると、何かおかしいんだらうか。普通に動かしていたから、特に気にしたことはなかったけど。

「すみません、ユーリ君。では、他の使い方はしていますか？」

気を取り直した先生が次の質問をしてくる。他か。アクア水を飲んだりするくらいかな。

「飲み水として使ったり、お風呂に使ったり、生活用水にしていますね」

「そうですか。先生も飲んでみて構いませんか？」

「アクアが言うには、ぼくが飲むならいいという事らしいんですけど、どうされますか？」

ステラ先生は少し眉をひそめた。ぼく以外がアクア水を飲むと害になるだろうと考えているのだろうか。

「では、やめておきます。その水を飲んだり、お風呂に使ったりしているといいましたが、何か変わったことはありませんでしたか？」

「それなんですけど、この水、とても美味しいんです。お風呂にしてもとても気持ちよくて。戦闘に使えなくても、これだけでいいと思えるほどです」

今でも毎日使っている。高級な水というのがどういいうものかわからないけど、アクア水を超えることは無いんだろうな。

「美味しい、ですか。どんな味ですか？ 天然水のような感じでしょうか」

「あまり気にはしていませんでしたけど、なんとなく甘いような気がします」

「なるほど。それでは、召喚した水を見せてもらってもいいですか」「わかりました」

ステラ先生の前にアクア水を召喚する。ステラ先生はアクア水の周りを眺めたり、匂いをかいだりしていた。

「ふむ。見た感じではただの水のようなんです。なるほど……」  
またステラ先生は考え込む。

なんだろう。何かおかしいことでもあったのだろうか。少し不安になってくる。

でも、アクアはぼくに害のあることをしないだろうと信じる。  
「アクア水って、何か変だったりするんですか？」

「そうですね……いえ、先生は調べ物ができました。これ以上は、また、何かわかったときにお話しします」

そう言ってステラ先生は去っていく。どうしたんだろう。

まあ、ステラ先生なら、ぼくに危険がありそうならすぐに言ってくれるだろうし、そこまで心配しなくても大丈夫かな。

その夜、ぼくはアクアと話していた。

今日、ステラ先生と話していた時、アクア水は何か特殊なんだろうという雰囲気だったので、アクアに聞いてみることにした。

「アクア、普通の召喚した水って、美味しくなかったり、泥を操れなかったりするのかな？」

「知らない。他のスライムと比べてみたら分かるかも」

「そっか。急にごめんね。少し気になったからさ」

「別にいい。気にするなら、撫でてくれればいい」

という事らしいのでぼくはアクアを撫でることに。

それにしても、別のスライムか。ハイスライムなんて滅多にいないらしいけど、出会う機会があるのかな。

仮に他のスライムのほうが有用だったところで、アクアより契約しなくなる相手はいないだろうし、特に気にすることもないか。

そして次の日。ぼくはステラ先生に話しかけられる。

「ユーリ君、エンブラの街の闘技大会に優勝したことですし、ちよつといい店に食べに行きませんか。空いている日を教えていただければ、予約しておきますね」

「近々の予定は学園くらいですけど。ステラ先生が生徒と出かけるなんて、珍しいですね」

「それほど先日のユーリ君が素晴らしかったということですよ。奢りですの、お金の心配はしなくてもかまいませんよ」

お金の心配をしなくていいのはありがたい。正直なところできるだけ節約したいから、ステラ先生がそう言うってくれることは渡りに船かな。

「ありがとうございます。ステラ先生にお祝いしてもらえるなんて、嬉しいですよ」

「お上手ですね。では、3日後はどうでしょう」

「それで構いません。楽しみにしておきますね」

「ええ。私も楽しみです。では、3日後、よろしく願いますね」

ステラ先生と食事に行けるらしい。本当に尊敬できる先生だし、わざわざ機会を取ってくれるなんてありがたい。今から3日後が楽し

みだった。

その日の夜。機嫌がよさそうなアクアと話す。

「アクア、何かいいことでもあった？」

「なくはない。でも、ユーリには内緒」

「アクアが隠し事なんて珍しいね。言いたい気分になったら教えてよ」

「分かった。気が向いたら教える」

それにしても、アクアが隠し事か。

そんなことまでできるようになって嬉しいような、ぼくに隠すようなことができたのかと寂しいような。アクアの成長ということでは喜んでおくか。

もつといっぱい隠し事が増えたら、考えも変わるかもしれないけど、今のうちはこれでいいかな。

そして3日後、ステラ先生と食事に行くことに。

待ち合わせ場所に向かうと、そこには赤いドレス姿のステラ先生がいた。ふだんあまりおしゃべりしているようには見えないステラ先生だけど、格好が変わるとだいぶ印象が変わる。

いつもおっとりして安心感のあるステラ先生だが、今日はかなり色気が出ているように見える。なんだか緊張してきた。

「ユーリ君、待っていましたよ。もうすぐ店の予約時間です。急がなくてもかまいませんが、そろそろ向かいましょう」

「ステラ先生、その衣装似合ってます。お綺麗ですね」

「ありがとうございます。ふふっ、ユーリ君はいつも通りですね」

そうだ。ステラ先生がこんな格好をするってことは、ぼくはこんな衣装じゃだめだったんじゃないか？ 思っていたより店のグレードが高いかもしれない。

「あ、そうです。ユーリ君、衣装のことは気にしなくてかまいませんからね。私の知り合いのやっている店で、事情は説明してあります。気にせず楽しんでってください」

ぼくの反応は予想していたらしい。先生はやっぱり大人だな。

まあ、先生の着ているドレスに合わせた衣装なんて用意できないか

ら、そう言ってもらえるのはありがたい。

そして少しの移動後、店に到着する。

「よう、ステラ。こいつがキラータイガー討伐の立役者で、エンブラの闘技大会で優勝したユーリってやつか。とてもそうは見えねえが、人は見かけによらねえもんだな。坊主、しつかり楽しんでつてくれや」  
軽そうな調子で店主らしき人が話しかけてくる。格式ばった対応をされるとどうしようかと思っていたが、これくらいなら安心できる。マナーなんて、ただの学生に分かるはずもない。

「ユーリ君、今日は特別な料理を用意してもらいました。マナーについては、そこまで気にしなくてもかまいません。今日は他のお客もいませんし、ひっくり返したりしないよう気を付けるくらいで十分です」

「そうだな。ただの学生に細かいマナーなんて期待しねえよ。せっかくステラが高い金を払ったんだ。お前も楽しんでいけ。それがステラも一番喜ぶだろうよ」

そういうことらしい。ここまで言われて、あまり気にし過ぎるのも逆に失礼かな。無理しない範囲で気にしておくことにしよう。

「まずは1品目だ。食べ終わるころに次を出すから、まずはこれを食べておけ」

そう言つて料理が出てくる。1品目と言っていたけど、まさかこれは噂に聞くコース料理という奴だろうか。ステラ先生はかなり奮発してくれたらしい。

ステラ先生の食べ方を見ながら同じように食べていく。これはおいしい。カタリナの料理もぼく好みでとてもおいしかったけど、これも負けていない。

食べ終わったところに次の品が出る。これも美味しい。そうして何品が出された後、

「これが最後だ。しばらくは外しておくから、ゆっくり話しておいてくれや。坊主も知らん奴と一緒に祝われても困惑するだけだろうしな」

といい、店主は離れていく。後でお礼を言わないとな。

「ユーリ君、キラータイガーの件、闘技大会、お疲れさまでした。大きなけがもなく終わって、先生も安心しました」

「ありがとうございます。先生にたくさん配慮していただいて、おかげでいい結果になれたと思います。先生には感謝でいっぱいです」

「そうですか。ユーリ君たちのお役に立てているのであれば、先生は嬉しいです。ユーリ君は本当に見違えましたね」

ステラ先生は若干遠くの方を見ているようだ。昔の事を思い出しているのかな。ぼくは本当にずっと弱かったからな。見違えたと言われるのも当然かもしれない。

「先生のおかげです。そういえば先生、前言ってた調べ物は終わりましたか？」

「ええ。問題ありませんでした。ユーリ君には心配させてしまったみたいで、申し訳ないです」

「いえ。先生がぼくのことを気にしてくださったことだというのは分かっています。謝ることはありません」

「ふふ。そんなユーリ君だから、期待に応えようと頑張って、闘技大会でも優勝できたんでしょうね。ユーリ君、苦しいこともあったでしょうに、よく頑張ってくださいました」

そう言っただけでこちらに来たステラ先生に抱きしめられる。

ステラ先生にここまで褒められるなんて、意外だな。ステラ先生は優しいけど、深入りはしてこないというイメージだった。

それにしても、ステラ先生に抱きしめられていると、すごく安心感がある。これもステラ先生の人柄によるものだろうか。

少ししてからステラ先生は元の席に戻る。なんだか名残惜しい気もする。

「ユーリ君、今日は楽しかったですか？」

「はい。ステラ先生、こんな機会を用意していただいて、ありがとうございました。これからも先生の期待に応えられるよう、頑張ります」

「そうですか。ユーリ君、頑張るのはいいいですが、くれぐれも無理はないように。ユーリ君に何かあったら、先生は悲しいです」

「わかりました。これからもよろしくお願いします」

それからしばらくして、店主が戻ってくる。ぼくは店主にお礼を言う。

「今日はありがとうございました。本当においしかったです。おかげでいい時間を過ごせました」

「おう、次は自分の金で来れるよう、精進しな。そんな時は、今よりマナーも覚えてこい」

そしてステラ先生と別れてぼくは家に戻る。今日はいいい日だったな。ステラ先生のおかげでリフレッシュできたし、また頑張ろう。



## 裏 ステラ

ステラがアクアについて本格的な疑念を抱いたのはつい最近である。

初めは、些細な違和感でしかなかった。ユーリが使う契約技であるアクア水を使う時、水を多く呼び出すことができるにもかかわらず、ほとんど動かすことができないということ。

たいていの場合、契約技というのは規模と精度が同時に向上している。水であれば、召喚できる水の量と、操作精度は比例するものである。才能によつて偏りが発生することは無くはないので、ユーリもその類であるかもしれないと、考察をそこで止めていた。

次はユーリたちだけでキラータイガーを討伐したことである。

本来、ユーリたちの実力であれば、アリシアたちの助けを得ずにキラータイガーを討伐することなどできなかっただろう。

だが、ユーリは自分のアドバイスから順当に成長したような策を用いていたことと、最初にアクア水を見た時の召喚量を考え、ユーリは特に才能があるのだろうかとうと流していた。

違和感が大きくなったのは、エンブラの街において行われた闘技大会。

その決勝において、ミーナの一撃を受けたユーリは、それでダウンするように見えた。これまでのユーリであれば、そうなるはずであった。

だが、ユーリはその一撃に耐え、さらにミーナに攻撃を加えることまでできていた。

それだけでなく、その後も平然と過ごしていた。とっさにアクア水を使って防御したとも考えたが、服が濡れるなどの痕跡は見当たらなかったし、ユーリの性格ならば、優勝を辞退する、そうでなくとも、悔しそうな顔をするくらいはしたであろう。

そこまで考え、アクアとの契約において、ハイスライムとの契約では起こりえないようなことが起きているのではないかという疑念が生まれた。

それからしばらく。自分一人で考えていても埒が明かなかつたので、ユーリに確認を取ることにした。その中において、ステラはさらに疑念を深めていくことになる。

本来、ハイスライムなどとの契約で水を操る際には、水と触れているものを直接的に動かすことはできなかつた。水の圧力などを利用して、間接的に動かすことしかできないのである。

他の契約技においてもそうである。風の影響で砂を吹き飛ばすことはできても、その中の砂を直接操ることはできないように。

ステラの考えでは、水を操るだけでは、泥の成分と分離して、砂と水に分かれるはずだつた。

また、ユーリがアクア水を飲料として利用し、さらに美味であると感じていることもおかしかつた。契約技に流れる力を抜かない限り、普通は飲んだ後も操作できてしまうので、干渉をしないままある程度時間を経過させるなどしないと、飲料としては利用できなかつた。

そこまでもしても、味は単なる水のはずであつた。ユーリが水を美味だと感じているからアクア水もそうだという様子ではなかつたので、さらに疑念を深めていた。

そしてステラは、ユーリはアクア水を飲料と使用している中で、アクア水から何らかの影響を受けているという可能性に思い至つた。

その考えであれば、ユーリが最近身体能力を伸ばしていること、キラタイガーを倒せるまでに成長していること、ミーナの一撃に耐えたこと、アクア水を美味だと感じていること、そのすべてに説明がつくと思えた。

そこまでのことができる契約技など、ハイスライムとの契約ではありえない。

ステラの頭の中に、荒唐無稽ともいえる考えが思い浮かぶ。アクアがオメガスライムであるという可能性だ。

オメガスライムはかつて3つの国を滅ぼすに至つたと伝えられている。だが、はるか昔の伝承ということもあり、多くの者には作り話の類であると思われていた。

ステラがその可能性をユーリに告げなかったのは、まだ半信半疑であつたためでもあるが、ユーリに心配をかけることにはためらいがあつたということ、現状大きな問題を起こしていないように見えるアキラを刺激することで、もつと大きな問題が発生することが避けられたという思いがあつた。

その夜、ステラは書庫でスライム種について調べていた。他の教員や生徒にも内容を告げず、閉め切った部屋で調査を行っていた。

大きな話になることを避けたかつた他、万が一の際、周りに被害を出さないためでもあつた。

黙っていた場合のリスクも考えたが、アキラが本当にオメガスライムであつた場合、ただ混乱を招くだけで何ら有効な対策が行えそうになかつたこともあり、黙っていることを選んだ。

実際、現在のアキラは特に理由がない時には他者への干渉を行うつもりはなかつたため、他者に話をしてその内容がアキラに伝わった場合でなければ、即座に大勢が犠牲になるということとはなかつただろう。

ステラはアキラがオメガスライムであるという確証は得られなかつたが、少なくともただのハイスライムではないとは確信していた。

これ以上のことを調べるためにはもつと多くの資料があるところ、もつと大きな学園や貴族などが持つ書庫をたどらなくてはならないだろうという結論に至り、これからどうするかについて考えていた。

もつと調べるか、ここで止めておくか。ユーリやその他の人間に伝えるべきか、伝えないべきか。

考え事に浸っているステラの足元に水が触れる。こんなところで？ 疑問に思っているとある可能性に思い至る。それと同時にステラは水に拘束された。

「アキラちゃん……？ ここは閉め切っていたはずなのに。いえ、それよりもどうしてここに」

「アキラは水。人間が入れない程度の閉鎖なら問題ない。それに、ユーリのことなら何でもわかる」

ステラが考えた通り、その正体はアクアであった。自身がとてつもない窮地に追いやられてみると、ステラは理解していた。

しかし、自分に対して返答したアクアに対し、一縷の望みをかけてさらに話を続ける。

「アクアちゃん。あなたはオメガスライムなのですか？ ユーリ君のことを何でもわかるとおっしゃいましたが、これはユーリ君が望んだことなのですか？」

「オメガスライムが何かは知らない。アクアはただのハイスライムでもないけど。それと、ユーリはステラを気に入っているから、単に殺すつもりはない」

「それはどういう……？ いえ、それよりも、あなたはユーリ君に危害を加えるつもりはないんですね？」

「アクアはユーリのもの。ユーリはアクアのもの。ユーリをユーリでなくすつもりはない。アクアが考えてることは、すぐにわかる」

そう言うとアクアは、ステラの口から入り込み、体を制御する。

自分の意思で体を動かさなくなったステラは、それでも言葉を発することができたため、会話を続ける。

「まさか……！ 私に成り代わるつもりなんですか!? いえ、それだけじゃない。アクアちゃん、あなたまさか、キラータイガーも……」  
「ユーリのごことは心配しないでいい。それより、自分のことは心配しなくていいの？」

「ユーリ君……アクアちゃんは、あなたのそばには……」

「それ以上は許さない。ステラ、これまでユーリの役に立ってくれてありがとう。お礼に、せめて苦しませないであげる」

そう言うとアクアはさらにステラの体内に侵入し、体のすべてを支配下に置いた。

ユーリよりはるかに優れた水の操作能力を持つアクアは、自身の水分を介して、ほとんどのものを操作、さらに自在に作り変えることもできた。

その力を利用して、ステラの体の大部分を自身の操りやすい形に変え、脳の記憶領域以外を休眠状態にした。ステラは眠っているような

状態のまま、アクアに操作され続けることとなった。

ステラを操作できるようになったアクアは、ステラの記憶を読み取った。

今日、ステラがアクアに対して行った調査と考察は、ただでさえ怪物だったアクアが、さらなる化け物へと変化するきっかけになった。

次の日。アクアはいつも通り自分自身でユーリと接するほかに、ステラとしてもユーリと接触した。

普段、ユーリがアクアと会話する時とは違う態度に、アクアは新鮮味を覚えていた。単に自分の異常性がユーリに伝わらないことを目標としてステラを乗っ取っていたのだが、自身が思っていた以上に得るものがあった。

アクアは、アクアとユーリではできないことをステラの姿を利用して実行することにした。

その一歩として、ステラの交友関係を利用し、ただの学生では通えないような店へユーリを連れていくことに決めた。

アクアの擬態は他の人たちに違和感を持たせないことに成功しており、学園にいるほかの生徒や教師、ステラとして予約した店の店主、その他ステラの交友関係にある人間は、ステラがいつも通りのステラであると思っていた。

この調子ならば、ユーリと自分の時間を増やすに等しいことを行えると確信したアクアは、その日上機嫌だった。

それから3日後、アクアはステラとしてユーリと食事に出かけていた。店主を乗っ取ることも検討していたアクアだったが、まだ乗っ取りという行為に慣れていないということもあり、特に気づいていない様子の店主に何かすることは避けていた。

ユーリがマナーに詳しくないことは知っていたので、事前に店主を適当に言いくるめ、ユーリが自身との会話を楽しめるように誘導していた。

いつもとは違うユーリの反応。いつもとは違うユーリの会話。

アクアはそれらを楽しみながら、ステラという外面をどう利用するか考えていた。他の人の立場からもユーリと関わるができる以

上、アクアと言う顔を通してはこれまで通りのユーリを楽しむことに決めていた。

ステラとしての自分は、教師と生徒という立場を利用してユーリに甘えさせるのもいいかもしれない。アクアとしてはするつもりがなかったアドバイスを通してユーリに頼られるのも面白い。

なんにせよ、ユーリと距離を近づけることは絶対だ。アクアはこれまでなかった可能性に思いをはせていた。

そしてステラとしてはユーリと別れ、アクアとしてユーリを迎える。今日はユーリの知らない一面を知ることができた。アクアは今日も幸せだった。

## 11話 日常

ぼくは今日も学園に通っていた。いつも通り授業をこなし、いつものメンバーと戦い方についての話などを行っていた。まずはステラ先生にアクア水の事を相談した。

「ステラ先生、泥水を操作できるという話から思いついたのですが、アクア水の中に何か入れておいて、それを利用した戦術というものもあると思います。何かいいものはありますか？」

「そうですね、それを考えるにも、まずはどの程度の大きさのものならアクア水を通して操れるのか、そこを検証したほうがいいと思います。」

粉状のものなら大丈夫なのか、大きい塊でも問題ないのか、重さは関係しているのか。その情報があれば、また考えも広がると思いますよ」

「確かにそうですね。では、いろいろと検証してみたいと思います」

その話の後、検証を行ってみたところ、細かいものをアクア水に入れた場合だと多く動かせて、大雑把な操作に。

大きなものだと少しの数だけ操作できて、数が少ない分だけ細かく制御できた。

疲れてくると、操作できる大きさや個数の限界が下がったり、操作が雑になったりしていたので、これから練習することで、もっと細かく操作したり、数や量を増やすといったこともできそうだ。

やっぱりステラ先生は頼りになる。

次はカタリナと雑談をしていた。この前参加した闘技大会で弓使いがいたので、その話題を振ってみる。

「カタリナ、この前の闘技大会で対戦相手が連射してきたけど、カタリナもああいう事ってできるの？」

「できるに決まってるでしょ。馬鹿にするんじゃないわよ。前衛が足止めしてる時にあんなことをしたら危ないじゃない。あたしは1人で戦うつもりなんてないんだから、正確さのほうが大事なのよ」

「確かに誤射されたら怖いね。なら、カタリナがああいう動きをする

「ことを見る機会はないかな」

「どうしてもって言うなら、訓練場で見せてあげるわよ。あんな奴程度とは比べ物にならないんだから、目を凝らしてよく見ておくことね」

カタリナに見せてもらった連射は、たしかにあの時のスタンよりすごい。あつという間に矢筒の中の矢を撃ち切ってしまったにもかかわらず、一本も的から外れてはいなかった。

「こんな精度じゃ前衛と戦う時に撃てないってのはあんたでもわかるでしょ。でも、そのうち連射しても的のど真ん中に当てられるようになってやるわよ。せっかくだから、あんたにも特等席で見せてあげるわ」

ぼくからすれば十分な精度に見えたけど、カタリナは納得していないらしい。

カタリナは口は悪いけど、向上心も高いし、周りに気を使うこともできるのだ。分かりにくいとは思うけど。

ぼくはカタリナと組めることをあらためてうれしく思った。本当に頼りになる幼馴染だ。

その次はアクアとだった。アクアが進化してから戦闘についてあまり話していなかったから、それを話題とすることに。

「アクアはハイスライムになってから、あまりぼくと一緒に訓練していないよね。いろいろ訊きたいことがあるんだけど」

「何でも訊いて。でも、あまり戦闘の経験はないから、よくわからないことも多い」

「そっか。進化したばかりだもんね。まあ、わからないことでも、訓練するきっかけになったりするかもしれないし、訊くだけ訊いてみるね。まず初めに、アクアは武器って使えるの？」

「使えないこともない。でも、普通に殴ったり蹴ったりするほうがやりやすいし、そこらの武器よりそっちのほうが強い」

以前のキラータイガーとの戦いではあまり有効打を与えられなかったみたいだけど、足止めに徹してくれていたという事なのかな。

実際、どれくらい強いのかはまた検証してみるのもいいかもしれない



いな。

「じゃあ次の質問だけど、攻撃を受けた時に痛みを感じたりはする？」  
「別に。そもそもスライムに痛覚なんてない」

痛みを感じるといふなら、物理攻撃相手に盾の役割を任せすることも考え直さなくちゃいけないけど、痛覚はないのか。

なら、スライムの弱点である超高温と超低温にだけ気を付けなければいかな。さすがに水の形を保てなくなったら、スライムは危ないみたいだし。アクアに万が一はあってほしくない。

その日の夜、アクアに打撃を試してもらったところ、金属の板をへこませていた。これだけの威力があるなら、並のモンスターにはアクアの打撃だけでどうにかなりそう。

ぼくももつと訓練して、カタリナやアクアにふさわしい仲間になれるようにしないと。

次の日。ぼくはステラ先生とアクアとともに出かけていた。

ステラ先生によると、しゃべるモンスターとの出会いはミストの町に来てからは久しぶりで、アクアといろいろ交流してみたいとのことだった。

実際、ぼくもこの学園ではぼくくらいしか契約している人を知らない。ぼくの交友関係が狭いせいもあるかもしれないけど。

都会や冒険者の組合が活性化しているところでは、それなりに契約者は見かけるといふ事らしいので、ミストの町が田舎なせいかもしれない。

アロシアとレティにもつと契約者の話を聞いておけばよかつただろうか。

そうすれば、アクアとの契約で気を付けるべきところを知れたかもしれない。アクアに不便をかけるのは避けたいし、何か調べてみるのもいいかもしれない。

「アクアちゃんは、どうしてユーリ君と契約しようと思ったんですか？ 進化したモンスターでも、契約しないという方も珍しくはないですし、何かきっかけでもあったのでしょうか」

そういう事もあるのか。アクアからはすぐに契約を持ちかけられ

たから、みんなすぐに契約するものだと思ってた。アクアと契約しなかったら、ぼくも無事ではいられなかっただろうし、幸運だったのだろう。

「ユーリと契約するのは当然。アクアは、ずっとユーリと一緒にいる」  
いまさらアクアと離れることなんて考えられないし、アクアもそう思ってくれているのはありがたい。

ぼくがもし結婚することになったとしても、アクアとは一緒に住むつもりだ。

その辺を理解してくれる人がいるかはわからないけど、アクアはぼくの一部のようなものだし、頑張って理解してもらうしかない。

「アクアちゃんはユーリ君のことが大好きなんです。契約している人たちでも、ここまで仲のいい関係というのは、珍しいかもしれませんね。」

単なる道具として契約モンスターを扱う人もいれば、ビジネスのような関係の人たちもいます。誰もがアリシアさんとレティさんのように、お互いに信頼関係を持つパートナーとなるわけではありませんから」

そんな人たちもいるのか。ぼくはアクアにとっていいパートナーでいられているだろうか。

ただのスライムだったときは、大事にしているとはいえ結局のところはただのペットだったけど、アクアと会話できるようになってから、その関係も変わってきたような気がする。

アクアはまだペットのつもりみたいだけど、そのままでもいいんだらうか。もつとアクアの望みを叶えられるようになりたい。アクアは本当にぼくを支えてくれているから。

「アクアはぼくが契約者で良かった？　ぼくはアクアと契約できてうれしいけど、アクアにお返しできてる気もしないんだよね」

「そんなの気にしなくていい。アクアの望みは、ユーリと一緒に過ごすこと。ユーリはアクアと遊んだり、アクアのことを撫でたりするだけがいい。そのためなら、どんなことでもする」

「そっか。何かしてほしいことがあるなら何でも言ってくれていいか

らね。ぼくもアクアと過ごしたいけど、アクアに頼りっぱなしというのもカッコ悪いからね」

「本当にユーリ君とアクアちゃんは仲が良いんですね。ユーリ君が契約技をどんどん進歩させているのも、2人の信頼関係からでしょうか」

アクア水をうまく使えるのも信頼関係の証というのなら、こんなに嬉しいことはない。

ぼくがアクアを信頼しているのは間違いないけど、アクアもぼくを信じてくれているなら、それに応えたい。

「ユーリ君はアクアちゃん以外のモンスターと契約したいと思った事はありませんか？ アクア水は便利ですが、他の技を使ってみたくて思った事もあるんじゃないですか？」

「他の技が気にならないといえど？ になりますけど、ぼくはどんな便利な技よりも、アクアとの契約のほうが大事です。アクアはずっと一緒に過ごしてきた家族のようなものですし、それより優先するほどのことじゃありません」

「アクアもユーリ以外と契約するつもりはない。他の人なんて、考えたこともない」

アクアはそう言ってくれる。アクアがぼくの事を大切に思っているということが良くわかる。

もちろん、ぼくにとってもアクアは大切な存在だけど、これからもこの関係を大事にしていきたいし、もっともっと仲良くなりたい。

「そうですね。もっと強いモンスターのほうが良かったなんて言う契約者も珍しくはありませんからね。」

ただ、そういう契約者が、モンスター側に愛想を尽かされるということもあります。ユーリ君とアクアちゃんには、その心配はなさそうですね」

「当然。アクアとユーリは最高のペットと飼い主」

契約モンスターに愛想を尽かされるとどうなるんだろう。

ぼくはアクアに見限られるほどひどいことをするつもりはないけど、そういう契約者もいるんだ。

アリシアとレティはそういうことは無さそうだったけど、そんな契約者と会う事もあるのかな。とてもぼくとは気が合いそうにない。

「ふふ。そんなユーリ君とアクアちゃんには、贈り物があります。どうぞ受け取ってください」

そう言つてステラ先生は一組の指輪を渡してくれる。ぼくとアクアがそれぞれを別に着ければいいのかな。

「それはですね、契約の補助をしてくれる指輪なんです。他の形のものもありますが、ユーリ君もアクアちゃんも近接で戦うこともありませんから。邪魔にならないものになりました。」

この指輪は契約技の補助に使う他に、習熟すれば、お互いの考えていることを送りあうこともできるそうですよ。もちろん、相手に全部筒抜けというわけではありませんが。仲のいいユーリ君とアクアちゃんにはぴったりだと思います」

「ありがとうございます、ステラ先生。こんな良い物を頂いてしまつて。大切にしますね」

早速もらった指輪を着けてみる。ぼくが左手の中指に着けると、アクアも同じところに着けていた。

「おそろいですね。ふふっ、これからもお2人で仲良くしてくださいね。そうすれば、これを贈った甲斐もあります」

アクアと仲たがいするつもりなんてないけど、せつかくの贈り物だから、アクアとの関係と同様に大切にしよう。それにしても、契約の補助をする道具か。初めて聞いたな。

それからしばらく雑談した後、ステラ先生と別れて帰宅する。その後、もらった指輪を試していた。

アクア水の操作は少しだけ楽になったけど、考えを送りあうことはできなかった。

ステラ先生は習熟すればできると言っていたし、これからの練習に組み込まないとな。

## 12話 暗雲

今日ぼくは、アクアとカタリナと出かけていた。

少なくなった日用品をそろえるための買い物を中心に、そこらをぶらつくことになっている。

いくつかの買い物を済ませると、カタリナが問いかけてきた。

「あんた、アクアとおそろいの指輪なんてしてるのね。アクアのことペットって言ってるわりにはそんなことをするし、あんたの性癖も大概よね」

とんでもない誤解だ。びっくりしたぼくは訂正してもらおうと説明する。

「これは契約を補助してくれるもので、カタリナが考えているようなことはないよ。ステラ先生にもらったんだ」

そう説明するとカタリナは少し考えこんだ様子になる。なにか気になることがあるのだろうか。しばらくたった後、カタリナは不満げな顔をして、ぼくに話しかける。

「あんた、ステラ先生と最近よく一緒にいるみたいじゃない。一応言っておくけど、ステラ先生は誰にでも優しい人なんだから。」

あんたが最近いろいろ面倒を見てもらっているのも、あんたが聞きたい契約技について説明できるのがステラ先生だけだからであって、あんたが気に入られてるわけじゃないんだから、そこら辺勘違いしないようにしなさいよ」

当たり前のことだ。そもそもステラ先生は頼りになる先生であって、ぼくは彼女と付き合い合いたいとか、お近づきになりたいとか思っているわけじゃない。

ただ、カタリナにその辺を直接説明しても、言い訳するんじゃないみたいなのを言われるだけで納得してくれないだろうし、どう返答したものか。

そう考えていると、カタリナはさらに捲し立てる。

「返答に詰まるなんて、あんた凶星ってわけ？ いい？ この機会に言うけど、あんたみたいなのやつ、好きになるのはそのアクアくらい

で、ヘタレで、弱っちくて、情けないあんたが女の人に好かれるなんて幻想、さつさと捨てたほうが、あんたの身のためよ。いい加減、身の程をわきまえることね」

散々言ってくるな。いくら口が悪いカタリナとはいえ、ここまで言ってくるなんて、何かぼくに不満があるのだろうけど、カタリナはその辺をつくと説明してくれるわけでもなく、さらに怒るだけだからな。

適当に謝っておこうかと考えていると、アクアが取りなそうとする。

「カタリナ、その辺にしておいて。いくらカタリナでも、ユーリをそこまで悪く言われていい気はしない」

「分かったわよ。あんた、良かったわね。かばってくれるペットがいて。せいぜい大切にしておきなさいよ。こいつに見捨てられたらあんたは終わりなんだから」

それはそうかもしれない。ぼくの事を大切に思ってくれる人なんてそうはいない。

そんなことは関係なくアクアの事を大切にするつもりではあるけど。

「アクアを大切にするなんて、当然のことだよ。まあ、アクアがぼくを見捨てるとは思わないけど」

「当たり前。アクアは何があってもユーリと一緒にいる」

「はいはい、お熱いことで。なんかもういいわ。さつさと次の店に行きましょう」

まだ不満はある様子だけど、カタリナは落ち着いてくれたみたいだ。ぼくじゃこうは落ち着かせられなかっただろうし、アクアには感謝しておこう。

それからしばらく、カタリナの買い物に付き合わされた。

いつもはもうちょっとぼくのペースに合わせてくれるカタリナだけど、今回は随分待たされたので、アクアと一緒に時間をつぶしていた。

買い物を終えたカタリナは満足げな様子で、さつきまでのいらだち

を解消できているように見えた。

「あーすつきりした。ほら、あんた。これ、持ちなさいよ」

いつものように荷物を持たせて来ようとする。本気でいら立っている時は自分で持とうとするので、だいぶ機嫌は良くなつたみたいだ。

それにしても、一体なんでカタリナは機嫌を悪くしたのだろうか。原因がわかれば次から気を付けることができるけど、当人に聞いても絶対に答えは返ってこないからな。

どうしたものか。悩んでいると、先にカタリナに声をかけられる。

「あんた、今日は悪かったわね。ちよつと虫の居所が悪かったのよ。でもね、あんたはモテないってのは事実なんだから、十分気を付けることね」

謝ってるのかなこれは。

ただ、カタリナが自分を悪いと言うなんてほとんどないことだし、素直に受け取っておくか。

「気にしてないよ。それより、今日はもう帰るんでしょ？ 気を付けてね」

「はいはい。あんたも気をつけなさいよ。アクアがいるんだから、頼りないあんたでも何とかなるでしょうけど」

そう言つてカタリナは去っていく。それから、ぼくたちも家に帰つた。

家でアクアという時に、今日のカタリナについて相談することを思いつく。

アクアなら何かわかるかもしれないので、試しに聞いてみることにする。

「アクア、今日のカタリナ、なんで機嫌が悪くなつたんだと思う？」

「想像はつく。でも、たぶんユーリは信じない」

アクアの言うことは信じてるけど、たぶんそういう事じゃないんだろくな。

きつと、よっぽどカタリナらしくない事なんだろう。一体何なんだろう。ぼくが信じないと言うあたり、ぼくじゃ思いつかないか、思い

ついてもすぐ否定することなのだろう。

「カタリナのことはいいい。それより、いっぱい撫でて」

ぼくは言われた通りに撫でながら、カタリナのことを考える。

カタリナはすぐ感情を表に出すようにいて、知られたくないことはうまく隠す人だからな。ぼくが察するのが苦手なだけかもしれないけど。

その場で機嫌が悪くなっても、遅くとも次の日には直っているものだから、あまり気にしたことがなかった。

これからそうはいかないこともあるかもしれないし、そういう時にアクアに相談できるといいんだけど。

それからしばらく考え続けたけど、答えは出なかったのでとりあえず諦め、いつも通り過ごした。

次の日。ぼくはステラ先生に呼び出される。今度は一体何だろう。

「ユーリ君。エンブラの街の闘技大会で当たった、ミーナさんという方がいましたよね。彼女から手紙が届いていますよ」

「ミーナから？ ぼくの居場所なんて知ってたんですか？ 教えた記憶はないですけど……」

「学園からは何度もあの大会に人を出場させていますからね。運営を通して送られてきたんです」

わざわざ大会の運営を通してまで手紙を送ってくれたのか。ミーナとは大会で戦ったくらい浅い関係だから、そこまで大した内容ではないと思うけど。

「そうですか。一体何のために送ってきたんでしょう」

「私は読んでいないので内容は知りません。ただ、ある程度は検閲されてから送られることになっているので、大きな問題のある内容ではないでしょう」

「分かりました。読んでおきますね。では、また」

ステラ先生と別れ、ミーナからの手紙を読むことにする。

手紙の内容として、ぼくに負けてからこれまでより多く訓練するようになったこと、これから冒険者になるつもりだということ、再会した時にはぼくに勝つつもりだということが書かれていた。



ぼくはあの勝ち方に満足できているわけではなかったけど、ミーナがぼくを目標にしている以上、ぼくももつと強くなろうと思った。それがぼくが負かしたミーナに対しての礼儀のように思えた。

剣技だけなら今でもミーナのほうが上だろうし、これからもつと差が開いていくだろうけど、ぼくにはアクア水がある。

アクア水はぼくなんかもって良いと思えないほど、可能性に満ちている契約技だ。これならミーナにも十分対抗できるはずだ。

もちろん、アクア水のすごさにかまけてぼく自身の訓練をおろそかにすれば、簡単にミーナに負けてしまうだろうけど。

いずれは風刃と呼ばれるアリシア以上の契約技使いになってみせる。

そうすれば、ミーナだけではなく、アクアやカタリナ、ステラ先生にも恥じない人になれたと言っつていいはずだ。

その後、カタリナと合流して会話をしていると、少し不満げな様子でぼくに質問してきた。

「あんだ、今日もステラ先生と一緒にいたみたいじゃない。一体何の用だったのよ」

そう問い詰められたので、ミーナから手紙が来たことを話す。カタリナはますます不満げになった。

「ミーナって、前の闘技大会の決勝に出てたやつよね。あんだ、そんなとこまで手を出してたの?」

「手を出すってなにさ。ぼくたちみたいに冒険者になる予定で、次に出会ったときにはぼくに勝つつもりらしいよ」

「そう。よかったわね。また女の人と仲良くできて。あんだも嬉しいんじゃない」

女の人だからということはないけど、単純に知り合いが増えることは嬉しい。

これから先にもつと親しくなれる可能性を感じるから、余計にだ。親しい人ってカタリナとアクアとステラ先生くらいだからね。

「ミーナと再会するのは楽しみかな。お互い、どれだけ強くなったのか確かめるいい機会だし」

「ほんとにあんたって奴は！　いいわよ、せいぜい女の人に囲まれることを夢見ておくことね」

「そんなつもりはないんだけど。カタリナ、ぼくが女の人にだらしないみたいなのを言うのやめてもらっていい？」

「は？　事実でしょうが！　もういい。あんたなんかにつき合ったられないわ。あたしたちのパーティーもこれまでね。あんた、頑張ってるじゃないようにね」

そう言っただけでカタリナは去っていく。今までに聞いたことがないくらい低い声だった。

困ったな。これは本当に怒っているみたいだ。いまもう一度話しかけてももっと怒るだけだろうし、いったん落ち着くのを待つべきだろうか、

でも、カタリナがパーティー解散を口に出すなんて初めてだし、どうすればいいだろう。

結局それから、カタリナはぼくが視界に入るとすぐに離れていくことを繰り返していた。

本当にどうしよう。カタリナとパーティーを組むことはぼくの活動の基本みたいなものだったし、何とか仲直りしたいけど、ここまで怒ったカタリナに対してどうすればいいかわからない。

その日の夜、家でアクアに相談してみるけど、良い答えは出てこなかった。

次の日も、カタリナは機嫌を損ねたままだった。

一日置いても落ち着かないほど怒らせてしまったのかと落ち込むけど、原因がわからない以上謝り方もわからない。迂闊な謝り方をすれば、もっと機嫌を損ねてしまうことは目に見えているし、慎重に行動したいけど、このままではカタリナと離れ離れになってしまうかもしれないという焦りも生まれていた。

結局その日も事態は好転せず、次の日を迎えた。

今日はもともとカタリナとは別々の訓練を行う日だ。その間にカタリナに対してどうするかを考えていた。

考えてもカタリナが怒った原因は分からないので、カタリナとまた

仲良くしたいとまっすぐに伝えることにしようと思っていた。

カタリナには下手なごまかしは通じないので、原因はわからないと素直に伝えるしかないかな。

訓練が終わったので、カタリナを探そうとしていると、焦った様子のステラ先生がぼくに話しかけてきた。

「ユーリ君、ここにいましたか。大変です。訓練中にモンスターが異常発生して、カタリナさんが取り残されてしまったんです」

### 13話 救出

カタリナがモンスターのいるところに取り残されたらしい。ぼくは焦りながらも、状況をステラ先生に確認する。

「カタリナが取り残されたって、一体どこに!？」

「いつも訓練で使用している山です。前にキラータイガーも現れた場所に近いところですね」

山の異常はあれで終わってなかったのか。

それにしても、一体なぜカタリナが。いや、そんなことを考えている場合じゃない。

「モンスターが異常発生しているといいましたが、キラータイガーみたいな危険なモンスターはいますか。それに、数はどれくらいですか」

「普段山にいるようなモンスターより強いことは確かですが、キラータイガーほど危険なモンスターはいません。それより厄介なのは数です。とにかく多くて、現場も混乱していたみたいです」

「とにかく多い、ですか。具体的な数はわからないんですか?」

「情報が錯綜していて。ただ、10や20ではないことは確かです」

そんなに多いのか。だとすると、何の準備もなく向かって、犠牲者を増やすだけにしかならない。今すぐにでも向かいたいけど、装備を整えないと。

「ステラ先生、ぼくは救出に向かう準備をするので、アクアを呼んでももらえますか」

「危ない……いえ、わかりました。急いで呼んできます。しっかりと準備してくださいね」

ステラ先生はそう言って駆け出す。

ぼくも急いで用意しないと。剣と盾に防具、後はアクア水で使えそうなもの、食料も一応あったほうがいいか? 飲み水はアクア水でいいとして、軽い物がいいかな。あまり重くても、探し回る邪魔になりそう。取り残されたと言われている場所にいるとは限らないし、あまり重い荷物にならないほうがいいよね。

ぼくが準備を終えたころ、ステラ先生がアクアを連れてきた。ステラ先生は息も絶え絶えといった感じた。

「ユーリ君、お待たせしました。すぐに向かいますよね？ 私は応援することしかできませんが、必ず、カタリナさんと無事に帰ってきてください」

「ありがとうございます、ステラ先生。では、すぐに向かいますね。アクア、状況は分かってる？」

「うん。カタリナが危ない。ユーリ、急ごう」

「ユーリ君、アクアちゃん、お気をつけて。私はここで無事を祈っています。目途が立ったら、応援も送るつもりですから、慌て過ぎないように」

ステラ先生はそう言うけど、応援が間に合うとは限らないからな。焦りは確かに良くないけど、できるだけ素早く行動しないと。

「ありがとうございます、ステラ先生。アクア、行こう」

「わかった。ユーリ、カタリナと仲直りしよう」

「ふふつ、そうだね。そうしようか」

そうしてぼくたちはカタリナの救出へ向かった。

カタリナと仲たがいはしたままお別れなんて、絶対に嫌だ。いや、そうでなくても、カタリナはぼくの大切な幼馴染だ。絶対に助けてみせる。

ぼくたちが山に入ると、早速ダブルホーンラビットが10匹くらいで出迎えてきた。2本角の生えたウサギのようなモンスターだ。

授業でよく戦うホーンラビットは無力に等しい存在だったけど、ダブルホーンラビットは対応を間違えればやられかねない。

それが入り口でこの数か。カタリナはもつと多くのモンスターとぶつかっているとみて間違いないだろう。ぼくの心に焦りが生まれる。

「ユーリ、落ち着いて。ここで焦ったら、カタリナにたどり着く前に疲れ切っちゃう」

そうだ。カタリナにたどり着いても、そこでカタリナを襲うモンスターたちを倒しきれないと意味がない。焦りが消えたわけではない

けど、少しは落ち着いた。

消耗を防ぎながら探索範囲を広げるとなるとこれかな。ぼくはガラス片をアクア水で包んだものをいくつも用意した。

アクア水は少なめにして、速く動かせるようにしたものにする。

別にカタリナを襲っていないモンスターを倒す必要はない。ガラス片を利用して目をつぶし、こちらに襲い掛かってこれれなくするだけでいい。ぼくはそうしてダブルホーンラビットを無力化し、先に進む。

戦闘中でないときは、常に大声でカタリナの名前を呼んでいた。

カタリナが気づいてくれるならそれでいいし、モンスターに気付かれるだけだとしても、カタリナにそのモンスターが襲い掛かる可能性は減る。

ぼくの負担が増えるだけなら、大抵のモンスターからはアクアが守ってくれる。その場で考えたにしては悪くないアイデアだと思えた。

ぼくはそうして、出会うモンスターをいなしながらカタリナを探し続けていた。

けど、カタリナは見つからない。反応も帰ってこない。ぼくの心に暗い物が増える。もしもう手遅れだったら。

いや、まだ探しきれていないだけだ。行き違いになった可能性もある。まだあきらめるな。そう自分を鼓舞した。

「カタリナ、どこにいるんだ……」

けど、それからしばらくしてもカタリナは見つからなかった。

ぼくの頭にカタリナとの思い出がよみがえる。涙が出そうになるけど、歯を食いしばってこらえる。涙なんて流したら、今よりもっと見つけにくくなるだけだ。そんなの全部終わってからでいい。

絶対に、カタリナともう一度仲直りするんだ。そう思いながら必死にカタリナの名前を叫ぶ。

すると、少し遠くで声が聞こえた。その方向に近寄り、何度もカタリナの名前を呼ぶ。今度ははっきりと声が聞こえた。

「ユーリー！」

カタリナの声だ。まだ間に合う。そう思うとぼくの体に力が沸き上がってきた。

急いで声のほうに向かう。そこにはカタリナの姿が見えた。かなりボロボロだけど、命が危ないようには見えない。少しだけ安心するけど、気を取り直す。まだ、カタリナが助かったわけじゃない。

カタリナはいくつかの種類のモンスターに囲まれていた。弱いモンスターばかりで、その中心にいるのはラピッドウルフだ。少しだけ厄介な、尻尾が黒い狼という見た目をしている、名前の通りに速い狼といった感じのモンスターだ。

だけど、ラピッドウルフはゆっくりとカタリナを取り囲んでいる。弓の傷以外もあるし、ラピッドウルフに向かうモンスターもいる。これは同士討ちでもしていたのだろうか。いや、考えるのは後だ。

「アクア！ カタリナを守って！」  
「わかった。まかせて」

アクアはモンスターの中をぐり抜け、カタリナのそばに寄る。アクアがいるなら、ある程度は大丈夫だろう。そう判断したぼくは、まずラピッドウルフを倒すことにする。

カタリナに近い物から順に攻撃しようと思われ、ぼくはアクア水で針を高速で移動させる。アクア水があるから針の軌道を変えることもできる。

それを利用して、ラピッドウルフの喉や眉間に針を突き刺す。ラピッドウルフは少し苦しんだ後、倒れていく。ラピッドウルフはこれで大丈夫そうだ。

ぼくはその作業を何度か繰り返しつつ、他のモンスターの様子を見る。

ラピッドウルフが倒れると、ラピッドウルフ以外のモンスターはカタリナの方へ向かおうとしていた。

ぼくはアクア水をモンスターたちの方へぶち撒けて、モンスターたちが水を払っている間に、地面の土をアクア水を通して操り足を絡めとった。

足を止めている間に、剣が届くモンスターから順にとどめを刺して

いく。

それからしばらくして、カタリナの周りにモンスターがいなくなつた。もう大丈夫だ。そう思うと、涙がボロボロとこぼれていく。しばらく泣いていると、その間に近寄ってきたカタリナに抱きしめられる。

「ほら、泣くんじゃないわよ。あたしは無事よ。あんたのおかげでね」  
「カタリナ……ぼく、カタリナに何かあったらと思うと、本当に怖くて。良かった。カタリナを助けられて」

「ユーリ……ありがとう、あたしを助けてくれて。あんた、本当に頼りになるようになったのね。また、あたしとパーティを組んでくれるかしら」

カタリナからそう言われる。本当に良かった。カタリナとまたパーティを組めるなんて、願ってもないことだ。

「当たり前だよ。ぼくはあの時からずっとそうしたかったんだ。こちらからもお願いするよ」

「ふふ……そうね。なら、また一緒に組みましょう。あたしたちなら、きつと最高のパーティになれるわよね」

「ぼくもそう思うよ。カタリナ、またこれからもよろしくね」

そう言うときカタリナはぼくを離して微笑む。そうしているカタリナは、これまで見たものの中で、一番きれいなもののように思えた。

「そうだね。アクアにも礼を言わなくちゃね。ありがとう、アクア」  
「別に。気にしなくていい」

「じゃあ、そろそろ帰りませうか。一応心配かけた人もいるでしょうしね。ま、ユーリほどじゃないでしょうけど」

「あはは……。それにしても、ステラ先生は援軍を送ってくれるって言ってたけど、結局見当たらなかったね」

そう言っていると、教員たちがこちらに向かってくるのが見えた。5人組か。今の山にはさすがに一人では行動できないということだろうか。

それにしても、本当に遅い。もう全部終わったんだけど。内心あきれけるけど、さすがにそれを表に出すことはしなかった。一応、危険を



承知で行動してくれたわけだし。

そしてぼくたちは教員たちと合流し、学園に戻ることに。

ぼくたちと合流した以外の人員が退路を確保していたらしく、帰りにはそれほどモンスターには出会わなかった。

学園に戻ったぼくたちは軽く診察を受け、カタリナは治療のために別れていった。カタリナに後遺症が残りそうなケガは無かつたらしく、一安心といったところ。

それからステラ先生に事の顛末を報告することに。ステラ先生は戻ってきたぼくたちに対して、

「カタリナさんともども、よく無事に戻ってきてくれました。先生は嬉しいです。応援はあまり役に立たなかったようですが、責めないであげてください。必要な戦力計算のための情報がうまく集まらなかったみたいなんです」

と言ってくれた。ステラ先生が喜んでくれているところに悪いとは思うけど、本当に学園の教師は信用ならない。

まあ、ぼくもカタリナも無事だったのだから、責めなくてもいいか。

「まあ、カタリナが無事だったので何でもいいですけど。結局、何が原因だったかはわかったんですか？」

「原因は現在調査中です。原因が判明するか、一定期間以上落ち着くまで、あの山は立ち入りを制限することになりました」

まあ、妥当なところか。似たようなことがまた起こるかもしれないわけだし。

アクアやカタリナ以外が似たような目にあっても、ぼくは助けに行こうとは思わないけど、起こらないに越したことはないよね。

ステラ先生は山に入ることはないだろうし、ぼくが心配するのはそれくらいか。

「ユーリ君、あの指輪、役立ってくれましたか？ そうだとすると、贈ってよかったと思えるのですが」

「あの指輪がなかったら使えない手段もあったと思います。カタリナを助けられたのは、先生のおかげでもありますね」

「そうですね。ユーリ君たちのお役に立てたのなら、嬉しい限りです。」

カタリナさんが元気になったら、アクアちゃんも一緒に出かけませんか？」

ぼくと親しい人みんなで出かけることになるな。でも、カタリナはぼくとステラ先生が仲良くしようとすることに不満があったみたいだから、反対するかもしれない。

「ステラ先生となら喜んで。まあ、カタリナには聞いてみないといけないと思いますけど」

「では、カタリナさんさえよければ。ふふっ、楽しみです。では、また」

ステラ先生と別れたぼくは、カタリナを家に送っていったあと、帰宅した。今日は本当に疲れた。早く寝よう。

そうして、ぼくの長い一日は終わったのだった。

## 14話 平穩

事件が立て続けにあったということで、学園は調査のため休みとなった。

手持ち無沙汰になったぼくは、アクアと遊ぶことにした。アクアとだけ1日を過ごすことは、アクアが進化してから全然なかったことだから、今日は楽しく過ごせそうだ。まずは何をしようかな。

「アクア、今日は何して遊ぶ?」

「なんでもいいけど。せつかくだし。抱きしめてくれる?」

何だろう。今日はいきなり積極的だな。まあいいか。

アクアがやってほしいというなら、人前でもないし、抵抗感はない。アクアを抱きしめると、冷たい感じがすると同時に、なんとなく温かいような気分を感じた。

アクアの体温は低いし、何かアクアから出ているのだろうか。

不快な感じはしないどころか、むしろ居心地はいいので、あまり気にすることもないか。

「ユーリ、人にするみたいに、優しくしなくてもいい。どうせ痛くない」

もつと強く抱きしめろってことかな。

痛くないというなら、アクアの言うように優しくしなくても大丈夫かな。物理攻撃はスライムには効かないようなものだし、人が全力で抱きしめるくらい、どうということはないのだろう。

全力でアクアを抱きしめると、アクアは潰れることもなく、かといって強く押し返してくるわけでもなく、柔らかい感触がした。アクアはご満悦な様子だ。

「ふふ。ユーリ、楽しいね」

そう言いながら、アクアは抱き返してくる。

いつものことだけれど、アクアとくっついているとなんだか安心する。落ち着きたいときには、アクアと一緒にいるに限るな。

それからしばらく抱き合っていると、アクアは満足した様子で離れていく。次は何をしようか。

「アクア、満足した？ ぼくは結構楽しかったかな」

「アクアは満足。ユーリも嬉しいなら最高」

「なら最高だね。アクアとぼくは相性バツチりみたい」

特に悩みもせずにそう言うと、アクアは胸を張って肯定する。

「当然。アクアはユーリにとって最高のペット。他のモンスターじゃこうはいかない」

「まあ、そうだね。たとえばレティとかと一緒にだったとして、アクアほど相性がいいとは思えないよ」

「戦闘も性格も契約も、ユーリなら全部アクアが一番。アクアにとっても、ユーリが全部一番」

「アクアにとつて一番なら嬉しいな。もちろん、ぼくにとつても、アクアが一番だよ」

アクアと一緒にいられたことはぼくにとつて望外の幸運だ。辛い時も、苦しい時も、アクアがいるから頑張ろうと思えた。

他にもぼくを支えてくれた人はいるから、アクアだけでいいとまでは言わないけど、アクアがぼくの中で一番大きな存在であることは間違いないだろう。誰よりもずっと一緒にいたことだし。

次はボードゲームをすることに決めた。これはアクアがただのスライムだったときには絶対できないことだったし、こういうのもいいだろう。

「アクア、これのルールは知ってる？」

「うん。でも、いいの？ ユーリじゃ敵にならない」

「やってもいけない内からそんなことを言っているのか？ まあ、ぼろ負けするとしても、アクアとなら楽しいよ」

「そう。なら、遠慮はしない」

それから、アクアと10戦したけど、良いところが一つもないまま10連敗した。

アクアは初めてこのゲームをするはずなのに、なんでこんなに強いんだろう。

負けたことをぼくは気にしていなかったけど、アクアの目がだんだん憐れみを持ち始めたので、単純な強さより、相手との読みあいが大

事なルールの遊びに変えてみたけど、これもまた連敗した。的確にぼくの行動を読んでくるので、前のゲームよりも惨敗することになった。

アクアがぼくのことを理解してくれているのだと思うと嬉しかったけど、そう考えると、ぼくはアクアのことを理解できていないんじゃないかと思ってしまう、少しだけ気分が沈んだ。

その様子を見て、アクアは別のゲームを提案してきた。

今度は運要素の強いゲームだ。ぼくはこういうゲームが得意だったので、アクアに対して、リベンジを宣言してみた。

「アクア、運のゲームなら、ぼくは負けないよ。覚悟しておくことだね」

「そう。たまにはユーリが勝つのもいい。手加減はしないから、がんばって」

アクアは余裕綽々といった様子だ。まあ、あれだけ連勝していればそれも当然か。

それからしばらくそのゲームを続けた。基本的にぼくが優勢だったけど、運に乗り切れないときに戦略でひっくり返されることもあり、7対3位の優勢にとどまった。

これにはびつくりした。運の絡むゲームでほとんど負けたことがないだけに、ここまで負けるのは予想外だった。ただ、アクアは少し悔しそうだった。

「ユーリ、本当に強い。でも、これならユーリと勝負になる」

「あはは……アクア、本当に賢いんだね。ぼく、このゲームで負けたことはほとんどないのに」

「ユーリのペットは最高でしょ？　これからはこういうことでも頼ってくれていい」

「そうだね。本当にぼくなんかと一緒にいて良いのかと思うくらい」

ぼくがそう言うと、アクアは顔をしかめてしまう。それから少しだけ真剣みを増した顔と声で返してくる。

「アクアはユーリのペットなんだから、離れるようなことは言わなくていい。ユーリは頼りになるけれど、別にそうじゃなくても一緒にい

る」

「あ……ごめんね、アクア。そうだよ。ぼくだって、アクアが頼りにならなくても、ずっと一緒にいるよ。それはそれとして、頼れる場面では頼らせてもらおうけど」

「それでいい。ユーリはアクアとずっと一緒にいることだけ考えていればいい」

「わかった。ずっと一緒に居ようね、アクア」

アクアが離れたくならない限り、なんて言うのはアクアに対して失礼だろうから、思いとどまった。

アクアがぼくのことを好きでいてくれるのは間違いないから、それを否定するようなことは言うべきではない。反省するべきかな。

さつきからの言葉や考えはアクアの好意を信じないようなものだ。他の誰が信じないとしても、ぼくだけはアクアのことを信じていないと。

それから、アクアと話したり、遊んだりしながら一日を過ごした。

今日はアクアの新しい一面を知れたし、アクアとの絆を改めて感じることができた。楽しい一日だったといっているのかな。

それからしばらくして、学園の活動が再開した。結局以上の原因は分からなかったたので、警戒のための人員を配置するという方針に決まったようだ。

ぼくはカタリナに、ステラ先生やアクアと出かける誘いを持ちかけようとした。

「おはよう、カタリナ。今日はぼくのあげた髪飾りをつけてくれるんだ？」

「ま、あんたにしては悪くないものだったからね。たまにはいいでしょ」

「ありがとう、カタリナ。ところで、ステラ先生がぼくたちと一緒に出かけたらしいんだけど、カタリナも来てほしいみたいなんだ。一緒にどうかな」

ぼくがそう言うとカタリナは一瞬だけ眉をひそめたが、すぐに元の顔に戻る。ちよつと機嫌を損ねちゃったかな。

「あんだね……ま、いいわ。ステラ先生なら、そんな変なところには連れて行かないでしょ。ついて行ってあげてもいいわ」

「よろしくね。それはそうと、体はもう大丈夫？」

「問題ないわ。でもね、あんだ。そう言うのは最初に聞くことでしょうが。仕方ないわね。ま、あんだにデリカシーがないのは分かりきったことだし、寛大なあたしだから、許してあげるわ」

カタリナは偉そうな言葉遣いだけど、ぼくに笑顔を向けてくれている。そこまで悪印象を与えたわけでは無いのかな。だけど、反省すべきだな。

「そうだね。ごめん、カタリナ。でも、問題なさそうでした。一応無事とは聞いていたけど、少し心配だったから」

「少しなの？ あたしはあんな所でやられはしないけど、その言い方はうざったいわね。それはいいわ。それより、いつ出かけるつもりなの？」

「やっぱり聞かれるよね。先にステラ先生に確認しておいて良かった。」

「今度の休日だって。つまり明日だね。軽い食事と、後は雑談する予定みたい」

「そ。じゃ、特に用意もしていかなくてよさそうね」

「そうだね。気軽な感じで良いらしいよ」

「ステラ先生らしい話だね。じゃ、あたし、次の授業があるから」

カタリナとは別の授業なので、ここで別れる。それからは、いつもの学園生活だった。

それにしても、わざわざ4人で話すって何の話だろう。まあ、大事な話ならもつと別の形だろうし、そこまで気にすることもないか。

そして次の休日。ぼくとアクアはステラ先生との待ち合わせ場所に向かった。そこには今のところ、カタリナだけが待っていた。

「おはよう、カタリナ。あれ、今日もぼくのあげた髪飾りをつけてるんだ？ 毎日変えてるのに、めずらしいね」

「別にいいでしょ、何でも。あんだは本当にいつも似たような恰好ね。この機会に少しはおしゃれでも覚えたら？」

ごまかされてるな。カタリナがそんなことをすることなんて今までなかったし、何か気分でも変わったのだろうか。

追及したところで、カタリナが答えてくれるとは思えないので、とりあえず流されておこう。

「覚えてみたいとは思っただけだね……なかなか難しくて」

「ま、あんたにそういうセンスがあるとは思ってないわ。でも、あんたの思うおしゃれは、普通の人の身だしなみ位だとは理解しておきなさい。あんたがだらしないと、一緒にいるあたしまで変な目で見られるんだからね。あたしに恥をかかせないようにしなさいよ」

「カタリナが恥ずかしいのは問題だね。じゃあ、少しは頑張ってみるかな」

「期待しないで待ってるわ。どうせあんたのことだから、たいして身に着けられないんでしようけど」

ひどいことを言われているけど、あまり否定できるとは思えなかった。どうしても良くわからないんだよね。

それからアクアも混ざって少し雑談をしていると、ステラ先生が到着する。

「すみません。お待たせしてしまっただけです。ユーリ君、カタリナさん、アクアちゃん。今日はよろしくお願いします」

「いえ、気にしないでください。時間より遅いというわけではないです。今日は何の話をする予定なのでしょうか？」

「特に決めているわけではありませんが、最近の調子は聞いてみたいですね」

特に決めていないのなら、本当に雑談と考えていいのかな。ステラ先生の顔はそこまで真剣という感じではないし、少なくとも今は大事な話ではないのかな。

「あたしは特に問題ないわ。ユーリは最近調子がいいみたいじゃない」

「そうだね。アクアが進化してから、トラブルもあつたけど、調子自体はいいほうだと思う」

「アクア、ユーリの幸運の女神」



「アクアちゃんは、本当にユーリ君になついていますね。契約技使いは、契約モンスターとの仲がとても大事ですので、ユーリ君とアクアちゃんの関係は理想的なんですよ」

ぼくとアクアの関係が理想的だとステラ先生が言ってくれれば、本当に嬉しい。

ぼくがアクアを大切にしていることも、アクアがぼくを信じてくれていることも、ステラ先生は感じてくれているのだろう。

「ふーん。アクアとあんたが仲良くすればあたしの役に立つなら、存分に仲良くすればいいわよ」

「そんなことのためにアクアと仲良くするつもりはないよ。いや、他の誰ともそういうつもりで仲良くしようとは思わないけど」

「別にユーリと仲良くできるなら何でもいい」

ぼくたちの様子を見て、カタリナはあきれたような顔をする。とはいえ、これは不機嫌な顔ではないな。単純に心配しているという感じかもしれない。

「相変わらずあんたはお人好しね。そんなんで、冒険者になつてやっていけるの?」

「少し心配にならなくもないですが、アクアちゃんもカタリナさんも、ユーリ君のそういうところに助けられていますよね? 私も含めて、周りの人が支えてあげればよろしいかと」

「アクア、何があつてもユーリを支える」

「アクアも相変わらずね。ま、ユーリのお人好しは治るものじゃないでしょうし、仕方ないか」

ぼくの助けになってくれる人がこんなにいるんだと思うと、嬉しくなってくる。みんなが支えてくれる分は、別の形でみんなに返したいな。

それからしばらく経つて、食事をとることに。今回は前みたいに高そうな店というわけではなかった。前の店は美味しかったけど緊張したし、今のところはこれくらいの方が良いかな。

簡単に食事を済ませ、少し休憩する。今日は本当にただ雑談するだけの日みたいだ。ステラ先生に何か用事があつてぼくたちを集めた

わけではなさそうだし、もう気を緩めても大丈夫かな。

「ところで、ユーリ君たちはパーティを組んで冒険者になるつもりですよね？　そこで、少し提案があります」

駄目だった。それにしても、何だろう。ステラ先生のことだから、無茶を言うてくるはずはないけど、わざわざぼくたちだけに？

「ステラ先生からの提案でしたら、できるだけ聞き入れたいとは思いますが……一体なんでしょう？」

「それはですね、カーレルの街で冒険者活動を始めてみないかということですよ」

カーレルの街か。たしかアリシアとレティが活動拠点にしているところだよな。何かいいことでもあるんだろうか。

「カーレルの街ですか。特に行きたい場所があったわけでもないのかまいませんけど、一体なぜ？　あ、カタリナはそれでいい？」

「ステラ先生の話次第ね。厄介ごとを持ち込まれちゃかなわないわ」  
「厄介ごとではないと思いますよ。実はですね、カーレルの街は私の故郷なんです。」

キラータイガールの発生があったときに、アリシアさんとレティさんを連れてこられたのも、その伝手があったることなんです」

そうだったのか。なら、アリシアとレティとステラ先生はすでに知り合いなのだろうか。それとも、カーレルの街に連絡したら、そこにいた彼女たちが来たということだろうか。

「それは知りませんでした。ということは、故郷に貢献してほしいとかでしょうか？」

「いえ、そうではありません。あなたたちにはいろいろと便宜を図ろうかと思ひまして。これでも、あなたたちには期待しているんですよ？」

ステラ先生に期待されていると言われると、気分が上がってくる。ぼくだけじゃなくて、カタリナやアクアの事も認められているような口ぶりだから、余計にかな。

「ま、当然でしょ。あたしたちが有望なんて、誰でもわかることですよしね」

「そうですね。それで、カーレルの街に私の屋敷があるんですが、それを貸し出そうと思ひまして。他にも、アリシアさんやレティさんにあなたたちの面倒を見てもらおうかと」

かなりの大盤振る舞いだな。いくらステラ先生が優しいといつても、ただの生徒にここまでするものなのだろうか。

「それで、何か対価などは必要なのでしようか？ さすがにただでそこまでしていただくわけには……」

「気になるというのでしたら、家賃程度の額を私に払っていただければ。生活を切り詰めてまでとは言いませんが。」

「それだけでは足りないような気がしますけど……」

「そうですね。実のところ、ユーリ君に贈った指輪を使いこなしてもらいたいです。あれを使いこなせる人を見るために、私は教師になつたので」

それくらいなら何もなくてもするつもりだったんだけど。

まあ、少し申し訳ないことを除けば、本当にいい話だ。強い冒険者の技術を学ぶこともできるし、しっかりと扱点もできる。ステラ先生との関係が切れてしまわないところも嬉しい。

受けるだけ受けて、別の形で何か返せるように頑張ってみるか。

「カタリナ、ぼくは受けてみてもいいと思うんだけど、どうかな？」

「そうね。ユーリが目当てというのは腹立たしいけど、悪い話でもないし、ステラ先生がだまそうとするとは思わないわ。ま、いいんじゃない？」

「アクアはユーリのやりたいようにする。ユーリはステラの話を受けたいんだよね？」

カタリナとアクアが反対しないなら、決まりだな。これからもステラ先生のお世話になることにしよう。

「そっか。ステラ先生、その話、受けたと思います。よろしくお願ひします」

「わかりました。では、準備を進めていきますね」

それから、また雑談をしてから家に帰った。家でアクアといると、少し悲しそうな顔をしているのが気にかかる。

「アクア、何か気になることでもあった？」

「ううん。何でもない」

「そっか。ぼくには解決できないかもしれないけど、言うだけでも楽になることってあるから。気が向いたら教えてくれる？」

「……うん。ありがとう、ユーリ。でも、心配しなくても大丈夫」

それから、アクアと一緒に寝ることに。これでアクアの気分が晴れてくれるといいんだけど。そう思いながら眠りについた。

## 裏 カタリナ

モンスターの異常発生からユーリに救出されたカタリナは、自宅に帰った際、既に情報が伝わっていたらしい両親に随分心配された。

「カタリナ、大丈夫だったかい!? カタリナが危ないと聞かされて、僕は生きた心地がしなかったよ」

「カタリナ、傷だらけじゃない。すぐに休みなさい。それにしても、学園に通わせるのも少し考えた方が良くかしら?」

「別にそんなことをしなくていいわよ。今回は結局ユーリが助けてくれたんだし」

カタリナは両親に妙なことをされて学園に通えなくなることを懸念していた。そんなことになれば、ユーリがどうなるか分かったものではない。

それに、多少の危険があつたくらいで引っ込んでいるだけなら、最初から冒険者を目指していることがおかしいのだ。両親に反対されたところで、カタリナは学園に通うことをやめるつもりはなかった。「ユーリ君が? あの子で何とかなるなら、ただの大騒ぎだったのかしら」

「いや、カタリナは傷ついているし、ただの大騒ぎじゃないだろう。調査自体はするみたいだから、その辺を待つてから判断してもいいだろう」

「うるさいわね。近くで騒がれちゃ休むに休めないわ。さっさと静かにしなさい。じゃ、あたしは部屋に戻っているわね」

それから部屋に戻ったカタリナは、今日の出来事を振り返っていた。

「本当に危ないところだったわ。それにしても、あのユーリに助けられることになるなんてね」

カタリナにとつて、ユーリとは弱くて、ヘタレで、常に自分が守つてやらないといけない存在だった。

幼馴染のよしみもあるし、危険にはすぐに気付くなど、役立つところもあるから、仕方なく一緒にいてやっている。そんなところであつ

た。

「ま、ほとんどアクアとの契約のおかげなんでしょうけど、それでもだいぶ頼りになるようになったわね」

今回の事件では、アクアが自分を守り、その間にユーリがアクア水を用いてモンスターを排除していた。

初めのころに比べれば、様々な使い方ができるようになっていた様子ではあるし、間違いなく努力はしているのだろう。

だが、カタリナの中のユーリのイメージは、他者の力に頼りきりというものであったため、アクアとの契約のおかげという方が納得がいった。

「いや、それだけでも言えないか。じゃなきや、闘技大会で優勝なんてできっこないんだし」

ユーリが闘技大会に出ることになったとき、カタリナはあまりにもユーリのイメージと違い過ぎて、ステラ先生もついに血迷ったかと思っていた。闘技大会のルールにあつていない自分の方が、間違いなく活躍できるだろうと。

しかし、せっかくユーリがやる気になっていたので、水を差すのも悪いかと思い、付き合つてやろうと考えた。

だからこそ、闘技大会でユーリが勝ち上がったとき、カタリナの内心は驚きでいっぱいであった。口では負けるなど言いつつも、どうせ負けるだろうし、適当に慰めてやるかと考えていたくらいだったのに、本当に意外でしかなかった。

だからこそ、またとない機会にユーリに良い思いをしてほしいと応援にも力が入った。決勝戦においてユーリが戦った忌々しいミーナ。それに負けそうになった時、思わず叫んでしまったほどだ。

ユーリを追い詰めたことといい、自分についてくるだけだったユーリを奪おうとするように見える行動といい、カタリナは本当にミーナのことが嫌いになりそうだった。

結局ユーリが闘技大会で優勝した時、自分のことのように嬉しくなった。だから、カタリナはわざわざ結構な手間までかけた料理を作つてやることに決めた。

ユーリが自分の料理を勢いよく食べているのを見て、随分満足できた。まずいなどと言われたらただではおかないつもりでいたが、予想以上に喜ばれたので、カタリナはとても気分が良かった。

それからである。ユーリが他の女と絡んでいる所を見ると気分が悪くなるようになったのは。これまでは、何がどうなろうと、ユーリは自分のもとから離れることはできないだろうと考えていた。ユーリは自分がいないと何もできないのだから。

しかし、ユーリが自分で戦えるようになる、ステラがユーリと距離を近づけたり、ミーナからの手紙をユーリが嬉しそうな顔で語る所を見て、我慢ができなくなったのだ。

それで、ユーリとのパーティを解散すると告げ、ユーリと距離を取っていた。

「あいつ、あんなことがあった後でも必死にあたしを助けようとして……しまいには泣き出しちゃうだもんね」

随分とユーリには理不尽なことを言ったが、それでもユーリはカタリナから離れようとしなかった。

だから、カタリナはユーリがずっと自分のものであると思えたのだ。そう思えば、これまでの怒りはすべて消え去っていた。

だから、次に学園に通う時、たまにはあいつの送った髪飾りをつけていくのもいいかと思い、ユーリに贈られた髪飾りをつけて学園に向かった。

なんだかんだで目ざといあいつは、すぐに気が付いた。だから、やっぱり自分はユーリの一番なのだと思えた。そのため、目の前でステラの話をするくらいなら、別に許してやってもいい気分だった。

だが、カタリナの高揚感もそこまでだった。学園から離れた後、カタリナはアクアに出会う。

「アクア？ 一体、どうしたのよ。ユーリと一緒にいるんじゃないの？」

「カタリナ……ごめん。アクアのこと、許さなくていい」

「は？ なんなのよ、急に。わけがわかんないわよ」

カタリナが疑問に思っていると、アクアはカタリナを拘束する。突

然のことに驚いたカタリナだったが、アクアと対話を続けようとする。

「一体何をするつもりよ。わざわざユーリと助けに来ておいて、ここであたしをどうにかしようっての？ おかしいわよ、アクア」

「そうかもしれない。でも、これしかないから。アクアはカタリナになる」

「は？ それであたしを拘束するの？ あたしを殺したところで、アクアはあたしの代わりにはなれないわよ」

「わかってる。だから、カタリナの体をもらう」

アクアが自分に何をしようとしているのか察したカタリナは、自分が悪い夢を見ているだけならいいと願っていた。

それでも、これは現実なのだということ、はつきりと理解できていた。

「うそでしょ……アクア、あんたはそんなことをして、気づかれないとも思ってるの？ 随分バカなんじゃないの」

「ステラは気づかれなかった。カタリナはどうかかな」

「ステラ先生が!? 一体いつからなのよ!」

「答えるつもりはない。じゃあ、カタリナ。ばいばい」

そう言ったアクアはカタリナを自身の体に沈めていく。カタリナは逃げようとするも、まるで抵抗が通じない。

「アクア……嫌! こんなところで終わりたくない。せつかくここからなのに……ユーリ、助けて。ユーリ……」

そうしてカタリナはアクアに取り込まれる。死を覚悟していたカタリナだったが、自分の体が思うように動かせなくなっても、自分の体が勝手に動いても、意識は残ったままだった。

（一体どういうこと？ アクアはあたしを殺すつもりじゃなかった？

それとも、完全には殺せないものなのかしら？ いや、どちらにしても、あたしにできる事はないか……）

それから自宅に帰っても、両親は全く気付いたような様子はなかった。それに心を痛めるも、ただ見ていることしかできない。それから、カタリナの体が眠りにつくと、カタリナの意識も落ちていった。



次の日。カタリナはステラたちとの待ち合わせ場所にいた。何かできないか考え、結局何も思いつかないままである事実は、カタリナの心を追い詰めていた。

ユーリと出会ったとき、自分の体がつけている髪飾りについてユーリが前日と同じだと指摘してきた時には、カタリナの中に嬉しさと、わずかな希望が浮かんできた。

（ユーリ、気づいて……気づいてくれたら、あたしは……あたしは、どうなるの？ 気づいたところで、あたしに体は返ってくる？ それどころじゃない。ユーリはどうなるの？ アクアはユーリに執着しているけど、アクアがユーリに嫌われても、ユーリは無事でいられるの？）

思い浮かんだ考えはカタリナを絶望させるには十分だった。ユーリと過ごしていた日常が返ってくるとは思えなかったからだ。

もし体が返ってきたとしても、それ以外が失われてしまっているのであれば意味がない。

カタリナにとっての希望は、以前の生活が戻ってくることだったが、その未来は失われてしまっているように思えた。

（こんなことなら……もっと早く、ユーリに好きって言っていればよかった……好き？ そっか。あたし、ユーリのことが好きだったんだ……こんなことになってから気づくなんて、バカみたいね……）

そしてしばらく、カタリナはユーリとの過去を思い返していた。

小さい時はいつもついてきたこと。ずっと弱くて、モンスターは自分がほとんど倒していたこと。カインにいじめられていて、少しばかりかばってやったこと。最近になって、少しは頼れるようになってきたこと。

カタリナには出会ってからのユーリとの思い出ばかりが浮かんできた。悲しかった。これからユーリと思い出を重ねられないことを思うと。

それから、ステラが到着して、ユーリたちは会話を進めていく。一見ほほえましい姿だが、ユーリ以外はすべてが同一人物だと思うと、カタリナはおぞましきしか感じなかった。

ふざけた環境の中にユーリが置かれている。そう思うと、沈んでいたカタリナの心に怒りが芽生える。

(ユーリをこんなピエロにするなんて、アクアのやつ、許せない。でも、アクアを殺したら、ユーリはきつと悲しむわよね……)

ユーリはアクアたちと冒険者になるつもりらしかった。冒険者になること自体はユーリとカタリナの目標であったが、それが汚さされているように思えた。

それでも、自分の体はユーリと一緒にいる。ユーリの姿を見ることが出来る。それはカタリナにとってわずかな救いであった。

幸い、アクアは絶大な力を持っている様子だ。間違ってもユーリが死ぬことはないだろう。

ならば、いつかカタリナが自分の体を取り戻せた時のために、アクアからユーリを守る方法を考えておけばいい。ユーリを守って、ユーリとどうするか。それを考えていると、カタリナの心にほんの少しだけ力が湧いてきた。

(そうね……また、ご飯を作つてあげるのもいいわね。あいつなら、仮にまづくてもあたしの料理というだけで喜ぶでしょ。あたしの料理がまづいわけではないけど。

それに、デートなんかしてやるのもいいかしら。これまで意識したことなかったけど、あいつもデートだといえばあたしのこと、今までよりもっと意識するでしょ。

それからそれから……)

それからというもの、カタリナはずっとユーリのことを考え続けていた。それ以外にすることがなかったということもあるが、ユーリとしたいことは自然とどんどんカタリナの頭の中に浮かんできた。

カタリナは、いつかアクアが気まぐれに自分の体に戻す時を待ちながら、今の地獄に耐え続けることを決意した。いつかユーリとまた笑いあえる時のために。

(ユーリ、あんたはすごいやつなんだから、絶対に負けるんじゃないわよ。あたしはアクアなんかには負けないわ。そして、いつかあたしが体を取り戻したときは、あんたをあたしのものにしてあげる。嬉しい

に決まってるわよね、ユーリ？)

## 裏 苦み

カタリナがモンスターの異常発生により窮地にあると知ったとき、アクアは自身の端末を飛ばしてカタリナを守るために行動した。

カタリナにもしものことがあるれば、ユーリは傷つくだけでは済まないと理解していたからだ。それに、アクア自身もカタリナに死んでほしいとは思っていなかった。

そのために、モンスターをカタリナから離れたほうに誘導したり、ある目的のための実験としてアクアがこれまでに溶かしたモンスターから作成した、デザインを調整したモンスターにカタリナを襲うモンスターを攻撃させたりと、カタリナが本当に死んでしまわないように影ながら守っていた。

ユーリにカタリナの居場所を伝えれば、ユーリに自身の異常性が気づかれてしまうと判断したため、伝えることはしなかったが、焦ってユーリに何か起こってしまわないためのフォローも同時に行った。

ユーリがカタリナを助けることに成功した時、アクアは素直に喜んだ。ユーリは嬉しそうだったし、自分がユーリの役に立っているという実感もあった。

だからこそ、カタリナに自身の端末を張り付けておいて、いざという時の備えにすることも検討していた。

そうすれば、ユーリの見えないところでカタリナがどうにかなってしまう可能性を減らせるだろうと。

ユーリの幸福にカタリナが必要であることは分かり切っているし、それでいいだろうと思っていた。カタリナがユーリを抱きしめている姿を見るまでは。

その時、その光景が本当に美しい物であるように思えて、自分が入っていけない世界を構築しているように思えて、アクアの胸はざわついた。

ユーリとカタリナが会話を終え、カタリナが微笑んだ時のユーリの表情を見て、その思いはさらに深まった。羨ましかったのか、妬ましかったのか、はたまたそれ以外か。アクアは自分でもわからなかつ

た。

ただ、ユーリにとってカタリナが一番で、自分はその外にいるのではないか。その不安が消えることはなかった。

それから、ユーリたちが学園から帰ったとき、ステラとしてユーリと接する中で、ステラの指輪について話題に出した。その答え次第では、ユーリとの絆を計れるのではないかと思っただからだ。

その時にもカタリナのことを答えるユーリを見て、アクアの中に焦りが生まれていった。カタリナと一緒に外出しようと思案した時には、自身とカタリナのどちらを優先しているか、別の視点から図るつもりでいた。

家に帰った後、眠るユーリの姿に満足感を感じたことで、アクアの不安はさらに膨らんでいった。

さすがにユーリが自分を捨てることは絶対にならないだろうと思えたが、カタリナとユーリが一緒にいる時、自身とユーリの距離が離れるのではないか。カタリナを優先して、アクアという時間が減るのではないか。考えれば考えるほど、アクアの中にある不安がどんどん膨らんでいった。

だからといって、カタリナを排除すればユーリは傷つくだろう。悲しむだろう。万が一自身の仕事だと知られてしまえば、嫌われるだけでは済まないことは分かり切っていた。

どうすればいいのか。アクアはずっと考え続けていた。その日はユーリに強くくっついていてしたが、ユーリのそばは暖かいのに、心の寒さは消えなかった。

次の日。アクアはユーリに遊びに誘われたとき、抱きしめてほしいと言った。カタリナに抱きしめられているユーリの姿が忘れられなかったから。

ユーリに優しく抱きしめられていても、いつものように満足できなかった。だから、もっと強くしてほしいと願った。

それでも、カタリナとユーリのあの時の姿を超えられているとは思えなかった。ユーリと強くくっついていられるのは嬉しかったが、心の奥に澱のようなものが残った。

ユーリの一番は自分だと思いたくて、アクアは自身をアピールした。一番であると強調した。それにユーリが同意してくれたにもかかわらず、アクアはユーリを信じ切ることができなかった。本当はカタリナが一番ではないのか。そう心の奥底で感じていた。

次にユーリがボードゲームを提案してきた時、アクアは自分が手加減することなどまるで考えられなかった。モンスターには知性があるとはいえ、あまりにもユーリとアクアの差を感じると、ユーリが自分をおかしく思うかもしれない。普段のアクアならそういった考えが浮かぶはずだった。アクアの焦りが、アクアの思考を曇らせた。

それからというものの、ユーリに対して一切手加減することなく、ボードゲームで全戦全勝した。そうすれば、ユーリが自分をすごいと感じてくれるかもしれない。自分を頼ってくれるかもしれない。その中で、ユーリにおいて自分の優先度が上がってくれているはずだ。希望的観測に過ぎないのに、その考えを止めることはできなかった。

だから、運が絡むゲームでユーリに勝ちきれなかったとき、アクアは足元が崩れ落ちるかのような感覚に陥った。これではユーリの一番になれない。ユーリが離れて行ってしまう。不安がぬぐい切れなかった。

にもかかわらず、ユーリが自分との関係を否定するかのような一言を放った時、アクアは初めてユーリに対して怒りを抱いた。ユーリにとって、自分はその程度の存在なのか。だから、カタリナのほうが大事なのか。

ユーリはそんなことを思うはずがないと理性では理解していたが、感情は収まらなかった。

だからかもしれない。アクアは自分が間違ったことをしようとしていると理解していながらも、カタリナに成り代わろうと思っってしまった。

学園が再開した日。アクアはカタリナが一人になるタイミングを見計らって計画を実行しようとした。

カタリナが憎いわけでも、カタリナが悪いわけでもない。アクアは

自身の行動は正しくないと確信していたが、それでも止められそうになかった。

ユーリ以外のほとんどの存在を、利用価値でしか図れないアクアであるが、カタリナに対しては確かに情が存在していた。ユーリとの未来を思い描くとき、大抵そこにはカタリナの姿があったほどだ。他の人に同じようなことをするには何のためらいも持たないアクアであるが、カタリナに成り代わろうとすることは最後まで迷っていた。

だから、余計なことだとわかかっていてもわざわざ謝罪してしまったし、カタリナの最後の言葉を聞いて、心を痛めていた。だから、カタリナを完全に殺そうとはせず、意識を奪うことはやめていた。

ただ、情が湧いている相手に、多くの人が死ぬよりひどいと言うだろうことをするあたり、やはりアクアは怪物でしかなかった。

次の日、アクアはカタリナとしてユーリに出会っていた。ユーリからカタリナに贈られた髪飾りをつけて。かつてユーリがカタリナに贈り物をする話をするとき、微笑ましさと羨ましさを感じていた。だから、この髪飾りが自然と目に入った。

ユーリにカタリナが毎日髪飾りを変えていることを指摘されたとき、ユーリとカタリナの絆を感じたような気がして、心が少し沈んだ。それと同時に、自分が何をしているか気づかれやしないかと怖くなった。

ユーリの指摘をごまかしたときも、ユーリは疑っているように見えた。ステラとしてユーリと接していた時は疑いなんて感じなかったのに。

ステラも合流させてからの時間、アクアは、自分に向けてユーリの顔と、カタリナに向けてユーリの顔の違いに苦しんでいた。やっぱり自分はユーリの一番ではないのではないか。ステラとしてユーリと会話していた時にはいつもと違うユーリをあんなに楽しんでいたのに、今は苦しいだけだった。

自分とユーリとの関係が理想的だと口にした時も、心の奥底では信じ切れていなかった。以前はユーリと自分は最高の飼い主とペット

であることを確信していたのに、今は違うようにしか思えなかった。アクアはユーリを完璧に支えられるのは自分だけだと思っていたが、本当は自分がただユーリに寄りかかっているだけだと感じた。

食事をとった後、アクアは前々から計画していたように、カーレルの街を拠点にして、ユーリたちが冒険者として活動することを提案した。

これはもともとステラが計画していたことに、若干の修正を加えたものだった。この計画を利用すれば、ユーリと思う存分冒険者活動を楽しめる。

そう思い描いていたはずだったが、ユーリがこの提案を受け入れても、アクアに喜びはなかった。

アクアの理想の冒険者としての生活は、カタリナの体を奪った時点で崩壊していたことにこの時気づいた。カタリナがユーリを引っぱっていった、自分がユーリを後ろから支える。それを夢見ていた。

だが、この未来が訪れることはもうないだろう。カタリナを演じているだけの自分と、カタリナとはやはり違う。カタリナがユーリに憎まれ口をたたくこともアクアは楽しんでいたが、自分でそうしていてもまるで楽しくなかった。

家に帰ってユーリと一緒にいても気分が上がり切らなかった。それをユーリに気づかれたが、ごまかすことしかできなかった。

カタリナの体を奪ってしまった。それからカタリナとしてユーリと過ごしていたが、ずっと苦しいだけだった。そんなことをユーリに言えるわけがない。もしそんなことを口にしてしまえば、ユーリとの関係は決定的な破局を迎えることは明らかだった。

ずっとユーリに隠し事をしなければいけない。これまではなんとも思っていなかったことがとても苦しかった。

だからといって、カタリナに体を返したところで、カタリナと関係を修復することなんてできるわけがない。ユーリに自分の本当の姿を話されてしまうかもしれない。アクアには自分がどうしたいのかも、どうすれば良いのかも分からなかった。

かつて理想としていた未来が訪れることはもうない。それだけは



確信できた。ユーリとカタリナと笑いあえる日々はもはや空想の中だけにしかないのだ。

アクアは自分が人でないことを初めて恨んだ。きつとただの人間だったなら、カタリナやユーリとずっと過ごせる未来もあったはずなのだ。

ユーリと自分が違う生き物であるからこそ、ユーリと最高の関係が築けると思っていた。だけど、人間でないから、ユーリと同じものを見ることができないのだ。

大好きなユーリと過ごしているはずなのに、アクアの胸の内から苦い物は消えなかった。

## if ステラとの未来

エンブラの街で行われた闘技大会。

その決勝で、ぼくはミーナと戦い、戦術をすべて退けられ、クリーンヒットを受けた。

カタリナが何か叫んでいるのが聞こえるが、ぼくの意識はだんだんと薄れていった。

目を覚ますと、アクアとカタリナ、ステラ先生がぼくの様子を見ていた。

「ユーリ君、目を覚ましましたか。状況は分かっていますか？」

「そうだ、闘技大会！ いや、あの時、ぼくは負けたんだな。最後の状況を思い返してそう確信した。」

負けてしまった。ぼくの中には悔しさが渦巻いていた。

「ごめんなさい。せっかく応援してもらったのに、負けてしまって。せっかくだから、いいところを見せたかったですけどね……」

「いえ、気にしないでください。ユーリ君はよく頑張ってくれました。本当に、ユーリ君が素晴らしく成長したことが分かる、いい試合でしたよ」

「あんだ、くよくよしない。ミストの街に帰ったら、あたしが手料理を食べさせてやるんだから、それで満足しなさいよね。その程度じゃ足りないなんて言ったら、許さないわよ」

「ユーリ、格好良かった。負けたのは残念だけど、ユーリは最高だった」

みんなが慰めてくれたけど、ぼくの心から暗い物は消えなかった。

みんなにせっかく応援してもらったのに。カタリナも、アクアも、ステラ先生も、いっぱい手伝ってくれたのに。

「ユーリ君、そんなに暗い顔をしないでください。ユーリ君が悲しうだと、私まで悲しくなってしまう。」

「……そうだ、ユーリ君、アクアちゃん、2人に、贈りたいものがあるんです。ほら、ユーリ君、手を出してください」

ステラ先生に言われるまま手を差し出すと、2つの指輪を手のひら

に置かれた。これはいったい何だろう。

「これは、契約者と契約モンスターの関係で、契約技を強化したり、とても習熟すれば、思考を送りあうこともできる指輪なんです。

仲のいいユーリ君とアクアちゃんにぴったりだと思ひまして。ほら、着けてください」

そんな効果のある指輪、聞いたことがない。

でも、ステラ先生が嘘を吐くとは思えないから、きつと本当なのだろう。

もしかしたら、すごい道具なのかもしれない。ステラ先生に言われるままに指輪を着け、アクアにも着けてもらう。

「良く似合っていますよ、ユーリ君、アクアちゃん。ユーリ君、アクア水を使ってみてください」

言われた通りにアクア水を使ってみると、以前よりアクア水をうまく出せるような感覚があった。思考を送ろうとしてみても、上手くは行かなかった。

「どうでしょうか？ 使いやすくなつたんじゃないですか？ これから、この指輪をどんどん使って、アクアちゃんとの仲も深めてみてください。ユーリ君、アクアちゃん、ずっと仲良くいてくださいね」

アクアとずっと仲良くいることは、ぼくの中では当たり前のことだっただけ、アクアとの仲を深めるために、しっかりと努力しようと思ひ改めて思えた。

ステラ先生、負けてしまったぼくにこんな物をくれるなんて。

でも、ステラ先生の優しさに恥じないように、ぼくとアクアは最高の契約者と契約モンスターになろう。そう誓った。

「もちろん、アクアとはずっと仲良くしているつもりです。ね、アクア？」

「当たり前。ステラが心配しなくてもいい。でも、ステラ。ありがとう」

「どういたしまして、ユーリ君、アクアちゃん。ふふっ、ユーリ君が元気になってくれて、私は嬉しいです」

ステラ先生に慰められてしまったな。

でも、嬉しい。ステラ先生にも、ぼくとアクアは仲がいいと思ってもらえているんだ。

それに、ステラ先生がぼくが元気になることで喜んでくれることも嬉しい。ステラ先生は、本当に尊敬できる先生だ。改めてそう感じた。

「あんた、随分いいもの貰ったみたいじゃない。それをしっかりと使いこなして、あたしの役に立ちなさいよ」

「わかった。まあ、カタリナとぼくたちはパーティーなんだから、ぼくがしっかりと成長するだけで、カタリナの役には立てるよね」

「それだけじゃなくて、ちゃんとあたしの役に立てるように考えなさいよね。ま、いいわ。あんたにそこまで期待はしていないわ」

「カタリナ、素直じゃない」

「はあ!? アクア、あなた何のつもりよ、そんなこと言って。こいつはずっとあたしに助けられてきたんだから、それを返すのは当然ってだけよ」

確かに、カタリナにはずっと助けられてきた。

ぼくが倒せないようなモンスターをぼくの代わりに倒してくれることが何度あったことか。

カタリナに感謝しているのは事実だし、恩返しもしたいと思ってるけど、こういうことを自分で言ってしまうのが残念というかなんというか。

「ふふっ。仲がいいですね、みなさんは。ミストの街に帰ったら、みなさんに提案したいことがあります。ぜひ、聞いてください」

ステラ先生の提案か。一体なんだろう。

まあ、よほど無理なことでないなら、その提案は受けたいな。ステラ先生にはお世話になってるから、できるだけ返していきたい。

「わかりました。楽しみにしておきますね」

「いくらステラ先生でも、おかしな提案をしたら許さないんだから。ちゃんとしてくださいよね」

「心配しなくても、大丈夫ですよ。みなさんにとっていい話のはずですから」

それから、ミストの町へと帰った。帰ってすぐにカタリナが食事をごちそうしてくれた。とても美味しくて、また食べたいと思った。

その数日後、ステラさんからの提案を聞くことになった。

「わたしがみなさんに提案したいことは、カーレルの街で冒険者をしていないかということ。あそこは私の故郷ですから、里帰りのついでに、みなさんのサポートをしようかと」

「サポート、ですか。それはどんな？」

「あなたたちが前に会った、アリシアさんやレティさんに、冒険者の活動を教わることを依頼します。」

その他に、その街で有力な貴族とのつながりも得られるようにします。あなたたちの拠点として、わたしの家に住んでもらうことも考えています。どうでしょう？」

この提案を受けて、ステラ先生の役に立とうと考えていたけど、これじゃステラ先生に貰うばかりだよな。いいのかな、そんなので。

「とてもありがたいですけど、ステラ先生の負担になつてはいませんか？ そうだとすると、この提案は受けられません。ごめん、カタリナ。でも、そういうことだから」

「いえ、気にしなくて構いません。それほど負担という訳ではないですし、それに何より、私はユーリ君とアクアちゃんがその指輪を使いこなしているところが見たい。その姿が見られれば、私は満足です」

この指輪、何か特別なものだったりしないよね？ さすがにそんな物をただの生徒に渡しはしないか。でも、ステラ先生がそれを見たいというのなら、頑張ろう。

「だったら、受けておいた方が得よね。あたしだって、ステラ先生の事は信頼しているわ。ステラ先生なら、妙なことはしないでしょ」

「そうだね。ステラ先生、その話、受けたいと思います。ステラ先生がこの指輪を使いこなしているところが見たいと言うなら、絶対に使いこなして見せますから」

「ありがとうございます、ユーリ君。ですが、焦りは禁物ですよ。その指輪は、契約者と契約モンスターとの絆がとても大事なんです。絆という物は、無理に深めようとして深まるものではありませんから」

確かにそうだろう。ぼくはもともとアクアともつと仲良くしたいと思っていたけど、無理に近づこうとしてもうまくいかないはずだ。でも、これを渡そうってステラ先生が考えたってことは、ぼくとアクアがそれだけの関係になれると思ってくれているということなのだろう。それが、とても嬉しかった。

ステラ先生の提案を受けて、ぼくたちはカーレルの街で活動することに決めた。ぼくとカタリナは、そのための準備をしているところだった。

「あんた、ステラ先生にそんなもの渡されて、あそこまで手伝わってもらう予定なんだから、絶対に無様をさらすんじゃないわよ。そんなことになったら、ステラ先生がとても悲しむでしょうね」

「当然、そのつもりだよ。ぼく自身も頑張るつもりだけど、カタリナだっついてなくちゃ、ぼくたちは指輪を使いこなせないと思う。カタリナ、よろしくね」

「当然よね。あんたはあたしがいなくちゃ、何もできないんだから。でも、ま、ユーリとアクアなら、きつと絆は深められるでしょうよ。」

あんたがどれだけ強くなるかは知らないし、指輪を使いこなせるかわからないけど、それだけは間違いないわ。あたしが保証してあげる。あんたたち、割れ鍋に綴じ蓋って感じで、ちょうどいいのよ」

最後のセリフはいらなかったかな。でも、カタリナもそう思ってくれているんだよね。うん。ぼくたちならきつと出来る。そう信じよう。

「ユーリとアクアは、今でも最高だけど、これ以上があつたらもつといい。ユーリ、頑張ろう」

「そうだね。一緒に頑張ろう。アクア、大好きだよ」

「アクアもユーリが大好き！ ずっと一緒に居よう」

それからもしばらく話していると、少し大声での話が聞こえた。声の感じからして、ステラ先生もいるみたいだ。

「ステラ、どうして学園をやめるんだ！ まだ教師になって、そう経つてもないのに！」

「あなたには関係のないことです。強いて言うなら、もつと大切な目

的のためでしょうか」

「それは、あの落ちこぼれと関係があるのか!? ステラが面倒見たところで、結局優勝もできなかったじゃないか!」

「だとしたら、何だというんです。それに、あの子の真価はそこではありませんよ。それが分からないと言うなら、あなたもその程度なのでしよう」

「僕は納得していないぞ! ステラ、考え直すんだ!」

「あなたの納得など必要ありません。これ以上は時間の無駄ですね。失礼します」

そう言ってステラ先生は去っていく。相手の先生にはずっと冷たい顔をしていたが、こちらに気づいたようで、少しだけ笑顔を向けてくれた。それから、ステラ先生と口論をしていた先生がこちらにやってきた。

「お前……どんな手を使ってステラを誑し込んだんだ。どうせろくでもない手段だろう。ステラの事を縛り付けようとするんじゃないぞ! 分かったな!」

そう言って先生は不機嫌さを隠そうともしないまま去っていった。

あの人、本人を説得するより、こちらを遠ざけようとするあたり、ろくな人じゃないな。

でも、変なことをされないように、気を付けておこう。

「あの先生、ステラ先生に気があるのがまる分かりだったのよね。でも、ステラ先生にその気はないのは明らかだから、見苦しい男よね。」

はあ。つまらないことで時間を無駄にしちゃったわ。さっさと行きましようか、ユーリ」

「そうだね。今度は、ぼくが後ろに下がった場合の練習をしようか」

それから、ぼくたちはいつも通りに過ごしていた。

学園生活を過ごす中で、モンスターの異常発生が一度会ったが、ぼくと特に話したこともない人が何人か犠牲になったくらいだった。

そういえば、ステラ先生に気のある様子だった先生も、その犠牲者か。まあ、どうでもいいか。

でも、モンスターが妙な形で発生することには、ちゃんと気を付けておかないと。アクアやカタリナ、ステラ先生が犠牲になるなんて事、絶対に避けなくてはいけない。

それからしばらくして、ぼくたちはカーレルの街で、冒険者として活動することになった。

ステラ先生のことは、ステラさんと呼ぶことになり、ぼくたちはステラさんと同居していた。ステラさんは、とてもぼくたちの冒険者活動を支えてくれていて、ぼくたちは本当にステラさんに感謝していた。

「ユーリ君も、冒険者としての活動に慣れてきましたね。アクア水の使い方も、随分うまくなっている様子です。指輪の調子はどうですか？」

「何度か、これまでより指輪と繋がるような感覚がありました。ですが、思考を送りあうところまでは、たどり着けていません。これ以上となると、何が必要なのか……」

「そういう感覚があるという話は聞いたことがあります。となると、後はきっかけでしょうか。何でも、普通に過ごしているだけでは得られない経験が必要となる、というあいまいな情報しかなくて。ユーリ君たちに無理はさせられませんから、運が回ってくることを待ちましよう」

ステラさんの言っていた運はすぐに回ってきた。

強大な人型モンスターと戦う中で追い詰められて、アクアが危ないと思った瞬間に、ぼくとアクアがつながるような感覚があった。

それから、アクアと声を出さずに思考を送りあうことが出来て、耳が良いからぼくたちの作戦を事前に聞いていたモンスターへの対策が取れた。

そのモンスターはそれからすぐに倒すことが出来た。指示を全部聞いて後出ししてくることが厄介だったので、それが無くなればすぐだった。

それから、ぼくたちの家に帰ると、すぐにステラさんが出迎えてくれた。ステラさんはとても嬉しそうな様子だ。



「ユーリ君、ついにやったんですね。ここに居ても伝わってきました。意思を送りあう指輪という意味が良くわかりました。ユーリ君、あなたのおかげです。本当にありがとうございます」

「これまでステラさんが支えてくださったおかげです。それに、アクアとカタリナも。ステラさん、ぼくはあなたの生徒として、しっかりやれましたか?」

「もちろんです! ユーリ君、あなたを選んでよかった。もちろん、アクアちゃんも」

「アクアとユーリは最高なんだから、当然。でも、ステラ。ステラのおかげでユーリともっと仲良くなれた。ありがとう」

「なによ、あたしをのけ者にするな。でも、いいわ。ステラさんがこの瞬間を待ち望んでいたことは、あたしだってよく分かってるわ」

「カタリナさん、すみません。ですが、今日だけは許してください。ユーリ君、後で話があります。私の部屋に来てください」

それからしばらくみんなで話した後、ステラさんの部屋に行く。ここではステラさんが待っていた。

「ユーリ君。本当に、あなたを選んでよかった。これからも、あなたと、アクアちゃんの事を、誰よりも傍で見たい。ずっと、私と一緒に居てください」

「もちろんです。ステラさんには本当に感謝していますから、こちらも同じ気持ちです。みんなとずっと一緒に居たい。これからも、よろしくお願いします」

そう言うと、ステラさんは少し呆れたような顔になって、すぐに微笑む。そのステラさんは本当にきれいだと思えた。

「わかっていませんね……こういうことですよ、ユーリ君」

そのままステラさんにキスをされた。突然のことにびっくりしたぼくだが、ぼくはステラさんの事が大好きになっっているのだと、その時気づいた。

「ステラさん。ぼくも、ステラさんの事が大好きです。ステラさん、これからよろしくお願いします」

ぼくはそれからしばらくたって、ステラさんと結婚することになっ

た。

それなのに、何故かカタリナも一緒に住むことになっていた。それはステラさんが勧めてきて、アクアもカタリナも賛成していたから断り切れなかった。ステラさんが言うには、

「あなたたちは、3人一緒に居てこそですからね。離れ離れにするわけにはいきません」

とのことだった。結局それからもこれまでのように、みんなで生活することになった。

でも、ステラさんとぼくの距離は以前よりも近かった。

それから、冒険者としての活動は縮小した。金銭的には全く困っていなかったのも、ステラさんとの生活を優先するためにそうした。

アクアは賛成してくれたし、カタリナも渋々という様子だったが受け入れてくれた。ステラさんと過ごす毎日は本当に素晴らしくて、ステラさんとの間に子供もできた。カタリナやアクアも、ぼくたちの子供をよくかわいがってくれた。

本当に、ステラさんと出会えて、ステラさんに貰った指輪を使いこなせてよかった。ぼくはずっと幸せだった。

アクアにとって、初めてのステラに対する認識は、ユーリが尊敬している先生くらいのものだった。

だが、ユーリとアクアの仲がいいと言われたり、ユーリとアクアに渡された指輪が本当にいいものだったり、ユーリを含めた自分たちをよく支えてくれていることから、アクアは徐々にステラに絆されていった。

ユーリを傷つけたものをひそかに始末しながら、ステラやカタリナを傷つけようとするものも、少しずつ排除していった。

たとえば、ステラに言い寄っていた教師。ステラが彼を迷惑に思っていることは明らかだったので、ユーリに暴言を吐いていたこともあり、大量発生したモンスターを操り排除した。その時はユーリの事が主であったが、アクアはだんだんステラのためだけでも動くように

なっつていった。

そして、ユーリと冒険者として過ごす中で、ユーリとともに指輪を使いこなす日が来た。指輪を使いこなす条件は、おそらく、お互いがお互いの事を信じぬき、それに加えて何かのイベントで感情が高まることなのだろう。

なぜなら、ユーリから伝わってくる感情には、アクアに対する絶対の信頼で埋まっていたから。その感情を味わう中で、アクアはステラに本当に感謝した。

だから、アクアはユーリとステラが結婚することを、素直に祝福できた。

ステラとユーリが結婚することになると、ユーリにとってアクアが大切な存在であることは揺るがない。アクアはそう確信していたし、ステラもそれを喜んでくれるはずだと考えていた。ユーリやステラとずっと一緒に居ることは、アクアにとっても素晴らしい未来だとアクアは考えていた。

ステラはユーリと結婚することになったが、カタリナも一緒に住むことになった。アクアは当然一緒に住むものだと、誰もが考えていた。そんな中、こんな一幕があった。

「ステラさん、ユーリの事、絶対に幸せにしてくださいよね。ステラさんだから、ユーリを任せてもいいって思えたんですから、もううまくいかないようなら、あたしがユーリをもらいますからね」

「ふふっ。カタリナさんは、本当にユーリ君の事が大切なんですね。でも、きつと大丈夫です。カタリナさん、ユーリ君と、アクアちゃん、カタリナさんと、私とで、一緒に過ごしましょう。やはり、3人いてこそそのユーリ君だと思いますからね」

「はあ……本当にかないませんね、ステラさんには。あたしなら、きつとほかの女の人なんて傍においておけない。アクアならともかく。ユーリの事、信じているんですね」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ユーリ君とアクアちゃんをそばで見たいなら、それが一番大切なんです。カタリナさんがその中にいることで、ユーリ君とアクアちゃんの関係

が良くなるのなら、それでいいんです」

そのステラとカタリナのやり取りを聞いていたアクアは、ステラの事が本当に信じられると思えるようになった。ステラなら、ユーリだけでなく、自分もきつと幸せにしてくれる。そう考えたアクアは、ステラとユーリのこれからを楽しみにしていた。

それから。旦那がいると知りながらステラを口説こうとする者をひそかに排除したり、ユーリにつまらない嫉妬をしているものをモンスターに襲わせたりしながら、ユーリの結婚生活を見守っていた。

ユーリもステラも、これまでよりもアクアの事を大切にしてきていた。アクアは本当に幸せで、ずっとこんな時間が続けばいいのにと考えていた。

ユーリとステラの子供が出来て、アクアはユーリやステラほどではないが、その子供も大切な存在になっていた。カタリナとともに、ユーリたちの子供を見守っていた。カタリナはユーリたちの子供に囲まれて楽しそうにしていた。

最初に思い描いていた未来では、ユーリとカタリナとだけ一緒に居る予定だった。予定していた未来とは違うが、これでいい。ユーリと、ステラと、カタリナと、ユーリたちの子供。それらの人に囲まれながら、アクアは幸せを満喫していた。

## if 本気のアクア

ぼくはエンブラの街の闘技大会から帰った後、ステラ先生に契約技についていくつも質問されていた。

質問に答え終わると、ステラ先生は考え込む。

そして、何かを決意したようなステラ先生が話しかけてきた。

「ユーリ君、アクアちゃんは、ハイスライムではありません。もしかしたら、オメガスライムかもしれません。ユーリ君、誤解しないでほしいんですけど、私はユーリ君に、アクアちゃんに気をつけろと言いたいわけでは無いんです。

ユーリ君、アクアちゃんは恐らく自分の正体を隠しています。それは、きつとユーリ君に嫌われたくないから。だから、ユーリ君には、アクアちゃんの正体が何だったとしても、アクアちゃんを受け止めてあげて欲しいんです」

アクアはオメガスライムかもしれない。そうステラ先生に聞かされても、ぼくはアクアを疑ったり、嫌いになったり、恐れたりということは一切なかった。

それよりも、アクアに今まで窮屈な思いをさせていたのかもしれないという心配の方が強かった。

アクアの正体がオメガスライムだったとしても、そうじゃなかったとしても、アクアはぼくの大切なペットだ。それは何があっても変わらない。

だから、アクアが自分を隠しているなら、もつと表に出してもいいんだと伝えたかった。

「もちろんです。アクアはぼくにとって、何よりも大切な存在だと思っています。アクアの正体がオメガスライムだったとして、そんなこと、些細な事です。ぼくとアクアの絆は、そんなことで壊れたりはしません」

「ふふっ、そうですね。ユーリ君、アクアちゃんの事、大切にしてくださいね。アクアちゃんは、間違いなくユーリ君の事が大好きなんですから」

「ぼくだって、アクアの事が好きですよ。ステラ先生、ありがとうございしました。アクアの事、聞かせてくれて。これから、アクアにもっと寄り添っていきたいと思います」

ぼくはステラ先生に感謝していた。これがきつかけで、アクアとの絆をもっと深められるような気がしていたからだ。

でも、アクアがオメガスライムだとすると、ぼくが役に立てることはあまりないかもしれない。そこだけは、少し心配だった。アクアに頼りきりなのは、できれば避けたかった。

それから、家に帰って、アクアと話をすることに。

「アクア。アクアって、オメガスライムだったりする?」

そう問いかけると、アクアはおびえたような表情になる。言い方を間違えてしまったかもしれない。

だけど、ぼくはアクアを責めたいわけじゃない。ぼくはアクアを抱きしめて、語りかける。

「アクア。その反応は、きつと自覚があるんだよね。でも、アクアがそれを隠していたことを責めたいわけじゃないんだ。ごめんね、アクア。今まで窮屈だったよね。怖かったよね。」

でも、大丈夫だから。ぼくはアクアが何者だったとしても、ずっとそばに居るから。それに、アクアにも、ずっとぼくのそばに居てほしい。大好きだよ、アクア」

そう言うと、アクアはぼくを抱き返して、最高の笑顔を見せてくれた。良かった。

もしかしたら、アクアとの関係が壊れてしまうんじゃないかって、少しだけ不安だった。でも、これなら、きつとうまくいくよね。

「ユーリ、大好き！ユーリ、ずっと離れないから!」

そう言ってアクアはぼくを抱きしめる力を強める。少しだけ苦しかったけど、我慢した。アクアだって、今まで苦しかったはずなんだから、これくらい、なんてことない。

それからしばらく抱き合った後、アクアといろいろと話をしていた。

「ユーリ。ユーリはアクアの事、オメガスライムだって言ってたけど、

アクアにもちやんとは分からない。アクアがただのハイスライムではないことは、間違いないけど」

「なら、ハイスライムより強いってくらいなのかな？」

「3つの国を滅ぼすのは、やろうと思えばできる。ユーリはそんなこととしても喜ばないのは分かっているから、そんなことしない」

3つの国を滅ぼすというのは、有名なオメガスライムの伝承だ。

それなら、本当にアクアはオメガスライムなのかもしれない。そうだとすると、ぼくがアクアにしてあげられること、どれだけあるだろう。ぼくがアクアを守るなんて事、きつとできないよね。

「アクア、アクアはぼくに何かしてほしいことはある？ アクアがそんなに強いなら、ぼくが役に立てることはあまりないよね」

「ずっとアクアと一緒に居てくれるだけでいい。それで、遊んだり、撫でたり、抱きしめたりしてくれればいい。それだけで、ユーリのためになんだってできる」

アクアの願いは本当にささやかなものだ。なら、絶対に叶えてあげないとね。その一步として、またアクアを抱きしめていた。

「ユーリ、大好き。そうだ、餌、もういらぬから。別にアクアは食べなくても生きていける」

食べなくても生きていけるのか。本当にアクアはすごい存在なんだな。

でも、食べなくてもいいからって、食べて駄目なわけじゃないだろうけど。

まあ、無理に食べさせることはないけど、アクアが食べたいのなら、食べさせてあげたい。

「生きていけるって言っても、美味しい物とか、食べたくなならない？」

お金の事なら、アクアのためなら気にしなくてもいいよ」

「アクアに味覚なんてない。だから、本当に要らない。気にしているのなら、一緒に寝たり、一緒に遊んだりする時間を増やしてくれればいい」

「わかった。アクア、あらためて、これからもよろしくね」

「こちらこそ。ユーリ、ずっと一緒に居よう」

「もちろんだよ。アクア、大好きだよ」

それからずっとアクアと一緒に過ごしていた。次の日、モンスター討伐に出かけていると、アクアがあつという間にモンスターを片付けてしまった。カタリナがその様子を見て、疑問を投げかけてくる。

「アクア、随分強いみたいじゃない。とてもハイスライムとは思えないわよね。ま、あたしの役に立ってくれるなら、なんだっていいけどね」

「アクア、オメガスライムかもしれないんだ。アクアが言うには、3つの国を滅ぼすこともできなくはないって」

ぼくの言葉を聞いたカタリナはとても驚いた顔をする。当然だよ。ぼくだってとても驚いたんだから。

その後、カタリナは周囲を見回す。そしてぼくに叫ぶような声で言葉返す。

「はあ!? そんなこと、こんなところで言うんじゃないわよ! 誰かに聞かれたらどうするつもりよ! はあ、仕方ないわね。アクア、ユーリともども、しっかりあたしの役に立つことね」

「ユーリが1番だけど、カタリナの役にも立つ。それでいい?」

「仕方ないわね。あなたにユーリよりあたしを優先しろってのも無理な話だわ。でも、しっかり役に立ちなさいよね」

「わかった。それくらいなら簡単」

「本当に簡単なんでしょうね、あなたなら。ま、いいわ。ちゃんと周りには気を付ける事ね。あたしならともかく、他の人に伝わってもいい事なんて無いでしょ。あたしにまで迷惑かけるんじゃないわよ」

カタリナはあきれたような様子でそう言った。

ぼくだって、誰彼構わずこのことを言っただけで回るつもりはない。カタリナの事は、これでも信用しているのだ。思った通り、アクアの事も受け入れてくれていた。

それから、ステラ先生に、契約者と契約モンスターの絆を強めるという指輪をもらった。そして、ステラ先生の故郷である、カーレルの街に誘われた。ステラ先生が言うには、

「アクアちゃんがいるなら、私のサポートなど必要ないかもしれません



んが、せっかくなら、ユーリ君とアクアちゃんが絆を深めるところを、特等席で見たいですからね。本当に、ユーリ君とアクアちゃんがうまくいっている様子で良かったです。ずっと、仲良くしててくださいね」

とのことだった。ステラ先生はぼくたちの恩人なので、そのステラ先生がぼくたちを近くで見たいと言うなら、それを叶えてあげたかった。なので、カーレルの街へ向かうことに決めた。

それからの学園生活の中で、カタリナがモンスターの大量発生した地点に取り残されかけるといふ事件があったが、アクアがあつという間にカタリナを助けてくれた。ぼくとカタリナは本当にアクアに感謝した。

そしてカーレルの街で冒険者活動をしていたが、ある問題があった。指輪を使いこなせないことと、アクアが全て片付けてしまうので、ぼくたちが何もできない事だ。指輪を使いこなせないことに関しては、ステラ先生は納得しているようだった。

「ユーリ君とアクアちゃんの仲に問題があるとは思えませんが、この指輪の力を必要とする場面がそもそもないのでしょう。」

もしかしたら、ユーリ君たちにはこの指輪は合っていないのかもしれないですね。ですが、それはユーリ君たちが持つていてください。私より、ユーリ君たちの方が可能性があるでしょう」

「それはいいですけど、あたしにとっての問題は、あたしが何の活躍もできない事よ。さすがにアクアに頼りきりなんて、情けないったらないわ。本当に腹が立つのよね」

「それはぼくも同感かも。せっかく一緒に冒険しているんだから、もっと支えあいたいというか……」

「なら、アクア水を飲んでみる？ そうすれば、ユーリもカタリナも、アクアがもつと強くしてあげる。ステラも強くなって、契約するのを試してみるといい」

「それで、ユーリ君は強くなっていたわけですか。デメリットは無いんですか？」

アクア、そんなところでもぼくを支えてくれていたのか。

まあ、アクアに頼る形にはなるけど、きつと今よりましだと思っから、ぼくは受け入れるつもりだった。

「アクアがその気になれば殺せるけど、ユーリにも、カタリナにも、ステラにも、そんなことはしない」

「じゃ、あたしは飲むわよ。アクアがあたしを傷つけたりしないでしょ。それに、アクアに力を借りることになるとはいえ、何もできないよりましよ」

「私は、遠慮しておきます。指輪はもう、ユーリ君たちに託すと決めましたから。だから、強くなっても仕方ありません」

「美容にも役に立つけど、それでも飲まない？」

「美容にも!? す、すみません。……では、お願いします……」

結局ぼくたちはみんなアクア水を飲むことにした。

それから、かなり強い契約技くらいの強化が得られて、ぼくたちにも活躍の場が少しはできた。

冒険者として活動していく中で、ぼくたちと仲良くなる人もそれなりに居て、冒険者になって、本当に良かったと思えた。

それから、アクア水を飲んだ人はずっと若いままで、変な目で見られて困ることもあったが、ぼくたちは幸せだった。

そんな中、ぼくはアクアと結ばれることになり、みんな祝福してくれた。本当にアクアと出会えて良かった。何度も感じたことだが、改めて感じていた。

「アクア、これからもずっと一緒に居ようね」

「うん。ずっと、ずっと。ユーリ、大好き！」

アクアは初めて自身がオメガスライムだという疑いがユーリに伝わった際、原因になった人をどうしてやろうかと考えていた。

しかし、ユーリの想いやカタリナの想い、ステラの想いを感じる中で、自らの正体をユーリに伝えたステラをどうにかするという考えは消えていた。ステラがユーリにそれを伝えたからこそ、ユーリと仲を深めることが出来たことは間違いない。だから、アクアはステラに相

応の感謝をしていた。

ユーリはアクアを今までよりもっと大切にしてくれるようになったし、カタリナも口ではいろいろ言いながら、アクアを大切に思っているのは明らかだった。

それに、ステラはユーリとアクアが仲良くなることを素直に喜んでくれていて、だから、この人たちは何があっても守ろうと考えていた。アクアはユーリたちに危害を加えようとする人間などを、こっそりと操ったり、始末したりしながら、ユーリたちとの冒険者生活を楽しんでいた。

ユーリたちが自分の活躍の機会がないことに悩んでいたのも、アクアで強化するという提案をしたとき、危険性を説明したうえでも、皆が受け入れてくれたということに本当にアクアは喜んだ。

ずっとこの人たちと一緒に居よう、アクアはそう考えて、ユーリたちをあの手この手で守っていた。そんな中、ユーリたちにも新たな出会いが何度かあり、アクアにとっても大切な人になっていった。

ユーリと結ばれた際に、皆が祝福してくれたことがアクアにとつては本当に嬉しかった。だから、皆とずっと一緒に居るのだとアクアは決意していた。アクアは本当に幸せを満喫していた。

## if アクアの暴走

ぼくが学園に通っていると、突然ある教師に問い詰められた。

「お前、そのスライム、正体は知っているのか？ オメガスライムかもしれないらしいじゃないか。さっさと出ていくんだな、この学園から！」

それから、その言葉を聞いていた人たちなどから騒ぎが起きたので、ぼくは家に帰っていた。

アクアはなんだか沈んだ表情をしていた。ぼくはアクアの横にずっと一緒に居た。何を話していいか分からなかったので、せめて隣に居ようと思つての事だった。

「ユーリ、明日から、どうする？」

「ほとぼりが冷めるまで待つているとかかな。どうして良いのかよく分からないし、どうしても駄目そうなら、ミストの町から出ていこうか」

「わかった。ユーリ、今日は一緒に寝よう？」

そう言われたので、アクアと一緒に寝ることに。いつも一緒に寝ているけど、今日はアクアを抱きしめて眠った。

それから何日か、家でアクアと遊んでいるだけだったけど、ある日、カタリナが家にやってきた。

「あんた、もう学園に来て大丈夫よ。あんたの噂も、もうすっかり無くなったから。どうしても嫌なら、あたしがそばに居てあげないこともないけど？」

「そっか。なら、学園に行こうかな。カタリナ、またよろしくね」

それから学園に向かうと、確かに妙な騒ぎはなくなっていた。

ステラ先生には騒動を謝罪され、それからは普通に学園で過ごすことができていた。

そのまましばらく学園で生活してから、ぼくは冒険者として活動することになった。ステラ先生に誘われたので、カーレルの街で冒険者をする事になった。

冒険者としての活動は、ぼくが考えていたよりもとても楽なもの

だった。

モンスターは簡単に倒れていくし、厄介な人間が絡んでくることもなかった。

そうして過ごす中で、ある日、アクアと関係を持つことになった。アクアから誘われたので、それを受け入れることにした。

それから、何故かカタリナやステラさん、その他出会った人たちに関係を持つことを持ちかけられた。ぼくはアクアの事を大切にしていたので断っていたが、そのアクアに関係を持つことを勧められて、結局みんなと関係を持つことになった。

それからの日々は、弱いモンスターを倒しながら、みんなと遊ぶことを中心に生活することになった。そんな日々がずっと続いていき、退屈を感じるようになったころ、急にみんなに子供が出来た。

人とモンスターとの間に子供はできないので、ぼくとアクアの子供がいないことが悲しかったが、子供との生活は、それまでの退屈を紛らわせてくれた。

思っていた生活とは全然違うし、これで良いのかと思わなくもなかったけど、退屈を感じながらも、平和な日々を過ごしていくことになった。

アクアはその日激怒していた。どこの誰かも分からないような奴に、ユーリに対して自分がオメガスライムかもしれないなどと言われたのだ。

即座にその人間を殺すことに決めたが、問題はユーリだ。ユーリが自分の事を嫌ったらどうしよう。アクアはそんな不安でいっぱいだったが、ユーリは態度でアクアを受け入れていると示してくれた。やっぱりユーリの事が大好きだと改めて考えたアクアだったが、ユーリにとって大きな問題があった。学園で、アクアがオメガスライムかもしれないと騒ぎになっていることだ。

アクアは次の日、自身の分身のようなものを作り出し、学園へと向かった。

まずアクアは、ユーリに対して自身の秘密を暴露した教師を殺した。その中でその教師の記憶を読み取ると、ステラがつい漏らしてしまった言葉を聞いたその教師が先走ってユーリに言葉をかけたことが分かった。

アクアはステラに対しても大きな怒りを抱いた。ステラさえ何もしていなければ、ユーリが排除されることはなかったのだ。すぐさまアクアはステラのもとへ向かった。

「アクアちゃん……？　ごめんなさい。すぐにこの噂が沈静化するように働きかけますから」

そうステラは言ったが、アクアにステラを信じるつもりは全くなかった。

即座にステラに取り付き、ステラの脳を支配した。アクアはステラの全身を改造し、その結果、ステラの人格は完全に失われることになった。ステラはもはや、アクアが操作する肉の人形でしかなかった。

それから、学園でアクアがカタリナに出会ったとき、カタリナがアクアにかけてた言葉が、アクアをさらに暴走させるきっかけになった。「アクア……い・あんだ、どうしてこんなことになるまで黙ってたのよ!!　ふざけるんじゃないわよ!　あんだがユーリを傷つけてるんだってこと、よく自覚しなさいよね!」

カタリナは怒りこそしていたが、アクアを拒絶するつもりはなかった。

単純に、大きな問題が発生しているのに自分が蚊帳の外にいること、アクアから信用されていないのではないかという疑い、それらの考えがカタリナの言葉に棘を持たせていた。カタリナは、ユーリとアクアともう一度パーティを組む生活を取り戻したいだけだった。

だが、怒りに飲まれたアクアにそんなカタリナの考えは通じなかった。アクアはステラと同じようにカタリナを処理した後、学園全体、ミストの町、この国アードラと、どんどん犠牲を広げていった。

カタリナの体を操作したアクアがユーリの部屋を訪れるころには、この国はすでに完全にアクアに支配されており、生きていけると言える

存在はアクアとユーリだけだった。

それから、ユーリの夢をかなえるためにステラとカタリナを操作しながら、ユーリを冒険者へと導いていった。冒険者としてユーリが戦ったモンスターはすべてアクアの支配下にあったし、ユーリが話しかける人間もすべてもう死んでいた。全てはユーリを接待するためのアクアの演出であった。

そんななか、アクアはユーリに関係を持ちたいと持ちかける。ユーリとの新しい遊びくらいのつもりだった。

ユーリはともものめり込んでいたので、アクアは新しい食事を用意するような気分で、操作している人間をユーリと関係を持たせるように動いた。ユーリがアクアの事を考えて断ってくれたのは嬉しかったが、どうせほかの人間もアクアの一部のようなものだったので、ユーリに新しい味を教えるくらいのつもりで、ユーリにアクアが操作する人間と関係を持つように勧めた。

案の定、ユーリは新鮮味を感じているようで、ユーリの楽しそうな姿に、アクアは喜んでいた。

だが、ユーリと過ごす中で、ユーリが退屈を感じ始めていたことが分かったので、支配している人間の体を改造して、ユーリとの子供を作った。ユーリは子供が生まれたことで、退屈を忘れていたようだった。ユーリがまた退屈を感じ始めた時のために、新しい遊びを用意しておくか。そう考えたアクアは、その時世界のすべてを完全に支配していた。

この世界で本当の意味で生きているのは、ユーリとアクアだけだった。ユーリはそれに一切気づかないまま過ごし、アクアは全力でユーリという日々を楽しんでいた。

## if カタリナとの未来

冒険者を目指してぼくの故郷であるミストの町の学園で過ごしていたある日、カタリナにパーティの解散を告げられてしまった。

それから、1日たつてもぼくたちは仲直りできず、その次の日。

今日はカタリナと別々の授業を受ける日だけど、授業が始まるより先にカタリナを探し出した。

カタリナは、ぼくの姿を見ると逆方向へというふうとしたが、ぼくはカタリナに先回りして、何とか呼び止めた。

そして、ぼくはカタリナに対して、仲直りしたいという思いを伝えることにした。

「カタリナ、ぼくは今でも、カタリナをなぜ怒らせてしまったのか、分からない。本当にごめん。でも、ぼくはカタリナと離れ離れになりたくない。ずっと一緒に居たいんだ。許してほしいとは言わないから、またぼくとパーティを組んでください。お願いします……」

そう言うと、カタリナはあきれた様子になってため息を吐く。ダメだったか。諦めそうになると、カタリナは少しだけ微笑んだ。

「見苦しいから、そんな卑屈な態度はやめなさい。ほんと、あんたってどうしようもないわね。でも、いいわ。またパーティを組んであげろ。だから、そんなざまを見せるのはやめて。はあ、仕方ないやつね、あんたは。あんた、ほつといたら勝手に変なところで死にそうなもの。これじゃあたしが面倒見てやるしかないじゃない」

「カタリナ……！　ありがとう。また、これからよろしくね。良かった。カタリナと仲直りできないんじゃないかって、ずっと不安だったんだ」

「別にあんたを許したわけじゃないわ。でも、あんたに勝手に死なれちゃ、寝覚めが悪いつてだけよ。あたしに着いてくることだけは許してあげるんだから、感謝しなさいよね」

「もちろんだよ。カタリナにはずっと感謝してる。ぼくはカタリナのおかげで生きていられるんだから」

「大げさなやつね。でも、それならいいわ。しつかりあたしの後ろに



着いてくること。いいわね？」

カタリナとパーティをまた組むことができるようになって、本当に良かった。

カタリナは大げさだと言ったけど、ぼくは本当にカタリナに命を助けられていると思う。幼いころから、カタリナは何度もほとんど戦えないぼくの代わりにモンスターを倒してくれた。

ぼくがモンスターに攻撃されて動けなかったときに助けてくれたり、ぼくだけじゃ倒せないモンスターに遭遇した時に倒してくれたら、本当に何度も助けられてきたんだ。

だから、ぼくはカタリナに本当に感謝していたし、カタリナの事が好きだった。これまで助けられてきた分、アクアと一緒に返していきたいと思っていた。

「ユーリ、カタリナと仲直りできてよかった。アクアもカタリナがいないと困る」

「そうだね。ぼくたちにとって、欠かせない存在だもんね、カタリナは」

「そ、そう。ま、そこまでいうなら、これからもユーリたちの面倒見てもいいわ。でも、授業には遅れちゃうわね。はあ。遅刻の方が欠席より面倒なのよね、あの先生。さぼっちゃいましょうか」

カタリナに誘われて、ぼくたちは授業をさぼっているいろと話していた。すると、学園で騒ぎが起き始める。ステラ先生がここにやってきて、カタリナの姿を確認して安心したような顔になる。

「カタリナさん、ここにいましたか。実は、モンスターが異常発生してしまって、カタリナさんの受けている授業で、参加した人たちの安否を確認していたんです。既に犠牲者も出ているので、カタリナさんの無事が確認できてよかったです。私は忙しくなりそうなので、これで失礼しますね」

急いだ様子のステラ先生はそのまま去って行く。ぼくはカタリナと顔を見合わせていた。

「あの授業、さぼって良かったみたいね。あんなのおかげで命を救われたって言っているのかしら。ユーリ、あんなのおかげね。あんな

も、たまには役に立つのよね」

「そうだね。でも、本当に良かった。カタリナに何かあったら、ぼくは生きていけなかったよ。犠牲者が出たのは残念だったけど、それがカタリナじゃなくて良かった。カタリナとけんかしている間、ずっとつらかったけど、今回の事があつたなら、それでよかつたと思えるよ」  
「うん。カタリナ、無事でよかつた。カタリナはこれからもアクアとユーリと一緒に居るべき。カタリナの事も、アクアが守る。もちろん、ユーリも守る」

「あんたたちはほんと大げさね。でも、命を助けられたんだから、これから一緒に居るくらい、どうってことないわ。これまでずっと一緒に居たのが、これからも続くだけだもの」

カタリナとアクアとこれからも一緒に居られると思うと、本当に嬉しくなってくる。

カタリナにはずっと守られるだけだったけど、カタリナにも危ないことがあるかもしれないことはよく分かつたし、カタリナの事を守るくらいに強くなつてみせる。そう誓つた。

それから、ステラ先生に誘われて、カーレルの街で冒険者として活動することになった。

ぼくたちは順調に活躍することができて、結構有名な冒険者になった。

新たな仲間も加わり、カタリナもモンスターと契約することになつてからは、ぼくたちに敵はいないんじゃないかと思えるほどだった。

そんな中、ぼくはカタリナに告白することにした。

ぼくが結婚するならば、カタリナ以外ありえないと考えていた。

アクアにも相談して、ぼくからカタリナに告白することに決めた。アクアが言うには、ユーリなら大丈夫とのことだった。

ぼくたちが冒険者として活動する中で、ぼくはカタリナに助けられたり、カタリナを助けたり、いろいろな形で絆を深めてきた。

ぼくはカタリナが隣にしていると安心したし、これからもずっとそばに居てほしいと考えていた。きっと、カタリナもぼくの事を好きでいてくれていると感じていた。

だけど、いざ告白するとなると不安もあった。カタリナとは冒険者としていいパートナーになれていると思うし、お互いがお互いの理解者であるとも思っていた。

でも、それが勘違いだったらどうしよう。それで、カタリナとの距離が離れてしまったら。

そんな考えが浮かんできたが、それを察したアクアに励まされて、ぼくは告白を決意した。カタリナを呼び出して、告白する。

「カタリナ、ぼくはカタリナの事が好きだ。これからもずっと一緒に居てほしいし、できれば結婚したい。カタリナ、ぼくと付き合ってくれないかな？」

カタリナはぼくの言葉を受けて、あきれたような顔になる。少し不安になったが、すぐに笑顔を向けてくれた。

「……はあ。本当に今更だわ。遅いのよ、ユーリ。でも、答えは決まってる。……一度しか言わないから、よく聞いておきなさいよね」

そう言ってカタリナはぼくの耳元に口を寄せて、ささやいてきた。「あたしも大好きよ、ユーリ。ずっと一緒に居ましょうね」

そのままカタリナはぼくにキスをした。カタリナと付き合うことになった喜びで、ぼくの中はいっぱいだった。

それから、ぼくたちどちらにとっても大切な存在のアクアに、ぼくたちが付き合うことになったと報告した。

「ユーリ、カタリナ、おめでとう。いちやいちやしてもいいけど、アクアを仲間外れにしないで」

「アクア、ありがとう。あたしたちのこと、祝ってくれて。もちろん、仲間はずれにはしないつもりよ。アクアは、あたしにとっても、ユーリにとっても、大切な家族よ。でも、2人きりの時間は作らせてね？」

「わかってる。人間にはいろいろあるって知ってる。ユーリとカタリナの子供、楽しみ」

「さすがにそれは気が早いわよ。でも、いずれ、ね。ユーリ、それまでに、しっかりお金をためなくちゃね」

「そうだね。アクアも、ぼくたちの事を支えてほしい。もちろん、ぼくたちもアクアの事を大切にすることから」

アクアは本当に嬉しそうで、ありがたかった。ぼくたちを繋ぐきっかけの一つだったアクアにお祝いしてもらえて、本当に嬉しかった。それから、他の人たちにも報告して、祝いの言葉をもらった。ぼくたちは付き合うことになっても、大きく生活が変わったわけでは無かったが、少しだけ、ぼくたちの距離が近いことが増えた。

それからしばらくの間冒険者として活動していたが、結婚しても十分な資金がたまったと判断したぼくたちは、パーティを解散して、ミストの街に帰ることにした。

パーティは解散したのに、仲間たちはミストの町へ着いてきていた。ステラさんと呼ぶようになったステラ先生も、ぼくたちと一緒にミストの町へきて、教師へと戻った。ぼくたちも学園で働くことになり、またステラ先生と呼ぶことになった。

ミストの町へ帰って、カタリナの両親にぼくたちが結婚することを伝えると、とても喜んでくれた。ぼくたちが結婚するときのために貯めておいたお金があるそうで、それを渡してくれた。

それから、ミストの町で教師として働きながら、カタリナとアクアと一緒に過ごしていた。ぼくたちの間に子供もできて、アクアがとてもかわいがっていた。

「カタリナ、今まで本当にありがとう。カタリナがいてくれるおかげで、ぼくは幸せになれたんだ」

「何よ急に。でも、当然よね。あんたにはあたししかないんだから。もちろん、アクアは別にして、ね。でも、あたしも幸せよ。ユーリ、あたしの事を好きになってくれてありがとう。これからも、ずっと一緒に居ましようね」

アクアにとって、ユーリが最も大切な存在であることは揺るぎなかったが、カタリナもアクアにとって大切な存在だった。その2人と一緒に冒険者になって、アクアはとても楽しく過ごしていた。

ユーリもカタリナもアクアの事を大切にしてくれて、アクアは前よりずっと2人の事が好きになっていって、この2人とずっと一緒に居

たいという思いが強くなっていった。

ユーリにカタリナと付き合いたいと相談されたとき、アクアにはやっとかという呆れすらあった。ユーリとカタリナがお互いに想いあっていることなど、明らかだったのに。

ユーリはそれでも不安そうだったので、アクアは背中を押ししてやった。当然のように2人は付き合い始め、アクアもその中に混ざっていた。

それから、ユーリとカタリナが結婚することになって、ミストの町へと帰ることになったとき、ユーリたちの生活に問題が起きないよう、邪魔な存在を事前に処理していた。結婚に反対しようとしていたメンバーの事も操り、問題なくユーリとカタリナが結婚できるようにした。

ユーリとカタリナの間に子供ができた時、アクアは初めどうでもいито考えていたが、ユーリとカタリナと一緒に子供を世話していく中で、その子供も大切な存在になっていった。ユーリにもカタリナにも似ているところがあつたことが大きかった。

アクアがずっと思い描いていた通りの生活が続き、アクアは本当に幸せだった。アクアがユーリとカタリナの間に混ざりたいと思った時、2人は必ず混ぜてくれていた。アクアは、ユーリとカタリナに出会えて本当に良かったと、運命に感謝していた。

## 1章の登場人物

ユーリ

この物語の主人公。アクアと2人暮らしで、生活費はユーリの家にあつた資金をカタリナの両親が管理していて、余つた分はユーリとカタリナの結婚資金にする予定にしている。

アクアとの出会いは記憶にないほど幼いころで、その時からずっとアクアと一緒に居る。家にはスライムの資料が多くあり、ユーリのスライムに関する知識はそれがもとになっている。

アクア

ユーリのペットで、ユーリにはハイスライムだと思われているが、実は特別に危険なモンスターのオメガスライム。感情が芽生えてその時間がたっていない。

とにかくユーリが大好きで、ユーリを傷つけるものは何があつても許さない。だが、一般的なケンカくらいであれば、相手によっては許している。ユーリからの好意がないとわかっているような人物であれば、悪口ですら危ない。

カイン

カタリナに惚れている。理由は顔。そのためカタリナとよく一緒に居るユーリに突つかかっていたが、それによってカタリナにはゴミくらいにしか思われていない。カインが死んだとき、カタリナは内心大喜びした。

カタリナ

ユーリの幼馴染。茶髪を耳が隠れるくらいの長さにしていて、髪飾りを毎日変えている。いつも釣り目。ユーリが弱かったころはユーリの代わりにモンスターを倒しており、弓の腕は相当高い。カタリナがいなければ、ユーリは本編開始までに死んでいた可能性が高い。ユーリもそれを自覚していて、だからカタリナの口の悪さを気にも留めていない。あんたと呼ぶのはユーリだけであり、アクアもそれを知っている。ユーリは気が付いていない。

ステラ

ユーリの通う学園の教師。藍色の髪を長く伸ばしていて、おっとりした雰囲気。ユーリとアクアの仲の良さを見て、指輪を渡す候補としてユーリに目をかけていた。召喚技について詳しいのは、指輪を使いこなそうとしていたころの名残。結局テイマーとしての才能はなく、だれかに夢を託すために教師になる。その夢は、指輪を使いこなせるほどモンスターと絆を深めることで、ユーリとアクアならそうなるのではないかと期待していた。

アリシア

赤い髪に高い身長 of 冒険者。風刃と呼ばれており、知名度が高い。一般的な冒険者ではまるで敵わないキラータイガーに対して、特に何とも思っていない様子を見せる。ユーリの実力を見て、少しだけ気にかけている。

レテイ

アリシアの契約モンスターであるハーピー。アリシアとはとても親しく、まさに一心同体と言っている。ハーピーの中でも強者と言われているが、アリシアの方が強い。

ミーナ

エンブラの街に住む剣士見習い。ピンク色の髪を後ろでまとめている。剣の腕に相当自信があり、だからこそユーリに負けたことが今後に大きく影響する。大体何をしている時も笑顔だが、剣を握ると雰囲気が変わる。

マカロフ

エンブラの街の闘技大会1回戦でユーリと戦う。剣一本で身を立てることを目標にしている。恐らくその目標はかなわない。

アーノルド

エンブラの街の闘技大会2回戦でユーリと戦う。契約技を弱者の技と思っている。その真実を知るときに無事でいられるかは定かではない。

スタン

エンブラの街の闘技大会3回戦でユーリと戦う。弓の腕に自信があるが、カタリナの方が強い。カタリナの実力を見れば、心が折れて

いたかもしれない。



## 2章 水刃のユーリ

### 15話 新生活

ぼくはあれから学園を卒業して、前からの予定通りに冒険者として活動するためにカーレルの街へと向かっていった。

これまでと同じくカタリナとアクアとパーティを組むつもりだ。

カーレルの街までの移動ではこれといったトラブルもなく、後は到着を待つだけとなっていた。

「カタリナ、アクア、これからぼくたちは冒険者になるわけだけど、うまくやっていけると思う?」

「そんなことをあたしに聞いてどうするのよ。ま、あたしがいるんだから、どうとでもなるでしょうけど」

「ユーリもカタリナもアクアが守る。心配しなくていい」

「2人とも頼りにしているよ。これから頑張ろうね」

これから冒険者として活動していくことが楽しみなような、不安なような。

でも、この2人と一緒なら、ぼく1人でやるよりずっといい結果にできる事は間違いない。

それからもう少し経って、カーレルの街に到着した。

ミストの町より明らかに人が多い。この中の多くの人は関わることはないだろうけど、どのくらい知り合いを増やせばいいんだろう。

さすがに学園の時のようにほとんど決まった人とだけ会話というわけにはいかないかもしれないし、積極的になってみるべきなんだろうか。

まあ、それはもう少し考える時間はあるか。今はステラ先生に借りる家を探そう。

これからぼくたちが暮らす家はすぐに見つかった。

目立つとは聞いていたけど、明らかに周りより大きい。いまさらだけど、こんな家を借りてもいいんだろうか。

「すつごく大きい家だね。ステラ先生ってお金持ちだったりするのかな」

「下世話な話するんじゃないわよ。確かにあたしもびつくりしたけど、ちゃんと気を付けておけばいいでしょ」

「これからはカタリナも一緒。ユーリ、嬉しい?」

そんなことを聞かれても困ってしまう。

まあ、カタリナが近くにいると思うと、同じ部屋ではなかったとしても心強いとは思うけど。やっぱりぼくはカタリナに頼っている部分が多いんだろうな。

「あはは……まあ、これだけ広いなら、一緒に部屋でなくてもいいかもしれないね」

「アクアはユーリと同じ部屋。ペットなんだから、ちゃんと面倒を見るべき」

「あたしと同じ部屋で過ごすつもりだったの? あんた、そういうところはちゃんとしなさいよね」

会話をしながら玄関に近寄っていくと、扉が開いた。

そこからはステラ先生が出てきた。誰もいないのかと思っていたけど。ステラ先生はぼくの驚きを気にした様子もなく話し始める。

「ユーリ君、カタリナさん、アクアちゃん、いらっしやい。お待ちしていましたよ」

「ステラ先生!? こっちに来ていたんですか? 学園はいいんですか?」

「学園ですが、辞めてきました。これからはユーリ君たちのサポートに専念するつもりです」

びつくりした。ステラ先生には目をかけてもらっているとは思っていたけど、そこまでするのか。

ちよつと期待が重い気がする。いや、嬉しいんだけど。

ぼくはステラ先生の期待に応えられるだろうか。ステラ先生は尊敬できる人だし、失望されたくはないな。指輪を使いこなしてほしいんだっけ。頑張ろう。

「サポートと言うと……? この家を管理してくださるとかですか

？」

「もちろんそれもあります。他には、割のいい依頼を紹介したり、あなたを手助けしてくれるような人に紹介したりといったところでしょうか。」

ミストの町ではただの一教師でしたが、この街では、私ももつと多くのことができるんです」

ステラ先生は学園にいる時でも相当頼りになったけど、それ以上のことができるのか。やっぱり、ステラ先生はすごい人なんだな。改めて尊敬する。

「それは……助かります、ありがとうございます。ステラ先生にはたくさん支えてもらっているので、きちんと指輪を使いこなしているところを見せられるよう頑張ります」

「あまり急ぎ過ぎないように気を付けてください。ユーリ君が無理をして危ない目にあっては元も子もありませんから。それはさておき、もう私は教師ではないので、ステラで構いませんよ」

さすがに呼び捨てには出来ない。ステラ先生にはこれまで本当にお世話になってきたんだ。ステラさんあたりがいいだろう。

「では、ステラさんと呼ばせていただきますね」

「あたしもステラさんでいいかしら？」

「ステラ、よろしく」

「ふふ。皆さん、これからよろしくお願いしますね」

ステラさんとも一緒に生活することになるんだよな。なんだか緊張してきたような気がする。

ステラさんみたいな大人の人とあまり近くにいた経験はないし、どうしようか。ステラさんとなら、きつとうまくやっていけると思っておこう。

ただ、ステラさんは優しいし頼りになるけど、甘え過ぎないようにしないと。いくら優しいステラさんといっても、迷惑をかけられて嬉しいはずもないのだし。

「さあ、皆さん、今日は疲れたでしょう。明日から活動できるように連絡しておきますので、今日はゆっくり休んでください」

「わかりました、ステラさん。そうだ、ぼくたちはどの部屋で過ごせばいいですか？」

「ユーリ君とアクアちゃんの部屋、カタリナさんの部屋、それぞれの部屋の扉に名札を設置しているので、そこを利用してください。今日は私が食事を用意しますので、その心配はしなくともかまいません」

ステラさんが料理を用意してくれるのか。

いろいろ手間をかけて申し訳ないと思うと同時に、ステラさんの手料理を食べられるという喜びもある。

最初はびつくりしたけど、ステラさんと一緒に生活できるということとはとても嬉しい。

「食事まで用意していただけるんですか。本当にありがとうございます。ステラさんにはお世話になってばかりですね……」

「ふふ、そうですね。ですが、皆さんなら、それに見合う活躍ができると思っていますよ。あなたたちは私が見てきた中でも飛びぬけた才能を持っていますから」

ぼくに才能があるかはともかくとして、アクア水の力は本物で、カタリナもとても優秀な弓使いだ。アクア自身だつてとても頼りになる。

ステラさんの期待にこたえたいという思いと同時に、この2人にとつてふさわしい仲間になりたいという思いもある。うん。頑張つていこう。

「その期待を裏切らないように頑張ります。ステラさん、見ていてください」

「あたしなんだから当然よね。でも、ステラさんが期待しているよりも活躍してみせるわ。あたしたちなら、それくらいできるでしょ」

「ユーリと一緒になら百人力。アクア、頑張る」

それからぼくたちの部屋を確認した。

この部屋は前に暮らしていた家の部屋のいくつ分くらいの大きさだろう。こんなにすごい家で暮らせるのだと思うと、喜びより緊張の方が大きいかもしれない。

冒険者になると野宿することもあるかもしれないし、あまり慣れ過

ぎないようにしないとな。

部屋を確認し終えたくらいの頃、ステラさんから食事の準備ができたと告げられる。

用意されている食事はステラさんが作ったらしい。ステラさんの手料理か。少し楽しみだな。

ステラさんの作った食事は、なんだか優しい味がした。ステラさんの人柄に良く合っている。

「ステラさん、これ、美味しいです。ステラさんは料理も上手なんですね」

「そうね。これならまた食べてもいいかもしれないわね。あたしほどじゃないにしろ、ステラさんは料理上手ね」

「ありがとうございます。人に食べてもらったのはこれが初めてなので、美味しいといってもらえるのは嬉しいです。いつもとはいきませんが、また機会があれば振る舞ってみたいです」

これが初めてなのか。なんだか特別感があるな。もつと味わって食べても良かったかもしれない。

また食べられるなら嬉しいけど、ステラさんに負担をかけたわけでは無いからな。できるだけ、自分で食事を用意していこう。

「では、また明日。明日は紹介したい人がいます。楽しみにしてくださいね」

「ステラさん、今日はありがとうございました。これからよろしくお願ひしますね」

それからぼくたちは部屋に戻り、ぼくはアクアと遊んでから寝た。明日はどんな人と会うんだろう。

次の日、ステラさんに連れられて、冒険者の組合へ向かった。紹介したい人はここにいらっしゃるらしい。

「皆さん、こちらがあなたたちを担当していただく、サーシャさんです。サーシャさん、この人たちが私が推薦するパーティです」

「皆様、お初にお目にかかります。わたくしは、あなたがたのパーティを担当する、カーレル組合のサーシャと申しますわ。どうぞよしなに」

この人はサーシャと言うらしい。

金色の髪を後ろの方で、なんとというか四角が織り交ざるかのようにたたんでいる、かわいらしい人だ。ステラさんとそう年の頃が変わっていないように見えるけど、印象はずいぶん違う。

それにしても、この面倒そうな髪形は一体どうやっているんだろう。

「ぼくはユーリといいます。サーシャさん、これからお世話になります」

「あたしはカタリナ。よろしくお願いするわね」  
「アクア。よろしく」

サーシャさんにはこれからきつとたくさん会うことになるだろう。いい関係を築けるように、しっかりとやっていかなくちやね。

「はい。ユーリ様、カタリナ様、アクア様ですわね。では、これから組合の説明に入りたいと思いますわね。よろしいかしら?」

「その前にこれだけ。サーシャさんは、この町の有力者であるエルフィール家のご令嬢です。」

多少失礼があったところで無礼打ちするような方ではありませんが、そのことは理解しておいた方が良いかと。ただの組合員はもっていないような権限を多く持っているので、好かれておいて損はありませんよ」

「あなた方くらい態度でどうこう言うつもりはありませんわ。冒険者というのは、もっとどうしようもない方も大勢おりますし。」

それに、ステラ様だけではなく、あのアリシア様やレティ様に目をかけられていると言うではありませんか。そのつながりを安易に逃すほど、わたくしは愚かではありませんわ」

アリシアとレティは有名人だけど、サーシャさんの口ぶりだと、かなり信用されているらしい。

強いとは聞くけど、結局実力は見られなかったんだよな。どれくらい強いんだろう。

「さて、この話はここままでよいでしょう。組合の仕組みについて説明するのはいかがでしょうか。冒険者の受ける依頼というのは、大きく

分けて2つありますわ。一般依頼と、指名依頼ですわね」

2種類あるのか。名前の響きからして、一般依頼というのが普通に受ける依頼なんだろう。

指名依頼は、きつと実力のある有名な冒険者が受けるんだろうな。

「一般依頼は、組合でまとめて条件を管理していて、モンスターの討伐や素材の採集を決まった値段で行う形になっておりますわ。

ただし、これまでの実績から依頼達成が困難と判断される場合に、依頼を受けることはできません。その場合に素材などを持つてきて、報酬は支払われないばかりか、ペナルティを受ける場合もありますわ。無鉄砲を褒めるシステムではないということですよ」

なるほど。つまり、評価されようとして無理に強いモンスターを倒しに行ったところで、得られるものは少ない。

なら、そこまで無茶をする冒険者は少ないだろう。

「そして、指名依頼というのは、組合は手数料を受け取るだけで、交渉などは冒険者の方と依頼主の方が行うことですわ。

依頼を受けなくても組合からペナルティなどはありませんが、受けて失敗した場合はその限りではありませんわ。

多くの場合は受けられる一般依頼が減ることになりますわ。自分の実力をきちんと把握することが大事ですよ」

なら、最初は慎重に判断することが正解かな。ある程度どういう依頼がどういう難易度なのかはしっかり分かってから受ける事にしたい。

「先ほど、交渉は依頼主と直接行うと言いましたが、あなた方の場合であれば、問題のある依頼はわたくしが弾きますし、ある程度の仲介も行いますわ。

せっかくの有望株を、つまらない依頼でつぶす方が組合にとっても、エルフィール家にとっても損失となるでしょう」

それはありがたい。ぼくたちは交渉に慣れていないから、サーシャさんがサポートしてくれるうちにしっかり学んでおこう。

「あなた方は、しばらくの間こちらの指名依頼を受けていただくことにしますわ。もちろん、断っていただいてもかまいませんわ。

ですが、あなた方を見込んでのことでもありますので、直接的なペナ

ルティはなくとも、あなた方の評価を下げることになることは留意してくださいまし。よく考えて選択することをお勧めしますわ」

評価が下がることのデメリットが分からないから、判断が難しいな。

でも、ステラさんも関わっている以上、罠のような依頼ではないはずだ。

「説明はこんな所ですわね。今日のところは、一つだけ依頼を受けていただきたいのですわ。」

危険は恐らくありませんし、良い経験になることも保証いたしますわ。いかがなさいます?」

そうだな。ステラさんの顔を立てておきたいし、ステラさんの紹介なら、少なくとも初めは信じるとするか。

「カタリナ、アクア、受けようと思うけど、いいかな?」

「いいわよ。サポートのある状況から慣らしておいた方が良いでしょう」

「アクアはユーリについていく。罠だったとしても、アクアが守ってあげる」

2人とも賛成のようだ。

まあ、そうだよな。右も左も分からない状況だから、ステラさんの紹介ということ置いておいても、サポートがしつかりしてそのような依頼を受けておきたいのは当然だ。

「サーシャさん、今日の依頼は受けようと思います。これからは事前の説明していただけないと、受けるとは言えません」

「かしこまりましたわ。では、依頼の内容を説明いたします。アリシア様とレティ様に、冒険者のいろはを教わっていただきますわ。」

ある程度実践を行っていきながら、冒険者の頂点の一角ともいえる存在がどれほどなのか感じていただく、いい機会になるでしょう。

アリシア様やレティ様ほどになつていただきたいとは言いませんが、あなた方がこの街を代表できるような存在になることを期待しておりますわ」

「わかりました。ぼくたちも精進したいと思います。それで、アリシ



アさんとレティさんとはどこで合流すればよいでしょうか？」  
「ここで待っていてくださいまし。時間になればいらつしやいます  
わ」

そう言われたので、アリシアとレティを待つことにする。初めての  
依頼が、アリシアとレティとの再会になるなんてね。でも、楽しみだ。

## 16話 初依頼

ぼくたちは初めての依頼を、アリシアとレティと共に行うことになった。

アリシアとレティはこのまま待っているとここに来るらしい。会うのはキラータイガーの一件以来だし、楽しみだな。

しばらく待っていると、アリシアとレティがやってきた。

「ユーリ君、カタリナさん、アクア。久しぶりだね。今日はどれだけ成長したのか、見せてもらおうかな」

「みんな久しぶり。元気だった？ わたしたちは調子がいいよ」

アリシアもレティもぼくたちの事をちゃんと覚えてくれているみたいだ。なら、しつかりぼくたちの成長を確認してもらおう。

「アリシアさん、レティさん、お久しぶりです。ぼくたちは、以前より確かに成長できたと思います」

「そうね。あたしたちがどれほどの実力か、見せてやろうじゃない」「うん。ユーリ、カタリナ、やろう」

ぼくたちの返答を聞いて、アリシアもレティも笑みを浮かべる。

アリシアは余裕そうな感じの笑い方で、レティはとても明るい笑顔だ。前に会った時もあったけど、この人たちとはとても接しやすい。

「うんうん。あなたたちもうまくやれてるみたいだね。アリシア、楽しみじゃない？」

「そうだね。じゃあ、サーシャさん。ユーリ君たちは任せておいて」「お願いいたしますわ。ユーリ様たちが一流になれること、期待しておりますわ」

そうしてアリシアたちと依頼に向かうことに。せっかくの機会だ。いっぱい勉強させてもらおう。

今回向かう先は森のようで、道はしつかりしているけど、そこから外れると途端に木々に囲まれてしまいそうだ。うっかり道から逸れないように気を付けよう。

「そういえば、ユーリ君とアクアがつけている指輪。それ、ステラさんが昔、自分で使おうとしていたものなんだよ。」

ステラさんは結局モンスターを使役することはできなくて、それで、モンスターと契約している誰かに託すことにしたらしいよ。君たちはステラさんに信頼されているんだね」

ステラさんはぼくたちに自分の目標を託してくれたのか。もともとの指輪を使いこなすつもりだったけど、ますますそうしなくなってきた。

ステラさんに恩返ししたいし、ステラさんが喜ぶ姿も見たい。冒険者として活躍することが目標だったけど、こっちも大事にしたいな。それから本格的に活動を開始する。

アリシアたちはぼくたちの動きを確認するのかと思っていただけ、まずはいろいろと説明を受けることに。

「君たちがモンスターと戦う腕前は、前の段階でもそこらの冒険者より上だったからね。その確認より先にやりたいことは、君たちに私たちが考える心得を教えていくこと。それが終わったら、実践かな」なるほど。アリシアがそう言うのなら、ぼくたちは強い方の冒険者なのだろう。

だけど、慢心は禁物だよ。アクアとカタリナに何かあるなんて絶対に許せないし、ステラさんを悲しませたくもない。

「分かりました。しっかりと学びたいと思います」

「あたしたちをただのザコと一緒にされちゃ困るわよ。でも、今のところはアリシアの方が上なのは分かっているわ。今は従ってあげる」

「その意気だね。わたしたちの実力を見て、自信を無くさないようにね。そういう人たちばかりだったから」

レティは当然のことを言っているという感じに見える。

つまり、本当にみんな自信を無くすくらいにアリシアとレティは強いのだろうか。

でも、この2人がいくら強かったとしても、それが諦める理由にはならない。みんなと一緒になんだから、絶対に大丈夫だと信じよう。

「レティ、余計なこととは言わない。そうだね。まずはモンスターとの戦い以外の依頼についてかな。君たちは薬草とかの自然でとれる採

集物はどれくらい知っているかな？」

「基本中の基本くらいは。さすがにキノコを生で食べるような真似をするほどではありません」

「まあ、そうなるよね。君たちくらいの実力で、あまり採集依頼を受けることはないと思うけど、一応知っておくに越したことはないからね。たとえば食料が足りないときに、何を食べられるか知っているだけでも全然違う」

薬草採集などは、駆け出しが受ける依頼として一般的なものだ。

強いモンスターの縄張りに有用なものがあることは滅多にない。

食べられるものなら食い尽くされてしまう事が多いし、食べられないものはどこでも縄張りにできるほど強いモンスターが執着するともない。

危険なモンスターの縄張りだと、結局採集依頼より先に討伐依頼が出ることになる。

ぼくたちはそれを意識して、強いモンスターの情報を優先的に調べていたが、アリシアほどの冒険者が言うのなら、確かに勉強する価値はあるのだろう。

アリシアが言っていることには納得できるし、今度からそれも勉強しよう。

「ただ、素人が適当に勉強するより、もつと効率よく知る手段もなくはない。一から手探りよりも、先人の知識をうまく生かした方が良い。君たちにそんなところで躓いてほしくないからね。これを見てごらん」

そういうアリシアは、こちらに一冊の本を手渡す。図鑑のようなものかな。植物などの絵と、説明が書いてある。

「これは私が一番お勧めする資料だ。薬草と似た毒草は隣に並べてくれているし、危険なものは一覧になっているページもある。調べやすいように、名前から逆引きもできるようになっている。

よくできた資料だよ。覚えれば役に立つことは間違いないし、頭に入っていないくても、分からないものがあるときにこれを見るだけでもいい。最低限死ぬようなことは避けられるだろう。

これをユーリ君にあげるよ。せつかくだから、一冊もっておいて損はないよ。ユーリ君たちなら、これをうまく使ってくれると期待しているよ」

説明を聞いているととても便利そうに聞こえる。

実際、書いてある絵は本物とそっくりに見えるし、危ない物がこれ一冊でわかるなら便利なのは間違いないはずだ。

「ありがとうございます。さすがに今から読むことはできませんが、大切に読ませていただきますね」

「二応、サーシャさんに言えば、この資料を買うこともできるはずだ。もし何かあったときは、そこから入手するといい。燃えてしまった時とか、なくしてしまった時とかにね。安くはないけれど、この情報には見合う値段だと思うよ」

「そんなにいい物なんですか。本当にありがとうございます。さすがになくしてしまわないように気を付けますが、本当に大事にします」  
「大事にしてくれるのは嬉しいけど、たとえばモンスターに襲われて、荷物が邪魔になったときなんかには捨ててしまってもいいよ。また手に入るものだから、そこまで気にしなくてもいいかな」

アリシアは本当に僕たちにちゃんとアドバイスしてくれる。

もつと雑に扱われたとしても、アリシアたちほどの冒険者なら、周りは納得するくらいだろう。心底ありがたいな。

「本当にぼくたちを気にしてくださっているみたいで、ありがとうございます。ありがとうございます。いつかお返ししたいと思います」

「あたしたちに期待するのは当然じゃない？ ま、確かに思っていたより丁寧だけど」

「そこまで気にしなくてもいいんじゃないかな。わたしたちと肩を並べて冒険できるくらいになってくれれば、アリシアは喜ぶだろうけど。そこまで新人に期待するのは酷だよ」

「レティ、言い過ぎだよ。でも実際、私たちは君たちに期待しているんだ。」

少なくともこの街には私たちの足元にも及ばない冒険者しかいない。君たちがその状況に一石を投じてくれるかもしれない。そうな

れるだけの才能は間違いなくあるんだ」

アリシアたちがそこまで期待してくれていることは嬉しいけど、期待が重いようにも感じる。ただの一冒険者にそこまで期待するほどだろうか。

「君たちを間違った方向に進ませたり、君たちが途中で倒れてしまわないように気を付けることは、私たちにもメリットがあることなんだ。

だから、君たちは遠慮なく私たちに頼ってくれていいよ。どうしても嫌なら断るけれど、それで君たちを邪険にするほどじゃない」

あまり頼りたくない気もするけど、カタリナやアクアをしつかり守れるように、利用できるところは利用していこう。つまらない意地で2人が犠牲になることほど嫌なことはないのだから。

「私たちも、ステラさんも、サーシャさんも、それぞれ自分の思惑があつて、君たちを手助けしているんだ。感謝は大切だとは思うけど、君たちもそれを利用してやるくらいの気持ちでいいよ」

ぼくたちに期待してくれるのは本当に嬉しい。

だから、よほど問題のある思惑でなければ、叶えてあげたいと思う。とはいえ、みんなは思っていた以上にぼくたちに目をかけてくれている。そこまでのことをしたのだろうか。よくわからない。

「分かりました。では、今回の依頼で、しつかり学ばせてもらいますね。そして、いつかアリシアさんたちを超える冒険者になって見せます」

「ふふつ。微笑ましいね。いかにも若いという感じだ。こんなことを言うと、私が老けているみたいだね。忘れてもらえるかな。

それはさておき、ここからは別の話だ。カタリナさんは弓を使うから、地形に関する理解はある程度あると思うけれど、ユーリ君たちはどうだい？」

どうだろう。森で手足を露出しないように気を付けるとか、山で迷ったときには上の方へ行くとか、それくらいの基本は知っているけど、そのレベルが聞きたいわけじゃないよね。

「当然よね。弓使いが射程や遮蔽物の扱いが分からないなんて事、あ

るわけないでしょ」

「逃げる時に地形を利用したことがある位でしょうか。そこまで詳しいと自信を持って言えるほどではありません」

「アクア、どんなところでもユーリについていくだけ」

「なるほど。では、ユーリ君を中心に説明することにしようか。カタリナさんには退屈になってしまいかもしれないけれど、よろしく頼むよ」

ぼくは気合を入れて聞くことにする。

アリシアほどの冒険者に教わる機会なんて、そうないはずなんだから、せっかくのチャンスが無駄にするわけにはいかない。

「よろしくお願いします」

「仕方ないわね。ま、たまには復習もいいでしょ。それでユーリが役に立ってくれるなら言うことはいわ」

カタリナはそう言いながらもすっかり耳を傾けている様子だ。

当然だよな。アリシアたちは本当にしっかりと教えてくれる。学園の授業よりよほどためになるから、聞いていてとても楽しい。

「ユーリ君、君の契約技は、たとえば高い方と低い方、どちらに動かす方が楽とかあるかな？」

「いえ、ありません。ただ、アクア水と一緒に別のものを動かしている時は、アクア水が離れると、落ちていきますし、アクア水の操作をやめてもアクア水が落ちていきます」

「なるほど。なら、普通にものを上に運ぶより、アクア水を使った方が楽になるわけだ。それは重い物でも変わらない？」

アリシアは本当に契約技に慣れているのだろう。ぼくの答えに対してすぐに意見が出てくるあたりでそれが分かる。

「そうですね。なら、重い物を運ぶときにアクア水を使うことを優先したり、降りる時には逆にアクア水を使わないとかできそうですね」  
「良い視点だ。自分の契約技を使う時、契約技だけに意識を向けるだけでなく、契約技の周辺への影響や、周囲の地形や物を利用できるようになると、選択肢が大幅に広がる。」

たとえば、そうだね。そこに池があるよね。ユーリ君は、池の水も

操ることはできるかな？」

それは分からない。アリシアの質問が来てはつとした。

アクア水を操れるのなら、他の水はどのようなかという発想がなぜ浮かばないのか。

アリシアに教わる機会を持てたことは、この質問だけでも十分な成果かもしれない。

「すみません。試したことはありません。今、実験しても大丈夫ですか？」

「かまわないよ。それでユーリ君が成長してくれるのは、ありがたい限りだ」

「ありがとうございます。試してみますね」

まずは契約の証からのびる力を、池の水に向けてみる。

動かそうと試してみてもびくともしない。

次に、アクア水を池の中に入れてみる。アクア水を通してなら、水を操ることもできた。思っていたより少しのアクア水でも、結構な量の水を操ることができた。

「こんな感じですよ。何もなしでは水を操ることはできませんが、アクア水を通してなら、操ることができるといえますね」

「うん、すばらしいね。たとえば私だったら、風を水の中に送り込んで、水を間接的に操ることもできる。他には、池の近くにいる相手を、突風でそこに落としたりもするね。」

君なら、水場を利用することで、もっといろんなことができるんじゃないかな」

その通りだ。今だけでもいくつかの考えは浮かんだ。

でも、アリシアたちを待たせるのもどうかと思うし、検証はまた今度にするつもりだ。

「そうですね。いくつか案はあります。モンスターが相手なら、いろいろ試せそうです。人が相手なら、危険なものもいくつかありますけど」

「そうだね。これからは、他の地形も利用できないか考えてみるという。ユーリ君は筋がいいよ。本当に教え甲斐があるね」



あのアリシアに褒められていると思うと嬉しいな。

ただ、いつかはアリシアを超えるつもりなんだ。褒められて喜んで  
いるだけではだめだろう。ぼくは気を引き締めた。

「それじゃ、次の講義だ。それを生かして実践を行ってもらおうつもり  
だから、覚悟してね」

## 17話 モンスター

次の指南が終わると、いよいよ実践らしい。アリシアの最後の指南はどういうものなのだろう。

「まずは聞きたいことがある。初見のモンスターと戦ったことはどれくらいある？」

初見のモンスターか。学園では、まずモンスターの情報を授業で聞いて、それから初めて戦うようになっていたからな。

授業以外でモンスターと戦う機会は2回あったけど、そのどちらも知らないモンスターが相手というわけではなかった。

「全く情報がないモンスターと戦ったことはないですね。凶鑑で見たことがある、という程度でしたらキラータイガーの一件がそうですが」

「なるほど。では、これから話すことは君たちの役に立つと思うよ。とにかく、初めて見るモンスターに対する対処がうまくできるかどうかは、生存率に直結するからね」

「確かにそうでしょうね。挑みかかるか、逃げるかの判断を間違えるだけでも、命の危険はありそうですし」

キラータイガーの時は、キラータイガーを知っていたから逃げようと思えた。ただの虎くらいに思っていて、逃げようと思ったかは怪しい。

結局逃げることはできなくて、ぼくたちはキラータイガーに負けたんだけど。あの時は運が良かった。

「その通りだ。今回説明したいのは、モンスターの外見や周囲の状況から、モンスターの強さや、モンスターの性質を計るための基本的な考え方だ。」

君たちは、モンスターと動物との関係について、どれくらい知っている？」

「動物に似ているモンスターは、基本的にその動物と同じような動きをして、そこから速くなったり、強くなったりということがあるというのでしょうか」

「他にもあるわよ。元の動物にない特徴を持っているモンスターは、その部位を利用してくるものらしいじゃない」

「基本は抑えているようだね。他にも、モンスターはどこから現れるか分かっているじゃないということもある。動物は子孫を残す姿が確認されているけど、モンスターはそうじゃない。」

だから、いつも同じモンスターしか現れないと思っっているところに、急に別のモンスターが現れて、その結果怪我をしたり、死んだりというのは、冒険者に良くあることだね」

前のキラータイガーにしろ、カタリナが取り残されたモンスターの異常発生にしろ、ぼくたちはそういう危険を経験しているから、その話はよく分かる。

運が悪ければ、そのどちらかで命を落としていてもおかしくはなかった。

「冒険者というのは、学のない人間になることの方が多からね。」

君たちくらいの知識でも、間違いなく上位1割は超えるんじゃないかな。本当に何も考えず突っ込んでいって死ぬ冒険者というのは、どこにでもいるよ」

冒険者にガラの悪い人間が多いといわれる理由の一つなんだろうな。

基本的に力で成り上がっていくこととも無関係ではないだろうけど、とにかく何も考えていないような奴は、本当によくいるらしい。「で、ここからが本題だ。モンスターの強さを見分ける時に、とても大事なことがある。」

それは、モンスターの外見が、元の動物からどれくらい離れているかということだ。分かりやすいのが、ホーンラビットと、ダブルホーンラビットだね。

角が1本と2本という違いだけけど、それでもその強さはまるで違う。動物に詳しくないような冒険者の方が多いくらいだから、この説明をして意味がある相手はあまりいないんだ。君たちはそうではないよね？」

そういえば、キラータイガーはただの虎とは明らかに色や模様が

違ったな。

ラピッドウルフは、あまり違いなんて分からないくらいだった。

これまではあまり気にしていなかったけど、これからはそういうところを意識して見てみよう。

「自信をもってはいとは言い切れませんが、基本的なところは抑えているつもりです。今回わざわざ説明してもらったことで、改めて動物について調べようと思えました」

「ま、そうね。あたしたちはそこまでバカではないわよ。ただの木っ端冒険者とはわけが違うところ、よく覚えてもらわないとね」

「あなたたちは本当に熱心だね。この説明をアリシアから受けたところで、何の役にも立てられなかった冒険者がどれだけいたことか。

勉強なんて何の役に立つんだって言って、勝手に死んでいくんだもんね。本当に冒険者はつまらない人たちばかりだね。あ、あなたたちは違うと思っているからね」

「レティ。それでユーリ君たちに冒険者なんて嫌だと思われたら、困るのは私たちだよ？ 私たちにしか受けられないような依頼がどれほどあることか。ユーリ君たちにはぜひ立派になってもらいところだね」

カタリナなら、他の道を選んでもどうにかできるかもしれないけど、ぼくは冒険者になるしかない。

せっかくアリシアたちが時間を割いてくれているんだから、身につけられるだけ身につけないとな。

「ぼくたちが頑張ることでアリシアさんたちが楽になるなら、頑張りたいと思います」

「あんたってば、本当にどうしようもないお人好しね。こいつらの都合を全部受け入れることなんてないわよ。こいつらが勝手にやっていることなんだからね」

「本人の前ですごいことを言うね。でも、間違っではないよ。他人の面倒を見ようとし過ぎる人は、簡単につぶれてしまう。

私たちは君たちに期待しているけれど、それは私たちの勝手な都合だ。君たちは君たちのためだけに頑張るといい。それが結果的に私

たちの役に立つてくれたら、それで十分以上だよ」

アリシアはそう言ってくれる。

でも、アリシアには今回かなり丁寧に教えてもらっているから、できるだけ役に立てるようにになりたい。

まあ、アクアやカタリナと生き延びることが最優先で、それは2の次にしておこう。

「ユーリが何をしても、アクアが守る。でも、ユーリは、アクアと、ついでにカタリナのことを考えているだけでいい」

「おっと、話題がずれてしまったね。それで、動物の姿とは関係のない姿をしているモンスターもいる。アクアもそうだね。そういうモンスターには、さっきの話は役に立たないね。

では、どういう風に考えるか。たとえばアクアと同じスライム種なら、水の性質を持っているよね。見た目も水とかなり近い」

そうだな。でも、アクアはただの水ではできない事もいっぱいできるみたいだけど。

「炎をまとっているようなモンスターなら見た目通り熱いし、電気が見えるなら、感電に気を付けないといけない。こういう時に、基本的な物理法則を知っているだけで、対処法が浮かんでくることもある。

対処法が浮かばないなら、逃げてしまうことも大事な考えだ。依頼を失敗してしまうことを恐れるのは当然の考えだけど、命に代えられないほどじゃないからね」

ぼくだけなら最悪死んでしまっても諦められる。

でも、カタリナやアクアにはそんなことになってほしくはない。引き際を見誤らないことは本当に大切だろう。

「スライムは、水が蒸発するような温度や、凍るような温度に弱いということは知っています。

たとえば、今の話に出てきた燃えているモンスターは、水に弱いということでもいいんでしょうか。

あと、電気の流れるモンスターには、金属で攻撃してはいけないとか、そういうことでもいいんですか？」

「大きくは間違っていないかな。スライムは打撃にも弱いけど、特に

弱いという意味ではそうだね。

炎は水に弱いというのは、正確には違う。温度を下げるのが大切なんだ。

他にも、空気が入らないようにできるならそれもいいかな。私たちは、風でどうにか空気を除こうとして、うまく出来なかったことがある」

スライムが打撃に弱いって、信じられない。だったらアクアは何だと言うんだ。

それに、ぼくの家にある資料にもそんなことは書いていなかった。それはさておき、空気が入らないようにする、ね。アクア水を通して空気を操ることができたら便利かもしれない。1回試してみたいな。

「電気の流れるモンスターの件は、金属ならどれでも駄目だということはないね。

ただ、普通に武器や防具にするようなものだど危険だというのは確かだけれど。

どちらにせよ、さつき挙げたモンスターは、カタリナさんなら遠距離攻撃でいいし、ユーリ君も、契約技をうまく使えばいいかな」

なるほど。今後勉強しないといけないことが増えたかな。

でも、こういう資料を使えば勉強できるだろう。ステラさんや、サーシャさんに相談してみるのもいいかな。

「もう一つ、大切なことがある。人に似た姿をしたモンスターは、なぜかは分かっているけど、とても危険なことが多い。君たちなら勝てるだろう相手もそれなりにいるけど、どんなモンスターか情報が頭に入っていないときには逃げることに。これだけは絶対に守ってくれ」

さすがにぼくでも知っていることだ。今のぼくたちがレティに勝てるとは思わないし、アクアとぼくが戦ったなら、まずぼくが負けるだろう。

「分かりました。人の姿をしたモンスターは、会話ができる事も多いと聞きますが、それも避けた方が良いですか？」

「そうなる。人に友好的なモンスターというのは、思いのほか少ない。

会話の中で罨を仕掛けてくるなんて、そう珍しい話でもない。基本的に敵だと思っておいた方が無難かな」

そうなのか。アクアはとても友好的だし、レティもこちらに対してしつかり気づかいしてくれているから、人の言葉を話すモンスターとこのはそういうものだと思ひ込んでいた。

罨か。アクアがやるとするなら、適當なことを言つて近づいてから、相手をつかまえて、自分の体の中で溺れさせるとかだろうか。

「参考までにお聞きしたいんですが、アリシアさんは、人の言葉を話すモンスターの罨を受けたことはありますか？」

「受けたことはないけど、倒した後に罨を仕掛けた跡が残つていたモンスターは何体もいるかな。たとえば、落とし穴を掘つていたりだとか、モンスターの巢に誘導しようとして来たりだとかかな」

モンスター特有の能力を使った感じではないのか。普通の悪人と敵対するような感じで警戒するといひんだらうか。

「たとえばレティさんなら、空の方へさらつていたりみたいなの、モンスターの能力を使った罨はありましたか？ 今の話だと、人間でもできそうなことだと思ひますけど」

「良い質問だね。そこが厄介なところなんだよ。モンスターの知性といひのは、種族ごとに決まつているわけではない。

かなり高位のモンスターに限つて言へば、とても知性の高い物らしいけど、そこまでのモンスターには今のところは出会つたことはいひかな。

そんなものが現れたら、もうその周辺はあきらめるしかないことがほとんどだよ」

ドラゴンの上位種とか、伝説のオメガスライムとかかな。

そんなものがあるなら、人間が何人集まつたところでどうしようもないことは當然だらう。

「モンスターといひのは、いつの間にか現れることもあるし、いつの間にかいなくなることもある。

どちらにせよ、どういふ形で現れたり消えたりするのは、全く分かつていないんだけどね。あまりにも強大なモンスターが現れると、

人間には、いなくなってくれんことを祈るしかできないんだ」

他にできる事といたら、逃げる事くらいか。1度目の前に現れでもしたら、逃げる事すら難しいだろうけど。

「話を戻そう。同じモンスターでも、自分の能力をきちんと理解しているものもいれば、ただ適当に能力を使っているものもある。人から奪った武器を使っているようなものもあるね。」

人型のモンスターの能力は厄介なものが多いから、警戒しすぎるということはないけど、だからといって、モンスターの能力だけに気を取られてはいけないということだね。

私が出会ったモンスターだと、人が使うような罫で相手をとらえた後、養分を吸いつくすような事をしているものがいたかな。アルラウネって言うんだけど」

アルラウネか。植物型のモンスターだっけ？ 恐ろしいことをするモンスターみたいだな。ぼくたちも気を付けないと。

「ここまでの話は理解してくれたかな？ 次はいよいよ、君たちにモンスターと戦ってもらおう。それなりに強いから、気を付けてね」



## 18話 実践

ついにぼくたちは冒険者として初めてモンスターと戦うことになるみたいだ。

どこまでやれるか、楽しみでもあり、不安でもある。

どんなモンスターが相手だろうか。知っているモンスターだとい  
いんだけど。

「君たち、あそこにいるモンスターが見えるかな？ 一応聞いておこ  
うか。君たちはあのモンスターを知っているかな？」

そう言つてアリシアが指を指した方向には、3体のモンスターがい  
た。

1体は岩のようなものに体を覆われたトカゲ、1体はウサギのよう  
な耳が生えた猫、1体は真っ赤な犬。

3体とも見たことも聞いたこともない。もしかして、あれと戦わな  
くてはいけないのだろうか。情報のない敵と戦うの、嫌だなあ。

「知りませんでした。アリシアさんは知っているんですか？」

「あたしも知らないわね。なんだか変なモンスターだわ」

「そうだよ。知っていると言われては、困ってしまうところだった  
よ。あのモンスターたちは、最近発見された新種でね。君たちには、  
あのモンスターたちを倒してもらいたい」

やっぱりそうなるのか。要するに、さっきまでの説明をちゃんと理  
解できているか、ぼくたちを試そうとしているんだろう。

せっかく説明を受けたばかりなのに、ちゃんと聞いていなかったと  
は思われたくないし、何より、せっかくの機会を生かせなかったとい  
うのはもったいない。

ぼくたちの目標は冒険者として大成することである以上、こんな所  
でつまづいてる訳にはいかないよね。ちよつと気合が入った。

「あのウサギの耳の生えた猫って、見た目通り耳が良かったりするん  
ですか？ できる事なら、ある程度観察してから挑みたいんですが」  
「モンスターの情報については答えるつもりはないよ。ただ、観察す  
るといのはいい考えだ。君たちは、冒険者にとって大事な才能の、

慎重さをきちんと持ち合わせているようだね」

それはそうだろう。ぼくたちはこれまで何度か命の危機にあつてきた。それで無茶し続けるようなら、何も考えていないようなものではない。

「冒険者をやっていて、突発的な戦闘が一度もないということはないから、そういう練習もしておいて損はないけどね。」

初めて見るモンスターに対して、自信満々に挑みかかった結果、予想外の強さを持っていたモンスターに負けて死ぬ。冒険者に良くある死因を、君たちは未然に防げそうだ。

前から君たちには期待していたけど、その評価を一段上げてもいいかもしれないね。それでも、今の君たちはあくまで新人だ。うぬぼれてもらっては困るよ」

当然だ。自分に自信を持つことが悪いとは言わないけど、自分を疑うことを忘れた馬鹿になるつもりはない。

ぼくだけが死ぬというなら、とりあえず突っ込んでいく冒険者のようになることもあつたかもしれない。

でも、ぼくにはカタリナがいる。アクアがいる。ぼくの軽率な行動で2人を危険にさらしてしまうかもしれない以上、絶対に打てる手は尽くしておく。雑なことをして2人に何かあつたら、死んでも死に切れない。そんな未来はごめんだ。

「分かっています。ぼくたちがアリシアさんたちと比べて未熟だということ、今日だけでもよく分かりました。さすがにうぬぼれる気にはなれませんよ」

「ま、当然よね。あたしたちはいずれ最強のパーティになる予定だけど、今最強というわけじゃないこと位、分からないほど馬鹿じゃないわ。」

あたしはそこらのモンスターにやられて馬鹿にされるような冒険者になるつもりはないのよ」

「アクア、どんなことがあってもユーリを守る」

ぼくたちが決意表明すると、アリシアたちはぼくたちから少し離れた位置に待機する。そこからぼくたちがどうするか見るつもりなの

だろう。

「じゃあ、私たちはここで見ているから、君たちの好きなように戦うといい。一応、万が一の時には手助けするけど、多少怪我をするくらいなら見過ごすつもりだから、しっかりするんだよ」

「あなたたち、がんばってね。せつかくいろいろ教えてもらったんだから、いいところを見せてほしいな」

まだ敵はこちらに気づいていない。

いや、あの猫は耳がいいかもしれないよね。もしかしたら気づいているかもしれない。一応不意打ちできないか試してみたいけど、過剰な期待は禁物だな。

まずはウサギの耳が生えた猫を見てみよう。動き方は普通の猫と同じような感じか。

なら、身軽だと考えておいた方が良いかな。何か足止めができるといいけど。耳がいい可能性があるから、カタリナがただ弓を撃つても、気づかれるかもしれない。何か別の場所で音を立てて、気を引いておくのもいいかもしれないな。

次は岩の肌、でいいのかな。とにかく岩に囲まれたトカゲだ。見た目通り固いだろうし、カタリナが弓で撃つことに期待はできない。

なら、ぼくがどうにかするべきだよ。ぱつと見動きは遅い。

でも、トカゲだよ。足が速い可能性があるから、溺れさせる以外の手は持って置かないとな。

そう考えていると、良いことに気が付いた。トカゲの口の中は普通の生き物みたいだった。なら、内側からの攻撃はどうだろう。

最後は赤い犬だ。他のモンスターに餌らしきものを渡されているな。こいつがリーダー格だと思っていいいのかな。

だとすると、一番強いはずだ。できれば初手で仕留めておきたいところだけど、どういうことができるかな。毛並みは普通な感じだし、特に防御力が高いということはないだろう。

だったら、一つ試しておきたいことができた。

作戦はある程度決まった。ぼくはアクアとカタリナに作戦の内容を説明する。

「なるほどね。あんたが中心つてわけ。ま、あたしにも見せ場があるみたいだから、許してあげる。それにしても、アクア水は本当に役に立つわね。あんたもアクアに感謝しておいたら？」

「感謝はいつもしているよ、それで、アクアはどうかかな？」

「別に失敗しても、ユーリはアクアが守る。心配しなくていい」

「じゃあ、これで行こうか。みんな、行くよ」

早速準備を開始した。事前の備えは終わったので、早速戦うことに。

まず、アクア水で浮かせておいた剣を、ゆつくりと気づかれないように座っている赤い犬の上に操作しておいた。

そのままアクア水ごと剣を下に向けて操作する。赤い犬は気づくこともなくぼくの剣に貫かれた。仕留め損ねても、ぼくたちは隠れていたから、すぐには見つからなかっただろうけど、これでまずはよし。すぐに岩のトカゲが赤い犬から逆の方に逃げようとする。

そこにはすでに金属片を混ぜたアクア水を設置しておいた。アクア水ごと金属片を岩のトカゲの体内に動かし、体の中をずたずたにしてやる。岩のトカゲはすぐに動かなくなった。

念のため、ぼくの方とカタリナの方にも同じものを用意しておいたけど、今回は役に立たなかった。まあ、備えというものは役に立たないことがほとんどなので、これでいい。

ウサギ耳の猫は耳をピンと立て、周囲を警戒している。

ぼくはもう一本持っていた剣で、左手の盾を何度も叩き、猫の気を引く。猫はこちらにゆつくりと向かってきた。

別の方向にいたカタリナが弓を射かける。猫はそれに気づかず、カタリナの放った矢に貫かれた。

念のため、アクアにはカタリナを守ってもらうことにしていたけど、順調にいったよかった。

少し息を整えていると、アリシアが話しかけてきた。アリシアは今回のぼくたちをどう評価してくれるだろう。

「すばらしかったよ、ユーリ君たち。もう少し苦戦するかもしれないと思っていただけだね」

「本当にすごかったよ。あなたたちがわたしたちに追いつくのも、本当にただの夢じゃないかもしれないね」

「そうなってくれると嬉しいね。それはさておき、今回の敵に対して、どんなことを考えて戦っていたのか、聞かせてもらえるかな」

戦う前に全部考え終えていたけど、その内容を説明すればいいだろう。1つずつそれらを解説していくことにする。

「わかりました。まずは赤い犬なんですけど、餌を他のモンスターから渡されていたので、リーダーかもしれないと思って。それで、頭から先につぶすという鉄則通り、先に仕留めようと思いました」

「うん。実際、あのモンスターは他のモンスターに指示を出しているらしき行動をしていたことがある。その判断は正しいよ。統率の取れたモンスターというのは本当に厄介だからね」

そうだろうな。人間でも、連携の取れた集団と、バラバラに動いている集団では、できる事が全然違う。モンスターに同じことができないと考えるのは、ただの怠慢だ。

「次にあの岩のくつついたトカゲなんですけど、明らかに硬そうなので、剣や弓で攻撃しても効果は薄いだろうなと。」

それで、溺れさせることも検討したんですが、捕まらなかったときに備えようと思ひまして。

その時、ちようど口の中が見えて、その中は普通だったように見えたので、内側からならいけるんじゃないかと。それで、体内から攻撃しました」

「溺れさせることに失敗しても、体の中に水を入れてしまえば内側から攻撃できるとい判断なわけだね。」

でも、それだけだと、あそこまで早く倒せるものなのかな？ いや、そもそもただの水では有効なダメージは与えられないんじゃないかな」

「それはですね、水と一緒に金属の破片も送り込んだんです。そうすれば、体の中からボロボロにできるでしょう。人相手でも有効そうですね。やろうとは思ひませんが」

「う、うん。顔に似合わず、えげつないことを考えるんだね」

アリシアは少し引いたような様子だ。

でも、仕方ないじゃないか。ぼくはそんなに強いわけでは無いから、手段を選んでいるとすぐにやっていけなくなるに違いない。

「顔は余計です。モンスターに、いや、そうでなくとも敵相手に、手を緩めるだけの理由は存在しません。」

ぼくだけならまだしも、ぼくはカタリナやアクアの命も背負っているんです。多少残酷だからと言って、やらないなんてこと、ありえませんが」

「顔については本当に申し訳ない。私も外見で侮られることは何度も経験していたから、私が言っていることではなかったよ。」

それに、君の意見は正しい。敵に対して手を緩める理由は、私たち冒険者にはないというていい」

当然だよ。カタリナとアクアを傷つけようとする相手に、手心を加えても仕方がない。それでカタリナやアクアに何かあるなんて、許せないんだから。」

「結局冒険者というのは、パーティーメンバーくらいにしか助けてもらえない人がほとんどじゃないかな。いや、そのパーティーメンバーだって、いざという時に裏切られることもある。」

だから、敵と分かっている相手に手心を加えても、得をすることなんてまずないんだ。手心を加えた相手は、後で手助けしてくれるどころか、復讐してこようとするだろうし。結局他人なんて信用できないということだね」

アリシアは結構親しみやすく感じるけど、そういう風に考えているのか。ぼくたちの事も実は信用されていなかったりするのだろうか。

まあ、ぼくだって初対面の人を全面的に信用することがおかしいこととは分かる。

それに、家族だから信用できるものでもない。疑うことがすべてとは思わないけれど、疑いを忘れるつもりはない。

「まあ、それはいい。私は今の話を聞いて、君に言いたいことがあるんだ。」

君は自分のことを大切にしていないみたいだけど、君が傷つけば、

カタリナさんやアクア、それにステラさんはきつと悲しむだろう。もちろん私たちもね。君が自分を大切に思えないというなら、君が大切に思う人のために、自分を大切にしてみるといい」

「それは……はい。わかりました。気を付けておきます」

「あんたはあたしの役に立つ義務があるんだから、勝手に死ぬなんて許さないわよ。あたしの役に立てるだけ立って、それから死ぬのよ」

「アクア、ユーリと一緒にじゃないと嫌。ユーリはアクアが守る」

アリシアの言うことは、確かに理屈ではわかる。

でも、結局他の人たちはぼくがいなくなっても代わりがいるのではないかという思いがぬぐえないんだ。

だけど、カタリナやアクアが一時的にでも悲しむのは嫌だし、少しは気を付けよう。

「話がずれてしまったね。最後に、あの猫は、最初に言っていた、耳が良いというのを考慮してああしたということでもいいんだよね？」

「はい。カタリナの弓の音を聞かれたくなかったので。うまくいってくれてよかったです」

「うん。君たちのことはよくわかった。今回私たちが説明したことをきちんと理解してくれている。これなら、また機会があったら、何か教えてみるのもいいかもしれない」

本当にアリシアの教えは分かりやすかったから、またの機会があると言うなら本当にありがたい。楽しみなことが1つ増えたかな。

まあ、口だけで次の機会はないのかもしれないけど。

「ありがとうございます。嬉しいです。機会があったら、よろしくお願ひします」

「それじゃあ、ここで依頼は終わりにして、帰ろうか。……うん？ユーリ君たち、戦闘できる構えになって。何か様子がおかしい」

アリシアに警戒するように言われたぼくたちは周囲を見回す。

しばらくして、答えは現れた。キラータイガーだ。それも1体や2体じゃない。1体だけでも苦戦した相手が、こんなに現れるなんて。

## 19話 頂点

ぼくたちの前にキラータイガーが現れた。

これはいったい何体いるんだ。1目では数えきれそうにない。1体だけでも苦戦したキラータイガーがこんなにいるなんて。ぼくたちはここまでなのか。

「仕方ないね。今回は見ているだけのつもりだったけど、こんな異常事態ならそういうわけにはいかないよね。レティ、準備はいい？」

「いつでもいいよ。あなたたちは、念のために自分の身を守っておいて。」

それで、できたらわたしたちの事を見ていてね。いい機会だから、最高の冒険者がどんなものか見せてあげる」

アリシアたちには全く緊張した様子はない。キラータイガーがこんなにいるなら、絶望してもおかしくない状況だけど。

2人はこの数のキラータイガー相手でも、ぼくたちを守りながら戦えるのだろうか。一体、どれほどの実力があればそんなことができるのだろうか。

アリシアたちはキラータイガーに向かっていく。レティはすぐさま1体に向けて飛んでいき、迎撃しようとしたキラータイガーの攻撃を、方向を変えて避け、そのまま足を首に突き立てた。

すぐにキラータイガーは倒れる。あつという間だった。

いったんレティは空中へと上がり、ナイフを投げたり、急降下したりして、隙を見せたキラータイガーを狩っていく。

ぼくたちが戦ったときは矢を弾かれたけど、上からなら、キラータイガーはナイフに対処しきれないようだ。

アリシアはもつとすごかった。

目で追うのがやつとの速度でキラータイガーを切り払い、これまた素早いナイフ投げで、キラータイガーをさらに仕留める。これほど素早ければ、キラータイガーも反応しきれないのか。

さらに、その間に風の刃で切り裂かれたであろうキラータイガーが倒れていく。レティが1体倒すのでさえ素早いのに、アリシアは、レ



テイが1体倒す間に3、4体は倒していく。

何体いるのか分からなかったキラータイガーが、アリシアとレテイのたつた2人によって、あつという間に片付けられていった。

ぼくは興奮が抑えきれなかった。これが風刃と呼ばれるアリシアさんと、その相棒のレテイさんの実力なのか。

これほどの実力ならば、冒険者の頂点の一角に数えられるのも当然だ。

いつか、ぼくたちもこれ位できるようになるんだ。たつた今日にした光景を目に焼き付けて、ぼくはそう決意した。

キラータイガーを倒し終えたアリシアさんとレテイさんが、こちらに向かつてくる。楽しそうな様子のレテイさんに話しかけられた。

「どうだった？ わたしたちがどれくらいすごいか、よくわかつたんじゃない？ あなたたちはキラータイガーを倒したことがあるし、他の人たちがこれを見るよりよほど理解できたんじゃないかな」

「すごかったです。レテイさんの動きは、地上にいる相手に対して空をとれることがどれだけ有利かよくわかりましたし、噂通りナイフ投げの正確性も確かでした。」

アリシアさんは本当に素早くて、目で追うだけでも必死でした。それだけでも素晴らしいのに、同時に複数の風刃も使っているんですから、すごいなんてものじゃありません。本当に最高の冒険者というのも納得です」

「そうね。今のわたしたちじゃ、相手にもならないことが良く分かったわ。でも、絶対に勝てないほどだとは思わないわ。今のところは負けておいてあげるけど、すぐに抜かしてやるんだから」

「ユーリたちの方がきつとすごくなる。アクアも手伝う」

うん。アリシアさんたちは確かに途轍もない強さをしているけど、ぼくたちならきつと超えることができる。カタリナとアクアの顔を見て、そう信じる事ができた。

ぼくたちの様子を見て楽しそうにしていたアリシアさんが、ぼくたちに質問を投げかけてくる。

「君たちには才能があるとは私たちも思うけど、どうやって私たちを

超えるつもりかい？ まさか口だけということはないよね」

「今すぐには答えられません。ぼく1人だとしたら、絶対に無理だとも思います。」

ただ、ぼくにはアクアがくれたアクア水があります。さっきの戦い方を見て、思いついた戦法もいくつかあります。アクア水なら、レティさんの風刃を超えられる可能性は十分にあると思っています。

それに、ぼくにはアクアがいる。カタリナがいる。ぼく1人ではできないことだつて、この2人と一緒ならできるはずです。アリシアさんやレティさんが遠くにいることは分かっていますが、絶対にぼくたちは2人を超える冒険者になります」

ぼくの答えを聞いたアリシアさんは少し考えこむ。何かおかしい回答をしただろうか。

でも、この思いは本物だから、アリシアさんたちが何を言おうと変えるつもりはない。

「……そうか。いつか君たちが私たちに並ぶような冒険者になったときには、一緒にパーティを組んで冒険しよう。」

もちろん、今の君たちに何かを教えるためにパーティを組むこともあるだろうけど、そういうのじゃなく、私たちくらいじゃないと挑めない依頼にだ。その日が来ること、本当に楽しみにしているよ」

「そうだね。あなたたちなら、もしかしたらって思っちゃう。期待しないようにとは思っていたけど、あなたたちにはつい期待しちゃう。あなたたち、頑張つてね。わたしたちが見守っているから」

いつかアリシアさんたちと一緒に。そうできるといいし、そうしたい。いつかをできるだけ近くにできるように、これから頑張ろう。「ありがとうごさいます。アリシアさんたちの期待を、きつと裏切りません。楽しみにしておいてください」

「ま、あたしたちならきつとすぐよね。そう待たせるつもりはないから、アリシアさんたちが忘れることもないでしょう」

「ユーリなら大丈夫。アクアも頑張る」

ぼくは本当にいい仲間に出会えた。カタリナとアクアは最高だ。

それに、ステラさんやアリシアさんにレティさん。サーシャさんは

まだよく分からないけど、きつといい出会いだと思う。

「うん。これからもよろしくね。私たちも、できる範囲でサポートするつもりだから、本当に強くなってるね」

「アリシアがここまで言うなんて、本当になんことなんだ。もちろんわたしも。あなたたちはきつと大成してくれる。そう信じているから」

アリシアさんたちの信頼に応えたい。ぼくたちにもここまでしてくれたこともあるし、ぼくに期待してくれる数少ない人だから。アリシアさんたちが喜んでくれることを楽しみにして、成長していこう。

「さて、冒険者組合に戻ろうか。報告しないといけないこともあるからね。ちゃんと帰るまで、気を抜かないようにね。君たちならわかっているとは思うけど、これを忘れて死ぬ冒険者は本当に多い。気を付けておいて」

「分かりました。では、戻りましょうか。カタリナ、アクア、行こう」  
そしてぼくたちは冒険者組合へ戻った。サーシャさんがぼくたちを迎え入れてくれた。

「初めての依頼、お疲れ様でございますわ。いかがでしたでしょうか？」

「ええ、ためになった依頼でした。今回の依頼だけで、随分いい経験になったと思います」

「そうですね。でしたら、今回の依頼を組んだ甲斐がありましたわ。今回の依頼は、これをもって、達成とさせていただきますわ。今後の依頼におきましては、必要な条件を満たしたか、こちらで確認させていただきますことにはしますわ。

主に討伐部位などの素材を持ち帰っていただくことですが、持ち帰りが難しいなどの場合、こちらで人を派遣いたしますので、それによつて確認が行われてから、達成した扱いになりますわ。

即日に依頼料が支払われない場合もございますので、ご注意ください。いますし。

こちら、今回の依頼達成の報酬となりますわ。ご確認くださいませ」

そういつて渡されたのはそれなりに大きい額だ。1週間位はこれだけで生活できるだろう。ほとんど教わっていただけなのに、ここまでもらえるなんて。

「不思議そうな顔をしていらっしやいますわね。今回、あなた方が倒したモンスターは、ただの素人ではとても倒せないモンスターですわ。その報酬としては、少ないくらいですわね」

サーシャさんには何も説明していないのに倒したモンスターが分かっている。

これは、かなり細かいところまで事前に計画されていたな？ そんな依頼を断ったら、それは評価が下がるだろう。最初に受けた説明に納得がいった。

「それで、アリシア様、レテイ様。ユーリ様方はいかがでしたでしょうか？」

「期待以上とっていい。今後の活躍にも大きく期待できるよ。あなたの目標にも、大きく近づくのではないかな」

「本当にすごかった。とても新人とは思えないくらい。間違いなくこの街でなら上から数えたほうが圧倒的に早いかな」

「それはすばらしいですわ。では、ユーリ様方、今後ともよろしくお願ひいたしますわね。ユーリ様方のチーム名もここで決めていきましょうか」

チーム名か。考えたこともなかったし、これから考えようかと思っ  
ていると、アリシアさんが割って入る。

「それは少し待ってほしい。一刻を争うほどではないと思うけど、一応先に報告しておきたいことがあるんだ。今回の依頼で向かった先で、キラータイガーが大量に発生していたんだ。キラータイガーはすべて倒したし、他のモンスターは現れてはいなかったけど、少し注意が必要かな」

「そうでしたの。それで、原因は分かっているしやいまして？」

「今のところは分かっている。今後の調査が必要だろう。念のため、弱い冒険者は、あそこに入れないようにした方が良くんじゃないかな」

アリシアさんの提案は当然のことだよ。万が一キラータイガーが1体現れただけでも、弱い冒険者にとっては危ない事なんだから。でも、アリシアさんはそこまで真剣に提案しているようには見えない。

「そうですわね。指示しておきますわ。それにしても、キラータイガーの大量発生ですか……」

「何か気になることでも？ 私たちも今ここにいることだし、何かできる事があるなら言ってくれてかまわないよ」

「いえ、さすがに心配のし過ぎでしょう。気にする必要はありませんわ」

サーシャさんは何か思いついたことがある様子だ。ぼくたちにも関わりのあることになるかもしれないし、念のため聞いておこう。

「サーシャさん、話していただけませんか？ ぼくたちでは解決できないかもしれませんが、ぼくたちが今後活動するうえでも、判断基準は増やしておきたいんです」

「それでしたら……ドラゴンですら霞むほどのモンスターが近くにいらると、その周辺のモンスターが活性化するといえますわ。普段は現れないような強いモンスターが現れたり、とても多くのモンスターが発生したりするとされておりますわ。

仮にそんなモンスターが発生していたとすると、アリシア様やレティ様でもかなわないでしょうし、この街どころかこの国全体の危機ですわ。

ですので、さすがに考慮するには値しないでしょうと思えますわ」  
そんなことになったら、ステラさんと一緒にぼくたちは逃げよう。ステラさんの故郷だから、ステラさんは複雑な気持ちかもしれないけど、ぼくはステラさんに死んでほしくない。

「ドラゴンですら霞むほどのモンスターか……それなら、確かに私たちであったとしてもどうしようもない。そのモンスターが人に襲い掛からないことを祈るしかないね」

「そうなりますわ。調査の手はずは整えておきますが、何も無いことを祈るしかありませんわ。

さあ、話を元に戻しましょう。ユーリ様方のチーム名はいかがいたしますか？ 必ずしも今日決める必要はありませんわ。ですが、3人いらつしやることですし、決めておくと便利ですわよ」

チーム名か。ぼくたちの目標は冒険者の頂点だ。だったら、こういうのはどうかな。

「オーバースカイ。これでどうかな、アクア、カタリナ」

「微妙じゃないかしら。でも、かぶってないのなら別に何でもいいわよ。名前が何であろうとあたしが最高であることには変わりないわ」

「ユーリが決めたならそれでいい。アクアたちはオーバースカイ」

「オーバースカイですわね。よろしいかと。では、今後はそのパーティ名で呼ばせていただきますわ。オーバースカイの皆さん、これからもよろしくお願いいたしますわ」

こうして、ぼくたちの初依頼は終わった。これから本格的に冒険者としての日々が始まる。

## 20話 スライム

「ユーリ君、カタリナさん、アクアちゃん、行ってらっしゃい」

「行ってきます。今日は今後の調整の予定ですので、早めに帰れると思います」

「分かりました。では、お気をつけて」

今日もステラさんに見送られて家を出る。

あれからしばらく。ぼくたちは何度か依頼を受けて、そのすべてを順調にこなしていた。

ステラさんの家で過ごすことにも慣れてきたし、ようやく少し落ち着いてきた気がする。

今日はサーシャさんと、今後の予定について話をする事になった。サーシャさんとも、それなりに打ち解けることができたかな。冒険者組合に着くと、すぐにサーシャさんが出迎えてくれる。

いつも出迎えてもらっているので、少し申し訳ないような気分になることもあるけど、毎回同じ人とだけ会話していればいいというのは、気が楽でありがたい。

「オーバースカイの皆様方。本日は前から決まっていた通り、今後の予定について話をさせていただきますと思いますわ。」

まずは、ビッグスライムの群れが現れたとのことですので、明日、それを討伐していただきたいと思えますわ。皆さままでしたら容易な依頼であろうと思われれますわ。いかがなさいますか？」

「ビッグスライム以外のモンスターはどうなっていますか？」

「特におかしなことになっているとは伺っておりません。マナナの森にいつもいるようなモンスターに気を付けていただければ十分かと思われれますわ」

マナナの森というのは、ぼくたちの最初の依頼でも向かったカーレルの街の西にある森だ。

道はしっかり作られているけど、そこから外れると途端に迷いやすくなる、うっそうとした木々の多い森なんだよね。いつものモンスターは弱い物ばかりだから、不意打ちにだけ気を付けていればいい。

「分かりました。では、その依頼を受けたいと思います。他には何かありますか？」

「アリシア様とレティ様ですが、最近依頼が多く入っておりますので、次回の共同依頼は、少し間を開けることとなりますわ。最低でも1週間はかかることになるかと。」

「ですので、その間に、マナナの森の間引きを行っていただきたいと思っておりますわ。」

ビッグスライムの依頼のついででも構いませんが、ビッグスライムはかなりの数いるようですので、わたくし個人としては、ビッグスライムを倒すときには、それに専念することをお勧めいたしますわ。急ぎというわけではありませんので、慎重に進めていただければよろしいかと」

「間引きですか。最近は、マナナの森で冒険者があまり活動していないんですか？」

「そうなりますわね。前回、別の場所とはいえ、キラータイガーが大量発生したということ、及び腰になっている冒険者が多いのですわ。」

「それで資金が尽きて、盗賊まがいの活動をするようになった者もおりますわ。慎重さは冒険者にある程度必要とはいえ、それで犯罪者になられては世話がありませんわね」

「盗賊まがいの冒険者か。この街にいる冒険者に、ぼくたちに勝てる人はほとんどいないというのがサーシャさんの弁だけど、できれば人とは戦いたくないな。」

「ぼくたちに殺し殺される覚悟が十分にあるとは言い切れないうか。その冒険者たちの討伐が、ぼくたちに回ってくることはあるでしょう。人が相手になるなら、モンスター相手と同じようにはいかないでしようし、できれば事前に知っておきたいのですが」

「その心配はありませんわ。相手との実力差もわからないような手合いが、あなた方に襲い掛かる可能性は否定しきれませんが、我々といったにしても、オーバースカイの皆様には、できるだけ身綺麗でいていただきたいと思っておりますわ。」

あなた方のように乱暴でない冒険者というのは、それだけで貴重で



すのに、あなた方は実力も兼ねそろえていらつしやいますわ」

サーシャさんは本当にぼくたちの事をよく褒めてくれる。嬉しいけど、適当に持ち上げられているだけじゃないかと少しだけ不安になる。

「そんな素晴らしい冒険者ですもの。こちらとしては、ある程度売り出していききたいのですわ。」

その時に、モンスター相手が多いと、冒険者でないような方々に好感を持たれやすいのですわ。結局冒険者のことを、そこらのごろつきと大差ないと思っている方も多くいらつしやいますので」

「分かりました。一応他者に対しても、警戒を怠らないようにしたいとは思いますが、わざわざ自分から人と戦おうとは思わないことにします」

「それがよろしいかと。万が一何かトラブルがありましたら、こちらに相談していただければ、こちらで対応を行いますわ。」

あなた方にはそういう心配で余計な手間を使ってほしくありませんもの。せつかくの権力です。将来有望な方に投資するというのも悪くありませんわ」

サーシャさんにそう言ってもらえると、本当に相談したくなる。

サーシャさんが話しやすい雰囲気ということと、ぼくがトラブルに慣れていないことがあるから、1回だけ相談してみて、その時のサーシャさんの雰囲気次第で考えることにしよう。

「ありがとうございます。それで、その先の予定はどうしますか？」

「現状、マナナの森の間引きが終われば、すぐにあなた方に受けていただきたい依頼はありませんわ。一般依頼を受けるもよし、休養にあてるのもよしですわね。」

まあ、あなた方の金遣いが荒いという話は聞いておりませんので、休養したとしてもすぐに問題が出ることはないかと思えますわ。あなた方は冒険者になられたばかりということもありますし、目に見えないところで疲れがたまっているかもしれませんわ。

最終的には自己判断ということにはなりますが、判断基準がはつきりするほど経験がないという現状でしようし、一度休養を取って、ど

れほど疲れていたか確認していただくのもよろしいかと思えますわ」  
休養か。こここのところ毎日依頼を受けているし、たまには休むのもいいかもしれないな。

「カタリナ、アクア、どう思う？　　ぼくは休んでみてもいいと思っっているけど」

「そうね。せっかくの機会だし、ゆつくり羽を伸ばすのもいいかもしれないわね。ま、いいんじゃないかしら」

「アクアはどっちでもいい。ユーリと一緒にいるだけ」

「なら、一回休んでみようか。サーシャさん、そういうことですので」  
　　ぼくがそう言うと、サーシャさんは笑顔でうなずく。サーシャさんの笑顔は本当に可愛らしいよね。

それはさておき、すっかり休むことでこれからの依頼でちゃんと活躍できるようにしよう。

「承りましたわ。せっかくですので、1つ提案がありますわ。一度わたくしと、食事に行きませんか？」

「別にかまいませんけど、ぼくたちはマナーには詳しくないので、そこに配慮していただけるとありがたいんですが」

「ええ。新米冒険者にマナーを要求するつもりはありませんわ。受けていただけるのでしたら、エルフィール家へ招待いたします。わたくし以外の人間は部屋に入れないつもりですので、マナーが心もとなくとも、気にする者はおりませんわ」

　　エルフィール家って貴族らしいし、そういう人相手の対応なんてどうすればいいか分かったものじゃないから、サーシャさんの言葉はありがたい。サーシャさんが相手だと、安心して話が出るんだよね。  
「でしたら、招待を受けたいと思います。アクア、カタリナ、いいよね？」

「そうね。せっかく誘ってもらってるんだから、受けておいてもいいんじゃない？　　まさか誘っておいて文句ばかり言うわけでもないでしょうし」

「ユーリが行くなら行く。ユーリが決めていい」

「わかった。では、サーシャさん。よろしく願います」

サーシャさんはぼくたちの言葉を受けて笑みを深める。本当に楽しみにしてくれているように見えるおかげで、ぼくはサーシャさんの提案を受けたことを失敗とは思わなかった。

「楽しみにしておいてくださいまし。良い時間にいたしますわ。では、10日後、よろしくお願いいたしますわ。それから後のことは、またの機会にと致しましょう」

「分かりました。では、サーシャさん。また」

そういつて冒険者組合から出ようとする、突然誰かに話しかけられた。

「おいおい。スライム使いのザコが、アリシアとレティに教えを受けたくらいで、調子に乗るんじゃないぞ。お前なんざ、アリシアとレティの助けがなきゃ、何もできないだろうがよ」

なんだこいつ。よく見ると、そばにビッグスライムを連れている。なんだろう。高度な自虐とかなんだろうか。

「だんまりか？ どうせ、アリシアとレティが倒した魔物を、分けてもらってるだけなんだろう？ いいねえ。お強い冒険者様に目をつけてもらったなら、貴族の支援も得られるってか。やってられねえな」

つまらない難癖だ、適当に無視しておいてもいいかな。

いや、こういう時にサーシャさんに相談した方が良いのだろうか。そう思っていると、別のところから声がかかる。

「それは聞き捨てならないね。私たちがそんなつまらないことをするって思われているとはね」

「ア、アリシア!?! どうしてここに!?!」

「依頼の帰りだね。要するに、君はユーリ君たちが気に食わないんだ?」

なら、こうしようか。ユーリ君と、君が戦うといい。私が場を用意してあげるよ。ユーリ君は一人で、君はそのモンスターとも一緒に戦うといい。サーシャさん、いいかい?」

「はあ、仕方ありませんわね。では、闘技場の準備をしておきますので、そこに集まってくださいまし」

思わずアリシアさんの方を見ると、ウインクをしたあと、首を掻き

切る動作をする。たぶん思い切りやってもいいということだよね。

それから闘技場の上で、ぼくとさつききの男は対峙する。めんどくさいし、さつきと終わらせたいな。

「いいのか？ こっちにはビッグスライムもいるんだぜ。たった1人なんだ。今から逃げ出してもかまわないんだぜ？ ここじゃあ、アリアは助けに来ちゃくれねえよ。そういうルールだからな」

「はいはい。そう言うのはいいですから、さつきと始めましょうよ。ぼくはさつきと帰りたいんです」

「後悔するなよ。じゃあ、いくぜー！」

そう言つてビッグスライムと共に襲い掛かってくる。

男の顔にアクア水を出現させると、男の動きが鈍くなる。その隙に、ビッグスライムに剣の面をたたきつける。

ビッグスライムの体内に剣が取り込まれたときのために、アクア水を剣にまとわせておいて、取り込まれたときにビッグスライムの行動を妨害するつもりだったが、ビッグスライムは何の抵抗もせず、そのまま吹き飛んでいく。ビッグスライムは震えたまま動かなくなった。

あのビッグスライム、進化しているはずだよな？ アクアがただのスライムだったときでも、物理攻撃に対しては、そのまますり抜けさせるか、弾き飛ばすか選んで行動するくらいのことではきたんだけど。ビッグスライムってこんなものなのか？ それとも、このビッグスライムが特別弱いのか？

それから残り1人になったので、適当に距離を取りつつ、アクア水で一方的に攻撃していった。すると、相手の男がわめき始める。

「卑怯者！ 男なら、正々堂々近づいて来いよ！ いつもアリアとレティに守られてるから、びびってるんだろ!? スライムなんかを使つてるような奴にはお似合いだけどな！」

こいつ、アクアのことをスライムなんかと言いやがった。適当に流すつもりだったけど、少しくらい痛めつけてやるか。そう思っていると、周囲からも似たようなヤジが飛び始める。

「仕方ないな。安い挑発ですけど、付き合つてあげますよ。どうせその動きじゃ、ぼくの敵ではないでしょう」

口ではそう言ったが、いいタイミングでアクア水を使ってやるつもりでいた。こんなやつ相手に、約束を守ってやる義理なんてない。それからしばらく接近戦をしていたが、ぼくの中には呆れが浮かんできた。エンブラの闘技大会の1回戦で戦ったやつの方がよほど強いくらいだ。マカロフって言ったっけ。

「隙だらけなんだよ!」

そう言いながら、男はポケットに手を突っ込み、こちらに何かしようとする。動き出したところを蹴り飛ばすと、手から砂がこぼれた。目潰しするつもりだったのか。卑怯者呼ばわりしてくる割に、小ずるいな。

そこからは特に何事もなく、ぼくは何度も男を打ち据えた。男は降参だと叫びだした。アリシアの方を見ると、男が駆け寄ろうとしてくる。ぼくはアクア水で相手の口をふさいだ。アリシアは男を止めに入る。男は拘束されたので、アクア水を解除すると、男は半狂乱になって叫びだす。

「何なんだよ……お前、何なんだよ! いくらハイスライムだといつても、スライム使いがそこまで強くなれるわけないだろ! ふぎけるなよ……」

そう言つて男は組合の人間に連れられて行つた。自分から挑みかかってきておいて、負けたらこれか。ぼくはまるで本気を出していないのに。本当につまらないやつだった。

それから、サーシャさんと今回の件について話していた。

「あの男には、それなりのペナルティが与えられることになるでしょう。あなた方は、何も心配する必要はありませんわ。あなた方にこれ以上近づけないように、こちらでそれなりの対応を致しますわ」

「ありがとうございます。結局、あいつは何だったんですかね」

「つまらない嫉妬でしょう。ユーリ様が気にする必要のある相手ではありませんわ。それでは、また」

サーシャさんは笑顔で手を振ってくれる。それからぼくたちは家に帰った。いつも通りステラ先生が迎え入れてくれた。明日からまた依頼だ。

## 21話 襲撃

ぼくたちは、前にサーシャさんから受けた依頼をマナナの森でこなしていた。

ビッグスライムの群れが現れたという件は、ぼくたちが思っていた以上にたくさんのビッグスライムに襲われることになったが、その割に特に苦戦はしなかった。

前に絡んできたあの妙な男のビッグスライムが弱いのかと思っていたが、ビッグスライムというのは本当に弱いモンスターのようだった。スライムでもっと強いと思っていたんだけど、案外そうでもない。

ぼくがアクアと契約できたのは本当に幸運だったんだな。改めてそう思った。

アクアといると楽しいし、落ち着くし、冒険者として活動しているもアクアはとても活躍してくれている。アクアが足止めをしてくれたモンスターは、絶対にぼくたちの方へ抜けてこないし、防御力が低いモンスターなら、アクアだけでも倒してくれる。

それに、アクア水は本当に便利だ。戦いにも、生活においても、ものすごく役に立ってくれている。アクアのことはもともと大好きだけど、もっと感謝するべきだし、もっと好きになるべきだ。そう感じた。

それから、マナナの森のモンスターの間引きを行っていた。突然発生したようなモンスターを除き、基本的にいつも発生しているようなモンスターは狩りつくしてしまっても、いつの間にか増えている。

だから、依頼内容にあるモンスターは何も考えずに倒すことができる。他のモンスターは特に見つからなかったもので、初心者でも倒せるようなモンスターが多く、間引くこと自体はかなり楽だった。

しばらく間引いていると、人らしき気配が近寄ってくる。

こんなところにぼくたちに用がある人がいるとは思えなかったの  
で警戒していると、その人たちは剣を抜いていた。

いつでも攻撃できるよう、態勢を整えていると、その2人組に話し

かけられる。

「よう。最近随分儲けてるらしいじゃねえか。お前たちのような若造に、そんな大金、もったいねえ。俺たちがもらって、もっとうまく使ってやるぜ、なあ、兄弟？」

「そうだな。それに、お前の横にいる女、随分美人じゃねえか。お前も、俺たちについてきたほうが、もっとうまい目を見せてやるぜ。どうだ？」

「あなたたちみたいな品性のかけらもなさそうな男、お断りよ。それに、あなたたちなんて、ただのザコにしか見えないわよ。せいぜい格下相手に粹がつているのがお似合いよ」

カタリナがつまらなさそうにそう返すと、男たちは明らかに怒ったという顔になる。この程度でそこまで顔に出すのか。我慢が弱い人たちだな。

「随分言ってくれるじゃねえか。おとなしくついてくるなら、優しくしてやつても良かったが、気が変わった。使いつぶした後、売り飛ばしてやるぜ。なあ、兄弟？」

「そうだな。そのハイスライムも、おかしな趣味をした連中なら、見世物くらいにはしてくるだろ。好みじゃねえが、ついでに貰っておいてやるでしょうぜ、兄弟」

こいつら、カタリナやアクアに手出しするつもりらしい。なら、最悪殺してしまってもいいか。

手加減する気が失せたぼくは、アクア水を2人の顔に出現させる。少し苦しそうにしていたが、それなりにすぐに振り切ってきた。まあ、ここで終わるなら憂さ晴らしにもならないか。

「お前の手の内は、あのビッグスライム使いのおかげで知ってたよ。お前じゃ俺たちの相手にはならねえ。さっさと諦めたほうが、すぐに楽になれるぜ」

そう言って2人は剣を振ってくる。片方は右利きで、片方は左利きのようだ。剣の振り方からして、前の闘技大会のアーノルドやスタンよりいくらか強いくらいに見える。2対1でも、ミーナに勝てるとは思えないくらいだ。

でも、カタリナに殺しをさせるわけにもいかないし、カタリナは当てにしない方が良いよね。手加減できる矢も持っていないことだし。そう考えたぼくは、1人の剣を受けながら、もう1人の剣をアクア水でずらした。今のうちに！」

「アクア、片方の足止めお願い！」  
「わかった。すぐに片付ける」

アクアはすぐに左利きの方の足止めをしてくれる。何度もアクアに剣をたたきつけているが、アクアはまるで意に介していない。別の方向に向かおうとするけど、それはアクアがすべて阻止してくれている。

その間にぼくは右利きの方の相手をしていた。

アクア水を使わず、剣で相手していたが、特に苦戦することはなかった。

そのうち、相手が剣だけに意識を向けるようになったので、相手が剣を振るタイミングで、後ろからアクア水をぶつけ、態勢を崩させた。

そこに思い切り剣の面をたたきつける。一応殺さないようにと考えてのことだったが、相手は気絶したようだ。

その後のもう1人はアクアに気を取られている間に、後ろから攻撃するだけで済んだ。随分自信満々だったみたいだけど、この程度か。

戦いが終わったので、相手をどうするか考えていたが、人を拘束できる道具がない。

そこで、相手が意識を取り戻しても抵抗が難しくなるように、相手の両腕をアクア水で包み、物体を移動させる要領で2方向に力をかけ、両腕を折っておいた。

2人ともその痛みで目が覚めたようで、叫び声をあげている。

「何てことしやがんだ。お前ら、覚えておけよ」

「あなたたちと問答する気はありません。首元、何があるか分かりますか？」

ぼくはアクア水に刃物を入れ、相手の首筋に添えていた。首元を見た2人は諦めたように話し出す。

「わかったわかった！ 抵抗はしねえから、これをどけてくれよ。お



前らだって、人殺しになりたいわけじゃないだろう」

「ここで助けてくれたら、その恩は忘れねえよ。だから、さっさと解放してくれ」

何を言っているんだろう、こいつらは。ぼくがカタリナやアクアに手を出そうとした人に手心を加えようと思うものか。

殺していいことだって、こいつらのことを考えたわけではなく、サーシャさんのためでしかないのに。

「あなたたちを信用するだけでも？　ほら、ぼくたちの前を歩いていてください。妙なことをしたら、分かりますよね？」

そう言うと2人はうなだれて歩き始める。

それからぼくたちは冒険者組合へ向かっていた。すると、周りの人たちが何か話し始めた。

「おい、あいつら、ブレンダン兄弟じゃねえか。やられたのか？」

「あんな手の付けられないやつを倒せるってのかよ？　だれだ、あいつらは」

「オーバースカイだよ、ほら、アリシアたちの金魚の糞つてやつだ」

「どこがアリシアたちの金魚の糞だよ。それがブレンダン兄弟を倒せるってのか？」

「どうせいつものようにケンカを売りに行ったんだろうぜ。それであなつたわけか」

「おいおい、なんてやつらだ。どこの馬鹿だよ、あいつらはいいカモになりそうだとか言ってたのは」

話を聞く感じだと、こいつらはある程度名の知れたやつららしい。そこまで強いようには思えなかったけど、こんなやつらにも頭の上がない程度の冒険者もいるのか。

そのまま進んでいると、人を連れたサーシャさんがこちらにやってくる。

「あら、オーバースカイの皆様方。一体何がございましたの？」

「こいつらに急に襲われて。返り討ちにしたところですよ」

「そうでしたか。でしたら、そのお2方はこちらで処罰しておきますわ。それにしても、オーバースカイの皆様は襲い掛かるなんて、身の

程知らずですわね」

「ぼくが状況を報告すると、サーシャさんが、周りの人たちに男たちをとらえるように指示する。それを見た男たちが、急にわめきだす。「何を言ってるやがる。俺たちは被害者なんだぜ。見てみろよ、この両腕を。こいつに折られちまったんだ。それに、俺の首元には刃物が添えられているんだぜ。どちらが悪者かなんてすぐにわかるだろ。なあ、兄弟?」

「そうだけ。こいつらは俺たちから手柄を奪おうとして、急に襲い掛かってきやがったんだ。モンスターを退治した後でなきや、こんな奴らにやられはしなかつただろうぜ」

「つまらない言い訳をする奴らだ。ぼくたちが依頼を受けていたことくらい、サーシャさんなら知っている。それに、依頼で集めたものもあるのだ。どちらが正しいかなど、すぐにわかるだろう。」

「見苦しいですわね。あなた方の普段の素行と、オーバースカイの皆様普段の素行を見比べて、あなた方をかばうものがいれば見てみたいものですわ」

「あいつはこの前もビッグスライム使いを痛めつけていたじゃねえか。それが素行がいいやつ態度だったのかよ。なあ、兄弟?」

「そうだけ、兄弟。それに、証拠はあるってのかよ。こいつらが俺たちに襲い掛かったわけじゃねえってどうして言えるんだ?」

「ため息を吐いたサーシャさんは、珍しく怒ったらしい様子で話し出す。」

「証拠、ですわね。調べたらすぐに出てくるでしょうが、それは些細な問題ですわ。あなた方は知らないようですので、ここで言うっておきますわ。」

「この街において、エルフィール家が絶対のルール。この街で生まれたものならば、幼子でも知っていることですわ。あなた方の主張が本当かどうかになど、興味ありませんわ。」

「大事なことは、私が目をかけているオーバースカイの皆様方に、あなた方は敵対した。つまり、エルフィール家にケンカを売ったということですよわね」

サーシャさんは虫けらでも見るような目でブレンダン兄弟を見ながら、ため息を吐く。それからさらに彼女は話を続ける。

「あなた方は本当に愚かなことをしましたわ。いくら普段私が冒険者の皆様に寄り添っているからと言って、エルフィール家の面子をつぶすような真似をされて、おとなしくしているとお思いでしたか？

そうだというのなら、エルフィール家も随分舐められたものでございますわね。あなた方の末路は決まっていますが、何か言いたいことがございましたら、最後に聞いて差し上げますわ」

「お前……この俺たちにここまでして……ただで済むと……」

「これ以上は時間の無駄ですわね。さっさと連れて行きなさい」

そして男たちは連れていかれた。殴る蹴るを受けながらだったので、汚い悲鳴を上げていたが、ぼくの留飲は下がった。

サーシャさんはその様子を無表情で見送っていたが、直後に笑顔に変わって話しかけられる。

「先ほどはああ言いましたが、あなた方のようなきちんとした冒険者の方に、強権を振るうつもりはエルフィール家にはございませんわ。所詮さっきの男たちはつまらないゴロツキでしたもの。安心して、あなた方は普段通りにわたくしに接してくださいませ。

そうですね。今度の食事会、楽しみにしておりますわ。あなた方となら楽しい時間を過ごせそうですし、お楽しみにしていってくださいまし。美味しい物をご用意しておりますわ」

それからしばらくサーシャさんと雑談した後、ぼくたちは家に帰った。

ビッグスライム使いといい、ブレンダン兄弟といい、面倒でしかなかった。これからはこんな事が無いといいけど。

## 22話 食事会

ぼくたちはサーシャさんと約束していた食事会の待ち合わせ場所へと向かっていた。そのなかで、今回の食事会の事が話題になる。

「サーシャさん、美味しい物を用意するとは言ってたけど、どんなものを出してくれるつもりなんでしょうね？　まずかったら、文句を言っつてやろうかしら」

「さすがにそれは……まあ、ぼくたちの知らないものかもしれないし、何とも言えないよね」

「美味しかったら、アクアの方も食べていい」

アクアはそう言うけど、ぼくは反対だ。

アクアには食事に対するこだわりなんてなさそうだけど、だからといって食べる必要がないわけでは無いのだろうし、できればしっかり食べることを楽しんでほしい。

「いや、アクアの分はアクアが食べて。アクアにも美味しいものを食べてほしいし、それにそういうことをするのはさすがに失礼じゃないかな」

「わかった。カタリナ、ユーリと手でもつないでみる？」

「何でそんなことをしなくちゃいけないのよ。あたしはそんなことごめんよ。サーシャさんに見られてもいいって言うのかしら？」

カタリナなら当然拒否するよね。アクアは何でそんな提案をしたんだろう。

それからも雑談をしながら待ち合わせ場所に向かうと、サーシャさんはすでに待っていた。

こちらを見つけたサーシャさんは、笑顔で話しかけてくる。

「ようこそいらっしやいました。さ、こちらの準備はすでにできておりますわ。早速エルフィール家に向かいましょう」

「すみません、お待たせしてしまっただけです。今日はよろしくお願ひします」

「いえ、お気になさらず。今でも予定の時間よりは前ですもの。十分でございますわ。では、着いてきてくださいまし」

サーシャさんはぼくたちを先導する。それなりに時間がかかるといふことなので、ぼくは気になったことを訊いてみる。

「サーシャさん、前の一件で、サーシャさんがぼくたちに目をかけてくださっているという話がありましたよね。」

ですが、エルフィール家の名前を出すということは、ぼくたちが変なことをすると、エルフィール家にも迷惑をかけてしまいかねないですよね。何か気を付けておくべきことってありますか？」

「ふふっ。冒険者の方々にかかわらず、わたくしたちの庇護を得られたと思つたものが、増長して余計なことをするということも、これまでは幾つかあつたようですわ。」

そういう方々は、自らが得られるメリットばかりに目を向けていらつしやるばかりでしたので、ユーリ様のようにわたくしたちの都合も考えてくださるといふのは、ユーリ様方を信頼してもいいと少しばかり思える材料になりますわね」

少しばかりか。サーシャさんにしつかり信頼してもらえるように精進しよう。

これまでサーシャさんと接してきて、ぼくはサーシャさんに信頼してもらいたいと思うようになっていた。サーシャさんにはこれまで色々と助けられているし、サーシャさんとの関係を大事にしたい。

「ただ、わたくしは大いに期待しておりますが、今のオーバースカイの皆様はあくまで駆け出し。エルフィール家の名前を使って横紙破りをなさろうとしないならば、現状において特に注意するべきところはありませんわ。」

ただ、オーバースカイの皆様が大きく躍進された際、エルフィール家の助けあつてのことだと言つていただければ、こちらにとつては大きな助けとなりますわ。暫くは無いでしようけど、そういうことを意識してくださると、こちらは嬉しいですわね」

なるほど。まあ、ぼくたちはあくまでただの一冒険者だ。わざわざエルフィール家の名前を出さなければ、そこまでエルフィール家に注目もいかないのかもしれない。

話の内容を聞いている感じだと、ぼくたちが一流の冒険者になるこ

とを期待されていることは確かなようだ。

それはぼくたちの目標とも一致するし、それでサーシャさんの役に立てるのなら、ぼくとしてはありがたい限りだ。

「ぼくたちはできるだけ早くアリシアさんたちを超えることが目標なので、そうなれるように頑張ります」

「そうね。あの人たちが今のあたしたちより強いことは確かだけど、絶対に越えられない差じゃないわ。さっさと超えてやりましょう、ユーリ」

「そうなっていたら、わたくしとしても本当に嬉しいですわね。期待して待っておりますわ」

それからしばらくして、エルフィール家の屋敷に到着した。

かなり広い屋敷だし、貴族の家なんだから、兵士が見えてもおおしくないと思っただけど、それは見当たらない。ぼくたちの思い込みなのだろうか。

「サーシャさん、この家って警備とかされていないんですか？ 見えるところにそれらしい人がいないんですけど」

「ふふっ、エルフィール家の調査でした？ 過度な詮索は身を滅ぼしますわよ。」

なんて、冗談ですわ。全く知られていないことではありませんし、説明しておいてもいいかもしれませんわね。こちらをご覧くださいまし」

そういつてサーシャさんは胸元を広げる。

急なことに驚いていると、胸のあたりに樹のような模様が見えた。契約の証だ。

「エルフィール家では、皆、とあるモンスターと契約しているのですわ。そのモンスターが家の中への侵入を許さないのですわ。」

それこそ軍隊ほどの規模でなくては、家の内部に入ることすらできないでしょう。家自体も頑丈ですし、扉はこの契約の証を通してしか開けられませんので」

モンスターと人との契約は1対1だと聞いていたけど、どうやってこの家の人たちは契約しているんだろう。まさか殺しているわけで

はないでしょ。

「モンスターとの契約ってどうしているんですか？ 契約解除はどちらかの死が条件と聞いていますが、それ以外にもあるんですか？」  
「実は、わたくしの家のモンスターは特殊な生態をしております、一家のものが増えるたびに、モンスターも増えているのですわ。接ぎ木のようなイメージがわかりやすいかと」

なるほど。モンスターの数が増えているのか。それなら納得できる。

それにしても、エルフィール家はよくそんなモンスターと契約できたな。

「その話はもういい？ サーシャさん、いくらなんでも破廉恥じゃないかしら？ 他の人はともかく、ユーリは男なのよ？」

「口で説明しても納得は難しいかと思ひまして。それに、ユーリ様でしたらかまいませんわ。誰にでもこんなことをするわけではありませんわよ」

これも期待の証なんだろうか。なんだか少し怖くなってきた。

でも、サーシャさんに頼らないと、冒険者活動で今より苦勞することは間違いないだろうし、どうしよう。

いや、サーシャさんがぼくたちを悪いようにしたいわけでは無いだろう。多少利用されるくらいなら、笑って許せると思う。

「それはさておき、今の話は全く知られているわけでは無いと言いましたが、皆が知っているわけでもありません。できれば秘密にしておいてくださいまし。ユーリ様方を信用してお話しましたのよ？」

「気を付けたいと思います。サーシャさんに迷惑をかけたいわけでは無いので、話すつもりはありません」

「そうしてくださいまし。では、こちらへどうぞ」

そう言つてサーシャさんは屋敷の扉を開ける。屋敷の中は豪華絢爛といった様子だ。

ただ、お金持ちのイメージでよくある、そこらじゅうが金だったり宝石だったりというわけでは無かった。

「なんというか、すごいですね。それ以外の言葉が見つかりません」

「ふふつ。何度も訪れていたただければ、それ以外の言葉も浮かぶようになるでしょうか。そういう機会も用意したいものですわね」

また誘ってくれるつもりのようなのだ。中々緊張するけど、そのうち慣れるのだろうか。

まあ、サーシャさんとはもつと親しくなりたい。お世話になっているし、喜びそうなこととかを知れるといいよね。

そして食事会の部屋に案内された。言っていた通り、サーシャさんとぼくたちの分だけの食事が用意されていた。

「さて、こちらに座ってくださいませ。皆様に気に入っていただけるとよろしいのですが」

そう言ってサーシャさんは席に座る。その様子を見て、ぼくたちも席に着いた。

食事の内容は、ぼくの好きな魚料理や、カタリナの好きな果物のパイなどが用意されていた。アクアの好物はさすがにわからなかったみたいだ。何でも同じような様子で食べているから、ぼくもはつきり分かっているとは言い難い。

それにしても、ぼくたちの好物などどうやって調べたのだろう。貴族はそういうこともできるのだろうか。少なくともぼくはサーシャさんには何も教えていない。

「さ、いただきますしよう。たんとお召し上がりになってくださいな」

サーシャさんが食べ始めるのを待って、ぼくたちも食べ始める。

うん。これはかなり美味しい。カタリナも気に入った様子で、楽しそうに食べている。しばらく食べ進めると、サーシャさんが話し出した。

「食事中にする話ではないかもしれませんが、皆様に知らせておいた方が良いでしょうので、一応話させていただきますわ。」

この前ユーリさんに絡んだビッグスライム使いですが、行方不明となっています。痕跡を見る限りですと、危険な地域に行つて、自滅したのだと思われますわ。あなた方が活躍しているから、自分でもできるとでも思つたのでしょうか、愚かなことですよわね」

そうなんだ。自分が弱いとは自覚していただろうに。なぜわざわざ



ざ危険なことをしたのだろう。

まあどうでもいいか。ぼくたちにこれ以上絡んでこないなら。

「もう一つありまして。あなた方が捕えた、ブレンダン兄弟という男たちですが、捕らえておいたのですが、なぜかお互いが悪いのだと言い争いになり、そのままお互いに死ぬまで殴り合っていたようです。一応背後に何かいないか調べておきたかったのですが。せつかく捕らえていただいたのに、申し訳ありませんわ」

あの2人はいかにも乱暴者といった感じだったけど、お互いに死ぬまで殴り合うってどういう事なんだろう。そもそも、片方だけ死ぬとかじゃないんだ。一体どういう状況だったんだろう。

「気にしないでください。ぼくたちに襲い掛かってこないなら、ぼくたちとしては問題ないと考えています。サーシャさんにはお世話になっていきますから、迷惑だとは思っていません」

「それは感謝いたしますわ。さ、食事の続きを楽しんでくださいまし。皆様の好物を用意したのですから、楽しんでいただきたいと思いますわ」

それから食事を続けると、サーシャさんはぼくたちが食べる姿をニコニコして見ていた。そういう顔をしてくれると食べていてもいいんだと思えるけど、恥ずかしい気もするな。

「うん。ただ好物だからってだけじゃない。本当に美味しいわ。これならちゃんと食べてあげられるわ」

「本当に美味しいです。こんな機会を用意してくれて、ありがとうございます  
ございます」

「ユーリ、美味しい？ なら良かった」

それからしばらく食事を楽しんで、ぼくたちはすべて食べきってしまった。本当に美味しかったな。

「皆様方、楽しんでいただけただようですわね。この場を準備した甲斐がありましたわ。ふふっ、今度はわたくしの好物も紹介したいですわね」

「それは楽しみです。今日はありがとうございました」

「皆様方、お帰りの前に聞いていただきたいことがありますわ。最近、行方不明者が増えておりますわ。犠牲者はどうしようもない方々ば

かりですから、多くの方は気にされていません。

ですが、原因が分かかっていないこともあるので、皆様にも気を付けていただきたいのですわ。余裕がありましたら、調査もしていただけると嬉しく思いますわ。

ただ、はつきりした情報がないと報酬を支払うことができませんので、身の安全を第一にお願いいたしますわ。現状では、あなた方の安全に替えるほどの事態ではございませんわ」

サーシャさんがそう言うなら、積極的な調査というより、何かきつかけがあつたらしつかり調べるくらいで良いかな。改めて依頼があつたらちゃんと積極的に行動しよう。

「わかりました。気にかけておきますね。では、また」「さ、門までお見送りいたしますわ。こちらへどうぞ」

そして門まで移動する。その間も雑談をしていた。

サーシャさんは話がうまくて、つついいろいろと話してしまうし、サーシャさんの言う事を聞いていることも楽しい。本当にいい時間だ。

「皆様方、今日はありがとうございましたわ。これからもよろしくお願ひいたしますわ」

「はい、こちらこそ。今日は楽しかったです。ありがとうございますました」

「ええ。本当に楽しかったわ。ありがとうございます」

「サーシャ、またね」

そしてぼくたちはステラさんの待つ家へ戻った。今日は楽しかったな。サーシャさんとも、もつと仲良くなれた気がする。

## 23話 休日

ぼくたちは今日、ステラさんの家で休んでいた。案外疲れがたまっていたらしく、のんびりするとだいぶ気分が楽になった。そうしていると、ステラさんに話しかけられる。

「ユーリ君、だいぶ疲れているようですね。冒険者としての活動は、大変でしたか？」

「ぼくとしては、今のところは楽なものだと思っていたので、休んでみて、案外疲れていたんだなと思いました」

「そうですか。それでしたら、ユーリ君。提案があるのですが」

このタイミングで提案されることは、疲れが取れる何かなんだろうけど、想像がつかない。ステラさんの提案はどんな内容だろう。

「一体なんでしょう？ ステラさんの提案なら、できるだけ受けてみたいとは思いますが」

「そう言っていただけだと嬉しいです。それで、提案なんですけど、私のマッサージを受けてみませんか」

「マッサージ？ ステラさん、そういう事もできたんですか？」

「はい。これはユーリ君には話しましたっけ。私は以前、モンスターと契約したいと思っていました」

アリシアさんにそんな話を聞いたな。確か、ステラさんに貰った指輪を、自分で使ってみたかったんだっけ。

「それでですね。契約できるようなモンスターは、人型であることがほとんどです。

だから、仲を深めるための手段の一つとして考えていたんです。結局、モンスターをタイムすることはなかったんで、今まで使うことはありませんでした。

ですが、せっかくユーリ君たちにあの指輪を贈ったんですから、ユーリ君に頑張ってもらうために、こういう形のサポートをしてみてもいいかなと思ったんです」

なるほど。ステラさんは本当にあの指輪に思い入れがあるみたいだ。

そんな物を贈ってもらえて嬉しいけれど、ちゃんと期待にこたえられるか不安にもなる。

ステラ先生には失望されたくない。ぼくに今まで優しくしてもらえたし、いろいろアドバイスもしてもらった。本当に尊敬できる先生なんだ。

いや、不安になるより、どうやったら期待にこたえられるか考えよう。

今まで通り冒険者活動を進めるとして、指輪を使いこなすためにはどうしたらいいだろう。アクア水を使う時に楽になった感じはあつたし、アクア水を使い続けるのもいいと思う。それ以外に何かあるかな。

ステラ先生は、契約モンスターとの仲が大事だとよく言っている。

だったら、アクアとの仲を深めてみるのもいいかもしれない。これまで通り遊ぶだけじゃだめだね。何か考えてみよう。

「それで、ユーリ君。どうしますか？ 私の腕が不安なら、受けなくてもかまいませんよ」

その言い方はずるい。そんなことを言われたら、受けるしかなかったんじゃないか。よし、覚悟は決まった。せつかく受けるんなら、しっかり受けて、今後の役に立てるようにしよう。

「ステラさん、よろしくお願いします」

「分かりました。では、部屋を移動しましょう。そこでユーリ君は、肌着になっていてください」

言われた通り部屋を移動して肌着になっていると、ステラさんも用意できたようで、こちらに向かってくる。いつもより少し薄い格好だ。そんなステラさんを見るのは新鮮で、少してれくさかった。

「それでは、その台にうつぶせになってください。その後、始めますね」

ぼくはうつぶせになったままステラさんを待つ。

すると、ステラさんはぼくの背中に触れ始めた。ゆっくりと力を入れてくる。痛くは無く、少し気持ちいいかもしれない。

それから、ステラさんはぼくの様子なところをマツサージしてくれ

た。時々ステラさんの体の一部が当たって、なんだか恥ずかしい気持ちになった。

ステラさんは真剣にマツサージをしてきているので、ぼくはがんばって無心になろうとしたけど、そこまでうまくいかなかった。

しばらくして、ステラさんがマツサージを終えると、体が軽くなったような感覚があった。でも、ぼくはなんだか疲れてしまった。

「ユーリ君、どうでしたか？ 実践するのは初めてでしたが、うまくいっていたでしょうか」

「気持ちよかったです。今も少し体が軽くなったような気がします」

「それは良かった。ユーリ君、また疲れてしまったときには、私に言ってください。今度もマツサージしてあげますね。次はもっとうまくなっていると思いますよ」

マツサージを終えて着替えたぼくはカタリナのところへ向かった。カタリナは弓の手入れをしていた。

「カタリナ、休日でも武器の手入れをするんだね。ぼくも見習った方が良いかな」

「あなたの武器はアクア水じゃない。そこまで手入れは必要ないでしょ。剣だって、最低限の手入れくらいはしているんじゃない？」

「それはそうだけど……だったら、手伝おうか、カタリナ？」

「余計なお世話よ。あたしはあたしが一番使いやすいように弓を調整しているの。あなたには分からないでしょう？」

そんなことをしていたのか。カタリナの弓は頼りになると思っていただけ、こういう地道な努力にも支えられていたんだな。ぼくは改めてカタリナに感謝した。

思えば、カタリナの弓が外れたところなんて見たことない。カタリナの弓が通じない相手は、見てから避けたり弾いたりしてくるか、そもそも弓が刺さらないような相手だけだ。弓が刺さる相手なら、うまく隠れて撃つてくれることも多いし、本当にカタリナの弓の腕はいい。

前の闘技大会で戦ったスタンも弓はうまくいったけど、ぼくはカタリナの方が親しいということを引きにしても、スタンよりカタリナと組

みたかった。

「本当にカタリナには助けられてるね。いつもありがとう」

「何よ急に。気持ち悪いわよ。まあ、あんたも見てるだけなんて暇でしょうし、少し解説してあげるわ」

「お願い。実はちよつと気になってたんだ」

「でしようね。それくらいは分かるわよ。弓つてのはね、とにかく撃てればいいってものじゃないの。1人で活動するなら、そういうことを言う人もいるでしょうけどね。本体のしなりで弓の飛距離はだいぶ変わるし、その勢い次第では狙いと違うところに行くことだってあるんだから」

山なりに飛ばして的に当てるみたいなお話だろうか。確かに速度が違えば、同じ角度でも描く放物線は変わる。当たると思った敵に当たらないことがあってもおかしくはないか。

「それに、弦はこまめに張り替えないと、狙いがずれるだけじゃすまないわ。最悪の時なんて、いきなり撃てなくなることもあるんだから」  
狙いがずれるのも怖いけど、いきなり撃てなくなるとなったら、弓使いにとつては素手になったも同然だ。それは気を付けないといけないよね。

「ただ放っておいただけでも、撃つときの感触が変わってまともに撃てなくなる時もあるのよ。間違つても誤射なんてするわけにはいかない以上、弓の手入れをきちんとすることなんて、弓使いにとつては当然の事よ。あんたには分かんないかもしれないけど」

カタリナは態度とは裏腹に、本当に仲間のことを考えてくれている。

口の悪さ位で、カタリナの評価を下げるほどもつたいないことはない。ぼくだつて、口では悪く言われながらも、何度もカタリナに助けられたのだ。

そうじゃなかったら、いくら幼馴染だからって、カタリナと冒険者になろうなんて思えなかった。カタリナになら、ぼくの命を預けてもいいと思える。それくらいには信頼しているのだ。

それから、カタリナが弓の手入れを終えるまで見守っていた。

その後は、ぼくの部屋でアクアと話すことにする。せっかくだし、アクアがやりたいこととか聞いてみるか。

「アクア。アクアの趣味とか、好きなものとか、今まで聞いたことはなかったよね。アクアにはそういうものってあるかな？」

「趣味はユーリと一緒にいること。好きなものはユーリ」

「そっか。なら、改めて、ぼくたちの触れ合い方を見直してみてもいいかもしれないね。そうすれば、今までよりもっと楽しい気分になれるかもしれないし」

「ユーリといられるならいつでも楽しい。ユーリが何かしてくれるなら、それでもいいけど」

そういう事らしいので、試しにアクアと手をつないでみる。

アクアは相変わらず冷たいけど、アクアと手をつないでいると、なんだか心が近寄ったような気がして、少し暖かい気分になった。

「ユーリ、楽しい？ 手をつなぐのは初めてかも。こういうのもいい」  
アクアは喜んでくれているみたいだ。アクアからは物欲のようなものを感じないので、感謝を形にすることがなかなか難しい。

前にあげたブレスレットは大切にしてくれているみたいだけど、食事に対してもこだわりはないし、おしゃれが嬉しいという様子でもない。

ぼくが何かすることでアクアが喜んでくれるなら、何でもしてあげたいという気分だった。

「そういえば、アクア。この前のビッグスライムはぼくの剣ですぐにやられちゃったけど、アクアは剣ではやられないよね。どうやってるの？」

「水で衝撃をずらしたり、水だから通過させたり。アクアはどんな姿にもなれる」

そうなのか。今は人みたいな姿を取っているけど、普通のスライムの姿にもなれるのだろうか。

まあ、スライムは水なんだから、姿を変えることくらい出来てもおかしくはないか。アクア水だってどんな形にもできるわけだし。

「だとすると、物を取り込んだりもできるの？ たとえば、ボールを体

の中に入れてたりとか」

「ユーリもやってみる？ 腕、こっちに出して」

そういわれたので腕をアクアに差し出してみる。アクアは腹の中にぼくの腕を沈めていった。相変わらず冷たいけど、なんとなく心地よい気もする。

アクアだから安心できるのかな。他のスライムにこんなことをされたら、パニックになることは間違いないだろう。

しばらくじっとアクアの感触を味わっていると、アクアは楽しそうな様子で、ぼくに提案してきた。

「これ、すつごくいい。ユーリ、もっとユーリの体を入れさせて」

「どこまで入れるつもりなの？ 全身が入っちゃったら、息ができないよね。さすがにそれは勘弁してほしいかな」

「大丈夫。空気を取り込むくらい、なんてことはない。ユーリ、早く」  
「わかった。アクア、優しくお願い」

そう言うのとアクアは大きくなり、ぼくの体を全部取り込んでいった。

アクアの体の中は冷たくて、何か浮遊感のようなものがあつた。明らかに水の中にいるような感じなのに、息は問題なくできる。

少し不安だったが、大丈夫みたいだ。アクアの中でぼくはまどろんだような心地になり、体の疲れがさらに抜けていった。

1時間くらいいたつたところ、ぼくはアクアに解放された。アクアは明らかに上機嫌になっていた。アクアが喜んでくれたのは嬉しいな。

変な感じだったけど、気持ちよさもあつたから、またやってもいいかもしれない。

「ユーリ、ありがとう。最高だった」

「どういたしまして。何かまた思いついたら、言ってみてね。できるだけ叶えてあげるから」

「わかった。ユーリ、また遊ぼう」

それからはいつものように過ごした後、眠りにつくことに。

今日はみんなの意外な一面を知れたな。またこういう機会があつてもいいな。



## 24話 出会い

ぼくたちは休養を終えて冒険者活動を再開した。

今のところは簡単な依頼ばかりで、特に苦戦することはなかった。今日は久しぶりにアリシアさんたちとの活動だ。アリシアさんたちと冒険するとき、基本的にはアリシアさんたちはぼくたちの活動を見守りながら、気になったところを指摘するという感じで一緒に来てくれた。

アリシアさんたちはぼくたちの活動に良く付き合ってくれているけど、収入が減ったりはしていないのだろうか。

アリシアさんたちと一緒に活動できるのは嬉しいけど、あまり迷惑をかけたいわけでは無い。気になったぼくは、それを質問してみることにする。

「アリシアさん、ぼくたちという時にはアドバイスを徹してくれていきますけど、それでアリシアさんたちの活動に支障は出たりしないんですか？」

「私たちが君たちの指導をするのは正式な依頼だからね。軽く口出しするくらいで依頼料が入ってくるんだから、楽なものさ。

それに、今のところはスケジュールにも余裕がある。前の時のキラタイガーみたいなアクシデントが多ければ、大変だったろうけど。今は落ち着いているよ。

だから、君たちの指導に力を入れても問題ないというわけさ。私たちも、君たちの指導は楽しみにしているんだ。だから、心配しないでいいよ」

「そうなんです。ぼくたちも、アリシアさんたちに教わることは楽しいです。自分たちがめきめきと伸びているような感じがして。

それに、アリシアさんたちの人柄も、ぼくたちにとっては好ましいです」

ぼくがそう言うと、アリシアさんは笑顔で返してくれる。

アリシアさんはいつも凛々しい雰囲気だけど、笑っていてもそれが消えていない。なんとというか、格好いいなあ。

「嬉しいことを言ってくれるね。冒険者というのは、素直に他者に対して尊敬できるような人は少ない物なんだ。

せっかく指導しても、何も身に着けないばかりか、余計な反発をした拳句にそれで失敗して、こちらに文句を言ってくる人までいるという有様でね。

君たちのように素直に指導されてくれるというのはこちらとしてもありがたい。本当に、君たちは可愛らしいよ」

「そうだね、アリシア。わたしたちは、あなたたちがわたしたちに追いついてくれるのが、とつても楽しみなんだ。だから、アリシアは他の依頼があつたとしても、あなたたちの指導を優先すると思うよ」

アリシアさんたちも色々大変みたいだ。

でも、そのおかげでぼくたちを大事にしてくれているのだと思うと、いけないとわかっていても嬉しく思ってしまう。

アリシアさんたちがぼくたちの指導者で本当に良かった。ステラさんにも感謝しないといけないな。始めのキラータイガーの一件でアリシアさんたちを呼んでくれなければ、この出会いはなかったわけだし。

「そう思ってくれているなら、本当に嬉しいです。アリシアさんたちには、本当に感「きやーっ!!」

悲鳴!?! 一体何なんだ?」

女の人の悲鳴だ。助けに行つた方が良いのかな。

思わずアリシアさんの方を見ると、アリシアさんはうなずいてくれた。向かつてもいいということだろう。ぼくたちは悲鳴の方へ向かつて行つた。

少しの間走っていると、人影とモンスターらしきものが見つかった。長い銀髪の女の人を追いかけている。追いかけているのは、食虫植物らしき見た目をしたモンスターだ。

「わ、わたしは美味しくないですよーっ!!」

そう言いながらこちらの方へ向かつてくる。こちらにたどり着いた女の人をかばい、ぼくはモンスターに対峙する。

モンスターは触手の先に着いたハエトリグサのようなものをこち

らに向けてくる。後ろに女の人があるので、避けることはできない。ぼくはアクア水を使って触手の軌道をずらし、剣で触手を切り落とした。それから何度か同じようなことを繰り返すと、モンスターは地面に潜りだした。

下から攻撃されるとまずい。そう思ったぼくは、地面にアクア水をぶちまけて、薄く広げる。

思った通り、地面からの振動をアクア水を通して知ることができた。モンスターはアリシアさんの下に向かっていている。

「アリシアさん、そこから離れて！」

そう言うと、アリシアさんはすぐにその場から離れる。それと同時に、地面からモンスターが口を開けて飛び出してきた。

すぐさまアリシアさんは風刃でモンスターに攻撃する。大きくダメージを受けた様子のモンスターは、その場から触手をアリシアさんに向かって放つ。アリシアさんは自分に当たりそうなものだけを切り裂き、残りはレティさんが足でちぎっていった。

それからはモンスターはほとんど何もすることができず、そのまま倒れていった。

ほとんどアリシアさんたちが倒したようなものだったけど、これくらいならぼくたちだけだったとしても倒せたように思う。

念のため、まだ息が残っていないか確認した後、アリシアさんに確認したいことがあったので質問する。

「アリシアさん、最近行方不明者が出ているという話がありましたよね。もしかして、このモンスターのせいだったりするんでしょうか？」

「どうだろう。その話は私たちも知っているけど、行方不明者は明らかに恣意的に選択されていた。このモンスターに知性がないとは思わないけど、そこまでの知性があるだろうか」

なるほど。サーシャさんも、ろくでも無い人ばかりが行方不明になっていると言っていた。ろくでも無い人を選んでいけるとすると、ただのモンスターではない。

これ以上はぼくにはわかりそうもないし、他の人たちに任せるとす

るか。

「なら、可能性はある、位の報告にしておくといいでしょうか。ぼくではこいつが原因なのか判断が付きません」

「それでいいんじゃないかな。これからも行方不明者が出るかどうか。このモンスターに遺品などが食べられているかどうか。それは組合に調べてもらうことにしよう」

「なら、ぼくたちでこのモンスターを運びましょうか？　かなりしんどいですけど、アクア水があればできると思います」

「それも組合に任せていいと思うよ。討伐報酬はきちんと出るように話は通しておくから、大勢で調査してもらおう。大丈夫。普段からこういうことは組合の仕事さ」

「分かりました。では、そうします」

アリシアさんとの会話を終えると、それを待っていた様子の先ほどの女の人が話しかけてくる。

「あ、あの。先ほどはありがとうございました。おかげで命拾いしましたよっ。あなたのおかげですねっ」

この人、今まで見たことがないくらい美人だ。

とても白い肌にも長めの銀の髪と赤い目をしていて、一見冷たそうに見える顔をしているけど、こころごとと変わる表情がその印象を緩和させている。

ぼくたちとそう変わらない年に見えるし、こんな所にいたということとは、冒険者か何かだろうか。

「アリシアさんたちが主に討伐してくれましたから。お礼はそちらに言ってください」

「ア、アリシアさんと言うんですか。お二方も、ありがとうございましたっ。たっ。

ですが、真っ先に助けてくれたのはあなたですっ！　あなたには、一番のお礼を言わせてくださいっ」

感謝されるのはありがたいけど、妙な勢いだな。少しだけ困って、アリシアさんの方を向いてしまう。

「せっかく感謝されてるんだから、素直に受け取っておいたらいいん

じやないかな。冒険者が感謝される機会というのは、君が思っているより少ないよ」

「わかりました。どういたしまして……えつと……」

「あ、失礼しました！ 名乗っていませんでしたね。わたしの名前はユーリヤです。これからよろしくお願いしますっ」

ユーリヤという人はぼくに笑いかけながら礼をする。声も弾んだ様子だし、こちらまで楽しくなってきたそうだ。

「ぼくはユーリといいます。あなたを助けられてよかった。こちらこそ、よろしくお願いしますね」

「わ、わたしたち、そっくりな名前なんです。あなたに助けられた事といい、これはきつと運命ですっ！ ユーリさん、あなたのユーリヤをどうぞ可愛がってくださいっ」

いきなりだな。あなたのとかわれられても困ってしまうんだけど。思わずカタリナの方に助けを求めようとしてしまう。

「あんた、良かったわね。こんなかわいい子に好かれてるんじゃない。それで？ モテすぎて困るなんて言ったら、ぶつとばすわよ」

「そんなわけではないでしょ……そうだ、ユーリヤさん。こちらがカタリナ。あちらのハーピーがレティさん。その隣にいるのがアリシアさん。こっちのスライムがアクアだよ」

「み、みなさん、よろしくおねがいますっ。それで、ユーリさん。せっかくなんですから、もつと砕けた態度でお願いしますっ。あ・な・た・の・ユーリヤですよっ。ほらっ！ どうぞー！」

いや、ほんとにぐいぐい来るな。こんな人と今まで接したことがないから、どうするのが正解なのかよくわからない。

まあ、いきなり否定することもないか。

「わかった、ユーリヤ、これからよろしく。これでいいかな？」

「は、はい。素晴らしいですっ。ユーリさん、これからどうされますか？」

アリシアさんたちがどうすべきと判断するかは気になる。ぼくとしては、ユーリヤを危なくないところにまで連れていきたいけど。

「そうだね……ぼくはユーリヤさんを連れて戻りたいと思います。ア

リシアさんたちはどう思われますか？」

「それでいいと思うよ。君たちは守りながら戦うことに、まだ慣れていないんじゃないかな。そんな状況で無理に連れまわすことはないし、せつかく助けたのに置いていくというのも、助けた人としての責任を果たしているとは言い難いんじゃないかな」

「うんうん。わたしたちがあなたたちに指導する機会はまだあるから、今回は人を救出した時の対応を学んだということでもいいんじゃない？」

当たり前のようにまた機会があるといってくれて、本当に嬉しい。

ぼくはこの人たちと一緒に居る事にも幸せを感じるようになってるんだな。アリシアさんたちもぼくたちのことを大切だと感じてくれているようで、もつとこの人たちの事を好きになりそうだ。

「分かりました。じゃあ、カタリナ、アクア、そういう事だから」

「ま、仕方ないわね。ここで置いて行けとは言えないわ。でも、ユーリ、ユーリヤさんに変にデレデレするんじゃないわよ」

「分かった。ユーリヤ、よろしく」

それからぼくたちは組合に戻ることに。サーシャさんに事の顛末を報告した。

「なるほど。食虫植物のようなモンスターですわね。確かに、人を捕食しているというなら、行方不明者が出ていてもおかしくありませんわ。こちらは組合で調査しておきますわね。」

それで、ユーリヤ様。今晚はどうなさるおつもりですか？」

「ユ、ユーリさんの家に泊めていただけじゃないでしょうか。いえ、ユーリさんのチームにわたしも混ぜてほしいんですっ」

「ユーリさん、いかがなさいまして？ わたくしといたしましては、そこまでおすすめはしませんわ」

サーシャさんは反対という様子だけど、ぼくはチームに入れること自体は反対ではない。一緒に住むことはいきなりすぎると思ってるけど。

「家に泊めるとなると、ステラさんの意見は必ず聞かなくてはいけませんから。パーティに関しては、まずは、実力を見てからということ

で」

「そうね。恩人だと思ってくれてるなら、それなりには役に立つてくれるんじゃない？ 恩を感じないようなやつなら、あたしはお断りよ」

「み、みなさんに恩を感じていないということはありませんよ。必ずお役に立って見せますっ」

ユーリヤは両手を握って気合十分といった感じだ。うん。実力に問題がなければこの人と一緒にチームを組みたいな。

「アクアはどっちでもいい。裏切ったなら、アクアがユーリを守る」

「では、今日の宿はステラ様に確認を取るということでよろしいですね。念のため、こちらで宿を探しておきますわ」

「ありがとうございます、サーシャさん。それでは、また」

ステラさんの家にユーリヤを連れていくと、ステラさんは快く迎え入れてくれた。

次はユーリヤと組むかどうかなだね。ユーリヤの実力はどんなものだろう。

## 25話 チーム

ぼくたちはユーリヤの実力を確認するため、マナナの森でモンスター退治を見せてもらうことにした。

今日もアリシアさんたちが一緒に来てくれているので、ユーリヤをチームに加入させるかどうかはアリシアさんたちの意見も聞くつもりでいた。

「ユーリヤさん。ユーリ君たちは新進気鋭とっていいチームだ。生半可な実力ではおんぶにだつことなるだけだろう。」

もし、ユーリ君たちがチーム加入に賛成したとしても、私たちは反対することになるだろうね」

「わ、わかりました。ユーリさんたちの邪魔になりたいわけではありませんから。しっかりお役に立てるところをお見せしますっ」

そう言うとうりやさんはモンスターに向かっていく。

素早くモンスターに駆け寄り、針のような武器を突き刺す。

その後、別のモンスターに蹴りを叩き込む。蹴っただけのはずなのに、モンスターには穴が開いていた。

別のモンスターがユーリヤの背後から襲い掛かろうとする。ぼくが思わず動きそうになると、アリシアさんに止められる。

モンスターはユーリヤに向かっていったが、途中で切断されていた。アリシアさんの風刃のようなものだろうか。

いや、ユーリヤはモンスターを連れていない。何か別の手段を使ったのだろうか。

一通りモンスターを倒し終えたユーリヤさんは、笑顔でこちらに駆け寄ってくる。

「ど、どうでしたでしょうか、ユーリさん。中々うまくいったと思うんです。これなら、ユーリさんとチームになれますかっ?」

「ぼくとしては十分だと思うけど……せつかくだから、今何をしたいのか聞いてみたいな」

「わ、わかりました。まずは、この武器ですね。これは相手に突き刺すことができる武器なんです。接近戦で役に立ちますね。最初のモ



ンスターはこれで突き刺しました。それは皆さんお判りでしょう」

結構素早い動きだったから、この武器を使うことには慣れていそうだな。それに、すっかり急所を狙っていた。腕はいいように思える。「次は、この靴ですね。この靴には、針が仕込んであるんですつ。その針を、蹴りと同時に出すことで、相手に穴をあけることができるんですよつ。」

対人でも、対モンスターでも、とても便利なんですよつ。モンスターには単純に威力が高いですし、人が相手なら、結構油断してくれるんですつ」

それで蹴っただけに見えるのにモンスターに穴が開いていたのか。ただの蹴りかと思ったら凶器が出てくるなんて、知らない人からしたらとても厄介な武器だろうな。

「それで、最後は金属の糸ですね。扱いはかなり難しいですし、うっかりすると味方にもダメージを与えてしまいかねないんですが、攻撃だけでなく、移動や罠を仕掛けたり、防御もできるんですつ。」

皆さんとの連携がとても大切になるとは思いますが、これなら、ユーリさんのお役に立てるのではないでしょうかつ」

なんとというか、明るい性格に反して、陰湿な戦い方をする人だな。ユーリヤは個人としてなら、今でも結構強いと思う。

後は、カタリナやアクアがどう思うかだな。

「カタリナ、アクア。ぼくはユーリヤをチームに入れてもいいんじゃないかと思ってる。カタリナやアクアが反対するなら、考えるけど。性格の相性もあるだろうし、少し時間をおいてみるというのもありかもね」

「そうね。お試し期間くらい感じで、いったん組んでみるくらいならいいでしょ。それでだめだったら、改めて外せばいいんじゃないかしら」

「アクアはユーリヤがいてもいい。ユーリヤ、ユーリの役に立つ」

二人は今のところ賛成か。アリシアさんとレティさんはどう思うだろう。ぼくはアリシアさんたちの方を見る。

「そうだね。お試し期間というのはいいい考えじゃないかな。実力的に

は、ユーリ君たちの足を引っ張るほどじゃないと思う。

ユーリ君たちと役割も違うから、これまでのユーリ君たちでは出来なかったことが出来るようになるかもしれない。ひとまずは、反対はしないよ」

「うんうん。わたしたちの目のあるうちは変なことはさせないし、他の人たちと仕事をする機会もあるかもしれないからね。新しいメンバーと動く練習だと思えばいいよ」

そういうものか。アリシアさんたちは以前、キラータイガー相手だと10人で挑んでも負けることがあると聞いていた。

それはつまり、10人で組むようなことがあるということだ。そういう時に知っている人だけになるとは思えないし、確かにいい機会かもしれない。

「そういうことなら。ユーリヤ。まずはお試しということになるけど、ぼくたちとチームを組んでほしい」

ぼくがそう言うのとユーリヤはとてもきれいな笑顔になった。ぼくたちとチームを組むことをこんなに喜んでもらえるなら、いきなりいがみ合うようなことは心配しなくていいよね。

「わ、わかりました。ユーリさんたちが私を必要だと思っただけるよう、がんばりますねっ」

「よろしくお願いするわ。でも、役に立たないようなら、出て行ってもらうから。ちゃんとすることね」

「ユーリヤ、よろしく。ユーリをちゃんと守る」

「み、みなさん、よろしくお願いします。ふふっ、ユーリさん。これから一緒ですねっ」

ユーリヤはそう言いながらぼくにとても近づいてくる。本当にユーリヤはぼくに対して積極的だ。確かにユーリヤのことを助けはしたけど、それだけでこんなにする物なのだろうか。

まあ、ユーリヤから悪意は感じないし、これから仲良くなっとう。

「じゃあ、ユーリ君たち。これから、ユーリヤさんとの連携の訓練にするのはどうだろう。まだモンスターはいるだろうし、弱いモンスター

相手のうちに、いろいろ試しておくといい。

いざとなったら、私たちがフォローするから、今のうちは失敗してもいいよ」

「そうだね、アリシア。いずれユーリ君たちはわたしたちと一緒に戦うこともあるだろうからね。そういう時に、連携の何たるかを知っておいてもらえると、わたしたちとしてもやりやすいかな」

今はアリシアさんたちにフォローしてもらえばかりだけど、いつかアリシアさんたちの力になれるようになりたいな。本当にアリシアさんたちは、良い師匠のような存在に思える。

だから、アリシアさんたちが困ったときは、ぼくたちがフォローできるようになりたい。それくらいでアリシアさんたちへの恩を返せるとも思わないけど。

そういえば、昨日の戦いで、少し思いついたことがあったんだ。アリシアさんに話してみよう。

「今の話とは関係がないんですけど、昨日、地面に潜るモンスターを探るために、地面の振動を感じたじゃないですか。その時に思いついたんですけど、音って確か空気の振動でしたよね。」

なら、アリシアさんの風の操作で、音を消したり、音を大きくして驚かせたりということもできませんか？」

「なるほど……私は風で物を動かすことばかり考えていたからね。出来るかどうかは分からないけど、試してみる価値はあると思うよ。もしできるようになったら、君たちにお礼をしよう」

「いえ、そんな。ぼくたちはアリシアさんたちに本当にお世話になっていますから。思い付きを口にするくらいでアリシアさんたちの役に立てるなら、それで十分です」

レテイさんはぼくの言葉を受けてとても嬉しそうな顔をしてくれる。この顔が見られただけでも、今の提案をした価値としては十分だな。これがアリシアさんたちの役に立ってくれるならもっと嬉しい。「ユーリ君たち、わたしたちの事をそんなに考えてくれてるんだ。商売敵になるかもしれない相手を強くしようなんて、わたしたちは嬉しいけど、気を付けた方が良いよ。」

それにしても、わたしたちをこんなに喜ばせちゃうなんて、ユーリヤさんのこともあるし、ユーリ君ってば、色男だね。なんちゃって」「からかわないで下さい。別に、誰に対しても世話を焼こうなんて思うわけがないです。アリシアさんやレティさんは、本当にぼくたちに対しても良くしてくれました。他にこんなことをしようと思える人なんて、両手で数え切れるくらいしかいませんよ」

「そのほとんどは私たちでも知っていいそうだね。まあ、それはいいじゃあ、ユーリヤさんとどんな立ち回りをするのか、考えてみるという」

ユーリヤは接近戦ができる。これはアクアも同じだけど、アクアは足止めに強いのに対して、ユーリヤは積極的に攻撃していく方が向いているだろう。罠を仕掛けるなら、ぼくとも協力できるかもしれない。

それに、カタリナの弓も効果を発揮しやすくなる。動く相手に当てられないわけじゃないけど、動きが制限されている方が楽だろうし。なんとなく、ユーリヤは遊撃のような立ち回りが向いているような気がする。足も速いし判断も早い。できることも、アクア水ほどじゃないけど多い。ぼくたちにとって不足している部分をちようど埋めてくれるような立ち回りが出来そうだ。

方針は決まった。なら、ユーリヤたちに伝えてから、一度試してみるか。

それから、手ごころなモンスターを見つけて戦ってみる。

ぼくがアクア水を使って敵の動きを制御して、アクアが足止めをして、近いモンスターをユーリヤが、遠いモンスターをカタリナが仕留めていく。

ユーリヤの近くのモンスターは、ユーリヤが仕留めるほか、手数が足りないときは足止めにとどめて、ぼくやカタリナに始末させる。

事前に準備できるときには、ぼくとユーリヤが協力して罠を張り、最小限の手間でモンスターを片づけることが出来た。

本当にぼくたちの相性はぴったりだと思えた。他の人とは、いきなりここまででは出来ないだろう。長年組んでいるかのような安心感

すらあった。

「ユーリヤ、本当にすごいよ。戦闘に関しては全く問題ないと思うよ。後は、共同生活なんかがうまくいくかくらいかな。ユーリヤが問題を起こすとは思っていないけど、一応ね」

「は、はい。ユーリさんが褒めてくださって、本当に嬉しいです。それなら、私とチームを組んでも問題ないと思ってもらえるでしょうか」

ぼくはユーリヤとチームを組めたら嬉しいと思っていたから、今の連携で完全にユーリヤを受け入れる気になっていた。問題は他の2人だよ。ぼくは2人の方を見る。

「あたしは別にいいわよ。あなたがいたら、あたしもやりやすいしね。でも、ユーリ。ユーリヤさんがあんたを慕ってるからって、余計なことをするんじゃないわよ」

「アクアもかまわない。ユーリヤ、一緒にユーリを守ろう」

「ユーリさんなら、わたしに何をして余計なことではありませんよ。アクアちゃん、カタリナさん、これからよろしくお願いしますねっ」

上手くまとまったみたいだ。これからはユーリヤと一緒に活動することになる。頼りになる仲間ができたな。

「ユーリヤさん、本当に驚いたよ。ユーリ君、さっきは連携の練習とあったけど、これでは他の人と連携するときの参考にはならないと思うよ。それくらい、ユーリヤさんの動きは良かった」

「そうだね、アリシア。まあでも、ユーリ君たちに心強い仲間ができたと思うと嬉しいな。これで、ユーリ君たちがわたしたちに近づける可能性は、一気に上がったと思うよ」

「ア、アリシアさん、レティさん、ありがとうございます。ユーリさんたちが活躍できるように、わたしも頑張りますねっ」

その後にもう少しだけ動きの確認をした後、ぼくたちは帰った。ユーリヤは本当に頼もしかった。これからは楽しみだな。

## 26話 疑惑

ユーリヤとパーティを組んで何日か。ぼくたちはユーリヤと活動することに慣れてきていた。ユーリヤは細かいところに良く気が付くし、一緒にいてかなり快適だった。

今日は以前ユーリヤと出会ったときに倒した食虫植物のようなモンスターについての報告を聞きに、組合でサーシャさんに会いに来ていた。

「サーシャさん、調査が終わったとのことですが、結局あいつは行方不明事件の犯人だったのでしょうか」

「あのモンスターの近くから、遺品や遺体が見つかったということはありませんでしたわ。モンスターの体内も調べましたが同様ですわ。

また、資料を調べましたが、同種のモンスターは見つかりませんでしたわ。恐らくあのモンスターは新種ということですよ。解剖もしましたが、あのモンスターが装備ごと人々を溶かせるようには思えませんでしたわ」

鉄は溶かせていないとか、そういう事だろうか。

だとすると、装備がそのまま残っていないとおかしい。装備は見つかったのだろうか。見つからないのなら、物盗りの可能性もあるよね。

「ですが、あれから行方不明者が出なくなっていることも事実。組合としましては、あのモンスターが行方不明者の原因と結論付け、調査を打ち切りとし、アリシア様方を含むあなた方に報酬をお支払いすることになりましたわ」

じゃあ、これ以上の調査はされないということだよ。次に似たような事件が起こらないならいいけど。

「ただ、念のために他の可能性があることは頭の片隅に置いておいてくださいまし。行方不明者の傾向からして、あなた方がターゲットになる可能性は少ないとは思いますが」

ですが、あくまで希望的観測。お気をつけになられることをお勧めいたしますわ」

ふむ。疑わしいところはあるが、状況証拠的にはあのモンスターが犯人だということか。

他の何かが犯人だとすると、目的がわからないな。金目の物を持っている人は少なかつたようだし、金目当てでもなさそうだ。

モンスターの可能性が濃厚であることは確かだけれど、一応、ぼくたちを付け回す人がいないかは確認しておいてもいいかもしれない。「それはさておき、ユーリ様。出来れば2人きりで話がしたいと思いますわ。いかがでしょう?」

2人きりですか。一体何の話をするつもりなんだろう。

サーシャさんなら妙なことにはならないだろうし、ぼくはかまわないうと思っっている。ただ、他の人の意見も聞いておいた方が良いでしょう。

「どうでしょうか? ここで待っててもらってもいいかな?」

「あんた、付いていくつもりなのね。ま、いいわ。せいぜい浮かれておきなさい。どうせそういう話ではないでしょうよ」

そういう話って、どういう話だと思っっているのだろう。

どうせ大勢に知られたくない報告があるとか、それくらいだろう。そこまでサーシャさんと親しくなっているとは思えない。まだ会ってそう経っていないわけだし。

「ユーリ、何かあつたら大声を出して。すぐに行くから」

「ユ、ユーリさん。わたしは構いません。アクアちゃんと遊んでおきますねっ」

「話は決まったようですね。では、こちらへどうぞ」

そう言つてサーシャさんはぼくを組合の裏側へと連れていく。鍵のかかっている部屋を開け、ぼくたちが入った後、鍵を閉めた。人に聞かれたくない話なのかな。

「さて、これでよろしいでしょう。ユーリ様、ユーリヤ様についてですが、十分に警戒なさってくださいまし」

ユーリヤに警戒して欲しい? 一体どういう事だろう。ユーリヤはぼくたちに良く尽くしてくれている。疑うようなことがあるとは思えないけど。

「説明しないといけませんわね。ユーリヤ様ですが、あの日ユーリヤの方に発見される以前の痕跡が、一切存在しないのですわ。それまでに出会った人もいなければ、店などを利用したことや街道を利用したといった痕跡もありませんわ。」

そこから考えられる可能性としては、ユーリヤ様が暗殺者や密偵、工員、あるいはそれに類するものといったものがありますわ。ただ、密偵などであったとしても、一切の痕跡がないというのは不自然ではありませんわ。本当に、突然あの場所に現れたかのようなものです。

もしかしたら、あのモンスターもユーリヤ様が持ち込んだ、あるいは何かの工作をごまかすためにあのモンスターを利用したということもあり得ますわ」

なるほど。そういうことならば、ユーリヤを疑うということも理解できる。あの仕込み靴も、鉄の糸も、密偵や暗殺者の技だと言われて納得できないということはない。

ただ、なぜだろう。ぼくはユーリヤを疑う気にはなれなかった。ぼくに好意的だということもあるかもしれない。

でも、ぼくを騙そうとした人がいなかったわけじゃない。そういう人が好意を装ってきたこともある。その上で、ぼくの心はユーリヤを信じる方に傾いていた。

なんとなく、本当になんとなくしか言いようがないのだけれど、ユーリヤがぼくを裏切るということは、絶対にならないことのように思えた。

「サーシャさん、忠告は本当にありがたいです。サーシャさんがぼくを心配してくださっているということも分かります。」

ですが、ぼくはユーリヤを疑うということをしたくない。せつかく情報を下さったサーシャさんには悪いと思いますが、ぼくはユーリヤを信じます」

「そうですか……ユーリ様らしい、と。そう思えてしまいますわね。ユーリ様のお優しさはわたくしも好ましいと思っておりますわ。ですから、ユーリ様はそのまま構いませんわ。」

ですが、それでしたら、アリシア様やレティ様、ステラ様にもこの



情報はお伝えしたいと思えますわ。ユーリ様の人を信じるということとは美徳ではありませんが、隙にもなりますわ。

ですので、こちらでユーリ様を調べて、怪しいところがありましたら、わたくしたちから、ユーリ様へと伝えたいと思えますわ。

それと、忠告を聞き入れないことを気になさる必要はありませんわ。あなた方を様々な形でサポートするのが、わたくしの仕事ですわ。冒険者としての活動をあなた方はしっかりとなさっていますわ。ですから、これくらいの事は迷惑でも何でもありませんわ」

サーシャさんは本当にぼくたちの事をサポートしてくれている。サーシャさんがいなくなったら、冒険者としての活動は、もつと苦しい物だっただろう。サーシャさんは、ぼくたちにエルフィール家の名前をいい形で広めてもらいたいみだし、ぼくたちの名声を高めることを考えてもいいかもしれない。

「本当にありがとうございます。サーシャさんには、いつも助けられていますね」

「こちらもあなた方の活動で助けられていますわ。持ちつ持たれつということですね。それはさておき、ユーリ様。今度、2人でお出かけいたしませんか？ ユーリ様、わたくしが楽しい時間にいたしますわよ……？」

そう言つてサーシャさんは触れそうなくらいぼくに顔を近づけてきた。いつも可愛らしい印象のサーシャさんだけど、今日は妖艶な雰囲気がある。なんだかドキドキしてしまった。

「わ、わかりました」

「嬉しいですわ。それでは、ユーリ様の次の休日に合わせておきますわね。ふふっ、楽しみにしててくださいまし」

そう言つてサーシャさんはぼくを部屋から連れ出した。組合の受付に戻ると、カタリナたちが迎え入れてくれた。

「あんだ、それで？ 一体何の話をしていたのよ？ 2人つきりですの意味のある話だったんでしょね？」

カタリナの問いかけに対して、サーシャさんはぼくと腕を組んで答える。

「わたくしたちは、今度の休日に逢引きをすることになりましたわ。ユーリ様、楽しみですわね？」

そう言いながらサーシャさんはぼくに流し目を向ける。少しどぎまぎしてしまっただが、これはさつきユーリヤの話をしていたのをごまかす目的もあるのだろう。明らかに露骨にカタリナを挑発している様子だった。

「デ、デートお？ あんたまさか、本当にそんな話をしていたわけ!？」

本当、信じられないわ。ま、いいわ。どうせあんたじゃサーシャさんをまともにエスコートなんてできないでしょうよ。せいぜい失望されておくことね」

「ユーリ様がエスコートに慣れていないからといって、失望などいたしませんわ。むしろ、ユーリ様らしくて好ましく思いますわ」

「ユ、ユーリさん。今度わたしもデートしてくださいっ！ あなたがユーリヤが、サーシャさんより楽しませて見せますからっ！」

「つい最近 出会ったばかりのユーリヤ様が、ユーリ様の好みを知っています？ わたくしはきちんと存じ上げておりますわよ」

先ほどユーリヤを疑えと言っていたようには思えない。サーシャさん、演技が上手いな。ぼくたちへの態度も演技だったらどうしよう。

いや、演技だったとしても、サーシャさんのしてくれた事が無くなるわけじゃない。よっぽどんでもないことを企んでいない限り、サーシャさんへの感謝は消えることはないだろう。

「ユーリ、サーシャさんと出かけるの、楽しみ？」

「そうかもね。サーシャさんがどんなところに連れて行ってくれるつもりなのかは気になるかな」

「ふふっ、素晴らしいところですよ。きっとユーリ様も気に入ってくださいますわ。」

それに、いい気分転換になると思いますわ。ですので、しっかり楽しんでくださいいな、ユーリ様。それで、また今後の冒険者活動の活力にしていただけだと思いますわ」

ぼくの冒険者活動のことを考えてくれているらしい。サーシャさ

んはぼくに立派な冒険者になってほしいみたいだし、当然といえば当然だけれど、他の冒険者にもここまでするものなのだろうか。

まあ、組合でサーシャさんが話しているところなんて、ぼくたちとアリシアさんたちとステラさん位しか見たことはないけど。

「ユーリ。良いお土産があつたら頂戴。でも、かさばらないものでいい」

アクアが物をねだってくるのは久しぶりだな。いつもはぼくと何かしているだけで満足みたいな感じだし、良い物を見繕ってあげたいな。

「ふふっ、ユーリ様からだけではなく、わたくしからも土産を持っていきますわ。もちろん、ユーリヤ様とカタリナ様にもお贈りいたしますわ」

「そ。よろしくね、サーシャさん。それとあんた、変なものを買ってくるんじゃないわよ」

「わ、わたしにもですか？　そうですね。可愛い物だと嬉しいですっ」「楽しみにしておいてくださいまし。それでは、皆様方、また。ユーリ様、逢引きのこと、楽しみにしておりますわよ」

それからぼくたちは家に帰った。今日は本当に気疲れしてしまつた。ゆっくり休んで、また頑張ろう。

## 裏 愉悦

アクアはユーリと冒険者としての活動を進める中で、アクアとして、ステラとして、カタリナとして。それぞれの立場から、ユーリのサポートをすると決めていた。

カタリナを解放することに未練はあったが、どうせカタリナとの関係は修復できないのだからと諦めていた。

カタリナに対して罪悪感が浮かばなくてはなかったが、ユーリに嫌われることの方が怖かった。ユーリに嫌われたら生きていけない。アクアにとって、それだけは絶対だった。カタリナに対する情は、それに優先するほどではなかった。

冒険者としてユーリが活動を始める前に、アリシアとレティ、それにサーシャがサポートすることをステラとして取りまとめておいたアクアは、その3者に乗っ取るか考えていたが、カタリナに対する罪悪感が思い返されて、今のところは取りやめることに決めていた。

念のために自身の端末で監視することにしてはいたが、アリシアとレティにしろ、サーシャにしろ、目的からすると、今すぐにでもどうかするほどではないだろうという計算もあった。

なにせ、アリシアとレティも、サーシャも、ユーリに冒険者として大成してほしいのは事実なのだ。ユーリに対して危害を加えて、それを遠ざけるほど愚かではあるまい。

ステラとして接する中で、その程度には信用していた。万が一そんな愚かなことをするならば、即座に排除するつもりでもあったが。

幸い、アリシアとレティは先達として良いユーリの手本になれそうだった。

ユーリに何もかもをアドバイスするだけでなく、ユーリの仕事を奪うでもなく、ユーリの尊敬する冒険者としての立ち位置を確保していた。

キラータイガーが大勢現れた時は、キラータイガーの排除の仕方について少し悩んだが、アリシアとレティのおかげで、その懸念は取り除かれた。

これならば、少なくとも今すぐアリシアとレティをどうにかしなければならぬなんてことはない。アリシアとレティは自身がオメガスライムであると疑っている様子もない。ユーリがこの2人を慕っていることもあり、そのままアリシアとレティに良き指導者でいてもらおうと思っていた。

サーシャについても、ユーリたちにおかしなことをする様子はなかった。今のところは様子見でいいと判断していた。

サーシャはカーレルの街に滞在してほしい様子ではあったが、アクアにとって、ユーリと一緒にいるならば場所は問題ではない。多少カーレルの街に縛り付けようとした位では、排除しようとは思えなかった。

問題はユーリに対して因縁をつけたビッグスライム使いだった。ビッグスライムの弱さに、ユーリが違和感を抱いていることはすぐに分かった。

今ほど知性を持っていないときの行動がここにきて響いている。アクアに少しの焦りと、それ以上のビッグスライム使いに対しての怒りが浮かんた。

幸い、ユーリはアクアに対して感謝の念を深めているだけだったが、それでアクアの怒りが消えるはずもなかった。どうやってビッグスライム使いを殺そうか、ずっと考えていた。

ユーリとの関係が悪くなるかもしれないと考える時間は本当に苦痛だった。それを考えると、ただでビッグスライム使いを殺す気はなかった。どうすればより苦しめながら殺すことが出来るだろう。アクアはそのことばかりを考えていた。

他にもアクアの機嫌を悪くする出来事があった。ブレンダン兄弟とかいうどうしようもない小物だ。つまらない考えでユーリを傷つけようとする愚か者だったが、ユーリはそれを殺すことはなかった。

ユーリならそうするだろうとは思っていたが、だからといって自分まで見逃してやるつもりはなかった。ユーリを傷つけようとした罪は、死くらいで贖えるものではない。

競技として高めあう中でいくらかの傷がつくくらいなら、見逃す度

量がアクアにもあった。だが、明確に悪意を持ってユーリを傷つけようとしたなら別だ。

どのみちアクアが手を下さずとも死にそうではあったが、それくらいの事でアクアの怒りは収まりはしなかった。

結局、すぐにビッグスライム使いも、ブレンダン兄弟も始末することにした。

ビッグスライム使いは意識を残したまま操り、魔物の群れの中へと体进行操作した。ビッグスライム使いの痛覚を残したまま、魔物たちに自分が何もできず殺されていく様子を、普通の人間が死ぬような状態になった後でも味わわせた。

ゆつくりと、しかしながら着実に、なにもできないまま自分が死に向かっていく様子はさぞ苦しかった事であろう。完全にではないものの、アクアの留飲は下がっていた。

ブレンダン兄弟には、アクアが脳进行操作することで、お互いがお互いを裏切る様子を何度も何度も幻覚として見せていた。

結局、兄弟だなんだといいながらお互いを信じられなくなったブレンダン兄弟は、お互いを敵として殺しあう事となった。死ぬ寸前にはお互い躊躇していたが、アクアは最後の一押しとしてお互いの体を操ってやった。

結局ブレンダン兄弟は、最も信頼する相方が裏切ったという絶望の中で死ぬことになった。

それから、アクアはユーリの事を傷つけるかもしれないと、世間の評判が低い存在を次々に始末していった。

ただ殺すだけではもつたいないと考えたアクアは、死体も装備も溶かしつくして、何らかの形で再利用できないか考えていた。

アクアの中にある考えが思い浮かんだので、その考えの検証に幾つかの死体を使った。検証の結果、何をするかはすぐに決まった。アクアはその計画を実行した時のことを考え、ひそかに興奮していた。

その後、サーシャの提案した食事会で、サーシャが契約技使いであるとユーリが知り、アクアはサーシャを安易に殺すことはできないと考えた。

契約技使いは、モンスターと契約者のどちらが死んでも契約は解除される。ユーリがサーシャの契約技を知った以上、殺す形で何かをすれば違和感に感づかれかねない。サーシャがユーリに対して何かを仕掛けたとしても、迂闊に殺すことは出来なくなった。

殺さなくともサーシャをどうにかする方法はすでにアクアの手の中にはいくつもあつたが、面倒ごとが増えた心地であつた。

それから、サーシャがアクアの犠牲者について話している時、アクアは何食わぬ顔で過ごしていた。どうせサーシャには気づくことはできない。気づいたところでどうとでもなる。それよりも、ユーリとこれからどう過ごすかの方が圧倒的に大切だつた。

それからの休日。アクアは常にだれかの顔でユーリのそばに居た。ステラとしてはユーリにマツサージをした。

ステラがモンスターと契約しなかったことも、そのためにマツサージを覚えたことも、指輪を誰かに託したことも事実であつた。

ユーリがステラにとって指輪を渡す第一候補で、それ故にユーリに特に目をかけていたことを知っていたアクアは、ステラにとつても本望であろうと、指輪をユーリが使いこなせるように誘導していた。

指輪を使いこなすためには、契約者とモンスターのお互いの信頼関係が大切であるとも知っていたアクアは、ステラの想いと自分の想い、どちらも叶える一石二鳥の策であると思っていた。

ユーリに対してマツサージする際、わざとステラの体をユーリに触れさせていた。

ユーリの疲れをとりたいということも事実だつたので、ステラの記憶通りにしつかりとマツサージを行いながら、ステラに対して照れているユーリの事も味わっていた。

アクアの姿ではユーリはあまり照れたりしないので、またこういう機会を設けてもいいとアクアは思っていた。

ユーリのペットとしてのアクアに不満があるわけでは無いが、ペット扱いでは楽しめないユーリの姿もある。アクアはあらためてステラの体のありがたさを感じていた。

次はカタリナとしてユーリと会話していた。カタリナが弓の腕を

高めるためにどれほどの努力をしていたのか、アクアはカタリナを乗っ取ったことにより改めて感じていた。

いつも憎まれ口を言っただけのカタリナだが、ユーリが困ったときにはほとんど必ずと言っていいほど助けに入っていた。カタリナはその弓の腕で、ユーリが倒せなかった多くのモンスターをユーリの代わりに倒していた。

カタリナのユーリに対する好意はきつと本物だと、ユーリ以外の情などどうでもいいと感じているアクアでさえ信じていた。

カタリナとしてユーリと接する中で、ユーリのカタリナに対する信頼を感じ取ったアクアは、カタリナだけでなく、ユーリに対しても悪いことをしているのではないかとほんの少しだけ思った。

だけど、アクアからカタリナを解放するだけの勇気は出てこなかった。

ユーリのカタリナに対する信頼は本物だ。ユーリにカタリナが真実を告げれば、きつと嫌われてしまう。そんなことになるくらいなら、死んだほうがまだ。ただの他人なら、アクアの方を信じてくれる。

でも、カタリナなら？ アクアはカタリナの魅力を理解して、ユーリがその魅力を知っていることも感じて、だから、本当のハッピーエンドから遠ざかっているだけだと薄々思いながらも、アクアは今のまま進むことをやめられなかった。

その次にアクアとしてユーリに接している時、ユーリの腕を自分の中に入れた時、妙な興奮がアクアを襲った。

ユーリの体を食べているみたい。ユーリがもとは自分の一部であるアクア水を飲んでいる時、ユーリと一つになっているような感覚を味わっていたが、それとは別種の悦びがあった。

アクアは自分でも興奮を抑えきれず、ユーリの全身を自分の体の中に入れることを望んだ。

ユーリの全身を取り込んだ時、ユーリの生殺与奪を握っているような感覚になった。ユーリを殺すなど、アクアは何があってもするつもりはないが、ユーリの命が手のひらの上にあるような感覚は、ユーリ



が自分を信じているという実感とともに、アクアを大いに高揚させた。

ユーリが自分の中にいるという感覚を、ゆっくりじっくり味わったアクアは、カタリナに関する罪悪感などすっかり忘れ去っていた。スライムの体でこういう感覚なら、人間の体ならどういう感覚なんだろう。アクアは好奇心でいっぱいだった。

またユーリとの新しい関係の可能性を思いついた。アクアは最後にはとても上機嫌だった。

## 27話 逢引

ぼくは今日、サーシャさんと約束していたお出かけに来ていた。待ち合わせ場所に向かうと、すでにサーシャさんが待っていた。

「すみません、お待たせしてしまっただけですわね」

「いえ、お気になさらず。ユーリ様を待つというのも、楽しい時間でしたわ」

「ありがとうございます、そう言っていたらいい。今日は何をする予定なんですか？」

「ふふっ。いろいろ、ですわ。まず向かいたい所がありますわ。着いてきてくださいまし」

そう言つてサーシャさんはぼくの手を取る。

そのままサーシャさんは歩き出した。こういうことはカタリナ位としかしたことがないから、結構ドキドキする。

しばらく歩いて、公園のようなところに着いた。ぼくは組合とステラさんの家、後は最低限の店位しかこの街を知らないの、こういう所もあるのだなと感心していた。

ベンチのようなものが真ん中にあり、サーシャさんはぼくの手を引つ張つたままそこに座った。

それにしても、全く人がいないな。こういう場所にはもっと人がいてもいい物だと思うけど。

「さ、ユーリ様。隣へどうぞ」

そう言われたので隣に座る。少し離れたところに座ると、サーシャさんがすぐ隣にまで寄ってきた。ぼくは照れてうつむいてしまう。

「ふふっ、初々しいですね。せっかくの機会ですわ。もっとお互いのことを知りたいと思いますわ。ですので、ユーリ様の事を話していただいたり、わたくしに質問があればそちらにもお答えいたしますわ」

急に自分のことを話せと言われても、何を話せばいいのかわからない。そうだな。サーシャさんはモンスターと契約しているらしいし、それについてもう少し聞いてみるか。

「サーシャさんは以前、モンスターと契約しているといいましたが、どんな契約技を使えるんですか？」

「冒険者のユーリ様らしい質問ですわね。ふふつ、それは気になりませんわよ。せっかくですから、体感していただきましょう」

そういつたサーシャさんは改めてぼくの手を握る。すると、ぼくからサーシャさんに何かの流れ込んだような感覚になった。

ほんの少し流れたただけだけど、これを多く失ったらまずい、そう感じた。思わずサーシャさんの方をじつと見てしまう。

「気が付きましたか？ わたくしの能力は、生命力のようなものを吸収できるのですわ。今はほんの少しだけですが、これを本気で吸い尽くすと、そのものは命を失ってしまうのですわ。」

もちろん、わたくしにユーリ様を傷つけるつもりはありませんわ。ですので、今吸い取ったのは、クツキーの一枚でも食べれば回復する程度。

この能力があれば、ユーリ様ほどの冒険者ならともかく、そこらの冒険者程度には後れは取りませんわ。それが、エルフィール家の一員であるわたくしが、組合で活動できる理由の一つなんですわ。多少乱暴者が寄ってきたところで、どうとでもできますもの」

「そこらの冒険者に遅れは取らないと言いましたけど、相手に触れなければならぬなら、運用するのは難しくありませんか？ ぼくだったら、対策はいくつも思いつきますけど」

距離を取ればいい能力だとすれば、アクア水があるだけで本当にどうにでもできる。それ以外にも、全身を何かで覆うとか、遠くから武器で攻撃するとか、できる事はいろいろとあるだろう。

「わたくしの能力はエルフィール家で働いているものでも知らない方が多いですわ。ですので、対策を取られるということはあまりないかと思えますわ。」

それに、そこらの冒険者というのは、ユーリ様が思っているよりはるかにレベルの低い存在ですわよ。

それはさておき、相手の安全を気にしなければ、わたくしの手の届く範囲よりはかなり広い範囲から生命力を吸収できますわ。

先ほどユーリ様と手をつないだのは、触れている方が細かい調整が効くからですわ。間違っても、組合にとつても、エルフィール家にとつても、わたくしにとつても大切なユーリ様に万が一のことがあつてはいけませんもの」

なるほど。それは確かにかなり強い能力だな。それだけの範囲から生命力を吸収できるなら、組合で対応している相手から生命力を奪うことは容易だろう。

どれほどの効果なのかは分からないけど、サーシャさんに生命力を奪われたときにはかなりの危機感を覚えた。

生命力というくらいだから体力などにも影響があるだろうし、あの感覚を感じながら冷静に対処できる人がそう多いとは思えない。これらの冒険者に後れを取らないというのは納得できる。

それにしても、サーシャさんは大事な秘密っぽいことでもかなり教えてくれるな。それだけ信頼してもらえているのだと思うと、嬉しくもあり、怖くもある。

サーシャさんはぼくにいったい何をさせたいのだろう。とんでもない事じゃないといいけど。

まあ、それは今はいい。そんなに強い能力を使えるモンスターを接ぎ木のように増やせるといつていたな。どこでそんなモンスターを手に入れたのだろう。

「ふふっ、気になることが増えたという顔ですわね。いいですわよ。ユーリ様でしたら、何でも、とは言いませんが、それなりに大事なことでも教えて差し上げますわ。答えられないことでしたら断わりますので、どうかお聞きになつてくださいまし」

「なら、エルフィール家のモンスターはどうやって契約することに成功したのか、聞きたいですわね」

「当然、気になりますわよね。このモンスターの大本は、王家が契約しているモンスターですわ。王家の方々は、わたくしよりはるかに強い能力を使える方が多いのだと聞きますわ」

王家か。またとんでもないところが出どころだな。エルフィール家は王家ともつながりがあるということなのか。それは強い権力を

持ち合わせているはずだ。

「というか、ただの1冒険者にそんなことを聞かせていいのだろうか。なんだか引き返せないところまで進んでしまったような気がする。」

「それで、わたくしの両親の研究成果が、このわたくしの能力なのですわ。かつてこの国を建国したとされる、アーデルハイト様と同種の能力を発現させることに成功したのですわ。」

「もちろん、アーデルハイト様の足元にも及ばない出力と汎用性ではありませんが」

「アーデルハイト。ぼくでも知っている。この国史上最強の契約技使いといわれており、生命の活性化や弱体化、それらを自在に操ることで圧倒的な戦果を誇り、それによってこの国を造った女傑である。」

「今話を総合すると、アーデルハイトは生命力の操作を行うことでそれらを実現したのだろう。活性化までできるということは、生命力の吸収だけではないのだろうか。」

「まあ、考えたところでわかるはずもないか。1000年近く前の話なのだから。」

「それで、その成果によって、わがエルフィール家は王家から勲章を賜ることが叶ったのですわ。わたくしも、その偉大な両親に並べるほどの成果を残したいものですわね」

「サーシャさんは両親のことを本当に尊敬しているみたいだ。そうでないと今のような顔は出来ないだろう。」

「なんかというか、自慢げなような、嬉しげなような、いい顔をしている。ぼくには両親を尊敬するという感覚は分からないけど、きっとサーシャさんの両親は素晴らしい人なのだろう。」

「ご両親の事、尊敬しているんですね。良い両親なようで、少し羨ましい気がします」

「当然ですわ。ユーリ様のご両親は……その顔、訊くべきではありませんでしたわね。失礼いたしましたわ」

「顔に出ていたのか。両親の事はもう振り切ったつもりでいたけど、案外気にしてしまっているのかもしれない。」

「……気にしないでください。ぼくにはアクアがいますし、カタリナも、ステラさんもいます。それに、アリシアさんやレティさん、ユーリヤ、サーシャさんにもたくさん助けられていますから」

「その中にわたくしも含めていただくこと、本当に嬉しく思いますわ。そうですね、せつかくですから、わたくしの好物の一つをごちそういたしましょう。ついてきてくださいまし」

そう言ったサーシャさんにまた手を引かれる。相変わらず恥ずかしいけど、少しだけ慣れてきたかな。

そのまま連れていかれた先には、小さな店があつた。サーシャさんとともに入ると、店員らしき人に迎え入れられた。

「これは、サーシャ様。いかがなさいましたか？」

「こちら、オーバースカイのユーリ様ですわ。ユーリ様に、いつもの物をごちそうしてくださいまし」

「かしこまりました。すぐにお持ちいたします。ユーリ様、こちらへ」

ぼくはサーシャさんと一緒に連れられて行き、サーシャさんと同じ席に着く。結構高そうな調度品の割には、サーシャさんとぼくのテーブルはそれなりに小さい。どういう店なんだろう。

というか、外でサーシャさんと同じ席についていいのだろうか。

しばらく待っていると、テーブルに料理が並べられた。よくわからないけど、肉の入ったスープのようなものが出てきた。

「これがわたくしの好物の一つ、グロリアカウのスープですわ。さ、お召し上がりになって」

サーシャさんは手を付けることもなく促す。ぼくは困惑しながら、スープを飲み始める。

おいしい。肉に手を付けると、とても驚いた。肉ってこんなに柔らかくなるものなのか。

それに、スープの味と混ぜつて、肉だけではない美味しさを感じた。なんというか、層がいつぱいあるような感じでもいいのかな。複雑な味だった。今までに食べたことがないけど、とても美味しいことは間違いないかった。

サーシャさんはぼくが食べる様子を微笑みながら眺めて満足げに

した後、サーシャさんも食べ始めた。

ぼくが食べるより明らかにきれいな手つきで食べ進めていくサーシャさんになんとなく視線を向けてしまった。食べ終えたサーシャさんはこちらに向けて微笑むと、話し出す。

「ふふっ、気に入っていただけだよすわね。ですが、レディの食べる姿をじつと見るというのは、良いマナーとは言えませんが。わたしは構いませんが、相手次第では機嫌を損ねることもありますわ。お気を付けくださいまし。」

まあ、わたくしにユーリ様の視線が集中するというのは、いい気分ではありませんたわ。わたくしはユーリ様にとって魅力的なようですし」

サーシャさんに好感を覚えているというのは確かだろう。本当に色々助けられているし。

それにしても、そういうことも気を付けないといけないのか。マナーというのは大変だな。

それから、ぼくたちは別のところへ移動していた。今度は服屋だ。ぼくはサーシャさんにいろいろと着せられて、どれが似合うか確かめられていた。

「ふふっ。わたくしが着飾るのも楽しくはありますが、ユーリ様の服を自分好みのものにする、というのなかなか良い気分ですわね。わたくしは、これが一番似合うと思いますわ。」

ですので、こちらはユーリ様に差し上げます。冒険者としては着る機会は無いでしょうが、持っていて役に立つこともあると思いますわ」

ぼくが着ているのは、タキシードでいいのだろうか。なんとなく、偉い人が着ているイメージがある服だ。こんなものを貰っても、着る機会があるのだろうか。

まあ、サーシャさんの食事会がまたあるなら、その時に着ていくとかでもいいか。

「それでは、次はわたくしですわね。ユーリ様、どれがわたくしに似合うと思われませんか？」

そう聞かれたので、近くにあるドレスをいくつか眺める。なんとなく目についたのは、青いドレスだった。なんというか、派手過ぎず、地味過ぎず、サーシャさんのイメージに合っているように思えた。

「こちらがお気に入りになりました？　では、今から着替えてまいりますわ」

そう言ってサーシャさんは着替えて戻ってくる。思った通り、サーシャさんに良く似合っている。いつもの可愛らしさと同時に、気品も感じられる。我ながら良い物を選んだな。

「ふふっ、その顔を見れば、ユーリ様がどう思っているかは聞くまでもありませんわね。」

では、わたくしはこれを買いましょう。ユーリ様は他の皆様にも何かお贈りになってはいかが？　わたくしが支払いますので、お金の心配は無用ですわ」

そこまで支払ってもらっていいのだろうか。

ただ、ここの服を買おうとすると、これまでの報酬がほとんど消えてしまう。そんなことをするより、サーシャさんに支払ってもらった方が、みんなのためにはなるだろう。

「心配しなくとも、この程度、わたくしにとって大した額ではありませんわ。それよりも、わたくしとユーリ様から共同で贈った、という形にしませんこと？　わたくしとユーリ様の絆の形、ですわね」

「わかりました。でも、機会があったら何かお返ししたいですね」「そんなこと、ユーリ様が気にすることはありませんわ。わたくしにも、メリットがありますので」

メリットっていったい何だろう。

まあ、サーシャさんの依頼は優先的に受けるくらいしかぼくには出来そうにない。あまり気にし過ぎても、空回りするだけかもしれないな。

それから、アクアには黒のドレスを。カタリナには白のドレスです。テラさんには茶色のドレス、ユーリヤには赤のドレスを選んだ。

アリシアさんやレティさんは、自前の物が余っているくらいらしいのでやめておいた。その代わり、アクセサリーをいくつか選んだ。



「これで全部ですわね。また、わたくしと一緒に彼女たちに渡すことにいたしましょう。ユーリ様、本日は楽しかったですわ。また、こんな機会を用意したいですわね」

それからサーシャさんとぼくは元の待ち合わせ場所に戻った。

「ユーリ様、あなたはあなたが思っている以上に素晴らしい冒険者ですわ。今後も、見守っておりますわ。ですので、安心して冒険者活動をしてくださいな。それでは、また組合で」

そう言ってサーシャさんは去っていく。今日は楽しかったけど、サーシャさんにいろいろ貰い過ぎたような気もする。返していけるように、また頑張ろう。

## 28話 悩み

ぼくはまた冒険者としての活動を行っていた。

あれから、サーシャさんと一緒にみんなに買ってもらった物を贈ったが、みんなは喜んでくれた。

それを着ているところや着ているところを見せてもらったけど、みんなとてもよく似合っていた。良い光景が見られた気がして気分が良かった。

今日もマナナの森でモンスターの間引きを行っていた。サーシャさんが言うには、いつもよりモンスターが増えるペースが速いらしい。何かの前兆かもしれないので、気を付けるようにとのことだった。

「ユ、ユーリさん。わたしたちだけでの活動にも慣れてきましたねっ。アリシアさんやレテイさんがいなくても、ある程度はやれるんじゃないでしょうか」

「まあ、異変がなければ大丈夫だとは思うけど、その異変が起こっているかもしれないんだよね。気を付けるに越したことはないよ」

「大丈夫です。あなたのユーリヤが、ユーリさんのことをしっかりと守って見せますっ」

「うん。ユーリは何があっても守る。油断はしない方が良くけど、心配しなくていい」

「ユーリがアクアやユーリヤを守ってやるのよ。あんた、それくらいはちゃんとしなさいよ。ま、仕方ないから背中くらいは守ってあげるわ」

みんなしつかりした顔をしていて本当に心強い。何があってもとはいかないかもしれないけど、大抵の事ならみんながいれば乗り切れるような気がした。

それからしばらくモンスターを倒していると、モンスターが不自然に減っているところがあった。もしかしたら、異変の原因かもしれない。

「みんな、気を付けて。何かおかしい。いつでも戦闘に移れるように

「しておいて」

「分かってるわよ。ユーリ、あんたこそ気をつけなさいよ。あんたは弱っちいんだからね」

「ユーリさん、その感覚、当たっているみたいですよ。あそこを見てください」

そうやってユーリヤは指を指す。目を凝らして見てみるものの、何かあるようには思えない。ついユーリヤの方を見てしまう。

「そうでした。わたし、とつても目が良いんです。あの先に危険なモンスターがいますから、気を付けてくださいね」

「近づいても大丈夫そうかな？　どんなモンスターかは分かる？」

「恐らくドリアードです。アクア水が届く位置くらいなら、大丈夫ですよ」

ユーリヤの言葉を信じて、そちらの方へ向かっていく。ぼく、アクア、ユーリヤ、カタリナの順でドリアードだというモンスターに近づいて行った。

ある程度近づくとモンスターが見えてきた。木が人型になったような存在。確かにこれはドリアードだろう。そう思っていると、ドリアードに話しかけられる。

「ようこそ、皆さん。せっかくここまで来てくださっただからです、歓迎しますよ。こちらへどうぞ」

そうやってドリアードは手招きする。どうしようか迷っていると、ユーリヤが耳元で声をかけてくる。

「ユーリさん、あそこ。落とし穴ですよ。あのドリアード、こちらを罠にはめる気ですよ」

ユーリヤが指さす方を見るが、よくわからない。なので、その地面の中にアクア水を出現させる。

すると、確かに地面は空洞になっっている。棘のようなものまであった。確かにこれは罠だろう。ぼくは地面をアクア水で壊す。

そして、地面に穴ができる。それから、その様子を見ていたドリアードが本性を現した。

「ぎーンねん。気づかれちゃったか。でも、あなたたち程度じゃ私を

倒せるはずがないんだから、さっさと諦めて養分になりなさい」

「あなたごときにあたしたちが負けるわけないでしょ。いいわ。さっさと片付けてあげる」

強気な言葉を発するカタリナだったが、警戒は緩めていない。鋭い顔をしたままだ。

アクアがドリアードに近づくのに合わせて、カタリナは弓を放つ。ドリアードに突き刺さったが、ドリアードは特に気にした様子もなく、こちらに近づこうとしてくる。ぼくたちはいったん距離を取る。すると、ドリアードが木の根のようなものをこちらに伸ばしてきた。ぼくはアクア水でそれを弾いてその軌道をずらす。

「水を私にくれるなんて、本当はもう諦めてるのかしら？　なんにせよ、いい気分だわ。水分までもらえるんだから」

ユーリヤが鉄の糸で攻撃しているようだが、それも効いていない。だが、さっきの言葉でいいことを思いついた。ぼくはアクア水をドリアードに向けて放つ。

「美味しい水ね。わたしの養分になる気になったようね。ほら、こっちに来なさい」

そう言っただりアードはアクア水を吸収する。ぼくはそこから、ドリアードの体内の水分ごと、アクア水をドリアードの体外へと出した。するとドリアードは苦しみます。

「どうして、こんな奴なんか……ねえ、悪かったわ。だから、助けて頂戴よ。ね？　お願い」

「そう言っただ、またぼくたちを狙うつもりなんでしょう。その手は通じませんよ」

不意打ちをしようとしてきた相手の言う事を信じる気にはなれなかったから、そのままとどめを刺す。

「嫌……いやあ！　なんで、なんでなの！　私はただ生きていただけなのに……」

ドリアードは苦しみを顔に浮かべたまま息絶える。とても苦しうだった。

もしかしたら、ドリアードは本当に反省していたのかもしれない。

そう思うと、なんだか心が沈んだ。

「ユ、ユーリさん。うまくやれましたねっ！ 大物を退治できましたよっ」

「……そうだね。ユーリヤ、今回はありがとう。おかげで助かったよ」  
「ユ、ユーリさん。何か気になることでもあるんですか？ あなたのユーリヤが、相談に乗りますよっ」

気になることというか、ちよつと気が重いというだけではある。いずれ通らなくてはいけなかった道だろうし、隠すことでもないか。

「あのドリアード……本当に反省していなかったのかな。少し気になっちゃって」

「そ、そうですね。モンスターというのは凶暴なものが多いので、ユーリさんとアクアちゃん、アリシアさんとレテイさんのような関係を築けることはほとんどありません。きっと、反省なんてしていませんよっ」

「そうだよね。そのはずだ」

口ではそう言うけど、納得できてはいない。ぼくのそんな様子を見たカタリナは、少し心配そうな顔をしてからぼくに話しかけてくる。

「なによ、うじうじしちゃって。大きいモンスターを倒せたんだから、さっさと帰りましょ。あんたがそんなざまなら、あたしたちまで危険になっちゃうわ」

「ユーリ、帰ろう。アクアをいっばい撫でるといい。きっと落ち着く」  
「そうだね。なら、帰ろうか」

そしてぼくたちは組合へ戻り、サーシャさんに報告する。サーシャさんは高額報酬を約束してくれた。

それから、家に帰ったぼくは、ステラさんに先ほどのことを相談する。

「今回初めて人型のモンスターを倒したんですけど、なんだかすごく後味が悪くて。この前、男たちに襲われたとき、殺してもいいかと思っていたんですが、ぼくは簡単に考えていたんですね。こんなに苦しいとは思わなかったです」

「なるほど。モンスターには言葉が通じるものもいますからね。そう

「いうモンスターは人を騙して餌食にすることが多いです」

それはぼくも知っていたし、ドリアドからは怪しさばかりを感じたから、とどめを刺した。

「人と契約するモンスターのほとんどは、タイムしたモンスターが進化したものですから。だから、きつとそうするしかなかったんです」  
ステラさんは悲しそうな顔を浮かべて話す。ぼくとしては、本当に和解の道はなかったのだと信じたけれど、つい分かり合えたかもしれないと思ってしまう。

「それに、私はたとえほかの人を犠牲にしても、あなたたちには無事に帰ってきてほしい。今回ユーリ君が倒したモンスターと話を通じる余地があったとしても、あなたたちの安全に替えるようなことをして欲しくありません。」

ユーリ君、あなたはカタリナさんやアクアちゃん、ユーリヤさんのためにモンスターを倒したんですね？ それでいいんです。きつと皆さん、あなたの優しさが通じていますよ」

話の最後あたりでステラさんはとても優しい顔になった。

ステラさんの言う通りかもしれない。ぼく一人だったら、きつともっと対話の余地がないか探っていただろう。皆で無事に帰るために、話を打ち切ることに決めた。

でも、それって自分の行動の責任を皆のせいに行っているようなものだ。それでいいんだろうか。

「まだ納得がいていないようですね。初めての事ですから、仕方がありません。」

ですが、アリシアさんとレティさんに相談してみるのはいかがでしょう。私はあくまで冒険者とは関係のない人間ですが、彼女たちなら、また別の視点から何かアドバイスを頂けるかもしれません。話私の方から通しておきますから、彼女たちの話を聞いてみてください  
「い」

ステラさんはぼくの相談に本気で応えてくれている。だから、しっかりこの問題を解決したいと感じた。

それからその日はアクアを強く抱きしめて眠った。アクアのそば

にしているとやっぱり安心できる。アクアにはいっぱい安心させてもらっているし、アクアに悩みが出来たなら、ぼくが解決してあげたい。次の日、アリシアさんとレティさんにドリアドの件について相談した。

「人型のモンスターを倒したときの後味の悪さって、なにか軽減させる方法ってありますか？」

「君たちはドリアドを倒したんだっただね。ドリアドはとても厄介なモンスターだ。まずは、君たちがドリアドを倒せるようになったことを褒めておこう。本当におめでとう、君たちはよくやった」

「ありがとうございます……」

アリシアさんたちはぼくの姿を見て納得しているような顔をした。もしかしたら、よくある悩みなのかもしれない。

「相当気に病んでいるようだね。でも、それは仕方のないことだ。モンスターと契約するような人間が、モンスターとの対話の可能性を信じていなければ、そのモンスターと契約者は必ず破綻するだろう」

そうだよ。アクアの事を話を通じない相手だなんてとても思えないし、レティさんだってそうだ。だから、他のモンスターにも話が通じると期待したんだ。

「それに、君の感じている罪悪感はとても大切なものだ。人を傷つけることに何も感じていないような人間は、容易に他者を傷つける。その結果として周りに敵がどんどん増えるということは良くある話さ。冒険者が頼れる他者というのは存外少ない。

だから、周りに敵を増やすばかりでは、簡単に立ちいかなくなってしまう」

ぼくは敵に対して容赦したいわけでは無い。他者を傷つけることは苦しかったけど、それでためらった結果としてカタリナやアクアにユーリヤ、他の大切な人たちが傷ついてしまうことの方が怖いから。でも、敵を増やしてみんなが危険になることも、同じくらい避けなないといけないよね。

「結論としては、とても陳腐になるけど、慣れるしかないということになる。それまでの間、君はパーティーの皆や、サーシャさん、ステラさ

んのためだと思って戦うといい。君は君自身のためだと力を発揮できないところがあるからね。

今は周りの人のために、敵を倒すんだ。いずれは自分のためにも出来るようになってほしいけどね。それはおいおいにしていこうか」

うん。結局そうなるよね。でも、アリシアさんも同じ意見だと思うと勇気が湧いてくる。今でも完全に納得はできないけど、そうするしかない事はよくわかる。

「うんうん。それに、わたしが言うのもなんだけれど、わたしやアクアみたいに人と友好的なモンスターって、いないようなものだと思うた方がよいよ。」

アリシアもわたしがいたから、モンスターと対話しようとして危ない目にあつたことは何度もある。わたしは止めたんだけどね。アリシアも通つた道だから、あなたの考えることはよくわかるよ。その上で言うけど、よっぽどいい出会いがない限り、あなたが信じるのは、わたしとアクアだけで良いかな」

そんなものなのか。アリシアさんたちでもうまくいつていないのなら、ぼくたちがうまくやることはとても難しいはずだ。なら、仕方のない事なのかもしれない。

「それを言われると恥ずかしいな……でも、君には私たちがいる。つらいときは、そのことを思い出してほしい」

「ありがとうございます。いますぐ解決はできませんが、アリシアさんとレティさんの言葉、大事にします」

「うん。それでいい。また何かあつたら、気軽に相談してくれていいからね」

そう言つてアリシアさんとレティさんは去つていった。もやもやが消えたわけじゃないけど、頑張るための活力が湧いてきた。大丈夫。今度はきつともつともうまくやれる。



## 29話 誘惑

ぼくはあれから何度か人型のモンスターを倒すことに成功していた。苦い思いを感じなくなっただけではなかったが、きちんと飲み込めるくらいの感情にはなっていた。

そんな中でステラさんに休みを提案されたので、今日は久しぶりの休みだった。ステラさんの家でゆっくり過ごすことになっている。

ぼくはステラさんに誘われ、ステラさんと二人でのんびり過ごしていた。

「ユーリ君。冒険者になってから、ユーリ君はよく頑張っていますね。ですが、頑張るだけでは駄目ですよ。ゆっくり休んで疲れをとる。それも大事なことです。ユーリ君は他の人のために頑張りがちですが、無理をすれば、結果的にあなたが大切に行っている人たちに負担がかかることにもなりかねません。自分のためだけではなく、周りの人たちのためにも、休息は大切なことなのだと思います」

確かにそうかもしれない。ぼくの疲れがたまったら、必然的に動きが悪くなるだろう。

そうになると、それをフォローするための動きが必要になることは間違いない。

それに、ぼくが疲れているということは、他の人たちも疲れるだけのこととはしているはずだ。ぼくだけが頑張っただけでどうにかなる問題ではない。それを思えば、休息は必ず必要なことなのだろう。

「ですから、こういうことを考えてみました。ユーリ君、こちらへどうぞ」

そう言っ、ステラさんは正座している太もものあたりに手を添える。

これは、何をすればいいんだろう。ステラさんに近寄ることは確かだろうけど。悩んでいることを察したステラさんは、説明を追加してくれる。

「ユーリ君、私の太ももに頭をのせてください。ふふっ、良いことをして差し上げますよ」

ステラさんの太ももに頭をのせる……？ 枕みたいにするばいいんだらうか。よくわからないなりにステラさんの太ももに頭をのせると、何とも言えない柔らかさと、ほのかないい匂いを感じた。ものすごく緊張していると、ステラさんに頭を横にされる。一体何をされるんだらう。このまま寝ればいいのか。

「ユーリ君、じっとしててくださいね」

そう言っただけステラさんはぼくの耳の穴に何かを入れる。少し驚いたが、じっとしていると言われていたのでそのまま我慢する。

ステラさんはその棒のようなものでぼくの耳の穴をこすっていく。ぼくは心地よいような、少し怖いような感覚を覚えていた。

しばらくじっとしていると、最後にステラさんはぼくの耳を吹く。少しいとうとしていたぼくは、驚きとともにくすぐったさのようなものを感じた。これで終わりかな。

「ユーリ君、今度は反対側を向ってください。寝返りを打つような感じでいいですよ」

ステラさんに言われた通り、反対側を向くと、ステラさんのお腹が目の前にあった。

なんだかいけないことをしているような気分になるし、柔らかいし、暖かいし、いい匂いもする。ぼくはとてもドキドキしていた。

そんなぼくを気にした様子もなく、ステラさんは反対側の耳にも同じようなことを始める。先ほどとは違い、やることは分かっていたので、さつきよりは落ち着いた気分です。ステラさんの行為を受け入れていた。

逆側の耳も終えたステラさんは、ぼくの頭を撫でながら、優しい声でぼくに語りかける。

「これが耳かきです。どうです、ユーリ君。落ち着いた気分になったのではないのでしょうか」

これは耳かきというのか。ステラさんの言う通り、本当にぼくは落ち着いた気分になっていた。ステラさんの温かさに包まれているような気がして、とても大きい安心感があった。ステラさんはぼくの頭を撫で続けたまま、ぼくに話しかけてくる。

「ユーリ君、このまま眠ってもかまいませんよ。ユーリ君も少し疲れただしょう。私の膝で、ゆっくり眠ってみるのはいかがですか？」

ステラさんの言葉は相当魅力的だ。なんだか眠くなっていたこともあるし、ステラさんの膝の上は本当に安心感がある。

ステラさんの声も優しい感じで落ち着くし、頭の撫で方も落ち着いた感じで心が安らぐ。

それに何より、優しいステラさんのそばにいられるという事が、ぼくにとっては魅力的だった。

「ふふっ。いい気分でしょう。さあ、ユーリ君、ぐっすり眠ってくださいね。その間、私はユーリ君のそばにいますから。安心して、眠っていていいんですよ」

その言葉を聞きながら、ぼくの意識はゆっくりと落ちていった。

それからしばらくして目を覚ますと、ステラさんは微笑んだまま、ぼくの頭を撫でてくれていた。

「ユーリ君、目を覚ましましたか。どうでしたか？ 私の膝の上で眠るのは」

本当に最高だった。何か暖かい物に包まれているような心地でいられたし、疲れもものすごくとれている。また頼めるのなら、何度でもお願いしたいくらいだった。

「とてもいい気分でした。ステラさん、本当にありがとうございます」  
「いいんですよ、ユーリ君。あなたが私のことを大切に思ってくれているように、私もあなたを大切に思っています。これくらいの事でユーリ君が喜んでくれるなら、いつだって、何度だってかまいませんよ」

ステラさんがぼくを大切に思ってくれているというのは本当に嬉しい。ステラさんは、ぼくが心の底から尊敬している数少ない人なのだ。

まあ、大切に思ってくれているだろうとは思っていたけれど、こうして言葉にされると格別の思いがある。ぼくが喜んでいると、ステラさんはぼくの耳元に口を寄せて小さく話しかけてきた。

「ユーリ君。あなたはこれまで、とても頑張ってきました。最近だっ

て、つらい思いをしているというのに、人型モンスターをしつかり倒してしまいましたよね。ユーリ君の頑張りは私が見ています。

ですから、たまには、私に溺れてくださってもかまいませんよ……？ ユーリ君が望むのなら、これ以上のことだって……」

ステラさんの言葉を聞いて耳元がぞくぞくする。彼女の提案はとても魅力的だった。

だけど、すぎるような気持ちでステラさんに溺れるというのは、ステラさんを利用してみたいような気分になる。だから、答えははっきりと決まっていた。

「ステラさんの気持ちは嬉しいです。ですが、これ以上甘えるわけにはいきません。」

ぼくは、ステラさんにも、他の皆にも、胸を張って誇れるぼくではないんです。たまには甘えなくなる時もあるでしょうが、ステラさんに溺れてしまつては、ステラさんの生徒にふさわしいぼくとは思えない。

だから、ステラさんに溺れてしまうわけにはいきません」

「そうですね。ユーリ君らしい答えですね。ですが、少しでも残念です。ユーリ君を溺れさせるというのも、それはそれは楽しそうだったのですが」

そう言つてステラさんは妖艶に微笑む。

なんとというか、大切なものをステラさんの手の内に持たれているような気分になつて、少しでもぞくぞくした。ステラさん、こんな表情もできるんだ。

少しだけ怖いような、もつとステラさんに大切なものを握られてしまいたいような、不思議な気分だった。

「それでは、ユーリ君には断られてしまいましたし、別の事をしましょうか。この間と同じように、マッサージはいかがですか？」

「わ、わかりました。お願いします、ステラさん」

マッサージか。さっきの話があつたばかりだし、なんだかドキドキが収まらない。こんな調子で上手く力を抜いてマッサージを受けられるだろうか。

でも、ステラさんのマッサージ、本当に気持ちいいんだよな。

「では、また着替えておいてください。こちらも準備しておきますね。ふふっ」

ステラさんはまた妖艶な感じで微笑む。何か企んでいるのだろうか。

でも、ステラさんになら、何か仕掛けられても受け入れてしまいうだ。一見怪しげなことだとしても、ステラさんが信じてほしいというなら、ぼくは信じてしまうような気がする。もうぼくにはステラさんを疑うことは出来そうになかった。

ぼくが準備を終えて部屋で待っていると、ステラさんも遅れて入ってきた。その格好を見て驚く。

ステラさんは、体のラインが露骨に出ている服を着ていた。ぼくは思わずつばを飲み込んでしまう。ステラさん、とてもスタイル良いんだな。

いや、そうじゃない。無心。無心にならないと。

「ふふっ、ユーリ君、どうですか？ 気に入っていただけましたか？ いいですよ、もっと近くで見ても……」

ステラさん、なんだか今日は挑発的だな。ステラさんの意外な一面を見た気がする。ステラさんは、そのままぼくの方へきて、耳元でささやく。

「ユーリ君、今回もうつぶせになってください。ふふっ。前よりも楽しい時間にしましょうね……？」

今日のステラさんとはとても意地悪だ。

でも、ステラさんに振り回されているんだと思うと、こういうのもいいかなという気持ちになってくる。これもステラさんの魅力なんだろうか。

まあ、なんでもいいか。ステラさんがぼくを傷つけようとしているわけじゃないし、これくらいのも事でステラさんの優しい印象は変わったりしない。

それからぼくはステラさんにマッサージを受けた。ステラさんはマッサージをしながらぼくにまたがったり、いろいろな部分を押し付

けてきたりしていた。

ずっとドキドキしていたけど、マッサージ自体に不備があるわけじゃないから、何ともしがたい。裏側のマッサージを終えると、ステラさんはぼくに仰向けになるように促す。逆らうことを考えることもできず、ぼくはそのまま仰向けになった。

ステラさんは、同じようにぼくの表側もマッサージしていく。ステラさんのいたずらっぽい表情が見えて、ぼくはさつきよりさらにドキドキしていた。

足から腕、さらに胴体とマッサージを進めていったステラさんは、最後にぼくに吐息がかかるくらい顔を近づけ、語りかけてきた。

「どうですか、ユーリ君。私に溺れる気になってきましたか……？」

ぼくはステラさんに本当に溺れてしまいそうな気持ちになった。

でも、ここで溺れるわけにはいかないと思った。なんとなく、一回溺れてしまうと、際限なく深みにはまってしまうような気がしていた。力を入れて首を横に振ると、ステラさんは楽しげに笑った。「そうですか、残念です。ですが、いつでも待っていますからね……？」

そういったステラさんの表情は、たぶんこの人に全部奪われるような人も出てきそうなくらい魅力的だった。

それから、ステラさんはぼくを誘惑してくることもなく、普段通りの一日が過ぎていった。今日は本当にドキドキしたけど、随分疲れは取れた。総合的には癒やされた一日だったとっていいんじゃないかな。

でも、なんとというか、ステラさんにも怖いところがあるんだな。そう思わされた。

### 30話 デート

ぼくは今日、ユーリヤとデートすることになっていた。

サーシャさんと出かけてからずっと頼み込まれ続けて、ついに押し切られてしまった。

まあ、決まってしまったことだから、ユーリヤをもっと知る機会にして、ユーリヤともっと親しくなれればと思っていた。

ユーリヤはパーティに入ったばかりだけど、なんだかんだで仲良くなるということは、パーティ活動するうえで大切なことだと思う。

少なくともぼくは、仲が良くない人とうまく連携できるような気はしない。

しばらく待ち合わせ場所で待っていると、後ろから目をふさがれる。

何事だ。急いでぼくはアクア水を出現させようとした。

「だーれだっ」

ユーリヤの声だ。安心したぼくは警戒を解いて力を抜く。ユーリヤはこういうイタズラもするんだな。

それにしても、本当に驚いた。良かった、ユーリヤで。

でも、アクア水をぶつけようとするのはまずかっただろうか。

いや、好意的な相手ばかりとは限らない。相手を傷つけずに無力化できる手段とか、思いつくといいな。

そうすれば、とりあえずそれを実行できる。それはまあ後でいいか。まずはユーリヤだ。

「ユーリヤ、だよね」

「は、はい。ユーリヤさん、今日の事が本当に楽しみでしたっ。今日はユーリヤさんをいっぱい楽しませてみせますよっ」

「うん、楽しみにしてる。でも、ユーリヤもしっかり楽しめるようにしようね」

「わ、わたしはユーリヤさんと一緒にいられるだけで楽しいんですっ。ですから、ユーリヤさんは安心して楽しんでいってくださいっ」

ユーリヤは本当はぼくに対して好意をあげすけに示してくる。一

体ぼくの何がそんなに気に入ったのだろう。

ユーリヤの手が離れたぼくは、ユーリヤの方を見る。ユーリヤはワンピースのような服を着ていた。笑顔のユーリヤには本当に似合う。改めて思うけど、ユーリヤって本当にきれいだな。でも、大丈夫なのかと心配になるくらいの白さだ。

まあ、ユーリヤが苦しそうにしているところなんて見たことがないし、きつと大丈夫なのだろう。

「今日はユーリヤが予定を決めてきたんだよね。まずはどこに行くつもり？」

「ま、まずは食べ歩きをしようかとっ。色々調べてきたんです。ユーリさんはきつと気に入ってくれますよっ」

食べ歩きか。お腹もそこそすいているし、ちょうどいいかもしれない。

ユーリヤは何故かわからないけど、本当にぼくの好みをよく知っている。そのユーリヤがぼくは気に入ると言うのだから、本当に美味しいのだろう。ぼくは今から楽しみだった。

しばらく歩いて店が並んでいる場所に着いた。うん。中々おいしい匂いがしている。

ユーリヤはあつという間にいくつかの商品を買いそろえ、ぼくに差し出してくる。

「はい、ユーリさん。こちらをどうぞ。わたしのおすすめですっ」  
「ありがとう、ユーリヤ。じゃあ、さっそくいただきますかな」

ユーリヤに差し出された料理はどれも串に刺さっている。  
1本つつ食べ進めていくけど、どれもぼくの好みに合っていた。ユーリヤは本当にどうやってぼくの好みを知ったのだろう。

ある程度食べ進めていると、ユーリヤの食べているものが目に付く。あれも美味しそうだな。

「ユ、ユーリさん。これが気になるんですかっ？ では、はい、あーん」  
そうやってユーリヤは自分が食べていたものを差し出してくる。

手で受け取ろうとするとユーリヤはそれを避け、ぼくの口元へと向けてきた。これを食べろということだよな。なんだか恥ずかしいな。



少し気合を入れてユーリヤの持つ食べ物を口に入れる。

うん。思っていた通りに美味しい。ユーリヤなら、これがぼくの好みだとわかっていてもおかしくないような気もするから、ぼくに先に渡さなかったことが気になる。まあそういうこともあるか。

ぼくがユーリヤの食べ物を食べ終わると、ユーリヤは口を開けて待つようなしぐさをする。

ぼくが食べているものをあげればいいんだよね。ユーリヤに食べ物を差し出すと、ユーリヤは直接食べた。

これ、食べる時もなんだか恥ずかしかったけど、食べさせるのもそれはそれで恥ずかしいな。ぼくは少し照れてしまう。

「あ、ありがとうございます、ユーリさん。なんだかユーリさんの味にするような気がして、とつても美味しかったです」

食べかけしかなかったからそれを渡したんだけど、そういうことを言われるとちよつと気になってくる。

さつきぼくが食べたものもユーリヤの食べかけだったよな。あれにもユーリヤの味がしたのだろうか。いや、変なことを考えちゃだめだ。落ち着け。

しばらくして、すべてを食べ終えたぼくたちは次の店へと向かっていた。

ユーリヤはついてからの秘密とっていたけど、どんな店だろう。

そのまま歩いていけると、服を並べている店へとたどり着く。

「ユ、ユーリさん。次はここですっ。ユーリさんの服は私が選んであげますねっ」

そのままユーリヤはぼくに何回も服を着せていった。気分はまるで着せ替え人形だ。

それにしても、ぼくの服を選んでるユーリヤは本当に楽しそうだな。ぼくはいつの間にか、服についてよりも楽しそうなユーリヤの事ばかり考えていた。

そのまましていると、ユーリヤは何か気に入った服が見つかったらしく、それを見ながら何度もうなずいていた。

「ユ、ユーリさん。これならばつちりですよっ。とても似合っていますよ」

すっ」

「ありがとう、ユーリヤ。似合うかどうかはぼくにはわからないけど、これ、すつごく着心地が良いんだ」

「な、なら、この服は買っておきますねっ。ユーリさんが私の選んだ服を着るの、楽しみにしていますねっ」

ユーリヤはとても楽しそうな顔でぼくの姿を見ている。

この服がぼくに似合うかは分からないけれど、ユーリヤが頑張っを選んでくれたものだと思うと、絶対着ようという気になる。

でも、自分の服は自分で買いたいよね。

「買ってもらうのは悪いよ。ぼくの服だし、ぼくが買うから」

「い、いえ。わたしが買った方が、ユーリさんに着てもらったときに嬉しい気分が増しますから。気になるというなら、わたしの服を選んでくださいっ」

なるほど。贈り物なら、確かに自分のお金で買った方が気分が乗るというのは分かるかもしれない。ここはユーリヤの言葉に乗っておくか。

それにしても、ユーリヤの服を選ぶのか。サーシャさんの時も思っただけど、女の人って服を選んでもらいたがるものなのだろうか。

それとも、よくあるコミユニケーションなのだろうか。カタリナは自分で選びたがるし、よくわからないな。

「ユ、ユーリさん。サーシャさんの選んだ服より、こっちの服の方が着る機会が多いですよねっ。これなら、ユーリさんは、わたしの色の方が強いですよねっ」

そんなことを言われても困ってしまう。

まあ、サーシャさんの服を普段から着るわけにはいかないというのは確かだけど、そのまま答えていい物なのだろうか。何か嫌な予感がある。

「ユ、ユーリヤの服を選ぼうか。ユーリヤはどんな服が好みかな？」

「そ、それを言ってしまうては意味がありませんよっ。ユーリさんの好みで選んでくださいっ」

ぼくの好みか。自分ではよくわからないけど、この前の店だったと

して、サーシャさんと同じ服をユーリヤに着せたいとは思わないな。ユーリヤにはユーリヤに似合う服があると思う。

でも、どういったものがいいだろうか。

ユーリヤの方を見ていると、ユーリヤが着ているワンピースが目に入る。これ、ユーリヤに似合っているな。これと似たようなイメージの服ってあるかな。

それからしばらく服を探していると、1つの服が目に入る。短めのスカートと、薄い生地の上着。ユーリヤが着ているワンピースとは違うけど、なんとなくこれはユーリヤに似合うんじゃないかと思った。「ユ、ユーリさんはそれを気に入ったんですねっ。なら、着替えてきませねっ」

着替えてきたユーリヤを見て、ぼくの直感は合っているなと思った。

表情のない時のユーリヤの冷たさにも、ころころ変わるユーリヤの明るい表情にも合っているような気がした。思わず見とれてしまう。

「ユ、ユーリさんの顔を見ただけでわかりますっ。これ、絶対に買いますからっ」

「大丈夫、ぼくが買うよ。ユーリヤ、今日は本当にありがとう。これはお礼だよ」

「い、いえ。お礼なんて気にしなくてもっ。でも、ユーリさんがくれるというなら、絶対に大切にしますねっ。でも、ユーリさん。下着も選んでくれてよかったですよっ」

ユーリヤは真剣な顔でそう言ってくる。からかうような顔なら簡単に断れるけど、この顔だと少しだけ悩んでしまう。でも、さすがに下着はね。

「そ、それは困っちゃうから。ユーリヤ、ほら、行こう」

「ユ、ユーリさんならそう答えますよね。でも、いつでも待っていますからっ」

ユーリヤはいたずらっぽいな表情でそう言った。からかうつもりも混ざっていたのかな、これは。

でも、ユーリヤが本気だとすると、彼女は押しが強いから、いずれ

押し切られてしまうかもしれないな。

そして選んだ服の会計を済ませ、ぼくたちはステラさんの家へと帰った。

「ユーリヤさん、デートはどうだったの？ あんなに誘ってたんだから、気合入ってたでしょう。あんた、ちゃんと楽しませてあげたんでしょうかね？」

「カ、カタリナさん。ユーリさんはすっかり私を楽しませてくれました。でも、今日はもう少しユーリさんをお借りしてもよろしいでしょうか？」

「もう少し？ ま、いいわよ。あんなに必死だったんだもん。少しくらいはあたしのユーリを貸してあげるわ」

いつからぼくはカタリナのものになったのだろう。まあいいか。

カタリナなら、大抵の事なら受け入れられる。ほんとに監禁とかされるなら困っちゃうけど、カタリナがそんなことをするわけがないね。

それにしても、家に帰ってからもやることがあるのか。ユーリヤ、何をしようとしてるんだろう。

「ユ、ユーリさん、ステラさんにマッサージされていたんですね。気持ちよかったですか？」

「ステラさん、そんなことまでユーリにしたの!? あんた、ステラさんに変な目を向けたりしていないでしょうね」

カタリナはジトっとした目でこちらを見る。ちよつと変な目を向けてしまったかもしれないので、返答に困る。

それにしても、ユーリヤはどこでそんなことを知ったのだろう。ステラさんが教えたりはしない気がするけど。

「ユ、ユーリさん、こちらに来てください。では、カタリナさん、また今度」

ユーリヤに連れられて部屋を移動する。そこにはステラさんがいた。何か嫌な予感がしてきたんだけど、大丈夫かな。

「ス、ステラさん、この間、ユーリさんにマッサージをされていましたよね。わたしにもその部屋と道具を貸してほしいんですっ」

「わかりました、ユーリヤさん。ふふつ、ユーリ君とですか。楽しんできてくださいいね」

ステラさんはこちらに意味深な笑みを浮かべる。どういう意味を持ってしているんだろう。

それより、ユーリヤがマツサージをしてくれるのだろうか。

マツサージに使った部屋に入ると、ユーリヤが着替えてくると言っ  
て出ていく。あれ？ ぼくが着替えることはいいいのかな。

しばらく待っていると、ユーリヤがこちらに来了。ユーリヤの姿を  
見てびっくりする。これ、マツサージを受ける時の格好じゃないか。

まさか、ぼくにマツサージをさせるつもりなのか？ いや、どうす  
ればいいんだろう。

「ユ、ユーリさん。わたしにマツサージをしてくださいいっ。ユーリヤ  
の全部、ほぐしてくださいいっ」

やっぱりそうなるか。ユーリヤはうつぶせになっていく。仕方な  
い。軽くするくらいならいいか。ユーリヤには助けられているし、こ  
れくらいのお願いなら聞いてあげたい。

そしてマツサージを始めたのだが、ぼくは緊張で頭がいつぱいだっ  
た。変なところには触れていないのに、柔らかいし、ハリがあるし、な  
んか変な気分になりそうだった。

腕に脚、それから背中をほぐし終え、ぼくは疲れ切っていた。

これ以上は持たないと思ったぼくはユーリヤにここまでにしよう  
と言った。

「ユ、ユーリさん。もつといろんな所をしてくれてもいいんですよつ。  
表側だって……」

「だ、だめだつてば。これ以上するならもう今後もしないからね」

「はあ……でも、ユーリさんならそう言う気がしていました。でも、  
ユーリさん、気が変わったら、どんなところだつて触つていいんです  
からねっ」

そう言つてユーリヤは去っていく。ユーリヤは本当に押しが強い  
な。でも、ユーリヤともつと親しくなれた気がする。

ユーリヤはなんだかんだでしつかり一線を見極めている。周りが

良く見えている人だ。

改めて、ユーリヤがパーティーに入ってくれたのは幸運だったな  
と思った。

### 31話 カタリナと

ぼくは今日、カタリナと装備を整えるための買い物に来ていた。ある程度お金もたまったことだし、そろそろ装備を更新しようチームのみんなで相談して決めた。

ユーリヤの武器はほとんど新品同然だったので、今回はカタリナと二人で来ることにしていた。まずはカタリナの弓と矢を見るつもりだ。

ぼくたちは武器屋で弓と矢を見ながら相談していた。弓はある程度良い物を買うつもりだが、矢をどうするかは悩みどころだった。

あまり高い物を使うと、どんどんお金が減っていくことになるので、収入が減ったときのことを考えるか、高い成果を出すための出費と割り切るか。そのバランス感覚が求められていた。

いろいろ矢を見ていく中で、いろんな矢が見つかった。

爆発物がセットされており、当たった相手にさらにダメージを与えるもの、モンスターの素材が使われており、それに応じた効果が発動できるもの、毒が仕込まれているもの、油が仕込まれており、火矢に使えるもの。

確かに便利なのだろうけど、値段も考えるとどれもしつくりこなかった。

切り札にすることも考えたが、ずっといろんな種類を持ち込めば、不便なだけだろうという判断になった。

悩んでいると、カタリナがこちらに矢を持ってくる。

「これなんかどうよ？ 矢の先に仕掛けがあつて、矢の中に入れておいたものが、命中した時に出てくるそうよ。

見た目の割にいろいろ入るみたいだから、アクア水と一緒に何か入れておいて、アクア水ごと操作できたら便利そうじゃない？」

カタリナから提案された矢を見てみると、矢の後ろ側に何か入れられるようで、入れた後は閉め切れるようだった。

当たったときに矢の先から仕込んでおいたものが出る構造になっているらしい。値段も手ごろで、モンスターの素材を使っているもの

よりも、はるかに安かった。

でも、矢の中に入るサイズで、アクア水と一緒に動かせるものか。何があるかな。粉状の物か、液体状の物に限られるよね。

まあ、毒を入れておいて、アクア水で敵の体に入りやすくするだけでも最低限の仕事はできるか。それ以上のことは、何か新しく思いついた時でもいい。この値段なら、それでも損はしないだろう。

いや、アクア水が入れられるのなら、矢が外れそうな時でも操作できるじゃないか。カタリナが撃つ速度よりアクア水で矢を速くすることもできる。

アクア水なら、一日くらいは置いておいても問題なく操作できる。これはかなり便利じゃないか？ ぼくはこの矢を買うことに決めた。「カタリナ、これならいろいろと使えそうだよ。これ、買っておこうか。あるだけ買ってでもいいんじゃないかな」

「何か思いついたようね。ま、あんたがそこまで気にいるのなら、1回くらいは買ってやってもいいわよ。せいぜいこれを使ってあたしの役に立ちなさい」

結局、普通の矢以外は先ほどの矢だけを買うことにした。弓はどうするか。カタリナに全部任せてもいいけど、それなら別のものをその間に見ておきたい気もする。

まあ、カタリナとこうして二人でいるのも久しぶりな気がするし、一緒に見るのも悪くないかな。

それからしばらくカタリナが弓を選んでいるのを見ると、カタリナは木製の弓と金属製の弓で悩んでいるようだった。

どういう所で悩んでいるのか気になったので、カタリナに聞いてみる。

「カタリナ、何について悩んでいるの？ とりあえず話してみるだけでもどうかな」

「あなたには分かんないでしょうけど、ま、いいわ。あたし、金属製の弓って使ったことがないのよね。ちゃんと管理すれば、木製の弓より持っらしいし、射程も長いそうよ。」

ただ、引くのに相当力があるらしくて。木製の弓はいつも使ってい



るんだけど、良い物があつたとしても、結局そう長いことは使えないのよね。だから、どちらを買おうか悩んでいるのよ」

「だったら、両方を買ってみてもいいんじゃないかな。それくらいの予算はあるよ」

「使わない方の手入れもしくちやいけないなんて、あたしは嫌よ。でも、今回きりならいいかもしれないわね。次からは金属製か木製かで悩むことは無いでしょうし」

せっかくの機会だから、カタリナには新しい道具を試してもらおうといいかな。カタリナも興味があるから悩んでいるはずだし、1度くらい失敗してみてもいいだろう。

「金属製がだめだったら、木製にするってことでいいんじゃないかな。一度実際に使ってみないことには分からないでしょ。練習だけだと実際に分からないことも多いんだから」

「ねえ、あんた。金属の錆をアクア水でとれたりしないのかしら？ それだったら、あたしも少しは楽になるかもしれないわ」

「どうだろうな。アクア水で物の1部分だけを操作したことはないような気がする。」

別れているものを操作することには慣れているけど、錆と金属は別々のものではない気がするから、いきなりは無理だよな。

「どうだろうね。まさか実際に弓を錆びさせるわけにもいかないし。まあ、今度何かで試しておくよ」

「そ。じゃあ、あたしがちゃんと管理するしかないわけね。はあ、今から気が重いわね」

「あはは……でも、素人のぼくが手伝うわけにもいかないからね。頑張つて、としかいえないかな」

「そうでしょうね。あんたもちゃんと覚えてくれたら、あたしも楽ができるんだけど。ま、あんたには荷が重いか」

実際はどうなんだろう。カタリナが楽できるというなら、覚えてみたいと思うけど。

ただ、カタリナはかなり細かく弓の調整をしているみたいだから。そう簡単ではないか。

結局2つとも買うことにした。ぼくたちは、次は防具を揃えに行く。カタリナはいつも通り軽装にするつもりだろう。

「あんた、攻撃にはアクア水があるんだから、防御をしっかりと考えた方がいいんじゃない？」

あたしはそもそも攻撃を受ける立ち回りをするのが間違っているわけだから。最低限は装備するけど、動きやすさの方が大事なのよね。

「あんたは接近戦もするんだから、それなりに防御を固めてもいいでしょうよ」

「どうだろうな。アクア水を攻撃に使うとなると、いろいろ持っておきたいところだし。」

それに、剣と盾も持っていくんだから、どうしても装備は重くなる。防御を固めたところで、まともに攻撃を受け続けるようならあまり意味はないからな。悩みどころかもしれない。

それからいろいろ防具を試してみるとなかなか良い物が見つからない。動きを阻害しなくて、防御力があるものか。そんな都合の良い物があるだろうか。

そう思いながら商品を眺めていると、砂を入れたらしき袋が見つかる。これを重りにしたりするらしい。

「なんとなくそれを見ていると、あることが思いつく。」

「そうだ。アクア水を防御に使えないか？ アクア水を体にくっつけておいて、常に防御できる状態にしておくというのはどうだろう。アクア水で攻撃を妨げることが出来ることは分かっている。それを何とか応用できないか？」

「思いついたアイデアを確かめるために、店主に武器を使う許可を得る。」

アクア水を空中に出し、それに向けて全力で剣を振る。アクア水は常に外側に向けて物を操作する感覚で使ってみた。その結果、剣を押し返すことに成功する。

「アクア水を服の中に入れておいて、同じことをすればどうだ？ あんな程度効果を見込めるんじゃないだろうか。」

店主に思いついたアイデアを話してみると、先ほどの内容に応じた防具を作ってくれるらしい。予定では、少し分厚い服くらいの感覚で着られるらしい。今からその防具の完成が楽しみだ。

「あんだ、あたしの意見も役に立ったでしょ？　ま、アクア水を使うとは思わなかったけど」

「そうだね。カタリナの言葉があつたから、防具をどうするか考えたわけだし。助かったよ。ありがとう、カタリナ」

それからは武器と防具を見繕うことはやめて、2人で適当にぶらついていた。最近はずアもつれていくことが多かったから、こうしてカタリナと2人なのは久しぶりだな。

「あんだ、サーシャさんともユーリヤさんともデートしたのよね。どうだったのよ？」

「そうだね。サーシャさんとは公園に行つて雑談をして、サーシャさんのおすすめの料理を食べさせてもらつて、それから服屋で服を買つてもらつたかな」

「雑談つて、何を話したのよ？　どうせあんだのことだから、いい雰囲気にはならなかつたんでしょうけど」

いい雰囲気にはなつていないと思う。でも、サーシャさんと前より親しくなるきつかけくらいにはなつたかな。

「詳しくは言えないけど、サーシャさんの契約技についてかな。ほら、サーシャさん、モンスターと契約しているらしいし」

「ほんと、あんだつてば、せっかくデートに行ったのに、そんな色気のない話しかできないなんてね。それにしても、サーシャさん、そんなことまで教えてくれたのね。契約技なんて、内容を知つたら対策することが当たり前でしょうに」

本当にね。サーシャさんの能力にどう対応するかはすでにいろいろと考えてしまつている。サーシャさんと敵対するつもりはないけれど、ついでという手が効果的かいろいろと思ひ浮かべてしまう。

「そうなんだよね。一応、あまり人に伝わってもいけないから、出来ればパーテイメンバーにも話さないつもりだよ」

「ま、妥当なところでしょうね。あんだから広まつたなんて知られた

ら、恨まれるどころでは済まないでしょうし。あんたのヘタレさも、こういう時には役に立つのよね。それで？ 食事するのはどんなものだったのよ」

「グロリアカウのスープって言った。肉が柔らかくて、スープの味もしつかりしていて、とても美味しかったんだよね」

ぼくがそう言うとかタリナは目を大きく見開く。よほど驚いているみたいだ。何かおかしなことでも言ったのだろうか。

「いや、あんた、グロリアカウよ？ 知らないの？ 普通の村人じゃ一生をかけても食べられないっていう高級食材じゃない。よくそんなものを食べさせてもらったわね。サーシャさん、思ってたよりあんたの事を気に入っているのかもね」

「そうだと嬉しいけど。それで、最後の服屋なんだけど、ぼくの服を選んでもらって、サーシャさんの服を選んで、それで、カタリナたちへ贈った服も選んだんだ。全部サーシャさんに支払ってもらったのは申し訳ない気もするけど」

「あんたね……あんまり他人に借りを作るもんじゃないわよ。いくらサーシャさんだって、貴族なんだから、変な形で取り立てに来たらあたたしたちも困るんだからね。気をつけなさいよ」

そうかもしれない。ぼくだけの問題じゃ済まないかもしれないってことにまで、思い至ってなかった。今後は気を付けた方が良くかもしれない。

でも、普通に断ればいいんだろうか。そういう作法には詳しくないんだよね。

「ま、いいわ。いまさらだし。それで、ユーリヤさんとはどうだったのよ」

「食べ歩きに行つて、ユーリヤに服を選んでもらって、ユーリヤの服を選んで、それくらいかな」

「だいぶサーシャさんの時と被ってるような気がするけど、あんたがそれを決めたの？ だとしたら、今後は気を付けた方が良くいわよ」

カタリナはずいぶん呆れたような目でこちらを見る。そうだよ。他の人と同じところへ連れていくと何も考えていないように思われ

るらしいし。

でも、どういう事をするかと正解なのかはよく分からない。

「ユーリヤが決めてくれたんだ。ユーリヤの選んだ食事、美味しかったな」

「そ。それにしても、ユーリヤさんはずいぶんあなたのことに詳しいわよね。もしかしたら、サーシャさんのデートについても知ってて、合わせてきたのかしら」

「どうだろう。それでも不思議じゃないくらいだけど」

「ま、いいわ。それで、あなたはあたしもデートしたいって言ったら、連れて行ってくれる……?」

そう言うとかタリナはぼくのことを見上げる。

カタリナとデート。すごい。考えただけでドキドキしてきた。カタリナとデートなんて、考えたこともなかったけど、絶対楽しい時間になる。

なんなら、よほどひどいデートコースでも、カタリナとならいい思い出になるような気がする。

「ふふっ、良い反応ね。冗談よ、冗談。でも、あなたがどうしても行きたいって言うなら、またの機会に考えてあげてもいいわよ」

「冗談か。びっくりした。でも、カタリナとのデートなら、きつと楽しいよ。ぼくは行ってみたいな」

「ま、気が向いたらね。それじゃ、ユーリ。帰りましょ」

そのままぼくたちは家に帰っていった。本当にびっくりした。

でも、さっきのカタリナ、本当に可愛かったな。また見てみたいかも。

## 裏 妬心

カタリナは今日も、アクアに支配された身体の中からユーリを見続  
けていた。

カーレルの街で冒険者を始めることになって、ユーリがステラとま  
で一緒に暮らすことに腹を立てていたが、ステラはアクアが操ってい  
ることを思い返し、結局前のようにアクアと同居しているだけかと思  
い直した。

冒険者組合において、サーシャという新たな女と関わり始めたり、  
ユーリの師としてアリシアとレティがともに依頼に向かうことにな  
り、自分だけのユーリがアクアに支配されている間に奪われかねない  
という思いが浮かばなくもなかったが、できる事はなかったので、心  
の歯を食いしばりながら我慢した。

(それにしても、アリシアさんとレティさんの言葉って、お世辞じゃな  
かったのね。あいつもなんだかんだで成長しているのよね。アクア  
のおかげってのは業腹だけど。

ステラ先生はすでにアクアの餌食になってたわけだけど、こいつら  
も既に餌食になってるってことはないわよね……？ アクアの強さ  
なら、ありえない話じゃないわ)

ステラがユーリに渡した指輪の話になったとき、指輪がステラに  
とって大切なものであることが分かったが、その指輪を渡したのはス  
テラなのか、アクアなのか、とても気になった。アクアならばまだい  
い。

だが、ステラがそこまで期待していたとなれば、アクアがステラの  
体を返したとき、ユーリがステラに奪われることもあるかもしれない。  
い。

アクアがステラに体を返す可能性がどれほどあるかは分からな  
かったが、ユーリはステラだけは他の先生と違う扱いをしていた。万  
が一ステラの側に気があれば、ユーリがなびきかねないと思う程度に  
は、ステラに対して危機感を抱いていた。

本当の自分ならば、絶対にステラにも勝てると言いきれたが、今は

自分の身体をアクアが操作している。ユーリは気づいていないようだが、やはり魅力は落ちるだろうと思っていた。

アクアの気まぐれ如何によつては、自分が何かを出来るようになる前に決着がつきかねない。自分が体を取り戻したときに、ユーリが誰とも関係を持つていなければ、絶対に自分が勝つ。カタリナはそう確信していたが、もし誰かとユーリが関係を持つてしまえば、ユーリの義理堅さから、自分が奪い取ることは出来ないだろうと思っていた。

(ユーリ……お願いだから、あたしのこと、ちゃんと待つてなさいよ。他の奴にあんたを渡したくなんてないわ。あんたのことを一番幸せにできるのはあたしなのよ……アクアでも、ステラ先生でも、その他の女でもないわ。だから、だから、あたしのもことになるのよ。それがあんたにとつての一番の幸せなんだからね)

ユーリがアリシアとレティとの依頼の中で、モンスターを簡単に倒していったとき、カタリナはユーリの成長を改めて実感した。本当に昔からずっとユーリの事を守っていたので、感慨深さのようなものがあった。

その直後にキラータイガーの大群が現れた時は驚いたが、アクアが焦っているような様子はなかったので、アリシアとレティがいなくとも大丈夫だったのだろう。

それは別の事として、アリシアとレティの強さを見た時、ユーリと同様にカタリナも本当に驚いていた。ユーリとともに冒険者として成り上がることを目指していたが、本当に強い冒険者というものがどういうものなのか、カタリナはこの時初めて実感した。

だからこそ、ユーリがアリシアとレティの強さを見ても折れることなく、アリシアとレティを超えろと言つて見せた時、感動のようなものを抱いた。あまつさえ、アリシアとレティに期待しているとまで言われたのだ。自分のユーリがここまでになったのだと、誰かに言いたいような気分だった。

(あんた、あんたは本当に大きくなったわね。それでこそ、あたしのユーリだわ。いつか絶対、あたしとユーリで最高のパーティーになつてみせる。アクアからあたしの身体を取り戻してね。

あんた、それまでの間にちゃんと強くなるのよ。あたしだって、身体を取り戻したらすぐにアリシアもレティも追い越してやるんだから)

依頼を終えて組合に戻った後の報告で、モンスターの異常発生は強大なモンスターによるものだと言ったとき、カタリナには腑に落ちるものがあった。

それならば、急に学園にキラータイガーが現れたことも、自分が危険な目にあつたモンスターの異常発生も、それによるものではないか。今回キラータイガーが異常発生したことにも辻褄が合う。

おそらく、アクアが原因なのだ。アクアが進化してからすぐだった。キラータイガーが現れたのは。それに、今回キラータイガーが現れたところにもアクアがいた。

だとすると、アクアはハイスライムなどではない。もしかしたら、あのオメガスライムかもしれない。

そう思い至ったとき、カタリナは不安でいっぱいになった。オメガスライムほどの相手から、どうやって体を取り戻すのか。いや、それはそもそもアクアの気まぐれに期待するだけだった。それよりも、アクアが世界をどうにかしてしまふのではないか。そんな予感がカタリナを襲った。

(あんた、気を付けて。本当に気を付けるのよ。そこにいるのはかわいいいペットじゃなくて、恐ろしい化け物かもしれないのよ。あたしを乗っ取るだけでも十分化け物だけどね。これは、アリシアさんやレティさん位ならどうにもならないかもしれないわね。

でも、アクアがユーリを好きでいる間は、ユーリは安全かもしれないわね。オメガスライムに勝てるような人間なんていないんだし。モンスターだって怪しい物だわ。適度にアクアを大切にするのよ、ユーリ)

それからしばらくして、ユーリにたいしてケンカを売った冒険者がいた。ビッグスライム使いだ。普段なら腹立たしかったかもしれないが、カタリナはむしろその冒険者に同情していた。

あのアクアが、ユーリの敵を無事で済ませるわけがない。スライム



などと侮った結果、藪をつついてドラゴンを出したようなものだ。結局それはユーリに手も足も出なかったが、それくらいの事でアクアが手心を加えるとは思えなかった。

（こいつの寿命はあと何日かしらね。ま、いいわ。ユーリに害のある奴が1人減ったと思っておきましょう。どうせろくな奴じゃないし、ただの他人だものね。どうなったところで、知ったことじゃないわ）  
それから、またユーリに襲い掛かる者たちがいた。まるで品性の感じられない、つまらない下衆だ。多少はできるようだったが、自分1人だったとしてもどうとでもできそうな存在だった。

あまりにも態度が悪いこともあり、同情する気もおきなかったが、その程度の存在でも名を知られているらしいことにあきれ返っていた。

こんな奴程度にもおびえているということ、程度の低さが知れるようだった。

（それにしても、知らないってことは幸せなことよね。ユーリは殺さないようにしてみたんだけど、結局アクアが何もしなくても死ぬんでしようし、そっちの方が幸せでしょう。よかったわね。アクアが何者か知らないままでいて。少しは希望も持てるでしょう）

その後、サーシャの家で食事会をする日、サーシャがエルフィール家の秘密をペラペラとしゃべっている姿を見て、カタリナは危機感を抱いた。

まさか貴族の令嬢が色恋に溺れて機密を話しているわけではあるまい。ユーリを何らかの陰謀に巻き込もうとしているのではないかと疑っていた。

（あんたはどうせ、サーシャさんが優しいくらいに思っているんでしようけど、どうせせいとも何か企んでいるのよ。ま、まずい企みならアクアがどうにかするでしょ。はあ。体を取り戻したら、こういう事もユーリに教えてやらなきゃいけないのかしらね。教えたところで、ユーリに人を疑うなんてことができるのかは怪しいけどね）

それからの話で、ユーリに襲い掛かった奴らが死んだと聞いて、カタリナはアクアの仕業か、サーシャの仕業かを考えていた。どちらで

もおかしくはないが、なんにせよ、ろくでも無い死に方をしたようだ。行方不明者が出ているという話では、真つ先にアクアを疑った。だが、行方不明者を出す理由が思いつかなかったこともあり、とりあえずその疑問はよそへと置いていた。

それよりも、カタリナはサーシャのユーリへの好意が本物だったらどうしようかを考えていた。どうせ妙な企みがあるならアクアがどうにかするだろうし、そちらを考えていた方がましだった。

（あんだ、女との関わりなんてほとんどなかったからね。押し強い女にほだされても不思議じゃないわ。でもね、結局貴族と平民なんだから、生活が合わないわよ。その辺、しっかり考えておくことね）

それから、ユーリヤという女がさらに増えて、カタリナはご機嫌斜めだった。

（なによこいつ。助けられたからって、そこまでになるものなの？

一目ぼれだったりするのかしら？ ユーリの顔は、まあ、悪くはないけど。なによ、べたべたして。アクアもアクアだわ。何でこんな奴に好き勝手させてるのよ。あたしの身体を奪ってまで、ユーリのそばに居たかったんじゃないの？ あなたの思いは、結局その程度だったの？）

結局ユーリヤとパーティを組むことに決めたユーリだったが、カタリナはユーリヤに警戒していた。

（こいつ、明らかにおかしい。何でこんなにうまく連携できるのよ。あたしだって、ユーリと初めて組む時には苦戦したってのに、ほとんど初対面のこいつがここまで？ こいつ、ユーリの何を知ってるのよ）

それからしばらく後、ユーリがサーシャやユーリヤとデートしている時間に、カタリナは一人の時間をユーリの顔を思い描くことで耐えていた。

（ユーリなら、あたしがデートしようって言ったらもつと喜ぶでしょ。どうせエスコートは下手でしょうけど、そこはあたしが補ってやればいいか。あんだは、あたしの後ろをついてくるのがお似合いなのよ。ちよつと色っぽい格好をしてやれば、すぐドギマギするんでしょう

ね。その時の顔、きつと見ものよね。ユーリ、早く帰ってきなさいよ……あたしが待つてるのよ……)

カタリナを操るアクアとユーリが二人で出かけている時、アクアがデートの事を口にしたことで、カタリナは、神聖な自分とユーリのデートが汚されたような気分と、サーシャやユーリヤからユーリの目を奪い返せるような気分の間で悩んでいた。

(あたしとユーリの初めてのデートをアクアに奪われたくない。でも、他の女にユーリを奪われるのも嫌。どうすればいいのかしら……まあ、このユーリの顔なら、あたしがユーリの一番なのは間違いないさそうね)

結局アクアが冗談だといったとき、カタリナはユーリとデートでいたいことを考えていた。ユーリの全部を自分のものにする。その決意を改めてしていた。

(サーシャさんとしたことも、ユーリヤさんとしたことも、ステラ先生としたことも。全部全部あたしが上書きしてあげるわ。楽しみに待ってなさいよ、ユーリ?)

### 32話 暖かさ

ぼくたちは今日、いつものようにマナナの森ではなく、カーレルの街の北にある、レニア山へと来ていた。こちらにモンスターが多く発生しているということで、間引きに来たのだ。

岩肌が大きく露出していたり、傾斜が大きくて崖があったりと、学園のそばにあった山とはだいぶ感覚が違って新鮮味があった。

今のところ、特に危険なモンスターとは出くわさなかったので、依頼は順調だった。

山の中で注意すべきこととして、落石が挙げられていた。もし落石があったなら、避けられそうになればアクア水で止めるつもりだった。

危険などところによらなければいいと思っていたのだが、そこあたりを縄張りにするモンスターが人里に下りてくることもあるということとで、侵入せざるを得なかった。

落石の他に、狭い道にも気を付けないといけないから大変だ。

モンスターたちを倒し終えて次の場所へ移動しようとした際、落石らしきものが見えた。アクア水を出そうとする前に、ユーリヤに突き飛ばされる。

「ユーリさん！　これで、安心ですね……」

体勢を崩したぼくはアクア水を出すこともできず、ユーリヤは落石に巻き込まれた。

「ユーリヤ！　これくらいなら、ぼくがどうにかできたのに……」

ユーリヤはそのまま崖から落下していった。

ぼくにはユーリヤが無事とはとても思えなかったが、せめて遺品だけでも回収したくて、ユーリヤの事を探していた。

しばらく探すと、ユーリヤの姿が目に入った。原形をとどめないような事態だけは避けられたか。やるせなさと同時に少しの安心も浮かぶ。

ユーリヤを回収しようと近づこうとしたとき、アクアに声をかけられる。

「ユーリ、ユーリヤは無事」

本当か！ 思わずユーリヤの方へ駆け寄ると、本当に息があった。目を閉じていたユーリヤだが、ぼくが息を確かめていると目を開き、微笑む。

良かった。もう助からないかと思っていた。安心したぼくは、ついユーリヤを抱きしめてしまう。

「ユーリさん。わたしじゃなかったらこういう事は危ないんですからね？ まずはこちらと治療をしないと。」

でも、わたしは大丈夫です。ユーリさん、あなたのユーリヤは、何があっても死にません。だから、安心して私に守られちゃってください。

わたしはユーリさんが思っているより頑丈ですし、ユーリさんを悲しませるようなことはしないって約束しますから。ね？」

そう言っただけユーリヤはぼくの頬へとキスをする。いつもなら照れてしまったかもしれないが、今日は安心感の方が強かった。

本当に良かった、ユーリヤが無事で。ぼくはユーリヤの顔を見て、ほっと息をついた。

それからすぐに組合へと戻り、ユーリヤを医者に見てもらった。結果としては、健康体そのものようだ。

ユーリヤがなぜ無事だったのか疑問に思うこともあったが、そんなことよりもまたユーリヤといられることの喜びの方が強かった。今回ばかりはダメかと思った。

だからこそ、ユーリヤに守られなくても済むように、もっと強くなりたかった。

その日は、いつもより指輪のことを意識しながらアクア水を使った。

すると、契約の紋章と指輪の間に何かがつながったような感覚があった。

それからは、アクア水を使える量も、アクア水の操作の精度も大幅に上がった。

今回のことは大いに反省すべきだし、自分の無力を呪ったけど、

得られるものも少しはあった。自分へのいら立ちが無くなったわけでは無いが、少しだけ慰められたような気分だった。

次の日、大事を取ってぼくたちは活動を休んでいた。指輪の運用について手ごたえを得られたので、アクアと思考を送りあえないか試していたが、まだうまくいかなかった。これでも足りないのか。

アクアとの信頼関係が足りないとは思えないので、もつと習熟が必要なのだろう。

それにしても、この指輪、本当にすごいな。ステラさんはこんなにすごい物をぼくたちに贈ってくれたのか。ステラさんに対してあらためて感謝を深めていた。

指輪の検証が一段落ついたとき、カタリナとユーリヤがやってくる。

「あんだ、今日はユーリヤさんと一緒にいてあげなさい。ユーリヤさんは無事だったけど、苦しくないわけでは無かったんでしようし。ユーリヤさんが一番好きなのは間違いないから、あんだといるのが今日のところは一番でしょ」

「カ、カタリナさん、本当に優しいですよねっ。うらやましいです、ユーリさん。こんなに素晴らしい幼馴染がいるなんて。わたしはずっと1人でしたから」

そういえば、ユーリヤの過去は全く知らなかったな。サーシャさんは突然現れたようだって言ってたけど、まさかそんなことがあるわけじゃないし。

でも、あまり明るい話ではなさそうだし、積極的に聞きに行くことはないか。ユーリヤが話したいなら話してくれればいいし、そうでないなら、気にしなればいい。

「ユーリヤ、いまはぼくもいるし、カタリナも、アクアも、ステラさんもいる。過去の事が無くなるわけじゃないだろうけど、これからはきっと寂しくなんてさせないから」

「ユ、ユーリさん、ありがとうございますっ。でも、寂しかったわけじゃないですよ。1人であることが当たり前だったのです。

でも、これから1人にされたら寂しいですから、あなたのユーリヤ

をずっと離さないでいてくださいねっ」

ユーリヤが悲しい思いをするということは避けたい。

それに、ぼくにとつてユーリヤはすでにとても大切な人になっていた。

だから、ユーリヤが望まない限りぼくたちから離れさせはしない。

「当たり前だよ。ぼくにとつてユーリヤはただのパーティーメンバーじゃない。家族同然だって思っているから。逆に、ぼくがずっと一緒にいてほしいってお願いする側かな」

「家族つての言い過ぎじゃないかしら？ ま、でも、ユーリヤさんはあたしたちにとつてもう欠かせない存在よ。これからもあたしと一緒にユーリの奴を支えてやりましょ」

「ユ、ユーリさん、カタリナさん……はいつ！ ユーリヤはあなたたちとずっと一緒にいますからっ！ もう離れたいなんて言つても遅いんですからねっ」

ユーリヤはとてもきれいな笑顔をしていた。ぼくがユーリヤから離れたいと言うことなんてきつとないから、ユーリヤにはぼくたちの事を信じて大丈夫だと思つてほしい。

「はいはい。そんなことは言わないから安心なさい。じゃ、ユーリヤさん。ユーリの事は貸してあげるから、今日はゆっくり楽しみなさいよ。じゃあね」

そう言つてカタリナは去っていく。今日はユーリヤと2人つきりか。カタリナの事だから、もうステラさんにもアクアにも話しているだろうし、ユーリヤと何をするかな。

「ユ、ユーリさん。前にアクアちゃんと手をつないだんですよねっ。アクアちゃんが言つてましたよ。わたしとも、手をつないでくれませんかっ」

アクア、ユーリヤとそんなことまで話すようになってたのか。

ぼくがいなくても仲良くしているというのはいいい情報だけど、ぼくの話が裏でされているというのは、恥ずかしいような、怖いような変なことか話されたりしてないよね。

ま、いいか。手をつなぐくらいで満足してくれるなら、いくらでも

かまわない。

早速手をつなぐ。すると、ユーリヤの体温を感じる。昨日ユーリヤが死んだかとも思ってから、ずっとふわふわしたような心地だったけど、ユーリヤはちゃんとここにいるんだと感じられた。

ユーリヤがこれ以上傷つかなくてよくなるように、ぼくも頑張ろう。改めて決意した。

「ふふっ、ユーリさん、暖かいです。大丈夫、ユーリヤはここにいますからね。ユーリさん、ずっと気に病んでたのは分かっていましたから。ほら、心臓だつて、ちゃんと動いていますよ」

そう言つてユーリヤは自分の胸元にぼくの手を当てる。本当に心臓の鼓動を感じた。

うん。ユーリヤはちゃんと生きている。ぼくの見ている幻なんかじゃない。

ユーリヤの鼓動と温かさを感じながら、ぼくは絶対に失いたくないものがまた増えたことに、喜びのような、感慨のようなものを感じていた。

それにしても、ユーリヤを慰めるためって話だったのに、ぼくの方が慰められちゃってるな。すっかりしないと。

「ユ、ユーリさん。こんなつなぎ方なんてどうですかっ」

そう言つてユーリヤはぼくの手を取り、指と指を絡めるように手をつないだ。

なんとというか、さっきの握り方より、もっとユーリヤと触れているような感じだ。

さつきはそれどころじゃなかったけど、ユーリヤの手、やわらかいな。ユーリヤがぼくの手を握る強さを強めたり弱めたりしているの、余計にユーリヤの手の感触をしっかりと感じていた。

「な、なんというか、少し恥ずかしいね。でも、ユーリヤの手の感触をよく感じるよ。ユーリヤの手、暖かいね」

「それ、さっきのわたしも言いましたよ。ユーリさんの手、暖かいって。でも、少し恥ずかしいってだけなら、もっと恥ずかしがらせちゃいますねっ」



ユーリヤはさらに僕の腕に両腕を絡め、密着してくる。

ユーリヤの温かさと柔らかさを別の部分からも感じて、ぼくは本当に恥ずかしくなった。顔、真っ赤になってるんじゃないかな。

ユーリヤの積極性には驚かされてばかりだったけど、最近距離の詰め方がうまくなってきたような気がする。

ただでさえユーリヤには押されているのに、これ以上になったら、一体ぼくはどうなってしまおうだろう。

「ユーリさん。この前はあまり意識してもらえなかったですから。だから、今回はユーリヤの事、しっかり感じてくださいねっ」

ぼくはユーリヤに頬にキスをされた。確かに前はそれどころじゃなかったけど、改めてされると本当に恥ずかしい。

あの時はあまり感じられなかったけど、ユーリヤの唇はプルプルしていて、とても気持ち良かった。

ユーリヤにかけられた言葉もあって、頬の感覚が敏感になっていたから、ユーリヤの唇の細かい動きまで感じ取れてしまった。少し変な動きをしてしまったかもしれない。

「ふふっ、ユーリさん。唇には、また今度、ですねっ。楽しみにしておいてくださいねっ、ユーリさん」

く、唇か。そこまで進んじやったらもう引き返せないのでは？

ユーリヤが嫌いなわけでは無いけど、そこまで一気に進んでしまうのは怖かった。

それにしても、ユーリヤ、最初の頃よりほんとに上手く誘惑してくるような気がする。この調子だと、ぼくはかなり危ないかもしれない。

それからもずっとユーリヤと過ごし、夜。ユーリヤは驚きの提案をしてくる。

「ユ、ユーリさん。今晚は、わたしの部屋で一緒に過ごしませんか。ユーリさんが来てくれるなら、必ず楽しい時間になりますからっ」

「そ、それはアクアにも聞かないと。アクアと一緒にの部屋で過ごすって約束だから」

「なら、アクアちゃんに聞きに行きましょうっ」

それからすぐにアクアのもとへ向かい、ユーリヤの件を相談した。「別にいい。ユーリ、ユーリヤ、楽しんできて」「ほらっ、アクアちゃんの許可は得ましたよっ。わたしの部屋へ行きましようっ」

そのままユーリヤの部屋へ連れられて、今晩はユーリヤの部屋で過ごした。ユーリヤのいろいろな姿を見られたことは楽しかったけど、アクアと一緒にじゃないのは久しぶりで、少し寂しいような気がした。

## 裏 ユーリヤ

ユーリヤなどという人間はそもそも存在しない。ユーリヤは、アクアが溶かし殺した死体から作成した肉の人形でしかなかった。

アクアには、ステラやカタリナとしてユーリと接する中で、自分の思い描いたキャラクターでユーリと接してみたいという欲望ができた。

ユーリヤという人格は、アクアがユーリと出来るだけ近づいてみたという欲求から作り出したペルソナだった。だから、ユーリに対してユーリヤは強く距離を縮めていた。

また同時に、人間としてユーリと同じものを見てみたいというアクアの欲望の形でもあった。そのために、モンスターとしてではなく人間としてユーリと接していた。

ユーリとユーリヤの出会いには必然だった。アクアとしてユーリの動きを知っていたから、その動きに合わせてユーリヤを動かし、また、彼女に対して襲い掛かる、これもまたアクアが作り出した食虫植物型のモンスターも動かす。

そのモンスターは、ユーリにユーリヤを助けさせてユーリヤに対する愛着を持たせると同時に、アクアがユーリヤを生み出すために出した犠牲をごまかすための便利な駒だった。

実際に組合ではこのモンスターが行方不明事件の犯人であると結論付けたし、ユーリはユーリヤを受け入れていた。

ユーリヤの顔は、アクアから見えて恐らくユーリの好みだろう形にしたし、実際にユーリはユーリヤの顔を美人だと思っているようだった。

ユーリヤという名前も、ユーリとそっくりであることからつけられた名前です、それによってアクアはユーリとお揃いになっているような感覚が得られた。

ユーリヤがユーリに好意的なのは当然の事である。アクアはユーリのことを嫌いなキャラクターなど、とても演じる気になれなかったのだから。

ユーリヤの戦闘スタイルは、ユーリたちのパーティに足りない役割を満たすために、遊撃という形をとれるようにしていたことが目的の一つ。

ほかに、戦い方が特殊なことや過去が見つからないという点から、密偵や暗殺者といった警戒が必要な人間だという疑問を持たせること。

それによってユーリヤがユーリのことを知り過ぎているという疑問や、ユーリヤのなにもかもが謎に包まれているという点から目をそらさせて、本命であるユーリヤがアクアのアバターであるという事実から目を背ける狙いもあった。

ユーリヤという役割は、ユーリと過ごすうえでたくさん喜びをアクアに与えてくれた。ユーリに襲い掛かる敵を足止めするという形でない、直接ユーリの動きをサポートする喜び。

肉の体でユーリと触れ合う時の、アクアとしてのユーリを感じ方は違うユーリの感触や体温に触れられるという喜び。

自分の考えたキャラクターがユーリに受け入れられているという喜び。本当に様々な喜びがあった。ユーリヤを生み出してよかった。アクアはユーリヤとしてユーリに出会ってすぐにそう思っていた。

ユーリはユーリヤの事を本当に信じていた。他の人たちはユーリヤの事を怪しんでいる様子だったにもかかわらず、それらの疑問をすべて気にすることなくユーリヤをチームに迎え入れた上で、ユーリヤのやろうとすることをほとんど受け入れていた。

ユーリに受け入れられなかった行動も、ユーリの性格からは当然と言えることで、だから、やはり自分とユーリの絆は本当なんだ。だからユーリヤはここまで簡単に受け入れられた。アクアはそう信じていた。

ユーリのことをユーリヤとして支える時間はアクアにとって本当に楽しいものだった。

特にドリアドとの戦いは最高で、アクアなら気にしないと思われることに気づいたり、ユーリの考えに口出ししたり、人型モンスターを倒して沈んだユーリの心を慰めようとしたり。

ユーリヤとしては出会ったばかりなのに、アクアはどんどんユーリの心に入りこめているような気がしていた。

ユーリヤとしてユーリとデートした時は、完璧としか言いようがなかった。後ろから目を隠してみた時は少し警戒されたようだが、声を聞いたとたんに警戒をゼロにしていた。

ユーリヤは本当にユーリに受け入れられている。デートの初めからいきなり楽しいことがあった。ユーリはユーリヤの外見が本当に好きなので、出会ってすぐにユーリヤに見とれている様子だった。わざわざユーリの好みの外見を考えて作っただけのことはある。アクアは自分の仕事に満足していた。

ユーリとの食事に向かう時、ユーリがユーリヤのおすすぬならと疑っていない様子を見て、人間の体を作った甲斐があったと思えた。

アクアの体にとって、害になるものなどないに等しい。だからこそ、アクアの味覚は未熟だった。ユーリヤの体を作ったことで、ユーリと似たような味覚を持ったアクアは、ユーリとともに食事をすることに新たな形の喜びを覚えていた。

ユーリに食事を勧めて、その味をユーリと共有する。今まで食事など単なる栄養補給の擬態でしかなかったアクアに、ユーリの美味しそうな顔を眺めるだけではない、別の形の楽しみが生まれた。ステラやカタリナはユーリと味覚が違うようなので、これもユーリヤの体を作ってできた良いことの一つだった。

ユーリの食べかけを食べることで、ユーリの唾液を取り込んでいくという感覚も、アクアにとっては面白かった。

アクアは人間にはそういう事に喜びを覚えるものもいると知っていたが、味覚があることならではの感覚だと、知見を広めた思いだった。

ユーリが自分の言葉で、ユーリヤの味を意識しているらしいことも面白かった。アクアとユーリは明確に違うものを食べていたが、これからはスライムの体で同じことをしても、ユーリは照れてくれるだろうか。アクアはスライムとして、初めて食事に興味を持った。

次の店でユーリの服を選んでいくこともアクアにとっては案外楽

しい時間だった。人間は服を着ることの何が楽しいのか疑問に思っていたが、相手を自分好みに着飾るといふのは案外面白い。

さらに、ユーリヤの服を真剣に決めたユーリの選んだ服を着るといふこともアクアは楽しんでた。ユーリは明らかにユーリヤに見とれていたし、ユーリの視線をこのような形で感じるのもいい。

アクアとしては服に全く興味を持っていなかったが、こんな楽しみがあるなら、アクアとしてもユーリと出かけて、ユーリに服を選んでもらうこともいいかもしれない。

さすがにスライムの体に見とれるということはないだろうが、ユーリの好みの服を着せてもらったら、ユーリもきっと喜ぶだろう。今回の経験を経て、アクアはそう確信していた。

ユーリにマッサージをしてもらうということも楽しんでた。スライムの体なら感じなかったであろう心地よさがあり、ユーリの恥ずかしがっている様子も、ユーリが自分に性欲らしきものを感じている様子も面白かった。

アクアに性欲はなかったが、人間の性欲がどういふものかは知っていたので、ユーリの性欲がユーリヤに刺激されているといふのはなんとなく心地よかった。

ユーリの性欲をいずれ満たすことも面白いかもしれない。アクアの体でか、ユーリヤの体でか、はたまたそれ以外でか。いろいろと考えていたが、どれも別の形で面白そうだ。その時のユーリの顔は、きっと可愛らしいのだろうな。アクアは想像を深めていた。

レニア山で起こった件も、アクアにとつては面白かった。ユーリヤとしてユーリをかばった際、ユーリヤが死んだと勘違いした時のユーリの顔には、とても昂るものがあった。

自分の一部の事でこんなに悲しんでくれている。ユーリを悲しませるといふことに対しては少しばかり罪悪感があったが、それ以上に、弱々しいユーリの姿と、ユーリヤが無事と分かったユーリの喜びの姿を見た時の興奮は大きかった。

その上、ユーリが指輪を使いこなすために訓練までしてくれて、指輪の力をさらに開放していたのだから、本当にアクアの喜びは大き

かった。ユーリとの絆が本当にいろいろな形で深められる。

何度も感じていたことではあるが、本当にユーリヤを作ってよかった。アクアは改めてそう感じていた。

次の日、ユーリがユーリヤを家族同然だと言ったことで、アクアにはとても大きい達成感があった。アクアはペットとしてユーリとの関係を深めていたが、ユーリヤとして別の形でユーリとの関係をとっても深めることが出来た。

ユーリヤとしてユーリといること、アクアとしてユーリといること、両方同時にユーリといること。それぞれ別の形でユーリを味わうことが出来る。ユーリはアクアの事もユーリヤの事も疑わないので、もつというんな遊びをユーリと出来る。アクアの前途は明るい。彼女はそう疑っていないかった。

ユーリヤとしてユーリと手をつなぐとき、アクアとしてユーリと手をつなぐ時とは別の感覚があった。

アクアとしてユーリと手をつないだ時は、ユーリの事を自分の中に受け入れるような感覚だったが、ユーリヤとしてユーリと手をつないだ時は、ユーリの体温とユーリヤの体温が溶け合うような感覚になっていた。

本当に人の体というのは面白い。結局人間の体を得ただけでは人間の心まで分かったわけでは無かった。ユーリと同じ心になることはできなかったが、それでも人間の体を作った甲斐はあった。こんな感覚は、スライムの体では得られなかったのだから。アクアは満足感を覚えていた。

ユーリヤの心臓の鼓動をユーリに感じさせている時も、人間の体を作ったからこそできる遊びだと感じていた。ステラやカタリナはそんなことをするキャラクターではないので、ユーリヤを作ったからこそできた。

やはりオリジナルというのはいい物だ。自分好みに調整できる。

ユーリヤの次を作るか、今のままを楽しむか、アクアは楽しく悩んでいた。

ユーリと恋愛ごっこを楽しんでみるのもいいかもしれない。そう

考えたアクアは、人間の恋人がするような行為をまねていった。ユーリには恋愛経験はないようなので、ずっとどきまぎしていた。

ユーリの感情を揺さぶるということの面白さも知ったアクアは、少しずつ、ユーリとの距離を縮めていった。そのたびにユーリは動揺していて、本当に楽しい思いをしていた。

ユーリヤの部屋にユーリを連れて行ったとき、アクアがそばに居ないから寂しがっているユーリを見て、アクアは本当に興奮した。結局アクアはユーリヤとしてユーリと一晩過ごしたが、アクアとしてもユーリのそばに行つて、抱きしめてやりたいくらいでいた。

ユーリヤを作ったことで、本当にユーリのいろんな一面を知るきっかけになった。アクアはとても大きい満足感に満たされていた。



### 33話 運命

ぼくはいま、サーシャさんからの依頼でぼくたちが住む国アードラの王都ハイデイケートへ向かっていた。

なんでも、そこで行われる大会に出てほしいらしい。ステラさんが王都へ向かう際のサポートとしてついて来てくれた。アクアもぼくについて来ていた。

道中では特にトラブルはなかったが、カタリナやユーリヤと別々に行動するのは、なんだか寂しかった。

カタリナとはだいぶ長く一緒にいたけど、ユーリヤは最近会ったばかりなのに、もう生活の一部になったような感覚だった。

ステラさんから説明を受けたが、今回出場する大会ではモンスターも出場権があるし、契約技も使っていないらしい。アクア水の使い方はいろいろ考えたから、しっかり役立てていきたい。

大会の前に一般予選という物が行われるらしいが、貴族の推薦を受けたものが中心の大会ということで、突破できるのは1人だ。

ぼくはサーシャさんの家であるエルフィール家の推薦を受けて大会に出場することになっている。

それからもまた移動を続け、ぼくたちはようやく王都へと到着した。王都はとにかく建物や道が整っていて、しっかり区画が分けられていた。エンブラの街やカーレルの街もぼくの故郷であるミストの町より都会だと思っていたが、ここは本当にすごいところだ。

大会まではまだしばらくあるが、今回は観光には時間を使わず、貴族の推薦なしでの参加者を決める一般予選を見ておくつもりだった。

ぼくはエルフィール家の推薦を受けているので、予選に参加する必要はないが、この大会にどんなレベルの人が参加するのか参考にするつもりだった。

ただ、結構長い歴史のある大会らしいが、一般の参加者が優勝したことはないし、良いところまで行ったこともほとんどないらしい。

つまり、本戦にはこの予選より数段高いレベルの参加者が出るだろう。

必ずしも参考にはならないかもしれないが、だからといって情報収集をしないのは、せっかく推薦してくれたサーシャさんに申し訳なかつたので、しっかり見ておくことにする。

予選の見学のため、会場の近くの席へ行くと、すでに人がある程度いた。良く見えそうな場所に頑張つて向かうと、隣の人が話しかけてきた。

「坊や、この予選に参加できる歳みたいだけど、坊やは参加しないの？」

話しかけられたので隣を見ると、褐色のラミアがぼくに話しかけてきていた。

ぼくにとつて、街中でモンスターが普通に人に話しかけてくるのはレティさんやアクアくらいのもので、なんだか不思議な気分だった。

最近では人型モンスターは基本的に討伐するものだから、親しげに知らないモンスターが話しかけてくると、少し警戒してしまう。

ただ、周りの人も普通の顔をしているので、王都では珍しいことではないのかもしれない。

「ぼくは本戦から参加する予定なので。予選より本戦の方がレベルは高いらしいですが、王都に来たのも初めてなので、何か参考になればいいんですけど」

「坊や、その歳で貴族の推薦をもらっているのね。大したものだね。腕自慢程度の人なら、門前払いつても珍しくないのにな。それとも、上手く取り入ったのかしら……？」

サーシャさんに勧められなければこの大会が存在することすら知らなかつたので、それはない。

それにしても、この人の発言からすると、今回の大会のレベルは高そうだな。

「さあ、どうでしょう。どうせぼくの本戦もそう遠くないですし、すぐわかるんじゃないでしょうか」

「そうね。なら、その時を楽しみにしておきましょうか。アタシは、知り合いが参加しているのよ。その子の応援に来たって感じかしら。」

あの子なら、きつと予選くらいは通過できるでしょ」

「そうなんですネ。なら、ぼくも警戒しておく必要があるかもしれないね」

「それがいいんじゃないかしら。ところで、坊やは契約技は使えるの？」

応援している人のための情報収集だろうか。ただの雑談だったとしても、できるだけ手の内を隠しておきたいから、話すつもりはない。「あなたが応援している人が本戦に来るなら、あなたから伝わるかもしれないし、それに答えることはできません。ところで、あなたは誰かと契約しているんですか？」

「こっちの質問には答えてくれないのに、坊やは質問しちゃうのね。でも、いいわ。アタシが応援している子はね、アタシの契約者なの。たぶん、アタシと契約していなかったとしても、予選くらいは突破できるんじゃないかしら」

なるほど。そこまで強い人が契約技を持っているとなると、厄介かもしれない。

契約技ってどれも強いし、戦闘スタイルとの相性もあるとはいえ、さすがに弱くなるってことはないだろう。

「そうなんですか。なら、その人がどんな人か楽しみにするのもいいかもしれないね」

「そういうつもりなら、アタシが応援している子は教えないでおくわね。ただ、すぐに分かると思うわ。明らかに強いんだもの」

それからもしばらくラミアと話していると、会場の方が動き出した。そろそろ始まるのかな。

すると、きれいな金髪をした高貴そうな女の人が会場にあがる。それと同時に、途轍もない歓声が沸いた。

一体なんだろう。疑問に思っていると、その女の人が話し始める。「さて、一般予選の時間だ。予選から本戦に出たものもいい結果を残したことはないが、いい加減、その展開にも飽きてきたところだ。貴様ら、余が許す。せいぜい貴族どもの面子をつぶす結果にしてやるがよい。このオリヴィエを、少しは楽しませて見せることだな」

オリヴィエ様と言ったか。なるほど、歓声が沸くわけだ。この国の王女じゃないか。ぼくのところにもいろいろ噂は流れてきている。

なんでも、くすんだ金髪ばかりの王家の中に、美しい金髪で生まれたことから、この国を建国したアーデルハイドの再来だとか言われているらしい。

アーデルハイドはとても美人だったと伝えられているが、オリヴィエ様もその異名に似合う程に美人だ。この人に応援されれば、男はそれはそれは力を発揮するんじゃないかな。

まあ、今のが応援かどうかは怪しいけど。

そのままオリヴィエ様は観戦するつもりのように、大会が良く見える位置に座っている。王女様まで観戦する大会なのか。

サーシャさんの頼みだからと軽く受けてしまったが、これは大ごとかもしれない。

それから、第1予選が始まった。ある程度の人数がまとめて戦うことを何度か繰り返して、トーナメントができる人数まで絞るようだ。

先ほどからぼくと話していたラミアの応援する相手は今は出ていないようで、特に集中している様子はない。

それにしても、契約技使いらしき人が何人かいるが、小さな火を出すのがせいぜいだったり、契約技を使っていなさそうな人に簡単にいなされていたり、とても契約技とは思えないようなぎまだった。

契約技は、使えるだけでも使えない人に対してかなりのアドバンテージがあると聞いていたが、結局第1試合の勝者は契約技を使っていない様子の人だった。

「契約技が使える人が勝つかと思っていましたけど、この試合、どの契約技使いも大したことなかったですね。あなたの応援している人は、今回の勝者と比べてどうなんですか？」

「契約技がなくても、あの男よりは間違いなく強いわ。契約技使いとしても、今回の試合にいた契約技使いとは比較にならないわね。でも、普通の契約技使ってあんなものよ。」

この国に限らず、強い人を上から10人みたいに選んだら、間違いなく契約技使いで埋まるわ。でも、そこまで努力できる人なんて、案

外ないものよ。坊や、強がりであれを大したことないって言ってる様子じゃないし、本当に強いのかもれないわね」

「少なくともあそこの男の人なら、よほど厄介な手札を隠していない限りは負けないでしょうね。」

まあ、それが本戦でどの程度まで通じるのかはわかりませんが、せっかく推薦してくれたんだから、できるだけいい結果を残して帰りたいですね」

「坊や、結構可愛らしいわね。アタシの応援している相手程とはいかないけど、せっかくの縁だから、それなりには応援してあげるわ。お姉さんの応援は嬉しいでしょう?」

「はい。そうですね。お姉さんと話しているのは結構楽しいです。ただ、あなたが応援している人相手でも、手加減はしませんよ。そんな余裕はありませんし」

「それは当然の事ね。手加減された相手に勝っても、あの子は喜ばないでしょうし。でも、きつと苦戦じゃすまないわよ」

このラミアの感じだと、相方の腕には相当自信があるらしい。でも、ぼくも簡単に負けるつもりはない。アクアがくれたアクア水もあるし、サーシャさんやステラさんの期待にも応えたい。

この人には悪いけど、ぼくは絶対に勝ってやる。そう意気込んだ。それから何試合か後、明らかに1人だけ強い剣士がいた。ピンク色の髪をしている。

もしかして。そう思っていると、その子が勝って勝者として顔が良く見える位置に立つ。あれは。

「ミーナ……? 前に戦った時より、はるかに強い。ミーナもぼくと同じように、本当に努力したんだな」

そう言うと、明らかに目の色を変えてラミアが話しかけてくる。「坊や、ミーナを知っているの? ……そうね。さつきからずっと話していたのに、名前を聞いていなかったわね。アタシはヴァネア。坊やは何て言うの?」

ヴァネアというらしいこのラミアもミーナを知っているらしい。契約していると言っていたけど、エンブラの街では見かけなかった。

あの時は契約していなかったのだろうか。

「ぼくはユーリです。ミーナとは、エンブラの街の闘技大会で戦ったんです」

「坊やが……！ ミーナは、坊やに勝つためにアタシと契約したのよ。アタシは野良モンスターだったんだけど、ミーナに負けたのよ。」

それで、ミーナの剣に惚れ込んだアタシが、契約を持ちかけたら、勝ちたい相手がいるからって、すぐ契約してくれたのよ。なるほど、坊やがね……ミーナが負けるほどの剣士と聞いていたから、本当に驚いたわ。坊や、とても剣士には見えないもの」

ミーナは野良の人型モンスターと契約したのか。

それにしても、人型モンスターの狡猾さを知っている身としては、よくその話を受けたなと思う。

ヴァネアにしろ、ミーナにしろ、お互いに幸運だったみたいだ。

「そうですね。剣の腕だけなら、あの時からミーナの方が上だと思えます。でも、契約技が使えるなら、ぼくは何が何でもミーナに勝ちます。それが、ぼくと契約モンスターの絆の証ですから」

「ふふ。良い契約相手がいるのね、坊や。でも、ミーナとアタシの絆も大したものだと思うわよ。坊やに勝つために、お互い訓練を重ねてきたんだから。」

それにしても、こんな偶然があるなんてね。ミーナも言っただけど、本当に運命かもしれないわね。坊やとミーナは」

「ヴァネアさん、ミーナに伝えておいてください。絶対に戦おうって。ぼくはミーナに当たるまで負けませんから」

「ミーナのライバルなんだから、ヴァネアでいいわ。ふふ。それにしても、ミーナには良い楽しみができたんじゃないかしら。ちゃんと伝えておくわね」

それから予選が続いたが、結局ミーナは苦戦することすらなく予選を通過していた。本当にミーナは強くなった。ぼくも負けたくないな。強くそう思った。

### 34話 ふれあい

昨日は予選だったが、今日は何もない。ぼくは明日から始まる本戦に備えて、ゆっくり休むことにしていた。

王都を観光することも考えていたが、王都については詳しくないので、変な疲れが残ってしまいかねないと思って宿でゆっくりと過ごすことに決めた。

1人でくつろいでいると、ステラさんがぼくの部屋へと入ってきた。

「ユーリ君、調子はどうですか？ せっかくですから、私が何かあなたを癒すことが出来ればと思ひまして」

癒す、か。ステラさんは優しいけれど、最近は少しそれだけじゃないところを見せてくるようにもなったので、ちょっとだけ警戒してしまふ。今回も妙な誘惑をしてくるのではないかと気が気ではなかった。

「まあ、調子はいいと思います。ステラさんは何をするつもりでこちらに？」

「そうですね。今回は耳かきはありませんが、また、私の膝を枕にしてみる気はありませんか？」

膝を枕にするくらいなら大丈夫かな。ステラさんは本当にぼくをドキドキさせてくるから、疲れちゃうこともあるんだよね。さすがに明日大会だし、そういう疲れ方はしたくなかった。

「じゃあ、お願いします」

「では、どうぞ。ユーリ君、安心していいですよ。今日はちゃんとゆっくりさせてあげますから」

ぼくの懸念はどうやらステラさんには見透かされていたみたいだ。本当にステラさんにはかなわないな。ぼくなんて、本当に手のひらの上なのだろう。

でも、ステラさんの手のひらの上だと思ふと、なんだか安心感もあった。ステラさんはなんだかんだで本当に優しいし、ぼくを破滅させにくるようなことは絶対ないだろう。

だから、ステラさんに転がされると感じてても、安心して受け入

れてしまえた。

ステラさんは座った膝の上を手で軽くたたき、ぼくを誘導してくる。ステラさんの膝に寝転んだぼくは、相変わらずの安心感を感じていた。

「ふふつ、ユーリ君、存分に私に甘えてくれてかまいませんよ。それでユーリ君の力になれるなら、それだけで私は嬉しいんです。だから、ユーリ君がしたいことを私に何でも言ってください」

何でもステラさんは言ったけど、ぼくは今この状況が既に理想の状態だと思っていた。

ステラさんにはなんだか母のような、姉のような感じを覚えてしまう。母親というのはよくわからないけど、ステラさんには本当に信頼して甘えてもいいと思えた。

そのままステラさんの膝の上でまどろんでいると、ステラさんはぼくの頭を優しくなで、子守歌のようなものを歌っていた。

ステラさんの優しい撫で方に優しい声。膝と手から感じる温かさ。ぼくは心の底から安らぎを感じていた。こんなはずつと続けてたら、ぼくは駄目になってしまいかもしれない。

それからしばらくステラさんの膝の上でじっとしていた。ステラさんはその間ずっとぼくを落ち着かせてくれていた。

満足したぼくはゆっくりと起き上がる。ステラさんの優しい表情が見えて、すこしだけきつとした。本当にこの人は魅力的だ。油断していると、どこまでも溺れて行ってしまいかもしれない。

「ユーリ君、ゆっくりできましたか？　これからはきつと大変でしょうから、疲れた時にはいつでも私のところに来てくださいね。私があるなを癒してあげます。それ以上のことだってかまいませんが、さすがに今はそんな気分にはなれませんよね。」

ユーリ君、つらくなったら私がいいますからね。だから、安心して全力を尽くしてください。仮に傷ついたとしても、私がいれば大丈夫。あなたを包み込んであげますから。ずっとそばにいますからね」

ステラさんに包み込んでもらう……安心できるような、溺れ切ってしまうようで怖いような。



でも、ステラさんが待つてくれていると思うと、今回の大会で頑張る気力が湧いてくる。

ぼくはもうステラさんから離れられないかもしれない。ステラさんが待つてくれているのといないのでは、何もかもが違う。

ステラさんがいなくなってしまうたら、ぼくは頑張つていくための大きな理由を失ってしまうことになる。ステラさんと学園にいたころは、普通に尊敬できる人くらいの感じだったのに。本当にわからないものだ。

もしかしたら、これからもそんな出会いがあるかもしれない。そう思うことによつて新しい希望が生まれたような気がした。

もともと、ぼくの世界にはアクアとカタリナ位しかいなかったのに。変われば変わるものだな。そう思った。

「ステラさんがいると思うと、本当に活力が湧いてきます。ステラさん、本当にありがとうございます、ぼくと一緒にいてくれて。ぼくが強くなれたのも、ステラさんの影響がとても大きいです」

「そうですね。案外嬉しい物ですね、頼られるというのも。ユーリ君、あなたは自分が思っているより魅力的ですよ。だから、周りの人たちも支えてくれるんです。私だって、そう思っていますよ。」

だから、ユーリ君。私にも、カタリナさんにも、アクアちゃんにも、ユーリヤさんにも、頼つていいんですよ。もちろん、ユーリ君に私たちが頼ることもあるでしょうが。今回のサーシャさんのように。

ユーリ君、無事に帰つてきてほしいのはもちろんですが、ユーリ君が納得する結果を出せるよう、応援していますよ」

「はい、ありがとうございます、ステラさん。きつといい結果を出して見せます」

ステラさん、本当に落ち着いているな。

だから、ステラさんというと僕も落ち着くのだろう。

いつか、こんな余裕を持った人になれるといいな。ステラさんのようになれるなんて、きつと最高だろう。

「じゃあ、ユーリ君。次はアクアちゃんを連れてきますね。アクアちゃんも、ユーリ君と一緒に居たいでしょうし。では、ユーリ君」

そう言つてステラさんは去っていく。なんだか少しだけ寂しいよ  
うな気がした。

ステラさんがそばに居ることも、いつの間にか当たり前のよう  
なつてたんだよね。ほんの短い期間といつてもいいのに。

でも、そんな人と出会えたのは本当に良かったな。一緒に居て嬉し  
い人ばかりじゃないのは、良くわかる。だから、本当にステラさんと  
出会えたことに感謝していた。

少しして、アクアが部屋へとやつてくる。アクアはすぐにぼくに抱  
きついてきた。

ほんと、アクアに抱き着かれるのは落ち着くような気がする。アク  
アは無邪気に甘えてくる感じが、すっごくかわいいんだよね。

アクアとどうやって出会ったのかは覚えてないけど、本当にアクア  
がぼくのペットで良かった。アクアがいなかったら、生きる希望なん  
てろくになかっただろうし。

アクアと一緒に居る時間が、どれだけぼくの支えになったことだろ  
う。

ぼくに優しくしてくれる人なんて全然いなかったから、アクアが甘  
えてくることが本当に嬉しかったんだよね。

カタリナは優しくしてくれたような、してくれなかったような怪し  
い感じだし。あれはあれで本当に助けられたんだけど。

「ユーリ、考え事？ ステラの番が終わったんだから、次はアクア。  
ユーリも抱き返して」

そう言われてしまったので、ぼくもアクアを抱き返す。アクアは本  
当にひんやりして気持ちいいな。

でも、寒い時でも体温を奪われるような感じはしないし、どうなっ  
ているんだろう。

まあ、アクアとくつつきやすくなるんだから、理由は何でもいいか。  
逆だったら困るけど。

アクアはそれから、腕を伸ばしてぼくに絡みついたり、ぼくの体の  
いろんなところを少しだけアクアの体に入れてみたり、ずっとべつた  
りだった。

アクアは姿を変えられることが分かってから、あの手この手でぼくと触れ合おうとしてくる。スライムつてすごいな。こんな触れ合い方はとてもほかのモンスターでは出来ないだろう。

「ユーリの全身でアクアが知らないところはない。これからも、ユーリの姿が変わったら、また確かめる」

なんかすごいことを言ってるような気がするな、アクア。

でも、アクアになら何を知られていてもいいかな。アクアがぼくの何を知ったところで、それがぼくに害をなすとは思えない。仮に害をなすとしても、アクアならそれでいいとすら思える。

アクアがぼくを殺すのだとしても、アクアが操られてとかではないなら、かまわない。アクアがいない人生なんて意味はないんだし。

ぼくも大概アクアに依存しているな。そう思ったが、改めるつもりはなかった。アクアが幸せじゃないのなら、考え直すべきだろうけど。

アクアは嬉しそうにぼくのいろんなところを撫でている。

少しくすぐつたいけど、アクアの嬉しそうな顔を見ると、とても文句を言う気にはなれなかった。

アクアの表情を見られるようになったのも、アクアが進化してよかったところだな。なんとなく感情は分かるような気がしていたけど、顔を見る時ほどではなかったし。

「アクア、楽しい？ アクアとこうして2人きりなのも、久しぶりだね。今日は目いっぱい楽しもうね」

「当たり前。せっかくユーリと2人きりなんだから、できる事は何でもする」

「なら、前みたいにぼくを取り込んでみる？ あの時のアクアは本当に楽しそうだったよね」

「それは最後。ユーリ、後ろを向いて」

言われた通りに後ろを向くと、背中にへばりついてきたアクアが、ぼくの体をマッサージし始める。ステラさんにマッサージされた時とは明らかに違う感覚だ。

なんというか、一気に全体を刺激されているような感じかな。

「ステラとアクア、どっちがいい？ ユーリ、答えて」

そんな質問をされたら困ってしまう。でも、本当に全然感覚が違って、まるで比べるものではないような感じがする。肉料理と野菜料理より違うかもしれない。

「そんなことを言われても……どっちも最高じゃだめかな？」

「別にそれでもいい。でも、だったら、こういう事もする」

アクアはぼくの顔を取り込んで、全体をマッサージし始める。

アクアの中で目を開いたまましていると、なんだか不思議な見え方がしていて、とても面白かった。

目や鼻に口の中までアクアに触られているような感じがしたが、全く不快ではなかった。どうやったらそんな風にできるのか気になったが、説明されたところでわからないだろうな。

しばらくアクアにされるがままになっていると、アクアは満足げな顔でぼくを解放した。ほんと、アクアは楽しそうだな。

まあ、アクアが楽しくなれるのなら、もうちょっといろいろされてもいいかもしれない。幸せそうなアクアを見ると、ぼくも本当に嬉しくなる。

「ユーリ、今度は全身」

そう言つてアクアが絡みついてきたので力を抜くと、アクアがぼくを取り込んできた。

今回は取り込んだままじっとしているわけでは無く、ぼくの体のいろいろなところを刺激し始めた。

本当に初めての感覚で、何と言つていいか分からなかったが、心地がいいことは確かだった。

それからアクアはぼくを弄り回したり、アクアの中のいろいろなところに動かしたりと、ずっと何かしていた。

かなりの時間がたったと感じたころ、アクアはぼくを解放する。そのままアクアはぼくに抱き着いてきた。

「さっきみたいなのもいいけど、こういう触れ合い方もいい」

そのまま、ぼくの頭を撫でてみたり、ぼくの腕に組みついてみたり、ぼくの手を握ったり、いろいろしていたアクアだったが、その間ずっ

と楽しそうだった。

「ユーリ、大会、頑張つて。一緒じゃないのは残念だけど、その分はまた堪能する」

この分だと、大会が終わった後にまたアクアと何かすることになりそうだ。

でも、ぼくも楽しみだから、大会が終わった後のお楽しみということにしておこうか。

明日からは大会だ。ミーナと戦えたらいいな。本当に楽しみだ。

### 35話 成長

いよいよ今日は大会だ。王都についてからはすぐだけど、移動を含めたら結構かかったからな。会場に向かいながら、ぼくは改めて気合を入れていた。

会場に到着すると、参加者らしき人だけでも大勢いた。

受付を済ませて会場で待っていると、オリヴィエ様が壇上へと上がってきた。先日が続いてまた歓声が沸き起こる。

「さあ、今日は余に強者たる力を示して見せよ。優勝したものには、余が手ずから勲章を賜ってやろう。せいぜい励めよ、諸君」

オリヴィエ様はそう言っただが、再び歓声が起こり、そのまま第1試合へと移る。

前日の予選と似たような感じで、まずはある程度人数を絞り、その後トーナメントを行うようだ。

ただ、予選のように必ずしも1名しか勝ち上がれないわけではない。試合最後の時間まで残っていれば、トーナメントに進むこと自体はできる。

その代わり、談合などがあつた場合、処罰されるらしい。そんなことをする相手のいないぼくには関係のない話だけだ。

第1試合からすでに、予選よりはるかに高いレベルの試合が行われていた。ミーナは予選では別格だったが、今回はもしかしたら負ける可能性もあるかもしれない。そう思っただが見ていたが、ぼくより前に出場したミーナは、余裕のありそうな表情で勝ち上がっていた。

何試合か終えてぼくの番がやってきた。ぼくは中心部からは距離を取り、近づいてくる相手を仕留める形をとっていた。

もちろん、仕留めるといつても殺すわけではない。故意の殺害は失格どころかその場で牢屋送りになるようだから、ぼくはきちんと手加減していた。

とはいえ、死んでいなければ治せるくらいの治療部隊が待機しているらしいので、恐る恐る戦うということにはならなかった。

「弱そうなガキがいるな。お前にこの大会はふさわしくない。さっさ

と消えてもらおう」

そんなことを言う奴もいたが、アクア水を使うまでもなく、単なる剣技だけで沈んでいった。ふさわしくないのはそいつだったみたいだ。

それから特に苦戦することはなく、ぼくは初めの試合を勝ち抜いた。

他の試合にいたような強い人がまるでいなかったこともあるが、試合にいる大勢は、そこまでレベルが高いとは感じなかった。

もちろん、アクア水を手に入れる前のぼくでは手も足も出なかっただろうけど。

その後はトーナメントに移り、大会は進んでいった。ぼくの番になると、相手として出てきたのはモンスターだった。

これは、アルラウネかな？ アリシアさんの話題に出てきたくらいで、特にこれまでかかわることはなかった相手だ。どんなものだろう。

「水の契約技使いか。なら、私が負けることはなさそうだね。運が悪かったね。まあでも、トーナメントに出れただけでも自慢していいよ」

水だと相性が悪いってことは、前のドリアードのような感じかな。でも、あの時と同じ手を使ったら殺してしまうから、ちよつとやり方を考えないとな。

「ドリアードなら仕留めたことがありますけど、あなたはどうなるでしょうね」

「ふーん。植物型モンスターを倒せはするんだ。でも、私をそこらのモンスターと同じとは思わない方が良くいよ」

そのままぼくは構え、試合開始の合図が鳴る。

アルラウネは、すぐさま蔓を鞭として飛ばしてきた。

ぼくはアクア水で蔓の軌道をそらしながら、そらしきれなかった蔓を、一部は切り払って残りは避けていく。

切り払った蔓は、いったんアルラウネの本体へと戻ってからすぐに再生していった。

驚いた。これまでの人型モンスターで、再生なんてことをできた奴はいなかった。

どうせ治療班が治せるらしいからと雑に切り払っていたが、これなら対処の仕方を考え直す必要があるかもしれない。

「ふふっ、おどろいた？ トーナメントまで来られるだけあって、少しはできるみたいだけど、このままじゃじり貧だね。あきらめる？ それとも、とりあえず最後まで粘ってはみる？」

そうアルラウネは言うものの、そこまでアルラウネの蔓には警戒していない。顔に当たったならともかく、前に作った防具のおかげで、直撃してもどうとでもなる程度の威力だと思えなかった。

なので、ゆつくりとアルラウネの動きに付き合いながら、突破口を探ることにする。

殺傷能力の高い技はほとんど用意してきていないから、上手く近寄ってノックアウトしたいところだ。

そのまま一撃も受ける事は無く粘っていると、アルラウネはじれったそうな表情をし始めた。

「そんなに動き回って大丈夫？ 次の試合もあるんだから、体力は温存しておいた方が良くないんじゃない？」

確かに前のぼくならへとへとになっていたくらいの運動量だが、ぼくは特に疲れてはいなかった。

こういう言葉をかけてくるあたり、アルラウネはこのままの状態をキープされるとまずいのだろう。そう考えたぼくはそのままアルラウネの攻撃を流し続ける。

「いいかげん、しつこい！ 優しくしてあげるつもりだったけど、もう手加減なんてしてあげないから！」

そう言ったアルラウネは蔓の本数を増やして、蔓の勢いも上げてくる。

ただ、蔓が顔に向かってこないようにだけ気を付けていれば、ぼくに特段ダメージは入ってくることはなかった。平然とした顔をして攻撃を受けるぼくを見て、アルラウネは明らかに焦りだす。

「なんなの!?! どうして私の蔓が当たってるのに平気なの!?! 一体何



なのよ、あんたは！」

よほど自慢の武器だったのだろう、あの蔓は。明らかにアルラウネの動きが精彩を欠きだす。ぼくはアルラウネの蔓を切り払いながら進み、剣をアルラウネの首に突き付けた。

「降参してください。これ以上は、痛いだけではすみませんよ？」

そう言うのと、アルラウネはあきらめたような顔になった。

「わかった。降参よ、降参。はあ、楽な相手だと思ったのに。ねえ、私に勝ったんだから、もつといいところまで行きなさいよ。これでも私、結構有名なんだからね」

有名なんだろうか。まあ、このアルラウネにも興味はない。結局名前も聞かなかったし、もう会うこともないだろう。

でも、一応気にかけてはおくか。ぼくが勝ったんだから、それを誇れるくらいに思ってもらえるのが一番いいよね。

「分かりました。せっかくの機会ですから、優勝を目指して頑張ります。お元気で」

「つれない子ね。でも、本当にあなたなら優勝できるかもね。私だって、前に出た時はいいところまで行けたんだから。それに勝ったんだから、少しは自慢げにしなさいよ」

そう言われても、このアルラウネの事も、この大会の事も、全然知らないし。大会の事を知らないのはちよつとどうかと自分でも思うけど、いきなりの話だったからね。

まあ、勝者の義務だ。胸を張ろう。ぼくは剣を上に掲げた。

「それでいいのよ。じゃあね。私が負けたのは優勝者なんだって、そう思わせてよね」

そう言ってアルラウネは去っていく。ぼくはそれから他の試合を見ることにした。

このトーナメントに出ているのは、契約者とモンスターだけみたいだった。皆何かしらの特殊な技を使っている様子で、見ていて面白かった。

しばらく見ていると、ミーナの試合が始まる。ぼくは集中して見ることにする。ミーナの相手はハーピーだった。レティさんとは結構

違う感じの人だ。

ハーピーは試合が始まると同時にすぐさま飛び上がり、空中でミーナを挑発しだす。

「ここまで攻撃を届かせてごらんよ。ま、契約技使いといっても、ただの剣士じゃ難しいかな」

そう言ったハーピーをミーナは流し、そのまま構える。ハーピーは上からものを投げて攻撃していた。ミーナはそれらをすべて捌き、じつと耐えていた。

ハーピーはしばらくの間、ものを投げ続ける。

あのハーピー、ものの重さも考えると、結構な重量を抱えたまま浮かんでいるみたいだな。何か特殊な力でも働いているのだろうか。

ぼくがハーピーについて考察していると、ハーピーがミーナをさらに挑発する。

「いつまでそうしているつもりかな。そうしているだけじゃ、勝てないってわからないかな？」

ハーピーはそう言うが、ぼくとアルラウネの戦いと同じ構図だろう。ハーピーの攻撃は届かないから、このまま進めていけば不利になるのはハーピーの方としか思えない。

同じ考えだろうミーナが、ハーピーの挑発に対して返す。

「そうしているだけで勝てないのは、君の方じゃないかな？ それとも、他に何か手はあるのかな？」

ハーピーは明らかにいらだった様子になり、攻撃の勢いを強める。

だが、ミーナは涼しい顔で全てを受け流していった。そのまま攻撃を続けていたハーピーは、限界が来たのか、攻撃の手を止める。そのままハーピーは空の上で動き回っていた。

これは、投げつけるものが無くなったな。

ハーピーはそれから、何度か地上に降りて投げるものを回収しようとするが、ミーナが先回りするため、結局地上には近づけないでいた。

そのまま何度か同じことを繰り返していると、今度はミーナが挑発する。

「いつまで逃げているつもりだい？ それじゃ勝てないってわからない

いかな？」

完全に先ほどの意趣返しを受けたハーピーは明らかに怒った様子になる。少しの間上をぐるぐる回り、ミーナに対して怒りの言葉をぶつけた。

「舐めやがって！ もうただじゃ済ませてやらないからな！ せいぜい後悔するといい！」

そのままハーピーは勢いよく飛び、ミーナに攻撃を仕掛ける。

あのハーピーはレテイさんほどじゃないとはいえ、かなり速い。でも、ぼくにも十分対処できそうな速さだった。

なら、ミーナは言うまでもない。ミーナはハーピーの攻撃を華麗に避け、カウンターを叩き込む。そのままハーピーは沈んでいった。

ミーナは剣を上に掲げ、勝者としてのアピールをする。そのまま、笑顔で周りに向かって手を振っていた。

ミーナの試合を終えた後も試合を見続け、今日の日程は終わった。最後にオリヴィエ様が壇上に立ち、再び演説を始める。

「今日の試合はなかなかいつもより面白かったぞ。だが、今日行われたのは所詮足切り。勝ち上がって当然だと思っっている。さあ、明日はせいぜい余を楽しませて見せろ」

そう言っただけでオリヴィエ様は去っていく。それから、ぼくたちも解散していった。

宿ではアクアとステラさんが迎え入れてくれた。アクアが散々甘えてきたので、なんだか落ち着いた。

明日はミーナと戦えるといいな。

### 36話 水刃

ぼくは今日も大会の会場に来ていた。今日の試合に勝ち進めば、優勝することが出来る。ミーナと戦えるとしたら決勝なので、絶対勝ちあがるつもりだ。

今日もオリヴィエ様が壇上に立ち、演説をする。

「今日がこの大会の本番とっていい。よくぞここまで勝ち上がってきた。だが、ここからが本番だ。気を抜くことなく精進せよ。それにしても、中々今回は面白い物が勝ち上がっているな……？」

そう言つてオリヴィエ様は何カ所かを見る。

その最中、オリヴィエ様と目が合ったように感じた。気のせいか？

そのままオリヴィエ様は演説を続ける。

「さて、今回は普段は勝ち上がらないようなものが勝ち上がっている。観客にとつてもめつたにない機会だ。幸運だぞ、今回の大会を見られたものは。出場者諸君、せいぜい余の勲章を賜れるように励めよ」

そう言つてオリヴィエ様は去っていく。今日も大会を観戦していくようだ。

そのまま大会は問題なく進んでいき、ぼくも何度か試合をすることになった。

契約技で力を強くする人や、炎を扱う契約者などと戦ったが、アクア水による防御を抜くことができず人はいなかった。

ミーナも順調に勝ち上がっており、決勝が楽しみだった。

次のぼくの試合。ここからは実況解説をする人がいるらしい。よくわからないが、邪魔にならないければ何でもいいか。そのまま会場へと向かう。

「さあ、エルフィール家の推薦で参加。冒険者チームであるオーバースカイのユースだ！ スライムと契約している水使いで、なんと、あの風刃アリシアに冒険者としてのいろはを学んでいるそうだ！ ここまで危なげなく勝ちあがっており、冒険者としては今大会最高クラスの活躍をしているぞ！」

歓声が上がったので一応手を振っておく。すると、さらに歓声が大

きくなくなった。こういうのは初めてだけど、案外悪くないな。そのまま相手も紹介される。

「つづいて、ブライト家が推薦する騎士の称号を持つオリアス！ 騎士だけあって、その武技は大会随一だ！ 猫モンスターと契約しており、契約技によって身体能力を上げているぞ！ そのスピードからは目が離せない！」

今回の対戦相手はオリアスというらしい。分厚い鎧をまとって槍を構えている。

そのオリアスが、ぼくに話しかけてくる。

「あのアリシアが、人に何かを教えるなんてな。お前、アリシアの偽物に騙されてるんじゃないやねえの？ そうでもなきや、あの女がまともに人を育てられるわけがねえんだ」

「アリシアさんの偽物は、数えきれないほどのキラータイガーを瞬殺できるんですか？ それなら、もしかしたら偽物かもしれないですね」  
そう言いながら、ぼくの心は怒りで燃え上がっていた。あの優しいアリシアさんが、まともに人を育てられない？ ふざけたことを言うものだ。

こいつ、絶対ただではすませてやらない。ぼくの怒りを思い知らせてやる。

「へっ、そうかよ。そりやあ確かに本物かもな。あの人を人とも思わねえ奴が、よくもまあ。お前、随分恵まれてるじゃあねえか」

こいつめ、アリシアさんを人を人とも思わない奴だと？ そんなことを言う奴を絶対に許すものか。泣いて謝ったくらいで許されると思ふなよ。

そしてぼくたちはお互いに構えた。今回は実況担当が開始の合図をするらしい。

「冒険者ユーリ、騎士オリアス、今この両者がぶつかります。試合、開始！」

掛け声と同時にオリアスは槍を振るってくる。ぼくは剣でそれを受け流したが、意外な重さに驚く。こいつはさすがに騎士だけあって強い。簡単にはいかないかもしれないな。

「さあ、オリアスが先手を取ります！ ユーリ選手は防戦一方！ このまま決まってしまうのか!？」

そんなわけないだろう。ぼくはアクア水も使っていないのだから。でも、こいつもきつと本気じゃない。どこで手札を切るかはしっかりと考えないと。

そのまましばらく受け続けていると、オリアスが挑発してくる。

「何だ、アリシアが教えたって言っても、こんなもんか。やっぱりアリシアに人に物を教えることなんてできねえんだな」

ぼくは冷静さを失いそうになるが、こらえる。

ここでこんな簡単な挑発に乗ることが、アリシアさんの教えに沿っているとは思わない。アリシアさんの事を思うなら、ここでしっかり勝つことの方が大事だ。

ぼくはそのまま受けを続け、アクア水の出し方を考える。ここまでこの大会で使った手札は、アクア水の鎧と、アクア水で敵の攻撃をずらすことだ。まずはそれから使っていくか。

そう考えたぼくは、相手の槍をアクア水でずらし、相手の体勢を歪める。

だが、そこで攻めようとすると嫌な予感がしたので、一步下がる。そこに相手の槍が通り過ぎていった。さすがに何度も見せている技だ。対策はされていたか。

次はアクア水を複数個浮かべて、そこに槍が当たると押し返すようにしてみる。

オリアスはしばらく動きを鈍らせていたが、すぐにアクア水の軌道を読み、アクア水を避けて攻撃してくるようになった。

だけど、これでいい。直接アクア水で槍の軌道を変えること以外にも、槍の軌道を絞ることもできるんだ。その証拠に、先ほどより動きの速度が上がっているオリアスに対しても、十分剣で槍に対処することが出来ていた。

「さあ、お互い契約技を使つての攻防だ！ 果敢に攻めるオリアス選手！ だが、ユーリ選手も負けてはいない！ 水を巧みに使い、きちんと対処できているぞ！」

「なかなかやるじゃねえか。アリシアとは似ても似つかねえが、確かにお前は強い。俺より10は若いだろうにそこまで出来るってんだから、羨ましいいったらないぜ。だが、これならどうかな!?」

そう言つてオリアスは槍の速度をさらに上げる。何度かアクア水の鎧に当たるが、ぼくはダメージを受けていない。

そのまま何度か受けていると、オリアスが顔に向かって攻撃してくる。それをいなすと、オリアスは顔に向けて攻撃を集中させてきた。

「ちゃんと顔も防御しないからこうなるんだぜ。詰めが甘いよなあ！」

それからオリアスは攻撃の速度を再び上げ、顔に向けて攻撃してくる。アクア水を使つてずらしたり、剣を使つて弾いたりしていたが、ついに攻撃が当たりそうになる。

「もらった！」

オリアスはそう言うが、ぼくは全身の周りにアクア水を出現させてぼくの動きを加速させることで対処する。アリシアさんがよく使うという風を使つた移動をまねたものだ。

ぼくはキラータイガーたちを倒したアリシアさんの姿を見てから、この技をずっと練習してきた。だから、オリアスの素早い動きにも十分対抗できた。

「ユース選手、水で体を動かしているのか!? これはまさに、アリシアとの師弟関係を感じさせる動き! オリアス選手も全力で攻撃しているが、全く当たらないぞ!」

オリアスは攻撃に対処しているぼくの姿を見ると、いまいましてそうに吐き捨てる。

「ちつ。本当にアリシアの動きそっくりじゃないか。冗談じゃねえ。あの女、俺の事はゴミみてえに扱いやがったくせによ!」

そう言つてオリアスは攻撃に力を入れている様子だが、ぼくに攻撃はまるで通らない。全身をアクア水で包んだメリットはぼくの加速以外にもあった。

防具を着ていなかった顔や、手足の端も防御できるようになったのだ。アクアに取り込まれたとき、呼吸できたことを参考にして、アク

ア水で顔を包んでも周りの空気をぼくの体に運んで問題なく呼吸できようになった。

だから、顔を狙うオリアスの行動は無駄になった。ただ、何度か防御を抜かれそうになる場面はあったが、アクア水をうまく操作することで対処できた。

それにしても、オリアスはアリシアさんにゴミみたい扱われたというけど、この態度の人だったら無理もないんじゃないかな。騎士つてわりにチンピラと見間違えそうなくらいだし。

どうせアリシアさんにろくでも無い態度でも取ったのだろう。あの優しいアリシアさんが、周りの人を積極的にゴミ扱いするなんてとても思えない。

しばらくオリアスの攻撃に対処し続けていると、オリアスは明らかに立ちを隠せない様子になった。

「もういい。次の試合なんて知ったことじゃねえ。今ここで、お前を終わらせてやるよ、アリシアの弟子さんよ！」

そう言うとオリアスは明らかに先ほどまでとは違う速度と威力でぼくに攻撃を仕掛けてきた。ぼくは全力でオリアスの攻撃をいなすことに集中する。

「おおっと、ここでオリアス選手、怒涛の連続攻撃！ ユーリ選手、防戦一方だぞ！」

オリアスの体力を尽きさせることを目指したぼくは、そのままオリアスの攻撃を受け続ける。オリアスは動きが鈍くなるどころか、どんどん動きが良くなっていった。

ぼくは少しずつ、攻撃をまともに受けそうになっていった。だが、そのまま粘っていると、オリアスの顔が明らかに変わった。これは渾身の一撃とかが来る顔かな。

案の定、オリアスは全力で攻撃してくる。ぼくは槍の前にアクア水の壁を張ったが、オリアスはそのまま突き刺そうとしてくる。

「これで、終わりにしてやるよー！」

オリアスは全力でぼくに向かって槍を突き出してくる。アクア水をものともせず、どんどんぼくに攻撃が近づいてきた。このままでは



当たってしまうだろう。

けど、ぼくはまだ手を残していた。アリシアさんの真似をしようとした技はあれだけじゃない。アリシアさんの代名詞である風刃を、アクア水で何とか再現しようとしていたのだ。

今がそれを見せる時だ！　オリアスの槍に向けて横から水を押し固めた刃を放つ。槍は真つ二つになり、ぼくに当たらない軌道へと変わっていった。

そのまま、ぼくはオリアスの防具をアクア水で破壊していった。オリアスはもうボロボロなので、少し様子を見てみると、オリアスは怒りを顔に浮かべてこちらに向かってくる。

「ふざけるな！　アリシアの技を使って、さらに俺を憐れむのか！　何様だお前は！　ここで俺を殺さないなら、必ずお前を俺が殺してやる！」

そうオリアスが言うので、アクア水でさらに痛めつけてオリアスの意識を失わせる。

「ユーリ選手、オリアス選手をノックアウト！　ここで試合終了です！　ユーリ選手の勝利です！」

オリアスはそのまま、運営らしき人に連れていかれた。さっきまでの試合では、こんな事は無かつただけだ。まあいいか。ぼくは剣を上に掲げて、勝利をアピールする。

「ユーリ選手、先ほどの一撃はまさに水の刃！　アリシアの代名詞である、風刃を意識したのでしょうか!?　ユーリ選手の動きはアリシアを継ぐもの。まさに水刃！　水刃のユーリと言っていていいでしょう！」

新時代の冒険者となるのでしょうか、水刃のユーリは！  
水刃か。アリシアさんとのつながりが感じられるいい名前だな。この大会もあと少し。優勝して、水刃の名を残したい。

### 37話 ライバル

ぼくはオリアスと戦ってからは特に苦戦することはなく勝ち進んでいた。

ミーナも勝ち進んでいて、ぼくたちは決勝で当たることになった。ミーナはオリアスより動きが鋭いような感じがする。もしかしたら、身体強化系の契約技なのかな。

決勝が始まる前に、オリヴィエ様が壇上に立ち、話し始める。

「本当に今回の大会は面白い。スライムとの契約者と、一般参加の者。どちらもこれまでではろくな成績を残したものがいない。余はすでに大いに満足しているが、最後がつまらなければ興ざめだ。両者とも、しっかりと励めよ。余の勲章を賜る荣誉、滅多なことでは味わえぬぞ。

だが、面白い試合になつたならば、敗者にもそれなりの褒美を与えようではないか。余を失望させぬようにな」

オリヴィエ様は前よりも近くで試合を見るようだ。少し緊張するような気もするけど、せつかくのミーナとの試合だ。しっかりと楽しまないとな。

とても楽しみだけど、せつかくここまで来たのだから、ミーナにも勝つて、最高の形でこの大会を終えよう。

ぼくとミーナは決勝の舞台で向かい合う。何か話しかけようと思ったが、その前に実況が始まった。

「水刃のユーリと、終の剣ミーナ。今、両者が向かい合う！ オリヴィエ様もおっしゃっていたが、スライムとの契約者、一般予選からの参加者、そのどちらともが決勝に来るものは前代未聞！ いつも熱い戦いを見せてくれる今大会だが、今回ばかりは目が離せ無いぞ！」

終の剣か。ミーナはこれまでの試合でも何度かそう呼ばれていたけど、何か由来があるのだろうか。ぼくの水刃はともいい名前をもたらったものだと思うが、ミーナはどうだろう。

「ミーナ、終の剣なんて呼ばれているんだね。ぼくは水刃なんて少し大げさな気がするけど、アリシアさんと似たような名前なのは嬉しいよ」

「君は風刃のアリシアに弟子入りしたんだって？　すごいじゃないか。でも、きつと僕も負けてはいないよ。終の剣というのは、僕が自分で考えたんだ。全ての敵はこの剣の前で終わるって決意を込めてね。」

実際に今まで君以外には負けていないよ。さすがに今はオリヴィエ様には勝てないだろうけどね。僕はユーリ、君に勝つために本気で訓練してきたし、ヴァネアとも契約した。

今日は君に勝って、あの時のリベンジを果たさせてもらおう。ユーリ、君の試合は全部しっかり観察させてもらったよ。それで分かった。君は本当に強い。あの日の君はきつと実力の半分も出せていなかったんだろう。でも、だからこそ、その本当に強い君に勝って、僕は最強の剣士に1歩近づくんのだ！　ユーリ、覚悟してね」

ミーナはこれまでの試合でも全く苦戦することはなく勝ち進んでいた。そのミーナが今は勝てないって言うなんて、オリヴィエ様はどれくらい強いんだろう。

ぼくは正直世間には疎いところがあるので、オリヴィエ様についてもあまり詳しくない。

それは今はいいか。それよりミーナだ。ミーナはきつと剣技だけならぼくの届かないところにいるかもしれない。そんなすごいミーナにライバル視してもらえるなんて、嬉しい話だ。

でも、ぼくにはアクア水がある。アクアがくれたアクア水で、ぼくは冒険者の頂点に立ってみせる。ミーナはすごい人だ。でも、ぼくはミーナにも負けない！

「ミーナ、ぼくは今回こそ誰にも恥じない形できみに勝つよ。そして、ぼくのアクアが最高なんだって証明してみせる！」

ミーナはそれを聞いて構えた。ぼくもそれに合わせて構える。さあ、いよいよだ。

「さあ、両者ともに構える。絶対に見逃せない決勝戦が今始まるぞ！

試合……開始！」

すぐさまミーナが動き出す。やっぱり速い！　ぼくは最初から水を体にまとい、高速で移動する。アクア水で補助しているスピード

に、ミーナは難なくついてくる。

やはりミーナは強い。そのまま何度も剣をぶつけあう。スピード勝負ではミーナが上回った。

だけど、ぼくのアクア水はこれだけではない。ぼくはアクア水を空中にたくさん出して壁のようにすることでミーナの持つ剣の動きを制限する。そうすることで、ようやくまともに打ち合うことができた。

「ふふっ。剣士としては僕の勝ちかな。でも、君の全部を打ち破らなくちや意味は無いんだ。まだまだこんなものじゃないよ。ぼくの訓練の成果はね！」

ミーナはそう言って空中にあるアクア水の上から剣を叩き込んでくる。アクア水で押し返そうとするも、アクア水を抜いてこちらに剣を通してきた。ぼくは慌てて剣で防御する。

重い！ 思わず唸りそうになるが、ぼくはアクア水ごと後ろに下がり、剣をいったん受け流す。

たくさんアクア水を出して壁にしても無駄になりそうだな。なら、別のやり方にするだけだ。

ぼくはミーナの剣に、最低限の防御を残した残りのアクア水をまとわせ、ミーナの剣の動きを妨害する。ミーナの力は強く、完全には制御できないが、ミーナの剣の動きは鈍った。これなら打ち合うことはできる。

そのまま剣を打ち合っていると、ミーナはぼくの動きに慣れたみたいで、ぼくの妨害をうまく受け流してくるようになった。

「目にもとまらぬ攻撃の応酬、だが、ミーナ選手が一步優勢か!？」

「まだまだ僕は行けるよ！ ユーリ、君だってここで終わりじゃないだろう！」

そのままミーナはぼくと打ち合いを続ける。だんだんミーナの剣を妨害できなくなって、また追い詰められたぼくは、今度は完全に自分の動きを補助することだけにアクア水を使うことにする。

さつきは全身を同じ方に動かすだけだったが、今度は別々の方向にアクア水を動かすことにする。失敗したら手足が変な方向に曲がつ

てしまう、危険な技だ。それでも、ここまでしなければミーナには対抗できない。

全神経をアクア水の操作に傾ける。そうしなければこの動きを使いこなすことなんてできない。だが、その甲斐あって、ぼくの剣はミーナと拮抗していた。

「ミーナ選手もユーリ選手もとても素早い！　こんな試合はこれまでに私は見たことがありません！　一瞬も目が離せない！」

「ユーリ、契約技で剣技をそこまで高めるなんて！　本当に最高だよ、君は！　なら、ぼくの契約技を、本当の意味で見せてあげるよ！」

そう言ったミーナは先ほどまでより明らかに鋭く剣を振ってきた。回避も間に合わず、アクア水での防御も抜かれて、ぼくの腕は軽く切り裂かれた。

血が吹き出そうになるが、アクア水を傷口にまもって血を止める。なんて鋭い剣だ。オリアスより明らかに強い。

いったん僕はミーナから全力で距離を取り、腕の止血を自動で行えるようにアクア水を調整する。

即座の判断が要求されるようなアクア水の動きでは決してできないが、単純なことならばぼくは全く意識せずアクア水を使えるようになっていた。

これも指輪の力のおかげだ。ステラさんには感謝してもしきれないな。

「おおっと！　ユーリ選手大打撃！　このまま決まってしまうのか!?」

「なんて力だ……これは、身体能力の強化？　でも、これまでの身体能力強化者は猫型モンスターと契約していたはず。どういうことだ？」  
「ふふっ、困惑しているみたいだね。でも、君のいう事は正しいよ。ぼくの能力は五感の鋭敏化。その力を最大限に使って、誰よりも正確に全身を操ることで、身体強化している人並みの力を発揮したんだよ。もちろん、これ一回きりじゃないよ」

ラミアの契約技はそういう方向性なのか。

でも、それが分かったところでこんな単純な能力に分かりやすい対

策は無い。大きな音を出すとかはありかもしれないが、ぼくはその準備をしてきていない。

それにしても、五感の鋭敏化だけでこれだけの力を発揮するなんて、ミーナはとんでもないな。

そのままミーナは連続で攻撃を仕掛けてくる。先ほどのように突然ではないので、かろうじてダメージを受ける事は避けられていたが、このままではじり貧だ。

難しいが、ミーナの妨害と自己の補助を同時にやるしかない。ぼくはミーナの剣にアクア水をまわすの妨害と、ぼく自身の動きをアクア水で補助することを同時に行った。

そこまでして、ようやく互角の戦況だった。ただ、ぼくの消耗はとても激しい。このまま我慢比べをしたなら、負けるのはぼくだ。

だから、次の一手を打つことにした。ぼくとの打ち合いに集中しているミーナの後ろから水刃を放つ。これが当たってくれば！ そう願うも、ミーナは全く見もせず水刃を回避してしまう。

「なんと！ ミーナ選手、一切目を向けずユーリ選手の水刃を避ける！ 一体どういうことなのか!？」

「君が前の戦いで水刃を使っていたからね。これが初めてだったら危なかったかもしれない。さっきは言っていなかったけど、ぼくの契約技はあれだけじゃないんだ。周囲の熱を感じ取ることもできてね。」

水刃をいつ撃ってきてもいいように、常に警戒していたんだ。君が手札を隠したまま負けるなんて事、あるはずがないからね。ユーリ、そろそろしんどくなってきたんじゃないかい？」

実際ミーナの言う通り、ぼくはかなり追い詰められていた。このまま時間をかけていても負けるだけなのは分かっていた。

だから、ここから短い時間ですべてを出し尽くす。そう決めて、先ほどまでのぼくの動きの補助とミーナの剣の妨害、そして複数の水刃を同時に出すことに決めた。

そうしてミーナにぶつかっていくと、ミーナは回避に専念していた。余裕のある方はミーナだ。このまま凌いでいるだけで、ぼくの方が負けるという判断だろう。

ぼくは何が何でも勝つと決めて、最後の手段に出ることにする。

ミーナの動きを水刃と剣にまとわせたアクア水で制御し、若干の隙ができたところで全力の一撃を叩き込む。

ミーナは剣で受け流そうとするが、ぼくの剣をアクア水で扱うことに切り替え、ぼくはミーナの剣を持つ腕に殴りかかる。ミーナはそれを避けようとするが、普通の動きに対応できる範囲だ。

ぼくは無理矢理アクア水で腕の軌道を変え、ミーナの腕に攻撃を与えた。

ミーナは思わず剣を離してしまう。ぼくの左腕はもう使い物にならないけど、アクア水でぼくの剣を動かしてミーナに突き付ける。

「ふふふ……今回こそは勝てたと思っていただけだね。君がどういう性格なのかを忘れていたよ。ユーリ、おめでとう、君の勝ちだ。さすがはユーリだよ。僕の運命のライバル。でも、本当に悔しいな……」

「決まったー！ ユーリ選手の優勝が決まりました！ ミーナ選手も素晴らしかったが、健闘及ばず！ だが、両者ともに素晴らしい試合を見せてくれた！ 本当にありがとう！」

そのままぼくたちは握手して、ぼくは右腕を突き上げる。これまでで一番大きな歓声が沸いた。その後、オリヴィエ様が壇上に上がり、今回の試合を総評する。

「ユーリ、ミーナ、双方とても余を楽しませてくれた。ユーリには勲章を、ミーナには相応の褒美をくれてやろう。だが、ユーリは勲章を受け取れる状態にないな。人を送る故、後日勲章を受け取りに来るがよい。貴様ら、見事だったぞ。褒めてやろう」

そう言っただけでオリヴィエ様は下がっていく。今日は本当に疲れたな。ゆっくり休もう。

ぼくは宿へと帰っていった。アクアはぼくの優勝を本当に喜んでくれたし、ステラ先生には心配の言葉をもらい、その後いっぱい褒めてもらった。本当に頑張ったよ。

### 38話 謁見

あれから2日後、オリヴィエ様の使いが来て、ぼくは王城へと招かれることになった。

大会で受けた傷は結構深い傷だったけど、次の日に起きたらもう治っていた。少し疑問だったけど、治っているのだから良しとする。

そのまま王城に向かうと、オリヴィエ様と数名の護衛らしき人のいる部屋に通された。

「よく来たな、ユーリ。さあ、余手ずから勲章を渡してやるとしようか。貴様ら、邪魔だ。余とこ奴の2人きりにせよ」

いきなりなんてことを言うんだこの人。王女様と2人きりなんて、勘弁してくれ。どういう態度をとっていいのか分かったものじゃないんだけど。

「しかし、オリヴィエ様。このような下賤なものなど……」

そう言われたオリヴィエ様はとて不機嫌そうな表情になる。そのままそう言った騎士らしき人を叱責する。

「貴様、いつから余に対して、『はい』以外の言葉を口にできるほど偉くなったのだ？ 立場をわきまえられないほど愚かなのか、貴様は？」

「は、はい。直ちに！」

そのまま大慌てで騎士らしき人たちは去っていく。頼むからもう少し粘ってくれよ。こんな状況に置かれたただの冒険者は、一体何をすればいいんだ。

「ユーリ、貴様のような冒険者如きに礼節など期待しておらぬ。普段通りに接しても良いぞ？」

普段通りに接しても良いって、普段通りじゃなくても良いってことだよな。そうだと言ってくれ。ほんと、どう対応するのが正解なんだ。

「オリヴィエ様におかれましては、ご機嫌麗しゅう……」

「見ておれんわ。なんだそのぎこちない態度は。今度は命令だ。普段通りに余と接せよ。後は分かるな？」



オリヴィエ様は目の圧力を強める。この人の命令に逆らうとか、絶対にくるくなことにならないのは分かる。はあ、仕方ない。気が進まないけど、やるか。

「オリヴィエ様、勲章を渡してくれるそうですが、そもそも勲章ってどんなものなんですか？　ぼくは世間に疎いようで、よくわかりません」  
「世間に疎いどうこうの問題ではなく、そもそも貴族ではないものは知らなくて当然だろうよ。まあ、はつきり言っておけば、単なる称号のようなものだ。勲章として世の物がイメージするような、形あるものですらないのが本来なのだがな。それでは誰が勲章を持っているかわからないということだな。こうして手渡しされる文化が生まれたのだ。

だが、それを持っているだけで、多くのものが貴様を優遇するだろうよ。王家から認められたという証なのだからな。無くすでないぞ？　そうなってはこちらが面倒なのでな」

称号なのか。サーシャさんの家ももらったということだけれど、王家から認められるって、そんなに嬉しい物なのだろうか。とてもこの人の前で言えることではないが、少し気になった。

「さあ、跪くがよい。余が貴様を認めたといい証だぞ？　貴様は分かかっておらんようだが、そのために一生を懸けるものも珍しくはないのだ。ユーリ、さあ」

そう言われたので頑張って跪く。勲章の価値がわかってないことに気づかれていたのか。ただ、オリヴィエ様にそれを気にした様子はない。

そのまま、オリヴィエ様はぼくの首に勲章をかけてくれた。金属の飾りのようなものに、ひものようなものが付いている。これが勲章か。なんだか実感がないな。

「これで終わりだ。楽にしてよいぞ。くくつ、スライムとの契約者が、この勲章を掲げることになるとはな。全くわからんものだ。貴様、誇ってよいぞ。余にも予想できぬことを成し遂げたのだ、貴様は」

スライムとの契約者って、そんなに弱い物なのだろうか。アクア水は最初からかなり便利だったけど、ステラさんの指輪のおかげかもし

れないな。ぼくは指輪に目を向ける。

「その指輪……貴様、ユルグ家の物だったのか？ いや、それにしては髪の色も目の色も何もかも似ておらんが……」

ユルグ家つてもしかしてステラさんと何か関係があったりするのだろうか。王家の人が知ってるって、よほど大事なものかもしれない。

今更だけど、こんなものを貰ってしまったてよかったのだろうか。

「その髪の色って藍色だったりします？ だったら心当たりがあるんですけど」

「その通りだ。なんだ、知っているのか？ ずいぶん昔に、貴重なモンスターから作られたものでな。モンスターと人との絆を強めるものだったはずだ」

「ぼくの先生だった人に貰ったんです。この大会のために、王都までサポートについてきてくれて」

「くくっ、そうか。随分と好かれてるようだな、貴様は。売れば一生遊んで暮らすこともできるであろうに」

オリヴィエ様はとても楽しそうな顔をしている。声色も楽しそうなので、本当に楽しいんだと思う。

それにしても、そんなにとんでもない物をもたらったのか。ステラさんには、本当に貰い過ぎているな。どうやって返していけばいいだろう。敵ならともかく、ステラさんに借りっぱなしというのは絶対に嫌だ。ぼくはステラさんの喜ぶ姿が見たいのだから。

ただ、この指輪は目立たないようにしないと。売るつもりなんて絶対はないけど、変な人に目を付けられたくない。

「まあ、それは良い。たしか、貴様はエルフィール家の推薦だったな。貴様はエルフィール家と王家の関係についてはどこまで知っている？」

どこまで言っているいい物なのだろう。ただ、この人に隠し事をする、絶対面倒なことになる予感がしたので、少しずつ様子を見ながら話していくことにする。

「確か、王家から勲章をもらったんですね？ エルフィール家に王

家が与えたモンスター能力の発現がどうこうで」

「何だ、そこまで知っているのか。せつかくの機会だ。貴様がどこまで知っているのか、確かめさせてもらおう。その能力はどのようなものか知っているか？」

「生命力の吸収ですよ。確か、この国を作ったアーデルハイド様と同種能力なのだから」

「そうだ。そこまで知っているなら話は早いな。貴様、余の左目をよく見てみるといい」

言われるがままにオリヴィエ様の左目を見る。すると、そこには樹のような模様があった。

つまり、王家にいらるといふエルフィール家に与えられたモンスターの大本から分かれたモンスターと契約したのだろう。

「気づいたようだ。余の能力は、生命力の吸収と活性化、さらに分配を行える。まさに余にふさわしい能力よ」

サーシャさんより数段上の力に聞こえる。それにしても、この人は自分の能力を簡単に話すよ。対策されるとか思わないのだろうか。でも、厄介そうな能力だな。アクア水なら、どうやったら対抗できるだろう。

「くくつ、余に齒向かおうとしても無駄よ。ユーリ、貴様とミーナが同時に襲い掛かってこようが余には勝てぬよ。余こそがこの国で、いや、人類の中で最強なのだ。貴様もなかなかのものではあるが、少なくとも今は、余の足元にも及ばぬよ」

圧倒的な自信だな。それにしても、能力までアーデルハイドと同じようなものなんて。アーデルハイドの再来という言葉に偽りなしだな。

まあ、本当に能力が言う通りの物であれば、対策が今のところは思いつかない。オリヴィエ様が気づく前にどうにか仕留めるしかなさそうだな。そんな状況があるのかはともかく。

「半信半疑という顔よ。なら、これを体感してみるがよい」

そう言っただけでオリヴィエ様はぼくに手を向ける。すると、ぼくの体にすごい力が湧いてきた。これが生命力の分配か。こんな力で強化し

たうえ、相手は生命力を奪ってくるんだよね。

それは、敵う相手が思いつかないな。アリシアさんでも厳しいんじゃないか？

「くくつ、驚いておるな。そうだ、これが余の力よ。誰も余に齒向かうことなど出来んほどの、圧倒的な力。この力を見た貴様に問おう。貴様、余の騎士になるつもりはないか？ そうすれば、金も名誉も思うがままだぞ？」

金も名誉も思うがままか。惹かれないわけでは無いけど、絶対に外してはならないことがある。まずは、それを確かめないと。

「それは、オーバースカイがということですか？ それとも、ぼく1人で？」

「無論、貴様1人だ。余が欲しいのは、世にも珍しいスライム使いの強者なのでな。他はいらんよ」

そういう事なら、ぼくの答えは決まっている。でも、この人にそれを言うのは本当に怖い。なんというか、機嫌を損ねることを絶対にしてはならないという気にさせられる。

それでも、言うしかないと覚悟を決めた。

「お断りします。ぼくには冒険者としての仲間がいる。冒険者として応援してくれている人もいる。その人たちに背を向けて得た金にも名誉にも意味はありません。ぼくは、ぼくを支えてくれた人たちだけは絶対に裏切りたくないんです」

そう言うと、オリヴィエ様は面白い物を見たという顔になり、大笑いする。これは、大丈夫な反応か？ 気にはなつたが、黙つてオリヴィエ様を待つ。すると、上機嫌そうになったオリヴィエ様が語りだす。

「くくつ、まさか余の力を知りながらそういう風に断るとはな。だが、面白い。所詮冒険者風情など、金という火によつて来る虫のようなものだが、貴様はそうではないようだな。余の言葉に逆らつた事、その面白さに免じて許してやろう。」

だが、貴様という人間はもうわかった。いずれ、貴様は自ら余の騎士になろうとするだろうさ。その時を覚悟しておくがよい」

助かったみたいだ。でも、どういうことだろう。ぼくが自分からオリヴィエ様の騎士になろうとするなんて。

でも、ぼくはカタリナも、アクアも、ステラさんも、ユーリヤも、アリシアさんとレティさんも、サーシャさんも裏切りたくない。ぼくが彼女たちを裏切る未来にならないよう、強く願った。

「くくっ、それにしても、冒険者になると言っただけの言葉を断るとはな。貴様は此度の大会がどういうものか、知っているか？」

「どういうものって、勲章をもらうための大会とかだろうか。サーシャさんに頼まれて出ただけなので、よくわからない。」

「くくっ、サーシャの奴め、中々……まあいい、貴様、此度の大会には年齢制限はないぞ。それから何かわかるか？」

「年齢制限がない？ それにしては……」

「そうだ。おかしい。契約技使いに年齢は関係ないわけではないが、身体能力の衰えで出来た差くらい簡単に覆せるくらいの力があるんだ。」

「なのに、出場者は30を超えているようなものはいないように見えた。今回の大会では結構年の言っていたオリアスだって、20後半くらいといった所だろう。どういうことだ？」

「そうだ、気づいたようだな。まあ、それ以上の事は貴様には分かるまい。だが、サーシャの奴を信じすぎると、痛い目を見るやもしれんぞ？」

「忠告、ありがとうございます。でも、ぼくはサーシャさんを信じるつもりです。ぼくにこれまでよくしてくれた事、全て打算だったとは思えませんから」

「くくっ、貴様らしい言葉だ。せいぜい踊るがよいき。どうしようもなくなったら、余が貴様を飼ってやろう。楽しみにしているがよい。ではな、ユーリ。また会うとしようぞ」

「そう言っただけを下がらせるオリヴィエ様はとても不敵な笑顔をしていた。本当に怖い人とは思えなかったけど、だからこそ言葉に真実味がある。また会うことはちよつと勘弁してほしいかもしれない。」

それから、ぼくは宿に帰り、アクアやステラさんと過ごしてから眠った。

### 39話 ミーナと

オリヴィエ様に勲章を受け取って、王都での用は済んだが、ぼくはまだ王都に滞在していた。

もともと、大会で消耗するだろうということだったので、多めに予定を取って、大会後を休息に当ててから、またカーレルの街に帰るという計画だった。

移動だけでもそれなりに消耗するだろうということだったが、到着からすぐに大会だったような……まあ、移動より大会の方が消耗したのは事実なので、それを組み込んだ予定なのだろう。

宿でゆっくりしていると、ぼくを訪ねてきた人がいるらしい。なので、そちらに向かうと、ミーナとヴァネアがやってきていた。

「やあ、ユーリ。大会以来だね。君がまだ王都に滞在していると聞いてね。せっかくだから、話でもしようと思つて。いきなり訪ねてきたのは悪いと思うけど、大会ではすぐに別れてしまったからね。それで、どうかな？」

「ミーナなら構わない。歓迎するよ。ヴァネアもよろしく。せっかくな来てくれたなら、紹介したい人がいるんだ。顔は知っているかもしれないけど、一応ね」

アクアとステラさんを紹介しようと考えている。できれば、ユーリやアリスアさんにレテイさん、サーシャさんも紹介したいけれど、ここにはいないからどうしようもない。

「よろしくね、坊や。それにしても、坊やの大会での活躍は本当によかったわ。さすが、ミーナがライバルと認めるだけの事はあるわね。お姉さん、本当に感激しちゃった」

「僕が顔を知っているとすると、エンブラの大会でも応援に来ていた人かな。ユーリの契約モンスターなら、ぜひとも知りたいね。もちろん、ほかの人も歓迎だよ」

ミーナにアクアを紹介できるのは嬉しいな。お互い契約技使いだし、いろいろ話も弾むかもしれない。ヴァネアも、ミーナの契約相手なのだから、いろいろ話を聞いてみたい気分だった。

「じゃあ、まずは案内するね。ミーナ、ヴァネア、ついてきて」

そうして僕はアクアとステラさんのもとへミーナとヴァネアを連れていく。ぼくはお互いを紹介することにした。

「アクア、ステラさん、こちら、ぼくのライバルのミーナと、その契約モンスターのヴァネア。ミーナ、ヴァネア、この人たちが、ぼくの契約モンスターのアクアと、ぼくの先生で、今は同居人のステラさん」  
「ミーナ、ヴァネア、よろしく」

「ミーナさんはエンブラの街での闘技大会でもユーリ君と戦っていたよね。面白い縁です。せっかくですから大切にしてみるというのも悪くないかもしれませぬね。」

それはさておき、ミーナさん、ヴァネアさん、ユーリ君に良くしてくれてありがとうございます。これからも、ユーリ君のことをお願いしますませぬ」

「アクア、ステラさん、よろしくね。それにしても、ユーリ君の契約モンスターはスライムだったのか。あの時も一緒に居たような気がするけど、スライムと契約してあそこまで強くなれるなんて。アクアは特別にすごいのかもしれないね」

「アタシもよろしくね。坊やの契約モンスター、かわいらしい子ね。アクアちゃんのこと、大切にしているよ、坊や」

アクアが褒められていると、自分の事のように嬉しいな。それが仲良くなったミーナとヴァネアなんだから、なおのことだ。

まあ、ミーナやヴァネアに言われなくとも、アクアは特別だと思っているし、大切にすることも当然のことだ。でも、改めてアクアについて考えてみるのもいいかもしれないな。

「せっかく紹介してもらって、2人には悪いんだけど、ユーリ君をぼくたちに貸してもらえないかな。せっかくの機会だから、ライバル同士、いっぱい話しておきたいんだ」

「わかった。ユーリ、またね」

「では、ゆっくりしてってください。私はアクアちゃんと一緒に居ますね」

アクアとステラさんは去っていき、またミーナとヴァネアと3人に



なった。ミーナはぼくに積極的に話しかけてくる。

「ユーリ、僕はあれからユーリに勝つために、本当にいろいろやったんだ。あれからすぐに冒険者になって、モンスターと戦ったり、人と戦ったりね。その中で、契約者の力を見ることがあって、このままではユーリに勝てないと思ったんだ。でも、契約モンスターを見つける方法が分からなかった」

それはそうだよ。タイムはそう難しくはないらしいけど、人型モンスターに進化する例はほとんどない。アクアがいなかったらぼくも契約相手は見つからなかったはずだ。

「そんな時にヴァネアと戦ってね。ヴァネアから契約を持ちかけられたから、危険だとわかっていてもつい受けてしまったんだ。結果的には本当に良かったよ。ヴァネアはとも強かったし、僕と契約してからさらに強くなった。だから、契約相手であると同時に、良い訓練相手だったんだ」

それであそこまでミーナは実力を上げられたわけか。ミーナの顔にはとても深い満足感が見えるし、ミーナとヴァネアは本当にいい出会いだっただろう。

「だから、僕はとても強くなったんだ。契約を考えるきっかけになった契約者にも勝てたくらいにね。それでも、ユーリには勝てなかったけどね。本当に悔しいけど、でも、少し嬉しいような気もする。僕のライバルは最高なんだって思えるんだ。ユーリ、また機会があったら、僕と戦ってほしい」

ミーナはぼくにとってもいいライバルだから、ミーナの提案は願ってもない。

それにしても、ミーナは本当にぼくに勝つことを強く意識していたんだな。なんだかむず痒いような。

でも、本当に嬉しい。ぼくもミーナにふさわしいライバルでいられるように、頑張らないとな。

「もちろんだよ、ミーナ。ぼくにとってもミーナは最高のライバルだよ。ミーナに勝つことに恥じないようにつて、頑張る力にもなった。それに、こうして高めあえる関係の相手はぼくにはいなかったか

ら。仲間や師匠のような存在はいるけど、ライバルつてのもいいものだよね」

「僕とユーリだからこそだよ。片方だけがライバル視することも、実力が見合っていないのにライバル視するようなこともある。僕とユーリは本当に運命なんだ。だから、これからもよろしくね」

そう言つてミーナは満面の笑みを浮かべる。エンブラの街の闘技大会に出て、本当に良かったな。そうしなければ、ぼくはミーナという最高のライバルを得られなかった。これからも、ミーナと高めあつていきたい。

「ミーナ、坊や、アタシもいるんだから、2人の世界を作らないでね。それはいいとして、坊やもミーナと戦つてから、どんなことがあつたのか話してごらんさいよ。せっかくだからいいライバル関係なんだから、お互いをもつと知るのも悪くないでしょ」

まあ、そうかもしれない。別におかしなことはしていないから、普通に話せばいいか。

「ぼくはあれからしばらく学園にいたんだ。その時に、モンスターの異常発生があつてね。ぼくの幼馴染のカタリナが取り残されちゃつて。」

だから、アクアと2人で助けに行つたんだ。その時は、本気で絶望しかけたよ。結果的にはカタリナを助けられたんだけどね。あれも、強くなりたいたいと思うきっかけの一つだつたな」

本当にあの時は大変だつた。ぼくもカタリナも無事だから、今でも笑つていられるけど、カタリナに何かあつたら、ぼくはきつとどうかしてしまつていただろう。

「助けられたんだね。だつたら遠慮なく聞こうかな。異常発生つて、どんな？ それにどんな技を使ったかとか、聞きたいな」

「とにかくモンスターが大量に発生したんだ。そこまで厄介なモンスターはいなかったけど、数が数だったから。ぼくは移動を優先して、ぼくの契約技のアクア水にガラス片を入れて、ガラス片を使って目潰しだけして、倒すのは後回しにしたんだ」

「坊や、そんなことまで出来るのね……なんでもありなら、ミーナは危

なかったかもしれないわね」

「そうかもね。僕は目を潰されても再生なんてできないし、中々厄介な技だよ。でも、ぼくはユーリと殺し合いたいわけじゃないから、そんな戦いはしたくないね」

ぼくもミーナにそんなことはしたくない。ミーナとはもつと、お互いに敬意を持つような関係でいたいな。ぼくはミーナを本当に尊敬しているし、だからこそ勝ちたい。

ミーナもそう思ってくれていると嬉しいんだけど。

「ぼくだってミーナを傷つけたいわけじゃないよ。もちろん、戦うんだから多少のケガはするだろうけどね」

「そうだね。ユーリとはこれから何度だって戦いたい。その機会を奪うほどのケガは、お互いしないにこしたことはないよ。それで、他には何かあった?」

「そうだね。それからは特にトラブルもなく冒険者になって、アリスアさんとレティさんにいろいろ教わることになったかな。初めての依頼で、キラータイガーが大量に発生して、アリスアさんとレティさんがあつという間に倒してしまったんだ。本当に2人にはあこがれたな」

そう言うとミーナはとても目を見開いた上に口を大きく開けていた。まあびつくりするよね。キラータイガー1体でも相当厄介なのだから。

「キラータイガーを!? 僕も1体や2体なら倒せるだろうけど、ユーリが大量っていうくらいの数倒せるかは怪しいな。でも、本当にアリスアとレティを尊敬しているんだね。顔を見ればわかるよ」

「坊やったら目をキラキラさせちゃって。そういう所は年相応なのよね。強さは信じられないくらいだけど」

そんな顔をしていたのか。でも、アリスアさんとレティさんを尊敬しないなんてありえない。ちょっと恥ずかしいけど、でも、当然かもね。

「それで、他には何かあるかい?」

「それからは、ぼくはもともと、ぼくとアクア、さつき話した幼馴染の

カタリナとパーティを組んでいたんだけど、モンスターから助けたことが縁になって、ユーリヤって言う新しいパーティメンバーが入ったんだ。それから、人型モンスターを何回か倒したくらいかな」

「坊や、普通の事を言うみたいに言うけど、坊ややミーナみたいに人型モンスターを倒すって、本来偉業扱いされることなのよ？ アタシだって、何人も冒険者を仕留めたわ」

それも普通に言っている事じゃないかな。

でも、本当にミーナは運が良かった。モンスターが契約を持ちかけてきても、ぼくには隙を作りただけにしか見えない。実際にそういうモンスターの方が多いだろう。

「それが君のこれまでか。ぼくが勝てないのも納得できるほどの経験だね。でも、次はユーリに勝ってみせる。一方的に負けるだけなら、胸を張って君のライバルを名乗れない。それはまあいいかな。話を変えるけど、僕はオリヴィエ様に褒美として剣をもらったんだ。これだよ」

そう言ってミーナが見せた剣はとても美しかった。

ただ、飾りが多いわけじゃなくて、ただ普通の剣としてあるだけなのに存在感が強い。何だろう、この剣。

「ユーリは何か感じたんだ？ 鋭いね。これはドラゴンシルバーの剣なんだ。僕がこれを超える剣を持つことは、生涯無いかもしれない」  
ドラゴンシルバー。ドラゴンの鱗と銀を合わせた、とても頑丈な金属らしい。加工にも相当な技術がいるようで、滅多なことでは見る事すらできないらしい。

オリヴィエ様はとんでもない物をミーナに渡すんだな。あの人はやっぱり何か恐ろしい。

「オリヴィエ様、すごいね。でも、ミーナがさらに強くなるのか。その剣を使われていたら、きつと負けていたんだろうな」

「武器の力でユーリに勝っても嬉しくないよ。ユーリも同じくらいの武器を使っているならともかく。でも、ユーリの負けて悔しそうな顔を見るのは、楽しかったかもしれないね」

「アタシは武器も自分の力だと思っけど。まあ、命の取り合いでない

なら納得も大事よね。アタシはミーナを応援しているから、ミーナにはしっかり勝ってほしいわね」

ヴァネアの言葉を受けてミーナは笑顔から真剣な顔に変わる。やっぱりミーナは本気で勝ちたいみたいだ。他の人が相手ならミーナを全力で応援するけど、ぼくは出来れば負けたくない。

「僕もそうしたいね。ユーリ、今日は楽しかったよ。今日は帰るけど、また絶対会おうね」

「坊や、しっかり強くなるのよ。油断した坊やに勝ってもミーナは喜ばないわ。ミーナの運命に見合う姿を見せてよね。そしたら、アタシがご褒美をあげちゃう」

「ミーナ、ヴァネア、またね。ぼくもミーナのライバルにふさわしい強さになってみせるから、ミーナも頑張ってね。また会うのが楽しみだよ」

そしてミーナとヴァネアは去っていった。ミーナとまた戦うことは楽しみだな。負けても悔しさはあるだろうけど、きつとミーナが相手なら楽しい。

わざと負けるつもりはないけれど、これからもミーナといっぱい戦いたいな。

## 40話 アディ

今日もぼくは宿でゆっくりしていた。早く帰って、カタリナやユーリヤにアリシアさんとレテイさん、サーシャさんに会いたいという思いもあった。

それでも、なんとなく残っていた方が良さそうな気がして、まだ王都に滞在していた。

すると、部屋に誰かがやってきた。扉を開けてみると、髪の色を変えているが、見間違えような顔があった。

「オリヴィー」

ぼくは唇を指でふさがれ、耳元に顔を寄せたオリヴィエ様にささやかれる。

「この姿の私はアディと呼べ。それで、ユーリ。今日は王都を逢引といこうぞ」

本当にいきなり来て何を言い出すんだこの人は。だが、断ったら絶対に大変な目に合う。オリヴィエ様の目を見てそれは理解できたので、仕方なくオリヴィエ様についていくことに。

「アディ様、アクアとステラさんに話を通してきてもいいですか？」

「何を様づけで呼んでいる。アディと呼び捨てで呼ぶのだ。そうではなくては不自然だろう？ 口調も相応のものにすることだ、今日の私たちは恋人というつもりでいる。それと、アクアとステラに話は通してあるし、すぐ傍におる。何なら本人に確かめてみるか？」

そう言われたので奥の方を見てみると、アクアとステラさんが手を振っていた。

いや、ステラさんとはかく、アクアと初対面で良くここまで打ち解けたものだ。普通にオリヴィエ様の事を受け入れている様子なだけだ。どんな手品を使ったんだ、この人は。

そのままオリヴィエ様に手を引かれて、外へと連れ出される。オリヴィエ様はとて上機嫌な様子で、僕は変に声をかけることをためらっていた。

この人の機嫌を損ねたら、絶対にただでは済まない。少し接しただ

けどが、それだけは妙に確信できた。

「ユーリ、お前は私のハイディケートをどれくらい知っている？ 観光などはもうしたのか？」

「いや、宿と、大会の会場と、アデイに連れられた王宮しか知らないかな。興味ないわけじゃなかったけど、大会に出場するために来たただだから」

「そうかもしれないとは思っていたが……ユーリ、お前はいずれ私のものになるのだ。同じく私の物であるハイディケートについては良く知っておくとよい。アードラも、と言いたいところではあるのだが。さすがにそれは直ぐにはいかんだろうさ」

この人は王女なんだよね。まるでこの国が自分の物のような物言いだな。

まあ、本当に本人が言う通りの能力を持っているなら、逆らうことはとても難しいことはよくわかるけど。

「今日教えてくれるんでしょ。まずはそれを楽しんでおくよ。ところで、アデイの家族はアデイほど強くはないの？」

「まあ、私どころかユーリやミーナに勝てる者すらいなようなものだ。なんとも情けないことだがな。だが、近衛の質は相応の物ではあるから、私がいなくとも、ユーリやミーナが10人くらいなら、王族は守り切れるのではないか？ 私がいたならば、100人だろうと問題は無いがな」

ぼくやミーナが10人くらいというのは多いのか少ないのか、よくわからないな。この人がとんでもない化け物ということにはなるけど。そんなに強いなら、それは自信満々にもなるというものだよね。

まあ、オリヴィエ様の能力は単純であるからこそ対策がとても難しい。相手に敵と認識されただけで、ぼくはやられてしまうだろうと思える。

どうにかして気づかれる前に攻撃できればいいけど、隠し玉がない保証は無いんだよね。

「くくっ、私の強さに慣れているのか？ お前が私のものになれば、この力がお前を守ることになるのだぞ？ どうだ、私のものになりたく

「なつたか？」

「いや、敵にはしたくないと思ったけど、ぼくは守られたいわけでは無いし。お互いに支えあえるのが理想かな」

守られているだけなら、キラータイガーの件や、カタリナの件でもきつと何もできなかった。

アクア水はアクアの力だから、アクアに守られていると言えなくもないけど、ユーリヤの時のような無力感を感じるのももう嫌だ。

それに、この人に守られているだけなら、この人が危なくなつた時にどうするんだ。

オリヴィエ様が好きじゃなければ無いけど、単に負担になるだけということは、嫌で嫌で仕方がなかった。

「くくつ、青臭い理想よな。だが、私を支えられるようなものなど居はしないさ。だからこそ、私は最強なのだから。ユーリが私に勝てるようになったなら、お前が私を守ることになるのか？ 全く想像できないな、私には」

「ぼくにもアディに勝つ手段は思いつかないし、きつと難しいどころの話ではないよね。でも、ぼくは諦めないよ。だって、これまでそうしてきたから、ぼくは今、大切な人たちと一緒に居られるんだから」  
「私ですら私以外の誰かの力で私に勝つ手段は思い浮かばん。だが、もし誰かに守られるようなことがあるなら、それはどういう気分なのか想像しなかったわけでは無い。期待はせんが、ユーリ、励めよ」

この人はきつと本心ではだれの事も頼りにできないのだろうか。なんとなく、そう感じた。

まだ出会つたばかりの人だから、ぼくがそうならうとは思わないけれど、ぼくにとつてのカタリナとアクアのように、何があつても信じられる人が現れればいい。そう思った。

「まあ、頑張るよ。それで、アディの正体にぼくは簡単に気付いたけど、王都に出かけても大丈夫なの？」

「私の顔を近くで見たものなど、そうおらん。それに、民というのは案外愚昧だぞ？ 私がユーリと一緒に居るだけで、勝手に気のせいだと思ひ込むものばかりだろうよ」



そういうものなのかな。でも、この人は結構いたずら好きな感じに  
思えるし、案外お忍びで出かけるのにも慣れているのかもしれない  
な。

「そろそろよいであろう。ユーリ、私のハイディケートを見せてやる。  
しつかり楽しめよ」

そう言つてオリヴィエ様はぼくと腕を組み、ぼくを引つ張つてい  
く。この人は自分が引つ張つていくことが絶対に好みだから、エス  
コートとか考えなくてよさそうなどころだけは気が楽だ。

それからぼくが連れていかれたのは、大きな公園だった。

恋人らしき人がいっぱいいて、どの人も結構距離が近い。たぶん、  
デートスポットとして有名なのだろう。

真ん中には噴水があり、他に開けた場所と、植物がいっぱい生えて  
いる場所がある。植物のところには、人工的に作られたらしい道もあ  
る。噴水を眺めたり、植物を眺めたりする場所なのかな。

オリヴィエ様はまず、噴水の近くにあるベンチに座った。ぼくも隣  
へ引つ張られて座った。

「どうだ？ 中々落ち着く場所であろう。人が多いというのが欠点で  
もあるがな。せっかく隣同士に座ったのだから、恋人らしい遊びでも  
してみるとうしよるか」

オリヴィエ様は腕を組んだまま、ぼくの肩に頭をのせてくる。頬に  
頭が触れて、少しくすぐったかった。

それにしても、オリヴィエ様は本当に距離が近い。オリヴィエ様の  
息の音が聞こえたり、オリヴィエ様の体温を強く感じたりして、かな  
り照れてしまった。

「くくつ、ユーリ、真つ赤ではないか。私は魅力も最高の存在であるか  
ら当然ではあるが、お前、見た通り女慣れしておらん？ その調子  
で、今日私を楽しませることが出来るのか？ お前にそういうことは  
期待していないが、だからといって私に甘えるだけなど許さんぞ」

ちよつと血の気が引いたかもしれない。この人に許されなかった  
ら、大変なことになるということだけは確信できる。

でも、オリヴィエ様と親しいわけでもないし、どうすれば喜ばせら

れるのかなんてわからない。ほんと、どうしよう。

「くくつ、冗談だよ、冗談。お前は本当に面白い反応をしてくれるな。大会ではあんなに勇ましかったというのにな。私には全く強く出られないではないか。私の力におびえているという感じではないし、全く、私を何だと思ってるのやら。」

「お前もお前の周辺も、怪我を負うことも、ましてや死ぬこともないぞ？ 私を殺そうというなら別だがな。お前がそういう事をするとは思えんが」

「怪我しないからと言って全く安心できないんだよな。ほんと、何をされるのか分かったものじゃない。でも、なんとなく茶目っ気のようなものを感じて、怖いだけだったオリヴィエ様に少しだけ親しみを持った。」

それから、オリヴィエ様にまた引つ張られて今度は植物を歩きながら眺めることに。

「マナナの森と違って、木々が邪魔になることもなく、モンスターの気配も感じなかったので、植物の綺麗さと匂いを楽しむことが出来た。」

「オリヴィエ様はぼくと腕を組んでいても上手く歩いている、ぼくだけ少しつまずいたりしていた。」

「どんくさいな、ユーリ。だが、よいぞ。お前を私好みに調教してやるというのも楽しそうだな。まずは、そうだな。私が腕を組んでいてもしっかり歩けるようになってもらおうか」

「そう言われてしまったので、ぼくは必死で上手く歩くことに集中していた。そのおかげで、それから公園を出るまでの間、全くつまずくことはなかった。」

「そうだ、ユーリ。私の言葉はしっかり守れよ。お前は私のものになるのだ。私を楽しませることに全力を尽くすのは、当然の事と思えよ」

「なんて人だ。だけど、オリヴィエ様の顔が本当に楽しそうで、ぼくは少しだけ見とれてしまった。この人に尽くすのも、全く嫌なことだとはすでに思えなくなっていた。」

オリヴィエ様はそれからぼくに何度か簡単な命令をして、それをぼくがこなしていた。

偉そうな態度、いや実際に偉い人だけど、それは崩さないままだったが、命令をこなすたびに褒めてもらえるので、少しずつ命令をこなすのが楽しくなっていました。

駄目だ。このままじゃ本当にこの人のものになってしまう。ぼくはアクアやカタリナの顔を思い返していた。そうだ。ぼくはみんなとオーバースカイを最高の冒険者パーティにするんだ。そう思い直した。

「くくっ、いいところだったのにな。仕方ない。では、次は食事だ。立ち食いというのも悪くはなからう」

「そうですね。ぼくはそっちの方が慣れてるし。でも、アデイはそれでもいいの？」

「万が一毒が入っていたところで私は死なんからな。お前も、私と一緒に居る間は助けてやろう。そんなこと、滅多にあることではないがな」

この人に出来ないことはあるのかと思わされてしまう。でも、毒が入っていても大丈夫と言えることは、そういうことだよな。

ぼくなんかには想像もつかない世界で、怖いと思うと同時に、この人がそういう目にあつたことがあるのだと知って、悲しくなった。

オリヴィエ様はぼくが食べるものも、自分が食べるものも、全部一人で選んでいた。

幸い、嫌いなものではなかったが、嫌いなものだとしてもこの人の前で嫌な顔なんてできる気がしなかった。

しばらく食べ進めていると、ぼくが食べ終わったのを見計らって、オリヴィエ様が食べていたものを口に突っ込まれた。いや、これって。ぼくが照れていると、オリヴィエ様は楽しげに話します。

「もうこれには飽きたからな。しかし、こんな事でも真っ赤になるのだな。お前なら、何をしても真っ赤にできそうだな。今度どこまで真っ赤になるのか試してみるのも面白いかもな」

今度の話がされていても、ぼくはもう嫌とは思えなかった。ほんの

少し一緒に居ただけなのに、もうこの人を嫌いだとは思えそうにない。困った。こんな人は絶対に振り回してくるのに。

それから王都の見どころという場所をいくつも案内してもらって、最後にぼくの宿で2人きりになった。

「ユーリ、今日は楽しかったか？ 私のものになれば、またこんな機会はあるのだぞ？」

今日1日で、ぼくはそれを魅力的だと思うようにされてしまった。でも、ぼくの目標は変わらない。だから、オリヴィエ様のものになるという誘惑を振り払った。

「本当に楽しかった。でも、アデイのものにはなれない。ぼくは仲間だけは裏切りたくない。だって、ぼくにはそれしかないんだから」

「そう答えるのは分かっていたよ。だが、いずれお前は私のものになる。だから、これはその証だ」

そう言っただけでオリヴィエ様はぼくの首にチョーカーのようなものを付ける。きつく締められたのに、全く苦しくなかった。

「これは、お前を守ってくれるだろうさ。お前が私のものになる前に死なれては困るからな。最後だ。これも受け取っておけ」

オリヴィエ様は自分の口に指を咥えると、引っっこ抜いた後ぼくの唇に指を押し付けてきた。ぼくは真っ赤になっていくだろう。

「ユーリでは私の伴侶にはなれぬだろうが、夢見るくらいなら許してやる。今日は楽しかったぞ。ユーリ、達者でな。また会う時には、もっと大きくなっていることだ。いろいろな意味でな」

そのままオリヴィエ様は去っていった。まだドキドキしている。あの人に、ぼくは決して勝てないかもしれない。そう思わされた。

それにしても、初めて会った時と一人称とかが違ったけど、どちらが素なのだろう。どっちでもいいか。そんなに大きく変わっている感じではなかったし。

## 裏 楽しみ

王都に來たアクアは、ユーリの大会を楽しみにしていた。エンブラの街での闘技大会では、ユーリの格好いいところを存分に見ることが出来たし、今回も期待できるだろう。

仮に負けたとしても、ユーリが最高であることに変わりはないが、ユーリが活躍しているところを見るのもとても楽しかった。

アクア水をユーリに飲ませて、ユーリの身体能力を上げていった甲斐がある。アクアは自身の判断に満足していた。

ただの剣術を使っているユーリも格好よかったが、今回はアクア水を存分に使うことが出来るルールだ。ユーリとアクアが一心同体であることを改めて確認できる。アクアは本当にワクワクしていた。

だから、ステラとしてユーリに接する際、誘惑をしてタジタジになるユーリを楽しむのではなく、しつかり大会へ向けて英気を蓄えさせることにした。

そうする中で、ユーリが本当に落ち着いている姿を見て、何かアクアにこれまで感じたことのない感情が芽生えた。ユーリはなんだかんだでいつも気を張っている。そのユーリが、ここまで甘えを前面に出すことを、アクアは見たことがなかった。それゆえ、ユーリに対して、可愛さのようなものを感じていた。

この日ステラとしてユーリにかけた言葉はすべて本心だったが、特にユーリに頼られたいという思いは強かった。何度もアクアとしてユーリに言っていたことではあるが、ユーリは自分でできる事は自分でしようとしてしまう。

ユーリに頼ってほしかった。ステラとしても、ユーリヤとしても、アクアとしても。そうすれば、ユーリが自分を必要としていることを強く実感できる。アクアはそう思っていた。

次にアクアとしてユーリと接している時、ユーリからアクアの体の中にユーリを入れる提案をされたとき、ついここまで来たかとアクアは思った。ユーリも自分と一つになることを望んでいる。そう思えて、興奮が抑え切れなかった。

でも、そんな大きな楽しみは最後の方が絶対に楽しい。そう考えたアクアは、まずはスライムならではのマッサージをすることにした。ステラとしてマッサージをすることも楽しかったが、スライムの体ならもつと深く触れ合える。ステラを取り込まなければ、マッサージという発想はなかった。そう考えたアクアは、ステラに感謝していた。

ステラとアクアのどちらがいいか聞いたとき、ユーリがどちらも最高と答えるだろうことは、なんとなくアクアにはわかっていた。ユーリは大切なもの同士でできるだけ順位をつけたがらないだろうと。あるいは、順位をつけることで関係が壊れることを恐れてかもしれない。

それでも、アクアと答えてくれなかったことで、ユーリにスライムの良さを叩き込むために、アクアはスライムの体でしか絶対にできないマッサージをユーリに施した。

これでユーリにさらなるスライムの魅力を知ってもらって、ユーリにもつと自分を好きになつてもらおうとしていた。

他のスライムには出来ないことであつたし、他のスライムとユーリがこんなことをするほど親しくなることもあるまい。そう考えて、アクアは全力でマッサージしていた。

ユーリにとつて繊細であろう部分に触れたとしても、ユーリはすべて受け入れていた。アクアがユーリを傷つけることは無いと、ユーリは固く信じてくれている。

その信頼が心地よく感じて、ユーリにいつぱい気持ち良くなつてもらつていた。

そのままユーリを取り込むと、前回のようじつとしていたことはせず、ユーリの体をいじつたり、ユーリの体を動かしてみたり、ユーリが体の中にある感覚をとにかく楽しんでいた。ユーリは一切抵抗しないので、思う存分ユーリを堪能した。ユーリが心地よく感じるように工夫したので、ユーリも楽しんでいただろう。アクアはユーリを取り込むことを本当に楽しんでいた。

ユーリを取り込む感覚を十分に味わって、ユーリと1つになる感覚

に満足したアクアは、今度はユーリと別れているがゆえの遊びを楽しんだ。ユーリに抱き着いてみたり、いろいろ触ってみたり。

さつきとはずいぶん違う感覚で、複数の味としてしつかりと味わっていた。

ユーリのそばに居るだけで本当にいろいろな楽しみがある。ユーリは本当に最高だ。アクアはご満悦だった。

次の日。ユーリの大会を見ていたアクアは、本当に楽しんでいた。ユーリが大勢の弱者相手に大活躍する姿は愉快だと感じた。ユーリも昔は大勢の側だったが、自分の力でここまで強くなったのだと満足していた。

そんな中、ユーリに暴言を吐くものが出て、アクアは本当に不愉快だった。せつかくユーリが活躍する姿を楽しんでいたのに、水を差されたと考えた。すぐにユーリに倒される程度の存在だったので、余計につまらなかった。

なので、アクアはユーリをけなした奴を処分することにした。特に注目もされていなかったのも、簡単に始末できた。

次の試合では、アルラウネと戦っていた。結構そのアルラウネは強い個体だった様子で、ユーリがいろいろな技を使う姿を見ることが出来たので、アクアは満足していた。本当にアクア水をユーリにあげてよかったと。

ユーリと契約して良いことはとても多くあったが、自分の一部であるアクア水をユーリが使いこなしている姿を見ることは、アクアにとつてとても大きな楽しみだった。

偶然ミーナがユーリと同じ大会に出て、ユーリが燃え上がっている姿を見て、アクアは偶然に感謝した。もともと頑張るつもりはあった様子のユーリだが、ミーナがいてくれたおかげでもっと本気になっていた。

これなら、ユーリの格好いい姿をもっと見ることが出来る。当然、アクア水が役に立つところも。

アクアはユーリのペットとして、ユーリに自分に頼ってもらうことも楽しみだったが、自分が頑張つて強くしたユーリが活躍する姿を見

ることも本当に好きだった。

弱いままのユーリを自分に依存させることを夢見なかったわけでは無いが、今のユーリの方がきつといい。本当にアクアのユーリは最高だ。何をしても自分を喜ばせてくれる。ユーリは最高の飼い主だと、アクアは他の飼い主を知っているわけでもないのにそう確信していた。

それからのいくつかの試合では、ユーリは全く苦戦していなかった。接戦にも接戦の味があるが、圧勝した時の余裕気なユーリもいい。アクアはユーリの新しい一面を見ることが出来たと喜んでいた。

その後、オリアスという者との試合があった。何かアリシアに因縁があるのか、アリシアと親しいユーリに絡んでいた。この時点でアクアのオリアスへの好感度は一気に下がっていた。

だけど、今後の態度次第では見逃してやってもいいかな。そうアクアが考えていると、オリアスは結構強い様子で、ユーリの様々な技を引き出していた。特にユーリがアクア水で加速する技は、ユーリとアクア水がしっかり触れているのが嬉しくて、アクアはとてもいい気分になっていた。

ユーリが水刃と名付けられた技を使っている時のユーリの嬉しそうな顔も良かったし、別にオリアスを殺さなくてもいいかな。

そう考えていたアクアだったが、オリアスがユーリを殺すと口にしたことでその気は完全に失せた。絶対にもごたらしく殺してやる。アクアはそう決めた。

その後、オリアスが雇っていた貴族に叱責されてから、オリアスが1人になったタイミングを見計らい、アクアはオリアスの全身を操って、痛みをより刺激するように改造した後、オリアスの骨を1本1本ゆっくりと曲げていった。

オリアスはずっと混乱したままで、何が起こっているのかわからないという様子のままに死んでいった。その後、アクアはオリアスを溶かして処分した。

ユーリとミーナの試合をアクアは本当に楽しんでいた。ユーリは真剣な顔をしているが、ずっと楽しそうだったし、これまでの試合で



使った技の総決算という感じで、本当に見ごたえを感じていた。

ミーナが本当に強かったので、ユーリもアクア水をどんどん使っていた。多少ユーリがケガをしていたが、それくらいなら別にまわらないと考えた。ユーリの命が危なくなることは無いと確信していたから、素直に応援できていた。

ミーナがユーリを追い詰めたおかげで、ユーリのアクア水を使う技術がどんどん上がっていった。アクアはそれに合わせて興奮していた。ユーリと自分がどんどん深くつながっていくことを感じて、アクアはミーナにとっても感謝していた。

ミーナとの決着の時、ユーリが無理をして左腕をぼろぼろにしていた時は少しだけ心配したが、ユーリはミーナに勝って本当に嬉しそうで、アクアまで嬉しくなっていた。それから、ユーリが宿に帰ってきた時、ユーリと一緒にとても喜んだ。本当に今日のユーリは格好良かった。アクアは今回の大会に非常に満足していた。

それから、ユーリが勲章をオリヴィエに受け取り、首に下げて帰ってきた。ユーリが称えられることは喜ばしいことかもしれないが、ユーリの周辺に変な人が寄ってくる、処分が面倒だ。アクアはそんなことを考えながら、ユーリの勲章を眺めていた。

また後、ミーナとヴァネアをユーリに紹介されて、ユーリはその2人と語らっていた。その2人と別れた後のユーリは満足げで、ユーリにまたいい交友関係ができた。アクアは素直に喜んでいて。

またユーリがミーナと戦うことがあったら、もっと格好いいところが見れるかもしれないし、もっとアクア水を使いこなしてくれるかもしれない。アクアはミーナにそれなりに期待していた。

さらに後、オリヴィエがユーリのもとを訪ねてきた。オリヴィエがユーリを自分のものにしたと言っていることには少し腹を立てた。アクアだが、ユーリに対して悪意を持っている様子ではなかった。見逃した。

オリヴィエは確かに人間の中では強いようだが、アクアにとって脅威になるほどではなかった。ユーリが帰ってきた時の様子から、ユーリがかなりオリヴィエに絆されているようだったので、オリヴィエに

対して何かするつもりはアクアから無くなっていた。

ただ、ユーリの首にチョーカーを付けていることだけは腹立たしかった。

あれではユーリがペットのようではないか。自分がユーリに着けるならともかく、他者につけられている事がアクアは気に食わなかった。

だが、ユーリは悪いようには思っていないなかったから、アクアは我慢することにした。

その日の夜。少しだけカタリナに体を返すべきか考えていた。そのまま解放することは怖かったので、カタリナのアクアに操られていたという記憶を消して、アクアが操っていた間の記憶を本物として植え付けることも検討した。

しかし、アクアは何故かそれを実行するような気にはなれなかった。結局、今のままカタリナを操り続けることに決めた。

自分はユーリという幸せだが、ユーリは自分という幸せなのだろうか。アクアの心に、ほんの小さな疑問ができた。

## 裏 計画

ユーリが王都へ向かっているころ、カタリナは孤独に耐えていた。ユーリの姿を見ていることで、精神の安定を図っていたカタリナだったが、ユーリはしばらく自分のそばからいなくなる。その事実をとても恐れていた。

何かユーリについて考えていたかったので、ユーリと結ばれるうえで障害になるかもしれない人たちにどう対策するかを考えていた。

(アクアは、そもそもあたしに体を返す気があるのかしら？ アクアがあたしに謝っていたのは本心のような気がするから、罪悪感であたしに体を返すのが一番高い可能性のような気がするけど、体を返してもらった後にどうするかよね。

アクアの真実をユーリに言ったところで、結局何も解決しないどころか、ユーリが何かされてしまいかねないし、その手は使えないわよね。こんなことをしたアクアは許せないけど、アクアがいるからユーリが生きていられるのも事実なわけだし)

カタリナはアクアのことをユーリのそばから排除しようとは考えていなかった。手段が思いつかなかったことと、ユーリが傷つくリスクばかりで、それ相応のメリットが浮かばないということが原因だ。

(アクア……どうしてこんなことを……アクアとあたしとユーリとで一緒に居るんじゃないの？ アクアだって、あたしを助けに来てくれたし、あたしの無事を喜んでくれた。アクアなら、あたしとユーリと一緒に居たって文句なんてなかったのに……はあ。だめね。あたしが解放されたところで、あたしはもうアクアをどこかで疑ってしまう。もうそんな未来はないわ)

カタリナの心に大きな寂しさが浮かんた。カタリナとユーリとアクアとでずっと暮らすという未来は訪れることはない。カタリナにはかつてそんな未来が訪れると信じていたことが、遠い昔の事のように思えてならなかった。

(アクアを殺さず、アクアの真実をユーリに告げず、それでいてアクアに復讐できる方法、あるかしら？ ……あるかもしれない。アクアも

ユーリのそばに居るけど、アクアよりあたしをユーリが大切にする。そんな光景を見たらアクアはどう思うかしら？ きつと愉快よね、その光景は。やっぱり、ユーリはあたしのものになるのが1番なのよ。ユーリ、絶対逃がさないわ)

かつてカタリナはアクアを信じていた。ユーリを守ろうとする意志は本物だと感じていたし、ユーリがアクアを大切にしていることも分かっていった。アクアが女の姿だったとしても、ユーリのそばに居ることに問題を感じていなかったほどだ。

ユーリが好きだと自覚していなかった頃でも、ユーリとアクア、そして自分はずっと一緒に居るのだと固く信じていた。

だからこそ、アクアが自分の体に乗っ取ったとき、本当に強いショックを受けた。アクアも同じ未来を見ていると信じていたのに、裏切られたと思った。

それでも、カタリナはアクアに憎しみをもちながらも、アクアを心の底から嫌いにはなり切れなかった。恐らく、アクアはユーリを自分に奪われると考えたのだ。

カタリナがその考えに至ったとき、少しだけアクアに共感を抱いた。ユーリを自分から奪う者なんて絶対に許せない。アクアは自分に謝っていたが、自分なら何の躊躇も持たなかったかもしれない。

きつとアクアは迷ったのだろう。アクアはユーリだけでなく、自分の事も大切に思っていたはずだ。そう考えたからこそ、カタリナはアクアともう一度話したかった。

アクアを許すことなど決してできないが、ユーリを幸せにするという目標だけは共通しているはずだ。カタリナはそのための妥協くらいはしても良かった。

カタリナが考え事をしている間も、カタリナの体は、ユーリヤと冒険者としての活動をしていた。時折アリシアやレティとも活動していたが、ユーリがいる時とは明らかに気合の入りようが違う。カタリナはアリシアとレティにも警戒していた。

(アリシアさんも、レティさんも、明らかにユーリを見る目が違う。今のところは冒険者として期待しているだけかもしれないけど、アリシ

アさんやレティさんに並ぶような冒険者になったら、本当にどうなるか怪しいわ。

アリシアさんも、レティさんも、ただ目をかけているだけにしてはやり過ぎなのよ。ビッグスライム使いの変な奴に絡まれることになったのも、きつとそのせいもあるでしょうし、ちよつと周りが見えてるか怪しいくらいよね)

アリシアとレティがユーリを特別視していることはカタリナにとって当然の事実となっていた。それゆえ、ユーリに対する恋愛感情が何かのきっかけで発生してもおかしくは無いと疑っていた。

(ユーリもどう見てもアリシアさんとレティさんに憧れているのよね。恋愛感情とは程遠いでしょうけど、アリシアさんとレティさんの態度次第じゃ落とされかねないわ。

今のところは先達としての態度を崩していないからいいけど、これがパーティーメンバーやパートナーみたいな立ち位置になったら危険だわ。本当に気を付けておかないといけないわね)

他にもサーシャの態度もカタリナにとっては問題だった。サーシャが貴族として何か企んでいるらしいことはカタリナにもわかったが、それだけで、あれほどユーリと距離を詰めるものなのか。サーシャもユーリと距離が近い。カタリナが警戒するには十分だった。

(サーシャさん、ユーリを何かに巻き込もうとしているだけならいいわ。いや、良くはないけど。単なる色仕掛けにしては、おかしいのよね。他の人たちにもそういう事をしているのなら噂の1つや2つあってもおかしくないはずなのに、何も聞こえてこない。

ユーリが飛びぬけて強いってこと、あるかしら？ アクアと一緒にあらともかく、ユーリー1人なら、アクア水があつたとしてもどうにかする手段がないわけじゃないと思うんだけど)

ユーリの活躍を見ていると、カタリナにとってユーリは特別な冒険者ではなかった。カタリナ自身がもともと契約技を持たない人間としては相当な強者だったこともあり、ユーリに勝てないというイメージが湧いていなかった。

ユーリに負ける可能性をカタリナは十分に認識していたが、それで

も手の届かない存在とは思えなかったもので、そんな存在にあれもこれも世話を焼くサーシャを警戒していた。

(色仕掛けにしたって、やり過ぎのような気がするけど。仮にも貴族だし、この街でエルフィール家がどれだけの力を持っているか、あたしにもわかる。単なる冒険者に、あそこまでする価値があるとは思えないのよね。貴族としてもっと大きくなりたいのなら、もっといい相手がいるでしょうし)

エルフィール家がカーレルの街では絶対だとサーシャが言っていたことは、そこまでおかしなことだと感じていなかったカタリナは、だからこそ、サーシャが本気でユーリを落とそうとすれば危ういと認識していた。

(サーシャさん、なりふり構わなければ一番危険な感じがするわ。あたしには権力は無いし、そういう方面も使って誘惑されたら、慣れていないユーリがどうなるか。)

金や名誉でユーリがあたしを裏切るとは思わないけど、あいつ、一度気を許した相手には本当に弱そうなのよね。ちゃんとあたしが見張ってあげないとね)

また、ユーリヤの態度もカタリナは気になっていた。最初は何かユーリを使った企みがあるように思っていたが、ユーリを落石からかばう姿を見て、疑いはほとんど消えた。

仮に死なないという確信があつたとしても、あそこまでの事を出来る人なんて想像がつかない。だからこそ、カタリナはユーリヤに本気で対策しようとしていた。

(ユーリヤさん、本気でユーリの事が好きなのは間違いない。何があの人の琴線に触れたのかはわからないけど、ユーリの好みを熟知しているわ、ユーリのそばにずっといようとすると、熱心さが他と段違いいよ。)

他の人は疑わしいってところだけど、ユーリヤさんは、ユーリに本気で恋しているとか思えない。強敵よね。ユーリの奴、ユーリヤさんに見とれてたことが何回もある。少なくともユーリヤさんの顔はあいつの好みなんだわ)

ユーリの顔の好みの一番が自分でないことに腹を立てていたカタリナだが、ユーリの性格を含めた人としての好みは自分が一番だと疑っていないからこそ、自分の手の届かない範囲での決着を恐れていた。

（ユーリヤさん、あいつと一緒に部屋の部屋で寝ていたことまであるもの。ユーリの奴が、その、し、していたなら、ユーリの態度がおかしくならないはずはない。だから、ユーリとユーリヤさんが関係を持つているってことはないはず。）

大丈夫。あたしにもまだチャンスはあるわ。でも、ユーリヤさん、本気でユーリの事を誘いかねないわ。なんとかして、決着がつく前に体を取り戻さないと）

それ以外にも気になることがあった。ステラの事をアクアが操っていることは知っていたが、カタリナは、ステラも自分と同じように命はあるような気がしていた。

アクアの性格からして、ユーリに嫌われる要素はできるだけ避けたいだろうし、そもそも、死体をあれほど綺麗に保てる手段があるとはカタリナには思えなかった。だから、ステラが体を取り戻す可能性にも警戒していた。

（ステラ先生、いや、ステラさんと呼んでおくべきね。あたしが体を取り戻したときに、ステラ先生と呼んでいたせいで気づかれるほど間抜けな話はないわ。ステラさんはユーリには明らかに目をかけていたのよね。ユーリの奴は気が付いていなかったけど。）

ステラさんは本当にユーリに優しいし、ユーリも男である以上、勘違いとかしてもおかしくないのよね）

ステラの事をユーリだけでなくカタリナも尊敬していた。そのため、ステラの魅力をより深く感じるようになったカタリナは、ユーリも似たような思いを抱えかねないと疑う。

（それに、ステラさんはユーリの帰る場所になってしまっている。本当なら、あたしがユーリのパートナーで帰る場所のはずだったのに。ステラさんのような立ち位置の人は恋愛感情かはともかく、好きにならないはずがないわ。本当に気を付けておかないとね）

ユーリが幼いころに家族がアクアだけになったと知っているカタリナは、家族の温かさにユーリが憧れているのだらうと推測している。自分もユーリの家族同然だと考えているが、きょうだいの類だろうから、別の方向性を持つステラが恐ろしかった。

（ステラさん、どうしてアクアに操られることになったのかしら。やっぱり、アクアがオメガスライムだと気づいてしまったから？ アクアはユーリにだけは嫌われたくないでしょうし、オメガスライムなんて知られたら、嫌われると思ってもおかしくはないか。

でも、ユーリがあたしを操られていると知ったならともかく、アクアがオメガスライムだったと知ったくらいでアクアを嫌いになるなんて、想像できない。今ならともかく、あたしだって嫌いにならないかったはずなのにね。アクア……）

ユーリの近くの女の事を考えている間、カタリナはずっと考えないようにしていたことがあった。ユーリの周りにいる人が、全て本当はアクアであるという可能性だ。それを考えてしまうと、カタリナは人間不信になりそうだった。

（ステラさんはもうアクアに操られている。アリシアさんとレティさんだって、アクアがその気になればおしまいよね。サーシャさんだって、契約しているモンスターごとどうにかできそうだし、ユーリヤだって怪しい。そもそも、ユーリに好意的なのは、アクアが操っているからだっったりしないわよね）

カタリナにとってユーリの周囲全てが疑わしく感じ、寒々しい物を中心に感じていた。アクアの力ならだれが操られていてもおかしくないという事実は、カタリナの精神を蝕むことになった。

（……だめね。あたしが信じていいのは、本当にユーリだけかもしれない。ユーリ、早く帰ってきて。何なら、アクアの操っているあたしの全部、好きにしているよ。ううん、むしろ好きにしてほしい。ユーリを感じている間だけなのよ。あたしが大丈夫でいられるのは……）

カタリナはユーリが好きだと初めて自覚した時より思いが深まっているのだと信じていた。ユーリの近くに居たいことはそれが理由だから、おかしくはないと思いつむ。カタリナの精神は、本人が自覚



している以上に追い詰められていた。

(だから、ユーリをあたしに刻み付けて。ユーリともし離れてしまっても、あたしがずっとユーリを感じていられるくらい。本当は、あたしとしてユーリと一緒に居たい。でも、そうできないんだから仕方ないじゃない。

もしあたしが体を取り戻したら、ユーリがあたしに今までしてきたこと、全部ユーリともう一度するわ。そうすれば、きっとあたしは全部取り戻せるんだから)

カタリナにとって、ユーリとの未来を考える事だけが今ある楽しみだった。ユーリの事を考えることが増える材料を、カタリナは心から求めていた。とても強く。

(それにしても、ユーリとそういう事をしたら、アクアに操られているままでも子供ってできるのかしら？ ユーリとあたしの子供……そうだ！ これなら……ユーリ、待ってなさいよ。アクアには絶対できないこと、あたしがしてあげるんだからね)

## 41話 新たなペツト

ぼくは王都から離れてカーレルの街へと向かっていった。

カタリナにユーリヤやアリスアさんとレティさん、サーシャさん。カーレルの街で再会するのが楽しみだった。ぼくにも大切な人がこんなにできたんだと思うと嬉しかったし、王都でミーナと再会できた他に新しい出会いもあった。

ミーナとまた戦うのは楽しみだし、ヴァネアがどんなモンスターなのかもっと知ってみたい。オリヴィエ様との出会いも、悪い物ではなかった。

改めて、王都での大会に出てよかった。そう思い直していた。

ぼくが考え事をしてっていると、近くに猫のようなものが寄ってきた。黒い毛並みをしたその猫の尻尾は2つに分かれていて、耳もそれぞれ2つあるような形だった。

モンスターだと判断したぼくは戦闘態勢に入ったが、モンスターはすぐにひっくり返ってお腹を見せてきた。

念のためにステラさんをアクアに守ってもらいながら、いつでもアクア水を出せるようにしておく。

そして、そのモンスターに近寄ると、そのモンスターはゆつくりとボクに近づいてきて、ぼくに舐めかかってきた。

ちよつと警戒したが、痛みやかゆみは無い。なのでもう少し様子を見てみると、ぼくの足に頭をこすりつけてきていた。

かわいらしいと感じたぼくは、そのモンスターを撫でまわしていたが、心地よさそうな表情で猫なで声を出していた。

ぼくの様子を見たアクアが近寄ってくると、そのモンスターはまた、ひっくり返ってお腹を見せていた。

「ユーリ、そのモンスターはもう上下関係が分かっているみたい。アクアには逆らえない。ユーリ、気に入ったのなら、連れて帰るといい」

上下関係って、アクアが上でこのモンスターが下ってこと？ アクアのイメージとは一致しないけど、アクアが大丈夫というなら、ぼくはこのモンスターを連れて帰りたかった。

「ねえ、ぼくについてくる気はある？　言葉が分かるなら、うなずいてほしいな」

そうぼくが言うと、モンスターはうなずいてくれた。またぼくに寄ってきて、ゴロゴロと声を出しながら、ぼくに全身をこすりつけていた。

この子はぼくに着いてくるつもりらしいし、名前を付けてあげるのもいいかな。

「ねえ、きみの名前を付けようと思うんだけど、ノーラで良いかな？」  
モンスターはすぐにうなずいた。これからこの子はノーラだ。

ノーラはぼくの体を器用に登って、ぼくの頭の上に座り込んだ。ちよつと重いような気もするけど、これくらいなら大丈夫かな。

ステラさんの近くへノーラと一緒に行き、ノーラを紹介する。

「猫型モンスターですか。モンスターの中では、人と一緒に居ることが多い種類です。ですが、そんな姿の猫型モンスターは初めて見ましたね。新種でしょうか。いえ、考察は後でもいいですね。ノーラちゃん、よろしくお願いしますね」

ノーラは鳴き声で返事をした。返事で良いんだよね。言葉は通じているみたいだし。

ステラさんが手を近づけると、ノーラは素直にそれを受け入れていた。

猫つてよく引つかいたりしてくるみたいだけど、ノーラはおとなしいな。見た目も可愛らしいし、ぼくには既にノーラがとてもかわいく思えていた。

「ユーリ、ノーラをペットにするのはいいけど、アクアが一番。それは忘れないで」

「ノーラにはかわいそうだけど、それは当たり前だよ。アクアとノーラなら、アクアを優先するかな」

「ならいい。ノーラ、分かった？」

ノーラは震えあがりながらうなずいていた。アクアってそんなに怖いのかな？　ぼくにはいつものアクアにしか見えない。

ぼくの知り合いでは他のみんなも特に怖がっている様子はないし、

モンスターがアクアにおびえているところも見ることがない。何か  
ノーラにしか分からないことがあるのだろうか。

まあいいか。アクアが妙なことをしているわけでもないだろうし。

ノーラを新しく仲間に加えてしばらく。ぼくたちは、帰った後ノーラをどうするのかを相談していた。

モンスターであるノーラだけど、戦えるのかはよくわからないし、  
ノーラがどうしたいかにもよる。ノーラには言葉が通じているみたいなので、ノーラに確認してみるのもいいかもしれない。

「ノーラはステラさんの家に連れて行ってもいいですか？ アクアの時は特にしつけどかに困った記憶はないですけど、モンスター相手だと、気を付けないといけないものでしょうか」

「ノーラちゃんはとても賢いと思いますよ。ですから、先に説明しておけば、家を汚されたりする心配は少ないのではないのでしょうか。トイレとか、家でのルールを先に考えておきましょうか。あ、ノーラちゃんを家につれてくることは構いません。外に放り出すのは、さすがにどうかと思いますし」

「カタリナ、猫が好きだから喜ぶかも。ユーリヤはどうか」

カタリナは確かに猫が好きだけど、モンスター相手でも大丈夫なのだろうか。

それに、猫の外見が好きなのであって、猫を飼いたいという雰囲気ではなかったからな。

まあ、ぼくがちゃんと世話をすれば済む話か。それより、ルールをどうするかだな。

「ノーラ、トイレは家の中にいる時と街の中では、決められた場所じゃないとだめだからね」

ノーラは軽くうなずいた。まあ、今もトイレに行くときは、ちゃんと処理しやすいようにしてくれているし、大丈夫だろう。少なくとも、馬車の中でとか、道で粗相をしたことはない。

ノーラは大体いつも僕のそばに居るが、トイレの時はちゃんと合図してからするし、食事も好き嫌いをすることはない。本当に手がかからなくて、ぼくはノーラを信頼しても大丈夫だと思い始めていた。

カーレルの街への道中のある日。ぼくたちは複数のモンスターに襲われていた。すると、ノーラがモンスターの前に飛び出していった。

「ノーラ、危ないよー!」

ノーラを心配していたぼくだったが、ノーラはとても素早い動きでモンスターたちを仕留めていく。

ぼくたちの援護が全く必要なさそうなくらいで、なぜあの日いきなり降参したのかわからないくらいだった。キラータイガーより数段強いんじゃないかな。

まだ余裕もある雰囲気だし、もしかしたら人型モンスター相手でも勝ててしまうかもしれない。

ノーラのあまりの強さに驚いていたぼくだったが、モンスターを倒した後、ぼくに甘えてきている姿を見て、ノーラを疑う気が失せてしまう。

「ノーラ、ぼくたちを守ろうとしてくれたんだよね。本当にありがとう。ノーラをペットにできて、ぼくは幸せだよ」

ノーラは自慢げな顔をする。ぼくはノーラの表情がなんとなくわかるようになっていた。

ノーラはぼくが離れた後にぼくを見つけるととてもうれしそうな顔をするし、何かあるたびにぼくに体をこすりつけてくる。そういう時は大体いつも楽しそうだ。

ノーラを撫でまわしていると、アクアも横に寄ってきて撫でることをねだってくるのがよくあった。

でも、今は状況を分かっているみたいで、ノーラを撫でまわしていても、アクアはねだってこなかった。

「ノーラ、ユーリに褒めてもらってうれしそう。ノーラ、撫でられた分はちゃんとユーリの役に立って」

ノーラは即座に肯定の鳴き声を上げる。ノーラはアクアに対してはまるで舎弟のようだ。ぼくの知らない縄張り争いでもあるのだろうか。アクアにそういうイメージは全然ないんだけどな。

それより、せっかく今は我慢してくれたんだから、アクアを後で

ちやんとかまってあげないと。

アクアはぼくがすることなら何でも嬉しそうだけど、アクアが言い出す前にぼくから始めたほうが嬉しそうだから、こういう機会ですっかり喜ばせてあげたい。

それは後のことにして、ノーラはとても強いみたいだけど、ぼくたちが冒険者活動する間、家で待っているよりついてくる方が良いかもしれないな。確かめてみよう。

「ノーラ、そんなに戦えるのなら、ぼくたちが戦うために出かける時もついてくる？ 嫌なら、家で待つてくれていいよ」

ノーラは全部言い終わる前から肯定の返事をしていた。だったら、ノーラと一緒に戦う訓練をしないと。カタリナもユーリヤも、しつかり慣れてもらわないと。

「ノーラちゃんは本当に強いですね。やはり新種でしょうか。これほど強いなら、何か情報があってもおかしくないはずですし」

ノーラが新種かそうでないかは、ノーラを信頼するかどうかには全く影響はないけど、新種じゃないとしたら、好みとかすでに分かっているかもしれないからな。

ぼくはすでにノーラの事が大好きになっていたから、できるだけ喜ばせてあげたかった。1回カーレルの街に帰ったら調べてみようかな。

その後、ノーラがトイレで離れている間に、アクアの事を思う存分撫でていた。アクアはとても満足気で、ぼくまで嬉しくなった。

「ユーリ、ノーラをペットにしても、ちやんとアクアの事を可愛がってくれてる。少し不安だったけど、やっぱりユーリは最高」

アクア、少し不安だったのか。気づかなかったな。

でも、せつかく言葉にしてくれたんだから、しつかりアクアに返したかった。

アクアに感謝を伝えるための具体的な行動を考えた結果、頬へのキスになった。

これまでも撫でたり抱きしめたりはしていたから、新しい行動を考えた結果だ。

少し恥ずかしかったけど、決意を込めてアクアの頬にキスをした後、アクアにいつも一緒に居てくれていている事への感謝を伝えた。

「アクア、ぼくのペットになってくれてありがとう。アクアがいたから、ぼくは頑張ろうって思えたんだ。戦闘でも、生活でも、アクアにはいつも支えられているよ。アクアとの契約でもらったアクア水も最高だよ。あれがあったから、ぼくはここまで強くなれたし、誰かを守ることもできたんだ。アクアはぼくにとって、最高のペットだよ」「ユーリ！ ユーリもアクアにとって、最高の飼い主。ノーラにとってもきつとそうだから、ノーラの事も大切にしていあげて。もちろん、アクアが1番だけど。ユーリ、大好き！」

そう言っただけで、アクアはぼくに抱きついて頬にキスを返してくる。ぼくもアクアの事を抱き返して、しばらくアクアとくっついていた。

ノーラが帰ってきてても、アクアはずっと僕に抱き着いていた。ノーラはアクアの邪魔をしないように僕に体をこすりつけてきていた。

ノーラはとてもかわいいし、良い出会いだっただけは間違いない。

でも、アクアとの絆を再確認して、ぼくにとって、アクアとの出会いが1番だったという思いを確かにしていく。

## 42話 帰還

ぼくたちはとうとうカーレルの街に帰ってきた。まずはサーシャさんのところへ向かい、結果を報告することに。ついでに、ノーラをパーティに加えようと思っていることも伝えておくことにする。組合へ向かい、サーシャさんのところへ向かうと、サーシャさんは満面の笑みで迎えてくれた。

「ユーリ様、結果はすでに聞き及んでおりますわ。優勝とそして勲章授与、おめでとうございますわ。ユーリ様なら活躍できると思って大会へと送り出しましたが、優勝までしてくださいとは、ユーリ様を送り出したわたくしも鼻が高いというものですわ。」

ささやかなものとなりますが、祝いの宴を用意することにいたしましたわ。どうぞ、ご参加くださいませし」

「サーシャさん、ありがとうございます。大会へと送り出してくれたサーシャさんのおかげで、良いことがたくさんありました。それでですけど、宴への参加は構いませんけど、いつの予定ですか？」

「3日後を予定しておりますわ。ユーリ様の好物をたくさん用意しておりますわ。楽しみにしておいてくださいまし。オーバースカイの皆様、アロシア様にレテイ様にも参加していただくことになっておりますわ。もちろん、ステラ様にも来ていただきたいですわね。どうですか、ステラ様？」

「もちろん、構いませんよ。他の参加者は誰になる予定ですか？」  
「給仕などを除けば、他に参加者はいない予定ですわ。ユーリ様はあまり目立つことを好まれないようですし、知り合いだけで祝う方が嬉しいかと思えますわ」

サーシャさんはよく分かってくれている。ミーナやヴァネア、オリヴィエ様ならいても嬉しいけど、流石に参加は出来ないだろうし。

なら、今のメンバーが一番だよ。ユーリヤやカタリナにアロシアさんとレテイさんにも早く会いたい。会って、いろいろと話がしたい。

ユーリヤやカタリナには今日にでも会えるだろうけど、アロシアさ



んとレテイさんはどうだろう。本当に楽しみだ。

「話は変わりますが、ユーリ様に水刃という二つ名がついたと聞きましたわ。アリシア様とレテイ様に、ユーリ様をお任せした成果ですわね。依頼料を払っている組合としても嬉しいことですよ。ユーリ様がアリシア様やレテイ様に並ぶ日も、そう遠くないことかもしれませんわね」

「ぼくは組合に登録したころよりはるかに強くなっているとは思いますが、それでもアリシアさんやレテイさんの背中には遠いと思います。」

もちろん、追いつき追い越すために全力を尽くすつもりですが。ぼくが強くなった分、余計にアリシアさんたちの凄さはよくわかるようになりましたね」

「なるほど……冒険者としての視点は、わたくしにはない物ですから。ユーリ様がそうおっしゃるのなら、そうなのでしょう。ですが、すでにユーリ様達オーバースカイは、一流とっていい冒険者ですわ。それは誇ってくださいまし」

一流ね。オリヴィエ様に勲章をもらえるくらいだし、ただの1冒険者とまでは言わないけど、そんなにすごいものなのだろうか。

まあ、勲章自体はサーシャさんも誇りに思っている様子だったし、そこまで軽んじるのは問題だろう。ほとんどアクアのおかげだろうけど、ぼくも自信をもって良いのかな。

「わかりました。それで、この子はノーラと言うんですけど、道中であつてきたので、一緒に行動することにしました。とても強いので、パーティに加入させようと思っっているんです」

「猫型モンスターですわね。わたくしはこのようなモンスターのことを知りませんわ。新種かもしれませんわね。それで、お強いんですの？」

「キラータイガーよりは強いんじゃないかと。それに、とても賢いんです。少なくとも人の言葉は理解していますし、言うこともちゃんと聞いてくれます。どうでしょうか？」

ぼくのセリフを聞いてサーシャさんは目を見開いて口に手を当て

る。よくある格好という感じだけど、サーシャさんがやると可愛らしさが強い。

「キラータイガーより!? ま、まあ、ユーリ様でしたら、キラータイガーより強い程度のモンスターなら大丈夫でしょうけれど、お気を付けくださいまし。」

ただ、今見ているだけでも、相当なついでにしているというのは分かりますわ。ですので、反対はいたしませんわ。使いようによっては、オーバースカイのさらなる栄達に役立つことでしょう」

ノーラは話を聞いているのかいないのか、ずっとぼくに頭をこすりつけている。

普通の猫と違って、そこらを引っかいたり、粗相したりということは一切なかったたので、組合に連れてきても問題ないと判断していたが、この調子で大丈夫かな。

今更ノーラと離れたくはないので、問題は起こさないでほしい。

「ノーラ、この人がサーシャさん、ぼくがとてもお世話になっている人なんだ。だから、失礼なこととはしないでね」

ノーラは鳴き声を上げて返事をする。今度は肩に登って、ぼくの顔に胴体をこすりつけていた。

本当にかわいい物だけれど、サーシャさんにも少しは気を配ってくると嬉しいかな。そう思っていると、ノーラはぺこりとサーシャさんに頭を下げる。

ノーラはずっとぼくの事しか見てないようできて、こういう時には周りに気を配ってくれるので、ぼくは本当にメロメロになっていた。

スライムだったころのアクアも相当可愛かったけど、ノーラも本当に可愛い。ぼくは甘えてくるペットに本当に弱いようだ。

でも、きつとみんな同じだよ。こんなに可愛いんだし。

「本当に賢いように見えますわね。ノーラ様、ユーリ様をしっかりと支えてあげてくださいまし」

そのサーシャさんの言葉に、ノーラは強くうなづく。ノーラの気持ちには嬉しいけど、ぼくの方がノーラを支えてあげたい。こんなに甘えん坊なんだから、きつとまだ子供だろう。

だから、ノーラが無茶しないように、ぼくがしっかりと見ててやらな  
いと。

「それでなんですけど、ノーラを祝いの会に参加させたいと思うんで  
すけど、サーシャさん、大丈夫ですか？」

「ノーラ様は本当に言葉が分かっているようですし、構いませんわ。  
好みの食べ物など、ありましたか？」

「肉が本当に好きみたいです。でも、雑食みたいですわ。ぼくが食べ  
ているものと同じものを、よく食べていますけど、調子を悪くしたよ  
うなことはないです。玉ねぎとか、猫にはよくないと聞きますけど、  
止めても平気な顔で食べていましたし、大抵のものは食べられるん  
じゃないでしょうか」

「では、ユーリ様と一部をお揃いにして、肉料理も用意させますわ。そ  
れでよろしいですか、ノーラ様？」

ノーラは元気よく鳴き声を上げる。サーシャさんの提案に満足し  
ている様子だ。ノーラも一緒に行けることになったし、お祝いの席、  
本当に楽しみだな。

「せっかくですから、アクア様の好みも聞いておきたいですわね。ア  
クア様、いかがですか？」

「ユーリと同じもの。同じじゃないなら、別に食べなくてもいい」  
アクア、本当に食事はどうでもよさそうなんだよね。ぼくが食べる  
のを見ている時は、楽しそうに食べているけど、ぼくと別れている時  
につまみ食いをしたことすらない。

なんとというか、ぼくからもらっているから食べる。そんな感じに見  
える。

「かしこまりましたわ。では、ユーリ様と同じものを用意しておきま  
すわね。話は変わりますが、ステラ様、ユーリ様は何か王都の暮らし  
で困っていた様子はありましたか？」

「強いて言うなら、私たち以外に会えずに寂しがっていたくらいで  
しょうか。王都では、以前の知り合いと仲を深めていたようで、私た  
ちと離れて行動することも良くありました」

「寂しがっている、ですか。それは、わたくしにも会いたいと思ってい

たと考えても……？」

「そうですね。サーシャさんにも会いたがっている様子でした。ユーリ君は、親しい人と離れて暮らす経験があまりないようでしたね」  
本人の前でなんてことを言うんだ。ぼくの顔は真っ赤になっているに違いない。

まあ、サーシャさんが恋しかったのも事実なんだけど。会わない日の方が少ないくらいだったから、離れてみると、本当に寂しかった。「それはそれは……ユーリ様、本当にありがとうございますわ。わたくしをそこまで近く感じていただいて。わたくしも、ユーリ様が恋しかったですわ……」

そう言ってサーシャさんはぼくに寄りかかってくる。顔が本当に近くて、とても恥ずかしい。

でも、サーシャさんがぼくを恋しかったといってくれるのは嬉しいかな。ぼくにとっての数少ない大切な人だから、サーシャさんもそう思ってくれていると嬉しい。

まあ、お世辞の類かもしれないけど。

「それにしても、ユーリ様は親元を離れて暮らすことを寂しいとは感じておりませんのね。いえ、失言でしたわ。ユーリ様、申し訳ありませんわ」

ぼくが前に両親の話で暗い顔をしたのを覚えていたのだろう。

だけど、あの時は顔に出してしまっただが、ぼくにとっては済んだ話だ。サーシャさんに謝ってもらうほどの話ではない。

「いえ、気にしないで下さい。アクアとずっと2人で過ごしていたので、家を離れても特に寂しいとは思いませんでしたね。アクアと一緒に居てくれることには変わりなかったですし、親しい人もカタリナとステラさんくらいだったので。どちらも一緒に居てくれましたから。本当にありがたいことです」

「ふふっ。ユーリ様は、近くの人には恵まれておりますのね。遠く離れた地にまで着いてきてくださる人など、そういないでしょうに、親しい人が全て着いてきてくださっているのですから。」

ですが、故郷を恋しいと思わないのでしたら、ここ、カーレルの街

をそう思ってくださいまし。わたくしは、いつでもあなたをここに歓迎いたしますわ」

カーレルの街を故郷のように、ね。ステラさんも、サーシャさんも、ここから離れるということとはそうなさそうだし、アリシアさんとレティさんもいる。

ミストの町より、ここに帰りたいたいと思うのは確かだ。ぼくににとって大切なものはほとんどここにある。中々いい提案かもしれない。

「そうですね。サーシャさんが迎えてくれるというのなら、それはとても嬉しいです。実際ぼくは、王都にいる間何度かカーレルの街に帰りたいと思いましたから。第2の故郷というか、生まれ育った町より、このの方が大切なくらいかもしれません」

「我がカーレルの街をそう思っていたら、本当に嬉しいですわ。改めて、ユーリ様、王都での活躍、本当におめでとうございますわ。そして、ありがとうございますわ。わたくしの求めに応じてくださって。あなた様をわたくしは本当に誇りに思いますわ」

サーシャさんがぼくを誇りに思ってくれるなら、それは本当に嬉しい。

それにしても、サーシャさんの言葉で、本当に帰ってきたんだと実感できた。ぼくたちの家にも早く帰りたいな。

「サーシャさん、では、また。祝いの席を楽しみにしています」

「ユーリ様、アクア様、ノーラ様、ステラ様。また、祝いの場でお会いいたしましょう。お待ちしておりますわ」

## 43話 家

ぼくは組合からステラさんの家へと向かっていた。ステラさんの家に近づくにつれてだんだん帰ってきたという実感がわいてきた。

もうミストの町の家ではなく、ここがぼくの家なのだと思えた。カタリナやユーリヤに久しぶりに会うのも本当に楽しみだった。

ぼくの居場所はここなんだ。素直にそう思えた。

ステラさんの家に着くと、ユーリヤがすぐに出迎えてくれた。満面の笑みを浮かべていて、その笑顔を見て、ぼくは本当に嬉しくなった。王都での日々も悪くなかったが、やっとここに帰ってこられた。ずっと会いたかった人に会えて、迎えてもらえるのがこんなに嬉しいなんて。

その後ろでカタリナが様子を見ていたが、ぼくの姿を見つけると、少しだけ嬉しそうな顔をしていた。カタリナもぼくとの再会を喜んでくれていたようで、嬉しかった。

カタリナなら、もしかしたら平気な顔をしているかもしれないと思っていたが、ぼくの思い違いだったようだ。

「ユ、ユーリさん、おかえりなさいっ。あなたのユーリヤは、ユーリさんをずっと待っていましたよっ」

「あんた、ちゃんと元気そうね。良かったわ。あんたはあたしが面倒見てないと死にかねないし、少し心配だったのよ。ま、それはいいでしょ。あんた、王都で大活躍だったみたいね。褒めてあげるわ」

ユーリヤは勢いよくぼくに抱き着いてくる。ユーリヤの声を聴くのも、顔を見るのも久しぶりなので、素直に受け入れることが出来た。ユーリヤを抱き返していると、カタリナがつまらなそうに声をかけてくる。

「別に、あんたがいちやいちゃしてようがどうでもいいけど、あたしの目の前でしないでくれる？ それで、ステラさんは分かるけど、そのモンスターは何よ？」

「この子はノーラ。ぼくの新しいペットだよ。出来れば、これからパーティに組み込みたいんだ」

ぼくの紹介を聞いてノーラは一鳴きする。カタリナは少しノーラを見て目を細めていたが、すぐにこちらに向き直ってくる。

「あんた、アクアはいいの？ その子は確かに可愛いけど、だからって、アクアをないがしろにするんじゃないわよ。アクア、嫌なら嫌って言いなさいよね」

「別にいい。ノーラはアクアに逆らえない。それに、ユーリはアクアを一番に可愛がってくれる」

「そ。ま、いいわ。それで？ パーティに組み込みたいってんだから、少しは強いんでしょ？ あんた、その辺、どうなのよ？」

「キラータイガーよりは強いと思う。相手を選べば、人型モンスターにも勝てるんじゃないかな」

カタリナはノーラを見ながら目を見開く。やっぱり驚くよね。ぼくもとても驚いたし。

それからカタリナはぼくにジトつとした目を向けてきた。

「あんた……そんなのをペットにするのね。ま、あんたには懐いてるのは確かみたいだけど。確かにそれなら、連携がちゃんとできれば、足手まといにはならないわね。別にいいわよ。その子連れて行っても」

ノーラはそっけない態度をとられているのに、カタリナの方に擦りついている。カタリナは特に何も返してはいないが、まんざらでもなさそうだ。

この分なら、カタリナは大丈夫そうかな。ユーリヤはどうだろう。

「ノーラちゃんって言うんですね。ノーラちゃん、これからよろしくお願いしますねっ」

ノーラはカタリナに擦りつきながら、ユーリヤに鳴き声で返事をした。ユーリヤは特に気にしていない様子で、ニコニコと微笑んでいる。

うん。ノーラは十分に受け入れられていると思っていいいかな。

「ユーリ君、ノーラちゃんが受け入れられているみたいで、よかったですね。ユーリ君、ノーラちゃんを本当に可愛がってましたから」

ステラさんはそう言った。まあ、ぼくがノーラを可愛がっていると

いうのは間違いない。

だからこそ、カタリナやユーリヤにノーラが嫌われるという事態は避けたかったが、この分だとうまくいきそうで、本当に良かった。

「さて、ユーリ君。いろいろと疲れたでしょうから、今日はゆっくりしててください。ただ、皆さんユーリ君を待ちわびていたでしょうし、少しだけカタリナさんとユーリヤさんに時間を作ってあげてください。そうすれば、2人とも喜ぶでしょう」

「ユーリ、そうしてあげて。カタリナも、ユーリヤも、寂しがっていたみたい」

ということらしいので、部屋に帰った後にぼくは部屋で休みながら、2人を待っていた。まず来たのはカタリナだった。

「あんた、調子はどうよ？ あんな遠出つてあんたは初めてでしょうし、少しは疲れたんじゃない？ 少しくらいなら、あたしに弱音を吐いても許してあげるわよ」

カタリナは今日は珍しく優しいな。でも、別に今は大丈夫かな。カタリナと会えなくて寂しかったとか、さすがに本人の前では言いたくないし。

「いや、大丈夫だよ。強いて言うなら、大会で少しケガをしたけど、すぐに治っちゃったしね。あ、今回の大会で、カタリナも知っている、あのエンブラの街で戦ったミーナとまた戦うことになったんだよ。知り合いに会えると思ってなかったから、本当に嬉しかったんだよね」  
「あたしに会えなくて泣きわめきました、くらい言ってみなさいよ、もう。で、あのミーナさんに再会したのね。あんたが優勝したつてのは聞いているから、もちろん勝つたのよね。良くやったわね。褒めてあげるわ」

泣きわめきはしなかったけど、カタリナに会えなかったのはつかったかな。

一緒に居るのが当たり前の人と離れることが、あんなに寂しい物だとは思ってなかった。

ミーナやオリヴィエ様のおかげで少しはましだったけど、それがなかったらと思うとぞつとする。



「帰りはノーラも居たし、本当に運が良かった。」

「ありがとう、カタリナ。カタリナと会うのも久しぶりだよね。せっかくだから、いろいろ話がしたいな」

「別にいいけど、あたしが話をするのか、あんたが話をするのか、はつきりさせなさいよね。あたしはいつも通りだったから、近況なんて特に話すことはないわよ」

「じゃあぼくが。ミーナ、ラミアと契約していたらしくて。ヴァネアって言うんだけど、大会の予選を見学していたら隣にたまたまいて、それがミーナの契約モンスターだったから、お互いとても驚いたんだよね。」

「それで、偶然は他にもあって、ミーナとは決勝でぶつかることになったんだ。エンブラの街に続いて、2回目だよ。ミーナが前に運命を感じてしまいそうって言ってたけど、今回ばかりはぼくもそう思ってたね。あんな偶然、滅多なことでは無いでしょ。知り合いを遠くの地でたまたま見つけるって、本当に嬉しい事なんだって、ミーナのおかげでよくわかったよ」

カタリナは特に表情を変えていないけど、しっかりと聞いてくれる。もしかしたら興味がないのかもしれないけど、それで嫌な顔はしないから少し対応に困る。

「そ。良かったじゃない。それで、ミーナさんは強くなってたわけ？」  
「本当に強くて。ぼくも一歩間違えただけで負けていただろうね。契約技が五感の鋭敏化と、周囲の熱探知らしいんだけど、身体強化の契約技を持っている人より動きが良かったくらいで。ぼくも全力で対抗したけど、本当に危ない勝利だったと言っている。ぼくももつと精進しなくちゃと思わされたよ」

「ミーナさん、結構元から強かったのにね。でも、そんなに強かったのなら、いい経験になったんじゃない？ もつとあたしの役に立てるようになったと思っっているのよね。あんた、しっかりあたしに尽くすのよ」

「はいはい。でも、実際のところこれ以上ない経験だったと思うよ。あの戦いの中だけでも、ぼくは数段成長できたような気がする。嫌な

こともあつたけど、王都での大会に出れたのは良かったと思うよ」

ぼくに対してカタリナは優しく微笑んでくれる。いつもはぼくをにらむような目を向けてくることも多いカタリナだけれど、こういう顔は本当に魅力的だよな。ずっとこうならドキドキしすぎるかもしれないから、今のままでいいけど。

「そ。あんた、ちゃんと頑張ったのね。褒めてあげるわ。また、何か料理を作ってあげるわよ。なにがいいかしら？」

「カタリナの料理は本当に美味しいから、結構悩むね。でも、そうだな。魚なんかを油で煮込んだ奴が良いかな。あれが一番好きだったかな」

「わかったわ。じゃあまた、休みの日にでも作ってあげるわ。楽しみにしてなさいよね」

「うん。本当に楽しみだよ」

「じゃ、あたしはこのくらいで。ユーリヤさんも待つてるでしょうしね。あんた、しっかり対応してあげるのよ」

そう言つてカタリナは去つていった。そう時間の経たないうちに、今度はユーリヤがやってきた。

「ユ、ユーリさん。王都での活動、お疲れさまでしたっ。久しぶりのユーリさんをしつかり堪能させていただきませうねっ」

そう言つてユーリヤはぼくの膝の上で寝転ぶ。そのまま頬や頭をぼくの膝にぐりぐりとする。ステラさんにしてもらったことはあるけど、人にするのってこんな感じなのか。結構恥ずかしいし、それなりに疲れる。

ステラさんはこんなことをしてくれていたのか。ぼくはステラさんに改めて感謝していた。すると、ユーリヤは少し不満げになった。

「もう、ユーリさん。だめですよ。ユーリヤと2人つきりなのに、他の女の人の事を考えていたら。そんなユーリさんにはこうですっ」

そう言つてぼくにすぐりを仕掛けてくる。結構くすぐったくて、ぼくは大きく悶えていた。そんなぼくの姿を見たユーリヤは満足げになつて言う。

「わたしと一緒に居るのに、他の女の人の事を考えていたらこうです

からねっ。もちろん、冒険中は構いませんけどっ。ユーリさん、分かりましたか？」

「分かった、分かったから。ユーリヤ、それで、久しぶりに会ったんだから、何かしてほしいことがあれば聞くよ」

「なら、今度はわたしの膝に座ってくださいいっ。ユーリさん、わたしがやったように、わたしの膝、しっかり堪能してくださいねっ」

ちよつと待つてほしい。さっきのユーリヤみたいにつて、膝に頭や頬をぐりぐりするの？ さすがにそんなことをしたら、ぼくの方がもたない。素直に横になるだけで勘弁してくれないかな。

ぼくはとりあえずユーリヤの膝に横になることにする。

「ユーリさん。王都での活躍を聞きましたよっ。本当に、お疲れさまでした。ユーリヤにいつぱい甘えて、存分に疲れをいやしてくださいねっ。ほら、その一歩です。ユーリさん、ぜひユーリヤの膝に、もつと顔を押し付けてみてくださいいっ」

本当にやらなくちゃいけないらしい。ぼくは覚悟を決めて、ユーリヤの膝に顔をこすりつける。

ユーリヤは、柔らかいし、暖かいし、いい匂いがして、ぼくは変な気分になりそうだった。

すぐに限界が来たぼくは、ユーリヤから離れていく。

「ふふ。そんなものですかっ。残念ですね。もつと堪能してくれても良かったのにつ。わたしもユーリヤさんをしっかり堪能できましたから、今日はこの辺にしておきますっ。では、また」

そう言つてユーリヤは去つていった。その後、アクアとノーラがやってきた。

ノーラはぼくの部屋で寝ることに決めたようで、寝る時には、アクアが左側に、ノーラが右側にひつついていた。可愛いペットに囲まれて眠れるなんて、最高だな。そう思いながら眠りについた。

## 44話 弟子

ぼくは今日アリシアさんとレティさんに久しぶりに会うことになっていた。今日は冒険者としての活動ではなく、別の事がしたいということなので、闘技場のような場所へと来ていた。

これはたぶん、ぼくの実力を試してみたいとか、そういうことだろうか。

しばらく待っていると、アリシアさんとレティさんがやってきた。

「久しぶりだね、ユーリ君、アクア。カタリナさんとユーリヤさんは前も会っているけどね。今日は、ユーリ君が王都でどんなことをしたのか、確かめてみたくてね。こちらにもある程度の情報は入ってきているんだけど、本人から聞いた方がはつきり分かるからね。」

それにしても、ユーリ君、水刃って呼ばれてるんだってね。私たちの弟子にぴったりの名前だ。ユーリ君、私たちは嬉しいよ」

そう言ってアリシアさんに頭を撫でられる。アリシアさんの撫で方はうまいわけでは無かったが、アリシアさんに撫でられているということが本当に心地よかった。顔に出ているかもしれないな。

それに、アリシアさんたちの弟子として認められたことも本当に嬉しい。

ぼくたちの関係はよくわからない何かのように思っていたので、こうしてアリシアさんたちの弟子だと本人から言ってもらえると、とても自信がついた。

「アリシアさん、ありがとうございます。アリシアさんたちの弟子として恥じないよう、これからも頑張りますね」

「ユーリ君ったらかわいいなあもう！ わたしたちの弟子としてなら、今でも十分すぎるくらいだからね」

そう言いながらレティさんは抱き着いてくる。なんだかとても暖かくて、すごく落ち着いた。アリシアさんやレティさんに認めてもらえていると思うと、本当に気分が上がった。

ぼくたちは本当に素晴らしい人たちに師匠になってもらえた。それが、本当に嬉しい事だった。

「それにしても、ユーリ君。水刃なんて技を使っちゃうなんて、本当にわたしたちの事が大好きなんだね。絶対に風刃の真似したでしょ。かわいいアピールだなあ、このこの〜」

アリシアさんたちが大好きなのは本当の事なんだけど、そう言われるととても恥ずかしくなってしまう。たぶんぼくの顔は真つ赤なことだろう。

「ユーリ、良かったじゃない。アリシアさんたちにあんたが憧れてるなんて事は誰でもわかることなんだから、そのアリシアさんたちへここまで認められて、嬉しくないはずがないでしょ」

「そ、そうだけど、本人たちの前でそんなことを言わないでよ！　アリシアさん、レテイさん、違いますからね！　いえ、違うということは無いんですけど……」

「わかってるよ。ユーリ君が私たちの事を尊敬してくれているのは。だからこそ、君たちを弟子として扱いたいと思ったんだから。もちろん、君たちの才能も考えての事だけど。」

君たちが私たちを尊敬してくれているように、私たちにとっても君たちは自慢できる存在だ。こんなに素晴らしい子たちが私たちの弟子なんだと思うと、本当に誇らしいよ」

「うんうん。あなたたちが、アリシアとレテイの弟子なんだって、自信を持つてくれたら、わたしたちも嬉しいよ。あなたたちはどこに出しても恥ずかしくない、わたしたちの大切な弟子なんだよ」

アリシアさんとレテイさんの言葉に、胸の奥が温かくなるような感じを受けた。こんなにすごい人たちに、自慢に思ってもらえるなんて、こんなに嬉しいことはない。アリシアさんたちの言葉を胸に、もっと頑張ろう。とても強く思った。

「アリシアさん……レテイさん……本当にありがとうございますっ。ぼく、絶対この日の事、忘れませんから。アリシアさんたちに喜んでもらえるように、絶対に、アリシアさんたちと一緒に冒険出来る冒険者になって見せます！」

「うん。君たちなら、本当にそう遠くない未来にその日が来ると思えるよ。君たちは私たちの想像を大きく超える成長をしてきた。本当

に、その日が来ることが楽しみだよ。君たちは私たちの希望なんだ……」

「そうだね、アリシア。冒険者なんてどいつもこいつもくだらない人たちで、こんな人たちと一緒に存在なんだって思うとつらかった。でも、あなたたちみたいなのと出会えたんだから、その時間も無駄じゃなかったって思えるよ」

アリシアさんたち、本当にろくでもない人ばかりに出会ってきたんだろうな。そんな顔を今していた。

ぼくの出会ってきた冒険者も、ミーナ以外はろくでもない人ばかりだったけど、アリシアさんたちは、もつといろんなひどい冒険者を見つけたのだろう。

でも、アリシアさんたちがそんな認識をする中で、ぼくたちはアリシアさんたちに出会えた。ぼくたちは本当に幸運だったんだな。

「アリシアさんたちにそう思ってもらえるなら嬉しいです。アリシアさんたちと出会えたおかげで、ぼくたちは冒険者としてやっていくことが出来た。」

だから、アリシアさんたちに、その分を返したいんです。アリシアさん、絶対に良いお礼を返して見せますから」

「別に気にしなくてもいいよ。どうしてもお礼をしたって言うのなら、私たちと一緒に冒険者としてやっていくだけの實力をつけて、一緒に冒険してほしい。」

そうすれば、今までの日々は報われたって、きつと思えるから」

「分かりました。でしたら、絶対に叶えて見せます。ぼくたちにとっても、それは大切な目標ですから」

「そうね。誰かの下にずっといるなんてつまらないわ。並ぶと言わず、超えて見せるわよ」

「ユーリヤは、ユーリさんにどこまでも一緒にしますっ！ その道の先にアリシアさんたちがいるというなら、そこまでだって行くだけですよっ」

「ユーリの望みがアクアの望み。絶対に叶える」

アリシアさんとレティさんはぼくたちをとて暖かい目で見てく

れている。この人たちが見守ってくれていると思うと、勇気と力が湧いてくる気がする。

「君たち……うん。君たちを弟子にして、本当に良かった。もし一緒に冒険できるほどにならなかったとしても、その思いは変わらないけど……。本当に、君たちには期待を止められない。これからもよろしくね」

「うんうん。サーシャさんやステラさんには感謝しないとね。ユーリ君たちと出会う機会を作ってくれたんだから。こう言っちゃなんだけど、あのキラータイガーにも感謝したいくらい」

あのキラータイガーにはカインを殺されたから、良いことばかりではなかったけど、アリシアさんたちと出会うきっかけを作ってくれた事には、ぼくも感謝して良いと思っている。

こんな素晴らしい人たちと出会えなかったなんて、考えたくもない。カインは死んでしまったけど、あの時に戻れたとしても、この人たちとの出会いを優先してしまうかもしれない。

「それで、なんだけど。君たちをここに呼んだ理由は、ユーリ君の水刃を見てみたいからなんだ。ユーリヤさんやカタリナさんも見たことはないみたいだから、見ていくといい。ユーリ君、私と模擬戦をしてみらえるかな？ もちろん、君に危ないけがをさせたりしないから」

アリシアさんと模擬戦か。胸を借りるいい機会だ。勝てない可能性の方が高いだろうけど、全力で勝ちに行く。それが、ぼくを弟子と言ってくれるアリシアさんたちへの礼儀だろう。

「わかりました。全力で行きます。アリシアさん、お願いします」

アリシアさんはぼくの前に立ち、構える。ぼくも構えに入った。レイティさんが開始の合図をする。

ぼくはすぐさまアクア水をまよって動きの補助と防御を行って、全力でアリシアさんに向かいながら、いくつも水刃をぶつけに行く。

アリシアさんは、ぼくの剣を弾きながら、風刃でいくつかの水刃を相殺し、残りを素早く避けていく。

ぼくは水刃以外にも全力でアリシアさんの妨害をしていたが、それでもアリシアさんの速さについていけない。

アリシアさんの攻撃に合わせてアクア水をぶつけようとするが、全て避けられて、攻撃を当てられた。

アリシアさんは手加減してくれているから、アクア水の鎧を抜けることはないが、ミーナ以上の威力を出せることは間違いないはずだから、これが実戦ならぼくはすでに負けていただろう。

だが、アリシアさんはぼくの動きを見たい様子で、それ以上の追い打ちをかけてこない。

ぼくはアクア水で加速しながら、今度は面でアクア水を出し、そこから避けようとするだろう所に水刃を置いておいた。するとアリシアさんは空中へ飛び、上からぼくに攻撃を仕掛けてきた。

慌てて逃げながらアクア水で妨害しようとしたけど、あつという間に追いつかれてしまい、また攻撃を受ける。

「ふふっ。地上しか移動できないと思ったのかな？ 私もレテイのように空中を移動することもできるんだ。これからは、空中からも攻撃するよ」

それからはアリシアさんの動きに翻弄されるだけで、全く手も足も出なかった。アリシアさんだけが空中にいる限り、どうやっても何も対処できない。

ぼくも空中に出るしかないが、アクア水をまとって空中を移動するだけの操作は、今は難しいだろう。

1方向に加速することが精いっぱい、格好の的になる未来しか見えない。方向転換をどうにかしたいところだけど、無理矢理方向を変えると、アリシアさんが何もしなくてもダメージを受けていくだけだ。

方向転換か。ぼく自身が体勢を変えて、それをアクア水で加速するだけならおそらくできるだろう。

なら、やることは1つだ。ぼくはジャンプした後、アクア水を足元に出現させ、ぼくの方に力をかける。それを蹴り飛ばして体勢を変え、そこを背中からアクア水で加速した。

アリシアさんほど縦横無尽ではないが、ぼくも空中に出ることができた。



それでも、アリシアさんにまともに攻撃を当てることはできなかったが、さつきよりは勝負になつていた。そのままアリシアさんと戦っている、アリシアさんがレティさんに向かって叫ぶ。

「レティ！ いざという時にユーリ君を助けられる態勢に入つて！」

「わかつた、アリシア！ いつでもいいよ！」

レティさんは空中に浮かび、構える。それを見たアリシアさんはぼくが空中を移動している最中に攻撃を仕掛けてきた。

体勢が崩れてアクア水の制御を失いそうになるが、ここで駄目になるようなら、あの日ユーリヤを助けられなかつたときから練習してきた意味がない！ ユーリヤに突き飛ばされて、アクア水の制御が出来なかつたことをずっと後悔していた。

それで、ぼくはあれからずっとアクア水をどんな状況でも使えるように訓練していた。だから、できるはずだ！

ぼくはそのままくずれた体勢に合わせてアクア水を出し、それを足場にしてまた移動する。そのままアリシアさんに向かって攻撃を仕掛けた。アリシアさんは全て避けた後にとても満足そうな顔になった。

「ここまでかな。ユーリ君、地上に戻ろう」

アリシアさんにそう言われて、地上に戻り、戦闘態勢を解く。アリシアさんは本当に嬉しそうな顔で、今回の戦いの評価をする。

「ユーリ君、本当に素晴らしかったよ。私の契約技の使い方をよく理解して、自分なりに取り込めている。私が同じくらいの頃に、そこまですできたかどうか。私の戦い方を本当によく研究してくれたんだね。そこまで理解してくれていると思うと、本当に嬉しいよ。ユーリ君、頑張ったんだね」

そう言つてアリシアさんはぼくの頭を撫でてくれる。

アリシアさんの動きは、本当に目に焼き付いていたので、それをもとに何度も練習をした。それがアリシアさんに伝わっているのは、恥ずかしいような、嬉しいような。

「ユーリ君、わたしになら、何戦かやれば1回くらいは勝てるかもしれないね。アリシアはまだ遠いと思うけど。初めて会ったときからは

想像できないくらいだよ。もう目いっぱい褒めちやう！ ユーリ君、えらいぞ〜」

レティさんはそう言いながら抱き着いてくる。

レティさんに初めて会ったときには、こういうことをする人とは思わなかったけど、それだけ心を許してくれているってことかな。だとすると、本当に感激なんだけど。

アリシアさんとレティさんは、それからも、うんと褒めてくれた。褒めてもらえるのは嬉しいけど、もつと頑張つて、アリシアさんたちと一緒に冒険できるようにしたい。そうできたら、きつととても楽しいだろう。

「ユ、ユーリさん、本当にすごかったです。さすが、わたしを助けてくれた人ですねっ」

「あんだ、本当に強くなったのね。間違えるようだわ。でも、あたしも負けやしないんだから」

ユーリヤとカタリナも褒めてくれる。この力で、もつとみんなの力になれるといいな。ぼくにとつて大切な人たちのために、鍛えた力を使えるのなら、どんなに嬉しい事だろう。

「ユーリ君、今日は疲れただろう。もう帰つて、休むといい。今日はユーリ君の成長が見られてうれしいよ。次は、サーシャさんの用意した祝いの会でだね。またね、ユーリ君」

アリシアさんとレティさんはそのまま去っていく。ぼくたちも家へと帰っていった。

アリシアさんとレティさんの弟子に認められたんだよね。今日は本当にいい日だったな。

## 45話 祝い

ぼくは今日、サーシャさんが用意してくれた大会のお祝いへと来ていた。他の人たちはもう先に来ていているらしい。

エルフィール家へとたどり着くと、サーシャさんが出迎えてくれた。前にサーシャさんと出かけた時にぼくが選んだドレスを着ていて、やはり似合っているとまた思った。

ぼくもサーシャさんに買ってもらった服を着ていた。こういう場を想定していたと本人に聞いていたので、これを着ることにしていた。

「ユーリ様、ようこそいらっしやいましたわ。ユーリ様、その衣装はよく似合っておいでですわ。わたくしの目は確かでしたわね。さ、皆様すでに揃っていらっしやいますわ。こちらへどうぞ、ユーリ様」

「今日はこんな場を用意していただいてありがとうございます、サーシャさん。その服も、良く似合っていますよ。自分を褒めたいくらいです」

サーシャさんはぼくの手を引いて、会場へと連れて行ってくれた。会場に着くと、みんなが拍手で出迎えてくれた。

「ユーリ様、今日は親しい皆様とともに、存分に楽しんでいってくださいまし。皆様、今日は、ユーリ様が王都で行われた大会で優勝し、勲章を頂いたことに対する祝いとなっておりますわ。」

しっかりと、ユーリ様をもてなしてくださいまし。皆様、合わせてください。では、今日はユーリ様の記念すべき日ですわ！」

「「おめでとー！」」

まだ何も始まっていないくらいなのに、ぼくはちよつと泣きそうになっていた。

本当に、あの大会に出てよかったし、優勝できてよかった。みんながお祝いしてくれることがすごく嬉しい。

偶然出会った人が多いけれど、その人たちとここまで親しくなれたのだと思うと、なんだか心が温かかった。

「みんな、ありがとう。ぼくが祝ってもらおうという形ではあるけれど、

みんなもしつかり楽しんでいってけると嬉しいな」

「ふふっ、ユーリ様らしい言葉ですわね。今回は、立って食べられるメニューを用意しておりますわ。ですので、皆様と話などしながら、今日のパーティを楽しんでいってくださいまし」

サーシャさんの言葉通り、テーブルには一口で食べられそうなものばかりで、その多くは片手で食べられそうなものだった。

皿も用意されていたが、無くても大抵の料理は食べられそうなくらいだ。

ぼくはいくつか料理を食べながら、それぞれの人のところへ向かっていくことにした。ぼくが動き出すと、サーシャさんもついてきていた。

まずはカタリナのところへ向かった。今日はカタリナもぼくとサーシャさんの送ったドレスを着てくれていた。良く似合っている。カタリナはノーラを抱えており、まだご飯を食べていないようだった。

ぼくが近づくと、ノーラはすぐにぼくの方へやってきて、器用にぼくが持っているご飯を避けてぼくの肩に登っていった。カタリナはそれからご飯を食べ始める。

「サーシャさん、ノーラのご飯って、どこにありますか？　ぼくだけ食べるというのも……」

「こちらにありますわ。ノーラ様、お召し上がりくださいませ」

サーシャさんはノーラのご飯を近くから持ってきて、ノーラに差し出した。ノーラはぼくから器用に降り、すぐにご飯を食べ、すぐにぼくにまた登ってきた。

「ノーラ様は本当に賢いですわね。それでいて、強さもあり、ユーリ様に懐いているというのですから、さぞ頼りになることでしょう。良いペットですわね」

「そうですね。本当に良い出会いだっただと思います。ノーラの主人としてふさわしくありたいものです」

サーシャさんと少し話していると、いくらかご飯を食べて満足した様子のカタリナが、料理を手にこちらへと向かってきた。

「ユーリ、おめでとう。あんたが本当に成長していて、あたしは誇らしいわ。よく頑張ったわね。……なんて顔してるのよ、あんた。そんなにあたしが褒めるのが珍しいわけ？」

カタリナが褒めてきたことというより、カタリナが本当に穏やかな顔をしていて、驚いてしまっていた。

でも、カタリナって本当に美人だし、こういう顔をしていると、完全に見惚れてしまいそうになる。

「いや、そういうことでは無いんだけど……カタリナが祝ってくれるのは本当に嬉しいよ。ぼくがここまで来られたのは、みんなのおかげではあるけど、特にアクアとカタリナのおかげだからね」

「そうでしょうね。昔のあんた、本当に弱くて見ていられないくらいだったもの。ほんと、あたしがいなきやどうなってたことやら」

「本当にね。でも、今ならカタリナに守られるだけじゃなくて、カタリナを守れることもきつとできるから」

カタリナはこちらを見ながら少し笑う。この感じは今の発言を馬鹿にしたわけじゃなくて、ぼくの言葉を肯定してくれているように見える。

「あんたはモンスターの異常発生のもうあたしを守ってくれたでしよ。でも、あんたがあたしを守りたいって言うなら、思う存分守らせてあげてもいいわ」

「わかった。カタリナとずっと一緒に居られるように、頑張るね」

「……はあ。どうせ誰にでもそういう事を言うんでしょうよ、あんたは。ま、いいわ。そろそろ次の人のところに行きなさい。これ以上時間かけると、他の人の分が無くなっちゃうわ」

そう言われてしまったので、カタリナと別れて次の人のところへ向かう。次はユーリヤの予定だ。

「ユーリ様が昔は弱かったというのは、意外ですわね。冒険者になつてすぐのところから、活躍していらっしやっただのに」

「ぼくが強くなれたきっかけはアクア水ですから。契約するまでは、普通の人でしたよ」

「そうでしたのね。契約技というのは使いこなせれば強い物ですが、

使いこなすにも才能や努力が必要なものですわ。強い契約者は、契約するまでにすでに強い人というか、強くなれるほど努力ができる人が多い物ですわ。

ユーリ様は、アクア様の事が大好きですね。でない、アクア水だけではあそこまで強くなれなかつたでしょう」

「そうですね。アクアがくれたものだったから、使いこなしたいと思っただけかもしれません。ただ、アクア水は本当にすごい技ですよ。それこそ、誰にも負けない可能性があるほどに」

「ふふっ、そうですね。そうでなくては、あの大会で優勝などとてもできないでしょう。アクア様は、素晴らしい契約モンスターですわ」

ユーリヤのところにとどり着くまでサーシャさんと話していたが、ユーリヤを見つけたのでユーリヤと話すことにする。ユーリヤもぼくたちの送ったドレスで、本当にきれいだ。

「ユーリヤ、今日はありがとう。ユーリヤがパーティに入ってくれたおかげで、ぼくは本当に成長できたと思う。これからも、一緒にチームに居てほしい」

「あ、当たり前ですよ。それこそ、出ていけと言われようが、ずっと離れませんから。ユーリヤさん、今回は本当におめでとうございませう。さすがはユーリヤさんです」

「改めて、ありがとう。ユーリヤに祝ってもらえて、嬉しいよ」

「ユーリヤさんはそこまでわたしのことを大切に思ってくださいなんですわね。これからも、あなたのユーリヤを大切にしてくださいっ」

ユーリヤはそう言いながら頭を下げる。ぼくにとっては改めて頼まれるようなことでは無いけれど、ちゃんとユーリヤを大切にするといいことはしつかりすると決めた。

「それこそ当たり前だよ。ユーリヤはもう、ぼくにとって、なくてはならない存在なんだから」

「嬉しいですよ、ユーリヤさん。ユーリヤさんこそ、わたしにとって何よりも大切な人なんですからね。ずっと、一緒に居ましょうねっ」

「うん、もちろんだよ。じゃあ、また。次の人に会ってくるよ」

「では、ユーリさん、また。皆さんもユーリさんの事、待っていますから。しつかり祝われていってくださいねっ」

こうしてぼくはユーリヤの次の人に会いに行くことに。次はアリシアさんとレティさんの予定だ。

「わたくしはユーリヤ様の加入には反対でしたが、上手くいつているようで何よりですわ。結果的には、ユーリ様の判断が正解でしたわね。オーバースカイにとって、ユーリヤ様の役割は大きいですわ」

「そうですね。ユーリヤには本当に助けられています。ユーリヤと出会ったのは完全に偶然でしたが、その偶然に感謝しています」

アリシアさんとレティさんのもとへたどり着くと、アリシアさんたちもドレスを着ていた。

いつもは勇ましい雰囲気だけど、今日は大人の女性といった感じだ。こういう姿を見られるのも嬉しいな。

「ユーリ君、よく来たね。今回はおめでとう。ユーリ君は、わたしたちの想像を超える活躍をしてくれた。これから、本当に楽しみだよ」

「うんうん。ユーリ君、わたしたちに着いてきてくれてありがとう。ユーリ君はわたしたちに弟子入りして良かったって思ってくれてることは分かるけど、わたしたちにとっても、ユーリ君たちが弟子入りしてくれたことは本当に良かった事なんだ。これからよろしくね」

「アリシアさん、レティさん、本当にありがとうございます。アリシアさんとレティさんはぼくの憧れですが、憧れるだけじゃなく、必ず隣に立ってみせますから」

「うん。楽しみだよ、その時が。でも、無理はしないでね。ユーリ君たちに何かあると、私たちはとても悲しい。だから、私たちのためだと思って、ね。ユーリ君、これからもよろしくね」

「そうだね、アリシア。ユーリ君、辛い時はわたしたちに頼ってくれていいから、これからも良い弟子と師匠でいようね。大丈夫、あなたならきつともっと強くなれるよ」

2人ともぼくを見る目はとてもやさしいし表情も穏やかだ。ぼくはこの人たちの弟子でいられて本当に良かった。これからもいい関係でいられるように努力しよう。

「はい……！　これからも、よろしくお願いします。アリシアさんたちが師匠でいてくれて、本当に良かったです」

「うん、良く分かっているよ、その気持ちは。さて、皆にはもう会ったかい？　まだなら、次の人のところへ行くといい。その人も、君を待っているよ」

「わかりました。2人とも、また」

次はステラさんのところへ向かう予定だ。ステラさんには、大会でも色々助けられたから、こちらもお礼を言いたいところかな。

「アリシア様とレティ様は、ある意味ではわたくしとオーバースカイを結び付けてくださった恩人ですわ。アリシア様にしろ、レティ様にしろ、しっかりとユーリ様の才能を見抜いていらっしやいましたわね」  
「サーシャさんと出会えたのは、その2人とステラさんのおかげですからね。ぼくも感謝しています」

「ふふっ、ユーリ様ったら。そう思っていただけるのは嬉しいですね。今後とも、長き付き合いのほどを、よろしくお願いしますわ」

ステラさんを見つけると、ステラさんの方からこちらに来てくれた。ステラさんもドレスで、なんだか色っぽい。

こうしていると、ミストの町で奢ってもらったことを思い出すな。

「ユーリ君、本当におめでとうございます。ユーリ君の成長は本当に嬉しいです。これから、ずっと見守っていますからね」

「ステラさん、ありがとうございます。今回も、大変助けられましたから。ステラさんにはお世話になってばかりですね……」

「いいんですよ、ユーリ君。それが、私の役目ですから。ユーリ君が元気な姿を見せてくれるだけで、私は嬉しいんです。体を大切にしてくださいね」

ステラさんはいつもぼくの安全を気にしてくれる。だから、ぼくの帰る場所はステラさんの家だと思えるようになった。これからも、ステラさんに心配をかけ過ぎないようにしよう。

「はい。皆と一緒に居るためにも、ぼくは元気でいたいですから。ステラさんこそ、体を大切にしてください」

「もちろんです。ユーリ君、アクアちゃんとはまだ会っていませんで



したよね。アクアちゃん、あなたが来ることを楽しみにしていますよ」

「わかりました。アクアのところに行ってきますね」

最後はアクアのところだ。アクアがいたから、全部があるんだよね。アクアには全力の感謝を込めないかね。

「ステラ様は、本当にユーリ様を大切にしていらっしゃいますわね。それも、ユーリ様が皆様を大切にしていらっしゃるからですわ。これからも、そうであってくださいませ、ユーリ様」

「もちろんです。みんながあつてのぼくですからね。みんなに貰った分をできるだけ返していきたいですね」

アクアもぼくのあげたドレスを着ていた。アクアは普段できるだけ服を着ようとしなないけど、着飾つてもとてもかわいい。アクアが嫌がらないなら、いろいろと着せてみたいな。

「アクア、今まで本当にありがとう。アクアと出会えて本当に良かった。アクア、これからもよろしくね」

「うん。ユーリ、これからも、ずっと、ずっと、一緒に居よう。アクアも、ユーリと出会えて本当に良かった」

「お互いにそう思ってるんだね。嬉しいよ。ぼくも、ずっとアクアと一緒に居たいな」

「何があつても離れないから。ユーリ、逃げたいと思つてももう遅い」  
そんなことを考えるはずがないのに。ぼくだってアクアとずっと一緒に居たいし、アクアとの出会いは最高の喜びをぼくにくれたから、とても感謝している。

「逃げたいなんて思わないよ。こっちこそ、絶対離さないからね」

「うん。ユーリ、今日は楽しんでいて。アクアも楽しんでいく」

アクアに促されたので、食事を楽しむことにする。少しずつ食べていたけど、まだ足りないんだよね。

食事を楽しんでいると、ずっとぼくのそばに居たサーシャさんがまた近寄ってくる。

「ユーリ様、今日は楽しんでいらっしやいますか？ 望みがあれば、何でも用意いたしますわ。それこそ、わたくし自身でも構いませんのよ

「……？」

「そ、それはちよつと。みんなにもきつと迷惑ですし」

「迷惑でなければ、わたくしをお望みだと思つても？ ユーリ様がわたくしに溺れる機会は、またといたしまじょうか」

溺れるつて言い回しはステラさんも言つてたな。流行っているのだろうか。サーシャさんは普段も積極的だけど、今日はとびきりだな。

でも、溺れるのはちよつとね。それにかまけて、冒険者というみんなの夢をおろそかにするわけにはいかない。

「ふふっ、ユーリ様。今回はわたくしがエスコートいたしますわ。さ、こちらへ」

サーシャさんはぼくの腕を取り、ぼくを引っ張つていきながら色々と食べさせてくれる。

満腹になったころ、サーシャさんがみんなを集め、今日のお開きを宣言した。最後に、みんなから時計が贈られた。絶対に大切にしよう。

今日はいい日だったな。本当に大会で頑張つてきてよかった。

## 裏 サーシャ

ユーリが王都に滞在しているであろうころ、サーシャは今後について考えていた。オーバースカイは冒険者として高い実力を持っている。それをどうエルフィール家の利益とするかであった。

冒険者は、誰にでもなれるということもあり、とてもレベルの低い人間が多く、嫌われ者であることがほとんどだ。

だが、一部の高名な冒険者に限っては、市井の者の憧れであった。エルフィール家には、3代先まで遊んで暮らせるほどの財があったため、金儲けについてはそれほど急いではいなかった。勲章をサーシャがきっかけで手に入れていることもあり、貴族の中での名誉も現在は十分と言えた。

だからこそ、冒険者だ。エルフィール家がオーバースカイの面倒を見ていることが、オーバースカイが大成した時、市井の物の名声として帰ってくる。それがエルフィール家の狙いだった。

カールルの街ならば、エルフィール家の名を知らぬ者はいないが、その外においては、貴族や王族には知られていても、一般の市民はエルフィール家を知らなかった。

そのため、冒険者を利用して知名度を上げることによって、エルフィール家の今後の活動に役立てる。冒険者をサポートするのはそのためだった。

サーシャが組合の受付をしているのもその一環で、サーシャを有望な冒険者のサポートにあてることで、エルフィール家と役立つ冒険者のつながりとするのを目的としていた。それゆえ、サーシャが自ら対応するような冒険者はほとんどいなかった。冒険者として大成できそうな人物など、滅多なことでは現れないのだから。

エルフィール家はアリシアとレティに対して関係の構築を試みていたが、アリシアとレティは基本的に縛られることをよしとせず、エルフィール家とはある程度の距離を置いていた。

だから、ステラがユーリたちを推薦してきたこと、それにアリシアとレティも賛同していたことは渡りに船だった。それほどの者なら

ば、エルフィール家の役に立つ可能性は高い。それゆえ、ユーリたちとの関係構築には力を入れた。

幸い、ユーリたちは冒険者の中では圧倒的に人柄がよい方で、関係の構築に苦戦はしなかった。その上、誰が考えていたよりも素早く実力と実績を上げていくのだから、サーシャはユーリたちを逃がすつもりはなかった。

王都での大会がちょうどいいタイミングとなるだろうことから、サーシャはユーリの対人での実力を見たかった。

だから、一般の者に与える情報をコントロールして、ビッグスライム使いや、ブレンダン兄弟のようなものが軽率な行動をとるように誘導した。

程度の低い人間の動きを、自分が直接何もせずともコントロールする程度の事、サーシャにとっては造作もない事だった。

実力的にそれらに勝てることは明らかだったが、ユーリは特に問題なく対人をこなしていたので、サーシャは王都での大会にユーリを送り込むことにした。

王都での大会は、貴族が自分の抱えている人間のお披露目の場であった。その大会に出たものが、推薦を受けた貴族でないものところへと向かうことは、大きな不義理とされており、ユーリは気づかぬままにエルフィール家から離れることが大きなデメリットを伴う状態となっていた。

他にも、サーシャがユーリたちに贈った服には、ユーリたちは気づいていないが、エルフィール家の紋様が入っており、この者はエルフィール家の庇護下にあるのだと、その服を見たものが察するようにされていた。

ステラは気づくかもしれないが、自分の家に住まわせるくらいなのだから、カーレルの街から離れにくくなったところで問題はないだろうと判断した。

これらの事があるため、エルフィール家が手回しすることなく、オーバースカイがカーレルの街の外で活動することになった場合、大きな逆風が吹くことになったであろう。ステラの事があるため、その

可能性は低いとサーシャは判断していたが、自分たちの手元にオーバースカイを置いておくために、様々な手を尽くしていた。

サーシャはオーバースカイと今後どう付き合っていくか、オーバースカイをどう利用するか、いろいろと検討していた。

外の街で厄介なモンスターを倒させるか、アリシアとレティの弟子として売り込んでいくか、あるいはカーレルの街に外部の人間を招き、オーバースカイの名声を高めるか。その他にもいろいろな考えがあったが、とにかく現状はオーバースカイの名を売ることが第一だろうと判断していた。

オーバースカイは、暴力的とは言い難く、他の人間を積極的に排することもなく、冒険者の中ではとても付き合いやすい存在とみられていた。中でもユーリは義理堅く、恩をしつかり打っておけば、絶対に裏切らないとすら感じられた。サーシャはユーリの事を好ましいと感じていたが、それすらも利用して、ユーリを自分に縛り付けるための行動を重ねていた。

オーバースカイの中心は間違いなくユーリであるから、ユーリを絡めとってしまえば、オーバースカイはエルフィール家から離れられないだろう。そういう打算があった。

考え事を進めていたサーシャは、いったん休憩と考えて水を飲んでいった。

「……ふう。ユーリ様は本当にわたくしを大切な存在と考えている様子。わたくしにとっても大切な存在ではありますが、だからこそ、ユーリ様はわたくしをもっと好ましいと感じるようになるはず。……あら？　そういうえば、水は先ほど飲んだような……？　ですが、他者がこの部屋に入るなどありえないこと。わたくしの勘違いでしょうか？」

サーシャの考えは勘違いではなく、サーシャが飲んだものはアクアの一部であった。とあるきっかけでサーシャに疑念を抱いたアクアが、サーシャの考えを調べるために飲ませたものだ。

アクアはアクア水のようなものをどこにでも出現させることが出来た。それを使って、サーシャのコップに自分の一部を出現させてい

た。

この時点では、アクアにサーシャを乗っ取ろうという考えはなく、単におかしなことをしていないか調べただけだった。

だが、サーシャの考えを読み進めていく中で、完全にアクアの気は変わった。

単にユーリを近くに置いておきたいというだけなら許すつもりでいた。

だが、悪意をもってビッグスライム使いやブレندان兄弟をけしかけたこと、ユーリが外部で活動しようとするのとデメリットが伴う事、それらはアクアの許容範囲外であった。

サーシャが直接指示していないことだから見過ごしていた。アクアは反省をすると同時に、それを今後警戒すべきことの1つだと考えていた。

サーシャを殺してしまうと、モンスターとの契約が解除されてしまう。そのため、サーシャを殺すわけにはいかなかった。

だから、アクアは実験を進めている最中のやり方を試すことにした。

サーシャを直接操作するのではなく、サーシャの思考を、本人が自覚しない状態のまま誘導する。そういう形でサーシャを操ることにした。

サーシャは何も気づかないまま、アクアとユーリにとって都合のいい形の思考をするようになっていった。

アクアはサーシャを操ることにしたが、ユーリなら、きっとサーシャの考えを知ったとしてもサーシャを信じるといふ判断をした。そう考え、あくまで自分はユーリと同じ存在になれない、ただの化け物でしかないと感じた。

だが、化け物なら化け物でいい。化け物らしいやり方で大好きなユーリを守って見せる。アクアはそう決意した。

それから、アクアはユーリの知り合いでない多くの人を乗っ取っていった。ユーリにとって大切な人ならば、できるだけ手出しはしたくない。そう思っただけのもの、それ以外の人間もモンスターもアク

アにとってはどうでもいい存在だったため、カタリナへの罪悪感だけがブレーキだった。

だが、完全にブレーキを失ったアクアは、もはやだれにも手を付けられない存在になっていくことになる。

すでにアクアは、かつてのオメガスライムを撃退した方法では倒せないほどになっていた。

それでも、ユーリの幸せを壊したいわけではなかったアクアは、ユーリの周りの存在をむやみに乗っ取ろうとはしていなかった。彼女たちがユーリを大切にしている限り、手出しはしないと決めていた。ユーリを傷つけるようなことがあれば即座に変わる程度の心構えではあつたが。

それから、サーシャのもとにユーリが王都での大会で優勝したとの知らせが入った。

サーシャは大勢で祝いのパーティを行い、ユーリとエルフィール家の関係をアピールするつもりだったが、アクアが思考に介入したことで、ユーリの知り合いだけを招く会へと変わっていった。

サーシャの中では、ユーリとの関係をよくするために、ユーリが好む選択を取るという判断ということになっていた。

サーシャは本来ならモンスターを簡単には信用しない性格だったが、ユーリがノーラを大切にしていることから、アクアはノーラを受け入れるように思考を誘導した。サーシャの思考の誘導にも慣れたもので、ユーリの好みだろう選択を取らせることは、アクアの思いのままだった。

アクアが意図していたことでは無いが、無意識のうちに、サーシャのユーリへの好意を増幅していた。アクアにとって、ユーリを好きであることは当たり前であつたために、自然と体が動いたようなものだった。サーシャにとつて、ユーリはもともと好ましい人物だったこともあり、サーシャの好意はユーリを他の人より優先するほどのものになっていた。

なので、ユーリに対して好感度を上げようとしていた打算も相まつて、ユーリに対して以前より距離を詰めるようになっていた。

その後、サーシャの開いたユーリの優勝祝いのパーティでは、サーシャはユーリのそばにずっといた。

ユーリと話すたびにユーリの好ましさを感じていたサーシャは、自分がユーリと結ばれることでユーリをエルフィール家につなぎとめることを考えるようになっていた。

アクアの誘導によって、ユーリをあまり束縛しない範囲のものとなっていたが。

アクアが意識しない範囲でもアクアの感情の影響を受けていたサーシャは、アクアの印象に残っていた、ユーリを溺れさせるというセリフをつい使ってしまった。

サーシャの中に大きな羞恥心が生まれていたが、サーシャにはユーリがそれを悪く思っていないように見え、ひそかに興奮していた。

ユーリと自分がエルフィール家を盛り立てる。それもいいかもしれない。あるいは、エルフィール家の力でユーリをさらに飛躍させるのもいい。サーシャはユーリとの将来を強く考えていた。



## 2章の登場人物

ユーリ

カーレルの街で冒険者チーム、オーバースカイとして活動。本人は気が付いていないが、好意にとても弱く、軽く恩を売っただけで好感度が大きく上がる。自分への悪意はまるで気にかけないが、大切な人とユーリが感じている相手への悪意には敏感。特にアクアとカタリナへの悪意は地雷と言っている。

水刃と呼ばれることになり、尊敬するアリシアとのつながりを感じて気に入った。短い期間で大切な人が多くできたことに対して、喜びと戸惑いを感じている。

アクア

ユーリのペット1号。ユーリという時間だけが幸せで、いつでもどこでもユーリと一緒に居たい。ユーリにとって大切な人に対しては多少とはいえ気を使うが、ユーリを傷つけようとした時点でそれをやめる。ユーリと同じ人間になりたいという願望があったが、自分は人間とは違うと思い知り、化け物らしくいようと決意。

カタリナ

ユーリの幼馴染。自分の乗っ取ったアクアの事を恨みながらも、どこかで信じようとしている。ユーリの事を考えている時だけ、自分の状況を忘れることが出来るため、ほとんどユーリの事しか考えていない。ユーリの周りの女たちをいろいろな意味でも警戒している。

ステラ

ユーリとステラの同居人。ユーリに渡された指輪はじつは家宝で、自分がそれを使えないことに絶望していた。だが、他の人が使っているとところを見るだけでもいいと考え、指輪を渡す相手を探すことにする。優しいと皆に思われているが、隠れS。

サーシャ

エルフィール家の娘で、カーレル組合の受付もしている。金髪を後ろでたたんでいて、かわいらしい印象が強い。受付の仕事は、基本的にただの冒険者相手には行っておらず、エルフィール家にとって役立

つかもしれない相手だけ面倒を見ている。オーバースカイという有望株が見つかったため、最近はそれにかかりきり。

ユーリに対して好意を持っていることは事実だが、それはそれとして、いかにユーリをエルフィール家の役に立てるかを考えている。

アリシア

オーバースカイの面倒を見ており、師匠的存在。冒険者の中では最強と言っているが、それでも最強格のモンスターには勝てない。アクアとオリヴィエを除いた2章までの登場人物全てを相手にしても勝てる。同格の冒険者と支えあうことを夢見ているが、今のところ叶っていない。レティは大切なパートナーだが、自身の方が明確に強いため、夢の対象ではない。

レティ

アリシアとともにオーバースカイの面倒を見ている、アリシアと契約しているハーピー。口で言うほどユーリたちに期待していなかったが、ユーリが自分たちを慕う姿を見て絆される。ユーリの事は冒険者仲間というより、弟のような存在としてみている。

ユーリヤ

ユーリを慕う、ユーリの冒険者仲間。銀髪に赤い目をしている。実はアクアが作り出した存在で、ユーリの好みとアクアの好みを合わせて作られた。装備はアクアが調達している。ユーリは今まで会ったことのない美人と評したが、他のヒロインの方が美人という人も多いだろう。

ミーナ

ユーリのライバル。ユーリに勝つために全力で修業し、ヴァネアとも契約した。契約技は五感の鋭敏化と周囲の熱探知。ユーリに負けたことはとても悔しがっていたが、ユーリというライバルを得た喜びも大きい。

ヴァネア

ミーナの契約モンスターであるラミア。褐色で黒髪。自分のことをお姉さんという。ミーナの剣技に惚れてミーナと契約した。ユーリとミーナの偶然の出会いを見て、ユーリとミーナをもっと近づけよ

うと計画する。

オリヴィエ

ユーリたちが住む国アードラの王女。アードラを建国したアードルハイドの再来と言われていて、綺麗な金髪を長く伸ばしている。自称人類最強。現在の登場人物で、アクアを除いたすべてを同時に相手にして勝てるほど強い。

ビッグスライム使い

ビッグスライムをテイムしているが、自身もビッグスライムもまるで弱く、くすぶっていた。アクアが殺したとユーリが知ったとしても、そこまで悪くは思われない。

ブレンダン兄弟

本当は兄弟ではないが、とても意気投合して常に2人で行動していた。暴力で他者から金や物を手に入れる生活を送っていた。サーシャに絡もうとしたが、死なない程度に生命力を吸い上げられ、それからサーシャをととても恐れている。それでもユーリたちに絡む愚者。

アルル

王都での大会でユーリと戦ったアルラウネ。ユーリの決勝戦で、とても熱を入れて応援していた。ユーリが優勝した時は、それはそれは大喜びした。

オリアス

王都での大会でユーリと戦った。アリシアを昔に口説いたが袖にされ、力づくに出ようとしてぼろ雑巾のようにされる。アリシアにとっては有象無象の1人で、名前と顔とやったことを全部説明しても恐らく思い出せない。

### 3章 頂へと歩むオーバースカイ

#### 46話 異能

ぼくたちは、いつものようにマナナの森でモンスター退治を行っていた。今日はモンスターが少なく、予定と違うので、警戒を強めていた。

しばらくマナナの森を探索していたが、特に何もなかった。帰る準備を始めようとしたとき、突然モンスターが周囲に大量に現れた。ぼくたちはモンスターに完全に囲まれてしまっていた。

どういふことだ。索敵は常にしていたし、出会ったモンスターもすべて倒していた。何より、これほどのモンスターがどうやって隠れていたというんだ。

まさか、本当にモンスターというのは何も無いところから発生するのか？

いや、考察より先に、何とか退路を確保しないと。

「みんな、カーレルの街の方を突破しよう！」

隙間なく囲まれていたので、とにかく一方向に集中して、どうにか囲まれている状況から出たかった。囲まれてさえいなければ、倒せない数ではなかったから、一度脱出してしまえば、逃げるにしろ、倒すにしろ、うまく出来ると考えていた。

けれど、ある程度進んだころ、他の方向から寄ってくるモンスターが来る前に突破しきれない速度だと感じて、ぼくはとても焦っていた。

アリシアさんたちがいればどうとでもなるだろう状況だったが、今はいいない。1対1体は強いモンスターではないため、倒すこと自体は出来ているが、手数が足りない。

アリシアさんたちほどとは言わないまでも、ぼくたちの足手まといにならない人があと1人いれば足りるのに！

でも、そんな奇跡に賭けるわけにもいかず、何か手がないか考えながらモンスターを倒し続けていた。

ぼく1人で逃げるだけなら簡単なことだが、そんなことができないわけがない。ぼく1人だけ生き残って何になるというんだ。ぼくは必死にモンスターを倒し続けるけど、状況は悪くなるばかりであった。「あんた、1人で逃げなさい！ あんたが助けを呼んでくれれば、みんな助かるのよ！」

「そうです！ ユーリさん、急いでください！ わたしたちなら、何とか耐えて見せますから！」

「カタリナもユーリヤもアクアが守る。ユーリ、心配しなくていい」みんながぼくを逃がすために嘘をついているというのはすぐに分かった。逃げるのがアリシアさんだったとしても、カーレルの街に着くまで耐えられるかすら怪しい状況なのに、ぼくが間に合うはずがなかった。

みんなを見捨てて逃げるわけにはいかない。でも、この状況をどうやったら切り抜けられる。

ぼくは必死に考えながら、何とかアクア水でみんなに攻撃が当たらないよう防御していた。

時間稼ぎだけならなんとかできると思う。でも、どうにかして誰かに伝える手段がないと、じり貧になって終わるだけだ。

他の誰かがここに来るといふ期待などできないし、来たとして戦力になる人かどうかは怪しい。

ぼくは戦い方を時間稼ぎに切り替え、何か思いつくまで耐えるつもりでいた。

「そこの方、手助けします……！ そこからあまり動かないでください……」

突然女の人のような声が聞こえた。何か攻撃してくることはすぐに分かったので、巻き込まれないように、指示を守ることにした。

すると、モンスターの1部が吹き飛ばされて、ぼくたちが頑張れば脱出できそうな隙ができた。ぼくたちはそれに合わせてモンスターの群れから脱出し、1方向にモンスターがいるという状況になったので、アクア水で壁を張り、動きを制限してから、正面の敵から順に倒していった。

先ほどの女の人も手伝ってくれていたので、ずいぶん楽にモンスターを倒しきることが出来た。

お礼を言おうと、その人に向かい合う。戦っていた時から思っていたが、契約技らしきものを使っているのに、モンスターを連れていない。どういう事だろう。

それに、こんな人はカーレルの街にいるのだろうか。他の街からこのマナナの森に？

いや、そんなことはどうでもいい。助けてくれたんだから、まずはお礼だ。

「あの、先ほどはありがとうございます。おかげで命拾いしました。あなたはぼくたちの恩人です。できる範囲にはなりますが、何かお礼をしたいと思えますから、何かあれば言ってくださいね。あ、ぼくはユーリと言います。繰り返しになりますが、本当にありがとうございますました」

「ええ。あたしたちみんな、あなたに助けられちゃったわね。ありがとう。あたしはカタリナ。よろしくね」

「あ、ありがとうございます。親切な方なんですわね。わたしはユーリヤと言います。ユーリさんを助けてくれて、本当にありがとうございますましたっ」

「うん。ユーリを助けてくれてありがとう。アクアはアクア。ユーリのペット。よろしく」

「みなさん、お礼を言ってくださるんですね……お礼ですが、まずは近くの街へ連れて行っていただけませんか……あ、わたしはフィーナと言います……みなさん、よろしく願います……」

フィーナさんは腰まである茶髪の、物静かそうな雰囲気の女の子だった。ぼくたちと近い年に見える。

ノーラはフィーナさんの方をあまり見ず、ぼくにずっとひつついていた。

フィーナさんの契約技らしきものは気になったが、今聞くようなことでもない判断し、フィーナさんをカーレルの街へと連れていくことにする。

「フィーナさん、ぼくたちが拠点にしているカーレルの街という街が近くにありません。案内しますから、一緒に来てください」

「わかりました……ユーリさん、よろしく願います……」

「フィーナさん、すみませんが、冒険者組合への報告に付き合ってもらえませんか。フィーナさんがいれば、スムーズに進むと思いますので」

「かまいません、ユーリさん……わたしでお役に立てるなら、何でも言うてください……」

「それはこちらのセリフですよ。フィーナさんには今回助けられましてからね。その恩の分くらいは働きますよ」

「そうね。あたしたちは恩知らずじゃないから、滅茶苦茶言わない限りは、あなたの力になるわよ」

「そうですっ。みなさん、あなたに助けられたんですからっ。フィーナさん、ユーリさんは頼りになる方ですから、安心してくださいっ」

ぼくたちに向き合うフィーナさんの表情は暗い物だ。恩人がこんな顔をしていると心配になる。何か悩み事があるのなら、できる限り解決してあげたい。

「わかりました……ですが、わたしはあまり人と関わるつもりはありませんから……みんな、わたしを恐れていってしまうだけなんですから……」

「ぼくがフィーナさんを恐れることなんてありませんよ。ぼくたちに攻撃してきたり、何かひどい犯罪を犯しているなら話は別ですけど。関わるのが嫌なら無理は言いませんけど、ぼくはフィーナさんと、もつと仲良くなりたいです」

「ユーリさん……わたしの力が、おかしなものだと知ってもですか……？」

やっぱり、あの力は契約技じゃないのか。

でも、フィーナさんは人と関わりたくないといいながら、ぼくたちを助けてくれた人だ。何か人から外れた力を持っているくらいの事なら、フィーナさんを恐れる理由にはならなかった。

「契約技じゃないんですね、その力。でも、関係ありませんよ。フィー

ナさんはぼくたちを助けてくれた優しい人です。だから、仲良くしたいんです。あなたが何者であれ、その気持ちは変わりませんよ」

「そうですか……今は、その言葉を信じます……ユーリさん、短い間かもしれませんが、よろしくお願ひします……他の皆さんも……」

「よろしくね、フィーナさん」

「ええ、よろしく」

「よ、よろしくお願ひしますっ、フィーナさん」

「フィーナ、よろしく」

ノーラも鳴き声であいさつしている感じだった。

それからぼくたちはフィーナさんを連れて組合へと戻り、今回の件をサーシャさんに説明する。

「なるほど、モンスターが突然、ということですね。良かったですわ。皆様がご無事で。ユーリ様、わたくしを残していなくなるようなこと、しないでくださいまし……」

サーシャさんはさすがのような顔をこちらに向けてくる。この人を悲しませないためにも、もつと強くなってみんなを守ってぼくも生き残れるようにしないと。

「今回はちよつと危なかったですけど、今回みたいな事態には対応できるようにしておくつもりです。ぼくに力を貸してくれるみんなのためにも、ぼくはみんなと絶対生き延びて見せますから」

「そうしてくださいまし、ユーリ様。フィーナ様とおっしゃいましたわね。ユーリ様方を助けて下さり、大変感謝しておりますわ。何でもとはいきませんが、それなりに便宜を図ることは可能ですわ。何かありましたら、言ってくださいまし」

その言葉を受けて、フィーナさんは少しの間思案する。先ほどよりは明るいけど、まだ暗い顔をしている。悩み事なら解決して、フィーナさんの笑顔が見られるといいな。

「そうですね……ユーリさんたちと、チームを組むことは可能でしょうか。ユーリさん、今回のお礼は、それでどうでしょう……」

「ぼくは構いませんけど。そんなことで良いんですか？」

「はい……ユーリさんが、わたしを受け入れてくれる人ならば、ユーリ



さんの力になることが望みです。ですから、一度私と組んでいただけ  
ないでしょうか……」

「ぼくは歓迎しますよ。でも、みんなにも確認しておかないと。どう  
かな？」

ぼくはみんなに確認する。みんなの表情は明るいから、きつと受け  
入れてくれると思う。

「あたしは別にいいわよ。それなら、ステラさんの家に住めるかどう  
かも、確認しておかなくちゃね」

「わ、わたしも歓迎しますっ。ユーリさんの力になってくれる人は、何  
人いてもいいと思いますっ」

「アクアも構わない。ユーリをちゃんと助けてくれるなら」

「ここで断ったら、わたくしが悪者ですわね。構いませんわ。アリシ  
ア様とレティ様にも、このことは伝えておきますわ」

「そういう事だから、フィーナさん、よろしくね。頼りにしているし、  
頼りにしてくれたら嬉しいな」

「みなさん、ありがとうございます……これから、よろしくお願いしま  
す……」

それから、ステラさんの家に住ませる許可も得て、フィーナさんと  
親睦を深めるために2人で話をすることにした。

「フィーナさん、男と2人で悪いとは思うけど、いきなりみんなと話す  
のも難しそうだったから、まずはぼくと話してほしい。フィーナさん  
をチームに加えるうえで聞いておきたいんだけど、フィーナさんはど  
んなことが出来るの？」

「いえ、配慮してくれてありがとうございます……わたしのできる事  
は、衝撃を飛ばすことです。上手くやれば、固いモンスターでも一撃  
で葬ることが出来るんです……」

話を聞く限りだと、とても強い能力に思える。アクア水で防御する  
ことはできるだろうか。それが出来ると出来ないのでは、運用の仕方  
が変わってくるだろうから、1度試してもらおう。

「とても強い能力なんですね。だったら、フィーナさんに頼る機会も  
多いかもしれませんね。他に、運動なんかは、どれくらい出来ますか

？」

「普通の人よりはかなり出来る方だと思います……衝撃の技で、大抵の敵は倒せるので、敵と距離を取ることが主ですが……」

今の説明でははつきりとは分からないけど、顔を見る感じだと身体能力の方も嫌っているように見えるから、あまり突っ込んだ質問をすることは気が引ける。

「なるほど。自分で敵と距離を取れるなら、だいぶ戦術の幅が広がります。連携の練習はしておきたいですけど、フィーナさんはぼくたちにとつて、とてもいい仲間になってくれる気がします」

「ありがとうございます……ユーリさん、これからよろしくお願いします……きつと、あなたの力になってみせますから、わたしの事、化け物だと思わないでください……」

フィーナさんはとても必死そうな顔をしている。ぼくはフィーナさんがこれまでに何度も化け物扱いされているのだろうと感じて、絶対にこの人を受け入れると決めた。

「大丈夫です。フィーナさんみたいな優しい人を化け物だなんて、思いません。」

それに、仮に化け物だったとしても、それでフィーナさんを敵だと思ふようなこと、絶対にしないって約束します。

だから、ぼくたちと仲間になってください。そして、ぼくにフィーナさんの力にならせてください」

「ユーリさん……その言葉、絶対に嘘にしないでください。そうである限り、どんなことをしてでも、あなたの力になりますから……よろしく願います……」

「はい。フィーナさん、これからよろしく願います。ぼくたちの仲間として、末永い関係にしましょうね」

そう言つてぼくはフィーナさんに握手を求める。フィーナさんはぼくの手を握り返してくれた。

「人の手つて、暖かいんですね……ユーリさん、また何度でも、この手を繋ぎましょうね」

「もちろん。フィーナさんが望むなら、何度だって、いつだって構いま

せんよ。あ、でも、戦闘中は勘弁してほしいかもしれないね」

「ふふ……ユーリさん。わたしはあなたを信じます。信じたいです。だから、きつと、わたしをずっと必要としてください……」

「はい。ぼくもフィーナさんを信じます。フィーナさんを頼りにするし、頼りにされるように頑張りますから」

フィーナさんはぼくと出会ってから初めて微笑んでくれた。またこんな顔が見られるように頑張ろう。

フィーナさんと言う新たな仲間も加わったことだから、ぼくたちはもつと強くなれるはずだ。

みんなを失わなくて済むように、強くなるんだ。そして、みんなとずっと一緒にいてみせる。

## 47話 新たな仲間

ぼくたちは、フィーナさんとの連携の確認のために何日間か使うことにしていた。

まずは、モンスターがいなくてここで動きの確認をしてから、モンスターとの戦いを試してみるつもりでいた。アリシアさんたちがいないので、万が一の際のフォローには入ってもらえないから、できるだけ慎重に行くということにしていた。

まずは、フィーナさんがどれくらい動けるかを確認するつもりだった。足の速さや体力などを確認し、能力に頼らずにどれくらい出来るか確かめて、それをもとにフィーナさんのポジションなどを考える予定だ。

「フィーナさん、まずは走る速さや、どれだけ長く走れるかを確認したいと思います。いいですか？」

「はい……ですが、わたしはきつと問題なく動けるはずです……どれくらい走っていればいいですか？」

「限界がどれくらいか見たいです。フィーナさんに無理をさせないためにも、安全なうちに確認できることは確認しておきたいですからね」

「わかりました……では、全力で行きます……ユーリさん、約束、忘れないでくださいね……」

約束。フィーナさんを化け物と思わないし、敵とも思わないということだろう。つまり、フィーナさんは身体能力も高いということかもしれない。

たとえ音速を超えるくらいだったところで、それを使ってぼくたちを傷つけようとしなければなら、フィーナさんを嫌いになるわけなんて無いんだけど、どうやって信じてもらおうかな。

少しだけ考え事していると、フィーナさんが走り出す。

かなり速いな。アリシアさん程ではないにしろ、ミーナやぼくの全力くらいはあるかもしれない。

契約技を持っていないのにこれか。本当にすごい人だな、フィーナ

さん。

そう軽く考えていたが、何より驚くべきだったのは、その体力だった。1時間ほど同じ速度で走っていたにもかかわらず、息一つ乱していない。これはとんでもないな。

でも、ぼくたちの体力が尽きる方が早そうなくらいだし、一緒にチームを組む上での心配事は1つ減ったな。

むしろ、ぼくがフィーナさんの足手まといにならないか心配しなくちゃいけない位かもしれない。

ぼくはフィーナさん呼び止め、もう十分だと言う。フィーナさんは少しおびえたような様子でぼくに話しかけてきた。

「ユーリさん、どうでしたでしょうか……？ ユーリさんとチームを組んでも、問題ないでしょうか……？」

「問題ないどころか、ぼくより凄いい位かもしれないです。フィーナさんの足を引っ張ってしまうかもしれませんが、それでもぼくたちとチームを組んでくれますか？ ぼくはフィーナさんが一緒に居られると心強いです」

「そうかもね。ま、あたしが足を引っ張るなんて事、あるわけないけどね」

「フィ、フィーナさんが一緒に居てくれたら、ユーリさんももっと活躍できますよっ」

「フィーナ、ユーリの力になってあげて」

「みなさん……ユーリさん、仮に足を引っ張ることになっても構いません。わたしは、みなさんと一緒に居たい……」

フィーナさんはそう言ってくれるけど、ぼくは足を引っ張るつもりはない。せつかく仲間になるのだから、フィーナさんにはお互いを支えあう喜びを知ってもらおう。

「歓迎しますよ、フィーナさん。これから、一緒に頑張りましょう」

「フィーナで構いません、ユーリさん……ユーリさんには、そう呼んでもらいたいです……」

「わかったよ、フィーナ。ぼくの事もユーリでいいよ」

「いえ、ユーリさんと呼ばせてください……ユーリさん、わたしは全力

であなたたちの力になります……ですから、ずっとわたしを離さない  
てくださいね……？」

フィーナはとても真剣な表情でそう言う。でも、フィーナの心配する  
ようなことにはさせない。ぼくにとつて、もうすでにフィーナは笑  
顔でいてほしい人なんだ。

「もちろんだよ、フィーナ。これからいっぱい頼りにすると思うけど、  
つらかったら言うてね。ぼくはフィーナを頼りにしたいけど、つらい  
思いをさせたいわけじゃないから」

「そう言うてくださるだけで十分です……それで、他にわたしの力を  
どれくらい確認しますか……？」

「では、衝撃の力を見せてください。まずは、ぼくが水を出しますか  
ら、それに向けて撃つてくれますか？」

「わかりました……では、いきます……」

フィーナの衝撃の力は、結構細かいところまで狙えるようだった。  
ただ、アクア水でうまく衝撃を逸らせば、ぼくには衝撃が届かない  
ということも分かった。

だとすると、通じる相手は限定されるかもしれない。単純に硬い相  
手なら大丈夫そんな感じだけど、武術の達人のような、衝撃をうまく  
いなすことが出来る相手だと、真正面から撃つても駄目だろう。

そうになると、タイミングをずらすとかが必要になってくるよね。

まあ、目には見えないものだから、対処できる相手は相当限られる  
だろうけど。

でも、そこで気を抜いてフィーナに何かあつてはいけないから、今  
のうちに対策できるならしておきたい。まあそれは、衝撃の力の性能  
をもっと確認してからかな。

「フィーナ、その力、撃つ速度を変えることはできる？」

「試してみます……」

フィーナは何度か衝撃の力を撃つうちに、衝撃の速度を変えること  
が出来るようになった。これなら、タイミングをずらすことは出来そ  
うだな。

他にも、アクア水を通せば、ぼくの方で操作できることも分かった。

フィーナと協力することで、いろいろできるかもしれない。

「今度は、衝撃の出る場所を操作できるか確かめてもらえる？」

「わかりました……」

フィーナさんは初めは同じ場所からしか衝撃を出せていなかったが、すぐに結構自在に発射点を調節できるようになった。壁の奥からでも撃てるようになった時は、さすがに驚いた。

いや、ぼくもできるんだけどね。結構ぼくは苦労したから、すぐにはできないと思っていた。

本当にフィーナはすごい人だ。こんな人が仲間になつてくれるんだから、フィーナの期待を裏切らないようにしないと。ぼくはフィーナを裏切らないと改めて誓った。

それから、いろいろとフィーナの能力の限界を確かめていた。

結構遠くまで撃てるし、速度もかなり自由で、撃つ地点も選べる。

欠点らしい欠点と言えば、一度撃つてしまえば、方向を変えられないということだったが、だからこそ、ぼくが力になれるとも言える。

フィーナさんの衝撃の向きを変えたり、速度を変えたりすることがぼくには出来た。

フィーナの力は、固い相手でも通じることが間違いないから、固定砲台としてだけでも相当な実力だろう。カタリナのお株を奪ってしまいかねないほどだと思つたが、弓矢は弓矢で火をつけたり、毒を塗ったり、フィーナにできない事はできる。

ぼくとカタリナ次第ではあるが、カタリナの役目を奪われないように、工夫も必要かもしれない。

まあ、単純に撃つ地点が2つになったり、手数が増やせるというだけでなく、役目が無くなることは無いとは思うのだけれど。こういう形で不和が出て欲しくないし、先回りしておくに越したことはないよね。

まあ、急いだ方が良いけれど、今すぐに考えることでは無いだろう。まずは、フィーナの立ち回りだよ。

ぼくの想定としては、アクアが近距離で敵を足止めして、ノーラが前衛で攻撃、ぼくとユーリヤが中距離から近距離まで状況によって変

える、カタリナとフィーナは遠距離から攻撃、というものだった。

まずは、ぼくたちだけで動きの確認だ。いろいろと試していたが、カタリナは隠密に優れているから、不意打ちなんかもできる感じだけれど、フィーナはそういうことは苦手みたいだった。

経験が少ないということは見て取れたので、今後伸びるところかもしれないけど、現状はぼくとユーリヤのどちらかのカバーが入れられる位置で動いてもらうことになるかな。

結局、今日のところは動きの確認で終わった。予定通りではあるが、中々考えることが多くて大変だ。

フィーナはとても頼りになる戦力になってくれるだろうけど、フィーナに頼ってばかりという訳にはいかないからね。

カタリナの火力を上げる手段があると、一気に楽になるんだけど。現状でのカタリナの問題として、弓が刺さらないとどうにもならないということがある。弓に工夫することで、弓が刺さらない相手にも何かできるといいんだけど。

ただ、そういうことをしようとすると、とたんにお金が吹き飛んでいくんだよね。悩ましいところだ。

そして、フィーナの力の使い道は、基本的には攻撃で良いんだろうけど、工夫の余地がないかは考えておきたい。射線をあける必要がない遠距離攻撃というだけでも、とても強いとは思うんだけどね。

ぼくがアクア水を通して他の物を操れるように、衝撃で他の物に干渉して何かできるだろうか。

ぱっと思いつくことだと、地面を吹き飛ばして、目くらましとかで邪魔をすることかな？ それなら、ユーリヤとの協力の余地もあるかもしれない。罫を仕掛けるうえでも役立つ気がする。

それから色々考察をしていたが、これという答えは見つからなかった。単純に使うだけでも、フィーナの能力は強いと思う。

だけど、せっかく仲間になってくれたんだから、活躍できるようにしたいし、楽ができそうなどころでは楽をしてほしい。今後の課題だな。

次の日。モンスターを相手に立ち回りを確認していた。



ファイナの能力は、大勢が相手でまとまっていると特に強いということがその時わかった。

結構な広範囲にまで広げられるので、一気にぶつけることが出来るのだ。

ぼくたちでモンスターを誘導して、ファイナの高火力で仕留める。これまでのぼくたちには出来なかった立ち回りだ。選択肢が明確に増えたので、ファイナが仲間になってくれて良かったとはつきり言えた。

もちろん、ファイナの人柄は好ましいと思っているし、ファイナの力が強いことも分かっていた。

でも、チームとしてしっかり活躍できると確信できたのはこの時だった。ファイナに頼りきりではいけないし、ファイナが足手まといでもいけなかった。

だけど、ぼくたちならいいチームでいられる。そう思えた。

カタリナはファイナと役割が被ることを気にしていたようで、複数同時に弓を撃つとか、連射するとかの技能を使っていた。同士討ちにならないように気を使っていると前から言っていたように、立ち回りを少し変えていた。

ぼくたちが足止めをして、その隙にカタリナが撃つというのがこれまでの基本的な立ち回りだったが、自分で敵を誘導したり、単独行動をしたりということもしていた。

個人的には、単独行動は心配になるけど、カタリナは相手して良い敵の見極めがともうまかった。

足の速さを考えたり、木の上とか、遮蔽物があるところとかだと安全になる相手を選んだり、ちゃんと弓が当たらなかったとしてもどうにかできる範囲での行動にとどめていたので、流石カタリナだと思っていた。

もともとアクア水を手に入れる前のぼくとは比較にならないくらい強かったからな、カタリナは。

他にも、ファイナはみんなに必要とされることがとても喜ばしいようで、頼りにされるたびに嬉しそうにしていた。

フィーナの過去はなんとなく想像がつくような気がするから、うまくフィーナが幸せに感じられるように立ち回りたいものだ。フィーナみたいな優しい人が傷つくなんて、嫌だからね。

「フィーナ、ぼくたち、中々いいチームになりそうじゃない？ ぼくたちがフィーナの力になることもできるし、フィーナがぼくたちの力になってくれることもある。ちょうど支えあえるいい関係だと思うんだよね」

「はい……！ とともに支えあえるということが、こんなに幸せだなんて知りませんでした。ユーリさん、あなたと出会えて本当に良かった……」

フィーナは今はとても明るい顔だ。この顔が当たり前になるように、頑張っている。

「フィーナがぼくたちを助けてくれたからだよ。フィーナさんが優しい人だから、ぼくたちもフィーナを受け入れることが出来たんだ。フィーナと出会えて、ぼくも幸せだよ」

「そうね。フィーナさん、もうあなたは立派なあたしたちの仲間よ。あたしだって、フィーナさんとお会えてよかったわ」

「そ、そうですよっ。フィーナさん、よろしくお願いしますねっ」  
「フィーナ、よろしく」

ノーラは毛づくろいをしていて、フィーナをあまり気にしていないように見える。フィーナ、気分を悪くしてないかな。

「ふふ……ノーラさんも、よろしくお願いします。もちろん、アクアさん、カタリナさん、ユーリヤさんも。そして、ユーリさんも。ずっと、一緒ですよ……」

こうしてフィーナはぼくたちの仲間として活動することになった。ノーラもみんなに馴染んでいるみたいだし、人数は増えたけど、問題はなさそうだ。新しいオーバースカイは、もっと強くなれるはずだ。

## 48話 連携

ぼくたちは、今日アリシアさんたちにフィーナを紹介するつもりだった。

今日は久しぶりのアリシアさんたちとの活動だけど、もしかしたら紹介を中心に1日潰れるかもしれないという覚悟はしていた。

アリシアさんたちにいろいろ教えてもらいたい気持ちはあるけど、こういう事をおろそかにするのは良くないよね。

結局のところチームを組む以上、人間関係という物は切っても切れないんだから。

まあ、1日潰れるというのは本当に最悪の場合で、顔合わせだけで終わる可能性も十分にあるとは思うけど。

フィーナの能力は特殊だから、いろいろな可能性は想定しておいた方が良いかな。

さすがにアリシアさんたちがフィーナを化け物扱いすることはないだろうけど、うっかりフィーナの繊細な部分に触れてしまいかねなくもないかもと、気を付けておきたい。

フィーナとアリシアさんたちの関係がうまくいかなかったら、ぼくは本当に困ってしまう。

どちらも大切な人だけに、どちらかを切り捨てないといけない事態は避けたかった。

「フィーナ、今日はぼくたちの師匠をしてきている、アリシアさんとレイティさんに会ってもらおう。ぼくたちの戦いとか、冒険者としての活動のいろいろな面倒を見てもらっているから、フィーナの能力についても説明しておきたいんだけど、いいかな?」

「ユーリさんが信頼できる方だというなら、構いません……ですが、その方たちが何と言おうと、わたしはユーリさんのそばを離れませんから……」

「大丈夫だとは思っているけど、万が一うまくいかななくても、フィーナを放り出すことはしないよ。もうぼくにとつてフィーナは大切な仲間なんだ。アリシアさんたちの意見に逆らっても、きみをパーティ

の一員として扱うことはもう決めたんだ」

「それは安心できます……ですが、ユーリさんのために、その人たちとうまくいくよう、頑張ります……」

それからしばらくして、アリシアさんたちと合流した。アリシアさんたちには、新しいメンバーが加わったことはサーシャさんから説明してもらっているらしい。フィーナさんを見つけたアリシアさんは、納得した様子でフィーナさんの姿を見ている。

「なるほど。君がフィーナさんか。話は聞いているよ。ユーリ君たちが危ないところを助けてくれたみたいだね。」

まずは、そこにお礼を言っておこうかな。不測の事態は起こることとはいえ、私が聞いた話では本当に大変だったみたいだし、そこまでのイレギュラーは滅多にない。

ユーリ君たちなら大丈夫だと思っていたけど、この近くでそんなことがあるとはね。ユーリ君たちが無事でいてくれて、本当に良かったよ。フィーナさん、ユーリ君たちを助けてくれてありがとう。ユーリ君たちは私たちにとっても、大切な存在なんだ。本当に良かったよ」「本当にありがとうね、フィーナさん。ユーリ君たちに何かあったら、本当に悲しいところだったから、フィーナさんには本当に感謝してるよ。わたしたちのいない時にそんなことがあるなんてね。本当に危なかったかも」

アリシアさんたちに心配をかけたかもしれないことは申し訳ないけど、アリシアさんたちがぼくたちの事を大切に思ってくれていることがよく分かってとても嬉しい。

「いえ……助けたのは事実ですが、ユーリさんたちはそれ以上の物をくれましたから……ユーリさんたちと出会えたことは、本当に幸運でした……」

「良い出会いだったみたいだね、ユーリ君。それで、フィーナさんはオーバースカイの中で、どういう立ち位置にするつもりかな？」

「後衛として、威力の高い攻撃を撃ってもらおう、という感じですね。ぼくたちにとって、単純に防御力が高い相手はやりづらい相手の筆頭といっても良かったですし、本当にいい人が入ってくれたと思います」

「そうだね。アクア水はからめ手としては強いけど、単純な火力としては低い方だったし、カタリナさんの弓や、ユーリヤさんの罠なんかも、高威力という訳ではなかったからね。確かにいい人が入ったという評価になるのは分かる。」

私たちも、風刃が通じない相手に対してどうするかが悩み所だけど、私とレティだけなら、逃げることは簡単だからね。そうやって私たちは生き延びてきたわけだけど、ユーリ君たちに同じことをするのは難しいだろうし、優秀なパーティメンバーが増えるというのはいいことだよ」

本当にそう思う。逃げることも選択肢の1つだとは思っているけど、ぼくたちはモンスターより早く走れることの方が少ないだろうし、気づかれた後だと逃げることは難しい。

できるだけ勝てる状況を作ってから挑みたいと思っているけど、モンスターが急に発生することがあるのは、本当に身に染みている。

いざという時の手段が増えるだけで、本当にありがたいんだ。

「優秀なパーティメンバーと言えば、ノーラもとても強いんですよ。動きも素早いし、攻撃の威力も高い。前衛としては、かなり優秀だと思います」

ノーラはぼくのセリフを聞いて自慢げな顔をしている。ノーラは本当に賢いし、強いし、可愛いし、最高のペットと言っている。

アクアと並んで、もう絶対に手放せない存在だ。アクアとノーラと一緒に眠ることは、最高の贅沢だと思う。

そういえば、ノーラは進化するのだろうか。今でもとても強いから、どんなことになるのか恐ろしい気がするくらいだ。

人型になってくれるのも嬉しいけど、猫型のままもいいよね。どっちでも、きつと最高というのは変わらないな。

いつ進化するのかも、そもそも進化するのかもわからないけど、楽しみな気持ちを抑えきれない。

「ノーラも君たちのパーティなんだよね。キラータイガーより強いかもしれない、というの聞いてるよ。上手くやっているかな?」

「そうですね。アクア水を近接戦闘以外に使わないぼくよりは強いと

思います。よく指示を聞いてくれる上に、指示を出しきれないときはちゃんと相手の強さを計って、攻めるか引くか決めてくれますから、そこらの人間よりよほどやりやすいですよ。

それに、いるだけで空気が明るくなるような気がしますし、本当にいるだけ得という感じですね」

「ノーラは本当に賢いわよね。あたしにもよく懐いてるし、しっかりモンスターも倒してくれる。ユーリもいいペットを持ったものよ。アクアにしろ、ノーラにしろね」

「そうか。君たちのパーティは実力も確かだけど、雰囲気もいいからね。ちゃんと皆が仲良くやってるパーティというのは多くないし、仲良くやった結果責任がバラバラということもよくある。

君たちは役割がはつきりしているし、誰が指示を出すかも明確だ。本当にいいパーティだと思うよ。私たちが駆け出しのころだったら、ぜひ入りたいと思っただろうね」

「そうだね、アリシア。和気あいあいといえば聞こえはいいけれど、結局なれ合いでしかない人たちってよくいるし、そういう人たちに限って、ちよつと失敗するとすぐ関係が悪くなるから。あなたたちはそういう心配はあまりしなくて良さそうだよね」

ぼくたちのパーティがいい雰囲気だと言われるのは嬉しいな。それにしても、アリシアさんたちの駆け出し時代って、どんな感じだったんだろう。

新入り同士でアリシアさんたちとパーティを組むというのも、きつと悪くないのだろうけど、アリシアさんたちはやっぱり師匠という感じが強いかな。

「ま、あたしたちはね。いくらユーリがヘタレだったからって、仲間を見捨てるほどの奴じゃないのは分かり切ってるわ。だから、こいつを見捨てないでやったんだし」

「ユ、ユーリさんはかっこいいですし、頼りになりますよっ。それに、カタリナさんも優しいですし、アクアちゃんもかわいいですよ。ノーラちゃんとフィーナさんも、きつと上手くやっていきますよっ」

「ユーリなら大丈夫。アクア、絶対にユーリを守る。ユーリの生活も、

ユーリの大切なもの」

「ふふ……本当に、みなさんと出会えて良かった。絶対に、この居場所を守ってみせます……」

ノーラはみんなが話している間、ずっとぼくに擦りついてた。話を聞いてないように見える時も、話は理解しているんだよね。

だから、あまり叱る気にもなれない。本当に聞き逃してはいけない話は、ちゃんと邪魔せず聞いてくれるから、余計にね。

それから、フィーナとノーラの能力と役割について細かく説明していた。アリシアさんたちはやはりフィーナを拒絶せず、しつかりフィーナの事を見ていてくれた。

少しは心配だったけど、やっぱりぼくたちの尊敬する師匠だ。本当に、この人たちで良かった。何度も思っていることだけど、また思った。

「それで、フィーナさんは、近接戦闘はできるかな？ ユーリ君は固定砲台でもいいと考えているようだけど、できるかできないかで、取る手段は大きく変わってくる。私だって、風刃で固定砲台という役割ができない事はないけど、近接戦闘もできるからこそ、ここまでこれたという自負がある。フィーナさん、どうかな？」

「全くできないという訳では……ただ、ユーリさんやアリシアさんのように、能力を近接戦闘には生かせないので……」  
「なるほど。衝撃を自分にぶつけて加速とかも難しいかな？」

その言葉を受けてフィーナは首を横に振る。衝撃が当たったら危なそうだと感じていたけれど、やっぱりそうか。

「そんなことをしたら、大ケガをしてしまいます……そこらのモンスターくらいなら、素手で能力を使わずとも倒せますが……」

「そうか。そうなると、ユーリ君たちが足止めする方が良いというのも分かる。ただ、近接戦闘しながら、別の場所に衝撃を発射するくらいの事は出来た方が良いよ。強く集中しないと使えない能力は、いざという場面に弱い。その辺は、ユーリ君はうまくやっているよ」

「わかりました……いろいろと、試してみたいと思います……この力は、あまり使ってきませんでしたから、成長の余地は大きいはずです

……」

昨日ちよつと試ただけでいろいろできるようになったことに驚いたけど、そういう事情もあったのか。フィーナが能力を使う才能があるのは間違いないけど、ぼくが先達として、いろいろ教えられるかもしれないな。

それから、いつものように、ぼくたちがモンスターを討伐して、アリシアさんたちがアドバイスがあるときに話しかけてくれるという形で進んだ。

ノーラは敵の背後や側面をうまくとる方法を教わっていたし、フィーナは動きながら能力を使うコツについて教わっていた。

ぼくたち全体としては、大勢の相手ではなく、強い1体に連携するための考えを教わった。

お互いがお互いの攻撃を邪魔せずに生かしあう。言葉にすれば簡単だけど、すごく難しい。

ただ、ぼくたちにはアクア水で軌道を変えろという手段があるので、他のパーティよりはやりやすいらしい。

初めてキラータイガーを相手にした時より人数が多いから、これまでも同じようなモンスターと戦う時でも戦術は大きく変わることは間違いない。しっかり練習しておかないとな。

アリシアさんたちと別れた後、ぼくたちだけで街の闘技場で少しだけ練習していった。ぼくたちで苦戦するような相手だと、人型モンスターとかドラゴンとかだよな。単純な手だけじゃだめだから、しっかり対策しておきたい。

それから帰って、今日もアクアとノーラと寝た。アクアのそばは前よりももっと心地よくなっているかもしれない。



## 49話　フィーナと

ぼくは今日、フィーナと2人で出かけていた。

フィーナから誘われたことがきっかけではあるけど、フィーナをよ  
り知って、パーティとして上手くやっていくためのいい機会だと判断  
していた。

フィーナは静かな場所が好みだろうから、人通りの少ない場所をい  
くつか回るつもりでいた。

「ユーリさん、今日はどこへ連れて行ってくれますか……？　ふふ、  
ユーリさんと2人で出かけることは、きっと楽しいですよね……」

「今日は、まずは公園かな。人があまりいないというか、1人いること  
も珍しいくらいなんだ。人が少ない場所は、ちょうどいいかと思つて  
ね」

「人が少ないことにかこつけて、わたしに何かするつもりですか……  
？　ふふ、そんな顔をしなくとも。冗談ですよ……ユーリさんが本当  
に望むのならば、やぶさかではありませんが……」

フィーナ、初めの時の印象と違って、とんでもない冗談も言うんだ  
な。

まあ、フィーナと打ち解けられていると思うと、悪い気分ではない。  
フィーナには人間不信の気も感じていたから、フィーナに変なことを  
するつもりはなかった。いや、普通にそんなことはしないか。

フィーナを公園に連れていったところ、本当に人がいなかった。完  
全にフィーナと2人きりだな。

フィーナはとても落ち着いた雰囲気の人だから、だいぶ落ち着いた  
気分でいられた。

だいぶさびれた雰囲気の公園だけれど、手入れ自体はされているの  
か、何かが壊れそうな感じはしない。フィーナと2人で空いているベ  
ンチに座って、話をしていた。

「ユーリさん、ユーリさんは、どんな女の人が好きですか……？　ユ  
ーリさんが望むのなら、わたしはどんな女の人にもなってみせます  
……」

ぼくの好みの女の人か。考えたことなかったけど、どういふ感じの人が好みなんだろう？ ぼくの周りの人は大体好きだけど、たぶんそういう意味で聞かれているわけでは無いだろうし。

でも、フィーナがぼくの言ったとおりにする、か。なんとなくだけで、嫌だな。

だってそれ、もうフィーナじゃない何かとしか思えない。

ぼくは今のフィーナに仲間になってほしいと思っただから、カタリナのようにだとか、アクアのようにだとか、その他の人のようにだとか、なつてほしくないな。

「どんな人が好みかはよく分からないけど……フィーナが無理矢理ほかの誰かのような演技をする姿は見たくないな。いつもの、おとなしくて、落ち着いていて、強くて、優しいフィーナでいてほしいな。」

もちろん、そこから外れたくらいでは嫌いにならないけど、ぼくの好みに合わせて無理させるのはごめんだよ」

「なら、今のわたしはあなたの好みだと思つていいですか……？ 他の誰かと比べた時、わたしを選んできますか……？」

今フィーナを一番にすることは難しい。好きかどうかという問題以前に、アクアやカタリナを中心に長い時間を過ごしてきた絆には勝てない。

「それは、これから親しくなつていく中で決まることじゃないかな。少なくとも、昨日今日会った人を、どれだけ魅力的な人だとしても、今のパーティーのメンバーより上に置くなんて事、ありえないよ」

「そのパーティーのメンバーに、わたしも入つていと思つていいですか？ ユーリさん、あなたにとつて、わたしは大切な人だと思つていいんですか……？」

「フィーナはもう絶対に失いたくない人だよ。どんな強大な敵が現れたとしても、絶対に一緒に生き延びてみせる。それじゃダメかな？」  
「構いません……ユーリさん、誰かにとつて大切な人でいられることとつて、幸せなんですね……ユーリさんの今の言葉、本当に嬉しかったです……こんな化け物を、大切な人だつて言ってくれて、本当に感謝しています……ユーリさん、あなたのことは、わたしが絶対に守つ

てみせますから……!」

フィーナは自分の事を化け物呼ばわりしている。あまり気分のいい物ではないな。フィーナがこれまでに苦しんできたことの証のよ  
うな気がする。

でも、何か言ったくらいでどうにかなるような問題とは思えない。  
どうするのが正解なのだろう。

フィーナの事を拒絶しないことは絶対だけど、時間をかけるしかな  
いだろうか。

すぐに答えが出るとは思えないし、ゆっくり考えていくことにしよ  
う。

「感謝してくれるのは嬉しいけど、別に感謝なんてするほどの事じや  
ないよ。当たり前前にこれからも続くことなんだから。フィーナがぼ  
くを守ってくれようとするように、ぼくもフィーナを守るから。それ  
がチームってものでしょ?」

「きつとそうなのでしょね……ですが、わたしにとつては当たり前  
ではなかった……ユーリさん、わたしに幸せを教えた責任、取つてい  
ただきますから……もう、ユーリさんと離れるなんて事、絶対にあつ  
てはいけないんです……」

ぼくはフィーナと離れようとは思わないけど、ちゃんとそれを  
フィーナが信じられるようにしないとね。

フィーナはきつと、これまでつらい思いをしてきたのだから、それ  
を上回るくらいの幸せで上書きしてやるのだ。

ぼくにとつて、フィーナの幸せはもはや他者の問題とは思えなかつ  
た。フィーナが幸せを感じていられるのなら、きつとぼくも嬉しい  
し、フィーナが不幸だと思っっているのなら、きつとぼくも悲しいだろ  
う。

ぼくはぼくのために、フィーナが幸せでいられるように努力する。  
そう決めた。

だって、フィーナのつらそうな顔なんて、見ていたくはないんだか  
ら。フィーナの嬉しそうな顔を、できるだけ長く見ていたかった。

その次に、ぼくたちは料理屋で食事をしていた。あまり繁盛してい

るようには見えないが、美味しくて雰囲気も悪くないから、フィーナを連れてくるにはちようどいいだろうと連れてきた。

フィーナは思った通り、あまり店主が干渉してこないところが気に入っているようだ。

「ユーリさん、このお店、結構美味しいですね……野菜にもしつかり味がついていますし、その割にはくどくない……わたし、また来たいです……」

「なら、また来ようか。フィーナも、要望があつたらいろいろと言ってくれていいからね。全部叶えるとはいかないだろうけど、せつかく一緒に居るんだから、そのほうがいいでしょ」

フィーナは嫌われることを恐れているようで、フィーナを恐れないという約束を守ることで以外の要望はあまり聞いたことがない。

でも、フィーナだけに我慢させるのは、きつといい関係とは言えないはずだ。

直ぐにはいかないだろうけど、ちよつとずつでも、フィーナがわがままになつていいのだと思つてくれたらいいな。

「なら……ここから先は、手を繋いで一緒に歩きたいです……ユーリさん、構いませんか……?」

「もちろんいいよ。フィーナ、ほら」

ぼくが手を差し出すと、フィーナはゆつくりとぼくの手を取った。フィーナの手は小さくて、でも、結構強く手を握られていた。

少し痛いような気もしたけど、ここで拒絶なんてできないよね。だから、フィーナの手をそのまま受け入れていた。

それからしばらく、街の中を手を繋ぎながら歩いていた。フィーナは歩く中で、力加減のちようどいい具合を見つけてくれたので、思ったほど我慢はしなくてよかった。

フィーナは時折、繋いだ手を嬉しそうに見ているので、これは離すわけにはいかないと思い、人通りの少なくしてそれでいて狭くない道を頑張って選んでいた。

フィーナは手を繋いで歩いていることに慣れてきて、手の握り方をいろいろと試していた。

「ユーリさん、最高の気分です……わたしを受け入れてくれる人が隣にいる、本当に幸せなことです。この手の温かさを忘れないうちに、また思い出させてくださいね……」

また遠くないうちに手を繋いでくれということだろう。望むところだ。他の人相手なら恥ずかしさを感じていたところだけど、フィーナ相手にそんなことを感じていられない。

実際はやっぱり恥ずかしいけど、それで手を放そうとしたら、絶対にフィーナを傷つけてしまう。

それが分かっていたから、フィーナの笑顔の事を考えて、恥ずかしさの事をごまかしていた。

いつもは表情の薄いフィーナだけれど、ごくたまに見せる笑顔は本当に魅力的で、ずっと見ていたいとすら思った。フィーナが笑顔でいられる時間が多くなれば、あの顔がもっと見られるのだ。

そう考えることで、今感じている恥ずかしさを、未来の楽しみのための時間だと思えた。

「もちろんだよ。フィーナが望んでいる限りは、それを続けるつもりだから。こんなぼくでも誰かの支えになれるって思えて、嬉しいんだ。フィーナが幸せそうでいてくれると、ぼくも嬉しいよ」

「ユーリさん、ユーリさんは素晴らしい人です。ぼくなんか、なんて言わないでください。ユーリさんだからこそ、わたしを幸せにしてください。ユーリさんだから、ずっと一緒に居たいと思ったんです。だから、ユーリさんがつまらない人間みたいに言うなんてこと、やめてください……」

フィーナがそう言ってくれるのは本当に嬉しい。でも、ぼくの全部はぼく以外の誰かの力で成り立っているのも事実のはずだ。だから、ぼくは大した人間じゃないってつい考えてしまう。

でも、フィーナが自分の事を悪く言っている姿を見てぼくが傷ついたように、フィーナもぼくが自分を悪く言っている姿を見て気分を悪くしたのだろう。

だから、せめてフィーナの前では、ぼくはすごい人間なんだって思っていることにしよう。

だって、大したことのない人間に幸せにされたってことになるよ、絶対嬉しくないよね。

「わかったよ、フィーナ。でも、きみがぼくを素晴らしい人だと思ってくれてるように、ぼくもきみが素晴らしい人だと思ってるんだ。ぼくも気を付けるから、きみも、自分を悪く言うようなこと、やめてほしい。フィーナだって、ぼくにとって最高の仲間で、絶対失いたくない大切な人なんだよ」

「それは……いえ、そうですね……ユーリさん、あなたがわたしを望んでいてくれる限り、わたしは自分を信じられるんです。だから、絶対にわたしの事を手放さないでください。そうすれば、わたしは自分を信じられるはずなんです……」

「もちろんだよ、フィーナ。だから、ずっとぼくたちの仲間であってほしい。そして、きつと最高のパーティーになってみせるんだ。フィーナは、最高のパーティーの最高のメンバーになるんだからね」

「はい……！ ユーリさん、ずっとあなたの事、信じています。そして、ずっとあなたの力になります……だから、いつまでも、いつまでも、一緒に居ましょうね」

## 裏　　ファイーナ

ユーリがファイーナと出会ったとき、ファイーナはすでにアクアによって操られていた。

アクアは他者の支配を拡大する中で、世を儂んでいるファイーナを見つけた。

ユーリならば、きつとこういう時は放っておけないのだろうと考えたアクアだったが、アクアにとって、ファイーナはどうでもいい他者でしかなかった。

ただ、ファイーナが自身の異能を使っている姿を見て、これは使えると考えたアクアは、ファイーナを乗っ取って、ユーリのためにこの力を使おうと考えた。

説得するという考えも頭には浮かんでいたが、ただの他人であるファイーナのためにそこまでする価値をアクアは見いだせなかった。

そのまま、アクアは即座にファイーナを乗っ取った。ファイーナはほとんど何も気づかないうちにアクアに支配されることになった。

ファイーナを支配したアクアは、どうやってオーバースカイのメンバーとしてファイーナを加えるか考えた。

ユーリの事だから、少しばかり恩を売れば直ぐにファイーナを仲間にしたくなるだろうと考えたアクアは、以前から考えていたモンスターの発生の制御の実験と同時に、ファイーナにユーリを助けさせることにした。

一定の空間内に、ある種の成分を一定量発生させればモンスターが発生する。強いモンスター程、その成分の影響が大きく、また、体内にもその成分が多い。強いモンスターが多ければ多いほど、モンスターというものは発生しやすくなる仕組みだった。

アクアはその成分を操作する手段を思いついた。それによって、自在にモンスターを発生させることが出来るはずだ。

いきなりユーリのそばで試すことはユーリの安全のために控えていたが、ある程度制御できるようになった段階で、ユーリの周りにモンスターを発生させることにした。

予定通り、力を発揮していない自分たちをかばうために、ユーリは必死になっていた。ユーリの事は何があっても傷つけさせないために、モンスターはある程度操作していたが、ユーリがアクアたちを守るために必死になっている姿には、昂るものがあつた。

アクアはユーリに気づかれないうようにひそかに興奮していたが、それを振り払い、フィーナをちよいどいいタイミングで登場させて、ユーリの事を助けさせた。

当然のごとくユーリはフィーナに恩を感じていたし、フィーナに絆されている様子だった。フィーナの力はユーリにとって得体のしれないものはずだったが、ユーリはフィーナを素直に受け入れていた。

やっぱりユーリは優しい。アクアはユーリの事がもつと大好きになつていた。

アクアは故意にユーリに説明していなかったが、フィーナの力の正体は知っていた。

人間の胎児が母体の中にいる際に、特定の種のモンスターを摂取するなどして、モンスターを発生させている成分を胎児が受け取ると、まれに契約技のようなものが使えるようになる。そうして生まれたのがフィーナだった。

フィーナはその力によつて周りに迫害され続けていたため、生きる希望を完全に見失っていた。

ユーリのような、自分の力を知りながら受け入れてくれる人に出会うことは、フィーナの悲願であつた。

フィーナの記憶を読み取つてそれを知っていたアクアは、ユーリの力になることは、フィーナにとつても本望だろうと考えていた。

それから、フィーナの能力をフィーナとしてユーリに説明した後、ユーリが語つた言葉、たとえ化け物だったとしてもフィーナの事を受け入れる。

そのような意味の言葉によつて、フィーナではなく、アクアが救われたような心地になった。アクアは自分の事をただの化け物と自覚していて、だからユーリに相応しくないかもしれないという疑いを、



ほんの少しだけ抱いていた。

化け物である自分の本性を知っても、ユーリは自分を捨てないのかもしれない。アクアにとって、そんな希望が湧いてくるような気分だった。

アクアは自身がオメガスライムであると考えていて、オメガスライムは伝説に残るほどの化け物だ。

だから、ユーリに自分の正体を明かすようなことをする気には今もなれないでいたが、もし仮にオメガスライムであることがユーリに知られても大丈夫ではないか。そう考える時間が増えることになった。

それから、ユーリはフィーナをパーティーメンバーとして本格的に受け入れることにした。

フィーナをユーリのパーティーに入れることで、ユーリたちが取れる手段は大きく広がった。

もともと、アクアはそれが狙いでフィーナを操作することに決めていたわけだが、予定通りにはまった形だった。

フィーナとしてユーリにかけている言葉は、フィーナならおそらくそう言うだろうという物ばかりだった。別にフィーナはユーリと初対面なのだから、好き勝手なキャラクターを演じてても問題はないはずだった。

なのに、アクアはフィーナの言いそうなことを言う事を選んだ。アクアは自覚していなかったが、フィーナの事を、自分が辿るかもしれないなかったもしもの姿のように考えていた。

アクアはユーリと出会えたから幸せを知ることが出来たし、感情がどういふものかを知ることが出来た。

もし、ユーリではない別の誰かが飼い主だったり、そもそも飼い主がない状態だったなら、ずっと空虚なまま過ごすことになっていただろう。

何も希望を抱いていない様子のフィーナの姿が、ユーリと出会えなかった自分の姿のようだ。そう感じていたのだ。アクアは自分では気づいてはいなかったが、フィーナに同情していた。

ユーリと出会ってから、幸せでいっぱいだったアクアだったが、

ユーリと離れる可能性を想像していたからこそそうなった。

アクアがカタリナを乗っ取ってから生まれた罪悪感が、ユーリと離れる未来を想像させていた。

アクアはユーリは自分を嫌わないとは言いつてもいいけれど、絶対に切れないことをしたと自覚していたから、ユーリと離れる事だけは絶対に嫌だという思いを強める形になっていた。

ユーリがいない世界は、どれほどつまらない物だろうか。アクアは想像するだけでも、とても強い寒さが襲い掛かってくるような心地でいた。

ユーリとずっと一緒に居られるなら、他に何を失ってもいい。自身の力も、他の人も、何でも。

アクアはそう考えていたから、オメガスライムという自分の正体は最悪気づかれてもいいが、カタリナを支配したことだけは気づかれたくないと考えていた。

カタリナとユーリという未来は失われてしまったが、ユーリだけは何かあっても手放さない。その覚悟を決めていた。

もしもの事があれば、ユーリの記憶を書き換える。そんな考えがアクアの頭に浮かんでいた。ユーリがユーリらしく生きてほしいと思っていたが、ユーリと離れることになる未来に、きつと自分は耐えられない。そう考えたアクアは、大切なユーリを別のものにしてしまいかもしれないという懸念と、ユーリと離れ離れになる恐怖の間で葛藤していた。

ユーリは優しいから、大抵の事では身近な人を嫌わない。でも、自分のしたことはきつと大抵の事には入らない。

カタリナを解放するという考えは、アクアの中で小さい物になっていった。ユーリとずっとそばに居る事だけは、絶対に達成して見せる。

そのために、カタリナとの未来を捨て去るしかないのなら、捨て去ってみせる。アクアは自分の未練も理解していたが、振り払おうと努めていた。最悪の未来の恐怖から目をそらすように。

それから、アリシアとレティもフィーナの事を受け入れていた。も

しもの時はアリシアとレティを乗っ取ることも考えていたが、その展開は無いようで、アクアは少しだけ安心していた。

アリシアとレティはユーリにとって大切な人だから、できるだけ歪めたくない、大勢の人を操っている今でも考えていた。ユーリのそばに自分があることが第一だが、ユーリに幸せになつてほしいというのも、アクアの本音だった。

作られた人形劇のような幸せより、本物の人間関係の中に生まれた幸せの方がユーリにとって良い事だろうと考えていた。自分が何をしているのか、その時のアクアは考えないようにしていた。

ユーリが自身と触れている時や、アクア水と触れている時に心地よさを感じるようにユーリの体を調整していること、アクアがユーリの周辺の人物を操っていること。それらから目をそらしていた。

結局その日アクアは、ユーリが自分のそばに居る時の多幸福感をユーリにも与えるという考えのもと、ユーリが自分の一部と触れている時にもっと心地よく感じるように、自分の体を調整した。

ユーリを操作することでユーリに自分を心地よく感じてもらうことは、その時は避けることにした。

その後、フィーナとしてユーリとともに過ごしている間のセリフには、フィーナが言いそうなことと、自分の本音が混ざり合うような形になっていた。

ユーリの好みが気になるというのは、きっとユーリと出会ったフィーナも感じる事だろうが、アクアにとっても大事なことだった。自分がユーリと結ばれる未来もあってほしいと考えていた。モンスターは人と子供を残せないから、ユーリにそれを受け入れてもらうか、どうにかする手段を考える必要があるだろう。

でも、ユーリの恋人、あるいは、ユーリの妻。ペットである今が不満という訳ではないが、心が躍る響きのように思っていた。ユーリに愛を向けられることはどんな心地がするのだろう。アクアは想像に胸を膨らませていた。

アクアは愛を理解していなかったから、単純に触れ合う機会やパートナーが多くなるくらいの考えであったが。

それから、フィーナの心とアクアの心が混ざったようなセリフを、フィーナとしてユーリと出かけている間ずっと言い続けていた。ユーリのあるがままがいいと、ずっと考えていたアクアだったが、ユーリに自分の好みに寄せてもらうという考えが出来ていた。

無論、ユーリを無理矢理操るつもりはない。ユーリと接する中で、周りの言葉や行動で、少しずつ誘導していくつもりだった。ユーリは自分に自信がないのがもったいないと感じていたし、ユーリから積極的に他者に触れ合うことがしないことは寂しいと感じていた。

だから、それらを変えてもらうために、まずは言葉から入ることにした。ユーリは素直にフィーナの意見を受け入れているような様子だった。

これからのユーリは、もつと魅力的になる。アクアは幸せな未来を思い描いていた。

## 50話 契約者

ぼくたちは少し遠出をして、強いモンスターが多く発生しているという場所へと来ていた。

その地域の冒険者たちでは対処できなかったので、ぼくたちが退治するようにとのことだった。

強いモンスターとのことだったが、ぼくたちにとって苦戦するような相手でもなかった。

モンスターの退治を終えて近場で休憩していると、猫耳を生やしたモンスターを連れた男に因縁をつけられた。

「スライム使いが女に囲まれて、ヒモでもやってんのかあ？ お前なんかより、俺の方がずっとうまくやれるぜ」

つまらない因縁ではあるが、その男がぼくに攻撃しようとしてきたので反撃する。

アクア水で何度か痛めつけていると、男がまたわめきだした。

「スライム如きを使ってるような奴が、いい気になってんじやねえ。これから、本気を見せてやるぜ！」

そう言った男は身体強化らしき技を使っていたが、ぼくも水をまとして相手をする。前に戦ったオリアスよりはるかに弱く、簡単に対処できた。

すると、男はモンスターを罵りだす。

「お前なんかと契約するんじやなかった！ お前みたいなザコ能力しか無いモンスターじゃなきや、スライム使い如きに負けるはずがねえんだよ！ ふぎけるな！ 死ぬよ！ そうすれば、俺は別のモンスターと契約できるんだ！」

その男の言葉があまりにも不快だったので、ぼくはその男をさらに痛めつけた。男はずっとわめいているだけだった。

「なんだ？ そんなくそモンスターをかばうのか？ くれてやるよ、そんなザコ。だから、俺にお前のモンスターを寄こしな。その猫なら、こいつよりはいいだろうぜ」

「冗談じゃない！ モンスターを何だと思ってるんだ。自分のパート

ナーとしてモンスターを大切にできないやつに、契約者の資格なんてない！」

こんな奴にノーラを渡せるわけがないだろう。どうせ、ろくに努力もせずにノーラを使い捨てると思えない。

ぼくにとつて大切なノーラなんだから、契約するとしても信頼できる人にしか任せるつもりはなかった。

ぼくの言葉を聞いて、ノーラとアクアが甘えてくる。男への警戒を解かないままノーラとアクアを構っていると、男はさらにわめきだす。

「お前はいいよなあ！ 強いモンスターと契約できて！ さぞ楽が出来たんだらうぜ！ 俺なんか、こんなくずと契約することになっちまったんだからよ！ おい！ 何とか言ったらどうなんだ！」

そう言つて男はモンスターに殴り掛かる。止めに入ろうとしたら、モンスターが男の首を攻撃して吹き飛ばした。男は声を上げる事すらできずに死んだ。

「契約解除は、あなたが死んでも出来るんです。望み通りに契約解除できたんですから、喜んでください」

ぼくはモンスターに警戒していたが、モンスターはぼくたちには攻撃を仕掛けてこなかった。なので、説得をしようと試みる。

「投降してくれませんか？ あなたの契約者がろくでもない人だったことは分かります。罪を償って、また契約者を探しましょう。あなたが死ななくて済むように、ぼくも働きかけますから」

その言葉を聞いたモンスターは、諦めたような顔で少しだけ笑つた。

「ふふつ。さつきまで敵だった相手に、そんな言葉をかけられるんですね。それに、あなたのそばに居るモンスターを見れば、あなたがモンスターと良い関係を築けていることはよく分かります。最後にあなたのような人に出会えて良かった……」

「最後つて、諦めないでください。どうしても駄目そうなら、逃げることも手伝いますから。良い契約相手を探しましょう？」

「いえ、もういいんです。契約者を殺したモンスターは、人の社会には

居られない。それに、契約したことがあるモンスターは、ただのモンスターにとつては敵なんです。私の居場所はどこにもない……」

「なら、ぼくたちと一緒に来ればいい。良い契約者が見つかるように、手伝いますから」

「大丈夫。せつかくだから、あなたの名前を聞かせてくれませんか？」

「ぼくはユーリです。ね、諦めないで、もう少し、頑張りましょうよ」

「わたしはミア。この名前、できれば忘れないでください。ユーリさん、右手を出してください」

なんとかこの人が諦めないでいてくれればと思い、ぼくは手を差し出す。

ミアさんがぼくの右手を両手で握ったと思うと、ミアさんは粒子のようになり、ぼくの右手に吸い込まれていった。右手が熱を持った瞬間、右手に猫のような紋章が現れた。契約の証？ でも、契約は複数できないはずじゃ？

いや、それより、ミアさんは死んでしまったのだろうか？ 口ぶりからすると、そんな気がする。ぼくは落ち込んでいたが、みんなに慰められて、宿へと戻っていった。

宿では、みんなと少し先ほどの事について話していた。

「ミアさんを助けられなかったのは残念だけど、せつかくミアさんが契約みたいなことをしてくれたんだから、それを生かしたいよね。それが、ミアさんを悼むことにもなるはずだよ」

「ほんと、あんたってどうしようもないお人好しね。敵だった相手の事で、そこまで悩むんだから。そんなことより、どうすればあたしの役に立てるか考えておきなさいよ」

カタリナはひどいことを言っているようだが、この感じだと、ぼくを慰めようとしているというか、ミアさんの事から考えを逸らさせようとしているはずだ。

まあ、恐らく身体強化の力だろうけど、この契約みたいなものを生かすことを考える事しか、どうせできないからな。それがカタリナの役に立つなら、それでいいだろう。

「ユーリ、ミアの事は残念だけど、せつかくミアが力をくれたんだか

ら、しつかり役に立てるといい。アクア水とも、同時に使えるはず」  
アクアはこの現象について、何か知っているのだろうか。まあいい。詳しくそうなステラさんに、一度相談してみたいな。

この能力を使うつもりではあるけれど、ステラさんなら何かいいことを知っているかもしれない。

ミアさんの様子からして、危ない物ではないはずだけど、使い方を間違えたりすると大変だからな。

「ユーリさん、ミアさんは、きつとあなたに救われたんです。わたしなら、きつとそうなりますから……」

フィーナはそう言ってくれる。そうだと信じたいな。ミアさんの契約相手はろくな奴じゃなかった。

あんな奴が契約相手なら、きつと苦しんだのだろうし、最後まで救われていてくれたらいい。ほとんどミアさんには何もできなかったけど、そう思った。

「ユ、ユーリさん、ユーリさんがそんなに暗い顔をしていることを、きつとミアさんは望まないと思います。そうじゃなかったら、もつと別のやり方を取っていたはずなんですから」

きつとユーリヤの言う通りだろう。暗い顔をさせたいだけなら、もつと別のやり方があったはずだ。

それに、ミアさんのセリフからして、ぼくを傷つけようという感じではなかった。ミアさんの事を忘れる気はないけれど、前を向こう。

仮にぼくが死んでしまったら、ミアさんのしてくれた事も無駄になつてしまう。

なら、しつかりミアさんのくれた力を役立てて、生き延びてやらな  
いとな。

ノーラもぼくを慰めようとしているみたいで、ぼくの事を舐めてくれる。

ノーラもミアさんと同じ猫型モンスターなんだよね。ノーラがミアさんと同じことにならないよう、ぼくはノーラを絶対に大切にしよう。もちろん、アクアの事も。

それから、ぼくたちはカーレルの街へと帰り、サーシャさんに事の



顛末を報告した。

「そんなことがありましたのね……ユーリ様、ユーリ様の心は立派だとわたくしは思いますわ。ただ、契約者を殺したモンスターは、本能的には重罪と決まっておりますわ。」

今回の相手がよほど素行の悪さで注目されているとか、もともと犯罪者だったとか、そういう事がない限り、モンスター側をかばうことは良い手とは言えませんわ。

もちろん、ユーリ様が本気でモンスターをかばうつもりがあるのでしたら、こちらでも力はお貸ししましたわ。それに、ユーリ様は勲章を持っておられますから、それも役に立ったはずですわ。

ですが、人生をかけるほどの覚悟がないのならば、今後はそういうことはお控えくださいまし」

サーシャさんにはそう忠告された。

そういうことなら、今後は考えた方が良いのかもしれない。ぼく一人なら、突き進めばいいんだけど、ぼくにはオーバースカイの仲間がいるし、他にも支えてくれる人がいる。

ミアさんの事はその人たちより優先するべきことではなかったと思う。結果的には丸く収まったのかもしれないけど、今後は気を付けよう。

それから、家に帰って、ステラさんにミアさんの事について相談した。

「それは……ユーリ君、本当にそんなことがあったんですね。モンスター2体と同時に契約できないことは、ユーリ君もご存じだと思います。ですが、例外もあります。それが、ユーリ君も手に入れた力です」

例外だろうということは、なんとなく分かっていた。モンスター2体と同時に契約できないということはほとんど誰でも知っていることだから。

「本来の契約とは、契約によって生まれた力をモンスターと人とで共有するものなんです。そのことは、ほとんどの人は知らないと思います。私も、学園で教えることはありませんでした。1対1でしか契約

できない理由は、その共有がうまくいかなくなって、モンスターにも契約者にも強い負担がかかり、多くの場合に死んでしまうからです」なるほど。なら、ミアさんのくれた力は、力の共有がうまくいかないという問題を解決しているのかな。でも、そんな力よりミアさんが無事でいてくれることの方が嬉しかったな。

「ですが、モンスター側が命を含むすべてをささげた場合、契約で生まれた力を共有する必要はありません。ですから、複数体から契約のよくな力をもらうことが出来るんです。

ただ、それは過去に何度か実験されましたが、人間の側がどうやって強制しても、その現象が起こることはありませんでした。モンスターの側が心の底から望まないと、その契約はできないんです。

ユーリ君。あなたは、ミアさんという方にとつて、自分のすべてを捧げてでもいいと思える相手だったということですよ。ミアさんのその想いを無駄にしないであげてください」

そういうことだったのか。ミアさんは生きることをあきらめていた様子だったから、必ずしもぼくじゃなくても良かったのかもしれない。

だけど、ミアさんはぼくにすべてを託してくれたんだ。

だったら、ミアさんの力をしっかり使いこなせるようになって、ぼくがもつと強くなるのが、ミアさんへの手向けになるはずだ。

ぼくはこの力を絶対にうまく使ってみせる。そう決意した。

## 51話 新たな力

ぼくはミアさんに貰った力がどういうものか検証するために、闘技場のような場所をサーシャさんに借りていた。ミアさんは猫型モンスターだったから、恐らく身体能力を強化する能力だと思う。

ただ、どれだけ強くなるのかなどが全く分からなかったので、念のために人を遠ざけてもらっていた。

最悪壊してもいい場所を用意して欲しいとサーシャさんに要求したところ、この闘技場を借りることになった。

まずは、アクアと契約した時と同じように、契約の証を強く意識してみる。すると、全身に何か流れ込んだような感覚があった。

恐らく、これが身体能力を強化してくれるのだろう。

まずは、試しに走ってみることにする。想像していたものの何倍も力が強く、思いきり壁に突っ込んでしまった。

慌ててアクア水で防御したから何ともなかったものの、これはアクア水で加速していた時よりもすごい。

いきなり全力は絶対無理だとわかったので、まずは、力を限界まで弱めてから使ってみる。

それでも制御には苦労したが、走ることだけはなんとかできた。これを戦闘に組み込むことには、相当な努力が必要そうだ。

それからしばらくの間、一番弱い状態で能力を使い続けていると、基本的な動きはこなせるようになっていた。

ただ、まだ最弱状態だとしても、実戦で使うことはやめておいた方が良さだろうと感じていた。

このままでは、体を操ることに神経を注がなくてはならず、ぼくの最大の強みであるアクア水にまで気が回らないだろうと感じていた。

それでも、この能力は本当に強力だということは既に感じていた。これなら、きっと王都で戦ったオリアスの能力より数段強いだろう。アクア水を移動に使わなくても、十分な身体能力は間違いなく発揮できる。

つまり、アクア水を他のところに使えるようになるということだ。

それに、体の頑丈さも上がっている感覚があったので、アクア水を移動に使うとすれば、これまでよりはるかに早く移動することも可能かもしれない。

アリシアさんのスピードを超えられるほどの可能性を、ぼくはこの能力に感じていた。

単に速さで勝っただけでアリシアさんに勝てるとは思わないけど、アリシアさんに追いつき追い越すという目標が、手を伸ばせば届く距離にあるのではないかと初めて感じていた。

ミアさんが死んでしまったことは本当に残念だったけど、ぼくはこの力をくれたミアさんにとても感謝していた。

ミアさんはぼくにミアさんの事を忘れないでと言っていたけど、この能力がある限り、ミアさんの事を忘れることはないだろう。

でも、できれば、ミアさんが新しい契約者を見つけるなり、ぼくたちのパーティに加わるなり、どうにか新しい幸せを見つけてほしかった。

過ぎたこととはいえ、どうにかする手段はなかったのかと考えてしまう。仲間に迷惑をかけずにミアさんを助ける手段はなかったと言われたら、きつと納得すると思う。

それくらい、どうすればよかったのかは分からなかった。

だけど、ミアさんとは、他の退治してきた人型モンスターとは違って、分かりあうことができたのではないかと思えて、つい、ミアさんの事を考えてしまっていた。

ミアさんが、もっといい契約者と契約できていれば、他の未来もあったのだろうか。本当に、あの契約者は最低だった。ああはなりたくない。

ぼくは絶対、アクアとノーラの事を雑には扱わないと誓っていた。それからずっとミアさんの能力を試していたが、その日は、最低限に抑えた力を何とか制御できただけだった。

ぼくはサーシャさんと相談して、しばらくの期間をこの力の習得に使って、依頼を受けないことに決めた。

その日の夜、ぼくはステラさんに、ミアさんに貰った力の使い方に

ついで相談していた。

「ミアさんに貰った力は、身体能力の強化だったんですけど、まだうまく使えているとは言えません。ステラさん、何かコツのようなもので、知っていますか？」

「そうですね。単純に、防御力のようなものを強化できる例もあると聞きます。そういった場合は、制御にそこまで苦労はしないようですね。体の一部分だけ強化できるような場合もあって、そういう場合は、制御がとても難しいようです。上手く制御できないと、自分の事を傷つけてしまうこともあるそうですね」

腕だけを強化すると腕の速さに他の体がついていけない、みたいなことだろうか。アクア水で1方向以外にぼくを動かす時に似ている感覚かもしれない。ぼくも気を付けるべきだろう。

「それで、制御のコツですが、とにかく使う時間を長くすることだそうです。寝ている間でもずっと使えるくらいになると、どんな状況でもうまく使えるそうですよ。」

練習自体でそこまでうまくならなくても、使っている時間が単純に長いと、体が動きを覚えるように、自然と習得できるものらしいです。いきなり強化の段階を上げるより、最小限の力でずっと使っている方が、はるかに習得が速いと聞きます。

ですから、まずはそこから始めてはいかがでしょうか」

「そうなんです。ただ、家の中で使うと、いろいろ壊してしまいかねません。1日中ずっとというのは、少なくとも今は難しいと思います」

「そうですね。なら、訓練のための場所を長く借りる以外にないでしょうね。サーシャさんに頼むといいでしょう」

「そうですね。そうしてみたいと思います。慣れてきたら、家でも使ってみようと思います」

「それでいいでしょう。ユーリ君、頑張ってくださいね」

やっぱりステラさんは本当に頼りになるな。契約技の事をこの人に聞いておかしな答えが返ってきたことがない。きつとこれからもステラさんの事を頼りにするのだろうか。

そして、次の日からミアさんの契約技の訓練を再び行った。

できるかぎりずっと契約技を使っていると、本当に使い方に慣れてきて、今なら全力とはいかずとも、それなりの強さの状態なら、問題なく戦闘に使えるような気がしていた。

最弱の状態なら、アクア水と併用しても全く問題が発生しなかったし、中くらいの状態なら、王都で戦ったオリアスよりは戦えるだろうと思えていた。

ミアさんの契約技だと、ちよつと長いから、契約技の訓練をしながら名前を考えていた。

アクア水はなんとなく決めた名前だけど、ミアさんの契約技には、絶対ミアさんの名前を入れたかった。

そうすれば、もつとミアさんの事をぼくに刻み込んで、忘れないでいることができるだろうと考えたからだ。

結局、契約技の名前は、ミア強化に決めた。単に強化の方が分かりやすいかもしれないと思うけど、ぼくは絶対にミアさんの名前を外したくなかった。だから、これでいいだろう。

そして、今日から家の中でもミア強化を使うことにした。大丈夫だと思っただけだが、うっかり力加減を間違えることはなかった。

今のところは最弱のままでは家では使わないことにしているけど、慣れたらもつと強化度合いを上げた方が良さだろう。

幸い、ずっとミア強化を使っただけでも、体力などを使い果たす感じはしなかった。

たぶん、アクア水をずっと使っていたことで、契約技を使うこと自体に慣れているからだな。

これから、ミア強化の存在は、ぼくたちにとって大切なものになるだろう。これがあるだけで取れる手段が大幅に広がるし、本当にいい力をミアさんはくれた。

ありがとう、ミアさん。あなたのくれた力で、これから頑張っていくから。

それから、ミア強化を実戦に使えると判断したぼくは、依頼を受けてマナナの森へと向かった。今回は強いモンスターはいなかったの

で、一応ほかのメンバーにサポートに入れるようにしてもらいながら、ぼく1人で戦ってみた。

すると、これまでよりかなり楽にモンスターを倒すことができた。何なら、ぼくとアクアとカタリナの3人で戦っていたころより、今のぼく1人の方が上手にモンスターを倒せるのではないかと思うくらいだった。

獣と変わらないスピードのモンスターくらいなら、アクア水で補助しなくてもぼくには追い付けない。一方的に攻撃することも簡単だった。

それを見たみんなはとても褒めてくれた。

「ユーリ、すごい。格好いい。ミアのおかげで、格好いいユーリがいっぱい見られた」

「格好いいかはさておき、あんた、本当に強くなったわね。その力をしっかり使って、あたしに楽しさせることね」

「ユ、ユーリさん、本当にすごいですっ。これならきつと、ドラゴンにだって勝てますよっ」

「ユーリさん……本当に強くなったんですね……わたしの力はお役に立てますか……？」

ぼく1人でかなりのモンスターを倒せるようになったことは分かったけど、問題は連携だ。ぼくの立ち回りの幅は増えたけど、それが即座にオーバースカイとしての強化につながるわけでは無い。

ぼくの移動速度が速くなるなら、カタリナやファイナはこれまで以上に誤射に気を配らなければなくなる。ユーリヤやノーラ、アクアはぼくの動きの速さに合わせる必要が出てくる。

ただぼくが強くなったと単純に喜ぶわけにはいかなかった。

それから、連携をいろいろ試してみたけど、なかなか難しかった。みんなで連携するよりぼくが直接倒した方が早いと思う場面も多くなってしまって、でも、だからといって、他の人たちに何もさせないのなら、ぼくたちがパーティである意味がない。

とても悩ましい問題が出てきてしまった。

敵の数が多い場面なら、人数が多いことは単純に役に立つ。手数

が増えるからだ。

でも、ぼく1人で倒せてしまうような相手なら、連携を工夫するよりぼくが突っ込む方が楽だし早い局面が多い。

だけど、連携自体はちゃんとしておかないと、ぼく1人で倒せない敵が出てきただけで終わりだ。

どうするかいろいろと試行錯誤した結果、ぼく以外のメンバーで連携して敵に当たり、ぼくがそこからあぶれた敵を倒すという形が今のところは強かった。

みんなとの距離が離れてしまった気がして落ち込んでいると、ノーラがぼくを舐めてくれたり、アクアが手を繋いだりしてくれて慰めてくれた。

ミアさんには本当に感謝しているけど、新しい問題ができてしまった。これからこのパーティーでどうやっていくのがいいか、よく考えないといけないな。



## 52話 決意

ぼくはミア強化を使いこなすための訓練を続けていた。ぼく自身がミア強化を使うことはとてもうまくなったと思うし、アクア水との併用もうまくこなせるようになっていた。

だけど、オーバースカイの仲間との連携はうまくいっていなかった。

行き詰まりを感じたぼくは、アリシアさんたちに相談してみることにした。アリシアさんたちと一緒に活動する日にその質問をした。

「アリシアさん、ぼくは、新しい契約技のような力を手に入れたんです。それでぼく自身は強くなったんですけど、みんなとの連携がうまくいっていません。どうするのが良いと思いますか？」

「そうだね。まずは、その力がどんなものか教えてくれるかな？ どう答えるにも、その情報がないとね」

「身体強化の力です。かなり強化できて、大抵の敵ならアクア水と同じ時に使うことで、ぼく1人で倒せてしまおうですよ」

「……そうか。申し訳ないんだけど、それに関しては私はうまくアドバイスはできない。」

私は、周囲に合わせることができないから、レティと2人で活動していたわけだからね。レティと私は、最低限お互いを巻き込まない事だけでやってきたから、連携がうまくいとは言いがたいこともある」

そうなのかな。前にキラータイガーがたくさん現れた時にはとてもスムーズにキラータイガーたちを倒していたけど。

まあ、本人がそう言うのなら、きつとそうなのだろう。

思い返してみると、2人はあまり近づかず別場所で戦っていたような気がするから、そのことを言っているのかもしれない。

でも、だとするとぼくたちの連携で頼りにできる相手は見つからないな。何とかぼくたちでうまく考えていくしかないか。

「私からの答えとしては、諦めずに取り組み続けるしかないんじゃないかな。そこで諦めてしまうと、いつまでたっても連携することはで

きないと思う。

ユーリ君が強くなったことは嬉しいけど、オーバースカイには、上手く連携できるチームでいてほしいと思う。勝手な話で申し訳ないとは思うけど、そういうことになるかな」

「そうだね、アリシア。結局、わたしはアリシアと対等じゃないから、本当の意味でうまく連携できているわけじゃないんだ。

もちろん、わたしとアリシアは大切な仲間だし、一心同体くらいの仲だと思うよ。でも、わたしが2人や3人いたところで、アリシアには勝てないから。アリシアの邪魔しないだけで精一杯かな」

アリシアさんとレティさんでもそうなのか。

なら、この問題は簡単に解決できないものと諦めて、地道に訓練を続けていくしかないかな。

でも、そうだな。戦力差があつたとしても、アリシアさんとレティさんのように、役割までかぶっているわけでは無い。

そこは、もしかしたらぼくたちの活路になるかもしれない。そう感じた。

「わかりました。では、これからも地道に訓練を続けていくことにします。2人とも、ありがとうございます」

「ごめんね、うまく解決してあげられなくて。でも、君たちなら、私たちにも出来なかつたことができるかもしれない。だから、諦めないでほしい。無責任な言葉だけどね」

「うんうん。わたしたちに解決できなくても、慰めてあげたり、励ましてあげること位ならできるから。だから、これからも気にせず相談してね」

「はい。アリシアさんたちの弟子として、恥じることはないチームになってみせます。それで、アリシアさんたちと冒険に出かけたいですね」

「ふふっ、すっかり覚えてくれてるんだ。嬉しいな。私たちも本当に楽しみにしているからね」

それから、いつものようにモンスターを討伐していた。

その中で連携をいろいろと試していたが、フィーナには、ぼくには

ない火力があるから、役割を持ちやすい。

でも、カタリナやユーリヤにノーラはぼくと同じ敵に対して戦うと、ぼくが役割を奪ってしまいかねないことが多かった。

アクアは上手く皆を守ってくれているから、とても活躍していると  
言えた。

「はあ。ほんと嫌になるわね。あたしがユーリの足を引っ張っている  
みたいじゃない。楽ができてると思えば良いこともあるけど、ちよつ  
とむかつくわね。」

でも、そうね。ユーリだけなら手数が足りない時くらいしか、あた  
しの出番はないんじゃないかしら」

「わ、わたしも同じ気持ちです、カタリナさん。ユーリさんが格好良く  
活躍してくれるのはいいんですけど、ユーリさんが頼ってくれない  
と、ユーリヤは寂しいですっ」

「ユーリさんは、わたしには頼ってください……ですが、せっかくチー  
ムを組んでいるんですから、みなさんで活躍してほしいですね……」  
「ユーリ、格好いい。でも、ユーリが頼ってくれないなら、カタリナた  
ちを守る。それとも、もつと別の戦い方をする？」

みんなやつぱり連携がうまくいっていないことを気にしているみ  
たいだ。

でも、ノーラは特に気にした様子もなく、敵がいない時はずっとぼ  
くに甘えていた。

それにしても、本当に困ったな。

ミア強化のおかげで、ぼくが皆を守れる場面は増えそうだけど、ぼ  
く1人で戦いたいわけじゃないから、もつとうまく皆で活躍できる手  
段が欲しかった。

頭を悩ませていると、アリシアさんは感心した様子になっていた。

「ユーリ君、本当に強くなったね。これなら、本当に私たちを超えるこ  
とは夢じゃないどころか、手に届く距離だと思う。ふふっ、本当の意  
味と一緒に冒険できる日も、本当に見えてきたかもしれないね」

「ユーリ君、わたしよりはもう強いよね。はあ。ユーリ君を可愛がる  
の、楽しかったんだけどな。もう先輩風は吹かせられないね」

「いえ、そんなこと。アリシアさんも、レテイさんも、ぼくの尊敬する師匠であることは、何があっても変わりません。ですから、いつまでも先輩のまままでいてください」

そう言うと、レテイさんは満面の笑みを浮かべてぼくに抱き着いてきた。

「ユーリ君は本当に可愛いな。うんうん。これからも、お姉さんが、いっぱい甘やかしてあげるからね」

レテイさんが嬉しそうにしてくれていて、ぼくも本当に嬉しい。

レテイさんに抱き着かれていると、なんだかくすぐつたいけど、それもレテイさんのものだと思うと心地よかった。

もし仮にアリシアさんとレテイさんより強くなることができたとして、ぼくはずっとこの人たちを尊敬し続けられるだろう。

しばらくレテイさんにされるがままになっていると、満足した様子のレテイさんが離れていった。

レテイさんはなんとというか、距離が近いような感じがするけど、レテイさんに心を許してもらえているような気がして心地よかった。

「ユーリ君は素直で、わたしたちをよく尊敬してくれて、本当に癒しだよ。もっと早く出会えていたら、冒険者としての生活も、もっと楽しかったんだろうね」

アリシアさんにしろ、レテイさんにしろ、冒険者としての生活に嫌気がさしているような感じがある。

ぼくたちは、アリシアさんたちのおかげで本当に楽しく過ごせているので、できれば、アリシアさんたちにもぼくたちの感じているような喜びを感じてもらいたかった。

まあ、そのためには、アリシアさんたちと対等以上にならないと、きつと難しいよね。ぼくたちは、まだアリシアさんたちに守られているだけだから。

でも、きつとすぐにそうなってみせる。

「そう言っていただけで嬉しいです。ぼくたちがアリシアさんやレテイさんを尊敬しているのは、アリシアさんもレテイさんも素晴らしい人だからです。」

だから、本当に感謝しています。これから、アリシアさんとレティさんに返していけるように、頑張りますね」

「何度も言っていることだけど、頑張り過ぎないようにね。私たちはユーリ君たちから、ユーリ君たちが思っている以上の物をもらっているよ。だから、君たちが無事でいてくれることが一番だよ」

「うんうん。ユーリ君たちと一緒に過ごすの、本当に楽しいんだ。だから、これからも一緒に居てほしいな。それだけでも、かなりのお礼になっていると思うていいから」

「もちろんです。ぼくたちは、アリシアさんたちの事が大好きですから。だから、一緒に居ることはこちらからお願いすべきことですよ」

そう言うと、アリシアさんたちは微笑む。何度でも思っていることだけど、本当にこの人たちと出会えて良かった。

それからまた、モンスターを退治しながら、連携をあれこれ試していた。

結局うまい回答は見つからなかったけど、お互い邪魔しないことだけは完璧にこなせていた。

ちゃんと合図を出しながら移動して、フィーナやカタリナが攻撃する範囲には入らないようにしたり、ノーラやアクアにユーリヤの動きをしつかり見て、攻撃が重なったりしないようにすることはできていた。

「ま、今のところは、こんなものじゃないかしら？ 新しい力を手に入れてそれを使いこなすという事は、一朝一夕ではうまくいかないと言う事ですよ。これからも練習をすることにしましょう」

カタリナの言葉にぼくも内心同意していた。いきなり完璧にこなすことができないというのは当然だからね。

でも、ぼくはこのままでは終わらせないと決意を固めた。みんなで最高のチームになることがぼくの夢なんだ。1人で最強になりたいわけじゃない。

だから、もっと連携を深めるために力を尽くす。そうすることで、良い連携が出来るようになってみせる。

そうしていると、さらにみんなから言葉をかけられることになった。

「ユーリ君、今とてもいい顔をしているよ。君たちなら安心して見ていられるね。今回の問題もきつと乗り越えられるよ」

「うんうん。そうなれば、もつとユーリ君たちはわたしたちに近づいてくれるよね。アリシアにしても、わたしにしても、あなたたちと一緒に冒険したいという思いは変わらないから」

アリシアさんたちはとてもぼくたちを信じてくれていることがよくわかる。

だから、ぼくたちでこの人たちの期待に応えたい。この人たちの喜ぶ顔を見たいから。

「ユ、ユーリさんだけに全部を任せたりはしませんよつ。わたしたちだって、もつともつと強くなつてみせますつ」

「そうね。ユーリなんかに負けっぱなしだったり、気を遣わせっぱなしってのも癪だわ。あたしはユーリより強くなるのよ」

「ユーリさんはみなさんの事を大切にしています……だから、わたしたちもあなたを大切にしてみせます……」

みんなの顔は決意に満ちている。ノーラも同じような顔をしている。うん。このチームでなら、今回の問題くらい難なく乗り越えられる。

だから、絶対オーバースカイは最強のチームになる。そう確信した。

## 53話 主従

しばらくオーバースカイとして活動する中で、チームでの連携の実力が停滞していた。

なので、いったん何か思い浮かぶことを期待して、休憩をとることに決めた。

朝起きてすぐに、アクアと手を繋ぎながら朝の支度をする。両手を使わないとどうしようもない時は、アクアは後ろから抱き着いてきていた。

ノーラがついてこようとしていたが、アクアが目線を向けると逃げていった。ほんと、ノーラはアクアに頭が上がらないみたいだ。

アクアはずっとぼくに引っ付いたままで、ぼくはいろいろと撫でまわされたりしていた。

くすぐったい時もあったけど、アクアが楽しそうだったので、すべて受け入れることにした。

「ユーリ、気持ちいい？ それともくすぐりたい？ アクアはユーリを堪能できて楽しい」

「くすぐりたいかな……でも、アクアが楽しいならばくすぐるのも嬉しいよ」  
「なら、もっとユーリを味わってあげる」

その言葉通り、アクアはぼくの全身を包み込んで咀嚼のような動きを始めた。

体の表面に刺激が与えられ続けて、それが少し気持ちいいような気分になった。

ちよつとぼくは変態みたいなんじゃないかと危機感があつたけど、アクアとのコミュニケーションを楽しんでいるだけだと自分に言い聞かせる。

しばらくアクアにされるがままになっていると、アクアはぼくを包み込んだまま会話をしようとしてくる。

「ユーリ、アクアに食べられちゃう？ アクアの栄養になって、アクアと1つになつてみる？」

アクアは冗談で言っているのだとすぐに分かったけど、ぼくはその

様子を想像してしまう。

アクアと1つに……ちょっとだけ魅力的かもしれないと思ってしまった。

もしぼくの意識が残ってアクアと意思疎通できるといふのなら、試してみたいような、恐ろしいような……。

ぼくの意識が完全に取り込まれてしまうと、アクアを感じることは出来なくなってしまうから、できれば意識は保っていたい。

そうならば……アクアの考えがぼくに伝わって、ぼくの考えがアクアに伝わる。

そして、アクアの思うがままにぼくは動かされてしまうのだ。

アクアを通してしか周りを見られないし、アクアが動かそうとしなければぼくの体は動かない。

ぼくはアクアに何をしてほしいのか祈ることしかできなくて、アクアの気分次第で叶えられるかどうかが変わってしまう。

ぼくは完全にアクアのおもちゃになってしまう事だろう。もしぼくがアクアと2人で生きているだけなら、本当にうなずいて

しまったかもしれないと思う程度には魅力を感じていた。

だけど、ぼくにはみんながいる。みんなを悲しませることになるはずだから、アクアに食べられてしまうわけにはいかない。

ああ、それにしても、ぼくは自分がいなくなったら誰かが悲しんでくれると信じられるようになったんだな。間違いなくみんなのおかげだ。

アクアがいたからぼくは強くなれて、みんなと出会えた。みんなが大切だと思えるのも、アクアのおかげだ。

ぼくはみんなにも、アクアにも、とても強い感謝を抱いた。

そうだ、アクアに返事を返さない。

アクアの体の中で、ぼくの口の中にも水が入っているような感覚だったけど、返事は問題なくできた。

「アクアと1つになるにしても、ぼくはアクアをずっと覚えていたい。アクアとふれあっていたい。」

だから、もしもぼくを食べてしまうなら、ぼくの意識を残したまま



がいいな。

でも、昔だつたらもつと乗り気だつたかもしれないけど、今はアクア以外にも会いたい人がいるから、それは受けられないかな」

「そう、残念。ユーリを食べてしまうことも、きつと楽しいのに。」

でも、ユーリと会話したり、遊んだりできる今の方が絶対に楽しいから、ユーリの事は食べたりしない」

アクアの声に真剣味があつて、少しだけ怖さを感じた。やっぱりスライムは人とは違う。

でも、だからこそぼくたちは最高のペットと飼い主になれるはずなんだ。

だって、アクアは人とは違うままぼくたち人間に寄り添ってくれている。

それってつまり、ただの人間同士と一緒に居る事より、ぼくたちの関係はもつとずっと尊いってことだ。

ぼくも人として、スライムのアクアにしつかり寄り添っていこう。ぼくたちは全く違う生き物だけど、絶対に通じ合うことができるんだ。

「あはは……食べられちゃったら、手を繋ぐこともできないからね」

「そう。ユーリと触れ合うことはとつても大切。でも、ユーリ。生きることが嫌になったら、アクアが食べてあげるね」

これは冗談ではないな。今のぼくには生きることが嫌になるイメージはできないけど、死ぬときにアクアの一部になれると思うと、悪い死に方ではないだろうな。

ぼくにとつて一番いやな死に方は、一人で誰にも気づかれずに死ぬことだ。最後の瞬間くらいは大切な人と一緒に良い。

どうしても助かりそうにない時は、アクアに食べてもらうこともいいかもしれないな。本当に。

「アクアがいてくれる限り、死にたいとは思わないと思う。」

だけど、ぼくが助かりそうにない状況で、近くにアクアがいるのなら、アクアに食べられて死にたい。アクア、その時はお願い」

「大丈夫。アクアがいる限り、ユーリは死んだりしないから。アクア

が絶対に守ってあげる。

だから、ユーリ。アクアとずっと一緒に居よう」

アクアの声がぼくの全身に響いて、アクアが守ってくれることを強く意識した。

アクア水にしろ、アクア本体にしろ、本当にぼくを守ってくれているから、アクアがいる限り大丈夫だと信じることはできる。

それでも、ぼくはアクアを支えてあげたい。

アクアにとつてぼくと一緒に居ることがとても大切だということのはつきりと分かるから、アクアを守るために死んだりはできない。

だから、戦闘で無茶をするんじゃないやなくて、アクアに幸せを感じてもらうという形で、アクアを支えていこう。

まずは、アクアを大切に感じているこの思いを、はつきり言葉にすることからだ。

「もちろんだよ。ぼくはアクアとずっと一緒に居る。アクアの事が大好きだから。

これからも、手を繋いだり、こうして取り込まれたり、一緒にいるいろんな遊びをしようね」

「ユーリ……い。うん！ アクアもユーリの事が大好き。ユーリとアクアが幸せになれるように、頑張るから！」

「ありがとう、アクア。でも、今アクアやみんなどと一緒に居るだけでもぼくは幸せだから。あまり無理はしないでね」

「大丈夫。アクアに限界なんてない。それに、無理をしたらユーリと遊ぶ時間が減っちゃう」

それが理由だなんて、本当に頼りになることだ。それに可愛らしい。

でも、アクアがそこまで求めてくれているんだ。これからも、しっかりアクアと遊んでいこう。

それから少しして、ぼくはアクアの外に出された。アクアはとっても満足そうな顔で、ぼくも嬉しくなる。

アクアに取り込まれる感覚にもずいぶん慣れて、前より気持ちよさが増したかもしれない。この感覚に溺れてしまわないように気を付

けよう。

アクアに取り込まれていて気づいたけど、ぼくは連携しようとはばかり考えて、相手に合わせることを意識しすぎていたかもしれない。

結局、連携がうまくなることが最大の目的じゃなくて、ぼくたちみんなで生き延びることが最大の目的なんだ。

これからも連携の練習はするけど、敵を倒せさえするのならば、連携がうまい戦いが正解ってわけじゃない。

落ち着いて自然体を大事にする。アクアの中でゆっくりしていたからこそ気が付いた。

「アクア、ありがとう。アクアに取り込まれていたおかげで、悩みが少し解決したような気がする」

「それは偶然。でも、ユーリの悩みは気になる」

「連携がうまくいかないことに悩んでいたんだけど、こだわり過ぎるのも良くないかなって。」

みんなが無事でいられるのなら、それが正解なんだよ、きつと」

「そう。でも、ユーリ。アクアには全力で頼ってくれていい。ユーリのためならどれだけだって強くなってみせる」

アクアはとてもまじめな顔をしているから、本当にそう考えていることがよくわかる。

どれだけでも、か。伝説のオメガスライムくらい強くなっちゃいそうなくらいの気迫があるよね。

本当にそんなに強くなってしまうと、ぼくが何もしなくても全部解決してしまいそうだな。アクアに頼ってもらえることはなさそうだ。

「ふふっ、どれだけ強くなってもいいけど、それでぼくの居場所が無くなっちゃったら困るかもしれないね」

「ユーリの居場所はアクアのそば。たとえ戦闘で役に立たないとしても、絶対に離してなんてあげない」

アクアはそう言ってくれる。

そうだよ。アクアとぼくは2つで1つ。アクアが役に立たない存在だったとしても、ぼくがアクアを捨てるなんてことを考えるはずがない。

アクアも同じように考えてくれていることが伝わってくる。

だから、アクアの絶対に離してあげないという言葉がとても魅力的に感じて、もうぼくはアクアから離れることはできないと確信した。

「そうだね。アクアに捕まっちゃってるよ、ぼくは。」

でも、それが心地いい。こんなに幸せなんだから、アクアと別れることはできないね」

「ユーリの心、捕まえちゃった。なら、体も捕まえる」

アクアは体を変化させて、手枷や足枷のようにぼくを拘束してしま  
う。

全く動けないようになったぼくだけれど、アクアに捕まっていると  
思うとなんだか楽しくて、全く逃げる気にはならない。

「身も心も捕まっちゃったね。どんなひどいことをされちゃうのかな  
？」

「ふふ。全身くすぐりの刑」

その言葉通り、アクアに捕まったまま全身をくすぐられてしまう。

ぼくは笑いをこらえきれなくて、ずっと笑いつぱなしになってし  
まった。

そのまま、されるがままになっていると、苦しくなる直前くらいに  
くすぐりから解放される。

手足は解放されないまま、アクアは人型の部分と手枷足枷の部分に  
分かれて、ぼくの全身を軽く囓んでくる。

「アクアに美味しく食べられちゃうー。だれか、たすけてー」

「助けなんて来ない。ユーリはアクアに美味しくいただけられる」

しばらくそんな感じでアクアとじゃれあっていた。

その間ずっとアクアに拘束されていたけど、なんだか心地よくて、  
ぼくはアクアからもう逃げられないと確信した。

「ふふつ、アクアが世界を滅ぼす怪物だとしても、もうアクアからは離  
れられないや。ぼくをこんな風にしちゃったんだから、ずっとそばに  
居てね」

「当たり前。何があっても逃がさない。ユーリ、覚悟して」

## 裏 感情

ミアとユーリの出会いは、アクアが意図したものではなかった。さつきまでどころか、今でも敵としか思えない相手を助けようとするユーリのお人好しぶりにアクアは呆れる。

同時に、そんなユーリだからこそ今でも自分と一緒に居てくれるのだという考えが浮かんだ。

ユーリは覚えていないだろうが、ユーリの両親とユーリが離れ離れになるきっかけはアクアだったのだ。

それでも、ユーリはアクアを恨むどころか、それまでよりずっと大切にしていた。ユーリのその姿勢がきっかけで、自分に感情が生まれたのだとアクアは認識していた。

ユーリは今も昔もアクアにとって大切な飼い主で、ユーリにとってアクアは同じように大切なペットに違いない。アクアはユーリを守るとの誓いを再び確認した。

ユーリが自分を大切にしてきている事はミアの契約者とユーリの問答にも表れている。モンスターと人との関係を重要視していることから明らかだ。

アクアはユーリに惚れ直したような心地で、ユーリの一言一言を楽しんだ。

だが、ミアがユーリに対して特別な契約を交わしたことはアクアにとつてとても大きい不満になる。

それでも、アクアはユーリとミアの契約を妨害しなかった。

その理由として、ミアの姿にユーリと出会えなかった自分の姿を見たことが大きい。ユーリと出会えなかった自分にはきつと何もなかった。

ミアには今も何もないはず。ミアはそんな状況の中でユーリに一筋の希望を抱いたのであろう。

だから、ミアは自分の命をユーリに捧げてもいいと感じたに違いない。

アクアはミアにはつきりと同情していて、それゆえにユーリにミア

の力をしつかり使うように言った。

それから、ミアの力が身体強化の力だとはつきりしたことで、アクアはユーリに対してさらなる強化を施すことに決めた。

これまでは、契約技を持つていない人間として違和感のない範囲でユーリを強化することしかできなかった。これからは、もつと強くユーリを強化することができる。

そうすることで、いままでより格好いいユーリの姿を見られるはずだ。アクアは強くなったユーリを妄想しながら、ユーリの体をさらに調整した。

アクアの狙い通り、ユーリはとても強くなった。

しかし、それによってオーバースカイの連携が乱れていることは問題だった。

ユーリが強くなって活躍していることはとてもいいことだ。アクアはそう感じながら、ユーリを直接支えたいという欲求の行き先を失いかけていることを危惧していた。

アクア自身がユーリに並ぶほど強くなってしまうと、誰かに違和感を持たれかねない。

アクアにとって、ユーリの全力でさえ自身の1割程度にすら遥かに及ばないことははつきりしていた。

その全力をいかんなく発揮してしまった未来で、ユーリと離れ離れになるかもしれない。

アクアはその恐怖と、ユーリの隣でユーリを支えたいという思いの間で板挟みになっていた。

そんな中で、アクアは自分が操作している人物を強化するという考えを思いつく。

カタリナを強化する手段はすでに構築していて、後は時間を待つだけとなっていた。

ユーリヤを強化する手段もアクアの頭の中には有ったが、アクアの中に有るほんのわずかな良心がその実行を止めていた。

ユーリの親しい人を新しく利用することはやめておく。今のアクアはそうすることに決めた。

フィーナはすでにユーリの役に十分たっていると判断できたので、強化を検討はしないでいた。

ユーリの周りの人間の強化を検討していく中で、アクアは本当の自分をユーリにさらけ出してしまいたいという思いを感じていた。

ユーリの周りの人間を操っていることだけは、絶対に知られてはならないとの思いは変わっていない。

だが、オメガスライムの性能を存分に発揮した姿をユーリに見せてみたいという考えがアクアにはあった。

ユーリはオメガスライムであるはずの自分を可愛がってくれるだろうか。頼ってくれるだろうか。

考えたくないことではあるが、恐れてしまっただろうか。嫌われてしまっただろうか。

アクアはとても悩みながら、ユーリとオメガスライムの性能を生かした遊びをしたいという願望と向き合っていた。

それからしばらくたって、アクアとユーリが二人きりで過ごす日がまた訪れた。

アクアはユーリともっと距離を近づけたいと考え、積極的に自分から近づいていった。ユーリはアクアのなすがままになっていて、アクアはユーリの信頼を感じて満足していた。

そんななか、ユーリに対してアクアが冗談で言った、ユーリを食べるというセリフを受けて、ユーリは真剣に考えていた。

アクアはユーリを食べてしまう気など全くなく、本当にユーリをかからかっていただけであつたが、ユーリのその姿を見て、少しだけユーリを食べることを考えてしまう。

結局、ユーリと離れ離れになることの方が、ユーリと1つになることのメリットを上回るとアクアは結論づけた。

だが、ユーリの台詞である意識を残したまま1つになるという案を聞いて、アクアはその未来も魅力的だと感じた。

ユーリの考えていることをずっと感じて、ユーリの望みを叶えたり、ちよつと裏切ってみたり。

ユーリに自分の感情を送り込んで、ユーリを大好きだということをし

直接伝えたり、ユーリの感情を受け取ってユーリの大好きを感じたり。

それなら、他の人たちと一緒に食べてしまってもいい。カタリナも、ユーリと1つになることをきつと喜ぶ。

ユーリヤに本当の人格を作ってみることもいい。フィーナの本当の感情を伝えさせるのもいい。

とてもたくさんのアイデアが思いついて、アクアは幸せな妄想に浸った。

それでも、ユーリを食べてしまうことはきつとない。ユーリと別々の存在だからこそできる触れ合いを、目いっぱい楽しむのだ。アクアはそう決めた。

だけど、ユーリが死んでユーリと離れ離れになる未来の避け方は分かった。

いつかユーリが生きていられなくなった時には、ユーリを食べて永遠にユーリと1つになる。そんな未来は来ないに越したことはないけれど。アクアはずつとユーリと触れ合っていられるように願った。

それから、ユーリが自分のことが大好きだと言った。最近のユーリは好きだと積極的に伝えてくれるから嬉しい。アクアはユーリの好意が本当に喜ばしいと感じていた。

ユーリは本当にいろいろと変わった。これからも変わっていくだろう。

それでも、ユーリがアクアの事を好きでいてくれることには変わらない。アクアはそう信じていた。

それからアクアは、ユーリに対してどの程度力をさらけ出すか考えるために、ユーリに少しづつ探りを入れていった。

ユーリは本当に自分の事を受け入れてくれているということが分かったアクアだが、どこまで力を発揮するかのはまともならなかった。

ただ、ユーリに対して積極的に迫っても、ユーリを完全に拘束してもユーリは苦しそうにするどころか、心地よさすら感じている様子だ。



自分の体を心地よいと感じるようにユーリの体を調整しているが、それでユーリの感情を操作しているわけではない。

つまり、ユーリの恐怖を消し去れるわけでも、ユーリの好意を生み出せるわけでもない。

そんな中でも、ユーリは自分に何をされても受け入れている。アクアは頭の中で何かははじけそうな感覚になっていた。

その日にユーリが発した言葉、アクアが世界を滅ぼす怪物だとしても離れられない。

その言葉を聞いたアクアは途轍もない歓喜に襲われていた。

ユーリの前でははしたない姿を見せられないと考えて、動きや表情を抑えていたアクアだが、それからずっとユーリとの未来について考えていた。

本当に世界を支配して、ユーリと自分だけの楽園を作ってしまったおうか。そんな欲求すら芽生えていたが、ユーリの周囲に対する好意を台無しにすることは避けようと思いなおした。

それから、アクアはユーリの周りにいる人たちについて考えていた。

カタリナは、ユーリにとって大切な幼馴染で、ユーリをこれまででも助けてきた存在。

アクアにとっても今でも大切だから、いつか和解できないかという希望が消せないでいた。

カタリナに体を返して、ユーリとカタリナと一緒に過ごす。そうできたらどれだけ幸せだろう。

でも、カタリナはきつと許してくれない。怖さと罪悪感からカタリナの感情を読んではないアクアだが、カタリナに嫌われてしまっていると確信していた。

ステラは、ユーリの尊敬する先生で、今は帰るべき場所を守る人。アクアはステラに恨みがあったわけでは無いから、必ずしも支配しなればいけない人ではなかったのではないかと考えた。

ステラは今でも眠っているだけのような状態だから、体を返すことはできる。

問題は、その間の記憶の齟齬をどう埋めるかということだった。

アクアの持っている記憶をステラに植え付けるということも選択肢としてあったが、実験が足りないからうまくいくとは限らない。

アクアは少なくとも今はステラに体を返さないと決めた。

アリシアとレティは、ユーリの尊敬する師匠。

アクアはアリシアとレティを取り込まなくて済む未来が来てほしいと考えていた。

2人がユーリを傷つけようとしたら、自分は必ず2人を支配する。それを確信していたからこそ、ユーリの尊敬を損なわない2人でいてほしいとアクアは願った。

ユーリヤは、ユーリの大切なパーティメンバーで、守るべき相手の1人。

ユーリヤというキャラクターを作ったことは正解だったと考えているアクア。

だが、ユーリの好意を受け入れる器としてのユーリヤは、アクアほど気に入られていない。

人間としての感情を学べなかった以上、ユーリヤを単なる人間では無くしても良いかもしれない。

アクアはユーリヤとユーリが結ばれる未来が来ないと予想していた。

だから、ユーリヤに人間としての役割を求めることをやめるか検討を始めた。

サーシャは、ユーリにとってよく支えてくれる人。

サーシャがユーリに仕掛けた謀略は許せないアクアだが、サーシャを憎んでいるわけではない。

だから、サーシャの人格を完全に消し去ろうとはしなかった。

サーシャが悪辣さを捨て去ることができたなら。アクアはほんの少しの期待を抱いた。

ミーナは、ユーリにとってのよきライバル。ヴァネアは、今のところミーナのおまけ。

アクアはユーリの格好いい姿を見るきっかけになったミーナに相

応の感謝をしていた。

またユーリとミーナが出会って、お互いに高めあう姿はきつと楽しい。アクアは未来に期待していた。

オリヴィエは、ユーリもまだよく分かっていないはず。

ユーリの事をおもちやのように扱っているオリヴィエだが、ユーリは嫌がっていないし、ユーリを傷つける行動もしていない。

また出会うことがあったとして、ユーリの事を大切にしてほしいとアクアは期待した。

ノーラは、ユーリの新しいペットでとてもかわいい存在。

出合いは偶然ではないにしろ、ユーリにとって大切な存在であることは間違いない。これからオーバースカイにとっても大切な存在になる。

アクアはこれからのノーラを想像することを楽しんでいた。

フィーナは、ユーリはきつとまだ同情半分で接している。

とても役に立つ力を持っているフィーナだが、想像以上に大きな役に立っている。

だから、フィーナに自分の幸福をおすそ分けしてもいいかもしれない。

ミアとの出会いを経て、アクアはフィーナへの感情をはつきりときせていた。きつと寂しかったはずだから、少しくらい幸せでいい。自分の邪魔をしないなら。

アクアは他者への共感の味を知った。悪くないが、ユーリという喜びほどじゃない。そう感じたアクアだが、ユーリ以外の他者を見ることが、単なる退屈な作業ではなくなっていた。

アクアはユーリ以外の他者について考えて、ほんの少しユーリ以外の事での喜びを理解した。

ユーリが一番であることに変わりはないが、ユーリを幸せにしてくれて、自分の邪魔をしないのなら、必ずしも排除するべき存在ではない。

そう考えるアクアには、わずかではあるが善性らしきものが生まれたのかもしれない。

## 裏 渴望

カタリナはいつものように、アクアの操る体でユーリを見続けていた。

そんななか、ユーリに新たな出会いがあった。

フィーナというこれまた新しい女であり、カタリナは再び不機嫌になりながらもフィーナに警戒していた。

(フィーナさんの現れるタイミングがちょうど良すぎる。この人は自分がチームに入りやすくなる瞬間を見計らっていた?)

これまで全く見たことのない人間が、オーバースカイがピンチに陥った瞬間に現れる。カタリナはそこに何者かの作為を見た。

ユーリを傷つける可能性のある人間かもしれないと警戒していたが、カタリナがフィーナの目を見た瞬間に別種の警戒へと変化した。

(この人、ユーリを見る目だけが違う。他の人は普通に見ているのに、ユーリを見ている時だけは感情が目に見えるよう。まさか、ユーリの事が好きだから、オーバースカイに?)

カタリナはユーリの周りに女が増えていくことがとても不満だった。

しかし、操られている自分が何かできるわけでは無いし、仮に自分の体が自由だったとして、ユーリの周りの女を積極的に排除するような真似は出来ないだろう。

ユーリは案外周囲への悪意には敏感だ。ユーリから女を引き離そうとすれば、感づかれかねない。

ユーリと結ばれることを夢見るカタリナにとって、それは致命的な展開といえた。

(この人のおかしな力をユーリは受け入れているし、フィーナさんは本気になりかねない。ユーリは押しに弱いところがあるから、積極的な姿勢を見せる女に奪われる可能性が一番高いはず。

嫌よ……ユーリがあたしの物になって、あたしはユーリの物になる。そうなつてくれないと、あたし……)

カタリナは自分以外の女にユーリを奪われるという想像をするた

びに、心に針が刺さったような感覚を受けていた。

ステラにアリシアとレティにサーシャ、それとユーリヤにフィーナ。

自分からユーリを奪うかもしれないと思える女がとても多くいて、だからカタリナはユーリが奪われる想像を何度も繰り返してしまふ。

(ユーリ……あんとまた、くだらない話がしたい。あたしが意地悪を言っつて、あんたが適当に流して。あたしの料理を食べさせたり、一緒に冒険の話をしたり、モンスターをぶっ飛ばしたり。

あんととの日常があたしにとつてどれだけ大切か、よく分かったわ。あんだだつてあたしが大切でしょう？ そうじゃなきやあたしのために何度も必死になつたりしないわ)

ユーリとの思い出を繰り返しても、ユーリを眺めていても、カタリナの精神への負荷は消えない。

カタリナはユーリへの好意を自覚してからずっとため込んでいたユーリとしたいことを思い出して、精神を落ち着かせようとする。

(あんとと手を繋いだり、キスをしたり、そんなんじや全然足りない。今まで触れられなかった時間を取り戻すためには、もつと深い関係にならないと。ユーリがあたしを必死に求める姿を見られたらいいわね)

ユーリの事を考えている以外でも、ノーラの存在がカタリナの癒しになることもあった。

カタリナはもともと可愛い生き物が好きだったが、手間がかかることが嫌で飼おうとはしていなかった。

ノーラはとても賢いうえに、ユーリがほとんど世話をしているの  
で、単純に可愛がることだけができそうだ。

なので、そうすることを考えて楽しむ中で、少しだけ懸念ができた。  
(ノーラの性別はどちらなのかしら？ ユーリにあんなに甘えている  
モンスターがメスなら、進化した時にとっても危険じゃないかしら？

モンスターと人間の間に子供はできないとはいえ、結ばれること自体はできる。あの態度の女なんて、情欲を抱かない男がいるのか怪しいくらいよ)

モンスターの上、ノーラが進化したとしても人型になるとは限らないが、カタリナはノーラが人型になる前提で考えを進めていた。もはやカタリナにとつてユーリと接する全てがユーリを自分から奪いかねない存在に見えていた。

（ノーラはあたしにも甘えてきているから、あたしからユーリを奪わないと信じるしかない。もう最悪なら他の女もユーリの物になっていいわ。あたしが1番でさえあれば。

ユーリ、いっぱい一緒にいろいろなことをしましょ？ 他の女としたことは、全部あたしともやってもらうから、しつかり準備しておきなさいよ）

カタリナは最後には自分がユーリの隣にいるのだと信じていたくて、ユーリを奪われてしまうかもしれないことが恐ろしくて、考えがあちこちに飛んでいくようになる。

（ユーリは確か勲章をもらったのよね。あれがあれば、あたしも色々できるかしら？ ユーリに勲章を渡したのはオリヴィエ様なのかしら。王都での大会つて言つてたはずよね。

アクアとあたしとでユーリを共有するつてのはどうかしらね。結局何をしてもユーリからアクアは離れたりしないんだから、恨みだけ持つていてもどうしようもないわ。

ユーリがあたしと結ばれるときにはどんな顔をするのかしらね。絶対嬉しい顔だけれど、余裕のあるあいつなんて想像できないわ。なっさけない顔しそうよね）

いつになったらアクアは自分を解放してくれるのか。もうアクアは自分の事なんてどうでもよくなつてしまったのか。

アクアが自分の事を大切に思ってくれているはずだと信じようとするカタリナだが、諦めも浮かびだす。

（あたしが死ぬまでずっとこのままだったらどうしよう。それで、ユーリと誰かが幸せそうにするのを横から眺めることになるの？

アクア、助けてよ……ユーリと3人でまた過ごすのよ……）

カタリナは1人でずっと考え続けることに疲れ切っていた。今アクアがカタリナの意識に話しかけてもすれば、とても喜んで会話をし

たであろう程に。

考えの内容もそろそろ限界に近づいて、同じ考えが再び浮かぶと自覚することも多くなっていた。

カタリナはとてまた新たな刺激を求めていた。

カタリナが望んだ形かはさておき、新たな刺激自体はそう遠くないうちに訪れた。ミアという契約モンスターとの出会いから始まった。

(ユーリのやつ、ただの敵にまで気を配るようになるなんて。お人よしも度が過ぎているのよ)

ユーリが大切にしている相手は自分と、百歩譲ってアクア。それだけでいいと考えているカタリナにとって、ユーリの他者への優しさは煩わしくもあった。

しかし、ユーリの優しさによってオーバースカイが手に入れているものも多く、完全には否定しきれないでいた。

(ミアさんのこれ、契約なのかしら？ だとすると、ユーリはまた新しい力を手に入れたことになる。まさか、これもアクアの仕込み？ そんなわけないか。

あたしを取り込んだのもアクアの独占欲が原因のはず。そんなアクアが他の相手とユーリが契約をすることを許すとは思えない。偶然でしょうね。

それにしても、ユーリはずいぶん偶然に恵まれるものね。アクアだって危険性を除けば大当たりどころの話ではないし。それがあたしとユーリの幸せに繋がってくればね)

その時点では楽観的にユーリの新たな力について考えていたカタリナだったが、すぐにその考えを改めることになる。

オーバースカイがうまく連携できないほどに力を高めたユーリ。その姿を見ていたカタリナに、心底恐ろしいビジョンが浮かぶ。

それは、強くなったユーリについていけなくなったカタリナを、ユーリが捨て去ってしまうという物だった。

(ユーリ……あんだ、そんなに強くなっちゃったら、もうあたしの弓なんて必要ない？)

……嫌！ ユーリ、あたしの傍にずっといてよ……あんだがいたか

ら、あたしは頑張れた。あんたを好きだって自覚してからよく分かったのよ。

あんたを死なせたくないし、あんたとずっと一緒に居たい。そのために強くなったのよ)

カタリナは長い間自覚していなかったが、相当な期間ユーリの事を好きでいた。

ユーリは弱くて頼りないにもかかわらず、ずっとチームを組んでいたことはそれが原因だった。

ユーリという時間を守るためだからこそ、辛い訓練に耐えることもできた。

そんなカタリナにとって、ユーリから必要とされなくなることは絶対に避けたい、何よりも恐ろしい事態だった。

(ああ、今ようやくアクアの気持ちがあつたような気がする。ユーリから必要とされなくなるって、こんなに怖い事なのね。

それは、アクアも我慢できないはずよね。ユーリと離れ離れになる可能性を本気で想像しちゃったりなんてしたら。

アクア、最初からユーリとあなたを引き離すつもりなんてなかったのよ。だから、安心して良いのに)

カタリナのアクアを許せないという気持ちより、ユーリと引き離されたくないという思いの方が上回ることで、アクアとの未来を考える余地が生まれていた。

アクアを許すほど納得できたわけでは無い。それでも、ユーリと一緒に居られない未来より、誰が他に居ようとユーリと一緒に居られる方が良い。

カタリナはユーリだけは何があつても失いたくなかった。

(もう他の女を見るなんて言つてられない。ユーリ、あんたがあたりを求めてくれるならそれだけで……)

素直になれって言うならなるわ。都合のいい女が良いならそれでもいい。浮気だって許してあげる。

だから、だから……あたしの事を絶対に手放さないで。強く捕まえていてよ。あたしはあんたの事だけが好きなのよ……)



カタリナはユーリが自分を捨て去ることを思いついた時からずっと感じていた寒さから逃れようと必死だった。

この寒さが無くなってしまうのなら、きつとどんなことだってできる。悪事でも、辛い事でも。

自分だけがユーリと結ばれたいという思いに蓋をしようとした。

ユーリと別々の未来を歩む結末だけは避けたいとカタリナは必死だった。

(ユーリ、あんだという時間だけがあたしの幸せなの。お願いだから、その幸せを奪わないで。あんだだってあたしと一緒に居たいでしょ？ そうだと言って……)

ユーリといられる時間以外なら、あんだが全部あたしから奪っていい。あんだ、こんな機会は無いんだから、あたしのことを貰ってよ……)

## 54話 アリシアと

今日はアリシアさんと2人で出かけることになっている。明日はレティさんとだ。

水刃という2つ名がついたご褒美とのことだけれど、その中でいろいろな遊びを教えてください。

待ち合わせ場所へと到着すると、すでにアリシアさんがいた。

普段は戦闘のための格好をしているアリシアさんだけど、今日はおしゃれをしていて、少し見惚れてしまう。

結構肌が出ている格好で、目のやり場に困る感じかもしれない。

「おはよう、ユーリ君。そんな顔をしてくれるなら、珍しいことをした甲斐があるという物だよ。今日は私にエスコートされて、普段の息抜きにでもするといいわ」

「わ、わかりました。今日の事を楽しみにしていたので、しっかりその分を楽しんでいこうと思います」

「ふふっ、ユーリ君がそう言うのなら本当に期待していたんだろうね。ユーリ君、今日はよろしくね」

アリシアさんとあいさつを終えると、アリシアさんに手を引かれて移動をすることに。

アリシアさんの手は思っていたより柔らかくて、強い戦士といえど女の人ののだと感じて結構照れる。

ぼくの手は、たぶんゴツゴツしてるんじゃないかな。剣を普段振っているわりにはボロボロではないと思うけど。

最初に連れられたのは広場のような場所だ。ただ広いだけで何もない空間のように感じる。ここでアリシアさんは何をするつもりなんだろう。

「ユーリ君、私達はお互い契約技使いだ。それを遊びに使ってみるのも面白いんじゃないかと思ってね。こんな遊びはどうかかな」

アリシアさんが説明してくれたところによると、頑丈なボールを用意したので、それをお互いの契約技を使いながら押し合うというらしい。

ある程度障地を設定しておいて、その範囲に入ったら1ポイント入って仕切り直しという形だ。

直接ボールに触れずに契約技のみでボールを動かすことになるので、衣装は恐らく汚れないだろうとのことだ。

1度試しに遊んでみたところ、アクア水でボールを包み込むことは禁止になった。アクア水の上から風でボールを動かすことができないからだ。

それから何度か試してルールを調整していった結果、契約技の大きさをある程度絞って、技を同時に使える数はお互い同時に5個まで。

その中で契約技をボールにぶついたり、契約技同士で妨害があったりして遊ぶという形になった。

ルールが決まった後からの遊びはとても白熱した。契約技を出しておいて相手の動きを誘導してみたり、何も無いところに急に契約技を出してみたり。

ボールを直接狙うこともすれば、相手の動かすボールを自分の設置しておいた契約技の場所へと誘導もする。

とても熱中してしまっただけでかなりの時間がたって、次の試合が最後ということになった。2点先取が時間的にちょうど良くて、最後はそのルールで遊ぶことに。

「単なる思い付きだったけど、ここまで楽しい物になるとはね。それに、契約技の使い方の訓練にもなるかもしれない。我ながら良いことを思いついたものだよ。」

最後の試合だからね。しつかり勝たせてもらおうよ、ユーリ君」  
「アリシアさんが相手でも、勝ち譲りません。勝って楽しい思い出で終わらせますよ」

ボールを上を吹き飛ばして、着地した時が試合の始まりだ。お互い、真上にボールを飛ばすことくらいは安定して行えた。

ボールが地面に着いた瞬間、ぼくはアクア水の1つをボールへ向けて飛ばし、残り4つを自分の障地の近くで障形を組ませるといふ戦術をとった。

アリシアさんは風をまとめて5つともボールへ向けて動かしている。初動はぼくが不利で、かなり手前にまで押し込まれてしまう。だけど、陣形を組んでいたことが功を奏して、いきなり自分側の陣地に入られてしまうことは避けられた。

そのまま中央まで押し返すことに成功すると、陣地同士を繋ぐ線とは垂直にボールが吹き飛ばされてしまい、アクア水ではボールに追いつけなくなる。

即座に風でボールを動かしたアリシアさんが先に点を取る。

失敗したな。ボールに追いつこうとするんじゃないやなくて、陣地を守っていればよかった。

次はアクア水でボールを吹き飛ばしあつて軌道を読めなくする作戦を試してみたところ、前に進もうとしていただけだとアリシアさんに対応されていた。

そこで、後ろや横にボールを動かすと、うまくアリシアさんが対応できなくて、1点を返す。

最後の1点でも同じ戦術を取ろうとすると、アクア水のいくつかに風を張りつかせてぼくの動きを誘導したアリシアさんに破られる。

それでも、アクア水を消して別の場所へ出現させたり、捨て駒としてのアクア水を用意したりした。

いったんはアリシアさんの動きが遅れたが、また対応されていく。どンドンぼくの陣地の方へ押し込まれていった。

何か手はないかとずっと考えていると、ある手段が思いつく。

それは、ボールの周囲に同時にアクア水を出現させて、どれかに当たったらボールを吹き飛ばしてアクア水をすべて消し、また同じことをするというものだった。

ある程度アリシアさんの陣地のそばにその手で押し込むと、アリシアさんはボールだけに集中して風を出し始める。

ボールの周囲は風で囲まれていたが、いったんアクア水を外すとボールが大きく動き、お互いの契約技の影響を受けない形に。

そこにまとめてアクア水をぶつけて一気に加速させると、アリシアさんの風では押し返しきれずに、アリシアさんの陣地へとボールが

入っていった。

これで2点先取。ぼくの勝ちだ！

「ふふっ、結構本気だったんだけどね。負けてしまったよ。でも、本当に楽しかった。ユーリ君はどうだった？」

「とても楽しかったです。契約技を遊びに使うというのもいいですね。中々遊び相手は見つからないでしょうけど、似たようなことは、またやってみたいです」

「それは何よりだよ。せっかく手に入れた力なんだから、戦闘だけにしか使わないというのは勿体ないよね。人を楽しませることも出来るんだから、良い力だよ」

「アクア水はとても役に立つ技だけど、遊びに使っても楽しいというのは考えていなかったな。」

まあ、競技のようなことをするのはとても難しいだろうから、アクアやほかのみんなと遊ぶことは厳しいかもしれないけど。

次はアリシアさんと食事をしていた。立ち歩きながら色々食べていて、アリシアさんの好みが肉と野菜を同時に食べられるものだという事も知った。

「ユーリ君は魚料理が好きなんだよね。そういう店に連れていけないのは申し訳ないね。でも、結構美味しそうに食べていて安心したよ」  
「魚料理が好きなのは確かですけど、嫌いなものはほとんどないですから。それに、アリシアさんの好きな料理をアリシアさんと一緒に食べるのって、とっても楽しいです」

「レテイじゃないけど、ユーリ君は本当に可愛らしいね。こんなに懐いてくれる人って見たことが無いけど、とても気分が良いものだよ」  
懐くって言い方だと犬猫みたいな感じに思える。アリシアさんが大好きで、よく甘えてしまっているのは事実かもしれないけど。

でも、ぼくの態度でアリシアさんが喜んでくれるなら、それでいいか。アリシアさんも穏やかな表情をしてくれているし。

そのまましばらく歩いてみると、ちよつとしたトラブルに見舞われることになった。

アリシアさんに男が寄って行って口説こうとし始めたのだ。

「よう、姉ちゃん。俺とどっか行って遊ばねえか？ いい思いさせてやるぜ」

「はあ。人と一緒に居るのが見えないのかな？ じゃまだから、さっさとどこかに行ってくれないかな」

「こんな坊主より、よほど俺の方が良い男だろうぜ。こんな奴はほつといていいだろう？」

適当に流している様子のアリシアさんが、その言葉で雰囲気を変え

る。「そこらの有象無象が、彼を超えられるとでも？ それに、私が知り合いを放って男遊びにふけると思われるのも不愉快だ。今のうちなら痛い目を見せないであげるけど？」

「痛い目って、女ごときに何が出来るとてんだよ」

アリシアさんはその言葉を男が言うと同時に男を風で吹き飛ばす。とても冷たい目で男を見ながら言葉を続ける。

「さすがに殺すつもりはないが、腕の1本や2本くらい折ってしまっても構わない。お前のようにつまらない虫けらに口説ける女じゃないんだよ、私は。……さっさと消えろ」

男は慌てて逃げていく。アリシアさんは底冷えしそうな雰囲気のまま男を見送っていた。

少しどころではない位に怖い雰囲気のアリシアさんだけど、ぼくとの時間を邪魔されたから機嫌を損ねているのだと感じて、嬉しくな

った。

アリシアさんはこちらを見ると、すぐに優しい雰囲気になる。「ごめんね。怖がらせてしまったかな。でも、せつかくの楽しい時間を邪魔されたんだから、あれくらいは許してくれると嬉しいな」

「いえ、とんでもないです。ぼくとの時間を楽しいと思ってくれているのなら、それで十分です」

「ありがとう、ユーリ君。ユーリ君みたいないい子の弟子ができて、本当に嬉しいよ」

アリシアさんはとてもきれいな笑顔を見せてくれた。この顔が見られたのなら、さっきのつまらない時間には十分な見返りだよ。

「そうだ、君には私たちの家を紹介しようと思う。明日にもどうせ来ることになるだろうけど、一応ね」

そのままアリシアさんに手を引かれてアリシアさんたちの家へと向かう。

アリシアさんたちの家は風刃という名前に見合わないくらいの大きさで、結構小さいと感じた。

「君たちの家に比べれば質素なんだろうけど、大きい家は管理が面倒だし、他の人間に管理を任せる気にもならないからね。これくらいで丁度いいんだ」

ぼくたちの家も、ステラさんが管理してくれなければ大変だろうし、それは納得できるかもしれない。

そのままアリシアさんたちの家へと入っていく。

「ようこそ、私達の家へ。レティは今は外してもらっているから、2人きりだね」

そう言われると少し照れてしまう。そんなぼくを見たアリシアさんは微笑みながら話し続ける。

「まあ、あまり物が無いから、もてなしは上手く出来ないだろうけどね。私の部屋へ入るといい」

アリシアさんについて行って、同じ部屋に入る。

アリシアさんの部屋はあまり物がなくて、趣味があるのか怪しいと感じるくらいだった。

「ユーリ君、君は柔軟はしている？ いや、やっているよね。あれだけ動けるんだし」

「まあ、最低限は。何か教えていただけののなら、聞いてみたいです」  
「いや、そういう訳じゃなくてね。2人で柔軟でもやってみない？」

1人だとできない事もあるし、レティは体の構造が違うからね」

「わかりました。お願いします」

アリシアさんと柔軟をしていると、アリシアさんの体としっかり触れ合うことになってしまい、少し緊張していた。

そんななか、アリシアさんのお尻に強く触れてしまうことがあった。

アリシアさんはスレンダーなイメージだったけど、お尻は大きくて柔らかいな。いや、そうじゃない。

「ご、ごめんなさい。手が滑りました。緊張しちゃって……」

「別に気にしてなかったのに。……いや、そうか。ユーリ君、女所帯で性欲をうまく解消できている？」

とんでもない事を聞かれてしまう。どう答えればいいのかな。

というか、ぼくの顔は真っ赤じゃないのかな。アリシアさんの言葉を聞いて、先ほど触れてしまったお尻に目を向けてしまう。

「ふふっ。ユーリ君は私を見てそういう気分になるんだ。情欲の目を向けられる事は不愉快なだけだったけど、それは相手がどうでもいい奴らだったからみたいだ。今は少し面白いくらいだよ。」

ユーリ君、どうしても我慢できなくなったら、私が手伝ってあげよ。チームメンバーにそういうことは言いづらいだろう？」

「そんなことをしたら、子供ができてしまうんじゃない？」

「そこまではしないよ。部屋を貸してあげたり、見ていてあげたりしてくらい。私の事を見たいならそれでもいいよ」

それって、アリシアさんの前で、色々するってことだよな。そんなの耐えられそうにない。

「え、遠慮しておきますっ。い、いえ、アリシアさんの事が嫌なわけでは……」

「わかっているよ。でも、その問題にはしっかりと向き合った方が良いでしょう。じゃあ、またね、ユーリ君」

アリシアさんはそのままぼくを家へと連れて行ってくれた。アリシアさんの意外な一面をいろいろ見ちゃったな。でも、アリシアさんは優しい人だと再確認できた。



## 55話 レティと

ぼくは昨日のアリシアさんに続いて、今日はレティさんと出かけることになっていた。

人と出かける時にはいつも相手が先に来ているので、今日はいつもより早めに来ていた。

しばらく待っていると、レティさんがやってくる。

「ユーリ君、随分早いね。わたしも結構早く来たつもりだったのに」

「相手より後に待ち合わせ場所に来ることが多かったので、早めに来ることにしたんです」

「ユーリ君の事だから、時間には間に合ってるんでしょ？ だったら、そこまで気にしなくてもいいんじゃない？」

「そういう物でしょうか。まあ、今回はレティさんをお待たせしなくて良かったです」

そう言うと、レティさんはすぐにぼくに抱き着いてきた。

レティさんに抱き着かれるのにも慣れてきたな。なんだか犬猫みたいに思われている気もするけど。

「ユーリ君ってば本当にいつも可愛いよね。お姉さんを待たせたくないなんて、男の子っぽいことを言ってみちゃって。うんうん。いっぱい褒めちゃう」

そのまま頭を撫でまわされる。羽の先にはかぎ爪のような物がついているけど、そこは当たらないようにしてくれているので痛くない。

レティさんのふわふわの羽根がしつかり感じられて、くすぐったさと気持ちよさを同時に感じた。

「気持ちよさそうな顔をしてくれてるね。ユーリ君は可愛がり甲斐があるなあ。わたしの事を信頼してるし大好きだって全身から伝わってくるもん。そりゃあ甘やかしてもするって物だよな」

そんな顔や態度に出ているのだろうか。

レティさんの事が大好きだということを否定する気はないけど、そこまであからさまだというのなら恥ずかしい。

「照れちゃうんだ。本当に癒されるなあ。つまらない嫉妬をしたり、すぐに逃げ出したりする人たちとは大違い。あー可愛い。うちの子にならない?」

「ありがたい話ですけど、オーバースカイやステラさんに不義理はいけませんから。でも、そこまで可愛いと思ってももらえるのなら嬉しいですね。できれば格好いいとも思われたいですけど」

「格好いいと思われたいのなら、もっと成長しないとね。実力って話じゃないよ。まだまだ子供にしか見えないよ、ユーリ君は」

大人か子供かと言えばぼくは子供なのだろうけど、そう言われると少し悔しい。

実力を認められていることは分かるから、そこは嬉しいけれど。

「いっぱい悩むといいよ、ユーリ君。大人の魅力をしつかり身に着けた君なら、女の人なんていくらでも寄ってくるんじゃないかな。ただでさえ有名な冒険者になりそうだし」

「いくらでもとかは別にいいです。レテイさんもそうですけど、親しい人が魅力的だと思ってくれるなら。あ、いろんな女の人と付き合いたいわけじゃないですよ。ただ、親しい人にはすごい人だと思っしてほしいだけです」

「そうだよ。ユーリ君がいろんな女の人と付き合い合ってる姿は全然イメージできないな。1人相手でも振り回されそうなのに、何人も相手をできる気がしないよ」

レテイさんの言うことが結構わかるような気がして、困ってしまった。

色々振り回されている感じがするよね。ステラさんとか、サーシャさんとか、ユーリヤとか、オリヴィエ様とか。

それに、付き合うのならば結婚して、末長い関係でいたい。

老後までずっと仲良しの夫婦とか、憧れるんだよね。

結婚と言えば、アクアは女の人にカウントしなくていいよね、さすがに。結婚しても一緒に居るつもりではあるけど。

モンスターと人間の間に子供はできないから、結ばれることに障害が多いし、何より本人がペットって言っているからね。

「あはは……まあ、それでいいと思います。やっぱり一生一人だけを愛する人って格好いいですからね。ぼくも出来ればそうなりたいです」

「うんうん。そう出来るならそれが良いよ。浮気者のユーリ君はあまり見たくないからね。まあでも、今日はお姉さんとデートだと思つて、しつかり楽しんでいってね」

レティさんとデートか。そう考えると緊張してしまう。

レティさんはとっても親しみやすいけど、可愛らしい顔をした大人の女の人でもあるからね。

まあ、レティさんも多分本気で言っているわけじゃないから、普通に楽しめばいいはずだ。

「改めて、今日はよろしくお願いします、レティさん。レティさんみたいな素敵なお人とデートできるのは嬉しいです」

「うんうん。喜んでもらえないとお祝いの意味がないからね。お姉さんがユーリ君にとって魅力的なのは大事だよ」

「もちろんレティさんは魅力的ですよ。だから、弟子と認めてもらえた時は本当に嬉しくて」

「そういうのもいいけど、今日はお姉さんと大人な時間を過ごしたいか、だよ。お姉さんとの1日のアバンチュール、楽しんでみたくない？」

いつもの優しい笑顔とは打って変わって、レティさんはぼくの顔のすぐ近くにまで寄ってきて、妖艶に微笑む。

ドキドキが止まらなくて、思わずつばを飲み込んでしまう。

「ふふ。今日お姉さんをしつかり楽しませられたら、大人なご褒美をあげちゃう。それでどう？」

大人なご褒美って何だろう。いや、そんなのに釣られちゃだめだ。

レティさんもぼくも楽しめるようにすることは、ぼくがレティさんを大切に思っている証のようなもの。

だから、報酬のためにレティさんを楽しませようとはしないぞ。

「ご褒美なんて無くても、レティさんを楽しませるために頑張ります。だって、ご褒美のために頑張るなんて、他の人でもいいように思えて

嫌なんです」

「せっかくのチャンスなのに、勿体ないことをするね。でも、ユージ君がわたしの事を大切にしていることはよく伝わったよ。レティさんポイント10点だよ。100点で、何にしようかな?」

「うんと褒めてくれると嬉しいです。レティさんに褒められるの、結構楽しいので」

「可愛い」褒美だ。また10ポイントあげちゃう。さ、楽しいお喋りはこのくらいにして、いろいろ遊んでみようか」

レティさんはそう言ってぼくを手招きする。

レティさんの中で遊びは決まっているみたいに見えたので、それを楽しみに待ちながらついていく。

すると、草原のような場所にたどり着いた。

「ユージ君はアクア水で空を飛べるから、こういう遊びなんてどうかな。じっとしててね」

言われた通りじっとしていると、レティさんが後ろから足でぼくの事をぎゅつとつかんだ。

おんぶに近いけど、ぼくは何もしていなくてレティさんがしっかりとしがみついている感じだ。

胸のあたりが後頭部にくっついていて、ほんの少し柔らかさを感じて緊張してしまう。

「レ、レティさん、当たってます……」

「いつも抱きついても気にしないのに、変なの。でも、お姉さんをしっかりと意識しているんだ。可愛いなあ」

「いつもはもう少し力が緩いじゃないですか。きつとそのせいです。それより、離れなくていいんですか」

「離れちゃったら危ないよ。わたしは準備できたから、もう始めちゃうね」

そのままレティさんは空へと飛びあがる。

羽を動かし始めたので胸のあたりは離れたけど、今度は太ももの柔らかさを強く感じてしまう。

レティさんの足は、足首あたりは硬そうな雰囲気だけど、膝から上

あたりはとても柔らかい。

空を飛ぶ感覚の気持ちよさも感じていたけど、ぼくはレテイさんに触れている部分を主に意識してしまっていた。

少したつて気が付いたけど、勢いよく飛びあがっていたのに全く負荷のようなものを感じなかった。

空気抵抗があつたり、しつかり掴まれているレテイさんの足からぼくのお腹あたりに苦しきを感じたりもしていない。

「すごいですね。空を飛んでいるのに、全く負担がありません。これもレテイさんの力なんですか？」

「そうだよ。ハーピーはどれだけ速く飛んでも自分に負担はかからないんだ。わたしは一緒に飛んでいる人にも同じ効果を与えられるんだよ」

「すごい力だ。これなら重さが許す限り何でも運べるんじゃないか？」

人の重さを運べることはぼくで証明されているし、いろいろと応用が利きそうな気がする。

「そのおかげでぼくも一緒に飛んでいるんですね。それにしても、いい景色ですね。こんなに高く飛んだことは無いので、新鮮な感じがします」

「うんうん。そう思ったから、ユーリ君を誘ってみたんだ。空を飛ぶことも楽しいでしょ。ユーリ君なら、万が一の時でも大丈夫そうだから、一緒に飛んでみたくて」

アクア水があれば空を飛べるし防御もできるから、そのあたりを考えてくれたのだろう。

これがレテイさんがいつも見ている景色か。

綺麗な景色も楽しいけど、レテイさんと同じものを見られているという感動の方が大きかった。

しばらくレテイさんと一緒に飛んで回り、最後にアリシアさんたちの家まで飛んで連れて行ってもらった。

「昨日もここに来たことは知っているけど、今日はお姉さんの部屋を案内しちゃうね」

レティさんの部屋に案内されると、そこにはいくつかの縫いぐるみがあった。

それ以外には、特に物らしい物はなく、アリシアさんと似たような雰囲気の一部屋だった。

「ぬいぐるみ、お好きなんですか？」

「そうだね。可愛い物は結構好きかな。だからユーリ君の事も大好き」

ぼくは可愛い物のカテゴリーなのか。やっぱり犬猫みたいに思われてないかな。

それでも、レティさんに大好きだと言われることはとても嬉しい。ぼくもレティさんの事が大好きだ。

「ありがとうございます。レティさんにいろいろお返ししたいですし、何かこういう物を買ってきましようか？」

「別にいいかな。それより、わたしの毛づくろいを手伝ってくれないかな」

レティさんにそう言いながらブラシを渡される。

それを受け取ったぼくは、まず翼をブラッシングする。

いきなり強くしては駄目そうだから、レティさんの反応を見ながらゆっくり強くしていくことに。

「うんうん。上手だよ、ユーリ君。翼だけじゃなくて、もつといろいろお願いね」

そう言われてしまったので、太もものあたりもブラッシングする。

頑張つて無心で行おうとするけど、レティさんの声とか息遣いとかを聞いていると変な気分になりそうで困ってしまう。

しばらくの間頑張つてブラッシングして、全部終わらせた。

ぼくは疲れ切つてしまつて、少し深呼吸していた。

「ありがとう、ユーリ君。これでレティさんポイント100点だから、うんと褒めちゃうね」

そのままレティさんに頭を胸元に抱えられながら背中を撫でられる。

レティさんの体温と柔らかさをしつかり感じてしまつて、変な気分

になりそうになるけど、がまんする。

「ユーリ君、いつも頑張っていて偉いね。それに、今日もお姉さんをしつかり楽しませてくれた。ユーリ君なら、少し位わたしにわがまを言ってくれてもいいからね。ユーリ君の事はいつでも見守っているから、安心して生活してね。わたしたちの可愛い弟子さん」

レティさんの声色は本当に優しく、とても落ち着いていた。

しばらくそうした後、レティさんはゆっくりとぼくの事を離す。

少しだけ名残惜しさを感じてしまつて、レティさんの方をじつと見てしまう。

「ユーリ君、今日は楽しかったよ。これからもよろしくね。じゃあ、この辺でお別れかな」

そのままレティさんにステラさんの家まで送つて行つてもらつた。

レティさんとはとても優しい人だと改めて感じた。優しい師匠が2人もいて、本当にいい環境にいると思えた。今日もいい日だったな。

## 56話 憧れ

ある日の昼頃、アクアと2人でカーレルの街をぶらついていると、突然人に声をかけられた。

「あの、水刃のユーリさんつすよね！ あたいをチームに入れてくれないませんか！」

「メルちゃん、いきなりすぎよう。まずは自己紹介とかから始めないと、ね？」

声をかけてきたのは、水色の髪をした活発そうなメルちゃんと呼ばれる少女と、アクアより薄い色をしたメルちゃんの髪と近い色のハイスライムらしきモンスター。

メルちゃんはぼくの事を知っていて、それでオーバースカイに入りたいみたいだ。

でも、初対面の人をいきなりチームに入れることは難しい。

すでにオーバースカイは結構人数が多いし、実力も人格も分からない相手をチームに入れるという問題もある。

まずは、相手の言う通り自己紹介あたりから様子を見るか。

「ぼくの事を知っているんだね。でも、一応名乗っておこうか。ぼくはユーリ。こっちはぼくの契約モンスターのアクア。よろしくね」「アクア。よろしく」

「あたいはメルセデスつす。ユーリさんの事は王都の大会で見ました。スライム使いなのにあんなに強いなんて、憧れちゃうつす！ せめてあたいの実力を見てくれませんか？」

「すみません、メルちゃんが失礼をしちゃって。私は、メルちゃんと契約をしている、ハイスライムのメーテルといいます。メルちゃんは王都での大会を見てからずっとユーリちゃんに会いたいわって言って、カーレルの街まで来ちゃうくらいなんですよ」

つまり、この人たちはスライム使いとしてぼくたちに憧れているって認識でいいのかな。

スライム使いは弱いという評判があることはよく分かっている。

王都での大会も結構大きい物みただから、それで注目されたの



か。

わざわざ王都から遠いカーレルの街まで来てくれたんだから、少しくらいは前向きに考えたいけど、オーバースカイのみんなの足を引っ張るようなら駄目だ。

メルセデスの言うように、実力を見ておくのが無難かな。

「わかった。とりあえず実力を見せてもらおうか。空いている広場へ行くから、ついてきて」

「わかったっす！ あたいの実力、しっかり見せるっすよ！」

「無理にオーバースカイに加入させて貰わなくても大丈夫だけど、記念にサインとかを貰ってもいいかしら？」

サインか。聞いたこと自体はあるけど、そういう物をぼくが書くなんて想像もしていなかったから、どうして良いものか分からない。

今日明日メルセデスが帰るわけじゃないのなら、ゆっくり考えるところか。

すぐに帰らないといけないようなら、とりあえず何か書いてみよう。

「メルセデスとメートルはいつまでこの街にいるつもりなのかな？」

それなりに長くいるつもりなら、ぼくの知り合いに紹介する事もあるかもしれないね。オーバースカイに加入できればすぐに紹介するけど」

「この町に住むつもりっすよ。ところで、ユーリさんはどんなチームを組んでいるんですか？ ユーリさんの仲間も強い気がするっす！」

「メルちゃんったらまた勝手に決めちゃって。ここはいい町だとは思うけど」

なるほど。だったら長い付き合いになるかもしれないから、雑に扱わない方が良いかな。

もちろん、むやみに態度を悪くするつもりはないけど、2度と出会わないだろう人と対応を変える必要がある。

「それなら、これからも出会う機会はあるかな。ぼくたちのチームに入りたいうことは、冒険者なんだよね？ どれくらいのモンスターなら倒せるとか、あるかな？」

「うっ……あんまり強いモンスターは倒せないっす。キラータイガーなんて現れたりしたらイチコロかもしれないっす」

そんなものだとすると、オーバースカイに加入させることは厳しいかもしれない。

ぼくたちも最初は苦戦していたキラータイガーだけど、今ならほんどのメンバーは1人でも倒せるだろうし。

しばらく話しながら歩いていると、空いている場所まで来たので、メルセデスたちの実力を試すことにする。模擬剣を渡して使ってもらうといいかな。

「メルセデス、メーテル。ここで2人がどれくらい出来るのかを見せてほしい。他のメンバーとの相性なんかも見る必要はあるけど、実力がないとそれ以前の問題だからね」

「わかったっす！ ユーリさんの胸をお借りします！ いくよ、メーテル」

「わかったわー。いきますよ、ユーリちゃん」

「アクアは今のところは下がっていて。危なそうだったら介入してくれる？」

「わかった。ユーリ、頑張つて」

「じゃあ、かかっておいで、メルセデス、メーテル」

その言葉と同時にメルセデスとメーテルは突っ込んでくる。

メーテルは殴り掛かってきて、メルセデスは剣で攻撃してきた。

どちらの攻撃もアクア水もミア強化も使わなくても対応できる程度だったので、軽く受け流す。

うーん。アクア水を手に入れる前のぼくとそんなに変わらないか、少し弱いくらいかな。

カタリナに相当する存在もないみたいだから、弱い方なんだと思う。

「契約技なんかは使わないのかな？ 今のままなら、契約技が強くないと厳しいと思うよ」

「ぐっ……仕方ないっす。これがあたいの契約技っすよ！」

メルセデスは自分の前に水の膜のようなものを張る。

その後ろでメルセデスは構えているので、恐らく防御の技だろうと思いを攻撃する。

すると、ほとんど抵抗なく水の膜は破れてしまい、そのままメルセデスに攻撃が当たりそうになる。

慌てて剣を止めてメルセデスに当たらないようにする。メルセデスはほっと息をついた。

「えっと……今のは防御に使ったことで良いんだよね？ あれで全力？」

「……そうっす。こんなにダメダメなら、オーバースカイには入れないっすよね。おとなしく田舎に帰ろうかな……」

水の膜を作ることしかできないのなら、ダメダメとメルセデスが言うことも分かってしまう。

汎用性はあまり感じられないし、あの程度の威力にも耐えられないなら使い道はほとんどないだろう。

それはさておき、メルセデスが田舎に帰るということは、王都での大会は遠出をして見に来たということだろうか。

メルセデスの沈んだ顔を見て、ぼくは思わず慰めようとしてしまう。

「剣技も契約技もまだただけど、身体能力は高いみたいだから、剣技は伸びしろがあると思う。それと、契約技の使い方も色々試してみた？ 膜を厚く出来ないかとか、広く出来ないかとか」

「なるほど……契約技は何も考えずにただ出していただけだったっす！ 確かに、膜を厚くすれば防御力が上がるかもしれないっすね！」

ユーリさん、あたいを弟子にしてほしいっす！」

メルセデスはそう言うけど、ぼくが弟子を取ってしまったでもいいだろうか。ぼくはアリシアさんたちに教えを乞う立場なのに。

でも、せつかくここまで来るほどの熱意がある人なんだから、ただ見捨てるというのも気分が悪い。

軽く教えるくらいならいいかもしれないな。ぼくはちよつとだけ面倒を見ようと決めた。

「ぼくは弟子をとれるほど上等な存在じゃないけど、冒険の合間に

ちよつとアドバイスをするくらいならできると思う。ぼくの冒険に連れていくのはお互いのためにならないと思うけど、空き時間くらいなら面倒を見るよ」

その言葉を受けてメルセデスはとても嬉しそうな顔をする。

「ありがとうございます、ユーリさん！ 少しずつでも強くなつて、いざれオーバースカイに入れるようになるっすからね！ 待っていてくださいっす！」

「ありがとう、ユーリちゃん。アクアさんも、よろしくお願いしますね」

「メルセデス、メーター、よろしく。ユーリにあまり迷惑をかけちゃだめだから」

「大丈夫っす！ せっかくユーリさんに面倒を見てもらえるんっすから、絶対無駄にはしないっす！」

メルセデスの目に炎が見えるような気がする。これは期待できるかもしれない。

せっかくだから、組合に連れて行って依頼の受け方を教えようと決めた。

「メルセデス、メーター。ちよつとついてきて。カーレルの街の組合でどうすればいいか、説明するから」

メルセデスとメーターを連れて組合に向かうと、サーシャさんが出迎えてくれた。

「ユーリ様、今日はどんなご用件ですか？ そのお2人をオーバースカイに加入させますの？」

「いえ、少しだけ面倒を見ることに決めたので、今日は依頼の受け方を説明しようかと」

「ユーリさん、そちらの方は？ ユーリさんの恋人っすか？」

「2人とも、こちらの方はサーシャさん。ぼくたちの依頼をあつせんしてくれている人だね。」

サーシャさん、こちらはメルセデスとメーター。弟子つて程ではないですけど、少しだけ冒険者として面倒を見ようと思っています」

サーシャさんは笑顔でいたが、少しだけ眉をひそめたように見え

る。何か気に入らなかつたかな。

「その2人は有望なんですか？ わたくしはオーバースカイに些事に関わってほしくはありませんわ」

「有望かはちよつと怪しいですけど、熱意は本物だと感じたので。冒険の片手間くらいでなら大丈夫かと」

「本格的に面倒を見るわけではありませんのね？ でしたら、構いませんわ。お2人とも、オーバースカイは本物の冒険者ですわ。迂闊に足を引つ張つては、恨まれるだけでは済みませんわよ」

サーシャさんは笑顔だが、とても冷たい雰囲気を出している。

メルセデスは少しおびえたような顔になるが、すぐに気を取り直す。

「ユーリさんに迷惑をかけたりはしないですよ！ オーバースカイにはあたかも活躍してほしいっすからね！ でも、いずれオーバースカイの仲間になってみせるっす！」

「ユーリちゃんもアクアさんもこんな私たちを少しでも認めてくれたんだもの。失望させてしまうなんてごめんだわ」

サーシャさんは今度は楽しそうな笑顔になる。メルセデスたちは邪険にはされなれないと思つていいかな。

「なら、よろしいですわね。あなた方は、簡単な依頼から少しずつ受けていくのがよろしいかと。急いで強くなろうとする冒険者は早死にするものですわ」

「わかつたっす！ なら、弱いモンスターの討伐から始めるっす！」

「でしたら、ホーンラビットあたりから入ることをお勧めしますわ。訓練では簡単に倒せるものでも、実戦だと案外苦戦するものですわ。

まずは、確実にこなせる依頼から。それが結果的に実力を上げる近道になりますわ」

「ホーンラビットっすね。じゃあ、早速明日から討伐するっす！ ユーリさん、待っていてくださいね。絶対、オーバースカイに入つてみせるっすから！」

## 57話 決意

メルセデスたちはカーレルの街で冒険者活動をしていて、今の所はうまくいっているようだ。

せっかく知り合ったのにすぐに死なれたりしたら寝覚めが悪いから、順調でいてくれるのはありがたい。

今日は組合を通してメルセデスを誘ってもらったので、オーバースカイの皆を紹介するつもりだ。

相手の予定が分からなかったので、メルセデスたちが1日で稼げるくらいの額を組合に聞いて、組合を仲介して依頼料代わりに渡してもらうことにした。

ぼくたちはちよつとお金を使いきれないような場面が出ている状況なので、みんなにも軽く許可を貰えた。

しばらく組合でメルセデスたちを待っていると、急いだ様子のメルセデスたちがやってきた。

「ユーリさん、お待たせしてしまつて申し訳ないです。時間には間に合つたつすけど、これじゃ遅刻と一緒にすね……」

「ごめんなさい、ユーリちゃん。メルちゃんが何を着るかずっと迷つていて〜」

そう言われたのでメルセデスの方を見ると、少し着飾っているみたいだった。

メルセデスの活発そうな印象を失わないまま、おとなしい雰囲気も出ている。

「良く似合っているんじゃないかな、メルセデス。時間に間に合っているならば先に来たことは気にしなくていいからね」

「メーテルっては何でそれをユーリさんに言つちやうんつすか!? でも、ユーリさんに褒めてもらえるのは嬉しいっす!」

まあ、ぼくにも本人の前で言われたくないことを言われた経験があるので、メルセデスの気持ちはよくわかる。

メルセデスは少し恥ずかしそうだけど、ぼくが褒めてからは明るい顔になっている。

メルセデスが全力でぼくに憧れているという顔をしてくれると、できるだけ面倒を見てあげたくなる。

アリシアさんやレティさんはぼくから慕われている時にこんな気持ちだったんだろうか。

「ユーリさん、なんだかスケベな顔をしてるっす！ エッチなことでも考えてたっすか？」

なんてことを言うんだ、メルセデスは。でも、メルセデスは嫌味な顔ではなく、楽しそうな雰囲気なので許してもいいかという気分になつてしまう。

「そういうのじゃないよ。ぼくの師匠はぼくの面倒を見ている時にどんなことを考えていたのか気になつてね」

「風刃のアリシアさんとレティさんっすね！ やっぱりユーリさんが強くなったのは師匠が良かったからっすか？」

「それももちろんあるけど、他にも仲間とか支えてくれる人がいたからかな。ぼく一人でここまで強くなることはできなかったというのは確かだよ」

「やっぱり周りの人は大切なんっすね。でも、ユーリさんが優しい人だから周りに人が集まったっすことは分かるっす！ あたいは誰からも馬鹿にされてきたから、ユーリさんの優しさには本当に感謝してるっすよ」

「そうね。スライム使いというだけでも見向きもされなかったのに、メルちゃんっすて剣もあまり上手じゃないから。ユーリちゃんが褒めてくれてからはぐんぐん上達していて、ユーリちゃんと出会えて本当に良かったわ」

なんというか、ぼくの周りには暗い過去がある人が集まりがちなのだろうか。

それとも、不幸という物はぼくが思っているよりありふれた物なのだろうか。

なんにせよ、ぼくのそばに居る人たちには、できるだけ幸せでいてほしい。もちろんメルセデスにも。

「ぼくが優しいから周りに人が集まると思うのなら、メルセデスたち

も出来るだけそうすると良いんじゃないかな。ぼくの周りの人とも、相手が優しいからこそ親しくなれたと思う」

「頑張ろうとは思いつすけど、難しいつす。ユーリさんやユーリさんの仲間には優しく出来ればいいつすけど、馬鹿にしてくる人ばかりなのに、どうやって優しくすればいいつすか……」

メルセデスは沈んだ顔をしている。話の仕方を間違えてしまったのだろうか。

これからメルセデスが笑顔でいられる時間が増えるように、ぼくがしっかりとしないとね。

「別に敵対してくる相手にまで優しくする必要はないよ。でも、たとえば、メルセデスはほくに優しいって言うてくれたよね。そう感じるような相手には出来るだけお返しするのが良いと思う」

「それなら出来るかもしれないつす。ユーリさん、あたいのことを見てくださいありがとうございます。ユーリさんが自慢できるような弟子になってみせるつすよ!」

アリシアさんたちはぼくのことを自慢できる弟子とってくれた。それが本当に嬉しかったから、もつと頑張ることができた。

メルセデスにもそういう気持ちを感じてもらえるように努力しよう。

「うん。期待しているよ。でも、無理はしないでね。メルセデスたちに何かあったら、とても悲しいから」

「はい! あたいははずれオーバースカイに入ってみせるんつすから、絶対にそれまで生き延びてやるつす!」

「それまでじゃなくて、それからもずっとだね。オーバースカイの仲間メルセデスたちが加わってくれること、楽しみにしているね」

「うおー! 頑張るつすよ! ユーリさん、絶対に追いついてみせますからね!」

「ユーリちゃん、本当にありがとう。ユーリちゃんのおかげでメルちゃんはとても元気になったのよ」

メルセデスもメーテルもとても嬉しそうだ。

ぼくたちの冒険はメルセデスたちには危ないだろうから、しっかりと



強くなって貰わないといけない。

だから、オーバースカイにメルセデスたちが入れるように、ぼくも頑張ろう。

アリシアさんたちがぼくたちと冒険がしたいって言うのも、こんな気持ちからなのかな。

「それじゃ、オーバースカイのメンバーを紹介するから、ついてきて」  
ぼくは前にアリシアさんと使ったり、ミア強化の訓練に使ったりした闘技場のような場所にメルセデスたちを連れて行った。

そこには、オーバースカイのメンバーがそろっていた。ぼくはメルセデスたちをみんなに紹介する。

「みんな、この2人はぼくが開いている時間に面倒を見る予定のメルセデスと、その契約モンスターのメーテル。できれば仲良くしてあげて欲しいな」

「ご紹介にあずかりましたメルセデスっす！ 今はまだ弱いですが、いずれオーバースカイのメンバーになってみせるっす！」

「私はメーテルよ。メルちゃんとの契約モンスターで、ハイスライムなの。みんな、よろしくね」

みんなは暖かい顔でメルセデスたちの自己紹介を見守っていた。

メルセデスたちに続いて、オーバースカイのみんなも自己紹介をする。

「あたしはカタリナ。ユーリの腐れ縁つてところね。ユーリはヘタレだけど、やるときはやる奴だから、ある程度は頼っていいと思うわよ」  
「わ、わたしはユーリヤですつ。オーバースカイの遊撃担当といった所ですわね」

「わたしはフィーナといいます……オーバースカイに加わったのは最近ですが、みなさん、良くしてくれています……」

「アクア。前にもあいさつをしたから知ってるよね」

ノーラも鳴き声を上げてアピールする。

うん。お互いの顔を見る限り、悪印象は抱いていないようだ。これなら大丈夫かな。

「この猫型モンスターはノーラ。この子もとっても強いんだよ。ぼく

のペットとして飼っているけど、すつごく癒されるんだよね」

ノーラは自慢げな顔をしている。本当にいつも可愛いなこの子は。それはさておき、お互いの実力がある程度確認してもらおうか。

「メルセデス、メーテル。もう1回ぼくと模擬戦をしてくれるかな？」

みんなにきみたちの実力を見せておきたいんだ」

「わかったつす！ この前より実力を上げたところ、しっかり見てもらうつす！」

「私も頑張るわ。ユーリちゃんに良いところを見せたいのは、私も同じなのよね」

早速模擬戦を始めると、メルセデスとメーテルはさつそく突っ込んできた。

この前見た時は単なる力任せの攻撃に見えたけど、今は少し間合いの取り方なんか工夫が見える。

うん。自分でしつかり考えて訓練をしてきたことがよくわかる。

まだまだ弱いという評価は変わらないけれど、メルセデスたちに対する期待は1段上がった。

「実力を上げたのは確かみたいだね。契約技の方はどうかな？」

「それも見せるつすよ！ いきます！」

メルセデスは水の膜を張った後、水の膜と体を一定の距離に保ったまま動く。

前は後ろに隠れているだけだったはずだから、使い方は進歩している。

試しに攻撃を仕掛けてみると、素手では破れなさそうなくらいの抵抗を感じた。

これなら、弱いモンスターの攻撃なら受けられるかもしれない。前は何の役にも立たなさそうだったから、大きな進歩だ。

そのままメルセデスに剣を突き付けるとメルセデスは両手を挙げた。メーテルも一緒に降参した。

「うん。確かな成長を感じるよ。しつかり指導された方が良いだろうから、剣の使い方とか契約技の使い方とか、教えられるときに教えるね」

ぼくの言葉を受けて、メルセデスは満面の笑みになる。

「やったつす！ ユーリさんにしつかりと弟子と認めてもらえるように、これからも精進するつす！」

オーバースカイのメンバーは、納得のような表情をしている。

「あんたの事だから、オーバースカイに誘っていかないのがおかしいと思っただけで、納得したわ。ま、伸びしろはいっぱいあるって所ね」  
「そうですね。でも、ユーリさんが気に入っていることは分かりません。ある程度はわたしも手伝いますよっ」

「わたしはお役に立てないでしょうが、メルセデスさんたちは応援しています……」

「ユーリがやりたいならアクアも手伝う」

その言葉を受けてメルセデスたちは燃え上がっているように見える。

ここで沈んじやわないあたりに可能性を感じるんだよね、ぼくは。  
「次は、オーバースカイのみんなの実力を見てもらおうと思う。的当てくらいで良いかな？」

「しつかり目に焼き付けて、オーバースカイに必要な実力を確かめるつすよ！」

「そうね。私たちが弱いことくらいは分かるけど、どれだけ差があるのかは確認したいわ」

「じゃあ、みんな、よろしく。最後にぼくの動きも見せるから、しつかり見ていってね。ぼくたちはアリシアさんたちの実力を確かめた時から、目標が定まったから、君たちもそうなるかと嬉しいな」

それから、カタリナの弓とユーリヤの遊撃、フィーナの異能にアクアの格闘、ノーラの高速移動などを見せた。

メルセデスたちは口を開けたまま見ていた。

「これがユーリさんの仲間……！ 今は足元にも及ばないつすけど、絶対にここまで強くなってみせるつす！」

「そうね。私たちはこの人たちと一緒に戦いたいわ。厳しい道だとわかってはいるけど、諦めたりしないわ」

「最後に、ぼくの動きを見せるよ。それでもアリシアさんには及ばな

いけど、結構強いと思うよ」

ぼくはアクア水とミア強化を同時に使った動きを見せた。

全力で加速してみたり、剣を振りながらアクア水で別の方向を攻撃してみたり。

メルセデスたちはそれを見ながら叫んでいる場面もあった。

「こんなものかな。これが今のぼくの実力。どうだった？」

「す、すごすぎっす！ でも、いつか同じくらい強くなってみせます！

それで、ユーリさんの相棒になってみせるっす！」

「本当に遠いけど、わたしも諦めないわ。メルちゃんが諦めないのなら」

メルセデスたちは本当に頑張ろうという意思があるように見える。

カタリナたちもそれを見て感心していた。

うん。この子たちがもつと成長する姿を見てみたい。ぼくも出来る限り手伝おう。

## 58話 師匠

メルセデスたちにオーバースカイのみんなの紹介を済ませた。

次にぼくたちの住むステラさんの家を案内して、ステラさんも紹介する予定だ。

「メルセデス、メーテル。次はぼくたちの家に案内するよ。オーバースカイはみんなそこに住んでいるから、知っておいても良いんじゃないかな」

「ユーリさんたちの住む家っすね！ 楽しみっす！ どんな家なんでしょうね」

「それはまあ、見てのお楽しみということ。正確にはぼくの家じゃなくて、借りている家なんだけど。家主の人も紹介するね」

「了解っす！ その人はユーリさんの恋人だったりするっすか？」

メルセデスのその台詞に、オーバースカイのみんなが結構反応する。

驚いた顔をしていたり、変なものを見る顔をしていたりいろいろなけど、カタリナから順に話に乗ってくる。

「ステラさんがユーリなんか釣り合うわけないでしょ。ユーリはそこまで女に好かれるような奴じゃないわよ」

「ど、どうでしょうか。ユーリさんはとっても魅力的ですよ。ステラさんもとっても優しい人ですけど、付き合うならお似合いだと思いますっ」

「ステラさんはユーリさんの事をとても気に入っているとは思いますが……ですが、女が男を見るような感じではないかと……」

その説明を受けたメルセデスは、何か納得したような顔だ。メーテルはずっと微笑んでいる。

ノーラはカタリナにちよつと擦りついた後にぼくのところへ寄ってくる。相変わらず可愛い。

「ユーリさん、モンスターにも人間にもモテモテっすね！ 一流の冒険者ともなるとそういう所も違うっすね！」

「あらあら、ユーリちゃんは色男なのかしら。可愛い顔には似合わ

ないと思うけど」

「はあ!? こいつがモテモテって、あなたたちの目はどうなっているのよ? ノーラとアクアがこいつの事を好きってのは間違いないけど、それだけで出てくる台詞じゃないでしょうが」

カタリナは随分目つきが鋭くなっている。

それはそうだよ。ぼくが囲っている女みたいに見られて嬉しいとは思えないし。

ぼくだってそういうつもりでオーバースカイの仲間と一緒に居るわけじゃない。みんなは大好きだけど、それは家族みたいというか、つまり男女がどうこうという訳じゃない。

「さすがにそういう風に見られて嬉しいわけじゃないでしょ、みんな。あまり茶化さないでほしいな」

「茶化してるわけじゃないっすけど……だったら、あたいがユーリさんの恋人に立候補するっす!」

そう言うメルセデスの顔は本気には見えないので、流すくらいで良いかな。

「メルセデスの事は可愛いと思うけど、さすがにまだ恋人は早いかな。好きとか嫌いとかを判断する段階では無いでしょ」

「そうよ。勢いでこいつと付き合った所で、こいつのヘタレっぷりに呆れかえるだけでしょ」

「ユーリが付き合いたいのなら構わないけど、メルセデス、ユーリを裏切ったら許さない」

アクアの目つきが本当にとげとげしくて、許さないというのは本気に見える。

メルセデスとメーテルも少しアクアを恐れているように見えた。

「残念っす……でも、アクアさん。心配しなくてもあたいはユーリさんを裏切ったりしないっすよ。ユーリさんは本気であたいを面倒見ようとしてくれる恩人っすから」

「そうね。メルちゃんがそんなことをしたら、私がちゃんと叱るわよ」

メルセデスもメーテルも真剣な顔でそう言ってくれるので、結構嬉

しい。

アクアはその言葉に納得したのか、すぐに雰囲気をいつもの感じに戻っていた。

「そうだと嬉しいな。さ、そろそろぼくたちの家に近づいていたよ」

ステラさんの家はもう見える位置にある。

メルセデスたちはその家をぼーっと見ていたが、ぼくたちがその家へまっすぐ向かっていく姿を見て驚いている。

「ユーリさんたち、こんなに大きい家に住んでるっすか!? さすがは水刃のユーリさんっす」

「ぼくの活躍とはあまり関係がなくて、もともと知り合いだったこの家の主に貸してもらってるんだ」

「そうなんっすね。ってことは、ユーリさんはこの街で生まれたってことっすか?」

「そういう訳じゃないよ。ぼくの故郷でぼくの先生をしてくれていた人の生まれた街なんだ。ぼくたちが冒険者になるのと一緒に里帰りをしたって感じかな」

「その先生がついてくるってことは、ユーリさんは期待されてたんっすね。羨ましいっす」

「メルちゃんにはユーリちゃんがいるじゃない。ユーリちゃんはとつても期待してくれているわよ」

メルセデスの言うことはきつと正しいけど、ぼくの運が良いこともあるだろう。

それに、メルセデスたちに期待しているというのは確かだ。

ずっと見ているわけでは無いけれど、2人からは確かな努力を感じるからね。

「まあ、期待してくれているというのは確かだと思うよ。そうじゃないきや、してくれないほどの事をしてくれたから。メルセデスたちもいつかここに住むかもしれないから、知っておいてほしいんだ」

「それって……あたい頑張るっすよ! ユーリさんの期待に絶対に答えてみせます!」

「ユーリちゃんったら嬉しいことを言ってくれるわね。メルちゃ

ん、この人は大事にしなくちゃだめよ」

ぼくが2人にオーバースカイに加入してほしいと思っ  
ていることはしっかり伝わっているようだ。

だけど、今のメルセデスたちの実力でオーバースカイの活動につ  
いてきたら、危ないでは済まない。

だから、ぼくがしっかり指導して、強くなってもらわないとね。

ステラさんの家に入ると、ステラさんが出迎えてくれる。2人を紹  
介することは事前に伝えていたから、ステラさんは2人にまず挨拶を  
した。

「ユーリ君から話は聞いていますよ、メルセデスさん、メーテルさん。  
私はステラといます。この家を管理している、ユーリ君の同居人で  
すね。ユーリ君の元教師でもあります」

「よろしく願います、ステラさん。それにしてもユーリさん、ユー  
リさんの知り合いは美人さんばかりっすね！ やっぱり顔なんです  
か、いやらしいっす！」

「メルちゃんったらまた変なことを言っつて。私はメルちゃんの契約  
モンスターのメーテルです。メルちゃんともども、ユーリさんにはお  
世話になっていきます」

メルセデスの言うようにぼくの知り合いには美人が多いことは確  
かだけど、顔で選んだわけでは無いと強く言いたい。

ただ、今の状況でそういうことを言っても言い訳にしか聞こえない  
よね。

「ぼくがいやらしいなら、メルセデスもそのターゲットつてことにな  
るけど、それはいいの？」

「ユーリさんつてば、あたいが美人だつて認めてくれてるっすね！

胸くらいなら触ってもいいっすよ！ それでユーリさんの弟子にな  
れるなら安いものっす！」

「そんなことはしないよ……メルセデスにはちゃんと強くなつてもら  
いたいから、真面目に面倒を見るつもりだよ」

ぼくはそう言っただけど、みんなのぼくを見る目がちよつと冷たい。  
変な誤解をされていけないといいけど。



「ごいつに自分から女の人に触っていくような度胸なんてないわよ。でも、いくらヘタレのユーリだからって暴走しない保証なんて無いんだから、やり過ぎないようにね、メルセデスさん」

「ユ、ユーリさんなら嫌がることはされませんよっ。してほしい事もされませんけどっ。ユーリさん、もつとユーリヤに色々としてくださいつ」

「ユーリさんには大切にしていただけですが、良くも悪くもみなさんを大切にされるので……」

うーん。何か不満があるような雰囲気は感じるけど、直接はつきりと言ってもらえないと分からない。

でも、みんなでいいチームでいるためには、出来るだけ察せるようにならないとダメかな。

「ユーリ、女の人は苦手？ なら、アクアとノーラを可愛がればいい」  
「苦手というか、未だにうまい接し方が分からないんだよね。こんなに一緒に居るのに」

アクアもノーラもひつついてくる。とつても可愛くて癒されるけど、今は適切な状況ではない気がして困ってしまう。

「こんなに女の人に囲まれていてモンスターの方を可愛がるんっすね。特殊な趣味だったりするっすか？」

「メルちゃんったら、失礼よ。ごめんなさい、ユーリちゃん。この子は人との距離の詰め方が分からないのよ」

メルセデスはみんなに馬鹿にされていた過去があったようだから、それが原因だろうか。

なににせよ、機嫌を損ねるほどの物言いではない。これくらいなら、カタリナの半分もない位のきつさじゃないかな。

「別に気にしてはいないけど、オーバースカイのみんなとか、ステラさんにサーシャさんとか、まだメルセデスたちは会っていないけど、アリシアさんとレティさんに同じようなことは言わないでね」

「そこは大丈夫っす！ ユーリさんは特別っすからね！」

あまり嬉しくない特別のような気はするけど、まあいいか。

メルセデスの顔に悪意は感じないし、それどころかとつても楽しそ

うだから、なんだか責める気が起きない。

少し今後の対応を考えていると、メルセデスがおびえたような顔になる。

「あの、ユーリさん。怒っちゃったつすか……？ これからはこんなことは言わないつすから、見捨てないでください……」

「大丈夫、怒っているわけじゃないよ。ちよつと位ぼくに失礼なことを言っただくらいで見捨てたりはしないから。みんなには言わないでほしいけど。メルセデス、これからもよろしくね」

メルセデスはすぐに明るい顔になる。さつきみたいな顔はあまり見たくないから、あまり厳しくはしないようにしよう。

もちろん、実力面で甘やかすつもりはない。そこで甘くするとメルセデスたちの命にかかわるからね。

たとえ嫌われてしまっても、メルセデスたちが無事でいる方が大事だ。そこは間違えるわけにはいかない。

「はいっ！ ユーリさんがどんな性癖を持っていたとしても、尊敬する師匠であることに変わりはないつす！」

「メルちゃんはユーリさんに甘えちやつてるんだと思います。できれば許してあげてほしいわ」

ぼくはメルセデスたちを弟子にすることに腰が引けていたけど、すっかり面倒を見ることに決めた。

メルセデスがすっかり強くなってぼくたちの仲間になれるように、頑張っていくぞ。

「2人とも、ぼくがすっかり教えていくから、ちゃんとついてきてね。2人が立派な冒険者になれるように、ぼくも頑張るから」

「ユーリさんに絶対についていくつす！ あたいの師匠は何があってもユーリさんつすからね！」

## 59話 師弟

今日はアリシアさんとレティさんに会える日だ。

なので、メルセデスを弟子にした事の報告と、その相談をするつもりだ。

アリシアさん達がやってきたので、挨拶をした後にメルセデスたちの件を伝える。

「アリシアさん、レティさん。ぼくも弟子を取ることにしたんです。

事前の相談もなく申し訳ありませんが、ちよつとアリシアさんたちの気持ちがあつたような気がします」

「そうなんだね。別に私たちに許可を取るようなことでもない気はするけど、その子は才能があるのかな？」

「多分そんなには無いと思います。それでも、いつかオーバースカイに入れるくらいに強くなつて欲しいんですね」

アリシアさんはぼくの言葉を受けて考え込んでいるようだ。

やっぱり、メルセデスたちをオーバースカイのメンバーにすることは無茶だろうか。

でも、ぼくはメルセデスたちに本気で期待してしまっている。あの子たちと一緒に冒険したいと思つてしまう。

「まあ、私が君たちに期待していることも無理難題の類だから、あまり人の事は言えないけど、過剰な期待は相手にとって良くないよ。その子を潰してしまいかねない。

だから、しつかり面倒を見て、おかしな事をしていないか、無理をしていないかをちゃんと見てあげてあげるとだ。それが師匠の務めだと思う。私たちも完全にできているとは言い難いけどね」

「そうだね、アリシア。ユーリ君たちが潰れていないのは結構特別なことだから。同じことがその子にも出来るとは思わない方が良さかな。

それでも、君が面倒を見たいと思つたのなら最後まで見捨てない事。相手がろくでも無い事をするなら別だけれど。お姉さんとの約束だよ」

うん、よく分かる。アリシアさんは謙遜しているけど、アリシアさん達がものすごく良い教えをくれたからこそ、ぼくたちはここまで来られた。

2人が自分の時間をしっかり使って面倒を見てくれたからこそだ。それと、アリシアさんたちの期待は嬉しかったけど、不安もあつたから、そこにも気を付けてあげないといけないよね。

ぼくたちに追いつけないからメルセデスたちが焦って潰れてしまふなんて、絶対に嫌だ。

メルセデスたちには幸せになってほしい。オーバースカイのメンバーになってくれる事より大事なことだ。

「はい。あの子たちがオーバースカイのメンバーにならないとしても、冒険者としてやっていけるように頑張ります」

「うん。それでいい。ところで、君が弟子に取ると決めた子はどんな子なのかな?」

「メルセデスというスライム使いと、メーテルというハイスライムのコンビです。正直なところ今は弱いですけど、本気で強くなるうとしている事が伝わるから、応援したいんです」

「なるほど。君らしいというか、なんとというか。時間が合いそうなら、私たちにも紹介してほしいな。君たちのサポートをする事は私たちの大切な仕事だ。君がしっかりと師匠ができているかも見てあげないとね」

「ユーリ君ってすぐに絆されちゃう所があるから、お姉さんは心配だよ。でも、あなたの周りにはいい人が多いから、案外見る目があるのかもね。しっかり私が判定しちゃう」

2人はぼくのがままにも付き合ってくれるようで、本当にありがたい。ぼくはこの人達への尊敬をさらに深めた。

メルセデスたちがうっかり失礼な対応をしないように注意しておこうかな。

いくら可愛い弟子だからといって、この人達を悪く言うことは許せない。気を付けてもらわなくちゃ。

それから、いつものように冒険の様子を見てもらった。

そしていくらか経って、メルセデスたちとアリシアさんたちを会わせる機会がやってきた。

メルセデスたちをアリシアさんたちの所へ連れていく前に軽く注意しておくことにする。

「メルセデス、メーテル。これからぼくの師匠をしてくれているアリシアさんとレティさんに会いに行くわけだけど、失礼のないようにね。本人たちが許してもぼくが許せない事もあるから」

「了解つす！ でも、さすがに風刃のアリシアさんとレティさんに失礼を働くほど愚かじゃないつすよ。あの人たちに再起不能にされた人は数えきれないらしいつすからね」

あのアリシアさんたちが人を再起不能に？ いや、オリアスみたいならくでも無い奴がいつぱい居たのだろう。

あの優しい姿からはとてもそんな乱暴な行為はイメージできないし。

「アリシアさんもレティさんも優しい人だから、そんなことはできれば言わないで欲しいな。まあ、会ったことのない人の噂でいろいろ考えるのは仕方のないことだけど」

「ユーリさんが優しいって言うなら大丈夫つすね。あたいはうっかり失礼を働いちやう事もあるみたいなので、すぐに注意してくれたら次から直すつすよ」

「さすがにメルちゃんでも初対面の人に大変な無礼は働かないわく。そこは安心して良いはずよ」

アリシアさんたちに失礼なことをされると困ってしまうけど、今のところはメルセデスたちを信じよう。

アリシアさんたちもメルセデスたちもお互い大切な人たちだから、上手い関係を築いてほしいな。

そしてアリシアさんにメルセデスたちを紹介することに。

「アリシアさんにレティさん、こちらがぼくが弟子にしたメルセデスとメーテルです。ほら、2人とも」

「メルセデスつす！ ユーリさんの弟子をしています。有名なアリシアさんたちに会えてうれしいつす！」

「メーターといます。ユーリちゃんにはとつてもお世話になって  
いるから、これからしつかり返していききたいわね」

「アリシアだよ。ユーリ君たちオーバースカイの師匠ってところか  
な。ユーリ君たちは弟子を持つことは初めてだけど、きつといい師匠  
になってくれるはずだ。その関係を大切にするといいよ」

「レティさんだよ。ユーリ君ってば、こんなに可愛い子を弟子にし  
ちゃって。モテモテだね」

お互いになにこやかな感じで自己紹介は進んでいる。

うん、今のところは上手くいきそうだ。ぼくがモテモテみたいなの  
とはメルセデスにも言われたけど、そんな風に見えるものなのかな。

まあ、レティさんは結構からかってくるから、その類かもしれない  
けど。

「やっぱりユーリさんはモテモテっすよね。女の人にあんなに囲まれ  
ちやう位なんですから。顔からは想像できないっすよね。あ、ユーリ  
さんの顔が悪い訳じゃないっすよ。でも、可愛い顔っすからね」

「うんうん。ユーリ君は本当に可愛いよね。それがいつでも大好きで  
すって顔をして来るんだから、もうとつても癒されるんだよ」

「あ、分かるっすよそれ。出会ったばかりなのに信頼されているのが  
顔に書いてあるっすから。だからこそ期待に応えたいと思うんっす」  
そんなにぼくは分かりやすいだろうか。

レティさんにしろメルセデスにしろ大好きだというのは本当の事  
だけれど、顔を見れば分かるのは恥ずかしいよ。

「ほら、落ち着いて。ユーリ君が真っ赤になってしまっているよ。そ  
れはさておき、メルセデスさんたちの実力をを見せてもらってもいいか  
な?」

フォローしているようでぼくを追い詰めているんですけど、アリシ  
アさん!?

まあ、それはいい。メルセデスたちの実力ははっきり言って大した  
ことはない。アリシアさんたちに見捨てられないかが心配だな。

ぼくの面倒を見るきつかけだつて、結局は実力なのだろうし。アク  
ア水のおかげとはいえ、そこは疑いようがない。

それから、メルセデスたちに軽くモンスターを倒している様子を見せてもらう。

メルセデスたちの成長はとても早くて、ぼくが最初の依頼で倒した赤い犬を倒せていた。

メルセデスがうまく契約技である水の膜で攻撃を抑えて、2人で攻撃を受けないように攻めかかっていた。

結局危ない場面は無く、水の膜でうまく攻撃をしのげていた。

あれから何度かぼくたちも倒しているけど、ぼく1人で正面から戦うと契約技がないと厳しい位だ。

最初のメルセデスたちなら手も足も出なかったはずだから、とても感心した。

「うん、悪くない。ユーリ君たちには遠いことは確かだけれど、才能を感じないって程じゃない。しっかり育てば、オーバースカイのメンバーになることは夢じゃないかもしれないね」

「びつくりしたよ、メルセデス、メーテル。本当にすっごく成長している。君たちの努力の凄さをしっかり感じたよ」

「成長？ 以前はこれより弱かったと言う事かな？ 君たちはこれまで、どれくらい訓練をしてきたのかな？」

アリシアさんの質問は確かに気になるところだ。無理をして訓練をしているようなら止めないといけないし、一緒に訓練する機会を作ってもいいかな。

「あたいはずっと訓練なんて碌にしてこなかったつす。スライム使いが大成するなんて夢のまた夢ですから。でも、せつかくユーリさんが弟子にしてくれたから、これで本気にならなくちゃ嘘つすよ」

「そうね。だけど、戦いつて訓練するだけでも案外伸びるものなのね。ずっとこの調子とはいかないでしょうけど、頑張りがあるわ」

スライム使いが弱いと思われていることはもう分かっている。

ぼくの家にある資料からはもっと強さを感じたものだけれど、これまで出会ったスライムは大抵とても弱かった。

アクアが特別なのかとも思ったけど、スライム使いというだけで諦

めている人が多いからなのか？

あるいは、ハイスライムでは無いのだろうか、メーテルは。

「なるほどね。ユーリ君、出会ったときのメルセデスさん達はどんなものだったのかな？」

「アクア水を抜いたキラータイガー討伐の時のぼく位ですかね。今の半分も無いかもしれない」

「そうなるか。うん。オーバースカイと一緒に、メルセデスたちも着いてくる機会を用意しよう。ユーリ君たちのチームが強化される可能性を感じるから、もう他人事ではないね」

アリシアさんの目にもメルセデスがオーバースカイに入る可能性が映っている。

「だったら、ちゃんとメルセデスたちを大切にして、ぼくたちの仲間と同じ扱いが出来るようになってもらおう。」

「風刃のアリシアさんにも認められたっすか？ これはユーリさんと同じチームになれる日も遠くないかもしれないっすね！」

「だからこそ、安全を大切にしてね、メルセデス。きみたちに何かあったらぼくは悲しいだけじゃ済まないから。期待しているからね。メルセデス、メーテル」



## 裏 期待

アクアはいつものように、ユーリの五感を感じ取ることでユーリの状態を探っていた。

アクアとユーリが契約してからずっと、ユーリの五感の情報は常にアクアに送られていて、それをもとにアクアはユーリが何をしているかを感じていた。

この日は、ユーリとアリシアがともに出かける日で、アクアは落ち着きながらユーリの様子を見ていた。

アクアはアリシアの事がある程度信用しており、アリシアは少なくとも自分からユーリを傷つけないだろうと考えていた。

ユーリはアリシアにとっても強い信頼を抱いているし、アリシアはそれにしつかりと応えている。

この関係がずっと続くならばアリシアに対して何もしくなくていい。アクアはそうあって欲しいと考えていた。

アリシアがユーリに対して提案した、契約技を使った遊びはアクアにとって新鮮で、アクアはユーリの楽しむ姿をとてもしやぎながら眺めていた。

ユーリが勝ったり負けたりしていて一方的ではないと言うところが見ていて楽しく、アクアは自分が同じ遊びをユーリとできない事を寂しく感じた。

ユーリはアリシアに対してさらに尊敬を深めているようで、アクアからアリシアへの好意も深まっていた。

カタリナのようにアクアが自分に負けることも、サーシャのようにユーリに悪意を向けられることもないまま過ごしたい。

アクアはユーリ以外に対しても情が芽生えていたので、ユーリの周りの人間も傷つけずに済む未来があるのならそれが良いと真剣に考えていた。

ユーリが一番大事な存在だということとは絶対に変わらない。それでも、ユーリと自分だけが幸せであれば良いわけではない。

それは最低限のラインで、オーバースカイやその周りの人の幸せが

作れるのならばそれに越したことはない。アクアは過去に戻れるのなら、ユーリの大切な人に乗っ取る以外の解決策を取りたかった。

だが、それはあくまで空想でしかない。もう来ない未来に心を痛めつつも、アクアはせめて今いる人たちだけでも乗っ取らずに済めばいいと祈った。

アリシアとユーリが過ごす中で出てきた問題があった。ユーリの性欲の解消だ。

アクアは性欲がどういうものかよく分かっていないから、どういう事をユーリが求めているのかが分からなかった。

たとえば分かったところで、アクアがその話題を口にしたらユーリはアリシア相手のように照れてしまうだろう。さらなる負担になるようにしか思えない。

アクアには解決策が全く思い浮かばなかったので、その問題についてはいったん諦めた。

次の日、レティとユーリがともに出かけていた。

レティとユーリの関係は、ユーリとノーラの関係に近いようにアクアには見えていた。

つまり、レティに取ってユーリは可愛がる相手で、対等であるという事を求めている。

アクアはそのこと自体に不満があるわけではないが、ユーリを可愛がるという行為に対して若干の憧れを持っていた。

ユーリとアクアの関係が今のままである限り中々行うことは出来ないだろう事であるからだ。

それから、アクアはレティがユーリとともに空を飛んだり、ユーリがレティの毛づくろいを手伝ったりしていることに若干嫉妬していた。

スライムと人間ではできない事をユーリとしていることがとても羨ましい。だけど、レティという時にユーリはとても幸せそうだから邪魔はしたくない。

アクアは姿を自由自在に変えることができたなら色々と遊べるのにと考えながらユーリの事を感じていた。

ユーリと強くつながっている感覚はとても楽しいから、ステラの指輪を使いこなす瞬間はユーリもきつと楽しいだろう。

ステラの指輪は感情を送りあう物と認識しているアクアは、自分の大好きという感情をユーリに直接送る瞬間を楽しみに待っていた。

それから時間が空いて、ユーリはメルセデスたちに出会う。

メルセデスの契約モンスターであるメーテルの存在を知って、アクアは危機感を抱いた。

ハイスライムであるメーテルの状態如何によつては自分の異常性をユーリに知られかねない。

アクアはメルセデスたちを乗っ取ることと、メーテルをひそかに強化することを検討した。

メルセデスたちを乗っ取ることにはユーリの様子から取りやめた。ユーリはメルセデスたちをすでに大切に思ってしまったから、アクアはメルセデスたちを乗っ取るという解決策は取りたくなかった。

メーテルをひそかに強化することは結果的に必要なかった。

最初にメルセデスの契約技を見た時には、あまりにも出力が低いために自分が疑われかねないと懸念していた。

しかし、メルセデスたちは訓練を全くしていない状態だったために、これから成長することでユーリに疑いを持たせまいだろうとアクアには思えた。

ただ、メルセデスたちが弱いままならユーリが悲しむ可能性が増えるだろうから、アクアは真剣にメーテルの強化を検討していた。

幸いにも、メーテルはハイスライムの上澄みだったようで、順当に成長すればメルセデスたちがオーバースカイに参加する可能性は十分にあるとアクアは判断した。

メルセデスたちはとても真剣にユーリに追いつくために頑張っている。

間違いなくユーリにとつてもっと大切な人たちになるだろうから、アクアはひそかにメルセデスたちが死なないようにサポートしていた。

危険なモンスターがメルセデスたちに襲い掛からないようにモン

スターの発生を制御したり、メルセデスたちの事を利用しようとする悪意を持った人間を排除したり。

サーシャの思考を操ってメルセデスたちに配慮させるということも行っていた。

そうする中で、サーシャを説得することでもこの展開は作り出せたのではないかという疑問が浮かび、アクアは再び皆に体を返すことを考え始めた。

以前にも検討したが、記憶を都合のいい形に書き換えることで皆を解放するという案は悪くないのではないか。

真剣に検討していたアクアだったが、以前カタリナにそれを実行することをやめた理由に思い当たった。

作り出した記憶のもとに動くカタリナなんて、アクアの知っているカタリナでも、ユーリの知っているカタリナでもない。

もはやカタリナの姿をしただけの別の存在でしかない。そんなカタリナの姿を見ていたくない。

前回は言語化できなかつた違和感をはつきりとアクアは形にできていた。

次に、そのまま何も対策せずに皆を解放するという案を考えた。サーシャだけはもしかしたら上手くいくかもしれない。

それでも、ステラもフィーナもカタリナも、絶対にアクアを許しはしないはず。

だから、そこからユーリに情報が伝わってユーリに嫌われてしまう。アクアはこの案を却下した。

その他に何かいい案がないかと考えていてもアクアには何も思い浮かばず、結局皆の体を返すことは取りやめた。

皆で幸せになるだけの事がこんなにも難しい。皆ユーリの事が形は違って好きで、ユーリも皆の事を好きでいる。

アクアだって皆が嫌いなわけでは無いし、好きなところはいっぱいあった。

ユーリとアクアと皆で幸せになる未来はどうやったら来るのだろうか。アクアは少しだけ諦めつつも考え続けようと決めた。

それから、メルセデスたちは順調に冒険を進めているようだった。メルセデスにしろメートルにしろユーリを尊敬していることはよく分かったので、オーバースカイに加わる日を待っていても良いだろうとアクアは考えた。

そこで、アクアはメルセデスたちに対するサポートを更にしつかりしたものにして、万が一にも途中で犠牲にならないように配慮していた。

メルセデスたちはしつかり成長しているようで、ユーリはとても喜んでいた。

ユーリを喜ばせるメルセデスたちでいる限り、アクアはメルセデスたちを大切に扱うと決めていた。

ユーリは周りに大切な人が増えたことが幸せそうなので、メルセデスたちにもその一員としてユーリを幸せにしてもらおうと考えての事だ。

ユーリは最初は恐る恐るという感じでメルセデスたちと接していたが、メルセデスの師匠になるとはつきり決めてから生活に張りが出ているようだった。

だから、アクアもスライムとしてメートルに何か教えることを検討していた。

ハイスライムの性能ではどうしてもアクアと同じことはできないが、スライムの運用に関してはユーリの家にあった資料が詳しく、それを参考にしようと考えていた。

物理攻撃に対してある程度の耐性があるスライムというのは珍しいが、メートルはその条件を満たしていた。

アクアのように壁として立ち回れることはある程度できるだろうか、そのやり方を教えることがいいか。

あるいは水としての性質を生かして、狭い場所に入るような立ち回りを教えるなどして、アクアと違う役割を持つてもらおうことも良いかもしれない。

アクアはオーバースカイにメルセデスたちが入ることは順当な流れだろうと考えていたので、メルセデスたちをユーリの役に立てる方

法を真剣に考えていた。

メルセデスたちはユーリの事を本当に尊敬しているから、ユーリの役に立てることは喜ぶはずだ。

お互いに利益のある提案になりそうだと考えて、それなりに重要度の高い案件として思考の片隅に置いていた。

メーテルが本格的に強くなるまではまだまだ時間がかかるだろうから、急ぎではないと判断している。

それでも、アクアはスライムという同族が自身をオメガスライムと判明させる展開を警戒することを止め、メルセデスたちをユーリと一緒に冒険させるための道筋をしっかりと考えていた。

メルセデスたちはユーリにとって大切な人であるし、ユーリの他の大切な人ともうまくやっている。

アクアはユーリの周りの人たちもユーリと一緒に幸せにする道筋を考え始めた。

その中のメンバーとして、メルセデスとメーテルも加わって、アクアはそれなりに現状を楽しんでいた。

アクアとユーリとその周りの人たちが幸せになる未来をアクアが考える中で、またユーリと何の関係もない人やモンスターはアクアの犠牲になっていた。

## 60話 再会

メルセデスたちを弟子にしてからしばらく経った。

メルセデスたちはアクア水を手に入れたばかりのぼくたち位の強さを感じるようになり、とても感動している。

そろそろオーバースカイに加入させることを考えてもいいと思うけど、本人たちはまだ納得していない様子なので、しばらくは様子見かな。

アクアはメーターと結構交流している様子で、アドバイスを送ったり一緒に出かけたりする姿を見かける。仲が良さそうで何よりだ。

ぼくたちにとつてのカタリナのような存在がないから、メルセデスたちだけでキラータイガーを倒すことはまだ厳しそうだけど、そう遠くないうちに実現できそうだ。

キラータイガーなんて現れないに越したことはないけど、メルセデスたちがキラータイガーと戦う機会があってもいいかな。

ちゃんとぼくたちで安全マージンを確保しておいて、いざという時に備えることが前提ではあるけど。

問題は人型モンスター相手にどこまでできるかという所だろうな。うっかり情が湧いてしまうと大変だし、単純に強いし、罠を仕掛けてきたりする狡猾さもある。

ただのモンスターとは対処法がずいぶん違うから、できるだけ楽なところから体験させてあげたい。

でも、人型モンスターが現れること自体が中々珍しいとは聞かから、ちようにいいモンスターが現れる確率はさらに低いだろう。

メルセデスがぼくたちの仲間としてしっかりとやって行けるように、これからも頑張ろう。

メルセデスたちが上手くやれていることに喜ぶ中、ぼくを訪ねて来る人がいた。

その姿を見たぼくは驚く。なんと、ミーナとヴァネアが来ていたのだ。

王都での大会で戦って以来かな。話もちよつとしたけど。

「久しぶりだね、ユーリ。ユーリがまた強くなったと聞いて慌ててこつちに来たんだ。離れて修行してユーリとの距離が分からないと問題だからね」

「はあい、坊や。これからアタシたちは少なくとも1か月はここに居るつもりだから、よろしくね」

ミーナとヴァネアとしばらくは一緒に居られる。

ぼくはとても喜んでいたが、今からだとみんなに紹介はできないから、ちよつと残念でもある。

ミーナをみんなと会わせて色々と話をしてみたいけど、それはまた今度かな。

「ミーナ、ヴァネア、歓迎するよ。そうだね。ぼくは新しい力を手に入れたから、それを使いこなすために修行をしていたんだ。結構上手くいつていると思うよ」

「そうなんだ。君の新しい力はどんなもの何だい？」

ミーナは興味津々といった様子だ。当然か。新しい力なんて簡単に手に入るものじゃないからね。

「身体強化の力だね。とあるモンスターに貰ったんだ」

「そうなんだね。時間が空いているなら、今から勝負しないかな？」

「分かった。じゃあ、移動しようか」

そのままぼくたちは空いている場所へと向かい、ミーナと模擬戦をすることに。

ヴァネアが審判を務めてくれるとのことだ。

模擬剣を構えたぼくたちは合図を待ちながら構える。

「3、2、1、始め！」

ヴァネアの掛け声と同時にミア強化を使ってミーナに突っ込む。

新しい力を手に入れたのだから、まずはミーナにそれを見せたかった。

しばらくミーナと打ち合っているも押し負けたりせず、互角の様相だ。

「アクア水を使っていないのにこれか！ 本当に強い力を手に入れたものだね！」



「そうだね。だけど、本番はこれからだよ！」

ぼくは水刃を発生させながらミーナと打ち合う。

ミーナもスピードを上げて対応しようとするが、手数が追い付いていない。

そのまま水刃とミア強化を同時に使っていると、ミーナの対応が遅れだして、ぼくはミーナの剣を弾き飛ばすことができた。

ミーナはそのまま両手を挙げる。ぼくの勝ちだ。

でも、勝って喜ばしいという気持ちは全然湧いてこなかった。

ミーナと競い合うこともできずに一方的に倒してしまふなんて。ミア強化をくれたミアさんには感謝しているけど、嬉しい事ばかりではないな。

「ユーリ、とても強くなったんだね。完敗だよ。ユーリの手に入れた新しい力は一体何なんだい？ 契約技では無いのかな？」

まあ疑問に思うよね。契約技を2つ持てないということは常識だし、契約技並みの力を複数持っていることがおかしいと感じるのは当たり前だ。

ぼくはミーナに説明することにする。

「この技はミア強化って言って、ミアさんと言うモンスターに貰ったんだ。モンスターが命を捧げることで、契約技のような力を使えるようになるらしい。それで、この力を手に入れたんだよね」

ミアさんの事はとても残念だという思いは今でもある。

だけど、全力でこの力を活用すること以外にミアさんに対してできる事はもうないから、この力をしっかりと使っていくしかない。

「ユーリはその力を手に入れた事があまり嬉しくないんだね。ユーリの性格なら当然か。他者の命を犠牲にして得た力でユーリが喜べるはずがない。僕にもそれくらいは分かるよ」

「そうね。アタシにだって分かるわ。でも、力を使わないとその命が無駄になっちゃうって考えでしょ。坊やらしい話だけど、ミーナとは差がついちちゃったわね」

「……そうだね。ユーリに追いつく事はなかなか難しそうだ。でも、僕は諦めないよ。せっかく出会えた運命のライバルに、情けないとこ

ろは見せられないよ」

ミーナは複雑そうだ。それも仕方ないよね。ライバルが急に力を手に入れて、いい勝負にならなくなってしまったんだから。

ぼくにも悲しさはあるけど、ミーナの前でそれを口にするほど愚かじゃない。話題を変えるか。

「そうだ、ミーナ。ぼくはあれから弟子を取ることになってね。ぼくと同じスライム使いなんだ。王都での大会を見てぼくに憧れてくれたらしいよ」

ミーナはすぐに明るい顔に変わったけど、無理をしているようにも見える。

心配だけど、ぼくが何か言ったところで逆効果になるだけだから、話題に出さないことが精いっぱいだ。

「そうなんだね。僕にも紹介してほしいよ。オーバースカイの仲間とか、アリシアとレティとか、それ以外にも今のユーリを形作った人にはあってみたいな」

「そうね。アタシにも紹介してくれるかしら？ 坊やの周りの人とも交友を深めたいわね。坊やとはもつと仲良くなりたいのよ、アタシはね。ミーナもそうでしょう？」

「そうだね。僕たちはライバルだけど、敵ではない。もつとユーリと仲良くなつて、お互いに頂点を目指したいところだね」

ミーナもぼくと近い考えでいてくれるようで嬉しい。

ミーナとお互い訓練したり、雑談したりしながらお互いが強くなつていけるならそれが良い。

ぼくはミーナを大切にしたいし、いがみ合いながら戦うだけの関係はやっぱりつらい。

「ぼくもそう思うよ。ミーナの好きなものなんかも知っていったらいいな。ぼくたちはライバルだけど、協力し合うことができると思う」  
ミーナは何度もうなずいている。ヴァネアはそんなミーナを見て微笑んでいる。

うん。ミーナにしろ、ヴァネアにしろ、みんなと上手くやって行けそうに感じる。オーバースカイにミーナが入るとは思わないけれど、

一緒に冒険する機会があってもいいな。

それからミーナとヴァネアとしばらく話してからミーナたちは去って行った。みんなに紹介することは約束したから、その機会が楽しみだ。

しばらくして、ミーナたちをみんなに紹介する機会がやってきた。みんなが集まれるちようにどいい機会があつたので、そこにミーナを呼んでみた。

結構大きな部屋で、ぼくの大切な人たちはみんなここに居る。大切な人がこんなに居るようになるなんて、学園に居るころは思ってもみなかったな。

「みんな、紹介するよ。このピンク色の髪の剣士がミーナ。ぼくのライバルだよ。こつちのラミアがヴァネア。ミーナの契約モンスターだね」

「紹介されたようにユーリのライバルをしているミーナだ。ユーリにはちよつと離されちゃったけど、出来るだけすぐに追いつくよ」

「アタシはヴァネア。ミーナとはチームを組んでいるわ。坊やとは王都で知り合つたの」

みんなはそれに拍手で返して、ミーナとヴァネアは笑顔で手を振っている。

いい雰囲気だから、お互いに上手くやっていけそうだな。

「じゃ、あたしからね。あたしはカタリナ。ユーリの幼馴染で、オーバースカイのメンバーよ。ミーナさんはエンブラの街の大会で見かけたわね」

「わ、わたしはユーリヤですつ。オーバースカイのメンバーで、遊撃を担当していますつ。よろしくお願いしますねつ」

「わたしはフィーナです……オーバースカイにはつい最近加入しました……」

「ミーナ、アクアは前にも会つたから分かるはず」

それぞれにミーナとヴァネアも返答して、和やかな感じだ。オーバースカイのメンバーの最後の1人も忘れちゃいけないよね。

「この猫型モンスターはノーラ。ぼくたちオーバースカイのメンバー

なんだ。王都での大会の帰りに出会ったんだよ」

「可愛いモンスターも一緒なんだね、ユーリ。オーバースカイは良い雰囲気だし、僕も一度一緒に冒険してみたいかな」

「それもいいわね。坊やと仲良くなるのにもいいし、対人では使えない技を見せ合うのにもいいじゃない」

ミーナたちもぼくたちと一緒に冒険したいと思ってくれているのなら、準備してその機会を作りたいな。

それから自己紹介はまだまだ続く。

「わたしは以前にも会いましたが一応。ステラです。ユーリ君の同居人ですね」

「サーシャと申しますわ。ユーリ様たちの冒険のサポートを務めておりますわ。ミーナ様たちほどの実力者でしたら、わたくしと会う機会もそれなりに有るでしょう」

ミーナたちはそれにも返答を返していく。穏やかな空気が流れている。

ステラさんとサーシャさんにもミーナたちはうまく対応できている。この調子で最後までいって欲しいな。

「私はユーリ君の師匠をしているアリシア。風刃と呼ばれているよ。よろしくね」

「わたしはレティ。アリシアと一緒にユーリ君の師匠なんだ。ミーナさんもよろしく」

「風刃のような2つ名として、僕には終の剣という物があるよ。ユーリ君の水刃ほど似合わないかもしれないけどね」

それからミーナたちはぼくの2つ名で盛り上がっていた。少し恥ずかしいけど、仲を深めるきっかけになるなら何よりだ。

「あたいはメルセデスっす！ユーリさんの弟子っすね。ミーナさんの事は王都で見てたっすよ！」

「私はメーテルよく。メルちゃんの契約モンスターなの。ミーナちゃん、よろしくね」

ミーナたちはぼくたちの決勝の話で盛り上がっている。あの試合は何度思い返しても楽しかったから、話を聞きながら思い返してい

た。

ある程度みんなとミーナたちが話し終わると、ミーナたちはぼくの方へ向かってきた。

「ユーリの知り合いは思っていたよりいい人ばかりで嬉しいよ。これなら、これから上手くやっていけそうだね」

「そうね。アタシもみんなの事が気に入っちゃったわ。滞在の期間を延ばしてもいいかもね」

ミーナたちと長く一緒に居られるのなら嬉しい限りだ。

ミーナたちがやってきたから、これからはもつと楽しくなるかもしれない。ミーナと出会えて良かったな。

## 61話 来訪

ここしばらくの間、カーレルの街が騒がしくなっていた。

何か新しい建物が建つようで、それを建てる人を中心に大勢が集まり、今の騒がしさになっている。

エルフィール家も関係しているようで、サーシャさんも忙しそうにしていた。

それからいくらか経って、建物が完成した。とても立派に見える。

サーシャさんに連れられて、オーバースカイのみんなで建物の前へと来ていた。組合というよりはエルフィール家としての用事のように、ぼくたちも正装をしていた。

建物から人が現れると、言われていた通りにぼくたちは膝をつく。そのまま待つっていると声をかけられた。

「久しいな、ユーリ。余の物になる準備はできたか？ まあ、貴様にそこまで急なことは期待していない。今日は貴様らに良いものをやろうと思ってるな」

この声に口調、間違いない。オリヴィエ様だ。それでサーシャさんは忙しそうにしていたのか。

それにしても、ここまで移動してくるような馬車なんかは見当たらなかったけど、どういう事だろう。

「オリヴィエ様、この度は転移装置の完成、おめでとうございますわ。エルフィール家の代表として、切にお祝い申し上げますわ」

転移装置って、あの物語とかに出てくる転移装置の事で良いのか？ 完成って、まさかここが最初だったりしないよな？ オリヴィエ様ならあり得てしまいそうで恐ろしい。

「そう畏まらなくともよい。ユーリを余のものにしようと思えば、あまり高圧的な姿を見せてはよろしくないであろうからな。それに、余と貴様の仲であろう、サーシャよ」

「恐れ多い事ですわ。ですが、オリヴィエ様。ユーリ様はそのような事でえり好みされるお方では無いかと。周囲の人間を傷つけさえしなければよいと存じますわ」

褒められているのか、誰でも好きになると思われているのか、ちよつと気になる。

オリヴィエ様が高圧的なくらいで嫌いにならないというのは確かだろうけど。今更だし。

「くくつ、皆の者、頭をあげても良いぞ。せつかくだ。余の近衛を紹介しておこう。リデイ、イーリス、来い」

くすんだ金髪をした小柄な女の人と、大柄なトカゲの鱗を持った女の人がやってきた。

契約者と契約モンスターだろうか。ドラゴニユートかな？ そう考えていると、ドラゴニユートらしき人がアクアに向かって炎を放つ。

慌ててアクア水で防御すると、アクア水が蒸発した。こっちに蒸気が来そうになると、風で蒸発したアクア水が散らされる。

この風は、アリシアさんも来ていたのか。ちよつと焦ったけど助かった。

ぼくはアリシアさんに感謝しつつ、ドラゴニユートらしき女を睨む。

「お前が契約技で防御するものだから焦っちゃったぜ。あのスライムにこの程度の炎が通じるものかよ。お前、案外相棒の力を分かってないのか？」

「反省の言葉より先に言うことかな、それが？ 近衛という割には品性がないらしい。主の程度も知れるんじゃないかな？」

アリシアさんは怒ってくれているようだけど、その言葉を聞いて焦ってしまう。オリヴィエ様を貶したら大変なんだよ。アリシアさん。

アリシアさんに何も無いように祈りつつも様子を見てみると、オリヴィエ様が笑い出す。

「アリシアよ。貴様の言葉はそう間違ったものではないな。余がイーリスを制御できていないように見えてもおおかしくはないからな。だが、ユーリの手前でなければ、貴様は許されんことを言ったのだぞ？

感謝することだ、ユーリにな」

もう一人の近衛であるリデイさんと言うであろう人が苦しそうな顔でオリヴィエ様に物申ししていた。

「殿下、そのような態度では敵意を抱かれてしまいます。殿下が強いことは疑っていませんが、不死では無いのですから、無用な敵を作ることはお控えください」

「敵をいくら作った所でこれまで余を害せたものなど居ないのだがな。まあよい。許せよ、アリシア。貴様にも良い物をくれてやろう。ユーリに侍るものも飾っておくのは悪くないからな」

オリヴィエ様はそう言つて、周囲の空気は軽くなった。でも、ぼくはまだイーリスとやらを睨んだままだった。

いくらアクアが無事になる威力だとしても、アクアを攻撃したことは許せない。この人の事は好きになれそうにないな。

「ユーリ。アクアは大丈夫だから。あんな小さな火ではやられたりしない。それより、自分の事を心配して」

「だろうな。俺の炎を見ても顔色一つ変えたようには見えねえ。余裕そうな顔してやがるぜ。お前、本当にハイスライムか？」

アクアは確かに恐怖などは感じていなかったように見える。でも、こいつは全く反省していない。

こんなことが次もあつて許せるはずがないのだから、痛めつけておくか？ できないとは思えない実力に見える。

「悪かったよ、ユーリ。モンスターをそこまで大切にしているとはな。所詮契約モンスターなんぞ道具としか思つて無い奴じゃないんだな。気に入ったよ」

イーリスはぼくの背中を楽しそうに何度か叩く。雰囲気は明らかに和らいでいるし、これ以上ぼくが空気を悪くするわけにはいかない。

「ぼくじゃなくてアクアに謝ってください。それでしたら許します」  
「ははっ、それはその通りだ。悪かったな、アクア。こんな相方なんて居るもんじゃ無えから、大切にしろよ」

「当たり前。イーリスは相方にに恵まれなかった？」

「いや、こいつは最高だぜ。俺より弱いが、とにかく能力をうまく使い



やがる。契約した甲斐があつたつてもんだぜ」

アクアとイーリスの会話は和やかだ。アクアが気にしていないのなら、許すべきだろうな。

多分この人は良くも悪くも素直だから、アクアにはもう攻撃はされないはずだ。

「イーリス、あなたの勝手な行動で迷惑を被るのはこちらなのです。殿下の名誉にもかかわる以上、軽率な行動はやめなさい」

「わーつたよ。ユーリ、オリヴィエ様に気に入られた以上は苦勞するだろうが、無理はするなよ。オリヴィエ様でも慈悲の心はあるんだから、ちゃんと無理なら無理って言え」

「ユーリ殿、貴殿は小生と同様に振り回される運命でしょうが、殿下は近くの物は大切に致します。失礼のないように気を付けている限り、今後は安泰でしょう」

イーリスとリディはお互いにオリヴィエ様に苦勞させられているようだ。

それにしても、イーリスは最初の態度とは大違いだ。最初の攻撃は何だったのだろう。

「そろそろ良いな。ユーリ、お前にはこれをくれてやろう」

そう言つてオリヴィエ様に渡されたのはミーナと同じような剣だ。これもドラゴンシルバーなのだろうか。

「貴様はこれを知っているようだな。ドラゴンシルバーの剣など、そうそう手に入るものではないぞ？　感謝することだな」

感謝はしようと思うけど、唐突過ぎて感情が追いつかない。ぼくが困惑しているうちに、オーバースカイのメンバーとアリシアさんたちに同様の武器が渡されていった。

カタリナは弓でユーリヤは糸と仕込み武器、フィーナは剣を。

アリシアさんとレティさんにも短剣が渡されていった。

「そういうえば、貴様は弟子を取つたというではないか。その者の分もくれてやろう」

そしてもう一本剣を受け取る。メルセデスにこれを渡すのはいいけど、こんなに貰つてしまつて大丈夫なのか？　オリヴィエ様はとん

でもない取り立てをしてきそうに怖いんだけど。

「くくつ、疑り深い顔をしておつて。これも貴様が余の物となるための布石の一環よ。そう無体なことをするわけでは無いのだから、少しは安心せよ」

どういふ狙いでこういう事をしているのだろうか。恩で雁字搦めにするとか？ 断つても怖いし、受けるしかないか。

「ありがとうございます、オリヴィエ様。しっかり役立てていきます」  
「それでよい。ではな、ユーリ。また会いに来るから、その時まで男を上げておけよ？」

そう言つてオリヴィエ様たちは去つて行く。

いきなり来て慌ただしいだけだったな。それにしても、とんでもない借りが出来てしまったかもしれない。結構怖い。

オリヴィエ様たちが去つた後、みんなでオリヴィエ様たちについて語っていた。

「あれがオリヴィエ様か。初めて会つたけど、とてもユーリ君に執着しているように見える。ユーリ君、気を付けてね」

「そうだね、アリシア。ユーリ君たちと冒険が出来ないようにするのは嫌だからね。ユーリ君、身の安全は大切にね」

まあ、単なる珍しいものに対する対応としては過剰に見える。

でも、オリヴィエ様は気分次第でとんでもない事をしてかしそうな人に見えるから、そういう気分なのかもしれない。

何にせよ、アリシアさんたちに被害がいかないように、そしてアリシアさんたちと冒険が出来るようにしなくちゃね。

オリヴィエ様の物になつてしまつてはそれが出来なくなつちやうからね。

「ほんと、とんでもない人たちだったわね。まあ、せつかく貰つたものだから、ありがたく使わせてもらうけど。あんた、王都で知り合つたのならあたしに伝えておきなさいよね」

「び、びっくりしちゃいました。でも、流石ユーリさんです。王女様にまで気に入られてしまうなんて。それでも、ユーリヤを捨てないでくださいね……？」

「わたしもそれは困ります……。ユーリさんとわたしはずっと一緒に居るんですから……」

「大丈夫だよ。絶対に捨てたりはしない。ぼくはみんなが大好きだから」

当たり前のことだけど、オーバースカイの方がオリヴィエ様より大切だ。

でも、オリヴィエ様はオーバースカイの事も大切にしてくれるかもしれない。

アリシアさんたちやメルセデスたちまで含めたみんなでなら、オリヴィエ様の物になることも必ずしも悪いことでは無いんだけどね。

みんなと離れ離れになることだけは嫌だから、その予定ならオリヴィエ様の物になる訳にはいかない。

「ユーリ、アクアを心配してくれてありがとう。でも、アクアのために無理はしなくていい。アクアは絶対に大丈夫だから、自分のために頑張って」

ぼくがイーリスに攻撃しようとしていたことは気づかれているな。アクアを心配させないためにも、ぼくが危険になるような真似は出来るだけ避けていかないと。

それからしばらく話した後解散した。サーシャさんはこれからも忙しくなるみたいだ。

メルセデスたちに剣を渡すとても驚かれた。誰に渡されたのかはメルセデスたちが落ち着くまでは伝えないことにした。剣だけで大声を出していたから、もうちよつと段階を踏みたい。

それにしても、オリヴィエ様がまた来るかもしれないのか。怖くもあり、楽しみも感じてしまう。

オリヴィエ様の事を嫌いになれたら楽なんだけど、ぼくにはそれは出来ないみたいだ。

## 62話 ヴァネアと

ぼくは今日ヴァネアと一緒に過ごすことにしていた。ヴァネアから親睦を深めたいという誘いがあったからだ。

ヴァネアが言うには、ミーナとぼくが良い関係を築くために自分たちも仲良くしておいた方が良さだろうし、単純にぼくにも興味があるとのことだ。

待ち合わせ場所でヴァネアをしばらく待っていると、いつも通りの姿のヴァネアがやってきた。

一緒に出かける時に着飾っている人が多かったので、こういう感じは気が楽で新鮮味がある。

「はあい、坊や。今日はお姉さんがエスコートしてあげる。坊やは気楽にしておけばいいわ」

ヴァネアはそう言ってくれる。気楽にしておけば良いというのは有難いけど、任せつきりでもヴァネアは楽しめるのだろうか。

まあ、ぼくがうまくエスコートできるとは思えないから、無理に引っ張っていくよりはヴァネアに任せた方が良さか。

「今日はよろしくね、ヴァネア。しっかり仲良くなるうね」

「仲良くなるうなんて意識するものじゃないわ。あなたは普通に楽しめばいいし、アタシも普通に楽しむわ。それが結局仲良くなる近道つてもものよ」

そういう物だろうか。ぼくが自分から仲良くなるうと踏み込んだ経験は無いようなものだから、無理をしても上手くいかないのは確かかもしれない。

ヴァネアは尻尾を揺らしていたり声が弾んでいたりと結構楽しそうな雰囲気だから、少なくとも今はヴァネアに任せておけばいいか。

「じゃあ、行きましようか。まずは食事ね」

ヴァネアに連れられた先は屋台だった。肉や野菜を焼いたものを出してくれるらしい。

ヴァネアは肉ばかり注文していた。ぼくは色々と頼んでみた。

「アタシは肉が好きなのよね。坊やは何が好きなの？」

ヴァネアはラミアによくあるイメージ通りに肉が好きみたいだ。野菜は食べられるのかが気になるけど、聞いてみても良いのだろうか。

「ぼくは魚が好きだよ。ヴァネアは野菜は食べないの？」

「食べられない訳じゃないけど、やっぱり肉の方が好みなのよ。野菜を食べなかったからといって具合が悪くなったりもしないしね」

そういう物か。蛇は肉食だと言うし、その辺が関係あったりするのかな。

アリスアさんに教わった動物と似ているモンスターは動物の要素が強いというのは、人型モンスターでも同じなのだろうか。

まあ、食べられない訳じゃ無いのなら気にする必要はないか。

具合が悪くなるのかなら気を付けないといけないけど、野菜が嫌いという顔でもないし、食べられないという事もなさそうだ。

しばらくしてすべて食べ終えたぼくたちは次の場所へと移動することに。

ヴァネアについていくと、前にフィーナと一緒に来た人気のない公園へと連れられた。

ヴァネアは楽しげな顔をしてぼくに向かい合っている。

「坊や、軽くアタシと戦ってみない？ もちろん、怪我をするほど熱くなるつもりは無いわ。坊やもアタシの実力が知りたいでしょうし、アタシも確かめたい事があるの」

そう言っただけヴァネアは構える。ぼくも拒否するつもりは無いけど、突然だな。

まあいいか。ダメになったら困るような服を着てきた訳では無いから、加減が出来るのならそれでいいか。

ぼくも構えるとヴァネアが突っ込んでくる。

ぼくは即座にミア強化を発動してヴァネアの動きに対処しようとする。

ヴァネアは殴りかかってきたり、尻尾で攻撃したり、噛みつきこうとしたりしてきた。

ぼくはそれら全てをいなしながら、気になったことを聞くことにす

る。

「ヴァネア、怪我はさせないと言っていたけど、噛みつかれて毒を貰ったりはしないんだよね？」

「よく勉強しているじゃない。でも、大丈夫よ。アタシくらいになれば毒を出すも出さないも自由自在よ。万が一当たったところで大した問題にはならないわ」

やっぱリミアに噛まれて毒を貰うことはあるらしい。

ヴァネアから騙そうという気配は感じないので、本当に毒を貰う心配は無いのだろう。

だからといって、攻撃を受けたいわけでは無い。ぼくは、ヴァネアの攻撃を全力で避けていく。

しばらくヴァネアの攻撃をいなし続けていると、ヴァネアが両手を挙げた。たぶん降参ってことだよ。ヴァネアの息は絶え絶えだし。

「坊やは本当に強くなったわね。王都での大会からじゃ想像もできない位。前は剣技じゃミーナには勝てないと言っていたけど、今なら勝てるかもしれないわね」

どうだろうか。技術という点では絶対にミーナの方が上だ。

ただ、ミア強化も含めた身体能力でどうにかできる範囲かもしれない。そのあたりをどう捉えるかの問題かな。

「身体能力の差で押し切ることを剣技と言うならそうかもしれない。でも、ミーナの凄いところは自在に剣を操るところだから、そこでは絶対に勝てないよ」

「それでミーナは納得するかしらね。それはこちらの話ね。坊や、アタシからお願いがあるの」

ヴァネアの顔はとても真剣だから、大事な話だろう。ぼくは姿勢を正して聞く。

「坊やもしかしたらミーナでは届かないほどの強さになるかもしれない。それでも、ミーナの事を大切にしてあげてほしいのよ」

ヴァネアはそう言う。ぼくにとっては当たり前のことだけれど、ミーナとぼくの関係はライバルだとするなら、実力が拮抗しないと関係が壊れるかもしれないという事は分かる気がする。

ミーナはぼくにとつては既にとても大事な人の1人で、友達のような存在にもなりたい人だ。

ミーナにとつてぼくはどのような存在なんだろうな。ライバルだと言っているから、お互いに研鑽しあう関係を求めているのだろうか。

なんにせよ、ミーナがたとえ今より弱くなったとしても、ぼくが強くなって実力差がついてしまっても、ミーナを大切にするということは変わらないだろう。

ぼくはミーナの剣技以外にも、あの笑顔や明るい態度、剣に対する真剣な姿勢なんかも好きになっているから、ぼくと対等の実力じゃなくなつたとしても嫌いになることは絶対にないと言えた。

「当たり前的事だよ。ぼくがミーナを尊敬しているところは強さだけじゃない。本気で剣に向き合っていることがよく分かるし、性格も好きだ。

ミーナが人を傷つけてもなんとも思わない存在になつてしまつたら分からないけど、それくらいの事がない限りミーナは大切な人だよ」

ヴァネアはその言葉を聞きながら優しい目でぼくを見つめる。こんな顔をするのなら、今の言葉は正解なのかな。

「坊やはそういう子よね。ミーナにはこの話をしたことを言わないでほしいんだけど、ミーナ、この前に坊やに負けてから悩んでる顔をよくするのよ。きつと、置いて行かれそうだと思つているんでしょね」

ミーナがそんな風に。思い当たる節がないわけでは無い。ミーナはあの時考え事の様な事をしている様子だった。

ミーナの気持ちは分からないけど、ぼくに置き換えて考えてみるとするか。

1回戦つて負けて、その後勝つために修行をしたけどまた負けて。ライバルだとお互いに認め合つていたけど、相手がとても強くなつて差が開く。

考えてみたけど、少しつらいかもしれない。

相手はどう思っているんだろうとか、置いて行かれる悲しさとか、

追いつけない悔しさとかで苦しい思いをしそうだ。

ミーナも同じような気持ちなのかもしれない。

でも、ぼくが何かを言ったところで嫌みのような何かになるだけのような気がする。ヴァネアに配慮して貰うしかないだろう。

「ヴァネア、それに対してぼくからできる事は悔しいけど何も無い。ヴァネアがミーナを支えてあげてくれないかな？」

「まあ、そうよね。坊やがミーナを慰めようとしたって、お前とは実力差があってもライバルだ、なんて物言いには聞こえないでしょう。同情されてるようにしか思えないわよね。坊やはミーナを見捨てないことはアタシには分かる。ミーナにもそれを分かって貰いましょう」

ぼくにはどうやってそれを実現するかは思いつかないけど、他に良い方法も思いつかない。時間が解決することを期待するとか？

それなら、何もしないことと同じか。本当に難しい問題だ。

「坊や、ごめんね？　こんな重い話をしちゃって。でも、坊やには知っておいて貰いたかったのよ。ミーナがどれほど坊やを大切に思っているか。アタシは坊やとミーナにうまくいつて貰いたいわ」

ぼくだってミーナをとっても大切に思っているけど、だからこそミーナに何かをすることは難しい。

ミーナと上手く行かないかもしれないからと訓練を緩めるわけにはいかない。ぼくはみんなの事を守るために強くなると決めたから。

それに、そんなやり方はミーナに対して失礼だ。ミーナがこの問題をうまく乗り越えることに期待するしかない。もどかしいな。

「坊やがミーナを大切に思ってくれている事はよく分かる。良かったわ。アタシはミーナと出会えたことも、坊やと出会えたことも最高の経験だと思っているわ。だから、2人のこれからをもっと見ていたい」

ヴァネアがそう思ってくれていることは嬉しい。

ヴァネアみたいな人型モンスターばかりなら良かったんだけど、ぼくの出会った人型モンスターはみんな敵だった。

ヴァネアとミーナのように人型モンスター相手でも分かり合う事



ができるならな。

「アタシはミーナや坊やと出会えて本当に良かった。それまでただのモンスターとして過ごしてきた時間は何て味気なかったんだろうって。アタシに楽しさを教えてくれたミーナにも、そのきっかけを作ってくれた坊やにも感謝してるわ。お願い。これからもミーナを大切にしてください」

「もちろんだよ。ミーナだけじゃない。ヴァネアだって大切にするよ。ぼくもヴァネアと出会えて良かったって思っているんだからね」  
ヴァネアはそれを聞いて少しした後、ゆつくりと微笑む。

ヴァネアがこんな顔をずっとしてられるように、ミーナと上手くやっけていきたい。

もちろん、ミーナ自身が大切だということもある。ミーナと出会えたことはぼくの大切な思い出だ。

ミーナをここまで心配するヴァネアは本当にいい契約モンスターだと思う。ミーナはいい出会いをしたものだ。

ぼくはこれからもミーナとヴァネアと笑いあっていていけたらなと願った。

## 63話 幸運

ぼくはオーバースカイとして活動したり、メルセデスたちの面倒を見たり、ミーナたちと交流を深めたりしながら毎日を過ごしていた。そんな中、ミーナと何度か戦っていたのだが、ミーナが笑顔になる時間が減っていく。

ミーナがだんだん追い詰められているように感じて、対応に困っていた。

すると、ミーナから思いもよらぬ言葉をかけられることに。

「ユーリ、君もオリヴィエ様からドラゴンシルバーの剣を貰ったんだろう？ どうだい、お互いにその武器で戦ってみるといっのは」

ミーナの目は初めて見るくらい刺々しくて、ぼくは少し怖くなった。

でも、ここでミーナの提案を拒否することが良い選択だとは思えなかった。

なぜなら、ミーナの目の奥からほんの少しだけ恐れのようなものを感じたから。ミーナは今いっぱいいいんじゃないだろう。

ぼくは剣を準備してミーナと向かい合った。ヴァネアが審判をしてくれることに。

ヴァネアの合図と同時に、ぼくたちはお互いに突っ込んで剣を振る。

ミア強化を使ってミーナの速さを上回るスピードを手に入れたぼくは、ミーナの剣を落ち着いて処理する。

速さで先手をとれているから対応できているけど、やはりミーナの剣技はきれいだし上手い。

ぼくはもつともつとミーナと戦いたいけど、このままじゃそれは難しくなりそうだ。ミーナは明らかに冷静じゃないし、ぼくを睨むような目で見てきている。

上手くここを乗り切れないと、ミーナとの関係が崩れてしまうような気がしていた。

「いつまで僕の事を見ないつもりだ、ユーリ！」

打ち合う中でぼくに若干隙が出来た時、ミーナはぼくの首に向けて全力で剣を振ってきた。

慌てて避けたのでぼくにケガは無かったけど、当たってしまったら死んでいたような攻撃だ。

ぼくはミーナに命を狙われるほど嫌われてしまったのだろうか。気分が沈む。

でも、今のミーナは動きが単調になっていいるから、対処すること自体は容易い。ミーナの剣をよけることに集中していると、ミーナは必死な顔で叫びだす。

「僕があんなに攻撃しても、僕には攻撃を仕掛けないのか。僕には殺す価値すらないとでもいうのか!？」

「ミーナを殺したくなんてないよ。ミーナとはこれから何度でも戦いたいし、戦い以外でも仲良くしたい。ミーナ、きみに殺す価値がないんじゃない。殺したくない位に大切なんだ」

ミーナと会話しながらミーナの攻撃をしのぐことに集中する。ミーナを疲れさせて、落ち着いて話が出来るようにしたかった。

ミーナはそんなぼくを見て怒りを強めたように大きく叫ぶ。

「アクア水すら使わないのか!？ 僕はユーリのライバルじゃなかったのか? そんなに手加減をされて、どうしてライバルだと言えるんだ!？」

ミーナの言葉に反論が思い浮かばなかったぼくはアクア水を使用してミーナの剣を吹き飛ばす。

ミーナはそれでも構わずにぼくに向かってこようとしていたが、そこでヴァネアが止めに入る。

「ミーナ、少し落ち着きなさい! ごめん、坊や。ミーナは連れて帰るから、いったん時間を空けましょう。ほら、ミーナ、行くわよ」

「離せ、ヴァネア! ここで僕の価値を示さないと、ユーリが……」  
「離さないわ。あなたが何をしようとしたのか、頭を冷やしてからよく考える事ね」

ミーナはヴァネアに拘束されたまま連れていかれる。ぼくはその様子を見てほっと息をついた。

ミーナの様子は明らかにおかしいから、距離を置いた方が良いことは確かなのだろう。

出来るだけすぐにミーナとの関係を元に戻せることをぼくは祈った。

それから、ぼくはミーナと顔を合わせずにオーバースカイとして冒険者活動を行っていた。

その中で、ユーリヤはとても成長していた。まるでミーナくらいの鋭い体術を使いこなしており、針や鉄の糸、仕込み靴をとても上手に扱っていた。

素早い動きからの攻撃をしたり、相手をかく乱しながら罠を仕掛けたり、縦横無尽に大活躍していた。

「ユーリヤ、とても強くなったよね。びつくりしたよ。何かコツとかをつかんだの？」

「そ、そうですね。全身に神経を張り巡らせる感じでしょうか。そうすると、うまく力が伝達できることが分かったんです」

なるほど。つまりユーリヤの身体能力が上がったわけでは無く、ユーリヤの体の動かし方がうまくなったという訳か。

それからユーリヤの動きを観察しながら戦っていたけど、アクア水で加速した時のぼく位の速さがあり、前線で大活躍していた。

これなら、ミア強化を使ったぼくにある程度着いてくる事ができる。連携の問題が一つ解決したんじゃないかな。

そう考えていると、カタリナが悔しそうな様子で話しかけてくる。

「もうこのチームで一番弱いのはあたしかもしれないわね。そして一番強いのがあんた。あたしの後ろをついてくるだけだったあんたがこんなに強くなるとはね。驚きだわ」

「そうかもね。でも、カタリナが今まで助け続けてくれたから今のぼくがあるんだ。今までありがとう。それに、これからはぼくがカタリナを助けるから」

「あんたに助けられたのは学園でのモンスターの大量発生からね。今は助けられるだけかもしれないわ。でもね、すぐにでもあんたより強くなってみせるんだから」

そういうカタリナの顔は晴れやかだ。カタリナなら、本当にすぐにはよくより強くなってしまうかもしれないと思えた。

もしオーバースカイで一番弱くなったとしても、カタリナがぼくの大切な存在であることには変わりはない。

それでも、強くなつてくれた方がこれから強い敵と遭遇した時も安心できる。

全力でみんなを守るつもりではあるけど、ある程度の実力がある方が守ることは楽だからね。だから、メルセデスたちをすぐにメンバーにしなかったわけで。

でも、仮に守るだけの存在になってしまったとしてもカタリナと離れたくはない。

そうなたら離れた方がお互いのためのような気もする。だけど、そんな未来が来なくて済むように祈った。

それから少したって、ヴァネアから呼び出された。ミーナと会って欲しいらしい。

ミーナが落ち着いたから誘われたのだと判断したぼくは、喜んでヴァネアの呼び出しに応じた。

そこにはミーナがいて、神妙な顔をしていた。ミーナはぼくの顔を見るや否や頭を下げる。

「ユーリ、あの時は本当に申し訳なかった。僕はユーリに置いて行かれたくない一心で、ユーリの事を全く考えていなかった。反省しているから、また僕と戦ってほしい。もちろん、模擬剣でね」

ミーナの言葉は願ってもないものだった。なので、ミーナと戦うことにする。

ミーナとぼくはお互いに構えて、ヴァネアの合図で打ち合いを始める。

前回の反省を生かして、ミア強化を使いながらアクア水でかく乱する。ミーナは攻撃を何度か受けながらもぼくに向かってくる。

そのままぼくが優勢のまま戦いは進み、ミーナの剣をぼくが弾き飛ばす。ミーナは両手を挙げた。

「まいった。ユーリは本当に強くなったね。きつとすぐにユーリに追

いつく事は出来ないけれど、ユーリに追いつく事を目指して頑張るよ。また何度でも戦おうね、ユーリ」

「そうだね。ミーナとまたこんな風に戦えてうれしいよ。これからもよろしくね」

ミーナは微笑みながらうなずいてくれる。ヴァネアはその様子を見ながらニコニコとしていた。

それから、ミーナとヴァネアと雑談をすることに。久しぶりのミーナとの話で、ぼくは気分が盛り上がっていた。

「ユーリの好物は魚料理なんだってね。ヴァネアから聞いたよ。僕の好物は野菜かな。煮て食べることが好きなんだ」

カタリナの好物は果物で、サーシャさんの好物の一つがグロリアカウ。ヴァネアの好物は肉。

こうして考えると、人によって好みの差があって面白いな。

ミーナとこうして雑談が出来るような関係に戻れたことも楽しいし、いろんな知り合いの事を知れているという実感があることも楽しい。

とつてもいい気分のままミーナたちと会話を続けていく。

「ぼくは魚を煮るのも焼くのも好きだね。生はちよつと怖いから嫌だけど、色々な料理の仕方があって面白いよ」

「料理つてのは面白いわよね。アタシが野良のモンスターをしていたころは、そんなもの知らなかったから、ミーナと契約したばかりのころは新鮮だったわ」

ヴァネアの意見は興味深いな。もしかしたら、野良の人型モンスターと分かり合うきっかけになるかもしれない。

まあ、よほどのことがない限り野良のモンスターと分かり合おうとは思わないけど。

ぼくは野良のモンスターの狡猾さを見過ぎて、警戒を緩めるという考えが浮かんでこないようになっていた。

もしミーナとヴァネアのような出会いがあつたとしても見逃してしまうかもしれないな、ぼくは。

「そうなんだね。野良の人型モンスターも、人の中に入って生活が出

来るようになればいいけど、ぼくはその光景が想像できないや」

「まあ、アタシが言えたことじゃないけど、それはよく分かるわ。ミーナと出会わなければ、アタシもその人の中に入れないモンスターだったのよね。いっぱい人も殺したわ」

前に王都で会った時にもほのめかされてはいた事だけど、はつきりと言っちゃったな。

まあ、ぼくの知り合いが殺されているわけでは無いからいい。思うところが全くないわけでは無いけど、今のヴァネアと仲良く出来ているという事実の方が大切だ。

「ぼくと出会っていたらぼくはヴァネアを殺してしまっただかもしれないから、ミーナと出会ってくれてよかったよ。だから、今こうしてヴァネアと話せているわけだからね」

「それが普通の反応なのよね。そしてそれが正しい事の方が多いわ。アタシとミーナが出会えたことは滅多にない幸運だったのよ」

「そのおかげで、ユーリと僕が再会することもできたわけだしね。僕はついているよ。ユーリ、ヴァネア、これからもよろしくね」

ぼくと周りの人たちとの出会いは数多くの幸運に支えられている。改めてそれを実感した。

ミーナとヴァネアとの出会いも、それ以外の出会いも、大切にしていこう。

## 裏 ミーナ

ユーリに対してミーナが真剣での戦いを仕掛けた日、ヴァネアはミーナを窘めていた。

「ミーナ、やりすぎよ。坊やと殺し合いがしたいわけじゃ無いと自分で言っていたことも忘れたの?」

「分かってるー。でも、どうすればいいんだ……ユーリに僕は追いつけない。今日の事でよく分かった。怖いんだよ。ユーリが僕の事をどうでもいい人だと思ってしまうことが」

ミーナはこれまで剣術を学ぶ中で、自分にとって敵では無いような相手の事をだんだんと忘れ去っていた。

その中には、お互いに高めあうことを約束した人もいたはずで、でも、ミーナはその約束以外は何も覚えていなかった。顔も名前も実力も、それ以外の全ても。

その中の1人として、かつてエンブラの街でユーリと戦った槍使いのアーノルドがいた。ミーナには剣では勝てないと判断した彼は槍使いに転向したが、当のミーナには全く顧みられることがなかった。

ミーナはかつて競い合っていた誰の顔も思い出せないでいたから、ユーリにとって自分が同じような存在になってしまうことが恐ろしくて、ユーリが自分の事をただの通過点として忘れ去ることが考えるだけでも辛くて、つい暴走してしまった。

ユーリは自分と違ってそんな事をしないはずだと頭の冷静な部分に告げていたが、ミーナは自分の中の恐怖に負けた。

ユーリになんとも思われなくなってしまう位なら、ユーリに殺されて自分の事を忘れないでいて貰うことの方が良い。そんな考えで真剣を持ちながらユーリに全力で攻撃した。

ユーリがそれに軽く対処して、自分の事を傷つけようとしないう姿を見て、ミーナは自分がユーリの中から消えてしまうような感覚に陥った。

だから、さらに頭が茹で上がり、ミーナは全く冷静さを取り戻せなくなってしまうた。



ヴァネアに窘められる中でも、ミーナはずっとユーリが遠くへと行ってしまう恐怖から逃げ出せないでいた。

「坊やはその子じゃないわよ。ミーナの事をとても真摯に大切にしていることがよく分かるわ。だから、おかしな事はやめなさい」

「そんなことを言っても、ユーリにライバルらしいライバルはいなかった。ただの親しい人として僕に接してくれる保証なんて……むぐっ!？」

ミーナはヴァネアも気づかないうちにアクアに拘束されていた。アクアはミーナに対して軽く問答を仕掛ける。

「ミーナ、ユーリを殺すつもりで攻撃をした？ アクアに嘘は通じないから、正直に答えて」

「殺すつもりなんてないよ……でも、あの攻撃が当たったらユーリは死んでいたかもしれないのは事実だ」

「そう。ミーナはユーリのいいライバルだと思ったのに。じゃあね、ミーナ」

その言葉で自分の運命を悟ったミーナは最後に少しだけ言葉を残す。ユーリともう戦えないことを考えるとミーナはとても悲しかったが、自業自得だと認識していた。

「ユーリ……僕の運命のライバル。僕は本当は君と……」

ミーナの言葉を最後まで待つことなくアクアはミーナの口から入り込みミーナを支配した。

その様子を見て呆然としていたヴァネアだったが、気を取り直して、アクアに勝てないまでも一矢報いようと考えた。

だが、アクアの表情を見てその考えは変わった。ヴァネアの想像と違い、アクアの顔には怒りも喜びもなく、悲しみだけが見えた。

ミーナとの契約が解除されていない事からミーナが生きている事も分かったヴァネアは、何とかしてアクアを説得しようとする。

「アクア、坊やはこんなことをしても喜ばないはずよ。ミーナは確かに間違っていたわ。でも、もう一度チャンスを頂戴。アタシがミーナを説得してみせるから」

「どうやって？ さっきまで見ていたけど、ミーナは考えを変えるよ

うには見えなかった」

その言葉に対する反論が即座に思いつかなかったヴァネアは、別の方向からアクアを説得しようとする。

「ねえ、今のやり方以外の道だつてあるでしょう？ アクアだつてこんなことを望んでいるように見ええないわ」

「具体的には？ ユーリを傷つけないで、ミーナを無事で済ませる方法は何かある？」

ヴァネアの頭の中に他の手段がはつきりと思いつかなくて、無く、具体的という言葉で考えた言葉のほとんどを封じられた。

それでもヴァネアは最後までアクアを説得する道を諦めようとはしなかった。わずかな望みをかけて言葉を紡いでいく。

「こんなやり方や誰も幸せになれないわ。坊やもミーナもアクアも。アクア、きつと後悔するだけだわ。ゆっくりとでもアタシたちと分かり合つていきましよう？」

「結局対案はないんだ。話はこれまで。じゃあね、ヴァネア」

その言葉を最後にヴァネアは拘束されて、アクアに口から入り込まれて、だんだんと意識が薄れていく。

ヴァネアはミーナと出会つてからの日々をその中で思い返していった。

人とモンスターが分かりあつていくこと、人同士が仲良くなつていくこと、モンスター同士がともに歩むこと。

ヴァネアはこれまでの日々でただの野良モンスターでいては知ることのなかつた感情を知ることができた。

ヴァネアにとつての心残りはユーリとミーナのこれからを見ることのできない事。

考えがだんだん思い浮かばなくなつていき薄れゆく意識の中で、ヴァネアは最後にアクアの言葉を聞いたような気がした。

「後悔なら、もうとつくにしてる」

アクアはミーナを支配していても全く喜びなど感じていなかった。

ユーリとミーナがともに競い合うところを見ていたかったアクアだが、ユーリを傷つけようとするミーナを前に我慢が出来なかった。

それでも、もう行動して結果も出てしまった以上、別の選択を取ることはできない。

アクアがユーリの周りを支配することによって、ユーリの幸せを自分が邪魔しているのではないかと考えた。だが、すぐにその考えを放棄した。

その考えが正しいならば、自分がユリから離れることが一番になってしまふ。アクアはそれだけは本当だと思いたくなかった。

ミーナに体を返すことはできない。ならば、せめてミーナの事を有効活用しよう。

そう考えたアクアは、以前から頭にあつたユーリヤの強化案を実行した。

それは、ミーナの身体制御の経験をアクアが吸い取ることで、ユーリヤの動きにフィードバックするという物だった。

思いついたときにはミーナの事を支配したくなかったのに、結局実行することになってしまった。アクアに悲しみがよぎるが、それでもユーリヤを強化した。

そうすることで、ユーリとアクアの共通の悩みであるオーバースカイの連携の問題の解消が一步進む。

ミーナとヴァネアを支配する結果になってしまったことは悲しいが、ユーリヤを強化できたことは良かったことだとアクアは自分を慰めていた。

実際にオーバースカイとして活動する中で、ユーリヤの強化の成果はすぐに現れた。

ユーリとも自分が操る他の仲間ともうまく連携できるようになっていて、オーバースカイとしてユーリと冒険する上でユーリの感じる楽しさは増しているとアクアは認識した。

他に、カタリナがオーバースカイで一番弱くなったという問題はユーリも分かっていたし、それでもユーリがカタリナを大切にする姿勢が見えた。

カタリナがオーバースカイに置いて行かれなくても済むように、カタリナの強化を出来る瞬間をアクアは待ちわびていた。

それから、アクアはヴァネアとミーナとしてユーリと接することにした。

ミーナとの関係がこじれている事をユーリは気にしていたので、その解決を演出することにした。

ミーナと再び戦えること、ミーナと楽しく会話ができる事にユーリは喜んでいた。

アクアはその様子を見ながら、本当はミーナとヴァネアにこの光景を作ってほしかったと考えた。

結局どうする事でそうなる事ができたのか、アクアには未だに分からなかった。

なので、ミーナとヴァネアを支配する以外の道は無かったのだとアクアは信じ込もうとした。

ユーリとミーナたちの会話は、アクアが読み取ったミーナたちの記憶をもとにして行われていた。

かつてのユーリとミーナの戦いでミーナがユーリに置いて行かれたくないと感じたことは事実だし、だからミーナはユーリを傷つけるような事をした。

アクアはミーナにいくらかの共感を抱いていて、ユーリが自分から離れるくらいなら、ユーリの手で生を終わらせてほしいというミーナの考えを理解できた。

それでも、アクアはユーリに対して攻撃を仕掛けようとは思わないし、ユーリに傷が残る形で死んでしまおうとも思わない。

ミーナの行動のその点だけはアクアには理解できなかった。

ミーナはユーリが大好きなはずだったのに、ユーリを傷つけようとした。

アクアにはその考えに至ることが全く分からなくて、人間という物は難しいと改めて感じていた。

そう感じてしまう以上、ユーリと自分の間には何か高い壁のような物があるのかもしれない。

アクアに浮かんだその考えは、アクアに寂しさをもたらした。

ユーリとずっと一緒に居るだけではできない事がある。人間のよ

うに考えられないから、ユーリと本当の意味で分かり合う事が出来ないのかもしれない。

アクアは思い浮かんでしまったその考えを必死で否定しようとした。

ユーリと自分が分かり合える未来はきつとくる。いや、もう分かり合えているはずだ。そう考えようとして、自分の隠し事が頭によぎって、アクアはとてつらかった。

ヴァネアに関してアクアはずつと考えていた。

ヴァネアが最後まで自分を説得しようとしていたのは、ミーナの事はもちろんあるが、それ以外にもユーリと自分のため。

ヴァネアが考えていたミーナやユーリと出会えたという幸運を、最後まで失わないための物だった。

ユーリとミーナとヴァネアが出会えたことはヴァネアが考えていた通りに幸運のはずだった。

それなのに、結局ミーナもヴァネアも幸せにはなれない結末を迎えてしまった。

どうすればこの幸運をずっと幸運のままにできたのだろう。アクアは真剣にその答えを知りたかった。

## 64話 好意

最近色々慌ただしかったので家でゆっくりしていると、突然来客があった。

誰だろうかと疑問に思いながら出てみると、オリヴィエ様とその子供2人がいた。

とてもびっくりしたが、頑張つて冷静に対応しようとした。

「オリヴィエ様、一体何のご用でしょうか？ 今日空いているので、それなりに付き合えるとは思いますが」

オリヴィエ様はぼくの様子を見てつまらなそうな顔をする。びっくりしている顔を見せた方が良かったかな？

まあでも、不機嫌さは見えないから、ぼくに被害が出ないことを祈ろう。

「くくつ、自分に用がある前提とはな。まあ合っているのだが。ユーリ、今日は貴様の周囲の人間を見て回ろうと思つてな。こやつらもついでに連れてきたのよ」

「急な訪問で申し訳ありません、ユーリ殿。ですが、殿下は自分のご意思を曲げられぬ御方ですので、ご寛恕のほどを」

「久しぶりだな、ユーリ。お前も元気そうで何よりだ。俺は調子が良くてな」

リデイさんとイーリスは普通に挨拶をしてくれるけど、オリヴィエ様は相変わらずだ。

まあいい。ぼくもオリヴィエ様が丁寧な対応をしてくれるだなんて思っていない。用があるときに無理矢理入って来られなかっただけマシだと思おう。

オリヴィエ様はぼくの周りの人を見たいというし、まずはこの家にいるオーバースカイの皆を紹介すればいいかな。前にも顔は見ていると思うけど。

「じゃあ、まずはこの家のみんなを紹介しますね。それにしても、転移装置という物は簡単に作れるものなんですか？ カーレルの街は重要な拠点とは思えませんが」

「まあ、王家ならばそう難しい事ではないな。大っぴらになると困るから大々的に使っていないだけだ。狙ったモンスターを出現させることの方がよほど難しいだろうよ」

まあ、転移を軽々しく使えるとなれば、誰が使うかとか、どこまでの移動を許可するかとか、いろいろと問題があることは分かる。

それよりも、狙ったモンスターを出現させることが難しいって、じゃあミストの町の学園の装置は？

当たり前のように弱いモンスターを出現させていたけど、転移より難しい事なのに、あんな田舎で？

それともぼくが知らないだけで、転移装置は簡単に作れるものなのか？

いや、王家ならば簡単だということは、一般の市民では難しい事のはずだ。

一体なぜ、そんなに難しい事ができる装置がぼくの故郷に？

まあ、考えて分かる事のはずがないか。オリヴィエ様との会話に集中しよう。

「そうなんですね。では、転移装置の存在はあまり知られていないんですか？」

「そんなところだ。貴様は余の物になるのだから、王家の事はよく知っておくとよいぞ」

そういえば、ぼくは王家の事は全然知らないな。オリヴィエ様の事は知っているし、国王のマクイル様も知っている。

他の事はぜんぜん知らない。オリヴィエ様の物になるかどうかは兎も角として、知っておいて損はないかな。

「ぼくは王家の人をマクイル様とオリヴィエ様くらいしか知りませんが、他にどんな人がいるのですか？」

「その程度しか知らぬのか、貴様は。まあよい。このオリヴィエ以外の顔と名前など知らずともよい。それよりも、余がもつとも偉大な存在であることだけは覚えておけ。王家が持つ力のすべては余の物だ。その力を貴様はこれから知っていくのだ」

「殿下の言葉は大きく間違っではいませんが、人の顔と名前は覚えて

おいて損はないですよ。ユーリ殿は小生たちの名前は覚えておいで？」

勿論覚えてる。この小柄な近衛がリデイさんで、もう片方のドラゴニユートがイーリスだ。

イーリスがドラゴニユートということは、リデイさんの能力は炎という事だろうか。

「リデイさんとイーリスでしたよね。ところで、リデイさんの能力は炎ということで良いんですか？」

「ええ、合っております。リザードマンとの契約とは比較にならないほどの炎、ユーリ殿にもいずれ御覧いただきたいものです。ユーリ殿の能力ほど汎用性は高くありませんが、強力ですよ」

リザードマンはほとんどカゲの人間という感じだけど、ドラゴニユートは鱗がある以外は人っぽい。

モンスターとしての強きはドラゴニユートの方が圧倒的に格上だけど、能力もそうなんだな。

「ユーリはマジで強えからな！ スライム使いがあんなに強くなるなんてな。水で俺の炎を防げる奴なんて他に居ねえだろ」

今のメルセデスたちには難しいだろうな。

あの水の膜も結構強くなってきていて、身体強化を使わない普通の剣くらいなら止められるけど、イーリスの炎が直接当たったらメーテルは危険だろう。

当然、メーテルから生み出されるだけの水が限度だろうメルセデスの水の膜でも厳しいはず。

アクアには当たっても大丈夫みたいなことを言っていたけど、超高温にも耐えられるのだろうか。スライムの弱点じゃなかったっけ？

まあ、弱点が多いより少ない方が良いか。アクアにもしもの事がある可能性は少ない方が良いに決まっている。

「ぼくはスライム使いの中では群を抜いて強いらしいですね。それでもアリシアさんには敵わないんですけど。強い能力というのがどういふ物かは気になりますね」

「当然、余の能力が最強だ。それはユーリも良く知っているだろう。」



リデイの能力も大したものだぞ。総合力ではユーリに及ばんだろ  
うが、火力については目を見張るものがある」

火力が高いのにぼくに総合力が及ばないとなると、何が足りないの  
だろう。

汎用性が低いと本人は言っていたけど、それだけでぼくより総合力  
が低くなるものだろうか。

「ユーリ殿は小生の能力が気になってるようですね。火力だけでし  
たらユーリスの炎よりも強いのですが、小生は身体能力が低いので、  
固定砲台のような役割しかできないのです。ユーリ殿ならば、その隙  
を突けると殿下は判断なさったのでしょうか」

リデイさんは見るからに小柄だし、そういう所が影響しているのか  
な。

そうなると、リデイさんの他に、リデイさんに近付けさせないため  
の人が必要だろう。それはユーリスなのだろうか。

「つまり、ユーリスが接近戦も担うということですか？」

「おう！ 俺は中々に強いぜ。今度ユーリとも戦ってみてえもんだ  
な。いい勝負ができるだろうぜ」

「ぼくは王都の大会よりも強くなっているけど、それでも？」

ユーリスは少し驚いた顔をした後、とつても楽しそうで興奮したと  
いうような顔になる。

多分これは戦いを想像しているよね。ちゃんと手加減してくれる  
のかな、ユーリスは。

「それは楽しみだな。俺はアリシアにも負けねえとは思うが、いい勝  
負ができる相手が近くに居なくてな。リデイは俺の望む戦いは出来  
ねえからな」

「アリシアさんはぼくよりも強いですけど、それでもですか？」

「相性の問題だな。アリシアの風では俺の耐久を超えられねえはず  
だ。ユーリも似たような物のはずだが、俺の直感はいい勝負になるつ  
て告げてきやがる。今からでも勝負しねえか？」

ユーリスは今すぐにでも攻撃してきそうな雰囲気だけど、ここで暴  
れられたら困る。

ぼくが困っていると、オリヴィエ様がイーリスを睨みつける。

「それはまたの機会にしておけ。今は余がユーリの周囲を見て回る時間だ。イーリス、分かっているな？」

「仕方ねえな。オリヴィエ様、だったら俺にも転移装置を使わせてくれよ」

「よいだろう。リデイ、貴様もそれに着いてゆくがよい」

リデイさんはため息をついて、こめかみのあたりを抑える。この人はとても苦労していそうだな。

ぼくはリデイさんの事が心配になっていた。絶対にこの人はオリヴィエ様に振り回されている。

「かしこまりました、殿下。ですが、殿下の護衛はしっかりと用意してください。そうでなければ、イーリスをここへ連れてくる事はできません」

「わかっておる。適当な騎士を護衛にしておくから、安心してユーリと親交を深めておけ。余の物達で距離を詰めることも良いであろう」  
ぼくはもうオリヴィエ様の物になっているのかな、この人の中では。

まあいい。オーバースカイのみんなとステラさんを紹介しよう。

オリヴィエ様たちをステラさん達のところへと連れていく。

オーバースカイのみんなは前にも会っていた事もあり気づいたみたいだけど、ステラさんは分かっているみたい。

当たり前のことだけれど、オリヴィエ様は機嫌を損ねたりしないよね？ 頼むよ、オリヴィエ様。

「ほう？ 貴様、ユルグ家の者か。ユーリの奴に指輪を渡したのだったな。あれがあれば契約技使いの上澄みになることなど簡単だったろうに、酔狂なことだ」

「はじめまして。ステラと言います。ユーリ君に指輪を渡したのは、私にモンスター使いの適性が無かったからですよ」

「名乗っておらんかったな。余はオリヴィエ。この国で最も尊きものよ。ステラ、ユーリをうまく育てたようだな、褒めて遣わずぞ」

ステラさんは目を見開いたが、すぐにいつもの顔に戻る。

いきなり王女様が目の前に現れたらそれは驚くよね。即座に気を取り直すだけでもすごい事でしょ。

「これは失礼致しました。オリヴィエ様はユーリ君に御用なのでしょか。ユーリ君は見た目通り繊細ですので、あまり御無体をなされませぬよう、お願い申し上げます」

「分かっておる。こやつは親しいものを失うことに耐えられぬだろうさ。だから、それなりの配慮をしてやるまで。余の物になるのだから、それなりには可愛がってやろうぞ」

ぼくが親しい人を失ってしまったら、どうなるだろう。オリヴィエ様の言う通りに耐えられないのだろうか。

そんなことを考えるより、失わなくて済むように全力を尽くそう。それしかできない。

それより、オリヴィエ様の物になることはもう決まっているのだろうか。みんなと離れ離れにならなくて済むなら、それでもいいけど。ステラさんとの話を切り上げて、オリヴィエ様はオーバースカイのみんなのところにも向かっていった。

その時には、オリヴィエ様は彼女に渡された武器の使い心地を確認していた。

みんなあの武器の運用はうまく出来ていたから、オリヴィエ様は満足げだった。

それからオリヴィエ様はアリシアさんとレティさんとも会話をしていた。

今回はオリヴィエ様の機嫌を損ねそうな話題にはならなくて、ぼくはほっと息をついた。

サーシャさんはお互いに良く知っているようで、リディさんやイリスとも会話が弾んでいた。

サーシャさんの畏まった姿は前にオリヴィエ様が来たときにも見ていたけど、やつぱり新鮮で、見ていて楽しさのような感じがあった。メルセデスたちのところへオリヴィエ様を連れていくと、メルセデスがオリヴィエ様の顔を知っていて、騒ぎになりかけた。

ぼくが慌ててメルセデスの口を塞がなかったらどうなっていた事

か。

メルセデスは渡された武器の出所を知って手が震えていた。メルセデス、この武器を使わない方が恐ろしい事態になると思うから、頑張つて慣れてね。

最後にぼくとオリヴィエ様たちだけで話をしていた。

「くくつ、今日は楽しかったぞ、ユーリ。それにしても、貴様は女に囲まれているな。存外好き物だったりするのかな？」

「とんでもないです。でも、女の人相手の方が会話は楽かもしれませんね。男の人で親しい人つてちよつと思いつかないので」

「ユーリ殿からは下心のようなものは感じませんから、安心感があるのでしょうか。オリヴィエ様に良からぬことを考える様子はないので、良しとしましょう」

「ユーリは女にがつつくタイプには見えねえからな。でも、オリヴィエ様にはいずれ惚れちまうんだろうぜ」

リデイさんとイーリスの言い分をカタリナ風にすると、ヘタレつて事にならないかな？

それでもいいか。大切な人と一緒に居られるなら、情けないと思われていようが構わない。

オリヴィエ様に惚れるぼくはあまりイメージできないけど、仮にオリヴィエ様を好きになっても、みんなを大切にできるぼくでいたいな。

「ではな、ユーリ。今日は楽しかったぞ。次はイーリスとリデイと親睦を深めておくといい。余の物どうし、交流も必要だろう」

「ユーリ殿、またいずれ。殿下のお気に入りどうし、お互い苦労するでしょうが、慣れて頂きたい」

「またな、ユーリ。今度は楽しい戦いにしようぜ」

オリヴィエ様たちはそのまま去って行った。オリヴィエ様というと疲れるな。

でも、それを悪く思わないぼくもいる。惚れているわけでは無いけど、オリヴィエ様の事を結構好きになつていような気がする。これから気を付けた方が良さだろうか。

## 65話 進化

ある朝にノーラの事を構っていると、突然発光し始めた。ノーラも進化することになったみたいだ。

なので、アクアの時の経験をもとに、進化に備えて準備をしておいた。

ノーラの種族は結局分からなかったけど、この子はどんな進化をするんだろうな。

アクアみたいに言葉を喋れるようになるのだろうか。とんでもない毒舌だったらどうしよう。

さすがにそんな訳ないか。こんなに甘えてばかりの子が。

ぼくが準備をしている間にみんなが集まってきていて、家にいるみんなでノーラについて話していた。

「ノーラちゃんとお会ったのは王都での大会の帰りでしたよね。アクアちゃんに比べるとずいぶん進化が速いようですね」

そうだよね。アクアは10年以上たってから進化したけど、ノーラの進化は出会ってからあつという間だった。

人型に進化したら肩にのせたり頭にのせたりは出来ないな。もうちよつとあの感覚を味わっていたかったような気もする。

「そうですね。あたしはもつとこの子を可愛がっていたかったですけど、進化するならまた改めて可愛がればいいわね」

「ノ、ノーラちゃんはどんな進化をするんでしょうねっ。どんな進化だとしても、ユーリさんに甘えることは変わらない気がしますっ」

そうだと嬉しいな。ノーラが甘えてくれる事はとても楽しいから、これからもそうして欲しい。

でも、ノーラは女の子だから、人型になっても体をこすり付けてくると困っちゃうな。

まあ、姿が変わったくらいで遠ざけられたらノーラがかわいそうだから、我慢しよう。

人型になることが決まったわけじゃ無いから、気が早いかな？

「ノーラさんはユーリさんが大好きですからね……カタリナさんも好

きに見えますが、やはりユーリさんが一番でしょう」

ノーラは一緒に居る間は大体ぼくに甘えてきているからね。

これで実は嫌いだなんて言われたら、ショックどころじゃ済まないよ。

まあ、ありえないよね。嫌いな相手にここまで甘える事ができるのなら、演技の天才をはるかに超えている。

「ノーラが進化すると、アクアに反抗するかな？ その時は、しっかりとしつける」

アクアはノーラに対してはとつても強気だな。ぼくに甘えてくるばかりのアクアだけど、ぼく以外の人とは違う関係なんだろうな。

まあ、アクアと関係性が悪そうな相手はぼくの周りには見当たらない。ノーラだって、アクアにいじめられている感じではないしね。

それからしばらく雑談をしながら待っていると、ノーラが進化を終えた。

ノーラの姿は以前と同じ2つに分かれた耳と尻尾が同じで、後は人間のような姿だった。

黒髪に細身といった姿で、ぼくと同じくらいの身長だ。この姿のまま甘えてくるの？

まあ、それはいい。ノーラも人型モンスターに進化したことになる。

様子を見てみると、ノーラはぼくの顔を見てすぐに話しかけてきた。

「ご主人、お腹がすいたぞ」

アクアの時と全く同じ展開でちよつと笑いそうになってしまう。

でも、ノーラは服を着ていなかったので即座に目を逸らす。

すぐに用意しておいた服を着てもらった。ちよつと慌ててしまった。

それから準備しておいた食事をすぐにノーラに渡したけど、人に猫の餌を与えているという絵面になってしまう。

ノーラには人間の食事の方が良いかもしれないよね。聞いてみるか。

「ノーラ、人間と同じ食べ物にした方が良いかな？」

「別にご主人がくれるものなら何でも構わんぞ。ただ、ご主人と同じものを食べる事には興味があるぞ」

そういう事らしいので、次からはぼくと同じ食事を用意することにしよう。

ぼくは魚が好みだけれど、ノーラは明らかに肉が好みだから、肉を食べる機会を増やそうかな。

それにしても、ノーラの口調は思っていたものとは違うな。なんというか、もつと可愛らしい感じかと思っていた。

ノーラの喋り方は固い口調というか、ちよつと偉そうというか。

まあ、話の内容からして悪いことを言いそうな感じではないから、個性という感じで可愛がつてあげよう。

ノーラはぼくが考え事をしている間に、餌を食べ終えてぼくに引っ付きだしてくる。

抱き着いてきたり、体をこすり付けてきたり、匂いを嗅いできたり。猫の時は気にしていなかったけれど、匂いを嗅がれるのはちよつと気になってしまう。変な匂いじゃないよね？

「ノーラ、匂いを嗅ぐのは恥ずかしいからやめて……甘えてくるのはいくらでも良いから」

「気にすることは無い、ご主人はいい匂いだぞ？　まあ、甘えさせてくれると言うなら存分に甘えるぞ」

いい匂いと言ってくれるのは嬉しいけど、やっぱり恥ずかしい。

ノーラはそのままぼくの顔を舐めたり、耳や鼻を甘噛みしたりしてきた。

猫の姿だったところと同じ行動ではあるのだけれど、ぼくはその時とは違ってすぐくドキドキしてしまっていた。

「ご主人、照れているな？　だが、甘えてもいいとご主人が言ったのだから、逃がさんぞ」

ノーラはそのままぼくにずっとひつついて、ぼくの体を隅々まで堪能しようとしていた。

ノーラの体から甘い匂いがしたり、ノーラの柔らかい感触を感じた

りしてしまつて、ぼくはきつと真つ赤になつてしまつているだろう。でも、ノーラの姿が変わつても変わらず甘えてくれているという事がなんだか嬉しい。

ノーラはアクアに続いて、ぼくのとっても大切なペットだから、距離ができてしまうような事にならなくて良かった。

「ノーラ、そろそろアクアにそこを渡して。ユーリの一番はアクア」  
アクアの言葉を受けて、ノーラは尻尾を立ててぼくから離れていく。

やっぱりノーラはアクアには敵わないみたいだ。でも、ノーラの表情からはアクアへの親しみも感じる。

悪い関係ではなさそうでも困つてしまつてしまうだろうから。ようなら、ぼくはとつても困つてしまつてしまうだろうから。

そのままアクアがぼくにへばりついてくる。ノーラはそれを羨ましそうに見ていた。

「アクア様がご主人の一番であることは構わないが、ご主人をうちから奪わないでくれ、アクア様。適度におすそ分けをしてくれればいいぞ」

「わかつてる。ノーラだつてユーリの大事なペット。別に排除するつもりはない」

ノーラはアクアの事を様づけで呼ぶのか。まあ、猫だつたところから舎弟のような雰囲気を出していたから、そこまで違和感はない。

それにしても、アクアもノーラもぼくのペットを名乗りながら、ぼくを所有物扱いしていないか？

まあ、別にかまわないんだけどね。アクアやノーラと一緒に居られることが大事なのであつて、関係の名前は何だつていい。

「アクアもノーラも、ケンカをしないなら思う存分甘えてね。ぼくは2人が好きだから、甘えてくれる事がとっても嬉しいんだ」

「アクア様にケンカを仕掛けたところで、うちは勝てんからな。そうでなくとも、ご主人を悲しませるつもりはないぞ。アクア様とうちが仲たがいなんぞ、ご主人に悲しんでくれと言っているような物だからな」



「ノーラはよく分かってる。ノーラがユーリを大切にしている限り、アクアもノーラを大切にする」

だったらアクアはずっとノーラを大切にしてくれそうだな。

ノーラとこれからも仲良く出来るように、ノーラの性格をしっかりと見極めていこう。

「お話し中すみません。ノーラちゃんは私たちの事は分かっていますか?」

「分かっているぞ、ステラ。ご主人が周りをどれだけ大切にしているか、うちはよく知っている。ご主人の周囲を雑には扱わんよ」

ぼくの存在がなければ雑に扱うという風にも聞こえなくはないけど、大丈夫だよな?」

ノーラの事だから、裏でみんなに対してひどい事はしないと信じられる。

あとはノーラがどれだけみんなの事を好きになってくれるかだよ。こればかりは強制してはいけない事だろう。

「ノーラ、あたしの事を忘れてはいないでしょうね? あんなに甘えてきたのに、ユーリと話せるならどうでもいいなんて言わないわよね」

「当然そんなことは言わんで、カタリナ。ご主人ほどではないにしろ、うちはカタリナの事が好きだ。これからもよろしく頼むぞ」

「ユーリがあたしの事を大好きなのは知っているわよ。それより、人前であんな甘え方はするんじゃないわよ。あたしたちの恥になるんだから」

そつちの意味なの? ぼくにはノーラがぼくを一番好きというように聞こえたけど。

まあ、カタリナの事が大好きというのは否定することでは無い。ずっと支えてくれる人なんだから。

それはさておき、カタリナの注意は助かるな。人前であんな甘え方をされたら大変だよな。

「仕方ないな。アクア様も我慢しているようだし、うちだけ甘えるという訳にもいかんか。人前以外でその分甘えさせてもらえばいい」

「夜はユーリと一緒にになるから、2人でいっぱい甘えればいい。ユーリだつてきつと喜ぶ」

可愛いペットに甘えられることは嬉しいけど、今のノーラの姿での甘え方をされると、ちよつと変な気分になってしまう。

まあ、ノーラにぼくを誘惑しようという気は無い事ははっきりしているから、慣れてしまえばいいか。

「ノ、ノーラちゃん、ユーリさんはみんなの物ですからねっ。独占しようとしてはいけませんよっ」

「うちから独占しようとはせん。ただ、ご主人がうちだけを見たいというのなら止めはせん。せいぜいうちにご主人を奪われぬようにな、ユーリヤ」

みんなぼくの事を物扱いしようとしてないかな？　まあ、悪意があるわけでは無くて、ぼくを奴隷のようにしたいわけでは無いはずだ。

みんながぼくを大切にしてくれている事はよく分かる。言い方の問題だけだろう。

「ノーラさんも、ユーリさんが大切なんですね……ユーリさんと一緒になら、力が湧いてきますからね」

「そうだな、フィーナ。ご主人のためなら、うちはどんな事でもできる。他の者たちも同じであろう。ご主人は恵まれているな」

それは本当にそう思う。みんながぼくのために色々としてくれているように、ぼくもみんなの為ならば頑張れる。

ずっとみんなと一緒にいられる限り、きつとぼくたちは無敵だ。

みんなと出会えたことはぼくの宝物だから、絶対に守り切ってみせる。

「ご主人、そろそろアクア様と部屋に行こう。今日くらいはご主人を目いっぱい堪能するぞ」

「今日はノーラを優先してあげる。ユーリ、ノーラを可愛がつてあげて」

それからぼくの部屋で、ノーラにいっぱい甘えられた。

ぼくはずつとドキドキしていて、時々交代するアクアに癒されていた。

そのまま3人で一緒に眠ったけど、ノーラがひつついてくることに緊張してしまった。

早くこの環境に慣れて、ノーラと一緒に眠ることを楽しめるようになろう。

## 66話 相談

ノーラが進化したので、ぼくは戦闘での立ち回りを考えるために、ノーラと話し合うことにした。

これまでと同じような立ち回りなのか、それとも別の動きをする事になるのか。

ぶつつけ本番は危険だから、ある程度練習してから実戦に移るつもりではあるけど、その前に方針を固めておきたい。

「ノーラは進化したことで戦い方が変わったりの？ 戦い方が変わるなら、戦術を練り直さなくちゃね」

「基本的には変わらんはずだ。体が大きくなったから、小さい隙間に入るようなことは出来んが、速度や攻撃の威力は上がっているぞ」

つまり、これまでのように接近戦を基本にして動いてもらう事になるのか。

前のノーラもかなり速かったけど、あれからさらに素早さが上がるんだな。

ぼくがミア強化で加速するより速いのかもしれないな。そうすると、相手のかく乱もできるだろう。

攻撃の威力が上がったことは嬉しいけれど、手足で攻撃するままなのかな。武器が使えるかどうかかも気になるな。

「そうなんだね。じゃあ、前からと同じように敵に近寄って攻撃してもらおうかな。それで、ノーラは武器を使う事は出来る？」

「出来んことは無いぞ。だが、そこらの武器を使う位ならば直接殴ったり蹴ったりする方が強いな。それに、殴る蹴るの威力はうちの力でもっと強く出来るはずだ。素早さを下げてまで使うほどではないだろう」

まあ、武器は重いしかさばるから、持たなくていいなら持ちたくないモノだろうな。

それにしても、殴る蹴るの強化となると、猫型モンスターの契約技みたいだ。

アクアはアクア水と本人の戦い方が一致していないけど、ノーラは

どうなんだろう。

まあ、ノーラが契約したいという相手が現れない事にはね。戦力の為だけに契約させるといふのは嫌だ。

仮にオーバースカイで契約するとしたら、カタリナかユーリヤだよね。

フィーナは契約できるのかちよつと怪しいし、そもそも契約が必要ないほどの力を持っている。

ぼくは契約する事ができないからね。ノーラもたぶんぼくと契約したいと思ってくれているだろうけど、アクアと契約解除なんてありえない選択だ。

それは急いで考える事でもないかな。そもそもぼくが考えるべきことかも怪しい。

それよりも、ノーラをどういう風に戦わせるかだよ。防具はどうしようか。

猫の姿の時は着けていなかったけれど、今でも必要ないだろうか。モンスターは下手な防具より強い防御力を自前で持っている事もあるから、その辺も確かめてみるか。

「なるほどね。じゃあ、防具も必要ないかな？ 攻撃が当たったら危ないなら着けてほしいけど」

「鉄の鎧くらいならいらんぞ。攻撃に当たりやすくなるだけで、生身で攻撃を受ける時と防げる限度はそう変わらん。当たらんように立ち回る方が賢いだろうな」

その言い回しだと、鉄並みに防御力がある皮膚という事になる。

そこらの人型モンスター相手なら鉄の剣でもかなり有効なのに、とんでもないな。

でも、強い分にはありがたいか。ノーラがケガをしちゃう可能性が減るわけだから。

仮にノーラがドラゴンより強いとして、それでノーラを恐れる事なんてありえない。

いつものように甘えてくる姿は可愛いし、ぼくたちにしっかり配慮してくれる優しさもある。

なによりも、ぼくはノーラが大好きなんだ。ノーラと一緒に居る幸せな時間の事を考えたら、ちよつとやそつとの問題でノーラと離れ離れになる訳にはいかない。

「それなら、動きやすい服を買おうか。ノーラはどんな服が良い？」  
「ご主人が選んでくれるなら何でもいいぞ。さすがにまともに入らん服は勘弁してほしいが」

その答えだと中々悩むな。まあいい。冒険の時に着る服は見た目より動きやすさを重視して、普段着はどうしようかな。

ノーラのイメージだと動きやすそうな服が普段でも似合いそうだな。

一番近いのはアリシアさんの服みたいな感じだけど、全く同じだとさすがに問題だから、どう変えようか。

尻尾があるから、それを通せる穴のようなものも必要かな。スカートは色々見えちやいそうだから止めようかな。

いや、お尻より上に尻尾があるから、穴の開け方を工夫すれば大丈夫かもしれない。

まあ、実際に服屋でいろいろと見ながら考えた方が良いか。服の事は後にしよう。

「それなら、今度服屋に行こうね。ぼくと一緒に行くだろうけど、他の人は連れていく？」

「アクア様は一緒でないと困るし、カタリナも着いてきて構わん。あとは、どうしてもご主人が連れてきたいのならだな」

そうなるか。なら、アクアとカタリナとノーラとで出かけることにしよう。

ぼくの服選びには自信がないから、できればカタリナの意見を聞きたい。

でも、他の人の意見を混ぜた選び方は、ユーリヤあたりは嫌がりそうだよな。ノーラはどうなんだろう。

「ノーラ、服を選ぶときにカタリナの意見も聞いていいかな？ ぼく1人だといい服を選べるか怪しいんだけど」

「先にご主人が選んで、カタリナがだめだと言ったら弾くのはどうだ。

それならば、ご主人の意見が中心だからな」

ノーラの場合はとても良いもののように思えた。ぼくの選択に自信があるわけでは無いけど、きつとノーラはぼくの選んだ服を着たいのだろうし。

それで、ノーラにおかしな服を着せてしまう可能性もつぶせる。

ノーラがぼくの選んだ服を気に入ってくれば嬉しいけど、ノーラが変な服を着ていると思われることは避けたいからね。

よし、ノーラの場合で行こう。

「そうさせて貰うね。おしやれしたノーラを見るの、楽しみだなあ」

「ご主人がそんなことを言うとは思わなかったぞ。衣装の事などよく分かっていなさそうなのにな」

それを否定はできないけど、せつかく服を選ぶのだから、ノーラの可愛い姿を見たいんだよね。

サーシャさんやユーリヤの服を選ぶ中で、着飾った服を見る楽しさというのが分かってきた。

だから、ノーラの服を選ぶときにはそれを意識することにしたんだ。

それに、ぼくが楽しんでる方がきつとノーラも楽しいだろう。

ノーラがぼくの事が好きだという事はさすがに分かる。ぼくは大好きな人の楽しそうな姿が好きだから、ノーラも同じかもしれない。

ノーラには出来るだけ楽しんでもらいたいから、しつかりぼくも楽しもうとしないかね。

「衣装の事がよく分かっていないことは確かだけれど、ノーラがせつかくオシヤレをしてくれるんだから、楽しまなくちゃ損だよ」

「そうか。ご主人がうちを本気で可愛がってくれている事がよく分かるぞ。ご主人、大好きだ」

ノーラにぼくの想いが伝わっているのは嬉しいな。それに、ノーラから大好きだと言われることも。

大好きだと大切な人に言われることはこんなに嬉しいんだから、ぼくも大切な人には出来るだけ好意をはつきりと伝えよう。

まずは、目の前にいるノーラからだ。

「ありがとう、ノーラ。ぼくもノーラの事が好きだよ。ノーラとあの日に出会えて本当に良かった」

「ご主人は最初うちの事を警戒していたがな。まあ、見知らぬモンスター相手では当然の反応なのだが」

それを言われるとちよつと困つちやうな。でも、あの日ノーラを受け入れることにしたのは大正解だった。

ノーラが甘えてくる姿が可愛かったから決めただけど、ぼくの判断を後押ししてくれたアクアにも感謝しないとね。

ノーラはぼくにとつてもう絶対に居なくてはいけない存在だから、ノーラを排除するなんてもしもを考えたくはない。

これまでも、これからも、ずっとノーラを大切にするんだ。

「あの時はごめんね。それで、モンスターと言う言葉で思い出したんだけど、ノーラは誰かと契約するつもりはある？ 契約してほしいわけじゃ無いけど、契約するつもりならいい相手を探さなくちゃいけないからね」

「うちはご主人と契約したいのだがな。ご主人はアクア様と契約しているからそれは叶わん。まあ、オーバースカイの役に立てるようになるぞ。そこらの他人と契約するつもりはないから、安心するといい」

ぼくもノーラと契約できるのならしたいけど、2重契約はモンスターの側も危ないらしいから、それは絶対にできない。

ノーラはオーバースカイの役に立てるつもりだと言っているから、恐らく候補はカタリナとユーリヤかな。

ノーラが契約をきっかけにぼくから離れていくことは無さそうだから、それは嬉しい。

でも、ノーラを縛り付けてしまっているような。

いや、その考えはぼくを大好きでいてくれるノーラに失礼だ。素直にノーラとこれからも一緒に居られることを喜ぼう。

「それは安心だね。ノーラは他人になんて渡せないよ。ノーラがどうしても去って行きたいならぼくは止められないけど、そんなことをノーラが言うとは思っていないしね」



「当然だぞ、ご主人。うちはご主人とずっと一緒に居る。うちを疑おうとするご主人には罰だぞ」

そう言っただけならノーラはぼくに全身をこすり付けながらいろんな所を甘噛みしてくる。

こんなの、全く罰じゃないよね。ちよつと恥ずかしさがあるとはいえ。

ノーラが甘えてくるのに合わせてぼくもノーラを撫でまわす。主に頭や手足を撫でていた。

「ご主人も積極的だな。つまり反省しているのか？ 人の姿になったからにはもう撫でられないことも覚悟していたが、これからはっきり撫でてもらうぞ」

ノーラにそんなことを考えさせてしまっていたのか。これは反省しないと。

ノーラはいつでも甘えてきていいし、目いっぱい甘やかしてあげるのだとノーラにちゃんと伝えよう。

アクアももしかしたら不安があったかもしれない。後でしっかりと甘やかしてあげよう。

「心配かけてごめんね。でも、これからいくらでも撫でてあげるし、他の遊びだっていいよ。ノーラが喜んでくれるなら、大抵の事はするよ」

「では、キスでもして貰おうか。……冗談だぞ、ご主人。ご主人がキスを特別に思っていることくらい分かっている」

冗談だったのか。すつごくびっくりしちゃった。

でも、口同士ならともかく、他の場所なら考えておこう。

ノーラがわざわざ口に出したんだから、全く望んでいないわけでは無いはずだ。

ぼくがキスについて考えていると、ノーラが決意を込めたような表情になった。一体なんだろう。

「決めたぞ、ご主人。うちはカタリナと契約するぞ。カタリナとならうちも嬉しい」

## 67話 契約

ノーラはカタリナと契約するつもりらしい。

カタリナは自分の強さに思う所があるので、タイミング的にはちょうどいいと思う。

でも、本人の意思が一番大事だからな。カタリナが嫌だということならノーラには諦めてもらう。

「ノーラと契約したいか、カタリナに確認しないとイケないね。契約は一生ものだから、その辺の確認はしっかりしないとね」

「そうだな、ご主人。だが、うちはカタリナは受けると思うぞ。ご主人との力の差を埋める手段があるのなら飛びつくだろうさ、カタリナは」

確かにカタリナは自分の力不足に悔しそうにしてはいたけど、そこまでだろうか。

でも、ノーラからそう見えるのなら何か兆候があってもおかしくは無いし、カタリナの様子を確認した方が良いかもしれない。

それに、ノーラとの契約だからいいけど、力に飛びつくというのはカタリナが妙なことに手を出さないかも心配だ。

カタリナはぼくよりシツカリしているから、怪しい話に飛びつくことは無いだろう。

でも、ノーラの話だと追い詰められているように聞こえるからな。

カタリナが冷静さを失ってしまいう事もあるかもしれない。気を付けておこう。

それから、ノーラとともにカタリナのもとへと向かう。

早速カタリナにノーラとの契約を提案した。カタリナはちよつと不機嫌そうだが、素直に話を聞いてくれている。

「どうせノーラの事だから、ユーリと契約できないからあたしと契約しようってんでしょ。むかつくけど、仕方ないか。いいわ。あたしがノーラと契約してあげる。ちゃんと強い力を寄こしなさいよね」

「それは契約するまでわからんが、良い能力になるように祈っているぞ。カタリナとご主人が良い連携をしてくれるとうちも嬉しいから

な」

そういう物なのかな？ アクアは契約する前にどんな能力か教えてくれたけど、ノーラがごまかしているのだろうか。

いや、ノーラはそんな子じゃないはずだ。だとすると、アクアは家にある資料で知識を得ていたとかかな？

まあ、それはいい。ノーラの言うようにカタリナと上手く連携できたらぼくはとっても嬉しい。

やっぱり、カタリナとコンビを組んでいた時間が長いから、カタリナは相棒みたいに見える。

そのカタリナと、良い連携ができたならそれは楽しいだろうな。もちろん、他の人とちゃんと協力できることも嬉しいけどね。

「じゃ、早速契約するわよ。ノーラ、準備はいいわね？」

「当然だぞ。カタリナこそ、準備はいいいな？」

カタリナが契約のために針で指を刺し、ノーラに垂らす。

それをノーラが受け入れることでノーラとカタリナの契約は完了してみたんだ。

すぐにカタリナの指を治療して、カタリナは能力を試すために闘技場へと移動した。

ぼくとノーラとアクアも着いて行って、その様子を眺めることにする。

「確か、契約の証に集中すればいいのよね。そうすると、あたしはへそのあたりに集中するのね」

カタリナの契約の証はおへそにあるのか。ぼくは右手の甲と左手の甲、サーシャさんは胸のあたり、オリヴィエ様は左目だったよね。

他の人がどんな場所に契約の証を持っているのか気になるけど、サーシャさんの場所が場所だから、他の人にもそういう事があるかもしれないし、うかつに聞けないな。

まあ、気が向いたら教えてくれることに期待しよう。

それで、カタリナの能力だけど、動いている物の威力を高めたり攻撃の範囲を広げたりできている様子だ。

殴ったときに殴りの威力を上げたり、腕の周りに光のようなものが

発生して攻撃範囲を広げていたりする。

今のままだと弓使いのカタリナとは相性が悪いと思うけど、たとえば武器に付与できるとなると話は変わってくるよね。

カタリナに提案してみるか。

「カタリナ、ナイフで攻撃した時にも同じことはできる?」

「いま試すわ。……できたわね。そうになると、どれくらいの大きさの武器なら使えるのかが気になるわね」

カタリナの力は、ナイフにも威力の底上げと範囲の拡大が適用できていた。

ナイフの時には、殴りの時と違ってナイフの周りの力で切り裂くようになっていた。

つまり、威力の強化は単純に考えていいだろうけど、範囲の拡大は何で攻撃するかによって性質が変わる。

攻撃の手段の一つに絞って錬度を上げるのか、複数の武器を用意して戦術の幅を広げるのかでだいぶ変わってくるだろうな。

でも、カタリナはこれまで弓を中心に使ってきたから、急に武器を変えるというのはあまり良くはなさそうだ。

弓でも同じ事ができるのなら、弓で能力を使う事が基本になるだろうな。

「剣で試してみるのもいいけど、まずは弓で試してみない? それができるのなら、やることはある程度固まるでしょ」

「そうね。流石に新しい武器を覚えるのは大変でしょうし、弓で運用できるのならそれが良いわね」

カタリナはそのまま弓で能力を試してみる。

その結果、矢に力を込めることで矢の威力を上げる事ができたと、範囲を広げようとすれば的に矢が三本同じ方向に当たった感じの穴ができた。

見た目としては、矢の右と左に光が着いてきている感じかな。

カタリナはまだ能力を使い始めたばかりなのに、すでに結構強い。

ぼくのアクア水もだけど、使い慣れると範囲や数や威力が上がるから、これからカタリナの弓使いとしての能力はとて伸びていくだろう。

う。

「カタリナ、すごい。これならユーリと一緒に活躍できる」

「そうだな。ご主人に置いていかれるような事にはならんだろう。うちも嬉しいぞ」

カタリナはその言葉を聞きながら胸を張っている。

カタリナが嬉しそうで良かった。これなら、カタリナとノーラの契約は上手く行っていると言っているいいよね。

この契約がきっかけで問題が起こったりしないか心配だったけど、大丈夫そうだ。

「ま、あたしなら当然よね。契約技だつてうまく使いこなせるのは。でも、ノーラもありがとね。おかげであたしはもつと強くなれた。ユーリに置いていかれないで済むわ」

カタリナの言葉を聞いてはつとす。

そうか。カタリナはそんなことを心配していたのか。

ぼくがカタリナを置いていくなんて事は絶対に避けたいと思っていただけ、それをはつきりと言葉にしていただろうか。

やつぱり思いは口にしないとだめだな。これからはしっかりと伝えるようにしなくちゃ。

「ぼくがカタリナと離れ離れになろうとする訳がないよ。でも、ちゃんと言葉にしていなかったのはごめん。カタリナ、ずっとぼくと一緒に居てほしいんだ」

「はあ。それはオーバースカイも、他の人もつてことよね。まあいいわ。あんたこそ、あたしに置いていかれないように気を付ける事ね。あたしのために強くなりなさいよ」

もともとぼくが強くなりたかったのはアクアとカタリナのためだった。

アクアとカタリナに助けられてきたから、恩返しをしたいという思いのためだ。

そのために、アクア水を手に入れてからずっと頑張ってきた。

ミア強化という力も手に入れて、アクアとカタリナや他のみんなを守るほどに強くなれたはず。

でも、強くなったことがきつかけでカタリナとの距離が開いてしまったことに寂しさもあった。

けど、もう大丈夫だ。カタリナはこれからまだまだ強くなるし、ぼくたちの依頼が危険だからついて来られないような事にはならない。契約技を持たないただの人間には難しい依頼なら、泣く泣くカタリナを置いていかなければならない可能性もあった。

無理矢理カタリナを連れて行って、それでカタリナに何か起こってしまう事態は避けたかったから。

これからも安心してカタリナと一緒に居る事ができる。ぼくは嬉しきでいっぱいだった。

「そうだね。カタリナとずっと一緒に冒険が出来るように、頑張るよ」  
「それでいいのよ。あんた、これからもよろしくね」

カタリナはとても柔らかい表情をしていた。

最近はずっと見ていないような顔で、やっぱり何か悩んでいたのだろう。

ノーラはそれに気がついていたから、カタリナと契約をしようとしたのかな。

きつとそうだ。ノーラがとても優しいという事をぼくはとても感じている。

ぼくの事も、カタリナの事も考えたうえで契約相手をカタリナにするという判断をしたのだろう。

「ノーラ、カタリナと契約してくれてありがとう。おかげでぼくたちはもつと強くなれて、もつと活躍できる。それに、これからもずつとぼくたちは一緒に居られる。ノーラのおかげだよ」

「ご主人が喜んでくれるのなら何よりだ。うちはご主人もカタリナも好きだからな。その2人の関係がおかしくならないように気を配るのは当然の事だ」

やっぱりノーラはぼくたちに気を使ってくれていたみたいだ。

とっても可愛くて、強くて、ぼくたちに配慮をいっぱいしてくれる。

本当にいいペットを持って、ぼくは幸せだ。これからノーラが幸せでいられるように、しっかりとノーラの事をみていこう。

「うん、ありがとう。ぼくたちもノーラが大好きだよ。ぼくのペットになつてくれてありがとう。ノーラのおかげで幸せがいっぱいだよ」  
「そうね。あたしからもお礼を言わせて。ノーラがユーリと一緒に居てくれてよかったわ。これからもよろしく」

「ふふ。うちは幸せ者だな。最高のご主人と、その仲間たちに囲まれておつて。ご主人、これからもずっとうちのご主人でいてくれよ」

ノーラはとても暖かい顔をしている。こういう顔をしてくれるのだから、やっぱり思いを伝えていくことは大切だな。

オーバースカイのみんなと、それを支えてくれる人たち。他にも、ぼくの周りにいるみんなに、ぼくがみんなを大切に思っていることをしっかりと伝えよう。

ぼくはいい出会いに恵まれている。この出会いがこれからも良いものであり続けるために、頑張っていこう。

「もちろん、ずっとノーラのご主人でいるよ。ノーラがこれからも幸せでいられるようにね」

「ありがとう、ご主人。もううちからは逃げられんから、そのつもりでな」

望むところだ。アクアもノーラもぼくを逃がさないというけれど、可愛いペットたちに捕まるなんて、最高でしかない。

これから、アクアとノーラの幸せを全力で支えていこう。

## 裏 ノーラ

ノーラというモンスターは、アクアによって生み出された存在である。

アクアはユーリヤを作ったことにより、何かを作り出すという楽しみに目覚めた。

そして、様々な目的を果たすための存在としてノーラを作り上げた。

その目的の一つとして、自立した思考を持つ端末を用意するという事があった。

アクアは何人かの人間を操ったり、自分の分身を生み出したりしてそれらを操作していた。

その限界がどのあたりに在るかが分からなかったので、念のために自動で動く存在としてノーラというモンスターを実験に使っていた。

ノーラの思考を制御するための方式として、アクアはノーラにいくつかの禁止事項を設定していた。

ユーリを傷つけることは絶対に許さない。ユーリの周囲を出来るだけ守る。ユーリの幸せを邪魔しない。

何かを実行するという形で設定するより、そのやり方のほうが自立している意義を感じたから、アクアはそうした。

それ以外に、アクアはノーラに対してユーリへの好意と、その何分の一かのカタリナへの好意を植え付けていた。

それが功を奏してノーラはユーリにとっても懐いており、ユーリはノーラをとっても可愛がっていた。

アクアがノーラに近づいたときには、ノーラはアクアに本能的な恐怖を感じており、ノーラの思考を念のために常に覗いていたアクアも疑問を感じるほど恐れていた。

ただ、ユーリに対して一切の害意はない事がはつきりしていたので、安心してユーリのペットとしてノーラを勧める事ができた。

ユーリが名付けたノーラという名前もとても本人は喜んでるよ  
うで、ノーラはユーリにとつていいペットになるだろうとアクアは判



断した。

念のためにユーリに自分が一番のペットだとアピールしたが、ユーリはそれを素直に受け入れていたので、ノーラをユーリが可愛がる姿も落ち着いて眺める事ができた。

それはそれとして、ユーリに可愛がってもらっているノーラは羨ましかったので、アクアはユーリに可愛がってもらう事をねだった。

ユーリはとても楽しそうにアクアを可愛がっていたので、アクアはとても満たされていた。

ノーラを生み出したことで、新しいユーリとの遊びができるようになった。

ノーラを作った目的はほとんど達成されていないが、アクアはすでにノーラを作成したことに満足していた。

それからしばらくしてノーラがモンスターと戦う機会があったが、アクアの予定通りにノーラの強さを発揮できていた。

ユーリの役に立てるためにノーラを強くすることは決まっていたが、どの程度の強さにするかアクアはとても悩んだ。

結局、進化することでも強くなるという方針に決めたアクアだったが、進化前でもユーリたちと組んでもある程度活躍できるように調整した。

ユーリはノーラの進化前でもノーラの強さを素直に受け入れており、ノーラを可愛がり続けていた。

それが、アクアが全力で自分の性能を発揮するという方針を検討するきっかけになった。

結局は未だに本気を出していないアクアだが、自分の強さがユーリに知られることへの恐れはずいぶんと減った。

その点において、アクアはノーラにとっても感謝していた。

それからノーラはユーリとずっと一緒に居ることで、ユーリの生活の一部になっていった。

ユーリはノーラと一緒に過ごすことで幸せが増したようにアクアには見えていた。

ユーリが幸せそうで嬉しいし、ノーラを構うとついでに自分も構っ

てもらえて嬉しい。

アクアはノーラを大切な仲間のように感じていた。

またしばらく経って、ノーラが進化する日が訪れた。

アクアはノーラが進化することによって出来るようになることをいくつか計画していたので、ノーラの進化を待ちわびていた。

アクアは自在にモンスターを進化させるところまではたどり着いていなかったたので、どのタイミングでノーラが進化するかは分かっていた。

ノーラが進化した時期はユーリたちにとってちょうど良いころだった。

ユーリが強くなったことでカタリナが実力不足気味となっていたころに、ちょうどカタリナを強化できるという、考えられる限りで最良に近いものだった。

なので、アクアはノーラの進化をととても歓迎していた。

ノーラはアクアの目の前でユーリにとても甘えていたが、アクアがユーリに近寄るとすぐに離れていった。

言葉で譲ってもらおうとしたが、脅そうと考えていなかったアクアは若干傷ついていた。

ノーラはアクアの事を嫌っていないことは考えを読んでいるから分かっているが、それでもノーラはアクアをととても恐れていた。

ノーラがアクアにユーリを奪わないでくれと頼んだ時にも、アクアはノーラからユーリを奪う事は全く考えていなかった。

ユーリにとつてすでにノーラは大切な存在であるから、引き離せばユーリが傷つく。

それに、アクア自身もノーラのユーリを大好きな姿勢は案外気に入っていた。

ノーラはユーリを幸せにするために本気で行動できる。アクアはそう信じていた。

それから、予定通りにノーラはカタリナと契約することになった。

ノーラと契約することによって、カタリナは強力な契約技を覚える事ができた。

カタリナに契約させることを前提にアクアはノーラを生み出したので、計画通りに進んだことに安心していた。

アクアはノーラの契約技がカタリナにとって丁度良いものになるように調整していて、だからカタリナの弓と相性の良い契約技が生まれた。

ユーリはそれにとっても喜んでいたので、アクアは改めてノーラを作った喜びを感じていた。

ユーリはノーラをととても大切に思っている。だから、ノーラをととても可愛がっていたが、ノーラを可愛がることで、ユーリはアクアへの好意を思い出しているようだった。

ノーラの感情は自分に伝わっているし、ノーラの分の喜びと自分の喜びで2度おいしい。

アクアはユーリという幸せを満喫していた。

そんななか、ノーラがアクアの事を呼び出す。

ノーラの考えは分かっていたアクアだが、それを表に出さずにノーラの話聞いていく。

「アクア様。アクア様は一体どれだけご主人の周囲を操っているのだ？」

ノーラがその疑問をアクアに発するまでに、ノーラの中で大きな葛藤があった。

ノーラは進化することで、進化する前よりも強い知性を手に入れた。

それと猫型モンスターの鋭い五感が合わさることで、アクアがユーリの周囲の人間を操っているという考えにたどり着いた。

ユーリの周りの人間の一部分からは、何故かアクアの匂いがする。それについて疑問を抱いたノーラは仮説をいくらか考えていた。

そもそもアクアの匂いのある人は人間ではないという説、アクアが契約のような何かをすることで匂いがしているという説。

その他にもいろいろと考えていたノーラだったが、ユーリの発言などから考えた結論として、アクアがユーリの近くの存在を操っているという結論に至った。

アクアが進化する前からユーリと一緒に居るはずの存在からもアクアの匂いがするから、人間ではないという考えは否定される。

契約技のようなものを身に着けている様子はないから、契約のような関係ではないはず。

そのような考えから順番に答えの候補を絞っていった結果だ。

自分の考えが正しいとすると、ユーリにそれが知られてはならない。ノーラはそう考えて、ユーリから遠い場所にアクアを呼びだした。

もしかしたらこの質問でアクアに殺されてしまうかもという恐れもあった。

だが、ユーリの幸せな未来のためには避けては通れない質問だと考え、ノーラはアクアに問いかけることに決めた。

その質問に対して、アクアはどう答えるか悩んでいた。

ノーラの考えからして、ユーリに事実が伝わることは無いとアクアは考えていたから、ある程度の情報は渡すつもりでいた。

それでも、どの程度の真実を告げるかは悩ましいと感じていた。

結局アクアは、段階を踏みながらノーラに答えていくと決めた。

「全員ではない。実際にノーラも操ってはいない。それで、ノーラは誰の事を心配しているの？」

「当然、ご主人だ。ご主人が幸せでない未来を迎えることは避けたいからな」

ノーラのその言葉は本気だと、ノーラの思考を読んだアクアは判断した。

ノーラはアクアがユーリの周りの人間を支配することで、ユーリの幸せが失われることを心配していた。

それに、ノーラはアクアとカタリナが幸せになれない事も懸念していて、だからこそ、恐れを抱きながらもアクアに相対していた。

その考えを受けて、ノーラの事を信頼することに決めたアクアは、おおよその事実を語りだす。

「ステラはアクアがオメガスライムだと気づきそうだから支配した。カタリナはアクアの嫉妬心に負けて操った。ユーリヤはそもそもア

クアが作った。サーシャはユーリを利用していたから操作した。フィーナは最初からアクアが動かしていた。ミーナとヴァネアはユーリを傷つけようとしたからそれを止めた」

「カタリナの事をそんな風に……アクア様、それでアクア様は幸せなのか？　うちのカタリナへの好意は、もとはアクア様の物だろうか？」  
ノーラは自分の正体にある程度たどり着いていた。自分からアクアの匂いがすること、アクアがユーリヤを作ったという言葉からたどり着いた答えだ。

自分に最初からユーリへの好意があつたのもアクアが原因であるはずで、同時にカタリナへの好意を持っている事もアクアが原因だろうと。

だからこそ、アクアはカタリナが好きではなく、ノーラはアクアの心情を慮っていた。

アクアはそれらの思考を読み取って、自分の幸せを思い返した。

自分の答えは最初から決まっているはずだ。アクアはその考え通りの言葉を返した。

「ユーリがそばに居てくれる。それだけでいい」

「それはうちも同じだ。ご主人さえいてくれれば幸せだろうさ」

ノーラは口にしていなかったが、アクアのやり方ではだれも幸せになれないだろうと考えていた。

代わりの案が思いつかないので、何も言わないでいたが。

そんなノーラの考えを読んだアクアは、ノーラにいぎという時に自分を止めてもらおうと考えた。

ユーリが本当に不幸になる選択を自分がしたときに、ノーラならば気づくだろうと。

「ノーラ、ユーリが不幸になりそうなら、アクアを止めて。ノーラの言葉ならちゃんと聞くから」

「わかった。うちはご主人にも、アクア様にも、カタリナにも幸せになってほしい。だから、みんなで幸せになるためにうちも力を尽くす。アクア様も考えることを止めないでくれ」

「分かった。ユーリの幸せのために、頑張ろう」

「ああ。もとはアクア様に植え付けられた物かもしれないが、うちのご主人が好きという気持ちはうちだけのもの。たとえばアクア様でも、それは奪わせないぞ」

「それでいい。ユーリを大好きなまままでいてくれるなら、アクアはノーラを信じる」

## 裏 希望

カタリナはユーリとの幸せな未来が思い描けなくなりつつあった。ユーリが自分のもとから去っていくという考えが思い浮かんで以降、ユーリが自分を捨て去る姿を様々な形で何度も考えてしまった。

カタリナの精神は徐々に追い詰められていき、アクアに自分の体を操ってユーリに好意をぶつけてほしいと考えるようになっていた。

（ユーリがあたしを捨てるはずない。それが正しいはずよ。でも、今のままじゃユーリと一緒に冒険できなくなるかもしれない。そして、ユーリはあたしの事を忘れてしまうの？

嫌よ！ その前に、アクアがユーリにあたしを刻み付けて。ユーリと結ばれる事ができたなら、離れ離れになってもユーリはあたしを忘れないはずなのよ……）

カタリナは自分の体を取り戻すという考えを忘れるほどに焦っていた。

ユーリの事を信じるつもりでいても、恐怖がどんどん押し寄せてくる感覚はずっと消せないままだった。

ユーリが自分を求めてくれるならばユーリに対して何でもすると考えていたが、カタリナは何をしてもユーリに捨てられるのではないかと思った。

（ユーリ……あんたがずっと一緒に居てくれるなら、それだけでいいわ。だから、あたしを必要として。戦力じゃなくていい。情婦とか、道具とか、それくらいでもいいから。あたしにはあんたが絶対に必要なのよ……）

カタリナにとってユーリのいない未来には何の意味もなかった。

だから、ユーリのそばに居られる手段を提示されたならば、カタリナはどんな相手だろうと縋っていたかもしれない。

自分で動くことが一切できないカタリナだから、その状況にはならなかったが。

ただでさえ不安でいっぱいのカタリナは、以前よりずっと、ユーリと自分以外の女とが掛けている時間を苦痛と思うようになってい

た。

（今日はアリシアさんとユーリが出かけているのよね。ああ、アリシアさんとユーリが何かのきっかけで結ばれちゃったら。あんたは愛人なんて持つ性格じゃないもの。あたしはきつと遠ざけられるわ）

ユーリに捨てられることを考えるようになってから、カタリナの頭には以前よりはつきりとユーリと誰かが付き合う姿が具体的に思い浮かんでいた。

そのたびに、自分が付き合っている2人の間に割って入れないだろうと考えて、その都度カタリナの心は傷ついていた。

（ユーリはあたしの事をデートに誘ってくれない。分かっているわ。あいつが誰かをデートに誘う度胸が無いなんてこと。でも、アクアはなぜかあたしの体でデートに誘う事をしない。お願いよ、ユーリ。あたしの事を求めて。それだけで、喜びが湧いてくるはずなのよ）

カタリナは最初の目標だった自分の体を取り戻すという事から、自分がユーリから捨てられない事に目的が変化していた。

ユーリと離れてしまう可能性を考えるたびに心が寒くなるので、それから逃れたい一心であった。

それからずっとユーリが去って行く恐怖と戦い続けていたカタリナに、ある変化が起こる機会があった。ユーリとメルセデスたちの出会いだ。

ユーリがカタリナの前に連れてきたメルセデスたちは、カタリナが呆れるほどに弱かった。

そのこと自体には特に思う所があるわけでもなく、ユーリがまた新しい女をひっかけたと考えていただけだった。

だが、そのメルセデスたちに対するユーリの態度を見て、カタリナの中にわずかな希望が生まれた。

（メルセデスさん達はこんなに弱いのに、ユーリは大切そうな顔をしているわ。まだ出会ったばかりの女にここまで情を持つんだから、呆れた話よね。でも、出会ったばかりのメルセデスさん達でこうなら、幼馴染のあたしはもつと大切にしてくれるはずよ）

ユーリとの実力差ができたことにより思い浮かんだユーリに捨て



られる未来。

それが訪れない可能性の方が高いと思えて、カタリナは素直に喜んでいた。

だが、その喜びに浸っていられる時間は短かった。

メルセデスたちの早い成長を見て、ユーリは才能があると見てメルセデスたちを大切に思っているのではないかとカタリナは考えてしまった。

（ねえ、ユーリ。あたしの代わりにしたくてメルセデスさんたちの面倒を見ているわけでは無いのよね？ ユーリはどうしたらあたしの事を求めてくれる？ あんたの望みは何なのよ……）

いずれ自分の代わりにオーバースカイに入ったメルセデスたちと仲良くするユーリの姿を想像してしまったカタリナ。

ユーリが自分に見向きもしない未来が怖くて、ユーリに忘れ去られてしまう結末を避けたくて、ユーリが自分に何を求めているのかをカタリナは知りたかった。

どんな望みをユーリが抱いていようが絶対に叶える。カタリナはそう考えていたが、ユーリに質問をする事さえできない状況に苦しんでいた。

不安に押し潰されそうになりながらも耐え続けていたカタリナに、さらなる不安の種が襲い掛かる。

ミーナとヴァネアがユーリを追ってカーレルの街へとやってきたことだ。

初めてユーリを奪われるかもしれないと考えるきつかけになった相手が現れて、カタリナはパニックすら起こしそうになっていた。

（嫌……いや！ お願いよ、ユーリ。あたしじゃない相手を見ないで。ううん、見るだけならいい。あたしを捨てないで。あたしと一緒に居て……）

ユーリのミーナを見る時の楽しそうな表情が、ユーリが自分から離れていってしまう証のように思えたカタリナは、目をつむっていたいと願った。

視界にユーリとミーナが嬉しそうにしている姿が映らなければ、少

なくとも今感じている恐怖からは逃れられるから。

そんなカタリナの願いは叶うことなく、ユーリがミーナと親しそうにする姿を見せつけられていた。

（そんな顔をしないでよ、ユーリ。あたしという時よりもミーナさんという時の方が楽しいの？　ねえ、あたしの何がいけなかったの？

確かにあたしはユーリに冷たい態度をとっていたけど、あたしがあんなたという時間が好きだったことくらい、分かっていたはずよね？

それとも、ほんとはあたしの事が嫌いだった？　あたしの事を助けてくれたのは嫌々だった？　ユーリ、今ならあんに好きって言えるから、受け入れてよ……）

カタリナはユーリに好きと言えないままアクアに操られたことを悔やんでいた。

カタリナは、ユーリと結ばれる最後のチャンスがアクアに取り込まれてしまう前だったと思えてならなかった。

ユーリの前にどんどん女が増えていって、ユーリがだんだんそれに惹かれていって。

ユーリに対して好意を持っている女が多いことは分かっている、その女たちが魅力的でないなどとは全く思えない事にカタリナは苦しんでいた。

ユーリに自分の好意をはっきりと伝える人はとても多い。

だから、ユーリに対してつんけんしていた自分はユーリにとって優先順位が低い存在になってしまったのではないかと悩んでいた。

そんなカタリナにまた別種の恐怖が襲い掛かることになる。

オリヴィエたちがユーリのもとを訪れて、ユーリを自分の物にすると言ったことがきっかけになった。

（王女様がユーリを本気で自分の物にしたいのなら、あたしたちはユーリの意思に関係なく引き離されちゃう？　どうしよう。どうすればいいの？　ユーリがあたしを捨てなくても、ユーリがいなくなっちゃうの？）

ユーリはオーバースカイを捨てないと言っていたが、カタリナはそんなユーリの決意など意味がないのではないかと疑っていた。

その中で、アクアがそれを許さないだろうという考えに至ったことで、落ち着きを取り戻したカタリナだった。

（大丈夫よ。王女様はアクアに勝てるようには見えない。ユーリがあたしを捨てない限り、あたしはユーリのそばに居られるはずよ）

それでも、カタリナの中から恐れが失われることは無かった。ユーリが自分より魅力的だと感じる女がいてもおかしくはない。その女にユーリがなびいてしまったら。

カタリナは過去の自分がユーリに嫌われていたのではないかと疑っていたから、誰も彼もをユーリが自分よりも好きと思っっているように見えた。

それからユーリに捨てられる恐怖からずっと逃れられないでいたカタリナに転機が訪れる。

それはノーラの進化から始まった。人型になったノーラがユーリに懐く姿に精神を削られていたカタリナだったが、ノーラの言葉がきっかけで希望が生まれた。

（契約技をあたしが手に入れば、ユーリにこれ以上引き離されなくて済むかもしれない。ユーリに実力で追いつけば、ユーリがあたしを嫌っていたとしても捨てられないはずよ）

カタリナはユーリが自分の事を好きでいると信じていたかったが、嫌われる要素も十分にあると判断していて、だからこそユーリが自分を繋ぎとめておきたくなる理由が欲しかった。

契約技の習得による実力の向上はそれにぴったりだと思えて、カタリナはノーラにとっても感謝していた。

しかし、自身が手に入れた契約技の内容によって、カタリナにある疑問が思い浮かぶ。

（おかしい。こんなにあたしにぴったりな契約技になるものなの？ 弓の強化にちょうどいい技だと思えない。そういえば、アクアもノーラとあたしが契約することを止めなかったわよね？）

カタリナはノーラと自分の契約も、アクアが仕向けたことではないかと考えていた。

だが、それこそがカタリナにとって最も大きな希望となった。

（アクアがこの契約を計画したのだとすると、アクアはあたしの事を忘れてはいないわ。ううん。それどころか、オーバースカイにとつて必要だと思っっているはずよ。アクアはやっぱりあたしの事を大切に思ってくれているのよ）

アクアに対する恨みより、アクアと和解したいという気持ちの方が大きくなっていったカタリナは、アクアが自分をどうでもいいと感じていないと信じた。

それによってカタリナの心は晴れやかになっていった。

（ノーラはアクアが用意したモンスターなのかもね。でも、あなたの正体は何だっついていいわ。ユーリに捨てられないための力をくれる。それだけでいい。いつかまた、ユーリとアクアとあたしの3人で笑いあってみせるわ。ユーリ、アクア、待っていてね）

## 68話 好感

今日はリデイさんとイーリスが来ることになっていたので、組合で待っていた。

オリヴィエ様と違って、リデイさんは事前に連絡をくれてありがたい。

予定の時間になったころ、リデイさんたちがやってきた。まずはサーシャさんが出迎えている。

「いらっしやいませ、リデイ様、イーリス様。歓迎させていただきますわ」

「ありがたく存じます、サーシャ殿。壮健そうで何よりです」

「よろしくな。今日はユーリと遊ぶ予定だから、あまり構えないけどな」

この感じだとサーシャさんと2人は知り合い同士なのかな。

前にオリヴィエ様が来たときに会っていただけでこういう挨拶にはならないよね。それとも貴族だと普通なのかな。

そういえば、リデイさんは貴族だったりするのだろうか。流石に直接聞くのは失礼かもしれないし、サーシャさんに聞いてみようか。

何にせよ、まずは2人にあいさつしないとね。

「リデイさん、イーリス。今日はよろしくね。それで、イーリスと戦えばいいの?」

前に会ったときにはイーリスはぼくと戦いたいと言っていたけど、今でも気は変わっていないのだろうか。

イーリスって手加減が苦手そうだから、戦わなくて済むのならそっちの方が良いかな。

「覚えていてくれたんだな、嬉しいぜ。じゃあ、早速戦おうぜ」

「ちゃんと戦う場所に移動してね。流石にここで戦うとは言わないよね?」

イーリスならあり得そうで怖い。組合をぼろぼろにするのは勘弁だし、サーシャさんが巻き込まれでもしたら大変だ。

そんなことを考えていると、イーリスはため息をつけてこちらをジ

トつとした目で見てきた。

「ユーリ、お前は俺を何だと思っっているんだ？　いくら何でもこんな場所で暴れたりやしねえよ」

イーリスはそう言うけど、ぼくはイーリスがいきなりアクアに攻撃を仕掛けたことを忘れていない。

イーリスは反省してくれたとはいえ、急に炎を吐き出してくる人だぞ。多少思慮が足りないと思うくらいのは普通じゃないかな？

まあ、今のイーリスからは暴れだしそうな雰囲気は感じないし、あの時が特別だったのかもしれない。そうだとすると、嫌な特別だな。

まあいい。イーリスと戦う事を想定していろいろと準備をしてきたから、それをお披露目しよう。

「リデイ様、イーリス様、こちらへ着いてきてくださいまし。戦える場所へ案内しますわ」

ぼくもサーシャさんに着いていくと、ぼくがよく使っている闘技場へと案内された。

まあ、ここになるよね。早速イーリスは闘技場へと走っていき、こちらを手招きする。

ぼくも舞台の上に登ろうとしたけど、その前にリデイさんに声をかけられる。

「ユーリ殿、小生が審判をさせていただきますが、防御はしつかりとして頂きたい。イーリスも手加減はするでしょうが、いい勝負となってしまうば分かりませんから」

やっぱり危険なこともあるんだ。だからイーリスとはあまり戦いたくなくかつたんだけど、仕方ないか。

諦めてぼくは会場の上へと向かっていった。リデイさんも着いてきた。

「ユーリ殿、小生も王都での大会は拝見しておりました。ミーナ殿との戦いはまれに見る名勝負でしたが、あの時のままではイーリスには勝てないでしょう。何か秘策でもおありですか？」

リデイさんも王都での大会を見ていたのか。

そういえば、リデイとイーリスはオリヴィエ様の近衛だったよね。

オリヴィエ様と初めて会ったときには居なかつたけど、どういうことだろう。

今それを聞いたら、話の流れに逆らっちゃうか。憶えていたらまた今度聞いてみよう。

「二応、契約技のような力をもう一つ手に入れたので、前のぼくが2人居ようが勝てると思いますよ」

そう言いながらリデイさんに右手を見せる。リデイさんはそれを見て目を見開いた。

「それは……い・小生もそういう物があるとは存じておりましたが、初めて見ましたよ。良い出会いがあったのですね」

リデイさんはこの力がどういふ物か分かつたみたいだ。良い出会いという言葉にはちよつと物申したい気分だけど、今この状況で言う事でもないか。

ぼくたちの話を聞いていたイーリスはとても楽しそうな顔になった。威圧感があつてちよつと怖い。

ぼくが模擬剣を構えると、イーリスも構えた。リデイさんが合図の準備をしている。

「それでは……始め!」

その言葉と同時にイーリスが火球を吐き出してきた。ぼくは即座にミア強化を発動して炎を避けつつイーリスに接近する。

そのまま模擬剣をアクア水で包んでイーリスに切りかかる。

イーリスは腕でこちらの剣を弾こうとしてきた。イーリスの腕に当たった剣からは予想通り固い感触が帰ってくる。

ドラゴニユートの肌は固いという情報があつたので、模擬剣が壊れないようにアクア水で守っていたが、それは正解だつたみたいだ。

今度はイーリスが殴りや蹴りで攻撃してくるけど、ぼくは避けたり剣で受け流したりしながら耐えていた。

「ユーリ、最高だぜ! まさか俺の動きにここまでついて来られるとはな! ユーリももっと楽しめよ!」

ぼくはこの戦いをあんまり楽しいと思っていないけど、イーリスには気づかれているのだろうか。

まあいい。楽しもうとして楽しめるものでは無いから、色々試すところからだ。

ぼくは水刃の一部を凍らせてイーリスに向かって放つ。

この技はイーリスの炎でアクア水が蒸発したことがきっかけで思いついた技だから、イーリスのおかげでできた技だと言っている。

蒸発したアクア水を操れないか考えて、実際に操れて、なら水でもどうかと考えたのだ。

だから、イーリスとの戦いでぶつけるにはぴったりの技だと思えた。

イーリスはただの水刃だと思ったのか、全く避けようともせずに水刃にぶつかる。

イーリスにちよつとケガを負わせることになって、イーリスは明らかに驚いていた。

「さっきまででも最高だったのに、俺に傷までつけてくれるなんてな！ ユーリ、全力で行くぜ！」

イーリスは炎を腕にまとわせて殴り掛かってくる。

ぼくは即座に半分くらい凍らせたアクア水で防御する。それでも大部分のアクア水が蒸発してしまっただが、それをイーリスへぶつけてみる。

「炎を生み出せる俺がそのくらいの暑さでどうにかなるでも思っているのか!? まだまだいくぜ！」

イーリスはそう言うけど、ぼくにとってはここからが本番だった。

イーリスが浴びている水蒸気を即座に凍り付かせ、さらにアクア水をかけて凍らせていく。

イーリスの動きはだんだん鈍くなっていき、息も絶え絶えという様子だ。

体内に入ったアクア水を凍らせることもできたけど、さすがにこれ以上は危ないと思ったぼくはリディさんの方を見る。

「そこまで！ イーリス、それ以上戦う事は許しませんよ」

「もうちよつと戦いたいが、仕方ないか。これ以上は殺し合いになりかねないからな」



殺し合いになったらぼくが勝てる展開だったと思うけど、だからと  
いってそんな事をしたいわけじや無いから、イーリスが止まってくれ  
て助かる。

殺さないようにこちらだけ手加減しているととなると、さすがに厳し  
いからね。

「ユーリ殿、見事です。まさかイーリスに勝ってしまうほどとは思っ  
ていませんでした」

「俺の負けか？　最後は追い詰められていたけどよ。まあ、審判が止  
めに入ったときに不利だった方が負けか」

イーリスは負けを認めている割にとても明るい顔だ。ぼくが負け  
ていたら、もつと悔しそうにしていただろう。

それにしても、イーリスは自分でアリシアさんに勝てると言ってい  
るけど、イーリスに勝ったぼくはアリシアさんに勝てるとは思えな  
い。

イーリスは相性の問題だと以前に言っていたから、イーリスの言葉  
が正しいなら3すくみの関係なのかな。

たしかに、あの硬さを風でどうにかできるとは思えないけど、それ  
でアリシアさんは負けてしまうだろうか。アリシアさんの武器は他  
にもあると思うけど。

ちよつと気になるけど、イーリスとアリシアさんに戦ってほしいと  
は言えないから、謎のままでもいいか。

「ユーリ、今の戦いは最高に楽しかったぜ。今回は負けちまったけど、  
また戦いたいもんだな」

「ぼくはちよつと勘弁してほしいかな。イーリスの攻撃なんてまとも  
に受けたら大ケガしちゃうよ。協力して別の敵と戦うのはどうかな。  
モンスターとか」

「それもいいな！　ユーリと一緒に戦うほどのモンスターなんて滅多  
にいないだろうがな」

イーリスはとても人懐っこい顔でぼくと肩を組んでくる。

アクアの事で嫌いになっていたけど、こういう顔を見ていると、  
ちよつと好きになってしまいそうだ。

なんというか、素直で悪い人では無いんだろうなと感じてしまう。もうアクアに対して攻撃を仕掛けないでいてくれるなら、イーリスと親しくする事は問題ないと思えた。

「その機会には、ぜひ小生の力も見ていただきたいものです。小生たちが協力するほどのモンスターが出現することを望んでしまう事は王国の騎士としては、いかななものかと思いますが」

「ぼくだって強いモンスターとは出来れば戦いたくないですけど、リデイさんやイーリスと協力して何かをするのは楽しそうです」

「そうですね。ユーリ殿ほどの方と協力するのは良い経験になるでしょうし、ユーリ殿は小生たちに親しみを込めてくれるので、一緒に居て心地よいですよ」

リデイさんは兎も角、イーリスにもそういう対応をしていただろうか。

まあ、今イーリスと親しくなることが嫌かと言われれば嫌ではない。またリデイさんやイーリスが訪ねてきても、ぼくは歓迎できる。

「リデイさんの力を見せてもらいたいですし、また会いに来てくれると嬉しいです。もちろん、力を見せること以外でも歓迎しますよ。出来ればぼくが忙しくない時にお願ひします」

「オーバースカイの皆様は予定はわたくしが存じておりますので、その機会があるならば、リデイ様方の予定とこちらで調整いたしますわ。リデイ様方は安心していらしてくださいまし」

今回の件もサーシャさんから話が来たわけで、何か連絡する手段があるのだろうか。

それにしても、サーシャさんは本当に頼りになる。ぼくはサーシャさんに支えられてばかりだな。

「ありがとうございます、サーシャさん。サーシャさんにはいつもお世話になってますね」

「それでわたくしが得るものも多いですわ。ですので、ユーリ様が気になさる必要はありませんわ」

サーシャさんは笑顔でそう答えてくれるけど、出来れば何かお礼がしたいな。

お礼について考えていると、リデイさんたちから話しかけられる。「ユーリ殿、小生たちはそろそろお暇致します。では、またいずれ」「じゃあな、ユーリ。また会う時を楽しみにしてるぜ」  
そしてリデイさんたちは去って行った。リデイさんたちとまた会うのが楽しみだ。  
オリヴィエ様も、急にでなければ歓迎したいんだけどな。

## 69話 サーシャと

今日はサーシャさんに家に来ないかと誘われていた。オーバースカイのみんなと一緒にかと思いきや、ぼく1人だけ誘われていた。

まあ、理由はよく分からないにしろ、ぼくと親睦を深めたいのだろうと判断してサーシャさんの提案を受けた。

今は待ち合わせ場所で待っている。すると、すぐにサーシャさんがやってきた。

「お待たせしてしまったようですわね。申し訳ありませんわ。それはさておき、早速わたくしの家へ向かいましょう」

今日は雑談もせずいきなり移動みたいだ。急ぎの用では無いはずだけど、なぜだろう。

別に気にすることでもないか。サーシャさんが今日を楽しみにしてくれたとも思おう。

それで、今日はいったい何の用でサーシャさんはぼくを家に呼んだのだろう。

サーシャさんの顔からして、ろくでも無い話ではないだろうから、楽しみに待っていていればいいか。

しばらく歩いて、エルフィール家にやってきた。サーシャさんに契約の証で扉を開けてもらい、ぼくはそれに着いていく。

この防衛の仕組みはとても便利だね。エルフィール家の人間だけが家に入るために必要な能力を持っているから、他の人は同行しない限り入ることすらできない。

来客を必ず迎えに行かないといけない欠点はあるけど、うっかり鍵を忘れるみたいなことは起こらないだろうし。

だから、こつそり侵入する事はまずできないだろうね。サーシャさんの安全が確保されているようで何よりだ。

サーシャさんの私室らしき場所へと案内されて、そこにあるソファのような椅子に座るように促された。ぼくはそのまま座る。

そうしたら、サーシャさんが隣に座ってきて腕を組んできた。びっ

くりしたけど、とりあえず受け入れる。

「ふふっ、ユーリ様の隣は居心地が良いですわね。これもユーリ様の人柄でしょうか」

そう思ってくれているのだとすると嬉しいけど、腕に感じる柔らかい感触でいっぱいになりそうで、あまりサーシャさんの言葉を咀嚼できない。

サーシャさん、前に契約の証を見せてもらったときにも思ったけど、大きいんだな。いや、サーシャさんとの会話に集中しないと。

サーシャさんは胸を押し付けてきているように感じてしまうけど、さすがに気のせいだね。

「人柄がよいと思っていたただけるのなら、それはサーシャさんがぼくに優しくしてくれたからです。だから、サーシャさんに恩を返したくて頑張ったんですよ」

「優しくされたところで、それを返そうと思う物は一握りですわ。その考えからでも、ユーリ様のやさしさは伝わってきますわ」

そういう物だろうか。ぼくの周りの人は優しい人が多いから、好意には好意で返してくれていると思う。

まあでも、カインみたいな嫌な人ともそれなりに出会ってきたから、そういう人たちと比べればぼくは優しいかな。

それでも、サーシャさんを含めたぼくの周りの人たちほど優しく出ているとは思わない。

ぼくの大切な人に優しく出来るように、これから頑張っていこう。「ありがとうございます。でも、サーシャさんほど優しくはないと思いますよ。サーシャさんには借が多いと思いますし」

「ふふっ、わたくしにも、企みがあつてユーリ様に優しくしているのですわ。ユーリ様、幻滅いたしますか……？」

サーシャさんは上目遣いでこちらを見てくる。やっぱり可愛いなこの人。

それはさておき、以前謁見した時にオリヴィエ様も似たようなことを言っていた。

でも、ぼくを利用しようとしていたところで、ぼくにサーシャさん

がしてくれた事が無くなるわけじゃ無い。

だから、きつと何かを隠していたとしてもサーシャさんを嫌いになる事なんてないだろう。

「ぼくやぼくの仲間を傷つけようとしているのなら、幻滅するかもしれませんね。でも、サーシャさんはそんな事をしないって信じています」

サーシャさんはぼくの言葉を聞いてとても明るい笑顔になった。

ほんと、この人には笑顔が似合うよね。ずっと見ていたい位かもしれない。

サーシャさんはそれからすぐにぼくへと抱き着く力を強めてきた。腕に当たる感触をより強く感じて、ぼくの頭は茹だってしまいそうだ。

「それでしたら、わたくしはユーリ様に嫌われることは無いでしょう。嬉しいですわ。ユーリ様がわたくしを信じてくださって。わたくしも、ユーリ様を信じていますわよ」

サーシャさんがぼくの周りを傷つけようとするとは思えないし、サーシャさんを嫌いになることは無いだろうとぼくも思う。

それよりも、サーシャさんに信じていると言われるのはとても嬉しい。ぼくはサーシャさんの期待に応えられているって事だよね。

ぼくがもつと良い冒険者になって、サーシャさんの目的を叶える手伝いをしたいな。きつとサーシャさんの願いはエルフィール家を発展させることだろうし。

ぼくが直接何かをしようとしたところでサーシャさんの邪魔になるだけだろうけど、サーシャさんに頼まれたことは全力で手伝おう。

サーシャさんはぼくよりぼくの使い方が上手そうだし、きつと上手くぼくを役立ててくれるはずだ。

「ありがとうございます。サーシャさんの目的に近付けるように、ぼくも出来る限り協力しますね」

「それは嬉しいですわね。それはさておき、メルセデス様たちの事で話がありますわ」

そういえば、サーシャさんはあまりメルセデスたちの面倒を見過ぎ

るなって言ってたような。

結局ぼくはメルセデスにすっかり弟子としての扱いをしてしまっている。サーシャさんが辞めろと言ってもやめられないけど、謝った方が良いかもしれない。

「すみません、サーシャさん。ぼくはメルセデスたちの事を正式に弟子扱いすることにしたんです。サーシャさんに報告もなく、申し訳ないです」

「わたくしは既にそれを知っておりますわ。そして、それを責めようとしている訳ではありませんわ。ユーリ様が最初に連れてきた時に、この展開は予想しておりましたもの」

そうなのか。みんなぼくがメルセデスをすっかり弟子にすると思っていた感じだし、ぼくってそんなに分かりやすいかな？

まあ、それはいい。それなら、サーシャさんはどんな話をしたいんだろう。

「メルセデス様ですが、わたくしにユーリ様のつまらない愚痴を言っているのですわ。恐らくユーリ様ならなされないことまで言っておりますわ。こちらから注意することもできますが、どうなさいますか？」

メルセデスがそんなことを。でも、内容を聞いてみない事にはね。どういふ愚痴かでどういふ対応をするかが変わってくるからな。まずはサーシャさんに質問だ。

「それで、どういふ愚痴を言っているんですか？　それが分からない事には決めかねますね」

「ユーリ様が自分の胸を見ていただけの、揉みしただけの、主にユーリ様がメルセデス様に性的な接触をしているという内容ですわね」

ああ、そういう。メルセデスの言いそうなことだ。でも、メートルも注意しているだろうし、そこまで問題にするほどではないか。

サーシャさんが信じてしまっているなら対応を考えないといけなかったけど、たとえばオーバースカイにメルセデスがそういうことを言っても、きっと大丈夫なはずだし。

メルセデスが本気でぼくを尊敬していることは分かるから、ある種

の自慢みたいな物なのかもしれない。

それで嘘を吐くというのはよく分からないけど、可愛らしいイタズラで済む範囲かな。

「それくらいなら大丈夫です。ぼくが悪人みたいに言われると困っちゃいますけど、そういう話ではないみたいですしね。それに、メルセデスは適当なことを言う子だって分かっていますから。個性として受け入れてあげたいです」

「なら、それでよろしいかと。メルセデス様たちがユーリ様を慕っているという事は、愚痴を言っている間ですら伝わってきますわ。でするので、メルセデス様に悪意があるわけでは無いのですわ」

そう言いながらサーシャさんはぼくの腕を組み、さらに肩に頭をのせてくる。

真面目な話だと思って聞いていたけど、そういえばサーシャさんはぼくの腕につかまったまま話しかけてきていた。

これはきつとサーシャさんは本気で深刻な話だと思って話していませんでしたね。

それにしても、サーシャさんの体温とか柔らかさとか吐息とか色々と感じてしまって、ちよつとどころでは無く恥ずかしい。

サーシャさんは自分の魅力に無自覚なんだろうか。さすがにそんなことは無いかな。

だとすると、ぼくを誘惑するためにこんな事を？ まさかね。サーシャさんがぼくを好ましく思ってくれている事くらいは分かるけど、恋愛感情ではないはずだ。

そうになると、ぼくを楽しませてくれるために？ それなら納得できるけど、誰にでもこういう事をするのだろうか。

その場合、サーシャさんは嫌な思いをしてでも、ぼくをもてなそうとしていないかな？

そうだとすると止めたいのだけど、嫌でもないのに止めたら失礼だろうし。どうしたものか。

「そうなんですネ。だったら安心して良いかな。話を変えますけど、サーシャさんは今は楽しいですか？」



「楽しいですわよ。今もユーリ様の暖かさとかくましさを感じますわ。ユーリ様、わたくしにしたいことは何でも言ってくださいな。ユーリ様に求められることは幸せでしょうから、その幸せを味わってみたいのですわ」

求められることつて、どういう事だろう。

サーシャさんとは色々と話をしてみたいし、サーシャさんともっと一緒に居たい。そういう事でいいんだろうか。

「今でもサーシャさんの事は求めていると思いますけど。サーシャさんとずっと一緒に居られるのなら、それはきつと楽しいでしょうし」「そういう事ではありませんわ。まあ、ユーリ様には伝わりにくいですわよね。それでしたら、何か女の人と一緒にして楽しかったことは無いのですの?」

「じゃあ、膝枕をしてもらってもいいですか? あれ、気持ちよかったです」

ぼくがそう言うのとサーシャさんはいったんぼくの腕を離し、ソファの端の方へと座った。

「さあ、いらっしやいまし。わたくしの膝枕、存分に楽しんでくださいな」

ぼくはサーシャさんの太もみに頭をのせる。サーシャさんの太ももは包み込んでくれるような柔らかさがあつた。

そのままサーシャさんはぼくの頭に手をのせて、軽く何度か触れてくる。

「いかがですか、わたくしの膝枕は。ユーリ様、眠たくなったら寝ても構いませんわよ」

その言葉を受けてぼくはまどろんでいく。

それから気がつくくと、既にあたりは暗くなっていた。思わず慌てるほくだったけど、サーシャさんが落ち着かせてくれる。

「大丈夫ですわ。すでにあなたの家には連絡させています。今晚はわたくしの家に泊まってくださいな」

サーシャさんに誘われたので、ぼくはサーシャさんの家に泊まることにする。

サーシャさんの部屋に泊まることになって、同じベッドに誘われてぼくはびつくりしていた。

「ユーリ様、今日は客間は用意しておりませんので、狭いでしょうが、わたくしの隣で我慢していただきますたいのですわ」

そう言われてぼくはサーシャさんの隣で寝ることを受け入れてしまふ。

そうだよね。急に泊まることになったから、準備なんてできなかつたよね。

サーシャさんと同じベッドで寝ていると、隣でサーシャさんの息が聞こえてどきどきしていた。

それでもがんばって深呼吸していると、そのうち落ち着いてきたので眠ることにする。

今日はサーシャさんに迷惑をかけちゃったかな。でも、サーシャさんと親しくなれていると実感できて、良い日だったと思えた。

## 70話 待望

今日はメルセデスたちの冒険に着いてきていた。アクアとは一緒だけど、他のオーバースカイのメンバーには休んでもらっている。場所はいつものマナナの森だ。

モンスターと出会ったときにどう戦っているかとか、索敵をどうしているかとか、色々と見てみるつもりだ。

「メルセデスたちはマナナの森でどんなモンスターがどれくらい発生するかは覚えてる？」

「大丈夫っす！ 大体弱いモンスターばかりっすよね」

「いつも同じところには同じようなモンスターがいるわよね」

メルセデスの言うことは間違っていないけど、それだけの認識だと危険かもしれない。

メーテルもいるから、ある程度メルセデスのフォローはされているんだろうけど。

「うん。それで、いつもよりモンスターが多いとか少ないとか、おかしな状況になったときには気を付けてね。どちらにしても危険の前兆であることが多いから」

人型モンスターが現れる時とかに多いからね。メルセデスたちの実力で人型モンスターと遭遇してしまつては危険だ。

だから、しっかりと気を付けておいてもらいたい。

「分かつたっす。そういう時はすぐに帰ればいいっすか？」

「そうしてほしい。依頼の失敗でペナルティが発生するかもしれないけど、命には代えられないからね。状況次第ではペナルティの取り消しなんかもあるみたいだから、まずは安全を第一にね」

ぼくたちは上手く乗り越えられたとはいえ、危ない場面が何度もあつた。

メルセデスたちに同じ目には合つてほしくないから、ここはぼくの言う事をしっかりと聞いてもらいたい。

「了解っすよ！ ユーリさんがあたいたちの事を心配してくれているのは分かるっすから、心配はかけないっすもりっす」

「本当に気を付けてね。前にはキラータイガーが大量発生したこともあるし、人型モンスターが現れたこともある。今のメルセデスたちが挑んじゃいけない相手だから、慎重にね」

メルセデスもメーテルも真剣な顔でうなずいてくれる。ちゃんと気を付けてくれそうな反応だ。

メルセデスたちが死んでしまったら、ぼくはとつても悲しい。3日くらいは泣いて過ごすと思う。

それから、メルセデスたちの事を何度も思い返して悲しい思いをするだろう。

そんな未来が来ないように、メルセデスたちにはしっかりと自分の命を大切にしてほしい。

「安心してください。ユーリさんを悲しませるような事はしないですよ。あたいはこれからユーリさんと一緒に居たいっすからね！」

「私もそうよく。アクアさんとも、ユーリちゃんとも、他の人たちとも、まだまだ話したいこともやりたいことも沢山あるもの〜」

「ぼくだって同じ思いだから、絶対に無事でいてね。何をしてもいいから、まずは生きていてほしい」

メルセデスたちは嬉しそうな顔でうなずいてくれる。

ぼくがメルセデスたちを大切に思っている事はきつと伝わっているから、無茶はしないと信じよう。

メルセデスたちがオーバースカイの間仲間になってくれる日を迎えられるように、そしてそれからずっと一緒に冒険が出来るようになってくれないとね。

「メーテル、メルセデスの事をちゃんと止めて。ユーリを悲しませないように」

「もちろんよく。メルちゃんだけなら心配だけど、私がしっかり見ているもの〜。ユーリちゃんの心配しているような事にはさせないわ〜」

「アクアさんも、メーテルもひどいっすよ！ あたいはユーリさんの言う事だけは聞きますからね！」

メルセデスの言葉は嬉しいけど、他の人の言葉も聞いてもらった方

がありがたいかな。サーシャさんとか、アリシアさんたちとか。

ぼくだって常に正しいことを言えるわけでは無いのだから、いろんな意見を取り入れることを覚えてほしい。

「ぼくの言う事にも間違ったことはあるし、他の人たちの意見にも大切なことはあるよ。誰の意見でもってわけじゃないけど、聞く価値のある人の意見は聞いておいてね。たとえばサーシャさんとかアリシアさんとか」

「分かっているつすよ。その中でもユーリさんを優先するだけつすから。あたいはユーリさんの言葉だけは信じたいつす。他の人の言葉も当然聞くつすけどね」

その言い方だとちよつと分かっているか怪しく聞こえるけど、これ以上念を押そうとしても意味はないかな。

ぼくを信じようとしてくれるのは嬉しいけど、信じたいから信じるというのは危険なんだよね。

でも、それを伝えようとしてもメルセデスの気持ちを裏切るような言い回しになりかねない。

だから、ぼくがうかつなことを言わないようにする事が大事だろう。それでメルセデスを間違った方向から遠ざけていこう。

「うん、ありがとう。でも、死にそうな時にまでぼくの言葉を守ろうとしないでね。ぼくの言葉に逆らって生きてくれる方が絶対に大切だから」

「そこまであたいの事を心配してくれるのはユーリさんだけつすからね。ユーリさんのために全力で生きるつもりですけど、どうせ死ぬのならユーリさんの言葉を守って死にたいつす」

「メルちゃんがおかしなことを言っているのは私も分かるけど。私も気持ちは同じよ。でも、ユーリちゃんを悲しませないために頑張るわ」

メーテルまで同意するとなると、これは根の深い問題だな。

そうだな。ぼくの周りのみんなと協力して、メルセデスたちを大切に思う人はもつといるのだと伝えたい。

みんなはぼくよりメルセデスたちとの交流は浅いけど、みんな優し

いから、きつとメルセデスたちを大切にしてくれるはずだ。

まあ、急ぎ過ぎても良くない結果を招くだろうから、時間をかけてしっかりと解決していこう。

「メルセデスたちに何かあったら、ぼくは周りの目なんて気にせず泣くからね。そうならないようにしてほしいな」

「メルセデス、メーテル、ユーリを泣かせたら許さないから」

アクアはとつても強い圧力をかけているように見える。メルセデスたちはちよつとおびえてないか？

でも、メルセデスたちがおびえるくらいで無事でいてくれるなら、その方が良く。止めなくてもいいかもね。

「わ、分かったつす。あたいはユーリさんと出来るだけ一緒に居たいつすから、死ぬ気はないつすよ」

「もちろん、死なないために全力は尽くすわ。でも、どうしようもない時は許してほしいわ」

もちろん、ぼくだつて不意に死んでしまう時はあるかもしれないから、絶対に無事でいる保証なんて誰にもできない。

でも、メルセデスたちが前向きに生きようとしてくれる事を裏切る結果にならないことを祈つた。

「ぼくだつて、どうしようもない時はきつとあるから、それは責められないよね。でも、最後まで絶対に諦めないでね。それはきておき、今日はいつもと比べてモンスターの様子はどうかかな？」

「ちよつと少ない気がするつす！ これくらいでも依頼をあきらめた方が良くいつすか？」

「今回はぼくがいるから、たぶん大丈夫だとは思うけど、他の人がどんな依頼を受けたか把握しておく、こういう時に判断しやすいね。これくらいなら、人型モンスターはいないと思う」

この状況で出てくる位の強いモンスターなら、ぼくでも対応できるかな。メルセデスたちを守りながらも、何とかかなると思う。

とにかく不自然なくらい多かつたり少なかつたりすると危ない事が多かつた。今くらいでモンスターの大量発生や人型モンスターが現れるという事はないはずだ。

「分かったつす。いっぱい狩った結果少ないなら、おかしくはない位なんすね」

「そんな感じかな。じゃあ、メルセデスたちのモンスター退治を見せてもらおうかな」

「もう敵がいるつすか？ 今すぐには見せられないと思うつすよ」

メルセデスはそう言うけど、ぼくの索敵には既にモンスターが引っ掛かっていた。

アクア水を霧状にして広げた結果、おかしい反応があったのだ。形的には弱いモンスターかな。

アクア水を利用した方法だからメルセデスには真似できないかもしれないけど、敵の気配なんかを感じられるようになってもらいたいな。

「ぼくにはもう敵は見えているよ。メルセデス、警戒してね」

その言葉を受けてメルセデスは周囲を見渡す。

そう時間がたたないうちにモンスターを見つけて、警戒するほどのモンスターでは無いと判断したのか、すぐにメートルとともに向かっていく。

実際にメルセデスたちは特に苦戦することもなくモンスターを倒していた。

「メルセデス、他にモンスターが隠れていないかは警戒していた？」

「二応死角からの攻撃に対応できるようにメートルと視界の範囲を調整していたつす」

確かに、メルセデスとメートルは全く同じ方向を向いていなかったし、2人の目が入っていないところにはメルセデスの水の膜があった。

うん。モンスター相手での立ち回りはしっかりしているみたいだ。

メルセデスたちの成長に感心していると、ぼくの警戒網におかしな反応があった。

よく調べてみると、キラータイガーの動きだった。

「メルセデスたち、気を付けて。キラータイガーがいる。ぼくが倒すから、アクアはメルセデスたちを守ってくれないかな？」

「ユーリさん、あたいたちに任せてくださいっす！ ユーリさんが見てくれるなら、きつと倒せるっす！」

メルセデスの言葉を受けてぼくは少し考える。

メルセデスたちなら全く手も足も出ないという事はないだろう。

キラータイガー位の動きなら、いざという時にはすぐに倒すことができる。アクア水でもミア強化でも大丈夫だろう。

考えた結果、すぐに手を出せる距離から見守りながらメルセデスたちに任せると決めた。

「分かった。メルセデスたちに任せる。危なくなったらすぐに助けるから、安心して戦ってね」

メルセデスたちをぼくが誘導してキラータイガーの方へと向かう。

すぐにメルセデスたちは戦い始めた。

キラータイガーが前足で先制攻撃を仕掛けたが、メルセデスが水の膜で妨害する。

そのまま、メーテルは至近距離で攻撃をする。

メルセデスは距離を空けながら戦い、水の膜で攻撃に対処しながら、隙ができると剣で攻撃を仕掛ける。

メルセデスに攻撃が向かいそうになるとメーテルが妨害し、メルセデスは攻撃を食らう事がなかった。

メーテルにキラータイガーの攻撃が当たっても、メーテルは上手く防御しているようだ。

単に攻撃を無視しているという感じではなく、攻撃が来るところの防御を固めているみたいだ。

たぶん、メルセデスの水の膜を厚くして防御力を高める感じに近い。水をうまく固めている雰囲気だ。

そのまま順調に戦闘は進んでいき、ついにキラータイガーが倒れる瞬間がやってきた。

ぼくたちがキラータイガーを倒した時より時間はかかっていたけど、ぼくたちの時ほど危なくなかった。

メルセデスたちの成長に感動しながら、ぼくはメルセデスたちを褒める。



「メルセデス、メーテル、おめでとう。きみたちがここまで強くなつて、ぼくは嬉しいよ。だけど、ぼくがいない時には、まだキラータイガーと2人だけでは戦わないでね」

「分かっているっす！ 1つ失敗したら危ないっすからね」

「そうね。私もまだフォローがない状態で戦いたくないわ」

メルセデスたちはちゃんとわかっている顔だ。なら、安心だな。

それから、特に問題が起こることは無く今日の活動は終わった。

メルセデスたちがオーバースカイに入る日は、すぐ目の前にあるように思えた。

## 71話　メルセデスと

ぼくは今日、メルセデスと出かける約束をしていた。

メルセデスが言うには、師弟で親睦を深めるとのことだったけど、その理由だとなぜメーテルがいないのだろう。

まあいい。メルセデスともっと仲良くなって、オーバースカイにメルセデスたちが加入した時にうまくやっていく事を目指そう。

しばらく待ち合わせ場所で待っていると、予定の時間の少し前にメルセデスがやってきた。

「ユーリさん、お待たせして申し訳ないです。今日ははよろしくお願ひします」

「時間には間に合っているから、気にしなくていいよ。ぼくの方こそ、よろしくね」

今日のメルセデスはいつもの冒険の時の格好と違って、随分おしゃれをしている。

上も下もレースのような生地で、胸元に大きい切れ込みが入っていて、スカートも短くて、全体的に色気が強い。

いつもの動きやすさを考えているような恰好とだいぶ違って、ちよつと見惚れてしまった。

「ユーリさん、いやらしい目をしてるっす！　おさわりしても別にいいっすけど、その時にはオーバースカイに入れてくださいよね」

とんでもないことを言ってくるな、メルセデスは。どこまで本気なんだろう。

まあ、いやらしい目をしているというのは完全には否定できない。見惚れてしまっているわけだし。

それよりも、メルセデスは自分の事を大切にしているのだろうか。簡単におさわりを許すような生き方をしているのでは？

そうだとすると、止めた方が良いのだろうか。メルセデスがそれを楽しんでやっているのなら良いけど、苦しんで処世術みたいに思っているのなら止めたい。

でも、うかつな聞き方をすると、メルセデスが傷つくだけになりか

ねない。今は流すのが正解かな？

「メルセデスはちゃんとした仲間にしたいたいから、そういう事はしないよ。あ、メルセデスに魅力がないわけじゃ無いからね。あくまで、メルセデスの事を雑に扱いたくないからだよ」

「ユーリさん……やっぱり、無条件でおさわりしてもいいつすよ。ユーリさんが相手なら、嫌じゃないつす。……なんちやつて。本気にしたつすか？」

メルセデスの目は本気に見えたから、結構ドキツとした。メルセデスの本音がどこにあるにしろ、冗談と言ってくれてよかった。

ぼくはメルセデスの事を大切に思っているし大好きだけど、男女の関係になりたいわけじゃ無いから。

メルセデスたちがオーバースカイの仲間となつて、一緒に冒険をすることを楽しみにしているのだ。

その時には、きつとメルセデスたちは頼りになることだろう。その瞬間が待ち遠しいな。

「あはは……メルセデス、本当に自分の事を大切にしてくれ。もうメルセデスはメルセデス一人だけの物じゃないんだと思つて。ぼくにとつても大切な存在なんだ」

「お前は俺の物つてことつすか!? まさかユーリさんからそんな男前なセリフが出るなんて、予想外つす！」

確かにそう捉えられてもおかしくない言い回しをしてしまったかもしれない。

メルセデスは狙っていないと思うけど、曲解にならないラインをうまく突いてくるな。

メルセデスはわざとらしい表情を作っているから、ぼくの意図は分かっていると信じよう。

「そんなに普段のぼくは格好悪いかな……ちよつとシヨックなただけど」

メルセデスが冗談を言っているので、悲しそうな顔を作つてこちらも合わせてみる。

それにしても、ぼくが冗談を言うなんてこと、昔は全然なかったよ

ね。やっぱりぼくも色々と変化しているんだな。

アクア水を手に入れてから強さは増したと思うけど、こういう所でも変わっているのかもね。

「い、いや、ユーリさんはいつも格好いいっすよ！ だから、弟子にしてもらって嬉しかったし、オーバースカイに入るために頑張ってるっす！」

メルセデスはとても困った顔をしている。

ちよつと楽しくなってしまう。メルセデスがぼくをからかう気持ちがあつたかもしれない。

まあ、これ以上困らせても仕方ないし、ネタばらしをするか。

「ありがとう。でも、冗談だからそんなに慌てなくても大丈夫だよ」

「そうなんっすか!? ユーリさんにはすっかり騙されちゃったっす。ユーリさんってば、悪い男っすね。あたいの事をどうしちやうつもりっすか?」

「そうだね。可愛い弟子から、可愛い彼女にとか? なんてね。メルセデスが一人前の冒険者になれるようにしたいね。もうちよつとだと思っけど」

「ユーリさんの彼女なら歓迎っすよ。あんな事やこんな事をしちやうっす。ユーリさんはきつと彼女にはデレデレっすね。あたいも可愛がられちやうのか」

メルセデスはなんだかクネクネしている。これはどういう反応なんだらう。

まあ、メルセデスが本当に彼女になつたらきつと楽しいよね。でも、今はぼくには誰かと付き合う余裕はないと思う。

きつと冒険を優先してしまうし、他の女の人と距離を取ることでもできないから、誰かと付き合つてうまく行く姿がイメージできない。

「メルセデスの事は今でも相当可愛がっていると思うけど、それじゃ足りない?」

「ユーリさんは分かつてないっすね。そういうのと今可愛がつてもらつてるのは違っすよ。やっぱりイチャイチャが大事っすね。それは付き合つてない今でもできるっすから、今からやるっすよ」

そう言つてメルセデスはぼくと手をつなぐ。メルセデスは体温が高いのか、とても暖かい。

ぼくもしつかりと握り返していると、メルセデスはとても明るい顔をしてくれた。

「ユーリさんも乗り気みたいすね。なら、もつとイチヤイチャするっすよ」

メルセデスは手のつなぎ方を変え、指と指が絡み合うような形にした後、ぼくの腕にもう片方の腕も組みついてきた。

メルセデスの柔らかい感触が伝わってきて、すぐドキドキしてしまう。

でも、メルセデスの顔を見ると真っ赤になっているから、緊張しているのは、ぼくだけじゃないな。

「ユーリさんってば真っ赤っすよ。照れちゃうユーリさんも可愛いっすね」

「赤いのはメルセデスもだけど、可愛いところも同じだね」

ぼくがそう言つたとメルセデスはさらに赤くなつてしまう。ちよつと恥ずかしいことを言つちやつたかな。

でも、メルセデスの姿は本当に可愛くてきれいで、ずっと見ていたい位だ。

「ユーリさんはいつの間そんな口説き文句を覚えたっすか。あたいは教えてませんよ。まさか、ユーリさんはデートマスターだったっすか？」

「デートマスターって何なのさ。せつかくメルセデスと一緒に居るんだから、楽しむ姿勢は大事だつてただだよ。ぼくはメルセデスと一緒になら何でも楽しいと思うけどね」

「ユーリさんは思った以上に強敵だったっす……ユーリさんはあたいの事が大好きつてことはよく分かつて嬉しいっすけど」

これまでのぼくなら、こういう言葉は言わなかっただろうな。

でも、周りの人に好意をしつかりと伝えると決めたんだから、全力でやらないと。

メルセデスにもぼくの大好きな気持ちが伝わっているみたいだか

ら、上手く行っているはずだ。

それから、2人でいろいろ見て回って、次は食事をする事になった。

メルセデスのお気に入りのお店があるらしくて、そこに連れて行ってもらおう。

連れて行ってもらった店は、屋台が家に固定されたような見た目の店だった。

「ここつすよ。おっちゃーん、空いてるつすか？」

「空いてるぜ。メルセデス、そいつがお前の恋人っていうユーリとやらか？」

いつの間にもぼくはメルセデスの恋人になったんだろう。

まあ、悪い気分ではないけど、あまりこの話が広まったら困っちゃうな。

でも、どうせ他の人と来るような店ではないだろうから、ここは合わせておくか。

「メルセデスがよくお世話になってるみたいで、ありがとうございます。今日はよろしくお願いしますね」

「いつもの2人前でよろしくつす！ 今日あたいの好物を恋人に食べさせるつすよ」

店主は元気よく返事をして厨房へと引つ込んでいく。食事を待つ間、ここがどんな店なのか聞いてみるか。

「ここつてどんな料理が出てくるのかな？ 店主に顔を覚えられてるくらいなんだから、よく来ているんでしょ？」

「それは料理が来てからの楽しみつす！ でも、きつとユーリさんも気に入るつすよ」

「そうなんだ。ところで、メルセデスの好きな食べ物つて何かあるかな？」

「野菜が好きつすね。特に葉っぱは大体好みつすよ。根っこや茎も嫌いじゃないつすけど、やっぱり葉っぱつすね」

となると、野菜を使った料理が出てくるのだろうか。

ぼくは魚が好きとはいえ、嫌いなものはあんまりない。たぶん何が

出てきても料理に失敗していなければ食べられるはず。

メルセデスがお気に入りという位なんだから、そういう駄目な料理ってことは無いだろう。

しばらく雑談をしながら待っていると、料理がやってくる。

野菜炒めのような物がいっぱい出てきた。とても大盛りだな。冒険者をしているぼくにとつて食べられない量ではないけど。

メルセデスは結構な健啖家なのかもしれない。まあ、いっぱい食べられるだけ稼いでいるみたいだから、安心できる。

野菜炒めを食べてみると、結構味が濃い。でも、野菜の味が感じられないというほどでも無いから、これがちょうど良いのかもしれない。

メルセデスはとても勢いよく食べている。ぼくはそんなに早く食べられないので、いつも通りのペースで食べた。

すぐに食べ終えたメルセデスがこちらに話しかけてくる。

「あー美味かったっす。あれ、ユーリさん、まだ半分も食べてないじゃないっすか。まずかったっすか……？」

「いや、美味しいと思うよ。ただ、速く食べるのに慣れていないだけだから」

メルセデスはその言葉を聞いて不安そうな顔を元に戻す。それからは楽しそうにこつちに話しかけてきた。

ぼくは食べながらその話をずっと聞いていて、食べ終わるころにメルセデスの話が終わった。

メルセデスはぼくの食べるペースに合わせて話をしてくれたのかもしれないな。感謝しておこう。

それから、再びいろいろと回って、そろそろお開きにしようと言う時間になった。

「メルセデス、名残惜しいけど今日はそろそろ帰ろうか。送っていくよ」

「ユーリさんってばあたいの宿を知りたいっすか？ 夜這いならいつでも歓迎するっすよ」

「そんなことはしないよ……メルセデスも冒険者だから自分の身は自

分で守れるだろうけど、一応ね」

「ありがとうございます。ユーリさん、今日は楽しかったっす」

それからも話をしながらメルセデスの宿に移動した。宿の前でお別れをする。

「じゃあね、メルセデス。またこういう機会があつたら嬉しいな」

「今度はユーリさんから誘ってほしいっす。今度はメーテルも一緒つてのも悪くないっすね」

メルセデスはそのまま去って行く。ぼくから誘うのはなかなか勇気がいるけど、メルセデスはその勇気を出してくれたんだよね。なら、ぼくもそれに応えないとな。

今日は本当に楽しかった。メルセデスともっといろいろな時間を過ごせるように、ぼくも頑張ろう。



## 72話 試練

メルセデスたちはあれからも順調に成長していて、そろそろキラータイガー位なら安定して倒せそうだ。

人型モンスターには2人では敵わないだろうけど、戦力として数える位はできるかもしれない。

なので、オーバースカイにメルセデスたちを加入させるための準備をしていた。

サーシャさんに相談すると、メルセデスたちのチームをいったん解散した扱いにしてから、オーバースカイに新しいメンバーとして登録することになるらしい。

どういう原因でそうなるのかは説明されなかったけど、これまで新メンバーを加入させるときには大して手続きがいらなかったから、そのあたりが理由だろうか。

チーム同士の合流にしないのだから、そうするとダメな理由があるという事だけは分かる。

まあ、何でもいい。メルセデスを加入させることに問題はないらしいので、後はメルセデスたち次第だ。

メルセデスたちをいつも使っている闘技場へと呼びだして、今回予定している事を話す。

「メルセデス、メーテル、今日はぼくと模擬戦をしてもらおう。オーバースカイのみんなにも見ってもらって、その結果次第でメルセデスたちをオーバースカイに加入させるか決めようと思うんだ」

ぼくの言葉を受けてメルセデスとメーテルは目を輝かせる。

この表情を見た時点でぼくはオーバースカイに加入させたいと思っただ。

けど、ここでいい結果を残せないのにメンバーにしてしまうとメルセデスたちの安全が危ぶまれる。

冒険者としての活動は命がかかっているんだ。好き嫌いだけで判断するなんてもつてのほかだ。

安易な感情でメルセデスたちを危険にさらすわけにはいかない以

上、ここは真剣に行こう。

メルセデスたちはぼくの言葉を聞いて明るい顔をしているけど、戦いの結果次第ではこの顔が曇ってしまうかもしれない。

それでも、メルセデスたちのためにも簡単に合格にはしてあげられない。

メルセデス、メーテル。きみたちの力を見せてくれ。

「やっとこの時が来たっすね！ 絶対に合格してみせるっす！」

「そうね、メルちゃん。私たちが待ち望んでいた瞬間よ。ここで結果を出してみせるわ」

メルセデスたちはやる気バツチりみたいだ。つい期待してしまうけど、落ち着こう。

やりすぎても良くないし、手加減しすぎても良くない。人型モンスター相手にちゃんと生き延びられるのか、しつかり確認しないと。

メルセデスたちの準備ができるのを待って、ぼくは構える。メルセデスたちも構えた。

今回はカタリナに合図してもらおう。いちばん声が通りやすいのはカタリナだと思う。

しばらくして、カタリナからの合図があった。ぼくは即座に水刃を2人に向かって放つ。

これをまともに受けてしまうようなら、人型モンスターの能力には対応できないだろう。

メルセデスたちは期待通りに、水刃を回避してぼくの方へと向かってきた。

まず第一段階は合格だ。ぼくは今回の戦いでいくつか壁を用意することに決めていた。

それら全てを突破できるのなら問題なく人型モンスターと戦えるはずだ。

いづらか駄目だとしても、内容次第ではぼくたちがフォローすれば済むかもしれない。そのあたりの判断はみんなに任せるつもりだ。

勿論ぼくの願いは全部の壁をメルセデスたちが突破する事。それならば、安心してメルセデスたちもオーバースカイとして活動でき

る。

「さすがにこれくらいは対応できるよね。なら、次だ。ぼくの防御を破ってみてくれ」

次はアクア水で壁を用意してそれにどう対処するのかわかるつもりだ。

人型モンスターには防御が固いものも多い。十分な火力を用意できないのなら、戦力としては期待できないことも多いだろう。

メルセデスの能力は防御寄りだから、ここはメーテルに期待したい。

メルセデスはまず剣でぼくの用意した水の壁を攻撃する。当然、それだけでは全く水の壁を超えることはできない。

さあ、ここからどう対応する？ 手間取っているなら、さらに水刃で攻撃するぞ。

人型モンスターが自分への攻撃をおとなく見ているだけのはずがない。そのことを、よく分かってもらわないとね。

「メーテル、この水、とんでもなく硬いつす！ アクアさんに教わったっていうあの攻撃で頼むつすよ！」

「分かったわ。少し時間を稼いでちょうだい」  
駄目じゃないか。わざわざ敵の前で狙いを話すなんて。そのつも

りなら、ぼくはメーテルを攻撃するかな。

ぼくは水刃をいくつもメーテルに向かって放つ。メーテルは慌ててそれを避けていたが、攻撃の準備は失われたみたいだ。

あの感じだと、こぶしに力を集中しているのかな。さて、メルセデスたちはどう対応する？

このままぼくの水刃に翻弄されるだけならば、合格はさせてあげられないぞ。

「メーテル、どれくらいの水刃なら避けられるつすか?! ユーリさんはおとなしく見ていてはくれないつすよ。溜めながら回避も出来ないつすよ！」

よく分かっているな。全く動かず溜めなければ使えない技なんて、無いのと同じだ。

メルセデスがメーテルをどうフォローするのも見たいけど、まずはメーテルが最低限の事ができないとね。

「後ろにまで集中できないから、後ろを守ってちょうだい。前からだけならなんとかしてみせるわ」

メーテルがそう言うのなら、後ろからいっぱい攻撃するか。勿論前から攻撃するし、横からも攻撃する。

さあ、どうやってこの水刃をしのいで水の壁を壊すかな？　ここが乗り越えられないようなら、みんなに相談するまでもなく不合格だよ。

メルセデスはぼくの水刃から、水の膜を張ってメーテルを守る。

水の膜は初めて出会った時とは違っていくつも出現させられているし、水刃を防げるくらい硬さもある。

メルセデスは水の膜を出したり消したりしながらうまくメーテルを守っている。

メーテルも、自分の言葉通り正面からの攻撃を避けながらこぶしに力をためている。

メルセデスの水の膜は最大で5枚みたいだ。同時に6個水刃を出してみようか。

いや、そこまでしないと対応できない人型モンスターはそうはいない。試験の趣旨に反する事はするべきではないな。

その辺の対応については今後教えていけばいい。まずは最低限の実力の確認だ。

「メルちゃん、準備できたわ！　私の攻撃をサポートしてね」

「分かったっす！　ユーリさん、行くっすよ！」

わざわざ攻撃のタイミングを教えてくれるのか。なら、しっかり妨害しないとね。

相手の言葉を人型モンスターは認識してくるのだから、今回の結果がどうであれ、そのあたりはしっかり教えよう。

ぼくは水刃をメーテルの進行方向を邪魔するように放つ。

メルセデスが水の膜でメーテルを守るけど、完全には対応できていない。メーテルはまっすぐこちらに向かう事ができていない。

さて、このままぼくに翻弄され続けるのなら、人型モンスターの相手は難しいよ。どう対処してくるのかな？

「なら、まずはあたいから攻撃するっす！ これでもくらえ！」

メルセデスは水の膜をこちらの壁に向かって垂直に出現させる。ああ、そういう狙いか。

本気でメルセデス自身も壁を破るために行動しているようなので、メルセデスへの攻撃を増やして、メーテルへの攻撃を減らす。

メルセデスは水の膜をぼくの作った水の壁へとぶつける。水刃と同じような攻撃手段だけど、まだ威力が足りない。

でも、何度もぶつけられると危ないかもしれないな。

だから、メルセデスへの攻撃をさらに増やす。メルセデスはそれにも対処しながら攻撃を続ける。

そうしているとメーテルが近寄ってきたので、メーテルにもある程度水刃で攻撃する。

メーテルはメルセデスと協力しながらぼくの攻撃をしのぎ、ぼくの作った水の壁に攻撃を当てることに成功した。

「これが私の全力よ。お願い、通じて！」

結果として、水の壁は破られた。第2段階も合格だ。メルセデスたちの成長は嬉しいけど、感動している場合じゃない。

ぼくは模擬剣を構えて、メルセデスたちに向かって剣と水刃で攻撃を仕掛ける。

「さあ、ぼくに何か一撃当てたら、文句なしの合格だよ！ 頑張っ！」

ぼくはメルセデスたちと戦いながら、足元にいくつかアクア水で罠を用意しておいた。

怪しい水たまりのような物をいくつか設置していて、罠ではないただの水たまりもある。

人型モンスターの狡猾さを考えると、これに対応できてほしいけど、どうだろうね。

「メーテル、足元に気を付けるっすよ！ 絶対に怪しいっす！」

「もちろんよ。ここまでできて負けられないもの〜」

メルセデスたちは足元の水を避けながらこちらへ向かってくるので、そちらへ誘導するように水刃を放つたり、剣で攻撃したりする。それを受けてメルセデスたちは確信を深めたようで、絶対に水たまりには入ろうとしない。

うん。とてもいい対応だ。これなら十分に合格をあげていいと思うけど、最後までしつかりやろう。

「これで決めるっすよ！ ユーリさん、覚悟してください！」

メルセデスはぼくに向けて水の膜を縦にいくつも向けてくる。当たったら大変だから、ぼくは避けながらメルセデスに剣で攻撃する。それに対してメートルが横から剣を殴ってくる。ぼくは体勢を崩した。

そこにメルセデスが模擬剣で攻撃してくる。もう十分かな。

ぼくはメルセデスの攻撃を素直に食らって、両手を挙げる。

「まいった。メルセデスたちはこれからオーバースカイの仲間だよ。よろしくね」

メルセデスたちはともに両腕を高く上げて大声で叫ぶ。

「やったー!!」

こういう時に息びったりなのはいいコンビの証って感じがするね。

ついにメルセデスたちがオーバースカイの仲間になるのか。期間的には短いと思うけど、ぼくはとても待っていたような気分だった。

「これからよろしく、メルセデスさん、メートルさん。ユーリはヘタレだけど、ちゃんと頼りにしていいわよ」

「よ、よろしくおねがいしますっ。お2人の事、歓迎しますよっ」

「よろしくお願いします……一緒にユーリさんを支えましょう……」

「よろしく。ユーリ、良かったね」

「ご主人が嬉しそうで何よりだ。2人とも、これからもしつかりな」

みんなメルセデスたちを歓迎してくれているようだ。メルセデスたちとこれから一緒に冒険できると思うと、とても嬉しい。

アリシアさんたちにも同じ気持ちを味わってもらえるように、頑張ったいこう。

「ユーリさん、今までありがとうございました！ これから末永くよ

ろしくお願いするっすからね！」

## 裏　メルセデス

ある夜、アクアはメルセデスたちの宿に侵入していた。メルセデスたちを支配するためである。

きっかけはメルセデスの態度にあった。

メルセデスは適当な発言をする癖がある。

その中で、ユーリやユーリの周りの人たちにユーリが変な性癖を持っているという旨の発言をしているという事をアクアは知っていた。

その時点では、単なるいたずらの類だろうと見逃していたアクアだった。

だが、ある日、アクアが支配しているユーリと特に関係のない人間に対してもメルセデスが同じような内容を言っていることで、アクアの気は変わってしまった。

メルセデスにとって、ユーリに対してだけ余計なことを言う事は、ユーリに対しての信頼の証であり、同時に甘えの発露でもあった。

スライム使いという事で誰からも軽んじられていたメルセデス。

そんな彼女にとって、王都で見たユーリの姿は憧れるには十分だった。

スライム使いでもあそこまで強くなれる。その思いを胸にユーリに会うためにカーレルの街まで出向くほどだ。

そしてユーリと出会ったメルセデスだったが、ユーリの自分に対する態度で、ユーリの事は単なる憧れではなくなつた。

スライム使いとして弱い自分を見せても自分の面倒を見てくれて、その上全力で期待をしてくれて。

ユーリはずっとメルセデスに本気で優しくしようとしていた。その結果として、メルセデスはユーリだけは何があっても信頼できると考えるようになっていた。

ユーリに対して失礼な発言をするのも、メルセデスはユーリならばそれを許してくれると信じていたから。

それを許される中で、ユーリに対する時にするような発言を、ユー



リ以外の人物の前でも行おうようになっていた。

もしそのことに気が付かれたとしても、ユーリならば笑って見逃してくれる。メルセデスはそう信じていた。

実際にユーリがそれに気が付いたところで、ユーリは許す判断をしていただろう。

だが、アクアはそれを看過できなかった。ユーリに対する悪評が広まってしまう事を懸念したアクアは、メルセデスたちを取り込んで、ユーリにとって都合の悪い発言を出来ないようにすると決めた。

夜にメルセデスたちを支配することに決めたのは、アクアのメルセデスたちに対する情からの判断だった。

せめて、メルセデスたちが何も知らないまま苦しむこともなく絶望することもなくいられる様に。

アクアはメルセデスたちを裏切ると決めた後でも、メルセデスたちを出来るだけ安らかなままにしたかった。

そのために、アクアはメルセデスたちが眠っている間、当人たちが気が付かないうちにすべて終わらせると決めた。

「むにゃ……ユーリさん……」

アクアは眠るメルセデスたちを見ながら、メルセデスたちとのこれまでを思い返していた。

自分とユーリと同じスライムとスライム使い。

ユーリが自分の技術をメルセデスに教えるのと同様に、アクアはメーテルに自分の技術を教えていた。

その時間はユーリとの共同作業のような感覚で楽しかったし、メルセデスたちがユーリを慕っている姿を見るのも嫌いではなかった。

ユーリとも自分ともいい関係を築けていたはずだったのに。アクアはこれからメルセデスたちと一緒に居られないことを寂しく感じた。

最後の瞬間までためらいの感情を持ったまま、アクアはメルセデスたちの支配に動いた。

うっかり目覚めさせてしまわないように細心の注意を払いながら、メルセデスたちの体内へと侵入し、彼女たちの体の制御を奪った。

メルセデスたちはアクアの思惑通り、何も気が付かないままアクアの制御下に置かれることになった。

アクアが目覚めさせようとしれない限り、メルセデスたちの意識は失われたままになる。

結局メルセデスたちを支配することになってしまった。アクアは少しばかりの苦しさを覚えた。

メルセデスたちを見逃した方が良かっただろうか。でも、それでユーリに良くない事が起こってしまったら。

アクアはユーリが一番大切で、だからユーリの未来の不安は消しておきたかった。それがアクアにとつて最も優先すべきことだった。

それでも、メルセデスたちと過ごす未来を失ってしまった事は寂しかった。アクアは自分に芽生えた感情の事を邪魔に感じながらも、捨てたくはないと思った。

この感情を持ってしまった事はつらいけれど、ユーリを大切に思う気持ちとも、ユーリと一緒に居られて嬉しい気持ちとも、根っこは同じはずだ。

自分がユーリを大切に思えないようになる事は絶対に避けたいアクアだったから、今感じている苦しみから逃げないことに決めた。

それから、ユーリがメルセデスたちをオーバースカイに加入させるための試験を行うことになった。

アクアがメルセデスたちを支配して、メルセデスたちを強化していたからこそこんなに早く実力が上がった。

本当はメルセデスたちに自力でここまで来てもらいたかったけれど、メルセデスたちを乗っ取ってしまった以上、その状況を最大限に利用するとアクアは決めていた。

ユーリはメルセデスたちをオーバースカイの仲間にする事を心から望んでいる。

だから、アクアは少しでも早くその願いを叶えてあげたかった。

これからメーテルに教える予定だった技を使えるようにするほかに、メーテル自身の体を強化したり、メルセデスの契約技を強化したりした。

もし仮にメルセデスたちに体を返す未来があったならば、この力はそのまま使えるようになっていた。

ユーリに嫌われないままユーリの周りの人間たちの支配を解除することをアクアはまだ諦めていなかった。

だから、皆に体を返した時に皆が失われた時を取り戻せるように体を調整していた。

ユーリにとって待ちわびた瞬間のメルセデスたちの試験だが、メルセデスたちも同じように待ちわびていたことをアクアはよく知っていた。

ユーリはメルセデスたちが大好きで、メルセデスたちもユーリの事が大好きなのに、何故かメルセデスはユーリを傷つける可能性があることをした。

ユーリを大好きだという気持ちを共有できる相手だったら嬉しかったのに、どうしても周りの人たちの事を理解できない。

どうしてユーリの周りにいる多くの人はユーリを傷つけようとしてしまうのだろう。ユーリを大好きだという事はアクアにも伝わっているのに。

ユーリさえ傷つけようとしなければ、ずっと一緒に居たい相手ですらあった。

アクアの一番は今も昔も変わらずユーリだが、他の人たちだって好きになれた。

それなのに、その人たちがユーリを傷つけようとするから、アクアは別れの道を選んでしまう。

アクアにとっての理想は、ユーリとの2人だけの世界ではない。ユーリとユーリにとって大切な人たちとアクアと一緒に居る事こそが理想だった。

そんな未来はもう訪れることはないけれど、せめて今残っている人たちだけでも一緒に居られたら。

アクアはこれ以上ユーリを傷つけようとするユーリの仲間が現れないことを心から願った。

あと残っているのは、アリシアとレティ、オリヴィエとその近衛。

結局皆を支配することになる未来をアクアは何とかして避けたかった。

そのためには、きつとユーリの事をもっと好きになってもらう必要がある。だってユーリが何より大切な自分はユーリを傷つけようとはしないから。

アクアは人間を理解できないと自覚しても、人間に自分の考えを当てはめることを止めなかった。

アクアが考え事をしている中でも、メルセデスたちの試験は進んでいく。

ユーリが人型モンスターの相手をすることを想定して試験を組み立てている事がアクアには簡単に分かった。

だから、自分が操作するメルセデスたちには、その意図をしつかり理解した立ち回りをさせようとしていた。

まず第一にユーリが不意打ちを仕掛けようとすることは考えるまでもなく分かっていたから、それを回避させることから始まった。

第二の試練としてユーリが用意した水の壁には、メーテルに覚えさせるつもりだった技を使うことに決めた。

ユーリの求めることを分かっているようにメルセデスに発言させて、ユーリを満足させるために動いた。

メルセデスの契約技を最大限に活かして、メーテルに決めさせる。

ユーリが理想としているような試験の攻略だろうから、きつとユーリは満足してくれるはず。

ユーリはメルセデスの成長に感動しているようだった。その姿を見て、全て自分の演出であることが心に棘のように刺さった。

本当なら、きつとメルセデスたち自身でこの光景を作り出す未来があったのに。

その未来ならば、きつと自分だって嬉しかった。メルセデスたちの成長のために力を貸していたのは嘘では無かったから。

そんなことを考えながら、それでもアクアはユーリのためにメルセデスたちを操作し続けた。

メルセデスたちが試験に合格する姿を見れば、ユーリはとても嬉し

いはずだ。それに、ここまで来てしまったのに投げ出せない。アクアは最後の試験へと進んでいった。

第三の試練でユーリが求めている事は、人型モンスターの狡猾さへの対処。

それが分かっていたアクアは、段階を踏んでユーリの仕掛けた罠を罠だと認識していくメルセデスたちを演じた。

怪しい水たまりだという違和感から、ユーリの行動の意図をつかんで危険な仕掛けだと察していく。

その姿を見ているユーリはとても満足気だった。メルセデスたちの実力を認めているのだろう。

全ての試練を突破したメルセデスたちにユーリが合格を言い渡す瞬間には、ユーリは最大限の喜びを示していた。

ユーリが喜んでくれることはとても嬉しい。それでも、アクアが望んでいた理想の展開では無かった。

本物のメルセデスたちが同じ光景を作っていたならば、ユーリだってもっと嬉しかったはずだ。

自分が不安を我慢していればその景色が作れたのかな。アクアは自分の感情よりユーリの幸せを優先できていないのではと疑い始めた。

### 73話 オリヴィエと

ぼくたちが依頼のためにまず組合へ向かうと、そこにはオリヴィエ様がいた。

サーシャさんが申し訳なさそうな顔で横に居たので、どういう状況か分かってしまった。

つまり、オリヴィエ様が急にやってきたので、その予定に合わせて今日ぼくは行動しないといけないんだろうな。

「申し訳ありませんわ、オーバースカイの皆様。今日はオリヴィエ様がユーリ様をお望みでいらっしやいますので、本日の依頼はまたの機会になりますわ。急なことはありませんが、休日だと思ってくださいまし」

「そういう事だ。今日はユーリを借りていくから、貴様らは下がっていると良い。ユーリよ、着いて来るがいい」

オリヴィエ様の命令に逆らう訳にはいけないので、ぼくはみんなに頭を下げてオリヴィエ様に着いていく。

みんなはあきれたような顔をしていたが、仕方ないとあきらめられてたようだ。

そのままオリヴィエ様に着いていくと、やけに大きくてきれいな屋敷があった。こんな場所にそんなものが有るだなんて知らなかったけど、いつの間にかできたんだ。

オリヴィエ様のために準備されたものだろうか。そんな気がしてきた。オリヴィエ様は自分の望みの為なら何でも命令する人だろうし。

それこそ、周りの人間を馬車馬のごとく使っていてもおかしくはないと思う。

それは考えても仕方のない事か。それよりも、今日は何の用事でオリヴィエ様が来たのかの方が大事だ。

屋敷の中に入っていくと、執事のようなイメージの人に部屋まで案内された。オリヴィエ様と同じ部屋に2人で入ることになってしまい、かなり緊張する。

それなりにこの屋敷には人がいる様子なのに、どうして2人きりになつてしまふんだろう。

いや、知らない人と一緒に居るよりオリヴィエ様と2人きりの方が良いか。

オリヴィエ様に失礼を働いたみたいなきことを言われたら面倒だ。オリヴィエ様は絶対に怒らせたら駄目な人だけど、案外沸点は高いと思う。

それよりも、些細な礼儀を気にするような相手が周りにいる方が厄介かな。それに、知らない人が一緒に居る時間はいまだに慣れない。オリヴィエ様と一緒に居る分にはある程度は落ち着いていられるから、こつちの方が良いはずだ。

部屋に入つてすぐに長めのソファのようなところに座つたオリヴィエ様に手招きされる。

この人は王族という割には気さくというか、平民を近くに置けないみたいな態度じゃないよね。

平気でぼくの隣に座つたりするし、手を繋いだこともあつたはずだ。

ぼくもオリヴィエ様の隣に座ると、すぐにオリヴィエ様は話し始める。

「貴様はイーリスに勝つたそうだな。リディから聞かされたぞ。なんでも、新しい力を手に入れたそうではないか。貴様はつくづく面白いな」

まあ、ミア強化はかなり珍しい類の力らしいし、強いスライム使いが珍しいからぼくをモノにしようとしている人が面白く思うのは当然か。

それにしても、更にオリヴィエ様に面白く思われてしまうと、ぼくは逃げ出せなくなつてしまわないか？

それは今更どうにかできることでは無いか。機嫌を損ねるよりましだと思つておこう。

「ありがとうございます。手に入れたくて手に入れた力では無いんですけど、この力をくれた人を忘れないためにもしつかり生かそうと

思っています」

「貴様が貴様の事を大切に思っている存在が犠牲になる事が嫌だというのはよく分かるさ。貴様の力は誰かから大切に思われていなければ手に入れられぬのだからな。だが、せっかく面白いものなのだから、いずれ余の前で存分にその力を発揮するのだぞ」

誰からもぼくがこの力を望んで得たわけでは無いことは分かると言われるな。そんなに分かりやすいと、戦闘でぼくの打つ手を読まれたりしないよね？

親しい人に理解されるというのは嬉しいけれど、それがみんなを守る邪魔になってはいけないからね。

それは今考えても仕方ないか。オリヴィエ様との会話を続けよう。

「結構強い力なので、見せる機会を用意するのはなかなか難しいですけど、オリヴィエ様を楽しませられるように頑張りますね」

「そのような機会など余ならいつでも準備できる。余を失望させないように、せいぜい力を磨いておけよ」

オリヴィエ様なら確かに簡単そうだ。とはいえ、いつか分からない期会のために準備するのってなかなかしんどいからな。

気にしすぎても仕方ないか。みんなを守るように強くなって、それでオリヴィエ様を楽しませればいい。

「そうします。それで、今日はオリヴィエ様は何のためにぼくに会いに来たんですか？」

「くくっ、気になるか？　だが、それを教えてやるつもりはない。必死に考えてみることだな」

全くヒントもないような状態でそれを考えないといけないの？

これまでの会話に手掛かりはあったかな。分からなかったら何をされてしまうんだろうか。

さすがにもうぼくが殺されるとかぼくの周りが傷つくとかは考えていないけれど、まだとんでもなく大変なことをさせられる気はする。

オリヴィエ様はとっても意地悪だ。それに何度も何度も困らされているのに、嫌だと思うどころかむしろ楽しいとすら思っているぼく



が  
いる。

「ぼくも本当に重症だ。オリヴィエ様に振り回されている時間が好きになってしまったんだから。」

「ぼくの新しい力を見に来たのなら別の場所に連れていかれますよね。それに、この屋敷に2人きりというのも気になります。リディさんやイーリスを連れてきていない事も」

「思考のつかかりとしては悪くないのではないか？ それで、リディとイーリスとの時間はどうだったのだ？」

「ほとんどイーリスと戦っていただけだった気がするけど、リディさんとも少し距離を縮められているとも思う。」

「ぼくがオリヴィエ様と関わるのならもつと出会う機会はあるだろうけど、それを楽しみに思う位には2人の事が好きになっている。」

「楽しかったですよ。リディさんともイーリスとも多少は親しくなれたんじゃないかと」

「そうだろうな。リディとイーリスも貴様のことを気に入っているようだった。余の言った通り、余のもの同士で親交を深められているようだな」

「もうオリヴィエ様の物になったような物言いだな。オリヴィエ様らしいと思ってしまうけど。」

「オリヴィエ様の言うことが本当なら、リディさんとイーリスと親しくなることには成功しているのかな。だとすると嬉しい。」

「そうだとすると嬉しいですね。でも、ぼくはまだオリヴィエ様の物じゃないんですけど」

「くくっ、まだ、な。よく分かっているではないか、ユーリよ。貴様はそう遠くないうちに余の物になる運命なのだ。そろそろ観念するかどうかだな」

「何でぼくはまだなんて言っちゃうんだよ。いや、そうか。オリヴィエ様の物になること自体はもう嫌では無いんだよな。仲間と離れ離れになることが嫌なだけで。」

「もうぼくはオリヴィエ様の事が相当好きになってしまっている。仮にオリヴィエ様の物になったところで、飽きられて終わりがもしれ」

ないけど。

オリヴィエ様は楽しいことに食欲に見えるけど、実際飽きたことに對してどんな反応をするのだろうか。

オリヴィエ様の物になって捨てられたぼくがどうなってしまうのか。無事でいられるのならいいのかな？

それでもないか。想像しただけでもとても悲しい。ほんと駄目だな。ぼくはぼくが思っていた以上にこの人の事を好きになっているかもしれない。

でも仕方ないよね。この人は尊大なだけに見えて、茶目っ気のようなものもあるし、気を使ってくれている瞬間もある。

それに何より、楽しそうな姿が魅力的なのだ。顔を大きく崩してはいないが、はつきりと楽しんでいるように見えてしまって、それが心地いい。

王女様だから演技が上手いだけなのかも知れないけれど、ぼくはこの人が楽しんでる姿が好きだ。

だから、もつと楽しませてあげたいと思ってしまう。この人にみんなより早く出会っていたなら、もうこの人の物になっていたのだろうか。

まあ、その場合にオリヴィエ様に目をつけられたとは思えないけど。みんながいたから強くなれたのだし。

「ぼくはみんなで立派な冒険者になる事を諦めるつもりはありませんから。オリヴィエ様には申し訳ないですけど、オリヴィエ様の物にはなれません」

「くくっ、ならば貴様の周りごと余の物にするのはどうだ？サーシャやミーナ、ステラも面白いし、お前の仲間もなかなか珍しい物がそろっているからな」

ついにそれを言われてしまったか。やっぱり、ぼくが周りの人と一緒に居たいから冒険者をしている事は気づかれているな。

本当に魅力的なんだよな。オリヴィエ様の物になること自体は。でも、みんなの意思を確認もできないまま返事なんてできるわけがない。

今のところはそのあたりで返事しておこうかな。

「それをぼくが勝手に決めるわけにはいかないので。少なくとも今はお断りします」

「そうか。ならば、お前の周りに働きかけるのも面白いかもしれないな。今すぐにとはいかんが、検討はしておくか」

今日みんなに会いに行くんじゃないやなくて良かった。急に決まっちゃったら心の準備ができないからね。

たぶん、カタリナあたりは反対するような気がするけど、オリヴィエ様の機嫌を損ねないような言い回しをして貰わないと。

オリヴィエ様の怒った瞬間は見たことがないとはいえ、この人は絶対に怒らせてはいけないだろうと感じる。

そういう事を抜きにしても、この人が怒る姿を見たいわけでは無いから、オリヴィエ様が機嫌を損ねる事態がない事を祈ろう。

この人はやっぱり上機嫌な姿の方が魅力的だからね。

「それで、オリヴィエ様は結局何のために来たんですか？ ぼくの考えだと、リデイさんとイーリスに聞いた話の確認でもしたいのかと」「そうだな……貴様が恋しかったから、というのはどうだ……？」

オリヴィエ様は瞳を潤ませながらこちらを見てくる。そのままぼくに触れそうな位置まで顔を寄せてきた。

本当にこの人はずるい。オリヴィエ様がからかっている事くらいぼくにもわかるけど、ドキドキするし、オリヴィエ様の言葉は嬉しいと感じてしまうし、とても困ってしまう。

「か、からかわないで下さい。オリヴィエ様がいくら強いといっても、襲い掛かる人もいるかもしれませんよ」

「くくっ、貴様にそんな度胸があるはずがあるまい。だが、貴様の反応は楽しませてもらった。次に余が来る瞬間を待ちわびているといい。今日はこの辺りにしておこうか、ユーリよ」

そう言ってオリヴィエ様はぼくの手を引き、組合へと戻ってから去って行く。

オリヴィエ様の言葉通り、次にオリヴィエ様が来る時が待ち遠しいと思ってしまう。ぼくは本当にオリヴィエ様の物になってしまう

かもしれない。  
だけど、それも悪くない未来だと考えてしまうな。どうしたものか。

## 74話 喜び

ぼくは新しくなったオーバースカイでモンスターの討伐へと向かっていった。

メルセデスたちとは同じ家で済むことになったので、こういう時にもすぐに用意する事ができた。

今回は結構遠出をしているんだけど、本音としてはマナナの森で特にメルセデスたちの動きをもう少し慣らしたかった。

まあ、一刻を争う事態らしいのでそうも言っていられないのだけだ。

モンスターが異常発生していて、現地の人材で倒すことはまず無理だろうとの話だ。

サーシャさんによると、ぼくたちならば大丈夫らしいけど正直不安だ。

その土地の人なんてどうなっても良いだなんて口には出来ないけど、オーバースカイの仲間には危険が迫るなら見捨てるかもしれない。

無事に解決できるのならそれが1番だけど、見知らぬ人と仲間の安全なら、ぼくは仲間を選ぶ。

まあ、量が問題なだけでそこまで強いモンスターは確認できていないのは幸いかな。

これで人型モンスターがいるとかなら、さすがに断っていた。ちゃんと連携できるか怪しい状況で挑んでいい相手じゃないからね。

アリシアさんたちは別の仕事があるらしい。アリシアさん達がいてくれるなら安心できたんだけどな。

モンスターの出たという草原に向かうと、実際に弱いモンスターばかりだった。それでも、数は百よりずっと多いように見える。千はないと思うけど。

この地の人間では駄目だというのは手数が必要ないからだろうか。何でもいいのか。ぼくたちだけでも倒せる相手に感じるから、余計な足手まといがついて来ないのは助かる。

サーシャさんが気を使ってくれたのか、ぼくたちだけで動くことに

なっているのだ。

「これくらいなら、あたし達でも問題なく処理できそうね」

カタリナもぼくと同じ意見みたいだ。ある程度モンスターの数を減らしたら、新しい動きを試してもいいかもね。

いや、油断は禁物か。イレギュラーの起きない状況で試す方が良いに決まっている。やめておこうか。

「みんな、予定通りにいこうか」

開けた場所にモンスターが集まるだろうことは事前に得た情報に有ったので、作戦はすでに考えていた。

「あたいとユーリさんの共同作業っすね！ 目いっぱい楽しむっすよ！」

ぼくとメルセデスがお互いの契約技で壁を作って敵の行動を制限する。敵の左右にこちらを頂点とした三角形の辺のように壁を用意した。

メルセデスが3割でぼくが残りの7割の壁を用意している。

メルセデスと出会ったときには今の十分の一すら用意できなかっただろう。

それを考えるとメルセデスの成長ぶりがよく分かって、戦闘中にもかかわらず笑ってしまいそうになった。

メルセデスが単なる弱者だなんて、もう誰も言えないはずだ。スライム使いだから弱いなんてこと、メルセデスをみたら絶対に言えないよ。

メルセデスは散々馬鹿にされてきたみたいだけど、その人たちを見返せる位にはなってくれたはず。

メルセデスたちとの出会いのきっかけを作ってくれたあの大会にはとても感謝している。ミーナやヴァネア、オリヴィエ様にノーラとまで出会えたんだから。

ぼくたちが壁を用意したことで敵はぼくたちの正面から来ることしかできなくなった。いくら数が多くても、囲まれないようにできるなら対処は楽なものだ。

前にフィーナに助けられた時には既に囲まれていたからできな

かったけど、今回は事前に準備できているのだから前と同じ展開になど絶対にさせない。

「あたしの新しい力を見せてあげる。フィーナもいくわよ！」  
「任せてください……ここで敵を減らします」

カタリナは契約技をいくつも周りに置いた矢を放つ。1本の矢を放つだけで、今のカタリナにとっては数十本の矢を放つこととほとんど同じ効果を得る事ができる。

その上、今は射線上に味方がいなくてカタリナは味方への誤射を気にしなくていいので弓を連射できている。

さらにフィーナが衝撃を放ってカタリナとは別方向に攻撃する。フィーナの衝撃はもともと多数の相手に適していたけど、訓練によってさらに範囲を広げていた。

カタリナはノーラと契約したことで別人になったかのように強くなった。

ほくもアクア水を手に入れたおかげで強くなったけど、本当に契約技というのはすごい力だ。

カタリナがこの力を手に入れてくれたおかげで、強いモンスターと戦うとしてもカタリナを戦力に数えられる。

そのおかげで、カタリナと離れて任務を受けるという事は考えなくて良さそうで、とても嬉しい。

はつきり言っていただけの弓では対処できない敵と戦う機会はきつと増えるだろうから、カタリナを無事でいさせるために置いていく可能性はあったからね。

その時はきつと苦渋の決断だっただろうから、カタリナが強くなったくれた事でその未来を回避できたことが喜ばしいのだ。

そしてフィーナもとても頼りになる。もともと強い力を持っていたフィーナがすっかり訓練をしているおかげでさらに強くなったからね。

フィーナが力を使うことに前向きになっている事がよく分かるのも気分が良い。

自分の力を嫌っていたフィーナはもういないのだろうと思える。

フィーナにとってもぼくと出会えたことが良いきっかけになると感じられるのが嬉しかった。

2人の活躍でモンスターはどんどん倒れていく。それでもある程度のモンスターはこちらに向かってくる。

さすがに数が多いから当然ではあるけれど、その状況にも準備はしている。

「ユーリさんのもとへ辿り着けはしませんよ。わたしがいるんですからっ」

「うちを忘れてもらっては困るぞ。ご主人の前でしっかりと活躍しないとな」

ユーリヤもノーラもとても素早い動きでこちらへと向かってくる。モンスターを始末していく。

ユーリヤは手に持った短剣や靴に仕込まれた針、鉄でできた糸などを利用して流れるように敵を倒していく。

敵を倒したときには既に次の敵に対してどう動くか決まっているように、とても滑らかな動きをしていて見惚れそうなくらいだ。

ノーラはユーリヤとはだいぶ感じが違って、単純なスピードと強い力で敵の頭などを吹き飛ばしていく。

ぼくには出来ないだろう姿勢でも平気で攻撃していて、体の柔らかさとしなやかさを感じる。

それでも武術の動きというよりは野生生物らしい豪快な動きといった雰囲気、まだ成長の余地があるかもしれない。

ユーリヤを最初に助けた時には強い人だなんて全く思わなかったのに、今ではこんなに戦えるようになってるんだもんな。

ユーリヤもカタリナと同じようにぼくたちの戦いについて来られなくなる可能性があったけど、これなら心配しなくてもいいよね。

前にレニア山でユーリヤが死んだと誤解した時のような思いはもうしたくない。

ぼくがユーリヤやみんなを守るために全力を尽くすのは当然だけど、それでもある程度強い方が守りやすいし、ぼくがみんなを守るために動けない状況もあるかもしれない。



それに何より、ぼくだけが誰かを助けられるなんてことは無い。ユーリヤがカタリナを助けるような場面だってあるはずだ。

そのためにも、みんなが強くなって助け合えるようになる事は歓迎すべきことだよね。

それにノーラもとても強くなった。アクアの時も感じていたことではあるけど、やはり進化するとその前とは別の何かとすら感じる。それでも、甘えてくる姿や戦っている時の動きなんかからノーラらしさを感じるから進化の寂しさを忘れられた。

ノーラと話せる今の状況はとても楽しいけど、猫として接する時間だつてとても楽しかった。

昔を恋しいと感じることもあるけど、ノーラの変わらない部分が昔と今を繋いでくれているような気がするんだ。

ノーラが進化してとても強くなったことでチームとしての戦力は上がったし、カタリナも契約技で強くなることができた。

それを素直に喜んでいられるのも、ノーラはやっぱノーラだと感じられるおかげなんだ。

「みんなが活躍するのは嬉しいけど。私たちが暇なのは少し悲しい気もするわ」

「ユーリたちが無事でいられるのならそれでいい。ユーリ、アクアが皆を守ってあげるね」

メーテルとアクアにはみんなを守る役割についてもらっている。ぼくも水刃などを放てるだけの余力を残しているけど、2人がいる

おかげで安心感は段違いだ。

メーテルは初めて出会ったときの頼りない姿とはまるで違ってしっかりみんなを守る強さがある。

あんなに弱かったのにここまで強くなったのだから、メルセデスともども相当努力したのだろう。

うっかり攻撃が当たったら危なかったころの面影をまるで感じないほどに堅い防御を持っている。

メルセデスもそうだけど、今ぼくたちと一緒に冒険出来ている事が嬉しい。

アクアと同じスライム種として見ると、アクアと随分と違う所があつて、モンスターの生体の不思議さを感じたものだ。人間だったらあり得ない位の違いだと思ふよね。

なにせ、人間が体を鍛えてどうにかなる範囲とは全然違う差があつたわけで。

剣を平気で受け止められるアクアに対して、殴ったら普通にダメージを受けていたもんね、メーテルは。

アクアはいつもぼくを守ってくれている。キラータイガーとの戦いから始まって、これまでずっと進化したアクアには支えられてきた。

アクアが守ってくれている相手は傷つかないと信じられるくらい、アクアの防衛は上手くなっている。

初めてキラータイガーと戦ったときにはぼくも危ない瞬間があつたけど、今のアクアならキラータイガーが何体もいても1人くらいなら守ってくれるだろう。

アクアと出会ったきつかけは覚えていないけど、アクアがいてくれたから今のぼくのすべてがある。

アクアとの出会いはぼくにとつて何よりも大切な宝物だ。アクアだつて間違いなくそう思ってくれている。

だから、アクアの事を思うと力が湧いてくるんだ。

「ユーリさん、ほとんどモンスターは居なくなつたつす。後は楽勝つすね！」

「警戒を怠らないようにね。平原とはいえ、ぼくたちが気づいていない敵がいるかもしれないんだから」

メルセデスにはそう言ったけど、それから特に問題が起こることは無くモンスターを討伐できた。

ずっと前のぼくたちなら逃げるしかなかつた相手だと思ふけど、今なら余裕すら感じる。

ぼくはみんなに支えられているし、きつとぼくがみんなを支えることもできている。

冒険者になつてよかつた。はつきりとそう感じられたのは初めて

かもしれない。

## 75話 進歩

ぼくたちはいつものようにカーレルの街で依頼を受けながら過ごしていた。

その中で、人型モンスターと戦う機会があった。幸いにも対処法が分かっているモンスターだったので、メルセデスたちの訓練としてオーバースカイみんなでそのモンスターと戦った。

メルセデスたちは初めての人型モンスターとの戦いでも罨に引つかかったり、モンスターの言葉に惑わされたりする事なく戦えていた。

ぼくのように人型モンスターを倒してしまった事で悩んでいなかった事もあり、安心して次からも一緒に人型モンスターと戦えるだろう。

メルセデスたちの成長が実感できて、ぼくがうつかり泣きそうになった事しか問題はなかった。

ノーラはモンスターと敵対することを何も気にしていない様子だし、オーバースカイはこれからも上手くやっていけそうだと思えた。

それからは特に難しい依頼が来ることは無く、のんびりとまではいかないまでも、それなりに落ち着いて日々を過ごすことができていた。

そんな中でミーナと戦う機会を何度も用意していたのだが、ある日の模擬戦の後にミーナからある提案を受ける。

「ユーリ、僕たちをオーバースカイの一員にしてくれないか？ ヴァネアに相談したけど賛成してくれたから、後はオーバースカイ次第なんだ」

「坊やとミーナが勝負することも良いけど、協力して他のモンスターと戦うってのも悪くないと思ってね。どうかしら？」

ミーナの提案にはびっくりしたけど、ぼくは乗り気だった。ミーナやヴァネアと隣で戦えることはきつと楽しいし、2人とも頼れる戦力であることは間違いない。

みんなが賛成してくれるかどうかだけど、ぼくは大丈夫だと感じて

いた。それでも、相談もせずにはぼくが勝手に決めるわけにはいかないから、いったん持ち帰るか。

「みんなの意見を聞かない事にはちゃんとした返事は出来ないけど、ミーナたちと一緒に冒険が出来たら嬉しいよ」

ミーナとヴァネアは明るい顔になってくれたけど、これがぬか喜びにならないといいな。きつと大丈夫だとは思うけど。

みんなに相談した結果としてミーナたちをオーバースカイに迎え入れることが決まったので、2人にそれを伝えた後、一度依頼を受けてみることに決めた。

ぼくとミーナたちならばきつとうまく連携できると思うけど、他のメンバーとの連携もしっかりしないといけないからね。

まずはいつも使っている闘技場で最低限の動きを確認してから、マナナの森へと向かった。

マナナの森には普段はあまり強いモンスターはいないので、異常がない事を確認しておけばいい練習場所なんだ。

今回確認するのはミーナたちとの連携の確認だけど、大きく分けて2つの確認事項を用意していた。

ノーラやユーリヤとの前衛どうしでの連携と、カタリナやフィーナとの後衛との連携だ。

全員での連携をいきなり試すのは難しいと思うので、まずは小さいところから。順調に進んだら全員での連携も試してみるつもりだ。

メルセデスやぼくみたいな立ち位置だと、個人との連携を考えるよりも全体の足りないところをフォローするのが良いから、しっかりと今回の練習を見ておくつもりだ。

それで動きの癖なんかを確認しておいて、出来るだけ先回りして水刃などの契約技を撃てるようにするつもりだ。

メルセデスは前衛としてはミーナたちと比べれば頼りないけど、契約技の運用はずいぶんうまくなった。

なので、水の膜で上手いこと敵の動きを邪魔してくれるのだ。

ぼくは前衛専門と比べてもそこまで引けを取らない位の実力はあると思うけど、オーバースカイに足りないのは前衛ではないので遊撃

として立ち回るつもりだ。

ユーリヤも遊撃は出来るんだけど、鉄の糸をうまく使おうとすると前衛が少ない方が良いので、今のメンバーなら前衛を任せただ方が良いという判断をした。

まずは前衛どうしの連携を試してみたけど、ミーナもヴァネアも視野が広いので上手く邪魔にならない立ち回りをできていた。

みんなかなり素早いのでいきなりは難しいかと思っていたけど、そうでもなかった。

上手くばらけて多方面の敵に対処したり、流れるような動きで次々に敵に攻撃を当てたりと、初めての実戦とは思えないほどの連携だった。

この中ではノーラが一番速いんだけど、他のみんなもそう変わらぬい速さで動いているのでそれぞれが相手の動きに合わせられていた。

ぼくがミア強化を手に入れた時に連携がうまく出来なかったのは大間違いだ。あの時とはみんななどの速さの差がだいぶ少なくなったから、今ならうまく出来るかも。

まあ、それは今やるべきことじゃない。ミーナたちの連携をしつかりすることが先だ。

「ミーナさんたちはとっても強いんですねっ。安心して背中を任せられますよっ」

「まあ、悪くはないのではないかな？　うちの戦いの参考になるかもしれないな。うちは人間のような戦い方はまだ出来んからな」

後衛とミーナたちとの連携は、カタリナとミーナたちに関してはすでに上手く行った。

ミーナたちはカタリナの射線には絶対に入らないようにしていたので、カタリナはいつでも好きなように弓を撃つことができていた。

問題はファイナの方で、ミーナたちにはファイナの使う衝撃の範囲が分かりにくいので、ファイナがどこを狙っているのかうまく察する事ができていなかった。

ファイナが手を狙った先に向けることで対処していたみたいだ。ミーナたちはファイナの手を見ることでどこを撃つのか察していた。

それではフィーナの強みである衝撃をどこにでも撃てるという事を生かすきれないので、対策を考えてみた。

ただのモンスター相手なら今のままでも十分なんだけど、人型モンスターが相手だと狙いがバレバレだというのは危険だからね。

その対策というのが声で合図する事なんだけど、勿論声でも人型モンスターはどこを狙っているか理解してくる。

それに対処するために、声と腕の両方を使い分ける練習をして貰った。すると、すぐに上手く連携できるようになっていた。

「ミーナさんたちが前衛だと弓が撃ちやすいわね。あんただって慣れているから十分だけど、うかうかしてたら抜かされるんじゃないかしら？」

「わたしはもう少し慣れる必要があるかと……ユーリさんが相手だとやりやすいというのがよく分かりました……」

ミーナとヴァネアもフィーナも信じられない位の成長速度で、ぼくも油断したら置いていかれてしまうと感じた。

もちろん訓練を緩めるつもりはないけど、ちゃんと強くなっていかないとね。

それはさておき、今後のために暗号で指示することを検討してもいいかもしれない。

複雑な暗号なら戦闘中には使えないので、いくつか行動のパターンに相当した単語を作るつもりだ。

それくらいなら出来ると思うんだよね。全力攻撃だとわかりやすいから代わりにエトナって単語にするみたいに。

それだと何のつながりもなく覚えていくかもしれないな。略称くらいの方が良いのだろうか。

今すぐには思いつくことでは無いだろうし、今後のアイデアの1つくらいは認識でいいか。

「どうだい、ユーリ？ 僕も君たちの仲間として十分に活躍できるんじゃないかな」

「アタシだって役に立てるはずよ。ミーナともどもよろしくね」  
もともとミーナたちの実力については心配していなかったけれど、

ここまでうまく連携できるようになるとはね。

まだ空は十分に明るいから、みんなでの連携を試してみるのも良いかもしれない。

でも、ちようどいい敵がいるかが問題だよな。人型モンスターは今の状況では現れないだろうし、モンスターが多いところを探してみるか。

いくつかの候補を回ってみると、いい感じの敵が見つかった。適度に分散しないと倒しにくい程度の数で、うまく連携すればすぐに倒せるだろう。

「あそこにいる敵で練習してみない？ ぼくたちなら1人でも倒すだけならできるだろうけど、素早く倒すならちゃんと連携しないとけないよね」

「僕は賛成だよ。他の人と一緒に戦うのも良いけど、やっぱりユーリと一緒に戦ってみたいんだ」

「そうね。坊やと一緒になのが一番いいわよね。アタシも賛成ね」

「アクアも戦ってみたい。せっかくユーリと一緒に戦える機会なんだから」

「あたしも活躍したいっすよ！ せっかくオーバースカイに入っても、あんまり活躍できないんじゃないっす」

「私も賛成よく。アクアさんと協力することを試してみたいわ」

みんな戦ってみたいのかな。今のところ今日あまり戦っていない人が先に賛成しているし。まあ、弱い敵と戦えるうちに訓練しておきたいから、みんなが乗り気なのはありがたい。

他の人たちも賛成してくれていたので、目の前にいる敵で連携の練習をすることに決めた。

メルセデスと協力して水の壁を作って敵の逃げ場をふさいだ後、まずはファイナとカタリナで攻撃して敵をこちらに誘導する。ついでにある程度敵の数も減らしてくれた。

こちらに向かってきたモンスターをアクアとメーテルが足止めして、そこからあぶれた敵を前衛が一気に片付けていく。

前衛から離れたところにはぐれている敵はぼくが水刃で仕留めて



いき、まとまっている敵はフィーナとカタリナが一掃する。

ある程度敵が減ってしまったえば後は前衛の独壇場で、ノーラは密度が高めの敵を素早く力強く倒し、ミーナとヴァネアは密度が低い敵を流れるように倒す。ユーリヤはどちらにも参加しつつうまく他の味方をサポートしていた。

アクアとメーテルは念のために後衛を守ってもらっていたけど、後衛の方へ向かってくる敵は1体もいなかった。

結局あつという間に敵を倒してしまつて練習としては短い時間だったけど、ある程度の手ごたえはあつた。人型モンスター相手でも十分に通じるくらいの連携だと思う。

万が一人型モンスターが複数現れても、よほどの化け物がない限りはどうかなるだろう。

「うん、ミーナとヴァネアはオーバースカイでもうまくやっついていけそうだね。改めて、よろしくお願いするね」

ミーナもヴァネアも笑顔でうなずいてくれた。オーバースカイのメンバーも増えたけど、みんなでうまくやっついていけると確信できた。

次の日、いつものように組合へ向かうと、慌てた様子のサーシャさんに呼び止められた。

「オーバースカイの皆様、大変ですわ。王都の近くに強大なドラゴンが現れたようですわ。オーバースカイの皆様にも討伐に協力していただきたいのです」

## 76話 死闘

王都に強大なドラゴンが現れたらしい。わざわざ強大とつける位なのだから、普通のドラゴンより強いのだろう。

ドラゴニユートだつてドラゴンより強いけど、そのイーリスがいるのにこちらに協力を要請してくるといふ事は、相当強い事を覚悟した方が良いね。

まあ、王族の近衛がわざわざ戦うほどじゃないと判断された可能性もあるけど。そちらの方が良いけど、希望的観測を今からするべきじゃないか。

アリシアさんたちも王都へ向かうことになったようで、サーシャさんが今状況を説明している。

今回は緊急事態なので転移装置を使つてぼくたちは王都へ行く事になるらしい。

敵のドラゴンはアリシアさんの風刃が通用しないほど硬いらしくて、アリシアさんたちがオリヴィエ様から武器を貰つていなければ戦力にはなれなかったみたいだ。

そのドラゴンはブラックドラゴンと呼ばれる種類らしいが、ぼくは知らない。

でも、相当な上位種らしくて、そこらの人型モンスターでは比較にもならないようだ。

これはイーリスより強い可能性が高いな。かなり気を付けておかないと。

メルセデスたちを置いていこうか少し考えたけど、メルセデスの方を見ると強い目で置いていくなと訴えかけられた気がした。

どうする。どの選択が正解だ。メルセデスたちは戦力として扱えるだけの強さはあるはずだけど、ぼくたちの中で一番弱いことも確かだ。

みんなで無事に帰るためには、しっかり敵の情報を知った方が良い。ぼくはサーシャさんに詳しく聞くことにした。

「ブラックドラゴンの攻撃ってどんなものなんですか？ 厄介な点と

かは分かっていますか？」

「ブレスが一番厄介だと聞きますわ。ただ、ユーリ様であれば防げるとの情報がこちらには来ておりますわ。他に足や翼や尻尾でも攻撃してきますが、そちらはメルセデス様やメーテル様でも耐えられるとのことですよ」

そうなる、メルセデスたちを連れて行った方がみんなのためには良いかもしれない。

いざとなれば逃げるつもりでいようと思ったけど、王都にはオリヴィエ様たちがいる。あの人に危ない目にあってほしくない。

守りたいものが増えるところいう時に厄介だな。1人だけ守りたいだけなら気にしないでいい事が多すぎる。

それでも、大事な人をへらして生きたいなんて思わない。全力で挑むしかないか。

転移装置で王都へ向かうと、オリヴィエ様たちが待っていた。

「ユーリ、よく来た。ドラゴン討伐に余も着いていければ楽であろうが、そうは出来ぬ事情があつてな。リデイとイーリスは貸してやる故、上手く使つてやれ」

「ユーリ殿、今回はよろしくお願い申し上げます。小生の炎を見せる機会がこのような事態とは、ついていないものです」

「ユーリ、よろしくな。オリヴィエ様のためにも全員無事で帰してやるから、安心して戦つていいぜ」

リデイとイーリスと一緒に来てくれるのはありがたい。これで戦力がだいぶ増える。

リデイは固定砲台みたいな物とのことだし、ぼくが上手く守つてあげると良いかもしれない。

イーリスは頑丈とはいえ、ブラックドラゴンの攻撃にどこまで耐えられるのだろうか。ちゃんと様子を見た方が良いかな。さすがにブレスは危ない気がするから、ぼくがしっかりしないと。

それからすぐにブラックドラゴンのいる場所へと向かっていく。ぼくたちが体力を使わなくていいように、兵士が道を切り開いて山を登っていく。

この兵士たちはぼくたちが戦っている間は離れたところで待機しているらしい。帰りの補助にも使えとのことだ。

道中の障害はモンスターくらいのもので、山だというのに木や草が邪魔になることは無かった。

助かるとはいえ、植物が見当たらないのはもしかしてドラゴンのせいなのか？ そんなことができるというのは相当厄介ではないのか。ぼくは警戒を深めていく。

しばらく進んでいくと、視界に大きな黒い物が映った。あれが恐らくブラックドラゴンだろう。

「ユーリ殿、ここからは我々だけで進みます。お前たちはここで待機している」

「はっ！」

ブラックドラゴンに近づいていくと、その巨体に圧倒される。

身長だけでも人間3人分くらいあるんじゃないかな。2足歩行できそうな後ろ足に、鋭い爪の着いた前足。大きな翼に尻尾。

全身が真っ黒でブラックドラゴンという名にふさわしい姿だった。ブラックドラゴンはこちらを見ると、すぐさまブレスを放つてくる。

ぼくはそれに対して全力で氷の壁を張った。何とか防げたが氷のほとんどは溶かされてしまった。すごい火力だ。

連続でブレスを放ってくることに警戒していたけど、すぐにブレスは撃ってこなかった。

その隙に前衛が近づいて攻撃を加えていく。全く効果がないわけでは無いものの、大きなダメージを与えられていない。

尻尾や足に翼、色々な場所で反撃を仕掛けてくるブラックドラゴン。その攻撃はどれも味方には当たっていない。当たっても地面くらいだ。

けど、当たれば危険だとはつきり分かるくらいの衝撃が地面から伝わってきた。これはメルセデスやアクアにメーテルが大事な役割を担うだろう。

「メルセデス、契約技で危なそうな人を守って！ メーテルとアクア

は抑え込める範囲で敵の攻撃を抑えて！ ブレスを撃つて来そうになつたらみんなすぐに逃げて！ ぼくの防御にも限界があるから！」最低限の指示だけ出しながら、ぼくもミア強化で攻撃を仕掛けてみる。鱗に傷をつけることに成功はしたけど、これだと何度攻撃を当てればいいのやら。

鱗の中は柔らかいと仮定しても、鱗を破るまでに同じところを何度も攻撃しないといけない。ブラックドラゴンはぼくたちより遅いとはいえ、ただの人間よりは数段速い。

当たつたらおしまいな攻撃を避けながら続けるには心もとなない戦術だ。

まずは後衛の攻撃がどれだけ通じるか確かめないと。

「カタリナ、フィーナ、リディさん！ 思いつきり攻撃して！ みんなは射線をあけて！ その間はぼくが足止めするから！」

アクア水を凍らせたもので拘束のような形で相手の動きを妨害して、後衛のみんなに攻撃してもらおう。

フィーナの衝撃は相手をのけぞらせているけど、致命傷には程遠いように見える。

カタリナの弓は鱗に軽く突き刺さっている。これなら当て方を考えればとどめにも使えるかもしれない。

リディさんの炎をブラックドラゴンはあまり気にしていない様子だ。リディさんは攻撃担当としては期待できないかもしれない。

そう考えていると、ブラックドラゴンはすぐにブレスを放つてきた。ぼくが防御しようとする、リディさんがブレスに向かって炎を放つ。

「これが小生の炎！ ブラックドラゴンのブレスと言えど、この炎は超えられませんよ！」

その言葉通りにリディさんの炎はブラックドラゴンのブレスを打ち消す。

熱気がこちらへ向かってくるので、急いで氷を出して周囲を冷やす。直接ブレスを防ぐよりぼくの負担が少ないので、リディさんが炎を撃てるうちはブレスを任せたい。

「リデイさん、炎を撃てなくなったらすぐに言ってください！ ぼくが変わりますから！」

「そんな事より今はこの戦いだよなあ！ ドラゴン族同士、どっちの力が強いのか試してやるぜ！」

イーリスがブラックドラゴンに向かって突き進む。そのままブラックドラゴンを何度も殴り、ブラックドラゴンの反撃を受け止める。

ブラックドラゴンもイーリスもすごい力だけど、この攻防ではブラックドラゴンに分があるように見えた。

「イーリス、そのままじゃ勝てないからみんなと協力して！ ノーラ、お願い！」

「わかったぞご主人。イーリスをサポートすればよいのだな」

「仕方ねえ。癪ではあるが不利なのは確かだ。ユーリの言葉に従うとするさ」

ノーラがイーリスのサポートに入ること、ブラックドラゴンはイーリスを相手しようとするタイミングでノーラにうまく邪魔されていた。

ミーナやヴァネア、アリシアさんとレティさん、ユーリヤも加わって攻撃を仕掛けていく。

ノーラとイーリスは攻撃をうまく受け止められているけど、他の人たちに攻撃が当たりそうなきはメルセデスやアクアにメーターが上手く守ってくれていた。

このまま進めば行けるかという希望が芽生えてきたが、そのまましばらく状況は膠着していた。

そんな中、ついにメルセデスが限界を迎えてしまう。

「これ以上は契約技を撃てないっす！ ユーリさん、あたいは下がりますね！」

限界を迎えてすぐに下がってくれたおかげでメルセデスを守らなくて済んだのは助かった。

それでも、防御の人数が減ったことでぼくたちは追い詰められているように感じた。

前衛の動きが追い付かない状況が増えたので、ぼくも前衛に回りながらアクア水でみんなを防御する。

それでもみんなに攻撃が当たりそうな状況が増えてきて、ぼくは必死で後衛に攻撃が向かわないように耐えていた。

「ミーナ、ヴァネア、もう下がって！ 攻撃に対応しきれしていないよ！」

「すまない、ユーリ。後は任せたよ」

「ごめんね、坊や。回復出来たらすぐに戻るからね」

ミーナとヴァネアが下がった事でぼくたちはさらに追い詰められていた。ぼくは全力でアクア水とミア強化を使っていたが、対応がだんだん後手へと回っていくことになる。

さらにぼくたちを追い詰めるように、リデイさんとイーリスも限界を迎えたようだ。

「ユーリ殿、これ以上炎を撃つことはできません。すみませんがいったん下がります！」

「リデイだけじゃ逃げられねえだろ。俺も下がるぞ。悪いな、ユーリ」  
「アクア、メーテル、カタリナとフィーナを守って！ こっちはぼくたちで何とかするから！」

前衛の数が明らかに減ったので、ぼくだけでもブラックドラゴンの近接攻撃から前衛を守れると判断して後衛を守ってもらう。

そうしながら前衛でブラックドラゴンを足止めしつつ後衛に攻撃してもらっていたのだが、更にメンバーが減っていく。

「これ以上は力を発揮できません……すみませんがわたしは戻りますね……」

「うちもそろそろ限界かもしれない。ユーリヤも、回復に向かうぞ」

「ユーリさん、すぐに戻ってきますから頑張ってくださいいっ」

「私は撤退を支援するわね。ユーリちゃん、ちよつとだけ頑張ってください」

最後に残ったのはぼくとアリシアさんにレティさん、カタリナとアクアだけだ。

ぼくはまだまだ動ける感じがしていたけど、アリシアさんたちの動

きが鈍くなっている。

「アリシアさんもレティさんも下がって！ ぼくだけならなんとかできるので！」

「そんな訳にはいかないよ！ ユーリ君こそ逃げるんだ！」

「わたしたちなら逃げるのは簡単だから、心配しなくていいよ！」

そうアリシアさんたちは言うけど、ここをアリシアさんたちに任せられるほど2人の状態は良くない。

仕方ないのでそのまま戦っていると、ブラックドラゴンはアリシアさんたちの方へブレスを放とうとする。

アリシアさんたちは範囲から逃げきれていないので、ぼくは全力でアクア水の壁を張った。

そのままアクア水は蒸発するけど、アリシアさんたちのもとへ熱気が向かう前に全力で凍らせる。

「アリシアさんたちはもう逃げて！ 勝ち筋は見えましたから大丈夫です！」

「……仕方ないね。私たちの方が足手まといになっている。レティ、行くよ」

「ユーリ君、絶対に無事に帰ってきてね、約束だよ」

アリシアさんたちはそのまま下がっていく。ぼくが勝つ手段を思い浮かべたのは本当の事で、それはブラックドラゴンの体温を下げる事だった。

前衛がいるとその人たちを凍えさせないように気を付けないといけないけど、ぼくだけならアクア水を飲むことで対策ができた。

アクア水の温度を固定することで、ぼくの体温が下がり切らないようにする事ができるのだ。

アクア水の氷を大量に発生させて、無理矢理蒸発させてブラックドラゴンの体温を奪う。

ブラックドラゴンの動きはどんどん鈍くなっていくけど、ぼくではとどめを刺しきれないと考えていた。

でも、カタリナがいる。あの弓ならば目から脳天を貫けるはずだ。ぼくは動きが鈍くなったブラックドラゴンを氷で拘束する。ぼく



が何も言わなくてもカタリナは弓を撃ってくれた。

「これでとどめよ！ あたしの弓、しつかり味わっていきなさい！」  
そして、ブラックドラゴンの目を弓が貫通し、ブラックドラゴンはしばらくもがいた後に動かなくなった。

何とか勝てた。みんなの無事を確認しないと。

アクアとカタリナと一緒に後方へ向かうと、みんなが待っていてくれた。  
いた。

「ユーリ殿、まさか小生たちが戻る前にブラックドラゴンを倒してしまわれるとは。さすがですね」

「みんな無事みたいで良かった。じゃあ、帰ろうか」

「ユーリの格好いい姿はアクアとカタリナだけが見ていた。うらやましい?」

「うちは羨ましいぞ。だが、最後まで残ったものの役得だと思えば納得だ。ご主人、無事で何よりだ」

それから少し休憩した後、ぼくたちは王都へと戻っていった。本当に大変だった。ブラックドラゴンとはもう戦いたくないな。

## 77話 夢

ぼくたちはブラックドラゴンを倒した褒美をもらえるとのこと、オリヴィエ様に呼び出されていた。

結構多くの人の前に出ないといけないので、とても緊張している。事前に褒美は名誉と金銭のどちらがいいかと使いらしき人に聞かれたので、今のところは名誉だと答えておいた。

詳しく質問されたので答えた内容としては、金銭には現在困っていないので貰っても持てあますだけだという話をした。

オリヴィエ様はそれを聞いてとても面白そうにしていたとリディさんに聞かされた。なんだか怖いんだけど。

呼び出された場所へ向かうとよく知らない人に衣装を整えられて、対応について説明される。

まず初めに跪いておいて、そのままの姿勢でオリヴィエ様の言葉に決められた返事をして、最後に首に勲章をかけられるので、その後には頭をあげるとのことだ。

会場へと向かい言われた通りに跪いていると、オリヴィエ様がやってきた。

そのまま待っているとオリヴィエ様が話し出す。気配的には玉座っぽい席の前に居るのかな。

「王都の歴史の中でも数えるほどしかない危機であろうブラックドラゴンの討伐、大儀であった。冒険者チーム、オーバースカイにアリスアとレティよ。此度はその褒美として勲章を授けよう。ユーリには以前に大会で優勝した時にも勲章を与えた故、白金勲章を授けよう」  
白金勲章ってのは普通の勲章と何が違うの？ ぼくには誰も説明してくれなかったので、全然分からない。

でも、周囲がどよめいているので、結構重要なものなんだと思う。まあ、勲章2つ目の代わりにくれるものなんだから、普通の勲章よりはいい物なんだろうけど。

そのままオリヴィエ様は言葉を続けていく。

「ユーリはブラックドラゴン討伐の功労者である。その功績を余が称

えよう」

「ありがたき幸せ。末代まで誇りとなるでしょう」

そのままりディさんによって順番にみんな勲章をかけられていくが、ぼくのもとへはオリヴィエ様がやってきた。

そのままぼくの首へと勲章をかけると、耳元でささやいてくる。

「リディとイーリスでも苦戦する相手を倒す姿、余も見てみたかったものだ。貴様には期待しているぞ。そこらの近衛よりよほどな。さて、頭をあげてもよい」

オリヴィエ様は頭をあげるタイミングを覚えてくれたのかな。そのまま頭をあげると笛らしき大きな音が鳴った。

「さあ、下がってよい。貴様たちの活躍は王家も認めるものだ。存分に誇ってよいのだぞ」

そのままぼくたちはその場を後にした。イーリスに案内されて転移装置へと向かい、ぼくたちはカーレルの街へと帰っていった。

カーレルの街ではサーシャさんが出迎えてくれて、ぼくの首にかかっている勲章を見て驚いていた。

ぼくはそれについて質問したのだけれど、サーシャさんも何も教えてくれなかった。

結局この勲章はいったい何なのだろう。いずれ分かるとは思うけど、妙なものじゃないといいな。

それから家に帰って休んだ次の日、アリシアさんたちから驚きの提案を受けた。

「ユーリ君、私たちをオーバースカイの仲間にしてほしいんだ。君たちと一緒になら、とても楽しい冒険ができると思う」

「ユーリ君は本当に強くなったよね。お姉さんは嬉しいけど、少し寂しいような気もするよ。これから一緒に冒険をして、楽しんでいこうね」

「もちろんです。アリシアさんたちなら歓迎しますよ。でも、いいんですか？ アリシアさんがリーダーになる道もあると思いますけど」

ブラックドラゴンとの戦いで一番活躍したのはぼくだったと思うけど、それはアリシアさんとの相性の悪さが要素として大きいはず。

それに、仮にぼくがアリシアさんより強いとしても、アリシアさんの経験は頼りになるから、きつとリーダーとしてうまくやっていけると思う。

「オーバースカイは君がリーダーだから上手くまとまっているんだと思うよ。それに、私は人に指示をすることが得意では無いから。ユーリ君の手腕を見させてもらおうかな」

「ずっとアリシアとわたしは2人でやってきたからね。みんなのリーダーをする経験なんて無かったから、ユーリ君の方が慣れていると思うよ」

「わかりました。いつかの約束を果たせそうで、すっごく嬉しいです」  
アリシアさんたちはぼくの言葉を受けて柔らかく微笑んでくれた。

ぼくだけが楽しみにしていたわけじゃ無いとは思っていたけど、アリシアさんたちもぼくと一緒に冒険することを楽しみにしていたくられた事がよく分かる。

「ユーリ君の師匠になれて良かったよ。でも、これからは師匠では無くて対等な仲間だ。よろしくね」

「そっか。オーバースカイの仲間になるなら、そうなるよね。ユーリ君、一緒に頑張っていこうね」

「はいっ！」

それからのオーバースカイは大変だった。アリシアさんたちが難しい依頼ばかり勧めてきて、何度か命の危機もあったくらいだ。

それでも、アリシアさんたちが充実しているというのはよく分かったので、あまり文句も言えないでいた。

ぼくたちの誰かが危ない時にはアリシアさん達がしつかりフォローを入れてくれていたというのもあった。

それでも、ぼくはとてもクタクタになっていて、そろそろ限界を迎えそうになっていた。

そんな日々の中、アリシアさんたちと一緒に休む日がやってきた。アリシアさんたちは全く休もうとしていなかったのに、心変わりでもしたのでだろうか。

正直なところ、アリシアさんたちに合わせて活動するのはとても大

変だったのでありがたいけど。

「ユーリ君、今日はゆっくり休むことにしようか。私たちの家に来るというのはどうかな?」

「わたしもそれが良いと思うな。ユーリ君、一緒にだらだらしよっか?」

「わかりました。それでは、お邪魔させてもらいますね」

アリシアさんたちの家に案内されて、3人で部屋の中でくつろいでいた。

レテイさんはぼくの後ろから抱き着いてきていて、結構あたたかい。そのおかげか、随分落ち着いた心地でいられた。

そのままアリシアさんやレテイさんといういろいろお喋りしながら、ゆっくりとした時間を過ごしていた。

「ユーリ君が冒険者を目指そうと思ったきっかけは何だったのかな?」

私はレテイがいたし、強くなるのもすぐだったから天職だと感じたのがきっかけかな」

ぼくが冒険者を目指したきっかけはミストの町に学園があつて、それに通う事だけは出来たからだ。そこではモンスターとの戦い方を中心に教わるので、自然と冒険者を目指していた。

両親はいないから金銭的に余裕があるわけでは無かつたし、他の勉強をするだけの準備はできなかつた。

「ぼくは他に道が思いつかなかつたからです。雇ってもらえるような伝手はないので、自分でどうにかしないとけませんでしたから」

「そうなんだ。つらいことを言わせてしまったかな。ごめんね。カタリナさんは最初から一緒だったのかな?」

「そうですね。カタリナとはずっと一緒に、自然とチームを組むのが当然だと思っていました。今思えば、カタリナはいつでも他の人とチームを組めたんでしようけど」

ぼくは大して強くなかつたし、アクア水を手に入れてやっとまともな戦力になれるくらいだった。

カタリナはそんなぼくによく付き合ってくれたものだ。完全に足手まといだった時期の方が多かつたのにね。

カタリナが幼馴染だったおかげで随分と助けられている。今のぼくがあるのは間違いなくカタリナのおかげだ。

「そういえば、アクア水を手に入れたのは私たちと出会う直前だったんだね。私たちにとってもいいタイミングだったってことになるね」「うんうん。ユーリ君と出会えた事はわたしたちにとつて、とっても大きな幸運だったんだよ」

キラータイガーの一件がきっかけだったんだよね。アリシアさんたちと出会うことになったのは。

本当にあの時アリシアさんたちと出会えて良かった。アクアにもステラさんにも感謝したいな。その2人のおかげで出会えたと言っ  
ていいんだから。

カインが死んでしまった事は残念だったけど、記憶を持ったまま過去に戻ったとしても、カインを助けようとは思わないかもね。

それでアリシアさんたちと出会えなくなってしまう事の方が、カインが死ぬことよりも嫌なことだよ。

自分でもよくない考えだとは思うけど、この出会いが無くなってしまふ事の恐怖にぼくは耐えられないだろう。

「ぼくにとつても大変な幸運ですよ、アリシアさんたちと出会えたことは。これからもずっと一緒に冒険しましょうね」

「そうだね、ユーリ君。ユーリ君には最近大変な思いをさせてしまつたけど、これからはもう少し落ち着けると思う。ごめんね。長年の夢が叶って興奮していたんだ」

アリシアさんの夢は対等な関係の人と冒険する事のはず。ぼくの事を育ててくれた事や、ぼくと一緒に冒険しようとしてくれた事、何よりも今のアリシアさんのセリフが根拠だ。

その考えが間違っていたとしても、アリシアさんの長年の夢が叶ったことはぼくも嬉しい。

アリシアさんが喜んでる姿を見られたのだから、あの大変さに見合うものではあったと思う。出来ればもう勘弁してほしいけど。

「みんな大きなケガはしていないので構いませんけど、アリシアさんはいいつも冷静なイメージだったので驚きましたね」

「いつも冷静ってことは無いと思うよ。私は結構怒りっぽいんだ。ユーリ君に怒っている姿を見せたことはほとんどないけどね」

「そうだね。アリシアはケンカを売ってくる相手に容赦したことってないから。わたしだって怒っていたのに、怒りが冷めるくらいの事はしていたよ」

アリシアさんと出かけている時にアリシアさんを口説いた男に対してはとても怖かったけど、それ以上の事をしていたような口ぶりだ。

ぼくにとってアリシアさんはいつも優しい人だけど、そういう一面もあるのだな。

まあ、ぼくの親しい人を傷つけないでいてくれるのなら、アリシアさんの本性がどんなものでも構わない。

それくらい、アリシアさんとレティさんの事が大好きなんだ。

「意外ですね。ぼくたちはみんなアリシアさんを優しい人だと思っていました。メルセデスは怖いかわさがあると行ってしまいましたけど」

「そういう噂が出てもおかしくないくらいの事はしたかな。もちろん、ユーリ君たちには絶対にそんなことはしないよ」

「そうだね、アリシア。ユーリ君達がどれだけわたしたちの事を救ってくれたか。素直に慕ってくれる人がいるだけであんなに嬉しいなんてね」

優しいアリシアさんたちを好きになるなんて当然の事だと思うけど、アリシアさん達にとってはそうじゃ無かったんだな。

ぼくがアリシアさんたちの救いになっているのなら、こんなに嬉しいことは無い。

これからも、アリシアさんたちと支えあっていけたらいいな。

それからもしばらく雑談をしてから家へと帰った。アクアがいつもより甘えてきて、ノーラは若干呆れている様子だった。

アクアと一緒に居られたからこそ色んな人たちと出会えたんだ。アクア水やアクア自身の力のおかげだ。

ぼくの幸せはアクアがあつての物なんだ。それには甘えてくる姿が可愛いのもあるけどね。アクアは何があつても大切にするぞ。

## 裏 アリシア

アリシアは長い間冒険者として活動していたが、ずっとアリシアと対等な存在は現れなかった。

アリシアを恐れる者、つまらない嫉妬をする者、女だからと軽んじる者。

冒険者としての生活に嫌気が差すほど、レティ以外のアリシアの周りにいるほとんどの人間は、アリシアにとって邪魔でしかなかった。

ユーリたちの面倒をアリシアたちが見るようになったのは、長い付き合いのステラに頼まれたからであって、ユーリたちに期待していたわけでは無かった。

そうしてユーリたちに冒険者としてのいろはを教えていたアリシアたちだったが、まずレティがユーリの素直な姿勢に絆されていた。

アリシアにとってもユーリの姿勢は好ましい物ではあったが、レティほどユーリを大切に思っではいなかった。

それでも、アリシアはユーリたちの事を、これまで自分たちに関わってきた有象無象とは違うと感じていた。

アリシアがユーリに本気で期待することになったきっかけは、人型モンスターを倒してなお、人型の敵を倒した罪悪感に悩んでいた事だった。

キラータイガーをアリシアたちが大勢倒しても心が折れなかった段階で、ユーリは自分を裏切らないのではないかと頭の片隅で考えていた。

だが、アリシア自身の夢である、対等な冒険者の相棒にはなれないだろうとの考えは変わらなかった。

その考えを変えるほどの衝撃をアリシアに与えたのが、人型モンスターと戦っても相手の事を考えるほどの余裕をユーリが持っていたことだ。

人型モンスターと戦った多くの人間は負けて死ぬもので、勝ったとしても辛勝が精いっぱいになる事がほとんどで、そんな人間は人型モ



ンスターに情けをかけるだけの余裕は持てないものだ。

アリシアが人型モンスターとの対話を試みていたことは事実だが、そんな人間は自分だけだと考えるようになるほど、人型モンスターを恐れる冒険者は多かった。

だからこそ、ユーリの悩む姿にアリシアは希望を見た。ユーリならば本当に自分の相棒として一緒に冒険できるのではないか。そう考え始めた。

それからというものの、アリシアにとって毎日が喜びにあふれた日々であった。ユーリの成長を期待しながら待つ時間も楽しいし、ユーリの成長を実感する瞬間もいい。

希望が目の前にあるだけでこんなに嬉しいのだと、アリシアは初めて知ることになった。

ユーリと一緒に冒険出来る瞬間が本当に待ち遠しくて、その時がだんだん近づいているのが目に見えて分かって、アリシアはユーリといえる時間が楽しいと感じていた。

ユーリからアリシアたちへの好意が大きい事は誰がどう見ても明らかであったが、アリシアもレティもユーリと過ごす時間が好きだと感じるようになっていった。

ユーリが王都の大会で優勝したと聞いたアリシアは、ユーリのさらなる成長を伝聞だけでも感じており、それを実感したいと考えていた。

ユーリの出場した大会の詳細をアリシアは知らなかったが、サーシャによると、優勝しただけで勲章を受け取れるほどの事だったので、それほどの活躍をユーリがしたのだと自分の事のように喜んだ。

ユーリがカーレルの街に帰ってきた時には思わず戦いを提案してしまうほど興奮していたが、その戦いの中でさらに気分が上がった。

ユーリは目に見えて成長していたし、自分には敵わないまでも戦いの中で十分に対応できていた。

アリシアはユーリの事をすでに認めていたが、はっきりと弟子だと言いつつユーリが喜ぶだろうと考えて、オーバースカイを弟子だと認めた。

その時のユーリの喜ぶ顔を見て、アリシアはユーリと出会えて良かったと心の底から思えた。

それからの日々で、ユーリはミア強化という新しい力を手に入れたり、オーバースカイに新たな仲間を加えたり、メルセデスたちという弟子を取ったりと慌ただしい時間を送っていた。

ミア強化というユーリの新しい力を見ることで、アリシアにはユーリとともに冒険している未来がはつきりと見えた。

オーバースカイの新しい仲間はユーリをしつかり支えてくれていたから、安心してユーリを冒険に送り出すことができた。

メルセデスたちという弟子を取ったことで、ユーリは自分たちの考えをより理解してくれた。

ユーリとアリシアたちが対等に冒険する瞬間はいずれなんて遠いものでは無く、目の前にあるのだとアリシアは考えていた。

それから、ブラックドラゴンと戦うことになったオーバースカイとアリシアたち。

ブラックドラゴンはアリシアたちにとって厄介な敵で、ユーリがいなければ間違いなく逃げることを選択していただろう。

それでもアリシアたちが逃げ出さなかったのは、アリシアもレティもユーリだけは失いたくないと考えていたからだ。

アリシアは二度と現れないであろう自分と対等に冒険できる存在として、レティは血は繋がっていないが大切な弟のような存在として、ユーリを何があっても死なせないために踏ん張っていた。

だが、ユーリはアリシアたちの想像を超え、ブラックドラゴンを討伐することに成功する。

その際にアリシアたちは足手まといになっていたことを考え、アリシアたちはユーリが自分たちを超えたのかもしれないと素直に思えた。

それがきっかけとなり、アリシアたちはオーバースカイに加入することを望んだ。

オーバースカイの一員としてユーリとともに冒険する日々はこれまで感じたことがないほど楽しくて、アリシアはつい張り切って危険

な冒険を繰り返していた。

ユーリたちが危ない瞬間もあったが、アリシアは全力でユーリたちと戦う喜びのためにもつともつと望んでしまった。

そんな生活をしていたある日、アリシアたちのもとにアクアがやってくる。

ユーリと一緒に居ないアクアがアリシアたちのもとを訪れることは無かったので、疑問に思いながらもアクアを迎え入れる。

「アクア、一体何の用かな？　ここにユーリ君はいないけれど」

「ユーリはアリシアたちをとても慕っていた。だから、本当に残念」

アクアの言葉に不穏さを感じたアリシアたちが動こうとする前に、アクアはアリシアたちを拘束した。

まるで対応できなかつたことに驚きながらも、アリシアはアクアの真意を確かめようとする。

「ユーリ君に実力を隠していたのかい？　それはなぜ……いや、アクアはいったい何をするつもりなんだ……？」

「アリシアたちの体はアクアがもらう。安心して。アリシアたちの夢はアクアが代わりに叶えてあげる」

アクアの言葉を聞いてアクアが何をするか察したアリシアたちは全力で抵抗しようとするが、アクアにはまるで通じない。

自分たちが助からないであろうことは理解していたが、それでもあきらめる事ができずにアクアに言葉を投げかける。

「待ってくれ。ユーリ君はようやく出会えた私の相棒なんだ……せめて、あと少しだけでも……」

「アクア、どうしてこんなことを？　わたしはこれからもユーリ君を見守っていたいよ……」

「アリシアたちはユーリが危ない目にあってもユーリを危険な冒険に連れて行った。だから、こうする」

そのままアクアはアリシアたちの体内に入り込んで、アリシアたちの体を支配する。

そのままアリシアたちの体を調整して、アクアがアリシアの契約技を使えるようにした。

ユーリの前でこの契約技を使う訳にはいかないけれど、せめてアリスアの技を残したいとアクアは考えていた。

アクアの行動によって、仮にアリスアたちの命が失われたとしてもアリスアの契約技はアクアの中に残ることになった。

それによって、アリスアたちを殺したとしても、アリスアが契約技を使っているように装う事は出来る。

それでも、アクアはアリスアたちを殺すことなどまるで考えようとはしなかった。

アリスアたちの事はアクアだって尊敬していて、だからこそアリスアたちと和解できる可能性を残しておきたかった。

そしてアクアがアリスアたちとしてユーリと接する時間が始まった。

アリスアたちの事を慕っているユーリの前でアリスアたちを演じることは少しだけつらかったが、それでもアクアはアリスアたちの支配を解こうとはしなかった。

アリスアたちが話題に出しそうな冒険者の話をしている中でユーリとカタリナの絆を感じたアクアは、カタリナともう一度話したいと感じていた。

どうしてあの時にカタリナを乗っ取るという選択をしてしまったのだろう。あれからずるずると皆を支配してしまっている。きつとほかの道もあるはずだったのに、アクアはその選択をできなかった。

アリスアたちとしてユーリと接していく中で、アリスアたちのユーリへの情をしっかりと認識していったアクアは、だんだん悲しさに襲われていった。

アリスアたちは間違いなくユーリを大切にしてくれていた。アリスアたちがユーリと仲良くする姿は見ていて楽しかった。

アクアはアリスアたちが好きになっていたことを自覚して、でもその好きを思い返すほどに悲しくなっていた。

アリスアたちとの思い出は楽しい物が多かった。なのに今はアリスアたちの事を思い出すと苦しい。

アリスアのユーリと対等な関係で冒険するという夢はユーリに

とつても自分にとつても大切な夢のはずだったのに、今はその夢の話をしていたくない。

アリシアたちの事を考えれば考えるほど悲しくて苦しくて、アクアはユーリに触れていたくなかった。

ユーリの温かさを感じている間だけはきつとこのつらさを忘れられるはずだから。

だからユーリが帰ってきた時に、アクアは全力でユーリに甘えた。ノーラはアクアの選択に納得していない様子だったが、それでもアクアを止めようとはしなかった。

ノーラのその行動がユーリを不幸にしているのだと思える数少ない希望で、アクアはいつかノーラに止められる日がやってくるのが恐ろしかった。

ユーリを不幸にすることは絶対に嫌だ。でも、ユーリを不幸にしない選択が、自分がユーリのもとから離れる事だったら。

アクアはそんな未来が訪れることの無いようにと必死に願っていた。

## 78話 ノーラと

最近の疲れを癒すためにしばらく家で休むことを決めたところ、リデイがこちらに来るとの話があった。

少し先の事だったので、今日は家でゆつくりする。ノーラと遊ぶつもりだ。

まずはノーラと一緒に過ごすことにする。アクアが最近甘えっぱなしだったので、ノーラが少し不満を感じているように見えた。

なので、目いっぱいノーラと遊んで過ごすつもりだ。

「ご主人、一体どんな遊びをしてくれるのだ？　うちはご主人としてかりふれあいたいぞ」

そういう事らしいので、ノーラとふれあえる遊びを考えることにする。

まあ、いつもとあまり変わらない遊びになるかな。しっかりふれあうとなると選択肢は限られてくる。

球遊びはノーラと離れている時間の方が多いし、前にアリシアさんとした柔軟でも試してみるか。

「ノーラ、それなら柔軟はどうか？　結構ふれあえると思うけど」

「良いと思うぞ。ご主人、しっかりうちに触ってくださいよ」

触ることが目的になつちやうと危ないと思うけど、こちらで気を付けておけばいいか。

まずはノーラから柔軟をしてもらって、こちらがサポートしていくことにする。

ノーラを押ししたり引っ張ったりしていたけど、猫型モンスターだけあってノーラの体はとても柔らかい。

いろいろな柔軟でびったり地面に引っ付いていて、ぼくはある種の感動を覚えた。

ぼくも近接戦闘をする関係上ある程度柔らかくしているけど、ノーラほどではない。

「ノーラは本当に柔らかいね。見ていて楽しいくらいだよ」

「ご主人を楽しませられているのなら何よりだ。それよりも、もつと

いろんなところを触ってもいいのだぞ」

「柔軟の最中にそういうことをすると危ないから……次の遊びでしようね」

「仕方ないな。だが、言質は取ったぞ。色々どご主人には触ってもらうからな」

うかつなことを言ってしまったかもしれない。きわどいところには触らなくていいようにノーラを誘導しないと。

次はノーラにぼくの柔軟をサポートしてもらおう。ノーラは体のいろいろなところを押し付けてきたのでちよつとドキドキしたけど、慣れもあってかそこまでひどくはなかった。

注意するべきか悩んだけれど、ぼくがケガをしないように気を付けているのは分かるので、何も言わないことに決めた。

ノーラは何か企んでいるような顔をしていたから警戒していたけど、いつも通りだったので拍子抜けだ。

そんなぼくの考えはノーラの発言で打ち砕かれる。

「ご主人、うちの胸や尻の感触はどうだった？ ご主人好みだったか？」

やっぱりわざと押し付けてきていたんだな。ノーラはスレンダーといった感じの体形だけれど、密着しているとなんだかんだで柔らかさを感じてしまう。

ノーラはこちらをからかっているのか、真剣に問いかけているのか、どっちなんだろう。

ある程度ごまかしながらの回答にするかな。ノーラが本気で聞いてきているのなら、もつと別の顔をしていたと思うし。

「ノーラは全部ぼく好みだよ。だから、ペットとして最高なんだよね」「くっ……ごまかされているのは分かるが、ご主人の言葉を嬉しく感じてしまうぞ。ご主人は魔性の男だな」

ぼくが魔性の男ならば世の中には魔性であふれているんじゃないだろうか。

それはさておき、ノーラは今の回答である程度満足しているみたいだ。なら、このまま遊びを続けるか。

「ノーラはぼくにいっぱい触れてほしいんだよね。だったらノーラの耳と尻尾を触らせてもらえないかな」

実はずつとノーラの耳と尻尾は気になっていたのだ。普通の猫とはかなり違うという事もあるし、単純に感触が気になるのもある。

ノーラの耳も尻尾も良く動いているので、なんだか目が引き寄せられてしまう。

ノーラはぼくの言葉を受けて、なんだか照れ臭そうになる。ちよつと無神経だったかな？

「そこを触られるのは恥ずかしいが、ご主人が望むのならば存分に触っていくといい。優しくしてくれよう？」

ノーラの許可が出たので早速耳から触ってみることにする。ノーラの耳は左右それぞれが2つに分かれたような見た目だけど、どうやって音を聞いているのだろうか。

それを言ったらアクアなんてもっと不思議だよね。あの水の姿でどうやって周囲を認識しているんだろう。

考えて答えが出ることは無いだろうから、ノーラの耳を堪能することにする。

ノーラの耳は暖かさと柔らかさが同居している。たぶんどの角度にも曲げられるけど、そこまでしたらノーラはきつと痛いだろうから、軽くぐにぐにする位にする。

「あつ……ご主人の手がうちの大切なところを蹂躪しているぞ。ご主人、そこまでしたのだから責任を取ってくれよ」

責任ってノーラは何を求めているのだろう。何の対価もなかったとしても、ノーラの願いならばできるだけ叶えるつもりではあるけど。

そのままぼくはノーラの尻尾も触っていく。ノーラの尻尾はふさふさで、こちらもまた暖かい。軽く握ったり緩めたりしながら、尻尾の先から根本まで手を動かしていった。

ノーラの尻尾は二股に分かれているけど、どちらもしつかりと全体を触っていく。ノーラは体をびくびくさせていた。

「ううっ、ご主人にもてあそばれているぞ。うちは所詮ご主人のおも



「ちやにすぎんのだな……」

「ノーラはぼくの大切なペットだよ。ノーラこそ、ぼくの事をおもちゃみたいに思っていない？」

ノーラの声はぼくをからかっているように聞こえたので、ぼくもからかい返してみる。

ノーラはこちらをじつと見た後、にやりとした顔になった。

「気づかれてしまったか。ご主人はうちのおもちゃになる運命だぞ。うちを拾ったときからずっとな」

「悪いペットだね、ノーラは。そんな子にはこうだよ」

ぼくは全力でノーラをくすぐる。ノーラは悶えながらも一切抵抗しようとしな

ちよつと楽しくなつてしまつたけど、ノーラの息が荒くなつたところに手を止める。

ノーラはなぜかうつとりしたような顔でこちらを見ていた。

「うちの主人はペットのしつけが上手いのだな……こんな事をされてしまつては、もうご主人には逆らえん」

どういう事だろう。ノーラはじつはくすぐられるのが好きだったとか？ それでしつけが上手いって言うのもおかしいか。餌やりがうまいって言う方がそれっぽい。

そもそもノーラがぼくに逆らう事なんて今までなかったし、これもノーラの冗談なのだろうか。

なんにせよ、うつとりしたノーラの表情も可愛らしいな。ノーラは大体いつでも可愛いけど、この表情は新鮮味があつていい。

「別にぼくに逆らつてもいいんだよ。それでノーラを嫌いになるわけじゃ無いし。でも、ノーラに嫌われちゃったら悲しいかな……」

ちよつと悲しそうな表情を作ってみる。ノーラは落ち着いた様子でいたが、泣いているふりをする

と慌ててこちらにすり寄ってくる。「うちがご主人を嫌いになるわけが無いぞ。ご主人、顔をあげて……うちをからかったのか!? ご主人はいつの間

にそんな高等技術を覚えただ」

ぼくは声だけで泣いている真似をしていたので、ぼくの顔を見てす

ぐにノーラはぼくが遊んでいることを察してみたんだ。

ノーラの驚いた顔はとても可愛くて、また見てみたくなる。

「人型モンスターの相手をしているうちに自然とね。あいつらは厄介だからね」

人型モンスターの相手はとても大変だ。こちらの指示を聞いて邪魔をしてくるし、罠を仕掛けてきたり騙そうとしてきたりするし、単純な強さ以外に化かしあいの技術も必要になってくる。

こちらがチャンスだと思っている時に苦しそうな顔を試みたり、苦しい時にはつたりを利かせたりというのは人型モンスターを相手するうえでとても大切なことだ。

戦いのための技術がノーラと遊ぶうえでも役立てるといえるのは嬉しい。戦いは疲れるだけで楽しいことは無いと言っているからね。

「うちもその人型モンスターだが、うちの事も厄介だと思っているのか……?」

ノーラは目に涙を浮かべながら問いかけてくる。ぼくは慌ててノーラを落ち着かせようとする。

「そんなわけじゃないでしょ? ノーラはぼくの大切な家族なんだ。厄介だなんて思うわけがないよ」

ぼくの言葉を聞いたノーラはにんまりと笑う。涙も完全に引っ込んでいたので、ぼくがからかい返されただけだと分かった。

ちよつと焦っちゃったよ。でも、ノーラがからかってくるだけで良かった。

ぼくはノーラの悲しい顔なんてできるだけ見たくないし、ノーラにはずつと幸せでいてほしい。

その願いが叶えられるように、これからも頑張っていかなきゃね。

「ノーラも仕返しなんてするようになったんだね。でも、可愛いよ。ノーラのいろんな表情を見られて、今日はいいい日だね」

「ご主人はうちをどれだけ喜ばせれば気が済むのだ。今度こそ責任を取って、うちと添い遂げてもらうからな」

「ノーラとずつと一緒に居ることは前から決まっているよ。それ以上の事は、今は難しいかな」

ぼくはノーラに恋愛感情を抱いているわけでは無いから、ノーラの望みが結婚とかだと困ってしまう。

人とモンスターが結ばれるための障害はとても多い。ぼくにそれを乗り越えるための覚悟があるとは限らないから、安易な気持ちでノーラと結ばれるわけにはいかない。

そんなことをしたら、結局ノーラを傷つけるだけの結果になるだろうからね。

ノーラが大切だからこそ、簡単に良い返事をするわけにはいかないのだ。

「ご主人がずっと一緒に居てくれるならうちは満足だ。これはその証だぞ」

ノーラはぼくに抱き着いてきて、顔中にキスをしてきた。口と口だけは避けてくれているので、ノーラもぼくに気を使ってくれているはず。

そのままノーラはぼくの頬や首を舐めていったあと、ぼくの首筋に吸い付いてくる。少し痛みが走ったけど、ノーラが嬉しそうな顔をしていたので我慢した。

「これはマーキングだぞ。アクア様ともども、うちは絶対にご主人を逃がさない。永遠に一緒に居てもらうから、覚悟を決めることだ」

ぼくが生きている限り、ずっとアクアとノーラと一緒に居る覚悟はできている。これからもよろしくね、ノーラ。

## 79話 リディと

今日はリディさんがやってくる日だ。ぼくと一緒に出かけるらしい。

組合でリディさんを待っていると、随分とオシヤレをしたりリディさんがやってきた。

リディさんは小柄で可愛らしい感じの見た目だけれど、今日は大人っぽさがあつた。

戦っている最中の鋭い雰囲気と違って、今日はとても柔らかい表情をしている。

リディさんの新鮮な姿に少しだけ見とれてしまった。

「ユーリ殿、おはようございます。今日は楽しい日にしましょうね」

「リディさん、今日はよろしくお願いします。目いっぱい楽しんでいこうと思います」

リディさんはぼくの言葉に対してふんわりと微笑んでくれた。リディさんもぼくと出かけることを楽しいと思ってくれているよね。

ぼくはリディさんと出かけることが楽しみだったけど、リディさんの今日の予定がオリヴィエ様の命令で仕方なくだったら悲しい。

きつと大丈夫だとは思うんだけどね。リディさんは楽しげな雰囲気を出しているし。

「ユーリ殿、着いてきてくださいいね。今日は小生がもてなそうと思います」

リディさんに案内されるままついていくと、前にオリヴィエ様と一緒に居た時の家に案内された。

そのまま家の中にリディさんが入っていくと、前とは違う部屋に連れていかれた。

この感じだと、リディさんの部屋とオリヴィエ様の部屋で別れている感じなのかな。噂に聞く別荘とかだろうか。

カーレルの街と王都を繋ぐ転移装置があるのだから、王族のオリヴィエ様に宿が必要というのはなんとなくわかる。

リディさんはオリヴィエ様の近衛とのことだし、近くに部屋が必要

なのだろうな。きっとイギリスの分もあるのだろう。

「ユーリ殿はそこでゆつくりして下さいね。小生が茶を用意しますから」

お茶の用意を手伝える気はしなかったのでリデイさんに任せていると、しばらくして2人分のお茶を持ったリデイさんがやってきた。

リデイさんの用意したお茶は澄んだ色をしていて、ぼくの知っていた濁ったものとはずいぶん違う。

「さあ、飲んでください。これでも茶を入れることは趣味ですから、満足していただけると思いますよ」

リデイさんに促されるままお茶を飲むと、すっきりした甘さと若干の苦さがあった。

ぼくの知っているお茶は苦くてすっぱいものだったので、とてもびつくりした。

「これ、美味しいですね。ぼくにとってお茶ってどうしても喉が渇いたときに仕方なく飲むものだったので、驚きました」

「ユーリ殿、それはいけませんよ。茶というのは美味しくて楽しい時間を過ごせるものなのです。ユーリ殿がいい茶を知らなかったというのは分かりますが、これから小生と過ごすときにはしっかりと楽しんでいただかないと」

リデイさんはとても圧の強い目でこちらを見ていた。よほどお茶の事が好きなのだろう。

ぼくは何度ももうなずいたけど、リデイさんの用意してくれるお茶ならば楽しい時間を過ごせるだろうというのにはぼくの本音だった。

リデイさんはゆつくりとお茶を飲んでいき、ゆつくりと呼吸をする。リデイさんが落ち着いているのはよく分かって、眺めていて楽しかった。

「こういうのんびりした時間もいいですね。冒険者をしていると慌ただしい事も多くて」

「殿下のそばに居ても似たようなものですよ。せっかくの休日にユーリ殿と過ごせるのは嬉しいです」

そうだよ。オリヴィエ様に振り回される日々はきつと大変なの

だろうな。

でも、きつとその大変さの中に楽しさもあると感じてしまうのはぼくがオリヴィエ様に絆されているからだろうか。

それにしても、そんな機会にリデイさんがぼくと過ごすことを選んでくれるのはとっても嬉しい。

リデイさんと仲良くなれているというのは、ぼくだけの思い込みじゃないと感じる。

「リデイさんがそう言ってくれるのはありがたいですね。リデイさんと過ごす時間は楽しいので、リデイさんも同じように感じてくれると嬉しいですよ」

「ユーリ殿は好意をはっきり示される方なので。顔を見ただけでも殿下や私たちに好意を抱いてくださるのは分かりますが、言葉にするのに照れなどはないのですか？」

もちろん照れはいっぱいある。それでも、言葉に示さないと好意はしっかり伝わらないというのは分かっているつもりだ。

アクアを不安にさせたことも、ノーラに心配させたこともある身としては、持っているだけの好意では駄目だと思う。

「恥ずかしさはありませんけど、好きな人に好きって言わなきゃ分かってもらえないものだと思います。言わなくても伝わることもあるでしょうが、言葉よりはつきりと通じないと感じているので、積極的に言っていくつもりです」

「ユーリ殿の姿勢は好ましい物ですが、小生にとっては立場上難しい物ですね。うかつに言質を取られてはいけないものですから」

物語の世界だと、うっかり口約束してしまった結果とんでもない損をするというのはよく見る展開だけど、貴族の世界もそういう物なのだろうか。

いや、リデイさんが貴族と決まったわけじゃ無いんだけどね。でも、近衛になるくらいなんだから血筋もいいとは思う。

「ぼくにはそういう事はよく分かりませんが、愚痴を聞く位ならできますよ。聞いた内容を他の人に伝えることはしません」

「ユーリ殿が言うのであれば信じてもいいと思えるのですが、それで

も小生はうかつな言葉を口にできないのですよ。この場に聞き耳を立てる者がいないとは限りませんから」

リデイさんにもいろいろ苦勞があるのだろうな。ぼくにはよく分からないけど、ぼくとの時間でリデイさんが癒されてくれたら嬉しいな。

リデイさんには幸せになってほしいと思える。出会ってからそんなに交流はしていないと思うけど、ぼくはリデイさんの事が好きになっているから。

「そうなんです。リデイさんの苦勞はきつとぼくには理解できないでしょうけど、リデイさんが楽しい時間を過ごせるように頑張りますね」

「本来はごちらがもてなすべきですが、ユーリ殿の言葉には甘えたくなくなってしまいますね。ユーリ殿には後ろ暗い考えは無いでしょうか」

ぼくが何かを企んでリデイさんに楽しい時間を過ごして貰おうとしているわけでは無いと思う。

リデイさんを通してオリヴィエ様に好印象を与えたいとかの考えは無いし。

それでも、リデイさんはいったい誰かを疑ってしまう状況に居るのだと感じて、少し寂しくなった。

この人が誰かに自分をさらけ出せる瞬間はあるのだろうか。

ぼくにはそういう人がいっぱいいるけど、その人たちのおかげで頑張る事ができたから。リデイさんにもそういう人がいたら良いのだけれど。

「ユーリ殿、そんな顔をしなくても小生は十分恵まれていますよ。ユーリ殿の表情豊かな姿は見えていて楽しいですが、貴族社会には向かないでしょうね。幸い、殿下もそういう働きを求めているわけではないのですが」

「オリヴィエ様が求めているのは自分が楽しむ事だというのは分かりません。そういう人なのにごこか優しさのようなものを感じるのが、なんとにかずるいんですよね」

オリヴィエ様は一見傲慢に見えるけど、ぼくを無理矢理ものにしようとはしてこないし、ぼくが頑張ったらしっかりと褒めてくれるし、悪人だとは思えない。

リデイさんがオリヴィエ様の行動に苦勞しながらも、オリヴィエ様を嫌いなように見えないのも、オリヴィエ様の魅力あつての事だろう。

「ユーリ殿も殿下の事をよく理解できているようで。そんなユーリ殿に一つ小生の秘密を教えましょう」

「いいんですか？ さつきは聞き耳がどうか言っていたじゃないですか」

「殿下からも伝えるようにと言われてますし、この屋敷に居るものは知っている事ですから」

なるほど。ぼくが知らないだけで、大事な秘密という訳では無いのかな。

まあ、リデイさんが秘密と言っている事だから、誰かに触れ回るつもりはないけど。

それにしても、リデイさんの秘密っていったい何だろう。ぼくは姿勢を正して聞こうとする。

「そんなに畏まる必要はありませんよ。それですね、じつは小生は王族の一人なのですよ」

「そうなんですネ……そうなんですネ!? すみません、大声を出してしまつて。王族なのに近衛をしているんですね。守られる側のようには思いますけど」

本当にびっくりした。言われてみればリデイさんのくすんだ金髪は噂に流れている王族の特徴と一致するけど、まさかりデイさんが王族だとは思わないよ。

これからはリデイさんに丁寧というか、敬うような接し方をするべきなのだろうか。そうなつてしまうと少し寂しいけど。

「王族だからと言って、全ての人間が王位の候補となるわけでは無いのですよ。小生は王位継承の資格はありませんから」

「そうなんですネ。では、これからぼくはリデイ様と呼んだ方が良い



のでしょうか。出来ればこれまで通りに接したいのですが」

「ふふ。これまで通りで構いませんよ、ユーリ殿。そんな顔をされてまで様づけで呼べとは言えませんよ」

ぼくはいったいどんな顔をしていたのだろう。気になりはするけど、言葉にされると恥ずかしいだけかもね。

それはさておき、これまでと同じようにリデイさんと接する事ができるのは嬉しい。

なんというか、様づけで呼んでいるとリデイさんと距離ができてしまうように感じていた。

リデイさんは王族なのに親しみやすいな。王族と言えば、サーシャさんが賜ったというモンスターの本がいるんじゃないかな。サーシャさんが賜ったというモンスターの大本がいるんじゃないかな。

リデイさんはイーリスと契約しているけど、どういう事だろう。

「リデイさんは木みたいな契約の証が出るモンスターとは契約していないんですね」

「ご存じでしたか。オリヴィエ様に伝えられたのですか？ 小生はあのモンスターと契約することになり気ではなかったのですが、イーリスと契約したのですよ。それがきっかけで王位継承権を失ったのですが、後悔はしていません」

そんな過去があったのか。王家の人にも王家なりの苦労があるものなのだな。

でも、きつとその選択のおかげでぼくはリデイさんと出会う事ができたんだよね。リデイさんがオリヴィエ様の近衛になったのはたぶんその影響が大きいだろうし。

「リデイさんのあの炎はとても強いですから、良い契約技ですよ。イーリスも悪い人じゃないです」

「そうですね。そのおかげでこうしてユーリ殿と出会う事も出来たのですから、正しい選択だったと思いますよ」

「リデイさんもぼくと出会えたことを喜んでくれるんですね。ぼくもリデイさんと出会えて嬉しいですよ」

「それはありがたいですね。おっと、そろそろ帰る時間になってしまいましたね。ユーリ殿、組合まで一緒に向かいましょう」

そのままぼくはリデイさんと一緒に組合へ向かって、それからリデイさんは帰っていった。

リデイさんの新しい一面が知れた気がして、なんだか嬉しい。またリデイさんと会いたいな。

## 80話 最強

今日はぼくだけが王都に呼び出されていた。しばらくカーレルの街には戻れないようなので、オーバースカイなどの人と会うこともできない。

できればすぐに帰りたいくらいだったけど、オリヴィエ様の要件が何かは気になるし、オリヴィエ様たちに会いたいという思いもあった。

オリヴィエ様に会いに行くと、モンスターを倒しに行くという事になった。なんでも、相当強いモンスターが出現したらしい。

人型モンスターでは無いようなので、知性の面での厄介さが薄れているみたいなのは助かる。

けど、もしかしたらこの前のブラックドラゴンより強いかも知れないと言われてびっくりしていた。

人型モンスターでもないのに強いモンスターが増え過ぎじゃないかな。一体どんな異変があつてそんな事になっているのだろうか。

オリヴィエ様が言うには自分がいるのだから心配は無用とのことだけれど、それでも仲間を連れてきたほうが良かったのでは？

リデイさんとイーリスは着いて来るとはいえ、他の人は戦力ではなく野営などの準備担当らしいので、ブラックドラゴンより強い相手に勝てるのか不安だった。

道中では人型モンスターと何回か戦うことになったが、どれもオリヴィエ様がすぐに片付けてしまった。

気づいたら事切れているという様子で、これが生命力を吸収する力なのかと感心していた。

「どうだ、ユーリ。余の力は偉大だろう。これがアードラの頂点に立つ者の力だ」

オリヴィエ様の自信も納得するくらいの強さを感じたが、何故かぼくには不安があった。

人型モンスターが10体くらい同時に現れても圧倒していたので、オーバースカイ全員を合わせたよりもオリヴィエ様は強いかもしれない。

ない。でも、不安はなくならない。

今感じている不安が杞憂であるようにと祈りながら目的地への道中を過ごしていた。

しばらくの期間を移動に費やして、目的のモンスターが住む地域にやってきた。

じめつとした空気に鬱蒼とした木々があつて、出来ればあまりいたくない所だ。

オリヴィエ様はこれから強大に挑むというのに全く余裕を崩していなくて、ちよつと見習いたいような、真似をしてはいけないような。

「ユーリ、今回は余の強大きさを存分に見ておくといい。貴様の支配者となる者がどれだけ偉大か知るいい機会だ」

オリヴィエ様はとつても自信満々だ。強いモンスターだという事くらいしか分かつていない相手によくもこんな態度をとれるものだ。

見た目は大きな亀つて感じらしいけど、強い冒険者や騎士に討伐を依頼しても逃げ帰ってくる者がほとんどだというのにね。

どんな攻撃も全然通じなくて、ちよつと傷を与えてもすぐに再生されてしまうらしい。

対応策はいくつか考えているけれど、それが通じる相手なのかの情報が足りていないのが怖いんだよね。

「ユーリ殿、安心していただいて構いませんよ。そこらの冒険者で傷を与える事ができるのですから、殿下の能力で十分なはずです」

「リディはいつもオリヴィエ様に注意しているけど、オリヴィエ様が戦って負けるとは思っていねえからな。俺だつてオリヴィエ様には絶対に勝てねえよ」

この2人が言う言う位なのだから、オリヴィエ様はぼくが見ていたよりも強いのだろう。でも、能力が通じないことを考えたりはしないのかな。

ぼくが分かっているだけでも強い力だと思う。生命力の操作という能力は汎用性も高いし、単純に生き物のだいたい弱点と言っている能力だろう。

でも、使うのが人間である以上どこかに限界があるはずだ。ぼく

だってアクア水の操作にはぼくの頭のできが大きく関わっているからね。

全くイメージできない動きは絶対にできないし、思考のスピードの影響でアクア水を動かせる数に限界がある。

オリヴィエ様の能力にもそういう欠点があるはずだけど、これまでは表面化しなかったのだろう。

いざという時には3人だけでも連れて逃げられるように準備しておいた方が良くもされない。

「オリヴィエ様だけに任せて見ているというのは性に合いませんから、邪魔にならない範囲で戦いたいですね」

「くくっ、悪くない思想ではあるが、余が戦う時に周りの人間など必要ないさ。ゆつくりと余の強さを眺めていればよい」

オリヴィエ様が嘘を言っている感じはしないから、本当に周りの人が邪魔なのかもしれない。

なら、念のために戦う準備をしておいて、オリヴィエ様が危ないなら介入するのが良いかな。

ぼくの心配し過ぎだとは思っただけど、オリヴィエ様に万が一の事があつてほしくない。

いざという時はオリヴィエ様もリディさんもイーリスも守つてみせる。

オリヴィエ様の強さはきつと本物だから、むしろぼくが守られる側なのかもしれないけどね。

そのまま目的地に近づくと、明らかに大きさがおかしい亀がいた。これが恐らく目的のモンスターだろう。

大きな家より大きいのではないかという位で、これに踏まれてしまつてはおしまいだろうと感じた。

オリヴィエ様はぼくに手のひらを向けて待てと指示した後、モンスターに近づいていく。

モンスターは気づいているみたいだけど、何も反応を返してこない。

「さあ、余の力をとくと見ておけよ、ユーリ」

オリヴィエ様はアリシアさんに匹敵するくらいのスピードで亀に接近して亀を殴りつける。

亀は大きくのけぞっていたが、あまり気にした様子はない。こぶし型にへこんでいる部分があったけど、すぐに元通りになっていった。

あの巨体をのけぞらせるだけで相当な力だと思っただけど、その強い殴りを受けても亀は気にしていない。これはちよつと危ないかもしれない。

ぼくはいつでもオリヴィエ様を助けに行けるように備えていた。

「くくつ、情報通りに頑丈なようだな。だが、この力に耐えられるものか！」

オリヴィエ様は手を亀に向けて何かをしている様子だ。恐らく生命力の吸収だろう。

ぼくが受けたらひとたまりもないオリヴィエ様の力だけど、亀はそれを受けても平然としていた。

本当にまずいのではないかと考えたぼくはオリヴィエ様を注視しつつ、ミア強化を発動したうえでアクア水を体にまとった。

これでいつでも最大の速度を出せる。何かあつたらオリヴィエ様を連れて逃げよう。

しばらくオリヴィエ様は生命力を吸収している様子だったが、亀はまるで弱った姿を見せない。ぼくは本格的に不安になっていた。

すると、オリヴィエ様が苦しそうな顔をして膝をつく。何かあつたかは分からないけど、オリヴィエ様が危ない。

急いでオリヴィエ様のもとへ移動すると、亀が水のようなものを吹き出してきた。

オリヴィエ様を狙っているものだったので、ぼくはオリヴィエ様を抱えて逃げる。

リデイとイリスが慌ててこちらに向かってきて、亀に攻撃を仕掛けていているが、亀は意に介していない。

オリヴィエ様をすぐに安全な場所へと逃がして、リデイさんとイリスを助けに向かう。

きつとオリヴィエ様は生命力の吸収が限界に達したのだろう。そ

の証拠に、リデイさんたちが攻撃して傷を与えても、オリヴィエ様が殴ったときより治癒が遅かった。亀の生命力が減っている証だ。

リデイさんが炎で亀に攻撃を仕掛け、イーリスは全力で殴ったり蹴ったりしている。

亀は手足をゆっくりと上げてから下に振り下ろす。すると、地面がすぐく揺れてリデイさんはバランスを崩す。

慌ててリデイさんを救出して撤退しようとする、リデイさんに止められる。

「ユーリ殿、限界まで小生は炎を撃ちますから、それを見てあのモンスターへの対策を考えてください。もうユーリ殿しかあのモンスターの倒せないのです」

ぼくはリデイさんを抱えて逃げられるようにしつつ、リデイさんが炎を撃つのを支える。

リデイさんは何発も炎を撃っていて、亀の皮膚がひび割れている瞬間があった。すぐに再生されてしまうが、わずかに血が流れていた。それを見てあの亀を攻撃するための手段が思い浮かぶ。一か八かでしかないけど、やるしかない。

3人とも連れて逃げるのが現実的ではない以上、ぼくがここであるの亀を倒さなくちゃいけない。

オリヴィエ様はぐったりしているし、リデイさんは息も絶え絶えだ。イーリスはまだ無事だけど、傷だらけになっている。

ぼくはリデイさんを後ろへと運んだ後にイーリスを助けに向かう。

「イーリス、代わって！ 後はぼくがどうにかする！ オリヴィエさんたちを守っていて！」

「ユーリ、任せませ！ 俺たちの命運はお前にかかっている！ 力になれなくて悪いな……」

そのままイーリスは下がっていく。

亀はこちらに向かって足で攻撃を仕掛けてくるが、速さは大したことがないので、空中に浮かんでしまえば簡単に対応できた。

アリシアさんと模擬戦をしてからちゃんと言を飛べるようにしておいて良かった。地面が揺れることで足を取られることが無いから、

のろい亀に攻撃を受けなくて済む。

ぼくは亀の攻撃をよけながら亀の表面にアクア水を張りつかせる。肌から水を奪い取ると同時に一気にアクア水を蒸発させて亀を冷やした。

すると、亀の肌が裂けて血が吹き出す。ぼくは亀の傷が治る前にアクア水を亀の傷口に放りこんだ。

傷口から体内に入ったアクア水を通じて、亀の血を操っていく。血を凍らせて心臓を攻撃してみたが、すぐに治ってしまった。

体内からの攻撃じゃダメか。いや、まだ手はある。これが通じなかつたらぼくはこいつに勝てない。頼む、通じてくれ。

ぼくはもう一度亀の表面に傷を作った後、傷口からアクア水で操った亀の血を全力で外に出す。

亀は大きく暴れるけど、ぼくは亀の攻撃をよけながら何度も何度もそれを繰り返した。

ぼくの限界が来そうになったころ、亀の動きが鈍くなっていく。それによって亀の血を出すスピードが上げられて、何とか亀の血をすべて奪うことに成功した。

これを癒されてしまったてはもう勝てない。祈りながら亀を見つめていると、亀はそのまま動かなくなった。

確認するために剣で首を切り落とすと、そこから再生はしなかった。首を落とすことも楽だったから、亀の防御力は恐らく膨大な生命力に支えられていたのだろう。

それで、オリヴィエ様は生命力を吸収しきれなかった。亀が死んだことにより、生命力を防御に回せなくなった。そんなところかな。

亀の死を確認してからオリヴィエ様のもとへ向かう。オリヴィエ様は横になっていたので、オリヴィエ様のもとに座る。

「オリヴィエ様、あの亀はもう倒しました。オリヴィエ様がいてくれたからこそ倒せたんだと思います。ありがとうございます。もう安心してくれて大丈夫ですよ」

オリヴィエ様はしばらくぼーっとしていたが、こちらの目を見て真っ赤になるとともに表情を大きく変えた。



なんというか、物語のヒロインがする顔って感じかな。いつものオリヴィエ様とは違うけど、可愛いかもしれない。

すぐにオリヴィエ様はぼくとは反対の方を向いて、恥ずかしそうな声を出す。

「み、見るな……このような顔、貴様には見せられぬ……」

「わかりました。では、後ろを向いていますね」

ぼくは言葉通りオリヴィエ様とは反対の方を向く。オリヴィエ様がこちらを向いたような気配がした。

「ユーリ、貴様には助けられてしまったな。このような経験を余がする事になるとはな……感謝するぞ」

「いえ、オリヴィエ様を助けられてよかった。オリヴィエ様が膝をついたとき、ぼくは気が気じゃなかったですよ」

「そうなのだな……ユーリ、この例は改めて別の機会でしょう。まずは王都へ帰るとしようぞ」

オリヴィエ様はそのまま眠っていった。リディさんとイーリスにその場を任せて、ぼくはオリヴィエ様から離れていった。

今日は本当に大変だった。でも、オリヴィエ様と一緒に来る事ができてよかった。そうじゃなかったら、ぼくは親しい人を3人失っていたのかもしれない。

あらためて、ぼくの周りのみんなが無事でいられることは得難い幸運なのだ感じた。

## 81話 正体

亀形のモンスターを倒してオリヴィエ様を助けたぼくは、しばらく王都で歓待を受けていた。

そんなある日、オリヴィエ様に呼び出されて部屋で2人になっていた。

「ユーリ、貴様には感謝している。望む褒美があるのなら、どんな物でもくれてやろう」

「それって王位とかでもですか？ 王位が欲しいわけじゃ無いですけどね」

「くくつ、貴様が真に望むのなら構わんさ。だが、貴様の望みはそうではないだろう？」

「そうですね。では、オリヴィエ様と遊びたい、でどうですか？」

オリヴィエ様はぼくの言葉を受けて驚いたような顔をする。

王女様と遊ぶなんてとんでもない名誉だと思うけど、失礼だったかな？

ぼくは少し心配していたけど、オリヴィエ様が楽しそうに笑いだしたので安心する。

「金でも名誉でもなく余と遊びたいときたか。貴様らしくはあるのだが、せっかくの機会を棒に振っているような物ではないか」

「オリヴィエ様が危ないと思ったとき、ぼくはオリヴィエ様には絶対に死んでほしくなかつたんです。オリヴィエ様と過ごす時間を大切に思っていたんだと、はつきりと分かりました」

「そうか……そうか！ やはり貴様に目を付けた余の目は正しかったです。ユーリ、余が許す。余と2人の時は余をハイデイと呼べ」

別にかまわないのだけど、どうしてハイデイなのだろう。

王都ハイデイケートがアーデルハイド様の愛称であるハイデイから名づけられたという話は聞いたことがあるけれど、それと何か関係が？

「くくつ、戸惑っているようだな。当然だ。ハイデイという呼び名にオリヴィエと何の関係もないのだからな。貴様には余の秘密を教え

てやろう」

オリヴィエ様の秘密っていったい何だろう。この前はリデイさんにじつは王族だと教わったけど、そういう他の人に言えない秘密じゃないと良いんだけど。

オーバースカイの仲間に隠し事は出来るだけしたくない。もちろん、知ってほしくない秘密を隠すくらいの分別はぼくにもある。

でも、隠し事をしているだけで後ろめたさのような物を感じてしまうので、隠さずに済むのならその方が良かった。

まあ、王女様の秘密で触れ回っていい物なんてないか。覚悟を決めよう。

「……実はな、余はかつてこの国を形にしたアーデルハイドそのものなのだ。この国において王など単なる飾りにすぎん。余こそがこの国で最も尊きものよ」

それは信じていい話なんだろうか。いや、オリヴィエ様の顔はとても真剣で、からかいのように嘘をついているわけでは無い。

確かにオリヴィエ様がアーデルハイド本人だとすると納得できる部分はある。

オリヴィエ様が今の王家と違う綺麗な金髪をしている事、オリヴィエ様の契約技がアーデルハイドと同じようなものだって事、オリヴィエ様がこの国を自分の物のように言っている事。

それら全てにつじつまが合う答えではあるのだ。だけど、一体どうやって千年近くも生きていたんだ？

いや、答えは簡単か。生命力の吸収と活性化。どちらかなのか、どちらもなのかは分からない。

どちらにせよ、オリヴィエ様の契約技の力で長生きする事ができたのだろう。

だとすると、サーシャさんも長生きできるのかな？ まあ、何でもいいか。ぼくには関係の有るようで無い話だ。

「そうだとすると、ぼくなんかに構って色々なことをしていて良かったんですか？ 王様って忙しいイメージがありますけど」

「余はすべてにおいて命じるだけで良い。それ以外の事はしもべども

が考えることだ。余がやりたいことを叶えるのがこの国の物の役目。それができぬものなどアードラには必要ない」

とんでもない暴君のセリフだ。でも、単にわがままなだけな人なら、ぼくはここまでオリヴィエ様を好きになつていない。

なんだかんだで配慮もできて、優しさが感じられる人だからこそ魅力的なんだ。

それにしたつて、ただ珍しいだけのぼくに構うのはおかしいと思うけど。

まあいい。そんな気まぐれがあつたからこそオリヴィエ様と親しくなれて、この人を助ける事ができたんだ。素直に喜んでおこう。

「なら、これからはハイデイと呼びますね。オリヴィエ様の願いを叶えられないぼくは、この国に必要なみたいですから」

「くくつ、貴様も言うようになったものだ。だが、よいぞ。貴様だけはどんな態度をとつたとしても許してやる」

ハイデイはそう言うけど、ぼくはハイデイに失礼な態度をとりたくないわけではないし、この人はきつと限度を超えると絶対に許さないだろう。

これからもハイデイにはちゃんとした態度をとることをぼくは心に決めた。

「それは嬉しいような、困るような……ハイデイの事を大切にしたいので、無礼なことはできませんよ」

「そうか。ろくでもない態度をとる貴様を見るのも面白そうだったが、まあいい。ユーリよ。今日は貴様を余の私室に連れて行つてやる」

そう言ったハイデイに手を引かれて、私室だという部屋に連れていかれる。

王女様、じゃなかった。この国の支配者っぽくはないかもしれない。質素というほどでも無いけど、豪華絢爛な様子はない。

そんな部屋の中で目立つ大きな寝具に座るハイデイに引つ張られて隣に座る。

私室つてことはハイデイはいつもここで寝ているんだよね。少し

どころでは無く緊張してきた。

「くくっ、今日は貴様と隣で眠ろうか？ 貴様には余に手出しするほどの度胸はないであろうが、こんな機会は二度とないかもしれないしれんぞ？」

「困ります。王女様と一緒にベッドで寝たなんて、どんな大変な目に遭う事やら……」

「それを言うならばこの部屋に入った時点で同じことだ。まあよい。ユーリ、余とどのような遊びをしたいのだ？」

ハイデイの言葉にはつとずる。そうだよ。同じ部屋に入った時点で関係が噂されてもおかしくないよ。

でも、もう部屋に入ってしまった事だから、受け入れてハイデイと遊ぶことにする。

一体どんな遊びをすればいいのだろう。アクアとするような遊びでは絶対にダメだよ。

「くくっ、悩んでおるな。ユーリ、余の膝に頭を置くといい。貴様とてそのような経験くらいあるだろう」

ハイデイはベッドの頭を置く方へ移動する。これはこのベッドで横になれって事かな。

そのままハイデイの膝を枕にすると、ゆっくりと頭を撫でられる。ハイデイはそのまま穏やかな声でぼくに話しかけてくる。

「ユーリ、まさか貴様に助けられる事になるとはな。これまで余は自分の道を己の力で切り開いてきた。それが本来弱者のはずのスライム使いに救われるのだからな。数奇なことだ。」

貴様には感謝している。余の長い一生の中でも一度も訪れることなかった、他者に必死で守られるという経験を味わえたのは貴様のおかげだ。ユーリ、余の物になれ。余は貴様が欲しい」

「ハイデイの気持ちは嬉しいですけど、ぼくは冒険者として生きていくと決めているので。でも、また何度でもハイデイに会いに来ますから。それじゃダメですか？」

ハイデイはため息を吐いた後、ぼくの頭を抱え込む。そのまま強くぼくの頭を抱きしめてきた。

「これまでならそれでも良かった。だが、もうそれだけでは満足できない。余のもとから離れるなど許しはしない」

ハイデイの声はとても真剣みがあって、なんだか強い執着のようなものも感じた。

その日はそのままハイデイと過ごして眠り、次の日に帰ろうとする時、転移装置には警備が大勢いてぼくは帰る事ができなかった。

ぼくは焦ったけど何もできなかったのも、そのまましばらく王都で過ごしていると、突然ハイデイと一緒にカーレルの街へ向かうと言い出した。

そのままハイデイさんやイーリスとともにカーレルの街へと転移装置で移動した。

カーレルの街ではサーシャさんが出迎えてくれて、心配の言葉をかけてもらった。

「ユーリ様、こちらに連絡が一切なかったのも、ユーリ様の身に何かあったのかと……嬉しいですね。こうしてまたユーリ様の顔を見られて」

そんな事になっていたのか。なら、オーバースカイのみんなにも心配をかけてしまったかもしれない。

ぼくはハイデイたちと一緒に、すぐにステラさんの家へと向かった。

ステラさんの家へ向かうと、アリシアさんたちも含めたオーバースカイのみんなが出迎えてくれた。

メルセデスたちはオーバースカイに加入した段階でこっちに住んでいたけど、アリシアさんたちもここに住んでいるらしい。

前の家はサーシャさんに管理を任せているという事なので、またあの家に行くこともあるだろう。

オーバースカイのみんなにもみくちやにされた後、ぼくは今回何があったのかを説明した。

ハイデイと一緒にモンスターを倒したこと、ハイデイの手回しでこちらに帰って来られなかったこと。

みんなは納得したような顔をした後、ぼくの成果を喜んでくれた。

それからしばらくらくみんなと会話を楽しんで、ハイデイの屋敷でハイデイたち3人と話していた。

「結局オリヴィエ様はどうして気が変わったんですか？　ありがたいですけど、理由がよく分からなくて」

「この2人の前ならハイデイでもよいぞ。オリヴィエ様でも構わんが。それで、理由か。余がこちらに来る機会を増やすことにした。それだ」

「もう少し説明させてもらおうと、王都の人員を整理する事ができたので、殿下がいらっしやらなくても、政務に滞りが出ないようになったのです」

人員を整理するとなぜそうなるのだろう。ぼくにはよく分からないけど、ハイデイがこちらにやってくる機会が増えるのは嬉しい。

リデイさんやイーリスとも会える事が多くなるだろうし、大歓迎だった。

「貴様を縛り付けていたら、貴様に嫌われかねんからな。余としてはそれは面白くない。オーバースカイともども余の物にするのも悪くないが、今回はこうすると決めた」

ぼくの懸念事項はみんなと離れ離れになる事だったので、それでも構わないと言えば構わないのだけど。

オーバースカイごとハイデイの物になるのなら、サーシャさんはどうなってしまうのだろう。まあ、今は考えなくてもいいか。

それからしばらくハイデイたちと雑談をして、ハイデイたちが帰るときに転移装置まで送っていった。

ハイデイたちと会える時間が増えるというのは嬉しいな。次にハイデイが来る時が楽しみだ。

## 裏 オリヴィエ

オリヴィエはかつてアーデルハイドという名でユーリたちが住むアードラを建国した。

アーデルハイドが契約したことによって手に入れた契約技の強大さをもとに、敵対する者たちをすべてねじ伏せてただの庶民から王まで成り上がっていった。

アーデルハイドはその中で何度も裏切られて、やがて自分だけが信頼できる人間だと思ふようになっていった。

契約技の力によってどんな状況からでも生き延びる事ができていたが、そんな日々の中でアーデルハイドは王という名は面倒ごとばかり招き寄せると結論付けた。

それから、アーデルハイドは死を装って表舞台から消えて、親族を代理の王として、裏からアードラを支配していた。

そんな日々の中でいつでもたった一人でいたアーデルハイドはいつか、誰かとふれあうという欲求を思い出していた。

そして気に入った人物を自分の物にするという遊びで日々の退屈を紛らわせていたアーデルハイド。

だが、表舞台に出ないという自身が課した縛りが面白い人間を探す際に邪魔になっていた。

いろいろと考えたアーデルハイドは、オリヴィエという名で王女として表舞台に再び立つことを決める。

その際に近衛として王族の中の異端であったリデイとイーリスを自らの傍に置くことにした。

リデイとイーリスは良くオリヴィエの期待に応え、オリヴィエを楽しませていた。

そんな日々を過ごすうち、自らが表舞台に立つことにより出会えるような人を探すために、ユーリも出場する事になる大会を計画した。

初めのころはオリヴィエの気に入るような人間もモンスターも現れなかったので、徐々に大会に出場できる人間の幅を広めて、目につく人材を探すことにした。



何度か面白い能力や芸を持つ存在がオリヴィエの前に現れたが、オリヴィエに求めるものが金や権力ばかりであり、オリヴィエを本当の意味で楽しませることは出来なかった。

あまりにもつまらない存在ばかりだったので、また死を装う事を考えだしたところにオリヴィエはユーリとミーナに出会う。

ミーナはユーリに勝つことばかりを考えていて権力にも金にも目を向けないところが面白かったし、ユーリはただの小市民にしか見えないながらも周囲の人間の期待に応えようとする姿が面白かった。

そしてオリヴィエはしばらく表舞台に立ち続けると決めた。ユーリの事は自分の事をだんだんと好きになっていく姿が可愛い動物のように思えて気に入っていた。

オリヴィエはユーリとの遊びを何度か繰り返すうちに、王女ではなただのオリヴィエに絆されていくユーリの姿にかつての人を信じる気持ちを思い出そうとしていた。

だが、オリヴィエは人を信じたところで王族である自身は欲に取り付かれた人間に裏切られるだけだと考えていた。

そんなオリヴィエの考えを変えるきっかけになったのが、オリヴィエがユーリを連れて行ったモンスターとの戦いだ。

自身が窮地に追いやられたときに、危険だと言うことは分かっているはずなのに逃げようともせず自分を守るユーリにオリヴィエは希望を見た。

そして、ユーリが金でも名誉でもなく自分との時間を求めたことによつて、オリヴィエはアドラを建国してから初めて人を信頼しても良いと思えた。

ただのおもちゃくらいにしか思っていない存在だったはずのユーリに対して執着心が生まれたオリヴィエは、ユーリを自分のもとから離れさせたくないと考えた。

その結果として、ユーリがカーレルの街へ帰ることを妨害した。

オリヴィエのその行動が、アクアにオリヴィエはユーリを自分から奪うものだと認識させた。

だからアクアはオリヴィエを支配することを決めた。

そして王宮に侵入したアクアは、オリヴィエを警護していたリデイとイーリスに出会う。

「アクア殿……？　ここはオリヴィエ様のおわすところ。ここから先へ進ませるわけにはいきません」

「そう。なら、リデイたちも邪魔。オリヴィエはユーリには必要ない」  
アクアはオリヴィエを支配するための障害としてリデイとイーリスを排除するために、2人を支配しようと動く。

アクアの危険性を察知したイーリスが、まずアクアに対して攻撃を仕掛ける。

「せっかくユーリと楽しく出来そうだったのによ！　オリヴィエ様を傷つけようとするものを許すわけにはいかねえよな！　せっかくの機会だ。その実力を存分に味わわせてもらおうぜ！」

アクアはイーリスの放つ炎も拳も蹴りもまるで意に介することは無く、イーリスを拘束してから支配する。

その姿を見ていたリデイは即座に全力の炎をアクアに放つが、それもアクアには通じない。

リデイもアクアに拘束されたが、リデイはどうしても気になる事をアクアに問いかけた。

「アクア殿、これはユーリ殿が望んだことなのですか？　ユーリ殿はオリヴィエ様を裏切ったのですか？」

「これはアクアが決めたこと。ユーリはこれからも何も知らない」  
「そうなのですね。良かった……」

最後に微笑みを見せてリデイはアクアに支配されていく。

リデイは王族として過ごす日々の中で、表だけ取り繕って裏であれこれ画策する人間ばかりを見ていた。

そんな中で出会ったユーリの態度は、自分たちに対する好意をはつきりと表に出していて、それが王族に対する媚びた姿勢ではないとリデイには感じられた。

オリヴィエに命じられて自分の正体を明かしたときも、ユーリはその態度を一切変えることなく友人のような存在としてリデイを見ていた。

そのユーリの姿に癒しのような物を感じていたりデイは、アクアがオリヴィエに敵対する姿を見て、心の底から不安を感じていた。

あの純朴な姿はすべて演技で、このアードラを支配するための道具として自分たちを見ていたのか。

その不安に耐える事ができず、リデイは最後のあがきよりアクアに問いかけることを優先していた。

アクアの言葉に嘘はないと感じたりデイは、自分の信じたものが偽りでは無いことを喜んでいた。

だから、最後にリデイは微笑むことができた。

アクアはそんなリデイの様子を見て、ユーリの理解者を1人減らしてしまったのではないかと悩んでしまう。

その考えを雑念だと放棄して、アクアはオリヴィエのもとへと進んでいく。

オリヴィエはやってきたアクアの姿を見て、余裕を見せながら問答に入ろうとする。

「アクア、この余に一体何の用だ？　つまらない用件であれば許さんぞ」

「ユーリを返してもらおう。そのためにオリヴィエは邪魔。それともアードルハイドと呼んだ方が良い？」

「貴様、なぜその名を……まあよい、ならば余の力を味わえ！」

オリヴィエは即座にアクアに対して契約技を使うものの、以前戦った亀型モンスター以上に手ごたえを感じなかった。

そのため、アクアが単なるハイスライムではないと確信する。

「貴様、まさかオメガスライム？　プロジェクトU・R eは頓挫したはずでは？」

「オリヴィエ、なぜその名を知っているの？　ことと次第によってはただでは済まさない」

アクアはプロジェクトU・R eという名に聞き覚えがあった。アクアに対してユーリの両親が行っていた実験の名前だと記憶していたため、その計画にかかわりのある者に好意的になれないでいた。

それでも、オリヴィエを殺すつもりは無いアクアは、問答によつて

その情報を手に入れようとする。

「さてな。どうしても知りたいというのなら、余の口を割ってみるこ  
とだ」

そのままオリヴィエは全力で契約技をアクアに対して行使する。  
それでも全くアクアに対して効果がないまま、オリヴィエは限界を迎  
えた。

オリヴィエはアクアに拘束されて、全く抵抗することもできないで  
いた。

自分がここで終わると考えたオリヴィエが最後に思い出した顔は  
ユーリの物だった。

「ユーリ、なぜ貴様は余の前に現れたのだ。そうでなければ未練など  
……」

そのままアクアはオリヴィエの体を支配していく。そしてオリ  
ヴィエの記憶を読み取っていった。

オリヴィエの記憶によると、プロジェクトU：Reとはかつて王国  
で行われたオメガスライムを生み出す計画だった。

オメガスライムの力を利用する事によって王国の版図を広げよう  
とする目論見のもと行われていたが、結局上手く行かず取りやめと  
なったものだ。

オリヴィエは直接関与しておらず、報告によってその存在を知って  
いただけだった。

仮にオメガスライムが暴走しても自分なら倒せると信じていたオ  
リヴィエは、プロジェクトU：Reの成否がどうであろうと構わな  
かった。

アクアはオリヴィエが直接プロジェクトU：Reに関与しないと  
知って安心感を覚えていた。

その安心感で自身がオリヴィエを信じたいと考えていたことを自  
覚したアクアは深い悲しみに襲われた。

どうしてオリヴィエと話し合う前に敵対する事を選んでしまった  
のだろう。オリヴィエは自分と似たような孤独を知っていた。だか  
ら共感しあう未来もあつたかもしれないのに。

オリヴィエもリデイもイーリスもユーリの事を大切に思っていた。その人たちとユーリの良さを共有する事だつてできたかもしれない。アクアは自分が支配という手段しか取れないことを嘆いた。

アクアはそれでもオリヴィエたちの支配を止めることは無いまま、オリヴィエたちとしてユーリに接する時間を作った。

王都に居る大勢の人間を支配する事によつてアードラをユーリの都合のいい国にすることもできたアクアだったが、オリヴィエたちの望み通りの国にすることにした。

その結果としてオリヴィエたちはある程度自由にユーリと出会うても問題ない立場になつて、ユーリとの時間を多く作れるようになった。

アクアはユーリがオリヴィエたちの事をとても好きになつていゝ事を感じて、また寂しさを感じた。

ユーリの大切な人たちを結局すべて支配する事になつて、結局ユーリの隣にはアクア一人のようなもの。

アクア自身もユーリも他のみんなも、誰一人として望んでいない結末だつたのにこうなつてしまった。

アクアとユーリとみんなで過ごすことが一番幸せなはずだつたのに。アクアは心の底から虚しさを感じていた。

### 3章の登場人物

ユーリ

冒険者チーム、オーバースカイのリーダー。これまでに出会った人物のほとんどがオーバースカイに加入したことで、オーバースカイがユーリの中心になった。

これまでの出会いにも新たな出会いにもとても感謝していて、冒険者になったことを喜ばしいと感じている。

アクア

ユーリのペットでスライムの中どころか世界で最も強い存在。

ユーリの周りの人にも情を感じていたが、結局アクアの行動を変えするには至らなかった。それに苦しみを感じているが、ユーリとふれあう事で痛みはほとんど忘れる。

カタリナ

ユーリの幼馴染でノーラの契約相手。

アクアを憎む気持ちが薄まっていき、和解したいと考えるように。カタリナにとってユーリが最も大切だが、2番目はアクアで3番目はノーラ。両親はさほど大切ではない。

ステラ

ユーリの元教師で同居相手。

アクアがステラを利用してユーリに与えた指輪がこれからのステラの運命を大きく変えることになる。

アリシア

ユーリの師匠だったが、オーバースカイのメンバーに。

オーバースカイの人間に対しては優しいが、ほとんどの人間に対しては冷徹で人と思っているかすら怪しい。

オーバースカイという希望を目の前にして、若干丸くなった。

レティ

アリシアの契約モンスターのハーピー。

いつでも朗らかだが、先ほどまで和やかに会話していた相手でも平気で殺せる。例外は本当の意味で親しい人くらい。

ミーナ

ユーリのライバル。ユーリが新たに手に入れた力であるミア強化がミーナの運命を決めてしまう。

同格の相手に今まで出会わなかったからこそ、ユーリのライバルであることを強く意識している。

ヴァネア

ミーナの契約モンスターのラミア。

基本的にモンスターらしい残酷さは薄れていないが、親しい人のためにそれを抑える事ができる。

ミーナと出会わなければ厄介なモンスターとして討伐されていた可能性が高い。

サーシャ

カールルの町の有力者であるエルフィール家の娘で、冒険者としてのオーバースカイのサポートを担当。

王家ともある程度かわりがあり、オリヴィエがただの王女でないと察している。

ユーリヤ

オーバースカイのメンバー。ユーリの事が大好きな様子。本気を出せば相当強いが、実力を出すつもりはない。

基本的には穏やかだが、ユーリに敵対すればその限りではない。

ノーラ

ユーリのペット2号。もとは猫型モンスターだったが、進化することで人のような姿に。

進化前と耳や尻尾だけは変わらないが、後は人そっくりな見た目。黒い髪に細い体形をしていて、ユーリと身長や髪の色などがそれなりに似ている。

フィーナ

オーバースカイのメンバー。茶髪で物静か。契約技では無い特殊な力を持っている。衝撃を放つことで敵を攻撃する。

基本的に人間扱いされてこなかったもので、まともに接するだけでもだいぶ好意的な反応を返す。

メルセデス

ユーリの弟子でスライム使い。

水色の髪をしていてそれなりに小柄。ユーリに憧れたきっかけは王都の大会。

基本的にスライム使いとして邪険にされてきたので、人との接し方がよく分かっていない。

ユーリの弟子となったことでめきめきと成長する。それでもユーリよりはるかに弱い。

メーテル

メルセデスの契約モンスターでハイスライム。

アクアより薄い色をしており、見た目の違いはすぐに分かる。

メルセデスの横で常識人ぶっているが、根本的に人の事が理解できておらず、単なる真似になっっている。軽い会話だけならおかしくはないので、メルセデス以外は気づいていない。

オリヴィエ

ユーリたちが住む国アードラの王女とは仮の姿。その正体はアードラを建国したアーデルハイド。

ユーリと戦うならば、大抵の状況でオリヴィエが勝つ。殺し合いになるとアクアが干渉する。

基本的に自分が強いから人に無防備に接しているだけで、根本的には人間不信。

リデイ

くすんだ金髪を持つ小柄な契約者。オリヴィエの近衛。

炎を使って空気の流れを操作したり、酸素をうまく敵から奪ったりできる巧みさを持っているが、それが役に立つ相手と戦うことは無いに等しい。

お茶に対する強いこだわりを持っているが、あまり他人には理解されない。

イーリス

リデイの契約モンスターのドラゴニユート。

ただのドラゴンよりはよほど強いので、相当強いはずなのだが、近



くにいる人間はイーリスより強い人がかなり多い。

アリシアに勝てると自称しているが、殺し合いならば手段を選ばないアリシアが勝つ。

ミア

ユーリにミア強化を与えて死んだモンスター。ユーリの心には強く残っているが、他の人はあまり覚えていない。

## 4章 プロジェクトU：Re 82話 兆候

ハイデイの件があつてからは特に大きな事件が起こることは無く、ぼくたちはカーレルの町周辺で冒険者としての活動を行つていた。

時々ハイデイ達がやってきてぼくたちの冒険に混ざっていく事もあり、ぼくは楽しく毎日を過ごすことができていた。

ただ、いつもは現れないようなモンスターがカーレルの街の周りにいることが多くなつて、若干の違和感を持つていた。

今日は少しだけ遠くへ来て、いつもより多く発生したモンスターを退治する事になっていた。

多く発生したとは言つても弱いモンスターばかりなので、オーバースカイにとっては容易い依頼だった。

とはいえ、油断は禁物なのでしっかりと警戒しながらモンスターと戦つていく。

すると、ただのホンラビットの見た目をしているのにダブルホンラビット並みに強い個体がいた。

どちらにせよぼく達にとって強いモンスターではなかったが、これが人型モンスターであれば一大事だ。

なので、改めて気を引き締めてモンスター討伐を行う事にした。

そうして依頼にあつたモンスターの討伐を終える事ができたが、その中には強さがおかしいモンスターが何度かいて、ぼくは少し警戒していた。

でも、その日は他に異常はなく、人型モンスターのような危険な異常はなかった。

「アリシアさん、こういう妙に強いモンスターと戦つたことはありませんか？ 種族の割には不自然なくらいでしたよね」

「私たちには無いかな。ただ、ユーリ君が警戒するのはきつと正しい。何もない事が一番ではあるけど、いつもと違うというのは冒険者にとって危険の前兆であることは多いかな」

アリシアさんも違和感を覚えているみたいで、かなり真剣にぼくの質問に答えてくれた。

やっぱりおかしいよね。こういう時に人型モンスターが発生したりするものだけど、今日は出てきていない。

この辺に注意してもらおうようにサーシャさんに言っておこうかな。そうすれば、何かあったときにすぐに発見してもらえるはずだ。

「あんた、警戒するのはいいけど、目の前の相手から気を逸らすんじゃないわよ。あんたは案外目の前の事しか見えてないんだからね」

カタリナはぼくを心配してくれているように思える。声が柔らかいし、目つきもいつもより優しい。

アクア水を複数使うぼくなのに目の前の事しか見えてないはずは無いと思いたいけど、カタリナは結構周りが見えているからな。

何かある前に注意して貰えたことをありがたいと思っ、問題が起こらないように気を付けておこう。

「ありがとう、カタリナ。カタリナがいるからぼくは安心して背中を預けられるんだ。これからもいろいろアドバイスしてね」

「当然よね。あたしがいたから、あんたは冒険者としてやってこられたのよ。でも、ユーリだって見違えるほど頼りになるようになったわ。今のあんたになら、あたしの命を預けてもいいわ」

カタリナのその言葉は、ぼくにとつて本当に嬉しい物だった。ミストの町の学園に居た頃のぼくとカタリナは、チームとは名ばかりの、カタリナにぼくが頼っているだけの関係だった。

学園でのモンスターの異常発生でカタリナの事を助ける事ができたけど、ぼくがカタリナに貰っているものをあの程度で返せたとは思えない。

だから、カタリナと対等な関係になれているだろう今が最高なんだ。

ぼくはカタリナの助けになりたいし、カタリナとチームとして支え合いたい。その思いが現実のものとなったように思えた。

「うん。カタリナが危ない時にはぼくがきつと助けてみせる。それがこれまで助けてもらった恩返しだよ」

「ま、あたしが窮地に陥るなんて滅多なことでは無いでしょうけど。これまで通り、あんたが危ない時にはあたしが助けてあげるわ」

カタリナが危険な目に合うなんて事は無いに越したことはない。それでも、今のぼくにはカタリナを助けられる力があるはず。

それを考えると心の底から勇気が湧いてきた。アクアにも、ミアさんにも、これまで支えてくれたみんなにも感謝したい。

ぼくはもう誰かの足を引っ張るだけの人間じゃない。そうなる事ができたのはみんなのおかげだ。

「そういえば最初はユーリ君とカタリナさんとアクアだけだったね。それが今ではこんなメンバーになった。それに、ユーリ君たちはずっと遠いところに居た私たちに追いつけたんだから、これからも大丈夫」

「そうだね、アリシア。ユーリ君たちがここまで来るなんて想像していなかった。ユーリ君たちとなら、どんな奇跡でも起こせる気がするよ」

アリシアさんたちはとっても楽しそうな顔をしている。オーバースカイのメンバーでいることを嬉しく思ってくれているんだな。

初めて出会ったときには手の届かないほど遠い存在だったアリシアさんたちが、今ではオーバースカイの仲間になってくれている。

アリシアさんたちが親身に面倒を見てくれたからこそ、アリシアさんたちに追いつく事ができた。

今は大切な仲間であるアリシアさんたちだけど、ぼくの中ではずっと尊敬する師匠だ。

そんなアリシアさんたちが仲間になってくれたんだから、それは心強いよね。

「アリシアさん達がそう言ってくれるなら、きつとぼくは何だってできます。アリシアさんたちが師匠で本当に良かった」

「私たちにとってもユーリ君たちが弟子で本当に良かったから、お互い様だね。これからもよろしくね」

「ユーリさんがあたいたちの師匠になってくれた事も本当に良かったっすよ。ユーリさんじゃなかったら、きつとあたいは諦めてたっ

す」

「そうね。ユーリちゃんはとっても良い師匠だったわ。わざわざカーレルの街まで来たのは大正解だったわよね」

メルセデスたちは感慨深そうだ。ぼくやカタリナも相当強くなれたけど、メルセデスたちの成長はものすごかった。

メルセデスたちが弟子になってくれたおかげで、ぼくはさらに強くなる事ができたと思う。

スライム使いであるメルセデスの契約技は、ぼくに新たな考えをもたらしてくれた。

それだけではなく、弟子という存在があったからこそ頑張る事ができた事はいっぱいある。

メルセデスたちと出会えて良かった。アクアとの絆を深めるきっかけにもなったと思う。

「メルセデスたちが弟子になってくれて嬉しいのはぼくもだよ。ありがとう、ぼくに会いに来てくれて」

「ユーリさんに会いに来たのはわたしもですよ。あれは間違いなく運命なんですからっ」

「それを言うならわたしもです……ユーリさんと出会えたことは、わたしの人生を変えてくれましたから……」

ユーリヤもフィーナも偶然の出会いだと思うけど、今ではぼくにとって大切な仲間であり、幸せになってほしい人だ。

ユーリヤを失うかと思ったときは本当につらかったし、だからフィーナが危険に陥ったぼく達を助けてくれた事はずっと感謝し続けると思う。

フィーナにしろユーリヤにしろ暗い過去があるように思えるけど、今はそれを感じさせない明るさを持っている。

2人がぼくと出会ったことを後悔しないように、これからずっと幸せでいて貰おう。

「運命と言えば僕は外せないよね、ユーリ。あの出会いから僕の剣は本当に意味で始まったんだ」

「その運命にはアタシも感謝しているわ。坊ややミーナと出会えたか

「だからこそ、今の楽しさを感じていられるんだもの」

ミーナとの出会いは本当に運命を感じてもおかしくはない。1度目だけならよくある話だろうけど、2度目の出会いは本当にびっくりした。

ミーナやヴァネアのおかげで訓練を楽しんでいる時間が増えたから、ぼくが強くなれた一因としてこの2人は外せないよね。

今は少し差ができちゃったけど、ミーナならきつともつと強くなつてくれる。

そうでなくとも大切な人だけど、競い合う楽しみを教えてくれたのはミーナだから、また切磋琢磨したいな。

「ユーリとアクアの出会いが一番。でも、みんなと出会えたことも嬉しい」

「ご主人と出会えたから、うちは今が楽しいぞ。ご主人は世界一の飼い主だな」

「当然。そしてアクアは世界一のペット」

アクアとノーラという可愛いペットに出会えた事はぼくの人生の中でもそう多くない喜びだろうな。

というか、アクアとの出会いは憶えていないとはいえ、アクアと出会えた以上の喜びは無いと思う。

アクアがいたからぼくは生きることの楽しさを知る事ができたんだ。アクアが世界一のペットだという事は誰にも否定はさせない。

アクアが一番なのは絶対だけど、ノーラは二番だよ。こんなに可愛くて強くて賢いペットなんて、どこを探してもいないだろう。アクアは除くけど。

可愛いペットと一緒に居られることの幸せは絶対にこれからも続くものにするよ。みんなとならきつとできるはず。

ぼくはみんなと出会えたことに改めて感謝を深めていた。だからこそ、何かの始まりを感じるこの異変を、絶対に乗り越えて見せると決意した。

いったんカーレルの街へと帰ってサーシャさんに状況を報告する。ぼくは単なる人型モンスターではない驚異の予感を感じていたの

で、サーシャさんに注意をしつかり呼びかけることにした。

「サーシャさん、今回の依頼で、種族からは想像できない強さを持つモンスターが現れたんです。弱いモンスターだと思つて油断していると事故が起こる程度には強くて。それで、ここからは単なる勘なんですけど、今回の異変は何か大変なことの始まりな気がするんです。サーシャさんも気を付けてくださいね」

「そうですね。個人の勘を根拠として動くことは組合としては出来ませんが、状況を注視していきたいと思いますわ。何かありましたら、エルフィール家の力を使うかもしれないですね」

サーシャさんはぼくの事を信じてくれていてるみたいだ。でも、大きく動くことは難しそうだ。

まあ、その判断は当然と言えば当然だけれど、もしカーレルの街に何かあればサーシャさんやステラさんも危ない。

ぼくは何とかして事態を未然に防げるようにしよう。この街自体はぼくにとってそこまで大切じゃないかもしれないけど、サーシャさんとステラさんの故郷だ。

ぼくはこの街を守ることを心に誓った。

## 83話 異常

ぼく達はいつものようにマナナの森でモンスターの討伐依頼を受けていた。

サーシャさんによると、最近新種の発見が増えているらしい。ぼくが前に出会った異変に関係があるかもしれないので、気を付けて調査をするつもりでいた。

マナナの森はいつもと違う雰囲気で、ピリピリした何かをぼくは感じていた。

しばらく森を探索していると何度かモンスターに出会ったが、新種だけではなく妙に強いモンスターもいた。

やはり何か異変が起こっていると確信できたが、原因ははつきりしなかった。

「みんな、どう思う？ 原因についてとか、これから何が起こりそうとか、思いつくことがあつたら言ってみてくれる？」

「そうね、人型モンスターが現れるとか、モンスターが大量発生とかはこれまでに有ったじゃない。その延長線としてブラックドラゴンみたいな厄介なモンスターが現れるとかはどうよ？」

カタリナの言う事はこれまでにぼくたちが経験したことから素直に考えを進めたものだ。

ぼくも危険なモンスターが発生する事に警戒しているのだけど、どこに現れるか予想がつきづらいのが問題なんだよね。

強大なモンスター相手だと初動が重要な感じがするから、相手に先手を取られる事態は避けたい。

「既に強いモンスターが現れているってのはどうっすか？ 強大なモンスターがいればモンスターが活性化するみたいっすからね」

メルセデスの言う事はとても恐ろしい話だ。その仮説が正しいとすると、ドラゴンよりはるかに強いモンスターが既にいることになる。

ブラックドラゴンはそこらのドラゴンよりよほど強いらしいけど、あのレベルでも相当な大問題だからね。もっと強いとか想像もした



くない事だ。

でも、警戒しておく必要はあると思う。その時にはサーシャさんやステラさんをどう逃がすかが問題になるかもね。

「既にこの状況が異変というのはどうだろう。今起こっている事が前兆ではなくて、本番という事だね。それなら随分と気が楽だけど、樂觀視は避けた方が良くもしいれないね」

アリシアさんの意見も納得できることではある。同じ種族なのに明らかに強さの桁が違うモンスターが現れるなんて相当な異変と言っていいからね。

実際にその説が正しいと楽な話ではあるのだけれど、事態が収まるまで油断は出来ないというのが正直なところだ。

アリシアさんの意見も大事な考えではあるけれど、それを前提に行動は出来ないよね。

ぼくが方針をまとめようとすると、ぼくの警戒網にモンスターが引っ掛かる。一瞬キラータイガーかと思ったけど、細かい姿が違う。つまり、未知のモンスターだ。しっかり警戒しないとね。

「みんな、モンスターの反応があった。念のために警戒しておいて」  
みんなは即座に戦闘できる姿勢に入ってくれた。これでモンスターがやってきても対応できる。

そう考えていると、急に似たようなモンスターが一度に発生した。慌ててぼくはアクア水とミア強化を全力で発動する。

すぐにモンスターはこちらへやってきた。キラータイガーの耳と尻尾が狼の物に変わったようなモンスターで、赤地に黒のまだら模様と耳や尻尾の灰色が全然似合っていない。

それよりも、相手の素早さが問題に感じた。キラータイガーよりよほど素早く、感じる強さからすると、メルセデスたちは守ってあげないといけないかもしれない。

方針をまとめる間もなく、すぐにそのモンスターは襲い掛かってきたので、まずはぼくがアクア水で足止めをする。

その隙にアリシアさんとレティさんが攻撃を仕掛けるけど、風刃では仕留め切れていない。

ハイデイに貫った武器なら十分に通じるみたいだけど、防御力は結構高いみたいだ。

「メルセデスたちは自分の身を守ることを優先して！ こいつら、相当強い！」

「わかったつす！ ユーリさんの邪魔はしないつすよ！」

大体耐久力は分かったので、ノーラやユーリヤもモンスターを仕留めていき、カタリナとフィーナも上手く攻撃できている。

ミーナとヴァネアは余裕をもってモンスターを退治できていたので、そちらは任せてもよさそうだ。

アクアは後衛とメルセデスたちのフォローに入れる位置に居てくれるので、ぼくは安心して攻撃に回る事ができた。

1対1体は強いと言ってもすぐに倒せるくらいのモンスターなんだけど、索敵網にはどんどん増えているモンスターが引つ掛かっている。

今のペースなら十分に倒す速度が上回っているけど、これより早いペースでモンスターが生まれると危ないかもしれない。

ぼくは敵を倒すペースを上げるために、水刃で敵の進行ルートを制限して後衛の攻撃が当たりやすいように誘導した。

カタリナやフィーナはすぐにぼくの意図を察してくれて、どんどん敵の数を減らしていく。

カタリナは契約技をずいぶん使いこなしていて、複数の敵にただの矢を当てるより強い一撃を与えるほどになっていて、今なら前に攻撃が通じなかった敵の大部分を倒せるだろう。

フィーナは相変わらず威力が高い攻撃をしてくれるけど、正確さも随分増したし、連射のスピードも上がった。

2人が攻撃すると1撃で何体ものモンスターが倒れていくけど、それでもモンスターはまだまだいるから倒しきれしていない。

「ユーリ、よくやったわね！ これなら楽に仕留められるわよ」

「わたしがユーリさんのお役に立てる……なんと心地よいのでしよう」

カタリナたちが討ち漏らした敵は前衛の人たちが素早く倒してい

く。

カタリナとフィーナがどこを攻撃するかはかなり分かりやすいけど、モンスターは上手く対応できていないから、こちらが一方的に攻撃できていた。

「僕の剣技にはついて来られないようだね！ これなら十分に勝てる相手だよ」

「ミーナ、油断するんじゃないわよ。モンスターがどんどん湧いてくる以上、他のモンスターが現れる可能性は否定できないわ」

ミーナとヴァネアは出会ってそう経っていないとは思えないほど優れた連携で敵をどんどん葬っていく。

ミーナの素早い動きにヴァネアがうまく合わせていて、ミーナが動きやすいようにヴァネアが敵を間引いていた。

その効果もあってミーナはほとんど速度を落とすことなく敵を倒し続けていた。

ヴァネアはとてもミーナのサポートがうまい。ミーナが倒しにくい位置の相手をうまくさばっている。

ミーナとヴァネアは2人1組で動いているようなものだったが、2人のいるところは2人に任せておいたら十分対処できるだろう。

「風刃が通じないと面倒ではあるけど、この剣があれば十分そうだとレティ、合わせて」

「うん、任せて。わたしたちなら一方的に攻撃できるからね」  
アリシアさんとレティさんは空中に飛び上がって、ぼくたちの対応の隙間を上手くカバーしてくれている。

多分上空から全体像を見てモンスターを倒す必要があるところを判断してくれているのだろう。

モンスターたちは相当素早いとはいえ、アリシアさんやレティさんの速さにはまるで追いついていない。

上空にモンスターが手出しできないことも手伝って、アリシアさんたちは攻撃を受ける事すら想像できない手際でモンスターを仕留めていく。

何度見てもアリシアさんたちの戦いはすさまじい。これがぼくた

ちの憧れた冒険者で、今では仲間になってくれている人だ。

アリシアさんたちにはこれから学ぶことがいっぱいあるだろうな。ぼくももつと精進しないとね。

「うちを忘れてもらっては困るぞ、ご主人。うちの活躍を目に焼き付けていてくれ」

「わたしだつて忘れられたくありませんよつ。すぐにやつつけちゃいますからねつ」

ノーラとユーリヤは戦い方が全然違ふけれど、上手く連携していると思える。

ノーラが素早く大雑把にモンスターを仕留めていって、ユーリヤが細かい敵を掃除していく。ノーラは固めのモンスターでもものともせず倒していく力があるし、ユーリヤは急所を的確につく器用さがすごい。

ユーリヤが罠を仕掛ける時もあるけど、ノーラは上手く罠に引っつかからないように動いているし、ユーリヤはノーラの邪魔をしないように罠を仕掛けている。

いつの間にこんなに連携できるようになったのか気になるけど、それよりも2人に感じる頼もしさが強い。

みんなうまくモンスターを倒せているけど、1体モンスターがメルセデスの方に向かっていった。

ぼくがすぐに倒そうとすると、メルセデスたちが待ったをかける。

「ユーリさん、1体くらいあたいたちで何とかしてみせます！ユーリさんは他の敵に集中していいですよ！」

「私たちだつて出来るんだつて見せちゃうわよ。大丈夫、うぬぼれじゃないわ〜」

「何かあつたらアクアが守るから、ユーリは安心してくれていい」  
アクアの言葉でこの1体だけモンスターを任せることに決めた。

メルセデスは水の膜を防御にも攻撃にも使つて、上手くモンスターの動きを誘導していく。

移動先に水の膜を張つて邪魔したり、隙ができた時に水の膜を縦にぶつけて弱い剣のように使つたり。

そしてメートルが殴って強い一撃を与えたり、メルセデスへ向かう攻撃をかばって防御したり。

だんだんモンスターの動きに慣れてきたメルセデスたちはどんどん一方的に攻撃できるようになり、最後はメルセデスがハイデイに貫った剣でとどめを刺す。

その次にモンスターがやってきた時は苦戦せず倒せるようになっていて、だんだん戦う数を増やしていったメルセデスたちだが、最後には5体同時に倒すことまで出来ていた。

メルセデスたちは本当に見違えた。もうメルセデスたちを弱いなんて言う方がおかしい人だろう。

キラータイガー1体に苦戦していたとは思えない強さになっていて、本当にメルセデスたちの勢いはすさまじい。

この2人ならば人型モンスターも倒せるかもしれないと思えるほど成長していて、戦っている最中にもかかわらずこみ上げるものがあった。

それからキラータイガーに似たモンスターをどんどんぼくたちで退治していつて、ついにそのモンスターが現れなくなつて、最後の1体を今倒した。

異変はこれで終わりかと考えていると、ぼくの背中に寒気が走る。

慌てて索敵を行うと、人型モンスターが複数体いた。今回の異変は本当に大問題かもしれない。

## 84話 戦い

ぼくたちの前に人型モンスターが6体現れた。どれも見たことのあるモンスターだけど、今回の異変と関係があるとするなら、同じ強さだと考えるべきではない。

現れたモンスターはハイスライム、ドリアード、リザードマン、セイレーン、ワーウルフ、スキュラに見える。

ぼくがどう戦おうか考えようとする前に、みんながモンスターを分断していった。

カタリナとノーラがドリアードと、ミーナとヴァネアがりザードマンと、アリシアさんとレテイさんがセイレーンと、ユーリヤとフィーナがワーウルフと、メルセデスとメーテルとアクアがスキュラと戦っていた。

ぼくはみんなを助けようとするけど、ハイスライムらしきモンスターに妨害される。

アクア水と似たような技を使ってきたので、みんなのところに出しされると厄介だと考えたぼくは、すぐにこのモンスターを倒そうと決意する。

試しにまず水刃を目の前のスライムに撃ってみるけど、案の定大したダメージを与えられているように見えない。

やはりただのハイスライムではないな。ぼくは目の前の相手に警戒を深めながらみんなを心配していた。

だけど、目の前の相手を倒さない事にはみんなのサポートをうまく出来ないと確信できたので、今はハイスライムに集中する。

「やっさどこいつを倒して、次に向かいたいよね。でも、どうしようか？ まあ、まずは戦ってみるか」

ハイスライムはこちらに素早く走ってくるけど、ぼくのスピードよりははるかに遅い。ただ、それでハイスライムに優位に立てるわけでは無くて、ハイスライムの防御をどうにか破る手段が必要だろう。

剣で切りつけてみるけど、ハイスライムの体を通過して終わった。単なる物理攻撃が通じないスライムは、アクア以外で初めて見たかも

しれない。

メーテルは頑丈なだけで、ダメージを一切受けないわけでは無いみたいだからね。それでも、そこらの剣士くらいなら無力化できるんだけど。

それよりも、このハイスライムにどうやって攻撃を与えるかだ。殴り合いの様な事を仕掛けても分が悪いだけだから、どうにかハイスライムを倒す手段を見つけないといけない。

ぼくの知識の中でこういう時の対応法は、バラバラになるくらいまで吹き飛ばすこと、完全に蒸発させること、全体を凍らせること。

「なかなか強いハイスライムだね。でも、この程度でぼくは倒せないよ」

蒸発させることは現状では難しいので、まずは凍らせることを試してみる。

アクア水をハイスライムにくっつけてそれを凍らせてみる。上手く行けばハイスライムを凍らせられるはず。

そう考えて実行してみたのだけど、アクア水だけが凍ってハイスライムには影響は出ていないように見える。

次は何かバラバラにするしかないけれど、水刃では威力が足りないので、何か別の手段が必要だ。

幸いにもハイスライムの速度はぼくほどではないので、避けに徹するだけなら簡単だ。

でも、ぼくの中には焦りがあったので、なんとか出来ないかといういろと攻撃を試してみた。

鉄の破片をぶつけてみても普通に飲み込まれて駄目だった。水刃を凍らせてみても単にハイスライムの体を通り抜けるだけ。

何とかバラバラにできないかと考えるけど、手は思いつかない。ハイスライムはアクア水のようなものでこちらに攻撃を仕掛けてくるけど、それはアクア水で簡単に防ぐ事ができた。

水鉄砲のように水を撃つてきてもアクア水で壁を作ればいいし、上から水を落としてきてもぼくは簡単に避けられる。

この状況なら時間を稼いで対策を考えるのがいつものやり方だけ

ど、ぼくは早くみんなを手助けしたいので、時間を稼ぐ気にはならなかった。

「どうしたものかな。このままじゃすぐに倒せないけど、どういう手が出るかな？」

ハイスライムをバラバラにする手段が使えないとなると、残りはハイスライムを蒸発させる手段だけど、どうやってその高温を用意する？ アクア水を蒸発させるのは高温になるとはいえ、それだけでこのハイスライムを蒸発させられるか？

いや、アクア水だけを蒸発させればいいんじゃないか？ 確か、水を急激に蒸発させると爆発するよね。

でも、単にハイスライムの目の前で爆発させてもこいつをバラバラにできるか？

それを考えている時に、ハイスライムの中に入った鉄の破片を見つけた。

さつき水刃を凍らせたなら、ハイスライムの中を通過したよね。なら、いけるはず！

「よし、頑張っていこう！ みんなならきつと大丈夫だから、ぼくがまず勝ってみせるよ！」

ハイスライムを倒す手段を思いついたぼくは水刃を凍らせてハイスライムに放つ。

ハイスライムは避けようとしなから、凍らせた水刃をいくつも潜り込ませることができた。

そのまま十分な数の水刃を取り込ませることに成功したぼくは、凍った水刃を一気に蒸発させる。

念のためハイスライムの周りをアクア水でドーム状に覆って、みんなに被害がいかないように守っておいた。

それでも、蒸発した水刃の爆発はとても大きな衝撃をこちらに伝えてきた。ただ、ダメージを受けるほどじゃない。

ぼくは身を守りながらハイスライムの様子を見る。ハイスライムの体はバラバラになっていて、特に動く様子はない。

念のためにアクア水を使って剣を遠くから突き立ててみるけど、そ



れでも動きはない。

ハイスライムを倒せたと判断したぼくは、みんなの様子を見に向かう。すぐに手助けしようとしたけど、なにかここで手を出すなどいう意思を感じた気がした。

その感覚に従う訳じゃないけど、みんなはある程度優勢に見えたので、危なくなるまでは見ていることにする。

みんなが危なそうなら、みんなの意思がどうであれ、ぼくが手助けするつもりでいた。

そういえば、さっきのハイスライムは全くこちらに話しかけてこなかったな。これも異変の一部なのだろうか。

まあいい。みんなの様子を確認しておいて、アクア水をすぐに放てるようにするか。

方針を決めたぼくはみんなの様子を見守る。まずは一番心配なメルセデスたちを見ることに。

メルセデスたちは上手くスキュラの相手を出来ているように思える。スキュラは触手のような足を振り回して攻撃しているけど、メルセデスが水の膜で防いだり、メーテルがうまくメルセデスをかばったりして、攻撃を受けないようにできている。

アクアはメルセデスにもメーテルにもすぐに近寄れる位置をキープしながらスキュラの前で動きを邪魔している。

「ユーリさんにあたい達だつてやれるって事を教えてあげるつすよ！メーテル、合わせて！」

「わかったわ〜。アクアさんがいるから安心だものね。全力で行くわよ〜」

メルセデスが水の膜を垂直に敵に当ててスキュラの足を切り裂く。バランスを崩したスキュラにメーテルが力をためて殴り掛かる。

スキュラは大きなダメージを受けているようだけど、すぐに足を再生してしまった。

それでも、メルセデスは水の膜を増やしてスキュラの足をどんどん切り裂いていき、メーテルが何度も殴りかかる。

しばらくすると、スキュラの動きがだんだん鈍くなっていて、最

後には動かなくなる。

アクアのサポートがあつたとはいえ、メルセデスたちが中心になって人型モンスターを倒すことができるなんて。

スキュラは人型モンスターの中で弱いようには感じなかった。メルセデスたちは人型モンスターを相手にしても十分にやっていけるかもしれない。

メルセデスたちの成長は嬉しいけど、メルセデスたちは勝てたので、他の人の様子に集中する事にする。

一応メルセデスたちを見ながらでも警戒を払っておいたけど、危なくなっている人たちはいない。

次に大きな動きがあつたのはミーナたちだった。リザードマンの鱗は固いみたいで、ヴァネアは有効打を与えられていない。

そこで、ヴァネアはミーナが剣を当てるためのサポートだけをすると割り切ったみたいだ。

ミーナの剣をよけようとするリザードマンの動きを妨害するようにしている。

ミーナが剣を縦に振れば横から妨害して左右に避けられなくして、横に振れば後ろから下がることや飛ぶことを邪魔する。

どんどんミーナの剣が当たるようになっていき、徐々にリザードマンの体から血が流れ出ていく。

随分このリザードマンは頑丈なものだ。ミーナの剣をまともに受けて両断されないだけでも結構硬いと思うけど、何度も剣を受けてまだ倒れていないんだからね。

「そろそろ終わりだね。頑丈なだけのモンスターは僕の敵じゃなかったみたいだね」

「相手が死ぬまで油断しないのよ、ミーナ。でも、あと少しなのは確かみたいだね」

そのまま先ほどより鋭い剣を振るっていくミーナ。ついに胴体に鱗が全くない部分ができたりリザードマンに対してミーナが思い切り剣をぶつけると、リザードマンは半ばまで切り裂かれた。

それでもリザードマンは反撃しようとするが、即座にヴァネアが手

と尻尾で攻撃して妨害する。

そのままミーナは何度も同じところに剣を振るっていき、ついにはザードマンは真つ二つになった。

ミーナたちも勝てたみたいだ。それにしても、どの人型モンスターも言葉を話さなくて、スキュラ以外は妙に強い。

スキュラにもぼくが気づいていなかっただけで何かあったのだろうか。そういえば、スキュラの足はあんなに早く再生するのだろうか。

前に王都で戦ったアルラウネの触手はすぐに再生したからスキュラの足が治るのも当然だと思っていたけど、ぼくが試したことは無かった。

まあ、考察は後でいい。それよりも、他の人たちの戦いを見ておかないと。

アリシアさんとレティさんは落ち着いて戦っているように見える。

セイレーンとともに空中に浮かび上がり、お互いが空を高速で移動しながら戦っていた。

アリシアさんやレティさんの動きが乱れる瞬間が何度かあり、その様子を詳しく見るとセイレーンが何か声を発したらアリシアさんたちの動きがおかしくなっていた。

つまり、音波のようなものでアリシアさんたちを妨害しているのだろう。でも、アリシアさんたちは全くセイレーンの蹴りなどの攻撃は受けていなかった。

心配しなくても2人は大丈夫だとは感じながらも様子を見ていると、2人の雰囲気が変わった。

「ただのセイレーンではないみたいだね。ちよつとだけ手こずったけど、もうおしまいだよ。風刃の強さを見せてあげよう」

「そうだね、アリシア。もうこのセイレーンの限界は見えた。わたしだけでも倒せるかもしれないけど、しっかりやろうか」

アリシアさんたちの動きが見るからに変わり、セイレーンは次第に追いつけなくなっていく。

セイレーンは音波でアリシアさんたちの動きを妨害しようとするけど、全くアリシアさんたちの動きは乱れない。

よく観察していると、空気の動きがちよつとおかしい気がする。これはきつとアリシアさんの風だ。

ぼくが以前にアリシアさんに提案した、音を消すという事を実行しているのだろう。

それで、セイレーンの音波が全く通じなくなった。そのままアリシアさんたちはものすごいスピードで移動してセイレーンを切り刻んでいく。

短剣で攻撃する分以上の傷があるので、風刃も使っているのだろう。あつという間にセイレーンは倒れていった。

やつぱりアリシアさんたちはすごい。ぼくの尊敬する師匠としての強さはここにあるんだと感じられた。

次はユーリヤとフィーナがワーウルフと戦っている姿に注目する。

ワーウルフは素早く力強い動きをしているけれど、ユーリヤとフィーナはどちらもその動きにしつかりと着いていけている。

最近ではフィーナに後衛に専念してもらったけれど、フィーナの身体能力はものすごいのだ。

ただ、ユーリヤの鉄の糸での攻撃をワーウルフは物ともしていない。ユーリヤに他の攻撃手段があるとはいえ、ワーウルフはよく耐えているな。

ユーリヤは鉄の糸を足止めと割り切ったみたいで、フィーナに攻撃が向かわないようにワーウルフの動きを妨害している。

「ワーウルフにしてはすごいぶん強いみたいですけど、わたしとフィーナさんに敵うほどでは無いでしょうね。そろそろ決めちゃいませうか」

「そうですね……ユーリさんにあまり心配をかけてもいいけませんから……」

ユーリヤが鉄の糸でワーウルフの動きを妨害して、その隙にフィーナが衝撃の力をぶつける。

たたらを踏んだワーウルフにユーリヤは手に持った針状の武器と

蹴りですらに傷を与えていく。

ワーウルフは大暴れするけど、ユーリヤもフィーナも危なげなく攻撃を回避していく。

どんどんワーウルフの動きはゆっくりになっていく。どうやら最後のあがきだったのかな。

ユーリヤが足を攻撃してワーウルフを動けなくすると、フィーナがワーウルフに向かって衝撃の力を放つ。

ワーウルフは見るも無残な姿へと変わっていった。さすがにこれでは命はないな。

ユーリヤとフィーナは上手くコンビとしてやっていけるみたいだ。2人で一緒に居る姿をあまり見てこなかったけど、ぼくの知らないところで仲良くやっているのかな。

いよいよ最後に残ったカタリナとノーラの戦う姿を見る。

相手のドリアードは根や枝を伸ばしてカタリナたちに攻撃するけど、ノーラがカタリナに向かう攻撃を妨害して、妨害し切れなかった分はカタリナが避けていく。

ノーラが殴ったり蹴ったりするけど、ドリアードはそれでも全く攻撃の手を緩めない。

効いているのか効いていないのか、よく分からないけれど、カタリナたちは全然攻撃を食らっていないので、やりようはあるのだろう。「ノーラのおかげで相手の頑丈さは分かったわ。いつでも決められるわよ」

「分かったぞ、カタリナ。ご主人もこちらを見ているみたいだし、さつさと片付けるとするか」

カタリナは弓を構えてドリアードに射かけようとする。ドリアードはそれを見てカタリナに攻撃を仕掛けるけれど、ノーラが根も枝も叩き折ってしまう。

先ほどまでダメージをあまり与えられているように見えなかったのは、ドリアードの耐久を計っていたのだろうか。

そのままカタリナはドリアードに矢を放ち、ドリアードを貫く。それでも、ドリアードはまだ生きていて、カタリナに根や枝を伸ばして

全力で攻撃していく。

ノーラが攻撃を妨害して、カタリナは攻撃を避けながらドリアードを射抜いていく。

カタリナとノーラの息はびったりで、絶対にノーラはカタリナの射線に入らないし、それでもカタリナへの攻撃を防いでいる。

そのまま何度も矢を受けていったドリアードは次第に勢いを失い、ついに息絶える。

カタリナとノーラも勝ったみたいだ。これでぼくたちの前に現れた人型モンスターはすべて倒せた。

それからは他にモンスターが現れることは無く、ぼくたちはカーレルの街へと帰っていった。

人型モンスターが異変の原因だったのだろうか。でも、ぼくはこれで終わりだという実感を得られなかった。

## 85話 支配

ぼくは久しぶりにアクアと2人きりになっていた。みんなは色々な用事で出かけている。

異変は完全に落ち着いたわけでは無いけど、ぼくたちが出ずっぱりにならなくてもいい程度には安定している。

アクアと一緒に朝ご飯を食べて、2人で一緒にのんびりとしていた。アクアはいつものようにペット用の餌を食べていたんだけど、ぼくたちで同じものを食べてみてもいいかもね。

昼は同じものを食べることにしようか。アクアは味があまり分からないみたいだけど、同じものを食べるのもきつと楽しいからね。

「アクア、昼ご飯は僕と同じものを食べてみようか。たまにはこういうのも良いでしょ?」

「別に何でもいい。でも、ユーリが用意してくれるのなら喜んで食べる」

アクアは本当にご飯に興味がなさそうだ。でも、ぼくが用意したなら喜んで食べるなんて、とっても可愛らしい言い方だ。そんなことを言われたら頑張って用意しないとね。

でも、昼までにはまだまだ時間があるから、アクアといろいろな遊びをしよう。

何が良いかな。そうだ。アクア水を使った遊びがいいかもね。球遊びの応用みたいな感じで、出現させたアクア水を追いかけて触ってもらおうとかどうだろう。

アクアはぼくがアクア水を使うと喜んでくれるし、そういう遊びだっけと楽しんでもらえるはずだ。

アクアに思いついた遊びを提案すると、すぐに賛成してくれた。「ユーリとアクア水を使って遊べる。嬉しい。遊びにもアクア水を使うのなら、ユーリはいつでもアクア水を操作できる」

アクアはとっても明るい顔でそんなことを言うので、ぼくまで嬉しくなってくる。

アクア水はアクアがくれた大切な技だから、ずっと使ってもらえる

のはぼくも喜ばしいと思うけど、アクアにとってもアクア水は大切な技だつてことだよね。

やっぱりアクアと契約したのは正解だつたよね。強くなれたことはもちろん大切だけど、何よりこうしてアクアとのつながりが感じられることが良い。

何度でも考えている事だけど、アクアはぼくにとつて何よりも大切な存在なんだ。

他にも大切な人はたくさんいるし、その人たちも大好きだけど、一番を決めるのなら間違いないアクアだ。

アクアと一緒に居る時間はいつだつて楽しいし、アクアもぼくと一緒に居ることを喜んでくれている。

進化する前からとつても大切な存在だつたアクアが、進化することですらにぼくと近い存在になつたと感じられる。

アクアが進化してくれた事は本当にいい事だつた。アクアとこうして会話できること、進化する前には出来なかつた色々な遊びができること、アクア水という大切な技が使えるようになったこと。

何もかもがぼくにとつて大切なことなんだ。

ぼくはこれまで色々と変わってきたけど、アクアと一緒に居る幸せだけは何があつても変わらないよね。

「それじゃあ、試しに1回やってみようか。アクア、とつてこーい！」  
球遊びと同じ掛け声にしちやつたけど、もうちよつと別の言い方もよかつたかもね。

それはさておき、アクアの正面にアクア水を出現させると、アクアは即座に右手でアクア水に触れる。

少し遠くに出現させると、アクアは走つてアクア水のもとへ向かつていく。

後ろに出現させたら気づかないかと思いきや、即座に後ろに振り向いてアクア水に触れていく。アクアはアクア水がどこにあるか感知できるのかな。契約技つてそういう物なのかな。まあいいか。

そのままアクアの上の方にアクア水を出現させると、アクアは跳び上がつてアクア水に触れる。



ちよつとイタズラしてアクアのジャンプで届かないだろう所にアクア水を出してみると、アクアは何度も跳びあがっていた。

「ユーリ、いじわる。そんな事をするなら、後でアクアもいじわるするから」

アクアは特に表情を変えないままぼくを責めてくる。責めているというか、からかっているのかもしれないけど。

それにしても、アクアはいったいどんな意地悪をするつもりなんだろう。アクアの言い方がとても可愛らしかったこともあって、すつごく楽しみになってしまう。

それからもしばらくアクア水に触れらせる遊びを楽しんだ後、アクアはこちらに近寄ってきてぼくを後ろから拘束する。

さつき言っていた意地悪だろうか。どんなことをされるのかワクワクしながら待っている、アクアに上の方を向かされてしまう。

そのままアクアにぼくの口を開かれて、ぼくは上を向いたまま口を開けているという、なんだかひな鳥か何かのような姿になってしまった。

「ユーリ、これから何をされるか分かる？ ユーリにアクアをいっぱい刻み付けてあげるね」

ぼくにアクアを刻み付けられてしまう。一体何をされてしまうのだろう。もともとぼくにはアクアが刻み付けられていると言っていると思うけど、これ以上って一体どうなってしまふのだろう。

でも、アクアになら何をされたって良い。ぼくがアクアを信じていることもあるし、アクアになら裏切られても構わないと思える。

アクアにこのまま殺されてしまったとしても、アクアと一緒に居たことを後悔なんてしない。ぼくはアクアがいたからこそ幸せを知ることができたんだから。

そのままアクアが何をするのか待っていると、アクアはぼくの口の上に青くて透明な指を持つてくる。

アクアの指をきれいだと思いつながら見ていると、指の先からぼくの口元へ水のようなものが落ちてきた。

そのまま雫はぼくの口に入る。甘くてまろやかな味がして、いくら

でも飲みたいと思える程の美味しさだった。

「ユーリ、アクアはおいしい？ ユーリの顔をみたら何も言わなくても分かるけど、ちゃんと聞かせて」

この水つてもしかしてアクアの一部なのかな。アクアが自分からわざわざぼくに飲ませるくらいなんだから、アクアに負担は無いと思うけど、少し心配になってしまう。

「美味しいよ……これまでに飲んだどんな物よりも美味しい。でも、アクアはぼくに飲まれて負担だったりしない？」

「ユーリが1億人居たってアクアを枯れさせるには足りない。だから、安心してユーリはアクアを味わっておくといい」

アクアを味わうなんて言い方をされると、なんだかいけない事をしているような気分になってくる。

アクアはそのままぼくの口の上にある指からもっと水を出し始めた。ぼくはアクアの一部である水をしばらくの間飲んでいた。

そうしていると、アクアは水を指から出すことを止め、ぼくの拘束を解除する。

少しの名残惜しさを感じていると、アクアはとんでもない事を言い出す。

「ユーリ、これからこの水を飲みたければ、アクアにおねだりすること。できるよね？」

びっくりするくらい美味しかったからもっと飲みたいことは事実だけど、おねだりしないといけないのか。

まだ喉は乾いているし、もう少しだけアクアから出る水を味わっていたかった。

覚悟を決めて、アクアにおねだりすることにする。とつても恥ずかしいけれど、仕方ない。

「アクア、アクアの水をもっと飲みたい。飲ませてほしい」

アクアはぼくの言葉を受けてにやりとした顔をした後、ぼくの口に指を突っ込んでくる。

勢いよく指を入れられたとはいえ、アクアが気を使ってくれたのか苦しさや痛さは全くない。

でも、アクアの指が口の中にあるのに、アクアの水は出てこなかった。思わずアクアの顔をじつと見ると、アクアはとても楽しそうな顔でこちらに要求を告げる。

「ほら、アクアの体液が飲みたければ、アクアの指を吸うこと。それができないなら、二度と飲ませてあげない」

体液って言い方をされるとなんだかおかしな物のように聞こえてしまう。

アクアから出てくる水はこれまで口にした物と比べる事すらできないほど美味しいので、二度と飲めないのは嫌だった。

これからこの水を飲みたければアクアの言う事を聞くしかない。出来るだけ我慢するつもりではあるけれど、大事なものをアクアに握られてしまったかもしれない。

まあ、特に罪のない人を殺すみたいなどんでもない要求をされない限りはアクアの願いはかなえてあげたい。

だから、大したことは無いはずだ。そう思いたい。でも、アクアの顔がなんだか悪い物に見えて、少し怖い。いや、アクアだから大丈夫。しばらくの間葛藤していたけど、ここで断ったらアクアが悲しむという考えが浮かんだ時点でぼくのすることは決まった。

アクアの指に吸い付くと、ぼくの吸う動きに応じてアクアから水が出てくる。

飲み物を吸う容器の中にこういうものが有った気がするけど、思い出せない。

それよりも、ぼくが飲みたいタイミングで美味しい物が出てくる感覚が先ほどよりさらに美味しいと感じさせてくる。

美味しさと同時になんだか安心感も湧き上がってきて、この感覚に依存してしまいそうにすら感じる。

しばらくして喉の渇きが収まったのでアクアの指から口を離す。

またこの水を飲むのなら、何か名前を付けた方が良くもしい。アクアジュースとかどうだろう。

それよりも、次は普通に飲みたいよね。なんだかいけない事をしてる感覚に襲われたので、できればコップとかに入れておいてほし

い。

「ユーリ、よくできたね。えらいえらい。それで、またアクアの体液を飲みたい？」

「う、うん……でも、次は別の飲み方をさせてほしいな。お茶とか水みたいな飲み方が良いよ」

「ユーリはわがまま。でも、いいよ。ユーリが望むのなら、そうしてあげるね」

アクアは納得してくれたみたいだ。でも、今のアクアがした表情がびつくりするくらい妖艶で、なんだか目を引き寄せられてしまった。その姿を見たアクアが楽しげな顔をする。

「ふふ。ユーリがアクアの手のひらに居るのは楽しい。また何か面白い事を考えてみようかな」

さっきまでのぼくはアクアの言うようにアクアの手のひらの上だったと思う。

だけど、またこんな気分を味わうのは出来れば勘弁してほしい。アクアが楽しそうなのは嬉しいけど、ドキドキしすぎてどうにかなくなってしまいそうだから。

それからぼくが料理をして昼ご飯を用意して、アクアと一緒に食べた。

その時にぼくの飲み物として、アクアジュースをコップに注いでもらった。アクアジュースはとっても美味しいだけではなくて、料理の味も引き立ててくれた。

「これ、すっごく美味しい。アクア水を料理に使っても美味しい物ができたけど、アクアジュースは別格かもしれない」

「そう呼ぶことに決めたんだけ？ また何度でも飲ませてあげるから、アクアをしっかりと味わって」

アクアにはこれまで色々助けられてきたけど、これ以上アクアと一緒に居ると、ぼくはアクアが離れた時におかしくなってしまうかもしれない。

これまでのようにアクアと離れて他の人と出かける事が、できなくなってしまうらどうしよう。

ら。いや、きっと大丈夫だよね。ぼくだって成長しているはずなんだか

## 裏 法悦

アクアには近頃カーレルの町周辺で起こっている異変の原因に心当たりがあった。

アクアにとつて忌々しいプロジェクトU：Re。その影響がカーレルの町周辺にまで現れたのだとアクアは判断していた。

それに対処できるだけの力はアクアには当然あった。それでも、アクアはプロジェクトU：Reに対して近づこうとはしていなかった。

心のどこかで思い出したくもない過去を避けようとしていた事、そしてもう一つだけ理由があった。

アクアはどちらの理由からもプロジェクトU：Reにかかわる人を支配する形でこの事件を解決するという手段を選ばないでいた。

アクアは支配している人間の記憶から、ある程度プロジェクトU：Reの現在の状態を割り出していた。

かつてはオメガスライムの創造を計画していた。それによってアクアは現在の姿に変化するきっかけを得て、アクアとユーリとの出会いもプロジェクトU：Reが関係していた。

だが、現在のプロジェクトU：Reは最強のモンスター、あるいは最強の契約者を生み出すことを目標としているらしい。

それ以上の事はプロジェクトU：Reの関係者を支配することでは知る事ができないと判断したアクアは、そこで調査を打ち切った。

ただ、プロジェクトU：Reの影響がカーレルの町周辺にまで及んでいるから、アクアはユーリを守るためにユーリの仲間たちを強化することに決めた。

ユーリの命が守られているだけでは真にユーリを守っているとは言えない。ユーリの心も守られていなくては。

そう考えたアクアはユーリの大切な人たちが傷つく姿をユーリに見せないと決めた。だから、オーバースカイとオリヴィエたちとサーシャが強化されることになった。

ステラの事も強化したいと考えていたが、流石に違和感を隠しきれ

ないだろうと判断した。その代わりに、ステラを守るための手段を用意していた。

そしてカーレルの街からほど近いマナナの森にもプロジェクトU：Reの影響が訪れる。

ユーリはこの異変から何かを感じ取っているようで、いつもより気を張っていた。アクアはその姿を見て若干悲しくなるが、それでもこの問題を解決する覚悟は決まらなかった。

そのままプロジェクトU：Reの成果であるモンスターが現れて、オーバースカイとして戦闘に入っていく。

ユーリはメルセデスたちの事を強く心配しているようだったので、メルセデスたちがどれだけ強くなったのかユーリに見せつけるとアクアは決めた。

そのままメルセデスを操作してキラータイガー△と呼ばれているモンスターを倒す姿をユーリに見せた。

ユーリは仲間たちとの戦いに感慨深さのような物を覚えているようで、アクアもユーリの嬉しそうな姿が感慨深かった。

アクアが進化する前のユーリは暗い顔をしている時間が今よりもはつきりと長かったから、アクアは自分が進化したことでユーリを喜ばせられているように思えた。

ユーリの周辺の間人を支配してしまった事は苦しいままだったアクアだが、それでもユーリの姿を見る喜びの方が大きかった。

そしてユーリたちが通常の実験モンスターを倒したころ、人型モンスターが複数現れる。

6体も人型モンスターが現れたにもかかわらず、ユーリはまず自分がどういう行動をするかを気にしているようだった。

その姿を見たアクアは、ユーリの周りの人たちで人型モンスターを倒す姿を見せることを決める。

ユーリは基本的に自分が行動することで状況をどうにかしようとする。アクアはユーリに周りの人に頼ることをもつと覚えてほしいと考えていた。

だから、ユーリがハイスライムφを倒すまで自分たちと人型モンス

ターとの決着を遅らせていた。

アクアがオーバースカイのメンバーを操作していないのならば、すでに人型モンスターはすべて倒されていたはずだった。

一番弱いメルセデスたちでさえ、十分に対峙するモンスターを倒せる力を持っていた。

それにはアクアによる強化の影響もあつたが、メルセデスたち自身の努力が最も大きかった。

オーバースカイのメンバーを制御する中でアクアの胸に痛みが走るが、それでもユーリのために皆の力を見せつけた。

スキュラ $\gamma$ と戦っているメルセデスたちには、これまでユーリたちに教わったことをしっかりと使っている姿を演出させて、その上で危なげなくスキュラ $\gamma$ に勝利させる。

リザードマン $\epsilon$ と戦うミーナたちには、ミーナの鋭い剣技を中心に披露させて、ミーナの剣の腕をアピールさせた。

セイレーン $\beta$ との空中戦でアリシアたちに彼女らがユーリの言葉を受けて開発した技を使わせて、ユーリのオーバースカイへの影響を実感させる材料を目指した。

ワーウルフ $\alpha$ と対峙するフィーナとユーリヤには、ユーリと関わらない時間でのオーバースカイ同士の関係性を意識させることにした。

ドリアード $\epsilon$ と戦闘しているカタリナはアクアが操作していたが、ノーラは上手くそれに合わせてくれていた。アクアはノーラとの絆を実感していた。

すべてのモンスターをユーリの見ている前で倒すことに成功したアクアは、ユーリが人に頼ることを意識できたか確かめようとしたが、成果はよく分からなかった。

それでも、ユーリが1人で抱え込まない未来のために、これからもアクアはユーリ1人で事態を解決させないと決めていた。

そうすることで、ユーリに頼ってもらえるようになる。アクアは明るい未来を思い描いていた。

それから少したって、アクアはユーリと2人きりになる時間を作った。



ユーリと一緒に居られる時間が幸せであることが最も大きい理由だったが、ユーリの幸せを計りたいという思いもあった。

アクアがユーリの周囲をすべて操ることになってしまった事は、アクアにとって悲しい出来事だった。

それでも、ユーリが幸せであるのなら、アクアはこの悲しさを忘れられると確信していた。

ユーリの周りの人を大切に思う気持ちは嘘ではないけれど、アクアにとってはユーリが最も大切な存在だった。

だから、ユーリとアクアの2人で幸せでいられるのなら、それだけでいいはず。アクアはそう信じていた。

ユーリと過ごす中で、ユーリが自分のご飯に対して気を使っている時には、アクアは若干の申し訳なさのような物を感じた。

アクアにとって食事は本来必要では無いし、味だって気にしていない。ユーリをごまかすためだけに食事をとっているようなものだった。

アクアはそれでも、ユーリの手が入った料理を食べられる時間は嬉しいと感じていたので、気が付いたらユーリの手料理をねだっていた。

ユーリは快くアクアの提案を受け入れていたが、アクアは味をほとんど感じていない事を寂しく感じた。

ユーリヤの体ならば味を感じられていられるけれど、アクア自身はユーリの料理を最大限楽しめない。

ユーリのすべてを感じていたいアクアにとって、現状はあまり気分の良い物ではなかった。

だが、スライムの体に味覚など必要ないし、アクアの体で味を感じる手段もよく分らない。

アクアは自分の体を改造することはほとんどできなかったから、悔しさのようなものが胸に重く詰まっていた。

全く自分の体を変えられないという訳ではないので、その分をユーリを喜ばせるために使うとアクアは決めた。

次にユーリがアクア水を自分と遊ぶために使うと言い出したとき、

アクアは喜びと悲しみを同時に感じていた。

ユーリがアクア水で遊ぶことを提案してくれたのは嬉しい。でも、そのきっかけはアリシアたちを操る前の出来事だ。

アリシアと一緒に出かけたユーリがアリシアの提案で契約技を使った遊びをしたことが始まりなのだろう。

アクアはその出来事を印象深く覚えていたので、アリシアの過去を思い出して悲しくなった。

だけど、ユーリがせっつかく自分のために遊びを提案してくれたのだから、全力で楽しむ。

そのために、アクアはユーリの出現させるアクア水をしっかりと追いかけていった。

その遊びの中で、ユーリがイタズラのようにアクアが普通にジャンプすると届かない位置にアクア水を出現させた。

アクアはそれに届くように飛ぶことなど簡単にできたが、ユーリを楽しませることと、自分の正体を隠すことを考えて、アクア水の高さに届かないふりをした。

ユーリに弄ばれるというのも楽しくはあつたけれど、アクアはユーリを弄ぶ側の方が楽しいと感じた。

なので、アクアは仕返しという名目でユーリを弄ぶことに決めた。ユーリを拘束して上を向かせて、自分の一部を飲ませていく。

ユーリが美味しく感じるように細かく調整していた成果として、ユーリはアクアから飲まされる体液を大変な美味と感じているようだった。

それに満足しながらも、アクアはさらにユーリを弄ぶために、ユーリにもっと飲みたければおねだりするようにと言った。

ユーリはそれに葛藤している様子で、それを見たアクアは途轍もない興奮に襲われていた。

ユーリが自分の事を飲んでいて、それを美味しいと思っただけでもとてもいい。

なのに、ユーリのもっと飲みたいから恥ずかしい事をしないといけない様子をアクアはとても可愛らしく感じていた。

そしてユーリにねだられたアクアは、ユーリをさらに弄ぶために、ユーリに自分の指を吸わせて自分の体液を飲ませることにした。

ユーリが必死に自分の指に吸い付く姿にアクアは大変満足していた。

これからは、ユーリが自分の一部を飲むことを餌にユーリを弄ぶことができる。そう確信できたアクアは自分の表情を制御できなかった。

ただ、ユーリは自分の表情に見惚れているような反応をしていたので、アクアはまた興奮を高めていた。

それから、ユーリとともにユーリの作った昼食を食べていたアクアは、ユーリの飲み物としてユーリがアクアジュースと名づけた自分の一部を飲ませていた。

アクア水もユーリに飲ませることを考えて調整していたが、アクアジュースはユーリが飲むためだけのものだ。

ユーリの中に自分の一部が入っていく感覚、ユーリが自分で染まっていく感覚、ユーリを支配できているような感覚。

アクアはそれからずっと楽しくて、いずれユーリのすべてを自分で染め上げたいと感じていた。

ユーリの体も心も自分が支配することで、きつとユーリは幸せになつてくれる。

幸せな未来を想像している間だけは、アクアは大切な人を操作している悲しさを忘れられた。

## 86話 危機

最近、カーレルの街で契約者の存在が増えてきているらしい。サーシャさんからの情報だ。

それなのに、契約モンスターが見当たらない事すらあるのだとか。フィーナの同類かもしれないと考えたけど、契約の証自体はあるらしい。

一体どういう事なんだろうか。モンスターと契約しているのに別々に行動しているとか？

いや、考えていてわかる事でもないか。ぼくは考えを放棄していつものようにマナナの森へ向かう。

マナナの森では、もうこれまでとはずいぶん生態系が変わっているように思える。

これまでにいたモンスターに見かけなくなった物がいたり、これまでいなかったけど今ではよく現れるモンスターもいる。

異変が収まって定着したという考え方もできるらしいけど、ぼくには異変がまだ続いているように思えた。

ぼくたちは慣れた様子でモンスターを倒していくことができている。

これまでよりモンスターが強くなったことで、一般的な冒険者は廃業した人や死んだ人も多いためだけに、新たに契約技を覚えた人や、別の場所から来た契約者も増えている。

でも、このまま進んでいて大丈夫なのだろうか。少し不安になった。

「みんなはこれから、この異変がどう進んでいくと思う？ 契約者の数が増えている事も関係があるのかな？」

「そんなことを言われたって分かんないわよ。あたし達が考えても仕方ないんじゃないかしら？ それよりも、モンスターの倒し方を考えた方が良くないんじゃない？」

カタリナの言う事はよく分かる話ではあるんだけど、受け身のままでいると対応が後手に回りがちだから、できる事ならば先手を取りた

い。

学者ではないぼくたちが考えても仕方のない事かもしれないけれど、何か分かってくれればという思いは消えない。

みんなが無事でいられるために、できる事があるならしたいんだ。

「モンスターは今のところある程度どういう強化かはすぐに分かるからね。大事なことではあるけれど、基本を守っていれば良いようにも思うかな」

「ま、分からない話じゃないわね。固いモンスターは固いだけだし、動きが良いモンスターはそれだけ。特殊な力を持っているなら身体能力はいつもと同じ。例外があるなら危険ではあるけれど、今は見つかっていないものね」

今まで現れた特殊なモンスターはどれもある特定の能力だけが強化されているものが多かった。

見た目が明らかに違うモンスターは強いけれど、それは新種に出会ったときと同じ対応をするだけだ。

カタリナの言う例外には気を付けたいところだけど、できることならば根っこを断ちたいのだ。

「どんな敵が現れたとしても、僕たちならきつと勝てる。何せ僕に勝ったユーリがいるんだからね」

「言いたいことは分かるけれど、油断は禁物よ。まあ、アタシのような人型モンスターを超えるモンスターは今のところ同じ人型モンスターだけ。数に気を付けさえすれば大丈夫なはずだけど」

実際問題今のところは苦戦らしい苦戦はしていないから、ミーナたちの言う事にも納得は出来る。

でも、何か大きな問題の断片が今の異変なのではないかという感覚がぼくの中にある。

根拠は説明できないのだけど、何か大変な事が起こってしまうのではないかと思えてならないのだ。

それでぼくの大切な人に何かが起こってしまう事は絶対に避けたいので、警戒をしているんだよね。

「弱いモンスター相手でも、油断は禁物だよ。弱さを装うモンスター

がないとは限らないからね。それに、簡単に勝てると思い込んでしまおうと、手を抜く事になりかねないからね」

「そこは安心してくれていいよ、ユーリ。僕だってこれまで冒険者をやってきたんだから、敵を甘く見たりはしない。ちゃんと本気で戦うよ」

「いざとなったらアタシがいるから、ミーナの事は任せておいて。ミーナは坊やに良いところを見せたいのよ」

2人が？を言っている感じはしないから、そこまで心配はしなくても大丈夫かな。ミーナたちに傷ついてほしくないから、つい余計なことを言ってしまったかもしれない。

でも、ぼくだって油断しないようにしないとね。今のところ異変で現れたモンスターはどうとでもできる存在ばかりだった。

けど、ブラックドラゴンやハイデイと一緒に戦った亀型モンスターみたいな存在が現れたら大変だ。

ブラックドラゴンは種族名がはっきりしているのに、戦力を見誤ったとは思えないメンバーで討伐に向かう事になっていた。

もしかしたら、今回の異変と同じようなことが起きていたのかもしれない。ハイデイたちは何も言わなかったけれど、その可能性だってあるはず。

だから、あんなに苦戦することになった。そう考えれば納得のいく話ではある。

その仮説が正しいとすると、とてつもなく大きな何かが動いていることになってしまう。ぼくは改めて気を引き締めなおした。

「ユーリさん、転移装置ってモンスターの一部を利用して作られるっすよね。似たような何かカーレルの街にあって、その影響って可能性はどうっすか？」

「メルちゃん、えらいわ。ちゃんとユーリちゃんの言う事を考えたのね」

確かに転移装置はモンスターの能力を利用して作られているらしい。モンスターの素材から上手くモンスターの能力を引き出しているそうなんだ。

そうなる、サーシャさんに以前聞いた、強大なモンスターがいると周囲のモンスターが活性化するという話。それと関係があるかもしれない。

それにしても、今の言葉でメルセデスがよく勉強しているというのがとてもわかる。メルセデスの成長を改めて感じられて、ぼくは嬉しい。

でも、実際のところはなんだろう。カーレルの街の周りで起こっているのは事実だけど、カーレルの街が中心とは限らない。

他の街の情報はぼくは知らない、正しいかどうかの判断ができないでいた。

実際にモンスターの死体を利用した装置が原因の場合、転移装置がきつかけの可能性もあり得るかもしれない。

そうだとすると、転移装置をどうにかしないといけない。ハイディたちと気軽に会えなくなってしまうけど、カーレルの街を守らないと。

まあ、今の仮説が正しいとは限らないから、まずは情報を集めるところからだ。他の街ではどうなのかとか、サーシャさんに聞いてみる必要があるかもね。

「メルセデス、とてもいい考えだよ。正しいかどうかは分からないけど、仮説の一つとしてちゃんと考えられている。立派になってくれて嬉しいよ」

「ユーリさんに褒められたっす！ いやメルセデスちゃんの成長は著しいっすね！ これもユーリさんに弟子入りしたおかげっす！

ユーリさんはスケベっすけど、立派な師匠っすよ！」

「スケベは余計よ。でも、ユーリちゃんがいなければ今のメルちゃんは絶対にいない事は間違いないわ。メルちゃんも私も、ユーリちゃんには感謝してるのよ」

ぼくが良い師匠でいられたのだとすると、アリシアさんとレティさんのおかげなのは間違いないし、メルセデスたちが良い弟子だったことも大切な要因だ。

メルセデスたちは素直に言う事を聞いてくれるし、目いっぱい努力

をしている。そうじゃなかったら、絶対に彼女たちはここまで成長できなかつた。

メルセデスたちと出会えたことは本当に嬉しい出来事だった。だからこそ、今のこの時間を守りたいんだ。

「ユーリ君、念のために言っておきたいことがある。この異変が人為的なものである可能性だ。モンスターを生み出す手段を生み出した人間が、それを利用して強いモンスターを発生させているというのはどうか？」

「ありえない話じゃないね、アリシア。モンスターがどうやって生まれるかなんて、わたしたちにも分からない。だけど、それが絶対に分からない事を意味するわけじゃ無いからね。気を付けておいて損はないかもしれないよ、ユーリ君」

アリシアさんたちの言うことが事実だとすると、悪意を持ってカールの街を危険にさらしている誰かがいるという事だ。

それが正しいのならば、ぼくはその人たちを絶対に許すことはできない。ぼくにとって大切な人たちを傷つける可能性を生んだことを、身をもって後悔させてやる。

まあ、まだ仮説の段階だ。誰とも分からない人を恨むことは優先するべきことでは無いかな。

もし本当の事だったならば、殺してでも止める必要があるだろうけれど、自然現象や偶然の可能性だって否定はできない。

安易に犯人探しをするべきではないだろうから、慎重な行動が必要だ。

「ユーリさん、怖い顔をしちやってますよっ。落ち着きましたよっね。怒りは冷静さを奪うものです。わたしはユーリさんの明るい顔が見たいですよっ」

「そうですね……ユーリさんが抱え込む必要はありません。わたしたちだって、ユーリさんの支えになる事が出来るんですから……」

ユーリヤたちの言葉がぼくを落ち着かせてくれた。そうだよね。アクア水の強みは取れる手段の豊富さだ。

怒りに目をくらませてしまうと、アクア水を生かしきる事ができな



い。それはアクアの契約者として、ぼくがやってはいけない事だ。それに、今はみんなが無事だから、怒りでみんなを危険にさらす可能性を増やすわけにはいかない。

みんなが大切だからこそ、簡単にみんなの事で怒ってはいけないんだ。

「ユーリ、安心して。何があってもアクアが皆を守ってあげる。アクアなら、ユーリたちを守る事なんて簡単」

「そうだぞ、ご主人。うちだっているし、そこまで心配しなくても良いぞ。ご主人を悲しませるような事には絶対にさせん。お礼は甘えさせしてくれることでもいいぞ」

アクアたちがみんなを守ってくれるなら安心だ。アクアがこれまでみんなを守ってくれていたから、ぼくたちはこれまでの戦いを乗り越えてこられた。

ノーラだつてとっても頼りになる。そうだよね。ぼくはもう1人じゃないんだ。みんなでこの問題を乗り越えていけばいいんだ。

「ユーリ、嬉しそう。大丈夫。ユーリと一緒に居る幸せを奪う事なんて絶対に許さない。ユーリはこれからもアクアと幸せに過ごす」

アクアもぼくと同じ気持ちでいてくれていた。アクアやみんなとずっと一緒に過ごすために、ぼくとみんなで頑張っていくんだ。

ぼくは改めてみんなと幸せに過ごす決意を固めて、今日依頼されたモンスターを倒していった。

そしてカーレルの街へ戻ると、街がモンスターに襲われていた。街の中にモンスターたちが入り込んでいる。サーシャさんとステラさんは大丈夫なのか!?

## 87話 火急

カーレルの街が大勢のモンスターに襲われている。ぼくは慌ててステラさんとサーシャさんの無事を確かめようとする。

「2手に分かれよう！ アリシアさん、サーシャさんの事をお願いできますか？」

「任せておいて。レテイ、そしてミーナさん達も行こう。私が道を切り開くから、着いてきて」

「分かった、アリシア。全速力で行くから、ミーナさんたちは遅れないようにね」

「了解したよ。ユーリ、こちらは任せてくれていいから、ステラさんを守ってあげてね」

「坊や、無理はしないようにね。いざとなったらみんなで逃げましょう」

アリシアさんの言葉通りに、アリシアさんとレテイさん、ミーナとヴァネアの4人にサーシャさんのもとへと向かってもらい、残りはステラさんの家へと急行した。

ステラさんは特に戦闘能力を持たない人なので、ぼくがアクアを抱えて先行し、他の人たちにはモンスターを倒していざという時の退路を確保してもらおう事にした。

「アクア、行こう。みんなはモンスターを間引きながら来てほしい。ステラさんが危なそうなら逃げるつもりだから、その時のために逃げ道が欲しいんだ」

「ユーリ、急ごう。ステラはアクアが守ってあげるから、ユーリは全力で走って」

「あたしたちに任せておきなさい。ステラさんの事、ちゃんと守るのよ」

「ご主人、武運を祈るぞ。後でうちを目いっぱい構ってくれよ」

「ユーリさん、任せてほしいっす。あたいとメートルでこっちの人を守るっすからね」

「そうね。また皆で楽しい時間を過ごすためにも、負けられないわ

」

「フィーナさん、出来るだけすぐにユーリさんに追いつきましょうねっ」

「そうですね……ユーリさんなら大丈夫でしょうが、手間取ってはいられません……」

みんなしつかりした顔をしていて、任せても大丈夫だと信じられた。ぼくはぼくの仕事を果たすぞ。

ぼくはアクアをお姫様抱っこしてミア強化とアクア水をまとって全力でステラさんの家へと駆け抜けていく。

道中のモンスターは進行方向に居るものだけを水刃で切り裂いていった。

すぐにステラさんの家に着いたけど、まだステラさんの家は無事なようだった。

急いで家の中へと入り、ステラさんを探す。ステラさんは自分の部屋に居て、ぼくの顔を見ると明るい顔になってくれる。

良かった。ステラさんの無事が確認できて。でも、ここからどうするのが良いだろう。

「ユーリ君、街の様子はどうですか？ 混乱していることは分かるのですが、家については様子が分かりづらくて」

「ぼくも今来たばかりで詳しいことは分からないんですけど、街の中にも結構モンスターが入り込んでいます。いざという時に逃げられる準備をお願いします」

ステラさんはぼくの言葉を受けて少し思索しているようだったけど、すぐにうなずく。

ステラさんが逃げてくれるのなら、最悪この街を放棄する事ができる。そうならない方が良い事ではあるけれど、選択肢が増えたのは大きい。

「ユーリ、ステラの事はアクアが守るから、ユーリは他の人たちを助けに行つて。1人を守る事くらい簡単だから、みんなを助けてあげて」  
「分かった。アクア、任せたよ。さて、みんなはどのあたりに居るかな」

ぼくはアクア水を霧状に広げて、みんなの居場所を探ることにする。

契約技を使っているらしき人の反応がいつぱいあって、なかなかあたりを付けることが難しかった。

ただ、オーバースカイのメンバーとは比較にならない弱さの技がほとんどの様なので、そういう場所はハズレと判断していく。

しばらく探していると、大勢のモンスターの傍にみんなの反応があった。苦戦はしていないようだけど、すぐに合流したかったので急いで向かう。

「契約技があればモンスターなんて簡単に倒せるんじゃないかなかったのかよ。……ぎゃあああー!」

「なんで俺の技が使えなくなってるんだよ!? た、助けてくれえ……」  
なんだか結構苦戦している人たちが多岐みただけど、冒険者の様なので通り道に居るモンスターを倒すくらいで干渉はそこまでしない。

一般市民を助けないとこれからの生活に困るだろうけど、冒険者は自己責任だし、何より最近流入してきた人なので、戦力として重要ではない。

みんなと合流した後で、余裕があれば助けようとは思うけれど、まずはサーシャさんの安全が第一だ。

ここで関係ない人を助けようとしてサーシャさんに何かあるような事は絶対に避けたい。

全く心が痛まないわけでは無いけど、ここで優先順位を見誤るわけにはいかない。

ぼくは冒険者たちから見つかっていないので、見捨てたという評判が足を引っ張ることもないはずだ。

まずは退路を確保していたみんなと合流する。その後、モンスターを減らしながらサーシャさんのもとへと向かう。

モンスターを蹴散らしながら進んでいくと、勝手に助けられた人たちがお礼を言ってくる。

「助かったぜ。オーバースカイは評判通りに強えんだな」

「モンスターがこんなに強いのなら、冒険者なんて目指すんじゃないか。ありがとう、おかげで助かりました」

別に助けるつもりはなかったけれど、助かってくれたのならそれでいい。死ぬ人が少ないに越したことは無いからね。

ただ、こちらに強く構ってこようとする人はどいてもらう事にする。

「急いでいるので、道を空けてください。逃げるのならさっさと逃げた方が良いでしょう」

「あ、ああ。もうこの街はおしまいだ。俺は逃げるとするよ」

それからぼくたちはモンスターを討伐しつつサーシャさんのもとへと向かう。

冒険者組合にたどり着くと、そこには大勢の人がいた。どうやら避難場所になっっているのかな？

アリシアさんたちと共にサーシャさんがいるのを見つける。ぼくは若干安心するけど、まだ終わったわけじゃ無い。

サーシャさんも組合の外に立って戦っていて、武器こそ使わないものの、後ろで守られながら契約技でモンスターを仕留めていた。

ミーナやヴァネアがうまくサーシャさんに敵を寄せ付けないでいるので、サーシャさんは契約技を使う事に専念できている。

アリシアさんとレイティさんは素早くサーシャさんの攻撃範囲から外れた敵を倒しているようだ。

それにしても、サーシャさんの契約技はとても強いな。モンスターが一気に枯れ果てていつてるように見える。

ハイデイのように圧倒的な力というほどでは無いけど、並のモンスターは数秒も耐えていない。

いつかサーシャさんはそこらの冒険者など相手にならないと言っていたが、それがよく分かる光景だった。

サーシャさんはこちらを見つけると、ぼくたちに指示を出してくる。

「オーバースカイの皆様、こちらにはわたくし達で何とか致しますので、この街のモンスターを一掃してくださいな」

「私達もサーシャさんと一緒に戦うから、ユーリ君たちでこの街を救ってくれ。ミーナさんたちはユーリ君に着いて行っていていいよ」

「分かりました。ユーリ、一緒にこの異変を乗り切ろう!」

アリシアさんとレティさんがいるのなら、十分にサーシャさんを守り切ってくれるだろう。

だから、ぼくは素直にサーシャさんたちの言う事に従う事を決めた。

だけど、その指示に従うのなら、まとめて動いていていいのだろうか。いや、ぼくが一番優先すべきは仲間の安全だ。

それでも、バラバラになるほどでも無い分かれ方なら大丈夫だろう。ぼくはミーナとヴァネアとともに行動して、残りのメンバーに別方向に行ってもらおう事にする。

「ぼくとミーナとヴァネアで素早く回っていくから、他のみんなはモンスターをしっかりと倒していつてくれる?」

「仕方ないわね。あたし達でさっさと片付けるとしましょうか」

「またご主人と離れ離れか……仕方がないとはいえ、腹立たしいな」

「ノーラちゃん、わたしがいますからっ。美味しいご飯を後で用意してあげますっ」

「ユーリさんの頼み、絶対に・達成してみせます……」

「あたい達がちゃんと防御してみせるっすから、ユーリさんは自分の仕事に集中してください」

「まかせて。ちゃんと皆でユーリちゃんのところへ帰ってくるわ」

みんなの顔を少しだけ見た後、ぼくとミーナとヴァネアは急いで街を回っていく。

他のみんなも頼もしい顔をしていたから、きつと大丈夫。ぼくは落ち着いて厄介そうなモンスターから順に仕留める。

ただ、モンスターを倒すこと自体は簡単なんだけど、街を守ることとはとても大変だ。

周りの人や家を巻き込まないように攻撃すること自体は、水刃が通じる相手ばかりだからどうという事はない。

でも、逃げる人とかが邪魔で上手く全力で動き回る事ができない。近接攻撃はかなり制限されていると言っている。

他にも、ぼくたちじゃなくて他の人ばかり狙われるから被害が増えないように立ち回ることが難しい。

ぼくや仲間が危なくなるような事は無いと確信できるけど、どうにも大変な状況ではある。

「た、助けてくれ」

「どうしてこんな事に！ 冒険者たちは何をしていたのよ！」

ぼく達がモンスターと戦っているにもかかわらず詰め寄ろうとしてくる人までいて、見捨てる考えが頭に浮かんだ。

でも、サーシャさんの顔に泥を塗らなくていいように、出来るだけ優しく対応していく。

ぼく達で守らなきゃいけない足手まといがどんどん増えていって、だんだん立ち回りが制限されていく。

人々から離れようとするヒステリックになる人が多いので、水刃が主な攻撃手段になってしまう。

ミーナやヴァネアはもつと大変そうで、強みである素早さを奪われているに等しい。

それでも目いっぱい敵を倒そうとするけど、守りながら戦うという事の難しさをずいぶん知ることになっていった。

だけど、それからぼくたちの目の前では犠牲者を出すことなく進めていた。すでに手遅れな人も何人かいたけど、それはどうしようもない事だからね。

ただ、やるせなさは残っている。ぼくたちの動き方次第では助けられたかもしれない人たちだからだ。

でも、人型モンスターを何度も倒す中で、こういう時に精神を落ち着かせることが出来るようにはなっていた。

そのままずっとモンスターを倒し続けて、ぼくたちはまだ大丈夫だったけど、ぼくたちが守っている人たちは限界を迎えていた。

そのままだと犠牲が出る状況が近づいていたころ、突如として歓声が沸く。

モンスターの気配もそれと同時にものすごい勢いで減っていたので、ぼくはアクア水で周囲を探る。

すると、ハイデイ達がこちらに来ている事が分かった。ハイデイの契約技はとてつとて繊細に扱えるみたいだ。

そうじゃなければ、モンスターだけでなく、人も犠牲になっているはずだからね。

とんでもない勢いでモンスターが減っている理由も分かったので、人々を鼓舞することにする。

「頼もしい援軍がやってきたみたいだ。モンスターを倒しきる道筋は見えたぞ！」

ぼくの言葉だけでは信じられなかっただろうけど、実際にぼくたちの前に現れるモンスターは減っていたし、歓声という状況証拠もある。

諦めかけていた人々も力を取り戻して、それからはずいぶん楽にモンスターを倒しきる事ができた。

そして、モンスターを完全に倒しきることに成功したようだ。伝令らしき人がその旨を叫んでいる。

大変な危機だったけど、何とか乗り切る事ができたみたいだ。それから仲間たちと合流して、みんなの無事を確認した。みんなに

特に大きなケガは無く、ぼくは一息ついた。

この異変の原因が何だったのかは分からない。でも、根っこを断つことは絶対に必要だ。ぼくは新たな決意を抱いた。



## 88話 憩い

カーレルの街が大勢のモンスターから襲われて、カーレルの街には大きな爪痕が残っていた。

それでも、ぼくの周りの人たちが無事でいられたのは嬉しい。

犠牲者もそれなりに出てしまって、悲しさや切なさのようなものがあるけれど、これには慣れるしかないよね。

最初から全力で市民を守ることに神経を傾けていれば助けられた人もいただろう。

けど、だからといって似たような機会があったらぼくは親しい人を優先する。犠牲になった人には申し訳ないけど、これを変えるつもりはない。

だって、今度は仲間たちが大丈夫だという保証は無いからね。ぼくの大切な人を最優先にして、そうじゃない人は余力で助ける。

冒険者をやってきたから分かるけど、優先順位をはつきりさせなければ何も守れないという事態になりかねない。

どのモンスターから倒すかとか、どの攻撃から対処するかとか、しっかり決めておかないとダメだというのはよく分かっている。

どの人を先に守るかというのも同じことだ。出来るだけ大勢助けたくはあるけれど、全員を助けることなんてできはしない。

なら、優先するべき者ははつきりと決まっている。カインとカタリナがどつちも危ないなら当然カタリナを優先する。そういう話だ。

カインの敵討ちにカタリナやアクアを連れて行ったことは今思えば軽率だった。ぼく1人で行けばいいという事ではないけれど、キラタイガーの危険性を知っているべき判断ではなかった。

おかげでアリシアさんたちと出会えたんだから、全部が全部間違っていたわけじゃ無い。

でも、似たような機会に似たような判断は今のぼくならしない。これは成長と言えるのだろうか。それとも冷徹さのような物を持ってしまっただけだろうか。

どちらにせよ、今のぼくは大切な人の安全を第一にするつもりだ。

ぼくの手の届く範囲はこれ以上広く出来ないだろうし。

それはさておき、ハイデイたちはしばらくカーレルの街に滞在するらしい。なので、ハイデイたちの屋敷に向かうつもりだ。

あの屋敷はなぜか無事だったみたいなので、遊びに行っても問題はない。エルフィール家の屋敷のようにモンスターに守られていたのかな？

まあ、理由は何でもいいか。ハイデイたちと一緒に時間を過ごすのは久しぶりなので、とても楽しみだ。

ハイデイたちの屋敷で用件を伝えると、まずリデイさんが出迎えてくれた。

「ユーリ殿、お久しぶりです。先日の騒ぎでは結局ほとんど会話もしなかったので、今日は楽しもうと思いますね」

「リデイさんがそう言ってくださって嬉しいです。リデイさんたちと久しぶりにゆっくり過ごせそうで、とても楽しみです」

「ふふ、そう言っていただけなら、こちらに来た甲斐があるという物です。殿下もお待ちしていますよ」

ハイデイも待つてくれているのか。もって言うあたり、リデイさんかイーリスかが待つてくれているという事になる。

イーリスならそれに言及していてもおかしくないし、リデイさんも待つていてくれたのかな。そうなら嬉しい。

まさか本人に直接聞くわけにもいかないし、確認する手段はないけどね。

そのままリデイさんに着いて行って、ハイデイの部屋らしきところに案内された。前はこの部屋でハイデイと2人きりだったけど、きつと今回は4人になるよね。新鮮な気分かもしれない。

部屋の中に入ると、ハイデイとイーリスが待つていた。2人とも片手をあげて反応するけど、だいぶ2人のイメージは違う。

なんとなくか、ハイデイは気品を感じるというか、偉い人間なんだなって思うけど、イーリスは気安い雰囲気だ。同じような手をあげる動作でここまでイメージが変わるものなのか。

「よく来たな、ユーリよ。そろそろ余の顔が恋しくなったころである

う?」

「そうですね。久しぶりに会えてうれしいです」

ハイデイはぼくの言葉に目を見開いている。そんなに意外なことを言っただろうか。ぼくがハイデイに会えて嬉しいというのは本当の事だから、おかしなことでは無いと思うけど。

「流石のオリヴィエ様もそんなに素直に好意を示されることに驚くんだな。まあ、俺も驚いてはいるんだがな」

そういえばリデイさんは言質を取られないように発言に気を遣うみたいなことを言っていたな。

そうになると、単に好意を示すだけでも、王族にとっては珍しい事なのかもしれない。

ぼくにとっては好意というのははつきりと口にするべきものだけれど、ハイデイ達にとってはそうでは無いのかもね。

「ユーリ殿の好意をはつきりと示される姿勢は好ましいものですが、我々のような人間には難しい事ですからね。殿下もお慣れでは無いのでしょうか」

リデイさんはお茶をぼくたちの前に置きながら話している。マナーの勉強をした限りだと、こういう場面で話すのは良くないんだけど?

でも、リデイさんが話しているという事は問題ないのだろうか。それとも、プライベートな空間だからいいという話なのだろうか。

どちらでもいいか。ぼくが不愉快になっただけでは無いし、ハイデイたちも気にした様子を見せていない。

「リデイも言うようになったものだな。まあよい。ユーリよ、余の力はしっかりと堪能したか?」

「直接見ることは出来なかったんですけど、あつという間にモンスターが減っていくのは分かりました。本当にハイデイの契約技は強いですよね」

「見ていなかったのか……まあよい。余の強大さはよく分かったであろう? 貴様は余の騎士になるのだから、この力に合わせられる様になれよ」

ハイデイはまだぼくを騎士にすることを諦めていなかったのか。まあ、以前のように無理矢理にでもぼくを騎士にしようと言う雰囲気は感じないから、別にいいか。

ハイデイの騎士になる事が嫌なわけでは無いからな。誘いをかけられること自体は嬉しいんだ。

ただ、ハイデイの騎士になる事よりも優先したいことがあるだけで。でも、いずれはハイデイの騎士になる事もあるかもしれないな。

みんなある程度冒険者として目標を達成できているし、冒険者でなければできない事は、もうあまりぼくたちの目標の中にはないかもしれない。

そのあたりに折り合いがついたのならば、ぼくは喜んでハイデイの騎士になるんだけど。

ハイデイならば、きつとぼくの仲間たちの事も大切にしてくれる。そう思えるくらいにはハイデイの事を信じているからね。

それはさておき、リデイさんが淹れてくれたお茶は前と味が違うから違う茶葉なんだろうけど、これも美味しいな。

リデイさんがお茶を楽しむための物だと言っていたことがよく分かる。美味しさだけでなく、違いまで楽しむ事ができるんだね。

「合わせる必要がある敵とは出来れば出会いたくないですね。一緒に連携の訓練ができるのなら楽しそうですけど。話は変わるんですけど、リデイさんの淹れてくれたお茶、美味しいです。お茶の楽しみとというのが少しわかった気がしますよ」

「それは何よりですね。小生はこれからユーリ殿にお茶を用意しますから、色々な楽しみ方を覚えてくださいね」

リデイさんはふんわりした雰囲気で微笑んでいる。戦っている時はとても勇ましい表情だし、ハイデイを窘めている時なんかは固い雰囲気だけど、こういう顔もするんだよね。

これからもリデイさんのいろいろな表情を知る事ができると嬉しいな。それはきつと素晴らしい時間になるはずだ。

「余を差し置いてずいぶんよい雰囲気になっているではないか。リデイ、貴様もユーリが気に入っているようだが、余を優先することを

忘れるなよ」

「当然わきまえておりますよ。殿下の所有物となるべき方に、みだりに手出しはいたしません。ですが、ユージ殿と友人関係を築くのは構わないでしょう?」

「余の物同士で交友を深めると言うこともある程度必要だからな。良しとしておこうか。ユージ、貴様も余を一番に考えるのだぞ」

ハイデイの事はもちろん大切だけれど、一番というのは難しいな。ぼくにとっての一番がアクアだという事は揺らがないだろう。

でも、それを正直に言ってしまうって大丈夫なのだろうか。いや、ハイデイの前で嘘を吐く方がまずいか?」

少し思案していると、ハイデイの方から先に声をかけられることに。

「口に出さずとも今の反応で貴様の考えはよく分かった。貴様でなければ許されんことだが、今は良しとしておいてやるから、精進することだ」

ハイデイの言葉はとつてもありがたいけど、ちよつと申し訳ないとも思ってしまうな。

これからハイデイと過ごしている時間が増えるたび、もつとハイデイの事を好きになるとは思うけど、それでハイデイが一番になるだろうか。

考えても仕方のない事か。出来ればハイデイにアクアの事を受け入れてもらいたいけど、それはぼくの前ガママだからな。

でも、ぼくの大切な人たちにできれば順位をつけるような真似はしたくないから、ハイデイが一番になるという考えを忘れてくれると一番うれしい。

まあ、流石にありえないよね。その考えでハイデイに嫌われても、きつと仕方のない事だ。

でも、そうなってしまうたら、ぼくはとつても強い悲しみに襲われるのだろうか。

やめやめ。今この話を考えて暗い雰囲気になるなんて、目の前にいる3人に失礼だよ。

「ユーリの顔に出やすいってところは、基本的には気に入っているけどよ、顔に出過ぎるのも考え物だぜ？ 戦闘中ならある程度は隠せるのは俺も知ってるから、隠し方を覚えてみたらどうだ？」

「イーリスはぼくを咎めているという雰囲気ではない。たぶん軽い提案くらいのも物かな。」

「ぼくは親しい人の前だつといふ気を抜いてしまっているから、顔に出るのはきつとそのせいなんだろうな。ようやく少しわかってきた気がする。」

「でも、相手を不快にさせるような感情まで顔に出していても良いことは無いし、確かに訓練してみるのもいいかもね。」

「表情の制御くらいなら覚えても良いかもしれんが、ユーリが腹に一物抱えて対応してくるといふのも腹立たしい光景だ。余としてはそうなる位なら今の方がまじだが、リデイはどうだ？」

「悩ましい問題ですね。顔に出やすいというのはユーリ殿の魅力の一端ではありますが、現状では王宮に入れば苦勞するだけでしょうから」

「それからぼくを置き去りにしてハイデイたちの議論は進んでいき、結局ハイデイたちと一緒に居る時は顔の制御をしない方向性に決まっていた。」

「まあ、知らない人が相手ならばくも気を張っているから、ある程度表情を制御できるはず。人型モンスター相手の時は出来ているわけだし。」

「ハイデイたちの期待に応えられるように、頑張りますね」

「それでよい。話は変わるが、ユーリ、貴様が此度の異変に対してどの様に立ち回るか、よく考えておけ。こちらでサーシャとも協力して調査するが、厄介な問題が紛れ込んでいるようだ」

「厄介な問題とは何だろう。それにしても、今回の異変はやっぱりまだ終わっていないみたいだ。」

## 89話 ステラと

サーシャさんたちが今回の異変について調査してくれている。

けど、結果が出るまでに時間がかかるという事と、今のところ強いモンスターは現れないという事から、オーバースカイには休むように指示が出された。

異変の原因がはっきりした際にすぐに動けるようにとの事だ。

ぼく達も調査しなくて良いのかも思ったけど、人や物の流れを調査することが主になるからと遠慮された。

つまり、今回の異変は人為的なものであると見ているのだろう。だから、そういう所を調査する必要がある。

ぼくは異変の原因が人である可能性が高い事に強い怒りを覚えた。人が原因だというのなら、犠牲が出ると言うことも分かってやっていたはずだ。

そんなやり方をする人たちを許すことは出来そうにない。まあ、今のうちにできる事はほとんどないから、サーシャさんの言うように英気を養っておくのが良いかな。

みんなが思い思いに休んでいる中で、ぼくはステラさんと2人になっっていた。

カーレルの街への襲撃で一番心配したのがステラさんだったので、ステラさんと一緒に居ることで安心したいという事があり、ステラさんと過ごすことにした。

ステラさんもそれを受け入れてくれたので、今日はステラさんと1日過ごすことになる。

ステラさんと2人で過ごすのはとても久しぶりな気がするのですが、しっかりと楽しんでいこう。

「ユーリ君、今日はゆっくりと過ごしましょうね。私の事を心配してくれたのは嬉しいですが、私は大丈夫ですから。アクアちゃんがしっかりと私を守ってくれましたからね」

街が襲われたときにはアクアにステラさんを任せておいたから安心だとは思っていたけれど、ステラさんがそう言うことは色々

あつたのだろうか。

何にせよ、アクアにステラさんを任せておいて良かった。そのおかげで、ステラさんとまたこうして過ごせるんだからね。

「そうなんですね。なら、後でアクアをうんと褒めてあげないといけませんね。アクアにはいつも助けられていますけど、今回も助けられちゃったみたいです」

「それが良いでしょうね。アクアちゃんはユーリ君に褒められることが嬉しいみたいですから、ユーリ君が褒めてあげれば張り切るでしょうし」

ステラさんが言う事はよく分かる。アクアはぼくが構えばなんだって嬉しいと思うてくれている様子だけれど、ぼくに褒められると気合が入っているみたいだからね。

アクアを褒め倒して便利に使うつもりは無いとはいえ、頑張った分は褒めてやる気になってもらいたい。

アクアがやる気で行けると、ぼくはとても心強い気持ちでいられる。アクアはぼくの心の大きな支えになっているよね。

アクアにとつてのぼくはどうだろう。アクアがぼくを大好きでいてくれる事くらいはさすがに分かる。

でも、ぼくはアクアの希望になれているだろうか。アクアはぼくにとつて色々なものをくれた存在だから、出来る限り返していきたい。

ぼくはアクアを何よりも信じているけど、寄りかかるだけならアクアの負担になりかねないからね。

アクアならそれでも良いって言うてくれそうだけど、ぼくはアクアには誰よりも幸せを感じてほしい。

まあ、ぼくにできることはアクアの事を肯定してあげる事くらいかな。遊んだりする時間を作ることでもできるけど、それはぼくがやりたくてやっている事でもあるし。

アクアの事はゆっくりと考えていくことにしよう。今日はせっかくステラさんと過ごすんだから、ステラさんの事をしっかりと考えたい。

そういえば、ぼくはステラさんの好みをあまり知らない気がする



な。ステラさんはぼくの好みをよく知ってくれているのに、それでいいんだろうか。

考えても仕方がない事だから、まずは聞いてみるか。

「ステラさんは何か趣味とかあるんですか？ ステラさんと一緒に過ごしているのにステラさんの事にぼくは詳しくないですよ」

ステラさんはぼくの言葉を受けて苦笑している。やつぱり呆れられているのかな。これだけ一緒に過ごしていて趣味の1つも知らないとかおかしいよね。

「私から話したことはありませんから。知らなくても無理はありませんよ。ここではつきり説明しておく、私の趣味は仲の良い人とモンスターを見ることです。だから、今のこの環境はとても楽しいんです」

なるほど。ぼくとアクア、アリシアさんとレティさん、カタリナとノーラ、ミーナとヴァネア、メルセデスとメーテル。

みんなどれも仲がいい人とモンスターだと思っから、確かにそういう趣味なら大変楽しいのではないだろうか。

ぼくに指輪をくれたのも、ぼくをステラさんの家に住ませたのも、その趣味が関係しているのだろうか。

指輪と言え、まだ意思を送りあう事には成功していないんだよな。契約技を強くすることはかなり出来ているんだけど。

ステラさんはぼくがこの指輪を使いこなすことに期待しているのは間違いないんだし、早く意思を送りあえるようになりたいものだ。

ただ、正直行き詰ってはいるんだよね。ステラさんも条件には詳しくないみたいだし。失伝しちゃったのだろうか。

ステラさんのユルグ家はハイデイも知っているような家なんだから、結構長い歴史がありそうだね。

それは考えて分かることでは無いだろうけど、指輪を使いこなすにはぼくとアクアの信頼関係が大事らしいとは以前に聞いたはず。

ぼくとアクアがお互いに信頼できていないとなると、ぼくは何を信じていいのか分からなくなりそうだ。

その可能性は考えたくないの、別の可能性を考えることにしよう

う。

単純に錬度が足りない可能性。それならば練習しかないけど、今は伸び悩んでいる。そういう時期というだけだろうか。

ユルグ家の人間でなくては使いこなせない可能性。ステラさんが使えないのはモンスターをタイムできなかつたからなはず。だとすると、ステラさんに指輪を返すべきなのか？ でも、ステラさんは諦めているような雰囲気があるのに、その選択で良いのだろうか。ステラさんにいらぬ負担をかけてしまうだけでは？

モンスターの種族が限定されている可能性。そうだとすると他の人に試してもらおうと良いのかもしれないけど、ステラさんに断りなくというのはあり得ないからね。

結局ステラさんがどうしたいのか次第か。でも、せつかく貰ったものにそんな扱いをして良いのかな。

返すと言ってみたり、他の人に使わせると言ってみたりするのはステラさんに失礼ではないかという気がする。

素直に使いこなせていない事を相談するくらいならいいと思うし、その方向性で行こう。

「だから、仲のいいぼくとアクアに指輪を託してくれたんですか？

だとすると、指輪を使いこなせていない今の状態は申し訳ないです」ステラさんは穏やかに微笑みながらぼくの話聞いていた。ステラさんは優しい人だから、嫌な顔をしている姿を見たことがない。

でも、今のステラさんの顔はいつもより優しいように見える。気にしなくても良いってことなのかな。

「私にできない事を任せているわけですから、すぐに結果が出ないからと言って悲観する必要はありません。それに、ユーリ君とアクアちゃんの関係が私は大好きなんです。だから、無理をして使いこなさうとしないでください。ユーリ君とアクアちゃんは自然体で良いんですよ」

ステラさんにそう言われると救われるような気持ちだ。ぼくとアクアの関係が好きって言ってくれるのはとっても嬉しい。

ぼくもアクアとの関係は最高だと思っっているけれど、尊敬するステ

ラさんに肯定してもらえると背中を押されたような気分になれる。

指輪の問題は悩んでどうにかなる問題ではないだろうし、ステラさんの言うように自然体でいるのが良いかな。

ぼくはアクアを信頼しているし、アクアだってぼくを信頼してくれているのは間違いない。信頼関係が大事だというのなら、そこは大丈夫なんだから、時間をかければどうにかなるかもね。

まあ、楽観視は危険だけれど、急ぎ過ぎてアクアとの関係が壊れることが一番まずいと言うのはステラさんの言葉で気づけた。

やっぱりステラさんはぼくの尊敬できる先生だ。いつもぼくを的確に導いてくれる。

「そうだ、今日はユーリ君が休む日なんですから、私が料理を作ってあげますね。ユーリ君の好物は魚料理でしたよね。楽しみにしてください」

そうやってステラさんはここから離れていく。台所に向かったのだろう。

ステラさんの料理を食べることは久しぶりだけれど、とっても楽しみだ。何だったらまずくても嬉しいだろうけど、ステラさんの料理は前も美味しかったから期待してしまう。

湧き上がるワクワクを抑えきれないまま待っていると、ステラさんが料理を持ってやってくる。

匂いだけでも美味しいってわかる。ぼくはすでに期待でいっぱいだった。

「ユーリ君、随分とわたしの料理を楽しみにしていてくれたんですね。私も腕の振るい甲斐があります。さあ、存分に召し上がってくださいね」

ステラさんは料理を並べるとすぐに食べることを促してくる。ステラさんが配膳している時間さえ待ち遠しいと思っていたので、ぼくはすぐに食べ始める。

魚を根菜と共に煮た料理は味が良く染みっていておいしいし、それでいて素材の味を生かしていると思う。

ぼくが普段食べる料理より味付けが薄いけれど、それでも全く問題

にならない位しつかりとした味だった。

他には魚をすりつぶして団子状にした料理や、魚の骨から出汁を取ったであろう汁物なんかもあった。

どれもぼくの好物ばかりだけれど、手間のかかりそうな料理ばかりだったので、ステラさんに対する感謝はとても大きかった。

勢いよく食べ進めていると、ステラさんの笑ったような音が聞こえてきた。声というほどでは無いけど、確かに笑ったような気がする。

「ユーリ君は本当に美味しそうに食べてくれて、料理を作る嬉しさというのがよく分かります。また食べたくなったらいつでも言ってくださいね。ユーリ君ならいつでも構いませんから」

そんな顔に出ちやっつたのか。少し恥ずかしい気もするけど、ステラさんが喜んでくれているのならそれでいいか。

ステラさんの料理がいつでも食べられるというのはとっても魅力的だけれど、ここまで手間のかかった料理だと大変じゃないかな？

ぼくはステラさんにこれまで貰った分を返せているのかな。やっぱり指輪を使いこなしたいな。

そうすれば、ステラさんはきつと喜んでくれる。恩返しがしたいということもあるけれど、ステラさんの喜ぶ顔はきつと魅力的だから、それが見たいというのもある。

「ステラさん、今日は色々ありがとうございました。ステラさんからもらった恩に報いられるように、頑張っていきますね」

「無理はしないでくださいね、ユーリ君。ユーリ君は私にとって大切な存在ですから、元気でいてくれることが一番なんですからね」

ステラさんは柔らかい笑顔でそう言ってくれる。もちろん、アクアやみんなのためにぼくは無事にいるつもりだ。

でも、ステラさんが待っていてくれると思うと、窮地でも力が湧いてくると思う。

改めて、ステラさんと出会えて良かったな。ステラさんは今でも最高の先生だよ。

そう遠くないうちにやってくるであろう異変の解決のための戦いに向けて、ぼくはしつかりと気合を入れなおした。

## 90話 幸福

サーシャさんの話によると、近々最近の異変の根源を特定できそうだという事だ。

恐らく戦闘になるだろうとのことで、そのためにそろそろ備えておいてほしいみたいだ。

いつでも戦えるようにするのは冒険者として当然の事なので、後は調子を整えておきたい。装備の調整はすでに終えたし、アクア水やミア強化、体の動きもしっかりと準備できている。

だから、指輪をさらに使えるようになる事を期待して、アクアとともに過ごすことを決めた。

今能力が強くなっても、使いこなすのに時間がかかるのではないとか、今までと同じ運用ができなくなるのではないとか、不安要素はある。

でも、これまでの指輪による影響では、錬度が上がることが主だったからね。新しい能力が使いこなしにくいのなら使わなければいい。

おそらく、そういう運用ができるだろうとこれまでの経験から判断した。1大決戦のようなものが起こる予感がするから、増やせる手札は増やしておきたい。

もちろん、何の成果も得られない可能性はあるけどね。ただ、普通に訓練をしたところで伸びしろはあまり感じないから、少ない時間ならこつちの方が良いはずだ。

アクアと一緒に過ごす決めてから、アクアはずっとぼくに引っ付いていた。今日はあまり遊びに積極的では無いのかな？

アクアとくつついている事はぼくにとって心地のいい事だし、アクアの顔が見える時には笑顔だから、こういう時間を過ごすことも良いよね。

「ユーリ、あったかいね。アクアに熱を感じる機能はあまりないけれど、ユーリの温かさはしつかり感じる」

アクアが熱をあまり感じないのは知らなかったな。ずっとアクアと一緒に居るけれど、まだまだ知らない事はある。

それが寂しいような、これからも色々なアクアを知っていけると思うと嬉しいような。

ただ、アクアの感じている暖かさはきつとぼくにもわかる。アクアの体はいつもひんやりしているけれど、それでもアクアとくつついていると温かいんだ。

アクアと一緒に居られて嬉しいって気持ち、アクアとふれあうことの楽しさ、アクアの事が大好きって想い。

それらがぼくの中で温かさになっていいるのだと思う。だから、アクアが温かさを感じているのなら、ぼくがアクアを大好きでいるように、アクアもぼくを大好きだと思ってくれている。

まあ、アクアがぼくを大好きでいてくれる事くらい、改めて考えるまでもない事なだけだね。

それにしても、アクアはなぜぼくの事を好きになってくれたのだろう。ぼくがアクアを好きになった理由は、ずっと一緒に居たことが一番だろうけど。

昔の事はあまり覚えていないとはいえ、アクア以外にはカタリナしか親しい人はいなかった。

カタリナと一緒に居る時間は少なかつたから、一番長いこと一緒に居たアクアを一番好きになつた。

劇的な理由という感じではないけど、人を好きになる理由なんてそんなものだよな。他の人たちが好きになつたのだって、大きなきつかけがあつた人の方が少ないだろうし。

まあ、アクアはモンスターなのだけれど。でも、そこの人よりよっぽどぼくに近い存在だから、人扱いで良いのかな。いや、人がモンスターより上と決まつたわけでもないか。

まあ、そんな哲学みたいなことを考えたいわけじゃ無い。ぼくがアクアを大好きな理由なんて、大好きだからでいいか。

でも、会話の種くらいにはなるかもね。試しにアクアに聞いてみようか。

「ぼくもアクアとふれあつていると温かいよ。ぼくがアクアを大好きだからだね。それでなんだけど、ぼくがアクアを好きになつたきつ

けは、たぶんずっと一緒に居たからなんだけど、アクアがぼくを好きになった理由って何かな？」

「ユーリ、もっと長い時間を過ごせばアクアより誰かを好きになる？  
ふふ。分かっている。アクアがユーリの一番だってことは」

アクアの言葉を受けてドキツとしてしまった。確かにそれが理由なら、アクアの言う事が起こってもおかしくはない。だけど、ぼくがアクアより誰かを好きになるというイメージはあまりできなかった。何かほかにアクアを好きになった理由があるのかもしれないけど、たぶん憶えていない位子供のころの話だからな。

なにせ、憶えているころの記憶ではずっとアクアの事が好きだったのだから。まあ、どれだけ好きだったのかははっきりしないけど。

子供のころにアリシアさんみたいな人やステラさんみたいな人に出会っていたら、アクアより好きになっていたのだろうか？

まあ、もしもの事を考えていても仕方ないか。そうならなかったから今のぼくがあるのだし。

「きつとこれまでも、これからもずっとアクアの事が一番好きだよ。だけど、ぼくがアクアを好きになった理由は他にもあるのかもね」

「アクアはユーリじゃないから分からない。でも、アクアがユーリを好きになった理由は簡単。ユーリがアクアに感情を教えてくれたから。それだけで、ユーリのためになんだってできる」

アクアの物言いだと、アクアはもともと感情を持っていなかったことになる。いつアクアは感情を持つことになったのだろう。

知りたいような、怖いような。ぼくがアクアの感情を感じた出来事がそうじゃなかったとしたら。

そもそも、なぜアクアはぼくと一緒に居ることになったのだろう。両親が連れてきたのかな。今は顔も声も何も覚えていない両親だけど、アクアを連れてきてくれたのなら感謝したい。

アクアと出会えたことは、ぼくにとって何よりも大切な宝物。それは絶対にこれからも変わらない事だ。

でも、アクアが昔は感情を持っていなかったという事実には恐ろしさも感じる。だけど、アクアは自身が感情を持ったことを嬉しいと感じ

じてくれている。

だから、それでいい。アクアはぼくと居ることによって、悲しみや苦しみよりも嬉しさや楽しさを感じてくれていたって事だから。

それに、アクアにぼくが救われていたって事実が変わるわけじゃ無い。カタリナ位しか親しい人がいない中で、ぼくが孤独に震えなかったのはアクアがいたからなんだ。

アクアがぼくの隣に居てくれて、一緒に家族として過ごしてくれた。それだけは変わらないはずだから。

「ぼくもきつとアクアのためならなんだってできるよ。アクアがぼくにくれたものは、数え切れないほど多いんだから」

「ユーリ、だったらキスしてくれる？ 前みたいに頬じゃなくて、口と口で」

「キ、キス!? ……分かった。アクアのためだもんね。でも、少し待って。覚悟を決めるから」

ぼくはキスを恋人同士がする特別なものだと思っていた。でも、今からアクアとキスをする事になる。

アクアとぼくが恋人同士になるわけじゃ無い。だけど、ぼくはアクアにキスをするんだ。

少しどころじゃなく照れてしまうけれど、ペットと飼い主ならおかしな話じゃないはず。犬や猫を飼っている人が、そのペットにキスをすると言う話は聞いたことがある。

ぼくが今からアクアとキスをするのだから、それと同じはずだ。だって、アクアはぼくのペットでいたいのであって、恋人になりたいわけじゃ無いだろうから。

そうじゃないなら、ずっとペットを自称しないし、首輪をずっと着けたままにもしないだろう。

これでぼくとアクアの関係が変わってしまうわけじゃ無い。今まで通り、大切なペットと飼い主のはず。だから、覚悟を決めろ、ユーリ。アクアの望みを叶えるんだ。

深呼吸をして、アクアの方を見る。アクアはこちらをじっと見ている。



ぼくは目をつぶって、アクアの方へと近寄って行った。アクアの唇らしきところにぼくの唇が触れる。

しばらくそのまましていると、アクアの方から離れていった。

「ユーリ、ごちそうさま。これで、ユーリの初めてはアクアの物。もう誰にも奪えない」

アクアはとても妖艶な表情でぼくを見つめていた。さっきまでキスをしていたこともあり、ぼくはずっとドキドキしている。胸がおかしくなってしまうようだ。

それにしても、アクアはぼくの初めてを求めていたのか。アクアがぼくに求めるものが有るのなら、何だってあげていい。

それくらい、ぼくはアクアに感謝しているし、アクアの事が大好きなんだ。

でも、流石にキスは驚いたな。アクアは恋とか愛とかそういう感情でキスを求めているわけでは無いと思う。

なにせ、アクアがぼくと恋人になろうとするそぶりは見せていないからね。ずっとペットとして甘えてきているし。

でも、これからぼくのアクアを見る目が変わってしまうかもしれないと思える体験だったよ、今のキスは。

いまだにドキドキしているし、アクアの唇の感触が忘れられない。水のように吸い付いて来るようであり、抵抗感のような圧力もあつて。

こんな体験を世の恋人たちはしているのか？ 大変だな、恋人つてやつは。それとも慣れていくものなのかな？

ぼくがようやく落ち着いたころ、アクアはいつものようにぼくに抱き着いてきていた。

先ほど感じていた妖艶さは見る影もなく、無邪気で可愛いペットといった様子だ。アクアにも二面性のような物を感じて、ぼくはすっかり参ってしまった。

それにしても、ぼくの知り合いには二面性を感じる人って結構いるよね。

アリシアさんはいつもの優しさとは裏腹の怖さを持っているみた

いだし、ステラさんも裏側というか、一筋縄ではいかない感じがあった。

ハイディだって高慢さだけでは無く優しさもしっかり持っているし、リデイさんも戦闘中の厳しさとプライベートのふんわりした雰囲気とは違う。

ミーナだって、普段の朗らかさと戦っている時の顔つきはまるで違う。

でも、そういう落差のようなものが魅力的でもあるんだよね。深みと言えはいいのだろうか、そういう感覚は。

「ユーリ、これからもずっと一緒。さっきのキスはその証。アクア水も、アクアジュースも、その他も、ユーリのために全部捧げるから」「証なんてなくなつて、何も捧げなくなつて、ぼくはアクアとずっと一緒に居るよ。約束する。だから、ずっと幸せでいてね、アクア」

「当たり前。ユーリがそばに居てくれるなら、アクアはずっと幸せ。何があっても離れたりしない」

## 裏 喜悅

アクアはプロジェクトU：Reから距離を取ることを望んでいた。自身のつまらない過去を思い出しそうになるからだ。

だが、アクアの目には状況がそれを許さないように見えていた。いずれ自分とユーリはプロジェクトU：Reに相對する。その未来がすぐそこにあるように思えて、アクアは憂鬱だった。

ユーリも自分の過去と向かい合う事になるのだろうか。ユーリに待っているであろう再会は、ユーリにとって幸福であるのだろうか。

アクアはユーリが心配なような、ユーリを頼もしく思うような、不思議な感覚の中に居た。

仮にユーリが新しい幸福を見つけたとしても、アクアが捨てられることは無い。これまでユーリと過ごす中で、アクアは素直にそう信じる事ができた。

だから、ユーリにどんな未来が待っていたとしても隣にいる。その決意を固めていた。

プロジェクトU：Reをすぐにでも排除しなければ、ある程度の犠牲は出るだろうとアクアは分かっていた。

だが、そんな事はアクアには関係がない。ユーリの周りの人間を犠牲にしない事だけは出来ると確信していたので、アクアはギリギリまでプロジェクトU：Reの關係者を放置しておくことにした。

ユーリは犠牲者が出ることで悲しみを覚えるかもしれない。

だが、冒険者として過ごす日々の中で、ユーリは他者の犠牲にある程度の慣れや割り切りを身に着けていた。

だから、ユーリの痛みは許容できる範囲に収まるだろう。全く痛みが耐性が無ければ、ユーリが傷つく機会は増えてしまう。

それゆえ、今回の異変をユーリにある程度の耐性を付けさせる機会とみなしていた。

かつてカインが死んだときにユーリが大きく悲しんだのも、ユーリが人の死に慣れていなかったから。

今回の異変を乗り越えることで、仮にカインの死に似た出来事が起

こつても、ユーリは前より落ち着いた対応を出来るようになる。

アクアはつまらない他者のためにユーリが危険に向かう事を辞めさせたかったから、今回の異変を利用すると決めた。

アクア自身がプロジェクトU：Reに向かい合う覚悟を固めきれていなかったことも理由としてあつたのだが。

そしてプロジェクトU：Reを原因とする異変に大きな動きが訪れた。

オーバースカイがカーレルの街から離れている間に、カーレルの街がモンスターに襲われることになった。

プロジェクトU：Reの関係者にとつて、今回の動きには大きく2つの目標があるとアクアは知っていた。

1つはプロジェクトU：Reによつて生み出されたモンスターの性能を確認すること。

プロジェクトU：Reの関係者は、未だにアードラの版図を広げることを目標として動いている。そのために、強い人間にモンスターをぶつけることで、仮想敵国に対してどの程度の働きができるか確かめる狙いだった。

もう1つはこれもまたプロジェクトU：Reの成果である、ある程度狙った契約技を生み出せるモンスターとの契約者の実験。

ただの人に契約をさせることで、どの程度の戦力として計算できるのかを知るための機会として、自分たちが生み出したモンスターとぶつけることにした。

そのために、実験で契約を持ちかけた人間をカーレルの街へと集めていた。

ユーリはそれを知ることがないままステラやサーシャ、そして町の人間を守るために行動していた。

アクアはユーリに自分の動きを見せないために、ステラを守ると提案することでユーリと離れることにした。

オメガスライムは大抵のスライムの進化系が持つ能力を持ち合わせている。

スライムの進化系の1つであるツインスライムは自身の体を2つ

に分けて動かす事ができる。

アクアはそれをやるかにしのぐ数に分裂して動く事ができるが、ユーリにまだそれを見せるつもりはなかった。

他にも、ステラの家にやってくるモンスターでプロジェクトU：Reの成果であるモンスターがどの程度の物なのか、様々な実験をするつもりでいた。

モンスターの耐久性、アクアが改造できるかどうか、アクアが似たようなモンスターを生み出すことができるのか。

それらをすべて検証した結果、アクアは自在にモンスターを生み出す能力をさらに発展させていた。

今のアクアならば、モンスターを生み出して好きなタイミングで進化させることもできる。今はノーラの存在で満足しているが、いずれは新たなモンスターを生み出すかもしれない。

アクアは未来にどうするか、ゆつくりと考えていた。プロジェクトU：Reによって生み出せるモンスターなどアクアの敵ではないので、考え事をしながらでも十分対処できていた。

退屈になったアクアはユーリの動きを覗いていた。サーシャを助けることに成功したユーリは他の人を助けたい様子だったので、サーシャにそれを指示させようとする、そうするまでもなくサーシャは人々を助けるようにユーリに指示していた。

そのままユーリの動きを眺めていると、ユーリは人々を守ろうとするあまり徐々に追い詰められている様子だった。

ユーリのその様子を確かめたアクアは、元々用意していたオリヴィエたちの動きを本格化させて、カールルの街へオリヴィエたちを動かした。

そのまま、オリヴィエの力によってモンスターはすぐに減ってきて、ユーリは守っている人に犠牲者を出さなかった。

ユーリの動きを邪魔していた市民は後で支配することにして、アクアはユーリの活躍を振り返りながら楽しんでいた。

ユーリは結局何度似たような事が起こったとしても人々を守ろうとするのだろう。そう考えたアクアは、プロジェクトU：Reを解決

するために動くことを決めた。

ユーリに過去を清算させるためにも、ユーリにプロジェクトU：Reの解決へと向かわせると良いのかもしれない。

そんな事を考えながら、具体的にどういう形でプロジェクトU：Reを終幕へと向かわせるか、アクアは考えていた。

アクアとユーリが出会うきっかけになったプロジェクトU：Reだから、アクアとユーリで終わらせるのが良いかもしれない。

プロジェクトU：Reがどんな形で終わるとしても、ユーリにはある程度負担をかけることになるだろう。そう考えたアクアは、それなりにユーリを休ませることに決めた。

そしてオリヴィエたちとしてユーリと過ごしてユーリに安らぎを与えたり、ステラとしてユーリと過ごしてユーリに落ち着きを与えたりしていた。

その中で、ユーリに今回の異変の元凶であるプロジェクトU：Reに立ち向かうだけの覚悟を決めさせた。

それからユーリに異変の根源へ向かう時期が近い事を知らせると、ユーリはアクアと過ごすことを決めていた。

ユーリにとって大切な状況で過ごす相手は自分なんだと考えたアクアは喜んでいたが、指輪に視線が向かうユーリを見て少しだけ傷ついていた。

ユーリは戦力の強化のために自分と過ごすことを決めたのか。でも、それでもユーリと2人で過ごせることは喜ばしい。

浮かんだ暗い考えを捨てて、アクアはユーリとの時間を楽しむことに決めた。

自分に抱き着かれているユーリは嬉しそうで、それだけでアクアは先ほどの悲しさを忘れる事ができていた。

ユーリは結局自分の事が大好きなのは間違いない。分かり切っていたことではあるが、改めて確認できた事実がアクアには喜ばしかった。

ユーリとくつついていると温かくて、心がだんだん満たされていった。温度を最低限しか感じていないアクアでも、ユーリの温かさは特

別で、ユーリとふれあう喜びを高める材料の一つだった。

いつかはこの暖かさで満たされたい心の寒さを感じていたことがあったけど、今ならばどんな寒さにだって凍えないだろう。

ユーリが自分をいつまでも大好きでいることをアクアは素直に信じる事ができていた。

ユーリから自分を好きになった理由を告げられて、アクアはそんなものかと感じた。

一緒に過ごした時間だけで人を好きになるのなら、誰だっていいはずだけれど。でも、ユーリは一緒に過ごしていても好きになつていない人もいる。

アクアは単に過ごした時間が長いからユーリが自分の事を好きでいるのではないと確信していた。

だから、ユーリに対してもっと時間をかけた人を好きになるのかとからかう事ができた。その後にはアクア自身が言った、ユーリの一番は自分であることが変わらないと信じられること。

今のアクアにとって、それは心からの真実だった。かつてはユーリを疑ってしまった。だから、カタリナから始まる悲劇に続いてしまった。

だけど、今ならユーリの事を信じる事ができる。ユーリの一番はずっと自分であることはきつと変わらない。

流石にユーリの親しい人を操っていることを知られるわけにはいかないけれど、オメガスライムであることを知られたくらいならきつと大丈夫。アクアはユーリとの未来が明るい事を信じていた。

それから、ユーリがアクアに対して何でもすると告げた時、アクアはユーリにキスをねだった。

ユーリは恥ずかしがりながらも、アクアに対してキスをする事自体は悩まなかった。

ユーリにとってキスは特別だと察していたアクアは、大切なものをアクアに捧げてもいいほどユーリはアクアを大切にしているのだと歓喜に浸っていた。

そしてユーリはアクアにキスをする。アクアはキスの意味を知っ

ていても理解はしていなかったから、照れも恥ずかしさも感じなかった。

ただ、ユーリの大切なものを奪ったという喜びが、アクアの体中にしびれのような物をもたらしていた。

ユーリがアクアとキスをしたことによつて真つ赤になっていたが、そのあたふたする姿がアクアにとつては心地よかつた。

ユーリの心の奥深くに自分を埋めることに成功した。そのことを確信できて、アクアはさらなる喜びを感じていた。

やはりユーリといるといつだつて楽しい。そう考えて、アクアはユーリに甘え倒そうとした。

ユーリにすべてを捧げると誓つてみたアクアに、ユーリは何も捧げなくても良いと返す。

ユーリのその返答に、アクアは不満のような喜びのような複雑な感情を抱いていた。

それでも、ユーリとアクアがずっと一緒に居ることは疑いようもない事だ。アクアは未来は明るいと確信した。



## 91話 始動

ぼくは今日、サーシャさんに呼び出されていた。何か異変が起こったのだろうか。それとも異変の原因が見つかったのだろうか。

何にせよ、単に世間話という訳ではないだろう。呼び出された場所が組合だし、オーバースカイの仲間も呼ばれているからね。

組合にたどり着くと、サーシャさんとハイデイたちがいた。ハイデイたちも来ているってことは、異変の原因の話の可能性が高そうだ。

まとめて会議室のような場所に連れられ、サーシャさんが話し始める。

「まずは、今回の異変である、異常なモンスターの発生。その原因にたどり着いたのでその報告からさせていただきますわ」

やっぱりその話だね。そうになると、これからの話はその準備とか、計画とかの話になるのだろうか。

それにしても、原因はいつたい何だったのだろう。ぼくたちの懸念通りに人為的なものだったのだろうか。

そうだとすると、やはり許せないという思いがある。カーレルの街にも犠牲者はいたし、家などの建物がボロボロになっていることもあった。

いや、まだ何も聞いていないのだから、先走るべきではない。まずはサーシャさんの話を聞いてからだ。

「かつてこの国で動いていた計画であるプロジェクトU：Reという物がありましたわ。その計画では、オメガスライムを生み出して操ることでアードラの周囲に戦争を仕掛け、アードラの版図を広げることが目的としていましたわ」

なんとなくプロジェクトU：Reという名前を言われるとちよつとだけ自分の名前を呼ばれているような気になってしまった。

発音が似ているから仕方のない部分はあるだろうけど、気分のいいものではない。

とはいえ、実際にぼくに関係があるわけでは無いだろう。そんな計

画なんて、名前を聞いたこともない。

それにしても、オメガスライムか。伝承には3つの国を滅ぼしたと語られているけど、よく分からない事が多いんだよね。

とつても強いという事だけは分かるけど、なんか強いという事だけしか分からない語られかただった。

ぼくたちの目の前に現れてしまえばきつと勝てない。だから、さすがにオメガスライムを生み出すことに成功したわけでは無いはず。

そんな事になったら、どうすればいいのか分からないよね。楽観視は危険とはいえ、オメガスライムが敵になる事を想定しても仕方ないだろう。どうせ勝てないのだし。

そんな事態になっていたら1も2もなく逃げるよ。逃げてどうにかなるのか分からないけど、それしかない。

「その計画は頓挫したのですが、それでも中心となった人間はまだ計画を諦めていなかった様子。ただ、目的は最強のモンスターや契約者を生み出すという事変わったようですよ」

オメガスライムを生み出すこともできないのに、どうやって最強のモンスターや契約者を生み出すつもりなのだろう。

でも、少し話は見えてきたな。つまり、今までの異変で現れたモンスターは、そのプロジェクトU：R eとやらの残党によって生み出されたものなのだろう。

その人たちを許すことなんて、ぼくにはできない。どうにかして捕まえて、相応の刑罰を受けてもらうつもりだ。

その結果死のうと知ったことでは無い。当然の報いとすら言えるのだから。それよりも、どうやってうまくその研究者たちを捕らえるかだよな。

研究者たちは許せないけど、そのためにぼくたちの誰かが犠牲になるという事は避けなければならない。

見知らぬ誰かの安全よりも、ぼくは親しい人を優先する。それは譲れない。

だって、ぼくに良くしてくれた人とそれ以外の人を同じに扱う事なんて、良くしてくれた人に失礼というかなんというか。

もちろん、ぼくにとって良くしてくれた人たちが大切なのは言うまでもないことではあるけれど。

まあ、出来る範囲でプロジェクトU:Reとやらを叩き潰しに行くつもりではある。

しかしながら、一体どうやってその研究者たちはあんなに強いモンスターを生み出すことに成功したのだろうか。

いや、聞いて分かる事でもないか。それに、ぼくが考えるべきはモンスターをどうやって倒すべきかだ。原因が何なのかなんて、他の人が考えていればいい。

「その成果として、これまでの異変であるモンスターが生み出されたという事ですわね。我々といたしましては、その行動を許すわけにはまいりませんわ。ですので、その研究者ともども、モンスターたちを撃退するという方針を取ることにいたしましたわ。もちろん、オーバースカイの皆様にも人を殺せと言うつもりはありませんわ。それは我々の仕事ですの」

「私やレティは殺せないことは無いけれど、ユーリ君たちにそれをさせるのは、やめておいた方が良くと思うよ。せつかく殺さずにこれまで過ごしているのだから、殺さずに済む方が良いよね」

「わたくしもそう考えておりますわ。もちろん、無理に殺すなどという訳ではありません。殺さなければ乗り越えられないと判断したのなら、殺していただいて構いませんわ。その場合でも、こちらで処理いたしますので、犯罪者のような扱いにはなりませんわ」

サーシャさんにしろ、アリシアさんにしろ、人を殺したことがあるような物言いだな。実際のところがどちらであれ、無実の人をこの人たちが殺すとは思っていない。それなりの事情があったはずだ。

それに、ぼくが人を殺すことができない分をこの人たちが支払ってくれる事になるのだろうか、嫌うなんてとんでもない話だ。

それはさておき、実際にぼくが人を殺す瞬間はやってくるのだろうか。殺すことには未だに抵抗がある。すでに人型モンスターを殺しているのに、いまさらという話ではあるけれど、どうしても人を殺すことを躊躇してしまう。

ぼくはアクアやノーラ、レテイさんにヴァネアとメーテルを知っている。彼女たちに人と特別な差があるなんて言えない。

それでも人型モンスターを殺しておいて人を殺すことを躊躇しているのだから、ばかばかしい話だ。

人型モンスターと人にどれほどの違いがあるというのだ。結局ぼくもくだらない人間の1人でしかないのかもね。

でも、戦いの場でこんな事に悩んでいるわけにはいかない。みんなが危ない場面があるのなら殺してしまえ。そうすればもうこんな事に悩まなくて済むぞ。

いや、でも殺すことへのタガが外れてしまったら。簡単に殺すという選択をするぼくになってしまったら。

違う。とりあえず殺せばいいわけじゃ無い。ぼくにとつて大切な人を守るためだけ。それだけのために殺すのだ。みんなと一緒に居る未来のために。

実際にぼくが人を殺すことになるのかは分からない。でも、嫌いだからというような理由だけで殺すことは絶対に避けないと。

そうなってしまうたぼくは、みんなと一緒に居る資格を失ってしまおうだろう。みんなの隣にいていいぼくでいる。それだけは絶対に守らないといけない事だ。

「本題に入りますが、プロジェクトU・Reの研究者はミストの町を拠点としている様子。ですので、そこを叩くことになりますわ。もちろん、ただの市民に被害が出ないようにいたしますわ。ですが、ミストの町が戦場になる可能性は否定できませんわ」

ミストの町だって!? ぼくの故郷じゃないか。そんな研究が行われていたなんて知らなかった。

いや、おかしいところは無い訳ではなかった。ぼくの通っていた学園には、ハイデイでさえ難しいというような技術を使った装置があった。弱いモンスターを発生させる装置だ。

それがプロジェクトU：Reの研究によつてもたらされた物ならば？ あの学園もプロジェクトU：Reと関係があることになる。

まさか、キラータイガーの一件やカタリナが巻き込まれたモンス

ターの異常発生のも？ いや、あのモンスターは特別強いという訳ではなかった。

いや、単にモンスターを生み出す実験の一環だという可能性は？

そんな事のためにカタリナは巻き込まれたのか？ この考えが真実だと決まったわけじゃ無い。無いんだけど、ぼくは怒りを抑えきれそうになかった。

「ミストの町はユーリ様やカタリナ様の故郷ですから、思う所があるという事は察しがつきますわ。ですが、我々の未来のため、今回の討伐計画に参加していただきたいのです」

「参加することに問題があるわけじゃ無いです。ただ、プロジェクト U：Re の関係者とやらに怒りが湧いてくるだけです」

「あたしだって別に故郷だからって大切ってわけじゃないわ。あたしの敵になるのなら、誰だろうと叩き潰すまでよ」

「それならよいのですわ。ただ、なかなか厄介なものでして、ミストの町のどこまでの人間が関わっているのかはハッキリできておりません。拠点の場所は判明しているので、そこを中心に抑えることになりますわ」

研究所のような場所があるのだろうけど、そこに出入りしていない人間の協力者がいたのならば、特定が難しいのだろうという事は想像がつく。

まあ、調査はたぶんぼくの仕事じゃない。ぼくの仕事はモンスターを退治する戦力であることだろうね。

いつもより激しく戦う事になるかもしれないな。いや、この考えは駄目だ。アクア水の強みは汎用性が大きい。だから、冷静さを忘れないようにしないと。

ぼくはみんなを守りたいんだ。敵を倒したいわけじゃ無い。そこは見誤らないようにしないと。

「ユーリ様とアクア様、カタリナ様には拠点を襲撃していただいて、それ以外の方には関係者を逃がさない事に注力していただきたいと思えますわ」

ぼくたち3人だけで？ あれだけのモンスターが生み出せる相手

ならば、みんなでまとめてかかった方が良いのでは？

いや、そうもいかない理由があるのだろう。それは何だ？ 少人数の方が良い理由。建物の中のように狭い空間なのか？

それならば、フィーナやアリスアさんやミーナにノーラは強みを奪われるから別行動の方が良いことも分かる。

アクア水を使うぼくがメインになって、アクアがぼく達2人を守る。カタリナが斥候。そんなところだろうか。

「プロジェクトU・R eの拠点はミストの町のほど近く、山に開けられた横穴ですわ。人工的な物なうえ、入り口も中もそう広いものではないとのことですわ。ですので、少人数で攻めていただくのがよろしいかと」

ぼくの考えはある程度当たっていたみたいだ。狭い空間では大人数では動きづらいだろう。

どの程度のモンスターに襲われるのかは分からない。でも、ぼくたちは絶対にやり遂げてみせる。

ぼくたち3人の連携はきつと誰にも負けない。だから、勝てるはずだ。

「ユーリ様、今回の戦いはカーレルの街どころかこの国の大きな転機となるでしょう。ぜひとも、この依頼を達成していただきたいのですわ」

もちろん、やり遂げてみせる。そして、またみんなで平和な日々を過ごすのだ。

## 裏 歪み

ノーラと契約してから、カタリナは晴れやかな気分で日々を過ごすことができていた。いずれ自分はアクアと和解できる。そして、またユーリとアクアと一緒に過ごすことができるのだ。

そこにはノーラだって一緒に居ることになる。新しい家族が増えたようなものだ、カタリナは素直に喜んでいた。

(ユーリとあたしとアクアでなら、きつと最高の家族になれるはずよ。ユーリは好意に弱いけれど、だからこそあたしの好意も分かってくれているはず。そうじゃなきゃ、あたしを助けてくれたりしないわ。あれからだってあたしを頼りにしてくれている。

アクアだってあたしの無事を喜んでくれていた。あたしを支配することを悲しんでいた。だから、あたし達はお互いがお互いを好きにならずなのよ。ノーラだってきつとアクアの一部のような物。だから、ノーラがあたしに好意を示してくれているのは、アクアの好意があたしにも向いているという裏付けになるはず。大丈夫。あたし達はまた笑いあえるのよ)

カタリナの心に余裕が出てくると、いつものようにカタリナがユーリを観察している際に、ユーリが自分をいとおしそうな目で見ていることに気が付いた。

他の人にも似たような目を向けているユーリではあるが、興味のない他人とは明らかに自分に向ける目が違う。

その事実が、カタリナに大きな勇気と喜びを与えていた。

ただ、ユーリが一番いとおしそうに見ているのがアクアだということにも気が付いた。それは悲しいけれど、仕方のない事だ。

アクアは自分が本当の意味でユーリに冷たく接していたころから、ずっとユーリの事を支えていた。

だから、カタリナは現実を受け入れる事ができていた。

ユーリの一番でいられない事はつらいけれど、それでもこれから幸せになる事ができる。そう信じていた。

(ユーリはアクアが誰よりも好きなのね。恋愛感情かどうかは分から

ない。だけど、あたしよりも、誰よりもアクアを大切に思っているのは間違いないわ。でも、それでもあたしはユーリと一緒に居られる。アクアとだって。だって、ユーリとアクアだけではできない事があるんだもの。それで、2人を支えてあげればいいのよ)

カタリナにとってはユーリもアクアも大切な存在で、だからこそ3人一緒に居られる未来がはつきり見えることが喜ばしかった。

そのためにも、自分のすべてを使って2人を支える。そうすることで、3人で幸せになる事ができる。

ユーリの恋人にはなれないかもしれないけれど、それでもユーリとアクアと3人でなら家族のような関係になれる。

ノーラは結局どういう存在かは分からないけれど、自分たちの間に入ってきて問題のない大切な仲間だ。

これからも契約技を頼りにするだろうし、甘えてくる姿は猫だったころと変わっていない。

ユーリにべたべたしている事なんて軽く許せるくらいには、カタリナはノーラを大事に思っていた。

(ノーラにアクアが干渉している事は間違いないわ。それでも、ノーラがあたしの相棒であることは変わらない。それに、アクアはあたしのためにノーラに干渉しているのだから、ある程度は受け入れないと。ユーリの力になるためにも、ユーリの幸せを守るためにも、もうノーラは欠かせない存在なのよ)

カタリナの精神はそれからずっと上向きになっていた。明るい未来を信じる事ができていて、だからこそ希望を胸に生きる事ができていた。

いずれアクアは自分を解放してくれる。そう信じていたし、その時にユーリとの関係が壊れることがないとも信じていた。

いつか、かつて夢見た未来に近い未来を迎える事ができる。だから、その時を素直に待っていればいい。

アクアの事は許す準備ができていて、いずれ来る自分が解放された日に和解すればいい。それで、自分に幸せが帰ってくるのだ。

アクアと自分でユーリを共有すればきつと楽しいし、ユーリだって



喜ぶだろう。

カタリナはユーリとアクア以外の女が付き合う未来はきつと来ないだろうと半ば確信していて、ユーリを除けばアクアと一番近い自分がアクアのおこぼれを貰えると信じ切っていた。

(ユーリは女の人に囲まれているけれど、その人たちに恋愛感情は持ち合わせていない。これからも普通の好意に収まるに決まっているわ。だから、アクアがユーリの一番近くににいるし、ユーリの一番大切な存在になる。アクアもユーリもあたしを大切にしてくれるから、ずっと一緒に居られるのよ)

カタリナはそれからの日々でも心を落ち着かせたまま生活する事ができていて、それでもユーリをずっと観察することはやめていなかった。

ユーリが自分に明るい顔や幸せそうな顔を向ける瞬間を楽しみに日々を生きていて、もっと幸せになる瞬間も待っていればやってくと楽観的に考えていた。

そんな日々の中、プロジェクトU:Reに起因する異変が起き始めて、それがユーリの笑顔を奪っていった。

カタリナはそのことが許せなくて、それゆえ異変の原因を何が何でも排除したいと考えていた。

(ユーリがまた暗い顔をしてる。明らかにおかしい事態が起こっているから、心配になるのは分かる。でも、あたしには優しいあなたの顔を見せてよ。あなたの楽しそうにしている姿が、あたしに元気と勇気といういろんなものをくれるの。その邪魔をする奴なんて、誰だろうと排除してやるから、だから、あたしに笑顔を見せて。モンスターだろうと人だろうと、あなたを苦しめるものは何だって殺してあげるわ) 異変の中で人型モンスターが複数現れた時、カタリナはユーリに己の力を見せつけたいような気分だった。アクアが操作している体ではあるものの、ユーリに安心して良いのだと伝えたかった。

自分はもはやユーリに助けられる存在ではない。それをユーリに教えて、もっと自分に頼ってもらいたかった。かつてのように自分の後ろに着いて来るだけでもいいし、隣で戦っても良い。

そんな事を考えていたから、普通より強い様子の人型モンスターを軽く倒している事が心地よかった。

(ユーリ、いつかはあんたに助けられちゃったわね。だけど、あたしがあんたを助けることだってできるのよ。だから、1人で抱え込まないで。あんたの笑顔にあたしは助けられてるんだから、あんたの笑顔を守ってみせる。ユーリ、アクアだって、あたしだって、あんたが明るくしているのが一番好きなのよ)

それから、カーレルの街がモンスターに襲撃されるという事態が発生する。その中で、ユーリはステラやサーシャを優先することを決めていたが、それでも誰かを見捨てないといけないという事に心を痛めている様子だった。

カタリナは、ユーリを苦しめる原因である今回の異変に強い怒りを抱いていたし、怒りをぶつける相手を求めている。

(ユーリ、あんたの為にあんたの周りの人はあたしとアクアで守ってあげる。だから、そこらに転がっているただの他人にまで気を遣わなくても良いのよ。そんな事をしたって誰も感謝なんてしないんだから、あたし達という時間の幸せだけを感じていればいいの。

それにしても、明らかにモンスターの動きがおかしい。アクアがユーリのために人を殺すなら、きつとユーリの心を傷つけない形をとるはず。だから、きつとほかの誰かが原因。そうよね。黒幕がいるのなら、あたしが殺してやればいいわ。ユーリを苦しめたのだから、楽に死なせたりしなくていいもの。思う存分痛みを与えてやるわ)

そしてついに、今回の異変を解決するための道筋が立っていた。サーシャの説明を受けて、カタリナはいくつもの疑問が浮かんできた。

(プロジェクトU：Re……オメガスライムを作る計画。アクアはそれによって生まれたのかしら？ だから、アクアはオメガスライムになった。だとすると、なぜユーリのもとにオメガスライムがいるの？

ユーリとプロジェクトU：Reに何か関係が？ ユーリ、U：Re。同じ発音よね。まさか、ユーリはプロジェクトU：Reとやらに何か関係があるの？ だから、アクアをペットにできていた?)

本当にプロジェクトU：Reとユーリに関係があるのなら、恐らくユーリは今回の事件で大きく傷つくことになる。そのことがカタリナに強い怒りをもたらしていたが、まだカタリナは冷静さを忘れてはいなかった。

だが、プロジェクトU：Reの関係者の拠点がミストの町であることが明らかになったとき、カタリナの怒りは限界まで高まった。

ユーリが両親から捨てられたのは、何かこの実験と関係があるのではないか。カタリナの両親はプロジェクトU：Reに関わっていたのではないか。

事実がどうなのかカタリナには確認する手段がなかったが、怒りをぶつける相手の姿がある程度固まってきたので、それだけは喜ばしいと感じた。

(ユーリとプロジェクトU：Reに何か関係があることはほとんど間違いないと言っているはず。だって、アクアがオメガスライムでミストの町がプロジェクトU：Reの拠点なのよ。まあ、それはいいわ。ユーリとあたしが出会えたのだから、それまでの事には感謝してもいい。

でも、今回の異変でユーリの事を傷つけたのは絶対に許せない。お母さん、お父さん、あたしをこれまで育ててくれた事には感謝しているわ。だけど、もしあなたがプロジェクトU：Reに関わっているのなら、あたしはあなたたちを殺すわ。

ユーリにあたしの両親を殺したなんて罪の意識を背負わせるわけにはいかないし、何よりユーリを傷つける人間を生かしておくつもりはない。あなたたちがプロジェクトU：Reと何の関係もない事を、少しくらいは祈ってあげるわ)

カタリナにとって、もはやユーリより大切にすべきことなどなかった。これまでの苦しみの中で、はつきりとカタリナの人格は歪んでいた。

だから、カタリナは今の幸せを奪う物を敵だと思えなかったし、それらを殺すことに何の抵抗も感じていなかった。

カタリナにとって、既に判断基準の大半がユーリとアクアで、だか

ら、カタリナは恩師であるステラですら、ユーリの大切な人であるという以上の価値は見いだせなかった。

ユーリの大切な人だからこそ、何が何でも守るといふ決意を固めていたが、そうでなくなつた瞬間にどうでもいい存在になる事はカタリナの中で決まり切っていた。

(ユーリ、あんたとあたしとアクア。あたしに必要なのはそれだけ。ノーラだつて大切だけど、ユーリの為なら捨てられる。だから、ずっとあたしと一緒に居て。3人で一緒に居られる未来のために頑張るから、一緒に幸せになりましょうよ)

## 92話 侵入

ぼく達はミストの町のすぐ近くにある山、そのふもとあたりにある人工的な洞窟のようなどころへ来ていた。

アクアとカタリナ以外の人とはここでいったん分かれて、逃げ出した人なんかを捕らえる役割を担ってもらう事になる。

洞窟の入り口あたりは結構狭くて、確かに多人数で入ることは難しそうだ。それに、大技を撃つことも厳しいように見える。

ぼくはアクア水の汎用性から一番この洞窟を攻めることに向いているだろう。

カタリナはどうだろうか。まっすぐ通路が続いているようだから、遠くから狙う事は出来ると思うけど、隠れたり移動したりすることは難しいように見える。

だからといって、他の人がもつと向いているかと言われるとそれも怪しい。アリシアさんとレティさんやミーナとヴァネアにノーラは素早さを奪われる。

フィーナは洞窟ごと崩壊させてしまいかねないところがある。ユーリヤは罫を張ったりすることが難しい環境に見える。

メルセデスとメーテルはそもそもぼく達の中で一番弱いし、何よりぼくやアクアと役割が完全にかぶる。

みんなそれぞれに強みを奪われてしまうように思えるから、なかなかだれを選ぶかは難しいところだろう。

ただ、カタリナの事をぼくはよく知っている。限界もよく分かっているからこそ、慣れない環境でともに行動するのならばカタリナが良いと思えた。

サーシャさんはそういう事を考えてカタリナを選んだのだろうか。アクアは誰でも選ぶだろうという気はするけどね。

なにせアクアが一番防御が固くて、一本道の通路に見える空間を進んでいくのだ。正面からの攻撃を防いでくれることに期待したいよね、やっぱり。

それにしても、久々にこのメンバーで動くことになるな。なんだか

懐かしさを感じるよ。

ぼく達の始まりはこの3人だったことを思うと、遠くまで来たような気分になる。

よし、そろそろ向かうとするか。この3人でなら絶対に勝てる。そう信じられる。

「じゃあ、みんな。行ってくるよ。ぼくたちでどうにかしてみせるから、期待して待っていてね」

「ユ、ユーリさん。あなたが無事に帰ってくれば、わたしはそれでいいんですつ。必ず帰ってきてくださいね」

「ユーリ君たちなら大丈夫。私達の誰よりも強いユーリ君なら、心配しなくてもいいよ」

「そうかもね。でも、ユーリ君たちの無事を祈っているから。わたしたちに、また元気な顔を見せてね」

「ユーリ、勝つんだ。人もモンスターも弄ぶ奴なんかには負けるんじゃない」

「そうね。アタシ達のすべてを否定するような人たちだもの。負けるわけにはいかないわよね」

「ユーリさんは最強のスライム使いっすからね！ 絶対に勝ってくるに決まってるっすよ！」

「そうね。ユーリちゃんにはまだまだ教わりたいことがあるんだもの。つまらない研究者なんかあつという間に倒してくれるわ」

「ユーリさん、ご武運を……力になれないのは悔しいですが、またの機会に全力を尽くしてみせます……」

「またご主人とは離れ離れか……だが、カタリナがいるのだから大丈夫だろう。アクア様、ご主人とカタリナの事をよろしく頼むぞ」

みんながそれぞれの言葉で送り出してくれる。うん、絶対に無事にこの事件を乗り越えてやる。

そして、またみんなで楽しい時間を過ごすんだ。そのためにぼくは頑張るんだ。

入り口から侵入していくと、すぐにモンスターが現れた。人型モンスターだ。

今回の敵はスキュラみたいだ。そういえば、スキュラって契約者が少ないとか聞いたような気がするけれど。

たしか、安定的に水を供給する必要のあるタコ型モンスターを育てるのは大変だから、それで契約者が少ないんだっただけかな。

この研究所ではその問題を解決したのだろうか。研究所って言う位だし、その方法でも作っていたのかな。

まあ、なんでもいいか。ぼくの考えるべきことでは無い。まずは目の前の敵を倒すだけだ。

さて、前回メルセデスたちが戦ったスキュラと性能は同じなのだろうか。違うのだろうか。

あのスキュラと同じならば、対処は簡単なんだけどね。まずは確かめてみるか。

ぼくは水刃をスキュラに向かって放つ。これで触手が切り裂けるのなら、何度でも切り裂いてやればいいだけなんだけど。

ぼくの思惑通りにはいかず、このスキュラには水刃を防がれた。なるほど、そうなるのか。

前のスキュラは再生能力に優れているだけだという感じだったけど、今回のスキュラは防御力が高いらしい。

それにしても、今回のスキュラも何も話しかけてこないんだな。何か普通のモンスターと違うのだろうか。

まあ、どう考えても改造か何かを受けているのだから、その影響なのは間違いない。問題は、それがどんなことを意味しているのかだ。

言葉をしゃべれない代わりに能力を強化しているだけなのならば話は早い。普通に倒せばいいだけだ。

ただ、それ以外に何か厄介な仕込みがされていないかが心配だ。ぼくにぱつと思いつくもので言うと、指輪の力みたいな意志疎通だ。それならば、手の内を見せると後続に情報を送られてしまう。

やっつかいだな、相手の事が分からないまま戦うというのは、でも、やるしかない。これ以上この研究所らしき場所に好き勝手させるわけにはいかないのだから。

「カタリナ、アクア、いつものようをお願い。ぼくがうまく倒してみせ

るよ」

「はいはい。さっさとしなさいよね。どうせこいつなんてただのザコなんだから、本命に向けて力は残しておくべきでしょ」

「まかせて。アクアが攻撃なんて通さない」

いつも通りの頼もしい2人だ。ぼくは安心して頼る事ができる2人にいくつかの仕事を任せて、スキュラの妨害に専念する。

触手を振り回して攻撃してくるだけなので、カタリナの方に向かいそうな触手だけをアクア水で防ぐ。

相手の触手は頑丈とはいえ、攻撃力はそれほどでもない。ぼくが触手を防いでいる間にアクアがスキュラに接近してスキュラの動きを妨害する。

これでぼくとカタリナの守りはそれほど気にしなくていいので、念のためにアクア水を霧状に広げて索敵しておく。

今のところは新たな敵はいないので、目の前の敵に集中する事ができる。

カタリナがスキュラの動きの隙について、いくつかの矢を射かける。ノーラとの契約技の力を段階に分けて、どれだけの威力の攻撃なら通じるか測ってもらっている。

何本かの矢がスキュラの触手に突き刺さった。それを見てスキュラの耐久力を計る事ができたぼくは、スキュラの倒し方がある程度決める。

さて、念のために前回のスキュラと同程度の再生力を持っていることに備えて策を練ったけど、どうかな。

ぼくは持ち込んだ鉄片をアクア水で操作して、スキュラの触手へと水刃の形でぶつけていく。

鉄片を含んだ水刃はスキュラの触手をすぐに切り裂いていった。念のため触手が再生しても良いように水刃を展開しておいたけど、再生する様子はない。

「カタリナー！」

「わかってるわよー！」

カタリナはぼくが声を出したときにはすでに動いており、スキュラ



はカタリナの撃った矢によって脳天を貫かれた。

触手が再生するのなら、触手で頭を防御されないように気を配る必要があったけど、再生はしてこなかったな。

スキュラはそのまま動かなくなつた。念のために少しの間様子を見ていたけど、完全に息は止まっていた。

まずは敵を倒したのでそのまま進んでいくと、今度はハーピーが現れた。

さて、どういうつもりで敵はこのハーピーを寄こしたのだろう。これだけの閉鎖空間でハーピーの強みを発揮できるとは思えないけど。空を飛ぶことは当然できないし、速い動きにしたって狭い空間では攻撃を適当なところに置いておくだけで簡単に動きを阻害できる。

それに、モンスターが複数体いるのならば、まとめてかかつてきたほうが厄介だと思っただけだね。

まあ、敵が愚かदैいてくれる分にはありがたい限りなのだけれど、油断するわけにはいかないよね。

ハーピーの事を観察していると、ぼくの索敵に空気の動きが引つ掛かった。慌てて防御すると、風刃のようなものが飛んできた。

なるほど。そういう手段をこのハーピーは持っているのか。なら、この閉鎖空間でハーピーを差し向けてきたのも、ただの馬鹿つてわけじゃなさそうだ。

でも、スキュラで足止めしながら風刃らしきものを撃たせた方が良かったんじゃないのかな？

まあ、ぼくが楽できるならそれを責める理由もないだろう。それにしても、風刃には似ても似つかないな、このハーピーの技は。

アリシアさんなら、もつと素早く、もつと多く、もつと鋭く風を刃として放つことができる。

それに、近接戦闘だつてすさまじいからこそアリシアさんの風刃は恐ろしいんだ。

単に固定砲台としてすらアリシアさんの足元にも及ばないこのハーピーは大した脅威では無いよね。さっさと倒してしまいたいな。正直見ているのも不愉快だ。

ぼくの尊敬するアリシアさんの技をこんなつまらないものだと  
思っている連中がいるってことだよ。そうじゃなかったら、わざわざ  
敵の正面にこの程度の奴を向かわせたりしない。

ぼくはさらに研究者たちへの怒りを強めていたが、アクアに手を握  
られて冷静さを取り戻す。

「ありがとう、アクア。カタリナ、こんなザコ、すぐに片付けてしま  
おう」

「気にしないでいい。それより、油断はしないで」

「あなたのいつも言ってることでしょ。自分が油断してどうする  
のよ」

カタリナにもアクアにも窘められてしまう。そうだよ。アリシ  
アさんたちの技はこんな程度ではないとはいえ、不可視の攻撃自体は  
厄介だ。ぼくはしっかりと警戒を強める。

落ち着いたぼくはメルセデスのように水の膜を張って敵の攻撃を  
妨害すると、アクアに接近してもらって敵の動きを抑えてもらう。

そこにカタリナが弓を射かけて、ハーピーの翼を動かさなくしてし  
まう。

翼を傷つけられたハーピーは風で滅茶苦茶に攻撃してきたが、霧状  
にアクア水を撒くといういつもの手段で風の動きを把握しているぼ  
くは水の膜で風を防ぐ。

そのまま、カタリナが脳天を射抜いてハーピーは倒れていった。

やっぱりこのハーピーは弱くはあったけれど、だからといって攻撃  
を受けていい相手ではなかった。ちゃんと冷静さを保っていないと  
な。ぼくはアクアとカタリナに感謝しながら、さらにこの研究所を進  
んでいく。

そこには、契約者らしき人たちが待ち構えていた。なるほど。カー  
レルの街に契約者が増えたのも、もしかしたらこの研究所が関係して  
いるのか？

## 93話 罪

ぼく達の前には契約者らしき人たちがいる。モンスターは連れていけないけれど、それぞれの顔に契約の紋章らしきものがあるから、契約技は使えるものと思っておいた方が良いでしょうね。

カーレルの街でモンスターを連れていけない契約者が増えていたのも、この研究所で契約モンスターを必要としない契約技を生み出せたからなのだろうか。

まあいい。ここに居るのだから、恐らくは敵だろう。いつでも攻撃できるように備えておく。

「侵入者が来たと聞いてやってきてみれば、弱そうなガキじゃねえか。さつさと片付けて、能力を強化してもらおうぜ」

「ああ。たった2人にモンスター1体だ。どうとでもなるだろうな」  
能力を強化と言ったか。やはりこの研究所で契約技を使えるようにしているんだな。そうなると、カーレルの街へ来た契約者も警戒しないといけないかもね。

サーシャさんには後で伝えることにして、まずはこいつらを倒さないといけない。

それにしても、こいつらはオーバースカイを知らないのか。結構有名になったと思っただけけど。

まあ、構えからしてただの素人に見えるし、冒険者として情報を集めたりはしていないのだろうか。

でも、研究者たちはカーレルの街での騒動にも関わっているのに、ぼく達の情報を知らないなんてことがあるだろうか。

わざとこいつらに知らせなかった？ そうだとして、一体何のために？ 今考えても仕方のない事ではあるか。

相手はこちらを殺そうとしてくるかもしれないし、しっかりやらな  
いとね。

敵は今のところ5人か。どんな契約技を使ってくるか分からないし、とりあえず先制攻撃として氷の塊を相手にぶつけることを試してみる。

誰もそれを避ける事ができず、顔面に真正面から氷の塊を受けていた。こんなものなのか？ 契約技がよほど強くない限り、ここまで戦い慣れしていない人は相手にならないと思うけど。

まあ、油断はしないでおかないとね。ハイデイみたいな能力を持っている可能性だってあるのだし。

「さっさと消えなさいよね。目障りなのよ」

敵の様子を見ながらさらに追撃を加えるか考えていると、カタリナが契約者たちの脳天を打ち抜いていった。

あつという間の出来事で、ぼくが何かを口にする前に全員死んでしまった。ぼくは正直言つて微妙な気分だったけど、カタリナはぼくに気を使ってくれたんだらうと判断して、カタリナの行動を受け入れることにする。

結局のところ、この人達の能力は何だったんだらう。ある程度情報があれば、この先出てくるかもしれない増援への対処が思い浮かんだらうけど。

契約の紋章らしきものがあるから、こいつらの力は契約技なんだらうけど、見たことのないような紋章もあった。

ある程度種族の特徴が出た模様になるのが契約の紋章だから、それで今まであたりを付けていたけど、分からない事がこれからも続くと、先手を打って対策をとれない。

まあ、初見の人型モンスターと戦う事と同じような話ではあるのだけれどね。一応人型モンスターについては頑張つて調べているけど、全く知らない人型モンスターと戦った事だつてある。

何かを考えてごまかそうとしていたけど、やっぱり目の前で人が死ぬのはいい気分ではない。でも、相手がこちらを殺そうとしているようなセリフを言っていた。

カタリナやアクアをちゃんと守るためにも、ぼくも殺すことを覚悟しないといけないのかもしれない。

でも、ぼくにはまだ殺す覚悟があるとは言えない。カタリナに罪を押し付けてしまっているだけだらうに、それでも覚悟を決められないなんて、情けない話だ。

少し悩み事に浸っていると、増援らしき人間たちがやってくる。どうする。ぼくが殺してしまうか。カタリナはもうこれからも殺すことをためらわないと感じる。

カタリナと一緒に背負うべき罪なのだろうから、ぼくだって殺すべきなのだろうけど、どうしても踏ん切りがつかない。

ぼくは人型モンスターをすでに殺しているのだから、人を殺したって変わりはないはずなのに。

覚悟を決められないまま、とりあえず敵の行動を妨害するためにアクア水で拘束しようとする。

その前に、敵が攻撃を仕掛けてきた。どうみても契約技だ。

「あいつらの仇！ せつかく新しい力を手に入れて、底辺じゃなくなっていく所だったつてのによ！」

「ガキに良い顔させたままでいられるかよ！ さっさとくたばって、俺にもっと強い力を寄こしてもらうんだ！」

敵からは炎や水が飛んできた。でも、はつきり言って弱弱い。ただ、念のためにしっかりとアクア水で防御しておく。

すると、攻撃を受けても特におかしな効果はなく、ただの弱い契約技にしか見えない。それから何度か敵が契約技を撃ってくるけど、全くアクア水には通じていない。

その様子を見て、敵は大きく動揺しているようだった。

「な、なんなんだ、こいつらの力は！ ただの侵入者じゃなかったのかよ！ カモだつて話だったじゃねえか！」

「に、逃げようぜ！ 力はもう手に入ってるんだ。こんな場面に付き合っついていられるかよ！」

何に動揺しているのかと思えば、今更過ぎないか？ ぼく達は特に手傷を負わないまますでに5人殺しているんだぞ。

それを見てもまだカモだつて言われた情報の方を信じるなんて、どうかしているんじゃないか？

まあいい。出口から逃げられたところでアリシアさんたち他のオーバースカイがいるはず。だから、逃がしても問題はないかもしれない。

ただ、隠れた逃げ道のような物があるかもしれない。そう判断して、逃げようとする敵をアクア水で拘束する。

すると、今度はアクアが敵の頭を殴りつけて吹き飛ばす。拘束された敵はすぐに息絶えた。

「ユーリ、アクアがユーリを守ってあげる。ユーリが殺すのを嫌がっているのなら、アクアが殺してあげるね」

「余計なことを言わなくていいのよ、アクア。こいつがヘタレなのは分かり切っているんだから、あたし達がその分を埋めてやればいいよ」

これからもカタリナとアクアはぼくの代わりに人を殺していくのだろう。それでいいのか？ ぼくの覚悟が足りない分を2人に背負わせて。

敵はぼくたちの命を狙ってくるんだ。それって、カタリナたちも危ないってことだ。それに、これからもぼくが敵を殺せないままなら、他の仲間にも同じ罪を背負わせてしまうんじゃないか？

いい加減覚悟を決めるんだ、ユーリ。ぼくが本当に仲間の事を思っているのなら、できるはずだ。

だって、仲間だけに嫌なことを押し付けるなんてこと、本当に仲間を大切にしていて人間のことでは無い。

それで良いわけがないだろう。仲間だけに苦しみを押し付けて、それで仲間の横で日常を笑って過ごすのか？

そんなこと、やっていいはずがない。でも、ただ人を殺すだけのぼくにならないように、制限を設けよう。

仲間の命を狙ってくる人間。それだけを殺していればいい。幸いなのかは分からないけれど、冒険者同士が殺しあう事なんてそこまで珍しい話じゃない。

それでも、冒険者として活動を続けることは問題なくできることの方が多。敵を殺して仲間に迷惑をかける可能性は低い。

よし、覚悟は決まったな、ユーリ。次の敵が現れて、それがぼく達の命を狙ってくるのなら。迷わず殺せ。それが仲間を胸を張れるぼくだらう。

「大丈夫だよ、カタリナ、アクア。ぼくも覚悟を決めたから。もう迷わないよ」

ぼくの言葉を受けて、カタリナとアクアは心配そうな顔をしている。そうだよ。今までずっと悩んでいたことに気づかれていないはずがない。

でも、もう決めたことだ。カタリナやアクアにだけ苦しい思いをさせたりしない。

今ぼくが感じている苦しみほどじゃないかもしれない。それでも、全く苦しみを感じないわけがないんだ。それを2人にだけ押し付けるような真似はもうしない。

相手は契約技を持っているんだ。それってつまり、拘束したって安全だとは限らないってことだ。だから、カタリナたちは殺す判断をしたのだと思う。

やるぞ。2人を危険にさらさないために、2人に罪を押し付けられないために。

そして次の契約者たちがやってくる。ぼくたちの姿を見るや否や契約技を放ってきた。ぼく達に当たる軌道でだ。

つまり、この人達はぼくたちを殺すつもりで来ている。さあ、やるんだ。

ぼくはアクア水で濡れさせて1人を足止めしながら、1人に鉄片を含んだ水刃で攻撃して首をはねる。

そのまま他の人たちにアクア水の氷をとがらせたものを頭に突き刺して仕留める。

それに時間をかけていると、濡れさせていた1人はそのままおぼれ死んでいった。

もう目の前に敵はいない。ついにやった。やってしまった。ぼくに喜びは全くなかったけれど、この嫌な感覚をカタリナたちも味わってきたんだと思うと、それで良いんだと思う。

「ユーリ、大丈夫？ アクアが代わってあげたのに。ユーリの為ならなんだってする」

「はあ。案の定落ち込んでるじゃない。あんたはつまらない事を気に

し過ぎなのよ。どうせ敵なんだから、数が減ってよかったでしょうに」

アクアたちが慰めてくれているのを聞いていると、本当に殺したという実感が沸き上がってきた。

胸の奥に嫌なものが詰まっている感覚、指の先がじりじりと焼かれているような感覚、そういう受け入れにくい感覚が襲い掛かってきて、ぼくは少し震えていた。

気分の悪さも今更ながらにやってきて、とんでもない事をしでかしたのだという思いがすごい勢いで浮かび上がってきた。

でも、カタリナたちだつて似たような苦しみに襲われてきたはずなんだという思いで必死に耐える。

しばらくの間苦しんでいたけど、ようやく落ち着いてきた。それに合わせてアクアが先導してくれるので、研究所の奥に向かって進む。

広間のような場所に出て、そこでは人形を抱えた少女が待ち構えている様子だった。

「ユーリに似てる? ……いったい何者?」

「たしかに、ユーリに似ているような……? まさか、本当にプロジェ

クトU:Reとユーリに関係があったの……?」

目の前にいる少女はぼくに似ているらしい。よく分からないけど、もしかしてぼくと血が繋がっていたりするのかな? そうだとすると、プロジェクトU:Reというのは、ぼくと関係があるのかな?



ぼくの目の前には、ぼくに似ているらしい少女がいる。幼さを感じられるような顔つきで、ぼくより3つか4つは年下だと思う。ウサギのような人形を抱えているのが目に付く。

まだ遊んでいてもおかしくない子供に見えるけれど、ここに居るといふ事は敵なのか？ そうだとすると、こんな子供まで殺さないといけないのか？

そもそも、ぼくに似ているといふ事は、ぼくと何か関係があるといふ事なのか？ 何もかもが分からなくて、頭がうまく回らない。

そんなぼくに、少女の方が声をかけてきた。

「おにいちゃん、シータがおにいちゃんをやっつけないといけないの。だから、やっつけちゃうね」

そのままシータとやらは電撃をぼくに向かって放ってきた。反射的にアクア水で壁を作れたから助かったものの、とんでもない攻撃だ。

シータはお兄ちゃんとぼくの事を呼んでいた。本当に血がつかっている？ いや、そんな事を考えていて勝てる相手とは思えない。

ぼくは気を取り直してシータに対峙することを決める。シータはそのまま何度も電撃をこちらに放ってきた。

それらをアクア水で何とか防御しながら、シータへの対抗策を考える。電撃は間断なく放たれる。だから、うかつに攻撃に転じればその隙をつかれかねない。

ぼくは反射で追いつかなくても対応できるように、水の壁を多めに用意していた。少なくともシータとぼくたちを繋ぐ直線には、常に水の壁があるようにしていた。

そのまま防御を続けていると、シータはあまり動かずに固定砲台として攻撃を続けていることに気が付いた。

それとほぼ同時に、カタリナがシータに向かって矢を放つ。そのままだと突き刺さってシータが死んでしまうので、ぼくは焦っていた。

だけど、ぼくの心配など関係なく、シータはどうやってか矢をあらぬ方向へと飛ばしていった。

カタリナがシータを殺さなかったことには安心したけど、このシータの技がどういうからくりかが分からないと、うかつに攻撃できない。

さつきは滅茶苦茶な方向に飛ばすだけだったけど、もしシータがこちらに向けて攻撃を跳ね返して来たら。

その懸念がある以上、シータに向けて強い攻撃を撃つことは出来なくなつた。少なくとも今は、シータを殺すような攻撃をしてはいけない。

それがぼくの心を軽くしてくれているのを自覚して、やっぱりぼくは覚悟を決め切れていないのだなと自嘲した。

まあ、それは今考えるべきことじゃない。どうやってシータを無力化するのかを考えないと。

シータの能力。契約技は恐らく電気を操るもの。そうになると、金属で攻撃するのは厳しいのか？

よく分からないけど、金属は電気を通すものが多かったはず。アリアさんが言っていたんだっけ。電気を通さない金属もあるのかも。しれないけど、ぼくはその光景を見たことがない。

ただ、金属が電気を通すこととさつき矢を弾かれたことに何らかの関係性を見出すとすれば、鏝の金属か？

だとすると、鉄片を仕込んだアクア水をぶつけるのもまずいのだろうか？ いや、そもそもなぜアクア水で電撃を防げているんだ。水にぬれると電気を通しやすいって聞いたことがあるんだけど。

ぼく達とアクア水の間には距離があることが大切なのか？ それとも、アクア水が特別なのか？

いや、その理由は何だつていい。アクア水でなら攻撃が通じる可能性があるという事が大事だ。

ぼくは水の塊をシータに向けて放つ。すると、シータは弾き返したりすることもなく水を受けていた。

「おにいちゃん、どうしてシータをいじめるの？ おにいちゃんなん

て嫌い！」

そう言ってシータは滅茶苦茶に電撃を放つ。これは相当怒っているな。アクア水でうまく防いでいるとはいえ、どれだけの時間シータは電撃を放ってられる？

まだ本命の敵は残っているだろうと思えるから、出来るだけ消耗しないうちにシータを無力化してしまいたい。

できれば殺すことは避けたいとはいえ、そんな余裕があるのだろうか。先行きが見えないこともあり、ぼくはどうすればいいのかすぐに決め切れなかった。

それにしても、どうしてシータをいじめるのと来たか。いじめられているのはぼくの方じゃないかな？

なにせ、先に死ぬかもしれないような攻撃を仕掛けてきたのはシータなのだ。

とはいえ、こんな小さな子供にそんな理性を期待するのもおかしな話か。ぼくだって、シータくらいの年に自制がすっかり効いていたのかは怪しいのだし。

まあ、シータだけを倒すことならば今の様子だと簡単だろう。問題は、これからの戦闘に備えてどれだけ消耗を減らせるかという事になる。

まだ厄介な人型モンスターがいるかもしれないし、凶悪な契約技を持つ契約者もいるかもしれない。

それを考えると、出来るだけ持久戦の様相にはしたくないのだけだ。

そうはいつでも、急いでことを仕損じるのはもつと問題だ。シータの攻撃はどう考えても命にかかわるものなんだ。アクア水がたまたま相性がいいだけで、本来もつと警戒してしかるべき契約技なんだよね。

シータが感情的になって滅茶苦茶に契約技を撃っているのは、幸運なのか不運なのか。うっかり近づくことはとっても危ないし、完全に電撃の軌道を読み切れないからある程度反射に頼らなければいけない。

でも、シータが冷静でいるよりは彼女が大きな消耗をしているのは間違いない。さて、どうしたものか。

このまま耐えていれば勝てるとは思う。でも、これよりぼくたちの消耗を減らす手段となると殺すことばかりしか思い浮かばない。

こんな小さな子供を殺すことにはどうしても抵抗があるので、できればシータが敵意を失ってくれればいいのだけれど。

そうだな、試しに言葉を投げかけてみるか。会話でここをくぐり抜ける事ができるのならば、それがいい。

「ねえ、シータ。ぼくに攻撃を仕掛けるのをやめてくれないかな？  
そうすれば、ぼくはきみに攻撃しなくていいんだ」

シータはぼくの言葉を受けて、少し考えている。その間は電撃がとまっているので、会話自体には効果があるみたいだ。

さて、シータはぼくの言葉にどう反応するのだろうか。ぼくの言葉は本音ではあるけれど、相手がどう受け止めるのかはよく分からない。

これで戦いを辞めてくれるのであれば、ぼく達は消耗しなくて済むし、シータを殺すことだつてしなくていい。

ぼくにとつてはいい事づくめなので、出来ればシータが話を聞いてくれると良いんだけど。

シータは悩む様子を見せていたが、またぼくに攻撃を仕掛けてくる。ぼくはカタリナとアクアに合図して、いったん攻撃を止めてもらう事にした。

「ほら、ぼく達から攻撃するつもりはないよ。シータ、ここを通してくれないかな？　ぼくはきみを傷つけないんだ」

シータはまた電撃を放つことを止める。会話に集中すると攻撃できなくなるのか、それともぼくの言葉を真剣に考えて攻撃を止めているのか。

どちらにせよ、ぼくは会話で攻めることを方針に決めた。こんな小さい子供に攻撃するのは気が咎めるし、何より、さつきまでの人たちと違って会話が通じそうなのが大きい。

これまでぼくたちがここで戦ってきた契約者たちは、ぼくたちを手柄くらいにしか見ていないのはよく分かったから、対話の余地は感じ

取れなかった。

でも、シータはそうではない。ぼくの言葉をしっかりと受け入れてくれているように見える。

この交渉が決裂するにしろ、そうでないにしろ、対話をすることに意味がないとは思えなかった。

それに、ぼくに似ているというアクアとカタリナの言葉、それとシータの語るお兄ちゃんという呼び名。それってぼくにとってシータが妹である可能性があるってことだ。

両親の事はもはやどうでもいいと思っているけど、この子はまだ幼いこともあって、守っていくべき存在なのではないかと感じた。

シータの様子を注視していると、シータはぼくに言葉を返してくる。

「信じられないもん！ どうせ、おにいちゃんもシータにひどいことするんだ！」

そしてシータはぼくに攻撃を仕掛けてくる。カタリナやアクアは目に入っていないようだ。それなら、ぼくは説得を続けても問題ないな。

カタリナやアクアを傷つけてまで、ぼくは出会ったばかりのシータを助けようとは思えない。でも、今のシータはぼくにしか攻撃してこない。ならば、ちゃんと話をして分かってもらうために力を尽くせる。シータの言葉を受けて同情しているのかもしれないけど、ぼくはシータをことさら傷つけたいとは思えないようになっていた。

シータがお兄ちゃんもと言う事からは、他の人たちからもひどい事をされてきたという事がうかがえる。

そんなシータに、ぼくはシータを傷つけるつもりがない事をどうやって伝えるか。少し考えて、シータに近寄っていくことにする。

「こないで！ こっちにくるのなら、もつとすごい事をするんだから！」

「シータ、ぼくはきみにひどい事をするつもりはないよ。だから、今だって君に攻撃していませんでしょ？」

シータは髪を振り乱しながら叫んでいる。その様子を受けてぼく

はシータがこれまでに本当にひどい事をされていたんだと感じた。

ぼくからこの子に攻撃すれば、シータは完全に心を閉ざしてしまうと思う。だから、シータが何をしても攻撃しないつもりでいる。

もちろん、カタリナやアクアを傷つけないという前提ではあるのだけど。でも、本当にこの子を傷つけないわけではない。

「うるさい！ これでもくらえ！」

そしてシータはぼくに向けてこれまでより数段強い雷撃を放ってくる。だけど、アクア水での防御は貫けなかった。

ぼくはそのままシータに近寄っていく。シータは肩で息をしているので、この攻撃でもとても疲れているみたいだ。

シータに近寄って手を伸ばすと、シータは顔をかばうような姿勢を見せる。たぶん、これは殴られたりしたことのある人の反応だ。

ぼくはそのままシータに近寄ると、ゆっくりと軽く抱きしめる。

「ねえ、シータ。ぼくはきみと仲良くなりたいんだ。お兄ちゃんってぼくを呼ぶんだから、きみはぼくの妹でしょ？ 一緒に遊んだり、美味しい物を食べたり、楽しい事をいっぱいしようよ！」

シータはゆっくりとぼくの話聞いていたが、また電撃を放ってくる。それでも、ぼくはシータを離さなかった。

するとシータは力を抜き、ぼくに抱きついてくる。これは和解に成功したかな？

「おにいちゃん。ほんとにシータと遊んでくれる？ 一緒に居てくれる？」

「もちろんだよ。だから、一緒に来てくれる？ ぼくはシータの事を必ず大切にやるから」

「うん！ だったら、おにいちゃんをいじめる人はシータがやっつけてあげる！ 変なおじさんたちより、おにいちゃんと一緒にがいい！」

そのままシータはぼくに抱き着いたままだった。アクアやカタリナは周囲を警戒してくれている。

さて、シータと和解することには成功した。でも、シータは本当にこの先の敵を倒してくれるだろうか？

なんでもいい。ぼくたちにもう攻撃してこないのなら、全力でシー

夕を守ってみせる。

## 95話 露見

ぼくはシータを引き込むことに成功して、研究所のさらに奥へと進んでいく。

通路を歩きながら、ぼくはシータと会話をして仲を深めようとしていた。

シータは人形を抱えながら、ぼくの左腕にしがみついている。人形の事は何があっても離そうとしないので、きつと大切なものなのだろう。

それにしても、なぜシータは急にここまで懐いてきたのだろう。いくらぼくが優しくしようと思っていたからって、それだけでこんな風になるものなのかな。

まあいい。シータと敵対しなくていいのはありがたい事だ。単純にシータが強いのもあるけど、こんな小さな子供を傷つけるのは流石につらかったし。

それに、シータが懐いてくれている姿を見ると、なんだか嬉しいうるか、優しい気分になれる気がする。

ぼくには家族はアクアしかないようなものだったから、妹ができた事が嬉しいのかもしれない。

まあ、ぼくはオーバースカイのみんなやステラさんも家族同然に思っているはずだけれど、なんだか少しそれとは違う感情のような気がする。

なぜそう感じるのかは分からないけれど、シータの事は大事に扱うつもりだ。

そうすれば、色々と良い事があるような気がするのだ。この感覚が当たっているといいな。シータにはつらい過去があるように見えるし、だから幸せになつてくれたら嬉しい。

「ねえ、シータ。好きな食べ物ってあるかな？」  
「よくわかんない。おにいちゃんは何が好き？」

よく分かんないと来たか。シータはこれまでろくなものを食べてこなかったんじゃないか？ だから、好きな食べ物も分からない。



ぼくの予想が正しければ、シータは本当にろくでもない目に遭っていることになる。こんな小さな子にまともな食べ物を食べさせないなんて、やはりこの住人はろくでもない。

ぼくは改めてこの研究所をどうにかするという決意を固める。

シータに何か美味しい物を食べさせてあげたいけれど、ぼくは携行できるあまり美味しくもない食事くらいしか持ってきていない。

ああ、飴なら良いかもしれない。空腹をごまかすために持ち込んでいたけれど、甘いものって子供は好きなイメージがあるし、気に入ってくれるかも。

「ぼくは魚が好きかな。ところで、シータ。これを食べてみない？」

甘くておいしいよ」

「なあに、これ？ おいしいの？」

飴を知らないのか。この子はもしかして、戦いしか知らなかったりするのかな？ だから、ぼくに攻撃することが当たり前だった。さすがにそれは無いか？

ぼくに攻撃するように言われたんだっけ。でも、それで素直に攻撃するってことは、戦闘にある程度慣れている事は確かかなはず。

契約技が使える事といい、戦闘のために育てられていたとしてもおかしくは無いと判断できる。

ぼくに似ている事といい、ぼくをお兄ちゃんという事といい、もしかしてぼくも何かこの研究所と関係があるのか？

そうになると、ぼくの名前がプロジェクトU:Reと関係がある可能性まで出てくる。家にあつた資料は、もしかしてアクアをオメガスライムにするための物だった？

でも、アクアはオメガスライムではない。もしかして、失敗作だとかそう言った理由でアクアを手放した？

適当な考えだとはいえ、全くのはずれだとは思えない。やっぱりこの研究所はどうかして停止すべきものだ。

まあ、今は戦う事を考えておけばいい。それに、シータに飴の説明もしない。

「飴って言って、口の中に入れて舐めるものなんだ。甘いから、きつと

気に入ってくれると思う」

ぼくの言葉を聞いて、シータは飴を口の中で転がし始める。とつても楽しそうな雰囲気をしているから、きつと気に入ってくれたのだと思う。

シータのおいしそうな顔はすつごく可愛くて、この子の笑顔をもつと見たいと思わせるには十分なものだった。

ぼくにはきょうだいは居なかったけれど、妹という物も良いかもしれない。

「おにいちゃん、これおいしいよ！ もつとちようだい！」

「もう1つだけならあるけど、それだけなんだ。ぼくと一緒に来てくれるなら、他にも色々食べさせてあげるよ」

「むう……じゃあ、そのもうひとつをちようだい！ おにいちゃんに着いて行っても良いけど、ちゃんとおいしい物を食べさせて！」

シータにねだられた分の飴をあげると、また楽しそうに食べている。

この子に色々とおいしい物を食べさせてあげて、どんな顔をするのかが見たいという欲求が湧いてきた。

おいしい物を食べさせる以外にも、いろんな遊びを教えてあげるとか、ぼくの仲間たちに紹介するとか、やってみたいことが色々できた。

うん、この子を殺してしまうような展開にならなくて、本当に良かった。

もうぼくの中では、シータは守りたい人の1人になっていて、これからももつと仲良くしていきたい相手なんだ。

「おにいちゃん、飴、ありがとう！ もつとおいしい物、たべさせて？」  
そう言いながらシータは抱き着いてくる。器用に人形を持ったま  
まうまく抱き着いてきていて、ちよつとだけ面白い。

シータの頭を撫でていると、気持ちよさそうにしている。シータの髪は短いけどとてもサラサラでなで心地が良い。

それにしても、シータの甘え方はなんだかアクアの事を思い出すな。いや、今アクアは隣にいるんだけどね。

なんとというか、ハイスライムに進化したばかりのころのように、事

あるごとに引っ付いてくる感じが似ているのかな。

アクアの事を思い出すからシータの事が好ましいのだろうか。一因としてはあるかもしれないけれど、やっぱりシータが素直で可愛いからだと思う。

この子はきつといい子だから、いっぱい幸せにしてあげたい。多少悪い子だとしても、可愛がるつもりではあるんだけどね。

シータにねだられた美味しいものは今は準備できないから、何か他の物で気を引けないかな？ でも、戦いの道具ばかり持ってきたんだよね。

道具がないなら、アクア水を使って何かしてみるか。何か派手なものでも作ってみるのはどうだろう。

「ごめんね、美味しいものは今はもっていないんだ。帰ったらいろいろ用意できると思うんだけど」

ぼくはそう言いながら、アクア水で色々な形を作ってシータの前に持っていく。ウサギとか、ねずみとか、可愛らしいと思う動物を主に作ってみた。

するとシータは目をキラキラさせながらアクア水で作ったものの方を見ている。これは成功したかな。

「すごいすごい！ ウサギさんだ！ おにいちゃん、他にも何か作れる!？」

ウサギにだけ反応していると、シータはどんなものを気に入ってくれようだろう。

少し考えた後、ぼくはアクア水を凍らせてウサギの像を作ることにした。そのままウサギの氷像をシータに見せると、跳び上がって喜んでくれた。

やっぱり、この子の喜ぶ姿はいい。無邪気な感じがとっても愛らしい。ぼくは出会って間もないシータの事をもうはつきりと好きになっっていた。

それからしばらくシータと遊んでいると、モンスターが何体か目の前に現れた。

シータはそれを見て少しおびえているように見える。すぐに倒そ

うかと考えていると、シータに声をかけられる。

「おにいちゃん、この子たち、シータがやつつけてあげる！」

そのまま電撃を出してシータはモンスターを倒していく。でも、シータは少し消耗しているように見えて、ぼくは心配する心を抑えられなかった。

「シータ、疲れていない？ 無理しなくても、ぼくがモンスターを倒してあげるから、休んでいいよ」

「ありがとう、おにいちゃん。でも、これくらいならへっちゃら！ おにいちゃんのために、いっぱいやつつけてあげる！」

シータは明るい様子でそう言った。本当に大丈夫なのか気になるけど、シータは止める間もなくモンスターが現れるたびに電撃を放ってモンスターを片付けていく。

そのたびにシータを褒めているけど、ぼくの本音としては、これ以上シータに戦ってほしくはなかった。

それからしばらく進んでいくと、また広い空間に出る。そこには男が1人と、何体かのモンスターがいた。

男はこちらに振り向くと、シータに何か装置のような物を向ける。すると、シータは苦しみだして、すぐに意識を失う。

慌ててシータの様子を確認したけど、息はある。まだ死んだわけじゃ無い。少しだけ安心しそうになるけど、まだはつきりと助かったわけじゃ無い。

アクアにシータを任せた後、怒りのままに男に水刃を放つ。男は光の膜のような物を張って水刃を防ぐ。

「シータに何をした！ ことと次第によつてはただじゃ済まさないからな！」

「θの能力は私が与えたものだ。私が制御できるようにするのは当然の事ではないか？ プランθは最高傑作と思っていたが、まさかこのような形で裏切るとはな」

プランθって、こいつ、シータの名前は単に計画の名前から流用しただけだともいうのか？

ぼくは怒りに飲まれそうになるけど、必死に落ち着こうとする。な

ぜこいつが水刃を防げたのか分からないままやみくもに攻め込むわけにはいかない。

それに、シータがいつまで無事でいられるのか分からない。何を優先すべきかはつきりさせないと、この状況は乗り切れないだろう。

ぼくが悩んでいると、アクアがこちらに寄ってきた。

「ユーリ、シータは大丈夫。だから、安心してこの男を倒せばいい」

「アクア……ありがとう。なら、全力でこいつを倒せばいいよね」

ぼくが目の前の男に全力をぶつけようとする、何故か男は笑い出す。そのまま樂しげにぼくたちに話しかけてきた。

「ユーリにアクアときたか。まさか、捨てたはずの息子とここで出会う事になるとはな」

この男がぼくの父親だった？ ぼくは少しどころではなく混乱していた。本当にぼくとプロジェクトU:Reに大きく関係があるなんて。

でも、そうになると、本当にシータはぼくの妹かもしれない。その考えに至ったとき、ぼくは頭が沸騰するんじゃないかというほどの怒りに襲われた。

こいつは、自分の娘を実験台に使ったあげく、邪魔になったらシータを排除しようとした。

何があってもこいつだけは許すわけにはいかない。ぼくはこの父親をどうにかして倒すことに決めた。

でも、ぼくの怒りを差し置いて父親は更に語り続ける。

「この研究所に侵入者が現れたと聞いたときには不愉快なだけだったが、ユーリには感謝しないといけない。その契約技、身体能力。失敗作だとばかり考えていたが、アクアこそがオメガスライムだったよ  
うだ」

アクアが……オメガスライム？ ぼくは思わずアクアの方を見てしまう。ぼくのその様子を見て、アクアにおびえのような感情が浮かんでいた。

動揺を抑えきれないと、ぼくの目の前に契約技らしき炎が飛んできていた。

「せっかく完成したオメガスライムはお前にはもつたいない。私の手にあるべきなのだ」

飛んできた炎に対処することもできず、そのまま炎はぼくに直撃した。

## 96話 恐怖

アクアがオメガスライムかもしれないということに気を取られている隙に、ぼくに契約技らしき炎が放たれて、それを無防備に受けしてしまう。

だけど、ぼくに火傷や傷のたぐいは全くなかった。首元から何らかの力を感じていると、ハイデイにいつか貰ったチョーカーと白金勲章が共鳴していた。

おそらく、このチョーカーが守ってくれたのだと思う。ハイデイはこれをぼくに渡すときに、これがぼくを守ってくれるみたいなのを言っていたから。

ぼくは今ハイデイに守られていた。ハイデイとのつながりをしっかりと感じられて、緊急時なのに嬉しくなってしまう。

でも、アクアやシータのことを考えてすぐに冷静になった。アクアは動揺している様子だし、シータは未だに目覚めていない。

カタリナは無事だけれど、今この状況では、カタリナに2人を支えてもらいたかった。

「カタリナ、2人をお願い。ぼくがこいつを何とかするから」

「仕方ないわね。でも、アクアはある程度落ち着いているみたいよ」

カタリナの言葉を受けてアクアのことは見るけど、カタリナが言うほど落ち着いているようには見えなかった。でも、カタリナがすぐに2人の様子を見に行ってくれたので、ぼくは安心して父親に相対する。

「お前がこれまでに犯してきた罪、死んだ程度で償えると思うなよ」

ぼくはそう言ったけど、積極的にこの男を殺すつもりはなかった。こいつは結構重要な立ち位置にいるはずだから。

オメガスライム研究の実験体だったアクアがぼくのもとに居ることといい、シータの研究についてよく知っていることといい、ただの末端ではないはずだ。

だからこそ、情報を吐けるだけ吐かせるために、できるだけ生かしてこの男を捕らえるつもりでいた。

サーシャさんなら、きっとぼくよりうまく情報を引き出してくれるだろう。

それにしても、敵の言うことを素直に信じてアクアに気を取られていたぼくには呆れる。敵の言葉なんて嘘が当たり前なんだから、何があってもアクアを信じていればいいだけなんだ。

さて、できるだけ殺さないつもりではあるけれど、こいつが死んでしまったところで心なんて痛まない。さっきまでの人を殺した苦しい感触は、この父親を殺してもやってこないと思えた。

ぼくは本気でこいつを痛めつけるために、まずは鉄片をアクア水に含ませてみる。すると、父親は悠長にぼくに話しかけてきた。

「先の攻撃で死なないとはな。やはり、アクアはオメガスライムとして完成しているようだ。だからこそ、あの炎に耐えきるほどお前が強化されていたのだろうよ」

何を見当違いなことを。ぼくが助かったのはハイデイのおかげだ。でも、こいつが勘違いしているというのなら、なにかに使えないか？

いや、流石にそれだけの誤解では無いか。

まあいい。さて、こいつからどれだけ情報を引き出せるだろうか。こいつがどうやって水刃を防いだのかも気になるところだ。

炎を撃ち出したのが契約技だとすると、契約技を2つ持っている？

いや、ミア強化のようなものをこいつが持っているとは考えづらい。この男にモンスターが信頼を向けることなどありえないのだから。

となると、手に持っている装置が怪しいか？ でも、シータの意識を失わせたことと、光の膜のようなもので水刃を防いだことに何の関係が？

やっぱり、闇雲に攻めるより、こいつから情報を引き出したほうがいいかもね。この男は明らかに自惚れている雰囲気だ。適当に情報を引き出すことは難しくなさそうだよな。

さて、方針は決めたことだし、やるか。どうしたらいいだろう。そうだな。自尊心をどうにか発揮させればいいよね。

「アクアを失敗作だと捨てておいて、見る目がある素振りなんて滑稽



だよ。身の程をわきまえたらどう？」

「分からないか。お前ごときではそうだろうな。私はすでにあのときとは違う。プランθを完成させ、このプランτで制御することに成功した。契約技はすでに私の意のままだ」

手に持った装置を見せびらかしながら男は語る。思った通りにずいぶん口が軽い。よほどプランτとやらに自信があるのだろうか、戦いはまるで分かっていないらしい。

相手の意識の外からこの装置を攻撃すればなんとかなりそうな気はする。さつきぼくの攻撃を止めたときにしろ、シータに干渉したときにしろ、こいつは見てからこの装置を動かしていたからね。

まあ、相手は何もしてこない様子だから、もっと情報を集めてみるか。

「へえ、それでその装置がプランτとやらの成果つてわけ。でも、偶然生まれたアクアの方がお前の最高傑作よりよほど優れているみたいだけど？」

「私がアクアに施した処置が正しかったと証明されただけだ。何も生み出せぬお前にはわからぬことであろうが、私の優れた成果はアクア1つではないのだから。プランθは知性を持ちながら何も行動できない契約技の材料としてこれ以上ない存在を生み出したし、プランτでは契約の紋章に干渉して契約技使いを無力化できるのだから」

プランθ。おそらくシータの名前の由来で、人もモンスターも弄ぶ非道なプランだ。ぼくの頭は怒りで茹で上がりそうになっていたけど、必死に抑える。

こいつはわざわざ余計な情報までペラペラと話してくれている。シータが意識を失ったのは、おそらくプランτとやらで契約の紋章になにかされたからだ。

先程の言葉も合わせると、シータになにかプランτで干渉しやすくする処置を施していたのだろう。

でなければ、ぼくやカタリナが昏倒していない理由がない。水刃を防いでいた光の膜の正体は今の情報ではわからないけど、契約技に何らかの干渉をするという方向性なのだろうな。

いくつか候補は思い浮かぶ。水刃の制御を失わせること。アクア水をただの水に変えること。

単純に契約技のように光の膜を貼っているという可能性も完全には否定しきれない。他者の契約技に干渉できるのだから、他の人の契約技を操っている可能性だってある。

プランターの装置の効果がアクア水の中にある契約の紋章との繋がりになにか関係があるとすると、水刃を防がれた時になにかぼくに負担があってもおかしくないはず。

だとすると、他者の契約技を使っているという可能性が高いのかな。

「それで？ 契約技に干渉できるくらいなのだから、お前の実験した人間の契約技を盗んでいるのか？ ずいぶんお前らしいことだ。他人の成果を奪うことしかできないんじゃないか？」

「私の言葉を聞いていなかったのか？ アクアも、プランθも、プランでも私が生み出したのだ。だからこそθを無力化できたというのに。どんな契約技とて、私の支配下にあるという事実はお前には絶望的すぎて理解できなかったか？ さて、お前の契約技も奪わせてもらうか」

そして男はぼくの方へとプランターのものらしき装置を向ける。でも、ぼくの水刃の制御が失われた様子はない。

そのまま炎が男の方から飛んできたのでアクア水で防ぐ。すると、男は見るからに動揺し始めた。

この様子を見る限り、こいつがぼくの契約技を奪うと言っていたことはただのハツタリではなかったらしい。

それにしても、この男はずいぶんバカバカしいことをしているな。ぼくの契約技を奪えるというのなら、シータを気絶させる時にぼくも同様にすればよかつただろうに、そうしていないから何もわからなかった。

シータしか気絶させられないのなら、こいつの自信に満ちた態度は明らかにおかしいんだからね。特別な処置をしないと使えない技とどうか装置を誇っているのだから。

結局、ぼくを気絶させなかったのは戦略でも装置の限界でもなく、ただの慢心だったのだろう。なんというか、ずいぶん小物らしいことだ。

「な、なぜだ!? 私の理論は完璧なはず……あらゆる契約技は私の手にあるはずなのだ!」

こいつは本当に頭が悪いのかもしれない。シータの電撃を使おうとしないことといい、全く使いこなせていない契約技のことをメインウエポンとしていることといい、何も考えていないようにしか見えない。

リデイさんにはまるで及ばない炎を当てにして、そもそも契約技の制御を奪えるのに、ぼくに攻撃する時にそれを実行せずただ炎を放っている間抜けっぷり。

こんな奴にシータの人生が弄ばれているのだと思うと本当に腹が立つ。なので、死なない程度に痛めつけるために、この男の背後からアクア水を出現させて腕をへし折ってやることにする。

実際にアクア水を男にぶつけてやると、簡単に腕を折ることができた。

このまま痛めつけるつもりでいると、突然モンスターが現れだした。そしてシータたちへ向けて攻撃を仕掛ける。

「あなた、ここは一旦撤退しましょう。体勢を立て直すのよ」

ぼくがシータに若干気を取られていると、急に現れた女が男を助けていた。水刃をそいつに向けて放つが、光の膜で防がれてしまう。

そのまま男ともども女は逃げていったが、研究所の奥に向かっているだけにまずはモンスターを倒すことにする。

カタリナは大丈夫かと思っていたが、モンスターが近寄ってしまったので、回避に意識を割いているようだ。

モンスターはシータたちの方を優先して襲っているが、アクアの動きは精彩を欠いている。なので、水刃でまとめて始末していくことにする。

女はモンスターたちを破れかぶれで出現させたのか、特に強いもの

はいなくて、それほど苦戦はすることなくシータたちを守ることができた。

そしてシータの様子を見ると、シータはすっかり息をしているようなので、命の危機ではなさそうだ。アクアは大丈夫だと言っていたけど、まだ心配だったから少しだけ安心だ。

そしてアクアの様子を見ると、ぼくの顔を見て怯えたように下がっていく。おそらく、ぼくがアクアのことをオメガスライムだと疑っているように見えているのだ。

アクアを安心させるための言葉を考えると、ぼくの頭に昔のことか思い浮かんできた。

## 追憶 きっかけ

かつてユーリは幼いうちに両親に捨てられた。オメガスライムに進化しないアクアを失敗作とみなして捨てると同時に、アクアの相手として調整したユーリも不要になったためだった。

アクアの相手としての調整がなかったとしても、ユーリはアクアと離れることを嫌がっていたので、結局のところ捨てられていただろうが。

両親から捨てられたユーリだったが、その事実をよく理解しておらず、それでもアクアの横で寂しさに促されるままに泣いていた。

カタリナの両親がユーリの両親が残した財産を管理して、ユーリの世話もしていたので幼かったユーリは生き延びることができていた。

カタリナの家で過ごしていたユーリだったが、まるで悲しさは埋まらなかった。

カタリナの両親にはユーリに対する愛情などまったく無く、単にユーリの両親が残した資産を利用したいがためにユーリを生かしていた。

ユーリが死ねば監督不行き届きを咎められて、その資産を失うことになるだろう。

だから、最低限ユーリが死なないように配慮はしていたが、ユーリのことは煩わしいとすら考えていた。

その影響を受けたカタリナも、ユーリに対して冷たく当たることが常だった。

「あなた、着いてこないでくれる？ あなたみたいなヘタレと一緒にいたら、あたしまで同じだと思われちゃうじゃない。迷惑なのよ、ユーリ」

ユーリはカタリナの両親とそれなりに接する都合上、カタリナとできる限り親しくなろうとしていた。その関係上、カタリナについて回ることが多かった。

だが、それが実ることはないまま、ほとんど誰からも顧みられることはないユーリは徐々に追い詰められていった。

そんなユーリにとって、唯一親しいと思える存在がアクアだった。アクアはいつでもどこでもユーリのそばにいて、それがユーリの心を癒やしていた。

ユーリは誰からも疎ましく思われていることを察していて、それでも一人でいることには耐え難いつらさを感じていた。

だからこそ、いつでもも着いてくるし、声をかけてもかまっても邪魔者扱いしないアクアという時間だけが救いになっていた。

「アクア、ぼくはどうすればいいのかな？ アクアだけがぼくの味方だよ……」

アクアは何も答えなかったが、それでも頭の上に乗ったり隣で跳ね回ったりしている姿から、ユーリは自分を肯定してもらえていると感じていた。

それがユーリの心を癒していたし、だからこそユーリはアクアに好意的だった。

始めは目についたものを気に入るような感覚でアクアのそばにいたユーリだったが、もはやユーリにとってアクアは切っても切り離せないほどの存在になっていた。

アクアと球遊びをしたり、アクアに話しかけたり、アクアにへばりつかれたり。そうしている時間だけがユーリにとって唯一と言っていい楽しみで、徐々にユーリはアクアに依存していった。

「アクア、楽しい？ ほら、次の球だよ。とってこーい！」

アクアはユーリの言葉には従順に従っていて、ユーリやカタリナにとって、それがモンスターの基準になっていた。

ユーリは自分の言葉に従ってくれる唯一の存在としてアクアのことを大切にしていたが、モンスターならば仲良くなってくれるのではないかという希望をわずかに抱いていた。

ただ、町中にモンスターが現れることはなかったし、当然ユーリが他のモンスターと仲良くなることもなかった。

そんな中でユーリは毎日アクアと遊んでいて、アクアはそれにずっと付き合っていた。

アクアがいなければ、ユーリは完全に心を閉ざしていただろう。だ

が、そうならないままいくらかの時間が過ぎていった。

それがユーリとアクアとカタリナの運命を大きく変えることになるなど、その時は誰も知らなかった。

ある日、ユーリはいつものようにカタリナについて回っていた。アクアもユーリにへばりついていていた。

カタリナに嫌われていると自覚しているユーリだったが、それでもまだカタリナと良好な関係を築くことを諦めていなかった。

カタリナはユーリの姿を確認すると見るからに嫌そうな顔をしていたが、それでもユーリがついてくることは諦めていた。

ユーリに対して暴力を振るうべきではないと両親に言い含められていたし、単純にカタリナが暴力が嫌いだということもあり、口で拒絶するだけにとどまっていた。

「ユーリ、あなたは着いてこなくていいのよ。いい加減、あなたを誰も必要としないことに気づいたらどう？」

ユーリはカタリナの言葉に深く傷ついていたが、誰からも必要とされないことはもともとと理解していたので、それで諦めることをしなかった。

ユーリは人間の友達を強く求めていた。アクアが大切な存在であることは疑いようがなかったが、親しく言葉を交わすということに憧れていたのも、アクアだけでは満足できないでいた。

だから、最も近くににいるカタリナにそれを求めていた。ただ、それはカタリナには一切通じていなかったが。

「アクアはぼくを必要としてくれるよね？　誰もぼくを必要としないなんて事はないよ」

「モンスターなんかに求められたからって何になるっていうのよ。哀れなものね」

カタリナはアクアの態度を見ていたから、ユーリの言葉は間違いではないだろうと判断していた。モンスターは危険な生き物だという両親の主張も、アクアを見ているカタリナにとってはつまらない嘘のたぐいでしかなかった。

それゆえ、町中に入り込んでいる犬型モンスターの姿を見ても、平

気で近づこうとしていた。

無警戒にモンスターに近寄ろうとしたカタリナに、モンスターは鋭く吠えたあと、走って噛みつきこうとする。

その姿を見たユーリは思わずカタリナをかばっていた。カタリナとモンスターの間に入り込み、それによってユーリはモンスターに足を噛みつかれる。

動揺するカタリナに、ユーリは痛みを堪えながら必死に叫んでいた。

「カタリナ、逃げて！」

ユーリは自覚していなかったが、ユーリがカタリナを助けた理由として、誰かに認めてもらいたいという思いがあった。

カタリナを助けるといふ善行はそれにピッタリと当てはまっているとユーリは無意識に感じ取っており、だからとつきに体が動いていた。

ユーリにとって助ける相手など誰でも良く、たまたまそこにいたらカタリナが対象となっていた。

だが、カタリナにとっては自分を必死に助けてくれたという事実だけがあつた。だからこそ、ユーリを助けるために全力で両親を呼びに走ることになった。

「ユーリ、すぐに助けを呼んでくるからね！」

カタリナが助けを呼びに行っている間、アクアはユーリに噛みついてるモンスターに全力で攻撃していた。

その結果、モンスターはユーリのことを放し、アクアをターゲットとしていた。しかし、アクアには犬型モンスターの攻撃は一切通じず、徐々にモンスターはアクアの攻撃により追い詰められていった。

ただ、ユーリが徐々に衰弱しているという事実がアクアから余裕を奪っていた。ユーリを死なせる訳にはいかないと考えていたので、何を優先するか決めかねていた。

少し時間が経過して、カタリナが呼んだ助けがモンスターをすぐに討伐した。ユーリの治療も同時にほど来られていたが、ユーリはとも弱っていた。



「ユーリ……あたしを助けるために……しつかりするのよ！ あなたにはまだお礼も言っていないのに！」

ユーリはおぼろげな意識の中でカタリナの涙する姿を見ていた。それがユーリに大きな満足感を与えて、落ち着いた心持ちで意識を失っていった。

ユーリについた傷はとても大きいもので、ユーリの命は危ぶまれていた。それを理解していたアクアは、誰にも見つかることのないままユーリを癒やしていた。

アクアにはすでにただのスライムにはない特別な力があり、それによってユーリの体を治療していった。アクアがユーリの傷口にへばりつくことで、ユーリの体を治す。

いつかアクアが進化してすぐにも似たような手段でユーリの傷を癒やしていたが、ユーリが疑問に感じなかったのは、このことを無意識に感じ取っていたということが大きい。

ユーリは眠りにつく中で、アクアが助けてくれる夢を見続けている。だから、次の日に目覚めて怪我の痛みがずいぶん落ち着いていることを感じた時に、アクアのおかげだと確信していた。

アクアは目に見えない部分を中心にユーリを癒していたため、傍目には大きく傷が治ったように感じ取れないでいた。

カタリナがユーリの見舞いに来た際にも、ユーリの傷口は痛々しい様子に見えて、だからユーリに対する感謝を深めていた。

「ユーリ、目が覚めたのね。昨日はありがとう。あなたのおかげで助けられちゃったわね」

カタリナのその時の笑顔を見て、ユーリは昨日の痛みが大きく報われたように感じていた。カタリナは自分に対して親しみを感じてくれている。そう信じることができていた。

「ううん。気にしなくていいよ。カタリナが無事で良かった」

ユーリのその言葉を受けて、カタリナはユーリを改めてしっかりと見た。痛々しい傷跡に、優しい顔。これまで忌々しいとすら感じていたユーリのことを、初めて好意的な目で見ることができていた。

「よし、決めたわ！ あんたをあたしの子分にしてあげる！ 親分は

子分を守るものよ！ あんたは安心してあたしに着いてきなさいよね。ヘタレなあんだだからって、見捨てたりはしないわ」

とても晴れやかな顔でそう言うカタリナを見て、ユーリはカタリナの子分になることに逆らわないことを決めた。

「わかった。これからよろしくね、カタリナ」

「それでいいのよ。あんたが弱つちい分もあたしが強くなってあげるから、アクア共々しっかりあたしに従うことね」

それからというもの、ユーリを取り巻く環境は少しだけ変わった。カタリナがユーリに好意的になったこともあり、カタリナの両親の態度も軟化していた。

最初は奪うつもりでいたユーリの資産を、カタリナとユーリの結婚資金として使うことに決め、カタリナには得難い友としてユーリを大切にするように語り聞かせた。

カタリナを命がけで助けたユーリの行為はカタリナの両親にも響くものがあつたため、カタリナがユーリを大切にしていることを喜んでいた。

相変わらずアクアと遊ぶ時間が最も大切なユーリであったが、他にもカタリナと遊ぶ時間を大切に思うようになっていった。

## 追憶 寂しさ

カタリナとの関係が目に見えて良くなってから、ユーリの心にはだいぶ余裕ができていた。

相変わらずカタリナは口が悪いままであったが、カタリナの声色や目つきなどの表情、そして何より、ユーリが追い詰められると必ず助けに入る態度がユーリにカタリナの好意を信じさせていた。

そんな日々の中で、カタリナの家で過ごしていたユーリとアクアが自分の家に戻る日がやってきた。

元の家に帰ること自体に喜びはあったが、それでもユーリは再び寂しさに襲われていた。

カタリナと共にいる時間が明らかに短くなり、再びアクアがユーリの心を癒していた。

アクアと球遊びをしたり、アクアに抱きついたり、アクアに話しかけたりしながらユーリは日々の寂しさをごまかしていた。

「アクア、ご飯は美味しい？ ぼくと遊んでいて楽しい？」

アクアはユーリの言葉に対して何も答えずにユーリにへばりつく。それがユーリにとって救いであった。

アクアはずっと一緒にいてくれる。そう信じるのがユーリの数少ない希望となっていた。

実際にアクアが何を考えているのかは誰もうかがい知ることができなかったが、ユーリはアクアが自分に好意的だと思いきこんでいた。

だからこそ、カタリナと離れ離れになっているつらさに耐えることができた。

なまじカタリナと親しくなってしまったがゆえに、カタリナと離れるつらさは以前の孤独な時間のつらさよりも大きな物となっていた。

それゆえ、ユーリはアクアとまで離れることを強く嫌っていた。だから、アクアがずっと隣にいるように行動していた。

何度も何度もアクアと遊んでいたし、アクアを可愛がることを全くやめようとしなかった。

「この球もそろそろボロボロだし、新しいものを用意したほうがいい

かな？ まあいいや、とつてこーい！」

ユーリが投げた球を跳ねながら追いかけていき、自分に引付かせてユーリのもとへと帰っていくアクア。

それを受け取ったユーリはまた球を投げる。何度かそれを繰り返したあと、アクアのことを撫でる。

ユーリはアクアの冷たさに怯みながらもアクアを撫でることをやめない。撫でることをやめた瞬間がアクアとのつながりが切れる瞬間に思えてならなかったからだ。

ただでさえとても寂しい時間を、これ以上つらい時間にする訳にはいかない。ユーリは強迫観念に突き動かされるように、アクアのことを目一杯甘やかしていた。

アクアはユーリの行動をすべて受け入れていて、それがユーリにとって自分を肯定するための材料になっていた。

アクアは自分のことを好きでいてくれる。だからアクアのために生きていけばいい。もともと孤独による希死念慮を慰めるためだったユーリの考えが徐々に深まっていった。

カタリナもユーリにとって大切な人になっていたが、アクアと居られる時間の長さが故にアクアのことを考える時間が最も多く、自縄自縛のようにアクアのために生きるという考えを強くしていった。

ユーリはいつしかアクアのいない時間でもアクアのことを考えるようになっていて、それが勝手にアクアへの好意を高めていった。

それゆえ、アクアを傷つけようとするものだけは許せないと言う考えに至っていた。

ユーリにとって幸運なことに、アクアをわざわざ傷つけようとする者はいなかった。

ユーリはアクアを害する相手ならば、たとえどれほど力の差があったとしても挑みかかっていただろう。そして当然のように負けていたはずだ。

カタリナはそんなユーリの危うさを若干ながら察していて、だからこそできるだけユーリのそばにすることにしていた。

ユーリはそんなカタリナのことがとても好きになっていたが、かつ

ての記憶がさらに距離を縮めることをためらわせた。

結果として、ユーリたちが学園に入るまでの期間、カタリナとユーリの間にはどこか微妙な距離感があった。

カタリナはユーリを自分として引つ張っていくが、ユーリはそれについていく以外でカタリナに接しようとはしなかった。

カタリナと一緒にいない間、ユーリはずっとアクアを構っていた。アクアはユーリに従順で、ユーリがどこへ行くにもついていったし、ユーリの指示にはすべて従っていた。

本来モンスターのタイムというのはそこまで簡単ではない。最も手っ取り早い手段ですら相手に逆らう気を起こさせない力を見せつけるというものだった。

他の手段は膨大な手間や特別な道具が必要で、アクアの従順さは見るべきものが見れば一目で異常を察するものであった。

幸いにもユーリの周囲にそれを知るものはおらず、アクアの異常性は悟られなかった。

だから、ユーリはアクアのことを誰よりも信じることになった。アクアだけはどんな時でも自分の味方であると疑わなかった。

「アクア、大好きだよ。ずっとぼくと一緒にいようね」

アクアはユーリの言葉に対して聞いているのかいないのか、いつもどおりにユーリにへばりつく。

ユーリはその姿を見てアクアはずっとそばにいと確信した。それゆえ、アクアに対する依存が深まっていった。

アクアだけは何があっても離れていかない。そう信じることがユーリの活力になっていた。だから、アクアを養っていくために冒険者になることを決意した。

他に道が思いつかなかったこともあるが、冒険者ならばモンスターが傍にいてもおかしくないという事がユーリにその道を進むと決めさせる最大の理由だった。

それから、ユーリは冒険者になるために戦闘の技能を鍛え始める。だが、それは好ましい成果を伴うものではなかった。

どれほど剣を振っても速度は全く上がらないし、立ち回りも向上し

ない。数ヶ月の時間が経過しても、ユーリにはまるで成長は見られなかった。

「ユーリ、あんたは弱ちくちく見ていられないわ。あたしの後ろにだけついてこればいいのよ」

ユーリの成長速度を見かねたカタリナは、ユーリとパーティを組んで、ユーリの代わりにモンスターを倒し続けていた。

ユーリの努力は知っているし、ユーリの熱意も知っている。それでも、ユーリがまともにモンスターに挑めるとは思えず、ユーリを矢面に立たせることはできなかった。

ユーリはそれに大きく傷ついていたが、自分のせいでは無いと諦めが頭に浮かんでいた。

だが、アクアが自分のそばにいる姿を見て、アクアとともに過ごすために努力を続けていた。

そんなある日、ユーリはアクアとともに少し遠出をしていた。

そこで、ユーリはトカゲのようなモンスターに出会う。逃げることを検討していたユーリであったが、アクアは無防備にモンスターへと近寄っていく。

そのアクアに向けてモンスターは火を放つ。スライムは火に弱いと認識していたユーリは全力でトカゲ型モンスターを攻撃することに決める。

「アクアを傷つけることは絶対に許さない！ ぼくがアクアを守るんだ！」

その言葉通り、ユーリは全力でトカゲ型モンスターに武器を叩きつける。なぜかユーリの攻撃を気にかけないままアクアに火を放ち続けるモンスター。

そこに、何度も何度もユーリは武器を叩きつけていた。やがてモンスターは動かなくなっていく。

その姿を見たユーリは、モンスターの方を見ることをやめてアクアの方を向く。ユーリの目には、震えているアクアは傷ついているように見えていた。

すぐさまアクアを抱きしめるユーリ。その時、これまで実らなかつ

た冒険者になるための努力を何があっても続けると決めた。

「アクア、ぼくは君を何があっても守ってみせるよ。だから、ずっとそばにいてね」

ユーリの言葉に対して答えることはないアクアだが、ユーリの肩に乗りかかっけいく。その姿を甘えと認識したユーリは、アクアを守るという決意をさらに固いものにする。

ユーリにとって、これが初めてアクアを失うと認識させた出来事だった。ゆえに、鬼気迫る様子で訓練にのめり込むことになっていく。

アクアのいない生活なんて考えられない。何があってもそんな未来は訪れさせない。その想いだけを胸に成果のほとんど出ない訓練を続けていく。

カタリナはそんなユーリの姿を見かねて、ユーリを遊びに誘う機会が増えるようになった。

その時間がユーリの心を癒やすことに成功して、ユーリがづらい訓練を続けるための活力になっていった。

ユーリのその姿に感化されたカタリナは、自身も必死で訓練を行うようになっていく。そうすることで、遠くない未来にカタリナの右に出る弓使いはミストの街にいない程になっていくことになる。

ただ、それゆえに学園にユーリと入った時に、ユーリに対してつまらない嫉妬を抱くものが現れるきっかけとなった。

ユーリたちは学園に入って、まずはユーリとカタリナとアクアでパーティを組むことになる。

明らかに才能にあふれるカタリナに対し、おんぶにだっこのように見えるユーリ。

それがカインにユーリを攻撃させるきっかけとなった。ユーリがどうにかなることはなかったが、カタリナは強い怒りを抱いていた。

だからこそ、いずれカインが死んだ時にカタリナは歓喜した。ユーリに咎められることになるほどに。

そんな日々の中で、ユーリとカタリナはともにアクアと行動している、カタリナとアクアはそれぞれがそれぞれにユーリを守っていた。

ユーリはカタリナとアクアにとっても感謝していて、何度もそれぞれに感謝の言葉を投げかけた。

「カタリナ、おかげで助かったよ。ぼくだけじゃこんなモンスターはとても倒せなかった」

「当然よね。でも、あんたも悪くはなかったわよ。ヘタレだけあって、危険なモンスターにはすぐに気がつくんだから」

「アクア、きみが守ってくれたおかげでぼくは無事だったんだ。ありがとう」

カタリナもアクアも感謝の言葉など受けたことがないようなもので、それが2人にいずれ大きな感情をもたらすきっかけの1つになっていく。

ただ、それ以上にユーリが2人に抱く感情は大きな物となっていて、何が何でも欠かせない存在になっていった。

長い学園生活の中で何度もユーリは傷ついていたが、そのたびにアクアを甘やかすことで痛みをごまかしていた。

アクアは無邪気に甘えているようにユーリには見えて、だからこそ、その姿を見ることが大きな楽しみだった。

球遊びをすることも、ユーリの肩や頭にアクアが乗ることも、アクアに語りかけることも、全てがユーリにとって心の支えになっていた。

そんな生活が続ける中、ついにアクアは進化することになった。それから、ユーリの生活は大きく変わっていく。



## 97話 想い

ぼくがアクアをオメガスライムと疑っているだろうと考えて怯えているアクア。その姿を見て、絶対にアクアを笑顔にするんだと決めた。

アクアの悲しそうな顔なんて1秒だって見ていたくない。すぐにもこの顔を変えてやるんだ。

敵が周囲にいないことはわかっていたので、安心してアクアを抱きしめる。

「アクア、きみがオメガスライムだとしても、そうじゃないとしても、アクアはぼくの大切なペットだよ。これからも、ずっと一緒にいようね」

これまでぼくがどれだけアクアに助けられたことか。アクアがいたからぼくは生きる希望を持つことができたんだ。

カタリナと仲良くできたのも、冒険者として活躍できたのも、みんなと出会えたのも。

全部アクアがいてくれたおかげだ。それを正体を隠していたかもしれないくらいで嫌いになるなんてありえない。

仮にアクアがオメガスライムだったとして何だというんだ。どう考えても些細な事だ。

ぼくのアクアへの感謝がなくなるわけでは無いし、アクアのことが大好きだって気持ちは変わらない。

だから、安心していいんだよ、アクア。ぼくたちは絶対に離れたりしないんだからね。

アクアはぼくの方を見て、柔らかい表情になって抱き返してくる。ぼくの気持ちは通じたみたいだ。

かなり強く抱きしめられているけど、アクアの感じた苦しみを思えば、心地よさすら感じるくらいだ。

よかった、アクアが明るい顔になってくれて。やっぱりアクアの明るい顔は癒されるよね。

「ユーリ……ユーリ！ 大好き！ ずっと離れないから！」

アクアの強い思いがぼくに伝わってくる。ぼくの思いも伝わっているはずだ。これからもずっとアクアと一緒にいるために、父親たちをしっかりと倒さないよね。

アクアのことを狙う人なんていない方がいいに決まっている。でも、これからあいつらを倒しに向かうのなら、シータのことが心配だ。シータはゆっくりと息を吐いて、傷のようなものもないし苦しんでいる様子もない。これから少し離れることになるけれど、どうか無事でいてほしい。

「カタリナ、シータのことをお願いできる？ できれば、みんなのところへ向かってほしい」

「そうね、それが妥当なところかしら。オリヴィエ様のところへ連れて行ってもらえばいいんじゃない？」

なるほど、ハイデイの生命力を操る力でシータを癒してもらおうのか。たしかにそれなら症状に関係なくある程度の効果があるかもしれない。

ぼくはここでカタリナと別れて、アクアと2人で父親たちのところへ向かうと決めた。

アクアと一緒になら、もうどんな敵が相手だろうと大丈夫。アクアがオメガスライムじゃなかったとしても、ぼくたちは無敵だ。

なんとというか、今ならブラックドラゴンやハイデイと一緒に戦った亀が相手でもどうにかできる気がしていた。

「じゃあ、お願いね。あいつらはぼくたちで何とかするから」

「しっかりとしないよね、ユーリ。あんなつまらない奴らに負けるんじゃないわよ」

「もちろんだよ。アクアやシータを傷つけた罪、しっかりと贖ってもらうから」

カタリナはシータを連れて去っていく。一応戻り道を索敵しておいたけど、問題なくカタリナは戻っていきそうだった。

シータが無事でいられることを信じて、ぼくたちはあいつらを倒すんだ。

結局のところ、あいつらを倒さないことにはシータの未来は開けな

い。アクアとぼくの邪魔だつてされるはずだ。

ぼくたち自身のためにも、これまでの被害を受けた人たちのためにも、あいつらはここで終わらせる。

「行こう、アクア。ぼくたちの最大の敵はもう目の前だよね」

「うん。ユーリのために、絶対にあの男たちを倒す。ユーリ、安心していいから」

アクアはそう言うってくれるけど、アクアに頼り切りになるわけにはいかないよね。アクアが本当にオメガスライムだとするならば、きつと敵なんていないのだろうけど。

ぼくはアクアとできる限り対等で居たい。アクアはきつと似たようなことを望んでくれていると思う。

だから、ぼくたち2人であいつらをやつつけてやるんだ。アクアとぼくの絆が最高だつて、この機会に証明してやるぞ。

「頼りにしているよ。でも、ぼくもアクアを助けるから」

「そう。なら、かっこいい所いっぱい見せて」

アクアはずいぶん気楽に見える。それが頼もしくもあつて、だいぶ気分が落ち着いた。

気負いすぎると良くないからね。相手は宿敵と言つていいかもしれないけれど、だからといって冷静さを失わないようにしないと。

ぼくはアクアの契約者として恥じない姿で居続けなくちゃいけないんだ。アクアがそれを望んでいるかは怪しい気がする。だけど、ぼくにとつてはとても大切なことだから。

契約モンスターと契約者は2つで1つ。ぼくはそう信じている。そうじゃなくてもアクアを大切にしたいという思いは変わらないけれど。

思いを固めたところで、研究所の最深部らしきところにたどり着いた。ここですべての決着がつく。そう思うと緊張もするけれど、アクアが隣にいてくれるのだから大丈夫。

決意とともに進んでいくと、父親とさきほどそいつを助けた女がいた。父親の腕は治っているみたいで、どうにかして治療したのだろう。

女はシータの持っている人形みたいなものを抱えている。年齢には合わないと思うけれど、なにか大事なもののなかもしれない。

「ここまで来たのか。ずいぶんとせっかちなものだ。だが、オメガスライムを連れてきてくれたのだから、私のものにしてやろう」

男はそんなことをのたまう。本当に腹立たしいことだ。自分から捨てておいて、アクアがオメガスライムだと思いこんだらこれだ。

こんな奴にアクアを渡せるはずがない。アクアだってこいつを受け入れるようには思えない。

「アクアは、そうじゃなくてもモンスターは道具なんかじゃないよ。そんな事も分からないから、お前はぼくたちに負けるんだよ」

男はぼくの言葉を受けて笑い出す。まあそんなものだろうな。こいつにモンスターの本当の価値が分かるはずがない。

ぼく以外にも、カタリナもアリシアさんもミーナもメルセデスも、みんなモンスターとの絆があったからこそあそこまで強くなれたんだ。

自分の研究の成果を見せびらかそうとするだけでロクに戦えないこいつには理解できないのは当たり前なんだけどね。

攻撃するための準備をしていると、男はまた得意げに語りだした。こいつは先程の敗北を何も理解できていないのか？

「モンスターなど道具に決まっているだろう。プランθがその証明だ。モンスターと人との交流など一切なくとも、契約技を使うことに支障など無いのだから」

どこまでもぼくを苛立たせる男だな、こいつは。でも、冷静さを失う訳にはいかない。ちゃんとこいつを倒すことが、ぼくたちの絆の何よりの証明なんだから。

モンスターを道具扱いするようなやつに絶対に負けるものか。アクアの幸せのためにも、絶対にこいつは野放しにしておけない。

「その割には、プランθもプランテもぼくたちに手も足も出なかったようだけど？ おまえは机上の空論だけでいい気になっているのがお似合いだよ」

「私の成果がその程度のものであるものか！ 私はオメガスライムに

負けただけで、お前に負けたわけではない！」

男はずいぶんと声を荒らげている。余裕のないことだ。よほど凶星だったのだろうか。

それにしても、ずいぶんと自尊心が高いみたいだけれど、能力はそれに見合ったものとは思えない。

なにせ、オーバースカイの誰にも勝てないように見えるものばかりを成果としているのだから。

プランτだって、結局自分の作ったものしか干渉できないみたいだったし、それでよく自信を保てるものだ。むしろ感心できるかもしれないな。

「へえ、プロジェクトU・Rεって最強のモンスターを作り出すことが目標だって聞いていたけど、オメガスライムに負けたことはいいんだ？　ずいぶんと低い目標なんだね」

「オメガスライムを生み出したこととて私の成果なのだ。それを誇って何がおかしいというのだ。だからお前は程度が低いのだよ」

なんとというか、これ以上話をしていても無駄に思えるけど、まだ情報を引き出せないかは試してみたほうがいいか。

一応、話の裏でなにか準備をしていないか警戒はしているけど、そういう雰囲気もないし。

仮になにか切り札があつたとしても勝てるとは思うけれど、無駄にアクアに負担をかけたくないからね。

サーシャさんに伝えられる情報は多い方がいいし、とりあえず会話は続けてみるか。

「見る目がないお前はアクアがオメガスライムかどうかとも分からずに捨てていたのに、それを成果扱いできるんだ？　志の低いことだね。これまでも、成果が出ないことに言い訳ばかり続けていたのかな？」  
「冗談ではない！　お前も見ただろ！　モンスターの身体能力を強化するプランα、契約技のような力をモンスターに付与するプランβ、モンスターに回復能力を与えるプランγ、モンスターの特徴を融合するプランδ、耐久力を強化するプランε、複数のプランの複合であるプランφ、そして何よりプランθにプランτ！　お前が知って

いるだけでもこれだけの成果があるのだぞ！ 無論私の成果はそれだけではない！」

男は怒涛の勢いで自分のプランについて語る。狙ったとおりに情報を引き出せたな。

この男はだいぶモンスターの改造に力を入れていたらしいな。腹立たしくはあるけれど、今は抑えないと。

こいつは怒りをぶつけてもいい相手ではあるけれど、怒りに飲まれてアクアに負担をかけるわけにはいかないんだから。

ぼくがアクアを大切だと思つていふことは絶対の真実だ。だから、ぼくの怒りでアクアをないがしろにするなんて行動をするわけがない。

男を倒す手段を考えていると、男の傍にモンスターが現れた。以前も戦つたブラックドラゴンだ。

「あなた、ブラックドラゴンゆならば流石にオメガスライムにも勝てるでしょう？」

女がこのモンスターを準備していたのか？ ぼくの素敵には引つかからなかったのに。

それにしても、この女はぼくの母親なのかな。どうでもいいか。倒すべき相手には変わりないんだから。

父親はブラックドラゴンの傍で自慢気にしている。ぼくが追い詰められていると考えたのだろう。

「ブラックドラゴンゆ。お前ごときに勝てる相手ではないぞ。お前はここで終わりだ」

さて、まずはブラックドラゴンゆとやらを倒すか。王都に現れたのと同じような個体なのかな。

## 98話 絆

ぼくの目の前に現れたブラックドラゴンめというモンスター。

その巨体には相変わらず圧倒されそうな感覚があるけど、なぜこんな閉鎖空間でこんなモンスターを出すのだろうか。

まあ、戦闘がよくわかつている人間とは思えないから、適当に強いモンスターを出したのかもしれない。

だけど、自爆覚悟で研究所ごと壊す判断をされたら厄介だ。倒すのならば出来れば一撃で済ませたいところだね。破れかぶれにならねては困ってしまう。

倒す道筋がはつきりと見えるまではできるだけ追い詰められているふりをした方がいいかもしれない。

まあ、それもこれも相手がどう出てくるか次第なところはある。まずは様子を見てみるか。

そんな事を考えていると、父親が指示を出すような動きをしていた。これで相手の方針は分かるけど。

「さあ、ユーリを叩き潰すのだ！ 思う存分力を発揮するといい！」

そう父親は言っていたけど、ブラックドラゴンめは動きづらそうにしている。ミア強化だけでも簡単に避けられそうなくらいに動きが鈍い。

足や尻尾を振り回すだけで、その動きが鈍いんだから対処はそう難しくはない。

とはいえ、障害物を気にせず攻撃してきていないのなら、ある程度知性があるのだろうか。生き埋めになって困るって判断ができているのなら知性は十分だろう。

だけど、単に標的しか攻撃できないみたいなの可能性もある。相手の都合では、アクアを避けて攻撃しないといけない。アクアが死んだらオメガスライムを失うことになるんだから。

それで、全部まとめて攻撃しないだけだという場合だってあるはず。安易な判断は危険かな。

ただ、ブラックドラゴンめは鈍い動きで攻撃してきているので、

やっぱり攻撃を避けるのは簡単だ。

一応余裕を見せないように避けてはいるけど、いつまでごまかせるかな。

さて、どうやってこいつを倒すのがいいだろうか。前回と同じ体温を奪うという手段はこの環境だと難しそうだ。狙いを気づかれないという楽観は避けたほうがいいだろう。

前回と同じならば、鱗は固いはずだけど脳が弱点でもある。前と一緒に確かめてみたいよね。

ぼくは水刃を凍らせたものをブラックドラゴンφに向けて放つ。多少傷ついていたので、威力の高い攻撃ならば通じると思う。

問題は、どうやってその威力の高い攻撃を放つかだ。水刃の移動速度を高めるだけでもいいのだろうか。

水刃を凍らせておけば、スピードがそのまま威力になるはずではあるけれど。ただ、中途半端に追い詰めたくはないんだよね。

父親の判断にしろ、ブラックドラゴンφの判断にしろ、暴走されたら厄介だということは間違いない。

やるとすれば一瞬に全力を込めることになる。それで通じないとどうなることやら。

色々と考えながら攻撃を避けるだけの時間が経過していった。すると、しびれを切らした様子の父親がなにかプランテの装置を操作し始めた。

「ブラックドラゴンφよ、その力を存分に見せてみるがいい！」

そしてブラックドラゴンφはブレスを撃つ構えに入る。冗談だろ!?! こんな場所でブレスを撃ったらお前も無事で済まなくなるかわからないのか!?

この研究所が無事で済むようには思えないし、そうでなくても酸素の問題は解決できているのか!?

父親は破れかぶれという様子でもなく、単に強い攻撃を放とうとさせている顔だ。まったく、どこまでバカなんだコイツは！

ぼくはブレスを防ぐために、ブラックドラゴンφの頭に全力で凍らせた水刃を放った。



だけど、ブラックドラゴンめにとどめを刺すには至らない。そのままぼくに向けてブレスが放たれる。

「ユーリはアクアが守る！」

その時、アクアがぼくの前に躍り出てきた。このままではアクアにブレスが当たってしまう！

ぼくがアクアを助けないと！ そう考えて必死にアクア水でアクアの前に壁を作ろうとする。

すると、ステラさんに貫つた指輪と白金勲章が共鳴し始めた。そのままアクア水の壁にブレスがぶつかりブレスは消滅する。

だけど、そんな事よりもっと大きな影響がぼくたちにはあった。

(ユーリ、ありがとう。やっぱりユーリは最高)

少し雑音が混ざっている様子ではあるけれど、アクアの心の声のようなものぼくに伝わってきた。

これがステラさんの言っていた想いを伝え合っていてことなのかな。だとすると、指輪を使いこなすところまで行けたってことかな？

でも、白金勲章と共鳴したつてのはどういうことだろう。ハイディのくれたチョーカーにも共鳴していたし、道具と共鳴することで力を引き出すとかだろうか。

まあ、今はそれを考えるときではないか。ブラックドラゴンめを倒すことが大切だよな。

ぼくは改めてブラックドラゴンめに向き合う。さつきは水刃で倒すことができなかつたけれど、今ならば絶対に倒すことができる。なぜかそう確信できた。

ぼくは全力でブラックドラゴンめに向けて水刃を放つ。水刃は凍らせていないけれど、これでいいと感じた。

ぼくの予想通り、やつは水刃の一撃で真つ二つになった。なぜかはわからないけど、今のぼくにはとてつもない全能感がある。何が次に現れたとしても倒せると思えていた。

「馬鹿な……私の切り札が、裏切るわけでもなく、こんな簡単に敗れたというのか……？」

ただ、次のモンスターも契約者も現れることはない気がする。父親

も母親らしき人もうなだれていて、なにかする気力があるようには思えない。

なので、これ以上何もできないように両手両足を折ってから運び出すことに決めた。

すぐに実行したが、そこまでしていてもまるで抵抗してこなかったのも、完全に心が折れているのだと思う。

ぼくは研究所から脱出しながら、アクアと意思を送り合うことを試していた。

(アクア、結局この研究所はぼくたちと関係が深かったみたいだね。こいつらは屑だけれど、アクアと出会えたことだけは感謝してもいいかな)

(アクアも同じ気持ち。ユーリと出会えたことは最高だった。ユーリ、大好き)

(ぼくもアクアのことが大好きだよ。これからもよろしくね)  
(うん。ずっと一緒だから)

相変わらず雑音が混じっているの、ちよつと不便ではある。もしかしたら、まだ完全に指輪を使いこなせていないのかもしれない。

あるいは、もともとこういう物なのかもしれないけれど。なんにせよ、アクアと心がつながっているという感覚は、ぽかぽかした幸福を運んでくれる。

ぼくとアクアの絆の力が、モンスターを道具とするやつの上を回った。だから、やっぱりモンスターとの絆が最高なんだ。

改めてそう確信することができて、とてもいい気分だった。

それからアクアと心で会話しながら、研究所から脱出した。

そこではみんなが待っていて、大勢を捕らえている姿が目に入った。ぼくたちの知らないところでも色々あったみたいだ。

契約技使いもそれなりにいたようだけど、みんなの敵ではなかったようだった。

カーレルの街にみんなが帰っていった、サーシャさんに父親を始めとした人たちを引き渡す。

「皆様、お疲れさまでしたわ。少し期間を空けることになりますが、さ

さやかな祝いの席を用意したいと思いますわ」

今回の件は解決したと言っているから、その祝いということなのだろう。でも、その前にサーシャさんに伝えておかないといけないことがある。

「サーシャさん、最近この街に現れた契約技使いを洗ってみてください。どうも、今回の異変では契約技使いを生み出す実験もしていたようなんです」

「それは尋問より先に伝えていただいてありがたい情報ですわね。確かに注視しておく必要がありますわね」

サーシャさんならば、きつとこの情報だけでもうまくやってくれるとは思う。もちろん、手伝いが必要ならばいくらでも手を貸すつもりだけどね。

さて、あとの問題はシータだけだ。ハイデイにこの情報を伝えて、できれば助けてもらいたい。

シータは落ち着いた容態ではあるけれど、だからといって楽観視はしないほうがいいと思う。

そこで、急いでハイデイを探す。この街には来ているという情報があったので、ハイデイたちの屋敷へと向かった。

そこでは、ハイデイの他にリデイさんとイーリスもいた。挨拶もそこそこに、すぐにハイデイに本題を切り出す。

「ハイデイ、あなたの力で助けてほしい相手がいるんだ。確か生命力の分配もできるんだよね？ 必要なら、ぼくから持っていつでもいいから、お願い」

「生命力は有り余っているくらいだから、貴様が気にする必要はないさ。それで、誰を助けてほしいのだ？」

「ぼくの妹だよ。今回の事件でぼくの味方になってくれたんだ。だから、絶対に助けてあげたい」

ハイデイはちよつと呆れたようにみえる顔をしたあと、優しくそんな顔を向けてくる。

「くくつ、貴様は本当に面白いな。よかろう、その者のところまで余を連れて行くといいさ」

そのままステラさんの家で眠っているシータのもとへハイデイを連れていき、シータの様子を見てもらう。

ハイデイは色々と試していたようだが、結局シータは目覚めなかった。

「すぐさま命の危機にあるわけではないな。ただ、食事を一切取れないとなると、余が定期的にここに来る必要があるだろうな」

「なら、ぼくがなんでもするから、シータのことをお願いします。この子は何があっても助けてあげたいんだ」

「そのような顔をせずとも、余が貴様を見捨てたりはせん。だから、つまらないことをするでない」

叱責しているような言葉だけれど、ハイデイの顔はこちらを慈しんでいるようにみえる。

ハイデイには本当に助けられてばかりだ。チョーカーのことといい、シータのことといい。

そうだ。チョーカーのことについてもお礼を言わないとね。

「ハイデイ、このチョーカーのおかげでぼくは危ないところを助けられたんだ。本当にありがとう」

「気にせずとも、もともとそのつもりでそれを貴様に渡したのだ。それが役に立っただけで十分よ」

ハイデイはそう言ってくれるけど、できればなにかお礼をしたい。でも、何を渡せばこの人は喜んでくれるのだろうか。

本人に聞いても、きつと無粋とか言われるだけだから、リデイさんとかに聞いてみるのがいいのだろうか。

まあ、すぐにとはいかないか。

ぼくが考え事をしようとする、ハイデイはすぐに去っていく。

シータのことが残っているとはいえ、大きな事件が終わった。もうこんな問題が起こらないことを祈ろう。

## 99話 心

プロジェクトU：Reに関する事件は終わって、シータが目覚めな  
いこと以外は特に問題もなく日々を過ごすことが出来ていた。

サーシャさんによると、結局ぼくの両親は死罪になったようだ。あ  
の女は母親だろうということだった。

まあ、そんなことはどうでもいい。ぼくたちは久しぶりの平和を満  
喫していて、あの戦いの疲れを癒していた。

初めて人を殺してしまった心の負担は思っていたより小さくて、初  
めて人型モンスターを殺してしまったときほど沈み込まなかった。

結局ぼくは冷徹な存在になってしまったのかもしれない。だけど、  
仲間を大切に思う気持ちだけは変わっていないはず。

仲間に幸せになってほしいという想いはぼくが絶対に失ってはい  
けないものだ。

もし人を殺すことに慣れてしまうのだとしても、それで仲間を傷つ  
けないようにしないと。

それはさておき、ぼくは休みであることを利用して、ステラさんに  
貰った指輪で思いを送り合うことを色々検証していた。

ぼくが送りたいと感じた思いがアクアに伝わって、アクアが送りたい  
と感じた気持ちもぼくに伝わるようだ。

雑音混じりの音でしか伝わっていないので、無意識の感情なんかは  
伝えられないと思う。

それでも、これで出来る様になることはかなり多いんじゃないか  
な。結構遠くでも思いを伝えられるみたいだし。

何よりも、アクアとつながっていられる感覚がとても嬉しい。役に  
立たないとしても、これだけで満足できると思うくらいには。

ステラさんにも、ハイデイにも、とても感謝しないとイケないよね。  
指輪と白金勲章をもらったから、今の気持ちがあるのだから。

もちろん、アクア本人にも感謝が必要だけどね。ほんと、ぼくは出  
会いに恵まれていると思える。

それで、アクアと会話の延長線上のように思いを送り合っている

と、なんだか秘密の遊びをしているような感覚になっていた。

例えばカタリナがここにいたとして、こつそりと聞かれたくない話をすることもできる。

まあ、聞かれたくない話ってなんなのかって感じだけど、背徳感のようなものがあっていいよね。

アクアもぼくも、いろいろな気持ちをお互いに送り合っていた。言葉にするのは難しいことも送っているような気がする。

(アクアの手はひんやりしていて気持ちがいいね。でも、ずっと触れていても寒くならないんだ)

(アクアはユーリにとって最高のペットなんだから、ユーリが心地いいのは当然)

すつごく恥ずかしい気持ちをおアクアに送ってしまった気がする。でも、言葉より簡単に思いが送られていくから、多分本音に近い心が送られている。

ぼくにとってアクアの手が気持ちいいことはきつと大事なことなんだろう。だから、言葉には出さないけど思いは送られてしまう。

それもそうか。大好きなアクアと触れ合っているのが大事な思いで無いはずがない。

でも、アクアの手に思いを込めているって、なんだかぼくの恥ずかしい部分が露出してきている気分になっちゃうな。

だけど、それでいいんだ。ぼくがアクアに悪意を抱いているはずがない。だから、言葉にできない思いがしっかり伝わるのは嬉しいことに決まっている。

アクアがぼくにとって最高のペットだというぼくの思いもアクアに伝わっているようだし、思いが伝わるというのは楽しいな。

(アクアのおかげでぼくは一人じゃなくなっただ。アクアがいなくてもはきつとダメになっただよ)

(アクアがいなくても、ユーリはきつとよかったと思うけど、アクアと一緒にじゃないユーリは考えたくない)

垂れ流しにしていた思考に対するアクアの返答を聞いてハツとした。

そうだよね。ぼくがアクアのいないぼくを考えたくないように、アクアだってぼくのいないアクアを考えたくないと思ってくれている。なら、アクアと一緒にいられる幸運に感謝するだけで、アクアと離れることなく考えていい。

アクアはぼくの幸せを喜んでくれるとはいえ、アクアなりの喜びだってあるに決まっている。

それをぼくが満たしてあげられるように、アクアのことをずっと考えていればいいんだ。

ぼくの幸せはすべてアクアあつてのものなんだから、ぼくのすべてをアクアに捧げることに迷いなんて無い。

アクアが幸せになってくれるのなら、きっとぼくはどんなことだってできる。

アクアの幸せの中にぼくがいることは間違いないから、自分を犠牲にすることは無いだろうけれど。

(アクアはいま幸せかな？　ぼくは幸せだよ。アクアがいてくれるおかげだね)

(当然アクアも幸せ。ユーリの傍にずっといられるなら、アクアはずっと幸せだから)

なんて幸せなんだろう。ぼくの大好きなアクアが、ぼくの傍にいらるだけで幸せだと思ってくれる。最高の気分だ。

アクアにも同じような気持ちを感じてもらえるように、ぼくも頑張っていきたいな。

きっと、アクアはすでに幸せを感じてくれているだろうけど、もともとと幸せにするために。

その時のアクアの顔を見ることが出来たならば、ぼくだって幸せになれる。

嬉しいことだよね。大切な人が幸せになつてくれている姿は。その瞬間が待っているから、頑張ることに意味を見いだせるんだ。

それからアクアとじゃれ合って一日を過ごして次の日。冒険者として活動をしていると、カタリナの動きがおかしいように感じられた。

ノーラの能力をうまく使いこなせていたのに、過剰な出力で敵を攻撃してみたり。

なんだかいつもと弓を撃つタイミングが違ってみたり。カタリナは大事なく敵を倒せていたとはいえ、少し心配だった。

そこで、次の日に休みを取ることで、カタリナと2人になる時間を作ることにした。

そして次の日、カタリナとぼくは一緒に過ごしていた。めずらしく家の中でカタリナとふたりきりだ。

少しだけゆつくりとした時間を過ごしたあと、カタリナに気になっていたことを問いかけてみる。

「カタリナ、最近調子が悪かったりする？　いつもと動きが違うみたいだったから、気になって」

ぼくのその言葉を受けて、カタリナは嬉しさと呆れを同時に感じているみたいなの、なんとも言い難い表情をしていた。

ただ、少し経つと優しい顔をするようになっていたので、機嫌を損ねたわけではないみたいだ。

「ふふっ、あんたはほんと、細かいことに気がつくものね。でも、大事なことに気がついていない」

カタリナの言う大事なことってなんだろう。カタリナの表情は悪いものではないから、ぼくが気がついていないことは大きな問題ではないはず。

だから、落ち着いてカタリナと向き合うことが出来ていた。

「それが何かを聞いても教えてくれないんですよ？　でも、カタリナに負担はかけたくないから、気になるようだったら言ってみてね」

「いいのよ。あんたはそのままです。そんなあんただからこそ、あたしはチームを組もうと思ったんだから」

カタリナに肯定してもらえていると思うと嬉しいな。カタリナには何度も助けてもらっていたから、しんどい思いをしているだけかもしれないと心配していた。

だけど、今のカタリナの表情を見る限り、きっと大丈夫だ。今にも見とれてしまいそうな穏やかな顔で、不満を溜め込んでいるとは思え



ない。

アクア水を手に入れるまで、カタリナにはずっと助けられてばかりだった。1度だけ小さい頃に助けたことがあったのは、この前の件で思い出したけど。

それくらいのこと、あれだけ助けてくれたんだ。カタリナには感謝してもしきれない。

まあ、口の悪さは少しだけ改善してほしい気もするけれど。でも、そこもカタリナの魅力だと今なら思える。

「カタリナとチームを組むことが出来たのは、ぼくにとって大きな幸運だったから。その分をカタリナにお返ししたいんだ。だから、何でも言ってみてね」

「ふふつ、あたしのことなんて何にも分かっていないくせに、生意気なのよ。……ほんと、あんたはヘタレで、情けなくて、マヌケだわ」

言葉の内容とはまるで一致しない柔らかい声で、だからきつと、ぼくにとっていいことがあるのだと感じていた。

カタリナは口の悪さとは裏腹にとっても優しい人だ。だから、アクア水を手に入れる前の情けないぼくを助けてくれていた。

今でもカタリナにはぼくは情けなく見えているのかな。できれば、かつこいいと思っけてもらいたいけれど。

そうじゃなければ、きつとカタリナには頼ってもらえない。カタリナに恩返しできる人に今のぼくはなれているはずだ。

カタリナには幸せになってほしい。これは間違いなくぼくの本当の気持ちだから。

「そうかもね。でも、カタリナの力にきつとなってみせるから。カタリナの幸せのために頑張りたいんだ」

「あんたってほんと、あたしがいなきやどうしようもないやつだって、今の会話だけでもわかったわ。だから、仕方がないから、あたしは決めたの」

そう言っけてぼくの両頬に手を当てて近づいてくるカタリナ。この先の展開がわかった気がして、とてもドキドキしていた。

そのままカタリナはぼくにキスをする。カタリナの唇は柔らかい

けど、アクアとはずいぶん感触が違う。当たり前だよ。種族からして違うんだから。

でも、ぼくが感じるドキドキは似たようなものだった。恥ずかしいような、嬉しいような。

離れていったカタリナは、いつかカタリナを助けた時に見た顔より、もっと素敵だった。

「どうしようもないあんたを支えてあげるために、あたしがずっとそばにいてあげるわ。あたしと、あんたと、アクアと、その3人で。幸せな未来を掴み取ってみせるのよ」

カタリナが当たり前のようにアクアを大切に思ってくれていることが伝わって、とても嬉しい。

でも、それだけじゃない。ぼくとカタリナとアクアの3人で幸せになることは、ミストの町にいた頃のぼくの願いだっただように思う。

カタリナもきつとぼくと同じ気持ちでいてくれたのだ。きつとアクアも同じ気持ちだったはずだ。

「うん。ぼくたち3人なら、きつと誰よりも幸せになれるよ」

「そうね。あんたとアクアの敵は、あたしの敵。どんな手を使っても排除してみせるわ」

その目にドロリとしたようなものが見えた気がして、ぼくは少しだけ怯んだ。

だけど、きつとぼくもアクアとカタリナの敵には同じような顔をする。だからぼくたちは同じものを見ていられるんだ。

改めて決意を固めるぼくを見て、カタリナが妖艶に微笑む。見たこともない表情で、こんな顔もできるんだという思いがあった。

「あたしとあんたとアクアと、その3人の子供と。それがずっと一緒にいる光景を作りましょう？」

## 裏 つながり

プロジェクトU：Reを排除することを決めたアクアは、サーシャを誘導して効率よく情報を集めさせた。

その結果として、すぐにプロジェクトU：Reの関係者を討伐するという計画が実行できることになった。

そのための計画をサーシャが説明している間、ユーリは強い怒りを抱いているようだった。

なので、アクアはその怒りをユーリにどう発散させるかを考えていた。

ユーリのことだから暴力で発散するというのは好まないだろうが、何かいいアイデアがあるだろうか。

結局アクアは怒りを発散させるという形に拘らず、後で人との交流で癒やすという結論に達した。

ユーリは人を傷つけるという好意にむしろ傷ついてしまうだろうという判断からだ。

そして、ミストの町のほど近くにて、プロジェクトU：Reの本拠地を襲撃することになる。

そのメンバーとして、ユーリと自分、カタリナを選出しておいた。その判断をサーシャを通じて伝えていた。

この3人の問題として、このメンバーで決着をつけるといい。ユーリに直接関係のないことで、アクアは珍しいこだわりを發揮していた。

そのまま山の麓にある研究所に侵入していったアクアたち。そこには多くの敵が待ち受けていたが、アクアにとって問題だったのはユーリが人を殺してしまったことだ。

ユーリは人を殺せば傷つくだろうという事ははっきりしていたから、ユーリに手を汚させないように配慮していた。

それが結果的にユーリに人を殺す覚悟を決めさせてしまった。

アクアはユーリが人を殺して傷ついている姿を見て悲しくなった。こんなガラクタたちのためにユーリが傷ついてしまうなんて。

アクアはプロジェクトU：Reに対する怒りをさらに強めていた。だが、ユーリの心情を思うと嬉しさも浮かんできた。

ユーリはわざわざ嫌で仕方ないことを自分たちのために行ってくれた。それはユーリが自分たちを大好きでいる証に違いない。

傷ついたユーリの心を癒やしてあげたいという思いと、その傷を好きだと思ふ感情の間でアクアは揺れ動いていた。

自分の行動の方針を決める前に、次の敵が目の前に現れた。ユーリに似ている顔をした少女で、ユーリとの血の繋がりを感じさせた。

プロジェクトU：Reはユーリの両親が中心であると知っていた。アクアは、 $\theta$ をユーリの妹だと確信していた。

ユーリは明らかに $\theta$ を殺すことをためらっていたが、情がわく前に殺してしまえばいいと判断してカタリナの体で攻撃を仕掛ける。

その攻撃は防がれてしまったが、その時のユーリの表情を見て $\theta$ を殺さないという方針を決めた。

ユーリはおそらく $\theta$ が死ぬことで先程よりも傷ついてしまう。そう判断したためだ。

$\theta$ がユーリに攻撃を仕掛ける姿には腹立たしきもあつたが、どこかに既視感のようなものを覚えて怒りが和らいでいた。

そのまま $\theta$ はユーリと和解していく。ユーリの嬉しそうな顔に安心すると同時に、既視感の正体にも見当がついた。

だから、アクアは $\theta$ の体を乗っ取らないことにした。ユーリの家族となつてくれる相手だろうから、大切にしておけばいい。

そうすれば、ユーリはきつともつと幸せになつてくれる。

ユーリの幸せな姿を見ることが嬉しいアクアにとって、悪い判断ではないと思えていた。

その判断の正しさを証明するように、ユーリは $\theta$ と楽しげに話をしていた。

$\theta$ はユーリによく懐いていて、これから自分がユーリに甘える時の参考にできる動きをしていた。

ユーリに新しい幸せが出来たと喜んだのもつかの間、 $\theta$ はユーリの父親によつて昏倒させられる。

その時のユーリの怒りを見たアクアによって、ユーリの父親の運命はすでに決まっていた。

ユーリがどんな判断をしたとしても、この男の未来は変わらない。そう考えていたアクアだったが、男の言葉によって思考が止まってしまった。

自分がオメガスライムであることを意図しないタイミングで露見させられて、ユーリが少しびっくりしたような顔でこちらを見る。

ユーリなら大丈夫だと信じていたはずなのに、頭が真っ白になっていた。

それがユーリに男の攻撃を直撃させる隙となってしまう、アクアは大いに自省していた。

仮に自分が嫌われてしまうのだとしても、ユーリを傷つかせていいはずがない。

オリヴィエの与えた道具によってユーリは無傷でいたが、それがない状況だったら。

ユーリに捨てられてしまうかもしれないという不安と戦いながら、アクアは必死にユーリの安全を守ろうとしていた。

そのままユーリの手によって男は退けられ、ユーリはアクアに近寄ってくる。

もし決別の言葉を告げられてしまったら。その恐怖を捨てられないでいたが、ユーリはアクアを受け入れてくれた。

やっぱりユーリは最高だ。いつまでも、どこにいても、ユーリと自分是一緒にいられる。

そう確信できて、アクアの頭の中は幸せでいっぱいだった。何があってもユーリは自分と一緒にいる。そう心から信じられていた。

もう何があってもユーリを信じていればいい。高揚感に支えられながら、アクアはユーリの真心を味わっていた。

そして再びユーリの父親と対峙する時が来た。男のモンスターは道具だという言葉は、ユーリに全く響いていない。

ユーリのモンスターを大切にする姿勢は、絶対に自分のことが大好きだからだ。

ユーリの思いは何度味わっても最高だ。アクアは強い興奮に襲われながらユーリの戦いを見つめていた。

ブラックドラゴンφとユーリの戦いはユーリにとって立ち回りにくい状況になっていて、だからこそユーリがどう乗り越えるのかを楽しみにしていた。

すると、愚かなユーリの父親がブラックドラゴンφにブレスを発射させる。

ユーリならどうにかできると思っていたが、ユーリに褒められたいという思いがユーリをかばうという判断をさせた。

それが功を奏したのか、ユーリは指輪の力を発動させる。

それによってユーリにかばわれるという体験はとても貴重で、アクアは物語のヒロインのような気分を味わっていた。

さらに雑音まじりとはいえ、ユーリの心が伝わってくる感覚がとても楽しくて、アクアはとても張り切っていた。

それで、アクア水にアクア自身の全力を込めることにした。ユーリはなぜかそれを感じ取っていたようで、迷いなくアクア水でブラックドラゴンφに攻撃する。

そのまま、ブラックドラゴンφは両断されていった。自分とユーリの共同作業という感覚はずいぶんとアクアを昂らせていた。

それから、ユーリと落ち着いて意思を送り合っていたアクアは、ユーリの思いに改めて感謝していた。

ユーリが自分との出会いを喜んでくれている。大好きだと思ってくれる。

それらの感覚はアクアに幸せを運んできて、改めてユーリと出会えて良かったという思いを強めていた。

プロジェクトU：Reに関する事件は一旦落ち着いていたが、問題もあった。θが目覚めないということだ。

ユーリは明らかに悲しんでいて、だからこそどうにかしたいという思いがあった。それでも、θが目覚めない理由はわからない。

なので、ユーリの両親から情報を引き出すことに決めた。アクアはユーリの両親が捕らえられている牢へと向かう。

そこにはユーリの両親がともにいて、アクアの姿を見て歓喜したような顔をしていた。

「アクア、やはり私に協力したいと考えたのだな。さすがは私の作品だ」

一体この男は何を言っているのだろうか。アクアには全く理解できないでいた。

アクアにとってユーリの両親を惨たらしく殺すことは迷うことのない結論である。

今この男の目の前にいるのも、記憶を覗いてθを助けるための知識を手に入れるためだった。

「ユーリなんてダメな子を生んだときにはどうなるかと思ったけれど、あの子も役に立つものなのね」

ユーリの母の言葉を聞いて、アクアの怒りは煮えたぎっていたが、それでも努めて冷静にしようと思がけていた。

情報を引き出す前に死なれる訳にはいかない。それだけが今目の前にいる2人を殺さない理由だった。

「アクアがユーリを裏切るとでも思っている？ ずいぶんくだらないことを」

アクアの言葉を聞いて、ユーリの両親に明らかな焦りが浮かび始める。そして、2人は牢を開いて全力で逃げ出そうとする。

何故か折られたはずの手足が治っているようだったが、アクアにとっては問題のないことだ。

アクアは2人の逃走を軽く邪魔するだけにとどめて、いったん2人に牢から逃げ出してもらおう。

「オメガスライムといえども、私の研究には及ぶべくもなかったか」「そうね。あなたのおかげで、また研究を再開できるわ」

牢から逃げ出した2人は、建物の出口へと向かって進んでいた。アクアの手から逃げられたと判断した2人の気はずいぶんと緩んでいた。

だが、出口にたどり着いた時に真の絶望が襲いかかる。そこには、無数のアクアがいた。

どう考えても逃げられないほどに隙間なくアクアがいて、ここでやつと2人はアクアの意図を理解した。

「私達がぬか喜びする姿を嘲笑っていたのね？　なぜそんなことを」「だって、悲鳴がここの人間に届いたら困る。お前たちには、どれだけでも苦しんでもらう」

その言葉通り、アクアは2人を捕らえると、人気のない場所へと運んでいく。

まずは二人の脳を支配して、必要な情報を抜き出した。

それから、アクアにとつての本番だった。まずは二人の全身の骨を砕き、そして癒す。

次は手のひらの先から順に溶かしていく。その次はアクア水のようなものに溺れさせる。

何度も何度も2人をボロボロにしては癒し、ボロボロにしては癒す。

ずっと悲鳴を上げ続けていた2人だったが、それを繰り返すうちにアクアの仕打ちになんの反応も返さなくなった。

そろそろ十分だと判断したアクアは、二人を癒してから牢に戻す。ユーリに自分がオメガスライムだと疑いをもたせたこと、θを傷つけてユーリを悲しませたこと、そもそもユーリを捨てたこと。

様々な怒りを全力でぶつけて満足したアクアは、晴れやかな気分で本体でユーリのそばを味わっていた。

その中で、アクアは自身の過去を思い返そうとしていた。もう過去に何も感じなくてもいい。

だって、ユーリがくれた幸せは無限だから。落ち着いた心持ちで過去に思いを馳せていた。



## 裏 オメガスライム

かつて3つの国を滅ぼしたとされるオメガスライムは、自らの手でそれらの国を滅ぼしたわけではない。

とある大陸に突然生まれたオメガスライムは、特に目的もないまま、その大陸に住まう人々を乗っ取っていった。

そして、徐々に支配する範囲を広げていく。数年が経過した頃、とある人物がその大陸の実情に気づく。

それゆえ、大陸外にある故郷にそれを報告することにした。

その報告を受けた当時の大国は、自国に被害を及ぼさないために、その大陸の人間ごとオメガスライムを滅ぼすことに決めた。

その頃の調査では、本体らしきものを倒した程度ではオメガスライムにダメージを与えたとは言い切れなかった。

残りの部位が存在していると、そこから再生することが判明したからだ。

結果として、その大陸の人間たちは、オメガスライムもろとも吹き飛ばされることになった。

それでも、大幅に弱体化しながらも、オメガスライムは僅かな断片を残していた。

それが海を流れて、ユーリたちの住むことになる大陸へとたどり着く。それが、いずれアクアと名付けられる存在だった。

オメガスライムの断片は、長い長い時間をかけて徐々に力を取り戻していく。

それから気の遠くなるほどの時間が経って、プロジェクトU:Reという計画に携わるユーリの両親がアクアを発見した。

オメガスライムの創造を計画していたユーリの両親ではあるが、そのスライムがオメガスライムの断片であるなどとは想像すらしていなかった。

ユーリの両親は他のスライムより優秀なスライムとして、モンスターと呼ばれる原因で、その成分が多いほど強いモンスターとなる物質を吸収させることに決めた。

そのための仕込みとして、ユーリにその成分を生み出す期間を埋め込んでいた。

アクアと名付けられたオメガスライムの断片は、その成分を吸収するためにいつでもユーリの傍にいた。

アクアにとつては、ユーリは卵を産む鶏でしかなかった。

だが、それゆえにユーリを守ることに全力だった。なにせ、美味しい卵を産む鶏が死ぬことを嫌うのは当然のことなのだから。

アクアの行動がユーリの心を癒していることなどアクアはまるで理解していなかったが、だからこそアクアはユーリの好意を素直に受け止めることが出来たのだろう。

アクアが感情に芽生えるまでは、それから長い時間が必要であった。とはいえ、アクアはユーリの好意にずっと触れ続けていた。

だから、アクアの感情が芽生える前にユーリからアクアの好む成分が失われたとしても、アクアがユーリを傷つけようとすることはなかっただろう。

ユーリはアクアの好む成分を生み出す器官を持っていることで、身体などの性能がただの人間と比べて大幅に劣ることになっていた。

それゆえ、アクアはユーリを守るために行動することが多かった。

カタリナもユーリに1度助けられてからは、ユーリを守るために行動していた。

目的が似たようなものであるため、アクアとカタリナは協力する形になることも珍しくなかった。

その時間が、やがてアクアにカタリナに対する情を生み出させることになる。

とはいえ、アクアに感情が芽生える日は遠かった。

アクアが進化する直前まで、アクアにとつてはユーリもカタリナも単なる便利な存在くらい認識でしかなかった。

それでも、だからこそアクアはユーリもカタリナもしっかりと守った。ユーリにもカタリナにも相応に従順だった。

ユーリの求める遊びにずっと付き合っていたし、人間生活に溶け込むための指示も守っていた。

そんな日々の中で、アクアはユーリに守られるという経験をする。アクアにとって、襲いかかるモンスターの攻撃などなんの驚異でもなかった。

だからこそ、モンスターがユーリに攻撃しないうちは無反応でいたのだが、それを見たユーリがアクアを守るためにモンスターに攻撃する。

そして倒れたモンスターを見て、アクアは少しだけいつもよりしっかりとユーリのことを五感で認識した。

それはアクアにいずれ芽生える感情の、ほんの少しの発露だったのかもしれない。

それからもアクアはユーリやカタリナとともに生活し、学園に通うことになる。

学園の中では、ユーリはカインに傷つけられていることが多かった。

そのころにはアクアにとって邪魔物くらいの認識でしかなかったから、カインは無事でいられた。

アクアに感情が芽生えていたら、数年もの間を我慢することなど決してなかった。

それがカインにとって幸運だったのかは誰にもわからないであろうが、世界にとっては好ましいものだったはずだ。

なぜなら、アクアが進化した後よりも遥かに低いハードルで、人を殺したり支配したりすることになっていただろうからだ。

それからの日々でもずっとユーリはアクアに対して全力で好意をぶつけていて、それがアクアにユーリを大切に思う感情を芽生えさせる。

それからのアクアは本当に幸せだった。

これまでは何とも感じていなかったユーリの好意が嬉しくて、ユーリと触れ合う時間は楽しくて。

そして、どんどんユーリのことを大好きになっていった。ユーリがくれた感情は、アクアにたくさんの幸せを与えてくれた。

だから、大好きなユーリのために何かをしたいという思いが強くなる。

なっていた。

それゆえに力を求めたアクアは、全力で進化のために力を蓄えた。そして進化という形で、本来の力を取り戻すことになる。

アクアは進化してすぐに、ユーリの中にあるモンスターのもとになる成分を生み出す器官を排除した。

そんなものが無くなったくらいでは、ユーリを大切に思う気持ちがなくなるわけがないと確信していたから。

それに、餌のようにユーリを見ている自分のことは嫌いだったので、ただのユーリを大好きな自分で居たかった。

それからの日々ではユーリとともにいくつもの冒険をして、いくつもの敵を倒した。

ユーリの幸せのために尽くしていたし、ユーリは幸せになってくれる。ユーリはその幸せを全力でアクアに返してくれたし、だからアクアは幸せだった。

これまでの日々を思い返していたアクアは、やはり過去は忌々しいという思いを消せなかった。

ユーリのことを単なる道具くらいにしか感じていなかった頃の自分など消し去ってやりたい。

だが、過去に戻れたとしても、ユーリと離れ離れになる選択だけはしなかっただろう。

感情がはつきり芽生えていなかった頃だって、ユーリの傍にいたことは心地よかったはずなのだから。

ユーリと球遊びをした思い出、ユーリにずっとくっついていた記憶、ユーリに撫でられていた過去。

それらは本当は全て愛おしくて、幸せで、大切な時間だったはずだ。そうじゃなかったら、自分に感情が芽生えたりはしなかった。ただの餌としてユーリを見続けていたに違いない。

そんなもしもは想像するだけで最悪の気分で、アクアはユーリがどれほど大好きか改めて理解した。

だから、アクアがユーリに出会えたことだけは、プロジェクトU：

Reの誇って良い成果だと思っていた。

プロジェクトU：Reはアクアがオメガスライムの力を取り戻すためにほとんどなんの役にも立たなかったが、ユーリを生み出したことは素晴らしい。

ユーリを大切に思う気持ちだけが、アクアをオメガスライムにし、アクアを幸せにした。

アクアがただのスライムだと思いながらも、ずっとずっと大切にしてくれたユーリがいたからこそだ。

アクアが進化してからだって、ユーリはアクアを変わりなく大切にしてくれた。いや、今まで以上にずっとずっと大切にしてくれた。

ユーリはアクアの大好きだという気持ちをしっかりと受け止めてくれて、大好きを返してくれた。

ユーリにとって大切な人が何人も現れても、アクアが一番に思い続けてくれた。

それがアクアにとって大きな喜びで、ユーリとともにいる喜びを噛み締めていた。

結局ユーリの周りの人間をみんな支配することになってしまったが、その人達をある程度好きになれたのはユーリがいたからだ。

ユーリが人を接する喜びを教えてくれて、だから、アクアは人を傷つけることが全てにはならなかった。

モンスターにとって人を攻撃するというのは当たり前のことだ。それを乗り越えるほどの好意を人にもてたことが、アクアにとって

どれほど素晴らしいことだったか。

今でもこの胸にある悲しみを抱えていこうと思う程度には、アクアは皆が好きだった。

アクアは喜びも悲しみも苦しみも、様々な感情を知ることになった。

それでも、一番大きく感じていたのは喜びで、それには何よりもユーリの存在が大きい。

アクアは何度もユーリに嫌われる未来を恐れることになった。それでも、そのたびにユーリはアクアを安心させてくれた。

カタリナが一番ではないかと疑ったときも、ノーラとの約束を思い描いたときも、オメガスライムという自分の正体を考えたときも。

ユーリはアクアを暖かく受け入れてくれて、アクアのことを肯定してくれて、アクアを大好きだと言ってくれた。

ユーリと過ごしていた時間の全ては、間違いなくアクアの宝物だった。

それでも、ユーリと離ればなれになる可能性のあることをすると決めた。

アクアにとっての幸せは、全部ユーリがくれたものだ。ユーリがほんとうの意味で幸せになってくれるのなら、自分が不幸でもかまわない。

もし仮にユーリと離れ離れになったとしても、この思い出と幸せを胸にこれからも生きていける。そう信じていた。

だが、アクアは本当の意味で孤独の恐怖を知らなかった。もしそれを知っていたならば、そんな判断は絶対にしなかった。

結局、アクアが自分の恐怖に負けて、カタリナを支配した。これがすべての悲劇の始まりだったのだろう。

カタリナのこととは大好きだったはずで、ずっと一緒にいたかったはずで、それなのに、カタリナのことでもユーリのことでも信じきれなかった。

自分にとってもユーリにとっても大切なカタリナ。ユーリの幸せの大きな要因。

アクアはユーリに嫌われることを覚悟しながら、カタリナを解放することに決めた。

## 裏 解放

カタリナを解放することに決めたアクアは、まずはノーラと話をすることに決めた。

ノーラはカタリナをとっても大切に感じているし、カタリナの契約モンスターでもある。

ユーリ以外でカタリナの話をするならば最もふさわしい相手だとアクアは考えていた。

ユーリに嫌われる覚悟を決めたつもりでアクアではあるが、直接ユーリにカタリナを支配していることを話せはしなかった。

せめてユーリに嫌われずに済む可能性だけは残しておきたいという、いたって当然の感情からだった。

「ノーラ、カタリナを解放したら、カタリナは喜んでくれると思う？」  
「うちはカタリナではないから分からんぞ。だが、ご主人にとって良い話だとは思うぞ。アクア様にとって良い話かはわからんが」

「そう。実は、カタリナはアクアが支配している間もずっと意識は残っている」

「それは……アクア様はなぜそうしたのだ？」

「どうしてもカタリナを殺そうとは思えなかったから。せめて意識だけでも残したかった」

「アクア様はやはりカタリナのことが好きだったのだな。だが、そのやり方は……」

言葉に詰まったノーラを見て、アクアは自分の行動になにか問題があるのだろうかと疑問に思い、ノーラの思考を読んだ。

すると、ずっと意識を持ったまま自分の意志ではなくユーリに触れ続けるイメージが流れ込んできた。

ユーリのそばににいるのに、ユーリの声も笑顔も自分以外に向けられている。

自分の声は届かなくて、他の誰かの言葉にユーリが反応を返す。

自分でない誰かのことを自分だと思いながら気がつかないユーリをずっと眺めているのだ。

そのイメージが流れてきたことによつて、アクアは自分がどれほど残酷なことをしたのかを理解した。

カタリナに申し訳ないという思いが湧き出してきて、カタリナのつらさを想像するだけで、アクアは自分のことのようにつらく感じた。もうカタリナと和解することなどできないかもしれないという思いも浮かんできた。

だが、それ以上にカタリナをその苦しみから開放してあげたいという思いのほうが強かった。

やっぱり自分はカタリナのことを好きなのだ。ずっとユーリをとともに支えてきた仲間で、ユーリのことを好きな同志でもある。

カタリナに憎まれていて、ユーリにもそれが伝わってしまうという恐怖はあった。

それでも、カタリナの苦しみを無くしてあげたかった。

だから、アクアはカタリナを解放することをはっきりと決意した。

「ノーラ、決めた。すぐにもカタリナを解放する」

「そうか。これから大変になるだろうが、頑張ってくれよ、アクア様」

「うん。カタリナに謝りたい。許してもらえないかもしれないけれど、それでも」

「まずはカタリナと2人で話しておいてくれ。うちは邪魔になるだろうからな」

「わかった。ノーラ、ありがとう」

ノーラが去っていったので、カタリナとふたりきりになって、アクアはカタリナを解放した。

カタリナは倒れそうになるが、すぐにアクアはそれを支える。

少し自体を理解していなかった様子のカタリナだが、アクアの方を見て笑顔になる。

「アクア、あたしを解放してくれたのね。ありがとう」

「ううん。ごめん、カタリナ。アクアはカタリナにひどいことをした」

「いいのよ。こうしてあたしを解放してくれたんだから。あのヘタレをあたしの手で守ってやることができるのよ」

カタリナの憎まれ口を久しぶりに聞いて、アクアは素直に喜んでい



た。

カタリナが本気でアクアを許すつもりなのかはわからない。それでも、あのカタリナが帰ってきた。

そう感じて、懐かしさと暖かさと嬉しさが湧き上がってきた。

「アクアがあたしのことを好きでいてくれるのは、その顔を見れば分かるわ。だから、許してあげる。あなただから特別なのよ？」

「カタリナ……ありがとう」

「ええ。また、あたしたちでユーリを支えてあげましょう？」

「うん！ カタリナも、いっしょの部屋で過ごす？」

「悪くはないけど、急ぎすぎても良くないわ。これから、ゆっくりと決めていきましょう」

そのカタリナという言葉が、アクアにカタリナとの未来をしっかりと感じさせた。

ユーリに悪口を言いながらも、なんだかんだでユーリを助けるカタリナの姿がまた見られる。

カタリナがユーリを引っ張って、アクアが後ろから支えるといういつか夢見ていた景色を見られるのだ。

自分とユーリとカタリナの3人なら、きつとどんな相手にだって負けることはない。アクアはそう信じ切っていた。

「それで、アクアに提案があるの。あたしとユーリが子供を作る。アクアのことだから、あたしの体に入ってその子供にアクアの要素を植え付けるくらいできるでしょう？ そうすれば、あたしたち3人の子供になるわ」

カタリナのその提案は、アクアにとってとても素晴らしいものだった。

自分とユーリとカタリナの3人の絆の証がはつきりと形になる。そして、3人とその子供たちで、本当の家族になることができる。

いつか夢見ていた未来よりも、もっとずっと素晴らしい未来になるとアクアは感じていた。

ユーリとカタリナ、2人の子供にはフィーナのような力を与えるのがいいだろうか。

それなら、様々な形でユーリたちの力になってくれるだろう。今の自分ならば、どんな契約技より優れた力を与えられる。

だから、きつとユーリも喜んでくれる。そう信じていた。

「それは楽しみ。みんなで家族になるのは、きつと最高の時間」

「そうよね。あたしだって同じ気持ちよ。だから、何があってもユーリを守りましょうね。今回のような敵が現れたのなら、何が何でも始末しましょう」

そう言うカタリナの目はとても濁りきっていて、アクアは少しだけ怖くなった。

以前のカタリナならば、そう簡単に人を殺そうとはしなかったはず。それに、こんな目をするのも。

やはり自分の行動でカタリナを傷つけてしまっていたんだ。だから、カタリナはこんな目をしている。

自分にとってのカタリナの大切さをはっきり理解できていたアクアは、胸が締め付けられるような苦しみを味わっていた。

「アクア、どうしてそんな顔をするの？ ユーリの敵なんて、いくら死んでもかまわないでしょう？」

「そうだけど、カタリナが苦しそうに見えて。ごめん。何度謝っても許されないことだけれど、それでも」

「確かにあたしはアクアに支配されている間ずっと苦しかったのかも知れない。でも、そのおかげで、ユーリとアクアがどれだけ大切な存在なのか分かったわ。だから、アクアには感謝しているくらい」

何故かカタリナの目はとても澄んでいて、だからこそアクアはカタリナの苦しみが伝わってきたような気がしていた。

おそらく、そうやって自分をごまかすしかなかったのだろう。だって、苦しいことをしてきた相手に感謝なんて絶対にしない。

アクアはこれまでの日々で少しずつ人間を理解してきたことで、カタリナ的心情に思いを馳せることができた。

きつとカタリナは自分のことを恨んでいたはずだ。ユーリだって同じことをされれば自分を恨むだろう。

それなのに、感謝しているなんて、それは本当の心なのか？

でも、それを指摘してカタリナに恨みを思い出されてしまったら。カタリナと和解するという希望が生まれてきただけに、アクアはカタリナとの破局が恐ろしかった。

これからカタリナの心を癒してあげたい。それならば、きっとユーリと接するのがいい。アクアはそう信じた。

「カタリナ、ユーリの一番がカタリナになってもいい。だから、ユーリの傍で過ごして」

「自分を騙しきれないような嘘をつくのは止めなさい、アクア。いいのよ。あいつの一番があなたなのは。それだけのことを、あなたはしてきたわ」

「だったら、2人で一番になればいい。ユーリなら、きつとそうしてくれる」

「どうかしらね。でも、あなたの気持ちは伝わったわ。あなたは一度間違えてしまっただけ。だから、これからの日々で償ってくれればいい。あたしとあいつといっしょに幸せになってくれればね」

「わかった。カタリナ、よろしく」

「ええ、よろしく。大好きよ、アクア」

「アクアも、大好き」

その言葉を受けてカタリナは柔らかく微笑む。それを見て、アクア自身からも笑顔があふれてきた。

カタリナのことは大きく傷つけてしまったけれど、きつとこれからやり直すことができる。

ユーリだって本当のカタリナとふれあえることは嬉しいはずだ。たとえばつきり気がついていないとしても、きつと。

だって、ユーリはアクアがカタリナを好きでいる以上にカタリナのことを好きでいるはずだ。

かつてユーリの一番を奪われると心配するほどに、大切に思う感情があふれていたのだから。

だけど、やっぱりユーリと離ればなれになる未来は恐ろしい。カタリナと和解できたことも嬉しかったが、何よりもユーリに嫌われないであろうことが嬉しかった。

ユーリに嫌われる覚悟はしていた。これからをずっとひとりきりで過ごす覚悟も。

それでも、目の前にその未来があると思うと恐ろしくて、寒くて、耐えられそうにない苦しみを感じた。

もし本当にカタリナと上手くいかなかったのなら、もう一度カタリナを支配していたのかもしれない。

今度は意識すらも残らないように念入りに。

あるいは、カタリナの記憶を操作していたのだろうか。

カタリナではない別人のようになってしまうかもしれないけれど、それでも、ユーリと離ればなれになる未来よりはいい。

結局のところ、自分は恐るべき怪物でしか無いのだな。アクアは密かに自嘲していた。

本当に自分はある優しいユーリのそばにいていいのだろうか。恐ろしい考えが頭の中に浮かんできて、アクアはその考えを必死に振り払っていた。

「アクア、これから3人で、いっしょに幸せになっていきましょうね。あたしにとつても、ユーリにとつても、あなたは大切な家族なんだから。あなたがオメガスライムだとしても、そんなことは大した問題じゃないわ」

カタリナのその言葉は、今の自分の感情を理解してのものなのだろうか。

その答えはアクアには思い浮かばなかったが、今の言葉がはつきりとアクアの心を軽くした。

やはり、カタリナの優しさはユーリにとって必要なものだ。だから、これからはユーリはもつと幸せになる。

アクアは幸せな未来をしっかりと想像しながら、今の幸せを噛み締めていた。

## 100話 目覚め

カタリナにキスをされてから、なにか関係が変わってしまったかもしれないと思っていた。

だけど、カタリナの態度はこれまでと変わらないままで、ぼくは安心したような、寂しいような、悩ましい気持ちの中にいた。

カタリナのことはもちろん大切だけど、恋人になりたいかどうかは、ぼくにはよく分からない。

まあ、カタリナから積極的になってきているという訳ではないので、カタリナも今の関係を望んでいるのだろう。

ただ、アクアとカタリナは前よりよく一緒に過ごしていると思う。ぼくには内緒の話もしているような感じで、ちよつと寂しい気もするけど。

でも、2人が仲良くしてくれているのは素直に嬉しい。だって、大切な人どうしが仲良くしてくれているんだからね。

そんな日々を過ごしている中で、ある日、シータの様子に変化があった。

少しうなされているような雰囲気だったので、心配もある。

だけど、これまでのずつと何も反応しない姿と比べると、いい方向に進んでいるのだと思いたい。

うなされているシータの手を握りながら、シータに声をかけることにする。シータが少しでも楽になってくれればいいな。

「シータ、きみとまた話がしたいよ。たつた一日の関係だったとはいえ、ぼくはシータのことが大好きなんだ。美味しいもの、楽しいこと、きみにはいっぱい知ってほしいよ」

シータはぼくの言葉に少し反応したように見えた。なんだろう、具体的に何が反応なのかはわからないけれど、そんな気がする。

だったら、もつと言葉をかけたらいいかもしれない。もしかしたら気のせいかもしれないけれど、ぼくは希望を捨てられなかった。

「シータ、早く目を覚ましてよ。あの飴だつて用意しているし、他にも美味しいものを食べさせる準備はできているんだ」

必死に言葉をかけていると、シータが身じろぎをしながら少し声を出している。

これはぼくの言葉が効いているのだろうか。そう思いたい。何よりも、シータが目覚めてほしい。

絶対にシータのことを幸せにしたいんだ。シータの幸せそうな顔を見れば、きつとぼくも幸せになれる。

ただ1度出会っただけの人にこんなことを思うのはおかしいかもしれない。

でも、そんなことは関係ない。もうぼくにとってシータは大切な存在なんだ。それでいい。

だから、目を覚ましてよ、シータ。きみとまた何度でも話をしたいんだ。

「おにい、ちゃ……」

シータがはつきりと声を出した。ぼくのことを呼んでいる。

もしかしたら、今日目覚めてくれるかもしれない。いまずぐにでも。

そう思えてくると、手に少し力が入る。ダメだ。シータの手を強く握ったらシータが苦しいかもしれない。

だけど、それでも力をうまく抜くことができない。

ダメなお兄ちゃんだよ、ぼくは。シータがいなくてもつとダメになっちゃうんだ。だから、お願い。

「シーター！ 頑張つて。またぼくにきみの笑顔をみせてほしい。そのためなら、何でもするよ」

ぼくはシータにすがりつくようにして言葉をかけていた。

そんな中、シータのまぶたが動いたのが見えた。これは、本当に希望があるのではないか？

シータが目覚めたらシータとしたいことは無限と言っていいくらいにある。

その思いとともに、シータにさらに言葉をかけ続けていく。

「シータ、ぼくはきみが大好きなんだ。だから、帰ってきて」

そして、シータの目が開いた。

シータはほんやりした様子そのまましばらくじっとしていた。そのままシータの様子を見てみると、シータの目がこちらを向く。こんな動きをするってことは、シータはきつと本当に目が覚めている。

ぼくはきつと隠しきれないほどの喜びを抱えながら、シータに笑顔を見せる。

シータはぼくの顔を見て、ぼくが握っている手の方を見て、またぼくの顔を見て、笑顔を返してくれた。

良かった。本当にシータの意識が戻ったんだ。体中から力が抜けるような感じがして、シータの手を放そうとしてしまう。

すると、シータはとても強い力でぼくの手を握り返してきた。結構痛いけど、努めて顔に出さないようにする。

「おにいちゃん、シータからはなれちゃダメ。おにいちゃんは、シータとずっといっしょにいるの」

シータの目には強い執着のようなものが見えた気がした。

シータと初めて出会ったときには、こんなふうじゃなかったと思うけれど。

それでも、言葉や声からシータらしさを感じることができて、本当にシータが目覚めたんだという実感がわいてきた。

良かった。このまま目覚めない可能性だってあったかもしれない。その不安はずっとあった。

だけど、これからきつとシータとずっといっしょに過ごすことができる。

それを考えると、いま手に感じている痛みなんてどうと言うことはない。なんなら、もっと強く握ってきたってかまわない。

「もちろんだよ。だったら、ぼくと同じ部屋で過ごしてみる？」  
「うん！ おにいちゃんといっしょにねるの、たのしみ！」

シータが喜んでくれているようで何よりだ。でも、アクアの許可も取らずに決めてしまったのはまずかったかな。

まあ、アクアがシータを拒絶するとは思わなければいけど。さすがにシータとアクアを入れ替えるのはダメだろうけどね。

そんなことをするつもりはないから、きつと大丈夫だと思う。

「シータよ、ようやく話すことができるな」

急に得体のしれない声は何処かから聞こえてきた。可愛らしい感じの声ではあるけれど、何者かもわからないと怖いだけだ。

なんとなく、シータのそばから聞こえてくるような気がする。

「何者だ?! 一体何をするつもりだ!」

もうちよつと落ち着いて対処をしたほうが良かった気がするけど、いきなりのこと動揺してしまった。

これでシータが傷つくことになったらぼくは悔やんでも悔やみきれない。

だけど、今のところはシータは苦しんでいる様子はない。得体のしれない声は、危険な契約技ではないのかな。

「ほれ、こつちを見るがいい。こつちだ、こつち」

声のする方を向いてみると、シータが抱えているウサギの人形から声が聞こえているようだった。

だとすると、シータの敵ではないのかな。いや、ようやくの意味次第だ。目を覚ましたからだというのならいい。

何か他の原因だったら大丈夫なのだろうか? すぐには思いつかないけれど、シータと初めて出会った時には話していなかった相手だ。

念のため、警戒は解かないでおこう。いつでもアクア水やミア強化を操るようにならないと。

それでも、はつきり敵対するのはまだ気が早い。むやみに敵を作るべきではないから、対話から試みてみよう。

「シータの人形だね? いったい何のつもり?」

「急に話しかけられて警戒するのは分かるが、わしはお主の敵ではない。無論、シータの敵でもな」

「ミリンちゃん、はなせるようになったの? いったいどうして?」

シータが知らなかったということは、シータが倒れている間に話せるようになったとか?

でも、一体どういう状況になったらそんなことに? まあ、それは



重要ではないか。

ミリンというこの人形の話が本当だとすると、何を目的に話しかけてきたのだろう。

「アクア様の手によってわしは話せるようになったのじゃ。シータ、お主のことは傷つけたりせん。お主は実験体仲間なのだからな」

「じっけんたい？ それってなあに？ おにいちゃん、しってる？」

「えつと……どうしても知りたいのなら説明するけど、知らないほうがいいと思うよ」

「それもそうか。シータ、すまなかつたな。わしとお主は仲間で友達だ。それでいいか？」

「うん！ ミリンちゃんが話せるようになって、シータ嬉しいよ！」

ミリンとシータは上手くやっていけそうな雰囲気だ。なら、大丈夫かな。

でも、人形が話せるようになるって、一体どういうことだろう。聞いてみても大丈夫かな。

「ミリン、答えたくなかったら答えなくていいんだけど、人形がどうして話せるようになったの？」

「ああ、当然気になるわな。端的に言うと、わしはモンスターなのだ。プロジェクトU：Reによって言葉や行動を封じられていただけだな。アクア様の力によって、こうして話せるようになったわけだ」

それはつまり、ミリンはシータの契約モンスターだということか？ それよりも、父親が言っていた意思をもちながら言葉や行動を封じられたモンスターがミリンだということか。

改めて怒りが湧いてくるけれど、あいつはもう死んでいるのだから、気にしなくてもいいか。

それにしても、アクアがミリンのことを助けてくれたのか。ほんとうにアクアは優しいな。

やっぱり、アクアがぼくのペットで良かった。何度でもそう思う。「そうなんだね。ほんと、あいつらはろくでもない奴らだったよ。でも、今ミリンと話せていることは嬉しいよ」

「むう……おにいちゃん、ミリンちゃんよりもシータとおはなしして

！」

「そうだね。それで、シータはいま体の調子はどう？」

「げんき！ おにいちゃん、おいしいもの、たべさせて？」

「なら、前に食べた飴はどうか？ 今はそれなら持っているよ」

他にも準備できるものはあるけれど、急に食べさせていいものか分からなかったから、飴で様子を見ようと思う。

美味しいものをいっぱい食べさせたいという思いはあるけれど、まずはシータの健康が第一だ。

「それでいいよ！ ちょうだい！」

シータに言われるがままに飴を渡すと、また楽しそうに飴をなめている。

シータのこの顔が見られることが、今は何よりも嬉しい。もつと元気になってくれたら、もつと楽しいことを教えてあげるからね、シータ。

「それが飴とやらか。わしが物を食えんことが悔やまれるな」

「ごめんね、ミリン。でも、ぼくにはどうすることもできないよ」

「いや、気にせずとも良い。仕方のないことだとは分かっておる。それよりも、ユーリよ。シータのことを大切にしてやってくれ。この子は、本当にこれまで苦しんできたのじゃ」

「もちろんだよ。もうシータはぼくの大切な妹なんだから、決して見捨てたりはしないよ」

「ならばいい。シータ、飴とやらはうまいのか？」

「おいしいよ！ おにいちゃん、もつとちょうだい？」

「今はもう持ってないかな。ごめんね」

シータは少しだけむくれている様子だったけど、すぐにぼくに抱きついてきて、頬を擦り寄せてきた。

シータは目覚めたし、新しい出会いはあったし、今日はいいい日だったな。

これから、もつとシータと仲良くなっていこう。そして、これ以上無いくらい幸せになってもらうんだ。

## 101話 名前

シータが目を覚ましたことで、プロジェクトU:Reの問題は完全に解決したような気がしていた。

だけど、シータがちゃんと健康でいられるかを確認しないといけない。そのあたりについてはよく分からないので、サーシャさんに相談した。

「サーシャさん、今回の事件で仲間になった妹のシータなんですけど、ずっと意識を失っていて、ようやく目を覚ましたんです。体の調子を確認する手段ってありますか？」

「それでしたら、わたくし自身がお役に立てますわ。わたくしの契約技はそのあたりにも応用が効きますもの」

サーシャさんが生命力を吸収する力を持っていることは知っていたけど、そんな形でも使えるのだな。

だったら、サーシャさんにシータのことをお願いするといいだろう。サーシャさんのことは信頼できるからね。

「では、シータのことをお願いできますか？ここに連れてきますね」「ええ、構いませんわ。ユーリ様のお役に立てて、嬉しいですわ」

そうしてサーシャさんのもとへとシータを連れてくる。

シータは素直についてきていて、ミリンのことを抱えながらぼくの腕をつかんでいる。

シータはぼくにずいぶんと懐いてくれているけど、他にも大切な人を増やしてほしいな。

そうすれば、きつともっとシータは幸せになってくれるだろう。願うならば、それがぼくの大切な人であればもつといい。

まずは、サーシャさんをシータに紹介してみるか。

ところで、シータのシータって名前、できれば別のものにしたいたい気持ちがあるけれど、本人が望むかがわからないからな。みんなが名前を覚え直す手間を考えると、できるだけ早いほうがいいと思うけど。

どうしようかな。まあ、まずはシータの体調を見てもらわないと

ね。

「サーシャさん、こちらがぼくの妹のシータです。シータ、この人はサーシャさん。ぼくが色々とお世話になっている人で、きみの具合を見てくれる人だよ」

「シータ様、よろしくお願ひしますわ。ユーリ様の妹ということですから、精一杯支えさせていただきますわ」

ぼくの妹じゃなければ支えないと言っているようにも聞こえるけど、流石にそんなことはないか。

サーシャさんにはこれまでいっぱいお世話になっているんだから、あまり疑うのもどうかと思う。

それよりも、シータの具合が本当にいいのかどうかのほうがよく大切だ。

シータはサーシャさんにちよつと怯えている様子だったけど、ぼくの腕をしっかりと握って挨拶を返す。

「シータ。サーシャさん、よろしくね」

なんというか、ぼくに話しかけているときとだいぶ印象が違うな。まあ、緊張しているのだろう。

シータの周りの大人はきつとろくでもない人ばかりだっただろうことは分かる。

だから、初めて会う人にうまく対応できないとしても、ある程度は仕方のないことだ。

いずれは、ぼくがいなくてもちゃんと話をできるようになってほしいところではあるけれどね。

「シータがすまん。わしもそうだが、良き人にこれまで出会ってこられなかったのじゃ。失礼をするかもしれないが、勘弁してほしい」

ミリンが急に話しかけたのを受けて、サーシャさんは大きく目を見開いていた。

それは当然なんだけど、ぼくの方からミリンを紹介しておけばよかったかもしれないな。

そうすれば、サーシャさんは今ほど驚かなかったと思う。まあ、今からでも説明しよう。

「今サーシャさんに話しかけたのは、シータの契約モンスターのミリオンです。シータが抱えている人形がそうですね」

「そうなのですわね。少々驚きましたが、シータ様の契約モンスターでしたら、親しくさせていだきたいですわ」

「よろしく頼むぞ、サーシャ。わしはシータが幸せであればそれで良いから、シータのことを主に気にしてやってほしいのじゃ」

「かしこまりましたわ。シータ様、それでは、シータ様の体の調子をはかりたいと思いますわ。こちらに手を出して下さいまし」

シータは不安そうにこちらを見ている。ぼくがうなずくと、ゆつくりとサーシャさんの方へと手を伸ばした。

サーシャさんはその手を取って、そこからなにか力を流し込んでいくようにみえる。

しばらくシータの手を握っていたサーシャさんだが、何度かうなずいた後、シータの手を離す。

「ユーリ様、シータ様の健康には問題がない様子。これでしたら、日常生活を普通に送っても問題はないでしょう」

「あまり食べていなかった人が、いきなり食べると危ないって聞いたんですけど、それも大丈夫ですか?」

「ええ、問題ありませんわ。オリヴィエ様に手を貸していただいたのが良かったのでしょう。身体的には至って健康ですわ」

そういうことならば安心だ。シータに美味しいものを色々食べさせてあげたかったからね。

それに、遊びを色々と教えることもしたい。シータの好みはどんなものだろうな。

そうだ。他に誰もいないことだし、今のうちにシータの名前について聞いてみるか。

「シータ、きみさえ良ければよくから名前を贈りたいんだけど、どうかな?」

「おにいちゃんが名前をくれるの? かわいいなまえにしてね!」

「シータという名前に込められた意味を考えれば、変えたくなるのも当然か。ユーリよ、良い名前にするのじゃぞ?」

「シイ。これでどうかな？　もつと長いのが良ければ、シーリアとかも考えたけど」

忌々しい名前とはいえ、全く原型を留めないこともシータの人生の否定のような気がして、要素を少し残した名前を提案してみた。

シータは気に入ってくれるだろうか。せつかくだから、シータが好きになってくれる名前がいい。

「シイでいいよ！　おにいちゃんのくれた名前、たいせつにするから！」

「シイか。呼びやすい名前ではあるな。シイよ、新しい名前になって、よろしく頼むのじゃ」

「うん！　ミリンちゃんはそのままでもいいよね？」

「そうだな。シイのつけてくれた大切な名前じゃ。これからも、わたしはミリンが良い」

シイとミリンの間には強い絆があるようにみえる。これまで会話もできなかったはずなのに、よくそんな関係を築くことができたな。

ぼくもシイを見習うべきところがあるのだろう。きっと、シイはこれまでミリンをとっても大切にしてきたはずだ。

そういえば、アクアはどういう経緯で名付けられたのだろう。今更呼び方を変える気はないけれど、少し気になる。

ぼくが名付けた名前であってくれればいいんだけどね。あの両親が名付けた名前だと思うと、ちよつと微妙な気分だ。

まあ、アクアはアクアだ。ぼくにとって大切なペット。それでいいだろう。

「それでは、これからはシイ様と呼ばせていただきますね。ミリン様も、どうかよろしくお願いいたしますわ」

「よろしくね。でも、おにいちゃんは渡さないから」  
「よろしく頼むぞ。シイのこと、しっかりと支えてもらうからな」

「ふふ。妹から兄を奪うほど、わたくしは性悪女ではありませんわ。ユーリ様ともども、大切にさせていただきますわ」

「むう……おにいちゃん、サーシャさんより、シイのことを大切にしてください！」

そんなことを言われると困ってしまう。思わずサーシャさんの方を見ると、ウインクをしてくれた。可愛らしくて癒やされるけれど、きつとシイの言葉を肯定していいという意味だろう。

サーシャさんに理解があつて助かるよ。シイのことは大切だけれど、流石に目の前で順位をつけさせようとするのは勘弁してほしい。「わかったよ。シイは家族だから、めいっばい大切にしていあげてね」「うん！ おにいちゃん、だいすき！」

シートは相変わらず器用にミリンを抱えたまま抱きついてくる。ミリンが苦しそうにしている様子はないし、よほど上手く抱えているのだろう。

よし、これでシイの抱える問題は一通り解決したかな。あとは、色々なことをシイに教えてあげたい。

「サーシャさん、今日はありがとうございました。それでは、失礼しますね」

「ええ、またお会いしましょうね、ユーリ様。ごきげんよう」

そのままぼくたちはステラさんの家へと帰っていく。家ではみんな揃っている様子だったが、シイのためにまずはステラさんとだけ話をすることにする。

シイはいっぱい人に囲まれたとは思わないだろうからね。みんな優しい人ではあるけれど、それがすぐに伝わるわけではないだろう。

ということ、ステラさん一人だけの空間にシイとミリンを連れて行く。

ステラさんはこちらに気がつく、いつもどおりの優しい顔で反応してくれた。

「ユーリ君、その子は元気になったようですね。紹介していただいてもいいですか」

「はい、妹のシイト、その契約モンスターはミリンです。ミリンは、シイが抱えている人形のことですね」

「シイさん、ミリンさん、よろしくお願いしますね。これから同じ家に住むのですから、仲良くしていきましようね」

ステラさんはシイと同じ高さを目線を合わせて挨拶する。

シイはそこまで怯えている様子ではなく、サーシャさんのときよりはだいぶ落ち着いている。

やっぱり、ステラさんの優しさはシイにも伝わるものなのだ。なんだか嬉しい。

「シイ、です。おにいちちゃんの妹です。ステラさん、よろしくお願いします」

「ミリンじゃ。シイともども、よろしくお願いするのじゃ」

一応あいさつは上手く行っているようにみえる。まあ、ゆつくり仲良くなっていければ十分だ。時間はたっぷりあるんだからね。

それよりも、ステラさんをお願いしたいことがある。受け入れてもらえるかな。

「ステラさん、できればシイに料理を作ってもらえませんか？  
美味しいものをほとんど知らないようなので、食べさせてあげたいんです」

「かまいませんよ。ユーリくんも食べていきますよね。それで、何を  
用意しますか？」

「魚料理を一品入れてほしいです。ぼくが好きなものだってシイに教えたことがあるので」

「分かりました。では、用意してきますね」

ステラさんが料理の準備に向かったので、ぼくはシイやミリンと話しながら待っていた。

しばらくして、ステラさんが料理を持ってやってくる。すでに美味しそうな匂いがしている。

「わあ、いいにおい！ ステラさん、たべていい!？」

シイは料理に興奮して、ステラさんにだいぶ気を許しているのかもしれない。さつきとは全然態度が違う。

ステラさんは優しくほほえみながら、食べることをうながした。

シイは夢中になって食べていた。口元がかなり汚れているようだったけど、まあ仕方ないか。

すぐに食べ終えたシイは、明らかにごきげんな様子だった。



「ステラさん、おいしかった！　ありがとうございます！」

「いえいえ。それで、どの料理が一番美味しかったですか？」

「このお皿のやつ！」

シイが指さしていたのは、ぼくが用意を頼んだ魚料理だ。つまり、シイとぼくは同じ好みということになる。家族のようなつながりを感じてとても嬉しい。

「それが、魚なんですよ。ユーリくんの好物です」

「おにいちゃんもこれが好きなの？　おそろいだね」

シイは嬉しそうな顔でそう言葉を発する。シイがそれを喜んでいることが分かって、ぼくも喜ばしい気持ちになっていた。

「そうだね。やっぱりシイとぼくはきょうだいなんだね」

「うん！　シイはおにいちゃんの妹！　だから、おにいちゃんとずっといるの！」

そのままシイは席を離れて勢いよく抱きついてくる。はしたないけれど、可愛らしくもある。

それから、ステラさんも交えて話をしながら過ごしていき、最後にぼくたちはアクアと同じ部屋へと戻っていく。

アクアはシイを受け入れてくれて、今日からはノーラも交えた5人で寝ることになった。

## 102話 優しさ

シイが目覚めて、ぼくと一緒に住むようになった。だいたいどこにでもついてくるけど、流星に冒険には連れて行こうとは思えない。いくら強い契約技を持つていると言っても、シイはただの子供なんだ。それに、ほんとうの意味で戦闘に慣れているわけではない。

シイを幸せにしたいぼくとしては、できれば冒険者としてオーバースカイに加入しようとはしてほしくなかった。

冒険者だと幸せになれないとまでは思わないけれど、幸せになるのは難しいからね。

シイがもつと大きくなって、それでも冒険者になりたいというのならそれで構わない。

だけど、他の道に進めるのならば、それに越したことはないはずだ。でも、どうやってシイに他の道を進ませるための知識や経験を身に着けさせればいいだろう。

ぼくはそういったことにまるで詳しくないので、どういう方針を立てればいいかすら分からなかった。

後で誰かにシイのことを相談できればいいんだけど、その候補となるのは、サーシャさんとステラさんかな。

いや、アリシアさんとレティさんもいいかもしれない。

ハイデイやリデイさんは立場が違いすぎて、きつと参考にならないと思う。

まあ、急ぎの話ではない。あまりのんびりしすぎても良くないけれど、慌てても仕方のないことだろう。

まずは、シイに自分の幸せの形を見つけてほしい。そこがはっきりしているならば、後はなるようになると思う。

ぼくの幸せはみんなと一緒にいることだ。シイの幸せは一体どんなものになるだろう。

シイの幸せが見つかったのならば、ぼくは全力で支えるつもりだ。

もし仮に、人を積極的に傷つけるような幸せだったなら止めるだろうけど。

でも、シイの様子からはそんな未来はまるで想像できない。だから、大丈夫だろう。

それよりも、今日はプロジェクトU：Reを壊滅させたお祝いのパーティがある。

シイも連れて行つていいとのことだから、みんなに紹介するついでに美味しいものを色々食べさせてあげたい。

今のところはシイにアクアとカタリナとステラさんしか会わせていないからね。

同じ家に住んでいるとはいえ、そこまでみんなが集まったりはしないのだ。

まあ、みんなはぼくがシイにつきつきりで居たいのを察してくれていたというのもあるのだろうけれど。

シイにパーティの説明をしたら、とても目をキラキラさせてくれた。

人見知りっぽいところのあるシイだけれど、やっぱり美味しいものがいっぱいなのは楽しみらしい。

できるだけ、ゆつくりとみんなに紹介していききたいな。いつペンにだと、きつとシイは疲れ切ってしまうからね。

みんなには先にパーティに向かってもらつて、ぼくはシイといっしょに会場であるハイデイの屋敷へと向かう。

ミリンもなんだか楽しそうな雰囲気に見えるので、誘ったのは正解だったかな。

「おにいちゃん、美味しいものつてどんな物があるの?」

「まだわからないかな。でも、いろいろな種類があるらしいよ。選んで食べていいみたいだね」

「だったら、おにいちゃんがえらんでくれる? シイはあんまりわからない」

「かまわないけれど、見た目や匂いで気になったものがあつたら言つてね。取り分けてあげるから」

「うん! どんなものがあるのかなあ。たのしみだね、ミリンちゃん」  
「わしは何も食べられんのじゃが……まあよい。目一杯楽しむといい

ぞ、シイ」

ぼくがシイの食べ物を選ぶとなると、どういう基準がいいかな。たぶん、苦いものと酸っぱいものと辛すぎるものは避けたほうがいいよね。

シイがどんな物を美味しいと感じるかはまだよく分からないけれど、そこは当たっているだろう。

肉とか魚とか野菜とか果物とか、いろいろな種類を食べさせてあげよう。

どうしてもシイが嫌いなら、ぼくが代わりに食べてあげればいいよね。

ぼくは冒険者として美味しくない保存食にも慣れているから、どうということはない。

甘やかしすぎると良くないのかもしれないけれど、どうしてもシイのことを可愛がりたくなってしまう。

会場へとたどり着くと、すでに玄関から飾り付けられている様子で、思わずのけぞりそうになる。

でも、シイは飾りの豪華さに興奮しているようなので、微笑ましくなってしまう。

今回のパーティの前にシイが目覚めてよかったな。きつとシイにとって楽しい思い出になってくれるはずだ。

中に入っていくと、広間へと案内された。そこも豪華な飾り付けと、豪華な料理がたくさんある。

今回のパーティでは自分の好きな料理を好きに取っていく形だと事前に聞かされていた。

本当にたくさん種類の料理があって、全部の料理を食べるのは不可能だろうな。

さて、どれを選んであげるといいのかな。まずは挨拶なりがあるだろうけれど、もう料理が出されているのだし、すぐに食べられるよね。

シイは目を輝かせて料理の方を見ているので、あまり待たせたくはない。

ほんと、シイは感情豊かかって感じた。見ていて楽しくなってくるよ

ね。

今回のパーティーもぼくに配慮してくれたのか、親しい人くらいしか参加していない。

王族も関わるようなパーティーでそういう事ができるつてのは驚きだけど、そっちのほうがいいよね。

ぼくたちがたどり着いてすぐに、ハイデイからの言葉があった。

ハイデイはきれいなドレスを着ていて、いつもの威圧感が和らいでいる。本当のお姫様みたいだ。

ちよつと見とれてみると、シイに強く手を握られてしまう。シイの方を見ると、こちらを不満げに見ていた。

シイはもう嫉妬心を覚えているのかな。可愛らしくはあるけれど、毎回こうだと困ってしまう。

シイはとても大切な相手だとはいえ、他の大切な人とも接していきたいのだからね。

まあ、初めてできた親しい人だと思うと、取られそうになっちゃうと怒るのは分かるかな。

だけど、みんなとシイには仲良くやつてもらいたい。どっちも大切だから、片方を切り捨てたくはないんだ。

「此度はよくぞアードラの驚異を打ち払った。オーバースカイよ、見事だったな。余が用意した席、存分に楽しんでいくがいい」

相変わらずの偉そうな物言いだ。でも、このパーティーを用意してくれたのはハイデイだと思うと、なんだか愛らしきすら感じる。

シイにはハイデイだけは紹介したい。シイの治療をしてくれた人なんだからね。

まあ、すぐに紹介することは難しいかもね。まずはシイが満足するまでご飯を食べさせよう。

「さあ、思い思いにこのパーティーを楽しむが良い。無礼講でいいぞ。貴様らならば許してやろう」

ハイデイの無礼講はあまり信用できないけれど、多少なら許してくれると思う。

シイがあまり失礼を働かないように気をつけておかないとね。

シイが大切だからこそ、そこを間違えさせてはいけない。

シイの命にすら関わってくるのだらうから、絶対にしつかりさせないと。

そのまま、ハイデイは下がって行ってみんなはそれぞれに動き始めた。

ぼくはシイと手をつないで料理のもとへと向かう。

シイは色々と目線を動かしているので、気になるものがたくさんあるのだらう。

「シイ、どれを食べてみたいかな？」

「まずはおさかな！ おにいちゃん、さがしてくれる？」

シイは前にステラさんの魚料理を気に入っていたみたいだから、似たような味のものがいいるだろうか。

たしか煮物だったはずだけど、それでいいのかな？ まあ、いくつか取り分けてみればいいか。

料理の中から魚料理をいくつか見つけ、皿に盛り付けていく。

それをシイに手渡すと、勢いよく食べ始めた。頬を膨らませながら食べている。可愛いけれど、注意したほうがいいだろうか。

「やっぱりおさかなおいしい！ でも、つぎは別のものを食べてみたいなあ？」

シイにおねだりされてしまったので、肉や野菜を持つてくることにする。

最後に甘いものを食べさせてあげたいので、お腹の具合が大丈夫か気にしておかないとね。

また用意したお皿を渡すと、今度も勢いよく食べ始める。口の周りをベタベタにしているの、拭いてあげないとね。

「おいしいよ、おにいちゃん！ あ、このあかいの食べてみたい！」  
シイの口を拭いてあげてから、シイの指示したものを皿に取り分け

る。

結構辛そうに思えるけど、シイは大丈夫だろうか？ まあ、辛くてもぼくが代わりに食べてあげればいいか。

シイが辛いものが苦手だとしても、泣き出すほどのものには見えな

い。食べさせても問題ないか。

ぼくが渡した料理を口に入れると、すぐにシイは顔をしかめる。やっぱり辛かったか。

それでもしつかりと飲み込んでいたので、ぼくはシイを抱きしめてあげたいような気分になった。

「おにいちゃん、これ、したがピリピリする。ぜんぶたべないとダメ？」

「ぼくが代わりに食べてあげるから、無理しなくていいよ。後で甘いものを持ってきてあげるね」

「ありがとう、おにいちゃん！ おにいちゃんはやさしいね！」

優しいというか、甘いような気もするけど、どうしてもシイのつらそうな顔は見たくない。

だから、やりすぎなくらい甘やかしちゃうのかな。どの程度の厳しさを持てばいいのだろうか。

もしシイが冒険者になるつもりなら、絶対に厳しく指導するけど。シイの命にかかわるのだから当然だ。

シイに嫌われることよりも、絶対にシイが死ぬことのほうが嫌なのだから。

そのままシイに甘いものを持ってくると、顔をほころばせながら食べている。また口周りを汚しているけど、これはきれいに食べるのが難しそうだからな。

今回は身内のような人ばかりだからいいけど、ある程度は教えておいたほうがいいのだろうか。

まあ、そんな外部の人がいるパーティにシイが出ることはないか。

結論としては、ステラさんにも頼りながらおいおい教えていくのがいいかもね。

「これあまくておいしい。もつとちようだい！」

シイにもう少し取り分けても数は十分ありそうだったので、シイの欲しがったものを皿に盛り付ける。

シイは今度は食べる前から笑顔だった。美味しいって知りながら食べるのは飴以来だろうけど、飴の時はこんな反応じゃなかった。

つまり、よほど美味しいのだろう。この料理をぼくの家でも用意できるといいのだけど、無理だね。

「ふう、おなかいっぱい。おにいちゃんもおなかいっぱい？」

ぼくもシイが食べ進めている横で食事を取っていたので、もう満足している。

「そうだね。じゃあ、少し休んで他の人達に挨拶に行こうか？」

「はぁーい。やさしいひとだね！」

「ユーリがシイに紹介しても良いと思っっているのじゃから、大丈夫じゃろ。ユーリがどれほどシイを大切にしているかはよく分かっておるぞ」

「そうだね、ミリンちゃん。じゃあ、つれていってくれる？」

さて、これからシイをみんなに紹介することになる。みんながシイを受け入れてくれますように。



## 103話 紹介

シイはお腹いっぱいになるまで食べて満足している。

そこで、いったん食べ物から離れてシイにみんなを紹介することにした。

シイは乗り気に見えるので、今のところは大丈夫かな。

引つ込み思案に見えるシイだけど、知らない人に会いに行っても大丈夫みたいだ。

サーシャさんとステラさんの時には緊張していたみたいだけど、もう慣れたのかな？

ぼくの大好きなみんなと大好きなシイにはできるだけ仲良くして欲しい。

とはいえ、もちろん強制はできないんだけどね。そんなことをしてもまったく意味はないし。

だけど、仲が悪くはならないことを祈りたい。そうなってしまえば、ぼくはひたすらにづらい思いをするだろう。

人間である以上合わない相手はいるんだろうけど、身近な人達がそうしていると、きつと苦しい。

まあ、今から不安に思っけていても仕方のないことか。上手くやっていけるようにどうサポートするかを考えていたほうがいいよね。

「まずはオリヴィエ様を紹介する予定だよ。さつきみんなの前で挨拶していた人だね」

「あのえらそうなひと！ シイちよつとこわいよ」

「あれで優しい人なんだよ。でも、失礼なこととはしないだね」

「うん。おにいちゃんのこととはまもるから！」

元気にそう宣言するシイ。まだ出会ってそうなっていない割に、ぼくはシイにもものすごく信頼されていると感じる。

その信頼を裏切ることの無いようにしないとね。シイには信じられる人がいることの喜びを存分に味わってほしい。

ぼくがその喜びを知ることができたのはアクアのおかげだけど、きつとシイにとってその役割を担うのはぼくになる。

責任重大だよ。でも、その責任が心地よくすら感じる。だから、全力で頑張れるんだ。

ハイデイのところへとたどり着くと、リデイさんとイーリスもいっしょにいた。

シイにはいきなり3人に挨拶してもらおうことになるけど、大丈夫かな？

まあ、できる限りフォローしていくしか無いか。でも、いきなりハイデイは失敗だったかもしれない。

だけど、相手の視界に入ってしまったことがはっきりと分かる。もう引き返すことはできないぞ。

手を上げたハイデイに、こっちも手を振って返す。ハイデイが僅かに微笑んでくれた。

「オリヴィエ様、リデイさん、イーリス。今日はこんないい場所を用意してくれてありがとう。それで、この子はシイ。ぼくの妹で、オリヴィエ様に治療してもらった子だよ。そして、シイの抱えている人形がミリン。シイの契約モンスターなんだ」

「シイ！ よろしくおねがいます！」

「わしはミリンじゃ。シイを治療してもらったこと、感謝するのじゃ」「シイのことはユーリに頼まれたからな。そうでなければ、わざわざ余が治療などせん」

「オリヴィエ様、こんな子供にそのような態度は……小生はリデイと申します。シイさん、よろしくお願ひしますね」

「俺はイーリス。ユーリの妹つてのはよく分かるぜ。そっくりな見た目だからな」

うん、最初の方は上手く行っているみたいだ。ハイデイも口調の割に声が優しいし、きつとシイを受け入れてくれている。

リデイさんはシイに目線を合わせて落ち着いた声で話しているし、子供の扱いに慣れているのかもしれない。

イーリスはいつもどおりだ。だけど、ぼくとシイが似てるって言われるのは嬉しいな。

シイは思っていたより怯えていないし、人と接することに慣れてき

たのかもしれない。

この調子なら、他の人に紹介してもうまくいくかもしれないね。

「オリヴィエさま、シイのことを治してくれてありがとう！」

「せっかく余が手ずから治療してやったのだから、ユーリの役に立て。余の物の状態を保つことが余に尽くすことだと知れ」

「おにいちゃんのやくにたつのは当たり前！ シイ、おにいちゃんがだいすきだから！」

本当にシイは可愛らしいけど、あまりぼくの役に立つことにとらわれてほしくはない。

シイがしっかりと自分の幸せをつかんでくれることが、ぼくにとっても幸せなのだから。

もちろん、シイがぼくの役に立つことが幸せだというのならそれでいいんだけどね。

でも、きつとシイの幸せはそれ以外にあると思う。だから、シイをぼくに縛り付けたくはない。

まあ、ゆつくりと分かかっていってもらえばいいだろう。いきなりそういう事を言っても、シイには拒絶と捉えられるかもしれない。

「ありがとう、シイ。ぼくもシイが大好きだよ。シイが幸せになれるように頑張るからね」

「シイ、もうしあわせだよ？ おにいちゃんがいつしよなら、それでいいの」

「くくっ、ずいぶんと懐かれているようではないか、ユーリ？ シイも余を楽しませてくれそうだな」

「ユーリ殿は優しい方ですからね。それがシイさんにも通じたのでしよう」

「どうだかな。だが、ユーリは俺より強えんだから、頼りにはなるだろうぜ」

「ドラゴニユートより強いとは、ユーリは本当に強いのかな。だが、それでこそシイの兄じゃ」

シイがぼくのことをとても大好きでいてくれるというのは本当に嬉しい。

だけど、ぼくだけがればいいなんて考えだと困るんだ。なにせ、ぼくはいつ死んでもおかしくない冒険者なんだから。

できるだけ死なないように全力を尽くすつもりではある。だけど、それで必ず死を避けられるわけじゃない。

ぼくがいなくなるだけでシイが希望を失うようなことにはなつてほしくない。

だからこそ、ぼく以外の人とも関係を作つていてほしいのだ。ぼくの知り合いたちにシイを紹介するのはその第一歩なんだ。

シイの幸せを本当に願うのなら、シイが1人でも生きていけるか、あるいはどれだけでも繋がりを作れるか。

そんな人間になつてほしいと思うのが人情というものではないだろうか。

「みんな、シイのことをよろしくお願いします。可愛い妹だから、どれだけでも幸せになつてほしいんです」

「くくつ、貴様に子供ができた時には面白い光景が見られるかもな。シイのことは頼まれてやる」

「ええ、もちろん。シイさんはしつかりした方の方のようですからね。仲を深めることに異論はありませんよ、ユーリ殿」

「ああ、任せておけ。オリヴィエ様が受け入れた以上、俺たちもシイのことを大切にするのは決まつているからな」

「ありがとう、みんな。じゃあ、そろそろ他の人にもシイを紹介しに行きますね」

「ばいばいー!」

ハイデイたちは手を振りながら送り出してくれた。まずは一息つけるかな。一番の難関を最初に攻略してしまったな。

だけど、だからこそこれからはもう少し楽だ。みんな優しい人だから、きつとシイのこゝろを受け入れてくれる。

ハイデイが優しくなかったら、そんなことはないと言えるけど、でも恐ろしいところもある人だから。

他の人達に恐ろしいところが無いわけではないだろうけど、シイの可愛さならきつと大丈夫。

さて、つぎはアリシアさんたちに紹介しておこう。

ここを乗り切ることができれば、後はスムーズに進むと思う。シイが人に慣れてくれるだろうからね。

シイの手を引きながらアリシアさんたちを探すと、すぐに見つかった。

アリシアさんたちはこちらを見かけると微笑んでくれる。やつぱりかっこいいなあ。

さすがはぼくの尊敬する師匠たちだ。どんな顔も様になっている。

「アリシアさん、レテイさん、紹介するのが遅れてしまいましたけど、この子がぼくの妹のシイ。あの研究所で育てられていたみたいです」「シイです。よろしくおねがいますー!」

「ミリンじゃ。ユーリからは紹介されんかったが、わしはシイの契約モンスターなのじゃ」

「アリシアだよ。よろしくね、シイちゃん、ミリンさん。それにしても、人型でない契約モンスターもいるものなんだね」

「知性を持つていればいいらしいです。ぼくの家資料にありました。ミリンは、その実験で生み出されたのでしよう」

「ひどいことをする人もいるものだね。それで、この子がユーリ君の妹なんだ。お姉さん、ユーリ君ともども可愛がっちゃうぞ」

そう言いながらレテイさんはシイに抱きついていく。シイは少しくすぐったそうではあるけれど、楽しそうな顔だ。

これは上手く打ち解けてくれそうだ。さすがだな、2人共。

「すっごーい! ふかふかだ。もつとさわっていい?」

シイはレテイさんに抱きつかれながらレテイさんの体を色々と触っている。

たしかに、レテイさんの鳥のような羽根が生えている部分は暖かくて触って心地よさそうだ。

ちよつと興味があるけれど、流石にぼくがそんな事を言いだしたら問題だね。ちよつとシイが羨ましいかもしれない。

前にレテイさんと出かけた時に、ちよつと感触は確かめられたんだけどね。でも、もう少し気になるというか。

やめやめ。今ぼくはろくでもない考えをしているぞ。素直にシイと2人の関係が上手く行きそうなことを喜んでおこう。

「別に触ってもいいけど、引っ張ったりしたらダメだよ。お姉さんと約束だよ?」

「うん!・ いたそうだから、ひっぱったりしない! やくそく!」

シイはとても楽しそうにレティさんの鳥のような部分を触っている。

それにしても、痛そうだから引っ張らない、ね。シイはすでに他者への配慮を覚えているということになる。

ぼくはシイの成長に飛び上がりそうなほど喜んでいたけど、もしかしたら初めからできていたのかな?

なんにせよ、シイがとてもいい子だということがよく分かる話だ。

ほんと、この子がぼくの妹で良かった。かわいくていい子でよく懐いてくれるとか、いいところしか無いよね。

そんなシイの様子を、アリシアさんもレティさんも微笑ましげに眺めてくれている。

このぶんなら、アリシアさんとレティさんも大丈夫そうだ。

やっぱりシイがいい子だから、みんな気に入ってくれるんだよね。ぼくはシイの兄でいられることを誇らしく感じた。

「アリシアさん、レティさん、そろそろこのあたりで失礼しますね。他のみんなにも紹介したいので」

「うん。折角の機会だし、全員に紹介しておくといいよ。シイちゃんはいいい子だから、みんな良くしてくれると思うよ」

「シイちゃん、ユーリ君、ミリンちゃん、またね。お姉さんにまた会いに来てもいいんだよ」

こうしてアリシアさんたちにもシイの紹介を済ませることができた。

それから、他のみんなにシイを紹介していったけど、みんなシイのことを気に入ってくれた。

シイもみんなによく懐いている様子だったから、これで一安心かな。

そしてパーティーはつつがなく進行し、楽しい一日が終わった。  
つらいこともいっぱいあったプロジェクトU：Reの事件だけど、  
シイと出会えたことは間違いなくいいことだった。

## 裏 シイ

θが目覚めないことにより、ユーリは深く傷ついていた。だから、アクアはθを目覚めさせるために力を尽くすことに決めた。

自分がθのことを乗っ取って動かすことも検討はしていた。しかし、せつかくカタリナを解放できたのに、これ以上人を支配したくないという思いがあった。

だからこそ、手間を惜しまずθの治療に全力を尽くしていた。オリヴィエの力と、アクアの力をともに活用することで、θの体は健康になったはずだった。

それでも、θは目覚めない。その原因はおそらく、プランターの装置によってθの感情が封じ込められたから。

だから、アクアはθの感情を刺激するために、自身の最も強い感情をぶつけることに決めた。

すなわち、ユーリのことを大好きであるという感情だ。

θがユーリを嫌っているのならば、感情が反発する都合上θに強い負担がかかり、おそらくθの精神は壊れてしまう。

だが、θは初めて優しくしてくれた存在であるユーリに強い好意を抱いていた。

だから、アクアは全力でユーリへの好意をθに叩きつけることができた。

ユーリ、好き。大好き。

永遠に一緒に居たいくらいに好き。

食べて一つになっちゃってしまいたいくらいに好き。

ずっといつでも優しくしてくれるところが好き。

強敵に挑む時のかっこいい姿が好き。

自分がオメガスライムだと知っても受け入れてくれるところが好き。

ふれあっているだけで幸せがあふれてくるくらいに好き。

自分に感情をくれたことが大好き。



一緒にいる時の穏やかな顔が好き。

触れた時にわずかに感じる暖かさが好き。

どんなときでも何をしても信じてくれるところが好き。

そもそも生まれてきてくれたところが好き。

自分を何よりも大切にしてくれてくれるところが好き。

取り込んでいる時に咀嚼する際の感覚が好き。

大好きだと言葉で伝えてくれるところが好き。

優しく見つめてくれる目が好き。

色々な遊びをいっしょにしてくれるところが好き。

アクア水を様々な工夫をして使ってくれているところが好き。

アクアジュースを美味しいと感じてくれているところが好き。

おねだりしたことを何でも叶えてくれるところが好き。

自分の寂しさや苦しさを感じ取ってくれているところが好き。

アクアだけは絶対に裏切らないと信じてくれているところが好き。

自分の嬉しさを本人以上に喜んでくれるところが好き。

守ってくれるために全力で努力してくれているところが好き。

何よりも、ユーリという存在そのものが大好き。

このような感情をぶつけられ続けた $\theta$ は、無意識のうちにアクアに強く影響を受けていくことになる。

だが、それはアクア自身も想定していない出来事だった。

だから、 $\theta$ は普通に目覚めるだろうと信じながら作業を続けていく。

そのまま $\theta$ の感情は強く動いていくようになり、ついに $\theta$ が目覚める瞬間が訪れる。

シータは目覚める前からユーリのことを夢で見っていた。

そして、目覚めてすぐにユーリのことを認識する。大好きなユーリがそばにいないことを全身で感じて、シータは強い喜びに襲われた。

だからこそ、そのユーリが離れようとする感覚がつかなくて、苦しくて、もっともつとユーリにはそばにいてほしかった。

ユーリが自分を捨てることなど絶対に許さない。大好きにさせた責任を取ってもらう。

そのような思考のもと、ユーリにずっとそばにいてもらうことをシータは決意していた。

(シータはおにいちゃんのことをごだいすきなんだから、おにいちゃんもシータのことは好きでいてくれるよね？ そうじゃなかったら、シータはどうすればいいの？)

シータにとってユーリは自分が初めて好きになった人だということ、アクアの感情に強く影響を受けていること、それらによって、ユーリに依存のような感情を抱いていた。

ユーリだけが自分を助けてくれた。ユーリだけが大好きだと言ってくれた。

存在しないはずの記憶も混ざりながら、ユーリを大好きに思う感情を何度も繰り返し思い返すことで更に増幅させていった。

ユーリと共に眠ることができるようになった時、シータは大きな安心を抱いていた。

ユーリとだけは何があっても離れたくない。たとえ夢の中でだって。

シータはユーリがともにいるのならば、どんな地獄にだって着いていくつもりでいた。

ユーリを守るための力は持っている。ミリンとの契約技はきつと役に立ってくれる。そう信じていた。

そのミリンが話しかけてきた時、シータはとても驚いていた。これまでには何度話しかけても反応すら返ってこなかった。

それなのに、なぜ？ 大きな疑問も思い浮かんでいたが、ミリンが話しかけてくること自体は嬉しいと感じていた。

ユーリの興味を自分より引きかねないというところだけは警戒していたが、問題はなさそうなので、安心してシータはミリンと仲良くすることができた。

(ミリンちゃん、アクアちゃんのおかげで話せるようになったんだ。ミリンちゃんにはおにいちゃんをとろうという感じはしない。だから、だいじょうぶだよね？)

シータはユーリに強い執着心を抱いており、ユーリを奪おうとする

ならば、大切なミリンでも敵に回すつもりでいた。

幸い、そのような意図はミリンにはなく、誤解が発生する余地もなかったために、ミリンとシータの関係が決裂することはなかった。

それから、シータはユーリに飴を食べさせてもらう。

これからシータが食べるものにはその飴よりも美味なものが多かったが、それでも、シータにとって大切な思い出の味になる飴だった。

(おにいちゃん、これがおいしいっていったこと、おぼえてくれたんだ。やつぱり、おにいちゃんはやさしいな)

その飴をもっと食べたいと感じてねだるシータだったが、それ以上ユーリは飴を持っていないようだった。

少し悲しみを覚えるも、大好きなユーリのそばを楽しむことができ、喜びにシータは浸っていた。

それから、サーシャのもとへと向かうユーリと離れ離れになる時間を、シータは耐え難いと感じる苦痛の中で過ごしていた。

(おにいちゃん……おにいちゃんがいないときびしいよ……はやく、はやくかえってきて……)

ミリンと会話することである程度苦痛をごまかしていたが、それでもずっと悲しくて、心が冷たくて、シータにとってこれまでに感じたどんな苦痛よりもつらい時間となっていた。

(おにいちゃんはシータをすてちゃうの？ そんなわけない！ ずっといっしょだってやくそくした！)

シータにとってユーリとの距離感は近ければ近いほどよいものであり、離れることなど想定していなかった。

それゆえ、強い不安がシータに襲いかかる。アクアならば問題なく耐えられる時間でも、幼く経験の少ないシータにとっては無限のように感じられていた。

シータはアクアの影響によってユーリを自分の一部か、あるいはそれ以上の存在と認識してしまっていた。

身を引き裂かれるような苦痛のなか、必死にユーリのことを考えながら過ごしていた。

ユーリが戻ってくるまで1時間も経っていないにも関わらず、シータは数日を過ごしたような心地でいた。

それでも、ユーリに嫌われたくない一心でその感情をぶつけることはできないでいた。

そして、サーシャによって体の調子を診断される。

サーシャはユーリにとって大切な人のようなので、嫉妬心と僅かな敵意をシータは抱いてしまった。

それでも、できる限り抑え込む。ユーリはきつと人に悪意を向ける人が嫌いだからだ。

それが功を奏したのか、ユーリには違和感を抱かれていないようだった。

そのうえ、ユーリは新たな名前までくれるのだという。自分の名前という意味をある程度察していたシータにとって、シータという名は大事なものではなかった。

だからこそ、ユーリに与えられたシイという名はすぐに自分のものとして受け入れられた。

(これから、シイのなまえはシイ。おにいちゃんがつけてくれた、たいせつなまえ)

シイという名をつけられたことによって、よりユーリのことを強く意識するシイ。

その感情が独占欲のようなものをさらに深めていくが、ユーリはシイだけのものにはなってくれない。

そのうえ、更にステラという人物まで紹介されることになる。

シイは不満でいっぱいだったが、我慢してステラに挨拶をする。だが、ユーリがステラに頼んで作られた料理はシイを虜にした。

ユーリが頼んで作られた魚料理が特に好みで、ユーリとの共通点を感じることがシイにとっては大きな喜びだった。

(やっぱり、シイとおにいちゃんはきょうだいなんだ。だから、ずっといっしょにいてもいいんだ)

シイはそれからユーリにずっとひっついて過ごしていた。

ユーリとふれあっていると楽しくて、暖かくて、ずっと感じていた

い気持ちで溢れていた。

そんななか、プロジェクトU：Reの事件を終えたことを祝うパーティがやってくる。

美味しいものをたくさん食べて、ユーリにいろいろな世話をしてもらう。

ユーリに甘やかしてもらっているという実感を得られて、シイはとても満足していた。

（おにいちゃん、シイのことをいっぱいかわいがってくれてる。やっぱり、おにいちゃんはシイがだいすきなんだ）

そんな満足感もつかの間、シイは新たにユーリの知り合いたちを紹介されていく。

どの人もユーリにとって大切な存在のように見えて、シイは嫉妬心を必死に抑えていた。

（おにいちゃんはシイのことをいちばん好きとはかぎらない。もし、シイより好きなひととケンカしちゃったら、シイはきらわれちゃう？

おにいちゃん、シイをいちばんすきになって）

シイの願いはただひとつ、ユーリとずっと一緒にいること。

その願いが遠く思える瞬間は何度もあって、そのたびにシイは苦しさを感じていた。

（しいがもつとつよくなれば、おにいちゃんにたよってもらえる？

もつとかしこくなればいいの？ どうすれば、おにいちゃんはもつとすきになってくれる？）

シイはまだユーリのことを理解できていなかった。だから、ユーリをもつと知りたかった。

そのためには、ユーリの周りの人と仲良くするのも大切かもしれない。そうして、ユーリにもつともつと詳しくなるんだ。

ユーリを大好きだというシイの気持ちは、これからもどんどん大きくなることになっていった。

## 104話 痛苦

今日ぼくはアクアと少し遠出をしていた。アクアがぼくを守ってくれるから、人のいないところで2人になりたいという話だった。

モンスターが現れるかもしれないけれど、アクアが守ってくれるのなら安心だよな。

もちろん、アクアに頼り切りになりたくはないという思いはある。でも、アクアが喜ぶことのほうが大事なことだ。だから、アクアのお願いを聞くことにした。

結局、アクアは本当にオメガスライムなのだろうか。どちらでもアクアが大切な存在であることに変わりはないけれど、ちよつと気になる。

まあ、アクアが言いたくなるのを待ってればいいか。アクアが望む限り、ぼくはずつとアクアと一緒にいる。

だから、そのあたりは問題ではない。まあ、アクアを守っているつもりでなんの意味もないとなると、少しは傷つくけれど。

それでも、それでアクアが幸せでいるのならいいと思う。アクアの望む役割を演じる覚悟はある。

たとえ本当はぼくの助けがいらないのだとしても、アクアが助けを求めるのならば絶対に助ける。それでいい。

アクアがぼくにどれだけの幸せをくれたことか。そんなことで返せるのなら安いくらいだ。

「アクア、街から外れたところで何がしたいのかな？ なにかの遊び？」

「そんなところ。ユーリとふたりきりになってみたかった」

「家の中じゃダメだったの？ 部屋では何度かふたりきりだと思っけど」

「他の人の気配がある。ユーリだけを感じていたい」

「アクアの主張は望むところではあるのだけれど、他の人の気配なんてよく感じていたな。」

ぼくはアクアのことしか意識できていなかったけれど。むしろ今

のほうで周囲を警戒してしまいうくらいだ。

やっぱり本当にオメガスライムなのかな。だから、敵なんて気にしなくてもいい。

まあ、誇大妄想のたぐいかな。アクアは攻撃を気にしないというのは事実のような気がするけれど。

どんな攻撃を食らっても平然としているアクアに頼もしさを感じていたことは何度もある。

だからこそ、ぼくたちを守ってもらおう役割を担ってもらえた。

今回も、アクアはぼくを守ってくれるのだろう。これまでがそうだったように。

でも、ぼくはアクアの力になってあげたい。もちろん、アクアが窮地に陥ってほしいわけでは無いけどね。

ただの自己満足かもしれないけれど、ぼくはアクアを助けられる存在で居たい。

まあ、力でアクアを助けることが全てじゃないか。アクアが幸せになる支えになればいいのだから。

ぼくがそばにいればアクアは幸せを感じてくれているとは思っただけど、それに甘えちゃダメだね。

もっともっと、いくらでもアクアには幸せになって欲しいのだから。

アクアが望んで言葉にすること、アクアが気づいていない望み。なんでも叶えてあげたい。

そのために、ぼくはアクアをしつかりと理解してあげないといけない。

アクアの最も大切な望みはぼくと一緒にいることだって信じている。ぼくもそれは同じだ。

だけど、気づいていないだけで、もっと喜べることがあるかもしれない。それをぼくの手で叶えることができたのなら、ぼくはどれほど幸せになれるだろうか。

いやいや、アクアの幸せのほうで大事だよ。でも、少しくらいぼくだって喜んでもいいよね？

アクアが嬉しいことはぼくも嬉しい。その気持ちは悪いものではないはずなんだから。

「なら、ぼくのことを存分に楽しんでね。アクアは何がしたいの？」  
「まずは手をつなぐ。それから、キスしたり、ユーリを取り込んだり」

またキスをすることになるのか。かまわないけれど、またひどくドキドキするのだろうか。

アクアはキスがどういうものか本当に理解しているのだろうか。どちらでも、アクアが望むのならばキスはするけれど。

だけど、アクアがキスの意味を理解していて望んでいるのなら、ぼくの考えがだいぶ変わってしまう。

アクアと恋人のような関係になってしまふのだろうか。人とモンスターの間に子供はできないけれど、アクアと恋人になったなら幸せだろうな。

でも、今の関係から変わってしまうことが恐ろしくもある。これまでできたことが出来なくなってしまうかもしれないし。

具体的に何かが思いついているわけではないんだけどね。ただ、なんとなく怖いだけで。

まずはアクアと手をつなぐ。アクアのひんやりぶるぶるした感触にもだいぶ慣れた。

アクアはぼくの手を握る力を強めたり弱めたり、握り方を色々変えてみたり。

普通に手を繋いでいる状態から、指どうしを絡め合うつなぎ方したり、手の高さを変えてみたり。

手をつなぐという行為だけでも、ずいぶんと幅があるものだ。それぞれに違う味わいがあるかもね。

アクアは時折こちらの方を向いて笑顔をみせてくる。無邪気な感じで可愛らしい顔だ。

それで、繋いでいる手を動かしてアピールしてくるのだ。これだけでも、アクアの虜になってしまいそうだ。

本当にアクアは可愛い。ぼくに甘えてきて、いっぱい楽しそうな顔



をして、ぼくの気を引こうとして。

「こうして手をつなぐのも、ずいぶん楽しいね。これまで何度も繋いできたけど、飽きる気がしないよ」

「アクアも楽しい。ユーリの感触をいっぱい味わう。ユーリの手の柔らかい所、かたい所。ぜんぶ知ってる」

アクアの手の感触はどこも似たような感じだ。形によって違いは若干あるけれど。

「ほくもアクアの手の感触に詳しくなったほうがいいのか？ でも、それって変態じみているような気がする。」

「いや、アクアに詳しいのはアクアの家族として当然のことではないのか？」

「どうだろう、流石に詳しいのは性格だけでいいんじゃないか？」

「それよりも、いちばん大事なのはアクアがそれを喜ぶかどうかだ。なんか喜びそうだな。」

「ふふ、詳しいんだね。ほくもアクアの手に詳しくなっちゃおうか」「好きにすればいい。でも、アクアの体は好きに調整できる」

「ああ、それがあつたか。なら、アクアはぼくの好みに合わせて体の感触を調整できることになる。」

「もうすでにそういう調整がされていたりしてね。アクアとふれあっているのは心地いいし。」

「でも、そうなるもぼくがアクアの感触を意識していないのは不義理なのでは？」

「まあ、アクアは本当は詳しくなって欲しいけど我慢しているという様子ではない。」

「だから、たぶんあまり気にしなくていいな。それにしても、手をつなぐと言うだけでも深さはあるものなのだな。」

「アクアだから特別という側面はあるのだろうけれど、他の人が相手でもそういう深さはある程度はあるのだろう。」

「とはいえ、アクア以外にそんなことをすれば不興を買いそうだ。アクアだけ特別、それでいいか。」

「そうなんだ。じゃあ今より固くしたり柔らかくしたりもできるの」

？」

「できる。確かめてみる？」

「だったら、お願い。ちよつと気になるんだよね」

「わかった。ユーリ、楽しんで」

そのままアクアはぼくと手をつなぎながら、手の感触を変えていく。

沈み込んでしまいそうなくらい柔らかくなったり、すごい反発を感じるようになったり、ぷにぷにな感触になってみたり。

それぞれ感触を変えながら、アクアは手の握り方も色々と変えてきた。

それによって、包み込まれているような気分を味わったり、しっかりと手を繋いでいるような感覚になったり、手ではない別の何かを握っているように感じたり。

アクアのひんやりした冷たさだけは変わらないままだったけれど、まるで変幻自在で、強い感動が沸き起こってきた。

「すごいね、アクア。これなら、いつまでも楽しめるかもしれないよ」

「そう、なら、ずっとこのままにいるっ！」

「それもいいかもしれないね。でも、キスとか取り込むとかはいいの？」

「それは大事。でも、ユーリとふれあっていることのほうが大切」

アクアの言葉はとっても嬉しいものだ。

ぼくにとってアクアとのふれあいが大きな喜びであるように、アクアにとってもぼくとのふれあいは素晴らしいものなんだ。

やっぱり、ぼくがアクアを幸せにするよりも、アクアがぼくを幸せにしてくれているな。

アクアの思いを感じるだけで、ぼくは舞い上がってしまいそうになっっているのだから。

これからも、きつとアクアはぼくのことを幸せにしてくれる。だから、それ以上の幸せを返してあげたい。

どうすればいいのかは分からない。それでも、絶対に諦めるつもり

はない。

それが達成できた時のアクアの幸せそうな顔を見ることはぼくの夢なんだ。だって、それ以上の瞬間なんてきつと無い。

そんな事を考えていると、なにか嫌な予感がした。思わずアクアの手を離して、ミア強化とアクア水を発動する。

すると、索敵に人型モンスターが引つかかった。ゆつくりとこちらに近づいている。

なので、先制攻撃を仕掛けることにした。人型モンスターと対話なんてできない。そんなことをしても騙されるだけだ。

水刃をそのモンスターに放つけれど、まるで通用しない。そのままゆつくりと近づいてくる人型モンスター。

どうすればいいのか考えていると、アクアが敵の方へと向かっていった。

そのまま、アクアは殴りかかろうとしていたが、すぐに立ち止まってしまう。

おかしい。アクアはどうして立ち止まった？ なにか敵に攻撃をされたのか？

分からないまま、全力でアクアを助けに向かう。人型モンスターは何も妨害してこなかった。

なので、アクアの様子を見ることにする。アクアは一体どうなってしまったのか。

すると、小さな声で何事かをつぶやいていた。アクアの口元に耳を寄せて聞いていると、ひどく悲痛な声だった。

「ユーリ……嫌いにならないで。アクアを捨てないで……」  
そんなことをぼくがするわけがない。だけど、アクアが苦しんでいる。

ぼくはなんとかアクアを安心させようとアクアに声をかけていく。  
「アクア、ぼくはここにいるよ。アクアを捨てるわけがない。嫌いになるわけがない。だから、こっちを向いて！」

必死に声をかけていても、アクアはこちらに反応を返さない。そのまま、ずつとつらそうな声を出している。

アクアの様子に集中していると、人型モンスターがこちらに近寄ってきた。

そして、ぼくがその目を見た瞬間、ぼくの意識は薄れていった。

## 105話 悪夢

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合に向かって今日の予定を確認した後、アリシアさんたちとともにマナナの森へと向かう。

そこで、いつものようにアリシアさんたちに教わりながらモンスターと戦っていた。

「ねえ、ユーリ君、何度同じことを繰り返すのかな？ そんな程度の存在を弟子になんて思えないよ」

「そうだね、アリシア。キラータイガーを倒した時には才能があるっと思ったんだけどな」

先程まで優しかったアリシアさんたちが急にぼくを責めはじめる。ぼくはどう返答していいものか分からなくて、言葉に詰まっていた。

「いいよ、もう。君に期待した私達がバカだったんだ」

「もうあなたには付き合っていられないよ。せいぜい一人で頑張つてね」

そう言っただけでアリシアさんたちはぼくを放って去って行ってしまった。ぼくは一人だけが残されて、そのまま必死でモンスターを退治している。

……なんでぼくは一人なんだっけ？ 他に誰かいたような……？

いや、そんな事を考えている場合じゃない。目の前にいるモンスターを倒すことしか、今の状況を乗り切ることにはできない。

あれ？ そういえば、どうやって今までモンスターを倒していたんだっけ？ そんなの、剣以外にないだろう。

おもいきり敵に剣を叩きつけると、そのままモンスターは倒れていった。

なにか手応えに違和感があるような気がしているけど、なぜだろ

う。

まあ、いいか。無事に生き延びることができたのだし。アリシアさんたちに見捨てられてしまったことは悲しいけれど、このままやっていくしか無い。

さて、つぎからの依頼はどうすればいいだろうな。ぼく1人でどこまで出来るだろう。

そんな事を考えていると、眠気がきて意識が薄れていった。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へと向かうと、サーシャさんが不機嫌そうな顔をしている。

「ユーリ様、見損ないましたわ。せつかくエルフィール家の力を使つてまであなたを支えていたのに、なんの成果も発揮できないとは。これからは、ただの冒険者として過ごしてくださいな」

そのままサーシャさんは去っていく。仕方がないので、別の人に受付を頼んで依頼を受けていく。

一般依頼の受け方が分からなくて、その人には結構手間をかけてしまった。

それにしても、なぜサーシャさんはいきなりぼくを見放したのだろう。よく分からない。

だけど、見捨てられてしまった以上はぼく1人でもやっていくしかない。

そのままマナナの森へと向かってモンスターを討伐していく。

マナナの森はやはり弱いモンスターばかりだ。ぼくでも問題なく倒すことが出来る。

剣を適当に振るだけで面白いように倒れていくのだ。ぼくってこんなに強かったっけ？ 別に気にすることはないか。上手く倒せるのだからそれでいいだろう。

そのままモンスターを倒していると、急に眠気が襲ってきて、耐えきれずに眠ってしまった。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へと向かうと、メルセデスたちが待っていた。いつものように、冒険の仕方を教えることになっている。

メルセデスが使う契約技にアドバイスをしながらモンスターを倒していく。

そういえば、どうしてメルセデスの契約技にアドバイスをしているんだっけ？ まあいいか。それですることは変わらないのだし。

そのままメルセデスたちに色々とアドバイスをしていると、突然2人は不機嫌そうな顔になった。

「何を知ったような口ばかりきいているっすか？ 自惚れも大概にするっすよ。こんな人、なんで師匠になんてしちゃったんっすかね」

「まあ、他に人がいなかったんだから仕方ないわ。それよりも、もうユーリちゃんに教わる必要はないんじゃないかしら」

そう言っつて2人は去っていく。結局2人は何が不満だったのだろう。よく分からない。

でも、これから指導しなくなるのだから、ぼく1人でしっかりやっていかないかね。

それにしても、なぜメルセデスたちはぼくの弟子になっていたんだっけ？ まあいいか。もう関わることはないだろうし。

悲しくはあるけれど、仕方のないことだ。これからも冒険者として活動するために、しっかりとモンスターを倒していかないかね。

そのままモンスターを倒していると、モンスターの目の前なのに眠気が襲いかかってきて、ぼくの意識は薄れていった。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へ向かうと、オリヴィエ様がそこで待っていた。そのまま、屋

敷へと連れて行かれる。

そこでは、リディさんとイーリスも待つていた。今日は一体何のようだろう。

部屋に連れて行かれて話をしていると、突然3人は怒ったような顔になる。何か気に障ることもしてしまったのだろうか。

「ユーリ、貴様に余が目をかけていたのは大きな間違いだったよ。もう余が貴様に会いに来ることはないだろうな」

「ユーリ殿、貴殿には失望しましたよ。それほどまでに愚かだったとは。殿下にも見込み違いというものがあるものなのです」

「本当につまんねえやつだったよ、お前は。だが、今のうちに気づけてよかったぜ」

そのままぼくは屋敷から追い出される。仕方ないので、それからは依頼を受けてモンスターを倒しに行った。

モンスターを倒しながら、そもそもぼくはなぜオリヴィエ様に気に入られていたのだろうかと考えていた。

しばらくのあいだ考えていたが、結局よくわからなかった。そのまま、モンスターを討伐していると、不意に眠気が襲いかかってきた。こんなところで眠る訳にはいかないと思いつつも、ぼくの意識は遠くなっていた。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へ向かうと、ミーナたちが待つていた。そうだった。今日はミーナと戦いの訓練をする日だったな。

そのままミーナと何度か戦っていると、ミーナは不満げな顔をする。

「ユーリ、君はそんなものだったんだね。君なんかをライバルだと思っていた自分が恥ずかしいよ。もう、次の機会はないだろうね」

「ミーナがライバル扱いする相手だから、どんなものかと思っていたけれど、期待外れだったわね。ミーナの目は曇っていたのかしら」



そう言つてミーナたちは去つていく。ミーナとこれ以上競い合え無いのは悲しいことだけど、仕方のないことだ。

それにしても、一体なぜ、ぼくたちはライバル関係になつたんだっけ？ 戦つたことはあるような気がするけど、それだけで？

まあいい。予定が潰れたのだから、モンスターを討伐していればいいか。

そして、モンスターの討伐へと向かおうとすると、突然の眠気に耐えきれなくなつた。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰つたんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だつたっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へ向かうと、フィーナとユーリヤがいた。そうか。今日は2人とモンスターを倒しに行くんだっけ。

2人とモンスターを倒していると、2人から急に睨まれる。ぼくは何もしていないと思うけれど。

「わたしたちに任せて、ユーリさんはずいぶんと楽をしていますね。そんな人だとは思いませんでした」

「そうです……わたしの力を好き放題に使っているだけなんて、許せません……」

そのまま2人はモンスターを放つたまま去つていった。追いかけてみたい気持ちもあったけれど、追いつくよりもぼくがモンスターに倒される方が先だろう。

そのままモンスターと戦っていると、なぜか急に意識を失つていった。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰つたんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だつたっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

部屋から出ると、ステラさんが待つていた。でも、いつもの優しそうな顔とはほど遠い。

「ユーリ君、この家から出ていっていただけですか？ あなたの世話をする理由は、今の私にはありません」

そのままステラさんに家から放り出されてしまう。追い出されてから考えることではないかもしれないけれど、そもそもぼくはなぜステラさんの家に住んでいたんだっけ？

まあいい。つぎの宿を探さないとな。そうになると、宿代の分も稼がなくてはいけない。

そのまま依頼を受けてモンスターと戦っていると、あまりの眠気に勝てなくなってしまうた。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

部屋から出ると、シータがぼくのことを待っていた。明らかにむくれた顔をしている。

「おにいちゃん、もうシータのおにいちゃんなんておもわないで」

それだけを言ってぼくのもとから去っていく。そもそも、なんでシータはぼくの妹として一緒にいたんだっけ？

まあ、考えても仕方のないことか。嫌われてしまったのだから、諦めるしか無い。

それよりも、今日の依頼を達成しないと。そのままぼくはモンスターを討伐しに向かう。そして、疲れていたのか眠りについてしまった。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へ向かうと、カタリナとノーラが待っていた。そのまま依頼のモンスターを倒しに向かう。

そこでモンスターを倒していると、2人から殺意のようなものを向けられた気がした。

「あなた、いつまであたしの足を引っ張っていけば満足なの？ もううんざりだわ。せいぜい頑張って生き延びることね」

「そうだな、カタリナ。元ご主人、せいぜい達者でな」

そのままカタリナたちは去ってしまふ。ぼくはもうどうしていいのかわからなかったけど、それでも生きるためにモンスターを倒していく。

すると、何故か立っているのに眠くなってしまい、そのまま眠りについた。

目が覚めると、いつもの家にいた。……いつ帰ったんだっけ？ まあいい。

それよりも、今日の予定は何だったっけ。マナナの森でいつものようにモンスターを討伐すればいいのか？

組合へと向かうと、アクアが待っていた。そのまま2人でモンスターを倒しに行く。

そこで、アクア水を使っているぼくを見て、アクアが不満そうな顔をする。

「どうしてアクアはユーリと契約しちやっただらう。ユーリ、ばいばい」

そのままアクアは去っていく。ぼくは少しの間呆然としていたが、すぐにおかしなことだと理解した。

アクアがぼくを見捨てるわけがない。なら、これはきつと夢？ それはわからないけれど、アクアとぼくの絆をぼくが疑うのか？

その疑問を深く追求していくと、アクアとの思い出が蘇ってきた。そうだ。みんなアクアと一緒にだから出会えた相手に、仲良くなれた相手なんだ。

これまでの夢も思い出した。そして、今の状況も。アクアは今も苦しんでいる。ぼくがアクアを助けるんだ！

そう強く誓うと、景色が歪んでいき、やがてぼくは目を覚ました。

## 106話 願い

ぼくが目を覚ますと、アクアは未だに苦しんでいる様子だった。

「ユーリ、嫌……許して……」

きつとぼくと同じように悪夢を見ているのだろう。すぐにもアクアのことを解放してあげたい。

アクアに集中したかったけれど、一応敵の様子を見る。こちらに攻撃してくる様子はない。

ぼくがもう一度悪夢に囚われるということもないので、今のところは大丈夫だろう。

だから、アクアを助けることに全力を尽くす。アクアの苦しそうな顔を見ているなんて、絶対に嫌なんだから。

「アクア、起きて。ぼくはここにいるから。アクアとずっと一緒だから」

アクアを抱きしめながら声をかけてみたけれど、アクアの様子に変わりはない。

敵はなぜか何もせずにはぼーっとしている様子だ。ぼくを妨害してくるわけでもない。

ただ、相手が何もしてこないのは好都合だ。アクアのことに集中していられるのだから。

アクアはぼくの名前を呼んでいる。つまり、ぼくに嫌われるという夢を見て苦しんでいるということだ。

こんな状況だけど、アクアがぼくに嫌われることを悪夢だと感じてくれることは少し嬉しいと思ってしまう。いや、良くない考えだな。

それよりも、どうやってアクアを助けるかだ。ぼくの声は届いていない。ぼくの感触も伝わっていない。

このまま声をかけ続けるだけで効果はあるのだろうか。まあ、何もしないよりはましかな。

なにか思いつくまで、声をかけ続けよう。さて、どんな言葉がいいかな。

「アクア、ぼくはアクアが大好きだから。だから、心配しなくていいん

だ」

「ユーリ、ごめんなさい……違う、違うから……」

アクアの言葉から察するに、ぼくに対する罪悪感を抱えていて、それがぼくに嫌われる原因になっている？

ぼくだってアクアに拒絶される夢を見ていた。だから、たぶん大きく外れてはいない。

そうになると、アクアがぼくに隠していることを察しないといけない。

そんな事がぼくにできるのか？ カタリナにも、大事なことには気がついていないと言われたのに。

こんなぼくに本当にアクアを助けられるのだろうか。いや、出来るかどうかなんて考えている暇はない。

何が何でもアクアを助けるんだ！ ここにすべてを賭けるだけだろう、ユーリ！

「アクアが何をしていても許すから。だから、帰ってきて。ずっとそばにいてほしいよ」

アクアはやはりぼくの声聞いていないようにみえる。声をかけるだけでダメならば、どうやってぼくの心を届ければいいんだ？ いや、心だ！

ステラさんの指輪でぼくの思いを届けたらどうだ？ アクアが夢の中にいても届くんじゃないか？

これ以上は今考えなくていい。ぼくの思いが通じると信じて、進むだけだ！

（アクア、そこはただの夢でしか無い。ぼくのところに帰ってきて！）

（ユーリ……？ 許してくれるの……？）

（アクアのことならなんだって許してあげる。だから、そんな悪夢じゃなくてぼくのところへ戻ってくるんだ、アクア！）

アクアがわずかに動いたと思うと、ぼくとアクアが強くつながったような感覚があった。

それから、アクアの恐怖が流れ込んでくるような感覚も。ぼくに捨てられてしまうんじゃないか、ぼくに嫌われてしまうん

じゃないか、ぼくに見限られてしまっじゃないか。

そういつた感情が流れ込んできた。だから、ぼくは指輪から通じると信じて、アクアを大好きだという思いを強く念じた。

そして、アクアは目を開いた。少しだけ周囲を見回して、こちらに焦点を合わせてくる。

それから、ぼくに抱きついてきた。そんなアクアからは、ぼくを大好きだという感情が強く襲いかかってきた。

言葉にならないような恐ろしく強い感情で、だからこそアクアに大好きを返したくなった。

ぼくだってきつとアクアのことが大好きなはずだ。アクアがぼくを想うほどかはわからない。

それでも、ぼく自身よりも大切だとはつきり言えるくらいには好きなんだ。

アクアのことに意識を集中していたけれど、敵のことを忘れてはいけない。

オメガスライムかもしれないアクアに悪夢を見せられるほどのモンスター。

だけど、今のぼくたちならば絶対に勝てるという確信を抱いていた。

その通りに、アクア水を全力でぶつけるだけでモンスターは崩れ落ちていった。

あんなにアクアを苦しめられていた割には、ずいぶんとあつけない最期だった。

もしかしたら、悪夢を見せるだけのことしかできないモンスターだったのだろうか。

それでも、アクアは苦しんでいたのだから許せないけれど。それにしても、あのモンスターは一切喋らなかつた。

ひよつとすると、プロジェクトU：Reと関係があるモンスターなのかもしれない。

死んだ今でも恨みはあるけれど、おそらく指輪を使いこなせるきつかけになったことには感謝したい。

今になってみると、前回指輪を使った時に感じた雑音が聞こえなかった。それに、言葉にならないような思いが伝わってきていた。

思いを伝え合うという説明が正しいという証明のように感じる。さすがに、これ以上の思いを送るなんて想像できない。

だから、これで指輪は完全に使いこなせているはずだ。ステラさんにも報告したいな。きつと喜んでくれるはず。

楽しい未来は色々想像できるけれど、まずは目の前のアクアだ。アクアは落ち着いているようにみえるけれど、きつと今でも傷ついている。

だから、ぼくはアクアのことを癒してあげたかった。アクアに幸せを感じてほしかった。

(アクア、きみが何をしていたとしても、ぼくはずっとアクアのそばにいるよ。だから、安心してね)

(うん、ユーリを信じる。ありがとう、アクアを信じてくれて)

(当たり前のことだよ。だから、感謝されるほどでもないかな。アクアに貰ったものに比べたら、大したことじゃないんだから)

(ユーリ、大好き。いつまでも、永遠に一緒にいる)

(そうだね。アクアとなら、どれだけ一緒にいたって飽きることはないよ)

アクアからは言葉になっていない感謝の気持ちも伝わってくる。きつとぼくの気持ちもアクアに伝わっている。

ステラさんのおかげでこの喜びを味わうことができた。本当に感謝したい。

この指輪を通して伝わってくる感情こそが、ぼくとアクアの絆が最高である証明だ。

もう何度思ったかもわからないけれど、アクアと出会えて本当に良かった。

ぼくには色々素晴らしい出会いがあったけれど、アクアとの出会いが最高だったと言い切れる。

これからどんな試練が待ち受けていたとしても、アクアと出会ったことだけは後悔しない。

「アクア、これだけは言葉にしておきたいんだ。ぼくと出会ってくれてありがとう。ぼくと一緒にいてくれてありがとう。おかげで、ぼくはいま幸せなんだ」

「アクアも、アクアも同じ。ユーリと出会えたから、アクアはいま幸せ」

指輪からもアクアの幸せが伝わってくる。ぼくたちはお互いに最高の出会いができた。

お互いがお互いの幸せになっているんだ。これ以上の関係なんて、他の誰にも生み出せないだろう。

それに、お互いに支え合うこともできているんだ。アクアがオメガスライムだとしても、ぼくはアクアの心を守ることができる。

これからぼくがするべきことは決まった。アクアの幸せを全力で支えるんだ。

アクアはきつと全能の存在ではない。どれだけ強いとしても、心の支えが必要なんだ。

だから、ぼくがそうなってみせる。他の誰にも任せることはできない役目だ。

「ぼくたちが一緒にいるだけで、両方幸せになれるんだ。それって素敵だと思わないかな？」

「うん！ だから、絶対にユーリと離れたりしない。もう何があっても諦めない」

こんなセリフが出てくるなんて、アクアは諦めそうになっていたのだろうか。

良かった。ぼくは自力であの悪夢から脱出できて。そのおかげで、アクアを守ることができたんだ。

アクアはきつとこれからもぼくを助けてくれる。アクア水も、アクア自身も。

だから、ぼくはアクアが幸せになるためになら、なんだってするんだ。

もちろん、大切な人は傷つけないようにするけどね。でも、もうアクアの敵を攻撃することをためらったりしない。



今回みたいにアクアが苦しむようなこと、絶対に二度と起こしちゃいけないんだ。

ずっとずっと幸せにしてみせるからね、アクア。それが、ぼくの感謝の証だよ。

「ところで、アクアは本当にオメガガスライムなの？　今までちゃんと聞いてこなかったよね」

「うん。でも、伝承よりもっと強い。だから、ユーリは安心していい。何があっても守ってみせるから」

「無理はしなくていいからね。ぼくが守られても、アクアが幸せじゃないと意味がないんだからね」

「わかっている。ユーリがアクアを大切に思っていることは。だから、アクアも幸せになる」

「それでいいんだ。アクアの幸せは、ぼくにとっても幸せなんだからね」

「ありがとう。ユーリ、大好き！」

言葉とともに思いも一緒に伝わってくる。この指輪はやっぱり最高だ。

アクアの気持ちをこんなに強く感じる事が出来るのだから。

ぼくの気持ちもアクアに同じように伝わっているはずだ。アクアはそれをどう感じているのかな。

少し気になるけれど、流石にそれを聞くのは恥ずかしいな。でも、きっと喜んでくれている。

ぼくがアクアを好きだと思っていることは疑う気がないし、それをアクアが嬉しいと感じることは何があっても信じられる。

「ユーリ、キス、しよう？」

「いいけど、敵が現れたばかりだと、少し警戒しちゃうね」

「大丈夫。もうあの敵には負けない。それに、他の敵にも」

「なら、やっちゃおうか」

そのままぼくはアクアにキスをする。アクアの唇は相変わらず柔らかい。

夢中になってしまいそうではあるけれど、我慢しないとね。ぼくの

欲望をぶつけるのは止めておきたい。

アクアはきつとそういうことを理解していないからね。だから、遊びの一種くらいに感じているはず。

しばらくのあいだアクアとキスをして、ぼくは離れていった。名残惜しさも感じるけれど、溺れてしまうのはいけないからね。

「ユーリ、カタリナのこと好き？」

どうしていきなりそんなことを聞いてきたのだろう。でも、答えは決まっている。

「大好きだよ。でも、それがどうかしたの？」

「カタリナと結婚したい？」

「よくわからないかな。でも、他の相手は想像できないかもしれない」

「3人で一緒に過ごさない？ シイを仲間外れにするつもりはないけど」

「カタリナがそれでいいなら……」

「じゃあ、カタリナにはアクアが伝える。ふふ。楽しみ」

よくわからないけど、アクアもカタリナが大好きなのだろう。指輪で伝わる感情には制限があるのか、そのあたりは伝わってこない。

でも、そうでないならばそんな提案はしないからね。

「だけど、そうか。カタリナと一緒に住む。それはきつと幸せなのだろうな。」

「ユーリ、楽しみにしている。アクアとカタリナで、ユーリを幸せにしてみせる」

## 裏 未来

カタリナと和解できて、シイが目覚めて、アクアの生活は順調と  
言ってよかった。

この調子でもっともつとユーリと仲良くなろうと考えたアクアは、  
2人きりになる機会を作ろうとする。

そして、実際にユーリと2人で少し遠出をしていた。

アクアにはユーリとしたいことは無数にあったので、すでにこれか  
ら先のことも考えていた。

周りに人がいないのだから、大きな音を出すことも、激しい動きを  
することもできる。

具体的な何かが思いついていた訳では無いにしろ、アクアはこれか  
らが楽しくなると信じられていた。

とはいえ、まずはいまユーリと楽しむことが第一だ。

最初はユーリと手を繋いで、いろいろな握り方をしてユーリの手を  
楽しんでいた。

それに満足した頃、アクアはユーリとの会話がきっかけで自分の手  
の感触を変えることにした。

アクアの手の感触を楽しんでいるユーリの姿を見ることは嬉しい  
し心地いい。

すでに今日という日に満足していたアクアだったが、その喜びはす  
ぐに崩れ去る。

きつかけは突如現れた人型モンスターだった。ユーリの攻撃が通  
じなかったので、いいところを見せようとモンスターに近づいていく  
アクア。

どんなモンスターにも自分を傷つけることなどできないと信じた  
ゆえの行動だった。

だが、唯一と言っていいアクアの弱点が突かれてしまうことにな  
る。

それは、アクアの精神が幼いということだった。完全に油断して夢  
にとらわれてしまうアクア。

そこからの光景は、アクアにとって地獄でしかなかった。

目覚めたという感覚とともに、アクアはユーリと会話をする。

それから、プロジェクトU・Reの拠点を攻撃している場面に移る。

そこでユーリに明かされた自信がオメガスライムであるという事実。そこで、ユーリはアクアに嫌悪感を持った目を向ける。

「ユーリ、隠していたことは謝るから、だから、許して」

「許すわけ無いでしょ？ アクアがオメガスライムだなんて知っていたら、ペットになんてしなかった。さよならだね、アクア」

「ユーリ……嫌いにならないで。アクアを捨てないで……」

「捨てるなんて人聞きの悪い事を。化け物と一緒にいるなんておかしいでしょ？」

「待つて、ユーリ……」

「じゃあね、アクア。せいぜい討伐されないようにね」

「嘘、こんなの、嘘だ……」

そのまま去っていくユーリ。アクアの視界からはユーリの父親も他のモンスターも消えていたが、そんなことに気づく余裕すらなかった。

どうして。ユーリはずっと信じていてくれたはずなのに。自分がオメガスライムだからいけないのか？

そうだとしたら、こんなふうに生まれたくはなかった。アクアは絶望に沈んでいった。

そして、また目が覚めたという感覚がやってくる。

その感覚によって、先程の出来事は夢だと思えたアクア。だが、アクアの悪夢は始まったばかりでしかなかった。

アクアが進化してすぐ、無事にキラータイガーを討伐したユーリたち。

その成果を楽しもうと考えていたアクアだったが、何故かユーリに自分がカインを殺したことが知られてしまう。

「アクアがカインを殺したんだ？ 最低だよ。ぼくはアクアを信じていたのに、裏切ったんだね」

「どうして、それを……」

「反論もしないんだ？ やっぱりモンスターなんて信用できないんだ。アクアをペットにしたのは失敗だったよ」

「そんなこと、言わないで……」

「じゃあどう言えればいいの？ 人殺しとは一緒にいられない。ううん。アクアは生きてちやいけないんだ」

そのままアクアはユーリに攻撃を仕掛けられる。

必死に逃げながら、どうしてこんな事になってしまったのかを考えていた。

カインを殺さなければよかった？ でも、ユーリを傷つけている相手なのに。

そもそも、どうしてユーリに気づかれてしまったのだろう。上手く隠していたはず。

どうしてユーリに嫌われちゃったのかな。カインを嫌いじゃなかったのかな。

ユーリから攻撃されるつらさをごまかすための考えですら、アクアの心を傷つけていった。

そのままユーリから逃げ去って、これからどうすればいいのか考えて、やりたいことが一つも見つからなくて。

ユーリと一緒にいられればそれだけで幸せだったはずなのに。そう思いながら眠りについた。

再び目覚めたアクアは、今度はどんなふうにユーリに捨てられるのかと恐れるようになっていた。

それでも、なんとかユーリと会話をしようとする。

今回はステラの姿でユーリと食事にかけたあとだった。そこで、ステラを乗っ取っていることに気づかれてしまう。

「アクア、ステラ先生に何をしたの？ ……答えられないんだ。お願いだから、死んでくれないかな？ そうすれば、ステラ先生は返ってくるでしょ？」

「ステラの体は返すから。だから、死ねなんて言わないで……」

「その程度の覚悟でステラ先生を弄んだんだ？ やっぱりアクアのこととは許せないよ。でも、ぼくだけではアクアを殺せない。どうしよう

かな」

その言葉でアクアはユーリが本気で自分を殺そうとしているのだと察する。

どうしてこんなことに。ただ、ユーリに嫌われたくなかっただけなのに。

それがユーリに殺されそうになっているなんて。これが現実だつて言うの？

混乱の中にいるアクアだったが、やがて眠りへと誘われていった。それから、何度も何度もユーリに嫌われる夢を見て、何度も何度もアクアの心は傷ついた。

こんな夢を見続けるくらいなら、生きていたくないとすら感じていた。

ユーリに大切にされていた感覚を忘れそうになって、そのたびに必死に思い出して、それでもユーリに嫌われてしまう。

やがて生きることが諦めることすら考え始めたアクアだったが、つぎにみた夢で世界は変わる。

カタリナを解放した際に、カタリナからユーリに真実を告げられてしまう。

そして、ユーリはアクアを敵でも見るかのような目で見るのだ。

恐れていた事態が現実となって、それでもユーリと関係を修復することを諦めきれなくて。

アクアは必死になって言葉を紡ごうとしていた。

「ユーリ、カタリナのことは助けたでしょ？ だから、お願い……」

「それで、ステラさん以外に誰を乗っ取っているの？ 本当のことを言つてよ」

「それは……」

「答えられないんだ。アクアはやっぱ最低だよ。信じていたぼくがバカだったよ」

「ユーリ、嫌……許して……」

「許せるわけがないでしょ？ そうやってぼくのことを弄んでいたんだ？ 楽しかった、アクア？」

「ユーリ、ごめんなさい……違う、違うから……」

「じゃあなんだって言うの！　ぼくの大切な人を奪って何が嬉しいっていうの！」

「ユーリに嫌われたくなかっただけ。お願い、信じて……」

「それでどうして信じてもらえるって思うのかな？　化け物の考えは理解できないや」

これまでで最も大きい絶望の中に沈みそうになったアクアだったが、不意にユーリの声が聞こえたような気がした。

耳を澄ますと、たしかにユーリの声が届いたと感じた。だが、それは頭の中に響いていた。

何故頭の中に声が響くのだろう。そう考えたアクアに、ユーリとの記憶が蘇る。

これはステラの指輪の力。思いを送り合う力でユーリの心が届いているんだ。

それでも、ユーリに嫌われることをアクアは恐れていた。だが、ユーリの言葉によつてその不安は吹き飛んでいく。

ユーリともう一度会つて、また楽しくて暖かくて幸せな時間を過ごすんだ！

その決意とともに、アクアの意識は目覚めていった。

それからのアクアは最高の気分を味わっていた。ユーリが言葉にできないでいるアクアへの思いが伝わってきたし、はつきりと言葉で好きを伝えてもくれた。

悪夢で味わった苦しみなど帳消しにして余りあると思えるほどの幸福を感じて、アクアはどうかかなりそうだった。

ユーリは誰よりも自分のことを好きでいてくれる。そう強く感じられた。

それからアクアがユーリにキスをねだると、今度は悩むこともなく受け入れてもらえた。

だから、アクアはユーリとの絆が深まったような感覚を味わえた。

自分に対する欲望がユーリから伝わってきて、なんだか心地よさもあつた。

ユーリの欲望ならなんだったって叶えてあげるのに。そう考えていたが、ユーリの心を口にすることは止めた。

我慢するということは、自分のことを思いやってくれている証だ。いずれユーリの欲望を全部味わってみるにしろ、今はこの感覚を楽しんでおけばいい。

ユーリの唇の感触を感じることも楽しいが、ユーリの心を味わうことはもっと楽しい。

アクアはステラには深い感謝をしていたが、申し訳無さも感じていた。

ユーリは強く自分のことを信じてくれている。だから、それを裏切りたくはない。

ならば、ユーリの大切な人たちに体を返すべきなのだろうか？ でも、カタリナのように許してもらえらるだろうか。

本当は、自分だってあの人達ともう一度話をしたいし、ふれあいたい。

だけど、きつとカタリナが特別なだけなんだ。アクアはカタリナ以外との未来を諦めていた。

カタリナといえど、3人の子供を作るという約束があった。その未来を現実にするために、まずはユーリとカタリナの距離を縮めよう。

そう考えたアクアは、ユーリにカタリナをどう思っているかを確認した。

その結果として、自分とカタリナで夢見た未来をつくることができると判断したアクアは、ユーリにカタリナと住む提案をする。

ユーリは乗り気なようだったので、まずは3人で一緒に寝るところからだ。

ユーリとカタリナと自分と、その子どもたち。そんな人達と過ごす未来のために、アクアはこれからも頑張ると決めた。

まずは、ユーリとカタリナを結びつけるところからだ。そうしないと子供は生まれないのだから。

子供ができれば、ユーリもカタリナもきつと幸せになってくれる。



だから、その未来に向かって突き進むだけだ。アクアは新たな先を夢見ていた。

## 5章 ステラの導き 裏 指輪

ユーリとアクアが指輪の力を解放したことがきつかけとなって、ステラの意識は目覚めた。

その時ちようどアクアが感じていたことも流れ込んで、それはユーリに捨てられる恐怖だった。

それが徐々にユーリに対する信頼に移り変わって行って、じよじよに落ち着いた。

(これは……アクアちゃんの感情？ どうして私にそれが……?)

それから、ステラの体がこれまで行ってきたことの記憶も流れ込んできた。

ユーリに指輪を与えたこと、ユーリに家を貸し与えていること、ユーリを支え続けてきたこと。

もともとのステラの予定通りではあったのだが、自分の意志が介在しないということに不満はあった。

それでも、自分が乗っ取られた時にアクアに感じていた印象とはずいぶん違うとステラは感じた。

ステラは、アクアはただユーリのそばにさえいられば何でもいいのだと考えていた。

だが、アクアは献身的にユーリを支え続けていた。それだけで、アクアを見る目は変わりそうだった。

(ああ、あの指輪を使いこなしたんですか。つまり、アクアちゃんとユーリ君は真の信頼関係を築けた。アクアちゃんは本当にユーリくんを信頼しているんですね)

その後、アクアの心のほとんどが流れ込んできた。これまでの行動、これまでの感情、これまでの記憶。

その中には、ユーリ以外に対する情もあった。もちろん、ユーリを最も強く想っていたのだが。

自分に対する罪悪感を抱いていること、アクアがカタリナを解放し

たこと。

これらの情報から、アクアはただの怪物ではないとステラは認識を改めた。

（アクアちゃんは自分のことだけを考えてユージ君を蔑ろにしていたわけではなかった。むしろ、ユージ君のためを思っていた。それなら、まだ道はあるはず）

ステラにとって、アクアの認識は単なるエゴイストだった。自分の欲望のためにユージの意思すらも無視する、契約モンスターとしてはあつてはならない存在。

それを、本気でユージのパートナーであろうとするモンスターであると認識を改めた。

たとえアクアがオメガスライムだとしても、それがユージのそばにいてはならない理由ではない。

アクアが本気でユージを思い、ユージもその思いに答えようとしている。

だからこそ、ステラは一筋の希望を見出した。

ユージの周りにいるカタリナ以外の人間は未だアクアにとらわれている。それでも、それが皆の運命を確定させたわけではない。

現に、カタリナは解放されているのだ。アクアにとって大切な存在であつたからだとはいえ。

（アクアちゃんには人を思う心がある。ただの化け物じゃない。だから、対話ができる相手なんです。私のことですから、好きな気持ちがあるのですから）

ステラはまだアクアに意思を伝える手段をはつきりと思い描いていたわけではなかった。

ただ、アクアと意思疎通が出来るならば、より良い未来をつくることができる。そう考えていた。

そして自分もともにユージを見守っていききたい。大変好ましいユージのことを。

ステラが今感じているユージへの好ましさは、流れ込んできたアクアの感情の影響を大きく受けたものだった。

とはいえ、ユーリの行動はステラ自身にとっても素晴らしいものではあった。

アクアのことを大切な存在として必死に守り、支え、信じる。人とモンスターの絆が好きなのステラにとって、ユーリは理想に近い契約者だった。

(ユーリ君は本当にアクアちゃんを大切にしている。少し羨ましくなってしまうそうなくらい。ユーリ君ならば、私になれなかった最高の契約者になれる。私の判断は間違っていないかった)

かつてステラはユーリとアクアに契約者の到達点となる可能性すら見ていた。

その期待はアクアに裏切られることになるのだが、今となってはその時見た可能性以上のものを感じていた。

ユーリにはこれから大きな試練が立ちはだかることになるだろう。カタリナは自分が操られていたことを黙っていたと判断できるが、ずっと気づかないということはありません。

気づかないとしても、自分がなんとかして皆を解放させれば露見しなはずがない。

それでも、だからこそ、それを乗り越えたユーリとアクアの絆は誰にも負けないものになる。

ユーリはおそらくアクアの罪を知ったとしてもアクアを見捨てない。

アクアはきつとユーリ以外にとっては今でも恐ろしい災厄でしかない。その事実をユーリが知ったとしても、きつと世界よりもアクアの方を選ぶ。

それこそが、ステラの見たいと考えている人とモンスターの関係だった。

なによりも、どんな他者よりも、世界の命運がかかっていたとしても、パートナーを優先する。

ユーリにはその素質がある。当然、アクアにも。

(この世界の全てよりもお互いを優先できるパートナー。なんて素晴らしい関係なのでしょう。でも、まだ道は遠い。今でもユーリ君は

きつとアクアちゃんを何よりも大切にしている。ですが、それだけでは足りないんです）

ステラですら知らなかった指輪の効果を発揮するほどに2人の絆は強い。

ステラが知っていたのは、契約者と契約モンスターがお互いに意思を送り合うところまで。

今の自分のように、おそらくユルグ家の血を引くものに特別な効果をもたらす記述も口伝も存在しなかった。

眠りについていた意識が目覚め、その上直接指輪を持っていない自分にもアクアの感情が送られる。

流れ込んできたアクアの記憶からして、無意識の感情を送り合うことすらできる。

単に思考を送り合う指輪としてしか知らなかったステラにとって、とても大きな驚きがあった。

（アクアちゃんとユーリくんの絆はおそらくユルグ家のどんな契約者よりも強い。だからこそ、誰も知らない指輪の効果を発動できた。これだけでも、私の夢は叶っているのかもしれない。でも、ユーリくとアクアちゃんなら、もつともつと先まで行ける。私はそれを特等席で見たい）

アクアの記憶から察するに、アクアの心にはまだわだかまりがある。

おそらく、カタリナを解放したことによって大幅に軽減できてはいない。だからこそ、プロジェクトU：Reとの戦いするときよりも指輪の効果を発揮できた。

それでも、自分たちを支配してしまっているという事実がアクアの心に影を落としている。

そんな今でもあれ程の結び付きがあるのだから、凄まじい話ではある。

だが、その後ろめたさを解消できたならば、ユーリとアクアの関係はどれほどになるだろう。

ステラはそれを想像するだけで、心が浮足立つようだった。

（アクアちゃんは私達を乗っ取っているという事実には罪悪感を抱えている。それこそが、アクアちゃんの人を思う心の証。アクアちゃんの感情が、意思が、本物であるという証明。ユーリ君は私が思っていた何倍も素晴らしい契約者でした）

ステラにはアクアの記憶が流れ込んでいる都合上、アクアに感情が生まれたきっかけもすっかりと認識できていた。

ただのスライムだと認識しながらも、ずっとずっとアクアに愛情を注ぎ続けていたユーリがいたからこそだ。

自分にそれができただろうか。ステラはその光景を思い描こうとしても思い浮かべることができない。

スライムは最弱の魔物でしか無い。それだけではなく、言葉も話せない。感情を見分けるすべなど無いに等しい。

そんな状況で、アクアに感情を芽生えさせるほど愛するということがどれほどの偉業か。

ステラにとって、ユーリはもはやただの生徒ではなく、最も尊敬すべき人間とすら言えるほどだった。

（それにしても、アクアちゃんは突然生まれたオメガスライムではなく、ずっとオメガスライムだったわけですか。歴史に残る大発見ですね。発表する意味などありませんが。それよりも、アクアちゃんの心は温かいもので満たされている。記憶を見る限り、ずっと無に近い心だったはずなのに）

ステラが受け取るアクアの感情は、ほとんどがユーリがきっかけで得られた幸せだった。

それほどに、アクアはユーリを大切に思っているし、ユーリはアクアを実際に愛していた。

ユーリほど全力でモンスターを想う存在などきつとこない。だからこそ、奇跡のようにアクアに感情が芽生えた。

それが今のアクアがユーリを想う心を形作っている。ユーリはアクアがオメガスライムであると知ってすら、疑うことなく大切にしている。

オメガスライムは伝説に残るほどのとんでもないモンスターだ。

それこそ、人がどれほど抵抗しても無駄だと感じるほどに。

そんな存在を恐れること無く、自分の命を預けられる存在として扱うことがどれほど尊いか。

少なくとも自分ならばできないだろう。ステラはそう考えて、ユーリを尊敬する思いを強めていった。

（あれほど人型モンスター脅威に触れながら、それでも絶対にアクアちゃんを疑わない。本当に最高です。だから、ユーリ君ならばどんな試練も乗り越えられる。アクアちゃんの本性を知る機会がやってきても大丈夫。私はその瞬間を見たい。そのために、何ができませんしょう？）

ステラはこれからすることを考える中、指輪について考察していた。

アクアの感情が流れ込んでくるのならば、自分の感情を送ることはできないか？

あるいは、自分が目覚めたように、他の人を目覚めさせることは？  
幸いと言っているのか、ステラにはそれだけに集中できる環境があった。

その中で、ステラはアクアの心に触れることに成功したような気がした。

（アクアちゃんはまだ私が目覚めたことに気がついていないけれど、だからこそ、私の思いを送ることは慎重に。アクアちゃんを通して、他の人に繋がれる感覚もある。だったら……導いてみせます。私が、アクアちゃんとユーリくんを理想の関係に。目的のための通過点だったとはいえ、これでも教師だったんですから。まずは、みなさんを目覚めさせることからでしょうか……）

ステラは自らの今後を定めた。アクアのわだかまりをなくすため、ユーリとアクアを最高の関係にするため、すべてを懸ける。

これまでの人生はそのためだけにあっただと思えるほど、ステラは熱中できることを見つけた。

それとは別に、自分の記憶の中には強い印象を残す光景があった。それを思い描くことも、ステラにとっては大事なことだった。

(ユーリ君を私に溺れさせる。アクアちゃんも面白いことを考えますね。それは、実現したらどれほど楽しい瞬間になるでしょうか。アクアちゃんともども、かわいがってあげるのもいいですね……)



## 107話 好意

今日はアクアとカタリナと3人で過ごすことになっている。ステラさんの家の空き部屋で3人になっているのだ。

この3人は久しぶりって気分になるな。プロジェクトU:Reの拠点に攻め込む時は一緒だったけれど。

休日をこの3人で過ごすことなど最近はなかった。だから、今日はうきうきしているかもしれない。

最初はこの3人だけだったし、ずっとこの3人でやっていくつもりでいた。

それが、あんな大所帯になるのだから分からないものだ。

とはいえ、それはぼくにとっては良いことだった。これまでの出会いにはとても感謝している。

それでも、この3人していると特別な感覚があるんだよね。やっぱりずっと一緒にいたからかな。

アクアもカタリナも、記憶が怪しくなるくらい昔から一緒だったんだからね。

「カタリナ、ユーリと一緒に寝るの、ユーリは良いって言った」

「あなた、急ぎすぎよ……でも、それならユーリ、同じ部屋で過ごしましょう？ あんたにあたしに手出しする度胸があるわけないんだから、構わないわよ」

まあ、カタリナが望むわけでないのなら、そういう行為をするつもりはないけれど。

とはいえ、同じ部屋で過ごしていると思える相手な割に、ずいぶんな物言いだ。

それがカタリナらしさだとはいえ、相変わらずの口の悪さだな。そこが可愛いところなのかもしれないけれど。

「いや、嬉しいけど……いくらなんでも危機感が薄くない？ ぼくだって完全に何もしない保証はできないよ？」

「どうかしらね。あんたくらいなら、あたしだけでもどうにでもできるんだから、心配する必要はないわ」

どうだろうな。ぼくがカタリナを本気で襲おうとすれば、手段がないわけじゃないと思うけれど。

アクア水をうまく使えばノーラとの契約技だって対処できると思う。

まあ、カタリナが嫌がることをしたいわけではないんだけどね。でも、カタリナがそれに全く対策しないのはどうなのかな。

とはいえ、シイも一緒に住むのだから、変なところを見せる訳にはいかない。

多分なんとかなるか。カタリナはきれいだし可愛いし好きだけど、だからこそ傷つけたくはないのだから。

それに、アクアとの絆の証を変なことに使いたくはない。その思いがあれば、きつと大丈夫。

「アクアも止めるだろうし、そのへんは大丈夫かな。でも、カタリナは魅力的なんだから、気をつけてよね」

「当たり前よね。だけど、あんたがどうしてもって言うのなら、受け入れてあげてもいいわよ」

そんなことを言われて、ついカタリナの方をじっと見てしまった。それに、余計なことも考えてしまっている。

カタリナがぼくの欲望を受け入れてくれる……いや、シイもいるんだから、変なこととはできないよ。

でも、カタリナは冗談で言っているのだろうか。なんとなく、本気が混ざっているような気がしなくもない。

そうだとすると、断りを入れるのも問題な気がするけど。カタリナが望むことなら受け入れたい。

とはいえ、今の環境では厳しいか。もし関係を持つのなら、ちゃんと準備が必要だろうな。

「あはは……流石に今の状況では難しいよ。絶対みんなに気づかれてしまうからね」

「それはたしかに問題よね。あんたとそういう事をするかはともかく、周りにバレバレってのは勘弁してほしいわ」

「そうだよな。そんなことになったら、恥ずかしいでは済まないよ」

「なら、アクアが音を消しても良い」

アクアにとんでもないことを言われてしまった。話の前提が完全に壊れてしまう。

いや、カタリナとそういう事をするのが嫌なわけじゃないけど、勇気がいるというか。

ぼくは誰に言い訳をしているんだろうか。でも、本当に困ってしま

う。アクアに見られるのも恥ずかしさはあるとはいえ、まあ耐えられる範囲ではある。

ぼくはアクアになら何をされてもいいと思っ

ただ、それをカタリナがどう思うかだ。いやいや、カタリナがぼくのことを好きという前提で考えを進めるのは……

でも、カタリナにはキスマでされたわけだし。あれでぼくをどうとも思っていないってことはないでしょ。

「あんた、ずいぶんあたふたしてるわね。ま、いいわ。時間はいくらでもあるんだから、ゆっくりと考えていけばいいわ」

今の台詞からすると、カタリナは乗り気なように思える。

なんとなく、今のカタリナの表情は読みづらんだよね。今まではずつとわかりやすかったと思うけど。

声色からも感情が上手く読み取れない。いつの間にそんな技術を覚えたんだろう。

まあ、カタリナが感情を隠したくらいでぼくに不利益があるとは思えない。だから、問題というほどではないかな。少し寂しくはあるけれど。

それよりも、アクアとカタリナはなにか結託している？ なんとなく、そう感じた。

理由を説明しろと言われたらできないんだけど、何故か正解だと思える。

まあ、仮に当たっていたとして、それがなんの問題なのかって話だ。2人共信頼できる大切な存在なんだからね。

だから、何かを画策していたとしても構わない。ちよつと気になり

はするけれど。

「まあ、急ぐことではないよね。結論がどうなるにしろ。でも、これからずいぶん生活が変わりそうだね」

「それはね。だけど、あたしたちならうまくやっていけるわ。なにせ、ずっと仲間だったんだもの」

「ぼくもそう思うよ。カタリナのことには信じられるんだ」

「どうせ誰にでも似たようなことを言っているんでしょ。ま、いいわ。あんたが優柔不断だってことはよくわかってるつもりよ」

「カタリナとアクアのどちらかを選ぶの、ずっと悩んでそう」

アクアにまで肯定されてしまった。そんなに優柔不断に見えるかな。

でも、2人のどちらを優先するのは悩ましい問題だ。アクアがいちばん大切だと何度も言っているけれど、カタリナだつてとても大切な存在なんだ。

それこそ、2人がケンカしてしまつたら、ぼくは右往左往してしまふかもしれない。

そういう意味では、2人の言っていることは正しいとしか言いようがない。

とはいえ、折衷案を出すのは得意なつもりだから、もしケンカになつたら上手く2人をとりなしたいところかな。

「あはは……否定はできないかもしれないね……でも、それは2人がどちらも大事だからだよ」

「知ってるわ。でも、情けない話じゃないかしら？　ま、ユーリがヘタレなのは分かつて一緒にいるのよ」

「それは喜んでいいの？　まあ、カタリナと一緒にいてくれるのは嬉しいけどね」

「アクアも嬉しい。これからが楽しみ」

ほんと、アクアの言うようにこれからの生活は楽しみではある。

カタリナと過ごすのは恥ずかしさもあるけれど、喜びのほう明らかに大きい。

やっぱりぼくはカタリナのことを大好きだ。それが恋とか愛とか

なのかはわからないけれど。

カタリナはぼくのことを恋愛の意味で好きなのだろう。キスするくらいだし。

カタリナと付き合うのも、結婚するのもまんざらではないけれど、変化が怖くもある。

これまで上手くやってこられただけに、なにか失敗してしまうのが恐ろしいんだ。

まあ、ケンカしても仲直りはできるはず。モンスターの異常発生からカタリナを助けたときのように。

「これまで一緒に住んだことがないし、ルールを決めたほうが良いかな？」

「不都合が起きてからでも良いんじゃないかしら？ お互い、嫌がることはある程度分かっているでしょうよ」

「アクアは何でも良い」

確かに、いきなり相手の堪忍袋の緒が切れるような真似はしないか。

とはいえ、一切ルールがないまま上手くやっていくのはむずかしいだろう。

それでも、カタリナに反対してまでルールを作るほどではないと思う。本気で嫌がることくらい分かるからね。

ちよつとした不満はあるかもしれないけれど、それもある程度は察せるはず。カタリナがずっと隠しきってしまうならダメだけど。流石にそこまではないでしょ。

「なら、カタリナの言うようにしようか。それで何とかなるでしょ」「そうね。強いて言えば、あんたがあたしの魅力に我慢できるかどうかかしら？」

「カタリナが嫌がるなら絶対に我慢するから、心配しなくてもいいよ」「ま、あんたはそういうやつよね。ヘタレだもの。でも、どうしても我慢できなくなったらあたしに言えばどうにかしてやるわ」

どうにかって、何をするつもりなんだろう。まあ、カタリナだって無茶はしないはず。

とはいえ、カタリナに我慢ができないって言うのは恥ずかしいな。まあ、きつと大丈夫だろう。今までだってどうにか生きてきたのだし。カタリナと一緒に住むくらいでそこまで変わらないはずだ。

「そんな事を言えっていうの？ 自分でどうにかするから、心配しないで」

「それくらいのことですれずかしがついて、本当に同じ部屋で過ごせるのかしらね？ ま、いいわ。あんたが望むのなら、あたしはあたしの全部をあげる。それは本当よ」

とても真剣な顔でカタリナは言うので、本気なのだろう。

まあ、ぼくだってカタリナにあげられるものなら何だってあげて良い。い。

でも、カタリナの全部か。色々と考えちゃうけれど、ぼくはカタリナの幸せそうな顔が見たい。

だから、カタリナが本当に望んでいないのなら受け取る訳にはいかない。

とはいえ、全部を拒否したってカタリナを傷つけてしまうような気がする。どのあたりを選べばいいだろう。

「それは嬉しいけど、無理はしないでね。ぼくはカタリナに幸せになっただけいいんだから」

「あんたと一緒にいられば、あたしは幸せよ。だから、そんなに心配しなくていいわ」

花の咲くような笑顔で言っているの、今は本当に幸せを感じているのだろう。

ぼくと一緒にいられることがその一因となっていることがとても嬉しい。

カタリナと一緒にいられるのなら、ぼくだって幸せになれる。だから、ぼくたちはきつと上手くやれる。

「これからよろしくね、カタリナ。大好きだよ」

「まったく、どんな意味で言っているのやら。でも、あたしも大好きよ。これはあたしの本音だから」

「アクアも、ユーリが大好き。カタリナも」

「あたしもアクアが大好きよ。前にも言ったけどね」

「ぼくも2人が大好きだよ。これからずっと一緒にいようね」

それから、シイも一緒に同じ部屋に住む生活が始まった。その生活に、確かにぼくは幸せを感じていた。

## 108話 敬意

今日はアリシアさんとレティさんと一緒に過ごすことにしていた。もともとアリシアさんたちが住んでいた家に行つて、色々と話をするつもりだ。

あの家はまだアリシアさんたちのものだということ、たまには掃除などをしていられるらしい。

手伝いを申し出たこともあつたけど、断られていた。

なんでも、自分の手で管理することに意味があるのだとか。わかるような、わからないような。

まあ、この家に愛着があるということなのだろう。ぼくはミストの町の家にはそれほど愛着がないからな。

結局、どこに居るかよりも誰と居るかのほうが大事だと感じているんだよね。

そう考えれば、今の環境は理想と言つて良いかもしれない。大切な人にいつでも会えるんだからね。

アリシアさんたちはぼくを何の用でこの家に呼んだのだろう。話だつて色々あるし。

別になんでもかまわないんだけどね。以前の悪夢のようなことはないと思はれるから。

「今日はゆっくりするんですよね。2人は何かしてほしいことはありませんか？」

「ふふつ、私に奉仕してもらおうかな。……なんてね。他愛のない話だよ。そういう時間も大事だからね」

「そうだね、アリシア。わたしたちだって偶にはゆっくりしたいからね」

アリシアさんたちはわりと冒険が大好きだと思つていた。それこそ、休みなんていらなとか言いかねないほどに。

流石にそんなことはなかったか。危険な任務に何度も連れ回されたのは、気分が乗つていたからかな。

まあ、夢が叶つたんだと思えばわからない話じゃないか。もう二度



と味わいたくはない感覚だけれど。

「そんな時間の相手にぼくを選んでくれて、嬉しいです。アリシアさんたちを喜ばせてみせますね」

「無理はしないこと。ゆっくり休むつもりなんだから、気を張っていても仕方ないよ。ユーリ君が私達を大好きでいるというのは嬉しいけどね」

「うんうん。ユーリ君は頑張り過ぎかな。そこも可愛いんだけどね。でも、ユーリ君と一緒にだけで私たちは楽しいからね。心配しなくてもいいよ」

そう言ってくれるのは嬉しいけど、それに甘えてしまつて良いのだろうか。

アリシアさんにもレティさんにもお世話になりっぱなしなんだから、返せる機会に返したいものだけれど。

まあ、ぼくが無理をしたらすぐに気づかれるような気がするから、うまいやり方を見つけないとね。

アリシアさんたちに心配をかけたいわけじゃなくて、喜んでもらいたいんだから。

「ありがとうございます。アリシアさんたちには助けられてばかりです」

「それでいいんだよ。今では仲間だけど、師匠を完全にやめたつもりはないんだから。年下は甘えておけばいいよ」

「そうだよ。ユーリ君の可愛さがわたしたちの癒しなんだから。あなたほど可愛い人なんてめったにいないよ。わたしたちは初めて出会ったかな」

2人の言葉は嬉しいような、悔しいような。

頼るだけではなく、頼られる存在になりたいと思うけれど、やっぱり2人にとってぼくはまだ子供なんだろうな。

でも、少しずつでも信頼されるようになりたい。オーバースカイに入ってくれるんだから、当然信頼はされていると思う。

だけど、それだけじゃなくて、ぼくに甘えてもいいと思えるくらいになりたい。

アリシアさんたちが望むことならば、何だつて叶えてあげたいけれど、アリシアさんたちがぼくの望みを叶えるばかりだから。

とはいえ、アリシアさんたちはずいぶん穏やかな顔をしている。

つまり、今は落ち着いた心境で過ごしているということだ。ぼくが可愛いって思われていることも影響しているはず。

だから、アリシアさんたちに甘える立場というのも悪いことばかりではないんだな。

愛玩動物くらいの役割かもしれないけれど、それでも2人の役に立っているんだ。

いずれは、もっともっと直接的な役に立ちたいものではあるけれど、今は満足しておこう。

アリシアさんたちは大人だから、ぼくが無理に役立とうとすれば、喜んだふりをしかねないからね。

そんな風に負担をかけたいわけじゃない。今できることをちゃんどやるのが大事だろうな。

「レテイさんには前にも言いましたけど、かっこいいって思われたくはありますね。アリシアさんたちを癒せているのは喜ばしいですけど」

「ふふっ、ブラックドラゴンを倒した時のユーリくんは十分かっこよかったよ。でも、いつでもかっこよくならなくてもいいよ。いざという時にかっこいいほうが、私は魅力的だと思うよ」

「直接は見えないのに、よく言うよ。でも、きつとはつきり見ていたら、今よりもつとあなたのことを好きになっただらうね。わたしたちが助けられるなんて、初めてだったから」

アリシアさんの言うことはよく分からない。ずっとかっこいいほうが良くないか？

とはいえ、アリシアさんが言うんだから、本当のことではあるのだろう。男と女の違いだろうか。それともアリシアさんの趣味だろうか。

まあ、どちらにしてもアリシアさんが魅力的だと思ってくれるのなら十分だ。

それにしても、今よりもっと好きになるって、今でも2人は十分ぼくのことを好きでいてくれると思うけれど。

そんな未来もあったのかもしれないと思うと、少しだけドキドキする。

今よりぼくを好きになった2人は、どんな態度になっていたのだろう。いまいち想像できないや。

でも、そうなったら、ぼくも2人をもっと好きになっていたのだろうな。それは間違いない。

「2人のことを助けられて良かったです。ぼくはアリシアさんたちが大好きですから」

「知っているけれど、改めて言葉にされるとまた違う味わいがあるね。悪くない気分だよ」

「ほんと、可愛いんだから。お姉さんもユーリくんのが大好きだよ」

やっぱり好意を言葉にするって大事なんだな。2人が喜んでくれているのを感じる。

2人が好きだっていうのは疑いようなない本音だから、恥ずかしくはない。いや、やっぱり恥ずかしい。

でも、それで嬉しくなってもらえるのなら恥ずかしさくらい我慢するよ。

それに、恥ずかしさを軽く超えるくらい、ぼく自身も嬉しくなれたんだ。2人が喜んでくれたことだね。

「本当に、2人に師匠になってもらえてよかった。あなた達との出会いは、ぼくの宝物です」

「私達だってそうだよ。君たちを弟子にできて本当に良かった。キラタイガーには感謝しないとね」

「あの戦いがなければ、わたしたちは出会えなかったからね。ユーリ君の友達には悪いけど、キラタイガーが現れてくれたのは幸運だったよ」

ぼくも2人と似たようなことを思っている。カインの犠牲がこの2人との出会いを繋いでくれたんだ。感謝したいくらいだよ。

まあ、2人の前でそんなことは口にできないけれど。失望されるのが恐ろしい。

「あはは……」

「不謹慎なことを言ってしまったね。でも、それだけユーリ君と出会えてよかったと思っっているんだ。それがどれだけ私達を幸せにくれたか」

「うんうん。冒険者になってよかったって思えたのは、ユーリ君のおかげだから。わたしたちと出会ってくれてありがとう」

アリシアさんたちがぼくの手で幸せになっけてくれている。それがどれほど嬉しいことか。

ぼくがもうばかりだと思っっていたけれど、もしかしたらアリシアさんたちに与えることもできていたのかな。

アリシアさんが対等な関係の冒険者仲間と冒険することは、ぼくが成し遂げたことだから。つまり、アリシアさんの夢をぼくが達成したことになる。

それは、ぼくの立場なら嬉しいに決まっている。アリシアさんが喜んでくれるわけだ。

だけど、もつともつと、まだまだ満足はしない。どれだけだっって幸せになってもらいたいんだからね。

「アリシアさんたちがぼくとの出会いを喜んでくれている。何よりのご褒美です。幸せですね、ぼくは」

「それを幸せに感じてくれるユーリ君だからこそ、私達の期待に応えてくれたんだろうね」

「そうだね、アリシア。こんなに尊敬してくれる子はいないよ。もういくらでも可愛がってあげちゃうー！」

レティさんに思い切り抱きつかれてしまう。嬉しいけれど、くすぐったいんだよね。

まあ、そのくすぐったさも愛おしいとすら思える。だって、レティさんがぼくを好きでいてくれる証のようなものだから。

嫌いな人にここまでのごことはぼくならできない。だから、幸せなくすぐったさなんだ。

「ユーリ君、抱き返してくれても良いんだよ？　なんなら、お姉さんのいろいろなところを触ってみる？」

「さすがにそれは……いや、嬉しいんですけどね？」

「レティ、ユーリくんは純情なんだから、あまりからかいすぎないようにね」

レティさんはぼくのことをからかっているのか。反応を楽しんでいるとかかな？

まあ、からかうくらいでレティさんが楽しくなってくれるのなら、いくらでも構わないけれど。

それにしても、レティさんは楽しそうな顔をしているな。見ているだけでも嬉しくなる。

本当に抱き返したら喜んでくれるのなら、恥ずかしさくらい我慢するけれど。でも、どこまで本気なのだろう。

まあ、ぼくの子供くらいに思っているだろうし、そこまで真剣ではないか。

「別にからかってくれてもいいですけど、ぼくだって男なんですからね？」

「それは知っているけれど、ユーリ君なら大丈夫だと思っているんだよ。レティはこれで親しく接する相手は少ないからね」

「アリシアだって人のことは言えないくせに。でも、最悪おさわりくらいなら良いよ？　それくらいで嫌いになったりはしないよ」

「いや、そんな事しませんよ……」

「あはは、照れちゃって。まあ、ユーリ君に好きなひとがいるのなら止めるけどね」

「今はよくわからないです。だから、何でもしてくれていいですよ」「あー。レティにそんな事を言っちゃうのか……」

「なら、全身わたしの羽根まみれにしてあげるね。覚悟すること！」  
そのままレティさんにもみくちやにされて、本当に羽根まみれにされてしまった。

アリシアさんはその様子を笑いながら見ていて、とても楽しそうだった。

2人と初めて出会った時には、こんな関係になるとは思わなかったな。でも、そうなれてよかった。

アリシアさんたちと出会えたことで、ぼくの冒険者としての生活が始まったんだ。

だから、これからずっと2人には感謝し続けるんだろくな。

## 109話 望み

今日はサーシャさんに招かれてエルフィール家の屋敷へと来ている。

個人的にプロジェクトU：Reに関するねぎらいをしたいという話だけど、あのパーティで十分だったんだけどな。

でも、断るのも悪い気がしてしまったので、誘いを受けることにした。

もうこの屋敷に来るのにも慣れたものだな。ぼくだけが誘われることのほうが多かったかもしれない。

最初は確かカタリナとアクアも一緒だったんだよね。それで、行方不明者が出ているって話をした。

その事件でユーリヤと出会うことになったんだよね。懐かしいな。それで、一体どんなおもてなしをしてもらえるのだろう。サーシャ

さんはぼくのことを知ってくれているし、あまり派手ではないだろうけど。

それにしても、サーシャさんと出会ってからもずいぶん経ったよね。

あのころはオーバースカイがここまで大きくなるなんて想像していなかった。

サーシャさんに受けた依頼のおかげで出会えた人はいっぱいいるので、とても感謝している。

「ユーリ様、よくぞいらつしやいましたわ。ささやかですが、ユーリ様の好物も用意しておりますので、後で食べていただきたく思いますわ。ユーリ様が楽しめるよう、尽力させていただきますわ」

ぼくの好物となると、魚料理かな。まあ、そこは何でも良いか。

サーシャさんはぼくの好みに詳しいので、今回のもてなしには結構期待してしまっている。

とはいえ、あまりお金をかけていないといいけれど。サーシャさんに負担をかけたいわけではないからね。

ぼくから今回の料金を支払うというのも多分失礼な話だし、悩まし

いところだ。

「ありがとうございます。目一杯楽しんでいきますね」

「ええ。そうしていただければ、わたくしも嬉しいですね」

サーシャさんには何から何までお世話になっていくけれど、ぼくはそれにふさわしい利益をあげられているのだろうか。

ぼくが立派な冒険者になればサーシャさんの役に立つとは言われていたけど、どうだろう。

オーバースカイは十分に活躍しているとは思いますが、それ以外にもなにか必要なのでは？

よく分からないけれど、例えばサーシャさんについて行って会うとか、そういうことが。

サーシャさんに頼まれれば大抵のことを引き受けるつもりでは居るのだけれど。

「サーシャさんが用意したのなら、安心して楽しめますからね」

「そこまで信頼していただけますのね……嬉しいですね。これまでの苦勞が報われたようですね」

やはりサーシャさんも苦勞しているのか。ぼくにはよく分からないとはいえ、当然か。

そこら辺をぼくが支えるというのは難しいだろうし、どういう形でならサーシャさんに貢献できるだろうか。

ぼくにできることは戦いくらいのものなので、サーシャさんの依頼はしっかりと受けようと思うけれど。

「ぼくが力になれることは限られていますけれど、できるだけ頼ってくださいね。サーシャさんのお役に立っていると嬉しいですよ」

「そんな事を気にされずとも、十分わたくしの支えになっていただいていますわ。ですが、ありがとうございます」

まあ、プロジェクトU：Reの事件を解決したり、強いモンスターを何体も倒したり、役に立っていないわけではないだろう。

それでも、ぼくにできることでサーシャさんの負担を軽減できるのならと思ってしまう。

サーシャさんは優しいから、きっとぼくが無理をすることは望まな



いだろうけれど。

でも、ぼくだってサーシャさんに同じ気持ちを抱いているのだ。まあ、サーシャさんが本当に無理をしているのかなんてわからないんだけどね。

「それなら良かったです。サーシャさんには本当にお世話になっていきますからね。感謝しています」

「それもこれも、ユーリ様が素晴らしい冒険者だからですわ。ですから、支え甲斐があるのです」

今更ぼくが優れた冒険者であることは否定しない。アクアのおかげがほとんどだと思うけどね。

だけど、それだけで終わらせられないほどにサーシャさんにはサポートしてもらったと思う。

だから、サーシャさんに喜んでもらえるお礼ができれば良い。

まあ、何をすればサーシャさんが喜ぶかなんてわからないんだけど。

サーシャさんがはつきり何をしてほしいか言ってくれば、できる限りのことはするんだけどな。

「それでも、サーシャさんには本当にたくさんのもをもらいましたから。だから、サーシャさんが喜んでくれるなら、大抵のことはしますよ」

「でしたら、わたくしの夫になっていただけますか？ ……冗談ですわ。ユーリ様に貴族としての生活は似合いませんもの。ですが、わたくしと結ばれたいならば、歓迎いたしますわよ」

サーシャさんの言葉はどこまで本気なのだろう。

笑顔のサーシャさんからは、うまく感情が読み取れない。やはり、サーシャさんも貴族だということなのだろう。

とうか、サーシャさんと結ばれるとして、サーシャさんはどうなるのだろう。

ぼくがうまく貴族としてやっていけるだなんて、サーシャさんは考えていないだろう。

それで、どうやってぼくとサーシャさんが結ばれたあとのことを処

理するのだろうか。

となると、流石に冗談かな。まあ、本気だとしても今受けるのは難しいけれど。

「あはは……サーシャさんは魅力的ですけど、さすがに身分が違いますがますよ」

「そうですか。残念ですわね……気が変わったら、いつでも言うてくださって構いませんわよ」

サーシャさんは満面の笑みだ。ほんと、どこまで本気なのやら。

まあ、完全に本気なら、もつと別の言い方をするだろうし。からかいが混ざっているのだろう。

とはいえ、サーシャさんと結ばれたとしたら、それはとても幸せなのだろうな。

それでも、今はそういうつもりにはなれない。カタリナのこともあるのに、不誠実だろう。

「では、気が変わったら、そうしますね」

「ええ。ところで、そろそろ昼食にちょうどいい時間ですから、料理を運ばせますわ」

サーシャさんの言葉通り、すぐに料理が運ばれてきた。

一体どうやって連絡したのだろう。事前に時間を決めていたのかな。

そこら辺を気にしても仕方ないか。目の前のご飯に集中しよう。

昼ごはんとして用意されたのは、魚と野菜を同時に煮込んだ料理と、後は多分グロリアカウのステーキかな。

前にサーシャさんに用意してもらったグロリアカウはスープだったけれど、匂いは似ているから多分グロリアカウでいいはず。

ステーキはびっくりするぐらい柔らかくて、以前のスープを思い出した。

あのときも同じような感想だったはず。でも、ステーキでこの柔らかさか。すごいな。

そして魚と野菜を煮込んだ料理を食べてみたけれど、魚は弾力があって味がよくしみている。

野菜にもしつかり味がついているので、魚に負けていないと感じた。

とても美味しいんだけど、以前カタリナにグロリアカウの希少性について聞いてしまったせいで、値段が気になってしまおう。

本当にサーシャさんの迷惑になっていないんだよね？ 嫌だよ、食事のためにとんでもない出費をさせるのは。

とはいえ、出されたものを食べないのは論外だからな。それに、値段を聞くのもちよつとおかしな話だ。

ここは素直に料理について褒めておくのが良いのだろうな。

「サーシャさん、とつても美味しいです。わざわざ用意してくださいっで、ありがとうございます」

「ユーリ様はわたくしの特別なお客様ですから、当然ですわ。それにしても、ユーリ様はずいぶんと可愛らしい顔で食事をなさるのでね」

それって、美味しいのが顔に出ていたということだろうか。まあ、喜んでるのが伝わる分には良いことなただけだ。

だって、せっかくサーシャさんが用意してくれた料理だからね。

とはいえ、かなり恥ずかしくはある。ぼくがどんな顔をしているのか知りたいけど、質問するのはちよつとね。

「サーシャさんに失礼でなければ良いんですけど。ぼくはマナーに詳しくないので、気づかないうちに変なことをしているかも……」

「そんな心配をなさらなくても構いませんわ。ユーリ様がこちらにしっかりと配慮されているのは伝わっていますわ。ですので、安心してくださいまし」

「それなら良かったです。サーシャさんを不愉快にするのは、かなり嫌ですから」

「それだけわたくしを好意的に思ってくださいるのなら、それで十分ですわ」

サーシャさんはぼくと比べてだいぶ大人だと感じるな。10は離れていないように見えるけど、流石に年齢は聞けないし。

ぼくを子供だと思っているから色々と許してくれているという可

能性を思い浮かべてしまった。

それは、ちよつと嫌だな。サーシャさんにはできるだけ頼ってもらいたい。

甘えるばかりではなくて、色々助けになりたいんだ。

「ぼくが失礼を働いているようなら、すぐに言つてくださいね。サーシャさんに嫌われたくないんです」

「ふふつ、可愛らしいですこと。あなたを嫌いになるとするならば、わたくしを攻撃してきたときでしょうか。ですが、ユーリ様がそんな事をするとは思っておりませんわ」

「もちろんですよ。サーシャさんを傷つけるなんて、絶対にごめんです」

「ええ、存じておりますわ。ですから、心配なさらなくてもよいのです。貴方様の心は、しっかり通じておりますわ」

ぼくはわかりやすいといろいろな人に言われているから、本当に通じているのだと思う。

サーシャさんなら、ぼくよりわかりにくい人の心だつてある程度分かるだろうし。

だけど、やっぱりしっかりと言葉にしたいな。ぼくがサーシャさんに感謝しているってことは。

今日はすでにちよつとだけ伝えてはいるけれど、まだまだ足りないからね。

「サーシャさんのおかげで、ぼくは冒険者として成長できたんだと思います。それに、サーシャさんに受けた依頼にはたくさんものをもりました。ありがとうございます」

「こちらにも打算あつてのことですから、あまり気にしなくとも構いませんわ。ですが、感謝の言葉はありがたく受け取っておきますわ」

「言葉だけじゃなくて形にもしたいんですけど、サーシャさんの喜ぶものが分からなくて……ぼくとは違う世界に生きていますからね」

「それでしたら、またこのような機会を作つていただければ十分ですわ。ユーリ様と過ごす時間は、あなた様だけでなく、わたくしにとつても大切な時間です。ですから、これからもずっと、よろしくお願い

いたしますわ」

本当にサーシャさんと出会えて良かった。サーシャさんが望むのならば、また何度でもここに来よう。

## 110話 回顧

今日はミーナとヴァネアと一緒に過ごすことになった。この3人で過ごすのは久しぶりな気がする。

いつもなら一緒に剣の訓練をするんだけど、今日はただゆっくり過ごす予定だ。

ミーナにしろ、ヴァネアにしろ、戦いはかなり好きなようだから、珍しくはある。

この3人で最後にゆっくり過ごしたのって、ひよつとして王都での大会の後じゃないか？

まあ、そこを気にしても仕方ない。めったにない機会を楽しめばいいか。

「ミーナもヴァネアも、今日は珍しいね。まあ、毎回戦っていても疲れちゃうか」

「それもあるけど、僕としては君とゆっくり話したかったんだ。大事件が終わった後だし、また戦うための英気を養うとでも思ってくれ」  
「坊やを誘うって決めてからずっとソワソワしていたのよ、ミーナは可愛らしいものよね」

「ヴァネア！ 余計なことは言わなくていいよ。とはいえ、本当に君とこうするのを楽しみにしていたんだよ、ユーリ」

ミーナは戦っている時以外はだいたい笑顔だけど、今日は普段より楽しそうに見える。

その顔の原因がぼくだというのなら、光栄な話だ。ぼくだって同じくらい楽しんでいるとは思うけれどね。

ミーナと初めて会った時には、ここまでの関係になるとは思っていなかった。

あそこでおしまいの関係だと思ふよね、普通。

エンブラの町での大会は得られたものが多かったけど、今となってはミーナとの出会いが一番かな。

ミーナのおかげで色々と強くなれたという面もあるけれど、こうして仲良くできる相手になってくれたことが嬉しい。

今では対等とは言いがたい難しい実力差になってしまったけれど、ミーナと競い合うことは本当に楽しかった。

それもこれも、ミーナが人間的にも好きになれる相手だからだ。ただ強いだけの相手ならば、競い合いたいとは思わないからね。

「それは嬉しいな。でも、ぼくだって同じ状況なら似たようなことになると思うよ」

「ユーリなら本気で楽しみにしてくれると思うけど、そこまでかな？」

「ミーナ……それは言ってしまうって良いことだったのかしら？」

「あつ……いや、違うんだ、ユーリ。僕がそんな子供みたいな……」

これは、ミーナ自身も自覚しているくらいソワソワしていたつてこと？

それは嬉しいけど、恥ずかしい気もするな。

まあ、この話題にはこれ以上触れない方向で行こう。ぼくが同じ立場だったらそうしてほしいからね。

「それで、何の話がしたいのかな？ 2人となら何だって楽しいとは思うけどね」

「坊やったら嬉しいことを言ってくれるわね。まあ、思い出話かしらね。アタシたちには色々あったでしょう？」

「折角の機会だから、時間の許す限り話をしたいところだよ。僕とユーリで話をする機会って、あまりなかったからね」

そういえばそうかもしれない。出会ってからの期間の割には、一緒にいる時間は少なかったからね。

それでもミーナとここまで親しくなれたのはありがたいことだ。

かなり偶然の重なった関係だけれど、出会えて良かったのはつきり言える相手だからね。

「それなら、どこから話そうか？」

「アタシはミーナとの初めての出会いから聞いてみたいわ。ある程度は知っているけれど、詳しく知りたいもの」

「だったら、エンブラの街での出会いからだね。そういえば、あの時買ったアクセサリーは誰に贈ったんだい？」

「そこも説明しないと……ミーナはアクセサリー屋の娘だったのは

知っている?」

「そうね。聞いたような聞いていないような。剣をずっと振っていたのは知っているわ」

「そこにぼくが贈り物を買に行つてね。そこでたまたま出会つたんだ。その時には、カタリナとアクアにアクセサリーを贈つたんだよね。カタリナには髪飾りを、アクアにはブレスレットを」

本当に懐かしい。あの時にはぼくはずいぶん弱かつたはずだ。

それを言つてしまえばミーナも弱かつたことになつてしまふか。

とはいえ、純粋な実力ならミーナのほうが上だつた。あの時勝つたのは本当に偶然だ。

それはさておき、あの時には訓練に付き合つてもらつたお礼に2人に贈り物を選んだんだつて。

アクアは今でも大切にしてくれているし、カタリナもたまにはつけてくれている。

2人にはまた贈り物をしてもいいかもね。いや、ミーナたちにも良いかもしれない。

まあ、それはまたいずれの話だ。今は会話に集中すればいいか。

「結局ユーリは気が多かつたんじゃないか? 2人に別に贈り物をするなんて」

「そういう意図で贈り物をしたんじゃないよ。本当に、ただの感謝だから」

「ふふつ、そんな時からあの2人とは仲が良かったのね。アタシもその光景が見てみたかつたわ」

ヴァネアの言う事は不可能ではあるけれど、気持ちはわかる。

駆け出し時代のアリシアさん達を見たいとか、昔のステラさんを見たいとか、色々とあるからね。

とはいえ、それはできないから、これからの関係性をより良いものにするしか無い。

そうすれば、もっともつと色々なみんなの一面が見られるだろう。

カタリナやアクアの新しい一面はあまり想像できないけどね。

あれだけずっと一緒にいて今更そんなものが見つかるとはあまり



思えないから。

「ヴァネアの昔がどんなだったかも気になるかな。言いたくないならいいけど」

「アタシの昔は、まあただの人型モンスターだったわね。きつとあの頃に坊やと出会っていたら、ろくな展開にはならなかったわね」

そんなモンスターとここまで仲良くなるなんて、ミーナは一体何をしたのでだろう。

野良の人型モンスターと仲良くなるイメージは全然できない。

これまで何度も戦ってきたけど、友好的な相手は1体もいなかった。

野良のヴァネアとぼくが出会っていたら、きつとヴァネアを殺していたと思う。そうならなくてよかった。

「人型モンスターとぼくが和解したことって一度もないからね。ほんと、ミーナとヴァネアが出会ってくれてよかったよ」

「本当にね。坊やと殺し合ってたなんて、考えるだけでも嫌だもの。こうして話してられるのも、ミーナのおかげよ」

「今思えば、僕の判断は甘かったんだろうね。でも、それで良かった。ヴァネアと契約できたことは、僕の大切な財産だからね」

ヴァネアとミーナが契約してくれたおかげで、ぼくはミーナと再会できたし、ヴァネアとも仲良くなれた。

だから、ぼくにとっても大切な財産になったと言っていていいと思う。ぼくは何度も出会いの幸運に感謝しているけれど、最も強い幸運はミーナ関連だろうな。

偶然に偶然が重なった結果として今の関係があるのだから。

「ぼくも同じ気持ちかな。それで、話を戻すんですけど、その後の大会でぼくとミーナは決勝戦で戦ったんだ」

「そうだったね。あの時は、僕が勝つと信じて疑っていなかった。だけど、ユーリには負けてしまったんだ。あれは決まったと思ったんだけどね」

「詳しく説明すると、ぼくが終始追い詰められていて、いい一撃を貰った後のミーナの際に無理やり勝ったんだよ。あれはきつと再現でき

ないね」

「そうだったのね。その時の坊や、かつこよかったんでしようね」

「どうだろうな。最後の最後に無理やり試合だけ勝ったようなものだから。」

「実力的には完全に負けていたと思うし、あの時に戻ったとしても勝てないと思う。」

「僕は正直負けたショックでそれどころじゃなかったから。でも、ユーリならきつと決意を込めた顔をしていたのだろうね」

「ああ、そんな感じがするわね。坊や、アクアとカタリナが見に来ているのに、気合が入らないわけがないもの」

「確かに、カタリナの応援のおかげで勝てたんだと思う。みんなのために勝ちたかったんだ」

「ユーリはその時からずっと誰かのために戦っている気がするよ。僕とはぜんぜん違う」

「ミーナの言葉はあまり納得ができないな。」

「これまでミーナはぼくの事を考えて力を振るってくれていたと思うけれど。それにヴァネアも。」

「単に自分のためだけに力を振るうような人間ならば、ここまで大切には思えていないはずだ。」

「とはいえ、なんとやって納得させればいいのか。ミーナの考えを変えるほどの言葉は思い浮かばない。」

「ミーナがぼくと違うとは思わないけれど。でも、自分のために強くなるのは悪いことじゃないよ。今ではぼくの仲間としてその力を役立ててくれているんだし」

「君には置いていかれたくなかったからね。だから、必死だったんだ」  
「それで、あの時ぼくに真剣で戦いを挑んできたのだろうか。」

「一歩間違えれば死ぬような攻撃までされてしまって、悲しかったけれど。」

「だけど、どちらでも無事で和解できたのだからそれでいい。ちょっと大きいケンカくらいに思っておけば。」

「そうなんだね。でも、無理はしないでね。ミーナが傷つく姿は見た」

くないから」

「うん。今ならユーリのことを信じられる。僕を忘れてたりしないで。ずっと仲良くできるって」

それってつまり、ぼくがミーナのことを忘れられると思われていたのか。

悲しくはあるけれど、心というのは制御出来ないものだから、仕方のないことではある。

とはいえ、今では信じてくれているんだ。ぼくの思いが伝わったということだろう。

でも、はつきりと言葉にすることは大事なことだ。改めて、ちゃんと伝えよう。

「そうだね。ミーナもヴァネアも、ぼくにとってとても大切な人だよ。これから、ずっと一緒にいたい」

「嬉しいな。ふがいない僕でも、君にとって大切な存在でいられるんだから。でも、ユーリと対等なライバルになることを諦めたわけじゃないよ」

そういうミーナの顔は朗らかさと頼もしさを同時に感じるもので、ミーナの心の余裕が伝わってくるようだった。

本当にミーナがぼくに追いついてくれるのなら、とても嬉しいけれど。

ミーナならできると思う。そう信じていい相手だとはつきりと言える。

とても楽しみだな。またミーナと競い合う時間は。

「その意気だわ、ミーナ。アタシも、2人にとってふさわしい存在でいられるように頑張るわね」

ヴァネアからは凄まじい気合を感じる。

もうすでにぼくにふさわしい相手だと思うけれど、ヴァネア自身が納得できる形になることを願う。

いつか、この3人で最高の連携ができたらいいな。まあ、ぼくとアキラとカタリナが1番だとは思うけれど。

「ミーナ、ヴァネア、ぼくと出会ってくれてありがとう。2人のおかげ

で、ぼくは強くなる楽しさを知ることができたんだ」

2人はそれに笑顔で返してくれた。

またいつか、最高のライバルと最高の戦いができる日が来てほしい。心からそう思えた。

## 111話 期待

今日はフィーナと一緒に過ごす予定だ。初めてあった頃に連れて行った公園に来ている。

相変わらず人がまるでないので、2人でゆっくり過ごすことができるだろう。

フィーナは初めて出会った時と比べて明らかに笑顔が増えている。嬉しい限りだ。

最近はみんなとそれぞれにゆっくりと話をする時間を作ることになったけれど、そういう時間は落ち着くんだよね。

だから、フィーナもそんな感覚を楽しんでくれたらいいな。

まあ、どんな感覚だとしても喜んでくれるのならそれでいいんだけどね。

フィーナがづらい過去を気にしなくて良くなるようになってくれたら嬉しいけど、難しいかな？

今は目の前のフィーナのことに集中して、余計な考えは排しておいたほうがいいかな。

素直にぼくが楽しむことが一番とまでは言わないけど、考え込むだけじゃうまくいかないよね。

さて、今回は弁当を用意してきたし、この公園ですつと話している問題はない。

どんな話をするのがいいかな。昔話は避けたほうがいい気がするけれど。

「フィーナは最近楽しいことはあるかな？ ぼくはみんなと過ごしていればだいたい楽しいかな」

「そうですね……ユーリさんと一緒にいる時間でしょうか……」

それは喜んでいい話なのかな？ いや、ぼくと居る時間が楽しいと思ってくれている事自体は嬉しいよ？

だけど、他者が主体の楽しみって、結構危ういんじゃないかな。ぼくも人のことは言えないけれど。

例えばぼくになにかあったり、ぼくがフィーナに嫌われたりした

ら、それで楽しみを失ってしまったわかないかな？

それに、最近ぼくがフィーナと一緒にいた時間が多いとはいえない。つまり、楽しい時間が少ないかもしれないってことだ。

ちよつと心配になってしまいう話をされて、少しだけ困ってしまった。フィーナは他の人と話ができているわけではないし、それでこうなってしまうのか。

うーん。フィーナの考えを否定するのは良くないし、どうすればいいのだろう。

楽しいことを紹介するっていったって、フィーナに無理をさせるだけかもしれない。

フィーナの笑顔自体は前より増えているのは確かだから、悪い方向に進んでいたわけではないはず。

とはいえ、危うさを感じてしまうのも否定はできない事実。

他の人といっても楽しくないのだろうか。それとも、特にぼくと居るときが楽しいのだろうか。

そのどちらかによっても随分問題の度合いが変わってくる。

だけど、それを直接聞いてしまうのはまずいよね。さて、どうするのが正解だろう。

「それはありがとう。ぼくもフィーナと居る時間は好きだよ。それで、他になにか趣味はあるかな？ ぼくは食事かな」

まあ、嘘ではない。とはいえ、親しい人と一緒に食べるのが好きなのだ。

ステラさんやカタリナの手料理とか、サーシャさんやハイデイに用意してもらった料理とか、そういうのだけだからね。

自分一人で食事のためにどこかへ向かうということはないし、自作の料理に凝っているわけでもない。

まあ、今日の弁当はぼくが用意したものではあるけど。

冒険者として、ある程度自分でも食事の準備はできるのだ。そうじゃないと、困る場面はあるだろうからね。

それよりも、フィーナは趣味を持っているのだろうか。

ちやんと1人のときにも楽しめることを持っていないと、やっぱり

心配になる。

フィーナがぼくと離れる時間はかならずある。だから、その時間をどう楽しんでいるかは大事なんだ。

だけど、ぼくが何かを強制する訳にはいかない。フィーナが自発的に楽しめるものがあればいいんだけど。

「特にありません……わたしはユーリさんといられれば十分ですから……」

本当に困る回答が返ってきてしまった。

どうしよう。どうするのが正解なんだ？

フィーナがぼくのことを好きでいてくれるだろうことは嬉しい。これは本当の気持ちだ。

だからといって、フィーナの世界にぼくしかいないという状態は絶対に問題だろう。

確かに、ぼくはフィーナのすべてを受け入れている。でも、それはぼくじゃなくてもできることのはず。

フィーナがぼくを大切にしてくれているのは構わないんだ。

だけど、フィーナを大切にしてくれる人は他にも居るはずだし、それをフィーナには知ってほしい。

それでも、ぼくからそういった事を言ってしまうと、フィーナを否定しているようなものだ。

本当に悩ましい問題だ。少なくとも、今すぐ解決しようとしてもダメだろう。

ゆつくりと、時間をかけてフィーナの心を解きほぐしていくしか無い。

とはいえ、その手段でかかってしまう時間がもどかしくはある。

フィーナに限った話ではないけれど、フィーナにはずっと幸せでいてほしいんだ。

そのために、ぼくに一体何ができる？　ずっとフィーナのそばにいろんことはできない。

そうなる、ぼく以外に大切な何かを作ってもらうしか無い。

だけど、そのための手段が思いつかない。何度も一緒に遊んでその

中で趣味を見つけてもらうか？

少なくとも、その手段では今日明日ではどうにもならないはずだ。まあ、フィーナがぼくだけでも大切に感じてくれていることは最初に比べれば前進している証だ。

だから、希望はあると言い切っても問題ないはず。問題は、その希望にどうやって近づくかだ。

「だったら、今日はいっぱい楽しんでいってね。フィーナと2人なのは久しぶりだからね」

「はい、もちろんです……ユーリさんと一緒にいる貴重な時間、無駄にはしません……」

やっぱり、フィーナはぼくと一緒にいられる時間を短いと感じている。

そして、それを不満だと思っているんだ。今の言葉ではつきりとわかった。

そうだとすると、ぼくがフィーナと一緒にいられる時間には限界がある。

だからこそ、ぼく以外の大切な存在がフィーナには必要なはずだ。そうすれば、ぼくがいない間でもフィーナは幸せでいられるはずだから。

だけど、どうやってそんな存在を作ればいいんだ？ フィーナはオーバースカイの仲間たちとはある程度接している。

それでも、その人達をぼくほど大切には思っていない。

無理やり仲を深めようとしても逆効果なのはぼくにだって分かる。フィーナと2人きりではなくて、他の人も混ぜた時間を作るか？

いや、それは問題があるはず。最低でも、ぼくがフィーナと2人でいる時間を減らさないことは絶対だ。

本当に今回降って湧いてきた問題は難題と言える。

だけど、それを解決する手段を考えることは嫌ではない。楽しいとは言えないけれど、フィーナの幸せのためなんだ。

ぼくはやっぱり大切な人が幸せでいてくれることが1番なんだな。昔ならば、こんなに大変な問題を解決したいとは考えなかったはず



だ。

いや、アクアとカタリナのためならばできたかもしれないか。

それでも、そういうことがしたいと思える相手が増えたってことは嬉しい限りだ。

「それで、フィーナはなにか遊びがしたい？ 話をしているだけでいい？」

「ユーリさんと一緒ならどちらでも構いません……強いて言うなら、ユーリさんをより感じられる方ですね……」

「なら、今日は話をしようか。遊びはまたの機会にするけど、ぼくを感じられるってなると、マッサージとかでいいかな？」

「もちろん、構いません……ユーリさんがわたしに触れていただけなら、きつと幸せですから……」

なるほど。ついマッサージを提案してしまった時は失敗かと思っただけで、そういう感じか。

そうなる、アクアとよくする遊びをアレンジするのがいいかもしれない。

まあ、それは今日考えなくてもいいか。話に集中しよう。

「そうなんだね。マッサージの腕はある程度自信があるから、楽しみにしているね」

「そうなんです……どなたかで、練習されたのでしょうか……」

それは正直に言ってしまった方がいいのかな。ユーリヤにマッサージをしたことがあるし、その時には喜んでもらえたんだけど。

というか、いつの間に関自分から提案しても平気になっちゃったんだ。ちよつと微妙な気分だぞ。

「それは、まあ色々……フィーナに心地よくなってもらえるように、頑張るね」

「それは嬉しいです……ですが、ユーリさんにしていただけるなら、どんな腕でも心地いいはずですよ……」

「そんな事を言ってくれるなら、ちゃんと練習しようかな。本とか読んでみてもいいかもね」

「そこまでしていただかなくても……ですが、その気持ちは嬉しいで

す……」

結局フィーナにマッサージをすることになってしまった。

うかつな提案をしたぼくが悪いとはいえ、今からドキドキしてしまう。

そんな感情を隠しながら話を続けて、弁当を食べる時間になった。

フィーナは明るい顔でぼくの用意した弁当を食べてくれていて、なんだか嬉しかった。

「ユーリさんの手料理、味わわせていただきました……とても美味しかったです……」

料理は下手ではないとは思っているけど、ここまで褒められると照れくさいな。

でも、フィーナの顔が晴れやかである嬉しさのおかげで、照れは表に出ていないと思う。

それにしても、手料理と言われてしまうのか。間違っではないけれど。

フィーナが喜ぶのなら、また作ってもいいかもしれないな。くどくない味がフィーナの好みのはずだから、もつと意識してもいいかもね。

「喜んでもらえて嬉しいよ。ところで、フィーナは料理できるの？」

「できるとはいいがたいです……ですが、ユーリさんに食べていただけるのなら、作ってみたいです……」

何気無くした質問だけれど、もしかしたらフィーナが趣味を見つかるきっかけになるかもしれない。

これで、料理を楽しく思ってもらえるのなら、とてもいい効果があるだろう。

まあ、期待しすぎても良くない。フィーナが無理しない範囲で、ゆっくり上達してもらいたいな。

「フィーナが作ってくれるのなら、もちろん食べるよ。楽しみにしているね」

「はい、ぜひ食べてください……ユーリさんの喜ぶ顔が、今から楽しみです……」

これは本当にいい傾向かもしれない。ぼくが一緒にいない時間も楽しみにできることが生まれるきっかけになってくれればいい。

フィーナ、どんな失敗をしても食べきってみせるから、料理を楽しんでほしいな。

それで、もっともっと幸せを知る切っ掛けにしてほしい。

フィーナがどんな料理を作ってくれるのか、今から楽しみだな。

## 112話 思惑

今日はハイデイの屋敷へと来ている。理由はもちろんハイデイたちと会うためだ。

ハイデイたちに会うのはそう久しぶりとは感じないけれど、それでも会える機会は少なく感じる。

だからこそ、その少ない時間をしっかりと楽しまないとね。

ハイデイの騎士になつてしまえば、一緒にいられる時間は増えるのだろうか。

最近の本気でハイデイの騎士になることを検討しているぼくが居る。

ハイデイならば、みんなと一緒に騎士みたいな扱いにしてくれると思うんだよね。

みんなともハイデイとも長く一緒にいられるのならば、それ以上はない。

まあ、みんなに相談しているわけではないから、今すぐにはいかないけれど。

「ハイデイ、今日は一体何の用事？ 普通に話をするだけ？」

「そのようなところだ。貴様と会話をする機会はそう多くないのでな」

そう言うってことは、ハイデイもぼくとの時間を楽しみにしてくれているはず。

まあ、そうでもなければ王族がただ遊びに来たりはしないか。

なにせ、ハイデイが会おう相手はある程度選べるだろうし。

いや、そうでもないのかな？ よくわからないけど、政治のためだけに人に会っているのかもしれないよね。

ハイデイがどういう仕事をしているのかは聞いたことがないから分からない。

とはいえ、自分から聞こうとは思わない。言っただいことなんてそう多くないだろうし。

ハイデイが話したいと思うのなら、いくらでも聞くんもりではあ

るけれど。

まあ、そんなことはないか。相談する相手としては間違いないが、は不適格だし。

リデイさんが今日もお茶を用意してくれる。また前とは違う味で、本当にお茶には色々あるのだと思いついてる。

リデイさんは相当お茶が好きなのか、それともお茶を用意するのが仕事なのか。

まあ、リデイさんがお茶が好きだということは分かる。そうでなければ、ぼくにお茶を楽しむことが大事なんて言わないだろうし。

「リデイさん、今日も美味しいです。お茶って沢山の種類があるんですね」

「それは良かった。そうですね、茶葉の種類や加工の仕方、組み合わせなどによっていくらでも味は変えられますから。いくらでも追求できると言っているんですね」

なるほど。茶葉が10種類で2つを組み合わせるだけで45種類。3つならば120種類。1、2、3の組み合わせを足せば175種類。それだけではなく、4、5、6と続いていく。

それに加工の仕方まで掛け合わせるとなると、どれだけ少なく見積もっても1000種類は超えるだろう。

それだけじゃない。茶葉どうしの量の調整だってある。その組み合わせだって途方も無い数だろう。

それに、茶葉の種類が10ということはないに決まっているのだから、一体どれほどの組み合わせがあることやら。

それこそ、一生をかけたとしてもすべての組み合わせを味わうことはできないのだろうか。

そうなってくると、いくらでも追求できるという言葉は本当に違くない。

「今考えただけでも、極めるには無限の時間が必要だと感じます。それはそれは奥深いのでしょうかね」

「ええ。小生など、まだ山の麓に居るかすらも怪しい。頂点に立つ人間など、はたして存在するのかもわかりません」

それはそうだろうな。でも、リディさんはそんな事を言いながらも楽しそうだ。

やっぱり、リディさんはお茶が大好きなんだろう。初めて出会った時には想像もできなかった一面だな。

まあ、そんなところもリディさんの魅力なのだけけれど。

「ユーリ、俺のことも忘れてもらっちゃ困るぜ。どうだ？ また戦ってみないか？」

「今日は無理だよ。でも、機会があればそれもいいかもしれないね」「言ったな？ 約束だからな、ユーリ」

「かまわないよ。イーリスとの勝負も結構楽しいからね」

イーリスは満面の笑みといった様子だ。本当に戦うことが好きなんだな。

でも、ぼくもちよつと楽しみにしている。ミーナのことといい、ぼくも戦いが好きなのかもしれないな。

とはいえ、ぼくは相手を傷つけたいわけじゃない。そこを忘れることの無いようにしないとね。

「くくつ、ユーリよ、余よりもリディやイーリスを優先するとはな？ 貴様も随分偉くなったものだな？」

明らかにハイディはからかっているという顔なのだけれど、ちよつと恐ろしいから止めてほしい。

ハイディがそういう事を言うのと冗談にならないんだよね。

まあ、ここに居るのはリディさんとイーリスだけだから、周りが暴走することは無いのが救いか。

それでも、今のハイディの言葉は心臓に悪い。正直冷や汗をかいてしまった。

「やめてよ、ハイディ。そういうつもりはないって分かっているくせに。はあ。今でこの調子なら、ハイディの騎士になったら大変どころじゃないんだろうな」

それは分かりきっているのに、ハイディの騎士になることは嫌じゃない。

ほんと、ハイディには随分心の奥深くまで入り込まれてしまったか

もしれない。

それでも、悪く思うどころかいい気分なのだから、ぼくもどうかしっているな。

それだけ、ハイデイが魅力的だってことなんだろうけれど。

ハイデイの正体がこの国を作ったアーデルハイドだと知った時には驚いた。

だけど、ぼくとはまるで遠い存在なのだと思ってからも、親しみのようなものを感じてしまう。

ぼくをからかってくることを含めて、ハイデイの茶目っ気みたいなものが大きく影響しているはず。

ハイデイはどこまで分かかってああいった態度を取っているのだろうか。

ぼくも、ハイデイに狙って心を絡め取られてしまったのかもしれない。

そうだとしても、ハイデイに疑いも嫌悪感も抱けないのだから、大概だよ、ぼくも。

ハイデイの心の裏側には間違いなく冷徹な計算がうごめいている。それが分かりきっているのに、それすらもハイデイの魅力に思えて仕方がない。

落ちるところまで落ちてしまったものだ。でも、それも悪くない気分だ。

「くくっ、ならば、一時的に試してみるか？ そうなれば、間違いなく貴様は余のものになるだろうよ」

ハイデイの言葉を否定できない。今以上にハイデイに近く接していれば、絶対に魅了されてしまう。

それでも手を伸ばしたくなってしまうぼくがいて、ちよつと呆れる。

ぼくは夜に火へと向かっていく虫かなにかなのだろうか。ハイデイにそれくらいの輝きがあるのは確かだけれど。

「そういう未来もきつと楽しいと感じてしまうから、試すわけにはいきません。ぼくはまだ冒険者で居るつもりなんです」

そうは言ってみたものの、冒険者としてやりたいことはもうあまり無い。

それでも、仲間に相談もなく決める訳にはいかない。仲間あつてのぼくだから、仲間の意思を軽んじるのはダメだろう。

カタリナにキスをされたこともあるし、適当な気持ちで未来を決めるのはどうかと思うのだ。

ぼくの未来はそろそろ形が定まってきたような気がしている。

だから、その未来でもハイデイたちと笑い合うために、安易な選択はできない。

ハイデイたちの幸せも、オーバースカイのみんなの幸せも、ぼく自身の幸せも守りたい。

そのためにぼくにできることは何だろう。わからないけれど、嘘をつくようなことはしたくない。

大好きな人達を裏切れることは、ぼくの幸せを大きく損なうだろうから。

それよりも大切な、みんなの幸せだって傷ついてしまうと感じる。

何が正解なのかなんて全く想像もつかないけれど、せめてみんなには真摯でいたい。

「くくつ、すでに余の騎士になることを好ましく感じているようではないか。貴様が余のものになる未来は相当近いだろうな」

本当にそうだから困ってしまう。

ハイデイやリデイさんやイーリスとすぐに会えるというだけでも、素晴らしい未来だと思えてしまう。

もうぼくは引き返せないと進んでしまっているのだろうか。

それでも、今は我慢するんだ。先延ばしにしなければならないとしても、意味はあるはずだから。

「ハイデイと出会えたことは本当に良かったことですから。もちろん、リデイさんやイーリスも」

「そうだろうな。余が全力を尽くして支配できぬ存在など無いのだから」



「ふふっ、そう言っていただけで嬉しいですよ。小生も、ユーリ殿と出会えてよかったと感じていますよ」

「ユーリはやっぱ面白えな。だが、それでこそオリヴィエ様に与えられた勲章にふさわしいんだろうよ」

それぞれにそれぞれの反応を返してくるけれど、どれも好きだと感じてしまった。

ハイデイの一目傲慢な、それでいて優しさを感じる表情とか。

リデイさんの静謐で柔らかい雰囲気だとか、イーリスの調子に乗ってる感じとか。

本来欠点であるはずのところですら魅力的に感じていて、どうしようもない。

でも、この人達と出会ったことは後悔していない。深い谷に落ちているような感覚すらあるけれど、それでも。

「サーシャさんの頼みで出た大会ですけど、出場できたことは幸運でした」

「貴様はあの大会がどういうものか全く理解していなかったからな。それでも、あの大会の趣旨は満たしていたのだから、面白いものだ」

それは一体どういう意味なんだろう。

ぼくはほんとにあの大会については全然知らない。

サーシャさんに頼まれたから出て、ミーナがいたからやる気になって、それで優勝しただけだ。

「それってどういうことなんですか？」

「あの大会は余のものとなるにふさわしい存在を見極めるためのものだ。それで貴様を拾えたのだから、十分な成果だと言えるだろうな」

それとか。でも、サーシャさんは何のためにそんな大会にぼくを？

オーバースカイとして活躍してほしいなら、ハイデイのものという立場は邪魔なだけだと思うけれど。

「そうだとすると、サーシャさんがぼくを推薦した意味が分からなくなってしまうんですけど」

「まあ、貴族が己の抱えている手駒を紹介するという意味もあつたからな。貴様はそのために送り出されたのだろうよ」

それなら納得できる。オーバースカイが有名になってくれれば嬉しいとはサーシャさんは何度も言っていたから。

でも、その思惑だとぼくが優勝したらまずかったのでは？

まあ、いま気にしても仕方のないことではある。それは考えなくてもいいか。

「そのおかげでハイデイたちと出会えたんですから、サーシャさんには感謝したいですね」

「そうだな。余も感謝している。貴様は、余が最も信頼する人間なのだ。それを誇りに思うとよい」

ハイデイからの言葉はとても嬉しくて、ハイデイと出会えたことに改めて感謝した。

リデイさんとイーリスも笑顔でその言葉にうなずいていて、ぼくは最高に幸せだった。

この人達とまた何度でも話したい。だから、騎士になることに前向きな気持ちになった。

## 113話 尊敬

今日はメルセデスとメーテルと過ごす予定だ。またステラさんの家の空き部屋を使っている。

冒険についてなにか教えるのではなく、普通に過ごすつもりである。

メルセデスたちは随分強くなったけど、まだオーバースカイでは一番弱いかな。

それでも、オーバースカイというチームを組んだ頃のぼくより強くなっていると思う。

なので、まだ道半ばとは言えるだろうけれど、1人前と言うには十分じゃないかな。

ほんと、最初に出会った時の弱さからは想像できないくらいだ。

だから、息抜きの仕方を知っているのかを知りたくなっているんだよね。

メルセデスたちがどれほど努力していたのかは結果が証明している。

でも、頑張るだけだと燃え尽きてしまいかねないからね。メルセデスたちは努力が大好きって感じではないから。

今更といえば今更なんだけど、それでも大事なことだ。

メルセデスたちに潰れてほしくない。それは間違いなくぼくの本音なんだから。

「メルセデスたちは、暇な時にどんな遊びをしているの?」

「契約技の訓練っすね。ずっと練習してないと、ユーリさんには追いつけそうにないっすから」

「私もそれに付き合っているわ。アクアさんに教わったこと、無駄にはできないもの」

これは相当重症なんじゃないか? ぼくだってアクアやカタリナ、他の人と遊ぶ時間くらいあるぞ。

そんなに根を詰めて、疲れ切ったりしないのかな?

冒険で動きが悪くなっているようには見えないけれど、実際はどう

なんだろう。

休み方を教えるだけで今より動きが良くなる可能性すらあるのではないか。そう思えてしまう。

訓練が好きで好きで仕方のない人の顔ではないから、どこかで無理をしているように感じるんだよね。

そういう人なら、まだ安心して見ていられるのだけれど。

「息抜きすることも大事だからね。だから、今日はゆっくりと遊ぼうか」

「何をすすつか？ 契約技の練習にもなるっていうあれすすか？」

メルセデスが言っているのはアリシアさんやアクアと遊んだ時のことだろう。

あれはあれで遊びとして成立しているのだけど、今したいことはそれではない。

ちゃんと心と体を休めるための遊びだ。

とはいえ、何をするのがいいかな。球遊びは流石に人相手にすることじゃないだろう。

となると、良い遊びはあまり思いつかない。ぼくも休み方を知らない人だったのか？

まあ、アクアに癒される時間が休みだと思えば休めてはいるのか。

「しりとりでもしてみる？」

「流石に子供っぽくないすすかね……ユーリさんがどうしてもしたって言うのならすすけど」

そうなってしまうよね、やっぱり。

でも、あまりいい遊びは思いつかないのが事実だ。うっかり遊ぼうなんて言わなきゃよかったかな。

ただ、メルセデスに遊びを知ってほしいのは確かなんだよね。

さて、どうしたものか。ここから起死回生の一手が思い浮かぶか？  
一手といえば、ボードゲームがあるけれど。いっぱい頭使って疲れちゃうだろうか。

「じゃあ、ボードゲームとかカードゲームをする？ いくつか持っているけれど」

「よく分からないけど、それでいいです。ユーリさんのおすすめ、楽しみますね」

「私は見ているだけでも楽しいとは思いますが、私には見えないところがあるから、見てもらうだけでもいいのかな？」

「以前アキラと遊んだゲームをいくつか用意して、色々遊んでみた。」

メルセデスは戦略とかをあまり考えずに突っ込むタイプで、メーテルは心理戦を仕掛けるのが好きなようだった。

ただ、どちらもそこまで強くはなかった。アキラにはボロボロに負かされたけれど、この2人にはぼくがボロボロにする側だった。

最初の方は手加減をしていたんだけど、すぐに本気で来いと言われた結果だ。

メルセデスはちよつと罠を仕掛けたら簡単にハマるし、メーテルは心理戦が逆に答えを分かりやすくしていた。

手加減しようとした瞬間に気が付かれてしまうので、圧勝していることと合わさって、ちよつといたたまれない気持ちになった。

2人共、人型モンスターと戦っている時の立ち回りはうまいのに、どうして遊びになるところなのだろう。ちよつと疑問だ。

ぼくの顔を立てようとしてわざと負けているという感じではないので、本当に下手なのだろう。

それでも、メルセデスたちが楽しそうなのは何よりだ。つまらなさそうなら、すぐに止めたんだけど。

何故楽しいと思っているのかは分からないから、これからもこの遊びをするかは悩ましい。

新鮮だから楽しんでる可能性もあるからね。それなら、新しい遊びを探さなくちゃいけない。

「随分ぼくが勝っちゃったね。アキラには一方的に負かされたから弱いつもりだったんだけど、自信を持っていいのかな？」

「あたいたちが初心者だからっすよ！次は絶対勝ってみせるっす！メーテル、いっしょに練習っすよ！」

「わかったわ。負けっぱなしじゃ悔しいものね。ユーリちゃんを

泣かせてあげるわ〜」

ゲームで負けたくらいで泣くなら、アクアとの勝負で涙が枯れ果てていると思う。

それくらいアクアには手も足も出なかった。運の勝負だけ勝てたけど、慰めにはならないし。

とはいえ、メルセデスたちは練習するくらいに面白いと感じてくれているようだ。

これはいい傾向と考えてもいいんじゃないかな。訓練だけの日々はつらいだけだからね。

まあ、それで冒険者としての研鑽が疎かになるようなら考えないといけないけど、メルセデスたちなら大丈夫だろう。

まずは、良い成果が得られたんじゃないかな。

「流石に泣いたりはしないよ……でも、楽しみにしているね」

「その余裕、絶対に崩してみせるっすからね！ 覚悟しておくっすよ！」

「そうよく。ユーリちゃんの歪んだ顔、絶対に見てみせるわ〜」

ほんと、次にメルセデスたちとこの遊びをする時が楽しみだ。

メルセデスたちのことだから、すっかり強くなってくるんだろうな。

ぼくも負けられないように練習したほうがいいだろうか。まあ、負けてからでいいかな。

「簡単には負けないからね。それで、つぎはどんな遊びをしようか？」

「あたいは遊びなんて知らないっすよ。それとも、いやらしいことでもしてみるっすか!？」

「そんなことはしないよ……メルセデスは大切な仲間なんだからね。自分を大事にしてもらわなくちゃ困るよ」

メルセデスはどこまで冗談で言っているのだろう。ぼくをからかいたい気持ちはきつとある。

それは、これまでメルセデスといっしょに居た時の発言から察している。

とはいえ、メルセデスは自分を大切にしていない雰囲気を持っている。

る。

なので、ぼくが頷いてしまうと本当にいやらしいことを受け入れかねない。本音では嫌がっていたとしても。

メルセデスの本心がどこにあるかは分からないけれど、メルセデスの危うさから安易な返答はできないんだ。

「せっかくオーバースカイに入れたんすから、ちゃんと無事に生きるつもりっすよ。こんな楽しい時間、今までには感じたことがないっすから、ここで終わる訳にはいかないっす」

メルセデスはとてもオーバースカイのことを大切に思ってくれている。

それに応えられるほくでいたいから、ちゃんとこれからもメルセデスに楽しいと感じてもらわないとね。

それにしても、オーバースカイが人の生きる希望になっている。嬉しい話だな。

まあ、メルセデスが言うから嬉しいと感じているだけで、ただの他人ならそこまで嬉しくないかも。

それはさておき、つぎの遊びが全く思いつかない。どうしたものか。

「メルセデスが生きるつもりならいいんだけど。でも、それとさっきの発言とはまた違う話だよ。あんなことを言って、本当にいやらしいことをされたらどうするの?」

「ユーリさんに貰った恩に比べたら、些細な事っすから。本気でユーリさんが望むならかまわないっすよ」

それは困った返答だな。本当は嫌なことを受け入れてほしくてメルセデスたちを弟子にしたわけじゃない。

メルセデスたちには幸せになって欲しいんだ。それをどう伝えればいいのか。

「恩のために苦しみを我慢するのは良くないよ。ぼくはメルセデスたちが大切だから弟子にしたんだ。メルセデスたちを傷つけるつもりはないよ」

「大丈夫っす! ユーリさんならそこまで嫌じゃないっすから!」

「そう。これ以上は説教の中でもつまらないものになるから言わないけど、メルセデスが傷ついたらぼくも苦しいってことは忘れないで」「ユーリさん……ユーリさんを悲しませたりはしないって約束するっすよ。だから、心配しなくても平気っす！」

メルセデスは真剣な顔をしているから、分かってくれたのだと信じたい。

ぼくにとつてメルセデスは大切な存在だから、自分を軽んじる姿を見たくないだけなんだ。

結局のところ、ぼくのわがままなのだろう。でも、これは譲れないところだから。

「それならいいんだ。ごめんね、空気を悪くして。嫌だったよね」

「いいっすよ。ユーリさんがあたいたちのことが大好きだったのはよく分かったつすから。それで十分っす」

「そうね。ユーリちゃんは私達が死んだら本当に泣いてくれる人なのね。嬉しいわ」

「そうだよ。メルセデスたちが死んだりしたら、泣くだけじゃ済まないから。それくらい、メルセデスたちのことは好きだよ」

間違いなくぼくの本音だ。ぼくの大切な人が傷つきそうになっていると、どうしても我慢ができない。

悪癖だとはわかってはいるんだけど、改善できることとは思えないんだよね。

冷静でいようと努めていても、つい熱が入ってしまう。

メルセデスたちにも迷惑をかけているかもしれないけれど、やめられないんだ。ごめんね。

「あの王都での大会でユーリさんを知って、カーレルの街に来て、ユーリさんに弟子にしてもらったのは忘れられない思い出っす。責任を取って、これからも大切にしようっすからね！」

「そうよ。ここまでしてポインなんて、絶対に許さないわ。ユーリちゃん、逃げようなんて思わないことね」

「もちろんだよ。その覚悟はできているつもりだから。これからもよろしくね、2人ともし」



2人はぼくの言葉を受けていい笑顔を返してくれた。

ぼくの期待に応えてくれたメルセデスたちだから、絶対に期待を裏切りたくない。

メルセデスたちが尊敬できる存在で居続けるために、頑張るからね。

## 114話 鎖

今日はユーリヤと過ごすつもりだ。またステラさんの家の空き部屋だ。こうして2人でいっしょなのは久しぶりだよ。

今思うと、最近はみんなが集まることが多くて、個人と一緒にいる機会は少なかった。

まあ、それは別にいいんだけど。今日はユーリヤと一緒にだけ、あんまりドキドキはしない。

以前から積極的にこちらに近づいてくるユーリヤだけど、ぼくももう慣れたのかな。

とはいえ、もっと激しくなってしまうえば厳しいだろうけれど。

流石にそこまではないかな。ユーリヤだって羞恥心とかはあるだろうし。

ユーリヤはかなり可愛いから、あまり押してくると緊張してばかりだった。

それなのに、平気でもっともっと距離を詰めてくることも多かったよね。

だから、女の人にはある程度慣れたはず。それでも、ドキドキすることはまだあるけれど。

ユーリヤは出会った時からかなりぼくに好意的だったよね。はっきり言っておかしいくらい。

でも、いまさら疑うつもりはない。ぼくに対する害意があるだなんて思うことはないよ。

ユーリヤはこれまでずっとぼくを信じてくれた。助けてくれた。そのこれまでの行動があつてまだユーリヤを疑うのなら、ぼくは相

当な人でなしだ。

ユーリヤはぼくにたくさんの喜びをくれたから、お返ししたい。

それが、ずっと慕ってくれたユーリヤに対してできることだよ。

さすがに、ユーリヤがぼくに好意を持っていてくれることは分かる。

だから、ぼくが何かをすることで喜ばせることはできると思う。

ユーリヤだつて何でもいいなんて思わないだろうけど、ぼくが積極的になるのは喜んでくれると思う。

まあ、まずはユーリヤとゆっくり話をして、それからの流れしだいかな。

ユーリヤにぼくから近づくことを武器にすれば、際限が無くなりそうだからね。

まあ、喜んでくれるのならある程度はいいけれど、付き合うわけもないのにできないことはある。

今ではカタリナのこともあるのだから、うかつなことをする訳にはいかない。

とはいえ、いつもどおりに接していれば問題はないだろうけれど。「ユーリヤとこうしてゆっくりするのは久しぶりだね。なんだか嬉しいな」

「そうですねっ。ユーリヤは寂しかったんですよ？ ユーリヤさんにも色々とおすることはわかりますが、ユーリヤを放っておくのはダメですよっ」

そう言われてしまうと痛いな。実際、ユーリヤとの時間は余り取れていなかった。

ユーリヤの好意に甘えて雑な対応をしていたと言われても、言い訳はできないかもしれない。

だから、ユーリヤを寂しがらせてしまったことは反省すべきかな。それにしても、ユーリヤは寂しがっていたんだな。気づかなかつた。申し訳ないな。

「ごめんね。これからは、できる限り時間を作るつもりだから。でも、そこまで増やせないかもしれない」

「ユーリヤさんには他にもいろいろな人がいますからねっ。でも、それをわたしの前でほめかささないでくださいっ。他の女の子のことは、ユーリヤの前では忘れてくださいねっ」

以前にもユーリヤには似たようなことを言われてしまった気がする。

それにしても、どういうふうにも他の女の人の影を話から消せばいい

んだ。

いやいや、それを考えている時点で、ユーリヤ以外の女の人を考えてるってことだから。

む、むずかしい。ぼくの知り合いは女の人しかいないから、余計にだ。

「が、がんばるよ。でも、いきなりうまくはできないかも。あやまるよ」

「もう。ユーリさんったら仕方のない人なんですからっ。だったら、他の子のことは、ユーリヤが忘れさせてあげますねっ」

そのままユーリヤはぼくに唇が触れてしまいそうなほど近づいてきた。

ユーリヤ、本当にきれいだな。まつげは長いし、目はパッチリしている。鼻筋も通っているし、唇はプルプルだ。

そういえば、前にユーリヤに頬にキスをされたんだよね。あの時は柔らかくて、暖かくて、ドキドキしたな。

思い出したら、またドキドキしてしまった。ユーリヤはとても魅力的で、つい目を引かれてしまう。

ぼくと目が合ったユーリヤは、柔らかく微笑んだ。ぼくはちよつと見とれそうになっていた。

「ユーリさんはわたしの魅力にメロメロですねっ。もつとわたしに夢中にさせてあげますっ」

そのまま、またぼくの頬にキスをされた。そのまま少し舌を出されてしまい、舌の感触まで感じるようになった。

ユーリヤはどこまでぼくをドキドキさせてくるつもりなんだろう。もうすでに、ぼくは限界を迎えそうになっていた。胸が破裂しそうだとすら感じている。

ユーリヤの手管は悪魔的ですからあると思えたけど、それはぼくが女慣れしていないからなのかな。

「ユ、ユーリヤ、恥ずかしいよ……」

「ダメですっ、まだまだ許しませんからっ。ユーリさんはもつと墮ちていっていいんですよっ」

そのまま何度もいろいろな場所にキスをされた。額とか、腕とか、手の甲とか。

どこにキスをされるのかによって別の感触に感じてしまい、よりユーリヤの唇を意識してしまう。

このままじゃ、本当にぼくは落ちていってしまうかもしれない。だから、必死に堪えていた。

ユーリヤはいたずらな感じに笑い、舌なめずりをしていた。

可愛いしきれいなのに、ユーリヤから恐るべき魔性を感じてしまう。

このままだと、ユーリヤのこと以外考えられなくなってしまう。そんな予感すらした。

「だ、ダメだよ。ぼくはまだ冒険者でいるつもりなんだから。ま、負けないから」

「ふふっ、いいところまで行ったと思ったんですけどね。残念ですっ」そんな事を言いながらユーリヤは離れていった。

ぼくは底なし沼に引き込まれるような感覚から逃れられて、ほっとした。

ずっとユーリヤに翻弄されっぱなしだったな。でも、反撃なんてしようものならきつともっと大変なことになっていた。

ユーリヤは優しい癒される人だと思っていたけど、今のは怖かった。

でも、そんなところも魅力的だと思ってしまう。参っちゃうよね。

「ユーリヤはいつたいどこでそんな事を覚えてきたの？ 慣れているようにみえるけど」

「失礼ですねっ。ユーリさんが初めてですよっ。でも、そんな風に感じていたんですね。やめちゃったの、惜しかったかな」

あの恐ろしい手管で初めてなんて、ユーリヤが手慣れたらどうなってしまうんだ。

というか、これ以上続けられたらどうしようもない。なんとか気をそらさないで。

「ユーリヤは、ぼくに何かしてほしいことはないかな？ できること

なら、頑張るよ」

ぼくの言葉を聞いた瞬間、ユーリヤは弾けるような笑顔になった。それと同時に、ぼくの背中に寒気が走ったような気がした。まさか、まずいことを言ってしまったのか？

「だったら、ユーリヤを抱きしめてくださいっ。ユーリヤさんの体温、いっぱい感じたいんですっ」

だ、抱きしめるときか。これは、どうなんだ？

恥ずかしさはもちろんあるけど、でも、そこまで厳しくはないか？ユーリヤのことだから、唇にキスしてくらい言われていたのかもしれないし、それを考えれば。

うん、ユーリヤにこれまで貰ったものを考えれば、これくらいなら「分かった。ユーリヤ、いくよ」

ユーリヤは何故か目を閉じる。

ぼくはそのまま、ユーリヤの肩辺りから背中にかけて腕を回した。

ユーリヤの暖かさや柔らかさ、呼吸がこちらに届く。

そのままの姿勢でいると、ユーリヤはぼくの肩や頬に顔を擦り付けてきた。

ユーリヤはまだ目をつむっているのに、ユーリヤがうっとりした顔をしているのがわかった。

もつとドキドキするかと思っただけけれど、今はすごく安心感に包まれている。

「ユーリヤさん、温かいですっ。ユーリヤさんも、わたしの体温をいっぱい感じて下さいねっ」

その言葉で、さらにユーリヤの暖かさを意識してしまった。

ユーリヤの胸の鼓動までこちらに届いてきて、安らぎが深まっていく。

ぼくはユーリヤに甘えさせているはずなのに、ぼくが甘えているかのような気分だった。

「ああ、ユーリヤさんをいっぱい感じます。わたしは生まれてきてよかった。こんな幸せ、はじめてです」

いつもと違う落ち着いた声でユーリヤは言う。

ユーリヤが生まれてきてよかったと感じてくれているのなら嬉しい。

でも、こんな幸せが初めてって、ユーリヤの幸せはこれまで小さいものばかりだったのだろうか。

ぼくにはユーリヤの心はわからないけれど、これくらいのことです。ユーリヤが幸せを感じてくれるのなら、いくらだって抱きしめていい。

恥ずかしさもドキドキも、ユーリヤの幸せを思えば別のなにかに変わる気がするんだ。

「ユーリヤはこれからもっと幸せになれるから。そのために頑張るから。だから、もっとわがままを言っていていいよ」

「なら、唇にキスしてくれますか？ ……冗談です。わたしはユーリヤさんの恋人になるつもりはありません。でも、たまには甘えさせてくださいね？」

「もちろんだよ。ユーリヤがこれまでぼくにくれたものを思えば、それくらいじゃ軽いかもしれないから」

これは本当の気持ちだ。

オーバースカイに貢献してくれたこと、ぼくの心を癒やしてくれたこと、ぼくを大切にしてくれたこと。

それだけの恩があつて、ただ抱きしめるだけで、甘えさせるだけで、返せるとは思えない。

ぼくに負担がかかるようなことをしたって、ユーリヤなら許すべきだ。

でも、きつとユーリヤはそういうことは望まない。なら、ぼくにできることは何かな。

ユーリヤの望みがぼくの恋人になることならば、きつと叶えることはできない。

だから、今のままでいいんだろうか。だけど、それ以外の願いならば叶えたい。

それは、ぼくのわがままなのだろうか。それとも、真心と思っているのだろうか。

「ユーリさん、ありがとうございました」

そう言つてユーリヤは離れていく。名残惜しさを感じてしまったけれど、顔には出さないようにする。

「ユーリさん、わたし、ユーリさんの心はわかっているんです。だから、ユーリさんにこれ以上わがままは言いませんから」

ぼくの心とはいったいなんだろう。でも、それよりもユーリヤから悲しさを感じた。

ぼくはどうするのが正解なんだ。わからないけど、ユーリヤのこんな顔は見たくない。

「わがままを言うくらい良いんだよ。どうしてもダメなら断るから。ユーリヤが幸せでいてくれることが、ぼくの幸せなんだ」

ユーリヤはその言葉を聞いて、ぼくに抱きついてくる。

「ユーリさん、そんな事を言ったら、わたしから逃げられなくなっちゃいますよ？ それでもいいんですか？」

ぼくは決意を込めて頷いた。ユーリヤがぼくを逃さないと言うならば、それでいい。

ユーリヤはそれに対して、幸せを感じる笑顔で返してくれた。

ユーリヤの幸せは絶対に大切にすることから、これからもよろしくね、ユーリヤ。



## 115話 執着

今日はノーラと遊ぶつもりだ。またいつもの部屋で遊ぶことになる。

最近はみんなとそれぞれ過ごしているけれど、新たな一面が見られたりして楽しいな。

一番新しく出会ったのはシィで、その前にメルセデスたちと出会ったのだけれど、ある意味ではノーラと出会ったのはメルセデスたちの後だ。

まあ、新しく話せるようになったというだけで、それまでにも色々と接した時間はなくならないんだけど。

それに、それを言ってしまうえば、アクアと出会ったときも比較的最近ということになってしまう。

だから、ろくでもない考えかもしれないな。ノーラだってアクアだって、進化する前の時間を無のように扱われて良い気はしないだろう。

それはさておき、今は目の前のノーラだ。2人きりになった途端にへばりついてきて、いつもの感じだと思える。

猫だった頃からずっとぼくにくっついてきたノーラだけど、人型になってからは場所を選ぶようになった。

きつとぼくに配慮してくれているのだと思う。ノーラは外で甘えたとところで恥ずかしいと思う感じではないし。

だから、こういう時間には目一杯甘えさせてあげたい。大切なペットだから、可愛がってあげないとね。

アクアよりも女の子って感じがして照れとかはあるけれど、それに対応を変えるのは可哀想だ。

ノーラだつてぼくのことをご主人と呼んでいるあたり、ペットとしての意識が強いのだろうし。

だから、アクアに似た感じで甘やかしてあげるのだ。そうすれば喜んでくれるはず。

「ノーラは可愛いね。それに、ぼくに気を使ってくれるようになって、

賢い子だ」

「分かりきったことでも、ご主人に言われると嬉しいものだな。ご主人、もっとうちを可愛がってもらおうぞ」

ノーラはぼくに頭や体を擦り付けてくるので、頭をいっぱいなでてあげる。

そうすると、明らかに上機嫌になった。鼻歌まじりになっているので、相当だな。

それにしても、ノーラは可愛い。アクアも可愛いけど、ノーラにはノーラの可愛さがあるよね。

アクアはぼくと居る時にはだいたい笑顔だけど、ノーラは割とコロコロ表情が変わる。

なんとというか、上機嫌なときとちよつと気を損ねている時の違いがわかりやすい。

とはいえ、明らかに不機嫌な瞬間はないので、都合のいいペットとすら感じてしまう。

まあ、だからといって、ぼくのために何もかもを我慢しているという感じはしない。

なので、相応に幸せでいてくれるのだろう。嬉しい限りだ。

「どう、満足した？ ノーラは身長が近いから、頭を撫でるには背伸びが必要なんだよね」

「ご主人が小さいだけだぞ。……冗談だから、そんな顔をしないでくれ。うちを膝枕して、しっかりと頭をなでてほしいぞ」

ぼくはいつたいどんな顔をしていたのだろう。傷ついたのは事実だけだ。

まあ、冗談なのは本当だろうからそれは良いとして、膝枕か。ちよつとしんどいけど、ぼくにそうしてくれた人も味わっていたしんどさだろうし、我慢しよう。

できれば、ソファの上でそうしたいところだけど、この部屋には無いんだよね。

となると、地面に直接座らないといけない。

とはいえ、それでノーラが喜んでくれるのなら十分か。よし、頑張

るぞ。

「ノーラ、ここだよ」

「ご主人、失礼するぞ」

ノーラはぼくの膝に頭を乗せてのんびりとしている。

耳がピコピコ動いているのがちよつと気になってきたな。

頭を撫でるついでに触ってみたら、ノーラは怒るだろうか。まあ、まずは普通に頭を撫でるか。

そのままノーラの頭をゆつくりと撫でていく。髪の毛がサラサラしていて撫でやすいな。

ノーラはゴロゴロというような声を出しながらくつろいでいる。

そういえば、人のように話せるようになったのに、こういう声も出さなんだな。

可愛らしくはあるけれど、なんというか、ちよつと違和感のようなものがある。

まあ、もとのノーラはよくこういう声を出していたから、懐かしさのほうが大きいかな。

「ノーラ、気持ちいいかな？ ノーラの頭はなで心地が良くていいね」  
「ご主人が喜んでくれているのなら何よりだ。ご主人の手は気持ちいいし、うちは満足だぞ」

ノーラが満足してくれているのなら十分かな。そう考えて手を離そうとすると、ノーラがぼくの手をつかんで自分の頭に押し付けてきた。

まだまだ撫でろということなのだろう。ノーラもわがままになって、可愛らしいことだ。

わがままになったと言っても、ぼくへの配慮を忘れてはしないだろうところが、また魅力的なんだよね。

まあ、まるつきりわがままになったところで、誰かを傷つけたりしないなら、可愛いままだろうけど。

再び頭をなでていく。こんどはさつきより素早くなでてみた。

そうすると、ノーラは体を震わせていた。ビクビクしている。ちよつと面白いと思ってそのまま続けてみると、ノーラは息を絶え絶

えにしていた。

少し心配になって手を止めると、とろんとした目でこちらを見てきた。

これは、気持ちよかったと解釈しても良いのだろうか。

「ご主人の手はうちをダメにしてしまうぞ。こんな事をされてしまったのは、ご主人から離れられんではないか」

お気に召したと判断して大丈夫そうだな。

まあ、もともとノーラが望む限りずっと飼い続けるつもりだったので、ぼくから離れられなくなっても問題はない。

とはいえ、これを何度も求められるとちよつと疲れちゃうかもしれないな。

それでも、ノーラが強く望むのならば是非もないといったところか。

ノーラはぼくの癒しなんだから、しっかりと優しくしてあげるのがぼくの努めだよ。

「前にノーラはぼくを逃がさないって言ってたけど、ノーラが逃げられなくなっちゃったかな」

「ご主人、まさかそんな迷惑が？　うちはご主人の手のひらの上で踊っていただけだったのか？」

「ふふつ、どうだろうね。でも、ノーラとずっと一緒にいられるのはうれしいかな」

「くつ、ご主人の言葉で喜ばされてしまううちが憎い……これでは、ご主人のおもちやではないか。いや、ご主人にもてあそばされるのなら、悪いことではないな」

ノーラはメチャクチャなことを言っている。

こんな言葉を人に聞かれてしまったら、大変なことになるな。

まあ、ノーラがそういう状況を考えない発言をするとは思わないけれど。

ノーラはとっても賢いので、ぼくを困らせようとする場面は選んでくれるのだ。

だから余計にノーラにメロメロにされてしまっているように感じ

る。

かわいいペットに魅了されるのは当然のことだから、全く問題はな  
いんだけどね。

「今のだけで弄ばれているって言うなら、こんな事したら耐えられ  
ないかな?」

ぼくはそんな事を言いながら、ノーラの耳をゆっくりと触ってい  
く。

外側の毛が生えているところを撫でたり、内側に指を滑らせたり、  
つまんでみたり、押してみたり。

そんな事をしてしていると、ノーラの顔はとろけているような姿になっ  
ていた。

ノーラ、やつぱり耳が弱いんだな。それにしても、なんだかちよつ  
と変な気分になっちゃいそうな顔だ。

「ご主人の手つきからは熟練の技を感じるぞ。ご主人の技巧に翻弄さ  
れるばかりだな、うちは」

「こんな事をするのはノーラくらいなのに。でも、ノーラが楽しんで  
くれているみたいで良かった」

「それだけでこれほどの技術を? うちはご主人が恐ろしいぞ。だ  
が、うちのために磨いてくれた技だと思おうと、もっと堪能したくなる  
な」

「なら、しつぽも撫でてみようか?」

「くっ、ご主人にもてあそばされるだけだと分かっているけど、体が求めて  
しまう……悔しいが、お願いするしかないぞ」

ノーラは一体何と戦っているのだろう。まあいいか。  
そのまま、ぼくは尻尾を触っていく。指を走らせたり、軽く握って  
みたり、先を撫でてみたり。

そのたびにノーラは軽く震えていた。うーん。うまくできている  
のかよく分からないな。

でも、ノーラが嫌がっているのなら止めてくるだろうし、もっと続  
けるか。

それから、ノーラのしつぽを色々といじりまわしていた。する

と、ノーラは甲高い声をだし始めた。

これはどういう声なんだろう。でも、目の焦点が合っていないから、そろそろやめておくか。

ぼくが手を止めると、ノーラはゆっくりとした動きでこちらを向く。

ほてった顔に、ブーツとした目をしている。口は半開きで息は熱い。

そのまま、ノーラはぼくに激しく抱きついてきて、ずっと震えている。

「ご主人、ご主人……うちは、うちは……！」

ノーラが何を伝えたいのか全くわからないけれど、ノーラは力強く抱きしめてくる。

それに応えるつもりで抱き返すと、ノーラはぼくに頬ずりを始めた。

それから、ぼくの顔中にキスの雨を降らせてきた。

「ひどいではないか、ご主人……ご主人の一番はアクア様だとわかっているのに、納得できなくなってしまっぞ」

ぼくはノーラを傷つけるようなことをしてしまったのだろうか。それくらい、ノーラの声から切なさを感じる。

ぼくが一番がアクアだということは確かだ。ノーラはぼくの一歩になりたくなかったのかな。

それなら、ノーラを可愛がらないほうが良かった？ そうは思いたくないけれど。

「ノーラに悪いことをしちゃったのかな。だとしたらごめん。でも、ノーラはぼくの大切なペットだから」

「ご主人は悪くない。うちが悪いのだ……己の分際をわきまえようとしないうちが……所詮、うちは異物でしかないのだから」

「ノーラが傷つくのなら、分際なんてわきまえなくていいよ。ノーラが望むことをすれば良いんだ」

「ご主人は優しいな。だからこそ、諦められなくなってしまっ……ご主人、うちに愛してると言ってくれ」

「もちろん、ノーラのごことは大好きだし、愛しているよ」

「ああ、嬉しいな……うちの言っていない言葉まで付け足してくれる。やはり、最高のご主人だ」

ノーラはそんな事を言いながらつらつらそうな顔をしている。だから、つい言葉が出てしまう。

「ノーラだって最高のペットだよ。だから、そんなに悲しい顔をしないで」

「わかっているぞ。ご主人がうちを想ってくれていることは。だから、またこうやって甘えに来てもいいか?」

「当たり前だよ。何があってもノーラを大切にする。それが、ノーラを飼い始めた者の責任だから」

ノーラは笑顔になってまた強くぼくに抱きついてきた。ぼくはゆっくりとそれを抱き返す。

「ご主人、うちをペットにしたことを後悔したとしても、絶対に放り出さないでくれよ。そんな事をすれば、うちは何をするかわからんぞ」

## 裏 昂り

ステラがアクアとの対話を目指すためにまず干渉したのは、よく知っているアリシアだった。

カタリナが未だに目覚めていないのならば、カタリナを優先していただろう。

それくらい、ユーリとアクアにとってカタリナの存在は重要だとステラは認識していた。

ただ、カタリナはもうアクアと和解している。ならば、引き込みやすい人間を優先するのが良いだろう。そう判断した。

ステラはアリシアという人間をよく知っていた。幼少期から才能があり、レテイというパートナーにも恵まれ、冒険者の頂点の一角になるまで、その物語をそばで見っていた。

それから、ステラはミストの町で教師をすることになるが、その後もアリシアとの関係は続いていた。

ステラは契約者としてうまく行っているアリシアに嫉妬していたこともあった。

だが、アリシアが周囲の人間に恵まれず、徐々に荒れていく姿を見て、考えを改めた。

そのくらいの時期からずっと、アリシアは対等な関係の仲間を求めている。

だから、ユーリたちをアリシアたちに引き合わせた。それが、お互いにとってよりよい未来を生むと判断したから。

結果として、ステラの思惑と大きく変わらない形でアリシアとユーリの関係は進んでいった。

アリシアがアクアに支配されなければ、ステラが思い描いていた形になっただろうほどに。

だから、アリシアはユーリとの関係を切りたくないはずだ。アリシアにとって、間違いなく待ちわびていた存在なのだから。

そのため、ステラはアリシアの説得はたやすいと考えていた。

そして、アリシアを目覚めさせるために指輪を通してアリシアに働



きかけた。

覚醒したアリシアは、急に流れ込んでくる知らない記憶の存在に混乱していた。

だが、知っている最後の記憶から、ある程度の状況を判断した。つまり、アクアが操作している自分の体の記憶なのだろう。

そこまで考えて、自分の今の状態を理解した。意識はあるのに、体が思い通りに動かせない。

だから、アクアはまだ自分の体を操っているが、自我が目覚めたのだらう。そのように判断した。

(アクア……私を殺すことは選ばなかったのかな。それとも、殺してしまつては私の体を操作できなかつた？ どちらでも良い。またユーリ君と冒険ができる可能性はまだある。今はそれだけで)

ステラの狙い通り、アリシアはアクアのことを考えるよりも、ユーリと再び対等な相棒として過ごすことを優先していた。

だから、ステラはアクアの感情と自分の計画をアリシアの心に送つた。

アリシアはそれを受けて、アクアがどれほど自分たちを好きでいるかを理解した。

それ故に、自分たちが解放される可能性は十分にあるだろうことも。

アクアは本当はこんなことはしたくなくて、未熟な心ゆえに暴走してしまっただけ。

ならば、和解したいという気持ちを伝えることに成功すれば、またユーリと冒険できる。アリシアはそう判断した。

(アクアのことを説得できる道筋は確かにあるはず。ステラの計画は、そう悪いものではない。とはいえ、選択を間違えればよりひどい結果になりかねない。アクアの感情は危うい均衡の上で成り立っている。例えば、私がユーリ君を傷つける可能性をアクアがまた認識してしまつたら。結末は容易に想像できる。これからの行動には慎重さが求められるね)

アリシアは流れ込んできたアクアの心から、アリシアが有象無象と

認識している存在をアクアが解放することはないと判断した。

アクアはアリシアたち以外にも、多くの人々やモンスターたちを支配している。

だが、それらに対する情は、アクアには一切ない。それらと同じカテゴリーに入ってしまったら、そこで終わりだ。

それ以外にも、アクアはたしかにアリシアたちに情を抱いているが、それゆえに頑なになるという可能性は否定できない。

はつきりと目の前に希望はあるが、それでもか細い糸である可能性は否定できない。

だからこそ、アリシアは性急な判断はできなかった。

（ユーリ君ともう一度冒険したい。今すぐにも。でも、その考えは危険だ。私がユーリ君を苦しめていると判断したから、アクアは私の体に乗っ取った。ユーリ君を大切にできないならば、また同じ、いや、もっと悪いことになりかねない。

でも、今思えばあの時の行動は軽率だった。ユーリ君を危険にさらしていた。ユーリ君を失いかねなかった。だから、もう同じ過ちは繰り返さない）

アリシアにとって二度と出会えない存在であると思えたから、アリシアのユーリに対する執着は相応に大きい。

もし仮に自分が無茶をしたことが原因でユーリを失っていたならば、自死すらも考えていただろうほどに。

それゆえ、アリシアの反省は本物だった。ユーリという相棒は、それほどにアリシアにとって大きい存在だった。

（ユーリ君のことはレティも大切に想っている。だから、レティも私と似たような判断をするはず。そうになると、残りの人達が問題だな）  
レティの感情はアリシアにとっては十分に理解しやすいものだった。それゆえ、レティとアクアの決裂は心配していなかった。

だが、他の人間はそうではない。もし他者が原因でアクアとうまくいかなかったら、その人物をどれほど恨んでも足りないだろう。

それゆえに、ステラの計画がどれほど確かなものかアリシアは知っていた。

(ステラさんは思慮深い人ではある。だから、無策というわけではな  
いはずだ。だが、ステラさんが乗っ取られた時期からして、ユーリヤ  
さん以降にユーリくんが出会った人を十分に理解できているかは怪  
しい。どうするつもりなんだい、ステラさん?)

アリシアの想定している道筋はアクアに支配されている側に干渉  
すること。ステラの計画は、アクアの感情に触れてアクアの心を癒や  
すこと。

それらの違いから、2人の考える目標への経路は大きく異なってい  
た。

ただ、アリシアのその考えが、ステラの計画をより確かなものとし  
る一助となった。

おそらく、全員でアクアを許すことができれば、ほぼ確実に望む結  
末を迎えることができる。

その考えを、ステラはアリシアへと送っていた。すでに目覚めた物  
たち同士がつながって、これから目覚めるものを説得する材料とす  
る。

その一歩目が、アリシアとステラの繋がりがだった。

(なるほどね。どういう順番が正しいのか、私には判断できない。た  
だ、私達でレティとサーシャさんなら説得できるはず。そこから、ど  
うすればいいだろう。メルセデスさんとメーテルさん、ミーナさんと  
ヴァネアさん、オリヴィエ様とリディさんとイーリスさん。このあた  
りのお互いに親しい人間をどうするかが鍵となるだろうね)

アリシアの目には、か細い糸のような希望が徐々に大きくなってい  
る姿が映っていた。

ユーリとの未来のため、自分自身の目的のため、アクアと和解する。  
その瞬間のために、今から計画を十分に練る必要がある。

だから、知恵者であるサーシャを味方につけたい。大切なパート  
ナーであるレティも味方になってくれるはず。

自分は戦いが最も得意であるし、人との関わりを絶ってきた。

だから、ステラやサーシャのような人の感情を理解している相手が  
必要だ。そう考えていた。

(ステラさんは次に誰を選ぶだろう。レティであるならば嬉しいけれど。私達のつながりからも、有用性から判断しても、サーシャさんは早い方がいい。とはいえ、私よりもステラさんのほうがうまい手段を考えてくれるだろう。ステラさんから相談されない限り、アクアに伝える思いを考えておくか)

アリシアが深く考えるまでもなく、ユーリにとってアクアの存在が不可欠だということは疑いようがなかった。

アクア水の存在がなければユーリは弱いままだったし、ユーリはアクアに依存すらしているように見える。

アクアの正体がオメガスライムであることは問題ない。

自身の正体を隠す以外に、ユーリの冒険を演出するために手加減していたのだから。

アリシアが望むユーリとの冒険は、アクア水を始めとしたアクアの存在が必要なものだし、それ以外の面でもアクアは邪魔にならない。

それに、アリシア自身にだって、アクアを大切に思う気持ちがあるのだ。

これまでに接してきた時間もあつたし、今伝わってきたアクアからの想いもあつた。

アクアはぶつきらぼうな態度のようできて、ちゃんと自分たちを守ろうとしていた。

それに、アリシアの夢もレティの夢も大切にしようとしていた。

それらに加えて、ユーリを大切だと思う気持ちは自分と同じであるから、アリシアはアクアとお互いに助け合えると判断していた。

(アクアの望む幸せと私の望む幸せは共存できる。ユーリ君を大切にしたい。さえいれば、そこに問題はない。私にとってもレティにとってもユーリ君は大事な人なんだから、そこはきつと共感しあえる。アクアは私達が許さないんじゃないかって怯えているけど、大丈夫なんだ)アリシアとしては、仮にアクアに恨みがあつたとしても、ユーリとの冒険を優先するつもりでいた。

だから、アクアと和解することにははつきりと前向きだった。

またユーリと冒険がしたい。ユーリの隣に立っていたい。

その思いを胸に、アクアから解放されるために突き進むつもりになった。

（ユーリ君の相棒としてまた強い敵と戦ってみたい。今度は、ユーリ君の体力や安全にも配慮して。あんな最高の時間は、他の人とは味わえない。だから、絶対に諦めない。アクア、君だってユーリ君の格好い姿が見たいだろう？）

アリシアにとつて、長年の望みが叶った喜びをもう一度味わいたいという思いが一番大きかった。

ただ、それ以外にも、アクアが自分の体を操作していた時の記憶から思いついた光景が頭から離れなかった。

（ユーリ君が私に奉仕する。今では私より強いとはつきり言えるユーリ君が。私以上の力を持っているにも関わらず、私にユーリくんが尽くしてくれる。考えただけで興奮が収まらない。アクア。君は私に大変なことを教えてしまった。もう後戻りはできないよ。ユーリ君、また会えたら、その時には……）

## 裏 愛玩

ステラがアリシアの次に目覚めさせようと目論んだのは、レテイだった。

サーシャにすることも検討していたステラだったが、サーシャの状況が特殊なこともあり、味方を先に増やすことにした。

サーシャは他の人とは異なる支配をされている。アクアはサーシャの心を誘導するだけで、サーシャの意識ははつきりとしているのだ。

その状況がサーシャの精神にどう影響するか、ステラには読みきれなかった。

十分に利益を見せつけければ大抵の提案には納得するのがサーシャだとステラは考えていた。

だが、意識を催眠に近い形で操作するアクアの手段にどのような反応を返すか。そこを問題としていた。

そこで、集団心理のようなものを利用することで、アクアを許す形に近づける。

それが現在のステラの目標だった。そのためには、2人では足りないだろうと。それがレテイを優先する理由だった。

そしてステラはレテイの意識へ干渉する。アリシアに比べてレテイはすぐに目覚めた。

おそらく、ステラが指輪の力の扱いに慣れたことが原因だろう。

それはさておき、レテイも覚醒してすぐに自分に記憶が流れ込んでくる感覚を経験した。

レテイは自分が計画していたいくつかのことをアクアに先行されたことに、若干の嫉妬のような恨みのようなものを覚えた。

せっかくユーリを驚かせたり可愛がったりするつもりだったのに、台無しにされてしまった。

ただ、レテイがそれ以上の悪意をアクアに持つことはなかった。

(ユーリ君の可愛い反応をしつかりと楽しみたかったのに。2回目だったら新鮮さはなくなってしまうよね。悔しいな。せっかく色々

と考えていたのに。でも、それはまた新しいことを考えれば良いね。それよりも、どうやってユーリ君とまた会うかだよ。アリシアを傷つけるものにわたしがどうするかを考えれば、アクアの行動は納得できるよ。でも、ユーリ君との時間を諦めるつもりはないからね)

レテイにとって優先すべきは、大切な相棒であるアリシア、そして自分を強く慕い信じるユーリだった。

自分が解放されるような状況になればアリシアも解放されるだろう。

だから、その点は大きな問題ではない。飲み込みきれない感情がない訳では無いが。

それでも、過ぎ去った時間よりもこれからの未来を考えたいとレテイは思っていた。

ユーリの純粋な好意は心地いいからまた味わいたいし、アリシアも夢の続きを見たいだろう。

それらの感情は、レテイにとってアクアを排除しようというような考えよりも優先するべきものだった。

(せっかくアリシアは夢を叶えたんだから、その時間をもっと楽しみたいだろうし。わたしだって、ユーリ君ともっと遊んだり甘やかしたりしたい。アクアだってわたしたちがユーリ君と一緒にいてほしくないわけじゃないみたいだからね。だから、ちゃんと仲直りできるはずだよ)

レテイにとってはアクアがオーバースカイと全く関係のない人々を支配していることは問題ではなかった。

なにせ、レテイは親しい人やモンスター以外には何ら価値を見出していない。

レテイの目の前でその人物たちが殺されていたところで、レテイの心が動くことはなかっただろう。

モンスターというものは人よりも残酷なもの。レテイはよく知っているつもりでいた。

自分自身も、人に優しくしようとするユーリに共感できないことは多かったのだから。

ただ、自分を慕っている姿が可愛く心地よかつただけ。それだけが、ユーリを大切に思う理由だった。

（ユーリ君がアクアの本性を知ったら悲しむのかもしれないけれど。わたしには関係ないかな。そりゃあ、悲しんでいるユーリ君を慰めてあげるのは楽しいだろうけど。それでも、モンスターはそういう生き物なんだし。知らないほうが悪いよね。わたしだって、怖い怖いモンスターなのにね）

レティはユーリがアクアやレティを清廉な存在のように扱っている姿に滑稽味を感じていた。

人型モンスターがどれほど残酷でおぞましい存在か身をもって知っているにも関わらず、無邪気さすら感じる様子で自分たちを信じているのだ。

面白くて、おかしくて、つい笑い出しそうになる瞬間は何度もあった。

アリシアとて、モンスターと接する中で、モンスターと人は別の生き物だと割り切っていたというのに。

かつてはアリシアもモンスターを信じようとしていたが、何度も裏切られる中でモンスターがどういうものかを理解した。

レティを大切に思う気持ちに嘘偽りはないが、それでも、恐るべき存在だとは認識しているのに。

アリシアにはレティをいつでも倒せるほどの力の差があるから、背中を預けられているだけなのに。

（あーほんとユーリ君は可愛いなあ。人と仲良くするモンスターは特別って、そんなことはないのにね。モンスターの気が変わったら、いつでも敵になってしまうのに。うまくいかない契約者だったのにな。ミア強化を貰ったから、ミアが契約者を殺したのは仕方ないと思っちゃったのかな？ 契約モンスターが契約者を殺すなんて、そんなの、本当はありふれた光景でしかないんだけどね）

レティにとってユーリを大切に思う気持ちは本物であるが、ユーリをおもちやのように見ているということも自覚していた。

ユーリをからかうこと、恥ずかしがらせること、困らせること。



どれもがとても楽しく癒される時間で、それでもユーリが喜んでい  
るということがまた良い。

嗜虐心のようなものが刺激されるなか、ゆっくりとユーリに自身を  
刻みつけていく。

そうすることで、周りが敵ばかりで遊んでいた心が落ち着いていく  
ことがわかった。

(ユーリ君なら、きつと便利な使い走りくらいの扱いをしてもむしろ  
喜ぶかもしれないよね。ああ、どんな事をしてユーリ君と遊ぼうか  
な。それこそユーリ君の大切な人を傷つけない限り、何をしても許し  
てくれるだろうからね)

レティにとってユーリのそばは心地よいものだから、またその感覚  
を楽しみたかった。

これまでにした楽しいことの他にも、新しい遊びがいくらでも思い  
浮かぶ。

それを実行した時のユーリの反応を想像するだけのことですら、レ  
ティにとっては喜びだった。

(あ、でもアクアから解放されない限りはユーリさんと遊べないん  
だった。でも、どうにかなるでしょ。カタリナが一番親しいとはいえ  
解放されたのだし、わたしは別にアクアをそこまで恨んでないから  
ね)

レティは楽観的に未来を考えていた。アクアが本当は自分たちを  
支配したくないことなど、自分たちが乗っ取られる前からわかってい  
たのだから。

アクアの感情もレティに流れ込んでくる都合上、アクアが自分たち  
を解放したくなることはとても簡単なことのように思っていた。

ステラは自分たちの感情をアクアに送る用意があるようだし、だつ  
たら、アクアと和解したいという思いは伝えられる。

レティにも完全に恨みがない訳では無いが、アクアの本音を知って  
しまえば許せるくらいのものであった。

(ユーリ君を死なせるかもしれないなかったことは、わたしの大切な  
時間も失うかも知れなかったってこと。そこはきちんと反省すべき

ところだよね。いくらユーリ君のそばが楽しいからって、これからの楽しみを無くしてまで遊びたいわけじゃないんだから)

レティにはユーリのことを滅茶苦茶にしてやりたい欲求もあったが、理性がそれを押し留めていた。

おそらくアクアだって同じだ。なにせ、自分たちはモンスターなのだから。

好意的な感情を持つ相手のすべてを壊してしまいたいという思いを持たないモンスターなどいないはず。

それは絶対に敵として他者を弄ぶこと以上の喜びをもたらしてくれる。

レティはそれを確信しながらも、ユーリを大切に思う気持ちを思い出すことで我慢していた。

(ユーリ君がわたしに裏切られた瞬間の顔、絶対に見ものだよ。流石にそんな真似はできないけど。わたしがユーリ君を好きだって気持ちは本物だから。お姉さんとして見守っていききたいから。それに、アリシアの大切な相棒でもあるんだから。これくらい、我慢できるよ)

レティはモンスターとして、大切な相手でも傷つけてしまうアクアの行動が理解できた。

だって、本能が傷つけることを求めてしまうんだから。そんな心持ちでいた。

本音を言えば、人間が一度殺しても蘇るのならば、アリシアもユーリも殺していた。今でも殺したいという思いはある。

それでも、アリシアやユーリと接する時の胸の暖かさを守るために、この本能に抗い続けるのだ。レティはそう決意していた。

(あーあ。わたしが人間だったなら、こんな思いで悩まなくても済んだんだろうな。でも、それならアリシアと契約できていないし、ユーリくんとの関係も築けなかった。だから、モンスターであるのは良かったこと。でも、少しだけ、ほんの少しだけ、同じ人間でないのが寂しいと思っちゃうな)

レティはユーリを見守っていききたいし、アリシアとも一緒にいた

い。

それらの思いを邪魔する上に、ほんとうの意味での絆の構築を妨害する自らの本能が憎かった。

それでも、人間に生まれなかったことを後悔はしない。モンスターだから手に入れられたものも確かに存在するのだから。

何よりの証である契約技が、アリシアとの間にはある。だから、大丈夫。

レティはアクアに、モンスターであることは悪いことではないのだと伝えたかった。

確かに人とモンスターは違う生き物で、時に遙かな距離すら感じる。

それでも、そうだとしても、大切な相手を思う心は本物だから。その心がある限り、そばにいて良いのだと。

(アクア、あなたもわたしもモンスターだけど、ユーリ君もアリシアもわたしたちを受け入れてくれる。心配しなくて、ずっと一緒にいられるはずだよ。だから、また一緒に遊ぼうよ、アクア)

レティにはアクアと和解した後、ユーリで試してみたいことがあった。それは、アクアの行動がきっかけで思いついたもの。

アクアと自分で協力すれば、他にも面白いものが生まれるかもしれない。そう考えていた。

(ユーリ君をわたしの羽根まみれにした後、その羽根をわたしは自在に凶器にできるって教えたら、ユーリ君はどんな反応をするかな？

きつと怯えながらもわたしを信じちゃうんだろうなあ。可愛いんだろうなあ。ほんと、またユーリ君と会える日が楽しみだよ)

## 裏 希求

アリシアとレティを目覚めさせたステラは、次の目標であるサーシャへの干渉を開始した。

サーシャは他の人間とは違う形でアクアに操られている。

意識ははつきりしているサーシャは自分が普通に行動していると考えたまま、アクアによって行動を操作されていた。

そのため、他者と同じように意識を目覚めさせればよいわけではない。

だからこそ、ステラは慎重にサーシャの心に触れていった。

その結果、サーシャは自分の状況を理解する。それはアクアにステラが何をしているのか理解させるということでもあった。

サーシャの思考を読みながら適宜サーシャの行動を縛っているアクア。

それゆえに、サーシャがアクアに操作されていると知ったことはアクアに知られた。

だが、アクアはステラがアクア自身と和解するために行動しているということも理解して、今のところはステラを妨害しないと決めた。

アクアはこれから、ステラやステラが目覚めさせた人間の思考を読むと決めた。

その事実をアクアから伝わってくる記憶で知ったステラだったが、慌てることはなかった。

アクアが本気で自分たちの行動を邪魔だと考えるのならば、即座に意識を奪われてもおかしくはない。

それなのに、アクアは静観の構えを見せた。つまり、アクアもステラの計画に希望を持っているはず。

だから、アクアが自分たちと和解したいという思いを強める手助けをすれば良い。ステラは計画をそのように修正していた。

ステラによって自らの状態を理解したサーシャがまず行ったのは、流れ込んでくるアクアの記憶の精査だった。

どのような形で自らの意識が歪められたのか知っておきたいがゆ

えの行動だった。

だが、それはサーシャにとっても大きい羞恥心をもたらしした。

アクアの誘導は、サーシャがエルフィール家の利益よりユーリの利益を優先させるために行ったもの。

その過程でユーリを誘惑などしていたのはサーシャ自身の意志だと判断できてしまったのだ。

(こ、これではわたくしが痴女のようにではないですか！ ユーリ様を好ましいと思っっていることは事実とはいえ、私はここまでではしたくない女だったのですか!?)

アクアによってユーリへの好意が増幅されていたサーシャだが、アクア自身が狙って行っていたことではない。

それゆえ、アクアの感情が流れてきても、サーシャがその事実にながつくことはなかった。

自分がつい勢いでおこなってしまったことはアクアのせいではないと判明したことが、アクアに操作されていたという事実よりもサーシャにとっては恐ろしかった。

アクアに制御されていたからだという言い訳が完全に消えてなくなり、正気に返ったサーシャを追い詰めていた。

とはいえ、実際にはアクアの影響を受けていた。アクアがユーリとしたいと強く感じていることは、サーシャの心にも流れ込んでいたからだ。

(ユーリ様をわたくしと同じ寝所に誘うなど、わたくしはどうかしていましたわ。でも、恥ずかしいとはいえ、悪いことだとは思えないわたくしもいる。わたくしは一体どうしてしまったのでしょうか)

サーシャにとって一番大きい感情は自身への羞恥、次いで状況への納得だった。

あのオリヴィエまでもが露骨にユーリを優先するようになった背景はそれか。そんな感情だった。

オリヴィエが他者を一切信用していないということはサーシャには明らかかな事実で、それゆえにオリヴィエがユーリに向ける信頼が奇妙に見えていたのだ。

サーシャ自身もオリヴィエに便利な道具だとは思われていたようではあるのだが、信頼には程遠いと理解できていたがゆえに。

それと同時に、サーシャはアクアの行動に奇妙な連帯感のようなものを持っていた。

自信を操っていたことは納得しきれた訳では無いが、それでもアクアを何故か仲間のようにすら考えていた。

（アクア様が私に対して実行したこと。それはモンスター特有のおぞましさを持っています。ですが、理解はできますわ。今のわたくしがユーリ様と同じことを画策している相手を見たとして、アクア様と同じ力を持っていたら。わたくしは似たようなことを実行したでしょうね）

サーシャのユーリへの好意はアクアによって増幅されたものではある。

だが、相応の期間を経たこと、もともとサーシャがユーリへ好感を抱いていたこと。

それらが相まって、サーシャ自身の感情として定着し切るほどになっっていた。

ユーリが望むのであれば、エルフィール家のすべてをユーリのために使ってもいいと思うほどに。

それゆえに、サーシャが最も優先したいものはユーリとの時間だった。

（ここでアクア様と敵対の姿勢を見せることは得策ではありませんわ。それでわたくしがユーリ様を失うような事態になれば、悔やんでも悔やみきれませんもの。そうなると、わたくしの選択肢としては、アクア様と他の人間の関係を軟着陸させることが最も有力ですわね）

サーシャが今最も失いたくないユーリとの関係を維持するためには、アクアがサーシャを完全に支配するという選択を避けるための行動が必要だ。

つまり、アクアが今支配している人間たちとの和解を諦めたら終わり。

だからこそ、サーシャはアクアと今後していきたいことを考えてい

た。

(アクア様は、食事にはさほど興味をお持ちではない。他に楽しむようなこと、ですわね。アクア様がユーリ様と過ごす時間を最も大切にされているのは当然ですが、カタリナ様とも仲良くしている。そうである以上、至つて普通に仲を深めるための行動が有効的。晩餐会のよくなものはダメですが、それ以外の遊戯や交流はアクア様だって望んでいるはずですわ)

エルフィール家はモンスターとの契約で成り立っている家であるので、サーシャもモンスターとの付き合い方はある程度理解できていた。

人の言葉を理解しているが、人と価値観を共有することは珍しい。それぞれのモンスターに五感を始めとする感覚の違いがあり、それに合わせた対応が必要である。

ただ、アクアはユーリやユーリのそばにいる人間たちと心の距離を近づけようとしていた。

そうである以上、完全にモンスターとしての対応をすることも危険だろう。

相手に弱みを見せないことがモンスターとの関係を築く基本ではあるが、ここは懐をさらす場面だ。サーシャはそう判断していた。

そもそも、絶大な力を持つオメガスライムであるアクアに弱みを見せないようにすることなど、何の意味もないのだから。

(アクア様と共有できる話題となると、まずはユーリ様の魅力でしようか？ わたくしとしては、名誉も力も持っているのに優しさを失わない所ですわね。無論他にも魅力的なところはありますが、そこが一番ですわね。そこから、わたくしがユーリ様と共にエルフィール家をもり立てたいという話に持っていくことが良いかと)

サーシャの目的はエルフィール家の発展であるが、そこにユーリもそばにいてほしいと思うようになっていた。

そのためには、単にユーリを利用するというのは悪手でしかない。ユーリの幸せと自分自身の幸せを共に満たせる良い妥協点を探ることが必要だろう。サーシャはそのように考えていた。

そこで、エルフィール家の表舞台をほかの血族に任せ、裏からエルフィール家に干渉する。

そうすれば、ユーリの自由をある程度保ったままエルフィール家をより大きくすることができはるはずだ。

ユーリがエルフィール家に協力しているという事実があるだけでも、サーシャが取れる手段は多くあるのだから。

(わたくし自身がエルフィール家の頂点に立ちたいわけではないのです。ならば、面倒な事は他の人に預けても良い。幸い、わたくし自身の契約技を始めとした力は絶大。アクア様の協力も得られるのであれば、わたくしたちの邪魔をさせないなど容易いこと。そのためには、アクア様の利益も考えなくてはなりませんわね)

アクアの望みは、察するに親しい人たちとずっと一緒に過ごすこと。ユーリの望みとも近いはず。

ならば、自分自身を手駒とするのが最も手っ取り早い。エルフィール家の中で、自分だけがアクアやユーリと親しいのだから。

そのような考えのもと、サーシャはアクアの望む未来に達する手伝いをする代わりに、アクアに自身の望みを叶える手助けをしてもらう。そう計画した。

サーシャにとつて、エルフィール家の人間だからといって全てが大切な訳では無い。

だから、そのような存在をアクアに支配してもらうことも良いかもしれない。

アクアは親しい人に乗っ取ることには嫌悪しているが、他者を操作すること自体を忌避しているわけではない。それゆえに考えた手段だった。

(アクア様だつて、ユーリ様の妨害をするかもしれない人間は邪魔なはず。それならば、わたくし達は協力できるはず。極端な話、わたくしとわたくしの子供が無事であれば良い。願わくば、その子供がユーリ様のものであれば。

ユーリ様はわたくしに恋愛感情など抱いていないでしょうし、わたくしだつてそうではない。それでも、これまで出会った男性の中なら



ば、ユーリ様が最も良い父親となるはず。アクア様は協力して下さるでしょうか？)

サーシャの頭には打算が常にあつた。ユーリとアクアが味方になるのならば、それほど心強い存在は他にない。

それに、ユーリに好意的な人間にも有用な存在は多い。そうである以上、サーシャにとつてもつとも重要な男がユーリとなることは必然だった。

(ユーリ様とて男なのですから、侍らせる女が増えて邪魔とは思いませんわね。ですので、わたくしのアプローチは効果的はず。それに、もとが打算だからといって、相手を大切に思う心は生み出せるもの。ユーリ様ならばこちらに配慮はしてくださりますし、わたくしだってユーリ様を喜ばせることはそう難しくない)

サーシャには合理性に基づいた考えの他に、ある欲望があつた。

エルフィール家を発展させながら、ユーリやアクアを幸せにしながら、それでも同時に達成できる目標だと考えている計画が。

(ユーリ様の生活から、わたくし自身を絶対に欠かせないものにする。あの強くて周囲にも恵まれているユーリ様から。すでに冒険者としての窓口はわたくしだけ。他にも、ユーリ様を支え続けることでユーリ様をわたくしに依存させられたら。それはどれほど甘美なのでしょう。そうなる瞬間が待ち遠しいですわね)

## 裏 衝動

アリシアとレティ、サーシャを目覚めさせて仲間にしたステラは、次にヴァネアへと目をつけた。

アクアの記憶から読み取れる言動を知って、ミーナを説得するために必要だと判断したからだ。

サーシャは結果的に先に目覚めさせても良かっただろうが、備えを軽んじるべきではない。

そのように考えて、説得しやすそうな相手から干渉することにした。

ステラの手によって意識が復活したヴァネアは、即座に状況を理解する。

流れ込んでくるアクアの感情から、やはりアクアは後悔していたのだと知った。

アクアは止まりたがっている。ヴァネアはそれを感じていたので、ステラの計画は望むところだった。

もう一度ミーナの剣を見たい。会話をしたい。そして、ミーナとユーリが共に競い合っている姿をまた眺めるのだ。

ヴァネアはミーナたちを神聖なもののように見ている、だから、彼女たちに近づくことで自分も綺麗になれるような錯覚を起こしていた。

（アクアはあれからも悔やみ続けている。それなら、アタシのすべきことは簡単ね。ミーナに反省を促すこと。そして、アクアにこれからミーナと坊やがうまくやっていると信じさせる。それだけで十分なはずよ。それだけで、素敵な和にもう一度入ることができるのよ）  
ヴァネアはミーナたちと出会ったことでほんとうの意味で幸せを知ることができたと考えていた。

だからこそ、その時間をなんとしても取り戻したい。暖かい関係をもう一度この手に収めるのだ。

それに、アクアの行動は理解できてしまう。自分自身がモンスターだからこそ。

暴力的な行動、残酷な手段。それらはモンスターにとって当たり前で、ヴァネアはアクアに乗っ取られる前は、幸福感を守るためにその衝動に必死で耐えていた。

（ミーナと坊やの関係を何度ぐちやぐちやに引き裂いてやりたいと思っただけなんてアタシにもわからない。だから、敵意が坊やの敵と思える人間にだけ向いているアクアが羨ましいもの。アタシなんて、心から大切だと思っっているはずのミーナですら、攻撃したいと考えてしまふのだものね。）

ただのモンスターとして無軌道に暴虐を振るっていた己を愚かしく思うからこそ、アクアには再起のチャンスが与えられてほしかった。

そんな心持ちのヴァネアは、アクアが得られる許しは、自分にとっても祝福となると信じていた。

（アタシだってたくさんの人間を殺してきた。それでも、アタシはミーナたちと幸せになりたい。アクアが許されるようなら、アタシだって許されて良い。ミーナや坊やのそばにいる資格は、アタシにだってあるはずなのよ）

ヴァネアとしては、薄汚れた自分と輝いているミーナたちがまるで対極のように思えて、それゆえに傷つき苦しんでいた。

それを解消したいという思いがとても強く、アクアと皆の和解を推し進めることは、その一助であるとするが、つくりつような感情でいた。

（結局のところ、アタシは残酷なモンスターなのよ。大好きなミーナや坊やですら、傷つけたいと思ってしまう。そんなアタシでも、ミーナたちと幸せになりたい。せめてそれくらい、許してほしいわ）

ヴァネアはミーナたちとの未来を考えると、同時にその過去も考えていた。

当然のことではあるが、過去のミーナたちをほんとうの意味で知ることはできない。

自分もつと早く彼女たちと出会っていたならば、その軌跡を知ることができたはずなのに。

悔しさのようなもの、悲しさのようなもの、後悔のようなもの。そ

れらがヴァネアに襲いかかっていた。

(アタシが昔のミーナと仲良くなっていれば……でも、あの時より弱いミーナにアタシが惹きつけられたかしら？ それに、もし坊やと出会っていたら、アタシは殺されていたかもしれない。……わかっているのよ。過去のものも考えても無駄だって。でもね、アタシはもつとミーナや坊やと時間を共有したかったのよ)

変えられない過去よりも、変えられる未来を考えよう。そう念じるヴァネアだが、それでも過去に思いを馳せてしまう。

自分がミーナたちと出会う前の時間がどれほどつまらないものだったか知っているからこそ、それを塗りつぶしてしまいたかった。

ヴァネアにとって、ミーナたちと出会ってからの時間は本当に幸せで、楽しくて、暖かかった。

それゆえに、ただのモンスターでしかない自分が憎かった。

それでも、そうだとしても、ミーナたちと一緒にいる資格を自分を持っていると信じたい。

ヴァネアからしてみれば、アクアの心を解き放つことは自身の許しにもなる、まさに福音だった。

(アクア、あなたの後悔はアタシにも分かる。だからこそ、あなたを止めようとしたのだから。でもね、まだ許されて良いはずよ。だって、まだみんな生きている。やり直せる。坊やたちと、アタシたち。どちらも幸せになるチャンスはまだある。だから、諦めちゃダメなのよ、アクア)

ヴァネアには、自分が許されたならばやってみたいことがいくつもあった。

それらの希望を叶えるために、もう一度あの楽しい時間を過ごすために、決して負ける訳にはいかない。

アクアだって、似たような気持ちでいるはずなのだから。アクアの周囲を大切に思う気持ちは本物のはずだ。

そうでなかったら、自分がミーナたちを想う気持ちまで嘘になってしまうのだから。

(坊やとアタシで本気で戦ってみるのもいいわね。もちろん、殺すつ

もりはないわ。でも、ミーナと坊やのようにお互いを高め合おうとする関係。その中にアタシも混ぜてほしい。アタシはモンスターだから、ミーナよりも成長の余地はあるはず。強いモンスターを倒せばいいの。そして、その力のようなものを奪う。アクアは成長を必要としていない。だから、アタシやメートルに分けてもらえないはず）  
モンスターは皆、モンスターが生まれるものになる成分を吸収することで強くなれる。

それでも、ヴァネアの考えは楽観的と言って良いものであった。人型モンスターほどの力を持つ存在が強くなるには、相当な強敵か、または途方も無い数の敵が必要だったのだから。

とはいえ、アクアにとってはヴァネアやメートル、レティのような存在を強化することは容易い。

だから、全くヴァネアに希望がないわけではなかった。

それに、アクアはユーリとミーナの戦いを楽しむ心があった。

だから、ヴァネアの希望をアクアが理解すれば、それに向けて進めることは十分に考えられることであつた。

他にも、ヴァネアにとっての楽しみはいくつもあつた。

それを思い描くたびに、ヴァネアの中には勇気が湧き上がってくるようであつた。

（坊やとデートしてみるのもいいわね。坊やはレティの扱いを分かっているけれど、そこが可愛らしいところでもあるわ。初々しい子を可愛がるのも楽しいわよね。それに、坊やはアタシを大好きでいてくれるから、そこが心地良い。モンスターの残酷さを十分知っていて、それでも信じてくれるのは、本当に嬉しいものね。

だから、また会うときのために、アタシは頑張ってみせる。そして、アクアと分かり合ってみせるわ。モンスター同士だからできることはきつとあるはずよ。人では届かないところに、アタシの手で……！）

ヴァネアは自分の過去を後悔している。ただ何も考えずに人を殺していた時期のことを。

だからこそ、いま後悔の念を抱いているアクアに共感できた。

その気持ちがアクアに伝わると信じて、自分にとってアクアが救いとなるように、アクアにとつても自分が救いになつてくれればと願つた。

ヴァネアにとって、自分がモンスターであるからこそ、ミーナたちのそばにいる許しを求めるのは当然のことだった。

結局、ミーナたちのように綺麗ではいられない。それでも、その輝きの中に居たい。

ミーナやユーリ、それに他の人達とも、楽しい時間を共有したい。だって、こんなにも周りの人たちが大好きなのだから。自分と一緒にいることを楽しいと感じて欲しいに決まっている。

もし仮に、自分と一緒にいることを幸せと感じてくれる人がいたならば。どれほど幸福なのだろう。

ヴァネアはそんな事を考える中で、ミーナとユーリはおそらくそう感じてくれているのだと信じる事ができた。

だから、何が何でもミーナたちとの時間を取り戻す。決意を新たにしていた。

(ミーナはアタシの相棒でいてくれる。坊やはアタシを信じて、そばにいて楽しいと思つてくれている。それを信じられるのも、ミーナや坊やと出会えたから。アタシを信じてくれたから。

ねえ、アクア。誰かから信じられるつてこんなに嬉しいこと。だから、アタシはあなたを信じるわ。そして、いつかアタシのことも信じてほしいわ。そうすれば、お互い幸せでいられるでしょう?)

ヴァネアはアクアを信じるかと決めてから、これからミーナたちとしていことをずっと考えていた。

ミーナとまた戦うこと、ユーリと一緒にでかけたりして過ごすこと、3人で遊んでみることに。

その輪の中にアクアも入つてくれるはず。その未来を待ちながら、自分たちが解放される瞬間に期待していた。

(アタシたち3人と、アクアと、できれば他の人達も。人と仲良くすることがこんなにも素晴らしいなんて知らなかった。だから、ミーナと坊やを引き裂いてやりたいって気持ちは絶対に我慢する。その先の未

来には、アタシの望む光景は生まれないのよ)

ヴァネアはモンスターとして、人を傷つけたいという当然の欲望があった。

それでも、自分の幸せはその衝動の先にはない。それは強く信じる事ができた。

ミーナたちとともに過ごすことができる喜びをこれからも噛みしめるために、ずっと耐え続けてみせる。固い決意が生まれた。

それでも、適度に欲望を発散しなければ耐えられないだろうと判断する冷静さはあった。

そんな中、ヴァネアにはある欲望が湧き上がってきた。

(ミーナより先に、坊やと対等になるっていうのは楽しそうね。他にも、坊やより強くなって、坊やを追い詰めるっていうのはどうかしら？きつと、それでも坊やはアタシを信じてくれる。だから、圧倒的な力の差を見せつけてあげたいわ。そして、坊やの耳元で、生殺与奪を握られているって事実を囁いてあげるのよ。その時の坊や、どんな顔をするのかしら？)

## 裏 痕

ステラはヴァネアを味方にできたと判断して、ミーナを目覚めさせにかかった。

ミーナはユーリをとて強く意識していることが伝わっていたので、ヴァネアを味方にできた時点でステラはうまくいくだろうと判断していた。

そして、ミーナが覚醒すると、すぐにミーナは自分の行動を悔やみだした。

ユーリをあれほど傷つけようとしたなんて、自分はどれほど愚かだったのだろうか。

そんな自分に、救われる資格などあるのだろうか。そう考え、自分が解放されることを諦めていた。

(結局、僕がアクアに乗っ取られたのは自業自得。何も悪くないヴァネアまで巻き込んでしまった。そんな僕がユーリと再会する資格なんて無い。みんなが解放されることは応援するけど、僕はもういいよ)

ミーナは我に返ったことで、自分の行動がどれほど愚かだったのかを理解していた。

ユーリに対して真剣で挑みかかり、命すら危うい一撃を放つ。

それを自分自身の記憶から消えるような、かつて競い合っていたものと同じようにされたらどう思うか。

その事を考えてしまえば、答えは自ずと導き出された。

ただユーリに度し難い迷惑をかけただけの己に、ユーリと競い合う資格など無い。

そう考えて、アクアに自分の代わりにユーリを幸せにしてもらおうと決めた。

そんなミーナの考えを知ったステラは、ヴァネアに今の状況を伝える。

すると、ヴァネアはミーナとともに生きたいという思いを送った。

ヴァネアは新しい生き方をくれたミーナに感謝していること、また



ミーナとユーリの競い合う姿が見たいこと、そして、3人で幸せな生活を送りたいこと。

ヴァネアは必死だった。ミーナがとても大切なヴァネアにとって、自分だけが解放されている状況に意味を見いだせなかったからだ。

そんなヴァネアの願いが功を奏して、ミーナは少し前向きになった。

自分を許すも許さないも、アクアとユーリが決めること。そして、流れ込んでくる自分の体の記憶では、ユーリは許してくれている。

ならば、アクアに許してもらえた時に、またユーリと競い合いたい。

あるいは、アクアには許されなくてもいいかもしれないけれど、それは仕方ないことだ。

ユーリに対してとても酷いことをしたのは事実なのだから。

それでも、願うならば、またユーリと。今度はユーリの隣で仲間としても戦いたい。

ミーナは本音ではずっとユーリに許されたかったのだから。

(僕は本当はユーリと一緒に仲間として戦いたかったんだ。ライバルとして高め合うことだって大切だった。でも、僕が求めていたのは、同じ方向を向いていられる仲間。どうして、間違えてしまったのかな……)

自分の本当の望みに気が付かなかったゆえに、ミーナはライバルという関係に執着していた。

だが、ミーナが強く求めていたものは、隣で戦う仲間。そうであると理解していたならば、あんな手段は取らなかつたはず。

強い後悔がミーナに襲いかかっていたが、それでも、ミーナはユーリの隣を諦めたくなかつた。

(僕は単なるバカだった。自分の強さに溺れて、自分自身すら見失ってしまうほどに。それでも、そんな僕でも、ユーリの隣にいていいのかな……?)

ミーナは自分の愚かさを強く感じたがゆえに、ユーリを輝いているものかのように見ている。

あんな目にあつたにも関わらず、自分を許す言葉を投げかけてくれ

た。

そして、また自分とともに戦うことを望んでくれた。

それを思い出すと、ユーリとまた話をしたくなる。自分ならば絶対に許さない自分自身を受け入れてくれる人。

ミーナにとって、競い合っていたかつての日々以上に、これから過ごせるかもしれない時間が素晴らしく思っていた。

(ユーリは本当に優しい。ユーリは汚い僕の本性も受け入れてくれた。だから、アクアの今していることだって許してくれるはず。そのはずなんだ。恥知らずかもしれないけれど、それでも、またユーリとともに過ごしたい。お願いだ、アクア。どうか僕を許してくれないか)

一度ミーナがユーリとまた一緒に生きることを見ると、もう諦めたいという思いが再び浮かび上がってくることはなかった。

ミーナは罪の意識に苛まれていただけで、本音ではユーリを失いたくなかったのだから。

そもそも、ユーリがどうでもいい相手であるならば、あんな事件は起こさなかった。

それを考えれば、ミーナの答えなどはつきりしていたというのに。(ああ、僕は本当に愚かだった。僕が求めるものを深く考えていれば、ユーリにあんなことをするのが無意味だと分かるはずなのに。でも、そんな愚かな僕だとしても、もうユーリのそばを離れたくない。初めてだったんだ、あんなに楽しい時間は。何度も巡ってきた奇跡の出会いを壊そうとしたバカな僕だけど、ユーリ、君ともう一度……)

ミーナは一度自分の願望を理解してしまうと、もうアクアに体を操作されていていいとは思えなかった。

それが罰だというのなら理解できる話ではある。想像を絶する苦しさだろうから。

だからこそ、今のミーナにはアクアから解放されないということが恐ろしくて仕方なかった。

自分の意識が失われるのならまだいい。もしも、もしも意識があるままアクアの操作する自分とユーリの時間を見続けるならば？

ミーナには、それに耐えきる自分の姿が一切想像できなかつた。

(カタリナは想像するだけで恐ろしい事態に耐えきつていた。それだけで、尊敬できる人だよ。でも、僕に同じことは絶対にできない。どうすれば、アクアは僕を許してくれるんだ？ なんでもする。ユーリと離れること以外なら。だから、アクア。頼むよ……)

ミーナの想像している許されるための手段は肉体の苦痛に耐えることが主で、例えばヴァネアと敵対するようなことは想像していなかつた。

ただ、実際にそれを許しの条件としてアクアに提示していたならば、アクアは許さなかつたであろう。

人とモンスターの絆を軽んじる存在を、アクアは決して許せないのだから。

アクアにとっては、それは自分とユーリの関係を否定されることと等しかつた。

とはいえ、ミーナとてヴァネアは大切な存在だと信じている。だから、ヴァネアを切り捨てるとアクアに指示されたならば、拒絶していたであろう。

その先に永劫の苦しみが待っていたとしても、ミーナは大切な人を手に掛けることを選択できない。

冷静になつたミーナは、だからこそ自らがユーリを本気で攻撃した愚かしさが理解できていた。

(真剣をユーリに向けて、もし本当にユーリの命が失われていたら。僕は間違いなく絶望していた。追い詰められていたとはいえ、自分が情けなくて恥ずかしい。でも、だから同じ間違いは決して起こさない。ユーリもヴァネアも、オーバースカイの仲間も。僕は守ってみせるよ)

ミーナは一度間違えたからこそ、自分の行動を冷静に見ることができると信じていた。

実際にそうなるかはこれから分かっていくだろうが、その感覚をアクアに伝えられればよいのではないか。

アクアだって、間違えたことを後悔しているのだから。

おなじ過ちを繰り返さないためにも、失敗した者同士での協力が必要になるはず。

そのような方向性でアクアの説得に加わろうと考えていた。

（アクアにとつて、僕たちを操っていることは後悔に値する失敗なんだ。だからこそ、一度間違えてしまった僕の存在が役に立つはず。僕たちはきつと同じだ。だから、一度だけでも信じてほしいんだ、アクア）

ユーリともう一度ふれあうために、全力でアクアの手助けをする。

そのような方針でミーナはアクアとの和解を計画した。

ミーナの後悔はユーリに追いつこうとするあまり暴走してしまつたこと。

だから、今度は無理に追いつこうとはしない。それで、同じ過ちはもう起きない。

アクアの周りを支配してしまうという失敗ならば、ユーリを自分たちでも守ればアクアだつて安心できるはず。

ユーリとの時間を大切にするために、アクアとも協力する。そして、ユーリの笑顔を守る。

そうすれば、ユーリもアクアも自分だつて幸せになれるはず。ミーナはそう信じていた。

（もうユーリを追いかけられるために無茶はしない。それでも、少しでも近づくために、努力は続けてみせる。ユーリだつて、僕の実力が近づけば嬉しいはず。一步一步強くなって、少しずつユーリに近づいて。そして、いずれは追いつくことができたなら。もう諦めないけれど、それでも、自分を見失わないままで。ユーリが大切だという気持ちを忘れなければ、きつと大丈夫だから）

ミーナはユーリがミア強化を手に入れたことで突き放された。

その差があまりにも大きかったから、焦りが生まれた。だけど、これ以上はユーリが大きく強くなることはないはず。

それに、もしもう一度同じようなことがあつたとしても、もう安易な道は選ばない。

ミーナはユーリとともに幸せになりたいのだから。ユーリと競い

合うだけでなく、追いつくために駆け上がっていくのも楽しいはずだ。

ユーリはきつと自分が弱くても忘れないでいてくれる。自分とは大違いなのだから。

ミーナは落ち着いた心持ちで今後を考えることができていた。

(うん、ユーリのことは信じられる。僕のように冷たい人間じゃないから。だから、安心してユーリを追いかけていけばいい。ユーリはきつと見守っていてくれるはずだから)

ミーナにとって、ユーリを信じるということは迷う必要のないことであった。

あそこまでのことをしたのに信じてくれている人を疑っては、誰を信じるというのか。

だからこそ、ユーリが喜ぶ顔を見るために、努力を続けることを誓った。

ユーリはきつと、その瞬間をとっても喜んでくれるはずだから。

そんな考えと同時に、ミーナが自分を嫌悪しそうな考えもあつた。

それを想像するだけで、背中に快感のようなものが走ってしまう。ただ、ユーリはそれでも自分のことを好きでいてくれるとミーナには思えてしまった。

(ユーリとの戦いで、ユーリが僕に消えない傷を刻む。そうすれば、ユーリは悲しむだろうけれど。でも、その傷跡を見た時のユーリはきつととても素敵なお顔をしているから。ああ、我慢しないとイケないのに、楽しそうで仕方がないよ)

## 裏 本能

ステラは次にメルセデスかメーテルのどちらかを目覚めさせることに決めた。

2人のどちらを優先するかは悩みどころであった。

両者共、自分が支配されると知らずに体に乗っ取られている。

そのため、それが2人の感情にどう影響するか、測り知ることができないでいた。

アクアを拒絶する反応を取られてしまえば今後が厳しい。

そのため、ステラは慎重にどちらを先にするかのメリットとデメリットを考えていた。

メルセデスを先に選択すれば、メーテルの説得が後にしやすくなるだろう。

とはいえ、メルセデスの心情がはっきりしない以上、どのような形でアクアとの和解を目指させるかが難しい。

メーテルを先に選択すれば、メルセデスは自分が何故後にされたのか疑うかもしれない。

それでも、メーテルはモンスターである以上、アクアの心情に近いものがあるだろう。

熟慮の末、ステラはメーテルを先に目覚めさせることに決めた。

メルセデスを理解できているのはメーテルだけだろうから、そこからメルセデスを説得する手がかりを手に入れるために。

そして、メーテルは覚醒する。目覚めたメーテルは自分の状況を理解してすぐ、アクアへの尊敬の念を深めていた。

(アクアさん、さすがだわ。こんなにも綺麗に何も気づかせずに他者を支配するだなんて、まさに最強のオメガスライムにふさわしいわ)。アクアさんに出会えてよかった。おかげでこんなにも素晴らしいものを見ることができたのよ)

メーテルにとって、アクアの圧倒的な力はまさに憧れと言ってよかった。

その力でメーテル自身を強化するなど、己にも力を分け与えてくれ

る、とても輝いた存在。

アクアがオメガスライムであるという事実も、メーテルの敬意をさらに大きくするだけであった。

何故アクアが自分を支配していることに悩んでいるかは分からないが、尊敬するアクアが苦しんでいるのならば解消したい。メーテルはそう考えた。

（アクアさんが苦しむのなら、今の状況は間違っているわく。あんなに素晴らしい存在なのだから。絶対の存在として君臨するくらいでいいのよ）

メーテルはステラの考えを知って、メルセデスを説得することには乗り気であった。

アクアが絶対に正しいのだから、アクアが和解を望むのならば達成してみせる。そんな気分からだった。

スライムの頂点であるオメガスライムのアクアは、メーテルにとってあまりにも偉大な存在であった。

それゆえ、メーテルはアクアに狂信に近い感情を抱いていた。

アクアが白といえば黒ですら白とする。メーテルにとっての正しさはそれであった。

（メルちゃんだって、またユーリちゃんと会いたいわよね。私だってユーリちゃんとまた会えるのは嬉しいわ。ユーリちゃんは、弱いスライムでも、好きって言うてくれるから）

力の信奉者であるメーテルにとって、弱い己はそれほど価値のあるものではなかった。

それでも、そんな自分を好意的な目で見るユーリことは好ましいと思えた。

ユーリは自分より強いにも関わらず、弱い自分でも信じて大切にしている。

その感覚はメーテルにとって癖になりそうなおもてであった。だからこそ、ユーリは尊敬できる師匠なのだ。

ユーリを滅茶苦茶にしたいという思いもあったが、アクアがいる限り、そんな事をする気はない。

アクアが大切に思っている以上、ユーリは神聖不可侵なものなのだ。とはいえ、アクアはユーリと自分が親しくすることは受け入れて  
いる。

そのため、アクアの意に反しない範囲でユーリを可愛がるつもり  
のメートルだった。

（アクアさんが教えてくれた技も、ユーリちゃんが伝えてくれた立ち  
回りも、私の大切な財産。だから、アクアさんが許してくれるのなら、  
またユーリちゃんと一緒に冒険したいわ。メルちゃんだって、頑  
張った成果をユーリちゃんに見せたいわよね？）

メートルにとって、メルセデスは大切なパートナーであることは間  
違いない。

それでも、絶対者と言えるアクアに出会ってしまった、メートルの  
優先順位は大きく変わった。

第一にアクア。第二にユーリ。そして第三がメルセデスという形  
になっていた。

メルセデスがたとえアクアを拒絶したいと考えたとしても、メーテ  
ルはアクアを優先する。

そして、メルセデスにはアクアと和解してもらおうのだ。どんな手段  
を使ったとしても。

とはいえ、メートルに取れる手段はそれほど多くはなかった。結局  
のところ、メルセデスが諦めるまで説得し続けるのがせいぜいだろ  
う。

（メルちゃんは、アクアさんにどんな反応を返すのかしらね。メル  
ちゃんといえど、アクアさんに失礼を働いたらダメよ。だから、な  
んとしてもメルちゃんを説得しないとね）

メルセデスがアクアを拒絶するのか、和解を受け入れるのか、メー  
テルにはわからなかった。

それでも、メートルはどういう未来にするのかをはっきりと見据え  
ていた。

当然のこととして、アクアが望む形、すなわちメルセデスとアクア  
の和解へと持っていく。



そのために必要な、メルセデスを説得するための材料を考えていた。

（メルちゃんのことだから、何かご褒美となるもので釣ればいいかしらね。その辺、何がいいかしら。やっぱり、オーバースカイ、特にユーリちゃんと一緒に冒険することかしら。私だって、そんな機会があったら嬉しいものね。）

メルセデスとメーテルの共通点として、ユーリを尊敬しているということがあった。

そのため、その共通点から攻めるのが常道だろうとメーテルは考えた。

ユーリはメルセデスや自分とともに冒険することを喜んでくれる。メーテルはそう信じていた。

だから、メルセデスだって信じやすいだろう。ユーリの優しきは、メルセデスもメーテルも解きほぐしてくれたのだから。

メーテル自身も、ユーリとともに冒険できるのならば喜ばしいと考えていた。だからこそ、メルセデスの説得に使えると判断したのだから。

（ユーリちゃんに私たちの成長を見せてあげたら、いい顔をして喜んでくれそうよね。私だって嬉しくなりそうなくらいに。オーバースカイの加入試験のとき、アクアさんが操っていたとはいえ、あれ程喜んでくれたのなものね。）

メーテルはアクアが自分を操作した時の動きを強く意識していた。今後の戦いの参考になるだろうし、単純にアクアを覚えていたいということもあった。

偉大なる先達の戦術を取り入れられるのだから、アクアに取り込まれたことを感謝すらしていた。

オメガスライムは、恐らくすべての意思を持つスライムのあこがれであろう。

最弱と扱われるスライムにとって、数少ないどころか唯一と言って良い希望の星。

誰もがオメガスライムを目指して、そして挫折していったはずだ。

そんなオメガスライムの物語を、これからはそうと知りながら見続けることができる。

意識が目覚めたメーテルにとって、アクアから解放されないとしても、今の状況は最高と言っているいいものだった。

（ああ、アクアさんは素晴らしいわ。ちよつと力を解放するだけで、ドラゴンすらも歯牙にかけない。その絶大な力を知ることができた。最高のご褒美だわ。生まれてきてよかったわ）

メーテルから見たアクアは、まさに理想のモンスターだった。

絶大な力を持ち、最高のパートナーを手に入れて、世界の命運すら手中に収める。

自分が同じように成れたらと、どれほど考えたかわからないほどに。

メルセデスはもちろん素晴らしいパートナーだが、ユーリとアクアほどお互いを信じてはいない。

オメガスライムの力があれば、ユーリなど吐息を吹きかけるよりもたやすく殺せる。

それなのに、その力の差をある程度理解したままユーリはアクアを信じている。

メルセデスはそんな状況でも自分を信じてくれるだろうか。自問して否定した。

お互いの弱さがつなぎとめた関係だから、片方だけが強くなっては切れてしまうものだろう。

メーテルは少しの悲しさとともにアクアとユーリの間を羨んだ。（ユーリちゃんが契約者だったら、きっと楽しかったんでしょね。でも、私の契約者はメルちゃんよ。それがいいわ。だけど、ユーリちゃんとアクアさんほどの関係にはなれないのでしょね）

メーテルはメルセデスともっと仲良くしたいと考えていたが、今回の件で仲がこじれてしまうかもしれない。

その危惧は頭にあったが、それでも、アクアという理想を目の前にした以上、止まるという選択肢はメーテルの頭に浮かばなかった。

メーテルにとって、メルセデスは間違いなく大切な存在だ。ただ、

オメガスライムへのあこがれが上回ってしまうだけで。

できることならば、メルセデスともアクアともどちらとの関係も両立したい。

だが、優先順位ではアクアが上回ってしまう。だから、自分とメルセデスはユーリとアクアのようになれないのだろう。

メーテルは自省しながらも、それでも今は進むと決めた。

（メルちゃんが拗ねちゃったら、なにか美味しいものを紹介すればいいかしら？。それでも仲直りできなかつたら、どうしましょうか。流石にアクアさんに操ってもらうのはまずいわよね。そうないと、ユーリちゃんに仲を取り持ってもらうのがいいかしら？。）

メーテルはアクアに従うと決めていたが、それでもアクアから流れ込んでくる感情から察するに、ある程度自由を認めてくれるはずだ。

だから、アクアの逆鱗に触れない範囲で、ユーリと遊ぶ内容を考えていた。

ユーリは自分を認めてくれるから大好きだが、それはそれとして、モンスターの本能がユーリに対する嗜虐心をもたらししていた。

（ユーリちゃんと模擬戦をして、私が勝ったら楽しいわよね。弱い弱いスライムに、力の差を見せつけられちゃうのよ。抵抗してもまるで通じなくて、私の前で這いつくばるしか無いの。その時のユーリちゃんの顔、どれだけ悔しそうなのかしら。屈辱に歪むユーリちゃんを、頑張って偉かったわねって撫でてあげるのよ。）

## 裏 顕示

メーテルがアクアと和解することに乗り気になったので、ステラはメルセデスに干渉をはじめることを決めた。

メルセデスがアクアを受け入れたならば、状況は大きく進歩する。仲間となった人数で完全に残り人数を上回っているので、同調圧力のようなものを仕掛けやすいからだ。

無論、本心からアクアを受け入れてもらったほうが良いことは確かである。

それでも、取れる手段が広がるということは大きかった。

これから説得しなければいけないのは、難しいことがはっきりしているオリヴィエと、何もわからないフィーナだからだ。

オリヴィエの人間不信の心がアクアから伝わっていたし、フィーナが最初から操られたことも同様だった。

だから、その2人を説得することは難題だ。取り掛かる前に1つでも良い条件を整えておきたい。

そのためにも、まずここで結果を残し、勢いをつけておきたいステラだった。

そして、メルセデスが目覚める時間がやってきた。

メルセデスは意識がはつきりしてすぐ、流れ込んだアクアの感情に複雑な心持ちになった。

アクアが自分を好きでいることがとても良く伝わる。それなのに、とてもおぞましい行為を自分に行った。

それは、自分に気を使った結果でもあった。だから、今になって自分は状況に気づいた。

眠っている間に自分の体に乗っ取るというアクアの判断には、良さも悪さも感じる。

メルセデスはアクアに怒りを抱いたし、感謝も抱いた。

だからこそ、これからのように行動するかが悩みどころだった。

(アクアはあたいにひどいことをしたつす。それは事実。でも、アクアがあたいたちが大好きだったのも伝わってくる。ずるいつすよ。

ここまで好きになってももらえるなんて、嬉しいに決まってるじゃないっすか)

メルセデスたちはスライムとスライム使い。どちらも弱いとされている存在である。

それゆえに、メルセデスたちは誰からも相手にされていなかった。メルセデスにとつて、ユーリだけが例外であった。だからこそ、ユーリを尊敬していた。

それなのに、アクアが自分たちを好ましく思っていたことが流れ込んできた。

嬉しくて、悲しくて、それでも、とても恐ろしくて。

アクアの好意を信じたい。そのためには、これから和解できるかどうかが大変。

メルセデスはどうしても、自分を好きでいてくれる人を信じたかった。だから、アクアと仲良くしようと考えた。

(あたいがどれだけ弱いかわかって、それでも好きになってくれたっす。アクアはオメガスライムだから、あたいななんて蟻みたいなもののはずなのに。弱くても認めてくれるなんて、そんな人、ユーリさんだけだと思っていたのに。ううっつ、あたいはどうすればいいっすか？ アクアはあたいを解放したいと思ってくれるっすか?)

メルセデスはアクアと和解することに前向きだった。最大の要因はユーリとまた過ごしたいことだった。

それに、アクアからの好意に絆されそうになっているということも大きい。

人から好かれるという経験の少ないメルセデスは、恐るべきアクアといえども、向けられる好意は失いたくなかった。

それだけではなく、アクアとユーリの関係に憧れているということもあつた。

アクアとユーリはお互いがお互いを強く信じあっている。

自分はメーテルをそこまで信じられているのか。あるいは、メーテルは自分を信頼してくれているのか。

メルセデスにはそんな疑いが浮かんでしまい、だからこそ、メーテ

ルともつと関係を強めたいという思いがあった。

(メーテルとあたいは、もつともつと仲良くなれるはずっす。ユーリさんとアクアという手本が目の前にいるんすから。強い絆で結ばれること、どうしても目指したくなってしまうっす。だから、アクアと早く和解して、少しでも先に進みたいっすね)

それだけではなく、メルセデスからしてみれば、ユーリが最強のスライム使いであることは明らかだ。

その軌跡を誰よりも近くで見たい。そして、ユーリの1番弟子として、世界で2番めのスライム使いになってみせる。

アクアがオメガスライムだからというのは、少し卑怯にも感じてしまう。

それでも、ユーリという輝ける存在の弟子であるという事実、ユーリに認められているという実感。

それらがメルセデスに強い勇気を与えていた。

(ユーリさんは最高のスライム使いっす！ だから、あたいはスライム使いとして誰よりもユーリさんを理解できる。どれほどアクア水がすごい技なのか、ユーリさんの技術の圧倒的な素晴らしさも、全部全部。人間としてのユーリさんなら、アクアやカタリナさんの方がわかっている。それは仕方ないっす。でも、スライム使いとしてのユーリさんは、あたいが一番知っているっすからね！)

かつてメルセデスがユーリに憧れるきっかけになった王都での大会。

メルセデスがユーリに弟子にしてもらったとき、ユーリは更に強くなっていた。

あまつさえ、自分が乗っ取られた後にまだ進歩していたのだ。

ユーリが己の師匠であることを、メルセデスは何よりも誇りだと感じていた。

(あたいはやっぱり、またユーリさんと一緒に冒険したいっす。そのためにも、ちゃんとアクアと和解しないとだめっすね。恨みはくはないっすけど、許さないことには始まらないっすからね。それで、またユーリさんにいっぱい褒めてもらおうっす！)

メルセデスは生まれてからずっと蔑まれていた。

だからこそ、ユーリからの褒め言葉がとてつもない快感になっていた。

承認欲求のようなものが満たされていく感覚は癖になっていて、もうもとの生活に戻ることに耐えきれそうになかった。

もしもユーリに見捨てられてしまったなら、すぐに人生をはかなんでしまうかもしれない。

そう考える程度には、メルセデスのユーリに対する依存心は強かった。

(ユーリさんは優しいっすから、どうやって褒めてもらうかおねだりするのでもいいっすね。頭をなでてもらうとか、お祝いにアクセサリーなんて買ってもらったりして！ あたいですらいっぱいお金持っているんっすから、ユーリさんなら何でも買ってくれそうっすよね。まあ、見捨てられたくないから、程々にしないとイケないっすけど)

メルセデスはアクアを怒らせた原因について反省していた。

だから、ユーリに見捨てられるという考えが頭の中に浮かんでいた。

自分の嘘や軽口はユーリなら笑って許してくれると思っていた。

それでも、もしユーリの怒りに触れてしまったならば、オーバースカイに入るところか、弟子ですらなくなっていたかもしれない。

そんな事態は考えるだけで震え上がりそうなので、だから、メルセデスはユーリに気を使うと決めていた。

(ユーリさんに嫌われてしまったら、もう生きる意味なんて無いっすよ。だって、そんな事になったらもう誰からも褒めてもらえない。それどころか、見捨てられたことで前よりも低く見られてしまう。あの笑顔と優しい声を失って、あたいは何を楽しみにすればいいっすか?)

メルセデスの本当の望みは、オーバースカイに加入できなかったとしてもすでに叶っていたのだ。

それに気が付かなかったから、アクアに乗っ取られる行動を起こし

てしまった。

ユーリに好かれてさえいるのならば、それで満たされていたのに。それ以上とは言い切れないつまらない欲望がきっかけで、全部壊れるところだった。

その後悔が、メルセデスのユーリへの執着を強めていた。

(あたいはバカだった。それはもう分かりきってる。でも、まだやり直せるから。またユーリさんと訓練したり、遊んだりしたいっす。そして、ユーリさんに認めてもらえるくらい強くなる。今度は間違えないっす。よそ見はもうしないから、それでユーリさんに喜んでもらえたらいいな)

かつては誰かから認めてもらいたいということがメルセデスの願いだった。

今では、ユーリから認めてもらいたいということが飛び抜けての一番。

それから、メーテルともっと仲良くすること、オーバースカイの間を支えることと続く。

自分の願いがはつきりしたメルセデスにとって、未来は希望に満ちていた。

(前はユーリさんくらいとしか仲良くしてなかった。でも、オーバースカイのみんなもきつといい人だから。だって、ユーリさんを大切に思う仲間っすからね。あの優しい人を好きになるのなら、悪人とは思えない。アクアはちよつと違うかもしれないっすけど。でも、たぶんアクアだつてあたいには優しくしてくれる未来がある。だから、信じてもいい)

メルセデスはアクアを信じるつもりになっていた。

ユーリを好きだという気持ちは同じなのだから、きつと分かりあえる。

そうでなくても、自分を好きでいてくれるという事実は勇気をくれた。

だから、恨みはもう忘れていい。次に似たような事態が起こらないことは、きつと保証されているから。



アクアの感情は理解できる。ユーリを傷つけるものを許さないと  
いうのは自分も同じだ。

ただ、力と取れる手段に違いがあっただけ。同じ力があつたのな  
ら、自分ならば殺していたのかもしれないから。

(ユーリさんにまた褒めてもらうことを邪魔する人は許せない。だか  
ら、もっと力が欲しい。ユーリさんのそばを奪われなかったための力が。  
オーバースカイの仲間とは特別だけど、ただの他人には絶対に妨害なん  
てさせない)

メルセデスはユーリを信じているからこそ、ユーリ以外が自分の喜  
びを奪うと考えた。

それでも、ユーリの周りを排除することはできない。ユーリに嫌わ  
れることは目に見えているから。

だが、現状ユーリが好意を持っていない相手ならば別だ。

人殺しはユーリが嫌悪するだろうが、うまく排除するのならば話は  
別だ。

そのためには、さらなる努力が必要だとメルセデスは判断した。

そして、メルセデスがユーリに求めるものは他にもあつた。

自分が死んで悲しむこと。すなわち、自分の苦しみをユーリ自身の  
苦しみのように思ってもらえること。

そのために、ユーリに対してしたいことがあつた。

(ユーリさんに、あたいのすべてを知ってもらおう。悪いところも、  
恥ずかしいところも全部。そして、その変化に気づいてもらう。ユー  
リさんがあたいを憶えてくれるのなら、どんな死に方をしてもらいま  
わない。だから、その時まで、ずっとあたいを見つめていてください  
ね)

## 裏 熱望

メルセデスとメーテルはアクアとの和解を目指す方針になった。そこで、次にステラが目覚めさせると決めた相手はフィーナだった。

オリヴィエが怒りを抱いていると、相当ややこしい展開になりかねない。

だからこそ、できる限り味方を増やしてから行動したいとステラは考えていた。

フィーナがユーリと出会った時にはすでにアクアに乗っ取られていた。

だから、アクアの感情からフィーナの人格を推し量るしかない。

それはとても難しく、ステラの頭を大きく悩ませることになった。

そこで出された結論が、まずは目覚めさせて、それからの動き次第で説得の方針を考えるとというものだった。

行き当たりばつたりと近しくはあるが、十分な情報を集める時間はない。

それは、カタリナの精神の歪みの原因、体を動かさない時間の長さを他の人にも味わわせる結果になるから。

そうなってしまうえば、せつかく和解に前向きになったことが無に帰しかねない。

最悪フィーナが仲間にならないとしても、その展開だけは避けたかった。

そのまま、フィーナはステラの干渉によって意識をはっきりさせる。

流れ込んでくる自分の体の記憶とアクアの感情。それらから状況を理解したフィーナ。

そこでフィーナに生まれた感情は、アクアへの怒りでもなく、恐怖でもなく、強烈な嫉妬だった。

(忌々しいわたしの力を受け入れてくれる人がいるのに、どうしてわたしはそこにいない……。ユーリさんは私を化け物と知っても受け

入れてくれるのに、わたしを見ていない……。ふざけるな……。そこはわたしの居場所だ！ 返して！ 返してください……)

フィーナにとって、自分の異常を知りながらそれでも暖かく迎え入れてくれる人は理想だった。

それをユーリは完璧に満たしていた。だから、今すぐにも本当の自分でユーリと接したい。

そのためならば、自分の居場所であるユーリの隣を奪ったアクアと和解する屈辱など、どうということはない。

それよりも、自分の体を取り戻すことが第一だった。ユーリに受け入れてもらいたかった。

(ユーリさんという素晴らしい人との時間をアクアさんは奪っていた……。でも、それはもうどうでもいい。そんなことよりも、ユーリさんに会いたい。会って、いろいろな話がしたい。褒めてもらいたい。それだけで、わたしは何でもできるんですから……)

フィーナは自分を受け入れてくれる人を求めながらも、人を避け続けていた。

もし仮に、フィーナがユーリの窮地を見たとしても、初対面ならば助けなかった。

ユーリは危機から救われた恩がゆえに、フィーナを肯定していたのだから、本来のフィーナがユーリと親しくなるはずがない。

アクアによってフィーナが操作されたことによって生まれた出会いでしかなかった。

それに気がついていないフィーナは、アクアによって自分の喜びを妨害されていると考えた。

それが、フィーナの強烈な嫉妬心の根源だった。

ユーリは化け物でも信じてくれる人。それなのに、オメガスライムとしても、フィーナとしてもユーリに頼られている。

それはフィーナにとって信じられないほどの贅沢で、恐ろしいと感じるほどの強欲だった。

(なんで、わたしは他の人がわたしの望む形で必要とされているのを見なくてはいけなかった……？ わたしはただ、化け物として生まれ

ただけなのに。わたし以上の化け物であるアクアさんは、わたし以上に幸せなのに。悔しいです……わたしだって、ユーリさんのお役に立てるのに……)

誰かから必要とされる経験がないフィーナにとって、体から流れ込んでくる記憶は劇薬だった。

自分も同じ体験がしたい。自分ならもつと尽くせる。もつと役立つ。

だから、もつと求められたい。化け物であると知って、それでも大切にしてくれる人に。

だからこそ、フィーナはなんとしても自分の体を取り戻したかった。

力づくが可能ならばそれを選択していただろうが、今の状況では不可能だ。

だから、アクアと分かり合うしか無い。そこが妥協点だろう。そう考えた。

(アクアさんが憎くはある。それでも、ユーリさんと出会うためならば、そんな感情はゴミでいい。ああ、ユーリさんは本当のわたしを、どうやって求めてくれるのでしょうか……)

フィーナにはこれまでの人生で考えた、自分を肯定してくれる人とおこないたいことが山ほどあった。

そのどれもをユーリは受け入れてくれそうで、だからフィーナの心はとても弾んでいた。

(わたしの力でユーリさんの敵を倒すのもいい。力を発する起点である手を握りしめてもらうことも。抱きしめてもらうのもいいかもしれない。化け物だって知っても触れてくれるのならば、嬉しいに決まっていますから……)

フィーナには自分が知ったアクアの記憶に共感できそうなどころはいくつもあった。

それでも、アクアがユーリにされたことを考えると羨んでしまう。あるいは、だからこそと言えるだろうか。

アクアはオメガスライムと知られても愛されている。国を滅ぼせ

るほどの怪物であるにも関わらず。

フィーナなど、それに比べれば小さなものだろう。それなのに、アクアのほうが大切にされているのだ。

理性では過ぎた時間の違いだと分かっているても、フィーナには嫉妬を抑えることはできそうになかった。

（本当に、本当に、アクアさんになりたい。アクアさんと同じように愛されたい。ユーリさんほど化け物を大切にしてくれる人なんて、きつと出会えない。わたしは、どうしてももっと早くユーリさんに巡り会えなかったのでしょうか……）

フィーナがもとから感じていた望みはアクアから解放されるだけで大部分が叶うだろう。

それでも、ユーリという存在を知って、さらなる欲望が生まれていった。

アクアほどの存在が愛されるのならば、自分だって。

そのような感情のもと、フィーナはユーリに対する願いをいくつも思い描いていた。

（わたしの力を制御できるようになって、ユーリさんと遊んでみたい。衝撃の力は、うまく使えば体をほぐすことにも使えるかもしれない。それをできるようになって、ユーリさんに楽しんでほしい。ユーリさんならば、絶対に受け入れてくれますから……。他にも、どれだけだってわたしに触れてほしい。手でも、顔でも、他のところだって。そうすれば、信じられていると実感できますから……）

フィーナはユーリに自分の理想を重ねていた。

ある意味では、人として認識していない。当然と言えば当然だ。

フィーナはこれまでまともにも人と接してこなかった。その中で、自分を受け入れてくれる人という存在だけを知った。

ユーリの人間性も、好みも、生き方も、何一つとして理解していない。

そのまま、ユーリが自分を肯定してくれる人だという考えだけを深めていった。

（ユーリさんは、わたしの顔も、人格も、力も、全部を好きになってく

れるはず。だから、もつともつと好きになつてもらうためには何ができるでしょうか……？　できることならば、アクアさんくらい好きになつて欲しい。でも、アクアさんのマネはできません……)

フィーナにとって受け入れてもらいたいのには自分であつて、他の誰かの模倣ではなかつた。

それでも、好かれるためには努力するものだとしてフィーナの常識から判断した。

ユーリならばありのままの自分でも好きでいてくれるだろうけれど、それでも、限界まで好かれない。

だからこそ、フィーナはどんな形で自分をよりよく見せるか悩んでいた。

(衣装を変えたり、化粧を覚えてみるのもいいでしょうか……。ですが、そのようなことをしていない人も、ユーリさんは好きでいる……。逆効果になる可能性もありますよね……。それとも、もつとアプローチしてみることも良いでしょうか……。わたしに近づかれても、ユーリさんなら喜んでくれるでしょうか……)

フィーナの自分に対する軽視は根深いものであつた。

自分は魅力的な存在ではなく、あくまでユーリが優しいから受け入れられているのだと考えていた。

だからこそ、自分を変えろということが好かれるための行動であると信じていたのだ。

その問題が解決するかどうかは、未来のユーリ次第だろう。

とはいえ、ユーリはありのままのフィーナを最も好む性質であつた。

親しい人間が無理をする姿を嫌う価値観であるがゆえ、フィーナに急激な変化があれば、それを止めようとするだろう。

それを知らないフィーナは、今までと全く異なる自分を見せることばかり検討していた。

(わたしの話し方よりも、もつと明るいもののほうが良いでしょうか……。ユーリさんの周りにはいろいろな人がいますから、どの方が好みを探らないといけませんね……。ユーリさんにもつと褒められ

るためには、力だけでは足りないでしょうから……。なにせ、オメガスライムがそばにいるのですから……)

フィーナの最も大きい望みは、ユーリに褒められること。そのための行動を考察していく。

自分の力の強さを知っていたがゆえ、まずはそれでユーリの敵を根絶するのが最も手早いと考えた。

だが、アクアの絶大な力に思い至り、その思考を放棄した。

それ以外に自分に何があるのかわからなかったが、自分を操っていた頃のユーリの言動に希望を見出した。

(そうです……！　ユーリさんはわたしの料理を食べたいと言ってくれました……。ならば、料理の練習をしましょう。美味しいものを食べれば、誰だつて喜ぶ。ユーリさん、やはりあなたはわたしの希望です……)

フィーナ自身がユーリに好かれるための行動まで、ユーリは教えてくれた。

そう考えたフィーナは、更にユーリへの好意を深めていく。

そうして、ユーリに自分を求められるための行動を躊躇わなくなつていこうとしていた。

(ユーリさんがわたしを褒めてくれるのなら、何だつてできます。痛いことも、苦しいことも、つらいことも。わたしの全てをあなたに捧げますから、わたしを褒めてください。頼ってください。愛してください……)

## 裏 志望

ステラにとって、残る干渉すべき相手はオリヴィエとリデイ、イーリスだった。

その中で、オリヴィエを最後にすることは決めていた。

おそらく、最も難しい相手となるだろうと考えたからだ。

ノーラはすでに味方になってくれていると判断していいだろう。

アクアの記憶を読む限り、自分たちを乗っ取る行動には反対していたのだから。

だから、オリヴィエを乗り越えることができれば勝ちだ。

その本丸を攻略するため、どういう材料を揃えるのがいいだろうか。

オリヴィエにとって、ユーリが未練だということはアクアの記憶からわかった。

オリヴィエの正体がステラの住む国の建国者、アーデルハイドであることを考えると、闘争で疲れた心の癒しだったのだろうか。

そうだとすると、オリヴィエにユーリと接することを提示することは良い判断だろう。

ただ、自分を遥かに超える経験を持っている相手に、安易な手段は通じないかもしれない。

そこで、オリヴィエの人となりに詳しいリデイとイーリスを先に目覚めさせることで、自分の方針が正しいか確かめたい。

そこまで考えたのならば、あとはリデイとイーリスのどちらを先にするかだ。

ステラはそこで、ユーリに対する好意がより強そうなりデイを選んだ。

イーリスはリデイとのつながりを利用したほうがいいのかもしい。そう判断した。

ステラの指輪の力を使うと、リデイは目覚めた。

リデイは起きてすぐ、オリヴィエはどうなったのかについて考えた。



そこから、アクアの記憶が流れ込んできたことにより、オリヴィエの状況を理解する。

今オリヴィエはアクアに乗っ取られていて、ステラはそれを解放しようとしている。

リデイはその方針には賛成であったが、オリヴィエ自身の反応が気にかかった。

（殿下はアクア殿に対してどう考えていらっしゃるのか。アクア殿の行動はユーリ殿の意思ではなかったとはいえ、ユーリ殿がアクア殿を制御できていなかったことは事実。そこをどう判断なさるのか）

オリヴィエがかつてリデイたちの国アードラを建国したアードルハイドであると、リデイは知っている。

それに、何度も裏切られ続けたオリヴィエが人間不信になっていることも。

その状況で、わざわざ再び意識を取り戻すことがオリヴィエにとっての救いなのか？

確かに、オリヴィエはユーリに対して希望を見出していた。

だが、それでも、ユーリのパートナーであるアクアに攻撃されたという事実がある。

オリヴィエはそれでさらに傷ついてしまっただけなのではないのか？

リデイはオリヴィエを大切に思っていたがゆえに、正解が何かを判断しかねた。

（殿下にこれ以上苦しんでほしくはない。ただ、ユーリ殿は殿下が唯一見つけた希望。これから得られるかもしれない喜びか、それともひどく味わうかもしれない苦痛か。どちらに転んでしまうのでしょうか）

リデイ個人としては、ユーリに裏切られたわけではないのだから構わない。

ユーリのことを信じていたから、裏切られたのならば許せなかった。

だが、自分たちを乗っ取ったのはアクアの独断だ。

そして、ユーリはそれに気がついてさえない。

ユーリの愚かさも感じるが、その愚かさがゆえにユーリは優しくかつたのだと判断した。

(ユーリ殿は甘いとすら感じるほどに小生たちを信じていた。同じように、アクア殿のことも信じていたのでしよう。そこがユーリ殿の良いところなのですから、無理に疑わせたくはない。ですが、また殿下がアクア殿の魔の手にかかることの無いようにしないと)

アクアが自分たちに情を持っているということは、確かな事実なのだろう。

それでも、その感情よりもユーリの安全を優先したのがアクアだ。

だから、また似たようなことがあれば、同じ様な形で支配されかねない。

それを避けるためにも、アクアに対する理解を深めておきたいリデイだった。

(アクア殿がユーリ殿を最優先にしているというのはわかります。小生も殿下を最優先にしていますから。だからこそ、それがぶつかり合うと危険なのです。小生たちを乗っ取ったことに後悔していること、カタリナ殿を解放したことは確かに希望。ですが、それは儂いものかもしれない。だから、もっとアクア殿を知る必要があるのです)

リデイはユーリにもう一度会いたいと考えていたが、オリヴィエもそうとは限らない。

オリヴィエはユーリに強く執着していた。だからこそ、その感情が恨みに反転していてもおかしくはない。

アクアはそれほどのことをしたのだ。リデイ自身にだって、アクアに対する恨みはある。

それよりも、オリヴィエのことを優先したいだけだ。

ユーリと再会したい気持ちは本物だが、オリヴィエのほうが大事だとリデイは判断した。

(殿下はどうお考えなのでしょう。やはり、一人で考えていても仕方がない。オリヴィエ様に目覚めてもらって、その意思次第で判断するのが良いと思えます)

リデイは今のところ、アクアとの和解には個人的に賛成でいた。とはいえ、最も優先すべきものはオリヴィエの意思。そこを無視して自分で判断する訳にはいかない。

だが、それを確認する手段がオリヴィエの目覚めだけである以上、一旦はオリヴィエを覚醒させようと判断した。

できることならば、オリヴィエにも和解を選択してほしい。

ユーリに自分の注いだお茶を飲ませたいし、契約技の色々な使い方を見せたい。

自分を無条件で信頼してくれそうな相手など、きつともう現れない。

だから、その時間を楽しみたいというのがリデイの本音だった。

(ユーリ殿にもお茶の注ぎ方を覚えていただくのも良いかもしれませぬね。そして、小生がそのお茶を飲む。きつと楽しい時間になるでしょう。お互いに注いだお茶を交換し合うことも良い。それに、ユーリ殿は契約技に造詣が深いですから、語り合うことはきつと素晴らしい時間になる。楽しみですね)

リデイはオリヴィエを最も気にしていたが、イーリスのことも心配していた。

とはいえ、精神的に傷ついているようなことはないだろう。

問題は、アクアに対しての闘争心のようなものが、オリヴィエの邪魔をしないかということだった。

イーリスはモンスターとして、戦いを強く好んでいる。

人を傷つけようとする本能を持つことが多いモンスターではあるが、闘争本能が強いものもいる。

アクアが圧倒的に強いがゆえに、挑みかかることを優先してイーリスが他をおろそかにしないかを気にしていた。

(イーリスはあまり賢いとは言いがたいですからね。頭が悪いと言うほどではありませんが。それでも、オリヴィエ様よりも自分の本能を優先されては困ります。さて、イーリスはどう扱うのが正解でしょうか)

イーリスが力の差故にアクアに従おうと判断しているのならばそ

れでいい。

オリヴィエにイーリスが従っていたのも、似たような理由だからだ。

イーリスがオリヴィエを最優先にしなくなることは痛手ではあるが、オリヴィエに歯向かわれるよりマシだ。

最善はオリヴィエもアクアと和解することを選択して、3人とも解放されることだ。

だからこそ、イーリスにはできるだけオリヴィエの心情を後ろ向きにする判断を取ってもらいたくなかった。

リデイは様々なことを考えながらも、アクアと和解できる道を模索していた。

（オリヴィエ様がアクアを拒絶するのならば小生も従いましょう。ですが、それまでにはできることは全てしたい。小生はできればユーリ殿とまた会いたい。オリヴィエ様ともまた話したい。オリヴィエ様はユーリ殿を優先される可能性が高いですが、それでも）

オリヴィエがアクアと和解することを選んだのならば、ユーリとまたふれあうためだろう。

だからこそ、オリヴィエにとってユーリが一番になることは想像に難くない。

それで仮に、オリヴィエが自分よりユーリを優先するのだとしても、オリヴィエが幸せならば構わない。

リデイは誰よりもオリヴィエを近くで見えていたからこそ、オリヴィエに強い好意を抱いていた。

オリヴィエは人間を信じていないにも関わらず、優しさを失うことのなかった人だから。

それゆえ、オリヴィエが望む未来を創る手助けをしたいと考えていた。

（オリヴィエ様は目覚めた時にどのよう感じられるのでしょうか。その感情が絶望でさえ無いのならば、きつとアクア殿から解放される方がいい。だから、説得する方法は考えておいたほうが良いでしょうね。ですが、どういう言葉が効果的でしょうか）

オリヴィエはきつとユーリと出会ってから楽しい毎日を過ごしていた。

だから、それが続くほうがオリヴィエにとっては好ましいだろう。とはいえ、アクアに乗っ取られたことがどのようなようにオリヴィエの感情に影響しているかわからない。

もし失意の中にいるのならば、このまま目覚めないほうが良いのかもしれない。

仮に意識が浮かび上がったとしても、もう一度今のようにならぬようにアクアに操られている方が幸せなのかもしれない。リディは悩んでいた。

（オリヴィエ様にとって、ユーリ殿は長く待った希望の人。だからこそ、そこから叩き落されたならば、オリヴィエ様が苦しんでいない。それが理想です。でも、最悪の場合も考えないといけません）

オリヴィエが解放されないことを選ぶのならば、自分も運命をとむにする。リディはそう決めていた。

それでも、できることならば、またユーリやオリヴィエと素晴らしい時間を過ごしたい。

だって、自分はユーリもオリヴィエも大好きなのだから。その2人と一緒にいられるのならば、どれほど喜ばしいことか。

そんな未来を考える中で、リディにはある欲望が浮かび上がっていた。

それは、ユーリとオリヴィエに共に忠誠を尽くすことだった。

（ユーリ殿。あなたはオリヴィエ様の騎士になるべきなのです。そうすれば、小生はオリヴィエ様とユーリ殿を同時に支えることができます。そんな未来で、ユーリ殿の小生への信頼を徐々に深めていけば、ユーリ殿の水と小生の炎、それらを混ぜ合わせることができるかもしれない。楽しみですね）

## 裏 永遠

リデイが目覚めて、オリヴィエを説得することに肯定的になった。

そこで、次にステラはイーリスを目覚めさせにかかる。

イーリスとリデイに共に説得されれば、オリヴィエもほだされるかもしれないとステラは考えていた。

イーリスが覚醒した時には、まずイーリスに悔しさと納得が訪れた。

アクアに負けてしまったことは残念ではあるが、オメガスライムが相手ならば仕方ない。

それで納得したイーリスは、そのままアクアと和解することを決めた。

強いものこそが正義という価値観をイーリスは持っていたので、当人からすれば当然の判断だった。

それがステラにも伝わり、ステラは次にオリヴィエの問題に対処することにした。

オリヴィエさえ説得できれば、問題なく皆は解放されるであろう。ステラはそう信じていた。

そして、オリヴィエが目覚める時間がやってきた。

ステラの懸念に反して、オリヴィエはなんとしてもユーリに再会するつもりでいた。

そのためならば、靴を舐めるくらいの屈辱を飲み込むほどの覚悟をしていた。

オリヴィエにとって、ユーリという存在はそれほど大切になっていたのだ。

(ユーリ……余は貴様がいなければもうダメなのだ……貴様だけだったんだ、余を一人の人間として大切にしてくれたのは。どうして余にそんな事を教えたのだ。知らなければ、このまま朽ち果てたとしても構わなかったのだぞ)

オリヴィエは面白い人物を自分のものにするという生活を送って

いた。

それでも、本当の意味では満たされない生活をずっと続けていた。そんな中で現れたのがユーリだった。ユーリは自分が王族と知っていないながらもオリヴィエに欲をぶつけなかった。

名誉欲も、金銭欲も、権力欲も、なにも。

強いていうならば、オリヴィエ自身と親しくなることを望んでいたのだが。

とはいえ、それはオリヴィエにとって好ましいものでしかなかった。

ただの友人や仲間として親しくしようとしてくる相手など、オリヴィエにはいなかったからだ。

だからこそ、オリヴィエにとってユーリは徐々に特別な存在に近づいていった。

その感情が本格的に変わったのは、オリヴィエがユーリに守られた瞬間だった。

オリヴィエを王族として大切にしているわけではないのに、命がけで助けようとされた。

それが彼女にとって大きな衝撃で、初めて味わった感覚に浮かれることになった。

だからこそ、アクアに乗っ取られるきっかけになる行動をした。

ユーリを王都から出さないようにして、自分以外の人間から遠ざけることだ。

ただ、その手段を取ることは二度とできない。アクアがもう一度拒絶するだろうから。

ユーリを独占したいのがオリヴィエの本音ではあった。

それでも、ユーリと引き離される未来だけは絶対に受け入れられない。

だから、アクアと他の人に対しても、妥協点を探るだけの心構えはあった。

(ユーリ、貴様とまた会うためならば、余はどんな事でもしよう。それほどのを、貴様は余にしたのだから。余が人を信じようと思った

のは、いつ以来なのかも分からないのだから)

ユーリと出会って、ユーリと親しくなつて、ユーリに守られて。

そうした時間がオリヴィエのユーリへの好意を高めていった。

どうしても他者では代替できない存在になったのは、亀型モンス  
ターから助けられてからだだったが。

そして、オリヴィエに生きる楽しみが生まれた。

それまでの人生では、生きることは単なる惰性でしかなかった。

だからこそ、ユーリという存在はオリヴィエの芯に大きな影響を与  
えていたのだ。

(余が誰かに守られるという経験をしたのはユーリが初めてだった。  
これまでは、余の契約技だけで道を切り開いてきたというのに。余が  
これまで全く知らなかった喜びを教えたのは貴様なのだぞ、ユーリ)  
オリヴィエはこれまで味わったことのない喜びを知った。

そのことで、世界の色が変わったかのようにすら見えていた。

だから、その感覚をもつと味わいたくて、今よりもつとユーリと接  
したくて。

ユーリとこれ以上出会えない未来を想像するだけで、膝を折ってし  
まいそうだと感じるほどだった。

それほどに、ユーリの存在はオリヴィエの中では大きな物となつて  
いた。

(ユーリ、貴様が笑いかけてくれることが、どれだけ余の救いとなつて  
いたのかようやくわかった。何の企みもなく、純粹に信じてくる相手  
がどれだけ得がたいものなのかも。だから、ユーリ。もう貴様と離れ  
ることなど考えられんのだ。罪深いやつだ。だが、それも心地よいと  
感じてしまうのだ……)

オリヴィエの今の願いは、なんとしてもユーリと同じ時間を過ごす  
こと。

そのためならば、どんな障害でも排除しようと考えていた。

オリヴィエにとって、敵を打ち破ることで己の欲するものを手に入  
れることが当然だったから。

それでも、力づくという選択を考えるとアクアの存在が頭によぎつ



ていた。

アクアには手も足も出なかったオリヴィエなので、そこが心に大きな影を差していた。

己の力に対する絶対の自信が、ユーリに助けられた事件と合わせて揺らいでいたのだ。

（余はもはや絶対の存在ではない。余の契約技は最強ではないのだ。そんな余を、ユーリは好んでいてくれるのか？ 余の権力に見向きもしなかったユーリだぞ。問題ないに決まっている。そのはずなのだ……）

自信が崩壊したことにより、オリヴィエの精神にも影響が出ている。

ユーリに嫌われてしまうのではないかと、不安が頭をもたげ始める。

オリヴィエはこれまで誰に裏切られたとしても動じなかった。

自分ならば絶対に乗り切れると強く信じていることができていたからだ。

その根拠が崩壊した今、どうすればユーリに好かれたままでいられるのか、必死で考えることになっていた。

（ユーリ、貴様にとつて、冒険者を否定して余の騎士になることを誘うのは迷惑だったか？ そうであるならば、余は貴様を騎士にすることを諦める。だから、余のそばにいてくれ……）

オリヴィエはこの様な不安など感じたことがないがゆえに、それはどう対処すればいいのかわからなかった。

ユーリに嫌われる未来を想像しただけで、オリヴィエには強い乾きのようなものが襲いかかっていた。

そして、恐怖や苦しみがだんだん増えていって、それらから逃れようとしても追いつかれてしまう。

その感情に押しつぶされそうになりながら、必死にオリヴィエは今後の希望へと頭を切り替えようとした。

（村娘のように、ユーリに媚びてみるというのも面白いかもしれん。英雄に助けられた姫にはピッタリの遊びだろうさ。だが、それをユーリ

リは可愛らしいと思うのだろうか。余がそうしたところで、気持ち悪いと思われたりせんだろうな。そうなったら、余は耐えきれぬ自信がない)

オリヴィエにとって、誰かから物語のヒロインのような扱いを受けることはこれまでなかった。

畏怖され、おもねられ、そして排斥しようとされる。それがオリヴィエの人生だった。

だからこそ、今オリヴィエが感じているものは彼女にとって劇薬だった。

強い多幸感と高揚感。それらが心の多くを支配しようとしていた。

それを失うことがどれほど恐ろしいか。オリヴィエは大きな幸福など知らなかったがゆえに、必死に今あるそれにしがみつこうとしていた。

(ユーリ、貴様に守られるという経験が、余にとってどれほど得がたいものだったのか、分かりはしないのだろうか。だが、だからこそ貴様は余を助けようとした。だから、それでよい。それよりも、余を変えてしまった責任を取ってくれ……余にはもう、貴様しかおらんのだ……)

オリヴィエからすれば、ユーリとの出会いはこれまでの価値観を塗りつぶすほどのものだった。

自分が絶対で、他の全ては自分のためにある。そう考えようとしていた。

ただ、信頼できない人間ばかりだったため、真実の心では別のものを求めていたのだが。

それが、ユーリとの出会いによって叶えられることになる。

オリヴィエが本当に望んでいた、心から信頼できる相手との出会い。

それによって、初めて人を信じる喜びを知ったオリヴィエは、その喜びを失いたくなくなった。

だからこそ、オリヴィエはある決意をした。

それは、ユーリが生を終えたならば、自分も後を追うというもの

だった。

ユーリとの出会い以上の喜びを得ることは自分にはできない。それを失った後の空虚な生を思えば、オリヴィエにとっては当然の判断であった。

（ユーリよ。貴様がいない人生になど意味はない。だから、貴様が死ぬときに余が死ぬときだ。だから、余を思うのならば、せいぜい永く生きることだ）

オリヴィエにはユーリに対して求めていることがあった。

それは、ユーリにもう一度守られること。

だが、オリヴィエが窮地に陥るほどの敵などそうはいない。

もし仮に、アクアがオリヴィエの敵になったならば、ユーリはアクアを取るだろう。

それはオリヴィエにとって悔しい事実ではあるが、受け入れるしかないことだった。

（ユーリ、貴様は余とアクアを並べたならば、アクアを選ぶのだろうな。だから、余はアクアに敵対することができない。それでも、アクアの後だとしても、余のための時間を作ってくれ。余と一緒にいてくれ。それだけで、余はまた幸福を知ることができると）

オリヴィエの心に徐々に希望があふれてくる。

アクアと和解することさえできれば、また素晴らしい幸福を味わうことができるのだから。

その未来のため、全力でアクアに思いを伝えることに決めた。

アクアの想い自体は間違っていないのだと。大切な人を独占したいなど当然のこと。

それでも、他の誰かへの情を大事にしようとしているのだから、それでいい。

今度はオリヴィエとアクア、ユーリの3人である時間も良いかもしれない。

オメガスライムであるアクアは、とても珍しいものなのだから。

オリヴィエがかつて自分のものにしようとしていた基準を満たしている。

だから、アクアだってオリヴィエが認める1人になるのだ。  
(アクア、貴様だって同じだろう。ユーリのいない生に意味などない。  
だからこそ、共にユーリとの永遠を目指そうではないか。それなら  
ば、皆が幸福でいられるだろう?)

## 裏 共鳴

すべてのアクアに乗っ取られている人物がアクアとの和解を決意した。

それから、ステラは計画を次の段階へと進めることにした。すなわち、アクアとこれからを過ごすための思いを束ねること。

そして、アクアへそれらを送ることで、アクアの心に訴えかけること。

何よりも、その手順を経ることで、皆が解放される未来をつかむために。

それからのアクアとユーリの関係は、きつと大きく変わる。

そして、それは素晴らしいものになるはずだ。

だから、ステラの胸は希望でいっぱいだった。

いつか理想としていた光景よりも、遥かに素晴らしいものを見られる瞬間は迫っている。

心の高鳴りを抑えながら、ステラはさらに準備を進めた。

これまで目覚めさせた者たちに、これからアクアと心をつなげることを伝える。

そして、それぞれの準備が整っていく。

皆がアクアに対する思いをそれぞれの中で形にしていた。

それから、ステラがユーリに贈った指輪の力でアクアにそれぞれの思いを伝える。

それを受け取ったアクアは、まず皆に和解の意思があることを喜んだ。

そして、それを実現した時に、再びユーリに危害が及ぶことがないかを探り始める。

皆を解放したところで、同じ展開になればまた自分は同様の行為をするだろうと判断したからだ。

その心配を排除するために、皆の心をしっかりと吟味していくアクア。

アリシアは、ユーリを失わないために危険な冒険を抑えると決めて

いた。

サーシャは、エルフィール家よりもユーリを優先していいと考えていた。

ミーナは、一度は自らを諦めるほどにユーリに攻撃したことを反省していた。

メルセデスは、ユーリに嫌われるリスクをしつかりと認識して後悔していた。

オリヴィエは、ユーリと離ればなれになるくらいなら妥協点を探る判断をした。

それぞれの考えを知り、アクアはユーリが次に傷つけられるリスクは低いと判断した。

ただ、だからといって即座に解放する判断を決めなかった。

結局自分と皆が仲違いしてしまうのならば、何の意味もないからだ。

自分たちが戦うことでユーリにとって良くないことになるのでは、解放しても仕方ない。

だから、アクアはもつと深い心に触れることを望んだ。

それに応えるように、アクアに皆の心の奥底が流れ込んできた。

その思いには、皆がそれぞれユーリに対して求めているものがあつた。

アリシアのユーリと対等でいたいという願いに共感した。

レテイのユーリを可愛がりたいという感覚に同意した。

サーシャのユーリを依存させたいという感性に賛同した。

ヴァネアのユーリと幸せになりたいという本心を理解した。

ミーナのユーリを追いかけていたいという祈りに同調した。

メーテルのユーリの上に立ちたいという欲にうなずいた。

メルセデスのユーリをずっと尊敬していたいという憧れを肯んじた。

フィーナのユーリに求められたいという望みを認めた。

リデイのユーリを支えたいという希望を支持した。

オリヴィエのユーリに守られたいという弱さを受け入れた。

皆の心に共鳴したアクアは、大切な人たちとユーリへの思いを共有したいという思いを新たにしたい。

そこで、全員を解放することに前向きになる。

最後の一手はノーラだった。アクアはノーラの心を読んだ。

すると、ステラから自分のように皆の思いを送られたノーラは、ユーリのために皆を解放したいと考えていた。

ユーリがこれまで彼女たちと紡いできた絆を無駄にしないために。

そして、ユーリを大切に思う人達が、これからもユーリを幸せにしてくれるように。

何よりも、アクアのわだかまりが解消されることで、ユーリとアクアがもっと仲良くなれるように。

ノーラは本当は自分がユーリの一番になりたいと考えていた。それはアクアにも強く伝わっていた。

にもかかわらず、ノーラはアクアとユーリの間係を本気で考えていたのだ。

その思いが伝わったことで、アクアは皆を解放することに前向きになった。

それと同時に、もっとノーラに報いたいという思いも持つことになった。

アクアは本格的に皆に体を返すために、まずは夜を待った。

ユーリに気がつかれてしまいたくないという思い、皆が体の操作に慣れられるようにという配慮。

それらの考えから、ユーリが寝静まってから行動を始めるためだった。

そして、運命を変える夜がやってきた。

アクアは一斉に皆を解放するのではなく、順番に解放していくことに決めた。

万が一問題が起きた時、すぐに対応できるようにするためだ。

それには、ユーリに対する危害への警戒と、うまく体を動かさないかもしれない皆への心配があった。

まずは、ステラが解放される。

ステラは自分の状況を理解してすぐ、指輪と自分がまだつながっているか確認した。

アクアの感情が今でも流れ込んでくるのを理解して、ステラは微笑む。

これで、ユーリとアクアを理想の関係に導く手伝いがまだできる。きっとユーリは今皆が解放されたことで、違和感を抱くはず。

その疑問こそが、アクアとユーリを次の関係へと進める力になるのだ。

明るい未来を想像することで、ステラは心どころか体まで弾むような心地でいた。

つづいて、アリシアとレティが解放される。

アリシアは風刃の調子を確認した後、軽く体を動かす。

今後ユーリと冒険するために、戦闘能力を把握することが必要だからだった。

問題なく動けることを確認したアリシアは、またユーリと冒険することを想像して高揚していた。

レティは一度部屋の中を軽く飛び回り、自分の感覚を調整する。

そして、翼を色々と動かしていた。

またユーリを抱きしめて、その感触を楽しむために、翼の感覚がどうなっているかが大事だったからだ。

ユーリのお姉さん分としてまたユーリをからかいながら遊ぼう。レティの心は晴れやかだった。

そのつぎに、サーシャが解放される。

サーシャだけは意識を持ったまま無意識を操られていた。

そのため、サーシャは自分の変化を大きく自覚できなかったが、ステラの指輪を通して自分の状況を理解した。

試しに思考を走らせてみると、いつもより残酷な手段も考えられる気がする。

それでも、サーシャはユーリやアクアたちとの未来のために、ゆっくりと尽くしていくと決めた。

それから、ミーナとヴァネアが解放される。



ミーナは模擬剣を手に取り、自らの剣技を軽く確かめる。  
またユーリと訓練をして、一歩ずつでも追いついていくために。  
いずれユーリとまた対等なライバルとして戦えたら嬉しい。そう  
でなくとも、チームとして助け合う経験は最高のはずだ。ミーナは期  
待を抱えながら訓練した。

ヴァネアは全身に一度神経を走らせて、どこか調子を崩していない  
か確認する。

万全の状態であることで、訓練でも冒険でも最高のパフォーマンス  
を発揮するために。

ユーリとミーナのいるところならどこへでも行く。

その覚悟を決めて、ヴァネアはさらに力を高めると決意した。

次いで、メルセデスとメーテルが解放される。

メルセデスは契約技である水の膜をまず使った。

ユーリの弟子として、同じスライム使いとして、ユーリに見せて恥  
ずかしくない精度であるために。

自分はユーリの次、2番目のスライム使いになるのだから。

メルセデスはその希望を大切にしながら訓練を続けた。

メーテルはスライムとしての形状変化を試していた。

オメガスライムという理想が目の前にある以上、少しでも自分を高  
めたいと考えて。

そして、メルセデスと相棒としてさらに連携の幅を広げるために。

メーテルは今を全力で楽しんでいた。

その後に、フィーナが解放された。

フィーナは自分の持っている特異な力を制御する挑戦をしていた。  
これまでは力を忌避していたが、自分を受け入れてくれる人がいる  
のだから。

その力でユーリの役に立てば、きつと褒めてもらえるはずだ。

フィーナには未来が輝いているように思っていた。

最後に、オリヴィエにリデイ、イーリスが解放された。

イーリスはそのままベッドに入り込んで睡眠を始めた。

これから来る日常で、いつもどおり過ごす決めたイーリスだっ

た。

リデイは次にユーリと会う時にどんな茶を用意するか考え始めた。オリヴィエはもう救われているようだから、自分の心配をしていれば良い。

自分もユーリもイーリスもオリヴィエも楽しめる時間を作る。

そのために、リデイはゆっくりと思考を深めていった。

オリヴィエは自らの力を他の人に使えないかを検討し始めた。

ユーリとともに永遠を過ごしたい。だから、己の能力が役立つのならば全力を尽くす。

その中で、他にユーリと親しいものにも能力を使えば良い。

オリヴィエは自分の幸せのために、ユーリの幸福も尊重するつもりだった。

その未来に、オリヴィエの理想が待っていると信じて。

そして、全てのアクアに操られている存在が解放された。

それとともに、アクアはノーラの思考を監視することも止めた。

ノーラはもう十分に信頼していい相手であるし、対話で収めれば良い。

ノーラがユーリと自分を想ってくれていたことには感謝している。

だから、これからは自分たちの幸福の輪に入ってくれば良い。

ノーラはアクアにとって、本当に大切な存在となっていた。

これで、ユーリも自分もみんなも幸せになることができるはず。

だから、この選択は間違っていない。

ユーリの望みも、自分の望みも、同じように叶う最高の展開であるはずだ。

それならば、これからの自分は楽しい時間をいっぱい過ごせるはず。

アクアはわだかまりが解消されて、ようやく心の底から笑えそうだった。

そして、最後にアクアを悩ませる問題があった。

ユーリヤはただの肉の人形ではない。

それは、ユーリの未来にとって良いものなのだろうか。

それが違うのならば。

ユーリヤだって本当の人間として、幸せを味わっても良いのではな  
いか。

そんな考えのもと、ユーリヤという人間を本物にすると決めた。

## 裏 檻

アクアはユーリヤという肉の人形を本当の人間に変えると決めた。そのためには、ユーリヤの過去を含めたカバーストーリーをしつかりと作る必要がある。

今ユーリヤの体には、アクアがユーリヤとして行動した時の記憶が刻まれている。

アクアが自分と切り離して、ユーリヤとして行動しやすくするため補助として。

だから、ユーリヤを人間として生み出す際にそれを流用できる。

それ以外にも、ユーリヤとしてほめかした過去に対して整合性をもたせるものが必要だ。

ユーリヤがアクアにした発言は、ユーリヤがずっと1人だったこと、目がいいということ、ユーリヤが大好きだということ。

それ以外には、ユーリヤが密偵じみた技能を持っているという事実がある。

それらをまとめると、ユーリヤという人間の設定は固まった。

かつてプロジェクトU：Reに類する計画で生み出され、そのまま技能を高めていった。

それから、その組織が崩壊したためあてもなく彷徨っていたところでユーリヤに出会った。

その際にユーリヤに助けられたという経験が、ユーリヤのこれからを決めた。

誰かに優しくされるという経験は初めてだったため、それを与えたユーリヤを好きになったのだ。

ユーリヤのキャラクターをそのようなものにする決めたアクアは、ユーリヤの体にその記憶を作り出していく。

それでユーリヤに本当の人格が目覚めた際、その過去をユーリヤに話してもいいし、話さなくてもいい。

もし仮にユーリヤが矛盾を見つけたとしても、ユーリヤへの情から気にしないだろうから。

他にアクアにとって大事な要素として、オーバースカイなどのアクアにとって大切な存在への好意を植え付けることがあった。

ユーリヤを人間にすることで、ユーリが傷ついてしまつては意味がないからだ。

そのために、ユーリヤと他の人間が仲違いしないように注意を払っていた。

そして、ユーリヤという人間が生まれた。

ユーリヤは目覚めてすぐ、自らの記憶にあるユーリへの好意を思い返し、好きという気持ちさをさらに高めていた。

ユーリヤにとって、ユーリは好みの真ん中であつた。

そのようにアクアが生み出したのだから当然ではあるのだが、ユーリヤはそれを運命だと考えた。

自分は目覚めてすぐだと理解していて、自らの記憶は偽物だとも知っている。

それでも、ユーリとこれから接していくことができる。そう考えただけで、ユーリヤには幸福があふれていた。

(ユーリさんはユーリヤの見た目が好みなんですよねっ。なら、おそろいですねっ。ああ、以前のわたしじゃないですけど、生まれることができてよかつた。あんなに素晴らしい人と、これからずっと一緒にいることができるんですからっ)

それでも、ユーリの周囲に他の女がいることを考える度に、ユーリヤには嫉妬の心が芽生えていく。

本音を言うのなら、自分だけでユーリのことを独占したい。それはかなわない願いではあるけれど。

アクアの存在を抜きにしても、ユーリは周囲の人間を排除する人間は嫌いだろうから。

ユーリヤは一抹の寂しさを覚えたが、ユーリとの未来を諦めるつもりはなかつた。

(アクアちゃんがユーリさんの一番。そう考えると、悲しくなつてしまいます。でも、ユーリさんは間違いなくわたしのことを大切にしてくれますからっ。だけど、カタリナさんも、ステラさんも、他の人達

も、ユーリさんは同じように大切にするんですよ。仕方のないことではありますけど、もつと早くユーリさんに出会いたかった)

ユーリヤは本物の経験を今のところはしていない。

だからこそ、その味がどのようなものなのか、想像を飛ばたかせていた。

生まれる前の自分がユーリと行っていたデート。

その中にあるどれもが楽しそうで、でも、ユーリは初めてではないことが悲しくて。

新しい何かで自分を上書きしようにも、何も思い浮かんではこない。

その中で、ユーリヤの心は一人の寂しきで埋められていった。

(またマツサージをユーリさんにしてもらいたい。同じものを食べることもしたい。色んなところにキスをしたい。でも、ユーリさんはアキラちゃんやカタリナさんとすでにキスをしている。それだけじゃない。他のことだってわたしが一度おこなったことだから、新鮮さを感じないかもしれない。……会いたいです、ユーリさん。でも、今すぐ会うことはできない。それが、つらいんです……)

ユーリは今眠っていることが明らかだ。

それだけでなく、そもそもユーリの寝室をユーリヤが訪れたことなどない。

だから、今感じている孤独を慰めてもらうことはできない。

それでも、せめてユーリとまた出会えた時には。本当は初めてだと教えられないけれど。

ユーリと少しでも距離を詰めて、新しい自分を心に刻んでもらうのだ。

いつの日か、ユーリヤといえば今の自分のことを思い出すようになると期待して。

ユーリヤは不安を感じながらも、未来への希望へと頭を切り替えた。

(わたしの感触、匂い、声。ちよつとずつ本当は違うんです。ユーリさんはきつと気が付かないでしょうけど。でも、だんだんわたしで上書

きしてあげますからっ。わたしにマッサージをしてもらう時の感覚も、キスの心地も、手のぬくもりも。ユーリさんの中が今のわたしで埋まるまで、ずっと一緒にいるんですからっ)

ユーリヤがこれからしたいと思えることは、どれもこれまで自分の体が経験していたことだった。

いずれは新しい自分だけの色が生まれるのであろうが、ユーリヤは生まれたばかりの赤子同然だった。

これからのユーリとの経験が、新しいユーリヤを形作っていく。

その際には、アクアが演じていたユーリヤとは違ったものになるだろう。

とはいえ、今のユーリヤはこれまでの自分から外れないことで精一杯だった。

(ユーリさんにいきなり違和感を持たれたら、アクアちゃんもわたしも困るだけです。ただでさえ、他にアクアちゃんから解放された人達がいるんですから。わたしは、これまでのわたしと同じようにユーリさんに大切にして欲しい。新しい知り合いでは嫌なんですよっ)

ユーリヤの頭の中にはこれまでのユーリとの思い出がある。それは自分が直接経験したことではないけれど。

それでも、この思いを抱えている自分が今更他人行儀で扱われるなど耐えきれない。

自分がユーリを想う心は、きっと本当のはずなのだから。

だって、こんなにユーリのことを考えていると幸せになれる。

それだけで、もとがアクアの感情であろうが関係のないことだ。

今感じている幸福も、これから知るであろう喜びも、全部自分だけのものなのだから。

(ユーリさんと会うのが楽しみです。きっと、わたしのことを笑顔で迎えてくれる。それだけで、わたしは嬉しくなっちゃうはずなんですよっ。ユーリさん、あなたはきっとわたしにいっぱい幸せを教えてください。だから、わたしもあなたを幸せにしてみせますからっ)

ユーリヤはまだ何も経験していないのに、喜びの記憶だけがある状態だ。

だから、本当の嬉しさがどんなものかを知らない。

それを知った時、ユーリヤにどの様な感情が芽生えるのか。それが、今後のユーリヤを色づけていく。

ユーリヤは未来への期待をはせていたが、それが自らの想像を超えるのか、それとも下回るのか。まだ本人すらも知らない。

ただ、ユーリヤは未来は明るいと信じていた。

この胸の中にある思いは、きっと自分を幸せにしてくれる。

だから、前向きにこれからを考えることができていた。

(ユーリヤさんには他の女の人もいますけど。でも、もつと積極的になればもつと仲良くなれるはず。アクアちゃんは私の手で手を引くような素振りを見せていましたけど、そんなの関係ありません。わたしがユーリヤさんの2番目だとしても、3番目だとしても、それ以降だとしても。それが、わたしが諦める理由にはならないんですからっ)

ユーリヤはユーリと共に居たい。

その思いが心の中心であったが、それ以外にも、アクアや他の人達にだって興味を抱いていた。

アクアから植え付けられた感情が元になっているのだが、それでも自分の意志を否定するつもりはユーリヤにはなかった。

(アクアちゃんは他の人たちのことは好き。わたしのことは好きなのでしょうか。できれば、好きになってほしい。わたしと同じようにユーリヤさんが好き。その思いはわたしたちを繋げてくれるのでしょうか。わたしだって、ユーリヤさん一人がいれば良いわけじゃない。だから、みなさんとだって仲良くしたい)

ユーリの目や心を奪うという意味で、ユーリの周りの女に対する嫉妬はあった。

それでも、きつと仲良くすることはできるはず。だって、自分たちは結局同じ様な存在だから。

みんなユーリが存在するという事実には救われているのだ。

それはユーリヤ自身も同じ。自分の全ては作られた記憶だと知っていたながら、それでも前を見ることができるのはユーリを想っていたから。



ユーリはきつと自分に優しくしてくれる。その事実が、どれほどの勇気を与えてくれるか。

作り物の体、作り物の心。そんな自分でも必要としてくれる相手がいる。

それだけで、自分の存在を肯定されていると思えていたのだ。

(カタリナさんも、ステラさんも、他のみなさんも、それぞれがユーリさんに希望を見ている。当たり前ですよ。自分のすべてを必要としてくれるんですから。弱くても良い。強くても良い。人でも、モンスターでも。それだけのことが、わたしにも喜びをくれる。だって、わたしは人でもモンスターでもないから。ただの人形だから。そんな存在を受け入れてくれる人、ユーリさんしかいないんです)

ユーリヤは目覚めたばかりの心で、自分のことを異端だと認識していた。

それでも、そうだとしても、望みはいくらだってある。求められているということが、幸せを運んでくれるはずだから。

ユーリヤは明るいこれから胸を弾ませていた。

(アクアちゃんが言ったセリフ。本当にありがたいものがありました。ユーリさん、何があってもわたしからは逃げられませんよ。だって、わたしが絶対に、絶対に、捕まえ続けるからです。覚悟してくださいねっ)

## 6章 ユーリとアクアの世界 116話 ペットたち

今日はアクアとノーラと3人で過ごす予定だ。

そういえば、2人共大切なペットではあるけれど、3人一緒というのは寝るときくらいだったな。

今ではカタリナとシイもいるから、余計に珍しい時間と言える。

それ以外にも、アクアとノーラの会話はあまり見たことがないかもしれない。

まあ、仲良くやっているのだろうけれど。そうでないなら、こうして3人で過ごすそうとはしないだろうし。

アクアもノーラもとっても可愛いから、2人が同時にいると、可愛いが多すぎるくらいかもしれない。

こうしてステラさんの家で誰かと一緒に過ごす時間はだいたい癒しだ。

けれど、やっぱりペットである2人が一番癒されるかな。

色々甘えてくるのは嬉しいし、落ち着くし、良いことばかりだからね。

やっぱりペットは良いものだ。もっと増えてもいいかもしれないと考えたこともある。

でも、それは贅沢すぎるかな。それに、今いるアクアやノーラをしっかりと可愛がるほうが大事だよね。

ただでさえ、ノーラを悲しませちゃったことがあるのだし。

アクアが一番なのは揺るがないと思うけれど、ノーラだって大切なのだから。

それを考えるならば、もっとペットを増やすというのは、不誠実かもね。

まあ、今はアクアとノーラとの時間を楽しもう。

それにしても、本当に可愛いな。アクアもノーラも楽しそうな顔をしていて、こちらまで嬉しくなってしまう。

アクアもノーラもぼくのペットでいることを幸せだと感じてくれているんだろうな。本当にありがたい。

今はアクアが右側に、ノーラが左側にへばりついてきている。とても動きづらくはあるけれど、ああ幸せだなと感じられる。

可愛い可愛いペットが2人同時に甘えてきてくれる。これ以上に素晴らしい時間があるだろうか。

改めて同時に甘えられると、2人の違いをつぶさに味わえるな。

アクアは動きを止めてじっとくっついてくる感じで、ノーラは体を擦り付けてくる感じだ。

なんだろうな。2人の性格が違うからなのだろうか。それとも、種族が関係しているのだろうか。

まあ、なんでもいいか。2人はそれぞれ違っていてそれぞれ可愛い。それで十分かな。

「ユーリ、気持ちいい？　せっかくノーラと一緒にだから、2人じゃないとできないことをする」

「ご主人は罪な男だな。アクア様もうちも侍らせているのだから」

ノーラの言うことは分からなくもないけど、ひどい言い方だ。

それでも、ノーラらしくて可愛いんだよね。なんというか、ちよつと生意気な感じが好きだ。

それにしても、アクアとノーラの2人じゃないとできないことか。

こうして、両側から抱きつかれるというだけでも、それを満たしているとは言えるのかな。

まあ、間違いなくこれから楽しくなるだろう。そもそも、2人と一緒にただで嬉しいからね。

そんな風だから、どんな遊び方だとしても満足できるだろう。

せっかくだから、新鮮な遊びをできたらいいなと思うけれど。

「それで、どんな遊びがしたいのかな？　2人と一緒になら、何でも楽しいとは思うけどね」

「アクアも同じ。ユーリとノーラと一緒になら、何でも楽しい」

「ご主人もアクア様も嬉しいことを言ってくれるな。アクア様、つぎは何をする？」

「手を繋いでみるのもいい。ユーリ、アクアとノーラの違いを楽しむといい」

「なるほどな。ご主人はペットを並べて吟味するのだな。贅沢なことだ」

ノーラの言う通りに贅沢な話ではある。可愛いペットが両側で手を繋いでくれて、それぞれの違いまで楽しめるのだから。

そのままノーラとアクアが目を合わせたかと思うと、ノーラが左手を、アクアが右手を握ってきた。

ノーラの手は温かくてちよつとザラザラしている。それで、ギュツと握りしめてきているんだよね。

アクアの手はひんやりしていてつるつるって感じた。握りながら、力を強めたり弱めたりしてくる。

本当にまるで違う感覚で、肉と魚をいつぺんに食べているかのよう  
に思える。

どちらもとても魅力的ではあるのだけれど、なかなか感覚の処理  
が難しいな。

片方に集中することができなくて、どちらも中途半端な味わい方  
になっているような。

せっかく可愛いペットなのだから、余すところなく堪能したいとこ  
ろなんだけれど。

とはいえ、2人が食べ比べのようなものを望んでいるのだろうか  
ら、これでいいのかもしれない。

「ユーリ、楽しい？ ペットが2人いてよかった？ 大好き、ユーリ」  
「ご主人、うちももつと構ってくれていいのだぞ？ 愛しているぞ、ご  
主人」

2人が両側からささやいてくる。耳元がくすぐったいような気が  
するけど、なにか背中にゾクゾクしたようなものが走った。

アクアもノーラも好意を表に出してくれて、とつても嬉しい。

でも、それだけじゃないな。なんというか、神経にまで心地よさが  
送られているような？

珍しい体験をして、心や体がびっくりしちやっただらうか。

それとも、好意をはつきり告げられることが嬉しいのかな。まあ、気分がいいからなんでもいいのだけれど。

「ぼくも2人が大好きだよ。これから、ずっと一緒にいようね」

「当たり前。何があっても離れたりしない。そんなこと、絶対に許さない」

「うちもアクア様と同じ気持ちだぞ。ご主人はうちらを飼った責任があるのだからな」

「望むところだよ。アクアもノーラも幸せにしてみせるから」

「それはもう叶っている。だから、ユーリはこれからユーリのままでいい」

「そうだぞ。それに、ご主人も幸せになるのだからな」

アクアもノーラも手を繋いだままこちらを向いて笑顔を見せてくれる。

この顔が見られるだけでも、嬉しさであふれてしまいそうだけれど。

同じ様な喜びを、この子達にも感じていてほしい。

きつと、それは大丈夫だと信じてはいるけれど。それでもね。

アクアもノーラも、どれだけだって幸せになってくれていいのだから。

「ぼくもすでに幸せだけど、これ以上があるっていうのなら味わってみたいかな」

「どうだろうな。うちはこれ以上の幸せなど想像できんが」

「アクアも同じ。ユーリと一緒になら、いつだって最高だから」

アクアもノーラも今が幸せなんだな。その事実が、ぼくを最高の気分にしてくれる。

やっぱり、大切な人の幸福は嬉しいものだ。

アクアもノーラもぼくのペットになってくれてよかった。

お互いがお互いを幸せにできる最高の関係だっことは間違いないからね。

「それにしても、アクアとノーラの手は随分違うよね。まあ、種族から何から違うから、当たり前といえば当たり前なんだけど」

「そう。だからこそ、2人で一緒に繋いでみた。ユーリ、どっちも好きでしょ」

「それで否定が帰ってきたらどうするつもりなのだ、アクア様は。まあ、ご主人から肯定以外が返ってくるとは思えんが」

「もちろん、2人共好きだよ。アクアの手はより繋がりを感じられるし、ノーラの手は手応えがはつきりしている。それぞれに違いがあって、とても楽しいよ」

「ユーリも褒め方が分かってきた。昔なら、どっちもいいで全部終わってた」

「ああ、たしかにそんな感じがするな。ご主人も成長しているのだな」それは喜んでいいのだろうか。まあ、成長しているのだからそれでいいか。

それよりも、アクアやノーラを喜ばせやすくなったということだね。ね。

それなら、もうちょっと言葉の勉強をしてみてもいいかもしれないな。

それで、ぼくを感じているアクアやノーラを好きだという気持ちを、もっとしっかりと伝える。

うん。ただの思いつきだけど、これは良いかもしれない。頑張ってみようかな。

「なら、もっととうまい褒め方を覚えたいね。そうすれば、もっと2人をうまく喜ばせられるからね」

「別に今でも伝わるけど。でも、ユーリがやりたいのならやってみればいい」

「ご主人がさらに魔性の男になってしまふのだな。楽しみなような、怖いような」

ノーラは本当にぼくを何だと思っているのだろう。

まあ、ノーラがぼくを魅力的だと感じてくれていることは嬉しいんだけどね。

ちよつと苦笑していると、ノーラとアクアが両側から頬にキスをしてきた。

ちよつとびっくりするけれど、そろそろ頬へのキスには慣れてきたな。

とはいえ、2人に同時にされるのは初めてだ。いけないことをしている気分になるな。

「ユーリ、嬉しい?」

「ご主人、すっかり堪能したか?」

「あはは……ありがとう、2人共。唇の感触も結構違うんだね」

なんてことを言っているんだぼくは。

実際、アクアの唇は引つづくような感じで、ノーラの唇は反発する感じだ。

だから事実ではあるんだけど、それを口に出してしまうと変な趣味みたいじゃないか。

ちよつと発言を後悔していると、アクアがなんだか笑顔になっていた。

そのまま、こちらの耳元にささやいてくる。

「唇どうしの感触が、アクアとノーラでどう違うのか比べてみればいい」

「え、ええっ!? そ、そんなの耐えられないよ」

「どうしたのだ、ご主人?」

「ノーラもユーリとキスしたいでしょ?」

「なんだ、そういう話か。アクア様が許可してくれるのならば、ぜひ頼むぞ」

ぼくは何も言っていないのに、いつの間にか2人とキスをする事になってる。

カタリナに悪い気もしてしまうけれど、アクアもノーラもペツトつてことでいいんだよね?

それなら、まだ納得できる範囲なのかもしれない。

犬や猫にキスするのは、聞かない話ではないのだから。

「ユーリ、早く」

そのままアクアにねだられるがままにキスをしてしまう。

今回のアクアはぼくの唇すべてを飲み込んでしまいそうな感触だ。

唇の全てからアクアを感じて、ドキドキが収まりそうにない。少し経つと、アクアの方から離れていった。少し名残惜しきがあった。

「ご主人、次はうちの番だぞ」

ノーラにもおねだりされる。

今度は覚悟が必要だったけど、気合を入れてノーラにキスをする。ノーラの唇は弾力があって押し返してくる。

感触の話をされたせいも、より詳細にノーラの唇を感じている気がする。

ノーラは一回激しく唇を押し付けてきて、離れていった。

ちよつと胸がどうにかなくなってしまいそうだけど、深呼吸して落ち着かせる。

「ユーリ、これからもずつと、アクアもノーラもユーリのペットだから。ちゃんと可愛がって」

「そうだぞ。万が一捨てようとしたならば、ご主人はどうなってしまうのだろうか?」

アクアもノーラもとても色気のある表情をしていて、つい目を引きつけられてしまった。

可愛い可愛いペットである2人を捨てるなんてあるはずがないけど、ちゃんとそれを分かってもらおう。

「アクアもノーラもぼくの幸せなんだから、2人こそぼくを捨てないでね」

「当たり前。ユーリは絶対に離さない。ノーラだってそうでしょ?」

「無論だぞ。ご主人の全部を奪ってやるぞ。せいぜい覚悟することだな」

「ユーリ、逃げようって考えても無駄。だから、アクアたちをペットにしたことを後悔しても遅い」

後悔だなんて、そんな事をするわけがない。だから、逃げられないのは嬉しいくらいだ。

これからもずつと一緒にいようね、アクア、ノーラ。



## 117話 余裕

今日はカタリナとノーラと一緒に。アクアはどこかへ行っている。冒険が必要になる状況があまり無いので、最近はのんびりできているな。

ずっと完全な平和だと困ってしまうだろうけど、こういう時間があることは嬉しい。

まあ、ずっとモンスターが現れなかったところで、贅沢をしなれば一生暮らせそうだけど。

とはいえ、ずっと目減りしていく資金を見るのはつらそうだから、ある程度はモンスターに現れてほしい。

今はそんな事を考えなくてもいいか。ステラさんの家とはいえ、自宅でゆっくりするのは落ち着く。

ミストの町にいた頃には、あまり自宅の居心地がいいという感覚はなかったけれど。

今は本当にこの家が好きだと思える。ステラさんにはいつぱい感謝しないとね。

それはさておき、カタリナとノーラとの3人で一緒か。アクアもいると楽しそうだけど。

まあ、3人なら3人での楽しみがあるだろう。ノーラはカタリナの契約モンスターだけど、ぼくと一緒にいることが多い。

だから、カタリナとノーラがどういうパートナーになっているのか知る機会にしてもいいかもね。

戦いではうまく連携しているのは知っているけれど。

その辺はゆっくり知っていても十分だろうけどね。仲が悪い感じではないから。

それはさておき、カタリナがジトつとした目でこちらを見ている。

さて、なにかカタリナが不満に思うことでもしてしまったのだろうか。

「あんた、ノーラとキスしたんだって? まあ、別にそれはいいけど。

あんたが女を侍らせたいと思うのなら、それでもいいのよ」

ひどい誤解を受けている。ノーラとキスしたのは事実だけど、あれはペットと飼い主のコミュニケーションだよ。

とはいえ、カタリナは思っていたより柔らかい雰囲気だ。

だから、ノーラとキスしたのを気にしていないというのはきつと事実だ。

本気で不満なら、声色や言葉の選択ももっと刺々しくなるはずだからね。

それでも、カタリナに不誠実なのは確かな気がしているから、謝ったほうがいいかもしれない。

「ごめん、カタリナ。カタリナの言葉に答えもだしていないのに」

「あんたが前向きに考えているってのは分かっているわ。それに、どうぞずっと一緒にいるんだから、ゆっくり考えればいいのよ」

そうなのだろうか。まあ、カタリナのことは好きだし、ずっと一緒にいたいとは思っけれど。

それがどういう感情なのかはまだよく分からない。恋愛感情と言っていいのだろうか。

カタリナを長く待たせたいわけではないし、できれば早く答えを出したいと思う。

急ぎすぎて妙な答えを出すかもしれないという懸念はあるけれどね。

まあ、仮に結婚したとしても、カタリナとならばうまくやっているとと思うけれど。

恋愛感情ではなかったところで、それでカタリナと一緒に暮らすことが嫌になるはずもないのだし。

「そうだぞ。ご主人がカタリナを嫌いになるなど、考えられん。少しずつ距離を詰めていってもいいと思うぞ」

「あたしがユーリを嫌いになることだってないわよ。だからあんたは急ぎすぎないでいいの。とりあえず受けようなんてのが、一番腹立たしいのよ」

なるほど、カタリナはそういう考えなのか。なら、急ぎすぎるのもダメかもね。

まあ、ぼくがカタリナを嫌いになるなんて、たしかに無いよね。  
カタリナがぼくを嫌いになるかどうかは、ミストの町での仲違いを  
思い出してしまふけれど。

あの事件があったから、ぼくたちの絆がさらに深まったと考えるこ  
ともできるんだけどね。

仮にカタリナにぼくが嫌われてしまったとしても、またなんとか仲  
直りできるように頑張ると思う。

そういう意味では、カタリナと離れることなんて考えられないよ  
ね。

「カタリナは信じているし、好きなんだけど。それが恋愛感情か分か  
らなくて」

「あんた、そういう所はにぶそうだものね。納得だわ。でも、あたしは  
あんたのことが好き。男と女としてね。これは、はつきり言っていな  
かったかもしれないけれど」

そうなのだろうと思っただけだけれど、言葉にされるとまた感じ方  
が違うな。

ドキドキするし、暖かい何かで胸が満たされそうになる。

こういう感情が恋だというのなら、それはきつと素晴らしいものな  
のだろうな。

やっぱり、カタリナと一緒になら幸せになれると思う。それは間違い  
ない。

「それなのに、ぼくが誰かを侍らせてもいいなんて言ったの？ カタ  
リナはつらくないの？」

「大丈夫よ。あんたはきつと、あたしのことを大切にしてくれる。そ  
う信じてるわ。まあ、どうせ付き合ってたって、他の女に目を奪われた  
りするのには目に見えているもの」

カタリナは柔らかな表情だから、ぼくを信じてくれているのは本当  
だろう。

でも、ぼくがカタリナと付き合ったとして、カタリナが他の男に目  
を奪われていたら。

まだ付き合うと決めたわけじゃないけれど、今後は気をつけたほう

がいいかもしれない。

ぼくはカタリナのことを傷つけないわけじゃないから。それくらい、大切な幼馴染なんだ。

「できるだけ気をつけるよ。そういうのって不誠実に思えるし」

「気をつけたってどうにもならないわよ。でも、あんたってそういうやつよね。無駄なところで真面目というか」

「そこがご主人の魅力でもあると、カタリナも分かっているであろう？　うちはご主人にすっかり悩んでもらっていいぞ」

「どうかしらね。まあ、なんでもいいわ。どうせあんたがいまさら変われやしないのよ。だから、受け入れてやるしか無いわ」

カタリナがぼくのことを受け入れてくれると言う。それだけのことが、とつても嬉しい。

ノーラだってぼくを肯定してくれているし、本当にぼくは幸せものだな。

だからこそ、ぼくはカタリナをいつでもどこでも信じていたい。

それが、カタリナを喜ばせることになると思えるから。

だって、誰かに信じてもらえるってことがどれほど嬉しいことか、ぼくはよく知っているから。

カタリナにも同じ喜びを味わってほしいと思えるのだ。

本当にカタリナには何度も助けられてきたから。体も、心も。

「それは、ありがとう。ぼくも、カタリナの全部を受け入れるつもりだよ」

「ふふつ、あんたがあたしをどう思っているのか、よくわかったわ。これなら、そうね。そう待たなくてもいいかもね、ノーラ？」

「まあ、ご主人は心の底では答えが決まっているのだろうな。自分ではよく分かっているだけで」

カタリナとノーラはぼくの何を分かったというのだろうか。

もうぼくの答えが決まっているって、どういうことだろう。わからない。

でも、カタリナが嬉しそうに見えるってことは、そういうことなのか？

そうだとして、これからどうすればいいのだろう。

カタリナとアクアとぼくの3人で過ごしたいみたいだったけど。

ノーラも仲間に入れてあげていいのだろうか。

そもそもカタリナはぼくに何を望んでいるのだろうか。

そのあたりが分からないことには、行動の方針が決められない。

「それって、そういうこと？　だとしたら、ぼくはどうすればいいの？」

「結論を急がないことね。あんたがあたしと結ばれるつもりなら、あたしとあんたとアクアの3人の子供を作る。そのつもりよ」

「3人のって、2人の子供を3人で育てること？」

「アクアはあたしとあんたの子供に、アクアの要素を付け加えられるそうよ。あとは分かるわよね？」

それは、胎児にアクアが何かをするってことなんだろうか。

アクアのことだから、ぼくたちの子供なら大切にしてくれるはずだし、健康とかには問題は出ないはず。

なら、それでもいいのかな。何となく、倫理的な問題がある気がするけれど。

とはいえ、そうすればアクアもカタリナも喜んでくれるんだよね。それは魅力的だ。

でも、それは子供を道具として扱っているのではないのだろうか。まあ、今すぐ結論を出さなければいけないことではないか。

そもそも、カタリナと結ばれるかどうかを先に考えるべきだよな。

「それで3人の子供ってこと？　アクアなら、子供を犠牲にはしないか」

「そうよ。悪くない考えじゃない？　あたしとあんたとアクア。この3人は絶対に離れない。その証にもなるわ」

「うちが全くかわれんのが残念ではあるが、うちもその子供は可愛がるぞ」

ちよつと悩ましいな。カタリナが実際に子供を持ったら考えは変わるかもしれない。それは前提としてあるけれど。

なんというか、本当に子供を手段の1つとしか思っていないんじゃない

いかと感じる。

その考えのままだとすると、生まれてきた子供が不幸になつてしまふかもしれない。

まあ、周りの人たちにも協力してもらえらるのなら大丈夫だろうけれど。

でも、どの程度協力してくれるかはわからないからな。家族の問題なのだから。

「ちよつと考えさせて。すぐに結論を出すことはできないよ」

「ま、あんたならそうでしょうね。でも、それだけでは済まさないわ。ユーリ、こつちを向きなさい」

ちよつと考えるために視線をずらしたからかな？ そう考えていると、カタリナはぼくの両頬を手で挟んだ。

そのまま顔を近づけてきて、キスをされる。

カタリナの唇はとっても熱いと感じた。それに、とっても柔らかい。

しばらくくつついてみると、カタリナの方から離れていく。カタリナはいたずらっぽいやつ顔をしていた。

「あんたにあたしを刻みつけてあげるわ。これからだって、何度でも。あんたがずっと悩んでいてもいいけど、あたしから逃げられるのかしらね？」

つまり、ぼくがカタリナを選びやすくするための行動なのかな？

それとも、ずっと悩んでいるのならば無理やりでも結びつくという宣言だろうか。

なににせよ、カタリナを悲しませないような結論にしないかね。

カタリナのつらそうな顔なんて、ぼくは見たくないのだから。

「ノーラ、そんな顔をして、うらやましいのかしら？ 別にいいわよ。あなたもキスをしたって。どうせ、それで何も変わったりはしないのよ」

「カタリナ、言質は取ったからな。だから、これも許してもらおうぞ」  
そのままノーラまでキスをしてくる。

ノーラは激しく何度も唇を押し付けてきていた。

そのままノーラが離れていったのでカタリナが視界に入る。

なぜか輝いて見えるほどの笑顔で、カタリナのことがよく分からなくなりました。

「別に許してあげるわ。ノーラ、あなたもあたしの家族なんだからね」  
「そうか。だが、悔しいな。カタリナがうちを許した理由がよくわかったぞ」

「ふふっ、そうね。ユーリ、覚悟しておきなさい。あんたはとっくの昔に、あたしにもアクアにも囚われているのよ。それをすぐにでも実感するでしょうよ」

## 118話 忍耐

今日はステラさんの家にサーシャさんを招くらしい。ぼくとステラさんで出迎える予定だ。

そういえば、サーシャさんの家に誘われることはあっても、サーシャさんがこちらに来たことはなかったな。

珍しいというか、初めてのことだ。これだけ長い付き合いがあつて、そうなるものなのだろうか。

まあ、サーシャさんは貴族なのだから、軽々しく平民とは付き合い合えないだけかもしれないけれど。

それにしても、サーシャさんとステラさんは、冒険者としてのぼくたちをずっと支え続けてくれた人たちだよな。

アリシアさんたちにも大きくお世話になったと思うけれど、あれは同じ冒険者としてだから、ちよつと感覚が違う。

まあ、どちらも尊敬すべき人たちであることには変わりないけれど。

ぼくの周りでオーバースカイでない人間は、ステラさんとサーシャさん以外にはハイデイとその近衛だけだ。

だからどうということも無いのだけれど、ちよつとステラさんとサーシャさんには共通点を感じるというか。

冒険した後に穏やかに出迎えてくれるところとか、頼りになる大人だと感じるところとかね。

そういうところがあるので、今日2人と一緒に話したりするのは、ちよつとワクワクするというか。

それに、サーシャさんにぼくが暮らしている環境を知ってもらおうというの。

サーシャさんはぼくには詳しいと思うけれど、それでも色々を知ってもらいたいと感じる。

改善できる場所があつたら教えてもらえそうだし、そういう面でもね。

ステラさんと待っていると、サーシャさんがやってきた。



今日のサーシャさんは、なんとというか貴族っぽくない感じだ。お洒落をした町娘みたいというか。

これはこれで、サーシャさんの可愛らしさを引き立てていると思う。

それにしても、衣装だけでもだいぶ印象が変わるものだな。いつものサーシャさんよりずっと身近に感じる。

「お待たせしてしまっただようで、申し訳ありませんわ。ですが、今日はお二方と共により時間を過ごせればと存じますわ」

「ようこそ、サーシャさん。今日は私の家を存分に楽しんでください」「今日はよろしく願いますね、サーシャさん。それと、その服とっても似合っています。いつもより親しみを感じますね」

「まあ、いつものわたくしには親しみがありませんか？ 冗談ですわ。ユーリ様が褒めてくださって、嬉しいですわ。それにステラ様も、今日はよろしく願いますわ」

「ええ、よろしく願います。それでは、こちらにどうぞ」  
そのままステラさんはサーシャさんを案内してぼくの部屋へと連れて行く。

今日はアクアとシイ、カタリナにノーラが4人で出かけているようだ。仲良くなってくれているようで嬉しい。

それにしても、客間とかでなくていいのかな。まあ、ステラさんが案内するくらいだから、大丈夫なのだろうけど。

ぼくの部屋に入ったサーシャさんは、ゆっくりと周りを見回す。

やっぱり人の部屋って気になるものだよね。サーシャさんはジロジロと見る感じではないから、落ち着いていられるけど。

これでじっくり観察されていたら、ちよつと恥ずかしいかもしれない。

それでも、サーシャさんにぼくの生活を知ってもらえるのは嬉しいけれど。

「ユーリ様ご自身のものがあまり有るようには見えませんわね。趣味などはお持ちでないのですか？」

「強いて言うなら、親しい人と接することでしょうか。あとは、いくつ

かアクアやシイと遊ぶおもちゃもありますけど」

「そのようなモノなのですわね。稼いでいるのですから、何に使っているのかと思いましたが」

「ユーリ君は贅沢が苦手なようですね。まあ、稼ぎな不安定な冒険者ですから、貯めておくのも悪い判断ではないでしょう」

「そうだよね。お金はいっぱいあるんだけど、何に使っていいのかわからない。」

「高い食事にしようにも、そもそもそういう物を手に入れるための伝手が無いし。」

「とりあえず高いものを買って満足するってのもあまりね。やっぱり、邪魔なものを置いておきたくない。」

「ぼくが欲しいのは、みんなともっと親しくなれるようなものだけだ、そういうものにお金はかからない。」

「遊び道具だって、そんなに高いものを選んでも仕方ないものだし。」

「それもそうですわね。万が一の事態でも、金銭が有るのと無いのでは大違いですわ。それに、そういう判断もユーリ様らしいと思ってしまうますわ」

「ユーリ君はこういう小市民らしいところも魅力と言えるでしょう。金にあかせてふんぞり返っている姿は似合いませんから」

「まあ、ぼくの心は今でもミストの町にいた頃とそう変わっていないかもしれないな。」

「それでも、大切な人が増えたってことだけは違うけれど。」

「周りの人の幸せが、ぼくに幸せを運んでくれるなんて想像もしていなかった。」

「ステラさんとサーシャさんがカーレルの町で支えてくれたのも、変化の大きな一因だよね。」

「それにしても、ステラさんとサーシャさんは前からの知り合いだったはず。」

「その割には、この2人が一緒に話している姿はあまり見てこなかったな。」

「あまり親しくなかったとか？」

でも、それでぼくをサポートしてと

ステラさんがサーシャさんに頼むのもおかしな話か。

なにか急に気が変わって話しかけなくなったとか？ 逆に、突然話しかけたい気分になった？

よく分からないけれど、こうして親しい人どうしが仲良くしてくれているのは嬉しい。

「ところで、ユーリ様はわたくし達のどのあたりを魅力的に感じていますの？ 興味深いですわね」

「それは確かに気になりますね。ユーリ君、答えていただけますか？」  
どうしてそういうところで仲良くしてしまったんだ。

うう、恥ずかしいし、難題だ。どう答えればいいのか全くわからないんだけど。

でも、ステラさんにしろサーシャさんにしろ、とても魅力的だったことは確かだ。

だから、答え自体はまあまあ思いつきはする。答えたくはないけれど。

仕方がない。本当に恥ずかしくてどうにかかなりそうだけど、無視もできないからね。

「ステラさんにもサーシャさんにも共通する魅力としては、オトナな雰囲気ですね。頼りになるし、かっこいいです」

「そう言われるのは嬉しいですね。ユーリ君の先生として、しっかりとできている証ですから」

「わたくしもですわ。冒険者組合の受付として、十分な仕事をこなせているということでもあります。ですが、わたくしたち個人の魅力も、言っていただけですわよね？」

最初からそのつもりではあるけれど、そう言われてしまうと緊張してしまう。

ステラさんやサーシャさんにつまらない人だと思われたくない。子供扱いもされたくない。

そのためには、ここでしっかりとした回答をできないといけないうじゃないかな。

「ステラさんは優しい感じが全体から漂っていて、それでも時折鋭い

雰囲気になるのがこう、深みを出しているという風ですね」

「ユーリ君はよく私を分かっていますね。それが、とても嬉しいですよ。ええ、私は優しいだけの女ではありません。ユーリ君も、油断してはいけませんよ？」

そういうステラさんの顔は、時々感じる怖さが混ざっていて、それと同時に色気もあって、すごく目が惹きつけられた。

なんというか、この人には勝てないと思わされる時がある。戦ったら絶対にどうにでもできるんだけど、そういうことじゃなくて。

精神的優位を常に保たれているというのかな。やっぱり、大人だからなのかな。

「それで、サーシャさんは普段は可愛らしいんですけど、時々妖艶でつい、どこまでも引つ張られていつてしまいそうになります」

「ユーリ様がどれほどたくしを魅力的に思っているのか、よく伝わってくる言葉ですわ。ユーリ様は、わたくしに着いてきていただくことで、もっと幸せになれますわよ？」

サーシャさんはすごく引き込まれそうな表情をしている。可愛らしさと色っぽさが同居している感じだ。

こんな顔をされていると、思わず目が奪われてしまう。

カタリナのことがあるから、他の人とはある程度距離を取るつもりだったのに、それをとてつもない難題に感じさせてくるんだ。

ステラさんにしろサーシャさんにしろ、ぼくでは敵わない相手のような気がしてならない。

このまま正面から対峙しては、きつと思うがままにされてしまう。

それでも、離れたいとは全く思えない。手のひらの上で転がされているのだとしても、それでいいと思えてしまう。

もう、この2人の魅力、その深みにハマってしまったのだろう。「ユーリ様。ユーリ様が望むのならば、わたくしもステラ様もユーリ様と女として仲良くしても良いのですわよ」

「ええ、そうですね。ユーリ君はきっとそういう未来を望まないのでしょうか、だからこそ墮としてみたくなるのです」

2人の提案は、とても魅力的だと思える。それこそ無意識のうちにつばを飲み込んでしまったくらいには。

それでも、墮落するわけにはいかないんだ。オーバースカイのために、みんなにふさわしいぼくでいるために。

何よりも、アクアにとつて最高の飼い主であるために。

ぼくはアクアに最も救われた。だからこそ、アクアに顔向けできないことをする訳にはいけないんだ。

「2人の言葉は嬉しいですけど、ぼくはそれを選ぶわけにはいけないんです。2人のことを大切に思っているからこそ、軽く扱うつもりはないんです」

「そうユーリ様が答えると、わたくしは知っておりましたわ。ですの  
で、これからも、ずっとあなたを誘惑することも悪くありませんわね」  
「ユーリ君は、強い心を持っている。それが分かっているからこそ、私  
に溺れさせてみたいんですよ。それを知って、ユーリ君はどうします  
か？」

「これからも、いつも通りサーシャさんやステラさんと接し続けるだ  
けです。サーシャさんやステラさんがぼくを使ってなにか企んでい  
たとしても、それで嫌いになるわけがないんですから」

サーシャさんもステラさんも、ぼくの言葉を受けて妖艶に笑う。

きつと、これからもぼくを誘惑してくるといふ決意表明だと思え  
た。

でも、ぼくはそれに負けたりしない。それでも、2人を大切にしま  
みせるよ。

「ユーリ君、つらくなったら、いつでも甘えてくれていいんですよ？」

私があなただを癒すこと、私も好きなんですから」

「ユーリ様、わたくしの望むことがあるのなら、何でも言ったださ  
います。わたくしの力が届くのなら、全て叶えて差し上げますわ」

## 119話 責任

今日はユーリヤとフィーナに誘われて、3人で一緒に過ごす予定だ。

この2人が一緒に誘ってきたので、仲良くしているのだと思う。ぼくの知らないところで関係を構築してくれているようで、嬉しいような、寂しいような。

全体としてみれば、間違いなくいいことではある。

ぼくの大切な人どうしがうまくやっているという事実があるのだから。

ちよつとユーリヤとフィーナが連携しているところを見たことはある。

とはいえ、ぼくの前であまり親しい姿をしていたわけではない。

まあ、ぼくもずっとみんなと一緒にいるわけではないからね。

どこか知らないところで交流していても、全くおもしろい話ではないよね。

ユーリヤに出会った時はぼくが助けて、フィーナに出会った時にはぼくが助けられた。

それに、ユーリヤは明るいイメージの人で、フィーナは物静かかって感じだ。

個人的には、対照的な2人がどうやって仲良くなったのか気になるかもね。

「ユーリさんっ、今日は目一杯楽しんでくださいねっ」

「そうですね……ユーリさんに喜んでもらいたくて、この場を用意したので……」

ステラさんの家の空き部屋で3人一緒にいるのだけど、特別変わった様子ではない。

となると、普通に3人で過ごすつもりでいるのかな。

なんにせよ、ぼくを喜ばせたいという二人の気持ちがとても嬉しい。

なんなら、今の言葉だけで十分だと思ってしまいうくらいかも。

「ありがとう。そう考えてくれるだけで、満たされる思いだよ」

「その程度で終わらせるつもりはありませんよっ。ユーリさんには、もっともーっと幸せになってもらうんですからっ。それに、わたしのことも幸せにしてみたいですっ」

「その通りです……わたしたちで、お互いを幸せにしましょうね……」  
お互いに相手を幸せにしあえるのなら、それは素晴らしい限りだけ  
れど。

ユーリヤやフィーナの存在によって、ぼくはとても幸福になれている。

だから、ユーリヤとフィーナはぼくの手で幸せにしてあげたい。

それが、2人と出会えた感謝を形にするってことでいいのかな。

いまだに、どうすれば他者に幸福を与えられるのかはよく分からないな。

だから、ぼくは頑張っていくんだけどね。みんなを幸せにしたいから。

「そうなれるのなら、きつと最高だよね。ユーリヤとフィーナは、今は幸せ？」

ぼくのその言葉に、2人は一度目を合わせてからこちらに微笑んできた。

その笑顔からはとても暖かな感情が伝わってくるようで、ぼくも嬉しくなってきた。

やっぱり、大切な人の笑顔はいつ見てもいいものだな。

「はいっ、もちろんですっ。わたしが幸せでいられるのは、ユーリさんのおかげなんですよっ」

「わたしも同じです……ユーリさんが受け入れてくれたことが、どれほどわたしの力になったか……」

ぼくが2人の力になれているという事実が、それだけで喜びを生む。

でも、ユーリヤもフィーナもまだまだ幸せになれると思うんだよね。

なんというか、不幸を知っているから幸せのハードルが低いという

のかな。

当たり前のことをすごい幸福みたいに感じているようにみえるのだ。

だからこそ、溺れてしまいそうな幸せを叩きつけてみたいと感じるんだよね。

「それは嬉しいな。でも、2人がもつともつと幸せになれるように、ぼくも頑張るから」

「でしたら、わたしの料理を食べてください……ユーリさんが喜んでくれると思って、準備したんです……」

「わたしも手伝ったんですよつ。フィーナさんは初めてだったそうですからっ」

ここには料理が用意されているように見えないけれど、他の場所で作ったってことかな。

言葉の様子からすると、ユーリヤは料理ができるのかな？

それで、経験のないフィーナを手伝っていた感じだろうか。

なんにせよ、2人が用意してくれるのなら、喜んで食べるつもりではあるけれど。

「もちろんだよ。ぼくのために用意してくれるなんて、嬉しいな」

「はい……ユーリさんのために用意したんです……思う存分、召し上がってください……」

「そうですよつ。わたしたちの愛情、召し上がれっ」

「お腹いっぱいになっても食べちゃうかも。ところで、調理場にもう作ってあるの？」

「そうですねっ。待ちきれませんか？」

「そうかもね。なら、取りに行こうかな」

ぼくが動こうとすると、ユーリヤとフィーナが共に手で止めてきた。

そのまま、2人で料理を持ってきてくれた。魚料理が中心になっている。

ぼくの好みに合わせてくれたんだな。というか、もうみんなぼくの好みを知っているのかな。



まあ、食事の好み知られているくらいなら、嬉しいって感じているかい。

「ぼくに興味を持ってきている証って思えばいいよね。」

「美味しそうだね。2人共、料理がうまいんだね。」

「その評価は、食べてから判断してください……ユリーさんの好みでなければ、意味がありませんから……」

「同感ですつ。お世辞なんていりませんから、ちゃんとおいしいか言ってくださいねつ」

「ぼくが不味くてもおいしいって言ってしまいそうなことを見抜かれているのかな。」

「お世辞なんていらなと言われても、そのままの感想を残すことは抵抗があるというか。」

「いや、これはまずいと決まったわけじゃないのに、その考え方はダメだよ。」

「匂いと見た目からは、美味しそう感じがするけれど。結構期待してしまおう。」

「そのまま食べていくと、ぼくの好みに合わせてくれるという感じが強かった。」

「甘さも辛さも何もかもちょうどよく好んで、いくらでも食べていたくらいだった。」

「夢中になって食べ進めていると、ユリーヤとフィーナから視線を感じて、思わず手を止めてしまおう。」

「わたし達のことには気にせず、好きな様に食べてください……」

「本当ですよつ。ユリーさんに美味しく食べてもらえないなら、作った意味がないんですからつ」

「そういうことらしいので、食べることに集中する。」

「魚は柔らかさを損ねないまま、いい焼き加減になっている。魚が好きなぼくとしては、最高だ。」

「それに、魚本来の味を邪魔しない範囲で味付けがされているので、それも嬉しい。」

総合すると、フィーナが初めてなんて信じられないほどの出来だつ

た。

「最高に美味しいよ。これなら、また何度でも食べたいくらいだよ」

そういうと、2人は弾けるような笑顔になってくれた。

美味しいって言うだけでこんなに喜んでもらうと、ちよつと申し訳無さもあるくらい。

ぼくは作ってもらって食べているだけなのにね。

でも、本当に2人の料理は好きだから、また食べたいのは本音だ。

「喜んでもらえて何よりですつ。それなら、またの機会に用意しますねつ」

「いずれは合作ではなく、それぞれ個人の料理も食べていただきたいですが……」

「それもいいですねつ。フィーナさん、お互いもつと練習しましょうねつ」

「そうですね……ユーリさんの好み、もつと知りたいです……」

ぼくの食事の好みって、魚料理以外は自分でもよくわからないんだよね。

というか、自分の好みを正確に把握できている人なんているのかとすら思える。

それはさておき、フィーナとユーリヤの手料理は楽しみだ。

ちよつとくらい焦げていても、笑顔で食べられちゃいそうだな。

まあ、お世辞は嫌って言ったのがどこまで本音かによっては、嫌味に受け取られかねないけれど。

でも、大切な人が頑張って作ってくれた料理ってだけで、相当嬉しいのは確かだから。

「ぼくの好みはぼくにも分からないや。でも、2人が作ってくれるのなら、喜んで食べるから」

「嬉しいです……また、ご用意しますね……」

「楽しみにしていてくださいねつ。もつとうまくなってみせますからつ」

本当に楽しみだ。今からでも待ち遠しいって思えちゃいそうなくらい。

フィーナもユーリヤも楽しそうで、それも嬉しいな。

特にフィーナは、趣味らしきものも見つかっていないようだったから。

「そういえば、2人はどこで仲良くなったの？ ちよつと気になっちゃうかも」

「わたしたちには色々共通点がありましたからねっ。それでですよっ」

「そうですね……似た者同士と言えるでしょうか……」

似た者同士？ 結構意外だな。ぼくは2人を対照的だっと思っていたのに。

でも、2人がそう思っていて、実際に仲良くしているのだから、事実なのだろう。

どんなところに共通点があったのかな？ 聞いてみても大丈夫なのだろうか。

「ふふっ、どんな部分が似ているのか、気になりますか？ 1つは、ふたりともユーリさんが好きだっけですっ。残りは、内緒ですねっ」

ユーリヤにはぼくの考えはお見通しだったみたいだ。

やっぱりぼくは顔に出やすいんだね。もう諦めたほうがいいのか？

それはさておき、2人共ぼくが大好きだときたか。嬉しいし、これまでの態度からそんな気はしていた。

とはいえ、それだけで繋がりが深くなるとは思えないし、残りが重要なのだろうか。

一体なんだろう。全くわからないな。でも、きつと悪いことじゃないから、ぼくに内緒でもいい。

「ありがとう。ぼくも2人のことが好きだよ。これからもよろしくね」

「それは知っていましたが、言葉にされると嬉しいものです……なので、わたしも言葉にしますね。ユーリさん、大好きです……」

フィーナがこんなに積極的になってくれたのは、フィーナが明るく

なつた証だと思える。

これまでずっと、フィーナは自分が嫌いなようだったから。そんなフィーナも、ちゃんと自分を愛せているような気がするんだ。

この感覚が当たってほしい。それなら、最高の状態だと言えるから。

「フィーナにも、ユーリヤにも、ぼくはずっと助けられてきたから。だから、2人の頼みなら、できる限り聞くよ。改めて、2人共大好きだよ」

「だったら、わたしたちのことをこれからも好きでいてください。それだけで、ユーリヤは満足ですからっ」

「わたしも、同じ様な気持ちです……それだけじゃありません。ユーリさん、もつとわたしたちを頼ってください。ユーリさんの頼みなら、わたしたちだってなんでも聞きますから……」

ユーリヤとフィーナは似た者同士だって言ってたけど、ぼくも似ているのかもね。

だって、ぼくの望みと2人の望みは似たようなものに感じるから。だから、ぼくがしてほしいこと、2人にいっぱいしてあげるんだ。

それで、2人にはずっと幸せでいてほしいな。

「これからもずっとよろしくね、2人共」

「はいっ。ユーリさんと、いつまでも一緒にいますからっ。嫌だと言っても遅いんですよっ」

「そうですね……わたしたちに幸せを教えた責任、何があっても取ってもらいますから……」

## 120話 関係

アリシアさんたちとドラゴンを倒しに行って、帰ってきた。

久しぶりの冒険ではあったけれど、なかなかの強敵ではあった。

まあ、ぼくたち3人でならそう苦戦はしない相手だったけど。

ただ、ぼく1人ならちよっと難しかったかもしれない。協力してちよっどいい相手と言うか。

指輪の力も、アクアと離れているとそこまで発揮できないみたいだからね。

とはいえ、ぼくだけでも頑張って倒せない相手ではなかったかな。

それにしても、ドラゴンに挑むなんて昔では考えられなかったな。

ぼくとカタリナとアクアでなんとかキラータイガーを倒せる程度の実力だったんだよね。

そもそも、アクアと契約しなければぼくはもっと弱かった。

アクアはオメガスライムだから、ドラゴンくらい簡単に倒せるかもしれないけれど。

もしかして、ぼくに冒険させるために指輪の力を抑えていたとか？

いざという時にはアクアは絶対守ってくれるけれど、ぼくの楽しみを邪魔しないように気遣ってくれているし。

ミーナとの戦いとか、アクアならもつとぼくを強くすることもできただけだからね。

なんというか、アクアはぼくの成長も楽しんでくれているというか。

まあ、そのへんの考察は今じゃなくていいか。

せっかくアリシアさんたちと一緒になんだから、2人との時間に集中しよう。

ドラゴン討伐から帰ってきたぼくたちは、アリシアさんたちの前の家に寄っていた。

ぼくたち3人になる時には、だいたいこの家にいる気がするな。

アリシアさんたちにとって愛着のあるだろう家に迎え入れてくれている。その事実が嬉しい。

ぼくはアリシアさんたちをきつと誰よりも尊敬しているけど、アリシアさんたちもぼくを大切にしてくれていると感じる。

「今日は楽しかったね、ユーリ君。ドラゴンを軽く倒せるようになるなんて、昔の私が聞いたら驚くだろうね」

「そうだね、アリシア。ユーリ君の成長が実感できて嬉しいよ。いつの間にか、わたしたちが追いかける方になっちゃったよね」

アリシアさんたちに教わっていた始めの頃、アリシアさんたちのような冒険者になりたいと思っていた。

それが、アリシアさんたち自身にぼくが彼女たちを超えたと言ってもらえるようになった。

嬉しさもあるけれど、アリシアさんたちをずっと追いかけていたかった気もする。

そんなこと、この人達の前では言えないけどね。

「こうしてアリシアさんたちと仲間として冒険できること、最高の気分です。ずっと楽しみにしていたことだったので」

「私達も楽しみにしていたんだよ、ユーリ君。だから、ありがとう。ユーリ君のおかげで、私達は最高の喜びを知ることができた」

「ユーリ君だからこそ、わたしもアリシアも一緒に冒険したいと思えたんだ。ずっと尊敬してくれていてありがとうね、ユーリ君」

アリシアさんたちはどちらもとても嬉しそうで、ぼくはなにか救われたような気分になった。

ぼくはアリシアさんたちに返しきれないほどのものを貰った。そう思っていたけれど。

もしかしたら、アリシアさんたちにも相応のものを返せているのかもしれない。

そう感じるくらいには、今のアリシアさんたちの笑顔は素敵だった。

「どういたしまして。でも、アリシアさんたちを尊敬できたのは、アリシアさんたちが素晴らしい師匠だったからです。だから、お礼を言われるようなことではないですよ」

「そう感じてくれていることが嬉しいんだよ。ユーリ君だって、メル

セデスさんたちに尊敬されていることは嬉しいだろうか？」

「うんうん。わたしたちが教えたところで、何も学べない相手はいっぱいいた。だから、ユーリ君の尊敬が心地いいんだよ」

メルセデスたちに尊敬されて嬉しいというのは分かる。

なるほど、これに似た感情をアリシアさんたちは感じてくれているのか。それは気分がいいな。

それにしても、アリシアさんたちから何も学べない相手か。どうせ会うことはないだろうけど、腹立たしいな。

こんなに素晴らしい冒険者から教わることが、どれほど喜ばしいことだと思っているのだろうか。

まあ、それがわからないからこそ、アリシアさんたちの教えを活かせなかったのだろうか。

「アリシアさんたちが喜んでくれるのなら、これからも尊敬し続けますね。まあ、そんなこと関係なく、ずっとぼくの憧れた師匠ですけれど」

「ユーリ君はとてもいい子だね。でも、無理に尊敬しようとしなくていいよ。それは、きつと疲れるだけだから」

「そうだね、アリシア。ユーリ君に見限られたのなら、とつても悲しいだろうけど。でも、それは仕方のないことだから。強制できることではないから」

ぼくとしてはアリシアさんたちの物言いには不満があるけれど。

この人達ならば、ずっと尊敬できる相手だと信じている。それを否定されたような気分が少しある。

でも、理屈はわかるんだよね。人は変化する生き物だし、感情も当然変わる。

それを無理に押し留めようとしても、歪な感情が出来上がるだけだろう。

だから、アリシアさんたちの忠告は正しいんだよね。ただ、心で納得できないだけで。

「ぼくの方こそ、アリシアさんたちに見限られないようにされないといいけませんね」

「それはないと思うけど。私がユーリ君を嫌うぐらいの行動は、ユーリ君の嫌いなものばかりだから」  
「それは分かる気がするなく。ユーリ君、人と対立しようとするの苦手だからね」

そういうものだろうか。普通にこいつなら殺してもいいって感じた相手はまあまあいるけれど。

一番強くそう感じたのは父親だったな。あいつだけは、反省したところで許しはしないだろう。

まあ、もう死んでいるんだけれど。今思い出しても不愉快な相手だったな。

「自分ではよくわからないですね。でも、アリシアさんたちから嫌われる可能性が少なそうなのは嬉しいです」

「ユーリ君が私達を嫌いになる可能性も少ないだろうけどね。たとえば、ほら、お手！」

アリシアさんはそんな事を言いながら手を出してくるので、ぼくはそれに合わせて手を出し返した。

そのままアリシアさんの手の平の上にぼくの手を乗せると、アリシアさんはいたずらっぽい表情をしていた。

なんとというか、こういう表情もする人なんだな。意外な一面かもしれない。

「こんなこと、相手によっては嫌われてもおかしくないんだけどね。ユーリ君はイヤイヤやっている風でもないからね。私達の関係が破綻する可能性は、相当小さいものだよ」

まあ、たしかにお手とか言われたら、バカにされていると考えてもおかしくはないか。

でも、アリシアさんがぼくをバカにするイメージはできないし、問題ない。

新しい一面を見られた感じで、むしろ嬉しいくらいだ。

「ユーリ君は相変わらず素直で可愛いなあ。よしよし、いい子だぞ〜」  
そのままレテイさんに頭を撫で回される。

なんとというか、レテイさんのふんわりした感触、暖かき、優しい表



情。

すべてがぼくを落ち着かせてくれて、いつそのまま眠ってしまいたいくらいだ。

「随分落ち着いているよね。癒されるなく。でも、ユーリ君はわたしがかぎ爪を突き立てたりするとは思わないの?」

他のモンスターなら、そもそもそんな距離に近づこうとは思わない。

レティさんが相手だから、素直に体を預けられるんだ。

それを思えば、レティさんがぼくを傷つけようとするなんて、考えられないな。

「そんな事、考えたこともありませんでした。でも、レティさんはそんな事をしないって信じてますから」

「そうだよ。ユーリ君ならそう返すよね。あーほんと可愛いなあ。食べちゃいたいくらいかも」

「食べられたら、レティさんと会えなくなってしまうので、それは嫌です。……」

「心配する所そこなの? でも、嬉しいよ。ユーリ君には楽しませてもらってばかりだね」

レティさんはそんな事を言うけれど、ぼくだって楽しませてもらっているから。

それに、レティさんに貰った恩を考えれば、楽しくなかったところで何の問題もない。

でも、レティさんが楽しんでくれているのなら、恩返しにもなっているのかな。そうだと嬉しいけれど。

「レティさんに楽しんでもらえているのなら、嬉しいです」  
「じゃあ、私も楽しませてもらっていいかな、ユーリ君?」

アリシアさんはそんな事を言う。一体何をするつもりなのだろうか。

まあ、アリシアさんが楽しいのなら、大抵のことは受け入れるつもりではあるけれど。

「どうぞ。ぼくは何をすれば良いんですか?」

「まずは肩でも揉んでもらおうかな。弟子なんだし、いいよね？」  
たしかに弟子の仕事ってイメージがある。

そういえば、アリシアさんたちには弟子として使えばしりみみたいなことをされなかった。

アリシアさんたちを尊敬していた理由の1つだったりしてね。

まあ、多少便利に使われたくらいで、どうとも思うことはないか。それこそ、奴隷のような扱いなら反発を覚えるかもしれないけれど。

アリシアさんたちがそんな事をするイメージは浮かんでこないな。それはさておき、アリシアさんの肩をゆつくりと揉んでいく。

ユーリヤにマッサージした経験もあつて、ある程度どうすれば良いのかは分かる。

それに合わせて、アリシアさんの反応を見ながら動きを調整していった。

「うん。気持ちいいよ、ユーリ君。そんなにうまいのなら、他の所も揉んでもらおうかな」

そう言つてアリシアさんはうつ伏せになっていく。

とりあえず、背中から揉み進めていく。アリシアさんの体はしなやかで、やはり素早い動きができる人なんだって感じた。

次に、手にマッサージをしていく。アリシアさんの体がほぐれるように、真剣におこなつていった。

「太ももとか、お尻とかもお願い」

そのままアリシアさんの太ももを揉んでいく。ちよつとドキドキするけど、アリシアさんの体に不具合が出ないように、ちゃんと進める。

そして、お尻にまで手を進めた。そういえば、以前アリシアさんのお尻に触れた事件があつた。

それを思い出してしまつて手が止まつたけれど、無心になつて続けていった。

アリシアさんの全身をほぐし終わると、アリシアさんは立ち上がつて体の調子を確認していく。

以前よりもっと動きが洗練されているかもしれない。ちよつと体術を見ていただけだけど、そう感じた。

「なかなか良かったよ。またお願いしようかな？ それとも、私もお返ししてあげたほうが良いかな？」

「いえ、弟子の役目ですから。それに、アリシアさんが喜んでくれるのなら、それで十分です」

「ふふつ、私達は良い弟子を持ったものだ。見限られてもいいって言ったかもしれないけど、あれは嘘だ。そんな事になったら、私は私を許せないよ」

「そうかもね、アリシア。でも、ユーリ君なら大丈夫だよ。だから、これからもずつと一緒にいようね」

ぼくの方からお願いをしたいことを言われて、何度もうなずいた。

本当に、この人達との出会いこそが、冒険者としてのぼくのほとんどなんだろう。

だから、ずつと尊敬し続けるに決まっている。アリシアさんの心配なんて、吹き飛ばしてみせるから。

## 121話 競争

今日はミーナたちと訓練をしていた。久しぶりに手合わせしたけど、ミーナはとても強くなっていた。

もう、アクア水かミア強化の片方だけで身体能力を上げているだけでは勝てない。

両方使ってしまったえば余力はあるのだけれどね。

それでも、ミーナといい勝負ができるようになってきたという事実が嬉しい。

とはいえ、本気になって負けてしまったら悔しいから、もっともつと訓練をするつもりだ。

ヴァネアも大分強くなってきている。

ミーナとヴァネアの二人がかりでかかってきた時は思わず本気になってしまった。

殺し合いになったならば、アクア水で使える手札がある限りぼくが勝つと思う。

でも、手合わせの範囲なら普通に負けることもあるだろう。それくらいには強かった。

ただ、昔はミーナ1人と互角だったんだよね。ぼくが突然強くなっただけで、ミーナが弱くなったわけではない。

それを思うと、未だに寂しさはある。あの競い合った日々は本当に楽しかったから。

でも、今は今で楽しみ様があるよね。そこは嬉しいところだ。

ミーナもヴァネアも晴れやかな顔をしているので、以前のように仲違いはしなくて済みそうだ。

ほんと、ミーナに真剣を突きつけられた時は悲しかったからね。

それだけ、ミーナがぼくとの時間を大切にしてくれていた証ではあるとはいえ。

訓練を十分にこなせたと判断して、ぼくたちは家へと帰っていった。

いい感じの疲れが体に残っていて、しんどさと心地よさが同居して

いる。

ミーナたちもぼくと似たような感覚を味わっている様子だ。冒険での疲れと違って、充実感のほうが大きいな。

なんというか、冒険の時は気疲れもするからね。訓練は楽しさのほうが大きい。

まあ、冒険はいくら弱い敵でも、命の危険があるからな。

純粹に実力を確かめるという意味では、訓練のほうが楽しいのは当たり前か。

冒険でもない、ミーナたちと協力するのは難しいけれどね。

ミーナたちと力を合わせる感覚も楽しいから、できればもつと安全な形で楽しみたいものだ。

しばらくしてぼくたちの家に帰ってきた。

この家も、オーバースカイがみんな住むようになったよね。

最初に見た時から広いとは思っていたけれど、この人数が住んで空き部屋があるというのがすごい。

なんというか、数字で広さを実感できたというのかな。ただ広いと感じていたものに形が付いた気がする。

ぼくたちは空き部屋に入って、今日のことを振り返りながら雑談をしていた。

「ミーナも随分強くなったよね。ぼくは純粹な努力で手に入れた力とは言いがたいけど、ミーナの強さは努力の証って感じだよね」

「ユーリがアクア水を使いこなしているのは、間違いなく努力の証だと思うよ。ミア強化は、よく分からないけれど」

ミア強化は単純にぼくの身体能力を高めるもので、工夫の余地もあまり無い能力だからね。

だから、努力が目に見えづらいというか。体を部分的に強化するっていうのも、普通の発想だし。

アクア水は頭を使えば使うほど成果が出るので、その辺は違いを感じる。

とはいえ、ミア強化だって、始めの頃は全然使いこなせなかったか。なんというか、ミア強化がミーナとの差がついた原因なので、

ちよつとずるに思えてしまうだけなんだけど。

お互い契約技が1つなら、対等って感じがしたんだけどね。まあ、ミアさんに感謝しているのは事実。

ミア強化を貰わなければよかったなんて、考えたことはないし。そんな事を考えていたのなら、ぼくは人でなしだよ。命まで捧げてもらっておいで。

まあ、ミーナと対等に戦いたいという思いは今も変わっていない。ぼくにとつてとても楽しい時間だったから。とはいえ、ミーナに努力を押し付けることはできない。

それに、ぼくが手加減するというのもミーナに失礼な話だから。

難しい問題ではあるけれど、いつかまた、あんな時間を過ごせたら良い。

口にだすのは問題があるかもしれないけれど、願うだけなら自由だよ。

「アクア水は使えば使うほど新しい扱い方を思いつくのが楽しいんだよ。だから、そこまで努力している気もしないかな」

「僕の剣技も同じさ。誰よりも楽しんでいたからこそ、相応の時間を費やせた。だから、ユーリに負けたことがとても悔しかったんだ。危ないと分かっているけど、ヴァネアの言葉を受け入れるほどに」

「そのおかげでアタシはミーナと契約できたんだから、坊やには感謝しないといけないよね。今が楽しいのも、ミーナと出会えたおかげなんだから」

その話を聞く度に感じるけれど、本当にミーナとヴァネアはお互い幸運だったよね。

ミーナは他の人型モンスター相手なら、命すらも危なかっただろうし。

ヴァネアは普通の冒険者にそんな話を持ちかけても、普通に殺されていただろうし。

ぼくがその出会いに貢献できているというのなら、とても嬉しい話だ。

ぼくはミーナもヴァネアも大好きだから。出会えてよかったと

思っているから。

「ミーナの軽率な行動は、ちよつと心配ではあるけれど。でもそのおかげでヴァネアと仲良くできたんだから、感謝するのはぼくもだよ」  
「はつきり言つて愚かな行動ではあつただけだね。でも、ヴァネアと契約できたことはとても良かった。契約技も、ヴァネア本人も、僕にとつてとても大切な存在になつているから」

「アタシですらミーナの行動はどうかと思うわよ。でも、そのおかげで今がある。この運命には感謝だけじゃ足りないくらいよ」

今更だけど、そもそもどうしてヴァネアは人と仲良くしようなんて考えたのだろう。

ミーナの剣技に惚れ込んだとは出会つた時に言っていたけれど。

それくらいで人と仲良くできるものなのかな、人型モンスターつて。

ぼくがこれまで敵対してきた人型モンスターは、どれも狡猾で悪意に満ちていた。

まあ、そこを気にしても仕方ないか。ヴァネアが特別つてことはいよね。

「ぼくたちの出会いって、なんとというか幸運にすごく恵まれているよね」

「まいったくだ。だからこそ、僕は君を運命のライバルだと思つたんだから」

「そうね。ボタンを1つかけ違えていたら、きっと今の関係にはなれなかつたわ」

ぼくたちが仲良くなれなかつたのかならまだ良いけれど、ミーナもヴァネアも死んでいた可能性が想像できてしまう。

それだけに、今ミーナたちと過ごせることはとてもありがたい。

この偶然が導いてくれた出会いには、本当にぼくに色々なものをくれたから。

「それにしても、ミーナもヴァネアもよく2対1でぼくに挑もうつて気になったよね。嫌だつたつて言いたいわけじゃないんだけど」

口に出して思つたけれど、なにか心境の変化でもあつたのだろうか

か。

正直、2人がかりで以前競い合っていた相手に負けるとか、シヨツクが大きそう。

でも、ミーナもヴァネアも晴れやかな表情をしていた。

なんというか、今までのミーナなら、とても受け入れられないような気がする。

なにせ、ぼくに置いていかれたくなって、あんな事件を起こしたのだし。

「正確にユーリとの距離を測れないことには、追いつくための道筋を組めないからね」

「それに、坊やに退屈させたくなかったのよ。弱い相手に合わせるのって、しんどいでしょう?」

ぼくはそれにどう回答すれば良いのかな。

まあ、ちよつと気を使っている部分はあつたけれど。

それでも、ミーナやヴァネアと一緒になら楽しいと思っていたんだよね。

結局、1人ではつまらないことも、大切な人が相手なら楽しいというか。

だから、ヴァネアの心配は杞憂ではあるんだけど。

「ミーナたちという退屈だと思つたことはないよ。だから、そんなふうに気を使わなくていいのに」

「そっか。僕は初めから間違えていたんだ。ユーリはずっと僕を大切に思ってくれていた。それを見失っていたんだね」

「あの時のこと? もう気にしなくていいよ。それよりも、今ミーナたちと楽しく過ごせている方が大事だからね」

「それでも、謝らせてほしい。ごめん。僕は結局、ユーリを信じきれないなかつたんだ」

そう言われればそうかもしれないけれど。

でも、ミーナの気持ちは分かる気がするから。大切な人に置いていかれる恐怖はね。

まあ、ミーナに疑われていたことは悲しいけれど。



だけど、しょうがないよね。短い時間しか一緒にいなかった。それは事実だから。

それで全面的に相手を信じるなんて、ぼくだってできないと思うよ。

ぼくとミーナでは疑い方が違っただけなんだろうね。

「うん。なら、これからもぼくと仲良くすること。それが許す条件だから」

「ありがとう、ユーリ。僕自身の言葉で謝れたおかげでスッキリしたよ」

「坊やは甘いといえば良いのか、優しいといえば良いのか。でも、そんな坊やだからこそ、仲良くしたいのよね」

まあ、殺されかけておいてこの対応は、甘いかもしれないけれど。でも、厳しい対応でミーナたちを傷つけたいわけじゃないから。

これが敵だったのなら、許さなかったとは思うけれどね。

だけど、ミーナはこれからだって仲間なんだから。だから、これでもいい。

「それで、これからどうするの？ なにか遊ぶ？」

「いや、ゆっくりしておこう。ユーリとの訓練は楽しんだから、後は何気ない会話だよ」

「そうね。坊やも疲れちゃうわよ。これから遊んだりなんかしたら」

それもそうか。それに、ミーナたちとなら、何気ない時間も楽しいに決まっているからね。

「そうだね。ミーナたちには、何かこれからの目標ってあるかな。ぼくは、みんなと交流を深めることかな」

冒険者として頂点に立つという目標、これはほとんど達成できたと考えていいだろうし。

だから、みんなと過ごす時間を増やしたい。これがぼくの本音だと思う。

「僕たちは、いずれユーリに勝つことかな。まずは2人がかりだとしてもね」

「そうね。いずれは、アタシたちどっちも1人で勝ちたいものだけれ

どね」

「そう簡単には負けないからね。ぼくだって、できれば負けたくないんだ」

「負けて悔しがるユーリだからこそ、勝ちたいんだよ。だから、待って  
いてくれ」

「同感だわ。坊やの悔しそうな顔、きっと楽しい思い出になるわ」

2人に負けたら、それはとても悔しいだろうけど。

それでも、さらなる奮起の材料になると思う。

これからも、ずっと2人と競い合っていけたらいいな。

## 122話 実感

今日はメルセデスたちに頼まれて、彼女たちの冒険を後ろで見ている。た。

限界ギリギリまで手出しはしないでほしいという事だったけど、特に問題はなかった。

メルセデスたちの成長を感じられたことはとても嬉しい。

だけど、メルセデスたちに教えることがもうあまり無いと考えてしまい、少し寂しさがある。

あの弱かったメルセデスたちがここまでになった。

ぼくはもともと弱かったけど、強くなれたのはオメガスライムであるアクアのおかげだ。

それに引き換え、メーテルはただのハイスライムだからね。

だからこそ、メルセデスたちがどれほどすごいのがよく分かる。

ぼくもハイスライムを敵にしたことはあるけれど、とても弱かったからね。

そのハイスライムであるメーテルもとっても強いと感じられるくらいなんだ。

それに、もともとメルセデスの契約技は模擬剣すら防げなかった。

それが今では壁として安心して後ろに入れるほどの強度になっている。

メルセデスたちがどれほど努力したのかなんて、考えるまでもないよね。

メルセデスたちはもうどこに出しても恥ずかしくないほどの冒険者だ。

だから、オーバースカイから飛び出そうとしてもおかしくはないと考えていた。

でも、その考えを察したらしいメルセデスに怒られたんだよね。

それでとても反省した。ぼくはメルセデスたちを疑っていたんだもの。

ぼくとメルセデスたちの絆は本物だ。改めて、そう信じることにし

よう。

今は冒険を終えて、ぼくたちの家に帰ってきたところだ。

メルセデスたちはこの家に住んでいることが感慨深いようで、何度も家を見ながら頷いていた。

何故今更そんな事をするのか分からなかったけれど、そういう気分するときもあるか。

そういえば、この家はステラさんがぼくの先生だから使えるようになったんだよね。

そもそも、ぼくたちがカーレルの街へ来たのもステラさんに誘われたからだけれど。

それを考えたら、ステラさんにはどれほど感謝しても足りないかもしれない。

この街に来る前に起こったミーナとの出会いも、ステラさんあつてのものだし。

まあ、それは今は考えなくてもいい。目の前のメルセデスたちを見るのが大事なはず。

メルセデスたちは2人で冒険者として活動しても十分活躍できるだろう。

でも、オーバースカイの一員であることにこだわってくれている。だからこそ、オーバースカイの中で役割をちゃんと持たせてあげたい。

純粋に個人で考えるとメルセデスはぼくの、メーテルはアクアの役割と被っている。

なので、ぼくたちがいればメルセデスたちが必要ないという状況がどうしてもあるのだ。

ぼくたちと協力して手数を増やす、チームをいくつかに分ける。それだけが役割だともつたないと感じるのだけれど、他には思いつかないな。

まあ、ぼくだけで考えないといけなわけではない。本人たちに聞いてみるのも1つの手か。

でも、そんな事を聞いてしまって大丈夫だろうか。

メルセデス達はぼくたちより一回り下だと伝えるようなものだよね。

そうだな、ちよつと関係のある話から反応を見ながら近づけていくか。

「メルセデス達は、どんな冒険者になりたいのかな？ 聞かせてほしいな」

「もちろん、ユーリさんに次ぐ世界で2番目のスライム使いになることつす！」

「私も、アクアさんの次に強いスライムになることかしら」

メルセデスたちは元気にそう言う。ぼくを立てようとしてそのセリフを言っているという感じではないな。

なら、さつきまでの考えは杞憂かもしれない。

ぼくたちと同じ様な役割を持つことに、むしろ誇りを感じる可能性だつてある。そう見えた。

それがメルセデスたちの願いだとすると、ぼくの技術をメルセデスたちに託すというのも良いかもしれない。

すでにある程度は教えているし、それで1人前になっている。

でも、その程度じゃなくて、もっとぼくに似せるといふ考えもあるつてこと。

ちよつとワクワクしてしまうけれど、まずはメルセデスたちの意見を聞いてからかな。

「それなら、メルセデスたちにもつと色々教えていいかな？ 冒険者としていろんな局面で役に立つことをこれまで教えてきたけど、単純にぼくの技を教えるのもいいかなつて」

「そんなの教えてくれるんつすか!? ぜひ、ぜひお願いするつす！」

ユーリさんの技、どんなものか気になるつすよ！」

「なら、私はアクアさんに教われれば良いのかしら？」

「メーテルにもぼくがある程度教えられると思うけれど、アクアの予定が合えばそうしようか」

「ユーリちゃんなら、アクアさんのことは理解しているはずよね。なら、ユーリちゃんに教わるのも良いかもしれないわね」

メルセデスたちは乗り気なようだ。今すぐというわけではないけれど、これから色々教えることになる。

それを考えると、胸の奥が暖かくなるような気がした。

メルセデスたちをぼくに染められるって言うのと、ちよつと言い方に難があるかもしれないけれど。

でも、そういうことだよ。ぼくの技を受け継いでくれると言っても良いのかな。

何にせよ、これからは楽しみだ。1人前になったメルセデスたちとは少し離れてみるのが良いと思っていたけれど、やっぱり寂しかったから。

「じゃあ、つぎの訓練の時までに考えをまとめておくよ。それにしても、嬉しいな。ぼくの技術をもっとメルセデスたちが覚えてくれることは」

「それを嬉しいと感じてくれるから、ユーリさんは尊敬できるっすよ。冒険者にとって、技つてのは飯の種っすからね。隠すのが普通と言つていいっす」

そうだとすると、アリシアさん達にはますます感謝しないといけなくなる。

まあ、今はその分をメルセデスたちに返すというか、次につなげていきたい。

アリシアさんたちだって、ぼくが良い師匠となることは嬉しいと感じてくれるはずだから。

「それでも、今は仲間なんだから、メルセデスたちの成長はぼくたちの役に立ってくれるよ。それに、ぼくはメルセデスたちが弟子になってくれて嬉しかったから」

「ユーリさんが師匠になつてくれなかったら、あたい達はここまで強くなれなかったっす。だから、ユーリさんのお役に立てるよう、頑張るっすよ」

「そうね。ユーリちゃん、初めは私達の弱さに呆れていたのに、それでも信じて育ててくれたんだもの。その恩は相当なものよ」

ぼくがメルセデスたちを弱いとみなしていたこと、気づかれていた

のか。

だとしたら、それでもちゃんと尊敬してくれるメルセデスたちに感謝したい。

ぼくだったら、下に見ていると感じている相手を師匠にしたいかないからね。

アリシアさん達は、大体いつでもぼくたちを褒めてくれていたな。その時ぼくたちはアリシアさんたちよりずっと弱かっただろうに。

ぼくも、メルセデスたちにとってのぼくは、ぼくにとってのアリシアさんたちのように居たい。

だからこそ、これからもしっかりとメルセデスたちを見守っていくんだ。

メルセデスたちがまだまだ成長できるように。そして、幸せな未来をつかんでもらえるように。

「無理はしないでね。メルセデスたちに何かあったら、それが一番嫌だから」

「わかっているつすよ。ユーリさんを悲しませるつもりはありません。だから、安心して見ていてくださいね」

「そうね。メルちゃんも私も、ユーリちゃんが大好きだから。こんなに心配してくれる人なんだもの」

メルセデスたちから嘘の気配はしないから、きつと大丈夫だろう。

それにしても、師匠というのは責任重大だ。ちゃんと間違った方向へいかなないように誘導するだけじゃない。

ぼくの姿を見て、こんな風になりたいと思ってもらわなくちゃいけないんだ。

幸い、メルセデス達はもとからぼくに憧れていてくれたけどね。

だからこそ、不適切な行いを学ばせてはいけない。

メルセデスたちなら、きつとぼくの過ちからでも学んでくれるだろうけれど。

だからといって、それに甘えるわけにはいかないからね。

「ぼくも2人のことが大好きだよ。だからこそ、幸せになってほしいんだ」

「大丈夫つすよ。ユーリさんがいてくれるなら、あたいたちは幸せつすから。信じてくれる人がいる。それだけで、こんなに幸福があふれてくるんすよ」

「メルちゃんほどではないけど、私も似たような気持ちよ。スライムも、スライム使いも、軽く見られるばかりだから」

今のメルセデスたちならば、そんな風に見るほうがおかしいだろうけれど。

でも、それで不躰な視線で傷つかなくなるわけじゃないからね。

守れる範囲で、ぼくたちでメルセデスたちのことを守ってあげたい。

まあ、メルセデスたちだって、自力で乗り越えられるかもしれないけどね。

「メルセデスたちを軽んじるような人、ぼくなら許せないな。でも、今なら尊敬もされるんじゃないの?」

「まあ、そういう時もあるつすけど。でも、これまでバカにしてきた人に褒められたって、そこまで嬉しくないつすよ」

「スライム使いなんて冒険者に向いてないって言われたものね。ユーリちゃん存在を知っているのに」

ぼくの知らないところでそんなことが。メルセデスたちがオーバースカイに入るまでの間、2人で活動していたときかな。

改めて、ぼくは幸運というか、人に恵まれていた。

カタリナは何度でも助けてくれた。ステラさんは良き理解者だった。

アリシアさんたちも、サーシャさんも1人の冒険者として向き合ってくれた。

ぼくは冒険者としてずっと幸せだったんだ。

だからこそメルセデスたちには、これからたくさん幸せを感じてほしい。

そのためにぼくにできることは何だろう。メルセデスたちを肯定してあげるのは当然のこととして。



その手本は周りにいっぱいいるから、そこから学んでいけばいいか。

「メルセデス、メーテル、ぼくと出会ってくれてありがとう。そんなつらい目にあっていたのに、それでもオーバースカイの仲間になってくれた。それが嬉しいんだ」

「ユーリさんってば、それはこっちのセリフっすよ。弱っちゃったあたいたちを暖かく見守ってくれて、オーバースカイに迎え入れてくれて。これからも、ユーリさんはずっとあたいたちの目標っす！」

「そうね。冒険者としての喜びは、全部ユーリちゃんのくれたものよ。だから、ずっと一緒にいましょうね」

メルセデス達は明るい顔でそう言ってくれた。

うん。メルセデスたちが尊敬できる人であり続けるために、ぼくも頑張るから。

だから、これからもよろしくね、2人共。

## 123話 大切

今日はハイデイに誘われて、カーレルの街にあるハイデイの別荘へと来ている。

ハイデイがこの町に来ることが多くて、ぼくとしてはとても嬉しい。

とはいえ、一応王女様ということになっているハイデイは忙しくないのだろうか。

無理をしてこちらに来てはいないか、少し心配になってしまう。

ハイデイたちに会えるのは嬉しいけれど、それで苦しい思いをしてほしくはないんだ。

まあ、杞憂の可能性もあるし、心配の押しつけも迷惑な話ではある。

ハイデイたちになにかあったら全力で手助けするけれど、政治の話はわからないから。

何かぼくが手伝おうとしたところで、王族特有の悩みなら足を引つ張るだけかも。

直接頼まれたら、大抵のことはするつもりではあるんだけどね。

ハイデイとリデイさんとイーリスの3人でこちらに来ることが最近が多い。

昔は、ハイデイだけで来ることも珍しくはなかったけれど。

ぼくの知らないところで、3人の仲が深まっているとかだろうか。

まあ、近衛なんだから、もともとある程度は親しいような気もするけどね。

王族絡みのことは全然知らないの、実は最近までちゃんと話をしていたなかったとか？ まさかね。

それはいいか。それよりも、この屋敷に来るのは何回目だろうか。その回数だけハイデイたちの誰かと過ごしていたことになるけれど。

結構来た覚えがあるけれどね。それだけハイデイたちと一緒にいるってことになる。

ぼくがハイデイたちに親しみを覚えるのも納得できるだけの交流

があるんだよね。

オーバースカイの仲間みたいにだいたい毎日顔を合わせる相手が多いから、感覚が麻痺しているだけで。

部屋に入るとすぐにリデイさんがお茶を用意しに動いてくれて、ハイデイがこちらに寄ってくる。

なんというか、いつもより距離が近いな、ハイデイ。

テーブルを間に挟むくらいの距離が普通だったような気がするけれど。

今はほとんど触れそうなくらい近くにいる。隣同士だし、このまま腕を組んでもおかしくないかも。

まあ、お茶を飲みながらそこまで近づいたら変か。だから、単に近づいているだけなのかな。

「ユーリ殿、殿下、イーリス。お茶と茶菓子を持ってきました。ごゆっくりどうぞ」

リデイさんが用意してくれたお茶を飲む。今日はいつもよりぬるい気がする。

なんだろう。そういう温度が良いお茶とかあるのだろうか。よく分からないけれど。

でも、おっかなびっくり飲まなくて良いのはありがたいかもね。

個人的には、これくらいの温度のほうが飲みやすいと感じる。

「今日のお茶はだいぶ口当たりが良いですね」

「ユーリ殿もある程度味がわかるようになった様子。これからも、ユーリ殿の舌は鍛えられていくはずですよ」

リデイさんは落ち着いた雰囲気ですんわりと微笑んでいる。

お茶とお茶菓子の味もあって、本当に落ち着いた心地になれる。

リデイさんの柔らかい態度からは、近衛としての強さを想像することは難しい。

戦いとなつたらとっても凛々しい感じで、かつこいい人なんだけれどね。

それにしても、リデイさんの物言いからは、これから何度もお茶を用意してくれると感じ取れる。

これからもリデイさんと親しくしていけるのならば、嬉しい限りなんだよね。

「せっかくリデイさんが用意してくれるお茶ですから、最大限に味わいたいものですね」

「それは嬉しい言葉です。小生のお茶を喜んでくれるユーリ殿ならば、もっと色々を用意したくなるのですよ」

なんだろう。他の人は喜んでいなかったりするのだろうか。

まあ、それを聞いても空気を悪くするだけだろうから、お礼を言うだけでいいか。

「リデイさんが用意してくれるのなら、喜んで飲みますよ」

「ふふ。ユーリ殿は素直ですね。そこが可愛らしくもあるのですが」

そんな言い方をされると恥ずかしい。リデイさんが温かい目をしているから余計にだ。

とはいえ、お茶もお茶菓子もなくなってしまったので、ゆっくりくつろぐことにする。

すると、ハイデイがぼくの右手の上に左手を重ねてきた。

思わずハイデイの方を見るけど、ハイデイは幸せそうな顔をしていて、何も言う気にはなれなかった。

ハイデイもこんな顔をするようになったんだな。ついそう感じてしまう。

これまでのハイデイは、ずっと冷たい表情をしているイメージだったけれど。

ときどき笑う時も、なんとというか余裕を崩さない感じとか。

今のハイデイは絶対者のアーデルハイドと同一人物って感じはしないな。

でも、ハイデイが幸せそうにしていることが、ぼくはとても嬉しい。しばらくのあいだ手を重ねていたけれど、それから手を離れたハイデイは腕を組んでくる。

そして、ぼくの肩に頭をあずけてくるのだ。ついドキドキしてしまうけれど、せっかくハイデイが嬉しそうだから。

だから、ぼくはハイデイのことをすべて受け入れていた。

ぼくの頬に手を添えることも、ぼくとハイデイの頬どうしをすり合わせることも。

しばらくハイデイにされるがままになっていると、満足気になったハイデイが離れていく。

つい名残惜しさを感じて、少し手を伸ばしてしまった。

すると、ハイデイがいつもみたいな調子で笑い始める。

「くくっ、そんなに余のそばが心地よかったか？ 可愛いものだな、貴様は」

さっきまでのハイデイのほうが可愛らしかったと思うけれど。

でも、そんな事を言っただけでかかっていると思われてもね。

せっかくハイデイが幸せそうなのに、それを邪魔したくない。

なんとなく、ハイデイには暗い陰のようなものがある気がしていたから。

「ハイデイが魅力的なのは確かだと思うよ。だから、心地よかったのは事実だけど……」

「そ、そうか。貴様も言うようになったものだ。だが、余が魅力的なのは当然だな」

「うん。そうだと思う。ハイデイの騎士としての生活も、きつと素晴らしいものだと思うくらいにはね」

「ならば、いずれ余のものになるのだ。貴様になれば、余のすべてをかけて幸福をくれてやろう」

ハイデイの言葉には、とても惹きつけられる。

一度みんなに相談してみたいな。冒険者としての生活には満足しているけれど。

でも、ハイデイたちを含めたみんなですつと一緒にいる。そんな生活はきつと最高だから。

今はハイデイたちがこつちに来ないと会えないからね。

だから、今では本気でハイデイの騎士って生活もいいと思えるんだ。

「ハイデイたちがそばにいてくれるだけで、ぼくは十分幸せになれると思うけれど。でも、ハイデイの気持ちは嬉しいよ。ありがとう」

「そうだな、貴様はそういうやつだったな。だからこそ、余は……」  
ハイデイは言葉に詰まっているのかな。

一体何を口にしようとしたのだろう。まあ、言いたくなったら言うだろうから。

無理に聞き出すこともないよね。つらそうな顔をしているわけでもないし。

むしろ、なんとなく幸福を感じる顔だ。ぼくがハイデイを幸せにできているのかな。だったら嬉しいけれど。

「ユーリは珍しいやつだよな。俺もユーリみたいなやつは初めて見た。オリヴィエ様が好むのも分かる気がするぜ」

「イーリス、貴様……！ いや、よい。イーリスにその様な配慮を求めるほど、余は愚かではないのだからな」

「なにか悪いことを言っちゃったか？ すまねえな、オリヴィエ様。次から気をつけるよ」

「貴様にそのようなことは期待しておらん。だが、口を慎めよ」

「今日はもう黙っているよ。それでいいか？」

「まあ、良いだろう。それで、ユーリ。貴様は余になにか求める気はないのか？ 余ならば、大抵のことは叶えられるぞ」

はつきり言ってしまうば、もっとハイデイと会いたいってくらいか。

お金には特に困っていないし、名誉だって面倒なことのほうが多そうだ。

ハイデイたちと一緒にいて面倒じゃないのかって話は、ハイデイたちが大好きだからで済む。

仮にハイデイたちに迷惑をかけられたとしても、大抵のことは許せそうだ。

「できれば、ハイデイたちとの時間をもっと増やしたいな。一緒に住むことができれば、それが理想なんだけど」

「ならば、余がステラの家に暮らしてやろうか？ 貴様が本気で望むのならば、それくらいはするのだぞ」

「殿下がそうすると決めたのならば、小生も付き従うまで。ですが、

ユーリ殿と一緒に暮らすというのは、とても楽しそうですね」

「でも、王族としての仕事とか、大丈夫なの？」

「余の意思を伝えるための手段ならば、すでにある。それに、余はその様な立場にこだわりはないからな」

ハイデイが良くても、ハイデイが裏からこの国を支配していたことを考えれば、大変なことになりそうだ。

でも、その時の大変さを考えたとしても、ハイデイたちと一緒に暮らすことは魅力的だ。

できれば、うまくスムーズにハイデイたちと過ごせるようになってほしいものだけれど。

「ハイデイはずっとこの国を自分のものって言っていたのに、それでいいの？ ハイデイに無理してほしいわけじゃないからね？」

「余にとってアードラよりも大事な存在が見つかったと言うだけだ。気にせずとも良い」

「そうですね。小生としては、オリヴィエ様の願いより優先すべきものはありませんから」

つまり、ハイデイはアードラを支配するよりも、ぼくと一緒に過ごすことのほうが大事なことだね。

それはとつても嬉しいけれど。でも、それで良いのかな。

ぼくにはあまりハイデイにいい暮らしをさせられるか分からない。

もしハイデイが生活の違いでつらいと感じるようなら、それは嫌だから。

こういう時にどう答えれば良いのだろう。やっぱり、ぼくはまだまだ未熟だな。

「それでハイデイたちが幸せになってくれるのなら、ぼくから言うこととはないけれど。でも、無理はしないでほしいな」

「余を誰だと思っている？ ただの人間からアードラの支配者となつたアードルハイドだぞ。貴様の懸念など、軽く吹き飛ばしてやろう」

「そうですね。騎士として生活していた以上、小生も粗食には慣れて

います。心配しなくとも、大丈夫ですよ」

「ならいいけど。一緒に住む準備ができたなら、歓迎するからね」

「ああ。楽しみにしておくがいい。王宮のことなら心配無用だ。アクアとも協力する予定だからな」

アクアと協力して何をするつもりなのだろう。まあいいか。

ハイデイたちはとても明るい顔をしている。だから、うまくいく算段があるのだろう。

これからは、ハイデイたちとも一緒に過ごせる時間が来る。それは、すごく嬉しいことだから。

「ありがとう、ぼくの願いを叶えてくれて。おかげで、もっと幸せになれるそうだよ」

「余も同じ考えだからその提案に乗っただけのこと。気にせずとも良い」

「そうですね。小生たちも、ユーリ殿との時間を大切に想っているのですよ」

ああ、それは本当に喜ばしいな。ハイデイたちと同じ家に住む時間を楽しみにしよう。



## 124話 真実

今日はステラさんに時間を取ってもらっている。ステラさんに相談したいことがあったからだ。

でも、まだその勇気が出てこない。

たぶん、この話から嫌な予感を感じているからだと思う。

それでも、ぼくにとっては大きな何かが起こる気がしているのだ。

ステラさんからも感じているんだけど、何かぼくの周りの人たちの様子が、最近変な気がするのについての話がしたい。

それで、ステラさんと2人きりになっている。

後は言葉にするだけでいいのに、なかなか口からそれが出てこない。

本当にこの内容を相談してしまっていないのか。ずっと悩んでいるんだ。

そうして言葉に詰まっていると、ステラさんの方から話しかけてくれた。

「ユーリ君、最近元気になっていますか？ サーシャさんと一緒に過ごした時には、問題ないように見えましたけれど」

「はい、大丈夫です。冒険者になってから、体調を崩したことはないですから」

「そうなんですね。それは素晴らしいことです。冒険者は体が資本ですからね」

本当にありがたい限りだ。ぼくはずっと体調がよいと感じているからね。

例えば、今すぐ戦わなくちゃいけないのに、調子が悪い。そんな事態があったとする。

想像しただけでもとても嫌な展開だと言える。

ぼくの問題がないってことは、冒険者としてのぼくにとって、とても役に立ってくれている。

「ありがたい限りです。オーバースカイが上手くやっていけることにも関係していると思えますから」

「そうですね。安定して実力を発揮できるということは、仕事を振る側からしても計算に組み込みやすいですから。サーシャさんがオーバースカイを重宝している理由の1つかと」

「そういえば、ぼくが冒険者になった頃は自分で仕事を探すこともあるかと思っていた。」

「でも、オーバースカイはずっとサーシャさんに紹介してもらった依頼だけを受けている。」

「もしサーシャさんが居なくなったりしたら、大変なことになりそうだよね。」

「とはいえ、ここでサーシャさんと距離を取るのも問題があるように思えるけれど。」

「これまでずっとサーシャさんにはお世話になつてきたわけなんだし。」

「サーシャさんにはこれまでいっぱい助けられていますよね。オーバースカイが大きくなれたのは、サーシャさんの恩も大きいと思いますよ」

「なら、私が紹介した甲斐がありましたね。ユーリくんたちなら活躍できると信じていたから、サーシャさんに繋ぎをつけたわけですから」

「それを思えば、ステラさんには何度も助けられているよね。」

「やっぱり、ぼくの尊敬する先生だ。ステラさんが居たからこそ、ぼくはこの街に来ることができた。」

「そして、いろいろな人達と出会うことができたんだからね。」

「何度でもステラさんには感謝しているけれど、改めてもう一度。」

「ステラさんには、ミストの町に居た頃からずっと助けられていますよね。ありがとうございます」

「いいんですよ。その分の見返りというか、ユーリくんを手助けすることで、欲しい物が手に入れたので。指輪をユーリくんとかクアちゃんが使いまわしてくれたのも、その大きな1つです」

「ステラさんに貰った指輪には何度も助けられている。」

「ハイデイにユルグ家の指輪だと言われた時、貴重なものならばくに」

は渡さないはずだと思っていた。

1 財産を築けるほどのものだと言われても、半信半疑くらいだったけれど。

でも、指輪の効果を実感した今では、それにふさわしい道具だと思える。

ステラさんはずっとぼくに期待してくれていたんだよね。それが分かって嬉しい。

とはいえ、申し訳無さのような感覚もある。ぼくにここまでして貰って良かったのだろうか。

「ステラさんが喜んでくれたのなら、それでいいですけど。それでも、ぼくがもらい過ぎなような気がします」

「別に気にする必要はありませんよ。私にとって、ユーリ君はそれほど大切だというだけですから」

「ぼくにとってのステラさんも、とても大切な存在なんです。だから、ステラさんに損をさせているというのなら、受け入れられないんですよ」

「ありがとうございます。ですが、その心配は杞憂です。ユーリ君こそが、私の求めていた存在なんですから」

ステラさんにそこまで言ってもらえて嬉しいという気持ちはもちろんある。

でも、ぼくの何がステラさんに気に入られているのだろう。

人とモンスターの絆が見たいというのは何となく分かる。だって、指輪を使いこなすっていうのはそういうことだから。

それでも、ぼくとアクアの関係性。ぼくは当然最高だと思っているけれど。

ステラさんも同じように考えているってことなんだろうか。だとしたら、それは何故？

「ステラさんにそう言って貰えるのはありがたいですね。ステラさんの生徒として、立派で居たいと思っていましたから」

「それは嬉しいですね。ユーリ君に尊敬されているということは分かっています。でも、そこまで本気だとは思いませんでしたから。」

ですが、大丈夫ですよ。ユーリ君は私が自慢できる生徒です。これまで面倒を見てきた中で、間違いなく1番だと言いきれます」

ステラさんにそこまで思ってもらえているのか。感動で胸がいっぱいだ。

やっぱり、ステラさんを尊敬していてよかった。この人が先生で良かった。

ステラさんがぼくを見守っていてくれたからこそ、アクアを始めとした仲間たちと、ここまでの関係を築けたんだ。

「ステラさん……ありがとうございます。これまでの人生でも数えるほどの嬉しい言葉です」

「それは良かった。私はユーリくんが大好きなんですよ。だって、私が欲しいものは全部ユーリくんがくれましたからね」

ステラさんの欲しい物。指輪を使いこなすというステラさんとの約束は果たせた。

それ以外はなにがあるだろう。ステラさんが喜んでくれているのだから、ぼくが知る必要はないかもしれないけれど。

これが悲しませているのなら、何が何でも改善しないとイケないけどね。

「ステラさんが喜んでくれているのなら何よりです。ぼくがステラさんの役に立てている。喜ばしいことです」

「周りの人の期待に答えようとしすぎて、無理をしないでくださいね。ユーリ君になにかあったら、私は悲しいです」

「はい。ぼくは誰かを悲しませたいわけじゃないので。そこは抑えておきます。何より、ぼくが苦しんだらアクアが悲しみますからね」

ステラさんはぼくの言葉を聞いて、とても明るい笑顔になった。何かぼくの言葉が琴線に触れたのか、それともぼくをとっても心配してくれていたのか。

これまでそんなに問題を起こしたつもりはないし、前者かな。

「ユーリ君とアクアちゃんはとても素晴らしいパートナーとなっていますね。指輪を渡した甲斐があるというものです」

「当たり前ですよ。ぼくとアクアが最高の関係なんて。でも、ステラ

さんの指輪のおかげで、だいぶ関係が進んだと思います。そのことに  
お礼を言わせてください」

「そのためにユーリ君に指輪を渡したんです。だから、礼は必要あり  
ません。それよりも、アクアちゃんにちゃんと感謝は伝えていますか  
？」

「そのつもりではありませんけど、せっかくステラさんに言われたので、  
また改めてお礼を言うのもいいかもしれません。アクアには、何度感  
謝しても足りないくらいですから」

間違はなくぼくの本音だ。

アクアが居たからこそ今のぼくがいる。アクアだけは何があつた  
としても疑わない。そのつもりなんだ。

もしアクアがぼくの敵になるというのなら、そのまま受け入れて死  
んだっていい。

アクアが居ない人生は、今でも無意味に思えるのだから。

「それは何よりです。それで、ユーリ君は私になにか相談があるんで  
すよね？」

ステラさんには伝えていなかったけど、気づかれていたのか。

そうだな。ステラさんと話をしていて、だいぶ心が落ち着いてき  
た。

今なら大丈夫かもしれない。よし、勇気を出して。

「ステラさんは、最近みんなになにか違和感をおぼえていないですか  
？ 何となく、なにか様子がおかしい気がして」

「なるほど。私はその答えを知っています。ユーリ君。どうしても聞  
きたいですか？ その先に、何が待っていたとしてもですか？」

ステラさんの言葉は、ぼくの間と一致するものだった。

なにか嫌な予感がしているのだ。ぼくにとつての絶望が待ってい  
るかのような。

なぜかはわからない。分かっていたら、そもそもステラさんに聞こ  
うとしないとはいえ。

ずっと不安が消せなくて、それでも、この感覚を抱えたままだとな  
にか失敗してしまいそうで。

ぼくは冒険者だから、不安を抱えたまま戦うのが良くないというのは分かる。

だから、怖いけれど覚悟するしか無いんだ。

「はい。だって、ぼくが迷いを抱えたままなら、みんなに迷惑をかけてしまうから。そんな未来はゴメンです」

「いつでもあなたは誰かのために行動していますね。さて、それが吉と出るのか凶と出るのか。では、話していきますね。ミストの町に居た頃、私がユーリ君に質問をしたことがありましたよね？ エンブラの街での闘技大会の直後です」

確かにあった。あの時はぼくの契約技について質問されたんだっ  
たよね。

それで、アクア水はなにかおかしいのか考えていたんだっけ。

でも、すぐにステラさんは問題ないと言ってくれたよね。だから安心できたんだ。

そんな事を考えていると、ステラさんはさらに言葉を続けていく。「その時に私が何を疑っていたかというと、アクアちゃんがオメガスライムではないかということなんです。それで、ユーリくんに危害が加えられないか心配していたんです」

なるほど。アクアはたしかにオメガスライムだけど、それでぼくに危害が加わるなんてことはない。

つまり、そのあたりがステラさんの杞憂だったわけだな。

だって、アクアがぼくに攻撃やら何やらを仕掛けてくるなんてこと、あるわけがない。

でも、続くステラさんの言葉は、ぼくの予想を大きく裏切るものだった。

「それで、その晩に資料を調べていたのですが、その時にアクアちゃんが私のところに現れたんです。それで、アクアちゃんはユーリくん  
にアクアちゃん自身の正体を伝えさせないために、私の体を操っていた」

ちよつと待って。ステラさんは何を言っている？

アクアが、ステラさんの体を操っていた？ それはつまり、どうい

うことなんだ？

## 125話 困惑

「ステラさん、それって、えっ、は？ え？」

ステラさんはアクアに体を操られていたという。

それも、ぼくが冒険者になる前、ミストの町に居た頃からだと。

つまり、ステラさんに貰った指輪も、実はアクアが渡していたということなのか？

感情が上手くまとまらない。ステラさんが嘘をついているという可能性は？

いや、そんな話をして何のメリットがあるというんだ。

ステラさんだって、ぼくとアクアの仲を引き裂きたいようには見えない。

なら、本当の話だというのか？ それなら、何のためにアクアは？ いや、それはステラさんが説明していた。ぼくにオメガスライムだと気づかれたくなくてと。

つまり、ぼくに嫌われないために、ステラさんが犠牲になっていたのか？

ぼくのせいで、ステラさんが？ でも、今は解放されているんだよね。

それなら、良いのか？ いや、待て。ならば、おかしい点があるぞ。「ステラさんは、自分が指輪を渡したときつきまで言っていましたよね。前からアクアが体を操っていたんじゃないんですか？」

ぼくは今の質問になんと答えてほしいのだろう。

ステラさんに実は嘘だったと言ってももらいたい？ でも、それなら、ステラさんはぼくを騙そうとしていたことになる。

アクアが本当にそんなひどいことをしていたと思いたくないのか？

それはそうだろう。だって、アクアがそんな存在だとしたら。どうすればいいんだ？

「ユーリ君に真実を伝えるタイミングを見計らっていたので。だって、急に知ったら今よりもっと良くない状態になりますから」



ステラさんの言うことはおかしくはない。

それなら、たしかに隠そうとする理由としては納得できる。

だとすると、ステラさんはぼくとアクアの関係を崩壊させたくないのか？

でも、ぼくが体に乗っ取られていたとして、そんな風に思えるだろうか。

だって、自分の体を勝手に操作されていた。そんなおぞましい事態だぞ。

「ぼくに気を使ってくれていたんですか？　でも、アクアはステラさんにそんな事をしていたのに、どうして？」

「私だって、乗っ取られる直前は、ユーリ君とアクアちゃんは引き離れたほうが良いと考えていましたよ。だって、アクアちゃんはただの怪物とは思えませんでしたから」

当然の考えだ。自分の体に乗っ取ろうとする相手に、どうして好感を抱ける？

ぼくは、アクアに乗っ取られるのならそれでも納得するかもしれない。

でも、それはぼく自身がアクアに感じている情があるからだ。

ステラさんに、そこまでのアクアとの絆があったとは思えない。

だって、ただの教師と生徒、あるいは生徒の相方。そんな関係ではない。

でも、ステラさんは考えが変わったことをほのめかしている。

あまりにもひどいことをされておいて、それでも、アクアを認めるだけの理由があるのか？

ステラさんとアクアには良好な関係で居てほしいと思っていた。

だけど、今の状況でそんな事を考えて良いのか？　アクアの行動が真実なら、そんなの……。

「ステラさんは、アクアを許そうと考えているんですか？　ステラさんの言うことが本当なら、ぼくが同じ立ち位置なら、きっと許せない」「ユーリ君はアクアちゃんを信じたいんですね。それでも、私のことを疑えないでいる」

そんなの、当たり前だ。

アクアを信じなくて、ぼくは何を信じれば良いと言うんだ。

でも、ステラさんが嘘をついているようには見えない。嘘をつく人だとも思えない。

それなら、ぼくはどうすれば良いんだ。

いや、待て。そもそも、ステラさんだけなのか？ 他にも被害者がいるんじゃないのか？

ダメだ。そんな事を考えたら、もう終わりだ。でも、もう思いついてしまったんだ。

「ステラさんは尊敬する先生なんです。本当に。だから、だから……」  
「ええ。それは伝わっていますよ。でも、ユーリ君。私は嘘をついていません。そして、ユーリくとアクアちゃんの間関係を壊そうという意図もありません」

それって一体どういう心境なんだ。

アクアのしたことを恨んでいないのか？ それとも、恨みより優先すべきことがある？

ステラさんの状況を考えるだけでもつらいのに、もしかしたら他の人も操られていたのかもしれない。

それどころか、今でも操っている可能性すら思い浮かんでしまう。

ぼくの思い出は、全部アクアに作られたものだった？

それどころか、ぼくが紡いできたつもりのは、全部アクアの手のひらの上だった？

アクアだけは信じていないといけないのに、疑いの心を抱いてしま

う。  
ぼくは結局、アクアとの関係すらも、ちゃんとは築けていなかったのかな。

だって、アクアはオメガスライムだと知られたくらいで、ぼくに嫌われると思っていただけだよ。

ぼくの信頼は一方的なものだったのかな。だから、ステラさんは操られてしまったのかな。

「でも……アクアが犯していた罪は、許されるものじゃないでしょう。」

それでも、ぼくは……」

「ええ、アクアちゃんと離れたくないんですね。私はそれを許します。むしろ、ユーリ君とアクアちゃんにはずっと一緒に居てほしい」「ステラさんの大切な指輪を勝手に扱われてもですか……?」

「ユーリ君はその指輪を使いこなしてくれました。私はその光景が見たかった。だから、それで良いんです」

ステラさんは笑顔を浮かべているけれど。

それは本心を覆い隠した顔ではないのか？ 本当はぼくのことも憎いのでは？

ダメだ、疑心暗鬼になっている。でも、こんな状況を想定できるはずもないし。

ぼくはどうすればいいんだ。そもそも、どうしたいんだ。

何もわからない。何も。だれか、助けて。

でも、助けてほしいのはみんなかもしれない。

アクアに会いたい。会って、安心させてほしい。こんな夢なんだって。

「ステラさん、それは本音だと思つて良いんですか？」

「もちろん。心配しなくても、みんなユーリくんのが大好きなんですよ。他の人だって」

「他の人達も、操られていたんですか……?」

「そうですね。一度も操られていないのは、ノーラちゃんとシイちゃんだけでしょか」

カタリナまで操られていたのか!?

だとすると、カタリナにキスされる以前に抱いていた違和感は。だから、カタリナはぼくに何も分かっていないといったのか？

いや、でも、それならカタリナは解放されていたことになる。

喜んでばかりいられる話ではないけれど、少しばかりの救いかもね。

「みんな解放されたって考えて良いんですか？ それなら、最近のみんなの違和感は……!」

「ユーリ君の考えているとおりでと思いますよ。それまでみなさんが

アクアちゃんに操られていたから、行動がおかしく見えた。そういうことなんでしょう」

そんなことって……。

ぼくのこれまでの日々は何だったの？ みんなと仲良くできたと思っていたのは嘘だった？

いや、みんなが解放されてからも、ぼくと親しくしてくれた。だから、全部が嘘じゃないはず。

でも、みんなに申し訳ない。そんな事態になっていたのに、全く気がつかなかったことが。

それでも、ぼくにはどうしてもアクアを問い詰めることができそうにない。

だって、震えてしまうんだ。もしアクアと仲違いしたらって考えただけで。

アクアはきつと、討伐することが正しい化け物なんだと思う。

そうだとしても、ぼくにはそんな事はできないんだ。

アクアの居ない空虚な日々を考えるだけで、怖くて、つらくて、どうしようもない。

今でも本当はアクアがみんなを操っているのかもしれない。

みんな以外の人だって、被害にあっている可能性もある。

それに、解放されたみんながまた囚われることだって考えられるんだ。

それでも、アクアと敵対なんてできない。想像するだけでもダメだ。

いつか、アクアが世界を滅ぼす化け物だとしても離れられないって言ったっけ。

完全に本当だったな。ぼくはアクアがいないと生きていけない。

みんな、ごめん。アクアのせいで傷ついているのかもしれない。

それでも、ぼくはアクアをみんなより優先するよ。

嫌われても、敵だと思われたとしても、仕方のないことだ。

でも、無理なんだ。アクアを排除しようとするなんてこと。

「ステラさん……アクアは今でも、ステラさんを操っているのかもしれない。

れない」

「その可能性はありますね。私を通して、アクアちゃんがユーリ君を試しているのかもしれない」

「みんなだって、今でも苦しんでいるのかもしれない。他にも、世界だって危ないのかもしれない」

「ええ、ありえない話ではありません。オメガスライムであるアクアちゃんなら、不可能ではないでしょう」

「それでも、そうだとしても、ぼくはアクアから離れられない。アクアの居ない人生なんて、意味がないと考えてしまふんです」

ステラさんにぼくの罪を告白した。

アクアが大罪人だとしても、ぼくはアクアのために生きる。そう決めたことの。

ステラさんの反応を恐る恐る見ていると、ステラさんは一度微笑んでからぼくを抱きしめてくれた。

「ユーリ君、それで良いんです。他の誰があなたのことを否定したとしても、私はあなたを肯定します。世界の運命よりも、どんな相手よりも、アクアちゃんを優先する。それが、あなたとアクアちゃんの絆の証なんです」

「本当に良いんですか……？　こんなぼくでも、アクアと一緒に居て……」

「アクアちゃんは、誰よりもあなたが良いと言うはずですよ。だから、あなたの考えには問題はありません。私は嬉しいです。ユーリさんとアクアちゃんがそこまでの絆を紡いでくれて」

ステラさんの言葉は、ぼくがこのままでいいという意味だろう。ぼくはステラさんだっけ見捨てているも同然なのに、どうして。

本当はアクアがステラさんを操っている？　そうだとすると、今の言葉にはすがりたいほどの魅力があった。

「ステラさん、ステラさんは本物なんですか？」

「ええ。信じてくれていいですよ。ユーリ君、私が操られている時に、アクアちゃんが私に溺れてもいって言いましたよね。私も同じ気持ちです。ユーリ君が頼りたくなったら、いつでも頼ってください

ね」

ステラさんの言葉には、つい甘えてしまいそうになる。でも、それでいいんだろうか。

ぼくはもう、ただの罪人になってしまったのに。

「ありがとうございます、ステラさん。まだどうしていいか分からないですけど、アクアと一度話してみようと思います」

「考えを整理してからの方がいいと思いますよ。みなさんと、アクアちゃんと、どうしたいのか」

「分かりました。ステラさん、今日はありがとうございました」

「いえ。アクアちゃんと、うまくいくことを祈っています。あなた達の仲良くしている姿を、誰よりも近くで見せてください」

ぼくはどうしたいのか。すぐには考えがまとまらないだろう。できれば、誰かに相談したい。

そう考えた時、ぼくの頭に思い浮かんだのはカタリナだった。

## 126話 勇気

アクアがみんなの体を乗っ取っていたと知って、カタリナに相談したくなった。

カタリナはもう解放されているらしい。それならカタリナを探していた。

ぼくはどうしたいのか、全くわからない。ただ、アクアと離れたいはない。

でも、それで他の人達はどうなってしまおうのだろう。

できれば、大切な人たちにはみんな幸せで居てほしい。

もちろん、カタリナにも。それは叶う願いなのだろうか。

ぼくはアクアが居なくちゃ生きていけない。だから、アクアが最優先なのは確か。

それでも、できればみんなだつて手放したくない。これはわがままなのかな。

そうだとすると、どこまで望んで良いのやら。みんなとアクアが対立するのなら、アクアを選んでしまう。

でも、それにだつて、きつとぼくは身を引き裂かれるような思いをするんだ。

だから、どうかみんなとアクアが上手くいってほしい。

アクアがしたことを考えたら、きつと難しいのだろうけれど。

カタリナはすぐに見つかった。ぼくたちの部屋でくつろいでいたみたいだ。

他の人達は今は居ないみたいなので、今のうちに相談しよう。

「カタリナ、ちよつと聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「何よ？ ……深刻な話？ ちよつと体制を整えるから、待つてなさい」

ぼくの顔を見て話の内容に想像がついたのだろうか。

カタリナはぼくのことをよく分かっている気がする。ありがたいけどね。

でも、カタリナは何の話だと思っっているのだろう。

いや、相談前にそれが分かるほうがおかしいか。

カタリナは姿勢を正している。こういう時にそうしてくれるのが、カタリナの魅力だよね。

でも、今のカタリナは本物なのか？ 怖い。カタリナも操られているかもしれないことが。

「それで、何の話なのよ？ つまらない話だったら、許さないわよ」

「カタリナは、アクアに操られていたの？」

「あんだ、それをどこで知ったの？ それで、どんな答えを返してほしいの？」

「カタリナが偽物だったら、ぼくはどうすれば良いのかわからないよ」

「ふふっ、あんだ、案外あたしのことを気に入ってるのね。悪くない気分だわ」

カタリナは柔らかく微笑んでいる。この笑顔は本物だと信じたい。

ぼくは幼馴染としてずっとそばにいたのに、カタリナの異変に気づけなかった。

それでも、カタリナのことを大切に思っているのは事実なんだ。

カタリナはそんなぼくのことをどう思うのだろうか。不安だな。

今は笑顔でいてくれていているけれど、最近は感情を隠すのがうまいから。

「そりゃあ、カタリナのことは大好きだよ。ずっと助けられてきたんだから」

「あんたは誰にでもそう言うからね。でも、あたしも特別なのね」

「当然だよ、ずっと一緒にいたんだから」

「そうね。あんたとはずっと一緒にいた。だから、あんたとまた会いたかったのよ」

それは、アクアにとらわれていた頃の話だろうか。

ぼくとカタリナが会っていない期間なんて、思いつかないくらいずっと一緒にいたから。

そうだとすると、全くカタリナの異変に気づかないぼくを、カタリナはどう見ていたのだろう。

「カタリナが苦しんでいるのに、それを知らなくてごめん」



「良いのよ。あたしとこれからずっと一緒にいてくれれば。そのために、ずっと頑張ってきたんだからね」

頑張ってきたって、まさか。

アクアに体を操られている間も、ずっと意識を持ったまま耐えてきたのか？

カタリナはその時、どれほどつらかったのだろう。苦しかったのだろう。

ぼくが呑気に過ごしているのに、カタリナだけが追い詰められていた。

考えるだけで心が痛む。他の人はどうだったんだ？

まだ、意識がないまま操られている方がマシかもしれない。

ステラさんに聞いておけばよかった。そうすれば、今の不安は少しは減っていたのかもしれない。

「ありがとう、ぼくをそこまで大事にしてくれて。でも、アクアを許していいの？」

「あんたはそんな事言わないように。アクアを誰より大切にしない。それでいいのよ」

「でも、カタリナは……」

「あたしとあたとアクアの子供、作ってよね。それが、今のあたしの望みよ」

カタリナは以前もそう言っていた。

ぼくとカタリナとアクアの絆の証。魅力的ではあるけれど。

でも、カタリナはそれでいいのだろうか。

アクアの手によって、ずっと苦しんでいたんだろうに。

「カタリナが望むのならば、ぼくはかまわないけど……」

「心配しなくてもいいの。あたしは本当にアクアのことを大好きだから。だって、アクアはあたしを大切に思ってくれているから」

それなのに、アクアはカタリナの体を操っていたのか？

いったいどうして。大切な存在にそんな事をするって、どういう感情なんだ。

アクアはぼくだけには嫌われなくなかった。それは事実だろう。

でも、それなら、カタリナの件が気づかれたら嫌われるとは思わなかったのか？

実際、ぼくはそれでもアクアからは離れられない。アクアはそれを計算していた？

「なら、どうしてそんなひどいことを？」

「多分、あんたの一番をあたしに奪われると思ったからよ。今考えれば、ありえないことなのにね」

それなら、ぼくが原因でカタリナはそこまで苦しんでいた？

そんなの、どうやって償えば良いんだ。そもそも、何故一番を奪われるなんて。

ぼくはずっと、アクアを一番に考えてきたのに。それを伝えきれていなかったのだろうか。

アクア……ぼくはどうしたら良かったの？ どうすれば、ぼくを信じてくれたの？

いや、昔は信じられなかったただけかもしれない。

だって、指輪を使いこなした直後だから。カタリナが解放されたのは。

だとしたら、ぼくがちゃんと気持ちを伝えていれば、カタリナはこんな目に合わなかった？

やっぱり、ぼくのせいなの？ カタリナ、ごめん。

「そんなきつかけって、まさか、ミストの町でカタリナを助けた時？」

「そうよ。あんたにしては冴えているわね。ま、紆余曲折あったけど、今はあたしたちで一緒だから、あたしは幸せよ。だから、そんな顔をしないでいいわ」

カタリナは幸せそうな顔に見える。

それを信じていたいけれど。でも、ぼくなら同じ状況で幸せなんて言えない。

でも、カタリナが幸福でないとすると。アクアとカタリナの関係は。

ぼくはどうすれば良いんだ。何度も同じことを考えているけど、答えがどうしてもでない。

「カタリナ、ぼくはどうすればいいと思う？ 何をすれば良いのかな？」

「あたしから言えることは、アクアを大切にして、あたしも大切にする。それがあたしの望みだから」

カタリナは本気でそう言っているようにぼくには見える。

だから、それを信じたい。カタリナをこれから大切にすることで、カタリナは幸せになってくれるのだと。

アクアが怪物だと知りながら、離れることを選べないぼくだけだ。

それでもカタリナを幸福にできるのなら。なんでもしたい。

アクアが一番なのは事実。それでも、カタリナだって大切なんだ。幸せになってほしいんだ。

だって、ぼくに幸せをくれた1人なんだから。それ以上のものを手に入れてもらいたいよ。

「カタリナの望みがそれなら。絶対に叶えてみせるから」

「ほんと、あんたはお人よしよね。バカバカしいくらい。でも、そんなあんたに助けられているのよ、あたしはね。だから、これからもあんたはそのままがいいわ」

カタリナは優しい目でぼくのことを見つめてくれる。

その目が、ぼくに許しを与えてくれているような気分になった。

でも、それが正しいとしても、カタリナだけだ。他のみんなには、どう接すればいいだろう。

分からない。とはいえ、ぼくにできることは今まで通りにすることだけかもしれない。

だって、そんな難しい状況の対処、誰ならできるか分からないよ。

消極的対応とはいえ、他に思いつかないんだ。

「カタリナがそう言うのなら、信じるよ」

「そう言う割には晴れない顔ね。他にも悩みがあるのなら、ついでだから聞いてあげてもいいわよ」

「ほとんどの人は最近までアクアに操られていた。なのに、全く態度に出さないんだ。それって、どうしてなのかな？」

「あくまでもあたしの意見だけど、あんたとの時間を失いたくなかったのよ。みんな、あんたのことが大切なのよ。あたしにだって分かるくらいにはね」

そうだとすると、わざわざ掘り起こさないほうがいいのかもしれない。

だけど、みんなの苦しみが無くなったわけじゃないと思う。どうやってそれを癒せばいいのだろう。

アクアに頼ることはできない。きつと、それはあまりいい選択ではない。

でも、ぼくはアクアがいなくて何ができる？ ただのぼくに、どれほどの力がある？

「カタリナの言葉には、すがつちやいそうになるね……」

「あんたは相変わらずヘタレね。でも、それでいいのよ。あんたらしくするしか、あんたにできることはないんだから」

それはたしかにそうだ。ぼくが背伸びしたって、できることは少ないだろう。

無理になにかしようとして、失敗する可能性のほうが高い。

結局、ぼくはアクアに頼りきりだったから。だからこそ、今の事態を招いたから。

アクア……こんなときでも、ぼくはアクアに会いたくなくなってしま

う。つらいときでも、アクアの顔を見れば安心できたから。

アクアと出会ったことでぼくは生きる喜びを知った。

それは、間違いだったのかもしれない。それでも、アクアと出会えないもしもなんて考えたくもない。

ぼくはそもそも正解なんて選べなかったのかもしれないな。

アクアがいたから、ぼくの全てがある。

だから、アクアが何を選ぶとも、ぼくはそれを受け入れるしか無かったんじゃないかな。

アクアがみんなを解放したことを喜ぶ。それしかぼくにはできない。そんな気さえする。

「そうかもね。でも、カタリナが本物だと思えて、安心できた。ありがとう、話を聞いてくれて」

ぼくがそう言うと、カタリナはこちらを抱きしめたあとキスをしてきた。

カタリナの暖かさが、ぼくにカタリナはここにいるという実感を与えてくれた。

「ユーリ。あなたにはあたしが必要だし、あたしにはあなたが必要。だから、お互いずっと離れられないわ。でも、それであたしは幸せなのよ。それだけは信じて」

「うん。少しは迷いが晴れた気がする。カタリナがぼくには居るってわかったから」

ぼくをずっと支えてくれたカタリナが、また助けてくれた。

もやもやはまだあるけれど、それでも、前に進む勇気を持つとう。

## 127話 歩み

カタリナは本当に解放されているのだと信じる事ができた。だから、少しは気分が楽になった。みんなも解き放たれているのだと、信じる一助にもなっていたから。

でも、それでもみんなとどう接するべきなのかには悩んでいる。アクアに乗っ取られているかもしれないと思いつながら話せばいいのか。

あるいは、この人は本物だと信じて付き合っていけばいいのか。そんな事を悩みながら歩いていると、シイと出会った。

シイとは毎日一緒に過ごしているけど、違和感はない。だから、そもそも乗っ取られていないか、まだ解放されていないか。ステラさんの言葉を信じるのなら、シイはずっと本物だ。

ダメだな。アクアにまで疑いの目を向けているぼくがいる。

それをアクアに気づかれて、嫌われてしまったらぼくは終わりなのに。

アクア水がどうこう、オメガスライムがどうこうという事ではない。

ぼくはアクアと一緒にじゃないと生きていけないんだ。

アクアがいてくれるから、人生を楽しむことができているのだから。

シイを目の前にしながらも、ぼくは頭を悩ませていた。

すると、シイがこちらに勢いよく抱きついてきた。

「おにいちゃん、シイがいるんだからこっちを見て！」

相変わらずミリンを上手く抱えながら抱きついてくるシイ。

シイの言葉はぼくをはっとさせた。

そうだよ。目の前にいる相手を見無視してまで考えることじゃない。

アクアの件はとても大切な話ではあるけれど、シイを傷つけてまで思案にふけるな。

ぼくは反省すべきだよ。向かい合っている相手を見ないなんて

ことを。

「ごめん、シイ。ちゃんと君のことを見ているから」

「そうだよ！ おにいちゃんはシイをかわいがらないとダメ！」

「そうじゃぞ。シイと最近話しておらんではないか、ユーリよ」

そうか。ここしばらく、いろんな人達と過ごしていたけど、シイとは寝るときくらいしか一緒じゃなかったな。

シイは大切な妹なんだから、もうちょっと親しくしていかないと。

それに、まだ幼いシイだから、楽しい時間をいっぱい作ってあげないかね。

シイはあの研究所ですつと不幸だったのだろうから、それ以上の幸福を知るべきなんだ。

そういえば、あの研究所、アクアなら簡単に滅ぼせたよね。

いや、アクアがオメガスライムだと当時のぼくは知らなかった。

でも、こっさり退治するくらいできたんじゃない？

まあ、アクアがそうしなかったから、シイと出会えた。だから、それでいいか。

「シイと話すのは楽しいから、何かから話をしようか悩んじゃうな」

「おにいちゃんは、シイのどこが好き？」

シイのどこが好き、ね。

全部と言いたいところだけど、具体的に挙げたほうが喜ばれるだろうな。

色々と思いつくし、順番に言っていくか。

「まずは可愛いところでしょ。契約技が頼りになるところもかな」

「もつともつと、いってー！」

「優しいところ、ぼくにも移っちゃいそうな笑顔をみせてくれるところも好きだよ」

それからも思いつく限りシイの好きなどころを言っていた。

ずっと笑顔でシイは聞いてくれていたので、言えば言うほど楽しくなっていく。

しばらく続けていると、シイは満足した様子に見える。

シイが喜んでくれてよかった。ちょっと恥ずかしかったけど、頑

張ったかいがある。

「ありがとう、おにいちゃん！ シイもお兄ちゃんのすきなところ、いっぱい言える！」

「そうなの？ 楽しみだな」

「うん！ シイにやさしくしてくれるところ、かっこいいところ！」

シイにぼくは優しいと思ってもらえているの、嬉しいな。

それだけ、シイはぼくの行動を喜んでくれているのだろうから。かっこいいってのも、気分がいいかも。

シイにとつて、ヒーローで居られているのかな。

だとすると、シイの助けになれている証だから。

「それに、つよいところ、かわいいところ！」

強いつていうのは、多分単純な実力だよね。

全部アクアが居てのものであるとはいえ、褒められることは嬉しい。可愛いというのは、ちょっと困ってしまうけれど。

シイみたいな子にまで可愛いって思われていると、情けないのかもと感じちゃう。

まあ、シイはぼくのことを頼りにしてくれているから、気のせいだと思いたい。

それから、シイは楽しそうにぼくの好きなところを言い続けてくれた。

それだけ、シイの中でぼくは大きな存在になっているのだろう。

だから、シイのことを悲しませないように気をつけていかないからね。

「いっぱい言ってくれてありがとう。とつても嬉しいよ」

「シイもうれしかったから、おそろいだね！」

「ユーリよ、よくシイを喜ばせてくれた。お主がシイをよく見ていることといい、感謝するのじゃ」

こんな風に言っている2人も、もしかしたら操られていたのかもしれない。

そう思うと、少しだけ気分が沈む。



そんなぼくを見て、シイはごちらに元気に話しかけてきた。

「おにいちゃんのかなやみごと、かいけつしてあげる！」

シイにぼくが悩んでいること、気づかれていたんだな。

それもそうか。シイを置き去りにするくらい頭がいつぱいだったんだから。

でも、どうやって相談したらいいかな。シイを傷つけないようにしたいけど。

「目の前にいる人が本物か偽物かわからない時、どうすればいいと思う？」

「シイをニセモノだと思ってるの？ でも、そんなのかんけない！」

おにいちゃんは、いまめのまえにいるシイをかわいがってくれればいいの！」

「そうじゃ。シイを喜ばせるために、しっかりするのじゃ、ユーリよ」  
そうかもしれない。偽物だと考えながら、目の前の相手と話す。それがどれほどその人を傷つけるか。

きつと、ぼくならとても苦しむ。だから、本物のつもりで接するんだ。みんなと。

シイに教えられちゃったな。お兄ちゃんなのに、情けないような気もする。

でも、こんな子が妹であることが誇らしい。

改めて、シイと出会えて良かった。敵として終わらなくて良かった。

「シイ、ありがとう。大好きだよ」

ぼくの方からもシイを抱きしめる。もちろん、ミリンが苦しくないように。

シイはとつても明るい顔になって、しっかりと抱き返してくる。

この子が幸せになってくれるように、ぼくも頑張らないと。

シイは大切なことを教えてくれたから。そうでなくとも、たったひとりの妹だから。

そして、とつてもいい子で可愛いから。幸せになるべきなんだ、この子は。

「シイもおにいちやんが大好き！　ずっと一緒にいようね！」

「もちろんだよ。前にも約束したからね。シイの幸福を、ずっと見守っているから」

「おぼえててくれたんだ！　ありがとう！」

「お主もすっかりシイの兄ができておるようじやの。出会ってそう経っていないというに」

ミリンからそう思ってもらえるのは嬉しい。

ぼくはシイのことが大好きだから。もしアクアに操られているのなら、なんとしても解放したいほどに。

もちろん、みんなに対しても同じように思っているんだけど。

やっぱり、一度アクアと話さないといけない。でも、怖い。アクアとの関係が壊れてしまいそうで。

「シイ、君をきつと幸せにしてみせるからね。約束するよ」

「おにいちやんが一緒なら、いまでもしあわせ！　だから、いっぱいいっしょにいてー！」

「うん、頑張るよ。みんなと一緒にになるかもしれないけど、いいかな？」

「いいよ！　おにいちやんがいるのなら！」

「ユーリはほんに好かれておるの。じゃから、シイを裏切らんでくれよ」

そんなの、当たり前だ。そう言いたい。

だけど、もしシイがアクアに操られていて、それを見逃しているのなら。

それはシイに対する裏切りに他ならない。

シイを幸せにできるのなら、大抵のことはできる。アクアと離れる以外の大抵は。

それで、大丈夫なのだろうか。

アクアがいたから手に入れた幸せを、アクアがいるから失うかもしれない。

今でもその未来が恐ろしい。アクアと別れることが最も怖いといえ。

「全力でシイを大切にするよ。それだけは、絶対だ」

「ありがとう、おにいちゃん。うれしいよ」

「シイ、良かったの。ユーリ、よろしく頼むぞ」

それからの一日は、ずっとシイと遊んで過ごしていた。

その中で、みんなを本物として接する覚悟を決めた。

シイがいたからその決意ができた。でも、まだアクアと話す勇氣は出て来ない。

急いでも失敗すると感じるから、まずはみんなと話をしよう。そう考えていた。

そして次の日。ハイデイたちがぼくたちの家へとやってきた。

これで、ぼくの知っている人たちはほとんど一緒に暮らすことになる。

そう考えていたら、サーシャさんまで後からやってきていた。

まずは、やってきた人たちと話をすることになった。

「ユーリ、貴様にとつては喜ばしいことだろうか？ 余たちだけではなく、サーシャもともに住むのだから」

ハイデイの言うことは確かにそうなのだけれど、突然でびっくりした。

というか、エルフィール家は大丈夫なのか？ サーシャさんがその辺で手抜きをするとは思わないけど。

ぼくは嬉しいけど、それでサーシャさんが困るのは嫌だから。

「そうだけど、無理はしてないのか心配ですね、サーシャさん」

「気にしなくても問題ありませんわよ。オリヴィエ様を始めた方々に協力いただきましたから」

それでも、ぼくには伝わってこないんだね。

なかなかみんなもぼくを驚かせるのがうまいというか。

事前に聞いているのと、今みたいにいきなりなのと、どっちのほうが嬉しいだろう。

まあ、どっちでもとても喜ばしいのだけどね。

「ユーリ殿、今日からよろしくお願いしますね」

「よろしくな、ユーリ。この家では戦えねえだろうか」

リデイさんとイーリスも挨拶してくる。

今日からみんなと住むんだという実感が湧いてきた。

同時に、これからの対する期待が高まってくる。

それからしばらく4人と話して、それからみんなにも4人を紹介した。

もうみんなお互いを知っているけれど、これから関係が少し変わるからね。

みんなが仲良くしている様子を見て、明日アクアがみんなを操っていた件について、アクアと話そうと決めた。

## 128話 ユーリのこれから

今日はアクアと話をするつもりで、アクアと2人になった。

アクアがぼくの周りの人たちを操っていたという事実。それについて話すために。

ぼくはアクアにどんな答えを返してほしいのだろう。今でもわからない。

だけど、ぼくたちの今後にとつてとても大事なことだろう。

アクアは目の前にいる。言葉が出るまで少しかかったけど、ついにはつきりと言う時が来た。

「アクアはみんなのことを操っていたって聞いたよ。それは本当？」

「本当。でも、今は違う」

アクアは特に悩むこともなく答える。

今は違う。その言葉を信じたい。信じるしかない。

ぼくはこれ以上アクアを疑っているような態度になれない。

アクアがぼくから離れてしまうことが、何よりも恐ろしいから。

もしかしたら嘘なのかもしれない。それでも、アクアが本当というのだ。

ぼくにとつてはその言葉が正解なんだ。弱いぼくでごめんね、みんな。

「つい最近、みんなに違和感を覚えたんだ。その時に解放されたの？」

「ユーリがいつ違和感を感じたか。それ次第。でも、確かに最近」

アクアからは嘘の気配を感じない。

でも、ぼくはこれまでアクアがみんなを操っていることに気づかなかった。

だから、その感覚に頼っていいのかは分からない。

それでも、アクアを信じることでできないぼくは、何も信じられないだろう。

だから、アクアの言葉は正しい。そうなんだ。

気になるのは、そもそもいつから操られていたのか、何故そうなったのか。

聞いていいのかな。これ以上。でも、聞かなきゃ前に進めない気がするから。

「アクアはなんで、みんなを操っていたの？」

「ステラは、ユーリにアクアがオメガスライムだと知られたくなかったから」

それはステラさんに聞いた。

やっぱり、ぼくのせいなんだ。ぼくがアクアに信頼されていなかったから。

悲しい。アクアが、オメガスライムだと知られたくらいで嫌われると思っていたことが。

プロジェクトU：Reの研究所でアクアの正体を知った時、薄々感じてはいたけれど。

ぼくのアクアへの好意は、伝わっていなかったのかな。

今なら分かるのに。ぼくはアクアを嫌うことなんてできないって。

アクアに拒絶されたら、生きていけないことも。

確かに、ミストの町にいた頃は、もうちよつと普通の態度だったかもしれない。

それでも、アクアを誰よりも好きでいたはずなのに。

ぼくがちゃんと言葉にしていなかったからなのかな。

それなら、ぼくはアクアも傷つけていたことになる。

「それくらいのこと、アクアを嫌いになるなんて、あり得なかったのに」

「今はユーリを信じている。でも、昔はそうじゃなかった」

アクアからはつきりと言われてしまった。

苦しい。悲しい。胸の奥が変な感じだ。

今は信じてくれてるのは嬉しい。それは本当なんだ。

でも、昔はそうじゃなかった。その言葉が重くのしかかってくる。

「そう、なんだね。ごめん、アクア。信じさせてあげられなくて」

「ユーリのせいじゃない。ユーリはアクアを好きでいてくれたから」

確かにぼくはずっとアクアを好きでいた。

でも、伝わっていない想いなんて、相手にとっては無いのと同じだ

ろう。

ぼくはちゃんとアクアに好きって言えなかったのかな。

そういえば、カタリナを助けた頃、アクアは自分がぼくの一番だとアピールしていた。

あれはアクアの助けを呼ぶ声だったのかもしれない。

だったら、それに気がつかなかったぼくは、愚かでしかなかったのかな。

「アクアを好きって気持ちを伝えられなかったのは、ぼくが悪いから。アクアを悲しませていたのは、ぼくのせいだから」

「ユーリはずっとアクアを信じてくれていた。ステラの指輪がその証拠。だから、いい。それで、他の人達は、ユーリを傷つけようとしていたから」

みんなが、ぼくを傷つけようとしていた？

そんなことが、本当に？ さっきまでとは違う寒気がぼくに襲いかかってきた。

そんなぼくを見ながら、アクアはゆっくりと続けていく。

「サーシャはエルフィール家のためにユーリを利用しようとした。ミーナはユーリに剣を向けた。メルセデスはユーリの悪口を言っていた。アリシアは危険な冒険にユーリを連れて行こうとした。オリエイエは王都にユーリを閉じ込めようとした」

それくらいのこと。

アクアの行動は、ぼくを想ってくれている証ではある。

だとしても、ぼくはそんなことなら許したのに。

アクアにぼくのことを伝えきれていなかった。結局それに尽きるのだろうか。

ぼくはアクアを大好きっていいながら、ちゃんとアクアとふれあつてこなかった。

そういう事になってしまふ。全部、ぼくのせいじゃないか。

「残りの人達は？ ユーリやファイーナはどうして？」

ヴァネアやレティさん、メーテル。それにリティさんとイーリスは分かる。

それぞれ近しい人たちを乗っ取るついでみたいな感じなのだろう。「ユーリヤはそもそもずっと人形だった。最近、ちゃんと人になっただけ。フィーナは利用するために操った。ユーリと出会った時には、もうアクアの支配下だった」

ぼくとユーリヤの出会いも、フィーナとの出会いも、両方仕組みられたものだった？

そもそも、ユーリヤは人間ですら無かったんだ。

だったら、ぼくが大切に想っていたのはずっとアクアだった？

アクアがユーリヤの正体なら、それはぼくの好みをよく知っていたはずだ。

そして、フィーナの悲しみを癒してあげたいと思ったのは無駄だったのだろうか。

でも、解放されてからのフィーナも同じ様な態度だった。

どうしてなんだろう。なぜ、本物のフィーナをそのまま再現したのかな。

それを聞いても仕方のないことではあるけれど。

「そうなんだ……」

「ユーリ、ごめん。ユーリが喜ばないと知っていたのに」

そう思っていて、どうして実行したのだろうか。

アクアに何の利益があつたのかな。

分からない。だから、聞いてみよう。

「何のために、ユーリヤを生み出したの？ フィーナとしてぼくに出会ったの？」

「いろんな立ち位置でユーリと接してみたかった。それに、人間を知りたかった。アクアは化け物だから」

アクアなりにぼくたちに近づこうとしてくれたって事なのかな。

そのための手段としては、あまりにもひどいけれど。

それでも、少し嬉しいと感じてしまうぼくがいる。

ぼくと接するために、色々と工夫してくれたんだって。

大概だな、ぼくも。主従でお揃いかもね。

ぼくとアクアが割れ鍋に綴じ蓋ってことなのかも。



「相談してくれたら……無茶な話か。どうすればよかったのかな」  
「ユーリが悪いわけじゃない。全部、アクアが望んだことだから」

そうだとすると、アクアの悩みに気づいていれば。

ぼくにも、もつとできた事があったんじゃないか。

だから、せめてこれからは。アクアをもつと幸せにしたい。

そうすれば、アクアだけではなく、みんなの幸せにもつながるはずだから。

それに、きつとアクアも苦しんでいたから。そうでなければ、今でもみんなは解放されてはいないはずだから。

「どんなアクアでも、ぼくは大好きだから。そう伝えられなかったぼくが悪いんだよ。つらかったよね。ぼくを信じられないこと」

アクアはぼくを大好きでいてくれた。今ではもつと好きでいてくれる。

それが分かるからこそ、ぼくがアクアを苦しめていたと理解できた。

だって、ぼくがアクアを嫌うって、その可能性をアクアに思い浮かばせてしまったから。

「でも、それで今ユーリを苦しめている。アクアは許されないことをした」

「そうかもしれない。それでも、ぼくはアクアとずつと一緒にいるって決めたから。だから、安心して良いんだよ。何があっても、アクアだけは嫌いにならない。それは本当だから」

「アクアも、ずつとユーリと一緒にいる。絶対に離れない」

そう言いながらアクアはぼくに抱きついてきた。

アクアは明るい笑顔をしていたから、きつとわだかまりが消えたのだと思う。

こういう顔を見られるだけで、ぼくは幸せを感じてしまうんだ。

やっぱり、ぼくはアクアから離れられない。それを改めて確認した。

ぼくからもアクアを抱き返して、アクアにぼくの気持ちを通じるように願う。

指輪のおかげで想いを送り合えるようになったけど、それがなくても届くと信じて。

アクアはぼくをさらにギュツと抱きしめてくる。

そんなアクアに触れているだけで、ぼくは幸福感に包まれていた。「アクアと一緒にだと、ぼくはとつても幸せなんだ。アクアも幸せ？」「当たり前。アクアはユーリが誰よりも、何よりも、世界よりも好きだから」

アクアの言葉で、ぼくは舞い上がりそうにすらなっていた。

やっぱり、ぼくはアクアに依存しているんだな。

いつか、そんな風を感じたことがあったけれど。間違いじゃなかった。

アクアの一挙一動に振り回されそうですらある。

きっと、アクアはぼくに配慮してくれるのだろうけれど。

そう信じてしまうのだから、ぼくは重症だ。

アクアがみんなを操っていたことなんて、無かったみたいだと思えてしまう。

「ぼくもアクアが大好きなんだ。他の誰よりも、何よりも、きっと世界よりも。ぼくたちは同じだね」

「だけど、オーバースカイたちだって大切。アクアもユーリも」

アクアがオーバースカイを含めたみんなを大事に思ってくれていることは、とても嬉しい。

だって、きつとこれからはみんなを傷つけようとしな。そう信じられるから。

アクアが一番。何よりも優先する相手。それは変わらないけれど。でも、みんなだって大切だから。幸せになつてほしいから。

「そうだね。みんなで幸せになれるのなら、きつとそれが理想だよ」

「うん。ユーリ、これからもずっと、ずっと隣にいて」

「当然だよ。どんな未来が待っていたとしても、必ず」

ぼくはこれからもずっとアクアとパートナーだ。

アクアはぼくが考えていたよりも邪悪で、愛の形が歪んでいて。

それで、世界すらも飲み込んでしまう災厄なのかもしれない。

でも、そんなアクアはぼくのペットだ。  
たとえ、世界を滅ぼせるオメガスライムだったとしても。  
ぼくは、アクアと過ごし続けるんだ。ずっとずっと先の未来まで。

## 裏 カタリナの望む未来

カタリナはアクアに解放されてから、人生の絶頂のような心地を得ていた。

ずっと思い描いていたユーリとの時間を過ごせること。

そして、アクアと3人で良い生活を送っていけそうだという実感があること。

だから、カタリナはこれからのために、ユーリとの距離を近づけると決意した。

ユーリとアクアと一緒にならば、どんな試練も乗り越えられる。そう信じて。

そんなカタリナにとって、ユーリが自らの変化に気がついたことは好都合であった。

それを受けて、すぐさまユーリに対して積極的な行動に移るほどに。

ユーリは自分が操られていたことになどまるで気がついていない。

それこそが、カタリナがユーリと一緒にいなければならぬと感じる最大の理由だった。

なにせ、ユーリは簡単に他者に騙されるであろうから。そんなユーリを支えたいと想って。

これからユーリに想いを伝えて、まずは新しい関係を始める。

ユーリが自分を見る目が変わるように。ただの幼馴染から、恋人になれる相手に変化してほしくて。カタリナは前進する覚悟を決める。

そのために、カタリナはユーリにキスをするを先に決めていた。

ユーリの話聞きながら、会話の流れを誘導していく。

情けなくて頼りなくて、それでも、いざという時は誰よりも信じられるユーリ。

その想いを回りくどい言葉で伝えながら時を見計らう。

そして、タイミングを待って実際にキスをする。

ユーリの唇はカタリナにとって心地よくて、もっと激しいことすら

も求めていた。

相手はそうでもない様子だったからこそ抑えていたのだが。

とはいえ、ユーリは照れくささと喜びのようなものを同時に感じている様子。

そんな反応を見て手応えを得たカタリナは、これから関係を進められると確信した。

アクアがユーリの一番かもしれないけれど、間違いなくユーリの心の奥深くに入り込める。それを強く信じられた。

ユーリは自分が大好きだということは間違いない。それは今の反応からも明らか。

そして、アクアも自分を大切に感じてくれている。さらに、自分も両者をかけがえのない存在だと疑わない。

それらのはつきりした。つまり、アクアと約束した3人の子供を作る未来。それに向けて一歩前進できた。

その実感がカタリナに大きな達成感を与えて、つい笑顔を浮かべてしまう。

それが、ユーリとカタリナの関係を変えていく始まりだと、カタリナは強く信じていた。

それから、アクアとユーリとの3人で過ごす日が来る。

アクアからカタリナに持ちかけられた、ユーリとアクアとカタリナの3人で同じ部屋で過ごすという提案。それを実行する日がやってきていた。

アクアがカタリナの知らないところでユーリに話していたことがきっかけである。

とはいえ、事態が進行していくことは望むところ。自分を蚊帳の外に置きたいなんて、この2人ならばありえない。

カタリナは喜びを強く感じていたが、意地のようなものがそれを態度に出させないでいた。

カタリナにとって幸いな事に、ユーリはカタリナと共にいること自体は受け入れている様子。

しかし、大きく照れているようで、反対とも取れる言葉を投げかけ

る。

そんなユーリには不満も納得も感じるが、それでもユーリを理解できているという自負がある。

カタリナにとって、ユーリの態度は押せば押し切れるように見えていた。

カタリナには急ぎすぎて失敗する懸念もあつたが、それでも、ユーリたちと共に生活したいという思いが強い。

それ故に、ユーリの欲望を何でも受け入れるという態度を示してみせた。

実際にユーリが欲求に根ざした行動をおこしたとして、望みどおりではない。

そう考えていたカタリナは、ユーリが自分に向ける情欲の目が心地よいとすら感じた。

ユーリはアクアとカタリナが敵対すれば、それは戸惑うだろう。

それでも、最終的にはカタリナよりもアクアを選ぶ。カタリナにはその未来がはつきりと見えている。

だとしても、ユーリやアクアとともに過ごす時間は、カタリナにとって大切なもの。

これからはその大切な時間が増えるのだから、ユーリが自分と今は結ばれていないことは、何の問題もない。

アクアとユーリでは子供を作ることができない。そうである以上、自分の存在は必ず必要になる。

カタリナは何があつてもユーリとアクアのそばにいる理由を手に入れていた。

だから、落ち着いた心持ちでユーリとの距離を徐々に詰めていくと決意したのだ。

そして、ユーリからはつきりと大好きだと言われた瞬間。

カタリナは表情を変えないようにすることで精一杯だった。

分かりきったことだとしても、ユーリからの好意は心地いい。

その時だけは、未来のことなどまるで考えずにユーリと向き合えたカタリナだった。

その後、次はユーリとノーラとカタリナで過ごす日。

以前にユーリと日中を過ごしてから期間が離れていたが、同じ部屋で暮らしているという事実がカタリナに余裕をもたらしていた。

ユーリとノーラがキスをしたという事実も、軽く流せるくらいに。カタリナにとって、自分をユーリが意識しているということは動くことのない真実だったから。

それに、ノーラはカタリナにとって大切な家族になろうとしていた。

カタリナの契約モンスターであるし、ノーラはカタリナが大好きな様子。

それだけでなく、ノーラの外見がカタリナの好みということもある。

アクアに囚われていたつらい時間。その時の癒しになってくれた存在でもあったから。

だから、カタリナはノーラを受け入れることができていた。

カタリナは強がりですユーリが女を侍らせても良いと言ったわけではない。

アクアがユーリの一番であるのなら、カタリナ自身はユーリの二番。

それが揺らぐことはないと強く信じていたからこそ、カタリナの心は落ち着いていた。

ミストの街で自分が危機に陥った時、ユーリがどれだけ必死に助けようとしたか。

冒険者としての日々で、ユーリがどれだけカタリナを頼っていたか。

それらを考えれば、自然とカタリナは自分が大切にされていると信じることができた。

いつか自分とユーリは結ばれる運命にある。

そう考えているカタリナは、ユーリが自分の感情を整理するまで待つ事を決めた。

ユーリは恋愛感情がどんなものかを分かっていない。

それでも、その感情を知った時に思い浮かべる顔はカタリナに決まっている。

アクアが大切なユーリだけれど、それは家族として、あるいは運命共同体としての想いだから。

さらに理想の未来に近づくために、カタリナは自分の想いをはつきりとユーリに告げる。

自分はユーリと恋人になりたいのだと。その先の未来を共に見たいのだという気持ちを込めて。

好きだと言うだけで胸が爆発しそうだと感じて、すべてを言葉にできなかつたけれど。

それでも、ユーリは自分の想いを真摯に受け止めてくれている。

カタリナはそう信じて、明るい未来を夢見ていた。

いつかは自分の態度が原因でユーリに嫌われることを恐れたけれど。

今のカタリナは、ユーリがそんな自分も受け止めてくれると疑わなかった。

たとえば他の女がユーリを誘惑したとしても、ユーリが一番に思い浮かべるのは自分だ。

カタリナはそれを確信していた。

だから、ノーラが改めてユーリとキスをしようと、他の女と何をするのだとしても。

心の奥深くで余裕を持って生きることができた。

それからしばらくの時間が過ぎ、ユーリにアクアの真実が伝わる。

アクアが今までユーリの周囲にいる人物を操っていたことが。

ユーリがそれについて相談する相手にカタリナを選んだこと、カタリナをユーリが必要としていること。

2つの事実がカタリナに大きな満足感をもたらしていた。

アクアが自分の体に乗っ取っていたことはもう許している。

これからの幸せな日々を思えば、アクアに支配されていた期間の苦痛は十分にやわらぐから。

ユーリは苦しんでいるようだが、すぐに解決する問題だとカタリナ



は考えた。

どうせ、ユーリにアクアと敵対する判断などできやしないのだから。

だから、アクアが何をしたいようとユーリは受け入れるしか無いのだ。

ユーリに問われるアクアの心情は、カタリナには手に取る様にならなかった。

アクアの言葉、態度、それらからおのずと答えにはたどり着く。

何故カタリナをアクアが支配したのか。それはユーリをカタリナに奪われなくなかったから。

いつか、カタリナ自身もユーリの一番になれないことに悩んでいた。

だからこそ、その苦しみにカタリナはとても強く共感するのだ。

それから、ユーリはカタリナに悩みを相談していく。

カタリナ以外にユーリの周囲はどうなっているのか。

その問いに対する答えは、カタリナにとっては自明に等しかった。

たとえアクアに操られていたことがあったとしても、ユーリと離れたくない。

自分がユーリに向けている想いと同質のものを、周囲の人間も持ち合わせているだけだろう。

それをユーリに直接告げるのは、カタリナにとって腹立たしくもあつたが。

それでも、ユーリはカタリナを強く求めているという実感。それがカタリナに強く襲いかかった。

思わず震えてしまいそうになるほどで、意識が遠のく感覚すらあつた。

カタリナについた心の傷が、ユーリにより深く刻まれる。そんな感触までも。

だから、カタリナはこれからユーリと過ごす日々が、今までよりも幸せになると確信できた。

ユーリがカタリナのもとを去ったあと、カタリナはこれからの未来

について想像していた。

たとえアクアが世界を滅ぼすのだとしても、自分とユーリとアクアだけは絶対に幸せでいられる。

そしておそらく、オーバースカイを始めとした人間たちも。

だからこそ、カタリナはずっと幸福でいられるのだと強く信じていた。

「アクアのことだから、ユーリにとって都合の悪い人間は絶対に支配しているでしょうね。何なら、ユーリが知らない人間なら全部なのかも。でも、どうだっていいわ、そんなこと。ユーリ、アクア。あたしたちの子供、いっぱい作りましょうね」

## 裏 アクアにとってのハッピーエンド

アクアはユーリの周囲にいる人間を解放してから、ユーリにわだかまりなく接していた。

何かを隠しているという罪悪感がなくなるだけで、ユーリのそばがさらに楽しくなる。

ユーリにくつついている時間も、ユーリの感触だけを素直に楽しめるのだ。

わずかなユーリの暖かさ、柔らかさと硬さが混ざったような触り心地。

本当はユーリに悪いことをしているのではないか。かつてしていた心配は今しなくて良い。

そんな時間が素晴らしく思えるアクアは、最高の気分を味わっていた。

これまで、ユーリの周りを操っていたことが、どれほどアクアにも良くない影響を与えていたか。

それがよく分かると同時に、今までの時間をとてももったいないと感じた。

今こんなにも楽しいのなら、皆を支配しなければ、今よりも幸せになれたのかもしれない。

それでも、今ユーリの隣にいられるという事実をアクアはしっかりと噛み締めていた。

ノーラとともにユーリに甘える時間は暖かくて、ノーラを生み出してよかったとアクアは喜んだ。

単なる思いつきで作ったノーラではあったけれど、自分もユーリも大切にしてくれる存在になっている。

そして、自分にとつてもユーリにとつてもノーラは幸せの一部なのだから。

優しくて、可愛くて、頼りにもなるノーラ。そんな存在を作り出せた自分が誇らしかった。

ユーリはノーラも自分もとても大切にしてくれる。

だからこそ、2人がかりでユーリの癒しとして可愛がられる時間は幸せだ。

ノーラの感情はもう読んでいないけれど、それでもノーラの幸福が伝わってくる。

そんな感覚と、自分自身がユーリに構ってもらう幸せが相乗効果を生んでいた。

やっぱり、ノーラは自分にとって大切な家族だ。アクアは改めてそれを確認していた。

アクアとノーラでユーリに好きと伝えると、ユーリからも好きと帰ってくる。

何度も経験していたようなことでも、自分の心が変わるだけでこんなに嬉しさが違う。

アクアはその喜びを胸に、ステラへの感謝を深めていた。ステラがいたからこそ、皆と和解できた。今の心になることができた。

その思いがあるから、ユーリをもっと好きになる。ずっと心にあつたわだかまりが、ユーリを好きという気持ちすらも

阻んでいたと分かるのだ。

それゆえに、アクアは未来への希望をどんどん高めていた。それから、ユーリはアクアが解放した皆と接していく。

だれもがユーリとの時間を楽しんでいた。それを、ユーリの五感を通して感じ取るアクア。

いつでもどこでもユーリが何をしているかは知っている。カタリナはノーラと一緒にユーリとの未来を考えている。

アクアがカタリナと約束した、ユーリとカタリナの子供にアクアが干渉すること。

そんな未来をカタリナは待ちわびているようで、だから、アクアもその日が訪れることが待ち遠しかった。

それに、カタリナはユーリとうまく行っている様子。モンスターは子供を生み出せないから、カタリナとユーリの子供は

アクアにとっても大切な存在になるだろう。

もしユーリとアクアの子供を直接つくる手段があつたとしても、大切なのは変わらないはずだけれど。

だって、カタリナのごときはアクアにとって本当に大事な家族だと信じているから。

家族同士の結びつきを喜ばしいと感じるのは当然だろう。アクアはそれを疑っていなかった。

ステラとサーシャはユーリを誘惑したいようだ。

それは構わない。もしユーリと2人が結ばれるのだとしても、アクア自身がユーリの一番であることは揺らがない。

それに、ステラもサーシャもユーリの幸せを尊重してくれるだろうから。

そう信じることができるくらいには、2人から伝わった思いは確かなものだった。

アクアは新しい関係性に期待を持ちながら、ゆっくりと落ち着いて過ごしていた。

ユーリヤとフィーナはユーリが近くにいるだけで幸せなのだろう。そんな気持ちはアクアにとってはよく分かるもので、微笑ましいと感じながら眺める。

ユーリヤは自分の感情を大切にしているようで、ちゃんと心を生み出した甲斐がある。

その幸せをもっともっと深めてほしい。自分が生み出したこともあり、アクアはユーリヤに相応の愛着を抱いていた。

フィーナは本物のユーリと接することを楽しんでいる。

いつかフィーナの記憶を読んだ時、自分が感じた共感は確かなものだった。

それを理解できて、アクアはフィーナの幸福を素直に喜んでいた。アリシアとレティはユーリとの冒険を楽しんでいる。

いつかのように、危険すぎる依頼を受けるわけでもなく、実力相応のものだ。

アリシアの夢はアクアも叶ってほしいと願っていた。ユーリの危険を無視できなかっただけで。

だから、今アリシアたちが楽しんでいることは喜ばしい。

ユーリがずっと憧れていた2人に、大切な仲間として扱われる。

それはユーリにとっても素晴らしい時間になるだろう。

アクアは自分たちの師匠としてアリシアたちが選ばれたことを、改めて感謝していた。

ミーナとヴァネアはユーリとの戦いに夢中なようだ。

かつては焦りから暴走してしまったミーナだけれど、今は落ち着いている。

ミーナとユーリが競い合う姿はアクアも大好きだった。

だから、今は対等でなかったとしても。いずれはまた互角の戦いを見せてほしい。

そこにヴァネアも混ざるのならば、きっと以前よりも楽しいだろう。

何度も偶然が重なったミーナたちとの出会いは最高だ。アクアはそう信じていた。

メルセデスとメーテルは冒険者として大きく成長している。

アクアにとっても大切な弟子である2人だけれど、やはり感慨深い。

そんな2人とこれからもオーバースカイの仲間として一緒にいられるのは素晴らしいことだ。

アクアだって、共に隣で冒険する日を夢見ていたのだから。

そんな日々が現実になりそうなこと。アクアは楽しくその日を待つつもりだった。

オリヴィエとリディとイーリスは、ユーリたちと同じ家に住みたいらしい。

アクアにとっては歓迎すべきことだ。それならば、以前のようにユーリと分断されずに済む。

オリヴィエやリディがユーリを心から信じていること。その想いは大好きで。

だからこそ、今は反目しあわないで済むことがアクアには喜ばしい。

オリヴィエの孤独は、きつとアクアにも理解できる感覚だから。そんな感情が癒されることを祈りながら、アクアはオリヴィエたちのことを歓迎しようとしていた。

そんな風にユーリと皆の日々を楽しんでいる中、運命の日が訪れる。

はじまりは、ユーリがステラに相談しようとしたことだった。

ユーリが皆の姿に違和感を覚えていることに、アクアは気がつかなかった。

だから、ユーリが相談している内容は、アクアにとっては苦しみとなる。

ユーリを自分は理解できていないのではないか。そんな不安とともに。

そして、ステラがユーリに真実を伝えようとしていることに気づく。

アクアはやめてほしいと叫びだしたいくらいの思いでいた。

それでも何もしなかったのは、ステラのことを信じていたから。

ステラは本気でユーリとアクアの間関係を好ましいと感じている。

それをアクアは知っていた。

だから、きつとユーリとアクアの間関係を引き裂かないでいてくれるはず。

そう思いながらも、心がちぎれそうだとアクアは感じていた。

アクアの真実がユーリに伝わって、ユーリはショックを受けているように。

それがアクアに不安と罪悪感を生んでいた。

ユーリを傷つけるものを憎悪していたはずなのに、自分がそうなっている。

その事実がとてもつらくて、悲しくて。アクアは一人で震え続けたいた。

ユーリは間違いなく混乱している。自分が何を言っているのか理解しているかすら怪しい。

それでも、ユーリがアクアのいない人生に意味なんて無いと言って

いたこと。

その事実が、アクアに大きな安心感を与えていた。

ユーリを傷つけてしまったかもしれないけれど、それでもユーリに嫌われることだけはない。

そう信じることでできたから。たとえば、ユーリがアクアのことを悪と認識しているとしても。

それから、ユーリはカタリナに相談する。

やはり、カタリナはユーリにとっても大きな存在なんだ。

そう感じたアクアには、カタリナを操っていたことが罪悪感としてのしかかっていた。

ユーリがカタリナをどれほど大切に想っていたのかなど、初めからわかっていたのに。

そう知りながらユーリの大切を奪ったことがどれほど罪深かったのか。アクアは改めて自らの罪を実感した。

それでも、カタリナはアクアのことを大事にしてくれている。

その事実が、アクアにとって大きな救いとなっていた。

カタリナを大切に感じていた自分は間違っていなかった。カタリナを信じきれなかったことが間違いだった。

そんな実感とともに、改めて自分にとってカタリナがどれほど大事かを確認していた。

そして、シイの言葉がユーリになにかの覚悟を決めさせたようだ。初めて敵対した時、アクアはシイを殺そうとしていて、殺せなくて。

シイがその時死ななかつたことを、アクアはとても喜んでいた。

やはりシイはユーリの家族として大切な存在だと、アクアははつきりと信じることでできた。

それから、アクアとユーリが2人で話す日がやってくる。

アクアはユーリから己の罪を問われているときでも、落ち着いた心持ちでいた。

ユーリは何があっても自分から離れることはない。そう確信していたから。

ゆつくりとアクアは自分の行動について話していく。



ユーリはその度に自分を責めているようで、それがアクアには最もつらいことだった。

一つ一つアクアは己の罪を話していき、そしてユーリはそれを受け入れる。

ユーリはとても苦しんでいたようだった。それでも、アクアを大好きでいるという。

そしてアクアはついユーリを抱きしめてしまう。ほとんど何も考えず衝動的に。

ユーリはすぐに幸せそうになって、アクアを抱き返す。

だから、アクアはもっと強くユーリを抱きしめていた。自らの幸福を伝えるように。

ユーリがアクアのすべてを受け入れて、アクアは大きく満足していた。た。

これからは、ユーリとアクアと、たくさんの仲間達。皆で永遠に過ごす。

アクアの花ならば、簡単に実現できることだから。

ユーリとの2人の世界を思い描いていたこともあったけど、それよりもずっとずっと幸せだ。

そんな事を考えながら、アクアはほぼすべての人とモンスターを乗っ取っていた。

事実上世界のすべてを支配したアクアは、それでも一部の存在だけは見逃す。

そして、今アクアに操られていない者は、いずれユーリと出会う運命にある。

幸せな未来をはっきりと想像しながら、アクアは笑った。

## if 墮落するユーリ

ぼくは人型モンスターを何度か倒すことに成功して、ステラさんがその疲れを癒すために甘やかしてくれた。

その中で、ステラさんに溺れてはどうかという提案をされたぼくは、ステラさんの誘惑に逆らえなかった。

「ス、ステラさんに溺れてしまいたいです……」

ステラさんはぼくの言葉を聞いて妖艶に微笑む。そのままぼくはステラさんにキスをされた。

なんだか頭がぼうつとしてきて、ステラさんの事しか考えられなくなってしまった。

ステラさんに頭を抱きかかえられて、ステラさんの柔らかさと匂いに頭がくらくらしていた。

そのまま頭を撫でられて、ぼくは落ち着きと興奮を同時に感じていた。

「ユーリ君、よくぞその決断をしてくれました。さあ、私に溺れて……」

ステラさんはゆっくりと服を脱ぎ捨てていって、ぼくはそのままステラさんと関係を持つことになった。

次の日も、また次の日もステラさんに溺れていたが、ぼくの中には冒険をしなくても良いのかという焦りがあって。

そんな考えを見透かしたかのようにステラさんはぼくの頭を撫でながら言葉をかけてくる。

「ユーリ君は今までずっと頑張っていましたよね。だから、少しくらい休んでも良いんですよ。なんなら、ずっと休んでいたとしても私が何とかしてあげます」

ぼくはそんなのじゃダメだと思いつつも、ステラさんの言葉に逆らえないでいた。

ステラさんに触れられると、なんだか安らいで意思の力が弱くなっていくような感覚があったのだ。

そのまま、ぼくはされるがままになってステラさんに抱きしめられ

る。突き放さないといけないはずなのに、なんだか心地よくなって力が抜けていく。

そしてステラさんにキスをされて服を脱がされていき、今日もステラさんに溺れることになった。

ぼくは全く冒険者として活動しなくなっていて、ステラさんとずっと過ごしていたが、アクアに構う事をねだられたのでアクアと遊んでいた。

すると、アクアから想像もしていなかった言葉をかけられる。

「ユーリ、ステラとお楽しみ？ 次はアクアがユーリを溺れさせてあげようか？」

なぜアクアはぼくがステラさんに何を言われたか知っているのだろうか。そんな疑問もアクアにキスをされることで消えていく。

そのままアクアに何度もキスをされて、ぼくはだんだん夢見心地になっただけだった。

ぼくからもアクアにキスを返していると、アクアはとてもいい笑顔を見せてくれて、その笑顔に誘われるように、ぼくはもつとアクアとキスをしていった。

そのままアクアはぼくの全身にへばりついてくる。

「アクアの事を何も知らない子供だと思っっている？ ステラとユーリが何をしていたか、アクアはよく分かっている。ユーリ、アクアも同じことをしてあげるね」

そのままアクアに流されたぼくはアクアと結ばれることになった。

アクアはぼくと結ばれたことが嬉しいようで、いつもは平坦な声がとても弾んでいた。

それからの日々はステラさんと過ごしたり、アクアと過ごしたり、2人と一緒に過ごしたりしていたが、それを見かねたのかカタリナがやってきた。

「あなた、どうしてそんな事をしているのよ。あたしと一緒に冒険者の頂点を目指すって夢はどうなったの？」

「それは……ごめん、カタリナ。ぼくはもうダメになってしまったから、いい仲間を探してほしい」

カタリナはなんだか泣きそうな顔になっている。

ぼくはその顔を見て慌てたけど、ぼくが言葉をかけたところでカタリナを慰めることはできないと分かっていった。

だけど、続くカタリナの言葉はぼくの考えとは反していた。

「ねえ……あんたが何で冒険者を辞めようとしているのかは知っているわ。ステラ先生やアクアとただれた生活を送っているんでしょ？

……あたしじゃダメなの？ あたしの方が、もっとあんたを満足させられる……」

カタリナはさすがのような顔でぼくを見つめてくる。これ以上墮ちていってしまっても良いのだろうか。

でも、カタリナの悲しそうな顔は見たくない。いや、カタリナならきつと立ち直ってくれるはず。

いろいろと考えて言葉を口にできないでいると、カタリナは少しずつ服を脱いでいった。

「あんたは何も考えなくていいわ。あたしが悪いんだから、気にしないでいいのよ。ユーリ、あたしをあんたの物にして……」

そのままカタリナを拒絶できなかったぼくは、カタリナにも溺れていくことになる。

カタリナはずっと媚びるような顔をしていて、強気なカタリナをぼくが殺してしまったかのように感じた。

そのまま、カタリナもぼくたちと色に溺れた生活を送るようになった。

それからの日々はステラさんの家ですつと過ごしていたのだが、ぼくが関係を持つ人がだんだん増えていった。

「ユーリ様、色をお望みでしたらわたくしを求めてくださってもよろしいのに。存分にもてなして差し上げますわ……」

「ユーリ君、私の風は閨でも便利なんだよ。その感触を味わってみたくないかな？」

「ユーリ君、ハーピーがどんな感触なのか知りたくない？ わたしが教えてあげるね」

「ユ、ユーリさん。わたしだつてユーリさんとずっと一緒に居たいん

ですつ。わたしも混ぜてくださいっ」

ぼくの知り合いみんなと関係を持つようになって、ステラさんの家でずっとただれた生活を送っていた。

どうやって稼いでいるのか、一切生活に困ることは無いまま墮落した日々を過ごしていくことになって。

ぼくはどこで間違えてしまったのだろう。決まっている。ステラさんの誘惑に勝つべきだったんだ。

罪悪感を抱えながら日々を送ることになったが、それでもぼくは幸せだった。

アクアはステラとしてユーリを誘惑している際に、ユーリが承諾したことに喜びと驚きが混ざったような気分です。

ユーリを墮落させることはきっと楽しいだろうが、ユーリは冒険者の夢を諦めないだろうと考えていたからだ。

だが、ユーリがステラに溺れることを選んだことで、アクアはこの機会を利用してユーリを自分から離さないようにと計画した。

1つ目に、ユーリがアクアの一部に触れることで受ける快感を増すことで、アクアが操っている人とユーリが接するときには逃げることを考えないようにした。

その結果、ユーリはアクアが操るステラの誘惑から全く逃れられなくなった。

2つ目に、アクアとしてユーリを誘惑して結ばれて、カタリナとしてもユーリと関係を持った。

カタリナとしてユーリを溺れさせていると、カタリナの悲鳴のような声が聞こえた気がしたアクアは、ユーリのいない所でいったんカタリナを解放した。

そしてカタリナと問答をしていたアクアだったが、ユーリと行為をする時だけでも解放してほしいとカタリナに懇願されて、カタリナに体を返すことにした。

それからというもの、カタリナは必死でユーリの興味を自分に向けようとユーリに対して積極的に媚びていった。

そんな生活を送っていると、サーシャやアリシアたちがユーリの様子を見にやってくる計画を立てていた。

せっかくユーリを自分に縛り付けているのに邪魔をされてはかなわない。

アクアは3人の体に乗っ取って、そのままユーリをさらに墮落させるための道具として使った。

ユーリヤは1人だけ離れたところに居ると違和感を持たれかねないと、ユーリとの距離を縮めさせることに。

だが、アクアの考えていない副産物として、他の人間を操っている時よりもユーリヤとしてユーリと触れている時の方が鮮明にユーリを感じる事ができていた。

アクアの五感は未熟だったので、アクアとしてユーリに触れている時よりも人間としてそうする方がユーリを感じられていたのだ。

ユーリヤとして結ばれることで、今までの喜びをさらに上回る事になり、アクアはとても興奮していた。

スライムの特性を生かした遊びをユーリとする喜びがあったから、アクアとしてもユーリとふれあっていたが、そうでなければずっとユーリヤとしてユーリと関係を持っていただろう。

墮落した日々を過ごす中でユーリはアクアから離れることなどまるで考えられなくなっていて、アクアは永遠にユーリをステラの家という監獄に閉じ込めておくことに決めた。

カタリナも一緒に過ごせる日々がやってきたので、アクアは毎日を楽しんでいた。

ユーリはこれからもずっとアクアから離れることはできないだろう。

if カタリナとの未来・偽

カタリナと買い出しに出かけた日、カタリナにかけられた言葉がぼくの運命を変えた。

「あんたはあたしもデートしたいって言ったら、連れて行ってくれる……？」

ぼくはその言葉に大してすぐにカタリナとのデートを想像した。

とても魅力的に思えたので、すぐにうなずいてしまった。

「したいよ、カタリナとデート。どこに出かけるのが良いかな。どこでも楽しいだろうけどね」

「そう、そうね。なら、今度デートしましょう？ 2人つきりで出かけるのよ」

ぼくはカタリナと予定を詰めてから帰っていく。

それからずっとカタリナとのデートが待ち遠しかった。

そして訪れたカタリナとのデート当日。

買い物をしたり、食事をしたり、色々と回った後に人気のない公園で2人きりになっていた。

カタリナと手を繋いでのんびりしていると、カタリナは柔らかく微笑みながら話しかけてくる。

「今日は楽しかったわ。あんたにしては悪くなかった。……これはそのお礼よ」

カタリナはちよつと背伸びをしてぼくにキスをしてくる。

ぼくはカタリナの唇の感触や温かさにドキドキしていた。

しばらくしてカタリナが離れていき、名残惜しさを感じて。

ぼくはカタリナの事が好きなんだとその時はつきりと実感できた。

「カタリナ、ぼくはカタリナが好きだ。これからもずっとデートをしたりしながら一緒に過ごそう」

「ほんと、遅いのよ。あたしがここまでする前に自分から言いなさいよね。でも、あたしだってあんたが好きよ。ずっと、一緒に居ましようね」

それからぼくはカタリナと付き合う事になり、休日は大体カタリナ

と一緒に過ごすことになった。

外出したり、同じ部屋で過ごしたり、色々なことを一緒にしていた。そうする中で、ぼくたちは同じ部屋で過ごすことになった。

アクアも一緒だけど、気を使って2人きりにしてくれることも多い。

そんなある日、カタリナと一緒に布団で寝ようと誘われて、それからは同じ布団で隣同士で寝ることになった。

しばらくして、カタリナとゆつくり過ごしていると、カタリナからある提案を受ける。

「……ねえ、ユーリ。あたしたちもこれまで色々としてきたけど、まだしてない事があるわよね……?」

カタリナはそう言ってぼくにキスをしてきて、舌まで入れてくる。それでカタリナが何をしたいか察したぼくは、カタリナと関係を持つことになった。

「ふふ。あんたとこうする事になるなんてね。でも、あたしは幸せよ。あんたはどう?」

「もちろん幸せだよ。カタリナが隣にいてくれることが、とつても嬉しい」

それからもずっとカタリナと過ごしていると、ぼくたちの間に子供ができる事になった。

しばらく冒険者としての活動を休んでもいいくらいの貯蓄があったので、子育てのために冒険者として過ごすことはいったんやめた。

アクアも子供を育てることをしっかりと手伝ってくれて、子供はぼくたちよりアクアに懐いているくらいだった。

子供がある程度大きくなると、サーシャさんやステラさんに子供を預けて冒険者としての活動を再開した。

勘を取り戻すために少しの期間を要したけど、ぼくたちは順調に生活する事ができていた。

それから、カタリナと結婚してカーレルの街で冒険者としてずっと過ごすことになった。

オーバースカイに新しい仲間が増えることもあったし、新しい子供



ができることもあった。

それでも、大きな問題は起こることなく生活できていて、ぼくたちはずっと幸せだった。

アクアはカタリナとしてユーリにデートを持ちかけた時、カタリナに対してわずかな罪悪感があった。

だが、ユーリとともに過ごせる喜びの中で、いつしかカタリナの事を忘れ去っていくことになる。

ユーリとデートをしたり、色々とふれあったりする楽しみを味わいながら、カタリナの姿でユーリと徐々に関係を深めていった。

そしてカタリナとユーリの子供ができた時、アクアは自分とユーリの子供のように感じていた。

だから、子供が健やかに育つように、カーレルの街の大勢の人間を支配していく。

そうしてユーリと過ごす日々は穏やかで、暖かくて、アクアはとても幸せだった。

カタリナはアクアに操られる自分の体がユーリとデートをしている姿を見て、ほんの少しの喜びと

大きな苦しみの中に居た。

（ユーリがあたしの事を好きなのは間違いない。それだけは信じていい。でも、ユーリはあたしがどうなっているか気づいてくれない。ユーリが気づいたところであたしに体は帰ってこない。分かっているのよ、そんなことは。

でも、あたしの言葉でユーリと話したい。あたしとしてユーリにふれあいたい。アクア、あたしに体を返してよ……）

それからアクアが操る自分がユーリにキスをしたとき、カタリナはとても深く傷ついていた。

自分の事を好きはずのユーリと、自分の体を操っているアクアが結ばれる姿は、カタリナが望んでいたユーリとの未来とは程遠かった。

(ユーリの唇の感触はあたしも感じる。ユーリの温かさも。ユーリとキスする瞬間を待ち望んでいたはずなのに、こんな形であたしの初めてのキスが奪われるなんて……ユーリはあたしの顔が好きだったの？

いや、顔だけならもつといい態度の相手になびくわよね……ユーリはあたしの何を好きになってくれたのよ?)

それからカタリナは勝手に動く自分の体とユーリが距離を近づける姿をずっと見続けていた。

カタリナが理想とするようなユーリとの生活を、自分とは全く関係のない形で行われている。

その事実がカタリナを徐々に追い詰めていった。

(あたしとユーリがしたかった事がだんだんアクアに奪われていく。あたしが体を取り戻しても、あたしがすることはユーリにとっては新鮮味のない行動でしかない。どうして、こんな事になってしまったのよ……)

ユーリとカタリナの体が結ばれている瞬間は、カタリナにとっては快感と苦痛で訳の分からない瞬間となっていた。

ユーリに求められることは嬉しい。でも、ユーリが見ているのは本当の自分ではない。

いくつもの思いが混ざり合ってカタリナの感情はぐちゃぐちゃになっただけだった。

(ユーリはあたしの体に夢中になっている。あたしの体はユーリの好きな体。それとも、好きな人なら何でもいいのかしら？ ユーリの味も匂いもいっぱい感じるのに、あたしはそれを本当の意味では受け止められていない。

ユーリ、あたしにどうして気づいてくれないの？ あたしの事なんてほんとにどうでもよかった？ アクアが本当の好みで、だから夢中になっているの?)

ユーリとカタリナの間でできた子供は、ユーリとカタリナそれぞれの特徴を受け継いでいた。

まさに2人の子供のはずなのに、そこに自分は全くかかわっていない

い。カタリナは喜ばいいのか、悲しめばいいのか、何も分からなくなっていた。

(アクアもユーリの子供を育てることに夢中になっている。それはそうよね。2人の子供みたいなものなんだから。まさか、子供を作るためにあたしの体を？ モンスターと人の間に子供は出来ないけど、まさかそこまで？ ……ユーリとあたしの子供なのに、あたしからその子を奪わないでよ、アクア……)

カタリナはそれからもユーリの幸せな生活を見続けていた。

ユーリが幸せそうなことは嬉しい。自分の事を好きだと感じるのも嬉しい。

そう考えて自分の感情をぐまかそうとするカタリナだったが、いつしか苦ししさしか感じなくなっていた。

(あたしのいるはずの場所に、あたしじゃない誰かがいる。ユーリの隣にいるのはあたしのはずなのに、どうして奪われてしまったの……アクア、あたしの居場所を返してよ……)

## if ユーリヤとの未来

ユーリヤを失いそうになった次の日。

ぼくはユーリヤと1日を過ごし、最後にユーリヤと同じ部屋で一緒に寝ることになった。

ユーリヤの顔を見ていると、安心感が湧き出てきて止まらない。本当にユーリヤが無事でよかった。

ぼくにとってユーリヤは欠かすことのできない大切な人になっていたので、ユーリヤとこれからも一緒に居られる喜びをかみしめていた。

ユーリヤはそんなぼくの顔をじっと見て、ぼくに微笑みかけてくる。

「ふふっ、わたしの無事がそんなに嬉しいんですか？ 気が変わっちゃいました。また今度と言いましたけど、今にします」

そのままユーリヤはぼくにキスをした。確かに今日頬にキスをされた時に、また今度唇にするって言われていたけど。

ぼくはすつごくドキドキしながらユーリヤの顔を見て、ユーリヤの穏やかな顔に見とれた。

ユーリヤとずっと一緒に居られたらどれだけ嬉しいのだろう。もしかして、この気持ちが恋なのかな。

だとすると、ユーリヤを失いたくないと思ったのは、ユーリヤに恋しているから？

どうだろうか。カタリナだってアクアだってステラさんだって失いたくない。

でも、ユーリヤといるとすつごくドキドキする。他の人という時よりも強いと思う。

なら、ユーリヤの事が好きなのかな。他の人とは違う意味で。

「ユーリさん、今日は楽しい時間になりましたよねっ、まずは、もっと関係を深めましょうっ」

そう言っつてユーリヤはぼくの頬を両手で挟んでもう一度キスをしてきた。今度は舌をぼくに入れてきて、ぼくは胸が爆発するんじゃない

いかと感じた。

しばらく経ってユーリヤが離れていく。

少しの名残惜しきとユーリヤが好きだという確信がぼくの中に残った。

だから、ユーリヤにぼくの想いをはっきりと伝えることを決めた。「ユーリヤ、ぼくはきみが好きだ。ユーリヤとずっと一緒に居たいし、色々な経験がしたい。ぼくが家族を持つときに、隣にはユーリヤがいてほしい」

ぼくの言葉を聞いたユーリヤは両手を胸の前で握って晴れやかな顔になる。

この顔をしてくれるってことは、ユーリヤもぼくの事を好きでいてくれているはず。

「わたしも、ユーリヤさんの事が好きですよ。これからはアクアちゃんともども、同じ部屋で暮らしちゃいましょうかっ」

アクアとユーリヤとぼくの3人で過ごすのか。その光景を想像するだけで幸せな気持ちになる。

アクアの事はもちろん大好きだけど、ぼくが恋をしているのはユーリヤだ。ユーリヤの隣に居られたらきつといつまでも楽しいはず。

明るい未来に思いを馳せて、ぼくはユーリヤと付き合う事になる喜びをかみしめていた。

「それでユーリさんっ、せっかく今日は一緒の部屋で過ごすんですから、さっきまでより楽しい事をしましょうねっ」

そう言いながらユーリヤはぼくの服を脱がせていく。何をするかは分かっていたけれど、どうすればいいのか分からないのでユーリヤに身を任せていた。

そのまま、その日にユーリヤと関係を持つことになった。ぼくはユーリヤにずっとリードされっぱなしだった。

次の日、ぼくはユーリヤとアクアと3人で過ごすことにした。アクアにユーリヤと付き合う事になったと伝えた。

「そう。ユーリヤ、ユーリの事を幸せにしてあげて。ユーリ、これからもアクアとずっと一緒」

もちろんアクアとはずっと一緒に居るつもりだったし、ユーリヤにもその話はしていた。

ユーリヤは元々ぼくとアクアと3人で一緒に居るつもりだったみたいで、当然の事だろうという反応をされた。

ぼくたち3人でずっと一緒に居られるのなら、何だつてできるような気がしていたぼくは、アクアとユーリヤがお互いを受け入れてくれている事が嬉しかった。

「ユーリさんの事を幸せにするなんて、当たり前前の事ですよつ。アクアちゃんも一緒にユーリさんを幸せにしましょうねっ」

「分かった。ユーリの事は幸せでいっぱいにする。ユーリ、楽しみにしていて」

「ありがとう、2人とも。だけど、ぼくは2人が一緒に居てくれるだけで幸せだよ」

実際問題、アクアと離れたりしなくていい事はとてもありがたかった。アクアとはずっと一緒に居たぼくの一部のようなものだから、離れ離れになる事には耐えがたい苦痛が伴うはずだ。

その心配がなくなったことで、とても前向きにユーリヤとのこれらを考える事ができる。

ユーリヤとアクアはとつても仲良しに見えるので、3人で一緒に過ごす機会をこれからも用意しても良いかもしれない。

ユーリヤはそれをどう思うだろうか。アクアを遠ざけると怒るような気がするけど。

まあ、おいおい良い関係性を見つけていけばいいか。オーバースカイとしてチームを組んでいる以上、一緒に居る時間はどうせ多いのだから。

それにしても、ぼくがユーリヤと付き合う事になるなんてね。

出会ったときには全く考えていなかったな。美人だとは思ったけれど、流石にそれだけで好きになりはしないのだし。

でも、ユーリヤと一緒に居る時間の中で、ユーリヤの頼りになる部分や、雰囲気明るくしてくれる所、一緒に居る時の安心感を感じていったことが好きになるきっかけだったのだろう。

直接のきつかけ自体は、ユーリヤを失うかと思つたときだろうけど、それまでに積み重ねた時間があつたからこそ、ユーリヤが死ぬことが恐ろしかったのだ。

これからもユーリヤをより一層大切にしていこう。もちろん、アクアの事も大切にするつもりだけど。

「ユーリさんが今が幸せだというのなら、これから先はもつと幸せになるんですよ。わたしだって、もつともつと幸せになるんですからっ」

「そう。それに、ユーリにはいろいろと楽しい思い出をあげる。アクアにも楽しい思い出を貰う」

きつと2人の言う通りになってくれると、ぼくは素直に信じる事ができた。

2人の言葉にうなずいていると、ユーリヤに右手を、アクアに左手を握られた。

ユーリヤとアクアは手の握り方も、感触も、その他のいろいろなものも違う。全然違う2人に囲まれているのに、ぼくたちはもともと一つだったかのような感覚があつた。

これからはこの3人で同じ部屋で暮らすことになる。ユーリヤとそう決めた。アクアもユーリヤを受け入れてくれる様子だから、上手くやつていけるだろう。

ユーリヤといるとドキドキが収まらないような感覚だけど、アクアといると落ち着く。この2人と一緒に居ると、なんだか暖かい気持ちになれた。

ユーリヤはアクアを受け入れてくれていて、アクアはユーリヤを受け入れてくれていて。だから、ぼくは大切な人たちと一緒に過ごすことをためらわずに済んだ。

2人にはとても感謝している。だから、ぼくも2人を幸せにするために全力を尽くすことを迷わなかった。

まずは、この気持ちを言葉にすることからしよう。2人はどちらもきつとぼくの言葉を喜んでくれる。そう信じているからね。

「ユーリヤ、ぼくの恋人になつてくれてありがとう。アクア、ぼくの

ペットでいてくれてありがとう。2人がいれば、どんなことだってぼくは乗り越えていけるよ。だから、ずっと一緒にいようね」

ぼくの言葉を受けて2人ともこちらを向いて微笑んでくれた。こうして見ると、アクアの笑顔は落ち着いた雰囲気、ユーリヤの笑顔は温かいイメージだ。

アクアのひんやりした手も、ユーリヤの温かい手も、どちらもぼくをととても幸せにしてくれる。

だけど、それだけじゃなくて、ぼくと手を繋いでいることで2人も幸せを感じているのだと2人の顔を見て思えた。

こうしてお互いがお互いを幸せにできているのなら、これからもきつとずっと幸せでいられる。

だから、心配することなんてきつとない。

冒険者を続ける以上、危ないことはあるかもしれないけれど。

でも、ぼくたちならきつと乗り越えられるから。

ユーリヤと、アクアと、生きて行くんだ。

アクアはユーリヤという外面を最大限に活用していた。

ユーリヤはユーリヤを大切に思う感情が大きくなっていくように。

つまり、自分自身を大切にされているということだ。

なぜなら、ユーリヤはアクア自身が生み出した人格。アクアが演じる存在。アクアのオリジナルだから。

だからこそ、ユーリヤが向けるユーリヤへの好意が、アクアにとってはとても心地よかった。

自分が考えた好みの言動を評価されているのだから。

これでアクア自身の本来の人格を好まれていないのならば、話は別だっただろうが。

ユーリヤはユーリヤを好ましく考えながらも、アクアを大切にしているのだから。

そうである以上、アクアにとっては何の問題もない話であった。

これまでにも、アクアはユーリヤの体とアクア自身で感じ方の違うユーリヤを楽しんでいた。



アクアとして、ユーリの体温がじわりと伝わってくる感覚を楽しんで。

ユーリヤとして、しっかりと伝わってくる温度を楽しむように。

ただ、ユーリヤはユーリに告白されたから。

これからはユーリヤとしてユーリの彼女という立場を。

アクアとしてはペットとしての立ち位置を楽しむことができる。

そう考えただけで、アクアは高ぶりを抑え切れないとすら感じた。

ユーリヤとしてユーリと結ばれて、アクアとしてユーリを支えて。

アクアはユーリのそばを全力で楽しんでいた。

ユーリの恋人として接する時は甘やかな心地を。

ペットとしてふれあうときには温かい気持ち。

それぞれ味わいながら、互いの差でより深まっていく喜びで満たされて。

アクアはこれまでよりも、ずっとずっとユーリのそばを幸せに感じていた。

いつしかアクアはユーリとの生活にとっても満足して、ユーリ以外をどうでもいいと感じていた。

それゆえ、邪魔になったものを即座に支配し、だんだんアクアの支配下にある存在が増えていく。

そして、やがてカーレルの街のほとんどの人間はアクアの人形になっっていたのだ。

ユーリと、ユーリヤと、アクア自身と。

その実質2者で過ごす日々を楽しむアクアは、誰よりも自分が幸せだと信じていた。

## if サーシャとの未来

ぼくはサーシャさんに頼まれて、王都で行われる闘技大会に出場した。

そこではミーナと再び戦うことができ、自分でもいい勝負だったと思う。

だけど、最後の最後で踏ん張りきれなくて負けてしまった。

悲しいけれど、仕方のないことだ。ただ、とても楽しかったのも事実。

勝てなかったのは残念とはいえ、十分な成果だと考えていた。

「ユーリ、君に勝って嬉しいよ。最後までどちらが勝つかわからなかったね。また、機会があれば戦いたいよ、僕のライバルである君と」  
「そうだね、ミーナ。今回は本当に楽しかったから。ミーナとまた会えて良かったよ」

「僕も同じだ。また、いずれ」

ミーナはそう言ってぼくの元から去っていった。

それにしても、偶然って面白いよね。まさかミーナとこんなところで再会するなんて。

とはいえ、嬉しい偶然だったな。負けたことは悔しいけれど、ミーナと戦えたのは本当に良かった。

さて、サーシャさんにとって、準優勝という結果はどれほど喜ばしいものなのだろう。

サーシャさんはぼくに勝ってほしかったのだろうけど、どの程度を求めているのかな。

まあ、それは帰ってから分かることか。今はゆっくり休もう。

それから、オリヴィエ様に今回の成果を褒めてもらって、剣をもらって、あとは帰るだけになった。

オリヴィエ様はミーナをかなり気に入っているようなので、大変かもね。

王女であるオリヴィエ様だけど、相応にわがままそうというか。

まあ、ぼくにはあまり関係のないことではあるけれど。ミーナが無

事ならそれでいいかな。

ぼくはカーレルの街へと帰る最中、ノーラという新しいペットと出会った。

猫型のモンスターで、賢くて可愛くて強い。とてもいいペットと言える。

ただ、これからオーバースカイとして活動する時、ノーラをどうするのか。よく考えないとね。

サーシャさんに相談してみるのもいいかもしれないな。

他の冒険者がどんな活動をしているかもある程度知っているだろうし、モンスターをどう扱うか、参考になるかも。

それなりに時間をかけて王都からカーレルの街へ帰る。

そして、サーシャさんに結果を報告しに向かっていた。

サーシャさんから頼まれて出た王都での大会だから、まずはサーシャさんに伝えたかった。

冒険者組合へと向かうと、笑顔のサーシャさんが出迎えてくれる。

「ユーリ様、お疲れ様でした。見事な成果、聞き及んでおりますわ。さすがは、わたくしの見込んだ方。ユーリ様と出会えたこと、素晴らしいことだと思いますわ」

サーシャさんはとても明るい顔で褒めてくれて、気分がいい。

とはいえ、ぼくは優勝できなかったのに、そんなに褒められていいものなのだろうか。

よく分からないけれど、サーシャさんが喜んでくれるのならば、それでいいかな。

「ありがとうございます。サーシャさんの役に立てたのなら、嬉しいですね」

「それはもちろん。ユーリ様は想像以上の成果を出してくれましたわ」

なるほど。王女様も見ていた大会だし、強い人が多いのかな。

何にせよ、サーシャさんにとって十分な結果を出せているのなら、満足だ。

「それは良かったです。サーシャさんにお世話になっている分を、少

しでも返せたでしょうか」

「ええ、それはもう。ユーリ様のおかげですわ」

サーシャさんは満足そうな雰囲気だ。

それにしても、ぼくが王都での大会で勝つと、サーシャさんにどう役立つのだろう。

まあ、気にしなくてもいいか。サーシャさんがろくでもないことを企むとは思えないし。

「これからも、サーシャさんのお役に立てることがあるなら、言ってくださいね」

「ええ。そうさせていただきますわ。ですが、無理をなさらないように。ユーリ様はわたくしにとっても大切な方ですから、傷ついてほしくはありませんわ」

サーシャさんは本当に心配しているんだなって顔をしてきている。

だから、できる限りサーシャさんの期待に応えたいって、つい考えちゃうんだよね。

まあ、それもサーシャさんにお世話になっているからこそだろうけど。

これまでの冒険者活動は、間違いなくサーシャさんのおかげで順調に進んだからね。

「気をつけたいと思います。サーシャさんを悲しませたくはないですからね」

「ユーリ様にもしものことがあれば、わたくしはとても悲しいですから。ですから、難しい提案なら、気軽に断ってくださいって構いませんわ」

サーシャさんはそう言ってくれるけど、できればサーシャさんの頼みなら達成したいものだ。

まあ、オーバースカイの仲間を危険にさらす訳にはいかないから、気をつけるけれど。

ぼくが大切にしたい人たちの利益が反目した時、きつと悩んじゃうんだらうな。

でも、きつと大丈夫だと信じているから。

「ぼくは仲間の命を預かっているので、申し訳ないですけど、そうします」

「ええ。それでよろしいかと。わたくしも、ユーリ様方の実力を完全に見通せるわけではありませんから」

そういうものか。まあ、サーシャさんは戦っているわけではないだろうし。

モンスターの強さを実感しているわけではないのなら、当たり前といえは当たり前だ。

ぼくだって出会ったことのないモンスターの強さは正確には分からないのだし。

「そうなんですネ。なら、無理そうならサーシャさんに伝えます」

「ユーリ様がそうしてくださいれば、よりの確な依頼をできると思いますが」

「だったら、もっとサーシャさんに頼っちゃいそうですね」

「ええ。もっと頼ってくださいまし。それが、わたくしの役割ですから」

サーシャさんの言葉はありがたいけれど、負担になっていないかな。

ぼくはとても助けられているから、できれば頼りたいけどね。

だからといって、サーシャさんに迷惑をかけたくないから。

「サーシャさんに頼る分、サーシャさんも頼ってくださいね」

「でしたら、とあるパーティに出席していただけませんか？」

「別に構いませんけど。でも、礼儀作法を知らないので迷惑にならないですか？」

「ええ、問題ありませんわ。わたくしもサポート致しますので」

サーシャさんが手助けしてくれるのなら、安心かもね。

とはいえ、ずっと一緒にいるわけにもいかないんじゃないだろうか。

その辺、どうなっているんだろう。

「サーシャさんの見ていないところで、問題が発生したらどうすれば

いいですか？」

「大丈夫ですわ。わたくしの部下にも目を光らせさせますので」

「なら、安心していいんですかね」

「ええ。さほど緊張なさらなくてもよろしいかと」

サーシャさんの見立てがこういうところの間違っているとは思わないし、きつと大丈夫かな。

もしサーシャさんに迷惑をかけたらと思っていたけど、頼まれたのなら手伝いたい。

ぼくがサーシャさんの役に立てるといふのなら、嬉しい限りだから。

「だったら、参加させてもらいますね。準備なんかは必要ですか？」

「いえ、こちらで用意しておきますわ」

「分かりました。色々とお世話になってしまいますね」

「こちらから頼んだことですので。問題ありませんわ。では、当日を楽しみにしていますわ」

それからサーシャさんと別れてその日は終わり、しばらくして。

サーシャさんに頼まれていたパーティに参加する日がやってきた。

待ち合わせ場所に向かうと、着飾ったサーシャさんが出迎えてくれた。

いつもは可愛らしい印象のサーシャさんだけど、今日は気品がある。

「今日はようこそいらっしやいました。ユーリ様、こちらへどうぞ」

サーシャさんはぼくの手を取って会場であるエルフィール家の屋敷へと連れて行ってくれる。

なんとなく、サーシャさんは浮き足立っているように思えた。

いったいなぜだろう。まあ、そこまで気にする必要もないか。

「今日はよろしくお願いしますね、サーシャさん」

「ええ。どうぞよろしく願いますわ。さて、衣装に着替えていただきますでしょうか」

今日は普通の服でいいとサーシャさんに言われていて、ちよつと疑問だった。

でも、納得だ。ぼくが持っている服だとふさわしくないだろうな。

そのままサーシャさんの手配した服に着替えて、パーティ会場の控室のような場所で待つ。

サーシャさんも隣にいてくれるので、だいぶ落ち着いた心地でいられた。

他に人は見当たらないけど、どうやってこんな環境を作ったのだろうか。

結構人が来るらしいけど、ここで待っているわけではないみたいだし。

まあ、サーシャさんと2人なのはとても落ち着くから、ありがたい話ではある。

しばらくサーシャさんと談笑したあと、パーティ会場へと連れて行かれた。

すでに大勢集まっている人の目が一斉にこちらを向いて、かなり緊張する。

ただ、ぼくは黙ってサーシャさんに寄り添っていればいいらしいので、まだ楽だ。

これでみんなの前で話をしなくちゃいけなかったら、もう無理だったかも。

サーシャさんは壇上へとぼくとともに歩き、話し始める。いつもは可愛らしいサーシャさんの、キリツとした雰囲気に着きつけられる感じだ。

「ようこそいらつしやいました、皆様。ここにいるのが、冒険者チーム、オーバースカイのリーダーにして、王都での闘技大会で準優勝した、水刃のユーリですわ」

サーシャさんの言葉に合わせて、周囲がざわめき出した。

これはどういう反応なんだろう。まあ、サーシャさんは余裕がありそうな表情なので、問題はないのかな。

サーシャさんの役に立ちたくてここにいるわけだから、サーシャさんの反応が一番大事かもね。

そのままサーシャさんは壇上で話し終え、ぼくと腕を組んで、ぼくのことをいろいろな人に紹介していった。

基本的にはサーシャさんの言葉にタイミングを合わせて相槌を打ったり頷いたりしているだけだ。

サーシャさんにどうすればいいかわからないと言ったら、今のやり方を提案されたんだよね。

おそらく順調にパーティは進んでいって、そのまま解散となった。ぼくはサーシャさんと、まだエルフィール家の屋敷にいる。

他の人達がどうしているのかは分からなくて、サーシャさんと2人きり。

おそらく、みんなもう帰ったのだらうけれど。そうじゃないと、サーシャさんは他の人達の対応をしているだろうし。

サーシャさんとはばらく話していると、なにか彼女の雰囲気が変わった。

そのまま、真剣な様子でぼくに話しかけてくる。

「ユーリ様、わたくしと共にエルフィール家を発展させていくつもりはありませんか？」

それはどういう意味だろうか。サーシャさんが協力してほしいことなら、できる限り手伝うつもりではあるけれど。

でも、ぼくが貴族の家を発展させるって、どうやって？

そもそも、なぜぼくに助力してほしいのだろう。

色々と考えていると、ぼくの疑問を察したのかサーシャさんは説明に移っていった。

「わたくしは、ユーリ様と共に生きていきたい。わたくし自身がエルフィール家を継ぐわけではありませんから、活動にはある程度の方が利くのですわ。結婚も、ね？」

サーシャさんはこちらをじっと見つめている。

もしかして、ぼくと結婚したいという意味なのだろうか。

そうだとすると、なぜ今言いだしたのだらう。タイミングはまあ良いか。

もつと気になるのが、そもそもサーシャさんがぼくを好きなのかど



うかだ。

よく分からないけれど、貴族って利益のために結婚するイメージがあるから。

「えつと……ぼくにはオーバースカイとしての活動があるんですけど、それでもエルフィール家を発展することを手伝えるんですか？」  
「ええ、もちろん。ただ、少しばかり活動を縮小していただくことになるかもしれません」

そうになると、少しばかり困ってしまう。

オーバースカイとしての目標は、冒険者の頂点を目指すこと。

だから、活動を縮小すると遠ざかってしまうから。仲間やアリシアさんたちの期待を裏切りかねない。

サーシャさんと仲間たち、どちらの希望を優先すればいいのだろうか。

「だとすると、ぼく一人で決めるわけにはいきません。仲間たちに相談しないと」

「そうですね。ユーリ様の誠実さが伝わってくるようですわ。ですが、オーバースカイの皆様に飢えさせるつもりはありませんわ。でするので、そのあたりの心配は必要ありませんわ」

つまり、割の良い仕事を振ってくれとかなだろうか。

心配事の1つが消えたので、サーシャさんの提案を受けてもいい理由が増えた。

とはいえ、どうしたものか。そもそもぼくはサーシャさんをどう思っているのだろうか。

サーシャさんに答えを返すために、ある程度の時間がほしい気がするな。

「それは助かります。ですが、いったん持ち帰らせてください。心の整理が必要だと思うので」

「ええ、構いませんわ。断るにしろ、受けるにしろ、しっかりと考えてくださいまし」

サーシャさんは断ってもいいんだと伝えてくれているようです。

だから、前向きに考えてみたい気分になった。

できればサーシャさんを悲しませたくはない。とはいえ、冒険者としての活動も大事にしたい。

本当に誰かに相談したいな。どうすればいいのか、悩ましいから。それからサーシャさんと別れて、みんなに今回の件を相談した。

カタリナにユーリヤ、アクアはどちらでも良い様子。

アリシアさんとレティさん、ステラさんはサーシャさんなら悪いようにはしないだろうと。

なので、もう一度サーシャさんと話をして、それで結論を出そうと考えた。

サーシャさんがどういう思いでこの提案をしたのか、聞きたかったから。

それから、サーシャさんと話をする場を設けることに。

サーシャさんは色々はこちらに伝えてくれるつもりらしい。

一体どんな内容か気になるけれど、すぐにわかることだから。

サーシャさんとエルフィール家の屋敷の一室に入り、2人で向かい合って話をする。

今のサーシャさんは明るい表情で、いつもの可愛らしさが増しているような。

「ユーリ様はある程度前向きに感じてくださっている様子。ありがたいことですよ」

「そうですね。サーシャさんにはお世話になっていますから、その恩を返せるのなら」

「その気持ちは嬉しいですよ。ですが、ユーリ様はわたくしのことをどのように思っていますの……？ わたくしは、ユーリ様を慕っていますわ」

サーシャさんは瞳をうるませてこちらを見る。

ぼくがサーシャさんをどう思っているか、か。もちろん大好きではあるけれど。

その気持ちは恋や愛なのかはわからない。

ただ、サーシャさんとなら、きつと試練が待っていても乗り越えられると信じられる。

「この気持ちか恋や愛でないのだとしても、サーシャさんのことは信じられますから。だから、きつとうまくやれるはずです」

「わたくしはあなたを愛しています。ですが、打算があることも事実。そうだとしても、ですか？」

「サーシャさんなら、きつとぼくの大切な人を傷つけないでくれますから。ぼくを利用するくらい、へっちゃらです」

「つまり、わたくしと結ばれてもよいと……？」

サーシャさんのその言葉に、ぼくは頷いた。

すると、サーシャさんは花開くような笑顔をみせてくれたんだ。

そして、サーシャさんはぼくにキスをする。

これからがきつと始まりなのだろう。そう感じる瞬間だった。

アクアにとって、サーシャは打算的ではあるが、ユーリの役に立っている人物という認識であった。

だから、サーシャがユーリに好意を示したとユーリから伝わった時、アクアはこれも打算なのだろうと考える。

ただ、サーシャが打算で行動していたのだとしても、ユーリのことを傷つけることはないだろう。

そう考える程度には、アクアはサーシャに信頼を向けていた。

事実、サーシャとユーリが結ばれてから、サーシャはユーリにとっても尽くしていた。

もちろん、ユーリを表舞台に出してエルフィール家の名声を向上させようとはしていたのだが。

とはいえ、ユーリの負担を考慮したとしても、ユーリは十分な幸せを手に行っているようにアクアは感じて。

それに、サーシャはアクアを含めたオーバーブラスカイのメンバーも大切にしていた。

無論、オーバーブラスカイとして活動するほうがユーリは活躍できると、サーシャは計算しているのだろう。

ただ、アクアにとってサーシャは十分に親しい相手で。

だから、ユーリとサーシャが仲睦まじく過ごす姿は、アクアには微笑ましかった。

近頃、サーシャの妊娠が判明したらしい。

アクアはそれを知って、ユーリとサーシャの子供をどう可愛がるか、とても楽しみにしていた。

サーシャとユーリと自分で過ごす毎日に、新しい仲間が加わる。

十分に楽しいだろう未来を想像できて、アクアは現状に満足していた。

## if アクアとひとつに

ぼくはアクアと2人で遊んでいて、その中でアクアに食べちゃおうかと言われた。

そんなぼくは、ついアクアに食べられる想像をしてしまう。アクアに取り込まれて、アクアの一部として存在するべく。

魅力的に思えてしまつて、つい我慢ができなくなつて。ぼくは引き返せない一線を踏み越えたんだ。

「ねえ、アクアはぼくの意識を残したままにできる？　なら、食べられたい。アクアと一緒にになりたいよ」

「なら、ユーリを食べてあげるね。ユーリの心は、アクアの中に残しておくから」

そのまま、ぼくはアクアに取り込まれて、ゆっくりと溶かされていった。

本当ならきつと痛いのだろうけれど、全く苦しみのだぐいはなくて。

これからアクアとひとつになるんだと、嬉しさがあふれてしまったんだ。

そして、ぼくの体はなくなつて、ぼくは何も動かせなくなつてしまふ。

それでも、アクアに直接思考を伝えられること、アクアの考えが流れてくること。

それらがとても心地よくて、だから、食べられてしまつてよかったと。そう思えた。

(アクア、ぼくは美味しかった?)

(さあ。アクアは味がわからないから。でも、今は最高の気分。ユーリがアクアの中にあるつて感じるから)

つまり、アクアも幸せでいてくれるつてこと。

良かった。ぼくが勝手に先走つて、アクアを悲しませていただけだとしたら。ぼくは後悔していただろうから。

(ユーリの意識が残っていないのなら、きつと寂しかった。でも、ユー

リがいい方法を教えてくれた)

アクアにはぼくの考えがすべて伝わるみたいなんだ。だから、少し恥ずかしい気もする。

そして、アクアの考えはアクアがぼくに伝えたいと考えたことだけが流れてくる。

だから、ぼくはアクアの思うがままなんだろうな。でも、それが心地良いくらいだ。

(ふふ。やっぱりユーリはアクアが大好き。よく伝わってくる。アクアもユーリが大好き)

当たり前のことなんだけどね。ぼくがアクアを大好きなのは。

だって、これまでずっと一緒にいたから。そして、ずっと幸せだったから。

今ではこれまでのように、アクアと球遊びとかはできないけれど。だとしても、今の新しい幸せの形が、とても素晴らしいと思えるんだ。

(ユーリが幸せならいい。後悔していたとしても、体は戻せないから) そうだよな。取り返しがつかないと分かっていたのに、自分を抑えきれなかった。

でも、そうか。うっかりぼくが悔やんでいたら、アクアを悲しませていたのか。

うかつな行動だったかもしれないな。だけど、本当に幸せだから。アクアとつながっていると考えるだけで、どうにかなりそうなくらい。

(アクアも似たような気持ち。ユーリをずっと感じていられる。ユーリの心を直接味わえる。とてもいい気分)

ぼくもアクアの心を直接感じてみたい気もするけど。

でも、アクアも隠したいこととかが有るのかもしれないからね。

無理には言わないし、言えない。

ぼくにとって、アクアの幸せが何よりも大切なことだから。

(ありがとう。ユーリがアクアを大切にしてくれて、とても嬉しい。ユーリには、なにか願いはある?)

どうだろうね。強いて言うなら、みんなと話せないことが寂しいくらいか。

でも、仕方のないことだから。ぼくはみんなよりアクアを選んだんだから。

ぼくがいなくなったと知ったら、みんな悲しんでくれるかな。

でも、悲しんでくれるよりも、幸せでいてくれる方が嬉しいかもね。

(そう。でも、他の人達に会わせることはできない。諦めてもらえない)

仕方のないことだよ。わかっているよ。

ただ、少しだけ感傷のようなものがあっただけだから。

結局、みんなと最高の冒険者になることはできなかったな。

でも、後悔はしていないんだ。みんなには悪いかもしれないけれど。

(カタリナは怒りそう。でも、きつと許してくれる)

そんな感じだよ。カタリナは態度は悪いかもしれないけど、優しいから。

ぼくだって何度助けられてきたことか。

でも、そうだよ。他の人も、もうふれあえないんだ。

それに、アクアと手を繋いだり、体をアクアの中に入れて遊んだりすることもできないね。

(なら、スライムの体で良ければ用意するけど。でも、みんなとは会えないと思う)

だよ。スライムが現れてぼくだって言っても、誰が納得するのやら。

でも、アクアと触れ合えるのだと思うと、嬉しいな。

もちろん、いまアクアと心がつながっている感じも最高なんだけどね。

(全部アクアの体で、ユーリに動かせるようにするだけ。だからユーリ、お願いしてみて)

アクア、お願い。ぼくはアクアの感触や冷たさを、また感じてみたんだ。

(分かった。なら、しばらくのあいだは体を貸してあげる)

そう言ったアクアはそのまま新しい体を増やしていく。

そして、すぐにぼくが動かす体はできあがった。

ぼくがいつものように体を動かそうとすると、そのまま動かせる。

ただ、スライム特有の動きはできないみたいだ。

(ユーリが慣れてきたのなら、そういうこともできる)

体が分かれても、アクアと思考はつながっているんだな。とっても

嬉しいかも。

それにしても、なんというか、あまり違和感がないな。

スライムの体を動かすのだから、もつと変な感じがしてもおかしくないのに。

(ユーリに合わせて調整したから。ちゃんとアクアを感じられるように)

そっか。アクアの体温とか感触を感じたいって言ったもんね。

だとすると、アクアと手を繋いだら冷たいのかな。

そんな事を考えていると、ぼくが動くより先にアクアが手を差し出してきた。

その手をつなぐと、アクアのひんやりした温度がまず伝わって。

次に、弾力を兼ね備えた柔らかさを感じた。

やっぱり、アクアとふれあっていると落ち着く気がする。

アクアを大好きだという気持ちだが、気持ちを和らげてくれるのかな。

(ふふ。大好きって思ってくれるのは嬉しい。アクアも大好き)

アクアから直接気持ち伝わってくるこの感覚も素晴らしいけれど。

せつかくだから、アクアの声を耳から感じてみたいな。

平坦なようで、聞き心地の良いあの声を。

「ユーリ、アクアの全部が好きみたい。アクアも、ユーリの全部が大好きだけど」

そうかもね。声も姿も、表情も仕草も、能力も種族も。

きつと何もかもが大好きなんだと思う。



そんなアクアだからこそ、食べられてしまいたいとすら考えたのだろうか。

(ユーリの全部はアクアのものだけけれど。せっかくだから、ユーリの初めてを奪いたい。ユーリ、キスしよう)

もう声を出すのをやめちやったのか。名残惜しさがあるな。

でも、アクアがやりたいようにするのがいいか。

それにしても、キスカ。まあ、どうせぼくに恋人ができることはないから。

未来の相手に不誠実だとか考える必要はない。

だから、アクアが欲しいものは全部あげていいと思う。

他にぼくの大切な初めては思い浮かばないけれど、アクアが望むのならば。

しかし、アクアにキスをするとなると、照れくさいな。

ぼくは恥ずかしさのようなものを振り払って、アクアに向かい合う。

そして、ゆっくりと顔を近づけていって。そして唇どうしが触れ合った。

アクアの唇はプルプルしていて、とても心地が良い。

何なら、何度でもキスをしたいと思えるほどに魅力的だった。

(ふふ。これで、今日のユーリの体はおしまい。次の機会は、いつにしようかな)

アクアの言葉通り、ぼくの体は動かさなくなってアクアに取り込まれていく。

そうか。これからはアクアの気分次第でしか、何もできないんだな。

まあ、アクアの手のひらの上だというのならば、嬉しいくらいだけだ。

それからアクアとひとつの存在としてしばらく過ごして、ある日。

(ねえ、あんた。いなくなっただと思っていたら、アクアに食べられていたのね。バカじゃないの？ まあ、あたしも同じバカなんだけど)

こんな風に、急にカタリナが話しかけてきた。

つまり、カタリナもアクアに食べられちゃったってこと。

カタリナはそれで大丈夫だったのだろうか。

今伝わってくる思考からは、カタリナらしきは失われていないと思うけれど。

(ごめん。冒険者の頂点に立つって夢を捨てちゃって)

(まあ、文句はいっぱいあるけれどね。いいわ。あんたの心を直接感じられる。それも悪くはないから)

カタリナとはもう会えないと考えていたから、こうして会話と云うか、意思疎通ができることは嬉しい。

ただ、無理やり食べられていないかは心配だ。

アクアを信じていないわけじゃないけど、自分から食べられるなんて人はぼくくらいだろうし。

(ユーリがどこにいるのか教えてあげたら、カタリナはすぐに決めた)  
(アクア、そんな事を言ったら……仕方ないわね。あんたと離れ離れになるより、こつちのほうがマシってだけよ)

カタリナはそこまでぼくのことを大切に感じてくれていたのか。

申し訳ないような、嬉しいような気持ちがあるな。

ぼくは結局、アクアに食べられることを我慢できなかったのに。

でも、カタリナとも一緒にいられることを我慢できなかったのね。

それから、カタリナとも思考を伝え合う関係になって。

しばらくの時間を過ごしていると、どんどんアクアに食べられた人が増えていった。

(ユーリ君、アクアちゃんに食べられちゃったんですね。でも、これも絆の形でしょうか)

(アクアに食べられても、案外自由は残っているね。何なら、私達と冒険してみる?)

(お姉さんに黙っていなくなるなんて、減点だよ。でも、また一緒にいられるね)

(ユーリさん、あなたがいなくて寂しかったんですよ。だから、もう離れませんか)

(ユーリ様とひとつになる。悪くない気分ですわね。エルフィール家の発展も、アクア様の力ならきつと)

(……ユーリさん、あなたの傍にいられるのなら。どんな形でも構いません……)

色んな人がアクアに取り込まれていって、ぼくは大変なことをしでかしたんじゃないかと感じた。

だけど、もう後戻りはできないから。せめて、今の幸せが続くことを祈りたい。

ただ、みんなとひとつになる感覚は、すごくいい気分なんだ。だから、後悔はしていないよ。

アクアはユーリに食べられたいと伝えられて、即座にユーリを食べることにした。

ユーリの体が失われることに一抹の寂しさがあったものの。

それでも、ユーリとひとつになる感覚はアクアにとっても心地よいものだった。

ユーリはアクアに食べられて体を失ったが、アクアの思考が伝わる感覚を喜んでいて。

だから、アクアはユーリをもっと喜ばせたいと考えた。

ユーリの思考が直接伝わってくる幸せを、ユーリの幸福を感じる幸せを、もっと増幅させたくて。

そのために、ユーリにも動かせる体を生み出そうとした。

アクアにとっては初めての試みで。

だが、ユーリのことを考えるだけで気力がみなぎって、すぐに実現できていた。

ユーリは明らかにアクアとふれあうことを楽しんでいて。

ただ、ユーリをせっかく取り込んだ感覚はもっと味わいたい。

そう考えたアクアは、ユーリのための体をたまにしかユーリに使わせないと決めた。

ユーリは当然のこのように受け入れていて、アクアはまた楽しくなった。

それからユーリと日常を過ごしているうちに、アクアはふとあることを思い立った。

ユーリ以外の大切な人も食べてしまえば楽しいのではないかと。だから、まずアクアはカタリナを食べていった。

カタリナは混乱していたようだが、ユーリの状況を理解すると、諦めたように受け入れた。

アクアは念のため、カタリナがまずい思考をユーリに伝えようとしてもできないように処理していた。

まずアクアが思考を確認して、問題があるならユーリに伝えないというように。

アクアの思考速度と内心まで読めるという状況が重なり、時間差は生まれない形で。

カタリナを取り込むことがうまく行ったことを確認して、アクアは他の人達も食べていった。

アクアに取り込まれた人間は不満も抱えていたが、アクアが五感に心地よい感覚を与えることで、やがて堕ちていった。

そして、アクアの大切な人たちがアクアの中でひとつになつていく。

アクアが演じるだけだったユーリや新しく人格を生み出して。ユーリと実際に会ったことのないフィーナはアクア自身が説得して。

それからのアクアはとても幸せな日々を送っていた。

だから、周囲に積極的に干渉することを止めて。

アクアの機嫌を損ねることがない限り、ただ生きるだけの人間はアクアに支配されることはないだろう。

## if フィーナとの未来

ぼくが王都での闘技大会を終えて、カーレルの街へと帰ってから少しした頃。

遠出をする依頼をこなしている最中に、とある女の人と出会った。腰まで伸ばした茶髪が印象的な、少し暗そうな人。

モンスターが近くまで来ているのにぼーっとしていて、だから助けたんだ。

すると、何も映していないように見えた瞳がこちらを向いて。

そして、薄く微笑んでいた。

きれいな笑顔と言うには幸薄そうに見えたけれど、何故か目が惹きつけられたんだ。

「わたしを助けてくれたんですか……？　ありがとうございます……」

「いえ、助けられてよかったです。危ないですから、これからは気をつけてくださいね」

「……あの、あなたの名前を聞いてもいいですか？　わたしはフィーナといいます……」

「分かりました。ぼくはユーリ。冒険者です。よろしく願いますね、フィーナさん」

「フィーナで構いません……よければ、わたしもあなたについて行っていいですか……？」

なんとなく、フィーナの表情はするようなものに見えて。

だから、ここで置いていくという選択をする気にはなれなかった。「いいですよ。なら、いつまでかは分かりませんが、よろしく願います」

「未永い付き合いになると嬉しいです……よろしく願いますね……」

フィーナは緩やかに頭を下げる。

なんとというか、のんびりしたというか、落ち着いた雰囲気の人だな。モンスターと戦おうともしていなかったし、戦闘には慣れていない

のだろうか。

だとすると、どうしてモンスターの現れるところにいるのだろうか。

気になりはするけど、聞いていいような気もしないよね。

「長い付き合いになるといいですね。これから、色々と話とかをしていききたいですね」

「はい……わたしを助けてくれたあなたと、もっと親しくなりたいです……」

フィーナの物言いだと、これまでは助けられてこなかったのだろうか。

だとすると、フィーナを大切に思う人もいるのだと知ってほしい。

ぼくはもう、フィーナが死んだらとても悲しいと思うから。

とはいえ、いきなり初対面の人に言うことでもないよね。

ゆっくりと、フィーナの心を開いていければいいな。

「はい、大歓迎です。ぼくはカーレルの街で冒険者チームとして活動しているんですけど、そこまで来るつもりですか？」

「そうですね……あなたと同じところに居たいです……」

ただ一度助けただけの人に、ずいぶんな懐きようと言うか。

もしかして、この人には親しい人がいないのではないかとすら思えてしまう。

それにしても、カーレルの街へ来るのか。

だったら、家の手配なんかも手伝ったほうがいいのかな？

「宿については詳しくないですけど、そういう所に住むつもりですか？」

「できれば、あなたと一緒に住みたいですよ……」

思った以上に接近してくる人だな。

まあ、悪意がある感じはしないけれど。

だから、ステラさんの許可を得られるのなら問題はないと思う。

「同居人がいるので、その人に聞かないとわかりませんね。ただ、前向きに考えたいです」

「なら、期待していますね……」

フィーナとの会話をいったん切り上げて、フィーナを連れてカーレルの街へと帰る準備をした。

当たり前のようにフィーナは隣に陣取っていて、距離も近い。嫌な気分というわけではないけれど、ちよつと疑問があるよね。

まあ、フィーナはぼくを気に入っているのだと前向きに考えよう。それからカーレルの街へと帰る道中で、ぼくたちはお互いのことをある程度話していた。

フィーナはずっと一人だったから、ぼくとの関係を大事にしたいのだと。

ぼくは冒険者の頂点を目指していて、今はアリシアさんたちに師事していると話した。

ある程度打ち解けることができている、フィーナもそれなりによどみなく話していると思う。

「ユーリさんは、冒険者としてどんな敵と戦ってきたんですか……？」  
「キラータイガーとか、人型モンスターとかかな。昔はキラータイガーに大苦戦したんだよ」

「なるほど……だとすると、ずいぶん強くなられたんですね……」

「そうだね。まだ満足するつもりはないけれど、成長は実感できているよ」

「なら……いえ、なんでもありません。忘れてください」

フィーナは何を言おうとしてためらったのだろう。

まあ、聞かれたくないことを無理に聞く気はないけれど。

ただ、ぼくが冒険者をしていることに関係があるのだろう。話を持ちかけるタイミングを考えるとね。

だとすると、もしかしてフィーナは戦えるのだろうか。

言いたくない事情があるのだろうか、気にしなくてもいいかな。

「フィーナには好きな食べ物とか、あるかな？」

「いえ、特には……ユーリさんの好物があるのなら、食べてみたいです……」

「ぼくは魚料理が好きかな。あとは、仲がいい人の手料理とか」

「それは、女の人の……？」

「そうだね。幼馴染とか、先生だった人とか」

カタリナが前に作ってくれたごちそうは最高だったし、ステラさんが作ってくれた料理も素晴らしかった。

思い返してみれば、色んな人が料理上手だな。

「なら、わたしも料理を覚えてみたいですよ……」

「ぼくは最低限の料理しかできないけど、基礎なら教えられるよ」

「では、教えてください……ユーリさんの料理も、食べてみたいですよ……」

フィーナに頼まれたので、道中で少しずつ料理を教えていった。

ぼくの料理を幸せそうに食べているのは嬉しかったけど、そんなに美味しいものでもないと思う。

まあ、フィーナが喜んでる所に水をさすつもりはないから、黙っていたけど。

それから何度かフィーナに料理を教えて。

もう十分に上手いんじゃないかと判断できる腕になっていた。

「うん。だいぶ美味しいよ。始めてからすぐと考えれば、すごい上達速度だと思う」

「嬉しいですよ……また、わたしの料理を食べてくださいね」

「もちろんだよ。フィーナが望むのなら、何度でもかまわないよ」

「なら、何度でも、何度でも食べていただきますね……」

フィーナは笑顔を見せながらそう言ってくれる。

はじめに出会ったころよりも、自然な笑顔というか、楽しそうな顔というか。

それだけフィーナが幸せを感じてきているのだと思うと、ぼくも嬉しい。

もう、ぼくにとってフィーナは大切な人だから。できる限り幸福でいてほしいね。

それからしばらく移動して、カールルの街へとたどり着いた。

ステラさんにフィーナのことを相談すると、一緒に住んでいいことになったんだ。

ぼくもフィーナもとても喜んでいて。



これからはまた新しい幸せが増えるのだと信じられる。  
その日から、ぼくの帰りを待ってくれる人が一人増えて。  
だから、冒険者としての活動にも張りが出たような。  
フィーナが笑顔をみせてくれる時間も多くなって、毎日の楽しみの  
ひとつになったんだ。

それからしばらくの間、ゆつくりとフィーナと仲を深めていけた気が  
する。

フィーナに手料理をごちそうしてもらったことも何度かあって。  
だんだん上達していくフィーナを見ることができて、嬉しかった。  
そんなある日、フィーナと2人ででかけていると、モンスターに  
フィーナが襲われて。

そして、フィーナの目の前に行ったモンスターがなぜか倒れた。  
慌ててフィーナの方へと駆け寄ると、フィーナは震えていたんだ。  
きっとフィーナが何かしたのだと思う。モンスターを倒すために。  
そして、それを見られなくなかった。

こんなことなら、もつと余裕を持ってモンスターを倒しておけばよ  
かったのかもしれない。

フィーナを傷つけないために、範囲の狭い攻撃にしようとしていた  
から。

「ユリーさん、お願いします……わたしから離れないで……」

「離れるわけないよ。フィーナはぼくの大切な家族なんだから」

「わたしが化け物だとしても……？」

さっきの力というか、技？ それは契約技だと思っていたけど。  
だとすると、契約の紋章が見当たらないことはおかしい。

いや、人に見せられない部分にある可能性もあるのか。  
そんなことはどうでもいい。フィーナを安心させてあげないと。

「フィーナが自分をどう思っているように関係ないよ。ぼくはこれまで  
フィーナと一緒にいて幸せだった。それだけで十分だよ」

「ユリーさん、ユリーさん……」

フィーナはぼくにしがみつきながら泣いていた。

ぼくはフィーナを落ち着かせたくて、頭を撫でることに。

ある程度の効果はあったようで、しばらくするとフィーナは泣き止んでくれた。

それから、ぽつりぽつりとフィーナはこれまでのことについて話してくれた。

フィーナが言うには、契約技ではない特殊な力を持っている。

そして、その力によって周囲から排斥されてきたのだと。

人生がどうでもよくなって、世をはかなんでいた時にぼくと出会ったらしい。

それからの日々が幸せで、だからぼくには嫌われなくなかったのだと。

フィーナの悩みについては理解できた。

もちろん、フィーナを嫌うつもりなんてない。

フィーナが幸せでいてくれるのなら、いや、そうでなくてもフィーナを受け入れるのは当然だから。

「大丈夫だよ。ぼくも、きつと他のみんなもフィーナを拒絶したりしない。フィーナをずっと大好きでいるから」

「なら、わたしの手を握っていただけますか……？」

「もちろんだよ。ほら」

フィーナに手を差し出して、手をつなぐ。

暖かくて、小さくて、でもしつかりと感覚の伝わる手。

フィーナらしく、とても小さい力で握られていたんだ。

しばらく手をつないでいると、フィーナは頬へとぼくの手を持っていった。

そして、幸せそうにこすりつけて。

そんなフィーナを見て、ぼくはフィーナの傷を癒せたんだと思えた。

「ああ、暖かいです……ユーリさんの暖かさ、もつと感じたい。だから、抱きしめてください……」

フィーナの要望に応えて、フィーナを抱きしめていく。

なにか救われたような顔をするフィーナを見てみると、こつちまで嬉しくなる。

ただ、こんな軽いことで救われたような顔をするってことは……。  
いや、これからもっとフィーナを大切にすればいいだけだよね。  
だったら、そんなに難しい話じゃないと思う。

「ね、分かるでしょ。ぼくがフィーナを大好きだってこと。だから、何も心配しなくていいよ」

「分かります。でも、もっと……。ねえ、キスしてほしいです……」

「キスは……嫌なわけじゃないけど、恋人でもないわけだから」

ぼくの言葉に合わせて、フィーナはとても強い意志を秘めた目でぼくを見た。

きつと、何か大きな思いがあるのだろうけれど。なんだろう。

「わたしは……わたしは、ユーリさんが好きです。もっと、どこまでも仲良くなりたい。ずっと一緒にいたいんです……」

いつも静かなフィーナが大声を出していた。

つまり、それほど大きな気持ちを抱えていたのだろう。

だったら、ぼくも真剣に答えないとね。

ぼく自身はフィーナをどう思っているのだろうか。

もちろん、大切な存在であることは疑いようがない。

だから、それでいいのかな。

「ぼくはフィーナを恋や愛みたいの意味で好きかは分からない。それでもいいのなら」

「なら、これから好きになってくれればいいです……。だから、お願いします……」

フィーナが望むのならば、ぼくは構わない。

だから、勇気を出してフィーナにキスをした。

フィーナはじつとこちらを見ていて、なんだか恥ずかしいな。

しばらくフィーナに抱きしめられていたけど、ゆっくりと離れていく。

ちよつと名残惜しきを感じたけれど、まあそれはいいか。

「ああ、幸せです……。ねえ、ユーリさん。これからもっともつと、何度でもしましょうね」

それがフィーナの望みだというのなら構わない。

だとすると、付き合うような関係になるのかな。

フィーナのことは大好きだから、きつとうまくやっていていけるはず。

「これからよろしくね、フィーナ」

「もちろんです……！　　ずっと、ずっと一緒にいましょうね……！」

アクアはユーリに近づくフィーナに対して、当初はなんとも思っていなかった。

ただ、フィーナの孤独を知って。

だから、自分と同じようにユーリに救われたのだと。

そう考えてからは、アクアはフィーナに共感のような思いを抱いていた。

それゆえ、ユーリとフィーナが距離を近づけることには賛成していたアクア。

だからこそ、ユーリとフィーナが結ばれたと聞いたときには素直に祝福できて。

これまではフィーナと関係を深めてこなかったけれど、もっと仲良くしようと。

そんな感情をもって、アクアはフィーナに近づいていった。

すると、思いの外フィーナとアクアは共感し合うことができて。

だから、これからフィーナとユーリがもっと関係を深めるのならば。

ユーリたちの幸せを増幅できるよう、自分も協力しようとアクアは考えた。

フィーナとユーリはゆっくりと仲を深めていく。

そんな2人を見ながら、アクアはのんびりと2人のそばを楽しんでいた。

## if ミーナとの未来

ぼくはとある依頼の中で、ミアさんという人型モンスターと出会った。

ミアさんは契約者にとってもひどい態度を取られていて。そして、ミアさんは契約者を殺してしまった。

ミアさんはこの世界に生きていく場所などないと諦めているように。

だから、必死に説得したんだ。

それが功を奏して、ミアさんは生きることを決意してくれた。

それから、カーレルの街へとミアさんを連れて行って。

サーシャさんにこれからミアさんをどうするかを相談した。

結果として、オーバースカイで彼女を預かることになったんだ。

ミアさんはユーリヤと契約して。

ユーリヤは身体強化の力を手に入れた。

これから、新しいオーバースカイへと変化するのだと予感して。

だから、ぼくはとてもワクワクしていた。

それから、新しい出会いもありながら。

ぼくにとつても大きな再会が待っていた。

それは、ミーナたちがカーレルの街へとやってきたこと。

つまり、またミーナと競い合うことができるってことだから。

「ユーリ、今日は移動の疲れがあるけれど、明日空いているのなら、戦ってみないか？」

ミーナにそう誘われて、ぼくは当然のように受けた。

ぼくだって、ミーナとはまた戦いたいと思っていたから。

エンブラの街でも、王都でもぼくは勝つことができた。

だけど、偶然にも助けられた結果だから。

だから、きつとこれから何度も戦っていくうちに負けることもあるだろう。

その時は悔しいだろうけれど、でも、きつと楽しい時間のはず。

そして次の日、ミーナと戦う時間がやってきた。

「僕は今日この日をずっと楽しみにしていた。王都で君に負けた日からずっと。ユーリ、今日は勝たせてもらうよ」

「坊やもミーナも頑張ってるね。アタシを熱くさせてちょうだい」  
「ぼくもミーナと戦えて嬉しいよ。でも、ぼくが勝つから」

お互いに構えて、ヴァネアの合図で駆け寄る。

そのまま数合打ち合い、どちらも契約技を使わないまま剣技を確かめていく。

ぼくも成長したつもりでいたけれど、ミーナも腕を上げている。やはりまだ剣技だけでは勝てない。その事実が悔しくも嬉しい。ぼくのライバルとして、目標でいてくれるってことだから。

「ふふ、強くなったね、ユーリ。でも、まだまだこれからさー！」

ミーナは契約技を駆使してより鋭い動きになる。

合わせてぼくもアクア水を身にまとって動きの補助を。

これまでよりも数段早い撃ち合いをするが、やはり剣だけではダメだ。

そこで、水刃を使ってミーナの動きを邪魔していく。

ミーナを直接狙ったり、ミーナの剣に当てて剣筋をずらしてみたり。

以前よりずっとお互いの実力は上がっていると感じて。

でも、今回もぼくの勝ちだった。

ただ、本当に紙一重の勝利だったと思う。

とても大きい満足感があって、最高の気分だと言えた。

「また負けてしまったね。でも、ユーリに勝つ道筋は見つかったよ」  
「なら、つぎは負けるかもね。でも、負けないように頑張るから」  
「うん、全力で来てくれ。最高の君を打ち破ってこそ、僕は本当の意味で君のライバルになれるから」

ミーナはすでに最高のライバルだと思うけれど。

でも、ミーナが納得していないのなら仕方ない。

もちろんわざと負けるつもりはないとはいえ、ぼくたちは互角だ。

だから、そのうちきつとぼくが負けて、ミーナが納得できる日が来るのだろう。

「ミーナも坊やも楽しそうで何よりだわ。こんな光景を見て、嬉しい限りだわ」

「これからも何度だって見られると思うよ。ね、ミーナ」

「そうだね。君とはずっとライバルで居たいからね」

実際にぼくの言葉通り、何度も何度もミーナと戦うことになる。

次の日にはすぐに負けてしまつて。とても悔しくて。

でも、ミーナはとても満足そうにしていたから、つい嬉しくなつて。

とはいえ、次は絶対に勝つと決意をしていたのだけど。

「今回は僕の勝ちだ。とはいえ、今回も紙一重だった。やっぱり、僕たちは最高のライバルだよ」

「そう思うよ。ミーナと戦う時間は最高に楽しいからね。もつともつと、ずっと戦っていたいくらい」

「ミーナも坊やも良いライバル関係で、羨ましいわ。アタシも、そんな存在に出会いたくなつちやつたわ」

ミーナやヴァネアの言う通り、ぼくたちは最高の関係だと言えると思う。

エンブラの街で、王都で、ミーナと出会えて良かった。

間違いなく偶然に支えられた出会いだけれど、だからこそ大事にしたい。

ぼくは競い合う楽しみをミーナのおかげで知ることができたから。

ミーナにもヴァネアにもとても感謝しているんだ。

それから、何度も何度もぼくたちは戦つて。

勝つたり負けたりを繰り返しつつ、お互いに成長していった。

いつしかミーナたちもオーバースカイに加入してくれることになり、冒険者としての生活も楽しくなつたんだ。

そして、そんな毎日を過ごす中のある日。

ミーナから告げられた言葉があつた。

「ねえ、ユーリ。僕たちの相性は最高だと思わない？ だから、別の関係になつたとしても、うまくやっていけると思うんだ」

「ぼくたちはライバルで仲間。別の関係ってあまり想像できないな」

「ユーリはそういう所は鈍いんだね。モンスターも、僕の動き

も鋭く読んでくるのに。……こういうことだよ」

そのままミーナに抱きしめられて、勢いよくキスをされる。

痛いんじゃないかと思っていたけど、案外大丈夫だった。

ミーナにキスされたことで、ミーナの意図はハッキリと分かった。

ぼくとしては、ミーナとならうまくやっていけるとい言葉には同意できる。

だから、ミーナと付き合うことに決めただ。

「うん。ミーナとそういう関係になるのなら、きつと幸せだと思う。だから、よろしくね」

「ああ、嬉しいよ。僕たちならば、きつと誰よりも幸せになれるだろうさ」

ぼくたちの関係をヴァネアも祝福してくれて。

アクアもなんだか嬉しそうだから、受け入れられていると感じられた。

それからは、ミーナとずっと仲良く過ごして。

アクアとヴァネアも仲良くなってくれているようで。

だから、とても幸せな日々だった。

アクアはミーナとユーリが競い合う日々をととても楽しんでいた。だから、その2人が付き合うことになったとしても、素直に受け入れることができた。

ミーナも契約者として、契約モンスターの大切さは知っていて。

だから、ヴァネアともどもアクアは大切な存在として扱われて。

そんな日々を過ごすうちに、ミーナとユーリの関係はどんどん深まっているようだ。

2人にはいざれ子供もできるだろう。だから、その子供を可愛がることも楽しみだ。

アクアは幸せな未来を想像しながら、大切なユーリたちとの日々を楽しんでいた。



## if メルセデスとの未来

メルセデスとメーテルを弟子にしてしばらく。

2人の実力が向上していて、そろそろオーバースカイに加入しても良いんじゃないかと思える。

この子達と一緒に冒険者としてチームを組めると思うと、嬉しい限りだ。

まあ、みんなにも相談はしないといけないけれど。とはいえ、本当に強くなったな。

初めて出会った頃は心配になるくらいだったけれど。

メルセデスたちの努力の成果であることは間違いない。

他にも、きつと才能もあつたのだろうな。本人たちが気づいていなかっただけで。

メルセデス達はオーバースカイに入ることを望んでくれている。だから、ちゃんと祝いできる形で加わってほしい。

そのためには、ある程度の試練を用意したほうが良いだろうな。人型モンスターとの戦いを想定したものにしよう。

オーバースカイは、人形モンスターともいっぱい戦うチームだからね。

そんな事を考えながら、試験のために英気を養ってもらうことも考えていた。

ちやうどメルセデスと一緒に出かけないかと誘われたので、いい癒しになってもらえれば。

そして実際にメルセデスと出かけて。

色々メルセデスにからかわれたりしながら、会話を楽しんでいった。

それから、メルセデスがよく行くという料理屋へと向かう。

「おっちゃん、空いてるっすか?」

「空いてるぜ。メルセデス、そいつがお前の師匠か?」

「そうっすよ。色々助けてもらってるっす! ユーリさん、今日はおごるっすね」

メルセデスがいつも食べているというメニューを用意してもらおう。大盛りの野菜炒めで、メルセデスが先に食べ終えてからはずっとメルセデスの話を聞いていた。

メルセデスのおすすめだけあって美味しかったけれど、ちよつと多かつたかも。

まあ、メルセデスが楽しそうだから、それでいいか。

それからの帰り道。

ぼくはメルセデスにオーバースカイへ加入するための試験をおこなうことを伝えた。

メルセデスはとてもやる気を出していて、見ていて楽しいかも。

「ユーリさん、絶対合格してみせるっすから！ そしたら、聞いてもらいたいことがあるっすよ」

「どんな話か、楽しみにしておくね」

「それって……ユーリさんの期待に、必ず応えるっすよ！」

メルセデスは浮足立った様子で帰っていく。

もちろん、ちゃんと成果を出せないと不合格にするつもりではある。

ただ、2人ならばきつと乗り越えてくれる。そう信じているからね。

2人と共に冒険することを想像して、つい楽しくなってしまう。

がんばってね。メルセデス、メーテル。

それから、メルセデスたちの試験をおこなった。

人型モンスターと戦うため、狡猾な策を乗り越えるための課題を中心にして。

メルセデスもメーテルもとても素晴らしいやり方でぼくの用意した試験を乗り越えてくれた。

文句なくオーバースカイに加入してもらえるだけの成果だ。

なので、全く悩むことなく合格だと告げる。

メルセデスたちはお互いの方を見て、抱き合って飛び上がった。それだけ、オーバースカイに加入できることが嬉しいのだろう。

だから、ぼくもとても舞い上がりそうな気持ちで、涙すら出そうなほど。

「やったつす！　メーテル、頑張ったかいがあつたつすね」

「そうね。ユーリさんは基準を満たさなければ不合格にするつもりだつたみたいだから」

メーテルの言う通りではある。

なにせ、オーバースカイの受ける依頼は危険なものが多いから。

メルセデスたちを安易に加入させてしまえば、ぼくはメルセデスたちを失うだけ。

だからこそ、本気で厳しい判断をするつもりでいたんだ。

なのに、2人はちゃんと課題を乗り越えてくれたから。

だから、今は本当に最高の気分なんだ。

「ぼくが言うのもおかしいかもしれないけれど、おめでとう。そして、ありがとう。今とても感動しているよ」

「それだけあたいたちのことを大切に思ってくれている証つすからおかしくても嬉しいくらいつすよ！」

「そうよね。私達が合格したこと、本当に喜んでくれているのが伝わるわ」

ぼくの思いが伝わっているのなら、十分かな。

メルセデスたちがオーバースカイに加わることは、ぼくの望みでもあつたから。

お互いにとって嬉しいのだから、それは素晴らしいはずだ。

そういえば、メルセデスが合格したら伝えたい事つてなんだろう。

まあ、こちらから聞くことかは怪しいし、ゆつくり待つか。

「そうだ、ユーリさん、後で2人になりたいつす。時間は空いてますか？」

待つと考えたそばからか。

まあ、メルセデスからは緊張も感じられるから、大事な話なのだろう。

だとすると、部屋みたいなところの方がいいかな？

「じゃあ、ぼくの住んでいる家に空き部屋があるから、そこで話そう

か」

「分かったつす！ 楽しみにしててくださいね」

それから、ステラさんの家に2人を誘って、これから住むための準備をもらった。

オーバースカイに入ったらこの家に住んでもらうって、以前に約束していたからね。

これからは2人とも一緒に暮らすと思うと、感慨深いな。

まずはメルセデスの話を聞いて、それからみんなに改めて紹介するかな。

メルセデスと2人きりになり、向かいあう。

神妙な顔をしているメルセデスは珍しくて、つい目を引かれる。

そして、いつも快活なメルセデスとは違う感じで、ゆっくりと彼女は口を開いていった。

「ユーリさん、はつきり言ってダメダメだったあたいの面倒を見てくれて、弟子にしてくれて、とても感謝しています」

「気にしないで。メルセデスたちに好感を持たれたからしたことだから」

「その好感をもってくれたことが、何よりも嬉しかったんです」

メルセデスの言う事は分かる気がするな。

アリシアさんたちは偉大な師匠だけれど、ぼくたちを大切にしてくれているから嬉しいんだ。

もちろん、役に立つ教えはいっぱいあった。その点でも尊敬している。

だけど何よりも、信じてくれたこと。それが大きな力になったから。

「ぼくがアリシアさんたちに教わったことかもしれないね。信頼は力になるってことは」

「よく分かります。ユーリさんが信じてくれたから。だから、頑張ることができたんです」

メルセデスの力になれていたのなら、嬉しい限りだ。

だって、メルセデスはぼくの大切な人。それは間違いないから。

ぼく自身も、メルセデスに力をもらっていたはずだから。

「うん。そして、メルセデスたちはオーバースカイに加入できるほどに成長してくれたよね」

「ユーリさんが本気であたいたちに向き合ってくれたからです」

ぼくを持ち上げてくれるけれど、きつと何よりもメルセデスたち自身が頑張ったおかげ。

だから、メルセデスたちはきつと最高の弟子だと思える。

アリシアさんたちにとって、ぼくも同じであればいいな。

まあ、今はメルセデスたちにとって良い師匠でいられていることを喜ぼう。

「メルセデスが素晴らしい弟子だったからだよ。だから、もつと自信を持つて良いんだ」

「調子に乗っちゃいそうですから、やめておきます。それで、伝えたいことがあるんです。聞いてください」

メルセデスは目つきを真剣なものから柔らかいものへと変えた。

つまり、悩み事とかの話ではないな。

なら、落ち着いた気分で聞くことができる。

ぼくの思考をさておいて、メルセデスは話を続けていく。

しつかりと語るように。ハッキリとした言葉で。

「ユーリさん、あたいはユーリさんが好きです。ユーリさんに伝わるように言うと、愛しています。だから、あたいたもつと関係を深めてくれませんか？」

メルセデスの言葉には驚いたけれど。

同時にとても嬉しいと感じるぼくがいて。

ああ、この子とならきつと幸せになれるだろうな。そう思えた。

だから、受けることには問題はない。

それでも、ぼくがメルセデスを愛しているかは分からないけれど。「メルセデスのことを愛しているとはハッキリと言えない。それでも良いのなら、喜んで」

「ユーリさんはにぶそうですからね。仕方ないです。でも、嬉しいです。ね、キスしませんか？」

メルセデスはぼくの返事も聞かずに近づいてきて、そして唇が触れ合う。

柔らかくて、暖かくて、とても幸せになりそうな感触。

メルセデスはゆっくりと離れていく。顔を見ると、真っ赤になっていた。

きっとぼくも似たような顔をしているのだろうけれど。

「メルセデス、これから幸せになっていこうね。ぼくたちなら、きっとできるよ」

「……はい！ ユーリさんのこと、幸せにしてみせるっすからね！」

アクアは多くの人たちを支配していく中で、せめてメルセデス達は乗っ取りたくないと考えていた。

メーテルはスライムどうし、大切な仲間であるし。

もちろんメルセデスだって大切な存在であったから。

この2人ならば、きっとユーリのことを幸せにしてくれるはず。アクアはそう信じていた。

だからこそ、メルセデスたちがオーバースカイの仲間になったことは喜ばしく。

そして、ユーリとメルセデスが付き合うことになったこともとても嬉しい。

アクアはユーリとメルセデス、そしてメーテルとともに幸せになりたいと考えていた。

そして、ユーリとメルセデスが付き合い出したことが始まりになるだろう。

メーテルとともにメルセデスたちを待ちながら、アクアはこれからの幸せを想像していた。

## if アリシアとの未来

ぼくたちは、王都の近くに突然現れたブラックドラゴンを倒すために遠征していた。

そして、実際にブラックドラゴンと戦っていく。

その中で、じよじよにぼくたちは追い詰められていき。

今ブラックドラゴンと戦っているのは、ぼくとアクア、そしてアリシアさんとレティさんだった。

ブラックドラゴンと戦っていく中で、翼を振り回しながらも飛ぼうとしないことに気がついて。

だから、空へと飛び立てば勝機があるのではないか。

そう考えて、アクア水を身にまとって、アクア水ごとぼくの体を空中へと飛ばした。

すると、ブラックドラゴンは全くぼくの速度に追いつけないように。

ぼくたちの姿を見たアリシアさんたちも、空へと舞い上がった。

それからは、ぼくたち3人でブラックドラゴンを翻弄することに成功して。

アリシアさんやレティさんと一体感を感じながら、順調に戦闘を進めることができた。

王都の危機というのに不謹慎かもしれないけれど、アリシアさんたちと一緒に楽しい。

つい笑顔になってしまいそうなくらい、幸せな時間だった。

そして、ついにブラックドラゴンは倒れていく。

完全に死んだことを確認して、アリシアさんたちの方を見る。

すると、アリシアさんは片手を高く上げていて。

何をするか分かったぼくは、アリシアさんの手に向かってぼくの手をつよく振った。

パチンといういい音がなって、手に痛みが走って。

それが今回の達成感に形を与えてくれたような気がした。

即席のチームだったとはいえ、アリシアさんたちと相棒みたいに戦

えたこと。

とてもいい思い出になることは今でも分かりきっている。アリシアさんたちも笑顔を浮かべていてくれるから、きつと似たような気持ちなんだ。

本当にこれまで頑張ってきたよかった。

とても大変な戦いではあったけれど。得た物はとても大きかったな。

それから、オリヴィエ様に褒美をもらって。

そして、ぼくたちはカーレルの街へと帰っていった。

転移装置があるおかげで、感慨もない位すぐだったけれど。

ステラさんの家でいったんゆつくりと休んでから。

アリシアさんたちと今回の戦いを振り返っていた。

とても良い立ち回りができたとも思うし、課題が多かったとも思う。

アリシアさんたちも似たような意見のようで、話は弾んだ。

「二歩間違えれば誰か犠牲が出ていた戦いだっただから、反省はすべきかな。ユーリ君はどう思う？」

「そうですね。ぼくやアリシアさんの力なら、もう少し相手の性能を測ってから戦うこともできたかなと」

「なるほど。遠くから攻撃して、いったん様子見をするというわけだ。だとすると、死角を見つけてからのほうがいいだろうね」

「そうだね、アリシア。それに、他の人たちのブラックドラゴンへの近づき方も考えないとね」

2人の意見も納得だ。

隠れていないのなら、見つかった時にそのまま攻撃されるだろうし。

逆に隠れたままならば、暴れているであろうブラックドラゴンにどうにか近づかないといけない。

やっぱりアリシアさんたちの意見は参考になるな。

肩を並べて戦う機会があったけど、今でも最高に尊敬できる師匠なんだ。



それからもしばらくブラックドラゴンとの戦いについて考えてある程度まとまった意見ができたと思う。

まあ、机上の空論の可能性はあるけれど。

とはいえ、前回よりうまく戦える道筋は見えた気がする。

考察については終わったけれど、まだブラックドラゴンとの戦いについて話していた。

アリシアさんたちと一緒に戦えて嬉しかったという話だ。

ぼくがその気持ちを伝えると、アリシアさん達はとても柔らかく微笑んで。

満足感で満たされたような顔で、ぼくに語りかけてくれた。

「うん、あのときの戦いは最高だったね。私とユーリ君はまさに対等の相棒って感じだったよ。あんな素晴らしい戦いは、そう簡単にできるものではないよ」

「わたしはアリシアやユーリ君に比べるとちよつと活躍できなかったね。まあ、2人が楽しめたのだから何よりだけど。それに、ユーリ君がかっこよかった!」

2人も楽しんでくれていたようで、嬉しいといつかなんというか。

それにしても、レティさんはかっこいいって言ってくれた。

なんだか気分が上がるな。これまではずつとかわい扱いだった気がするし。

他にも、アリシアさんに認められたような言葉も良い。

ずっと憧れていた人と対等な相棒なんて、最高としか言いようがないよね。

「アリシアさんたちも喜んでくれているようで、良かったです。ずっと前からの目標も達成できた気がしますし、あの戦いはいい経験でした」

「私達と一緒に冒険したってことだからね。私の夢も、もう叶ったよ  
うな気分だよ」

アリシアさんの夢を直接伝えてもらったわけではないけれど。

きつと、ぼくが夢の一助になれていたのだと思えて。

感極まってしまいそうなくらいだった。

アリシアさんの夢が叶ったという喜び、ぼくの目標を達成できた嬉しき。

それらが相まったことで、これまで感じたことのないような心地で。

だから、こんなにいい気分はもう味わえないかもしれないな。そう思いすらした。

「アリシアさんたちのおかげで、ここまで強くなれたんです。本当に、ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします」

「もちろんだよ。それで、ちょっと相談があるんだ。私達をオーバースカイに加入させるつもりはない？」

「ユーリ君がリーダーのままだね。あなたなら、きつとわたしたちもうまく扱えると信じているからね」

アリシアさんの提案にはとても驚いたけれど。

でも、とても嬉しい。何も考えずに受け入れたいくらい。

とはいえ、仲間に相談しないことにはね。

いくらアリシアさんたちと言えど、そのあたりは無視できない。

申し訳ないけれど、少し待ってもらうことになる。とはいえ、きつと受け入れられるだろうけれど。

その旨をアリシアさんたちに伝えて、仲間たちとも話し合って。

アリシアさんたちはオーバースカイに加わることになった。

2人がぼくの指示で動く姿にはどうしても慣れないけれど。

それでも、今のオーバースカイは何にも負けない最高のチームだと思える。

それから、何度も依頼をこなしていき、アリシアさんたちと協力することにも慣れてきた。

そんなある日。ぼくはアリシアさんから呼ばれていた。

アリシアさんたちが住んでいる家。今はステラさんの家だけれど。

かつては別の場所だったんだよね。オーバースカイに2人が入るまでは。

それで、前のアリシアさんたちの家に呼び出されていたんだ。

だから、きつと大事な話なのだろうとは思う。

アリシアさんはぼくを部屋へと連れて行って、そして。

ぼくの方を真剣な目で見つめながら話し始めた。

「ねえ、ユーリ君。私は今まで、男なんてどうでもいいって思っていたんだ。家族なんて、作る必要もないって」

とてもそうは思えないけれど。

アリシアさんはぼくにとても真摯に接してくれた。どうでもいい相手への対応ではない。

まあ、家族がほしいかどうかについては、ぼくには分からないことだけれど。

「そうなんです。今は違うということですか？」

「そうだね。ユーリ君は私の夢である、対等な仲間との冒険を叶えてくれたけど。新しい夢もできたんだ」

なるほど。アリシアさんの夢はそうだったのか。

なら、本当にぼくが叶えることができたってことじゃないか。嬉しいな。

それにしても、新しい夢か。きつと今回の話に関わってくるのだろうけれど、なんだろう。

ぼくの疑問に気づいているのかいないのか。アリシアさんはそのまま話し続ける。

「それはね。私の子供に冒険者としてのいろはを教えること。そして、立派な冒険者になってもらうことなんだ」

ああ。つまり、子供が欲しくなったと。

それは分かったけれど、どうしてぼくに話を？

もちろん、アリシアさんの新しい夢は応援したいけれどね。

アリシアさんはぼくを見てほほえみ、さらに話を進めていく。

「それでなんだけど、ユーリ君。私と子供を作ってくれないかな？」

それは……アリシアさんはぼくと結ばれたいってこと？

光栄ではあるけれど、戸惑いのほうが大きいような気がする。

もちろん、アリシアさんが望むのならばかまわないけれど。

「えつと……結婚とかをするってことですか？」

「必要ならね。ユーリ君には悪いけれど、君に恋や愛を抱いている訳ではない。ただ、私に触れてもいい相手は、今も未来も君しかないから」

「悪いなんてとんでもない。アリシアさんにそこまで認められているのなら、嬉しいだけですよ」

「なら、受けてくれるかな?」

「はい、喜んで。ところで、レテイさんには話をしたんですか?」

「ユーリ君と私の子供なら、全力で可愛がるそうだよ。レテイも君を気に入っているからね」

レテイさんなら、きつとうまく子供を育ててくれるんだろうな。

ぼくに対してお姉さんとして接してくれるけれど、とても心地良いから。

「なら、レテイさんも一緒というか、そんな感じなんですね」

「そうだね。アクアだって君とずっと一緒だろう?」

確かに、契約者と契約モンスターと一緒にいるなんて、当たり前の話か。

なら、家族がいっぱいになるだろうな。

ぼくとアリシアさん、アクアとレテイさん、ぼくたちの子供。

うまく子供を育てられるか、ぼくには分からないけれど。

だけど、頼りになる人たちはいっぱいいるから。だから、きつと大丈夫。

これからアリシアさんと結ばれて、どんな未来が待っているだろうか。

でも、どんな形だとしても、きつと幸せなのだろうな。

アクアはユーリの周りの人間をほとんど支配していた。

だから、今無事な人たちだけでも、乗っ取らずにすむならば。

アクアはそんな考えを抱きながら、同時に諦めも頭によぎった。

きつと、自分はユーリ以外のすべてを支配してしまうのだろうか。

ただ、そんな未来は訪れなかった。

アリシアがユーリに持ちかけた提案。

ユーリとアリシア、2人の子供を作るという計画。

それを知ったアクアは、2人の子供を可愛がりたいと考えた。

だから、アリシアもレテイも操る訳にはいかない。

そんな考えがアクアに生まれて。

そして、アリシアもレテイもユーリを大切にしてくれていて。

2人の温かい心が、アクアを解きほぐしていった。

これからアリシアとユーリは子供を作っていくのだろう。

そんな未来を夢見ながら、アクアはいま手元にある幸せを噛み締め  
ていた。

## if オリヴィエとの未来

オリヴィエ様と強いモンスターを倒しに行つて。

そして、追い詰められたオリヴィエ様を助けてモンスターを倒した。

それから、オリヴィエ様と話している中で、ハイデイと呼ぶように言われたんだ。

何でも、オリヴィエ様は大昔にこの国を生み出したアーデルハイド様らしい。

だから、アーデルハイドの愛称であるハイデイと呼ぶのだろう。

それで、ハイデイはぼくに何でも褒美をくれるのだという。

金銭や名誉はとくに欲しいわけではないので、悩みどころだったけれど。

ふと頭に思い浮かんだものがあつた。

ハイデイに受け入れられるのかどうかは分からないけれど。

だけど、ぼくの心からの望みだと思えるんだ。

「ねえ、ハイデイ。オーバースカイに入つてほしいってのはどうかな？ やっぱり失礼かな？」

ぼくがそう言うと、ハイデイは少し口を開けてブーツとしているよ。

それからしばらくして、とても面白いといったふうには笑い出した。

「はははー。まさか、余そのものを求めるとはな。ずいぶんと傲慢なことだ。だが、貴様ならば許す。オーバースカイの一員として、力を振るつてやろうではないか」

ハイデイはとても上機嫌に見える。

良かった。無礼とか言われていたら、困るどころじゃなかっただろうから。

つい言葉に出ちやっただよね。ハイデイと一緒になら、きっと最高だから。

うん、ハイデイのことを助けられてよかつた。

ハイデイと二度と出会えないなんて、考えたくもないよね。

「ありがとう。でも、王族の責務とかは大丈夫なの？」

「どうとでもしてやるさ。こんなに面白いことなど無かったのだから、今を全力で楽しまなくてはな」

ハイデイは本当に楽しそうな様子だ。

ぼくの言葉で楽しんでくれているのなら、嬉しいよね。

なんだかんだで、ぼくはハイデイが大好きなんだ。改めて理解できなかった。

「ハイデイが楽しいなら何よりだよ。ハイデイと一緒に冒険するのは、楽しみだな」

「余が全力を尽くせば、モンスターごとき軽く葬ってしまうだろうか。手加減を覚えなくては」

「ラクならラクで楽しみ方はあると思うけれど。まあ、油断は禁物だよね」

実際、ハイデイを失いかけたのも、ハイデイの油断があつたからだからね。

まあ、滅多なことではあんなに強いモンスターは現れないだろうとはいえ。

だからといって、またハイデイを危ない目に合わせるわけにはいかないのだから。

ハイデイはとっても強いから、きっと大丈夫ではあるとは思うけれど。

とはいえ、ハイデイが死んでしまうかもと考えた時はつらかったからね。

「その時は、また貴様が余を助けるのだろうか？」

「もちろんそのつもりだよ。でも、危険がないに越したことはないからね」

もうハイデイが傷つく姿は見たくないから。

ぼくにとつて大切な相手だということとは、もう疑いようがない。

「くくつ、貴様が本音でそう言っているというのが分かる。面白いな」

ハイデイにはご機嫌取りで色々と言う人が多かったのだろうか。

なににせよ、ぼくの言葉はたしかに本音。

ハイデイに幸せでいてほしいから。笑顔が見たいから。

「まあ、ハイデイより強いわけではないから、ぼくの方が助けられてしまいかもしれないけど」

「貴様を手助けすることも悪くはない。貴様ならば、余の力を尽くす価値がある」

ハイデイにそう言ってもらえることはとても嬉しい。

だから、手間を掛けさせすぎないようにしないとね。

ハイデイが喜んでいると、ぼくだって同じように喜べるのだから。

つまり、ハイデイが悲しければってことだ。

「うん。でも、できる限り自分で頑張るよ。ハイデイの負担は減らしたいからね」

「貴様が気にする必要があるのか？ 貴様に潰れられては楽しくないからな。気をつけておけよ」

そのあたりは何度か他の人にも心配されたような。

だったら、ハイデイに頼っても良いのかな。

でも、あの時みたいにハイデイに追い詰められてほしくはない。

なんとかかうまい具合にお互いが協力できれば良いんだけど。

「ハイデイこそ。またあの時みたいなのは、ぼくの心に良くないからね」

「くくっ、心配を受けるというのも、存外心地よいものだ。貴様には本当に驚かされるな」

やっぱりハイデイはロクに心配もされてこなかったのだろうか。

だとするならば、ぼくはもっとハイデイに心配される心地よさを知ってほしい気がする。

まあ、心配というのは余計なお世話であることも珍しくはないけれど。

「なら、もつと心地よい驚きを知ってもらいたいかも。まあ、狙ってはできないだろうけどね」

「そうだろうな。だが、貴様ならば実行できるかもしれない。楽しみにしているぞ」

ハイデイは不敵な感じで微笑んだ。



やっぱり、かつこいいいというか、なんとというか。

高圧的とすら感じるハイデイだけれど、間違いなくそこも魅力なんだ。

それから、リデイさんとイーリスもオーバースカイに加入することになって。

新しいメンバーを加えたオーバースカイで冒険を楽しんでいた。楽しむなんてどうかという思いもなくはないけれど。

でも、実際に楽しいのだから仕方がないよね。

冒険の中で、何度もハイデイと協力することがあった。

もちろん、ただモンスターを倒すだけならば、お互い1人のほうが楽ではある。

それでも、北と南の敵を別々に倒しているだけでも、つながっているような感覚があったから。

すぐそばにハイデイがいてくれるという事実だけで、力が増すとすら思えた。

それから何度が冒険をする中で、ハイデイと過ごす時間がどんどん楽しくなって。

だから、もつとずっと一緒にいたいと思う時もあったんだ。とはいえ、十分なだけ一緒にいるとも考えていたけれど。

そんなある日、ハイデイから彼女の屋敷へと呼び出されて。何を話すのだろうかと楽しみにしながら、会いに向かった。

部屋にはいつもより明確に着飾ったハイデイがいて、思わず見とれてしまった。

どこことなく神妙な顔をしている様子のハイデイは、ぽつりぽつりと語りだす。

「ユーリ。貴様と出会ってから、それなりに時間が経ったものだな」  
確かにそうだ。初めて会ったのは、王都での闘技大会の表彰で。

それから、色々と連れ回されたりしたんだよね。

今では懐かしい思い出だけれど、当時はハイデイを恐れていた。時間が経つにつれて、どんどん魅力を知っていったんだけれど。

「そうだね。今では懐かしい思い出もあるよ」

「あの頃の余は、貴様を面白いおもちゃくらいに思っていたものだったが」

うん、よく分かる。

だけど、それでもハイデイはぼくを尊重してくれて、大切にしてくれて。

そんなハイデイだったからこそ、ぼくも大好きになっただけだ。

「だよ。でも、ハイデイは優しくかったから。だから、振り回されるのも楽しかったくらい」

「くくつ、面白いことだ。余に対してそのように考える者がいるとはな」

「ハイデイはとっても魅力的だと思うけど。だから、そんなに不思議なことじゃないよ」

「そんな貴様だから、余は絆されていったのだろうな。愚かだとすら言える貴様だからこそ」

ハイデイの顔はとても柔らかくて、だから、絶対に褒めてくれている。

うん。今みたいな表情も見ていいいな。

本人に言ったら怒られるかもしれないけれど、とても可愛い。

「愚かだからハイデイと親しくなれたのなら、褒め言葉かもね」

「……そうだな。貴様はそんな奴だった。だからこそ、貴様に伝えた言葉がある」

ハイデイは優しい顔でこちらを見つめていて。

だから、良いことがあるのだと心から信じられた。

そのまま、ハイデイは言葉を続けていく。

「貴様に助けられたこと。大亀のようなモンスターから救われたこと。それが、余をおかしくしてしまった。王女でもないただの余を必死に助ける貴様がいたから。あまつさえ、ただの余を求めさえするのだから」

ぼくにとっては当たり前のことだけれど。

ハイデイが大切なのは、ぼくにとってはハイデイそのものが好きに

なれる人だったから。

どんな立場だったとして、きっと出会っていたのならハイデイを好きになっただけははずだ。

「それだけハイデイが魅力的だというだけだよ。だから、当然なんだ」「それを当然と言える貴様と、ただのアーデルハイドとで、結ばれたいのだ。ユーリ、受け入れてくれ……！」

ぼくはハイデイの言葉に、一瞬すらも悩まなかった。

どうしたいかなんて、決まりきっているから。

「もちろんだよ。ハイデイのことが大好きだから。ハイデイとなら、きっと幸せになれるから」

ハイデイはぼくの言葉に微笑んで。

それから、ぼくのあごに親指と人差し指を添えて。

ハイデイから届いた心は、とても暖かかった。

アクアがユーリの周囲で支配していないのはオリヴィエとその近衛だけとなって。

だからアクアは、せめて最後に残ったオリヴィエたちだけはユーリの味方でいてほしいと願った。

そんなアクアの思いに応えるように、オリヴィエはユーリを大切にしている。

アクアはだんだんオリヴィエに思い入れを募らせていた。

そして、オーバースカイに加入したオリヴィエはユーリのそばを楽しんでいる。

アクアにとって最後の希望であるオリヴィエは、アクアの期待にこたえていた。

そんなオリヴィエがユーリに想いを向けていることは喜ばしい。

だからアクアは、2人が結ばれることを応援しようと考えていた。とはいえ、直接干渉することは2人にとって好ましくないだろう。

なぜなら、2人も人との繋がりに臆病だから。

急いで結びつけようとすれば、ねじれが生まれる。

アクアはうまくいくようにと祈りながら、2人を見守っていた。  
そんなアクアの願いが通じたのか、ユーリとオリヴィエは結ばれることになる。

アクアはとても喜んで、2人に対しての祝いを考えていく。

もう自分が支配していないのはオリヴィエたちだけ。

それでも、最後に残ったオリヴィエが幸せを運んでくれた。

アクアはオリヴィエとユーリが出会えたことに、とても強く感謝していた。

## if ノーラとの未来

ぼくはノーラが進化してから、とても私生活が充実していた。アクアもノーラもとても可愛いペットで、家ではずっと甘えてくれる。

とはいえ、甘えるだけなら進化前からもだったけど。

でも今は、好意を言葉でも伝えてくれるから。

そして、ぼくと楽しい会話をしてくれるから。

ノーラが進化したことは、大きな喜びを運んでくれたよね。

今日はノーラと2人で過ごす日だ。

ノーラは2人きりになった瞬間から、ぼくに引っ付いてきている。体をこすり付けてくるのは進化前からの行動だけど、受ける印象は全く違うな。

人間みたいに見える部分が大いから、照れとかを感じちゃうんだよね。

もちろん、進化したからといって対応を変えたらノーラがかわいそうだから。

ノーラの行動はたいい受け入れている。

「ご主人と一緒にいる時間は幸せだぞ。もつといっぱい時間がほしいくらいだ」

ノーラの望みはできるだけ叶えてあげたいけれど。

それでも、ノーラと2人の時間を増やすことは難しい。

他の人たちと違って、過ごす時間を作りたいから。

ノーラだって、何人もいる状況で一緒にいたいわけではないのだからうし。

まあ、何人だとしてもぼくと一緒にいるだけで楽しんでくれていることは分かるけれど。

「ぼくもノーラと一緒にだと幸せだよ。ノーラと出会えて、本当に良かった」

「ご主人はよくうちを受け入れたものだな。警戒心の強いご主人にしては、珍しいな」

それはそうかもしれない。

懐いてきたモンスターだからといって、それだけで信頼するものだろうか。

まあ、ノーラを受け入れたことは絶対に正解だったから、問題はな  
いんだけど。

とはいえ、仮に他のモンスターが懐いてきたとして、拒絶していた  
かもね。

ノーラのことには信頼しても問題ないと思えたのはなぜだろう。

良かったことだから、理由は何でもいいか。

「ノーラは可愛かったからかな。ぼくにもちゃんと理由はわからない  
けど」

「うちは今幸せだから、ご主人にはとても感謝している。ありがとう。  
うちを信じてくれて」

「こちらこそ、ありがとう。ぼくのペットになってくれて。おかげで、  
ぼくも幸せだよ」

「うちとご主人は両思いだな。当たり前前の話ではあるが。ご主人、体  
を借りるぞ」

ノーラはそう言ってぼくに抱きついて体をこすりつけてくる。

やわらかくて、暖かくて、いい匂いまでするから、大変な気分だ。

ちよつと気疲れしちゃう部分もあるけれど、ノーラは幸せそうで。

だから、ぼくも嬉しいのも事実なんだよね。

「ノーラ、楽しい？ ノーラは進化しても、あまり変わらないね」

「まあ同じうちだからな。アクア様は変わったのか？」

どうだろうか。変わったような、変わっていないような。

ぼくは間違いなく大きく変わった。特にアクア水の存在で。

アクアができることの幅が大きく増えたから、そういう意味ではア  
クアは変わったけれど。

「いろんな遊びをするようになったかな。あと、はつきり仲良くなっ  
たと思う。もちろん、これまでも仲は良かったけれど」

「そうなのだな。うちは進化してからのアクア様しか知らんからな。  
進化する前のアクア様には、うちが会うことはできなかつたろうが」

まあ、王都のそばで出会ったわけだからね。

ミストの町でずっと過ごしていたぼくが出会わうわけもない。

本当に偶然の出会いだったけど、最高の幸運だったな。

「過去に戻ることはできないから、今を楽しむしかないね。いまノーラと遊んでいるのは楽しいよ」

「それは嬉しいな。ご主人が喜んでくれるのなら、最高の気分だぞ」

「ぼくもノーラが喜んでくれるなら嬉しいよ。さっきと同じだけど、両思いだね」

「……ご主人。うちとご主人とは本当の意味で両思いではない」  
ノーラは少しつらそうな顔でそう言う。

つまりきつと、ぼくの思いがノーラに届いていないのかな？

あるいは、ノーラの望む形の好意ではないか。

どちらにしろ、ノーラがどんな思いを望んでいるのかはわからないけれど。

そういうところなのだろうか。だとすると、どうすればいいのか。

「言いたいことがあるのなら伝えてね。直せるように、努力するから」

「そういうことではない……！　努力では、意味がないのだ……！」

思いは努力したところで変えられるものではない。

だから、ノーラの言っていることは分かるような。

だとしても、ノーラのつらい顔なんて見たくないから。

ぼくができることならば、なんだってしてあげたいから。

その思いは、間違っているのだろうか。

ノーラが喜ばないのなら、ぼくにとっては間違いであるのだけだ。

「だとしても、ノーラが喜ぶためなら、きつとなんだってするよ」

「なら、なら……うちとキスしてくれ！　それ以上のことだって！」

ノーラからの言葉には、とても驚いた。

つまりこれは、ノーラからの告白のようなものだ。

こんなにつらそうな顔で言わせてしまったことは反省したいけれど。

でも、ノーラが望むのならば。是非もない。

ノーラの決意に見合うくらいの覚悟を決めて、ノーラへと向かっていく。

ぼくはノーラを抱きしめる。すると、ノーラからも抱き返してくる。

それから、ノーラの唇へと向かっていった。

唇が触れ合ってから、ノーラはぼくに強くしがみついてきて。

とてもギュツと唇を押し付けてきたんだ。

きつと、心の内に溜め込んだものが爆発したのだろう。

だから、少し苦しいけれど耐えるつもりだ。

ノーラはしばらくの間ぼくに激しくくっついていて。

離れた頃には、お互い息も絶え絶えだった。

ぼくとノーラはそんなお互いを見て笑いあつて。

だから、きつとノーラとなら幸せになれると思えた。

「ノーラ、大好きだよ。これからも、ずっと一緒にいようね」

「当然だぞ。うちを捨てるようなことをしたならば、ご主人がどうなるか、うちでも分からんからな」

ノーラを捨てるようなこと、何があつてもするわけがないけれど。

だけど、その想いをきちんと伝えていかないとね。

またノーラを不安にさせるワケにはいかないのだから。

「そんな心配はしなくていいよ。これからの幸せ、一緒に作つていこうね」

「ああ。ご主人のことも、必ず幸せにしてみせるからな」

「ノーラが一緒にいてくれるだけで十分だよ。でも、その気持ちは嬉しいな」

「うちのすべてを捧げるから、ご主人のすべてをくれ。そうすれば、お互い幸せなはずだ」

ノーラの言葉からは強い決意を感じる。

だから、きつと本気でぼくのことを幸せにしてくれるはず。

ノーラにも同じかそれ以上の幸福を感じてもらうために、がんばるから。

それから。



ノーラとは男女の関係になって、アクアにも祝福してもらった。他のみんなも、ぼくの幸せを喜んでくれていて。だから、これからのぼくは幸福であふれるだろう。ずっと大切にしてみせるからね、ノーラ。

アクアはユーリの周囲にいる人もモンスターもまとめて支配していた。

ノーラは自由意志を持っているものの、アクアにとってはいつでも人形にできる存在で。

だから、ユーリの全ては自分だけで埋めてしまったのではないかと感じていた。

ただ、そんな思いを変えろきつかけになったのもノーラだった。

ノーラはアクアが全く想定していない形でユーリと結ばれて。

だから、アクアにとって唯一の、支配下にはない存在と言えた。

アクアにとってはノーラは間違いなく信頼できる存在で。

ノーラがユーリを幸せにできることは少しも疑っていなかった。

アクアはユーリとノーラの幸せを見ていることが楽しくて。

だから、今の2人をずっと守り続けると誓っていた。

アクアに残った最後の希望。ユーリとノーラの温かい時間。

それを奪おうとするものは、決して救われないだろう。

if しあわせなせかい

ぼくはプロジェクトU：Reという計画を止めるために戦っていた。

その中で、アクアがオメガスライムだということを知る。

怯えているアクアに、ぼくはなんと言葉をかければいいのか分からなかった。

だから、言葉に詰まって。

そうしていると、アクアがぼくを拘束してきた。

「アクア、なにを……？」

「ユーリ、ごめん。でも、ユーリに嫌われるくらいなら、こうするしかない」

アクアはそう言って、ぼくの口の中に入り込んできて。

そして、ぼくの意識は失われていった。

ぼくはユーリ。カールルの街で過ごしている。

一緒に暮らしている人も多くて、とても幸せだ。

大切なペットであるアクアとノーラ。よく甘えてくる可愛い相手だ。

幼馴染であるカタリナ。いつも口が悪いけれど、ぼくを大切にしてくれている。

おっとりした雰囲気のステラさん。この家の持ち主で、とっても優しい人。

可愛らしい年上のサーシャさん。ぼくの事をよく甘やかしてくれている。

頼りになるアリシアさんとレティさん。大人って感じで引っぱり張ってくれる人だ。

ぼくを尊敬しているメルセデスとメーテル。ちよつと軽薄だけど、そこも魅力かな。

共に訓練をよくするミーナとヴァネア。2人とも闘争心が強い。

明るい性格のユーリヤ。ぼくとの距離が近い気がする。おとなしい感じのフィーナ。イメージの割に意思は強い。尊大な性格のハイデイ。だけど優しさだつてすごいんだ。ハイデイに従うリデイさんとイーリス。ハイデイをとても尊敬している。

そんな人達と生活しているのだけれど、日によって別の人と過ごすことが多いかな。

今日はアクアと過ごす予定なんだ。ぼくにとっては一番思い入れが強い相手かもしれない。

なにせ、物心付いた時には一緒にいたからね。

人型の水みたいな種族であるハイスライムで、どんな形にもなれるんだ。

だから、それを生かして色々な遊びをするんだよね。

「ユーリ、アクアの中に入れてあげる」

そう言ったアクアは姿を変えてぼくを取り込んでしまう。

周りは水だらけとしか思えないのに、呼吸は全く問題ないんだ。

それに、なんだか心が落ち着くというか。

まあ、アクアがぼくを傷つけるわけがないんだから、安心できるのは当然か。

しばらくアクアの中でゆっくりしたあと、今度は球遊びをする。

球を投げて、アクアに取ってきてもらうだけけど。

何が楽しいのか、アクアはよくねだつてくるんだよね。

まあ、走り回るアクアは可愛いから、ぼくも満足だけど。

それからずっとアクアと遊んで、一日は終わった。

明日はノーラと遊んで、その次はカタリナか。

ほんと、幸せでいっぱいな生活だ。これからもずっと続くといいな。

アクアはユーリにオメガスライムだと知られて、ある恐れを抱いた。

ユーリに拒絶されてしまわないかという感情だ。

そんな不安が、黙り込んだユーリを疑わせた。

だから、アクアはユーリの記憶を消すと決めてしまう。

そのために、ユーリを拘束して体に入り込んだ。

それから、まずアクアはプロジェクトU：Reの関係者を皆殺しにした。

オメガスライムであるとユーリに知られるきっかけになった存在など必要ないのだから。

次に、ユーリの体を操作して、カーレルの街まで動かすことに。

だが、カーレルの街まで帰る過程で、ノーラにユーリを操作していることを知られてしまう。

ノーラは怒りのような、悲しみのようなものを顔に浮かべながらアクアに詰め寄る。

「アクア様！ なぜご主人を操っているのだ！ ご主人が好きではなかったのか!？」

「ユーリには今日の記憶を忘れてもらう。そして、幸せな生活を送ってもらう」

「そんなやり方でご主人が幸せになれるとでも!? アクア様、あなたは間違っている!」

「だとしても、もう考えを変えるつもりはない。ノーラ、じゃあね」

アクアはノーラの体も操り、カーレルの街にあるステラの家へと帰る。

そこで、ユーリとユーリの周囲の人間に、自分にとって都合の良い記憶を植え付けた。

ただ、ステラの家だけが皆の世界の全てとなるように。

そして、アクアが書き換えた記憶をもとにした生活をおくることになる。

ユーリも、他の大切な人たちも、アクアにとって都合のいい世界で生きる。

アクアはわずかな後悔を抱えながら、幸せな日々を過ごしていた。